Loyal Tomboy

senif

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ

【Ｎコード】
Ｎ９７１８Ｇ

【作者名】
ｓｅｎｉｆ

【あらすじ】
帝国暦３９７年。それまで、人々が望んでようやく手に入れかけていた安息の光が、次第に黒く淀んだ陰謀の闇へと徐々に侵食され始める。人の思いは何処へ向かい、何処へたどり着くのか。この物語は、過酷な戦乱の渦へと巻き込まれていく、一人の少女の運命を辿った物語である。（小説サブタイトル●は実際のストーリーにはあまり関係のない話です）（小説サブタイトル★は各章の登場人物一覧です）（小説サブタイトル@は挿絵有りです）

01－00：●WorldMap

＞Loyal Tomboy World Map＜（EC397年時点）

＞ムーンスローブ大陸地図＜

＞i19506－827＜

●：各都市、街など

★：その他基地、要塞など

▲：山、沼地、砂漠など

■：海

＞※※※注意※※※＜

○図上に方位が描かれていませんが、0時方向が真北と考えてください。

○緯度、軽度、赤道線は設定していません。

○その他の大陸に関しても、全く設定しておりません。

○この図は、あくまで小説を読むに当たって、イメージを持ちやすくする為に用意した地図ですので、実際の小説内容と若干異なる部分があるかもしれませんが、ご了承ください。

○文字が読み取り辛い部分に関しても、ご了承くださいTT

０１－０１：●はじめに

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「はじめに」

帝国暦３９０年代、ムーンスローヴ大陸に存在する王国、共和国、帝国、連合国の数は、小幅に増減を繰り返すものの、ざっと見積もって１２、３は存在している。

大陸の歴史は古く、当時大陸を制覇していた「セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国」を含め、全大陸制覇を成し遂げた国は１８にも上った。

ただし歴史文書で残されている「過去」についてのみだが、それとしても戦乱時代の方が大半を占めるこの大陸において、１８回も統一が成された事実は驚異的である。

それだけ飛びぬけた「力」を所持する者、国、団体が多く出現したということであるが、反面、統一後の「力」の衰退もまた「早い」ということでもある。

かつて、大陸史上最強の名高い「セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国」でさえ、凄惨な内戦が耐えず、大陸完全統一期間も１００年に満たない。

以後、幾多にも分裂を繰り返し、最後にはまた、新しい「統一者」を生む結果となる。

故人「シャルダ・ムーア」は「大なるは小にして、洸（こう）なるは暗になりて、我が軌跡は見えざる使命を照らす」と残した。

この物語は、ムーンスローヴ大陸の激動期を忠実に語った歴史文書、「最後の皇帝」の一遍「パレ・ロワイヤル戦記」に意訳を加え、編集された文書「Ｌｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」である。

01－02：●Del－Qwolf－Amuzument

第一話：「ルーキー」

section02「Del－Qwolf－Amuzument」

「Del－Qwolf－Amuzument（デル・クォーフ・アミューズメント）」

帝国暦390年代前半から流行り始めた「あそび」の事で、主に当時の若者が熱狂した、いわゆる「戦争ゴッコ」である。

当初は各企業の開発した軍事兵器や、制御システムなどの、デモンストレーション用に開催される事が多かったのだが、最近では主に人々の娯楽の一つとして、世間一般的に知られるようになってきた。

勿論、真に相手の命を奪い合う戦争とは違い、決して相手を死に至らしめるような行為は、ルール上禁じられているが、たかが「戦争ゴッコ」とはいえ、使用する武器は当時の最新鋭人型軍事兵器、「Del－Qwolf（デル・クォーフ）」通称「DQ（ディー・キュー）」である。

「DQ」はEC360年後半から、各国での開発が本格化し、EC375年のセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国「ストラントーゼ軍」に、初めて軍事用として登場する。

身長は10～20m、自重は6～15tが平均で、開発当初は歩く事もままならない、ただのガラクタ同然の固定砲台でしかなかった。

しかし、その後、各国のDQ開発力は著しい発展を遂げ、DQ移動制御システムに革新的な技術が次々に生み出されるようになると、

２足歩行が可能な、人型タイプが出現するようになる。

そして、高出力動力システムの小型化や、機体軽量化などが進み、高速機動が可能なジェットエンジンを搭載したＤＱが、市場を独占するようになった。

瞬く間に大陸中に浸透した軍事兵器ＤＱを用いた遊び「Ｄｅｌ－Ｑｗｏｌｆ－Ａｍｕｚｕｍｅｎｔ（以下ＤＱＡ（ディー・キュー・エー））」は、戦闘を繰り広げるべき広大な土地を「ＤＱＡ主催者」が提供し、限られた期間の中でいかに敵からポイントを奪い取れるかというものである。

ポイントの付き方は、地方によって様々だが、一番簡単なポイントの取得方法は、まずは戦闘に参加することであり、持ち点がゼロとなったところで、失格になるような事は無い。

自らの攻撃を相手のＤＱに命中させるだけでも、ポイントの取得は出来るが、もっとも高いポイントを稼げるのは、やはり相手のＤＱを戦闘不能にすることであろう。

しかし、逆に自機が戦闘不能となれば、減点の対象となるし、物資の補給、機体の修理などでも、そのポイントは消費されることとなる。

ＤＱＡ大会において、何といっても有利なのは、ＤＱ操舵に長けたパイロットであることは確かなのだが、そうも単純なシステムではないのが特徴だ。

ＤＱＡ大会の開催期間は５日～７日。

しかも、各企業スポンサーのついた約３０ものＤＱＡチームが、同

じ会場内で一斉に戦闘を繰り広げるのである。

1チーム編成6人で3機のDQを使用し、この戦闘に参加する事になるのだが、火薬の量を抑えているとはいえ、使用する弾は実弾であり、毎年平均しても、各地で1～3人死亡者が出ている。

本来、このような危険な遊びに関しては、国で規制すべきものなのだが、これが「若者の傭兵育成所」として、黙認されているのが現状である。

1人のDQパイロットを訓練し、一人前の兵士として育てるためには、かなりの時間を要する上、DQ10機分の購入費を軽く超えてしまう。

この戦乱の時代に、民間企業の資金力を使い、自国の兵力をアップさせる事が出来るのであれば、国としても大助かりという訳だ。

01－03：〇ルーキー［1］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「ルーキー」

時はＥＣ３９７年。
ムーンスローブ大陸東部に位置するトゥアム共和国廃都市「ブラックポイント」には、かつて、セルブ・クロアート・スロヴェーヌ帝国の支配下であった頃の活気が戻っていた。

１５年ほど前に、帝国軍が敢行した侵略戦闘以来、軍部のみを置く「廃都市」となっているが、痛々しい戦争の傷跡が残るこの街全体が、今回の「Ｄｅｌ－Ｑｗｏｌｆ－Ａｍｕｚｕｍｅｎｔ」会場である。

今期参加者は総勢２００名ほどで、その他会場経営者、運営者、報道陣、企業、観戦者をすべてあわせると、５０００人を軽く超える人々が、この町に集結していることとなる。

今、若者達の間で大人気のこの大会は、ＤＱを供給する開発企業側もそうだが、ＤＱを需要する側の関心も非常に高く、それなりにマスコミでの取り扱いも大きい。

実際に軍事兵器で戦闘を繰り広げる大会のため、その戦いを生で観戦することは出来ず、もっぱら大会参加者達の戦いぶりは、各地に設置された監視カメラで撮影された映像によって、全国に提供される事となっているのだ。

勿論、その戦いの中において、高いパフォーマンスを示すことの出

来たチームと言うのは、非常に人気が高く、そして、スポンサー企業の売り上げにも大きく影響を及ぼすため、同業他社を欺く戦略を思案したり、腕の良いＤＱパイロットを取り合ったりなどは、日常茶飯事である。

しかし、ある種過酷な企業戦争とも言える戦いの中にも、蚊帳の外なる「出来損ないチーム」が数多く存在する事は確かで、今回の大会に参加するチームのほとんどは、人気の無い無名チームである。

しかし、そんな無名チームの中に、今大会初出場でありながら注目度Ｎｏ．１のチームがあった。

それが「Ｔｅａｍ　Ｔｏｍｂｏｙ」である。

「Ｔｏｍｂｏｙ」とは「おてんば娘」の意で、ＤＱの女性操縦者が数少ないにも関わらず、そのチームのＤＱ搭乗者はすべて女性なのである。

（セニフ）
「大丈夫？シル。周囲警戒よろしく。」

（シルジーク）
「ＥＳ２０－Ｒ２３からハンター３機だ。５分で撤収しろ。」

（セニフ）
「じゃあ、５分は大丈夫なんだね。ありがと。」

（シルジーク）
「感づかれるとまずいから切るぞ。」

この会話の主は、「Ｔｏｍｂｏｙ」の最年少パイロット「セニフ・ソンロ」と、彼女の2歳年上となる「シルジーク・ハイ・フィリツ」である。

赤茶色の髪の毛にはっきりとした目が特徴的な、小柄な女の子「セニフ」は、はきはきとした明るい性格で、とても人懐っこい人物ではあるが、時に気性が激しく、扱いづらい面も見せるのが玉に瑕の、１６歳の少女だ。

このＴｏｍｂｏｙチームには2年前から所属している。

もともとトゥアム共和国の人間ではない彼女だが、自分の過去を話す事を非常に嫌い、仲の良いチームメートにさえ、「帝国出身者」であること事以外に、自分を語ろうとはしない。

2年前、Ｔｏｍｂｏｙチームオーナーである「ラックス・ムーズ」に、連れられてきたときの事は後に語るとして、今現在、「ＤＱを巧みに操る」という事実を除けば、フツーの女の子である。

一方、シルジークの年齢は１８歳で、金色のフサフサ髪で深緑の瞳を持つ少年だ。真面目で仕事熱心な彼の性格は温厚で、普段は滅多に怒ることは無いのだが、一度怒り出すと口が悪くなるのが特徴だ。

ＤＱ技術専門学校に通っていた経歴もある様で、そのＤＱメンテナンスの腕は一級品であり、パイロットの性格、癖なども考慮しながら、プライベート設定を組むことに長けた人物である。

今ではＴｏｍｂｏｙのバックアップチームリーダーを務め、戦術面のチーム指示から索敵、補給、ＤＱ機体メンテナンスと、すべてを

こなす、欠かすことの無い人材に成長した。

（セニフ）
「ジャネット。Ｐｏｉｎｔ１０５からお願い。レンジ絞って。」

（ジャネット）
「了解。」

（セニフ）
「アリミアは交戦中の片辺２機のＤＱを引き付けて。」

（アリミア）
「わかったわ。でも単純よ。悟られないようにね。」

戦闘前のパイロットの会話とは思えないほど、不似合いな黄色い声が無線に飛び交う中、簡易作戦会議を終了させたセニフは無線を切り、時間を合わせた時計を眺めながら秒読みを開始する。

「５・４・３・２・１」

レーダー上に点滅する「獲物」に焦点を定め、ある種、押さえ切れない武者震いを体現するかのように、セニフは空踏みしていたフットペダルを思いっきり踏みつけると、搭乗するＤＱ「パングラード」に、力強い命の息吹が宿りだした。

そして、周囲にけたたましい程の爆音を撒き散らしながら、震えたったパングラードは、その身を潜めていたガレージ内のありとあらゆる物を、浴びせかけた大量のバーニヤ風で吹き飛ばしながら、勢い良く郊外へと飛び出して行った。

セニフの搭乗するＤＱはかなり古い型で、アゼセイル社製「ＦＰＧ－０２Ｎ」通称「パングラード」である。

見た目は単なる卵型であり、人型を求めるＤＱとは似ても似つかぬ形をしており、頭部は無くのっぺりとした縦長の胴体に、羽のような側装甲。

両手にはマニュピレータも無く、その手首より先端部分には２０ｍｍ口径の、機関砲が取り付けられていた。

足は２本あるにはあるが、単に胴体を支えるためだけに存在し、あまり２足歩行を得意としないこの機体の移動方法は、今流行りの「ホバー走行」である。

シルジークの強烈な改造により、ノーマル設定より２～３倍の速度、加速度を生み出せるようになったこの「パングラード」は、見た目とは裏腹に猪突猛進型であるセニフの性格上、ベストマッチといえるセッティングとなっており、ファーストコンタクトで相手チームを錯乱、もしくは１機程度をスクラップにする事を目的とした、一撃離脱専用機に仕上がっていた。

そんな暴れ馬を巧みに操る「じゃじゃ馬」たるセニフは、周囲を気にする様な素振りを見せるものの、業と敵に見つかりやすいように、都市部でも割と広めである三車線舗装道路のセンターラインをかっ飛ばしていた。

無論、陽動だ。

彼女の目指すは先は、おそらく戦闘中であろうと思われる、他の２

チームがいる戦場Ｐｏｉｎｔ９９。

ＤＱＡ主催者公開情報では「チームファフィア」と「チームウェッジバスター」の、２チームのようだが、チームランクは両チームともに「レジスター」となっている。

本来であれば、２チーム合わせて合計６機のＤＱが戦場に存在するはずだが、レーダー上４機しか反応は無い。

常識では、ここで「あと２機は各チームのスナイパーで、何処か死角に潜んでいるはずだ」と慎重に考えるべきところなのだが、このチーム「Ｔｏｍｂｏｙ」に戦場での常識は存在しない。

（セニフ）
「きっと２機ともスクラップだよ。」

確かに、セニフの言う通り、お互いに繰り広げた戦闘の中で、すでにどちらかのＤＱが撃破されているということもありうるのだが、彼女の場合、あまりに事態を楽観視しすぎていたのであろう。

突然に鳴り響いた中距離仕様１１０ｍｍロングキャノンの砲声を聞くまで、セニフはまったくその事実を疑いもしなかった。

ドゴーン！！

（アリミア）
「セニフ！！」

余裕しゃくしゃくでフィールドをかっ飛ばしていた、セニフ機のすぐ真横で、眩いばかりの閃光が走ると同時に、物凄い爆発音が鳴り

響いた。

その強烈な爆風は着弾地点となった、ビル１階部分をも吹き飛ばし、土台を失った大きなビルは、ドミノ式に隣のビルにフレンチキスをかましながら崩れ去っていく。

そんな爆心地すぐ傍を走行していたセニフ機は、操縦不能状態とクリアモニター焼付きのダブルパンチを食らって、背丈３メートルも有ろうかと言う茂みの中に突っ込んで行いく羽目となってしまった。

（アリミア）
「ジャネット！！突撃中止！！Ｐｏｉｎｔ１０３に迂回！！ＦＴＰフィールドを５分張って！！」

（ジャネット）
「了解。わかったわ。」

大きく周囲へと響き渡った爆発音の元、交戦中であった敵チームもパイロット達も皆、どうやら自分達以外のチームが迫りつつある事に気が付いた様子で、ロングレンジコンバットを想定した散開行動を見せ始める。

このＤＱＡという大会のシステム上、優れた者が劣る者を貪る、完全なる弱肉強食の世界ではあるが、それは敵となる相手チームとの１対１の戦いではないのだ。

いつ何時、何処から襲い掛かるとも知れない複数の敵に対し、常に注意を払いつつ、敵を殲滅していかなければならないという、非常に困難な状況を強いられるシステムとなっている。

そのため、交戦中の相手チームが、もう一方に気を取られている隙を狙ったり、セニフ達「Ｔｏｍｂｏｙ」チームのように、体勢の整わない内に、一気にまとめて殲滅してしまおうと目論む輩が出てくるのだ。

しかし、第一突撃主であるセニフが作戦から離脱し、相手チームの行動を掻き乱すことを目論んだ作戦自体が、相手チームに知れ渡ってしまった以上、セニフ、ジャネットが搭乗する近接格闘戦専用ＤＱは、スナイパーの格好の餌食となるだけに、安易な突撃は命取りだとアリミアは判断したのだ。

近接戦闘専用ＤＱを２機保有するＴｏｍｂｏｙが遠距離戦に持ち込まれた場合、頼れるのはアリミアの搭乗するＤＱ「ＳＰＤＱ－１１Ｔｙｐｅ」だけである。

ロングレンジ仕様のこのＤＱは、正式に企業で生産されたものではなく、ジャンク品の寄せ集めで完成したＤＱであり、正式呼名は無い。

ただ、呼称が無いというのは何かと不便なこともあり、セニフ達Ｔｏｍｂｏｙチーム内では、スナイパーＤＱの総称たる「パンターデク」と呼んでいる。

この機体、セニフが搭乗するパングラードとは違い、かなり人型に近く、銃火器の装備が可能なタイプで、右手には汎用的なアサルトライフルである「ＡＳＲ－ＬＴｙｐｅ４４」を実装。

本来ロングレンジ砲を装備できるほど耐性が無いＤＱのため、剛性を上げるためにかなりの改造を行っており、両足にはフットダンパーを計４本取り付け、砲撃の反動をできるだけ吸収するような仕様

でを実現していた。

（アリミア）

「相手の程度にもよるけど・・・。勝敗を決めるのは武器じゃない。」

アリミアは大きく息を吸い込むとレンジを全開まで開放し、３種類のサーチャーを起動する。

サーチャー機能の程度は、３種類も同時に起動しなければならないと言う事実からも、判断できる程度の代物だ。

ＤＱを砲撃モードに進行させ、まじまじとレーダーを覗き込みながらアリミアは、沸々と沸き起こる高揚感を感じていた。

彼女の本名は「アリミア・パウ・シュトロイン」で、年齢は２２歳。

普段は物静で読書が趣味だという彼女は、目元が釣りあがっていて、何処か冷たそうな人物である印象を受ける人も多いが、それは見た目だけであって、セニフ達Ｔｏｍｂｏｙの面々はそうは思っていない。

彼女も赤茶色の髪の持ち主だがセニフよりはずっと「紅」く、耳元には髪の毛の色と、ほぼ同色の紅いヘアピンを２つ好んでつけている。

Ｔｏｍｂｏｙチームに参加したのはメンバーの中で一番最後であり、参加当初は、そのサバサバした性格と割り切った行動から、「冷徹女」と称されることもあった。

しかし、彼女の内面には隠された「優しさ」があり、それが、常に皆のことを思っての発言である事が解ると、次第にチームの皆とも打ち解けるようになってきた。

今では周囲からの信頼も厚く、チームのアタッカーリーダーを任せられるまでになった。

（アリミア）
「あとはセニフがどう動くかだけど。」

直射タイプのスナイパーは砲撃モードに入ると通信はできない。敵のサーチシステムに弾道を読まれる可能性があるからだ。

セニフがすでに敵に発見されている事を考えると、相手の周囲に対する警戒心も強くなるはずだが、それでも、セニフが現れた方角を中心に索敵をしているはず。

アリミアはセニフが突っ込んでいった辺りにＰｏｉｎｔレンジを絞り、サーチレーダーに映し出される機体反応を観察しながら、敵とセニフの今後の動きを予想する。

スナイパーと言うポジションはかなりの知識、経験、カンが必要とされるポジションであり、熟練したスナイパーを要するチームはとてつもなく強い。

逆に、スナイパーがいないと弱いかと言えばそうでもないのだが、どちらかと言うと搭乗者の技術の問題で、１対１の勝負で確実に相手に勝利できるという自信があれば、スナイパーなど必要ないともいえる。

Ｔｏｍｂｏｙチームのパイロット３人はといえば、３人が３人共に突撃アタッカータイプであるといえよう。

「では全員近接格闘戦ＤＱに搭乗して戦闘すればいいじゃないか」という人もいるだろうが、戦争での実戦経験が豊富な「傭兵落ち」共がウヨウヨいるこの「遊園地内」で、近接格闘戦ＤＱ３機というのは、３人まとめて始末してくださいと、言っているようなものである。

Ｔｏｍｂｏｙチーム内に仕方なしで存在するスナイパーは、こういった理由から誕生したのである。

（アリミア）

「まぁ、あの子がやられっぱなしで黙っているわけないか。」

アリミアの中で、次なる作戦方針は決まった。

セニフはＤＱにトラブルがない限り、「必ず」仕返しを敢行しに突撃開始するはずである。

それに踊らされ、近接戦を掛けてくるような輩なら処理は簡単だ。

アリミアの腕を持ってすれば、表に顔を出してきたＤＱから、順良くスクラップにできるからである。

敵チームが隠蔽状態でセニフを遠目から狙うとしても、ここは廃都市内のど真ん中であり、廃ビル、廃工場など死角が多数存在するため、高速で動き回るセニフ機を捉えることは、自動照準システム「オートチェイサー」を持ってしても難しい事であろう。

要は、物凄いスピードで暴れまわるセニフを捕らえるためには、少なからず「セニフを追い回す」形を形成しなければ成し得ないのである。

そして、先程の砲撃により、その所在の知れてしまった相手スナイパーも、同エリアに程近い、ジャネットの「ラプセル」が潰してくれるであろう。

（セニフ）
「このヤロォ！！何しやがんだよぉ！！」

一つ、軽い息を吐き出して見せるアリミアが、次なる作戦を決定してから３０秒と経たないうちに、通信機に飛び込んできたセニフの大声。

思わずイヤホーンを耳元から遠ざけたくなるような汚らしい叫び声であったが、それはまさしく、アリミアが思った通りの行動を、セニフがして見せた事を示していた。

（ジャネット）
「アリミア？５分たったよ。私は後ろでスナイパーをもらうね。」

レーダー越しにセニフ機が、戦場のど真ん中へと急加速を見せる中、今度は一つ目の怒鳴り声とは対照的な「しとやかな」声がアリミアの元へと届けられる。

この言葉に、アリミアは口元を左手で押さえながら、少し苦笑をしてしまった。

ここまでのアリミアの読みは完璧。

何の指示を与えなくとも、ある種、自分の思い通りに物事が進んでいる事に対して、少しこそばゆい感情が沸き起こったからなのかもしれない。

今後の敵の動きはどうであれ、アリミアとしては、ビルとビルの死角から顔を出したモグラを勢いよく叩く事にある。

現状、敵チームの隠れ家となっている地点は、元繁華街で道幅が狭く、所々崩れかかったビルの残骸が行く手を阻む迷路のような構造だ。

舗装道路だったはずの足元は大きく裂け、おまけに２０年前の「グリーンクラッド（みどりの雲）作戦」で成長した人工樹木が鉄成分を多く含んでいるため、サーチャーがあまり利かない地域でもある。

そんな絶好のゲリラ戦の舞台となる繁華街は、専ら「初心者の溜場」として多くの参加者達に利用されているようだ。

無論、セニフ達Ｔｏｍｂｏｙもその中の１チームである。

01－04：○ルーキー［2］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「ルーキー」

（ジェイ）
「マース！！速く雑魚どもを片付けろ！！次の奴がくるぞ！！」

チーム「ウエッジバスター」の一人が叫ぶ。

それまでｐｏｉｎｔ９９において、戦闘を繰り広げていた２チームの内、優位に立っている方で、これからゆっくり敵を殲滅しようかと言うところでセニフ達にチャチャを入れられたため，少々苛立っているようである。

（サックス）
「マース。ファフィアの連中が逃げてくぜ。」

（マース）
「まあ、狩ってもゴミのようなＰｏｉｎｔにしかならん奴だ。ほっとけ。新人の実力を見るにはちょうどいい。」

そう言うとマースは、しばしの傍観を決め込んだ様子で、ぼろぼろの廃墟と化した商店街の一角、細い小路地へと、操舵するＤＱの身を隠し始めた。

一方、何やら苛立ちを隠し切れない様子のサックスは、撃破寸前まで追いやった相手チームのことをあきらめきれない様子で、執拗に１ブロック区画内をうろうろとしていたのだが、ふと、一人ではど

うする事も出来ない事に気が付いた彼は、不貞腐れたような表情で口を尖らせつつも、結局、マースに従い、狭い横道へと入っていった。

このチーム「ウエッジバスター」はスナイパー1機、ミドルレンジDQ2機の編成で、近接戦は得意としないチームだ。

戦術は、つねに2機のDQが相手との距離を保ちながら戦闘し、隙をみてスナイパーが砲撃すると言うものである。

マースとサックスの搭乗するDQは「ホールスネークーJ5」で、前面に分厚い装甲を持つ「鈍重なDQ」である。

そのあまりの装甲のため両足が前後せず、歩くときは蟹股で歩くことになる。

武器は腹部に取り付けられた「SreGG－20mmナッチャー」のみで、近接戦の不利を玉数で補っている。

ここまできて言うこともなかろうが、「前面防御」は、ほぼ無敵である。

狭い地形を利用して、両翼からの攻撃を封じ込めた上で、前面衝突を余儀なくするこの小路地内にて、このホールスネークに勝てる相手はそう居ないだろう。

そう思いながら、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべ、ゆったりと迎撃の態勢を整えていたマースが、半場、鼻息混りでサーチレーダーを覗き込んだ時だった。

（サックス）
「マース！！ファフィアはどうした！？」

（マース）
「何処行きやがった！？わからねぇ・・・。気がついたら反応がなかったぞ！！」

それまで、余裕の表情さえ浮かべていた、格上たる2人の男が揃って、血相を変えたように周囲辺りの索敵を開始する。

先ほどまでくっきりと映し出されていたチームファフィアの2つの機体反応が、彼らのサーチレーダー上から、綺麗さっぱりと消えうせてしまっていたのだ。

フィールドを展開し、サーチレーダー上の隠蔽したとしても、物凄い速度で突っ込んでくるパングラードと鉢合わせになるはずの航路上で、一体、どうやって隠れたというのだ・・・。

チームファフィアの2機が、初心者の溜まり場から逃げ出しはじめてから、ほんの少しの間だった。マースが商店街へと移動するのに2分、ＦＴＰフィールド展開1分、戦闘モードへと移行するのに1分、サーチャー起動レンジ投入まで1分、たった5分の間である。

マースはレンジングスコープを装着しながら、必死に周囲の事態の整理に勤めるのだが、混乱した頭に蔓延る経験と言う名の雑念が、物事の真意にたどり着くことを阻害していた。

（マース）
「あんな短時間で2機のＤＱを消せるはずがない。しかし、現にファフィアの反応が無くなっている。サーチャーの故障か、そうでな

ければ化け物なのか。」

実際のところ、チームファフィアの2機を始末したのはＴｏｍｂｏｙである。

繁華街を前に、道幅が広々と3車線になる郊外で2チームは遭遇したのだった。

勿論、ファフィアの2人が、完全に無防備なままに突進してくる、大馬鹿な1機のＤＱに気が付かなかった訳ではない。

それなりの警戒心を持って、このパングラードの様子を見守っていたのだが、彼ら2人の意識には、まさかこのまま単独で突っ込んでくるはずがない。

・・・という思いがあった。

彼等の経験上、2対1のＤＱ戦闘で少数方が勝利する確率はかなり低い上に、まして、無防備での猪突などもってのほかだ。

客観論から言ってもそう判断するのが常識人であろう。

しかし、これは前にも述べたが、「Ｔｏｍｂｏｙ」に常識は存在しない。

言ってしまえば凡人たるファフィアのパイロット達には、このような非常時の対策、行動力は全くといっていいほど無いのであろう。

双方遭遇まで２０秒を切った所で初めて、ようやく戦闘モードへと移行し始めた2人は、すでにこの時点で、殺気ムンムンのセニフに

すでに敗北しているといえる。

新しいタイプのＤＱをかなり無駄に使いまわし、メーカーの標準値をはるかに下回る時間で戦闘移行をおこなったファフィアは、簡単にセニフに先制攻撃を許してしまう。

パングラードの両手に備え付けられた２０ｍｍ機関砲の連射音が響くと同時に、まず１機のＤＱの武装した片腕がぶっ飛び、速くも戦闘不能なガラクタを１つ形成する。

そして次に、セニフはパングラードを横滑りさせながら「ドリフト」状態にもっていき、すれ違いざまにもう１機をいただこうと目論んだ。

結構欲張りな奴だ。

パングラードの前面にマズルフラッシュが激しく点滅し、飛び散る薬莢が点々とパングラードの軌跡を模っていく。

次の瞬間、セニフに狙われた哀れな金属人形からは、眩いばかりの火柱が上がり、周囲に無残な肉片をぶち飛ばすこととなる。

さらにそれと同時に、体制を立て直しはじめた片腕ＤＱも、アリミアの「ＡＳＲ－ＬＴｙｐｅ４４」の前に、あっけなく朽ち果てるのだった。

（アリミア）
「へたくそなパイロットね。」

少しばかり残念そうに、アリミアが呟く。

このようなアタック戦法は、チームＴｏｍｂｏｙの十八番であり、専らセニフが突撃して相手陣内をかきまわし、錯乱した敵をアリミアが狙い撃つ。

そして最後に残ったご馳走を、最年長者であるジャネットが戴くという戦法であり、熟練したパイロットでもなければ、この連続攻撃を凌ぐことは、そう容易ではない。

今回は、ジャネットが敵スナイパーを狙って単独行動に出ているため、３連続攻撃とはならなかったものの、たったの２連続攻撃で退場に追いやられてしまうようなチーム相手には、言うまでも無く、そこまでは不必要であった。

01－05：○ルーキー［3］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「ルーキー」

（サックス）
「エリアに侵入してきたぜ。どうする？」

（マース）
「様子を見よう。まだ相手の実力もわかっていないからな。」

少しばかり弱気モードのマースは、ものすごい速度でＰｏｉｎｔ９９に進入してくるセニフを、サーチレーダー越しに眺めながら作戦を練り立てていた。

彼等のチーム「ウエッジバスター」は現在３機すべてが生き残っており、数の上ではチームＴｏｍｂｏｙと対等であると言える。

しかし、数の上で対等と言っても彼等には豊富な実戦経験があり、セニフ達Ｔｏｍｂｏｙの実力とは雲泥の差が存在するはずである。

・・・と、思っているのは「ウエッジバスター」の面々だけであって、この直後、彼等は彼女達の戦いぶりに度肝を抜かれることとなるのだが、とりあえずその事実は置いておくことにする。

彼等のチーム編成はＴｏｍｂｏｙと同じで、スナイパーが１機と近接戦用ＤＱが２機。

このスナイパーは一番最初にセニフに砲撃を行った奴であり、ある意味可哀想な事に、ジャネットの見えぬ敵意に晒された標的だ。

このパイロットは、ウエッジバスターの中でも、唯一実戦経験のない「ジェイ・ブラウン」である。

性格的にはかなり強気で方で、口悪い言動を繰り返す反面、内心的にはとても臆病であり、何故彼がこのようなＤＱＡ大会に参加しているか、疑問を持ってしまうほど、戦闘に向いていない人物だ。

どちらかと言えば、窓際のワークデスクに座って、毎日毎日同じような仕事を繰り返しているような単純作業の方が、性に似合っていると言えば似合っている方であろうか。

そんな彼は、初心者の溜まり場に渦巻く異様な雰囲気に呑まれてしまったのか、突然、己の臆病風を無理やりに押し込めようと、思いもよらない行動を起こしてしまう。

相手に自分の存在を晒してはいけないはずのスナイパーが、大きく盛り上がった高台に姿を表すと、猛然と突っ込んでくるセニフに向けて、中距離仕様１１０ｍｍロングキャノンを発射したのだ。

無論、先ほどの攻撃により、セニフの脳裏にはスナイパーの存在が植え付けられているため、たとえ相手の位置が不特定であったとしても、十分相手の照準センサーの気配を察してから避ける事は可能なのだ。

そして案の定、彼の放った弾丸が、パングラードの機体を直撃することは無い。

大きく舌打ちをして見せながら、再びロングレンジスコープ上で、セニフ機をしつこく追い回すジェイが、躍起になって１１０ｍｍ砲のトリガーを引きまくるのだが、彼女に体よくかわされてしまった複数の弾丸が、遠く在らぬところへと着弾し、無意味な爆発を奏で出すだけである。

（サックス）
「ジェイ！！やめろ！！弾丸の無駄だ！！」

見かねたサックスが叫ぶ。

（マース）
「ちっ！！」

せっかくチームウェッジバスターの一員として雇ってやったものの、チームにとってプラスになるどころか、マイナスにしかならないような奴とは・・・。

いくらスナイパーを必要としていたからとはいえ、チームオーナーも思い切った買い物をしたものだ・・・。

（サックス）
「あんな奴放って置こうぜ。馬鹿は死ねって事だぜ。」

（マース）
「サックス。大会はあと４日もあるんだぞ。それまで２機でつなげると思うか？パングラードが通過する地点まで移動して、通り過ぎ際に不意打ちをかけるぞ。」

使えない助っ人に対して、小首を傾げながらの、ため息連発することしか出来ないマースも、内心ではサックスと同じような思いを抱いていたのかもしれないが、残りの大会期間を考慮すれば、こんな馬鹿なパイロットでさえ、簡単に見捨てることは出来ない。

サックスは、マースの言葉に納得しながらも、小さく舌打ちすると、仕方なしとホールスネーク向きの戦闘Ｐｏｉｎｔを放棄して移動を開始する。

あの鈍重パングラードが、ジェイのいるｐｏｉｎｔを目指すのであれば、必ずハイウェイを使用しなければならないはずだ。

となれば、その周回軌道上に待ち伏せる俺達が先手を取って、この小うるさい蝿を撃ち落してしまえばいい。

マースはホールスネーク機体両腰に取り付けられている、サーチシステム阻害用のＦＴＰフィールドを機体周囲に散布し始めると、ホールスネークに常備された「ＳｒｅＧＧ－２０ｍｍナッチャー」に、弾丸を自動装填するためのボタンを押した。

ＦＴＰ阻害粒子は、相手サーチシステムを妨害する効果が得られる兵器で、空気よりも若干重たく、拡散性の高い粒子のために、高速移動時にはあまり意味が無い。

その上、フィールド濃度をあまり色濃く展開してしまうと、自機のサーチシステムにも影響を及ぼしてしまうという代物である。

しかし、自機のサーチシステム送受信装置をアンテナのように、フィールド外に伸ばす事によって、自分だけが「見つかり難い」状況を作り出すことができるため、拠点防衛時や、潜伏行動を取るよう

な場面では、非常に重宝される兵器の一つだ。

マースの作戦としては、ＦＴＰ粒子の拡散と共に出撃、隠蔽行動と共に物陰に身を潜めて、通り過ぎるセニフを横から、不意打ちにしようと言う算段であった。

マースは性格的に言うとアリミアと同じようなタイプで、どんな状況に置かれてもしっかり作戦を立て、理論的に行動する。

作戦を練る段階で自分の世界に入りこみすぎて、周りがまったく見えなくなるのが玉に瑕だが、それでも実戦経験を活かした論理的な作戦はトゥアム陸軍時代に定評があった。

実戦経験はトゥアム陸軍サルフマルティアで５年傭兵をした経験がある。

「ザ・ザ・ザザザァ！！ピーィィィ」

ゆっくりと、相手に気付かれないように持ち場に着き始めた、ウェッジバスターの２人の目の前には、何の気兼ねも無く快走してくる馬鹿なＤＱが一機、今も変わらずこちらへと迫ってくる。

しかし、なにやら不快な何処か遠くの方で鳴り響いているような雑音が、不思議と妙に気に触る。

何かがおかしい・・・？

ＦＴＰフィールド特有のスクラップ音のようだが、自分の展開したフィールドに干渉されている訳でもなさそうだ。

何処か遠くの方か・・・。

マースは不思議そうな表情のまま、サーチレーダーをまじまじと見つめ、セニフの動きを再度観察するのだが、特に何も不審な点は見当たらない。

・・・と、その時、何気なく視線を向けたジェイの機体反応が、いつもより遅い間隔で点滅しているのに気が付いた。

その点滅間隔は不安定で、時々１０m前後でずれ込んでいる。

（マース）
「し・・・しまったぁ！！」

マースとしては珍しく大声を張り上げてしまった。

これほど少ない情報で真実を見極めたのはすばらしいことだが、今の彼にはどうする事もできない。

レーダー上の反応はもうすでにジェイのものではなく、恐らくジェイをやった者の機体反応である。

チーム詳細情報は直接アタックチームに伝達される事はないので、この時点でジェイが何者にやられたのかはわからない。

（サックス）
「ジェイのブリッツがやられた！！」

（マース）
「ちっ！！ゴミ稼ぎのハンターか？なめやがって！！」

彼等にはこの時、ジェイがＴｏｍｂｏｙにやられたのだと言う認識はない。

どこの馬の骨ともいえぬ新人チームが、拡散遊撃戦術を用いる例は少なく、大抵は一丸行動をとる事が多いからである。

しかし、しつこいようであるが、このチームＴｏｍｂｏｙには常識は存在しない。

彼を始末したのは、先ほどからこのスナイパーを狙って、単独行動をとっていたチームＴｏｍｂｏｙのジャネットである。

彼女の本名は「ジャネット・クライス・ホスノー」で、２３歳になったばかりの女性だ。チームＴｏｍｂｏｙ内では一番とされるその長身に、少しのコンプレックスを抱いてはいるものの、その誰しも羨むような妖艶な体つきに、愛くるしい笑顔が特徴的な、やさしいお姉さんだ。

抹茶色の癖毛を右手で掻き上げ、「意気揚揚」と言うよりは、かなり「ルンルン」気分で突撃を開始したジャネットは、完全にジェイの死角を突いていた。

ロングレンジサーチャーというものは、サーチ距離伸ばすため一方向にサーチ機能を集中しなければならならず、広域サーチ可能な最新鋭サーチレーダーでも搭載していなければ、自機の周囲全ての索敵を補完することは難しいことだ。

元々、接近戦を想定して設計されたわけでもないスナイパー機体である。

スナイパーが「見つかったら終わり」と言われ続けるのは、こういった状況に陥る事が多いからなのである。

せめて、相手に発見されたと感じた時点で即座に隠蔽行動を取り、再度、相手の死角へと身を潜めて次なる攻撃の機会を伺うべきところなのだが、ジェイのとった行動と言えば前述の通りである。

ジャネットの張ったＦＴＰフィールドが拡散しきったのは、ジェイの元へとたどり着く少し前のことで、いかに反応の鈍いスナイパーであっても、容易にジャネットを発見できる時間が有ったはずだ。

この時、ジェイとジャネットとの距離は３ｋｍｉｌｓ。

ジャネット機「ラプセル」が全速で飛ばしても１分はかかると言う地点である。

ジャネットは、相手スナイパーの狙撃から逃れるため、自分の位置を捕らえられても問題ないように、細い小路地へにでかい図体のラプセルを乗せ、周囲に残された街灯や電柱を吹き散らしながらＤＱをかっ飛ばしていた。

しかし、そんな彼女の思惑とは裏腹に、まったく相手スナイパーは、彼女の存在に気が付いてくれなかったのである。

（ジャネット）
「もう気づいても遅いからね。」

ジャネットは一つ、小さな溜息をつきながら、かわいい声でつぶやきを入れると、その可愛らしさとは不似合いな、大胆な行動へと移

った。

ラプセルは鈍重型ＤＱであるが、機体素材は軽く頑丈なセラミックを使用しているため、従来の「ラプセル」より1．2倍の速度が出せる。

その上多重動力炉が用いられており、理論上かなりのパワーを引き出せる計算だ。

ジャネットは抹茶色の癖毛を右手でかきあげる仕草を見せた後に、ラプセルの両手首マニュピレータをワームオーバル（腕の中）に格納すると、機体の出力を一気に最大限まで引き上げる。

（ジェイ）
「なんだ?このサーチャーの共鳴は。」

この時点でもジェイは、ジャネットの接近に気づいていない。

距離的に３０秒有れば格闘戦に入れると言う位置にあってもだ。

たった一機で突っ込んでくるパイロットを、有しているチームを相手にするのであれば、他の2機に関しては、別のところで密かにこちらを攻撃するタイミングを伺っていると、考えるべきであろう。

しかし、そんな思考を張り巡らすでもなく、目の前の獲物ばかりに気を取られてしまったジェイには、この直後に死神の天罰が下ることとなる。

ドガシャーン!

ジェイがこの破壊兵器の接近に初めて気づいたのは、戦闘不能とも言えるラプセルの右フックを貰ってしまった後の事である。

その強烈なパンチは、４本足で立つブリッツの体勢を、崩すために放たれた一撃であったのだが、根部分を叩きつけられたブリッツの左前足は、意図も簡単に根元から引きちぎられてしまう。

まもなくして、ブリッツはヨロヨロとその大きな図体を傾けて行くのだが、更にジャネットは、それも許さない。

（ジャネット）
「はぁーぃ！！も一発！！。」

ラプセルの第二撃目は、ブリッツ前面に押出ているサーチセンサー部分へと叩きつけられる。

ラプセルの機体全体重を乗せて放たれたその衝撃はかなりのもので、正面からの受けた一撃であるにもかかわらず、最初に火花を飛び散らしたのは、後部テスラポット接続部分である。

ついでブリッツの主骨格ともいえるセンターシャフトはよじれ、前後に長いブリッツの機体は、無残にも耳障りな金属音と共に、自重に耐え切れなくなった中心部分を発端として、折れ曲がってしまった。

（ジャネット）
「Ｐｏｉｎｔ１０５、オッケー！！」

仕出かした恐ろしいほどまでの破壊っぷりにそぐわぬ黄色い声で、勝利報告をしたジャネットは、抹茶色の髪の毛を振り直しながら、

ニッコリと微笑んでみせる。

普段から優しく、おしとやかな性格の持ち主である彼女は、ほとんど、相手に対して負的感情をぶつけることは無いのだが、この時ばかりは「女だからって舐めてんじゃないわよ！」的な感情が、彼女の心をくすぐってしまったのかもしれない。

01－06：○ルーキー［4］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「ルーキー」

マースは焦っていた。かつて無いほどにかなり焦っていた。

それは、ジェイが敵にやられたと言うことに対してではなく、先ほどまで突撃をしていたパングラードに対してである。

確かに一時、ジェイの方に気を取られてはいた。しかしほんの一瞬だ。

パングラードの機体反応が完全に消えているのである。

（マース）
「あれほど近くに来ながら、レンジＣでまったく反応が無いだと？」

相手の行動が読めなくなったマースの顔面は蒼白で、その操縦桿を握る手は小刻みに震えているかのようだ。

こうなるとパングラードの瞬発力を見せつけられているだけに逃げる事もかなわず、ビルとビルの隙間から外の様子を伺う事しかできない。

次第に焦りが自分を支配して行く様が手に取るように解る。

長い・・・。

あれほどの猪突を見せた小雀はどこに行ったのだろう？

サックスは・・・？

マースにとってこれだけの不安感を感じた事は無い。

戦場よりはるかに安全なＤＱＡという檻の中で、死に対する恐怖をさほど感じないはずなのに、何故・・・。

これは自分中心に組み固めた「外側の自分」が感じる恐怖だ。

「自分は５年も傭兵をやってきた実績がある。こんなド素人相手にやられるはずがない。経験も腕も俺たちの方が絶対凄いはずだ。周りの奴からも尊敬され、御偉い方にもちやほやされ、何不自由無くやりたい事をやってきた。それに比べてなんだ奴らは。ゴミのようじゃないか。必死にもがいて、貧乏で、貧素で、俺の思い通りに踊ってくれる。そんなゴミみたいな奴らに・・・やられるはずがない。やられるはずがない。」

周りからよく思われたい。尊敬のまなざしで見られたいという、願望によって作り上げられた「弱い外側の自分」が、さらに彼の中で焦りを増幅させていた。

（サックス）

「ざ・・・ざ!!マー・・・だ・・・ザザザ・・・。」

サックスの声だ。

とっさにマースはサーチャーの出力を最大まで上げると、サーチレーダー上に映し出された周囲の索敵情報を注意深く観察する。

すると、距離にして３００ｍｉｌｓほどの地点に、ＤＱ２機の反応がかすかに見て取れた。

このサーチャーの反応具合からどうもフィールドを張られていたらしい。

もっぱら敵から身を隠すために用いられるＦＴＰフィールドだが、敵内部を撹乱するために攻撃用として用いられることもあるのだ。

（マース）
「ふざけやがって！」

このときマースには解っていた。

おそらくはもう、サックスはすでに始末されてしまっている。

沸き起こるその感情は、決して確信があった訳ではないのだが、それでも長年軍属の傭兵として戦って来た、戦士としての感が、そう彼に告げていたのだ。

チームランク「レジスター」のチームが「ルーキー」チームにノーポイントゲームされる事は至って稀な出来事であり、これまで彼自身も、同様の失態を演じてしまった戦士達を嘲け笑い、見下して足蹴にしてきた過去がある。

俺が人間のクズとして、卑しいレッテルを貼り付けてきたような奴等と、この俺が同じだと・・・？

そんなはずは無い・・・！

（マース）
「この借りの埋め合わせは、必ずテメェらの残骸を持って償わせてやる！」

マースの中に内在する「八方美人」たるプライドが、彼の思考の全ての事象を奪い去り、沸き起こる憎悪のみを駆り立てていく。

厳しい表情のままクッと前を見据えたマースは、激しい勢いでフットペダルを踏み込むと、ホールスネークの後部に搭載された２０ｉｎｃもあろうかという４機のバーナーを始動させ、巨大な鉄の塊を振るわせ始めた。

装備するＳｒｅＧＧ－２０ｍｍナッチャーのセーフティロックは解除され、すでに戦闘態勢への移行も完了を告げている。

狙うは言うまでもなく「生意気な新人共」。

このＤＱＡ常連チーム「ウエッジバスター」が受けた屈辱は１０倍にして返してやる。

先ほどとは打って変わり、鬼のような形相をもって、前面ＴＲＰスクリーンを睨みつけるマースは、完全に頭に血が上っていた。

アドレナリン大量分泌状態で、サックスがプレイクしたポイントを目指し、全速力でホールスネークを駆り出した。

「怒り」によって本来より優れた力を発揮できる人間は極まれで、マースがこのタイプの人間かどうかは判断できかねるが、ただ一ついえることは、「今のマースは頭に血が上って冷静な判断ができて

いない」と言うことである。

マースが繁華街からハイウェイ沿いの通りに、その身を這い出して間もなく、すぐさま憎むべき小雀の姿を捉える事に成功したのだが、どうやら相手は逃げ去る様子を微塵も見せずに、事もあろうかこのホールスネーク目掛けて突進してくるではないか。

（マース）
「なめやがって！」

マースは即座に銃火器の照準システム指定範囲中心部へと、標的となるパングラードの姿を叩き込むと、ＳｒｅＧＧ－２０ｍｍナッチャーのトリガーを思いっきり引いた。

ガトリング系であるこの銃の連射速度は凄まじいものがあり、１分間で約１２０発もの弾丸を発射可能な代物である。

そして、物怖じもせず無謀な攻勢に打って出たセニフもまた、マースの放銃タイミングに合わせて、両手の２０ｍｍアームガンのトリガーを引いた。

これまたオートセミカートリッジタイプの、凄まじい連射性能を有している兵器の一つとなる。

お互いの距離が接近するに連れ兆弾発光が激しくなり、あたりにおびただしい数の薬莢を周囲に撒き散らす。

しかし、お互いの機体が衝突する寸前まで撃ち合った2人が、物凄いスピードでその機体を交錯させるまでに、両者合計３０００発もの弾丸を放ったにもかかわらず、相手の機体に致命傷を与えるまで

には至らない。

勿論、お互いに前面装甲の厚い機体に搭乗しているのだから、両者共に一戦目は痛み分けとなりうる事は有り得る話で、マースがそんな状況をまったく想定しない訳が無かった。
チャンスだ。

旋回能力では断然ホールスネークの方が勝る。

いかにパングラードの直進能力が優れていると言っても、旋回性能に難を残す猪野郎では、所詮ただの特攻豚よ！

相手が旋回しきる前にＳｒｅＧＧ－２０ｍｍナッチャーの餌食にしてくれる。

後ろを見せたままで逃げ去るとしても、到底このホールスネークの蛇穴から逃げ切れるはずも無い。

マースは大きな図体のホールスネークを１８０度右旋回させると、どっしりとしたＳｒｅＧＧ－２０ｍｍナッチャーを構えなおす。

そして、レンジ中央にパングラードの姿を捉えたとき、旋回中の無様な姿を期待したのだが、セニフの取った行動は、直進してそのまま離脱してしまう事だった。

（マース）
「どちらでもよいわ！！」

そう言い放ったマースはガトリング発射のトリガーに力をこめる。

勝利を確信した彼の口元はほのかに歪んでいた。

そして有頂天でとても気分爽快だった。

レンジ右上に点滅する「Ｃａｔｉｏｎ」シグナルが目につかないほどに・・・。

そんな至福の瞬間を垣間見ていたマースを、どん底の現実に叩き落すべく、大きな衝撃が彼の体を直撃する。

勢い良く前のめりした身体を支えるための、磁気ベルトが激しくラップ音を奏で出し、彼の髪の毛を逆立てる。

一瞬、何が起こったのか理解できないマースに、とどめとばかりにもう一発の弾丸がホールスネークの機体を貫通した。

ドゴーン！

（アリミア）

「ヒット。」

先ほどの「Ｃａｔｉｏｎ」シグナルは、敵のサーチャーシステムのロックオンを警告するシグナルであり、セニフと撃ち合いを繰り広げている最中からずっと、マースはすでにアリミアの照準の向こうに捕らわれていたのだ。

アリミアとしてみれば、特に両者が撃ち合いを始める前であっても、ホールスネークに弾丸を命中させる自身は有ったのだが、相手はあの前面装甲の厚いホールスネークである。

より確実に相手を撃破するためには、ホールスネークの背面側を、アリミアの方に向けさせる必要があったのだ。

セニフも勿論、アリミアの潜伏エリアは把握しており、わざわざしなくても良い正面衝突を選択して見せたのも、相手ホールスネークの旋回を誘い出すための囮だったのだ。

バチバチと激しく火花がちらつく、ホールスネークの後部テスラポットからは、のうのうと濃密な黒煙が噴出している。

動力系統に深刻なダメージを追ってしまった機体はもう動くことも出来ずに、自重を支えきれなくなった両足が崩れ落ちる。

この時マースは、初めて相手チームにスナイパーが存在する事に気が付いた。

それまで、まったく馬鹿な新人がいきり立って、勝手に突進して来ているだけだと思い込んでいた。

おそらく、ジェイを始末したのも奴等か・・・。

少しぐらい臆病な感じに、慎重に物事を洞察すれば、決してこのような無様な姿を晒さずに済んだものを・・・。

（マース）

「けっ！！いい気になるなよ・・・。ひよっこ共が！」

そう一つ、吐き捨てるように言い放ったマースは、機体の爆発を避けるため、ホールスネークの電気系統を全てオフにし始める。

半分負け惜しみを含んだ言葉であったが、そしてもう半分は自分自身に向けられていたのかも知れない。

周りからはいいように持て囃され、いいように踊っていた自分に対しての戒めの言葉であった。

０１－０７：〇黒いお抱え衛兵［１］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「黒いお抱え衛兵」

廃都市ブラックポイントを囲む３０００メートルクラスの山々は、元は岩肌がむきだしの、草木も生えないといわれた死山であった。

ＥＣ３７７年ごろ盛んに行われた「グリーンクラッド作戦」により、今でさえ木々がのうのうと生い茂っているが、一昔前までは人が住むのも苦労する土地だったのだ。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国が戦火を盛んに拡大していたころ、トゥアム共和国側が、帝国軍の東方進軍を牽制する目的で、この地に軍事拠点を置いたのがこの都市の始まりである。

乾燥帯から熱帯へと気候を強制的に変化させられたこの地域は、今まさに雨季の真っ只中で、気温、湿度とも、人に不快感を与えるには十分なほどの最悪な状態だ。

（マリオネクス）
「シル？交換ビットと２０ｍｍ弾の用意できたよ。」

（シルジーク）
「ああ。まあ入れよ。外は熱いだろ？」

開いた扉から漏れ出してくる、目に見えない滑った空気が、それまで快適な世界を演出していた空間を侵食し始める。

チームＴｏｍｂｏｙの物資弾薬補給用トレーラ「キャンサー」の中で、一人、広域サーチレーダーの前に座り込み、涼しげなエアコンの冷気に浸っていたシルが、ゆっくりとマリオを手招きした。

３５度を超す程の、蒸し暑い空間からようやく開放されたマリオにとって、キャンサー内の室温は、少しばかり震えを覚えるほど寒い気もしたが、それ以上の快適さが彼を包んでくれるので、口にしなかった。

（マリオ）
「お姉ちゃん達は？」

滴り落ちる額の汗をタオルで拭い取り、ゆっくりとシルの方へと歩み寄ったマリオは、綺麗な細い声をキャンサー内に響かせながら、サーチレーダーが映し出す戦況へと興味を示した。

まだ幼さを拭いきれない小柄な彼の本名は「マリオネクス・ホスノー」、まだ１３歳になったばかりの少年だ。

彼の言うお姉ちゃんとは「ジャネット」のことで、マリオとジャネットは、実の兄弟である。

人見知りが激しく内向的な性格の彼は、とても臆病で泣き虫な所が有り、つい最近までは、常にジャネットの足元にへばりつくように行動していた。

しかし、そこがまた可愛いのだと、Ｔｏｍｂｏｙの女性陣からはすこぶる可愛がられている。

（シルジーク）

「まだエリア５５にも至ってない。３ラインにハンターがウヨウヨいたんでこのざまさ。」

なにやら疲れきった様子のシルは、体を仰け反らせるように、椅子の背もたれへと全体重を乗せると、大きく背伸びをした体勢のまま、ＤＱＡ会場マップを映し出す、コンソールの端っこを指差しする。

３人のおてんば娘達は、今大会会場内では一番の新米チームであるにもかかわらず、迫り来る相手チームを散々蹴散らしたあげくに、事もあろうか上位人気チーム同士の交戦区域を掻き乱すような行為を頻発したために、周囲のチーム達の反感を買ってしまったのだ。

勿論、大会ルールでは、彼女達の行動に何ら問題はない。

しかし、このチームはド新人の集まりで、しかも、ＤＱパイロットが全員女という、真面目に大会に参加している他チームからすれば、こんな「ふざけたチーム」に、良い様に大会を荒らされてたまるか！的な感情に駆られてしまうのも、心情としては解らなくもない。

だから俺は止めたんだよ・・・。

（シルジーク）

「まあ、この位置まで来れば、ニュートラルエリアまで後１０分ってとこだろ。よくもまあ、無傷で帰ってこれたもんだ・・・。」

大きな溜息を隠すでもなく、半分あきれた表情でシルは言った。

彼の言うニュートラルエリアとは、いわば「戦場の中立地帯」のような場所で、大会期間中、このエリア内での発砲、格闘、チーム間のイザコザは、即刻、失格退場となるルールと定められている。

５日間にも及んで戦闘を繰り返さなければならないとは言え、休息も取らずにぶっ通しで戦い続ける事など出来るはずも無く、このような中立地帯は、大会会場の各地にポツポツと設置されているのだ。

各ニュートラルエリアでは、各チームの物資の補給、休息、情報収集が可能であり、さらには、食料品店、生活用品店、娯楽施設、酒場など、人々が暮らして行くのに困らない程度の小さな街が形成されている。

また、ＤＱの修理工場や格納庫も存在し、金さえ出せば、ＤＱの予備パーツだけでなく、ＤＱ整備士やＤＱパイロットまで雇えてしまうのだ。

（シルジーク）
「そう言えばサフォークはどうした？」

（マリオ）
「・・・ええとね。・・・寝てるよ。」

（シルジーク）
「・・・。ったく・・・。たたき起こせ。」

（マリオ）
「でもさ。ほら気持ち良く眠っているし・・・。」

（シルジーク）
「そう言う問題じゃないだろ。」

（マリオ）

「でも、でも、ほら疲れてるみたいだったから・・・。」

（シルジーク）

「マリオ、あんなグータラかばってやる必要はないぞ。」

ようやく、チームＴｏｍｂｏｙが戦場での追っ手達を振り切り、安全なエリアまで到達したことを確認したシルは、しばし、安堵したような表情で、マリオとしょうもない会話を嗜んでいたのだが、チカチカとコンソール脇で点滅を繰り返す一つのランプの存在に気が付く。

しばし訪れた静寂の時間の中、ふと、気の抜けたような表情のまま、その光の点滅を観察していたシルは、突然、飛び上がるようにして目の前のコンソールに被り付くと、なにやらＤＱＡ大会本部から提供されている各チームの詳細一覧を漁り出した。

そして、そんなシルの行動に釣られるように、表情を豹変させたマリオも、慌てた様子でセニフ達アタッカー陣への緊急連絡用特別回線を開く作業へと取り掛かる。

何かがおかしい・・・。

シルは何か「えもいわれぬ不安」を感じていた。

敵チームの接近を知らせる警告ランプが点灯することは良くあることだ。

先ほどまで敵チームに包囲されそうになった場面でも、ほとんどこのランプは点灯しっぱなしだった。

サーチレーダー上に映し出されるアタッカー陣にも特に異常は見られず、先ほどまでしつこくセニフ達を追跡していた複数の「ハンター」達も、どうやら諦めた様子で、1チームの反応を残して、散り散りに後退して行くのが見て取れる。

??

1チームを残して????

もしやと思った瞬間だった。

（シルジーク）
「やっばい!!カーネルだ!!」

（マリオ）
「えええええ!?カ・・・カーネル!?」

マリオはくりくりとした大きな目を、さらに大きく丸めたような表情で驚くと、先ほど外にいたときとはまるで違う「冷たい汗」を背筋に感じた。

カーネルとはDQA参加チームの中でも最上級に位置するチームの総称であり、今回の大会には33ものチームが参加しているが、その中でもカーネルと称されるチームは3チームしか存在しない。

DQAの中に限っていえば、そのDQ操舵技術はほぼ「神の存在」に近く、出会ったら最後、チームの全滅は免れないといわれるほどのチームである。

DQA提供情報によれば、今回セニフ達の前に唐突に現れたカーネ

ルチームは、「Ｂｌａｃｋ' ｓ」というチームで、噂ではＤＱＡ主催者お抱えの衛兵だ噂されているチームだ。

それは主催者側が、ＤＱＡ優勝賞金を取られないように仕組んだ陰謀とも言われ、胡散臭い地方のＤＱＡともなると、ほとんど人の手に莫大な優勝賞金が渡る事はない。

（シルジーク）
「セニフ！！止まれ！！セニフ！！」

即座にシルは、マリオが差し出したマイクを手に取ると、緊急連絡用特別回線を通してアタッカーチームに連絡を取る。

事は一刻を争う状況だ。

おそらく、それまでしつこくセニフ達を付け狙っていたハンター達が後退したのも、このカーネルの存在に彼らが気付いたからであろう。

勿論、クラスが上位であるチームから奪ったポイントというのは、下位チームと比べても何倍にも加算される仕組みではある。

しかし、そんな甘い言葉に誘われて、見知らぬ藪を突付いてしまった奴等の末路とは、常に同じく「敗北」という言葉に塗れる事となる。

それが故のカーネルであり、あわよくば戦場において、決して出会いたくない相手なのだ。

サーチレーダー上で、チームＴｏｍｂｏｙが待機するポイントから、

少しはなれた位置で、じっと身動きもしない「Ｂｌａｃｋ' ｓ」だが、おそらくはこちらの存在に気が付いている事は確かだ。

そして、狙いは、俺達チームＴｏｍｂｏｙか・・・。

（セニフ）
「なぁによ?シル。愛の告白は2人っきりの時にしてって言ってるでしょ?それにもっと雰囲気のあるシチュエーションじゃなきゃ、私やだよ。」

（シルジーク）
「訳の解らん事を抜かすなアホ!エリア1ブロック内にカーネルが張ってるぞ!!一旦、全員止まれ!!」

サーチレーダーに食いつくように顔を近づけ、最大ズーム状態で細かなカーネルの動きを観察していたシルが、ふざけた調子で言葉を返すセニフをあっさりと怒声で退ける。

（アリミア）
「さっきからうるさい輩の気配がしないと思っていたら。そういうことなのね。」

（セニフ）
「・・・アホって・・・。」

アリミアだけは、周りに渦巻く異様な雰囲気を察していたようであったが、セニフ達アッタカーチームには、カーネルの存在が見えていない。

所詮、ＤＱＡ大会なので主に使用されている、現場レベルのサーチ

ャーなど、気休め程度のお飾りに過ぎず、広大な敷地面積を誇る大会会場の戦況については、１０分単位に更新される主催者側からの提供情報を元にするか、彼らのように、チームバックアップが広域サーチレーダーで、不足分を補完してやる必要があるのだ。

近場にカーネルの存在を知らされた彼女達は、すぐさまＤＱを停止させると、周囲に分厚いＦＴＰフィールドを展開し始める。

密林であるとはいえ、１ブロックエリア程度であれば、腕の立つスナイパーなら狙撃できるからだ。

（シルジーク）
「当該エリアの地形を利用してカーネルを撒くぞ！進路をＮ３２Ｅ５５に変更！！セニフ、お前が殿で援護しながら一気にずらかれ！！」

（ジャネット）
「あ～あ、もう汗びっしょり・・・。早く帰ってシャワーが浴びたいわ。」

すばやく周囲の茂みの中へと身を隠し、緊急戦闘体制への移行作業を終えると、自機のサーチャー感度を調節しながら、ジャネットがぼやいてみせた。

彼女達が身を潜めたこの区画は、ブラックポイントの都市ビル群より、２０ｋｍｉｌｓほど離れた山奥にあり、「グリーンクラッド」で植林された木々達が、血気盛んに生い茂る森林地帯となっている。

都市中心部も破壊された爪あとから、瓦礫の山で覆われた道路が多く、身を隠しての隠蔽戦闘が可能であったのだが、ここ森林地帯も

また、お互いを直射すべき射線を阻害する障害物に、事欠かない場所である。

（セニフ）
「アリミア？サーチャーで敵の正確な位置って解る？あのカーネルでしょ？私、一度やってみたかったんだぁ。」

突然、セニフがとんでもない事を、きらめく笑顔でさらっと言う。

ＤＱＡ参加者であれば、その姿を見ただけで逃げ失せてしまうような相手を前に、まったくの新人チームが太刀打ちなど出来ようはずも無く、一体、どうやったらそんな考えに到達するのかと、シルは顔を引きつらせて呆れるしかないのだが、他の２人も含め、女性陣３人の中に、シルの言葉に従って、即座に離脱行動に移ろうとする者はいなかった。

こういう場合、アタッカーリーダーのアリミアとしては、シルの提案する正しい判断を尊重し、セニフの考えを制するべきである。

しかも、チームＴｏｍｂｏｙは、先ほどまで繰り広げてきた戦闘で、残弾数、残エネルギー共に残り少なく、連続稼動を強いてきたＤＱ機体自体が、少しガタついてきたのも確かだ。

しかし、この時、彼女達の心の中に、じわじわと疼く思い。

（ジャネット）
「う～ん。怖いもの見たさって言うか、なんか、一度はやってみたい気もするわね。」

（セニフ）

「でしょ。でしょぉ。いいよねアリミア。」

ジャネットがセニフの言葉に乗ってしまった。

戦場における正しい判断とは何なのか。

それをまったく知る由もない二人の可愛い小娘達の黄色い会話が飛び交う。

こうなってしまうと、シルがいくら怒鳴り散らしたところで、逆に拗ねた彼女達の反感をかってしまう恐れもあり、シルとしては、もうアリミアに制して貰うしかなかったのだが、じっと、何かを考え込んでアリミアが導き出した答えとは、シルが期待したような「怒鳴り声」では無かった。

そして、挙句の果てに。

（アリミア）

「しょうがないわね。」

と一言漏らすだけである。

本来止めに入らねばならない立場の彼女であっても、内心に燻る「やってみたい」と言う気持ちが強かったのだろうか。

大きく息を一つ吐き出すと、そう決心して見せたアリミアは、くっと厳しい表情を醸し出し、釣り上がった目の奥に冷たい冷気を灯し始めた。

（シルジーク）

「お前等な・・・。」

・・・と、小面倒くさいが、説教の一つでもたれてやろうと意気込んだシルに対して、それを完全に遮断すべく割り込んだセニフの言葉。

何処かちょっと、根に持つタイプなのだろうか。

（セニフ）
「どうせ私アホだしね！じゃ、そういう事で通信終わりっ。じゃねシル。」

（シルジーク）
「どういうことだ！！」

コンソールを激しく殴りつけながら怒鳴り散らすシルだが、虚しくもお嬢様たちから届けられたものとは、受信拒否の悲しき手紙のみであった。

もう、彼に出来ることは何もない。

あとは天に運命を委ねて、彼女達がこれ以上、馬鹿な行動を起こさない事を祈るだけである。

01－08：〇黒いお抱え衛兵［2］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「黒いお抱え衛兵」

シルジーク達バックアップ部隊が待機するニュートラルエリアより、北北西に１０ｋｍｌｉｓほど離れた山奥にエリア５５と呼ばれるポイントがある。

ここは戦時中、帝国軍が建設中だった中距離ミサイル地下基地の建設跡が存在する。

位置的には、トゥアム共和国首都「ランベルク」の喉元にあたるというほどの場所であり、トゥアム共和国側は、基地始動１ヶ月前までこの存在に気づかず、下手をすれば、現在の「トゥアム共和国」は存在しなかったのである。

３０００メートル級の死山に囲まれたこの地域は、地上部隊からは完全に敬遠され、レーダーをも狂わす黒砂地帯であったため、トゥアム共和国側にとって、完全に「死角」となっていたのだ。

これが、この地方の名前「ブラックポイント」の所以である。

トゥアム共和国軍は、この事実を確認後、すぐさま重爆撃機「Ｓｔｒ－２９ガーゴイル」を三機派遣し、地形が変わってしまうほどの爆撃を、３時間に渡って行ったと言われている。

この地の至る所で目にする事が出来る「円形の不思議な湖」は、かつての爆撃跡の成れの果てであり、その時の爆撃が如何に凄まじい

ものだったのかを、暗に示していた。

（ランスロット）
「なあ、ボスの話だと相当な新人って言うぜ。Ｂ２機（ビギナー）、Ｒ５機（レジスター）、Ｈ２機（ハンター）だろ？軽く３チーム始末してるってこったぜ。」

（メイルマン）
「そんなことは関係ねぇ。まさか怖気づいてしまったのかよ先輩？」

（ランスロット）
「ほっ！！お前さんも生きのいい新人だこと。」

そんなクレータ湖の畔付近に鬱蒼と生い茂った、木々達の枝葉の中に身を隠したまま、じっと何かを観察している男達がいた。

それは、先ほどチームＴｏｍｂｏｙの近くに姿を現した、カーネルチーム「Ｂｌａｃｋ' ｓ」のパイロット達である。

彼らは皆が噂する通りの、ＤＱＡ大会主催者に雇われた傭兵であり、話す内容からして「ボス」とはおそらく「ＤＱＡ主催者」を指すと予想される。

アタッカーチームリーダーの「ユァンラオ・ジャンワン」を筆頭に、「ランスロット・アバンテ」、「メイルマン・イン・ニネヴェ」共に、かなりのやり手とされるＤＱパイロットだ。

（メイルマン）
「ユァンラオ。俺にやらせろ。テメエにポイントをやりたくねえ。」

チームＢｌａｃｋ' ｓとしては、最近入った新人で有るメイルマン

だが、もうすでに、チームリーダーの「ユァンラオ」にタメ口をかましている。

少しばかり勝気の過ぎる青年この青年は、気に入らない事があるとすぐに顔に出るタイプだ。

年齢は２４歳で、実戦経験は特に無いのだが、ＤＱ操舵技術には卓越した物を持っており、過去に、トゥアム共和国南部に位置する「セロコヤーン」地方で開催されたＤＱＡ大会で、自分のチーム以外のＤＱをすべて撃破し、莫大な賞金を手に入れたと言う、凄腕の傭兵である。

本来なら、もうすでに一生遊んで暮らせる程の大金を得ながらにして、何故また、危険なＤＱＡ大会等に参加するのか。

彼の周囲では、そういった疑問を抱く者も後を絶たないが、彼にして見れば、答えは簡単だ。

それは、単に、彼が弱者を痛めつけて優越感に浸る事を好み、言ってしまえば、単なるサディストであるからだ。

特に、やられる寸前に抵抗する事もできなくなった弱者に対し、「最後の銃弾」を撃ち込むのが最高の一瞬だと彼は語る。

（ユァンラオ）
「ふっ、好きにしろ。」

（ランスロット）
「おいおい！マジかよ、いいのか？こんな馬の骨一人にまかせてよ。」

馬の骨？・・・と言う言葉に対して、メイルマンは激しい怒りを感じたが、それでも彼としては珍しく、その感情を押し殺した。

口を開けば「女」と「酒」の話しか出てこないような、お調子者のランスロットに対しては、口で言うより、実際に自分の実力を見せつけた方がいい。

ＤＱパイロットとしての腕は、絶対に俺の方がいいに決まってる。

こんなひょろひょろで、覇気の欠片すら見つけることの出来ない金髪チリチリ頭が、何故、ＤＱＡ大会で最上級に位置するカーネルチームに所属しているのか・・・。

そして、そんなランスロットが何故、自分と同列の立場として存在しているのか・・・。

彼としては、絶対認めたくない事実であったのだ。

（ユァンラオ）
「ランスロット、先にＦＥまで行くぞ。メイルマン、ボケをかますなよ。」

（メイルマン）
「ふん！！ボケようがないぜ。」

厳つい強面の割れた顎にまばらに生えた武将髭を、ゆっくりと擦りながら指示を出すユァンラオに向けて、思いっきり不満げな言葉を吐き付けたメイルマンは、内に籠もる苛立ちをＤＱに体現させるように、駆動システム出力を１００％にまで吹き上がらせる。

すると、それまで彼等の搭乗するＤＱを覆い隠していた木々達が、「リベーダー２」のバーニヤから吹き荒れる大量の熱波に煽られ、大きな爆音と共に踊り狂い始めた。

彼らの搭乗する黒い機体リベーダー２は、マムナレス社製の最新型ＤＱで、まだ市場にも出回っていない、貴重な試作品の一つである。

数あるＤＱの中でも、大型に分類されるであろうこの機体は、最近の流行である小型軽量化に反して、かなりの機体総重量となっているが、それでも、高機動兵器を歌っている点は、決して伊達ではない。

後部テスラポット付近に取り付けられた、標準バーニヤ２機の他に、両肩から付き伸びる肩当て裏に左右合計６機、両足脹脛に計４機、太腿裏部分に計４機と、総数１６個ものジェットバーニヤを取り付けた、モンスターマシーンとなっている。

例に上げれば、最大出力でセニフの搭乗するパングラードの、５倍以上ものパワーを発揮できる計算で、全てのバーニヤをフル稼働させると、空を飛ぶことが出来るという噂まで流れた程だ。

しかし、噂はあくまで噂。

その機体性能の如何を知るのは、ＤＱ開発に携わった開発メンバーと、実際にこのＤＱを操舵するパイロット。

そして、このＤＱを敵に回して戦闘する、相手パイロットだけであろう。

01－09：○黒いお抱え衛兵［3］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「黒いお抱え衛兵」

（ジャネット）
「１機来たわ！！」

ジャネットの叫び声と共に、それまで密林の中で隠蔽待機中だったチームＴｏｍｂｏｙに、「Ｗａｒｎｉｎｇ」を知らせるシグナルが点滅した。

彼女達が待機する地点から程近く、注意深くその動向を見守っていた最強の敵カーネルが、ようやく動きを見せ始めたのがこの時だ。

程なくして迸った緊張感に包まれる中で、ジャネットは抹茶色の癖毛をかきあげると、チームＢｌａｃｋ’ｓのその後の行動に注意深く視線を向ける。

（ジャネット）
「・・・・・・あれっ？」

（セニフ）
「・・・１機・・・だけだね・・・。」

沸き立つやる気を一杯に、心の中に充満させて待ち伏せていた彼女達。

しかし、そんな彼女達の思いとは裏腹に、前後二手へと分裂を見せ

たチームＢｌａｃｋ-ｓから、Ｔｏｍｂｏｙへと宛がわれた贈り物は、たったの1機だった。

しかも、残りの2機に関しては、まったく戦闘態勢に移行する様子も無く、静かに北の方へと後退を始めるではないか。

（アリミア）

「完全になめられてるね。面白くないわ・・・。」

少しばかりドスの利いた低い声でアリミアが呟いた。

普段は物静かで、見た目の怖さとは対照的な優しさを持つ彼女も、正面切って見下される行為に対しては、面白くない感情を抱くようだ。

アリミアが、こんなにも感情的に「怒り」を表すことは非常に珍しいことで、通信機越しに言葉を伝え聞いたセニフでさえ、少しの悪寒を背中に感じてしまう。

身分不相応ながらも、彼女達としては、3対3の対等の条件を持って、このチームＢｌａｃｋ-ｓに挑みたかったのであり、何も「女だから」「子供だから」と、相手の油断を誘い出して有利な戦況を望んだ訳ではない。

（セニフ）

「ジャネットは右回り！！アリミアはバックアップ！！行くよ！！」

まったく次なる作戦の指示さえも、飛ばす事のないアリミアに立ち代り、隊長でもないセニフの指示が飛んだ。

（ジャネット）
「アリミア。怒るのも良いけど、貴方らしくないわ。まずは目の前の一機を撃破することを考えましょう。バックアップ。任せるわね。」

コクピット前面に張り巡らされた、外界を映し出すＴＲＰスクリーン越しに、眩いばかりに光を放つ２機のＤＱが、アリミアの目の前を勢い良く飛び出していく。

セニフを乗せたパングラードは左手方向、そして、ジャネットを乗せたラプセルは右手方向へ。

あまりの手際のよさを見せ付ける２人の行動に、少し驚いたような表情を見せたアリミアだったが、徐に狙撃用サーチゴーグルを装着すると、即座に通信マイクに指示を飛ばした。

（アリミア）
「セニフが先行！ジャネットが二番手！敵の攻撃を牽制しつつ、相手の動きを少しでも緩めさせて！相手はあのカーネルよ！出来る限り無茶は避けるように！」

（セニフ）
「了解！」

（ジャネット）
「了解！」

少し、私自身の方が飲まれていたのだろうか・・・。

アタッカーリーダーの私がしっかりしなくてどうするのよ・・・。

ふと、アリミアが、先ほど胸に抱いた怒りの源を探りながら思う。

右手を握り締めたまま胸へと押し当て、ゆっくりと目を瞑った彼女は、迫り来るカーネルという強敵に対して、新たな闘志を燃え上がらせるために、大きく一つ息を吐き出した。

01－10：○黒いお抱え衛兵［4］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「黒いお抱え衛兵」

セニフが操縦するＤＱパングラードは、重心位置補正機構を搭載していない旧式タイプであり、綺麗な2足歩行が出来ない「出来損ないＤＱ」である。

主な移動方法としては「ホバー移動」以外に無く、両足の設置面積を可能な限り大きく取る事によって、何とか機体のバランスを取っているに過ぎない。

現在市場に出回っている最新鋭ＤＱと比べれば、まるで玩具のような印象さえ、感じてしまう同機体なのだが、ここエリア５５のように、凹凸が激しい地形上を快走する分には、かえってこのような旧式ＤＱの方が、扱いが楽な場合もあるのだ。

しかし、そんな大地を滑り動くことのみに特化したパングラードでさえ、時に大量の水分を含んだ湿地帯に差し掛かかると、それまで増幅させてきた移動スピードが大きくかき消されてしまう。

（セニフ）
「何だよここ・・・。スピードに全然乗らないじゃん！ちっくしょ・・・。」

大きく迂回する羽目にはなったものの、本来、ＦＴＰフィールドを展開させながら移動するジャネット機よりも、先行してカーネルと対峙しなければならないはずのセニフは、中々思うようにスピード

に乗れない自分の愛機に対して、苛立ちを押さえ切れないように、細く綺麗な赤髪を掻き乱した。

何もわざわざ、このような移動が困難な戦闘エリアを、交戦会場として選択しなくても良いようなものだが、相手チームのＤＱは、機体性能すら未知数な最新鋭機種リベーダー２である。しかも、カーネルというチームに所属するパイロットが、今まで対峙して来たパイロット達より、劣っているはずもない。

対戦条件がどうであれ、そんなパイロットが悠々と戦闘を繰り広げられるような戦場は、彼女達としても、絶対に選択してはならないのである。

しかし、セニフとの距離を徐々に詰めつつある相手ＤＱもまた、彼女と同様の湿地帯エリアに差し掛かっているはずなのだが、どうも、移動に関して地形的制約をあまり受けていない様にも見受けられる。

その走行スピードから推測しても、ホバー走行タイプのＤＱであることは間違いないのだが、それでいながらにして、このスピードとは・・・。

ちょっとタイミング的に、まずいかも・・・。

と、セニフが一段と表情を曇らせた矢先だった。

ドドーン！！

突然、激しい爆発音と共に大きな黒煙が２本、セニフの行く先に立ち昇る。

（アリミア）
「セニフ？囮が先行しないでどうするの？」

ヘッドホンを通して静かな声色を投げかけたアリミアは、少し意地悪な口調でセニフの気持ちを煽り立てる。

どうやら、直前に発生した爆発音の正体は、アリミアが遥か後方からカーネルを狙撃したものであり、相手の進行速度を緩めさせるための、牽制弾であったようだ。

（セニフ）
「わかってるよ！！」

目に見えて進行速度を落としたリベーダー２に対し、簡単な挑発に怒鳴り声を返したセニフが、躍起になってフットペダルを踏み込むと、出力を臨界点まで引き上げられたパングラードは、見る見るうちにその進行速度を吹き上げていく。

なんとも単純な反応を見せるセニフの動きを、サーチレーダー上で確認しつつ、クスクスと笑いを堪え忍んだアリミアは、次なる砲撃を放つポジションを確保するために、即座に操るＤＱを発進させた。

チームＴｏｍｂｏｙ側としては、これでようやく、相手カーネル機を迎えるための準備が整ったわけだなのだが、やはりと言うべきか、完全にヒットさせるつもりで放ったアリミアの弾丸を、いとも簡単に回避して見せた辺り、リベーダー２のパイロットの腕前は偽者ではない。

（アリミア）
「所詮カーネルはカーネルか。」

今回のチームＴｏｍｂｏｙの作戦において、一番重要なポジションを任されたの、やはりなんと言っても、最後にカーネルを狙撃すべきアリミアである。

それは、パイロットの腕の差以前に、ＤＱ機体性能に雲泥の差が存在するため、彼女達には、近接戦闘での勝ち目が、ほとんど無いからに他ならない。

しかも、鬱蒼と生い茂る木々達を間抜いて、正確な射撃を敢行することは非常に難しいことであり、一瞬でもカーネルの動きを停止させることが、今回の作戦における、成功の前提条件となっているのだ。

そういった意味では、相手の注意を逸らすべきセニフ、不意打ちをかけるジャネット共に、軽視できる役割でも無く、たった一つの失敗から、一気に全滅となる可能性も否定できない。

（セニフ）

「あと３０秒。絶妙じゃん。」

カーネルの現在位置と、パングラードの現在位置から推測するに、どうやら今回のメインウォーエリアは、湿地帯のど真ん中に浮かぶ、島のような乾土帯となるらしい。

地形的にもさほど凹凸が無く、比較的開けた空間であることを確認したセニフは、山積する不安感を、微塵も感じさせないような笑顔を浮かべた。

彼女としては「強いものとやれる」という、好奇心の方が勝るよう

だ。

そして、フットペダルでパングラードの出力を調節し、対決戦場を微妙に修正すると、やがて視界に捕らえた相手を鋭く凝視した。

（セニフ）

「みえた！！」

この時点で、彼女から見て前方１ｋｍｉｌｓほど向うに、漆黒のＤＱが見え隠れする。

それは見るからに、かなり大型のＤＱであったが、ジャネットが搭乗するラプセルなどとは、比較にならないほどの機動性を感じさせる機体構造だ。

勿論、足を止めて撃ち合うことがタブーとされるパングラードで、真正面からリベーダー２と近接戦闘を繰り広げるわけにもいかないのだが、セニフは即座に、パングラードの両手に備え付けられている、２０ｍｍ機関砲に弾丸の装填を開始し、向かう相手に照準を絞る。

これまで繰り広げてきた戦闘によって、かなりの弾数を消耗してしまったために、すべての弾丸を装填したところで、残り４０％に満たない程度。

セニフが１０秒ほどトリガーを引きっぱなしにすると、全弾を打ち尽くしてしまう量ほどしか残されていなかった。

一方この時、チーム「Ｂｌａｃｋ－ｓ」のメイルマンもまた、迫りくる撃ち合いのための準備を開始していた。

リベーダー2が装備する武器は、小型のリニアキャノン「Ｒｅｓｅｎ ＡＳＲ－１０ｒｅｎｇ」で、ロールコンデンサに一気に高電圧をかけ、瞬間的に発生する磁力により弾丸を発射するものであり、瞬間的に大量のエネルギーを発生させるテスラポットが開発されるまで、実用化が困難であった兵器だ。

最近、ようやくこの手の武器は増え始めたのだが、未だに実戦で使用されるほどの成果も無く、この最新鋭機種リベーダー2も、電磁系火器を主装備とする設計思想であったが、どうしても通常火器を使用する機能を切り捨てられ無かったのだ。

（メイルマン）
「へっへ！！雑魚共のくせに、面白い作戦を立てるみたいだな。ルーキーがすぐさまやるようなフォーメーションじゃないぜ。どおりで早めに指示が下るわけだ。」

メイルマンはそう言い放つと、サーチレーダー上でしきりに「囮」であることを示す、セニフの動きを横目に、周囲への警戒をさらに強める。

彼は、チームＴｏｍｂｏｙの作戦をすべて見透かしていた訳では無いが、それでも彼女達が「時間差攻撃」を得意としている事は、すでに確認済みであった。

これは「お抱え衛兵」たるチームＢｌａｃｋ' ｓの特権であり、彼らの元には、一般の参加チームには与えられない、各チームの詳細情報情報が、リアルタイムで提供されているのだ。

当たり前のことであるが、ルーキーチームたるＴｏｍｂｏｙは、過

去の戦闘記録に乏しいために、対峙する相手チームとしても、まったく予備知識が無いままに、このチームと対戦しなければならない。

しかも、パイロットが全員「女」であるようなチームに対し、一体どのチームが、彼女達のチームに対して、警戒心を抱くというのであろうか。

彼女達がここまで快進撃を続けることが出来たのも、こういった相手の油断が招いた結果なのかもしれない。

勿論、事前にそんな情報を提供されていたメイルマンとしても、実際にチームＴｏｍｂｏｙの展開行動を目の当たりにするまで、全く信用していなかった。

時間差攻撃と簡単に言うが、実際にその戦術をチームとして運用することは、非常に難しいことであり、そんな高等戦術を実戦するチームが、こんな低位チームに存在するとは思っていなかったからだ。

とは言え、相手は所詮ルーキーチームのパイロット一人。

ＤＱの扱いにどれだけ長けていたとしても、実際の戦闘経験に乏しい相手に、自分が負けるなどと露程にも思っていないメイルマンは、静かにニヤリと不敵な笑みを浮かばせて、さらにリベーダー２の巡航速度を増加させた。

01－11：○黒いお抱え衛兵［5］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「黒いお抱え衛兵」

湿地帯ということで、精密機械であるＤＱの行動が著しく制限されてしまうという理由から、他の参加チーム達からは敬遠されがちなエリア５５。

次第に同エリア内で距離を縮めつつある２機のＤＱの気配を察したのか、それまで静かに囀り、木々達と戯れていた鳥達が、逃げ出すように一斉に飛び立った。

奇妙なバーニヤの共鳴音を撒き散らしながら、小島へと乗り上げた、リベーダー２の両肩バーニヤが３回ほど点滅する。

そして、相対するパングラードが、激しい水しぶきを巻き上げながら、浅瀬へと乗り上げた瞬間に、それまで水を打ったように静かだった、エリア５５の様相が一変した。

セニフは、パングラードの両腕に取り付けられている、２０ｍｍ機関砲のトリガーを引き絞りながら、サーチャーが示し出す警告音に反するように、相手リベーダー２と衝突寸前まで機体を突撃させる。

リベーダー２もまた、構えたＲｅｓｅｎＡＳＲ－１０ｒｅｎｇで反撃の銃撃を見せるのだが、パングラードの前面装甲が厚いという事と、セニフが弾数をケチった事により、お互い致命的な一撃を与えるには至らない。

しかし、セニフの狙いは、全く別のところにあった。

本来、一撃離脱戦法外には、使い道が無いとされて来たパングラードだが、セニフはリベーダー２接触まであと１０ｍｉｌｓという地点で、パングラード両足踵（かかと）に取り付けられたブレーキエッジをフルに利かせ、砂煙を巻き上げながら、リベーダー２の目の前で急激に減速させる。

！？

一瞬、一撃離脱後の無防備な背後を付け狙おうと画策していた、メイルマンの予想に反した動きを見せたパングラードは、さらに大地に切れ込ませたエッジを利用して、機体を９０度反転させると、今度は全速力で逃げの体制へと移行する。

そして、そのときに生じた土煙が、一瞬にしてパングラードのバーニヤによって舞い上げられた。

（メイルマン）
「こいつ・・・！戦いなれてる。」

両者の視界は一気に「ろうど色」に染まり、細かい霧状に漂う「黒砂」により、馬鹿なサーチャーが、狂ったように警告音を打ち鳴らす。

（セニフ）
「ジャネット！！」

やがて、渦巻く黒砂の霧をいち早く突き抜けたセニフが、次なるアタッカーであるジャネットの気配を捜して叫んだ。

千載一遇とも言える、出会い頭の奇襲攻撃を成功させたセニフのお膳立ては、この機を逃しては、２度と訪れないかもしれない。

（ジャネット）

「ベストだねセニフ。」

決して、彼女達は通信機を通して、お互いの意思を確認しあったわけではないが、全速力で離脱するセニフの左手方向で、格闘戦に備えたラプセルが、右手マニュピレーターをワームオーバルに格納しつつ、増速するために、後部バーニヤを大きく吹き上がらせる姿が確認できる。

タイミング的には、ジャネットの言う通り、ベストタイミングだ。

リベーダー２は最新鋭機種とはいえ、近接格闘用に開発された兵器ではなく、いかにパイロットが優れていようとも、格闘戦専用ＤＱラプセルを持って襲い掛かれば、相手も無傷では済まないはずだ。

しかも、黒砂の粉塵から抜け出した先には、遠方より付け狙うアリミアのＡＳＲ－ＬＴｙｐｅ４４の銃口が待ち構えている。

実際こんなもん？

カーネルって言ったってダサダサじゃん。

戦場から離脱体制にあったセニフは、どこか調子に乗った感じで勝利を確信していた。

それは、絶妙のタイミングで攻撃に転じたジャネットも。

そして、慎重に相手ＤＱの動向を見守っていたアリミアも。

彼女達には、この時点で、悲観的推測をめぐらせなければならない理由が無かったのである。

しかし時に、現実とは皮肉なもので、天国から一気に地獄へと人々の思いを貶める「力」を、常に秘めているのだ。

黒砂の粉塵の中へと、勢い良く突入を開始したジャネットの進行方向で、突然、何か大きく鳴り響いた猛爆音。

それは、疾走中のラプセルコクピット内でも、身体に振動を感じるほどに大きな音であった。

一瞬、息を止めたジャネットの背中を、何か冷たい悪寒のような風がひゅるりと吹き抜けて行く。

極限まで高められた緊張感に、思うように手足を動かすことが出来ない中、ジャネットの意識だけが、その事実を突き止める事となる。

前面ＴＲＰスクリーンを覆っていた粉塵の流れが急変し、リベーダー２のいる中心部へと勢い良く吸い込まれて行く。

そして次の瞬間、一時的な流れの停滞を経て、リベーダー２の強力なバーニヤによって、爆発的に吹き飛ばされた。

（ジャネット）

「カーネル！！」

（メイルマン）
「残念だったな。」

突然、黒い砂塵の中から姿を現したリベーダー２の中で、不気味に口元をゆがませたメイルマンの目に、黒い炎が宿る。

吹き荒らしたバーニヤの出力によって、猛烈な突進力を得たリベーダー２が、不意にラプセルの機体目掛けて突進を開始した。

ジャネットは、咄嗟に回避行動へと転じる構えを見せるものの、その行動を実行する暇など、殆ど与えられなかった。

ドガシャーーン！

（ジャネット）
「きゃぁぅぅう！！」

激しい衝突による金属音が撒き散らされる中、回避のために少し機体を捻ったのが災いしたのか、ラプセルは斜め方向からの衝撃に耐え切れず、無様にも背中から吹っ飛んだ。

しかも、そんな重量級ＤＱラプセルを相手に回し、体当たりを持って吹き飛ばしたリベーダー２の方はと言えば、衝突部分の左肩装甲部分を拉(ひしゃ)げただけで、体制すら崩すこと無く大地へと降り立つのだ。

それだけ両者の機体総重量が違ったのだと言われればそれまでだが、殆ど損傷を受けたようには見えないリベーダー２の機体剛性は驚くべきものである。

（メイルマン）
「見え見えなんだよ。素人が。」

轟音と共に背中から地面にたたきつけられたラプセルは、新たな粉塵を大量に巻き上げながら、ずるずると大地を引きずられ、ようやくその衝撃から開放されたときには、全くピクリとも動く様子は無かった。

バチバチと眩い火花が、機体外部まで迸る様を眺めながら、メイルマンはゆっくりと「ＲｅｓｅｎＡＳＲ－１０ｒｅｎｇ」を構えると、事もあろうか、動かなくなったラプセルに向けて、ゆっくりと弾丸を撃ち込み始めた。

大会の規約では、パイロット達の安全性を確保するために、火薬の量には制限が設けられているのだが、それでも実際に、コクピットを至近距離で撃ち抜けば、装甲を簡単に貫通してしまう事もありうる。

しかも、故意に相手パイロットを死に至らしめたとなれば、殺人行為として法的刑罰を免れないのだ。

それを知りつつも尚、右腕、左腕、右足、右肩、左足・・・と、ラプセルに対して弾丸を撃ちこむ事を留まらないメイルマンの残虐性は、ある種異常とも言えるのだが、彼にとってみれば、これは遊びの範疇内であり、決して殺意を抱いているわけでもない。

（セニフ）
「ジャネット！！何してる！！ジャネットォ！！」

そんな時、舞い上がる粉塵の中に渦巻く異変に、セニフが気がつい

た。

黒砂の影響もあり、思うような通信状況ではないにしろ、必死になってジャネットの名前を叫ぶセニフに対しての返答は無い。

リベーダー2を撃破したのか、それとも何かしらのトラブルがあったのか。

全く砂煙に包まれている両者の状態を知る術は無いのだが、それでも「一撃離脱」を主体に立てた作戦に対し、全く音沙汰が無いという状況が、すでに事の異常を示していた。

そして、やがて、一種異様な黒い雲の塊が、ゆっくりと大気の流れに乗ってスライドして行く中、最初に姿を現したのは漆黒のＤＱ。

ついで姿を現したのは、無残にも大量の火花を飛び散らして横たわる、ラプセルの姿であった。

（セニフ）
「ジャネット！！」

セニフの呼びかけもまた虚しい。

爆発寸前のラプセルの中でジャネットは完全に気を失っていた。

抹茶色の髪は乱れ、半開きになった口元からは、唾液が垂れ落ちる。

彼女に外傷はないようだが、パイロットの身を守るための磁気ベルトが、衝突の衝撃から敏感に反応しすぎたために、その圧力で気絶してしまったのだ。

（メイルマン）
「あー。こちらチームＢｌａｃｋ’ｓ。本部応答願います。エリア５５、ポイント８３にて、ＤＱ一機が炎上中。至急レスキュー部隊を派遣されたし。」

ラプセルの機体状況から見ても、早急に中に閉じ込められているパイロットを救い出さねば、危険な状態であることは誰の目にも明らかで、メイルマンは、即座に大会本部へと連絡を取り、専門のレスキュー部隊へ出動を要請した。

・・・・・が！？

しかし、メイルマンはそれでも、ラプセルへの銃撃をやめようとはしない。

この男・・・。どこまでふざけているのであろうか。

（セニフ）
「ジャ・・・！！」

ドォォォーン！

メイルマンが、ようやくその銃撃の手を緩め始めたのは、轟音と共にラプセルから赤黒い火柱が立ち上った瞬間。

ラプセルの爆風による巻き添えを食らわないように退避した時だ。

漆黒のＤＱの機体表面に映し出される赤い炎の渦が、呆気にとられたように見開いたセニフの瞳に宿り、激しい憎悪と怒りによって、

彼女の神経を逆撫でる。

（セニフ）

「てぇんめぇ！殺してやる！」

完全に我を忘れるほどの怒りを体現しながら、セニフは出来る限りの低い声を唸らせる様に吐き捨てた。

普段から気性の荒い性格をしている彼女だが、これほどまでに激しい怒りを見せることは無い。

全く身動きが取れない相手を前に、大会規約に違反すべき行為を平然とやってのける相手パイロット。

人を死に至らしめるかもしれないと言う危険な行為を平然と。

そして、それを、親友であるジャネットに対して。

怒りに打ち震えるセニフは、荒々しく思いっきりフットペダルを踏み込むと、強烈なスピードでリベーダー２への突進を開始した。

01－12：○黒いお抱え衛兵［6］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１２「黒いお抱え衛兵」

（メイルマン）
「次は、おー前だ。」

サーチゴーグルに翳（かざ）された照準システムに、パングラードの姿を正面に捕らえたメイルマンは、真正面から撃破してやろうというよりは、気持ち半分、悪戯がてらに遊んでやろうと言う構えで、リベーダー２のバーニヤを始動させると、後ろ向きでホバー移動を開始した。

本来、ＤＱがいくらホバー移動を主流とするからと言って、後ろ向きでの移動には難を残すタイプが多い。

それは、後方への巡航速度を保つために、どうしても前面装甲からはみ出すように、バーニヤを露出して取り付けなければならないためで、軍事用に開発されるＤＱに関しては、絶対にこの方法を採用することは無い。

しかし、最新鋭ＤＱであるリベーダー２は、両肩が前後に可変することで、バーニヤ部分を後方にも、前方にも向けられるようにしてあり、且つ、両足に取り付けられた複数のバーニヤもまた、前後に可変するように製作されている。

その後方推進力は、後部テスラポット付近に取り付けられている、メインバーニヤが使用できない分、前方時の約８０％と落ち込んで

しまうが、それでもセニフのパングラードが全速力で追い回しても、なかなか追いつかないほどの速度を出すことは可能なようだ。

（メイルマン）
「スピードだけはなかなかのものだな。だが機動性に乏しいＦＴＰＧシリーズでどうするつもりだ。」

メイルマンは、一向に追いつく気配を見せないパングラードに対して、少し呆れ気味の言葉を投げかけると同時に、３発の弾丸をプレゼントする。

これは、高速巡航におけるパングラードの旋回性能を試すもので、メイルマンにとっては遊び玉である。

セニフは即座に打ち鳴らされた警告音に反応を見せると、強引にパングラード両足のエッジで大地を削り、移動速度を少しも落とすことなく最小の動きでこれをかわす。

高速で移動する両者間で、敵に正確に弾丸を発射する方も凄いが、それを避ける方もまた凄い。

しかし回避の仕方にかなり無理を強いてしまったのか、パングラードの左足内側のエッジが吹き飛ぶと、後方の土煙の中へと消えて行った。

（メイルマン）
「おいおい。大丈夫か？なんか飛んでったぞ？」

貧しく、みすぼらしいものでも見るかのような目つきで、迫りくるパングラードを見つめるメイルマン。

セニフも負けじと２０ｍｍ機関砲の連射で反撃に移るが、メイルマンは余裕シャクシャクでこれをかわしてみせる。

もはや機体性能の差は埋めようも無い。

リベーダー２のホバー走行はパングラードとは違い、滑るのではなく完全に地上から浮いている状態で走行する。

そのため、空いたその足で、地面をちょっと蹴ってやるだけで、方向転換が簡単に行えるのだ。

同じような回避行動に見えても、実際に機体にかかる負荷の違いは大きい。

このまま持久戦に持ちこまれようものならば、確実に旧式パングラードに搭乗する、セニフに敗北の結末が待っていることは確実である。

たかがルーキーチーム。

どこかに潜んでいるであろうスナイパーも、この速度で移動する２人を捕捉するのは難しいはずだ。

だとしたら、もうお遊びはこれまで。つまらんな・・・。

メイルマンはバカの一つ覚えのように弾丸をばら撒くセニフの攻撃をかわしながら、脳裏に揺れる「かったるさ」を隠し切れなかった。

（メイルマン）

「もう、そろそろいいか？パングラードの弾丸も切れる頃だ。」

メイルマンが少し気を緩め、攻撃に移ろうとしたその時だった。

生い茂る木々達の間隙をかいくぐって、２発の弾丸がリベーダー２を襲う。

弾速はかなり早く、ＡＳＲ系ロングライフルだと思われる。

この弾丸を放った主は、勿論アリミアであり、彼女は２人の動きが弱まるのをじっと待っていたのだ。

周囲の木々達は、黒砂地帯の影響で木々自体がサーチャーの妨害をし、まるで薄いフィールドが張られた中で戦闘を強いられているような感じさえする。

メイルマンにとってみれば、弾速の速いライフルで、至近距離から狙い撃ちされたのと同じ状況だ。

しかし、メイルマンは、リベーダー２の両足を、強引に地面に突き立てるように踏ん張りを入れると、急激な減速によりこの２発をかわしてみせる。

そして、リベーダー２の直ぐ傍へと着弾したその弾丸は、大きな爆発音を奏でると共に、湿地帯の泥を渦のように巻き上げた。

（アリミア）

「はずした・・・。」

（メイルマン）

「ちっ！！なかなか腕の立つスナイパーだな。いいタイミングで撃ちやがる。」

少しだけ相手に賞賛の言葉を口にしたメイルマンは、すぐさま、リベーダー2の機体被害状況の確認へと移る。

爆風による被害は特に無いが、どうやら少し踏ん張った両足の神経系に、若干の故障を抱えたようだ。

しかし、主に完全なホバー移動を旨とする同機体である。

戦闘に然したる支障が出るわけでもない。

少し安堵した表情を浮かべながら、煩い（うるさ）小雀の所在を、索敵するメイルマンだったが、リベーダー2がかぶった泥によって、コクピット内のＴＲＰスクリーンに、死角が生まれていたことに気づくと表情が一遍した。

01－13：○黒いお抱え衛兵［7］@

第一話：「ルーキー」
ｓｅｔｉｏｎ１３「黒いお抱え衛兵」

＞ｉ４８２５－８２７＜

突然、轟音が鳴り響くと共に、細かな振動がメイルマンの体を襲った。

完全に密封されたリベーダー2のコクピット内にまで響き渡るその音は、極至近距離から放たれたパングラードの２０ｍｍ機関砲を被弾している音である。

その時、メイルマンの意識の中に生じた一瞬の油断を、見逃さなかったセニフは、すでにリベーダー2を射程に捕えていたのだ。

浅瀬に止まるリベーダー2の左手から進入し、横向きドリフト状態でカーネル中心にパングラードを半周させる間、２０ｍｍ機関砲のトリガーは引きっぱなしだ。

水分を大量に含んだ大地を、ほとんど「水切り」状態で、水飛沫（みずしぶき）を飛散させながら弾丸をばら撒きまくる。

鈍い金属音が鳴り響き、周囲で光り輝く兆弾の嵐が渦巻く中で、メイルマンはじっと耐えるしかなかった。

リベーダー2の装甲の穴とも言える各関節部分を押さえ、最小限の被害に押さえ込むよう努力する。

ドガン！

しかし、いくら最新鋭の機体とは言え、２０ｍｍ機関砲の弾丸を至近距離で被弾して、無事にいられるはずも無い。

結果、火花を飛び散らせて爆発発火したのは、後部テスラポット動力チューブ一箇所と、左右太腿裏部分の巡航バーニヤ両翼。

高起動を高らかに掲げ、戦場をかけぬけるべく開発された新鋭機は、この時、天高く舞い上がるための翼を削（そ）がれたのであった。

（メイルマン）

「くそっ！！やりやがったな小娘が！！」

無様にもモクモクと噴煙を上げ始めるリベーダー２の中で、一瞬にして過ぎ去った嵐の夜明けと共にメイルマンが怒鳴り散らす。

そして、即座に反転したリベーダー２が、過ぎ去っていくパングラード目掛けて、ＲｅｓｅｎＡＳＲ－１０ｒｅｎｇを構えた。

（セニフ）

「トドメを刺してやる！！」

一方、横滑りの惰性によって、少し相手との距離を離してしまったセニフは、そのままの旋回力を利用して、リベーダー２の方へと機体を向き直すと、すぐさまフットペダルを勢い良く踏み込み、再度攻撃態勢へと移行した。

・・・・・・が、激しく高ぶった気持ちをぶつけ合うべく、再戦を

望んだ両者の思いとは裏腹に、戦場エリア５５は、嘘の様にシーンと静まり返ったままだった。

（セニフ）
「なに?動け!!動いてよ!!何で!?オーバーヒートォ!?ふざけんな!!」

意識のみを暴走させるかのように、架空の世界で相手を撃破することをイメージしていたセニフが、やっと、その周囲の静寂さに気づき、目の前のコンソールをぶち叩きながら叫ぶ。

セニフのコマンド入力に対して、全く反応を見せなくなったパングラードは、メイルマンとの戦闘において、過剰な負荷をかけ過ぎたために、各神経を繋ぎ止める増幅ビットが吹っ飛び、完全に戦闘不能状態に陥ってしまったのだ。

また、メイルマンの方も、ＲｅｓｅｎＡＳＲ－１０ｒｅｎｇのトリガーを何回も引いているにもかかわらず、彼の望む弾丸は、一発たりとも発射されない。

（メイルマン）
「ちっ!!どっかの回路がやられたな。これだから電磁系ＡＳＲは・・・。」

ほとんど使うことの出来なかった「役に立たない試作品」に、舌打ちしながらぼやくメイルマンは、せめて他の火器をもう一つでも装備してくればと、今更ながらに後悔して見せるものの、今となっては後の祭りだ。

如何に機体性能に優れていようとも、相手ＤＱを攻撃するための火

器を失ったのであれば、リベーダー2と言えども、ただの木偶の坊である。

両者共に、その機能を満足に果たすことの無い大きなプロテクターの中から、お互いを睨め付ける事しか出来ないという、悲しき戦いに終始するしかなかったのだが、チームＴｏｍｂｏｙには、まだ最後の希望が残されている事に、セニフは気がついた。

（セニフ）
「アリミアァ！！なにしてんの！？撃ってよ！！」

（アリミア）
「弾切れ。」

全く、しょうもない会話だ。

この時点で、両チームが打てる手立ては、すべて潰えたと言える。

（メイルマン）
「覚えておけ、今度会ったときは3機まとめて始末してやるからな。」

激しい黒煙を噴出しながらも、生き残っているバーニヤが、まだ使えることを確認したメイルマンが、去り際の最後の捨て台詞を吐き出した。

彼としても、こんなチンケな新人チームに、これだけの損傷を負わされたのである。

腸が煮えくり返りそうな思いを抱いていたに違いない。

しかし、すでにこれ以上の戦闘が無意味であることを理解していた彼は、やけにあっさりと後退する意思を見せ始める。

大きな音と、大量の風圧を伴って移動を開始するリベーダー2は、とても損傷を追ったDQであることを感じさせないスピードで、セニフの元を後にした。

（セニフ）
「ちくしょうぉ！！」

彼女に残されたものは、全く動かなくなったパングラードと、最後の嫌がらせたる、メイルマンが旋回時に巻き上げて行った砂煙だけである。

殆ど相手にいいようにあしらわれていた印象しか思い浮かばないセニフは、その怒りと悔しさにより、半分涙目になりつつ顔を強張らせるのだが、ふと、自分はそんなことしている場合じゃない事に気がつく。

そして、急いでパングラードのコクピットハッチを手動で開けると、全速力でジャネットの元へと駆け出すのである。

01－14：○台風一過［1］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「台風一過」

（シルジーク）
「大体、お前等3人に、チームワークという言葉があるのか？攻撃時のチームワークの事を言ってるんじゃない。チームＴｏｍｂｏｙ全体としてのチームワークのことだ。たまにはバックアップの身にもなってみろ。盛りのついた馬みたいに、ぶいぶいとフットペダル空踏みするから、オーバーヒートなんかするんだ。全神経再チェックするのに一体どれだけの労力が必要だと思っている？ジャネットなんか無事だったからいいものの、下手をしたら今ごろ丸焼けになって棺桶の中だぜ。あれほど安易な考えで、敵に突っかかるなと言っていたのに。本当はお前が止めるべきだろうが？アリミア？違うか？」

横一列に整列させた女性3人を順番に指差しながら、シルが沸き起こる怒りを、嫌みったらしく言い放つ。

何も、彼女達の暴走行為は今に始まった訳ではない。

これまで何度も、彼の頭を悩ませて来た行為なのだ。

そのたびに苦労しなければならないのは、シル達バックアップメンバーであり、大きなＤＱＡ大会に実際参加するともなれば、少しはマシになるのではと、儚い期待を抱いた自分が馬鹿だった・・・。

両手を腰に宛がい、年下とは思えぬ貫禄で、彼女達の目の前に仁王

立ちする彼の後ろでは、今まさに、無残にも真っ黒に焼け焦げたラプセルが、大型クレーンで吊るし上げられていた。

そして、一見、外傷は少なく見えても、何か焼け焦げた匂いを充満させるパングラードもまた、ＤＱ輸送用大型トレーラーの荷台の上で、どこからとも無く白い煙を上げ続けている。

（ジャネット）

「まあ、やられちゃったものは仕方ないじゃない。みんな無事だったわけだしさ。あんまり怒んないでよ。シル。明日からまたがんばろう。」

前向きというか、無頓着というか、ジャネットが小首を傾げながら言う。

やたら首筋を気にする仕草を見せる彼女だが、先のカーネルとの戦闘で、唐突に前面から受けた強い衝撃によって、軽い鞭打ち状態になっているようだ。

コクピット内部を残して、その機体の殆どを、全焼させてしまうほどの激しい業火の中から、彼女が無傷に近い状態で救出されたことは、まさに奇跡的な事である。

そんな死の淵から生還を遂げた彼女はというと、みんなの心配をよそに、呆れるほど「あっけらかん」としており、普段どおりの可愛らしい彼女の笑顔がそこにはあった。

しかし、この時、ニッコリと微笑んで見せた彼女の行動は、シルに対して安堵感を与えるばかりか、逆に彼の神経を逆なでしてしまうこととなる。

（シルジーク）

「あほかぁ！！仕方なくない！！お前等の好奇心も程ほどにしろ！！お前等、一体、歳はいくつだ！？いつまでも子供みたいにはしゃぐだけはしゃいで、後始末するこっちの事を少しは考えろってんだ！！いいかぁ！！お前ら～～～以下省略～～～。」

大きな声を張り上げて、怒鳴りはじめたシルの説教が、留まることを知らぬ、マシンガンのように彼女達に襲い掛かった。

それは確かに、言われてみればその通りと、もっともらしい説教ではあったが、立ち並んだ3人にとってみれば、まさに念仏のようにも聞こえる。

反省しているのかしていないのか、ジャネットは、やさしく煌く様な笑顔をシルへと向けて、どうにか彼の気を収めようと終始するばかりであり、アリミアはといえば、完全にそっぽを向くような感じで、何故か遠くを見つめていた。

そして、セニフはセニフで、怒鳴られた事にショックを受けたような態度で、両手で顔を覆ってシクシクと泣き「真似」を始めてしまう。

・・・。

もはや、こんな彼女達には、何を言っても無駄と言うしかない。

単にＤＱを操舵することしか考えていない彼女達にとって、そのＤＱを整備すべき者達のことなど、考えていないのであろう。

（シルジーク）
「・・・ったく・・・。命令無視してカーネルに突っ込んだ挙句、たった1機のDQにボロクソやられて、あげくの果て戻る事もできないなんて・・・。早いところ身の程をわきまえろってんだ。馬鹿は馬鹿らしく、ちょっとは考えて行動しろ。だから女なんて、迷惑なだけで使い物にならないんだよ。こっちは遊びでやってんじゃないぞ。」

それまで、シルの説教に対して、全く興味を示さなかった3人だが、ものすごく嫌味たらしく言い放ったこの言葉には、さすがの彼女達も敏感に反応を見せた。

（セニフ）
「なんだよシル！！私達だって一生懸命やったんだぞぉ！！DQだって壊さないようにがんばったつもりだよ！！そりゃあ調子に乗ったりもするけどさ！！そんなひどい事言わなくたっていいじゃん！！シル達なんか、後ろでブツブツ指示してればいいだけじゃんさ！？私達だってがんばってるんだよ！！」

先ほどまで、俯(うつむ)いて泣き真似をしていたセニフが、大声で叫びながら、シルへと突っかかる。

しかも、今度のシルの言葉はかなり利いたようで、シルを睨みつけるセニフの表情が、本当に泣きそうになっていた。

また、温厚な性格のジャネットも、それまでの態度が嘘だったかの様に表情を曇らせると、著しく気分を害したのか、やがてシルの方からソッポを向いてしまった。

（アリミア）

「シル。貴方もう18歳でしょ？もう少しまともな言葉を選べないのかしら？」

（シルジーク）
「選ぶべきときには選ぶさ。アリミア、お前は子供相手に話しをするときに、論文発表のような言葉遣いをするのか？」

アリミアはアタッカーリーダーとして、今回のような事態を招いてしまったことに対し、少なからず責任感を感じていた。

当然、シルの怒りの説教は、彼が自分よりも年下だからとはいえ、紳士に受け止めるべきであり、自分には反論する余地も無いと思っていた。

そう、少し前までは・・・。

（アリミア）
「シル。今回の結果を招いた原因は、私達アタッカーだけの責任じゃないわ。いえ、むしろシル達バックアップ側のミスとも言える。」

（シルジーク）
「なにぃ！？こっちの指示を無視して、勝手にカーネルに突っ込んでいったのはお前らだろうが！」

（アリミア）
「あのカーネルのDO機体性能、パイロットの能力からして、逃亡したとしても簡単に逃げられるわけ無いわ。相手はすでに、ニュートラルエリアとの、コンタクトライン上に陣取っていたわけだし、足の速いバングラードだけを生かしても仕方ないわよね。疲弊しきった私達が、別のニュートラルエリアを目指せるわけも無いし、あ

の段階で、カーネルと戦闘状態に入ることは、もはや避けられなかったと思うわ。寧ろ、戦闘であのカーネルを相手に、手傷を負わせただけでも万々歳。私達は最善を尽くしたわ。それは、アタッカーリーダーの私が保証する。」

（シルジーク）
「・・・そんなこと、実際に撤退行動をとってみないと解らんだろうが！逆説的に自分達の言い分を、肯定しようって言うのか？」

（アリミア）
「いえ、私が言いたいのはそこじゃないわ。カーネルと戦闘をするしない以前に、何故、あの位置に接近されるまで、バックアップチームがカーネルを発見できなかったのか。今回の事の発端、結果を招いた原因の元はそこにある。」

（シルジーク）
「・・・。」

（アリミア）
「キャンサーのフィールドサーチャーは、型遅れとは言え、中心半径１０ｋｍｉｌｓは索敵が可能よね。私達のＤＱに搭載しているサーチレーダー上でも、くっきりと相手を確認できたから、ＦＴＰフィールドみたいに、サーチ障害となるようなものは存在しなかった。それでいながら何故、私達が逃げ切れなくなるような位置まで、カーネルの発見が遅れたのかしら？」

（シルジーク）
「・・・・・・・・。」

攻め手と守り手が、完全に逆転してしまった状態で、先とは打って

変わって、態度を豹変させたアリミアのマシンガントークが続く。

言うなれば、単なる「責任転換」という奴なのだが、彼女の言い分ももっともであり、シルが後半、黙り込んでしまったのも、彼なりに思うところがあったからなのだろう。

アリミアの言葉はとても静かで、平静さを保ったまま、相手を悟すように投げかけられるものの、言葉尻に微量に含まれた彼女の怒りのスパイスが、シルの心に見えない圧力をかけていく。

そして最後に、彼の心を陥落させるに至る言葉が、アリミアから発せられた。

（アリミア）

「シル？貴方の過失でしょう？戦闘中、何をしていたのか知らないけど、もう少し集中力を持続してほしいものだわ。こっちは遊びでやっているわけじゃないのよ。」

やはり男が、口で女に勝つことは出来ないのだろうか。

全く先に履き捨てた台詞を、そのままの形で返されてしまったシルは、歯軋りが聞こえんばかりに悔しがる気持ちで、アリミアから視線を叛けると、静かに黙り込んでしまった。

戦闘中、シルとしても、マリオとの会話の合間に、瞬間的にではあるがサーチレーダーから目を離してしまったことは認識している。

それも、ほんの一瞬だ。

アタッカーチームが、無事に敵チームの追撃を逃れることが出来た

という、安堵感が生んだ油断だったんだろうか。

それとも長い間、戦況把握に努めた頭の疲れが、カーネルという偶々（たまたま）現れた最悪の敵を見落としてしまったということなのだろうか。

様々に自分の敗因を探るシルが、なんだか収まりきれない気持ちと格闘している中、ようやく、ラプセルとパングラードの回収作業を終えた一人の男が、彼の元へと歩み寄って来た。

彼の本名は「サフォーク・モロ」。年齢は２２歳。性格は明るく、前向きなのだがお調子者であり、何かにつけてやる気なさげなＤＱ整備士である。

向上心に欠け、口が悪く、手癖も悪いと３拍子揃った彼は、何故かいつも年下のシルに怒鳴られる役を買って出るのだ。

（サフォーク）
「なんだ。やられちまったのかシル？お前も粘り強さが足りないねぇ。しかたねぇな。お前もボケッとしていたんだろ？」

（シルジーク）
「うるさい！！昼寝してた奴に言われたくない！！」

当の現場で爆睡をぶっこいていたにもかかわらず、よくも平気でそんなことが言えたものだと、シルは怒りの矛先をサフォークに向けて、完全なる八つ当たりをして見せた。

目の前でヒソヒソと勝利の喜びを分かち合う、３人の女共の姿が、やけに恨めしい。

あの半スクラップ状態に陥ったラプセルと、パングラードの機体状況では、今夜のＤＱ修理作業は徹夜になってしまう事は間違いない。

いっそのこと、何も考えずに寝てしまえたのならば、どれだけ気分が楽になるのだろうかと、シルは、大きくため息をつくしかなかった。

（セニフ）
「やったね。さすが、アリミア。」

（ジャネット）
「尊敬しちゃうわ。」

神様、仏様でも見るような目つきで、アリミアを見つめる二人の視線に、アリミアはにっこりと微笑んでこう言った。

（アリミア）
「簡単よ。あの子真面目だから、自分の考えだとしても、すべてに筋が通ってないと強く出れないのよ。」

アリミアの思いとは裏腹に、カラリと晴れ渡った青空に視線を向けて、彼女は少し、やりすぎた自分を反省した。

01－15：○台風一過［2］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１５「台風一過」

エリア５５に隣接するニュートラルエリア「アルファ」。
夕暮れ時とあって各戦場とを繋ぐ、コネクトロードはかなり混み合っている。

ここアルファは、激戦区の中に位置する、唯一のニュートラルエリアというだけあって、ＤＱＡ大会参加チームの関係者以外にも、商人、軍人、警察、マスコミ、観光客、武器屋、盗賊、娼婦など、ありとあらゆる人間達が集結する、活気に満ちた街並みが形成されていた。

その街の光は、廃都市ブックポイントに年１回だけ訪れる、ＤＱＡ大会期間中に限ってのみ灯された、儚い光であるが、それだけに、久しぶりの賑わいを歓迎するかのように、次第に姿を現し始めた星々達も、天高くから廃都市を煌びやかに装飾しているかのようだった。

（マリオ）
「こう見てると、なんか綺麗だなぁ。」

つい先ほどまで、死闘を繰り広げてきた猛者達とは思えないほど行儀良く、コネクトロード一直線に整列した彼らは、綺麗な光の帯を形成していた。

アルファは、少し周囲より小高い丘の上にあり、エリア南部のＤＱ整備用第三工場3階から、そんな景色を見下ろしていたマリオが、なにやらロマンチックに目を煌かせながら呟いた。

日が完全に落ちた後の、穂のかな残り陽が辺りを火照る中、一直線に続く光の帯を包み込むように広げられた星屑のカーテン。

疲れ果てた体にさえ、じんわりと浸透する癒しの空間がとても心地よい。

マリオは、涼やかに吹き抜ける風に身をさらし、ふと、お姉ちゃんにも見せたいなと思った。

（シル）
「マリオ！！ラプセル降ろすぞ！！クレーン操縦頼む！！」

（マリオ）
「はぁい！！」

工場の最下層に、トレーラーを乗りつけたことを知らせるシルの呼びかけに対し、大きな声で返事を返したマリオが、勢い良く3階から1階まで続く階段を駆け下りる。

途中、見下ろした工場内に停車したトレーラーの上で、仰向けに寝そべるラプセルの姿を確認したマリオは、そのあまりの状態の酷さに驚いた。

原型はとどめているが、外装は完全に焦げ付いており、ジャネットを救出するために、無理やりこじ開けたと思われるハッチは、もうすでに前面装甲としては使い物にならないようだ。

そしてさらに、テスラポット接続部は完全に爛(ただ)れ落ち、あわよくばコクピット内部をも、灼熱の炎で包んでしまわんばかりの、火力であったことを物語ってた。

（マリオ）
「ねえシル、お姉ちゃんは大丈夫だったの？」

お留守番的な感じで、別行動を取っていたマリオが、姉のことを心配してか、少し弱々しい声色でシルに声をかける。

（シル）
「ああ。逆にぶっ飛ばしてやりたくなるぐらいに元気さ。今頃、３人で飲みにでも行ってるんじゃないか？全く、のんきなものだ・・・。」

ラプセルが大破したという速報は、マリオの耳にも届いてはいたが、まさかここまで酷い状況だとは思っていなかったのだ。

しかし、全くジャネット事を気にする様子も無く、トレーラーの運転席から身を乗り出したシルが、半ば呆れた様子で両手を翳(かざ)したのを見て、マリオはようやく安心することができた。

（マリオ）
「シル？これどうするの？システムは大丈夫って言っても、完全に腰がいっちゃってるね。テスラポットも全交換っぽいかな。明日丸々費やしたとしても、復旧は僕達だけでは無理だよ。」

一般人であれば、単に外見の被害状況のみに、まず目が行きそうなものなのだが、マリオはまず、ＤＯ機構主要部の腰部分についての

ダメージに着目した。

どんな損傷であっても、本体センターライン以外の損傷であれば、パーツ交換等、比較的簡単な整備作業で修理が可能となるのだが、このＤＯ機構主要部だけは、各ＤＯ製造メーカーによって、設計思想が異なるということもあり、熟練したＤＯ専門整備士の腕をもってしても、修理が困難な場所なのである。

少し状態を確認しただけで、適確にラプセルの被害状況を分析してみせたマリオは、かつての人見知りの激しい泣き虫マリオではない。

彼は、まだ幼い１３歳の少年ではあるが、最近では、たまに発するこうした大人びた発言が、周囲を驚かせることがある。

（シル）

「うん・・・まあ、その点は大丈夫だ。サフォークの知り合いで、コプリー社製品に詳しい奴が、ブラックポイントに居るって言ってたからな。奴はこういう時にしか役に立たないんだから、しっかり「腕の立つ助っ人」を連れてきてほしいもんだ。かなり前に出たはずだけど、まだ帰ってきていないのか？」

頼もしく成長を見せるマリオの姿に、シルがなにやら嬉しそうな表情で言った。

まったく・・・。こんな幼いマリオでさえ、頼もしく成長を見せているというのに、あの体たらく馬鹿はいったい、どこで何をしてほっつき歩いているのか・・・。

と、シルがチラリとマリオの方に視線を向けると、その頼もしい次世代の担い手は、何故かポケットに両手を突っ込んだままの体制で、

きょとんとしていた。

そして徐に、工場ガレージ奥の方を指差して、なにやら困ったような表情で、シルを促すのである。

（マリオ）

「いつでも役に立たないみたいだね・・・。」

シルがマリオが指差す方角に向き直ると、確かにそこに、サフォークの姿を見つけることができた。

・・・が、しかし、頼みの綱といえる助っ人整備士を連れて来ることはおろか、今の自分達のチームが、いったいどういう状況に置かれているのか、まったく理解していないかのように、女性の尻ばかりを追いかけている彼の姿があった。

一人の女性に声をかけては逃げられ、そしてまた、すぐ側を通りかかった女性に乗り換えて話しかけるという、下手な鉄砲数打ちゃ当たる的な発想によるナンパ。

しかも、何らかの成功を収める気配は微塵もなく、怪しげな男の語らいに、すべての女性は、ことごとくダッシュで逃げ失せるという有様。

その光景はなんとも滑稽（こっけい）で情けなく、チームメイトのシルとしては、恥ずかしすぎて、彼を公の場で怒鳴りつける気さえ沸き起こらなかった。

（サフォーク）

「なあ、今夜は徹夜になりそうなんだよ。どう?彼女。一緒にハン

ガーで珈琲でも飲みながらＤＱメンテでも手伝わない？俺って優秀でさぁ。解らないことがあったらなんでも聞いて。手取り足取り教えてあげるからさ。さらに君が望むなら、真夜中のライフでも手取り足取り・・・。あっ・・・。」

そして、さらに一つ黒星を増やした彼は、天を仰ぐような素振りで失望の念を表し、更なるターゲットを求めて彷徨い歩くのだ。

下品でいてセンスがなく、そして彼の真意は全く相手に伝わらないが、確実に相手に「怪しい」と印象付ける行動を繰り返す彼には、一体、羞恥心という言葉が存在するのであろうか。
遠目から彼を見つめる冷たい視線の多くには、冷ややかな笑いが含まれていた。

（シル）
「笑えない・・・。」

シルにとって、その光景がどんなに滑稽でおかしくても笑えない。

サフォークはチームＴｏｍｂｏｙの一員であって他人ではない。

彼がかく恥は、自分の恥と同じなのだ。

（マリオ）
「ひょっとしてサフォークは、笑いを取りたくてしているんじゃないの？だとしたら笑ってあげるべきだよシル。あんなに必死で女性にアタックしてさ・・・。努力だけは認めてあげなくちゃ。」

本気で言っているのか、それとも子供だと思っていたマリオが、高度なギャグを覚えたのかは解らないが、どちらであってもシルには

関係なかった。

直後、シルは腹を抱えて大声で笑ってしまった。

01－16：○漆黒の水面下［1］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ16「漆黒の水面下」

夜更けと共に、次第に街の明かりが乏しくなり、一時の静けさが街を覆い始める。

もうすでに日も変わり、ニュートラルエリア「アルファ」のメインストリートは、街影から伸びる漆黒の水溜りに呑まれかけていた。

この時間ともなると、街を徘徊する人々の様相は一変し、見るからに怪しげな人達の姿が目立つようになってくる。

表立って一般人に危害を加えるような事はないのだが、ＤＱＡ大会期間中のみ賑わいを見せるこの都市には、大会規約事項以外は、ほとんど法律のない無法地帯なのだ。

勿論、形式的に警察が周囲をパトロールすることで、同地域での治安の維持に努めているため、毎年、ほとんど大きな問題は発生していない。

しかし、それは表立って事件が表面化していないだけであって、実際は、強盗、強姦、殺人などに加え、軽犯罪まで含めると、毎晩のように問題が発生しているのが現状だ。

では何故、それほど多くの事件がおきていながらにして、表立って大きな問題にならないのかというと、その事件当事者のほとんどが軍関係者であり、黒幕とも言える犯罪者グループのリーダーを含め、

警察内部とも、実は裏で繋がりがあるらしいのだ。

ここ廃都市ブラックポイントは、ＤＱＡ大会開催期間以外は、トゥアム共和国陸軍軍部のみを置く、特別指定区域となっているために、詳しい捜査を実施することも許されず、今までに、闇から闇へと葬り去られてしまった人の数は、軽く三桁を超えるであろう。

そんな危険な街の横道に、一つぽつんと光りが灯っていた。

その店は、知る人ぞ知るブラックポイントの穴場であり、酒代、食事代がかなり安く、その上、店員の女性は揃って美人という、曰く付きの飲み屋である。

無論ブラックポイントの穴場というぐらいだ。ただの飲み屋ではない。

常連客のほとんどが、上流階級出身者や政府関係者で、彼らの目的とは、楽しく酒を飲むことでもなく、誰かと楽しく語らうでもなく、周囲にそれとは知られないように行われる「人身売買」である。

この店「カルティナ」の店主「レアル・サルス・バティ」は、主に美人系、可愛い系の少女達を各地でかき集め、毎年ＤＱＡ大会開催時期に合わせて、人にそれとは悟られないように店を開く。

そして、売買対象となる女性達を、その店の女性店員という形で常連客にお披露目するのだ。

この女性達には「自分が売られている」という意識は無く、単に同地域の繁忙期に合わせて、出稼ぎに来ているだけである。

しかし、店主と常連客の間で、売買成立のサインのやり取りがなされると、その女性は人知れず、急用により帰郷することになるのだ。

（セニフ）
「あはははは っ！！いいじゃん。いいじゃん。もっと飲んでよオーナー！！」

（ジャネット）
「ねえオーナー？今日は遅くまでいいんでしょ？もっと飲もうよぉ～。」

そんな危険極まりない店の中に、ある種不似合いな黄色い声を、撒き散らす女性達がいた。

薄暗く、おしゃれな雰囲気をかもし出す店内には、巨大なディスプレイがあり、各チームが繰り広げた昼間の戦闘ダイジェストが、静かに放送されている。

時間的にまだ一般客を多く抱えたこの「カルティナ」に、いつもの怪しげな気配は「なり」を潜めてはいたが、安らかな音楽の流れる心地よい空間をぶち壊す彼女達の騒ぎ声に、その一般客達ですら、どこか殺気立っているようにも見える。

チームＴｏｍｂｏｙの女性パイロット３人組みは、単に昼間の戦闘の慰労会で、この店を訪れただけであり、彼女達に混じって、珍しくも中年男性が一人、メンバーとして加わっていた。

（ラックス）
「あはは。いいね、いいね。仕事終わりに美女に囲まれて飲むビー

ル。最高だねぇ。」

その男、見てくれはみすぼらしく、ちょっと変なただのおっさんにしか見えないのだが、彼こそがチームＴｏｍｂｏｙのオーナー「ラックス・ムーズ」であり、スポンサー会社「ＬＮＲ社」の社長である。

チームオーナーたるもの、自分のチームのことを熟知していてもよさそうなものなのだが、彼はＤＱＡチームオーナーとしては珍しく、ほとんどチームＴｏｍｂｏｙの事に関して興味を抱かない。

今日のこの飲み会も、単なる仕事終わりに飲む酒と大差なく、彼は未だに今日、チームＴｏｍｂｏｙがどのような戦い方をし、どういう結果となったのかをまったく知らなかった。

興味が無いからなのだと言えば、まったくその通りなのだろう。

彼の目的は自社ＤＱ製品のデモンストレーションでもなければ、自社のイメージアップ宣伝でもない。

では何故、このようなＤＱＡ大会に参加しているのかと言えば、それは誰にも解らない謎なのである。

しかしそんなラックスにも、たった一つだけ気にかけていることがあった。

それは、チームＴｏｍｂｏｙのＤＱ機体状態についてだ。

セニフ達から見れば、彼は自分達の雇い主であって、その状態が「どんな状態であれ」報告しなければならない義務がある。

おそらく何も言わないまでも、彼が彼女達の元を訪れたのも、そのDQ機体状態を報告してもらうためなのだろう。

彼女達にとっては気が重いはずだ。今日の結果では・・・。

どう話を切り出すにしても、報告すべき結果は同じ。

ならば、できるだけ予想される被害を最小限に・・・。

セニフが何やら右手の中指で鼻の頭をなでなでしている。

「作戦決行」の合図だ。

ジャネットはそれを見て、人差し指と親指で丸を作り、右目にあてがった。

「OK」の合図だ。

彼女達の「作戦」は、とにかくラックスに酒を大量に飲ませ、思考能力が低下したところで、アリミアが巧みな話術で論破すると言うものである。

あまりに稚拙で単純な作戦ではあるが、陥った結果を取り繕うこともできない彼女達にとって、もう、アリミアの口撃に頼る他ないのだ。

しかし、そんな作戦を目論む彼女達の思いとは裏腹に、ラックスは酒をあまり大量には飲まない。

飲むといえば他社重役との接待時に飲む程度であり、普段から口にする酒の量は、ほろ酔い加減にも満たない程度である。

そこで彼女達は、強引な手法で彼に酒を進める手法を取った。

（ジャネット）

「ねぇ、もっと飲んでよ、オーナー。私。もっと強いオーナーが見たいなぁ。ねぇ～飲んでみせてぇ。」

猫なで声のジャネットが妖しくラックスに擦り寄ると、その豊満な胸をラックスの腕に密着させつつ、彼の耳元で囁きを入れる。

どうやら色香でラックスを魅了し、酒をガンガン飲ませようという魂胆らしい。

（ラックス）

「あははははっは。オーケーオーケー。どんどん飲んじゃうよ。」

さすがに未婚の中年男性には、かなり利く攻撃だ。

ジャネットの誘惑を断る事もできないラックスは、年甲斐も無く顔を赤らめ、言われるがまま酒をあおるしかないようだ。

セニフも同様にラックスに擦り寄るのだが、擦り付ける「豊満な胸」など彼女には存在しない。

彼女は自分の胸をまじまじと眺めると、唇をツンと尖がらせ、一瞬泣きそうに眉間にしわを寄せた。

しかし、そんなセニフに気がついたジャネットが目線で合図を送ると、セニフはまた満面の笑みを浮かべ、ラックスに酒を注ぎ始めるのである。

彼女にも十分可愛さと言う魅力が備わっているのだが、この年頃の少女は、どうしても他の美しいものに引かれ、羨むのもである。

セニフはラックスの顔色をじっと観察し、アリミアに合図を送るタイミングを見計らっていた。

顔が大分赤くなってきたね。

こういうタイプのオジンは、昔、酒で失敗した経験があって、飲まなくなった奴が多いのよねぇ。

たとえ、昔、大酒飲みだったとしてもかなりブランク有るでしょ？

常に飲んでる私にかなうと思う？

早いところ、潰れてしまえ。えへっへっへ。

とても１６歳とは思えない思考だ。

作戦は滞りなく、万事順調に進行している。

次第に、かなり赤らんで来たラックスの表情が、その酔いと眠気で弛み始めたころ、最後の止めを刺すタイミングを見計らっていたセ

ニフが、チラリとアリミアの方に視線を向けた。
彼女は黙々と読書にふけっている。
読書は彼女の唯一の趣味なのだ。
彼女の右手には、ブランデーかと思われる酒がロックで注がれている。

・・・。

・・・!?

（セニフ）
「あぁあああっ!?飲んでるゥ!!!!!」

（ジャネット）
「えぇぇ!?」

（ラックス）
「へっ??」

大きな声を張り上げたセニフの目の前で、並々と注がれたそのブランデーを、一気に飲み干して見せたアリミアは、手に持つグラスを強くテーブルに叩きつけると、鋭い視線をセニフに突き刺して言った。

（アリミア）
「なによ。文句あんの?飲んだら悪いの?ピーピーワーワー読書の邪魔だ。死にたいのか小娘が。引っ込みな。」

セニフの背筋に悪寒が走る。

それほどドスが利いていて、恐怖心を煽る一言だった。

アリミアは普段、温厚で優しく、見た目からは想像できないほど他人のことを思いやる人物だ。

チームのまとめ役でもあり、その行動は周りの人からも評価され、それは尊敬に値する。

しかし、彼女の唯一の弱点と言えば「酒をあおると人が変わる」と言うことである。

酔っ払ったアリミアは「凶悪」という言葉以外では表現できず、自己中心的、暴力的、短気と、すべての面で普段のそれと白黒する。

こうなると、屈強な男共でさえアリミアに手出しすることはできない。

アリミアの酒乱振りをあらわす良い例がある。

セニフ達が出会ってまだ間もない頃、チームの８人（当時はチームメンバー８人だった）で、酒場に飲みに行ったことがある。

そのときボックステーブルの隣に座っていた男共５人が、またかなりの酒乱で有名な軍人だった。

女性が飲みに来るような小奇麗な飲み屋でなかったため、彼女達は

かなりその場から浮いた存在だったらしい。

言うまでも無く、その男達が彼女達に絡んできたのだが、今思えば可愛そうな奴等だ。

ジャネットは語る。

その男達ってのが凄くいやらしくて、胸とか太腿とか触ってくるのよ。

そして男の一人がアリミアの右肩に手をかけた瞬間、アリミアの左飛膝が相手の顔面に炸裂したの。

その後は覚えていない。

気がついたら男6人が倒れていたわ。

6人って？

喧嘩を止めに入ったシルが、アリミアにやられたみたい。

怖かったぁ。

これがアリミアの酒乱伝説の始まりである。

01－17：○漆黒の水面下［2］@

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ17「漆黒の水面下」

アリミアはそれほど酒が好きなわけでもなく、周囲の人がお酒を飲んでいようと、それを横取りしてまで飲みたがるような人ではない。

しかし極偶（ごくまれ）に、気がつくと勝手に酒を飲んでしまうという「変な手癖」があり、飲み会をするに指し当たって、アリミアの監視を怠ることはできないのだ。

今回は、セニフ、ジャネット共々、チームオーナーであるラックスに、酒を飲ませることに頭が一杯で、アリミアへの注意が行き届いていなかったと言えよう。

（セニフ）
「いえ・・・、あの、どうぞそのままで・・・。」

何故か、セニフは丁寧にアリミアを静すると、半場顔を引きつらせながら作戦失敗を認識した。

バカヤロー！！飲むと変わるその性格を直せ！！

と、心の中で叫んでは見るものの、決して口にすることはできない。

（セニフ）
（アリミアはもうだめだ。作戦を切りかえる。）

（ジャネット）
（仕方ないわね・・・。）

お互いの意思をブロックサインでやり取りしながら、彼女達は次なる作戦の決行を余儀なくされる。

（ラックス）
「そう言えば、今日の戦果はどうだったの？まだダイジェスト見てないしさ、本部に連絡もしてないから解らないんだけど。」

進められるがままにな並々と注がれたブランデーを、ゆっくりと飲み干したラックスが、とうとう今日の主題を切り出した。

もうこうなったらやるしかない。

2人も決心はついたようだ。

（セニフ）
「11機撃破・・・したんだけどね・・・。」

（ラックス）
「へー、やるじゃない。結構いいところなんだ。」

思ったとおりの、ラックスの素っ気無い返事が返る。

大会での戦果に関しては、本当に興味が無いようだ。

（ジャネット）
「でもね・・・。ラプセルが完全大破しちゃって・・・。パングラードはオーバーヒートを通り越して、全神経麻痺しちゃったの・・・

。」

（ラックス）
「・・・。？」

突如としてジャネットの口から飛び出した意外な事実に、一瞬、ラックスには何を言われたのか判断に困った。

言葉の意味は良く解るのだが、彼女の言葉が頭の中でクルクルと空転し、決して最後の結論へと到達することを拒む自分がいる。

いわゆる一つの「反射的現実逃避」と言うものか。

しかし、改めて思考をめぐらし、徐々にその現実を受け止め始めた彼の心には、沸々と事の重大さがこみ上げてきた。

口を半開き状態で、趣味の悪いサングラスがポロリとずれ落ちる。

呆然とした表情のまま直後に、彼はすべての行動を止めてしまった。

（ラックス）
「ＤＱ・・・た・・・大破・・・。」

ラックスにとって、それほどチームＴｏｍｂｏｙのＤＱは重要な物だったのだろうか。

激しく衝撃を受けたように、ピクリとも動かなくなった中年のおじさんを観察しながら、二人はお互いの顔を順番に見合わせた。

こんなにショックを受ける？

あの戦果に無頓着なオーナーが？

彼女達はラックスと、２年程も一緒にいることになるのだが、完全に間抜けな中年親父の雰囲気以外に感じたことは無く、どこからどう良く見ても、会社の社長には見えない。

普段から温厚でまったく怒る事が無く、社員がどんなに大きな失敗をしようとも笑って済ませる、陽気でマイペースな男だ。

そんな男が、ジャネットの一言で活動を停止させてしまったのである。

怖いはずだ・・・。

（ジャネット）

「ねぇ。聞いてよオーナーァ！？奴等ったら、か弱い私達を囲んで虐めたのよ！！」

（セニフ）

「カーネル３機にハンター１０機なの！！ぐすっ・・・。私達を囲んでいい様に弄んでさ・・・。ジャネットなんか殺されかけたんだよぉ。」

とっさにラックスの腕に巻き付くように抱きついた彼女達は、必死に彼を「泣き落とす」作戦を決行した。

作戦？と疑わんばかりの最終兵器たる女の涙だが、これ以上の作戦が彼女達に思い浮かぶはずもなく、ただただ、すすり泣く様を演出することしかできない彼女達。

元は自分達が発端で発生した面倒事とはいえ、本当に泣きたいぐらいだ・・・。

（ラックス）
「ん?ジャネット・・・。君に怪我は全然無いんだよね。と言うことは・・・。コクピットは全然大丈夫ってことか?」

と、泣きつく彼女達が、ラックスのシャツの袖で、涙を拭くような素振りを見せていたとき、ラックスがきょとんとした顔で確認するように呟いた。

（ジャネット）
「メインシステムとか、主要なところは大丈夫ってシルが言ってたけど、もしかしたら、明日一日はＤＱ整備作業で終わるかも知れないって・・・。本当にごめんなさいオーナー。」

心の中でジャネットの言葉を繰り返す。

大丈夫?コクピットは大丈夫?すると搭載しているアレも大丈夫ってことか?

パングラ―ドは?全神経麻痺と言っても破壊されたわけじゃないから、ということは、パングラ―ドもアレは大丈夫ってことか?

なんだ。それじゃ、何も問題はないじゃないか。

彼が達した答えの中に、悲観的要素がすべて取り払われたことを確認すると、いままで呆けっぱなしだった顔に怪しい笑みが蘇った。

（ラックス）
「あはーはっはっはぁ！！ＯＫＯＫＯＫ！！ノープロブレム！！ノープロブレムだよ。」

突如として明るい様相で笑い声を張り上げたラックスの態度に、今度は彼女達二人の方が驚いたような表情で、唖然とラックスを見上げる。

やはりこの男、どこか壊れているのだろうか。

先ほどまで屍のように微動だにしなかった彼だが、酒の尽きた自分のグラスの代わりに、ジャネットのグラスを取り上げると、勢い良くブランデーを飲み干しておどけてみせる。

（ラックス）
「君達が無事ならなにより、ブラックボックスが無事ならなによりだ。やられた事なんか気にするな！君達には明日がある。明日もがんばろうじゃないか。」

（ジャネット）
「ブラックボックス？」

（ラックス）
「おおっと・・・。」

決して注意深く彼の言動を観察していたわけではないのだが、何の気なしにさらりと発せられた言葉のなかに、不思議な一言が交えられていたのを、なんとなくジャネットは聞き逃さなかった。

（ラックス）

「まあ何だ。それよりジャネット。君は綺麗だよねぇ。君みたいな女性が、自分の奥さんだったらなぁなんて思ったりして。ね。どう？」

（ジャネット）

「うっふふふ。お断りします。」

あからさまに会話の内容を切り替えたラックスに対して、彼女は可愛らしい笑顔のまま、即座に拒絶の意思を表した。

しかし、何故か彼女の脳裏に残る、先ほどのラックスの言葉。

ブラックボックス？なにそれ？

実のところ、ジャネットはこのラックスに対して、少なからず不信感を抱いている。

おそらくは、日頃から抱き続けていた彼女の疑心が、その言葉に取り付いて放さないのだろう。

彼女がラックスに不信感を抱く理由とは。

一つに、何故、チームオーナーともあろうものが、チーム戦績に無頓着でいられるのか。

二つに、ＤＱ製造メーカーでもない小さな会社が、ＤＱＡ大会に参加する意味は何か。

三つに、ＤＱチーム運営費はどこから出ているのか。

これだけ妖しげな人物である。

考えれば考えるほどに、疑念が尽きぬほど沸き起こって来るのだが、彼女の中で一番大きな疑念は、この三つであろう。

一つ目は、あまり細かいことを気にしない、ラックスの性格から来ているものだとすれば、それなりに納得は出来る。

しかし、二つ目のＤＱＡ大会に参加する意味については、ラックスの運営する「ＬＮＲ社」に、あまりメリットが無いことから、その必要性を疑問視せざるを得ない。

ＬＮＲ社はＤＱ部品のリサイクルや、注文に応じたＤＱ部品の製作など、製造メーカーのような規格製品を扱うのではなく、いわば、ただの合法的不正規部品を取り扱う、ジャンク屋の一つである。

勿論、不正に製造したＤＱを販売することは法律で禁止されている上、いかに強力な改造を施したところで、専門の研究機関を要する、大手ＤＱメーカーの新製品に勝てるはずも無い。

自社のＤＱメンテナンス技術力を売り込むための参加なのだとしても、参加させるＤＱの整備、維持には莫大な費用がかかってしまい、これだけ小さな会社に、その支出に見合った収益がもたらされるとは考えづらいのだ。

三つ目の疑念にもあるように、ＤＱチームの運営費については莫大な費用が必要となる。

総資産でもトゥアム共和国経済情報機関「ライマット」の、評価で最低ランクのこの小さな会社が、一体どうやって、この金食い虫たるＤＱチームを維持しているのか。

こんな会社にＤＱ３機、チーム専属人員６名を配置し、２年も遊ばせる金が有るはずもない。

チームＴｏｍｂｏｙの運営費用は、とっくに会社の総資産を超えているはずなのだ。

聞こうと思えばいつでも聞けるこの疑念。

ラックスがその問いに関して、返答を渋ればそれまでのことであり、まず、疑念を抱いたのなら、当の本人に聞いてみるのも一つの手であろうが、チームＴｏｍｂｏｙの面々は、誰しも決してこの話題に触れることはない。

その理由はこうだ。

チームＴｏｍｂｏｙの規約の一つに「過去、人種、身分、性別を一切問わず、且つ、一方的な干渉、詮索を禁ず」というものがある。

これは各々の自主性でしか成り立たない規約ではあるが、チームの誰もが守る唯一の規約である。

それだけ、誰もが暗い過去を持ち、辛い過去を持ち、明かせない秘密をもってこのチームに入ってきているということなのだろう。

それは、ジャネットとて例外ではない。

きっとラックスでさえ、そういう境遇で育ってきたに違いない。

少し前まで激しい国家間の紛争が、繰り広げられていたムーンスロー ブ大陸において、何不自由なく暮らせた人間は、貴族や政治家、軍上層部など一部の人間達だけであり、一般市民は、常に貧乏クジを引かされる立場なのだ。

自分が聞かれて嫌なことは聞かない。

チームＴｏｍｂｏｙの人間達にとってこの規約は、単にそれだけの言葉でしかないが、逆に言えば、それがすべてとも言える。

自分を覆い隠す良き隠れ家として、偽りでも成り立つ関係を作り上げてきた彼らにとって、それは、絶対に「壊す事の出来ない規約」なのだ。

（ラックス）

「まあ、なんにしろ明日がんばろうじゃないか。飲みすぎ注意、トラブル注意だ。ＤＱのことなんか気にするな。」

その場を取り巻く空気の微妙な変化に気が付いたのか、ラックスがそそくさと逃げ出すように席を立つ。

（ラックス）

「金はいくらでもあるんだ。じゃんじゃん食べてよ。よく食べてよく寝て、大きいオッパイ作らにゃダメだぞ、セニフ。」

完全にセクハラである。

この言葉にカチンときたセニフは、手を振りながらテーブルを後にするラックスの後姿に、白々と薄い視線をあてがい、思いっきり舌を出して見せた。

そして、不貞腐れたように剥れた表情のまま、テーブルに並べられた料理をガツガツ食べ始めるのだ。

まあ、なんにせよ、当初の目的「この場をなんとかやり過ごす」という目論みは、十分達成できたと言えよう。

しかし、なんとも言い難い疑念が、深く募った飲み会であったとも言えなくもない。

ジャネットは少し疲れた様子でテーブルの上に寝そべると、ガツガツ料理を食べまくるセニフに視線を向けた。

（ジャネット）
「ねぇセニフ。オーナーの会社ってそんなに儲けていると思う？」

ジャネットの声に食事の手が止まり一言。

（セニフ）
「さあね。でも金があるって言うならいいんじゃない。」

セニフに聞いた私がバカだった・・・。

そう思ったジャネットだったが、確かにセニフの言う通り、お金があるってことは自分達にとって、全く不利には働かない。

私がそんなこと気にしてどうするのよ。

そう思い直したジャネットは、その後、セニフと一緒に「高級な酒」「高級な料理」を山ほど注文するのであった。

＞ｉ４８２６―８２７＜

01－18：〇漆黒の水面下［3］

第一話：「ルーキー」
ｓｅｃｔｉｏｎ１８「漆黒の水面下」

古い型の時計が2回、重いガラスを叩く音を奏で出し、午前2時になったことを告げる。

日付も変わり、夜更けと共に人の姿も疎らとなり始めるこの時間帯、酒場「カルティナ」には、妖しげな客人達が集結していた。

部屋の隅に座る、みすぼらしい姿の老人は、最上級と言われるワインをボトルでラッパ飲みし、頭から黒いフードをかぶった正体不明の人物は右手に水晶のような珠を2つ握り締め、カチャカチャと回している。

そして、接客のための店員達に、若くて美しい女性達が増え始めると、その客人達の妖しげな視線が色めき立つのだ。

センターモールのディスプレイに、淫妖で官能的な映像が流れ始め、店内の照明も薄暗い穂のかなピンク色に染まる。

そして今日も、悲しくも人知れず、姿を消してしまう女性店員が居るのであろう。

（メイルマン）
「おいおい、やめてくれよ安っぽい店はよ。」

（ランスロット）

「へっへっへ。ここには美人が多いんだぜ、おおマジ！！なあ、ユァンラオ。」

そんな夜も更け始めた時間帯ではあったが、新しい客人がきたようだ。

重たい木製の扉を開き、店内へと姿を現した3人のパイロットは、昼間にエリア５５にてチームＴｏｍｂｏｙと戦闘を繰り広げた、チームＢｌａｃｋ-ｓのアタッカーメンバーである。

３人とも日付が変わるまで戦場にいたようで、ニュートラルエリアに着くなり、店に足を運んだのだろうか、未だにパイロットスーツのままだ。

彼らがこの店に来た目的は、単なる仕事終わりの飲み会のようで、平常時と変わらぬ姿のまま店に現れたことからも、決して人買いを目的としたものではないと思われる。

（アガサ）
「あら、ユァンラオ、久しぶりじゃない。」

扉の前に突っ立ったままの男達の中に、見慣れた厳つい大男の姿を確認した女性店員の一人が、彼らの元へと歩み寄る。

真っ先にユァンラオに挨拶したこの女性は、カルテイナ開店当初からいる数少ない店員の一人で、名を「アガサ・プリース」という。

長いしなやかな黒髪に、細く横に伸びる目元、豊満な胸にスラッとした抜群のスタイル。

並大抵の男ならば、必ずといっていいほど振り向いてしまう程の美女である。

お調子者で女好きのランスロットなどは、彼女がユァンラオと会話している最中、ずっと両手で金髪天然パーマを整える振りをしながら、彼女の全身を舐め回すように見とれていた。

アガサとユァンラオの話し振りから察するに、彼はこの店の結構な常連のようで、奥からチラリと姿を見せた店主サルスでさえ、彼に向かって深々と一礼をするのだった。

（アガサ）
「ま。立ち話もなんだから、とりあえず座ったら？奥の席空いてるから。そっちに座って。ほら、お兄さん達も。私がお付き合いしてもいいかしら？」

そう言うとアガサは、ゆっくりとユァンラオの後ろ腰へと手を回し、彼等を奥の席へと誘おうとする。

しかし、この誘いに敏感に嬉しそうな反応を見せたランスロットを他所に、しきりに店内を見渡すユァンラオが冷たく彼女に言い放った。

（ユァンラオ）
「別にいい。それより、カルティナはいるか？」

（アガサ）
「はぁ・・・。なぁに？またカルティナなの？彼女なら今、奥にいるわ。後で呼んであげる。」

（ユァンラオ）
「酒を持って来い。いつものやつでいい。あとタバコだ。」

腰にまわした手を無造作に振りほどく彼の仕草に、彼女は小さく溜め息をついて、残念そうな表情を見せた後、少し投げやりな感じで、空いているテーブルの方を指差して見せる。

そして、何事もなかったかのように、そそくさと店の奥へと引っ込んでしまった。

何もそこまでしなくていいのに・・・。

と、どんな女性に対しても優しく接する、「自称プレイボーイ」のランスロットの目から見れば、彼の振る舞いは、問答無用で「鬼」である。

ギラギラと光る黒髪オールバックに、耳にぶら下げたドデカイリング。

剃ってるのか剃っていないのか解らないような無精髭に、伸びきったモミアゲ。

女性は何故、自分よりもこんなムサイ男の方に好んで近づくのか、まったく彼は理解できなかったが、さっさと一人で奥のテーブルへと、歩み始めたユァンラオの後姿に、小さな舌打ちをぶつけると、渋い表情のまま彼の後に続いて歩き出した。

彼らのために用意されたテーブルは、店の一番奥の方に位置し、照明もあまり届かない薄暗い場所だった。

隣接するテーブルとも敷居がなく、周囲が完全に見渡せるオープンスペースである。

静かにゆっくりと酒を飲みたかったメイルマンとしては、この店の状況が面白くないのか、眉間にしわを寄せたままブーたれ状態だ。

陰気くさい店内に、見てくれだけの能無しメス豚飼いならして、ここは豚小屋かってんだよまったく・・・。

客も変人だらけだし、うるせぇのもいる。

キャーキャー騒ぐなつううんだよ。

と、不満そうにテーブルに向かう途中、通路の脇に座っていた、うるさい3人組みの女をにらめつけた。

（メイルマン）

「こ・・・こいつら・・・。」

メイルマンは一瞬目を疑った。

昼間に受けた、あの屈辱が脳裏をよぎる。

メイルマンが目にした3人とは、先刻からこの店にいついてしまった、チームＴｏｍｂｏｙの女性陣3人である。

セニフとジャネットはもう完全にできあがっており、ほぼ彼女達の周囲だけが、異様にもパーティ状態となっている。

そして例のごとくアリミアは、黙々と読書にふけっており、狭い円

形のテーブルの上には、ワイン、ウィスキーのボトルが、5、6本ほど転がっているのが見て取れた。

一瞬、足が止まったメイルマンは、3人を睨み付けたまま思うのである。

こんなバカっぽいガキ共にやられたのか俺は・・・。

（ランスロット）
「おら、座るぜメイルマン。」

ニュートラルエリアでのチーム間のイザコザは即失格である。

特に主催者お抱えのチームとしては、他のチームを抑えて優勝しなければならない義務があり、つまらない揉め事で失格することなど出来ないのである。

ランスロットの促しに、渋りながらも席に着いたメイルマンだったが、未だ気持ちが収まらない様子で、右足をカタカタと揺らし始めた。

（ランスロット）
「おいおい。落ち着きなって。仕事終わりぐらいゆったりとしようぜ。」

（メイルマン）
「うるせぇな。ほっとけタコが。」

（ランスロット）
「なんだ。ひょっとして、昼間やられちまったことでも思い出した

のか?まあ、女子供にやられてりゃ世話ねぇわな。」

(メイルマン)
「黙れ!やられちゃいねぇだろうがよ!てめぇ!それ以上口開いたら、二度と無駄口が叩けないようにしてやるぜ!」

(ランスロット)
「おお。怖え怖え。いきなり新入りに殺されちゃうよ僕ちゃん。可愛そうな僕ちゃん。おお。神よ。この素晴らしき聖者たる僕ちゃんを助けておくれ。」

そういって席を立ち、両手を握り締めて天を仰いで見せるランスロットに、メイルマンは、呆れた表情のまま突っかかるのを止めた。

もはや、こんな訳のわからない輩とは、口論するだけ時間の無駄である。

彼は激しく、無駄な労力を消費してしまったことを後悔した。

(メイルマン)
「おいユァンラオ。何でこんな奴がこのチームにいんだよ。こんな糞蝿置いといたら、まずいだろ。」

(ランスロット)
「タコの次は蝿かよ。格下げだねぇ。」

溜め息混じりに問いかけるメイルマンだが、ユァンラオはまったく彼らに反応を見せなかった。

そればかりか、手に持つ最後の1本となったタバコに火をつけると、

思いっきりドギツイ煙を吸い込み、馬鹿な2人に無関心を装ったまま、煙を周囲に撒き散らした。

ちっ・・・。

不貞腐れたように舌打ちをしたメイルマンを他所に、ユァンラオは一人、まったく別の世界に居るかのような、穂のかな笑みを浮かべてみせる。

そして、徐に店内のとある場所に視線を移すと、睨みつけるように一点を凝視し始めた。

彼の視線が向かう先。

そこには、チームＴｏｍｂｏｙの女性達の姿があった。

（カルティナ）

「久しぶりね。ユァンラオ。貴方からもらったラブレター。とっても面白かったわ。」

突然、ユァンラオの背後に女性が現れ、彼に声をかける。

彼女が、店の奥からアガサに呼び出された「カルティナ・エニオアスカ」である。

彼女もアガサと同じく、カルティナ開店当初からいる数少ない店員の一人で、その美貌はかなりのものである。

彼女はこの店の看板娘であり、店の名前「カルティナ」も彼女の名から付けられたものだ。

その攻撃的で剥き出しの巨葡萄と、スラッと縦に伸びた真っ白い太腿は、数多くの男達を虜にしてきたであろう魅惑の果実。

カルティナはトレー台に乗せてきたグラスを、そっと一人づつテーブルの上に置くと、ゆっくりと順番にブランデーを注ぎいれていく。

そんな彼女の姿に、ランスロットが当たり前のように厭らしい視線を送るのは解るが、そっけないメイルマンでさえ、彼女の姿にはしばし見惚れ入ってしまったようだ。

しかし、誰しもが自分のものにしたいと切望するほどの彼女もまた、3人分のブランデーを注ぎ終わると、ユァンラオの側に擦り寄り、彼の肩へと手を回した。

そして、彼を誘惑するかのように、豊満な胸を肩の辺りに押し付け、人形のような顔を耳元まで近づけると、甘い息を吹きかける。

（ユァンラオ）
「奴か、ＤＮＡ鑑定するまで話はフラットだな。」

そんな彼女の行為に、まったく少しも関心を抱かないような素振りで彼が言った。

（カルティナ）
「そうね、でも貴方の手紙と彼女のタイミング。期待は大きいんじゃなくて？」

彼女は甘い口調で彼に囁き続けながら、胸の間に挟めておいた未開封のタバコを取りだし、彼の前にそっと置く。

そのタバコの上には、何やら紅い髪の毛のようなものが、2、3本乗せられていた。

（ランスロット）
「ねえ、お姉ちゃん綺麗ーだね。ユァンラオなんかやめて俺にしない？俺って、いい男だぜ。」

（カルティナ）
「あら、初めましてこの店は初めて？」

本当は3度目の来店なのだが、ランスロットは嬉しそうに彼女の質問を肯定して見せた。

こんな客商売をしていながら、3回も店に来た人物の顔を覚えていないのか・・・。

と、萎(しぼ)み失われ行く思いがあったのかもしれないが、彼はそれを責め立てるような無粋なことはしないようだ。

（ユァンラオ）
「また来る。」

ユァンラオは手元に置かれたタバコを握り締めると、グラスに注がれたブランデーを一気飲みし、席を立ちあがった。

すでに彼の用事は済んだようだ。

（メイルマン）
「なんだよ。もう帰るのかよ。」

（ユァンラオ）
「お前等は勝手に飲んでいろ。明日は昼からだ。遅れるなよ。」

不思議そうな表情を見せるメイルマンに向かってそう言うと、ユァンラオは纏(まと)わり付くカルティナを振りほどき一枚の紙切れを手渡した。

その紙には、なにやら暗号のような数字の羅列がびっしり書き込んであったが、彼女の方が、すぐに何の紙であるか了解した様だ。

（カルティナ）
「確認がとれたらすぐまわすけど、判定Ｎｏなら暇でしょ？今夜は空けとくわ。」

（ユァンラオ）
「ああ。」

このユァンラオの返答に、カルティナの表情が一瞬ぱあっと明るくなり、今まで妖しい光りを放ち続けた彼女の瞳が、少女のように澄み渡り始める。

まるで恋する乙女のような喜びようだ。

（ランスロット）
「なあ、あんな奴のどこがいいんだ？」

（カルティナ）
「暗いところ。」

ふと、誰しも思うだろう疑問を投げかけたランスロットに、さらっとした言葉を返すカルティナ。

そして彼女は決まってこういうのである。

（カルティナ）

「貴方みたいなの、どこにでもいるもの。」

ユァンラオは後ろを振り返ることもなく店を後にする。

その落ち着いた風貌からは予想できないほどの気持ちの高ぶりが、今の彼にはあった。

目線はじっと遠くを見つめ、不適に笑みを浮かべたユァンラオは、薄暗い路地の帰路に着くのであった。

０１－９０：★【第一話】登場人物一覧（前書き）

とりあえず試験的に投稿してみます

01－90：★【第一話】登場人物一覧

第一話：「ルーキー」

★★★新規登場人物一覧★★★

【シャルダ・ムーア】
「パレ・ロワイヤル戦記」に意訳を加え、「Ｌｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」を書いた作者。

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のファーストアタッカーを務める元気の良い女の子。
赤く長い髪の毛が特徴的で、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める真面目な性格の少年。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、人当たりの良い温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。

【ジャネット・クライス・ホスノー】

性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のセカンドアタッカーを務める可愛らしい長身の女性。
抹茶色の癖毛が特徴的な彼女は、おしとやかでとても可愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
同チームに所属するマリオネクスの姉。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のスナイパーを務める物静かな女性。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：１３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のＤＱ機体整備担当者を勤める明るい性格の男。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、

ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有している。
彼のお調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。

【マース・チェリーズ】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
チーム「ウェッジバスター」のアタッカー。
性格は好戦的だが、周囲の状況を冷静に分析して作戦を練るタイプ。
トゥアム共和国軍の傭兵として５年の実戦経験があり、小部隊を統率するリーダーとしては、周囲からそれなりに高い評価を得ていた。

【サックス・セロイアン】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
チーム「ウェッジバスター」のアタッカー。
自己中心的で、いつまでも根に持つしつこい性格の持ち主。

【ジェイ・ブラウン】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
チーム「ウェッジバスター」のスナイパー。
かなり強気な性格に反して、臆病で大した能力も持ち合わせない雇われ戦士。

【ユァンラオ・ジャンワン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国
チーム「Ｂｌａｃｋ，ｓ」のアタッカーリーダーを勤める得体のしれない怪しげな男。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦闘能力においては無類の強さを有する猛者。
厳つい顔に生え揃った武将髭が彼のトレードマークであり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。

【ランスロット・アバンテ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｂｌａｃｋ，ｓ」のアタッカーを勤めるお調子者。
金髪の天然パーマが特徴的な彼は、「酒」と「女」に全てを捧げる堕落者としての烙印を押された人物。
明るく軽い性格が彼の人当たりの良さを醸し出してはいるが、大半の女性は決して無為に彼の元へと近づく事は無かった。

【メイルマン・イン・ニネヴェ】
性別：男　年齢：２４歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｂｌａｃｋ，ｓ」のアタッカーを勤める自意識過剰な男。
実戦経験こそ無いが、卓越したＤＱ操舵技術を有し、他のＤＱＡ大会で自チーム以外のＤＱを全て撃破し、莫大な賞金を手に入れたと言う過去を持つ男。
歪んだ性格の持ち主であり、他人の事など少しも気にかけない非情なる人物。

【ラックス・ムーズ】
性別：男　年齢：３９歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のオーナーで、合法的不正規部品を取り扱う「ＬＮＲ社」の社長。
周囲の事象に対して無頓着で流されやすい性格だが、無駄に明るい雰囲気を醸し出して、誰にでも隔たり無く優しく接する温厚な人物。
時におかしな言動を放って、周囲に変人たるイメージを植え付けてしまう悲しき中年男性。

【レアル・サルス・バティ】
性別：男　年齢：５８歳　出身：トゥアム共和国
廃都市ブラックポイントで酒場「カルティナ」を経営する店主。

戦乱の世に落ちた黒き影に巣食う闇の住人。

【アガサ・プリース】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
酒場「カルティナ」の美人店員。
長くしなやかな黒髪を持つこの女性は、静かな語り口調が特徴的であり、抜群のスタイルと美貌を兼ね揃えた大人の女性だ。
カルティナ開店当初からいる数少ない古株。

【カルティナ・エニオアスカ】
性別：女　年齢：２４歳　出身：北ムルアート諸国
酒場「カルティナ」の名前の由来となるほど、攻撃的な魅力を有した美人店員。
紫色のボリュームのある綺麗な髪の毛が特徴的な彼女は、明るく優しい性格の持ち主だが、時として冷酷な一面を垣間見せる不気味な女性であり、ユァンラオとも深い関係の中に居るようだ。

02－01：●最後の皇帝

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「最後の皇帝」

セルブ・クロアート・帝国の歴史を示す文書「最後の皇帝」にこんな一文が残されている。

「最後の皇帝は死なず、永遠にその子孫を残し、老いる事もなく、水槽の中で生きつづける」。

これは歴史文書製作者の主観的願望であろうか。

多くの記録書、日記から抜粋され１０巻にも膨れ上がった歴史文書「最後の皇帝」。

その信憑性の高さから、ムーンスローヴ大陸史によく登場する文献のひとつで、これなしには大陸戦乱期を語る事はできない。

下記内容は、その帝国史第９巻「滅亡への歩み」より抜粋、まとめたものである。

セルブ・クロアート・スロヴェ―ヌ帝国は立国４００年で滅んだ、ムーンスローヴ大陸史上最強の軍事国家である。

ムーンスローヴ大陸を完全制覇統治した国の中だけで言えば統治期間は最長を誇り、完全統治期間は９８年で、「第８代皇帝オリュンポス」が悪名を轟かせていた頃に、わずか５年足らずで全大陸を制

覇したと言われている。

その後、「第１０代皇帝キンヴァル」の時代から辺境種族の反乱が数多く勃発すると、ＥＣ３３４年には９カ国もの独立を許してしまった。

「パレ・ロワイヤル戦記」が示すＥＣ３９０年代にはさらに２カ国が独立し、帝国領土も統一時代の半分以下に減ってしまっていた。

そして１０年へ経て、帝国は滅びへの道を歩むわけだが、歴史文書「最後の皇帝」が示す最後の皇帝とは、帝国唯一の女帝「ソヴェール・エマヌエル・プレッソス」を示す。

実際、王都ルーアンで戴冠を受けた人物は、この後２人存在するのだが、この女帝以降は皇帝血が完全に途切れており、その後の記録書には代理皇帝、無為皇帝として名を残すのみで、民衆の畏敬と崇拝の念はすべて「女帝ソヴェール」に集中した。

その不名誉な「皇帝」の称号を受けた皇帝とは、「ディユリス・ランス・セルブ」と、「デュランシルヴァ・レム・リキューニア」である。

ディユリスは皇帝血系ではなく、当時貴族としては最富豪であった、「ロイロマール家」の次男として生まれ１８歳の時に皇室入りした。

その後ソヴェールは過労がたたって急死に至り、彼女の娘である「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」が、成人するまで代理という形で、仮皇帝の地位を彼が受けたのだ。

しかし、ディユリス代理帝には、当時のカリスマだった「女帝」の代わりは勤まらず、連日連夜の公務により心身共に疲れ果てた彼は、やがて病床に伏せることとなる。

そして、その後まもなくして、帝国全土を揺るがす、ある事件が勃発するのだ。

当時ディユリスは、ソヴェールが病死してから、まだ帝国全土がその悲しみに包まれる中、3ヶ月しか経ていないにもかかわらず、帝国貴族「ストラントーゼ家」の「クロフティア・レブサーマル・トロ・ストラ」と再婚をした。

彼としても、愛する女性を失って間も無く、他の女性との婚姻など、考えられるはずもなかったのだが、それには、代理皇帝たるが故の政治的理由があったからなのだ。

その頃、帝国5大貴族の最両翼「ロイロマール家」と「ストラントーゼ家」の仲は、相当険悪な状態にあり、カリスマ的存在であったソヴェール帝を失った彼等は、帝国全土を巻き込む内戦へと暴走しかねない状況にあったのだ。

元々、ロイロマール家の息がかかったディユリスが、両家の間に割って入ったところで、余計に話が拗(こじ)れるばかりである。

彼は苦心の末に、臣下からの提言でもある、「両家の仲を取り持つ形での婚姻」を選択したのだった。

だがディユリスは、この婚姻に反発する国民達の非難を一心に浴び、さらにはママ子だったセファニティール皇女の恨みを買うことになる。

そして、ついには、実の娘であるセファニティールに「毒殺」されるという、悲しい末路をたどるのだ。

信頼しきっていた実の娘セファニティールには裏切られ、愛すべきソヴェールの唱えた「戦火縮小」をも実現することもできなかった。

あげく戴冠の事実さえも表舞台に出てこなくなり、今では「可愛そうな人」の代名詞ともなってしまった。

そして、もう一人の戴冠者デュランシルヴァだが、代理皇帝ディユリスとクロフティアの間に生まれた彼は、僅か生後2ヶ月で戴冠したという、帝国史上最年少皇帝である。

戴冠に至るまでには、様々な政治的陰謀が働いたとされるが、代理皇帝ディユリス亡き後、仕方なく戴冠した「形だけの皇帝」であり、裏ではストラントーゼ家が実権を握っていたとされる。

セファニティール皇女を、父親殺しへと駆り立てるに至った人物であり、なんら皇力を発揮することの出来ない幼少皇帝をいい事に、ついにセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国は、諸外国へと侵略を開始するのだった。

平和的思想の元、民衆のことを第一に唱えた英雄「ソヴェール」。

彼女の存在こそが、帝国国民達にとっての、永遠の皇帝であり、「最後の皇帝」なのだ。

やがて大陸全土に訪れた、激しく燃え盛る戦火の渦の中で、人々の怒りと悲しみに塗れるように、彼ら二人の存在は、歴史の歪へと消されてしまうのである。

02－02：●帝国貴族（前書き）

ナイテラーデ家の文章を少々追記しました。現在のところのストーリーに大きな影響はありません。ご了承ください。

02－02：●帝国貴族

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「帝国貴族」

帝国貴族とは、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国の建国者「ルーアン・セイル」、また建国当初にその国の重役であった者達の末裔を、主に指し示すのだが、当時の皇帝に特別に与号されることも決して稀ではない。

過去、帝国法務省に登録された貴族の総数は、王室「ランス」系を除いても１０００を超し、未登録のままの貧民貴族を合わせれば、その数は３００００を超すとも言われている。

帝国暦晩年、代表的な貴族は「ロイロマール家」「ストラントーゼ家」「ブラシアック家」「ナイテラーデ家」「ロートアルアン家」で、当時は帝国５大貴族と呼ばれ、彼等５貴族だけで、帝国領土の３分の２ほどを独占していた。

―ロイロマール家―

「ロイロマール家」の歴史は数ある帝国貴族達の中でも最も古く、帝国建国前にさかのぼらねばならない。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国建国当初から、帝国のために尽力した名家であり、帝国史の一部始終すべてを見てきた唯一の一族である。

帝国領北部「南ブランドル地方」から「セレーヌ地方」までを統治する彼等は、帝国国民からの信頼も厚く、数々の優れた人材を輩出することでも有名だ。

帝国滅亡直前、反王派「ストラントーゼ派」に粛清され、一族の多くが虐殺、投獄されることになってしまうが、その古来より民衆の信頼を、一心に浴びてきた名門だけあって、帝国滅亡後はその腐敗しきった治安と環境を整えるのに一役買い、古都市と化したルーアンを帝国最盛期時代以上に復興させることに成功する。

当時の家主「オットンハイマー・レブ・ロイロマール」は、一度、ストラ派に身柄を拘束され、処刑台に上るまでに至ったが、集った勇士達による救出作戦が成功。

その後の帝国内戦に終止符を打つ人物となる。

―ストラントーゼ家―

「ストラントーゼ家」は皇帝血族系の貴族であり、その発祥は「第１０代皇帝キンヴァル」の弟「ウィルセラム」が始まりである。

統治領土は旧帝都シュトラセ・ゼニーロ近郊周域のみと、５大貴族の中では少ない部類に入るが、その洗練された軍事力と、膨大な資金力により、帝国貴族最大の勢力を誇るまでに至った。

このストラントーゼ家の始祖ウィルセラムは、当時の第１０代皇帝キンヴァルと、王位継承問題で揉めに揉めた２人である。

結局は、父である「アヌバース帝」の遺言により、キンヴァルが帝

位を継ぐことになるのだが、彼のあまりにも怠慢な政治振りから、次第に民衆の反感を買い、数々の紛争が勃発、多くの独立国家を許す結果を招いてしまった。

そのこともあり、ストラントーゼ家は密かに反王派として生き続け、最後には帝国滅亡を演出するに至る。

帝国を滅亡の道へと追いやった人物とは、ストラントーゼ家４代目家主「オーギュスト・レヴ・ストラントーゼ」である。

当時の王室に関連する、あらゆるトラブルには彼が関わっていたとも言われ、女帝ソヴェールの死も、実は彼の仕業では無いかと、密かに噂されたほどだった。

ディユリスの死後、彼は幼少皇帝デュランシルヴァの裏で、帝国の実権を完全に掌握することに成功。

そして、その知性と野心を余すことなく振り回し、ソヴェールが縮小してきた戦火の拡大を計るのだ。

最後には盟友「トリストライアン・レヴ・ブラシアック」に裏切られ、悲惨な末路をたどるのだが、彼としては、先祖ウィルセラムの無念を晴らし、さらに短期間とは言え帝国全土を手中に収めたのである。

帝国滅亡と共にその運命を共にした名家は、儚くも力強く、帝国史にその名を残すに至った。

―ブラシアック家―

「ブラシアック家」の歴史は古く、「第５代皇帝ディエディリータ」時代に、元は小さな貴族でしかなかった「ビノルトス家」の家主「プリマルクソス」が、帝国繁栄に大きく貢献したことから受けた「家名」である。

全盛期には、南方「サンカサロ地方」一帯から、東方「カルッツァ地方」に至るまでを統治し、その統治領土は５大貴族の中で最大。

ストラントーゼ、ロイロマールに水をあけられた感じではあったが、常に「眠れる東方の獅子」として、力を誇った貴族である。

長きに渡り、帝国東方の軍事バランスを保ち、帝国暦晩年、戦火を拡大し始めた帝国軍の先鋒を務めたのもこのブラシアック家だ。

しかし、ストラントーゼと手を組んだことにより、持てる力を発揮することなく、良いように扱われてしまい、眠れる獅子は、眠ったままにして、衰退の一途を辿ることとなる。

―「ナイテラーデ家」―

「ナイテラーデ家」は皇帝血族系の貴族であり、もっとも歴史の浅い貴族である。

「第１２代皇帝ダルカム・ターカン」の娘、「ラキシス・マロワ・ベフォンヌ」皇女が受けた家名であり、つまり彼女は、「第１３代女帝ソヴェール・エマヌエル・プレッソス」の妹となる。

悲しくも病死した姉ソヴェールの後に、ラキシスを第２の女帝にと

いう声が沸き起こったが、彼女は直系承継が原則である皇位継承のしきたりを尊重し、姪であるセファニティール皇女を皇帝とすべく、早々に「ランス」の称号を捨て去った。

その時すでに、彼女には長兄たる「シングロード」がいたが、彼も特に不満を漏らすでもなく、彼女の意思を尊重することになる。

これは、過去に皇位継承権をめぐって、皇室内に数々の陰謀が暗躍したことから、そういった陰謀を抑止する目的で、皇族の身分を捨て去ったのだと言えよう。

家主「ラキシス」が皇帝血族に等身が近かったこともあり、他の貴族達からは、非常に恐れられた貴族では有ったが、彼女は軍備を増強することを非常に嫌い、唯一、自兵を持たない貴族として、細々と存続していくことを選択する。

しかし、セファニティール皇女が「父親殺し」の罪で身柄を拘束されると、長兄である「シングロード」が突然暗殺されてしまう。

そして、皇女の処刑により暴走し始めたストラントーゼに対して、まったく力を備えていなかった彼女にはどうする事も出来ず、挙句の果てに、養子に迎えた次男「ゲイリーゲイツ・トロ・ナイト」も、戦火を求めて、ストラントーゼ軍へとその身を投じる結果となってしまう。

それでも、むやみに軍備を持たなかったがめ、何とか戦火を逃れることが出来た彼女は、帝国滅亡後、周辺地域再建のために全財産を投げ出し、貧しい民衆を支えた。

最後の皇帝ソヴェールの威光に隠れてその実績は暗止んでしまうが、

彼女が統治した「タクラマカン地方」では、最後の皇帝と方を並べて「女神」と称され、彼女の名前は、永遠に語り継がれていくこととなる。

―「ロートアルアン家」―

「ロートアルアン家」は帝国領南西部一帯を統治する貴族であり、統治領土はブラシアック家に次いで2番目の広さとなる。

元々は別国「アルアンゴーニュ」の主だった「ライネート・タルカートス」が受けた称号で、第8代皇帝オリュンポスの時代に、帝国軍侵略に屈した同国は、そのあまりの土地の広大さから、新しい統治者を置く事が出来ず、そのままライネートに貴族称号を与えることで、統治を継続させたのだ。

帝国の支配下となった同国内では、数多くの不満の声が上がったものの、同領内国民の生活の安定のため、ライネートは身を切るような思いで、貴族称号を受けたと言う。

その後、アルアンゴーニュとは犬猿の仲であった「ロゼアル・マリア人」達が、帝国軍に独立戦争を挑んで立ち上がったため、両者共に多くの犠牲者を生む、凄惨な戦いを繰り広げてきたのだが、ロゼアル・マリア人達が、ロスアニア王国として独立してからは、次第に和解の道を辿ることになる。

そして帝国暦晩年には、帝国軍と同盟条約を結んだロスアニア王国との貿易を盛んにこなし、帝国5大貴族に上り詰めるまでに成長を遂げた。

帝国全土で勃発した貴族間紛争当初は、完全に静観の立場を突き通していたのだが、当時の家主「ボードリクール・レブ・ロートアルアン」は、ロスアニア王国の武力介入を機に、一気にアルアンゴーニュ地方一帯を制圧すると、帝国滅亡と共に、アルアンゴーニュ帝国を復活させるのであった。

02－03：○ブリリアントな朝の珈琲［1］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「ブリリアントな朝の珈琲」

大きな青空。白い雲。真っ青に生い茂る草原。

そよ風は優しく、暖かい。柔らかい膝枕。

暖かいしなやかな手に髪を撫でられながら、落ち着いた気持ちが、うとうとと暗闇に落ちて行く。

うっすらと瞼（まぶた）を開くと、燦々（さんさん）と光り輝く太陽が目の前の世界すべてを照り付けているようだ。

眩しい・・・。

自分を覆いつくした真っ白な世界に、意識のすべてがかき消され、まるで天の国で昼寝をしているような心地良さえ感じる。

ゆっくりと眼を細め、辺りを見渡すと、うっすらと黒い十字架のペンダントが、ゆらゆらと揺れているのが解った。

ペンダント？ああ、お母様の物だ。

優しい匂い・・・。懐かしいな・・・。

スッと眼を閉じ、再び暖かなそよ風に浸りながら、心に染み出す安堵感に包まれる。

暖かい・・・。

時間が止まったかのような、緩やかな時の流れの中。

完全に自分だけの世界感を望みながら、彼女が深い眠りの淵へと誘われた時だった。

ゴーン。ゴーン。ゴーン。ゴーン。

どこからともなく響き渡る低い鐘の音。

あれ?あんな時計台あったな?

いつのまにか傾きはじめた太陽の光は弱り、それまで神秘的だった白い造形物が、次第に大きな影を形成していく。

まだ眠い眼をこすりながらも目を凝らすと、広く延々と続く草原の中にひっそりと聳(そび)え立つ白石の時計台が見えた。

その最上部中央にある円形の時計は、何故か少し歪んでいるようにも思えたが、確実に時を刻んでいる様子が見て取れる。

あれ・・・?お母様は?

不思議と流れくる冷たい空気の渦へと包み込まれると、それまで自分の直ぐ傍にあった筈の、優しい人の気配を見失ってしまった。

ゴーン。ゴーン。ゴーン。

時は突然に加速する。

忙(せわ)しなく震える分針が、ものすごい速度で左回りに動き出し、再び歪んだ鐘の音を打ち鳴らした。

お母様!?

必死になって叫んでは見るものの、ヒタヒタと草原が終わる地平線の向こうから、真っ黒な暗闇が迫ってくる。

怖い・・・。誰か・・・。誰か助けて!

何時しかその時計台の周囲に屯(たむろ)す人だかり。

行き交う人すべてが真っ黒で、まったくピクリとも動くことが出来ないようだった。

隣の人と会話をするもの。冷ややかな冷笑を浮かべるもの。周囲を怒鳴り散らすもの。そして、悲しみに泣き崩れるもの。

中には手を差し伸べるものもいるようだったが、必死の思いですがったその手は、虚しくも自分の手をすり抜ける様に消え去ってしまった。

そしてまた、嘲笑うかのように鐘の音が打ち鳴らされると、唐突に黒い人影までもが、ガラスのように朽ち果てていく。

ゴーン。ゴーン。

たった一人。暗がりに映し出される、小さな世界に佇(たたず)んだまま、た

だ絶望感に苛まれた心だけが痛む。

消えていく・・・。

萎み行く小さな世界すら、打ち寄せる暗闇の波に飲まれ始めると、次第にその足へと取り付いた闇の魔の手が、体を徐々に侵食していく。

心までもが冷たい・・・。とても冷たいのに・・・。焼き裂かれるように熱い・・・。

ゴーン。

そして、もはや何も見えなく、何も感じない闇へと突き落とす、最後の鐘の音が鳴り響いた。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

熱い・・・。熱い・・・。ゾクゾクと寒気を訴える背中から、首元にかけてを電流を流し込まれたかのように弾む体が激しい吐息を奏でる。

全身汗びっしょりで、疲れきったような脱力感がとても気持ち悪い。

夢・・・？か・・・。

（アリミア）

「大丈夫？セニフ。また魘（うな）されていたみたいね。」

アリミアが心配そうな表情でセニフに語りかける。

そして、ゆっくりとベットの側まで歩み寄ると、右手に持った珈琲カップをセニフに差し出した。

寝ぼけていた眼をこすり、周囲を見渡すセニフ。

あ・・・。と、何故か頬を撫でるように流れ出す涙に気がついた。

ポタポタと毛布の上に涙の雫が滴り落ちると、部屋の窓から差し込む日差しに反射して、きらきらと光り輝いていた。

（セニフ）

「ん・・・。大丈夫・・・。うん。大丈夫だよ。」

セニフは軽く深呼吸をすると、毛布からのそのそと抜け出し、少し固めのベットに座ったまま、アリミアから珈琲カップを受け取る。

そして、沸き立つ湯気の気配を気にしつつも、ちびりと少しだけ口をつけた。

彼女達はいま、ニュートラルエリアの繁華街から、少し離れた簡易ホテルに宿泊していた。

ホテルといっても一軒家の狭い簡易住宅街であり、部屋に陳列されている家具たちも、どうやら安物のようだ。

昨晩宿を取ることも忘れ、女性達3人で夜遅くまで飲み明かしたため、きちんとしたホテルを取ることも出来ず、過去に兵士達の寮として使用されていた、粗悪な部屋を借りる羽目になってしまったのだ。

（セニフ）
「あれ？ジャネットは？」

（アリミア）
「忘れたの？今日は夕方からでしょ。ラプセルのシステム立ち上げのためにガレージに行ったわ。貴方もパングラードの立ち上げあるんでしょ。早く着替えなさい。」

セニフは「ふぅん」というような顔をした後、ベットの脇にあるサイドボックスに珈琲を置くと、再びベットの上に大の字で寝転がった。

殺伐とした天井には何もない。

単に汚らしい染みがだけが、無意味な抽象画を映し出し、セニフはその染みに何かを擬(なぞら)えて、ふと、何かを考え込んでいるようだった。

サイドボックスに置き放たれた珈琲からは、白い湯煙がふわふわと立ち上るだけで、少し温度が熱かったせいもあるのか、セニフは珈琲に手をつける様子はなかった。

（セニフ）
「なぁに？なんか私の顔に付いてんの？」

アリミアは返事もせず、寝室のキッチンとの敷居の上に突っ立ったまま、何かを観察するようにセニフをじっと見つめる。

そして、開けっ放しだった玄関の扉の方を、チラリと気にする素振りを見せた後、セニフの側まで歩み寄り、すっとベットに腰を降ろ

した。

（アリミア）
「この頃多いんじゃない？吐いてしまいなさいよ。」

セニフが放り出した可愛そうな珈琲カップを手に取りながら、器に注がれた黒い珈琲を飲むでもなく、捨てるでもなく、ただじっとそれを見つめながら、アリミアはなんとなく、遠まわしな意図を、短い言葉を込めて発した。

（セニフ）
「吐くほど飲んでいないよ。」

と、アリミアの問いかけに対して、ありきたりな返事をして見せたセニフだが、実は彼女には、問いかけの意図が解っていた。

アリミアは普段から言動が厳しく、冷たい感じもすることはあるが、本当は優しく、常に周囲の人達に気を配る人物だ。

アリミアがセニフに対して聞きたい事とは、勿論、毎晩のように魘（うな）されるセニフを気遣っての事である。

しかし、セニフはすばやくベットから起きあがると、パンツ一丁の格好のまま鏡の前まで進み、平静さを装うように、ボサボサの寝癖をブラッシングし始める。

（アリミア）
「そうじゃなくて、自分を吐くの。」

視線を珈琲からセニフに変え、真面目な目線でセニフに問いかける

アリミア。

セニフが予想した通りのアリミアの言葉だったが、鏡越しにアリミアの表情を伺いながらも、ブラッシングの手を止める事はしなかった。

（アリミア）

「たまにはお酒じゃなくて、自分に酔ってみるのも大切よ。貴方の心の内に何があるのか解らないけど、一人で抱え込んだって、苦しいだけよ。人はいくつもの自分というカテゴリを持っているの。そして、それを他人に示し、自分って言う一人の人間にまとめてもらう。他人の瞳を通して自分を作るのよ。閉じた自分という狭い壁の中に閉じこもったままだと、本当の自分だって見えやしないわ。」

アリミアはゆっくりと優しく、セニフを諭す様に話し始めた。

決してアリミアが直接セニフの「真」に触れることはないのだが、それでも彼女には、今のセニフの状態を放って置くことが出来なかったのである。

セニフが眠っている間、苦しそうに魘されるようになったのは、何もつい最近の話ではないのだ。

（アリミア）

「セニフ。貴方の・・・。」

（セニフ）

「私はそんなに弱くないよ。アリミアにとって、私はそんなに頼りなくて、弱い人間に見えるの？」

セニフはブラッシングの手をピタリと止めると、アリミアの言葉をかき消すように強い口調を重ね、じっと鏡ごしにアリミアの表情を睨み付けるように凝視した。

普段から気性が激しく、喜び、悲しみ、怒り、色々な感情を表現するセニフだが、ここまで不快感を露(あらわ)にすることは滅多にない。

しかし、時折アリミアがこの話題に触れようとするや否や、決まってセニフは激しく口調を荒げるのだった。

だからこそ、セニフには、自分からは絶対に吐き出せない、深い闇に包まれた「何か」があるのだと、アリミアは気づいていたのだが、彼女も強くその思いを表現することが出来ないでいた。

（セニフ）
「覚えている？私達のたった一つだけの約束。」

戦乱の時代は当の昔に終わりを告げ、ようやく訪れた平和に世間が色めきだっている中にありながらも、戦争によって国を失い、両親を失った若者達が、そう簡単に普通の生活に戻れるはずもない。

（アリミア）
「勿論、覚えているわ・・・。私達見たいに、難民のように諸外国から流れ着いた食み出し者に、寛容であれ残酷な現代社会は、キャパシティを広げようともしないし、そして、帰る場所もない。そんな私達が居場所を作るのは簡単なことじゃないわ。」

アリミアの手には、未だに珈琲カップが握られている。

熱く熱く煮えたぎりながらも、目的を果たすために処理されること

無く、単に作られた珈琲カップという檻の中に閉じ込められているだけ。

水の底へと沈み追いやった黒い思いを押し殺して、ただ怒りに満ちた湯気を上らせながら。

私と同じか・・・。

アリミアは、大きく溜め息をつくと、まだ熱いであろうその珈琲を一気に飲み干し、セニフの問いに対しての返答を返した。

（アリミア）

「過去、人種、身分、性別を一切問わず、且つ、一方的な干渉、詮索を禁ず。」

（セニフ）

「それを解ってて、尋問しているんだ。」

半場、呆れたような口調で言葉を投げつけたセニフではあるが、小さく息を吐き出して俯(うつむ)いた彼女には、アリミアの思いは伝わっていた。

そして、その思いに答えることが出来ない自分に腹が立ち、強い口調で相手を威嚇することで、自分の思いを押さえ込んでいるだけだということも、彼女は解っていた。

（アリミア）

「ごめんなさいセニフ。そんなつもりはなかったんだけど・・・。」

アリミアが、素直にセニフに謝った。

（セニフ）
「ううん・・・。ごめんアリミア・・・。」

そして、セニフもまた、アリミアに謝る。

セニフには、これしか返す言葉が見つからなかったのだ。

自分を苦しめる黒い思い。

それを解き放つことが出来たのなら、どんなに気持ちが楽なのだろうか。

しかし、それは決して、自分という檻の中から放つことの許されない思いであり、すべてを押し殺して、すべてを覆い隠して生きていくのだと、彼女はすでに心に誓っていたのだ。

（アリミア）
「時期が悪かっただけなのかしら?何か話しをしたくなったら、いつでも聞き手になってあげるわ。大したことはしてあげられないけどね。」

（セニフ）
「うん・・・。ありがと。でも、お酒抜きじゃなきゃ、やだよ。」

この言葉に、昨晩、酒に酔って作戦を台無しにしてしまった、アリミアは苦笑するしかなかった。

０２－０４：〇ブリリアントな朝の珈琲［２］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「ブリリアントな朝の珈琲」

ＤＱＡ大会開催地の中では、大きさ的にも小さな部類に入るニュートラルエリア「アルファ」。

とはいえ、もっとも戦場から近いと言う理由からか、ブラックポイントの中では最大の利用者数を誇っている。

エリアのほとんどがホテル、工場、飲み屋街で構成されており、ＤＱＡ開催時は昼夜を問わず人々がごった返す賑やかな街となる。

近くにはトゥアム陸軍駐屯指定地があり、軍の整備士達も訓練のため、積極的にＤＱＡ大会参加チームの機体整備を手助けするのだ。

勿論、タダでは無いのだが、それでもＤＱ整備力に乏しいチームなどは、挙（こぞ）って彼らの助けを求めて、アルファに集結してくる傾向にあった。

（ジャネット）
「まったく、もう少し工場から近いホテル取ってよね、マリオ。工場来るのに、こんな時間かかるとは思わなかったわ。」

（マリオ）
「何いってんの。昨日お姉ちゃん達が宿も取らずに飲みに行くからだよ。あのラプセルの状態で僕達にそんな暇あると思う？」

（ジャネット）
「そりゃぁそうだけど・・・。ごめんなさい。」

彼女が工場に足を運んだ時間は午前１０時。

通常、朝一から戦場に出向くチームがほとんどのため、この時間帯工場はガラ隙の状態だ。

大型トレーラーが進入可能な大きなゲートをくぐると、五階建てのビルがすっぽり入ってしまうぐらいの空間が、工場内に確保されている。

今回の出場規定の中に「参加ＤＱは特殊大型機種を除く」という規約があるため、このゲートが全開になる事はないのだが、それでも大型トレーラーでさえ、簡単に潜り抜けることが可能な程だ。

その大きな工場作業場の左手から2番目の列に、チームＴｏｍｂｏｙのＤＱ3機が立ち並んでいた。

（マリオ）
「どう?昨日徹夜で仕上げたラプセルだよ。表面はエアカッターで焦げを落として粗めにブラシかけただけだけど、内装は十分だから心配しないで。」

ジャネットが見上げる先には、昨日見る影も無かった真っ黒いガラクタが、暗がりに差し込む光に照らし出されて、綺麗な山吹色を放っている。

激しい衝突で損傷した機体装甲も、完全に修復されており、美しい機体曲線を取り戻した中型機「ラプセル」の姿がそこにはあった。

昨日の状況から、まさかここまで復活を遂げるとは思っても見なかったジャネットは、あまりの仕上がりに、しばらくラプセルに目が釘付けとなってしまう。

（マリオ）
「すごいでしょ。お姉ちゃんは外装も気にするからね。ちゃんと塗れてるでしょ。でも、ワックスがけはあきらめてね。」

昨夜から徹夜で作業し続けたマリオの目元にはうっすらと影ができている。

私達が飲みに行っている間、マリオ達バックアップはこんなにがんばっていたんだ。

なのに私ったら宿の質の事なんかで、うだうだ言ったりして・・・。

何か少し後ろめたさを感じたジャネットは、ゆっくりとマリオの前にしゃがみこむと、にっこりと微笑んだまま、そっとマリオにキスをした。

（マリオ）
「ちょっ！ちょっとお姉ちゃん。」

いきなりのジャネットの行動に驚いたマリオは、顔を真っ赤にしながら彼女の唇を振りほどく。

（ジャネット）
「あら、いいじゃない。私、マリオのこと好きよ。マリオは私の事嫌い？」

（マリオ）
「き・・・嫌いじゃないけど。僕もう１３歳だよ。もう子供扱いはやめてよ。」

そう言うとマリオはその可愛い真っ赤な顔をジャネットに見られるのがいやなのか、後ろを向いたまま黙ってしまった。

ジャネットはそんなマリオがなんだかいとおしく感じてしまう。

あの甘えん坊だったマリオ。だんだん男の子ってたくましくなるんだね。

身長も結構伸びたのかしら。あんなに泣き虫だったのに。

そして、スッと立ち上がった彼女の表情に、少し暗い影が落ちると、しばし視線を落として俯(うつむ)いてしまう。

あれだけ・・・。あんなに・・・。ごめん・・・。

ごめんなさい。マリオ・・・。

（ジャネット）
「ごめんねマリオ。」

（マリオ）
「え？」

マリオがジャネットの方へと振り向くと同時に、突然マリオに抱きつくジャネット。

緑系の髪の色。強めの癖毛。そして垂れ目なところは、流石に兄弟を思わせる風貌だが、年齢差は１０歳。身長差も３０ｃｍはあるだろうか。

人目も憚（はばか）らず、マリオのことを溺愛する彼女の姿は、兄弟というよりは、ほとんど優しい母親のような感じがする。

辛いことも、楽しいことも、いつも一緒に過ごしてきた二人。

そして、これからもきっと、二人で一緒に力を合わせて生きていくのだろう。

ジャネットは、込み上げる嬉しさと共に、彼の黄緑色の癖毛を撫でながら、思いっきり強く彼を抱きしめた。

ジャネットのふくよかな胸へと顔を埋められたマリオは、苦しいのか恥ずかしいのか必死でもがいていたのだが、ジャネットは決して彼を逃がさない。

（ジャネット）
「だめ。離さないんだから。」

（マリオ）
「お姉ちゃんっ・・・！誰か来る・・・って・・・。」

繁忙期が過ぎ去り、人が疎らな工場であるからできる行為であって、他の人が目撃したのなら、たちまち赤面してしまうぐらいの行為だろうか。

必死にジャネットの両手を振りほどこうとするマリオとしては、ここまで愛してくれる姉の思いに、嬉しさを感じるというより、恥ずかしい気持ちのほうが先行してしまうのは当然だろう。

（サフォーク）
「おい。恥ずかしいからもう終りにしな。こっちが赤面する。」

そんな二人の恥ずかしい行為を目の当たりにしたサフォークが、二人の元へと歩み寄ると、素直な気持ちを投げかけた。

バックアップメンバーたる彼もまた、昨晩徹夜作業を強いられた一人であり、かなり疲れていたのか、いつもの変な元気が失われているようだった。

目元に深い堀があり、目の下が黒ずんで見えるのはいつものことだが、洗われることなく乱れた黒いロン毛と油まみれの顔からは、「もう、眠らせてくれ」という、暗な気持ちがにじみ出ていた。

（ジャネット）
「あら、サフォーク。お疲れさま。ラプセル大分綺麗になったね。ありがとう。でも、大丈夫？なんだか死にそうな顔してるけど・・・。」

（サフォーク）
「まあ俺の腕にかかればこんなもんさ。大丈夫。どんなに疲れていようが、君がご褒美をくれたら、一気に吹き飛んでしまうぜ。」

と言って、徐にジャネットの近くに歩み寄った彼は、突然、右手でジャネットの胸を鷲掴(わしづか)みにした。

・・・。

一瞬にして凍りついた周囲の空気に、大きな「張り手」の音が鳴り響く。

馬鹿はやはり、どういう状態でも馬鹿なのだろう。

それまで優しかったジャネットの表情が、引きつったように強張ると同時に、彼女は思いっきりサフォークの顔面をぶっ叩いた。

火を見るより明らかな結果を生むとは、まさにこのことを言うのだろう。

（マリオ）

「大丈夫？サフォーク。お姉ちゃん、力結構あるでしょ。」

怒りのあまり、ソッポ向いてしまったジャネットを横目に、吹き飛ばされてしまったサフォークを、マリオが気遣う。

しかし、紅葉型にくっきりとした赤い張り手跡を頬に残したまま、サフォークがマリオに呟くのである。

（サフォーク）

「マリオ。男にはな。やるべき時にやる勇気と、根性が必要なんだよ。たとえそれが相手の怒りを生んだとしても、結果良ければすべて良し。解るだろ？マリオ。」

この男にとって、顔に跡が残るほどぶっ叩かれた結果が、いい結果と言うことなのだろうか。

意味不明な言葉を投げかけられたマリオは、ただただ首を傾げることしかできないのであった。

０２－０５：〇何も見えない丘の上にて

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「何も見えない丘の上にて」

大型自家用飛行機が離着陸可能な大きな空港、完全に舗装しなおされたハイウエイ、高級なホテル群。

廃都市ブラックポイントには不似合いなほど整備された土地。

第３ニュートラルエリア「サムトーテル」は、高級官僚、将軍、他大陸外交官を招待するために作られた都市である。

無論、一般来場者は決して立ち入ることのできないエリアとなっており、そのメイン通りは人気がなく寂しい限りだ。

しかし、ＤＱＡ大会を見学する場所としては絶好の高台に位置しており、森林、市街戦をのぞけば、すべの戦場が見渡せるため、数多くの著名人たちが訪れる場所となっている。

数あるビル群の中でも絶景を誇るのが、ホテル「シュチュアート・メアリー」。

絶景もさることながら、当ホテルでは室内の設備、サービスを重視し、且つＤＱＡ観戦も思いのままという贅沢さ。

（ラックス）
「これが昨日実戦で使用されたデータです。サフォークから回ってきました。」

（ティーラー）
「ご苦労。確かに受け取った。後残り2日間はこちらのデータでお願いする。君のチームは午後からだろう。間に合うのかね。」

（ラックス）
「そりゃ大丈夫ですよ。出撃はできるだけ遅らせるよう伝達しときましたから。」

ホテルシュチュアート・メアリーの最上階の一室にその男2人はいた。

黒いサングラスをかけ、頭はオールバックで、身なりからして決して高級な人物とは思えない方がチームＴｏｍｂｏｙのオーナー「ラックス・ムーズ」である。

そして、藍色の高級スーツに身を包み、お供を従えた偉そうな人物。

これが「ティーラー・テル」である。

彼は今回のＤＱＡ参加機種のほぼ半数を製造しているという、大企業「マムナレス社」のエリートで、今回のブラックポイント大会の会社総責任者となっている。

背丈が低く、少し頭が大きいこの若造は、釣眼で陰険な感じがあり、どうも胡散臭い匂いがする。

トゥアム共和国の中でも1、2を争う大企業のマムナレス社がＤＱ産業に身を乗り出したのが２０年前。

それまではただの自動車製造工場でしかなかったマムナレス社が、ここまで経営力をつけてきた背景には、トゥアム陸軍内部との、何らかの密約が内々で交わされているのではないかという噂がある。

今現在のトゥアム共和国陸軍所属ＤＱに限って言えば、トゥアム共和国陸軍開発研究員とマムナレス社のＤＱ技術研究員との共同開発で発案、製造された物がほとんどであり、この成り上がり者たるマムナレス社の成功を、芳(かんば)しく思う人達は非常に少ない。

そのため、そういった噂だけが暴走しているだけなのかもしれないが、かといってその噂を否定できる要素もない。

（ティーラー）
「ふん。約束の物だ。」

そう言うとティーラーは内ポケットからカードを取りだし、ラックスのカードリーダーにスロットインさせる。

そして、ピーと言う音と共に、送金確認のメッセージがディスプレイに表示された。

（ラックス）
「あ、こりゃぁどうも。」

その金額は、にやつきを抑えられないラックスの表情から推測するに、かなりの額に及ぶと思われる。

経営不振にあえぐ小会社でありながら、３機ものＤＱを保持し、ましてやなんの目的もなくＤＱＡに参加出来る訳。

中流企業以上、または上流階級個人ぐらいしか手にできないという、DQチームオーナーの肩書きが、今彼の手の中にあるという事実は、こう言った理由からかも知れない。

（ティーラー）
「それから例の件だが、実験用のパイロットとしてあの3人を使用したいと博士の方から話があった。」

（ラックス）
「え？本当ですか？」

ティーラーはそう言うと席を立ち、ボディガードであろう、ごついお供にスーツの上着を着せてもらう。

彼等が出会ってから現在まで15分程。用が済めばすぐに次の仕事がまっている忙しい身だ。

そう言わんばかりのティーラーの行動だった。

ラックスはというと、突如として投げかけられた「触れられたくない問題」に、傍目から見ても一目瞭然の「動揺」を見せた。

しかし、ティーラーは彼の動揺を完全に無視し、冷ややかな目つきで話を続ける。

（ティーラー）
「まだ未定だがな。しかし、たとえ機械と言えどデータにより、個人のクセが大きく左右する時代だ。私もこの意見に賛成派だ。彼女等の経歴についても問題は無いのだろうな。」

（ラックス）
「それはまぁ・・・。しかし本人達が・・・。」

（ティーラー）
「忘れるな。契約書はもう交わしている。契約期間内の責任と権限は、すべて君が握っているのだ。そしてこのプロジェクトに関して君に発言権、決定権はない。解るかね？」

そう言われるとラックスには返す言葉がない。

彼が今の生活を続けられるのは、ティーラーの遂行するとあるプロジェクトの一員として自分も参加しているからだ。

ティーラーは俯いたラックスの肩をポンと叩き、通用口へと足を向けた。

（ティーラー）
「それじゃ、失礼するよオーナー。」

ラックスは俯いたまま返事を返さない。

大海に逆らうことなく、ただ漂うだけの自分が嫌な訳ではないが、それでもこういうときは決まって、無念さの思いに打ちのめされる。

自分の無力さと、さらにそういった自分に腹が立たない自分が腹立たしい。

（ラックス）
「単なる御飾りか。」

流されつづけ、私は一体何処まで流されるのだろう。

死ぬまで流されつづけるのだろうか。

それでもいいかもしれない。

急流に巻きこまれて、誰も知らない深遠に向かうよりは・・・。

０２－０６：〇大海を知らぬ猿達［１］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「大海を知らぬ猿達」

ブラックポイントのニュートラルエリア「アルファ」の主繁華街から少しばかり離れたところにある住宅街。

ＤＱ整備工場とは真反対に位置するこの集落は、かつてトゥアム共和国陸軍の、兵士達の宿舎として使用されていた建物だったのだが、別の地区に新しい兵士宿舎が完成したため、今ではまったく誰も使用する事のない廃墟と化していた。

そんな無人の町並みの中を、おんぼろの軽トラックで乗り付けてきた金髪の少年が一人。

油まみれのボロボロの作業着に、スニーカーというラフな格好で現れた少年は、軽トラックの運転席から身を乗り出すと、あまりに静かな集落の雰囲気に、しばし周囲の風景を確かめるように見渡していた。

荒れた細い通りの左右に２０軒ほど並んで立てられた小さな宿舎は、見るからに古い仮住まい的な面持ちで、周囲にはグリーンクラッド作戦でばら撒かれた人工樹木が、多く群生する以外には何も無い。

（シルジーク）
「あそこか？」

ふと、あたりをきょろきょろと見渡していたシルが、一番突き当た

りの建物の扉が、開け放たれているのに気がつくと、軽トラックの運転席のドアを勢い良く閉めて歩き出した。

シルがこの住宅街を訪れた目的とは他でもない。

チームＴｏｍｂｏｙのパイロット二人が、なかなか集合場所であるＤＱ整備工場に姿を現さないため、痺れを切らして彼女達を迎えに来たのだ。

いくらオーナーからの指示で、出撃予定時間が夕方に変更となったからとは言え、ＤＱ制御システムの調整作業には、パイロットとなる彼女達がいなければ始まらない。

アリミアのように、ＤＱシステム調整値に幅が利くタイプなら問題ないのだが、時としてセニフは、性格とは異なる非常に細かい設定値を要求するため、パングラードのシステム立ち上げまでには、非常に時間がかかってしまうのだ。

やがて、昨晩、彼女達が泊まった建物の入り口までたどり着いたシルは、表に取り付けられた呼び出しブザーを押すでもなく、ドアに手をかけたまま部屋の中を覗き込む。

すると、直ぐ右手にキッチンがあり、左手には小さなテーブルと、その脇にソファーが２つ並べられている。

そして、シルに相対するように座っていたアリミアは、静かに珈琲を飲みながら、なにやら分厚い本に見入っている様子だった。

（シルジーク）

「のん気に座って読書かよ。セニフは？」

（アリミア）
「あら、迎えに来てくれたのね。セニフなら今、お風呂の最中よ。急いでるからって、乗り込んじゃだめよ。」

少し呆れたような表情で周囲を見渡したシルに、アリミアが素っ気無く答える。

キッチンの奥にある通路には、小さなシャワールームが備え付けられており、確かにそこから水の流れる音が静かに聞こえてくるのが解る。

そして何やら、楽しそうな彼女の鼻歌まで聞こえてくるではないか。

本来であれば怒鳴りつけてやりたいぐらいの気持ちもあったのだが、この状況では、男であるシルにはどうすることも出来ない。

シルは、口を尖らせるように表情を顰めると、アリミアの向かい側のソファーにどっかりと腰を下ろして、大きな溜め息をついた。

（シルジーク）
「ったくもう・・・。いつもいつも時間にルーズな奴だ。夕方までに調整作業終わらなくたって、俺はしらねぇぞ。」

（アリミア）
「シルなら出来るでしょ。頼りにしてるんだから皆。あの子ね。また魘されてたのよ。だからちょっとだけ。気分転換にってね。少し待ってあげて。」

優しく語り掛けるアリミアのその言葉に、疲れた目元を両手で揉み

解していたシルの手が止まる。

そして、一瞬、チラリとお風呂場の方へと視線を向けた後、シルは大きく体を大の字にしてソファーへと寄りかかると、天井を仰ぎ見ながら完全にリラックスモードへと入った。

そんな、シルの姿を見て、にっこりと微笑んだアリミアは、再び分厚い本に視線を落とすのだが、口先だけで本音は優しいシルの態度に、少し意地悪な言葉を投げかける。

（アリミア）
「あの子が臭いままだと、貴方も困るでしょ？」

え？？

不思議そうな表情で起き上がったシルが、アリミアに突っかかる。

（シルジーク）
「何で俺が困るんだよ。」

（アリミア）
「あら、惚けちゃって。セニフも幼稚だけど、貴方の態度も大人気ないわよ。もう少し、いい男になったら？」

素っ気無い態度で淡々と言い放つアリミアの言葉が無性に腹立たしいが、シルはシルで彼女の言葉に強く反発することが出来ない。

彼にも何か、思い当たる節でもあるのだろうか。

肘を突いた手の上に顎を乗せ、不貞腐れたように、彼は無言で会話

を遮断した。

いい男になれって言ったって。

そんな男。どんな男だよまったく・・・。

などと、シルがアリミアに言われるがまま、素直に思考を巡らせている時、キッチンの奥の方から扉を開ける音が聞こえてきた。

どうやらお風呂の時間は終わったらしい。

（セニフ）

「あ！シルだ。迎えに来たてくれたんだね。」

大きめのTシャツに、インナースパッツという、なんともラフな格好のまま、キッチン脇の通路から姿を現したセニフは、ソファーの上に座っているシルを見つけるなり彼を指を差した。

そして、狭い部屋の中を少し急ぎ足で彼の元へと歩み寄った彼女は、突然、ぐったりとするシルの身体の上へと飛び掛った。

（シルジーク）

「ぬおぉっ！！てめっ・・・。濡れた身体のまま抱きつくな馬鹿！！重いっ！！重い！！」

（セニフ）

「重いって言うな馬鹿ぁ！これでも私は小柄だし、軽いんだぞ！」

そんなことは見りゃわかる。

シルもさほど体格がいい方ではないのだが、彼に纏わりつくセニフの体格は明らかに小柄で、彼よりも一回りも二回りも小さい。

しかし、無邪気にじゃれ合うセニフの小さな身体を、必死の形相で振りほどこうとするシルだが、どうしても疲れ果てた身体が、彼女の元気さに押し負けてしまう。

そしてアリミアは、そら見たことかと言わんばかりの表情で、下を向いたまま上目線をシルに突き刺してやった。

（シルジーク）
「どけって！俺は汚いままなんだぞ。また汚れてしまうだろうが。」

（セニフ）
「いいよ。私そんなの気にしないからさ。愛し合う仲なら、汚くたって気にならないでしょ？」

（シルジーク）
「誰と誰が愛し合う仲だって！？」

そうシルに完全否定されたにもかかわらず、まったくお構いなしのセニフは、言われた分だけ倍に仕返しするかのように、今度はシルの首元に両手を巻きつけ、思いっきり彼を抱きしめた。

こいつ・・・。本当に言うことを聞かない奴だな・・・。

本当に一度、ぶん殴ったろか・・・。

決して彼がそれを実行する事はないのだが、それでもそんな彼女の振る舞いに沸々と心の中に沸き起こる感情は一つ。

（シルジーク）
「セニフ！！お前、いい加減にしろよ！！降りろ馬鹿！！離れろ！！」

まったくやりたい放題の我儘娘に対し、シルが怒気を交えてセニフを睨み付ける。

すると、突然、彼女は驚いたような表情でピタリと動きを止め、一瞬の静寂の後、スゴスゴとシルの上から身体を退け始めた。

まさに、駄々を捏ねる子供に対して、うまく叱る事の出来ない親が、逆切れして子供を怒鳴りつけるような感じである。

アリミアが先ほど言った言葉の通り、まったく持って、大人気ないといえば大人気ない。

こうした二人のやり取りは日常茶飯事であり、相手に面と向かって、簡単に好きだと告白してしまうセニフの姿も、もはや珍しいものではない。

１６歳ともなれば、少しは大人びて、異性に対する気恥ずかしさのような感情が、沸き起こっても良いようなものなのだが、そんな羞恥心に事欠いた彼女の性格は、どこかジャネットがマリオにしてみせる振る舞いに、影響されてしまっているのだろうか。

更にセニフは、ゆっくりとシルの目の前にしゃがみこむと、未だ怒気の残るシルの表情を見上げながら、消え入りそうな声色で呟いた。

（セニフ）

「ねぇ。シル・・・。本当に・・・。私じゃだめなの・・・？」

（シルジーク）
「う・・・。」

恐ろしい程に態度を豹変させて、しおらしい表情を見せたセニフの姿に、一瞬の大きな高鳴りがシルの胸を襲った。

そして、まだ乾き切っていない、しっとりとした細い赤毛から漂うふんわりとした優しいシャンプーの匂いに乗せて、意に反する大きな鼓動が、どくどくと心の中に響き渡っていく。

普段であれば、なんて事はないセニフを目の前にして、どうして男は一瞬女の見せるこういった仕草にドギマギしてしまうのだろうか。

シルはやがて、じっと見つめるセニフの視線に耐えられなくなり、黙ったまま彼女から視線を逸らしてしまった。

（セニフ）
「あっっっはははは！今のシルの表情、かっわいい～。」

（シルジーク）
「お前な・・・。」

少しも悪びれる様子も無く、大声で笑い転げるセニフに、シルはまったく何も言い返すことの出来ないまま、無駄な威嚇をしてみせる。

しかし、良い様に彼女をあしらうつもりだった彼が、良い様に彼女に弄ばれてしまったのでは、もはや威厳も何も有りはしない。

ただただ、面白くなさそうな表情で、セニフの笑いに耐えることしか出来ないシルを見つめて、アリミアもまたクスクスと沸き起こる笑いを抑えきれない様子だったが、仕方なしと彼に助け舟を差し出した。

（アリミア）
「ふふふ・・・。ほらほら。セニフ。シルをからかうのも、その辺にしておきなさい。本当に時間に間に合わなくなるわ。恥ずかしがり屋のシルに、そんなに人前で迫っちゃだめでしょ。今度二人きりの時にしなさい。」

（シルジーク）
「な！恥ずかしがり屋って何だよ！」

（アリミア）
「本当のことじゃない。」

（セニフ）
「あ～。シルったら、普段から強気を装ってるのって、そういうことかぁ～。」

（シルジーク）
「ちが・・・！お前・・・。いいから早いところ上着を着ろ！」

（セニフ）
「誤魔化（ごまか）した～。誤魔化（ごまか）した～。なんだよぉ。好きなら好きって、はっきり言えばいいじゃん。」

（シルジーク）
「てめぇ・・・。本当に言うこと聞かないと、そのままの格好で工

場まで連行してやるぞ！」

（アリミア）
「・・・・。」

（セニフ）
「いいもん。別に。このままの格好で連れてかれたって、私気にしないし。私まだ下着着てないよ。そんな私に近くをうろうろされたら、逆にシル達の方が恥ずかしいんじゃない？」

（シルジーク）
「・・・。お前さぁ・・・。ほんと・・・。変にへそ曲げるの止めてくれないか。頼むから着替えてくれ。頼む。」

（アリミア）
「・・・。」

どうやら、彼女は助け舟の出し方を間違ったようだ。

狙う意図とは裏腹に、この後もしばらくの間稚拙な口論を繰り返していた二人の姿を、じっと眺めたまま、アリミアは溜め息をつくことしか出来なかったのだが、それでも彼女は、この和気藹々（わきあいあい）とした、楽しいチームの雰囲気が大好きだった。

そして、いつまでもずっと、彼らと楽しい毎日を送りたい。

そう願っていた。

おそらくはチームメンバー全員が、アリミアと同じような思いを抱いていたに違いない。

しかしそれは、儚くも最後の楽しい一時だったのかもしれない。

02－07：○大海を知らぬ猿達［2］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「大海を知らぬ猿達」

「こちらラウル。建物の中はどうだ？」

「一番手前側の建物に3人。その他周囲に人影なし。」

「リンダ。ダミーＶＴＲの準備は良いか。」

「大丈夫よ。サインが出たら切り替えるわ。」

「よし、他の者に発見されないように包囲しろ。」

真昼間でありながら、人気のない寂しい住宅街の周囲には、雨季の季節に元気良く枝葉を伸ばし始めた新緑の森が広がっている。

人工樹木たる植物達の成長速度はまさに爆発的で、荒れ果てた不毛な大地上にあっても、通常の2倍から１０倍の大きさに成長するものまである。

しかし、一世代限りで交配しないよう品種改良されたその植物は、それ自体が変異することはあっても、爆発的な繁殖を見せることもなく、ただ、限られた範囲の森の中を、いっそう色濃くしているに過ぎない。

ここブラックポイント周域に広がる森の多くは、磁石の利かない迷いの森として有名だ。

それは、この地域が砂鉄分を多く含んだ土壌であることが関係しており、そこに根付く植物達自体が、多く鉄分を含んだ水分を元に、成長しているからなのだと言われている。

「リンダ。ＶＴＲスタート。」

「了解。」

「レドルーは後ろ、ローザンは右周り。ラウルは左周りだ。」

そんな危険な樹海のほとりに屯す数人の集団。

全身緑色に迷彩された戦闘服に、真っ黒なベレー帽が不似合いな男女が、何やら無線でやり取りしている。

ここニュートラルエリア「アルファ」は、トゥアム陸軍駐屯地区ほとりにあり、このような密林戦を想定した軍事訓練もしばしば行われている。

そのため、軍関係者がニュートラルエリアへ立ち入ることはけっして珍しくないが、勿論、彼等のように完全武装しての入場は禁止されており、訓練をするにしても、一般市民が往来するような地域で行われることはまず無い。

手に持つ強力なマシンガンの弾丸装填状況を確認し、今にも戦闘を開始しようかという緊張感をかもし出す彼らが、一体、何の目的でこの地域に潜んでいるのか不明である。

ただ、明らかに言えることは、彼等の目標はすぐ近くにという事だ

けだ。

「各員配置についたか？」

「待て。誰か出てきた。全員待機。」

彼等を統率する一人の黒人男性が、じっと観察していた建物から、一人の女性が姿を現したのに気がつくと、即座に通信機を通してメンバー全員の行動を抑止する。

そして、小さな望遠鏡を大きく見開いた右目で覗き込みつつ、その女性の動きを注意深く観察していた。

味気の無い半袖に、Ｇパンとスニーカーを履いたその女性は、長く伸びた紅い髪の毛を風になびかせながら、ゆっくりと近くに止めてある軽トラックの方へと歩いていく。

しかし、ふと何を思ったのか、その女性は一瞬途中で足を止めると、仕切りに周囲を見渡すような素振りを見せ始めた。

（アリミア）

「ん・・・。今、何か光った？・・・。」

その女性とは、昨晩この住宅街に宿泊したチームＴｏｍｂｏｙメンバーのアリミアであり、その部屋を引き払うに当たって手持ちの荷物を運び出すため、軽トラックを建物の近くに横付けしようとしていたのだ。

まったく人気の無いはずの住宅街。

しかし、何か不思議と人の気配を感じる。

と言うより、何か見られているような・・・。

彼女はそういった感が働く方なのだろうか。

鋭い目つきのまま注意深く周りを見渡すアリミアは、決して怪しい素振りを見せないように、ゆっくりとその場にしゃがみ込むと、足元に咲き乱れる綺麗な白い花を摘み取る素振りをしてみせた。

この女。なかなか出来るな。

アリミアの一挙手一投足を見逃すことなく観察を続けていた大柄の黒人が、不思議そうな面持ちで小さく呟いた。

素人目には、一連のアリミアの行動から、そんな結論に達することは無いであろうが、長きに渡り過酷な戦場を生き抜いてきたのであろう、傷だらけの顔の黒人には、彼女は少し、特別な存在として捕らえられたのかもしれない。

「フォーメーションCに変更する。」

「素人相手にか？」

そして、一つも怪しい行動を見せなかったアリミアは、大きくあくびをして背伸びをしてみせると、手に持った花束の匂いを嗅ぎながら、再び建物の中へと入って行く。

そんな彼女の姿を見ていた一人の部下が、この黒人の指示に驚いたような返事を返した。

「念には念をだ。いいか決して気を抜くなよ。行くぞ。」

そう指示を出した黒人のアタックサインと共に、一斉に行動を起こし始める謎の集団。

決して誰にも悟られること無く、且つ、迅速に目標を達成するために、巧みに身を潜めながら目標へと忍び寄る彼らは、どこからどう見ても完全にプロの軍団のようだ。

（セニフ）
「あれっ??トラックはどうし・・・。」

（アリミア）
「しっ!!」

ゆっくりと部屋の中へと入ってきたアリミアに、ようやく着替えを終えたセニフが声をかけたのだが、何やら神妙な面持ちで周囲を警戒するアリミアが、唇に人差し指を立ててセニフの問いかけを遮る。

一瞬驚いた表情のまま、彼女の指示に従ったセニフではあるが、トラックを横付けするために出て行ったはずのアリミアの右手には、何故だか白い花束が握られている。

ええ??・・・なんで??

彼女が不思議がるのも無理はないだろう。

そして、出発までの少しの間、ソファーに寝そべって体を休めていたシルもまた、そんな意味不明な行動を見せるアリミアに奇怪な視

線を送る。

（シルジーク）
「なんだ?何かあったのか?」

（アリミア）
「セニフ。シル。貴方達は奥のお風呂場の方に行ってて。早く。」

そう、二人を急がせるアリミアの表情に、ふざけている様子はまったく無い。

そればかりか、手に持った白い花束をテーブルの上に置き放つと、運び出すためにまとめて置いた自分の荷物から、護身用のハンドガン「ＰＧ－ＢＥＬＥＴＴＵ」を取り出して、即座に弾丸を装填し始めた。

あからさまに何かあったことは確かなのだろうが、それまで、のん気に楽しい朝の一時を過ごしていた二人には、彼女の行動がまったく理解できないで、ただ、呆然とそれを眺めていることしか出来なかった。

タッタッタッタ・・・。

かすかに聞こえた人の足音に、アリミアは敏感に反応した。

強化プラスチックの猫足・・・。

訓練されてる・・・。

間違いない・・・。

軍隊でよく使用されるブーツの足音だ。

人数は複数・・・。

アリミアの中で、しばらくの間放置されていた非常に強い警戒心の一つが、ジグソーパズルのピースのように徐々に埋め込まれていくのが解る。

これはアリミアが、今まで自分が生き抜くために、自然と身についた警戒心で、彼女の意思とは関係なく、すべての事象に対してこのような分析能力が働いてしまうようだ。

勿論、普段このような警戒心が働いたとしても、大抵は思い過ごしで終わっていたのだが、今回だけは何かがおかしい・・・。

そう、心の中で何かがアリミアに訴えかけていた。

一体、誰が・・・。

狙いは私達3人の内の誰か・・・。もしくは全員ね。

（シルジーク）
「おい。どうしたんだよ。アリミア。」

（アリミア）
「何してるの!?貴方達!早くお風呂場に行きなさい!」

怒鳴られたところで、お風呂はさっき入ったばかりだし・・・。

と、ポカンと口を空けたまま、アリミアが何を言っているのか、まったく整理の付かないセニフだったが、そんなのん気に溜め息を付いていられたのは、その瞬間までだった。

ガシャーン！！

突然、奥の部屋の方から窓ガラスが割られる音が聞こえてくる。

それまで普通に日常生活を送っていた者達が、こういった場面に遭遇した場合、一体どれだけの人が迅速に行動できるのだろうか。

その音に慌しく周囲を見回すシルに、怯えたような表情でセニフがしがみ付く。

まったく二人ともアリミアの指示を行動に移すでもなく、ただ凡人たる驚きの表情で、災難が降りかかるのを待っているだけだった。

アリミアとしては、建物の中では比較的丈夫に作られているであろう、お風呂場に身を隠してほしかったのだが、今となってはもう遅い。

奥の部屋のほうから小刻みに聞こえてくる足音に対し、立ち尽くした2人の男女を突き飛ばしたアリミアは、何故か逆に玄関の方へと振り向くと、いきなりマシンガンを翳(かざ)して、姿を表した軍服の男に向かってハンドガンを構える。

右手はピンと伸ばし、左手は添えるだけ。

目線に素早く合わせた照準を男の右肩を合わせて、アリミアは躊躇無くトリガーを引いた。

バン！

（ラウル）

「ぐうぅっ！！」

爆竹のような軽い発砲音と共に、弾丸が男の右肩を正確に射抜く。

そして、その軍服の男が床に倒れこむのを確認する間もなく、更に今度は奥の部屋の方へと振り向いたアリミアは、牽制のための銃弾を、2発ほど扉付近ぎりぎりに打ち込む。

後ろに注意を逸らしていきなり前方から攻撃、そして次は後方、次は・・・。

急襲時は常に相手の死角を付くことが鉄則だ。

相手がどんな強敵であれ、相手の意識を振り回し続ければ、必ずどこかに隙が生じるからだ。

こんなの素人相手に使う攻め方じゃない・・・。

すると、狙いは私！？

アリミアが一つの結論に達した時、彼女にはすでに相手の次なる攻撃を読んでいた。

しかし、彼女に出来たことは、そこまでだった。

再び玄関の方へと銃を構えようとした瞬間、扉付近にはもうすでに

金髪の女性が銃口をアリミアの方へと構えていたのだ。

そして、必死にその女性へとハンドガンを突き出すアリミアに向かって、容赦なく大量の弾丸が撃ち放たれた。

パシュパシュパシュパシュ！

まるで炭酸水の蓋を連続で抜いたような、情け無い発砲音が立て続けに打ち鳴らされたが、その破壊力はかなりのもので、キッチンと奥の部屋を仕切る壁の暑さが、２０ｃｍもあるにもかかわらず、いとも簡単に大きな風穴を作り出していく。

そして、当て所なくばら撒かれた弾丸の一発が、アリミアの右上腕部を貫通すると、小さな紅い飛沫（しぶき）が、花火のように舞い上がった。

（アリミア）
「あぅ！！」

そして、よろよろとした足取りのまま、穴だらけとなってしまった壁に寄りかかると、右肩を押さえて苦痛な表情を浮かべたアリミアが、足元から崩れ落ちた。

（ドルト）
「よーしそこまでだ。レドルー。ラウルを収容しろ。」

やがて、鼻を劈（つんざ）くような硝煙の臭いが立ち込める部屋の中に、静かに銃を構えたままゆっくりと姿を現したのは、ぎょろり大きな目を見開く大柄の黒人。

「黒いのっぽ」の男だった。

０２－０８：〇大海を知らぬ猿達［３］

第二話「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「大海を知らぬ猿達」

それは、ほんの数秒間のできごとだった。

一体、何が起きたのかまったく理解できない。

突き飛ばされたセニフとシルは抱き合い、床に伏せている事しかできなかった。

辺りの慌しさから一転、静けさを取り戻した部屋の中を、セニフは恐る恐る顔を上げて見渡してみる。

それまで、狭いなりにも殺風景で小奇麗だった室内は、安物の壁掛けや、壁の破片、ソファーから飛び散った羽毛等が、床一面に散らばっており、割れた窓から差し込んだ太陽の光に、立ち込めたきな臭い硝煙が、白い筋を伴って不思議なオーロラを形成していた。

そして、何やら目の前に差し込む太陽の光に反射して、不気味に紅光リる異様な液体に、セニフは気が付いた。

それは、ぽたぽたと一滴一滴、滴り落ちては床にへばり付き、マッシュルームが重なり合うように大きな森を形成していく。

そして、その異様な液体の落下量が、一気に加速した。

（セニフ）

「アリミア！！」

穴だらけの壁に紅いレールが擦(かす)れて走り、そして、そのレールの下に蹲(うずく)るアリミア。

抑えた右肩から右腕を伝って、真っ赤な鮮血がするすると滴り落ちている。

セニフは咄嗟(とっさ)にアリミアの元へと走り寄ると、彼女の右肩の状態を仕切りに心配した。

（アリミア）
「だ・・・大丈夫よセニフ。っつ・・・。」

（セニフ）
「・・・っでも。こんな・・・。」

アリミアは心配するセニフを他所に、じっと招かざる客人達を睨み付けたまま、決して攻撃的な意思を崩そうとはしない。

相手を突き刺すような視線はいつも通りなのだが、何か彼女に触れると、触れたその手が切り落とされてしまいかねない、そんな危険な雰囲気すらかもし出していた。

（ドルト）
「ふん。いい目だな。死角から狙ったラウルを、一撃でしとめるとは、たいした奴だ。」

大きく聳(そび)え立って見えるほどに大柄な黒人は、散らかった室内をきょろきょろと注意深く観察していたのだが、やがて彼女達に反撃の

手段が無いことを確認すると、両手に構えたマシンガンの銃口を、壁際に蹲るアリミアから引き剥がした。

そして、奥の部屋から顔を出した太った男に、ハンドサインで負傷者の手当てを命じ、ゆっくりとスリングを廻して銃を肩に背負い込んだ。

一体何の目的で部屋へと押し入ってきたのかは定かではないが、現時点で確認できる軍人は４人。

アリミアに撃たれて玄関先に倒れこんだ男が１。

そいつの手当てを始めたデブが１。

玄関先から外の状況を伺う金髪の女が１。

そして、アリミアを見下ろす黒のノッポが１。

こいつがリーダーか・・・？

シルはうつ伏せたまま、じっと気配を消しながら周囲の状況を確認していた。

そして、作業服のポケットにゆっくりと手を入れると、忍ばせていた飛び出しナイフを握り締める。

黒人の注意がアリミアに向いている今がチャンスか？

奴を人質に取れれば他の奴もいうことを聞くかもしれない。

そんな安易な思いを描きつつ、黒人に襲い掛かる機会を伺っていた時だった。

パシュパシュパシュパシュ！

（シルジーク）
「おあっ！あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

（セニフ）
「シル！」

突然、複数の光が玄関先で光り輝いた瞬間、シルが寝そべる床の近くに大量の弾丸が浴びせかけられる。

勿論、これは不穏な気配を見せるシルを牽制するための威嚇ではあったが、面白半分に弾丸をばら撒く金髪の女性は、少々頭がイカレているのだろうか。

（ローザン）
「よかったわねぇ。当たらなくて。あまり変な気起こすと、そこの女みたいに間違って当たっちゃうかもよ。ほら、小娘ももう動かないの。撃たれたら痛いの。解るわよねぇ。」

マシンガンを片手に下駄箱の上に腰掛け、チューインガムを膨らませる金髪の女は、今度はシルの元へと駆け寄ろうとしていたセニフを、まだ硝煙の残る銃口で制する。

そして、脅（おび）えるセニフに向かって、にんまり薄ら笑いを浮かべた。

なんとも嫌な女である。

シルはうつぶせの体制のまま、安否を気遣うセニフの方に、片手をぶんぶん左右に振って無事を知らせるのだが、同時にこれは、セニフにもう動くなというシグナルでもあった。

相手はどうやら本物の軍人。

か弱い一般市民に彼らに対抗すべく手段などあるはずも無く、彼としても、白旗を上げる以外に無かったのだ。

（セニフ）

「一体なんなんだよお前等!!いきなり押し入って来やがって!!」

セニフは激しい怒りを込めて、大声で彼らに噛み付いて見せるのだが、震えた声色から、心に焼き付けられた恐怖心をぬぐうことが出来ない様子で、傍目（はため）から見ても、あからさまに脅（おび）えている感じが伺えた。

突然、彼女達を襲った不気味な謎の集団を前に、脅えるなという方が無理な事は解っている。

それでもなお、セニフは勇気を振り絞るように、目の前に仁王立ちする黒のノッポを睨み付けるように威嚇して見せた。

しかし、セニフの態度など少しも気にする様子もなく、軍服のポケットからタバコを取り出した黒のノッポは、高級そうなジッポで火をつけると、深々と煙を吸い込む。

そして、薄く漂う硝煙の幕に、再度新しいタバコの煙を練りこみながら、黒のノッポは1枚の紙切れを取り出した。

（ドルト）
「セニフと言うのはお前か？」

漆黒の顔に光る二つの丸い目が、ぎょろりと一点セニフを凝視する。

（セニフ）
「そ・・・そうだよ。なんで私の事・・・。」

そして、黒のノッポは取り出した紙の内容をまじまじと眺めた後、吸い込んだタバコの煙と一緒に、今回の真の目的を吐き出すのである。

（ドルト）
「ある御仁からの依頼で、貴様の身柄を拘束するよう指示された。我々と一緒に来てもらおうか。セニフ・ソンロ。」

（セニフ）
「そ・・・。そん・・・。」

黒のノッポの放ったその言葉に、思うように言葉が続かないのは、彼女が不安と恐怖に押し潰されそうになっているからだろうか。

なんで??なんで私??なんで軍人が私に??

ある御仁て??一緒に??どこに??

それまで普通に暮らしていた1人の少女を拉致するために、恐ろしい軍人の集団が襲いかかってくるなど、胡散臭いドラマや映画でもやらないような、ありきたりのシーンを前に、セニフは完全に頭が

錯乱していた。

目の前に晒された銃は本物。

まったく抵抗する余地は無い。

それに、反撃したアリミアは負傷してしまっている上、シルも危険な目に合わせてしまっている。

セニフの表情からは次第に血の気が引いて行き、顔面蒼白状態で小刻みに震えているのが解る。

俯(うつむ)いて、挙動不審にどこかを見つめながら、ただただオロオロするばかりのセニフは、やはりどこかおかしい。

彼女には、彼らに対して「何故か」という理由を問いただしたくとも、問いただすことは出来ない。

何故ならば、セニフには「襲われる心当たり」が無い訳ではないからだ。

（ドルト）

「貴様には拒否する権利は無いことを理解しろ。」

（ローザン）

「私って優しいから、好意で右腕だけにしてあげたのよ。次はないのよ。お嬢さん。」

黒のノッポの言葉にも反応を見せず、俯(うつむ)いたままのセニフに、チラリと視線を移したアリミアが、痛む右肩を抑えながら次なる彼らの

言葉を待っていた。

出血の量からいっても、傷はそんなに深くない。

この程度の傷であれば、自分一人で何とか逃げ切る自身が彼女にはあった。

しかしそれは、彼らの狙いが「自分一人」であることが前提の話であり、事もあろうか、目的がセニフの方とは、アリミアも想像していなかったようだ。

何故？狙いはセニフ？私じゃないの？

アリミアにも「襲われる心当たり」が無いわけではなかった。

02－09：〇大海を知らぬ猿達［4］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ０９「大海を知らぬ猿達」

不穏な空気流れる狭い一室に渦巻く白い煙。

ゆらゆらと揺らめくように交じり合うが、なかなかに晴れない靄（もや）として、答えを求めて彷徨う心理を覆い隠す。

セニフも。アリミアも。そしてシルもまた。

そんな歯痒（はがゆ）い靄（もや）の中で、もがいている時だった。

陰謀を覆い隠した煙たい密室の中に、開かれた扉から冷たい空気が流れ込んだ。

「あ～あカワイソ。やっぱり帝国の人間は野蛮人が多いわね。」

突然、部屋の玄関の方から女性の声が流れてくる。

その声はどこか、極最近聞いたことのある声だった。

（ドルト）
「ローザン！！」

（ローザン）
「えっ？なに？えっ？」

玄関の前で外界を警戒しておくべき金髪の女性を、リーダーたる黒のノッポが怒鳴りつける。

チームＴｏｍｂｏｙのメンバー達とのやり取りの中で、彼女の意識が「部屋の中」にあったことは確かだが、それでも、彼女は決して油断していたわけではない。

玄関先の下駄箱の上にだらしなく腰掛け、ぶらぶらとマシンガン片手におどけて見せはしたものの、彼女にはこの体制からでも即座に戦闘体制に入るだけの自信あった。

それに、いくら注意散漫だったからといえ、戦闘経験豊富な彼女が、ド素人たる女性の接近にまったく気づかないはずが無いのだ。

しかし何故だろう、驚きを隠せない金髪の女性の直ぐ隣には、彼女に気づかれる事無く接近することに成功した綺麗な女性が一人、何やら不敵な笑みを浮かべたまま立っている。

そう、何処かで見かけた女性だ。

あれは確か・・・。昨日・・・。昨日酒場「カルティナ」で見かけた女店員。

間違いない。

この時、その事実に気が付いたのはアリミアだけだったのだが、玄関先に立つ女店員の背後から、更に大柄な男が姿を現すと、今度はシルの表情が一遍した。

大きな体躯にＤＱＡチームユニフォームを身に纏（まと）ったその男は、顎

に疎らに生えそろった武将髭がトレードマークで、チームＢｌａｃｋ'ｓのアタッカーリーダー。ユァンラオ・ジャンワンだ。

シルは一応、バックアッププリーダーとして、ＤＱＡ大会主催者側が提供する、各チーム情報にはすべて目を通している。

それが、昨日チームＴｏｍｂｏｙをボコボコにした相手チームの、ＤＱパイロットともなればなおさらの事だ。

ニュートラルエリアにおいて、酒場の女店員とＤＱＡ参加パイロットという組み合わせは、決して不思議な組み合わせでは無い。

しかし、謎の軍人達に制圧された小さな建物に姿を現した挙句、まったくその状況を意に介することも無く、軽々しく首を突っ込んでくる度胸とふてぶてしさ。

シルもアリミアも、不思議そうな眼差しでこの二人を見ていたに違いなかった。

（ドルト）
「何しに来た。報酬はもう渡したはずだが。」

（ユァンラオ）
「何。あまりに高額な情報なんで。少し興味が有っただけだ。」

黒のノッポが監視すらできない無能な部下を横目に、くわえていたタバコを吐き捨てながら言った。

そして、どうやらこの武装集団と繋がりを臭わせる返事を返したユァンラオは、顎の武将髭を撫でるように擦（さす）りながら、不気味にニヤ

付いてみせると、アリミアの前で俯(うつむ)いたままのセニフを睨み付けた。

セニフはじっと、何かを考え込むような表情のまま、ぶつぶつ呟いているようだった。

セニフの脳裏にへばり付いて取れない、先ほどカルティナが放った一言。

帝国・・・。帝国・・・？セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国・・・？

まさか。今頃になって・・・。

そんなこと有り得ない・・・。絶対に解るはずが無い・・・。

見たことの無い軍服だけど、真っ黒なベレー帽に「金色の軍章」。

モチーフは・・・。龍。・・・龍。・・・・・・・・・龍!?

（セニフ）

「タ・・・タルナーダメイリン!!こいつらロイロマールの隠密兵だ!!」

突然、セニフは勢い良く立ち上がると、ようやく意識の中で繋がりを見せた過去の記憶を、思わす言葉に発してしまった。

・・・・・・・あ・・・!!

（ドルト）

「ほう。我々のことを知っているというのか。ふっふっ・・・。や

はりただのターゲットではなかった訳だ。」

脅えたように後ずさりを始めたセニフの姿を、黒のノッポの丸く光る2つの視線が捕らえる。

次第に緩みだした口元に、薄っすらと笑みがこぼれる彼の表情は、かなり嬉しそうにも見える。

それもそのはず、この黒のノッポは、今回の作戦任務に対して、非常に強い不満を抱いていた。

トゥアム共和国は、周辺諸国に対して中立の立場を示してはいるものの、他国に潜入するという危険を犯してまで断行された任務だ。

何か非常に重要な軍事目標でも設定されているのではないかと思っていた。

それが、蓋を開けてみれば、廃都市ブラックポイントへ潜入して、ただの青臭い小娘の身柄を拘束して来いというのだ。

不満があったとしても、それは当然であろう。

しかし、このセニフが放った一言により、彼はこの任務の重大さを悟ることになる。

「貴族隠密兵」というのは、その貴族達が独自に保有する私兵団のことであり、各貴族が保有する軍隊とも性質の異なる集団である。

名前が示す通り表舞台では無く、秘密裏に作戦を遂行する特殊部隊で、指揮系統も完全にその貴族に属しているため、単なる一般人が

その存在を知ることは、決して無いのである。

そんな集団を知る少女。しかも、所属貴族、更には部隊名まで正確に示して見せたのだ。

この小娘が、ただの小娘なはずは無い。

（カルティナ）

「面白いのよ、その子。ちょっと調べさせてもらったけど、１３歳以前の情報が完全に架空の経歴。出身国籍さえ定かじゃないわ。私達が調べてこの有様って、すごいことよ。」

（ドルト）

「あいにくだがお嬢さん。我々もこの任務に関しての詳細はまったく聞かされていない。その疑問を解く答えを提供することは出来んな。解っていると思うが、我々は依頼人からの命令で隠密行動中だ。たとえ情報提供者と言えど始末しなければならない場合もある。気をつけて行動することだ。」

黒のノッポはそう言うと、武装をひけらかしながら、客人を威嚇してみせる。

しかしこの２人、恐怖心という物がないのかどうかは分からないが、この武装集団に対して一向に怯む様子もなく、ユァンラオは、今回の騒動の発端となる「セニフ・ソンロ」を凝視していた。

そればかりか、何の備えも無いままに、大胆にも部屋の中へと歩み入ってくるではないか。

（アリミア）

「私達は闇商人に身売りされたって訳ね。最低だわ。」

そんな二人の男女に向けて、吐き捨てるようにアリミアが言い放った。

どうやら2人の正体に、アリミアが気づいたようだ。

情報化社会の中にあり、「情報屋」と呼ばれる人間は、世界各地に数多く存在しているのだが、個人のプライベート情報から国家レベルの情報まで、あらゆる情報を裏で扱うエキスパートとなると、その数は激減する。

さらにその中には、非人道的行為をも厭(いと)わない「闇の情報屋」が存在し、時に世界中を混乱の渦へと巻き込む事件を引き起こしかねない存在として、人々から恐れられていた。

（カルティナ）

「あら。別に貴方の事を売った覚えは無くてよ。ごめんなさいね。とばっちり受けちゃって。」

そう言って、アリミアの前まで歩み寄ったカルティナは、白くて細長い右手をそっと彼女の目の前に差し出した。

しかし、驚くほど美人である彼女の顔に浮かび上がった笑みとは、負傷したアリミアに対する慈悲の笑顔ではない。

まるで、売られて行く食用豚に最後の笑顔を送るような、そんな冷ややかな冷笑であった。

これに対し、鋭い目つきのままカルティナを睨み付けたアリミアは、

自分の血が付着したままの左手で、勢い良くこの手を弾き飛ばす。
すると、真っ赤な鮮血がその衝撃で飛び散り、綺麗なカルティナの右手と洋服を襲った。

（カルティナ）
「あ！・・・あ～あ。サイテイ。」

（ユァンラオ）
「フッ。まあ、お遊びもここで終わりだ。残念だったな。」

それまで、壁際に張り付くように脅えていたセニフを凝視していたユァンラオが、嘲(あざ)ける様な笑みを浮かべて見せた後、チラリとカルティナと視線を交差させる。
何かの合図であろうか。

直後にカルティナは、恐ろしい程に冷酷な笑みを浮かべながら、右手に付着したアリミアの血をペロリと厭(いや)らしく舐めてみせた。

すると次の瞬間、住宅街の裏手の方から、建物全体を揺らす程の大きな爆発音が鳴り響いた。

02－10：○大海を知らぬ猿達［5］

第二話「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「大海を知らぬ猿達」

ドッゴーーーン！

住宅街の直ぐ裏手、新緑の森林地帯から鳴り響いたその爆発は、かなり大きな衝撃を生み出した。

割れて脆(もろ)くなった部屋の窓ガラスは崩れ落ち、戸棚に入れてあった安物の食器が、ガチャガチャと暴れ狂う。

（ドルト）
「なんだ！？」

（レドルー）
「チッキチャンとリンダの方だ！！見つかったか！！」

負傷者の手当てをしていた肥満体質の男が、玄関先から外の様子を伺いつつ叫んだ。

部屋の割れた窓ガラスの向こう側、彼等の仲間たる男女二人が、待機している地点の程近くからは、のうのうと真っ黒な煙が立ち昇っており、何が原因なのかは定かではないが、何らかの爆発があった事は確かなようだ。

こうなると、彼等としては秘密裏に遂行して来た潜入作戦だけに、駆けつけた共和国の保安隊と遭遇してしまう事は、絶対に避けなけ

ればならない。

しかも、爆心地付近で待機している2人の仲間については、その生死如何にかかわらず、「絶対に回収」しなければならないのだ。

彼等が装備する銃火器については、さほど共和国内でも珍しい物でもないのだが、身に着けた装備品や服装、持ち歩く小物などは、然(しか)る機関に調査されれば、ある程度犯人が特定できてしまうからである。

（ドルト）

「ちっ!!ローザン、レドルー!!この娘を連行しろ!!残りの奴等は殺してもかまわん。ラウルは即座に自力で脱出!急げ!」

黒のノッポは、明らかにあわてた様子で表情を強張らせると、二人の部下に最終手段たる非常な行動を指示した。

彼は何よりも任務を重んじる厳格な性格で、任務達成のためならどんな犠牲をもいとわない。

勿論、今回の作戦も同様、どんな障害が目の前に立ちはだかろうとも、必ず任務を成功させるつもりでいるのだ。

彼等のリーダーたる黒のノッポの指示により、下駄箱の上から飛び降りた金髪の女性が、マシンガンを構えると、鋭い視線で睨むアリミアに向かって銃を構えた。

（ローザン）

「可愛そうだけど。気に入らないのよね、その反抗的な目。」

（セニフ）
「ちょ・・・ちょっと!!まって!!私が目当てなんでしょ!!やめてよ!!」

すかさず2人の間に割り込んで立ちふさがるセニフだが、冷酷な命令を下した黒のノッポがそれを許さない。

彼は、真っ黒な顔に光る大きな目を、さらに大きく見開きながら、セニフの左腕をつかみ上げると、強引に自分の元に引き寄せて、身動きできないように抱え込んだ。

（セニフ）
「やめて!!ちょっ・・・!」

何か・・・。何かいい手は無いのか・・・。

いつまでもこのままじゃ、セニフもアリミアも助けることが出来ない。

ここは失敗しようとも、俺が・・・。

それまで、じっと床の上に伏せたまま、周囲の状況を伺っていたシルだが、いくら思案したところで、何か良き解決策が生まれる訳でもなく、もはや彼には、この軍人達に玉砕覚悟で特攻するしか手立ては無い。

そう思って、全身の力を思いっきり奮い立たせようとした時だった。

ざわめき出した兵士達の気配にも、顔色一つ変えなかったユァンラオが、黒のノッポの背後までゆっくり歩み寄ると、彼の肩に軽くポ

ンと左手を乗せる。

そして、徐に振り返った黒のノッポの腹部めがけて、強烈な拳を思いっきりめり込ませた。

（ドルト）
「ぐぁぁ！！」

よろよろと足元から崩れ落ちるようにうめき声を上げる黒のノッポ。

しかし、今度は彼の身体を支えるように抱きかかえると、ユァンラオは即座に彼の腰にぶら提げてあった短銃を抜き取り、更に短銃のハンマーで彼の即頭部を殴りつけた。

（レドルー）
「なっ・・・！！貴様っ・・・！」

このユァンラオの突然の暴挙に、一瞬驚いた表情を見せた肥満の男は、床に置き放ったマシンガンを即座に手に取ろうとするのだが、すでに彼を照準に捕らえていたユアンラオによって、悲しくも顔面へと弾丸を叩き込まれることになる。

と、そのついでとばかりにユァンラオは、隣に寝そべった負傷者に対しても、容赦なく短銃のトリガーを引いて見せた。

（ローザン）
「てめえ！！情報提供者だからって甘く見ていれば！！」

背後で撃ち鳴らされた軽い銃撃音に反応した金髪の女性が、先ほどまで噛んでいたチューインガムを吐き捨て、鬼の形相でユァンラオ

の後姿にマシンガンの照準を合わせる。

しかし、トリガーを引こうとした彼女の視界を遮った物とは、突然に現れた「カモシカ」のようにしなやかな脚。

直後、彼女は、驚くまもなく顔面をけりつけられ、綺麗な金髪を靡かせながら、テーブルごと吹き飛ばされてしまった。

勿論、そのカモシカのような綺麗な脚の持ち主とは、ニコニコと笑みを絶やさないカルティナであり、床に這いつくばって苦しむ可愛そうな女性に対して、更にその頭部を思いっきり蹴りつけた。

なんなんだこいつ等・・・。

仲間じゃなかったのか??

その場にいた誰しもが疑問を抱いたであろう二人の行動。

一体、彼等は何者なのであろうか。

まったく悪びれる様子も無く、気持ち高ぶらせることも無く、淡々と謎の集団を処理してしまったユァンラオとカルティナ。

シルも、セニフも。そして、アリミアでさえも、この彼等の行動に対して、一言も発することが出来ないまま、呆然と見つめることしか出来なかったのである。

（カルティナ）

「ユァンラオ。少し女性に甘いんじゃなくて？いつか後ろから刺されても知らないわよ。」

（ユァンラオ）
「ふん。」

やがて、まったくピクリとも動かなくなった金髪の女性を踏みつけたカルティナが、ユァンラオに面白く無さそうな表情をぶつけるのだが、そんな彼女の言葉に、少しも興味を抱かない彼は、床に蹲(うずくま)ったままの情け無い大男を、冷笑と共に見下ろした。

（ドルト）
「ユァンラオォ・・・！！貴様！裏・・・切りやが・・・ったなぁ！！」

未だ殴られた衝撃で、うまく呼吸が出来ないのであろうか。

必死の形相で絞り出すその声は、どこか途切れ途切れだ。

先ほどまでこの部屋の支配者だったはずの男が、無常にも、突然現れた二人の男女によって、まっ逆さまに地獄の淵へと叩き落されるなど、一体、誰が予想しえただろうか。

ゴソゴソと腰の辺りで何かを探している黒のノッポを睨みつけながら、ユァンラオはゆっくりとその探し物を彼に差し出してやった。

勿論、彼を本当の地獄の淵へと叩き落すために。

（ユァンラオ）
「ふん。裏切り？面白い冗談だな。味方でない者からの裏切りなどありえんだろ。」

パン！

再び部屋の中に木霊した軽い発砲音の後に、頭部を撃ち抜かれた黒のノッポが、力なくセニフの足元へと倒れこんだ。

ドクドクと血を噴出するその死体を見つめながら、逃げ出したい気持ちとは裏腹に、恐怖でまったく身体が動かない。

（セニフ）

「ひっ・・・・・・・・・・・！ぅ・・・・・・・・・。・・・・。」

なんとも情け無く叫び声を上げることすら出来ない彼女は、覚束（おぼつか）ない足取りで後ずさりを始めたのだが、それも叶わず、やがて、膝から折れるようにして尻餅を付いてしまった。

（ユァンラオ）

「ふ、小物は小物らしくだな。」

ユァンラオはそう吐き捨てると、黒のノッポから奪い取った短銃を放り投げ、剃りきっていない武将髭を再びさすり出した。

02－11：○大海を知らぬ猿達［6］@

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「大海を知らぬ猿達」

ようやく静けさを取り戻したその部屋は、ほんの少し前まで、何の変哲も無い宿泊施設の一室だったはずだ。

しかし、無数の銃痕と血糊によって彩られたその一室には、割られた窓ガラスの破片や、破壊されたソファー、テーブルが散乱し、更には人間の死体が４体も無造作に転がっている。

今や危険な拷問部屋のような様相を呈しているこの密室内にあって、人はいつもの平静さを保っていられるのであろうか。

それまで床に伏せるようにして、嵐が過ぎ行く様を目の当たりにしてきたシルが、ゆっくりと上体を起こしながら、この傍若無人（ぼうじゃくぶじん）な二人の男女を睨め付けた。

確かに、己の身へと降りかかる差し迫った危険は、一時的には取り除かれた訳なのだが、それでも彼は決して厳しい表情を崩そうとはしない。

いや、出来ないと言った方が良いのだろう。

ゆっくりとチームユニフォームの内ポケットから、タバコとジッポを取り出して、まるで一仕事終えた後の一服を嗜（たしな）むように、銜（くわ）えたタバコに火をつける男。

そして、不敵な笑みを浮かべたまま、チームＴｏｍｂｏｙの3人を順番に見つめる残忍な女。

彼等は一体、敵なのだろうか、味方なのだろうか。

（カルティナ）

「そんな怖い顔で睨まないでよ。助けてあげたでしょう。」

（シルジーク）

「けっ！！人売りが売り物を助けるなんて、一体、どう言う風の吹き回しだ？反吐が出るぜ。ブッ！！」

元々の騒動の発端でありながらにして、図々しくも恩着せがましく言い放ったカルティナに対して、シルは思いっきり嫌みったらしく足元に唾を吐き捨てる。

そう、彼等チームＴｏｍｂｏｙにしてみれば、どういう経緯（いきさつ）があったにせよ、この二人は自分達をこんな目に合わせた張本人であり、脅威の元凶となる存在。

彼がそんな二人に対して、いかに助けてくれたのだとしても、おいそれと気を許すはずもない。

（ユァンラオ）

「ふ・・・。なに。少し興味があっただけだ。理由はそれだけで十分だろ。」

シルの問いに素っ気無くそう返事を返したユァンラオだが、無残に転がる軍人達の死体の前に、へたり込んで呆けるセニフの姿を凝視すると、彼の瞳の奥にえもいわれぬ好奇心という炎が宿り始めた。

（カルティナ）
「うふふ。貴方達も、とんだ爆弾を背負い込んだものね。まだ、どのぐらいの大きさか解らないけど、私の予想としては、かなり楽しめるんじゃないかしら。」

（シルジーク）
「何のことだよ。」

（カルティナ）
「ほらほら。アレよ。ア～レ。」

そう言うとカルティナは、何か楽しそうに部屋の隅っこで蹲る、一人の少女を指差して見せた。

どこを見るでもなく。何を思うでもなく。

ただ、ぐったりとした様子で俯いたままに。

カルティナの促しにより集中した、シルの視線。アリミアの視線。カルティナの視線。ユァンラオの視線。

それらすべてに対して、まったく反応を見せない彼女は、ただひたすらに、目の前を流れる真っ赤な液体を見つめ続けていた。

未だ心の奥底から突き上げる黒い影に苛まれながら、彼女はその小さな身体を小刻みに震えさせて、拭いきれない恐怖感に必死に絶えているようだ。

「Ｔｏｍｂｏｙ」と言う甘い檻の中で、必死に隠しつづけてきた自

分。

そして、すべてを捨て去りつつも、新しい自分という光を、集う仲間達と築いて行きたいと願っていた。

か弱い一人の少女として。小うるさくとも元気な少女として。

何気ない普段の楽しい生活に、頭までドップリつかりながら、自分の血液がすべて蒸発してしまうまでのぼせたい。

そう願っていたのに・・・。そう願っていたいのに・・・。

（ユァンラオ）

「貴様の正体を暴いてやる。もうすぐな。」

＞ｉ４８２７―８２７＜

しばし部屋の中を包み込んだ静寂さを、ユァンラオが破り捨てると、彼の言葉に反応するかのように、セニフがゆっくりと頭を擡げて、虚ろな表情のまま見下ろす男に視線を宛がった。

傲慢で、ふてぶてしいまでの態度に、人を見下したような薄ら笑い。

そして、まったく人の気持ちなど意にも介さず、自分の望んだ欲望のみを追求する最低な人間。

こんな男に・・・。こんな男のために・・・。

次第に悔しさにも似た、怒りのような感情がセニフの瞳に浮かび上がると、睨みつける彼女の眼光が鋭くユァンラオの敵意に突き刺さ

る。

（アリミア）
「これ以上・・・貴方達の好きにはさせないわ。」

（ユァンラオ）
「ふ・・・。ふっふっふ。もう遅い。もはや貴様等猿ごときが、いくらあがいたところで、どうすることも出来ないんだよ。」

まったく彼の真意を理解するには、言葉足らずな発言であるが、不敵な彼の笑い声が妙に不気味さを醸し出している。

もしかして・・・。こいつ・・・。

（カルティナ）
「じゃぁね。今回は特別に教えてあげる。今回の依頼主の名前までは言えないんだけど、私達が情報を提供したら、こいつ等が真っ先に動きを見せたわけ。だからその事実を帝国５大貴族それぞれに開示してあげたわ。うっふふ・・・。まさか動きだしたのがロイロマール家だけなんて、あるはずないわよね。」

アリミアの前にしゃがみ込み、カルティナが優しい口調でそう説明を加えるのだが、たったこれだけの説明で、そのすべてを理解しろという方が難しい。

しかし、未だ疑念の残る思いを隠せないアリミアとシルを他所に、ユァンラオを見上げるセニフだけは、少し様子が違うようだった。

震える両肩は恐怖に脅えているからではない。

潤んだ瞳は悲しみや嬉しさから来るものではない。

普段ではありえないような怒りを、小さな身体全体で体現して、セニフは突然、ユァンラオの胸座(むなぐら)を鷲(わし)づかみにすると、大声で彼を怒鳴りつけた。

（セニフ）
「貴様ぁぁ！！自分でした事がどういう事か解ってんのか！！貴様らの勝手で・・・！？？」

しかし、怒りを込めて放ったセニフの言葉は、彼の心に響き渡ることもなく、唐突に放たれたユァンラオの拳によって簡単に閉ざされてしまう。

思いっきり顔面を殴りつけられてしまったセニフは、まるで蝶が舞うがごとく後ろに吹っ飛ばされると、硬い床に背中から打ち付けられ、胸の奥から沸き起こる喘(あえ)ぎに咽(むせ)び込んだ。

（セニフ）
「・・・！・・・うっ！あうっ・・・。」

（シルジーク）
「セニフ！おい！大丈夫か！？」

心配そうにセニフの元へと駆け寄り、彼女を気遣うシルだったが、苦痛に歪む彼女の目元から、ポロポロと涙が零(こぼ)れ始めた事に気が付くと、差し出した彼の右手が一瞬静止した。

殴られた左頬に手を宛(あて)がいながら、ひたすらに止まらぬ涙を服の袖で拭(ぬぐ)う彼女は、必死に何かをかみ締めるように、悔しそうな表情で

泣き始めたのだ。

それは勿論、痛みからくるものではないのだろう。

ピーピーピー。

と、その時、ユァンラオのポケットの中から、小さなシグナル音が鳴り響いた。

それは、何かの呼び出し音なのであろうか、そのシグナル音に即座に反応を見せたユァンラオは、嫌な笑みを浮かべたまま、カルティナにディスクのようなものを一つ手渡す。

そして、少し急いだ様子で部屋の玄関の方へと歩き出した。

（ユァンラオ）

「カルティナ。依頼人からの謝礼だそうだ。暗号解読は任せる。」

（カルティナ）

「ＯＫ。任せて。ユァンラオ。昨日の埋め合わせは、また今度ね。忘れないでよ。」

そう言って、笑顔でにっこりユァンラオを送り出す彼女を尻目に、無愛想にユァンラオがその部屋を後にする。

そして、最後の捨て台詞はこれだ。

（ユァンラオ）

「たかが蟻一匹相手に、一体何頭の像が慌てふためくのか。ふっふっふっふ・・・。」

穏やかに装ってはいるが、心の中には激しく燃え盛る暗黒の炎が宿る。

それは、大きく流れる大河の関へと手をかけて、突然にその流れを乱すことに成功した自分に酔いしれているのか、それとも、流れに飲み込まれて慌てふためく人々を想像し、ほくそえんでいるのかは解らないが、彼の顔から、不気味な笑みが消えることはなかった。

やがて、鍵が付けっぱなしだった軽トラックの運転席に乗り込んだユァンラオは、即座にエンジンを始動させると、前輪が空転するほどの勢いでこのトラックを駆り出す。

そして、あたり一面に焦げ臭いゴムの擦れた様な匂いを撒き散らし、騒動を巻き起こした張本人は姿を消してしまった。

彼は一体、何を慌ててこの場を立ち去ったのだろう。

彼が本当にしたかったこととは一体・・・。

考えれば考えるほどに、いや、おそらくは部外者たる自分には、決して考えてもその答えを見つけることは出来ないのであろう。

再び訪れた静かな空気に、部屋中に広がる惨劇を眺めて溜め息を付いたシルが、泣き伏せるセニフの肩に、そっと上着をかけてやる。

セニフ・ソンロ。１６歳。

破天荒で明るく無邪気な小柄な少女。

煩(うるさ)くて、馬鹿で、後先を考えない面倒な少女。

まったくその事実に疑いはない。

しかし、目の前に晒(さら)された本当の事実とは。

彼女は一体、何者なのだろうか。

それまで、お互いが望んで知ろうとしなかった過去。

知らないことで作り上げてきた「楽しき楽園」。

それが今、彼の心の中で静かに崩れ始めた事に気が付いた。

（セニフ）

「・・・。っく！・・・他に。・・・誰か来てるの！？・・・知ってたら教えて！教えてよ！！」

未だ殴られた時のダメージが残るのか、ガクガクと覚束(おぼつか)ない足を踏ん張って、立ち上がろうとするセニフが、カルティナに問いかけた。

（カルティナ）

「さぁ～ね。さっきの音は大会本部からの呼び出し音だったみたいだし、違うかもしれないけど、あの人の素振りから、かなり緊急性は高いと思うわよ。私より貴方の方が色々知っているんじゃなくて？もしかしたら、貴方が想像している通りかも知れないわねぇ。」

はぐらかす様に返答を返すカルティナだが、明らかにセニフの感情を煽り立てるような言い草。

彼女がすべての事実を把握している訳では無さそうだが、それでも涙を拭い去り、何かを決心したような表情で立ち上がったセニフにとっては、その言葉だけで十分だった。

（セニフ）
「・・・行かなきゃ。私、行かなきゃ・・・。」

（シルジーク）
「おい。無茶するなよセニフ。まだ座ってろ。」

そう優しく語りかけるシルが、セニフの右手を掴(つか)んで引き止める。

シル自身、彼女がどこへと行こうとしているのか、まったく見当も付かなかったのだが、それでも何か、彼女の醸(かも)し出す雰囲気が、彼の右手を動かしたのかもしれない。

しかし、ゆっくりとシルの方へと振り返った彼女は、物寂しそうな瞳で彼を少し見つめると、彼に聞こえない程の小さな声で呟いた。

（セニフ）
「・・・・・・さよなら・・・。」

（シルジーク）
「えっ・・・？」

（アリミア）
「だめよセニフ！！行ってはだめ！！」

名残惜しそうにも、掴まれたその手を振り解き。

一目散で部屋を飛び出して行くセニフ。

何て言ったんだ?セニフ?何て・・・?

待てよ!どこ行こうって言うんだよ!待て・・・!

その手に残された彼女の温もりに惹(ひ)かれるように、セニフの後を追いかけようとするシル。

しかし、そうなると、負傷したアリミアを一人、この部屋に置き去りにしてしまうことに彼は気が付いた。

(アリミア)
「シル!!早くあの子を追いかけなさい!!何しているの!?早く!!」

(シルジーク)
「・・・って言ったって、アリミア・・・。」

(カルティナ)
「あんっ。彼女のことなら私に任せておいて。別に悪いようにはしないわ。信用して。」

妖艶な笑みをシルに投げかけつつ、人差し指を軽く嗾(かじ)りながら、ふざけた様な口調で話すカルティナの、一体どこを信用しろと言うのだろうか。

こんな怪しげな女の残る部屋に、アリミアを一人残していくことなんて出来やしない。

そう躊躇(ためら)っていたシルに、アリミアが苦しそうな表情のまま訴えかけた。

（アリミア）

「シル。私は大丈夫だから・・・。お願い。行ってあげて・・・。」

彼女の負傷した右肩から流れ出る血は、それほど多くないとはいえ、かなりの激痛が伴うのか、彼女の表情はとても苦しそうである。

しかし、そんな激痛に耐えながらも、必死でセニフの安否を気遣っている。

シルにはもはや、そんなアリミアの思いを無視することが出来なかった。

シルは、チラリとアリミアに視線を向けると、うなずく彼女に従って、全速力でセニフの後を追い始めた。

02－12：〇開戦の雫［1］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ12「開戦の雫」

真っ暗な狭い空間に光る可愛い小さな赤色の蛍。

大きく綺麗に光り輝いて見せたかと思えば、また今度は次第に小さく萎(しぼ)んでいく行く。

（マリオ）
「お姉ちゃん。バックアップシステムと接続したから、システムカード入れていいよ。」

真っ暗闇に映(は)えるその赤色の蛍が、色鮮やかに花開いた時だけ、目の前のスクリーンに照らし出された自分の顔が映る。

垂れ目の澄んだ瞳に抹茶色の癖毛。

いつもと変わらぬ彼女の姿がそこにはあった。

じっと、黒いコンソールに浮かび上がった緑の文字を黙読しつつ、ジャネットは言われるがままに、半透明なシステムカードを投入口へと差し込む。

周囲を取り巻く完全な闇にその身を溶かして、システム立ち上げ前のハッチを締め切ったラプセルのコクピット内にジャネットは居た。

（ジャネット）

「ねぇ。マリオ。バックアップをリストアするだけじゃないの？」

狭い空間に発した声が静かに木霊する中、彼女はふと、その赤色の蛍に視線を向けた。

他には誰も居ない。

暗がりでたった一人、寂しそうに点滅を繰り返す赤い蛍。

なんか・・・。似ている・・・。

ジャネットは何か、心の奥底に刺さったナイフのような物を、少し擽（くすぐ）られた様な感じがした。

（マリオ）

「昨日の戦闘で行動アプリケーション自体がクラッシュしてたんだよ。だからソフトを再構築してからデータ投入しないとね。それから全体のバックアップデータが１ヶ月前のしかないから、行動ファンクションとオートモーションの投入作業がんばってね。お姉ちゃん。」

マリオの言葉に、少しげんなりした様子で、大きく溜め息を付いてしまうジャネット。

これまで過去１ヶ月間に渡って、彼女が蓄積してきたラプセルの行動データは、昨日の戦闘で一瞬にして消滅してしまったのだ。

彼女が肩を落とすのも無理はない。

本来、ＤＱの行動データは常に毎日バックアップを取って置くこと

が理想なのだが、彼等チームＴｏｍｂｏｙに関して言えば、少ない人数で様々な作業をこなさなければならないため、システム全体のバックアップ作業については１ヶ月に１回しか実施していないのだ。

いくら行動ファンクションデータとオートモーションデータを、個別に部品化してバックアップができるとはいえ、その再構築作業はめんどくさい上にかったるい作業なのだ。

ジャネットは、仕方無さそうにコンソール画面に打ち込みを開始すると、「ピー」と言う音と共に、赤色の蛍が澄んだ緑色へと変色した。

そして、次いでラプセルのメインシステム立ち上げ作業が開始され、それまで周囲に潜んでいた他の蛍達が、一斉に呼応するかのように、煌びやかに輝き始める。

高周波を伴いながら、一斉に暗闇を灯し始めたその光は、まるで真っ暗な闇夜に光り輝く星空と、絨毯（じゅうたん）のように敷き詰められた草原を、自由に飛び交う蛍達の間に挟まれたような、そんな幻想的安らかな世界観を醸（かも）し出しているようだ。

（マリオ）

「それじゃ。ＴＲＰスクリーンつなげるよ。ユーザーＩＤを入れて。」

そして、マリオの言葉に促されるように、しばしの幻想的世界への精神旅行を楽しんでいたジャネットがユーザーＩＤを入力する。

Ｕｓｅｒｉｄ：Ｃｒｙｅｅｃｅ

ジャネットはＤＱ駆動キーカードのＩＤには、必ず「クライス」という名前を使う。

ジャネット・クライス・ホスノー。

彼女のミドルネイムに位置する名前である。

（マリオ）

「ＴＲＰスクリーンのＥ－２パネルに、セットアップビューが出るでしょ。ガイドするからそのまま打ってね。お姉ちゃん。」

ジャネットがＩＤを撃ち終えると、正面のＴＲＰモニターに、じわりとラプセル機体周囲の風景が映し出される。

それと同時に、闇に包まれていたコクピットがぱぁっと明るくなり、それまで元気良く光り輝いていた蛍達の光が、新たな強い光によってかき消された。

（ジャネット）

「・・・。・・・？・・・・・・？？」

ジャネットはしばし、周囲の強いコントラストの変化に目がついていかず、視界を真っ白い霧の世界が包んでいたのだが、次第に目がその光に慣れ始めると、ようやくＴＲＰスクリーンが映し出す外界の風景へとたどり着いた。

（マリオ）

「ラプセルをコントロールシステムと連結するから、僕の言ったコマンドそのまま打ちこんで。」

（ジャネット）
「ちょ・・・ちょっと待ってよ。何これ・・・。」

慌てたようにジャネットがマリオに問いただす。

ＴＲＰスクリーンは、外部のカメラが捕らえた映像を、パネル一枚一枚に合成して描画したものなのだが、何故かその時、彼女の目の前に広がった風景は、パズルゲームのようにあべこべに映し出されていたのだ。

彼女の正面には、本来一番右下に表示されるべき、コントロールシステムに座るマリオとサフォークの姿が大きく映し出されている。

（マリオ）
「あぁぁぁっ！！サフォーク！！」

ようやく、その事実に気がついたマリオは、サフォークをじろりと睨みつけながら大きな声を張り上げた。

彼は眠たそうな目を細めながら、大きなガレージ入り口から見える、青い空を眺める素振りをして誤魔化してみせるのだが、昨晩、ラプセルのモニター関係の補修作業を行っていたのはサフォークだけである。

（サフォーク）
「寝不足はいい仕事の天敵ってな。」

しかし彼は、完全に呆けたような表情で、自分のミスをあたかも昨晩の徹夜作業のせいにしてみせるだけだった。

マリオは、半場薄ら笑いのような引きつった表情で、大きな溜め息を付く。

昨日の徹夜作業って一体・・・。

（マリオ）
「しょうがない・・・。お姉ちゃん。2時間ほどちょうだい。2人でモニター直すからさ。」

そう言うとマリオは、疲れた表情でニッコリとジャネットに微笑みかけた。

決してジャネットに対して、嫌な顔一つしない彼だが、昨日からの徹夜作業による疲れが無い訳ではないだろう。

もう、マリオがこんなにがんばってるって言うのに・・・。

何やっているのよ。サフォークの馬鹿。

そんな言葉が彼女の脳裏を過ぎるのだが、昨晩何の手伝いもしないまま、飲みに出かけた自分を棚に上げて、そんなことは言えやしないのだった。

せめて何か私にできることはないのかしら・・・。

そう思ってジャネットが、ラプセルのコクピットハッチを開こうとした時だった。

ドドーン。

大きな地響きと共に響き渡ってきた大きな音。

音源はかなり遠い様だ。

（ジャネット）

「な・・・何の音？雷・・・？」

不思議そうな表情をするジャネットが、見づらいＴＲＰスクリーン越しに、外の世界を見渡してみるのだが、カラッと晴れ渡った青空には、雷を生じさせるような雨雲の存在は確認できない。

というよりも、根本的に雷とは何か違うようだ。

あまり聞きなれない音にしばし彼女の身体が硬直する。

（サフォーク）

「どっかの馬鹿野郎がニュートラルエリアに、誤砲してんじゃないのか？」

サフォークはそう言うと、まったく意に介さない様子で、モニターの修復作業を開始しようとしていた。

まったく能天気というか、マイペースというか、こういった時だけ、彼の性格が羨（うらや）ましくなってしまうのは何故だろうか。

ドドーン！

再び鳴り響く大きな音。そしてそれと共に身体に伝わる地響き。

先ほどよりは近い位置のような気がする。

マリオは、可愛い顔の眉間に皺を寄せ、じっと注意深くその音を聞いていた。

（マリオ）

「ねぇ。地面にこれだけ振動が伝わるって事は、もしかしたらＭＩＳ系兵器の着弾音なのかな？ＤＱＡ大会規定でＭＩＳ系は使用不可なはずなのに・・・。」

ジャネットも何か、その周囲の異様な雰囲気を察していた。

工場ガレージの外の方で、何やら常駐整備士達が叫び廻っているようだ。

彼等が一体、何を叫んでいるのか見当も付かないのだが、その緊張度合いは彼等の行動を見ればすぐに感じ取れるほどだった。

（ジャネット）

「マリオ！！何か変だわ！！」

ジャネットがそう叫んだ時だった。

ドッゴーーン！！

今度は工場ガレージのかなり近くで、耳を切り裂くほどの轟音が鳴り響く。

そして、直後に猛烈な勢いの暴風が工場内へと吹き荒れた。

これはもう、何者かによる攻撃が着弾した時の爆風に間違いはない。

しかも、爆発の規模から考えても、決してＤＱＡ大会参加者の誤砲などではないことは直ぐに解った。

（サフォーク）
「なんだよこれ！！冗談じゃねぇぞ！！」

ラプセルのコクピット内に居たジャネットは勿論、工場ガレージ内に居たマリオとサフォークは、何とかこの爆風から身を避けることが出来たのだが、大きく開いたガレージ入り口から見渡せる外界では、様々な物が吹き飛んでいく様が見て取れた。

（マリオ）
「お姉ちゃん！！危ないからそのままコクピットから出ないで！！」

ジャネットにそう叫んだマリオは、即座にだだっ広い工場ガレージ内において、一番安全と思われる場所を探し始める。

しかし、その辺の物陰に身を潜めたところで、あれほどの爆発を確実に凌ぎきれる様なものは見当たらない。

願わくば再び爆発が生じないことを、天に願う事しか出来ないのかも知れないが、それでも彼は、必死になって生き延びるための活路を見出そうとした。

しかし、天はマリオにそれを見つけるまでの時間を与えなかったのである。

次の巨大な爆発は彼等の居る工場の直ぐ真横で発生した。

眩い閃光に包まれながら、大きな轟音に脅える暇もなく、吹き飛ばされた大量の瓦礫（がれき）や、大きな鉄骨が滝のように降り注いで来た。

（ジャネット）

「きゃあああああああああああああああ！！」

02－13：〇開戦の雫［2］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ13「開戦の雫」

トゥアム共和国の廃都市ブラックポイント西方に位置するジャングル地帯には、トゥアム共和国軍の陸軍基地が存在する。

ここはセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との国境にあたる、３０００メートル級山脈のふもとに位置し、トゥアム共和国防衛基地の中で、もっとも最前線の軍用基地でもある。

帝国暦３７３年に帝国との間に結ばれたソヴェール和約により、現在、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国と休戦状態にある同国ではあるが、過去の経験から決して帝国への冷態を解いていないのが実態だ。

（ジジ）
「ジルヴァ。モニター感度を上げろ。まだ来るぞ。」

（ジルヴァ）
「わかってる。何度もほざくな。」

黒砂を大量にふくんだジャングル地帯は、サーチレーダー機能を著しく低下させるため、周辺地域の詳しい情報を取得するためには、ＤＱ等の巡回索敵で補わなければならない。

しかし、同地域に群生する木々達には、あまり背丈が大きく無いものが多数存在し、搭乗したＤＱからの視界はすこぶる悪い。

地形的整理された道沿いであれば索敵車両を巡回させることが出来るのだが、このような凹凸の激しい不整地においては、やはりＤＱの機動性に頼らざるを得ないのだ。

今現在この地域には、ＤＱ２機編成３部隊が巡回中であり、各々北西地域、南西地域、南東地域を警戒警備に当たっていた。

その中で、不運にも北西地域を巡回警備中だった兵士達が、なにやら切迫した事態へと陥ってた。

（ジルヴァ）
「来たよ！！おらぼさっとすんな！！」

雨季の真っ只中だと言うのにすっきり晴れ渡った紺碧の空。

密林の隙間から見えるその青い空のど真ん中に、３本の白い線が描かれて行く。

ＴＲＰスクリーン越しに、その白線の先端を照準システムに照らし合わせた二人は、狙いを定めて一斉に中距離仕様（アサルトライフル）ＡＳＲ「ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４」を放った。

そして、昼間の明るさをかき消す程に焚（た）かれたマズルフラッシュの中から、上空へと舞い上げられた弾丸が白線の先端を捉えると、まるで打ち上げ花火が炸裂したように、２つの大きな花が大空に咲いた。

（ジジ）
「１つ残した！！」

パイロットの一人がサーチレーダー上で、この白線の行方を追いながら叫んだ。

撃ちもらした1本の白線が向かう場所。

それは廃都市ブラックポイントのDQA大会開催地である。

ジャングル地帯の真っ只中のため、彼等二人には都市部の詳しい状況を、把握することはできない。

しかし、追って都市部の方角から響き渡って来た大きな轟音により、最悪の事態を予感せずにはいられない。

（ジルヴァ）

「管制!!まだ敵の所在はつかめないのか!?このままだと廃都市が完全にガラクタになってしまうぞ!!」

女であるにもかかわらず、男勝りの強い口調で通信機に怒鳴り込む彼女。

彼女の名前は「ジルヴァ・ディロン」。年齢は25歳。

小柄な体格と可愛い容姿から、しばしば20歳前後に見間違われがちだが、その外見とは裏腹に、彼女の言動はとても汚く性格も荒い。

一回りも年上の上官である「ジジ・トレース」に対しても、タメ口というよりは完全に命令口調であり、軍の中ではある種、問題児的な扱いをされることが多い。

彼女が搭乗するＤＱは、かなり古い型の機体ではあるが、トゥアム共和国軍内では至るところで目にすることができる良機「ＮＭＤＩＡ－ヒセギア」だ。

マイルバッハ社製のこの機体は、そのほとんどの作りが一昔前のものであり、スマートな人型とは決してお世辞なりにも言えないのだが、駆動システム、制御システム、機体機構と、総合的バランスに優れ、いまだに陸軍ＤＱパイロット養成所の新人演習時に使用されるなど、ＤＱ操舵のイロハを覚えるには最適な機種の１つである。

しかし、ＤＱ産業界において、その勢力を拡大し始めた「マムナレス社」の影響により、マイルバッハ社は一般市場から追いやられるまでに至り、今ではＤＱ本体はおろか、交換部品、オプション火器に至るまで、すべてが入手不可能な状態になってしまった。

軍での運用については、マイルバッハ社より商標権が譲渡されたため、部品の生産から機体の改良まで、軍の開発部において可能なのだが、悲しくも一般市場では、もうお目にかかることの無い機体となってしまったのだ。

（管制官）
「こちら管制塔。所属不明機の識別確認出来ました。帝国製ポッド反応を示すＤＱが５機。機種は不明。中型機が２つ。大型機が３つ。内１機は南西巡回部隊と交戦中。他４機は機影をロスト。有線索敵網に依然反応はありません。」

（ジジ）
「上空からを飛来するミサイルは、我々の持つ兵器では対処しきれない。固定対空砲の用意を要請する。急いでくれ。」

（管制官）
「カール対空砲塔の使用にはゼフォン特佐の許可が要ります。私達の権限では指示できません。」

この管制官の言葉に、汚らしくジルヴァが舌打ちをかました。

（ジルヴァ）
「当の本人はパークで高見の見物ってか？本当にふざけた野郎だな。」

（ジジ）
「ジルヴァ。言葉を選べ。我々は軍人なんだぞ。」

彼女に対して言葉を選べとは言ったものの、ジジ自身、同じような思いを抱いていたのだろう。

彼は自分の部下を怒鳴りつけるでもなく、静かに軍人たる本分を語るに止めた。

（管制官）
「その代わり、ニュートラルエリアに待機中の、非常勤パイロットに出撃を要請しています。対空火器装備の上、ポイント到着まで・・・ザッザザ。・・・持してく・・・。ザザッ。」

・・・と。突然、悪化した通信状況に、管制官の声が途絶えてしまった。

なんだ？

ジルヴァは直感的に何か嫌な予感がした。

（ジジ）
「非常勤パイロットといっても、パークで戦争ごっこして遊んでいるやつらだろう?ジルヴァ。奴らをあてにするなよ。」

ジジはこの通信状況の変化を、まったく気にする素振りは無い。

このような通信障害は、この地域においてはさほど珍しいものではないからだ。

しかし不思議と、何か不気味な影の気配を感じていたジルヴァが、しきりにサーチレーダで周囲の状況を確認していた時だった。

ピキィィィィィィィィィィィィィ!!

けたたましい音と共に、耳障りな高周波があたり一面に鳴り響いた。

（ジジ）
「な・・・なんだ!!何の音だ!!」

ジジがその不気味な影の存在に気づいた時にはもう遅かった。

頭の裏まで響き渡ってきそうな高周波に続き、大きく大地を揺るがす振動が彼の身体を襲う。

そして次の瞬間、彼が搭乗するヒセギアの背後から、巨大な鉄の塊が飛び掛ってきた。

（ジルヴァ）
「ジジ!!」

ガッシャーーン！！

ジルヴァの叫びも虚しく、その巨大な鉄の塊が繰り出したハンマーのような右腕が、ジジが振り返るよりも先に、ヒセギアの頭部に振り下ろされる。

かなりの重量を持ち合わせていると見られる、その大型ＤＱの攻撃力は、ヒセギアの頭部を押し潰すに止まらず、ＤＱのセンターラインである腰から膝に至るまで、各部位にて鈍い金属音と共に激しい火花が飛び散った。

そして、まったくバランスを取ることが出来なくなったヒセギアは、再度襲い掛かった大型ＤＱの振り回した左腕によって吹き飛ばされると、地面に倒れこむよりも先に、大きな爆発を伴って四散してしまった。

（ジルヴァ）
「こ・・・こいつ！！」

破壊されたヒセギアから立ち上った大量の黒煙の向こうに、チラチラと見え隠れするその大型のＤＱは、背丈的にヒセギアと殆（ほとん）ど大きさが変わらない程度に見える。

しかし、通常の格闘戦において、あそこまでヒセギアを吹き飛ばしたとなると、それがかなりの機体総重量を有しているのであろうう。

そして、ゆったりとした風に流されるように、靡（なび）いた黒煙の向こうから、次第にその姿がはっきりとジルヴァの目に映し出された。

真っ黒に彩られたその大型ＤＱは４本足歩行タイプのようで、後ろ足より前腕の方がかなり大きく作られており、外見的にはまるで「巨大なゴリラ」のようにも見える。

両腕先端部にマニピュレーターは無く、おそらくはジジを葬り去ったであろう、極太な円筒形の両腕を携えていた。

帝国製のＤＱについては、あまり量産型という機種が存在せず、その多くが所属貴族固有の特殊なＤＱに分類される。

これは帝国内において、未だ戦争における主力兵器として、ＤＱが役割を担うまでに至っていないと言う理由もあるが、もう一つ、帝国ならではの特色が挙げられる。

高級兵器ＤＱの開発は、帝国貴族達にとって、自家の誇りと力を周囲に知らしめる「象徴」として用いられることが多い。

そのため、自らの財力を持って持って、自家特有の優れたＤＱを開発し、他家への力の差を見せ付ける。

近年、そういった風習が帝国貴族達の間に根付いていたのだ。

そのため、ＤＱＡ大会のようなの戦いは、形は違えど帝国国内でも非常に人気が高く、そういった場所で活躍するＤＱパイロットは、貴族、平民、貧民問わず、誰しもが尊敬する偉大な人物として崇（あが）められる。

帝国貧民階層者にとっては、最も手っ取り早い「成り上がりの場」となるのだ。

（アレナルティカ）
「あっははは!!フェザン。面白いわよ。雑魚よ雑魚。ＮＭＤＩＡなんてただの玩具じゃないの・・・って。・・・あら?」

通信機の操作を間違えたのか、それとも故意なのかは解らないが、おそらくは仲間との会話をしていたであろう女性の声が、突然、外部スピーカーを通して森林地帯周囲に響き渡る。

そして、その女性の発言に対して、小さく舌打ちをして見せたジルヴァもまた、外部スピーカーを通して言葉を発した。

（ジルヴァ）
「黒いＤＱに告ぐ!!ここはトゥアム共和国の有地となっている。貴方の所属国と目的を述べよ。さもなくば即刻発砲する。武装を解いて投降せよ!!」

ちっ・・・。女か・・・。

両者が共にそう思ったに違いない。

（フェザン）
「アレナルティカ。任務を忘れるな。まずは情報の正否の確認だ。開戦の口火を共和国に切らせるつもりは無いぞ。」

（アレナルティカ）
「はいはい。解ってますよ。」

仲間からの通信に、少し溜め息交じりでそう返した女性は、前述通り、貧民階層からの成り上がり兵士の一人だ。

細く長い金髪をポニーテールに結わえた彼女の瞳は、時折、不気味に赤い光が点滅しているのだが、これは、彼女の瞳が直接光っているわけではなく、バンダナの様に頭に巻きつけている装置から送られた光で、直接網膜に情報を表示すると言うものだ。

彼女は瞳に随時映し出される情報をチェックしつつ、突如として鋭い眼つきで目の前のヒセギアを睨め付けると、再び外部スピーカーを通してこう告げた。

（アレナルティカ）

「我々は帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊所属の兵士だ。今回の我々の任務は、諸外国と共謀し、帝都ルーアンの平和と秩序を脅かす、ロイロマール家兵士達の排除だ。この付近へと落ち延びた兵士達の引渡しを要求する。」

共謀する？？落ち延びた兵士？？

トゥアム共和国軍内でも下層に当たる一般兵のジルヴァには、到底答えることの出来ない要求なのだが、そんなことは、黒いＤＱのパイロットにも解っていたことだった。

（ジルヴァ）

「そのような理由があるならば、まずは正式に交渉の場を設けてから訪れるべきではないのか！？このような無差別な攻撃は、決して許される行為ではないぞ！！」

解っていないな・・・。

ポニーテールの女性は小さく溜め息をつき、不気味な笑みを一つ浮かべて両目を閉じると、外部スピーカーのスイッチをＯＦＦにした。

彼女には勿論、ジルヴァとの交渉を続けるつもりも、戦闘を停止するつもりもまったく無い。

（ジルヴァ）

「止まれ！！動くな！！」

黒いＤＱの両肩から吐き出される湯気の様な熱風が、一瞬の静寂の後に勢い良く噴出され始める。

そして、低い体勢を保ったまま、突如としてヒセギアに向けて突進を開始した。

最近ではホバー移動が主流となったＤＱではあるが、両手両足を４本使用する黒いＤＱの移動方法は、完全にゴリラの移動方法に酷似している。

見れば見るからに滑稽な移動方法だが、瞬発力はホバー移動に勝り、巡航速度は二足歩行に勝ると、まさに格闘専用ＤＱには打って付けの移動方法だ。

ジルヴァは即座に、構えたＡＳＲの照準を黒いＤＱに宛がうと、躊躇（ちゅちょ）無くそのトリガーを引いた。

ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４はさほど攻撃力のある兵器では無いにしろ、それでも近距離で被弾を許せば、ただでは済まないほどの威力は有している。

しかし、何故だろう。

激しい銃撃音に合わせて発射された大量の弾丸は、確実にこの黒いＤＱに命中しているはずなのだが、この黒いＤＱの突進が止まることは無い。

（ジルヴァ）
「こ・・・この雌ゴリラが！！」

（アレナルティカ）
「私達の本当の目的はロイロマール家と結託する諸外国の抹殺。残党達引渡しによる真実の解明なんてどうでも良い。私達が欲しいのは、残党達が死を持って残してくれる開戦の口実よ。」

まったくジルヴァの攻撃が利かないのは、何も彼女の腕が悪いからではない。

もはや、中古品となった量産機ヒセギア程度では、特注品たる黒いＤＱに太刀打ちできる術は無いのである。

話し合っても無駄。攻撃しても無駄。逃げ回っても無駄。

これ以上彼女に、一体どうしろというのだろうか。

攻撃の意思さえ失い、ただ黒いＤＱの前に佇むその姿は、もはや「打ち込み人形」のようでもあった。

容赦なく振り下ろされるハンマーのような右腕が、ヒセギアの腰部分にぶち当たると、まるで達磨落としのように、いとも簡単にヒセギアの下半身がぶっ飛ばされた。

そして、支えを失った上半身が大地へと落下すると、激しい衝撃を

伴って、大量の土煙を舞い上げた。

（アレナルティカ）

「あっははは。Ｄｅａｄ－Ｋｏｎｇに銃は利かないよ。近距離で砲を使用するなら話は別だけどね。まあ、貴方はメッセンジャーとして生かしといてあげる。運が良かったわね。」

まったく効果的な抵抗することも出来ずに、大地へと這い蹲（つくば）ることとなってしまったヒセギアのコクピット内で、ジルヴァはただ、訪れる死を待つだけだった。

しかし、彼女の最後を演出するべき止めの一撃は、彼女が救助隊に助け出されるまで、訪れることは無かった。

02－14：〇開戦の雫［3］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「開戦の雫」

人それぞれに与えられた、多岐にわたる人生の選択肢は、誰にでも与えられし平等な特権。

しかし人は、目の前に広がる無限の世界に対し、常により良い道を選択して歩むことはできない。

己の意思により、その広大な地平線に未来を見据え、人生と言う一本のレールを敷いて走る。

ひたすらに走る。

「はぁ…はぁ…。」

時に訪れた究極の選択肢を選び抜き、時に降りかかる天変地異をかい潜り、人は死ぬまで、必死に走り続けるのだ。

「っはぁ！…はぁ…。…っはぁ…。」

両端を深い森に挟まれた凸凹の細い一本道を、ようやく直前にまで迫った廃都市に向かって、ただひたすらに走る少女。

振り返ることもなく、立ち止まることもなく、ただひたすらに走る少女。

随分と長い距離を走り抜けてきたのだろうか。

疲れ果てた体が異様に重く、繰り返す呼吸も途切れ途切れに強く胸を打ち鳴らす。

しかし、止まることを許されない思いが、少女の意識を走り続けるよう駆り立てて止まない。

行かなきゃ…。止めなきゃ…。

「貴様の正体を暴いてやる。もうすぐな。」

少女の胸へと突き立てられた鋭利な言葉が、深く深く心の奥底を貫いていく。

絶対に誰にも知られるはずがない。絶対に誰も信じるはずがない。

そう思って作り上げてきた、新しき少女の世界。

それが今、突き刺された傷口から流れ出した真っ黒な過去と共に、徐々に壊れていくような恐怖感を感じていた。

黒のノッポの言動。そして、あの男の言動。

おそらくはまだ、私の正体に誰も気が付いていないはず。

大体、そんなこと。誰も信じるはずがない。

それならまず、あの男を止めなきゃ。

さっきの呼び出し音が、大会本部からの緊急召集のシグナルだとすればきっと・・・。

絶対に暴かれるわけには行かない。

絶対に知られるわけには行かないんだ。

「はぁ……はぁ……。」

しかし、少女が抱く強い思いとは裏腹に、疲れ果てた体が次第に彼女の前進を拒みだす。

そして、やがて少女は激しく突き上げる鼓動の苦しさから、その場に倒れこむように蹲(うずくま)って荒い吐息を繰り返した。

こみ上げる思いを噛み締めて、必死に前へと進もうと意識は先行するものの、どくどくと脈打つ疲労感がそれを許さない。

こんな…。こんなことしている場合じゃないのに…。

そう呟きつつ、必死に少女が再び進むための体力の回復を待っていたときだった。

ドドーーーン！！

（セニフ）

「…！？」

何処からともなく響き渡って来た大きな爆発音。

それまで緩やかな流れだった大気の流れが一変、一斉に周囲の木々達を踊り狂わせ、小刻みな振動で震える大地が唸りを上げる。

その爆発はそれほどセニフの近くで発生したものではないようだが、それでも身の危険を感じさせるには十分な程であった。

驚いた表情でセニフが周囲を見渡すと、見上げた大空にくっきりとの白い一本の帯が流れているのが見える。

そして、ゆっくりと彼女の頭上を通りすぎると、ニュートラルエリア繁華街付近へと、吸い込まれるように帯が落ちていった。

ドッドーーーン！！

（セニフ）
「あぁ・・・。・・・。」

再び大きな爆発音が響き渡ると共に、目の前の崩れかけたビルとビルの間から、真っ赤な火柱と真っ黒な煙が立ち上る。

このブラックポイント都市において、明らかに異常な事態が発生していることは確かだが、吹き荒れる暴風と爆音に包まれた中で、セニフはしばし、呆然（ぼうぜん）と天へと立ち上る真っ黒な煙を見つめていた。

彼女の体を襲う倦怠感（けんたいかん）が、赤々と照りつける炎の渦によって加速され、震えた両足は、もう前に踏み出すことも出来ない。

滴り落ちる汗すらも、氷のような冷たさを感じてしまうほどに、ゾ

クゾクとした悪寒が背筋に突き刺さる。

セニフは、目の前で起きた惨劇から視線を切り離すように、ゆっくりと俯(うつむ)くと、次第に肩を震わせて泣きそうな表情で拳を握り締めた。

（シルジーク）
「セニフ！！」

そんな時、彼女の背後から一人の少年が声をかける。

セニフが振り向くと、そこには必死になって彼女の元へと駆け寄ろうとするシルの姿があった。

おそらくはセニフと同様に、長い距離を走り続けてきたであろうシルは、ようやく見つけたセニフの後姿に、少し安心した表情で走るスピードを緩めたのだが、この時何故か、シルの姿を見つけたセニフは、突然逃げ出すように走り出したのである。

（シルジーク）
「な・・・！セニフ！！おい！！待て！！」

彼には、何故ここで更に逃げ出すのかまったく理解できなかったが、苦しそうな表情に、更に拍車をかけたような表情で、必死に彼女を呼び止める。

しかし、後ろを振り返ることもなく逃げ続ける彼女は、一向に止まる気配は無いようだ。

ちっくしょう！！！！！

疲れた身体に鞭を撃ち、瞳の奥に男子たる力強さを燃え上がらせて、シルは思いっきり全速力で彼女の後を追走した。

彼はそれほど体格的に恵まれた方では無いのだが、小柄で体力に劣るセニフがそれを振り切ることが出来るはずもなく、シルがようやくセニフの左手を掴み取った。

（シルジーク）
「待てよセニフ！！なんで逃げるんだよ！！」

（セニフ）
「離してよシル！！」

捕まって尚、その手を振り解こうと暴れるセニフに対し、シルは身動きが取れぬよう彼女の両手首を強引に掴み上げると、自分の方へと彼女を向かせて、必死に落ち着かせるように言い聞かせる。

（シルジーク）
「落ち着け！！セニフ！！落ち着けよ！！」

（セニフ）
「嫌！！行かなきゃ！！離して！！」

（シルジーク）
「一体どこに行こうって言うんだよセニフ！！さっきからお前おかしいぞ！！どうしたって言うんだよ！！」

（セニフ）
「・・・。シ・・・。シルには関係ない・・・。関係ないじゃん！！」

（シルジーク）
「関係ないわけ無いだろ！！2年も一緒にいた仲間だろう！！一人で勝手に暴走して、また俺を困らせるのか！？」

（セニフ）
「だ・・・。だって・・・・・・・。」

（シルジーク）
「それに、さっきの集団だって、お前何か知っているんだろう？一体奴ら何者なんだよ。なんでセニフを狙っているんだよ。」

（セニフ）
「うぅぅ・・・。う・・・。・・・し・・・・・・知らない。知らないよ・・・。」

（シルジーク）
「俺に言えないような事なのか？」

（セニフ）
「う・・・。うぅぅ・・・。」

それまで必死に抵抗を続けていたセニフだが、男であるシルに対して腕力で敵うわけもなく、次第に落ち着きを取り戻したように、静かな語り口調となって行く。

しかし、両手首を掴(つか)む力をゆっくりと緩めながら優しく問いかけるシルに、決して彼女の本意となる思いは帰っては来ない。

そればかりか、何か心に引っかかるものがあるような、うなり声を

上げたセニフは、やがて、俯(うつむ)いて泣き出してしまった。

02－15：〇開戦の雫［4］（前書き）

前の1話が長すぎたので2つに分割しました。

02－15：○開戦の雫［4］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「開戦の雫」

突然、襲い掛かってきた謎の集団。

そして、その謎の集団と繋がりがあるであろう男と女。

更に、そんな奴らの狙いが、この小さな少女一人だとは・・・。

しかも、何やらブラックポイントの様子が次第に不穏な空気に包まれ始めている。

明らかにＤＱＡ大会の戦闘エリアに関係なく爆発が発生しているようだ。

一体、何が起きているのか解らないが、これも、あの女の言った・・・。

セニフに対する数多くの疑念は、シルの脳裏にこびりついて離れないのだが、泣きながら抱きついてくるこの少女の姿に、シルはそれ以上の質問を投げつけることが出来なかった。

（シルジーク）
「セニフ・・・。とにかく周りの様子がおかしい。一旦安全な場所まで・・・。」

ドドーーーン！！ドドーーーン！！

それまで、断続的に遠くで鳴り響いていた爆発が、突如として彼等二人の程近くで発生する。

それは、遠くで鳴り響いていた爆発とは、何か種類の違う小さなものだったが、生身の人間である彼等にとってはどちらでも同じことだ。

早く安全な場所まで逃げないと・・・。

そう思ったシルが、強引にセニフの腕を引っ張り、近くの廃ビルの中へと逃げ込もうとするのだが、何故か再びセニフの抵抗が始まる。

（シルジーク）
「くっ・・・!!・・・セニフ!!何やってるんだ!!ほら走れ!!」

（セニフ）
「痛い!痛い!・・・離して!私やっぱり・・・。」

ドガーーーン!!

そんなイザコザを果てしなく繰り返すかに見えた二人の近くで、再び大きな爆発が発生する。

シルが向かおうとしていた廃ビルの裏手側で発生したその爆発は、かなりの威力を有していたのだろうか、二つ先で傾いていた廃ビルの一つをいとも簡単に吹き飛ばすと、すぐ脇を通る大き目の道路に大量の瓦礫を撒き散らした。

そして、ゆっくりと細い小路地から這い出してきたＤＱが、ヨタヨタと覚束(おぼつか)ない足取りで反対側の廃ビルへと衝突した。

（シルジーク）
「陸軍のヒセギアだ！やられてる！」

黒い煙を後部テスラポット付近から噴出しているそのヒセギアは、かなりの損傷を負っているようで、本体を包む装甲はすでに剥がれ落ち、左腕は肩からごっそり無くなっているようだ。

恐らくは「何者か」と戦闘を繰り広げている最中なのだろうか、そのヒセギアは即座に体勢を立て倒すと、アサルトライフルを構えて大量の弾丸を発射した。

と、ここまでなら普段から目にしているＤＱ同士の戦闘と変わりないのだが、現在、戦闘エリアにいるセニフとシルは、完全に生身の人間である。

（シルジーク）
「うあぁぁぁぁぁぁ！！」

（セニフ）
「ひっ・・・！！きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

ドズン！！ドズン！！ドズン！！

大量に頭上から彼らに襲いかかったものとは、ヒセギアが放った弾丸の残りカスたる「大きな薬莢」の豪雨。

着地と共に重たい振動を発するその巨大な鉄の塊は、勿論人間の頭

上に落ちてきたのであればひとたまりも無いほどの大きさである。

そして、すぐ脇5メートルほど離れた地点に落ちてきた薬莢に、彼等は悲鳴を上げる事しか出来なかったのだが、運良くも彼等に最も接近した薬莢はそれ一つだけであった。

（シルジーク）
「セニフ!!一緒に来い!!早く離れるんだ!!」

（セニフ）
「う・・・うん!!」

それまで、頑なにシルの手を振り解こうとしていたセニフだったが、さすがに巨人達の戦闘を前に身の危険を感じたのか、彼女はシルに手を引かれるままにその場から走り出す。

しかし今度は、逆に大量の弾丸をお返しされることになったヒセギアの頭部が吹き飛び、大きな弧を描いて二人の行く手に墜落することになる。

（シルジーク）
「くっ・・・。」

もはや巨人達の戦闘エリアにおいては、どこに逃げようとも安全な場所など無い。

願わくば離れた場所へと戦闘エリアを移動してくれることを祈るばかりなのだが、最悪なことに、廃ビル郡の奥の小路地から、勢い良くヒセギアの相手であるＤＱが飛び出してきた。

まったく見たことも無い姿形をしたその機体は、恐らくは機種的にはパングラードと同じタイプであろう青いＤＱで、人が前かがみになった様な体勢を維持している。

左右には飛行機のような翼が２枚広げられており、その下から覗いた両腕にはアサルトライフルが握られていた。

そして、最上部背中部分に取り付けられたミサイルポッドが、少し射角を調整したように見えた瞬間、その青いＤＱから３発のミサイルが発射された。

（シルジーク）
「セニフ！！伏せろ！！」

（セニフ）
「きゃうっ！！」

とっさにセニフを抱きかかえたシルが、思いっきり地面に滑り込むように身を伏せた。

シュルシュルと空を渦巻くような音を発して飛来したミサイルは、１発が右手の廃ビルを吹き飛ばし、もう１発がほとんど無防備なヒセギアの機体へと命中する。

そして、最後の１発はよろめいたヒセギアの機体をすり抜けて、こともあろうかセニフ達二人の程近くまで到達してしまった。

ドッドーーーン！！

激しい爆音が３つ。時間差を伴って当該戦闘エリア内に響き渡る。

もはや棒立ち状態だったヒセギアの機体は、完全に上半身部分が吹っ飛び、主要な支えを失った廃ビルは根元から崩れ落ちる。

そして、爆心地周辺のあらゆるものを消滅させた爆風によって吹き飛ばされた土砂や破片が、広範囲にわたってドロドロと音を立てながら降り注いだ。

もはや運命を天に委ねることしか出来なかった二人は無事だったのだろうか。

（セニフ）
「う・・・。ゲホッ！・・・。ゲホッ！」

その時、大量に巻き上げられた粉塵の渦の中で、咳き込む少女が一人。

被った土砂を振り払いながらゆっくりと起き上がった。

どうやら彼女には目立った外傷もなく、ほとど無傷に近い状態で爆風の嵐をやり過ごすことが出来たのだが、それは彼女を守るように覆い被さったシルのおかげとも言える。

（セニフ）
「・・・シル。・・・シル！！」

心配そうに彼の上に被った土砂を払いながら、セニフが名前を呼びかけては見るものの、何故か彼はまったくピクリとも動こうとしない。

しかも良く見ると、シルの右足太腿付近から、じっとりと赤黒い血が滲み出しているのに気が付いた。

（セニフ）
「シル！！起きて！！シル！！」

（シルジーク）
「・・・・・う・・・。・・・・・・っっっ痛う！。」

セニフはどうして良いか解らず、驚いたような表情でしばしオロオロとしていたのだが、今度は力いっぱいシルの身体を揺さぶると、ようやく彼の意識が現実世界へと戻ってきた。

しかし、せっかく意識を取り戻した彼を次に襲ったものは、右足に走る激痛だった。

どうやら爆発の勢いで飛散した破片の一つが、彼の右足に突き刺さったのだろうと思われるが、あれほどの爆風に晒されたのだ。この程度で済んだと思った方が良いだろう。

（セニフ）
「・・・シル。・・・大丈夫？」

（シルジーク）
「ああ・・・何とかな・・・・・・いちち・・・。」

血の滲んだ作業服を、破れた箇所からビリビリと引き裂いて、傷の程度を覗き込んだシルは、痛がる表情に笑みを交えながらセニフにそう答えた。

どうやら出血はさほど多くは無いのだが、何かが深く突き刺さっているような感じだろうか。

少しでも動かすと、たちまちシルの表情が苦痛に歪んでしまうようだ。

セニフはすぐさま羽織った上着を脱ぎ去ると、被った埃を一生懸命に払ってから、彼の負傷した右足にぐるぐると巻きつける。

そして、未だ周囲を薄っすらと包んだ粉塵の向こうの様子を、仕切りに気にするような素振りをした。

そう。いくら彼等が先ほどの攻撃をやり過ごすことが出来たとはいえ、再び同じような攻撃をされたのではまったく意味は無い。

彼等の脅威は未だに見えない粉塵の外にあるはずなのだ。

しかし、先ほどヒセギアと戦闘を行っていた青いＤＱは、どうやら次なる戦場へと赴くためか、一旦大きなエンジン音を奏で出した後、次第に彼等二人からは遠ざかっていく様だった。

（シルジーク）
「さっきのＤＱ。どっか行ったみたいだな。」

（セニフ）
「うん。」

大気に舞う粉塵達が、緩やかに流れ去っていく中にあって、まるで、先ほどまでの戦闘が嘘だったかのように、静まり返った廃都市のほとり。

二人はようやくお互いを見合ったまま、安堵した様子で大きな溜め息を付いてしまった。

そしてセニフは、じっとシルの負傷した右足を見つめると、再びシルの表情を伺いながらこう言った。

（セニフ）
「シル。その足じゃ歩けないよね。もうちょっと行ったら、すぐ第二工場が有るし、私トラックか何か拾ってくるよ。シルはここで待っていて。」

（シルジーク）
「ちょ・・・。セニフ。ちょっと待て。」

恐らくは自分の非力さでは、シルを担ぐことも、支えて歩くことも難しいと思っての発言だったのだろうが、シルは突然、立ち上がろうとするセニフの左腕を掴(つか)むと、じっと彼女の表情を見つめる。

そんな彼の思いを察してか、セニフは少し困ったような表情をして見せた後、ニッコリとシルに微笑んでこう続けた。

（セニフ）
「大丈夫だよ。もう逃げたりしないよ。怪我したシルをこんなところに一人置き去りにして、どっかに逃げたりなんかしないよ。大丈夫。信じて。」

そして、セニフはゆっくりと彼の手を振り解き、後ろも振り返らずに粉塵の向こうへと走り去って行った。

シルは、そんな彼女の後姿を見つめながら、穂のかな笑みを浮かべて、天を仰いだままその場に寝転んでしまった。

セニフはきっと戻ってくる。

彼はそう信じていた。

02－16：〇開戦の雫［5］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ16「開戦の雫」

周囲に立ち並んだ大きなビル郡のど真ん中。

もはや人が住む気配もなく、完全に荒れ果てた廃都市の中央通りで、青い飛行機型のＤＱが、仕切りに周囲を伺う素振りを見せていた。

トゥアム共和国軍の旧式ＤＱヒセギアを撃破し、意気揚々と東に移動すること５ｋｍｉｌｓ。

ニュートラルエリア「アルファ」の中では、唯一僻地となる第二工場の程近くには、過去オフィス街だったと思われる巨大な建造物が数多く立ち並んでいる。

そのため周囲の見晴らしはすこぶる悪く、道幅の広い大通りと言えど、崩れ去ったビルの残骸によって、大きな瓦礫の山が出来上がっていた。

（ランス）
「ちぃ！罠か！囲まれたな。」

青い飛行機型のＤＱ「ｆｌｇｅｒ：フォル・レンサジア」のコクピット内で、サーチレーダの索敵感度を調節していたパイロットが、そう吐き捨てる。

迷路のようなオフィス街の中で、この青いＤＱを中心に赤い光点が

５つ程、彼を包囲するように取り囲んでいるのが、サーチモニターから見て取れた。

彼がこのエリアに到達するまでの間、新型サーチャーである「ジュダ」も全くの反応を示さなかったため、ほとんど無警戒のままこのエリアへと立ち入ったのが仇となったようだ。

しかし、突然に浮かび上がった５つの敵影は、なにやらこの青いＤＱの動向を伺っていたのだろうか、ほとんど発見したポイントから動き出す気配はない。

迷路のようなオフィス街の中で、迂闊（うかつ）に身動きが取れない状況に陥っていた帝国軍のパイロットは、痺れを切らしたように一つの光点へと照準を絞ると、自動照準追尾ミサイルを３発発射した。

ドゴン！！ドゴン！！ドゴン！！

その光点が示す大きなビルの裏手の方まで、迂回するように回りこんだミサイルが、適確にターゲットの反応を巻き込んで大きな３つの爆発を発生させる。

ビィィィーーーー！ビィィィーーーー！

しかし、何故かこの攻撃を全く回避する素振りを見せなかった光点に、パイロットは不思議な違和感を感じたが、突然、後方の赤い光点が動き出した事に気がつくと、コクピット内に響き渡ったけたたましいワーニング音に合わせて、勢い良くフットペダルを踏み込んだ。

そして、青いＤＱの後方バーニヤの左半分だけを大きく吹き上がら

せ、機体を強引に旋回させると、襲いかかる弾丸の斜線を見事に外して見せた。

おかしい・・・。

この時、何か周囲を取り巻く不穏な気配に、やっと気が付いたのだろうか、青いＤＱのパイロットは、動き出した後方の赤い光点の動きを観察しながら、再びサーチレーダーで周囲の状況を見渡してみる。

彼を取り囲む光点は、先ほどミサイル攻撃により消え去ったものを除いて４つ。

一つは後方から攻撃を仕掛けてきた奴だが、他の光点の動きが鈍すぎる。

そして何より、先ほどミサイル攻撃を派手に食らった光点は、大きく爆発するでも、微(わず)かに反応を残すでもなく、まるで幽霊のように消え去ってしまったのだ。

（ランス）

「ふん。ダミーイリュージョンか。姑息なまねを・・・。」

ダミーイリュージョンとはＤＱの機体反応と同じ、特殊な粒子を発して、敵のサーチレーダーを撹乱するための道具の１つである。

主な使用方法としては、フィールド散布するか、またはカプセルなど発信機を投擲(とうてき)するかのどちらかであるが、現在彼を取り巻く光点の反応から推測するに、恐らくは後者による撹乱(かくらん)作戦が展開されているのだと思われる。

しかし、仕掛けさえ解ってしまえばなんて事はない。

青いＤＱのパイロットの表情に、微かに笑みがこぼれ始めた。

動き回る１つの光点に、全く反応を見せない残りの３つの光点。

これではまるで、自分がここにいるのだと言うことを、表立って相手に伝えてるも同然。

ダミーイリュージョンの反応と自機の反応をうまくカモフラージュしなければ、このような作戦は全く意味を成さないのだ。

動き回る光点に視線を定め、攻撃するタイミングをうかがっていた青いＤＱのパイロットは、大きなビルの陰で相手の機体反応が二つに分裂した瞬間を狙って、猛烈な勢いでフォル・レンサジアを発進させる。

（ランス）

「馬鹿が！！いくらダミーを置いたところで、どれが本体か丸見えなんだよ！！そんなチンケなトラップに引っかかると思うのか！？」

サーチレーダーに映し出される分裂した赤い光点は、そのままの勢いで過ぎ去っていく一つと、予想通りビルの木陰で動かなくなった光点の一つ。

とすれば狙うはこっちに決まってるだろうが！！

青いＤＱは大きな通りと交差する小道に逃げ込んだ光点を追う様に、勢い良くＤＱを横滑りさせながら小道へと特攻して行く。

このとき、少し進行速度を落とし始めた光点の動きに気づいていたパイロットは、恐らくはこちらに反撃してくるのだろうと予想して、持てる火器をいつでも撃ち放たれるよう構えていた。

しかし・・・。

（ランス）
「何っ!?いないだと!!?」

彼のサーチレーダー上に映し出された赤い光点は、まさに彼の目の前に存在するはずであった。

それが一体どこへ消えたのだろうか。

（ユァンラオ）
「まさかこんなチンケなトラップに、引っかかるとは思わなかったな。」

まさか!?と一瞬、彼は思った。

驚いたまま、慌てたように周囲を見渡すパイロットを他所に、全くの反対方向となる真後ろから、夥(おびただ)しい数の弾丸が、フォル・レンサジアに襲いかかる。

無数の弾丸に貫かれた後部バーニヤからは、異常なまでの煙が噴出し始め、被弾したミサイルポッドは、装填していたミサイルごと大きな爆発を発生させた。

そして、爆風に煽られて体勢を崩した青いＤＱは、走行するそのま

まの勢いで廃ビルの外壁に接触すると、横に伸びた翼が根元からはじけ飛んだ。

ユァンラオは、余裕の笑みを浮かべて伸びた無精髭を擦りつつも、一気に勝負を決めてしまうべく、搭乗するリベーダー2のバーニヤを一気に吹き上がらせる。

恐らく移動していた光点の正体は、彼が球形のダミー装置を放り投げただけなのだろう。

彼はトゥアム共和国軍の正式な兵士ではないのだが、有事の際の非常勤パイロットとして登録されている、いわば傭兵のようなものだ。

ＤＱパイロットの養成施設として黙認されているＤＱＡ大会参加者達は、彼のように軍と直接契約を結んでいる者は数少ないが、それでも彼等がＤＱＡ大会に参加するにあたり、「とある条項」が盛り込まれた契約書にサインする必要がある。

それは奇(く)しくも、彼等にとって予想はすれども、決して実際に己の身に降りかかろうなどとは、決して思っていなかった条項だった。

（ランス）

「ちぃ・・・。くそったれが！！」

青いＤＱのパイロットは、すかさず自機の被害状況の確認作業に追われるのだが、このとき、猛烈なスピードで接近してくる真っ黒な大型機を視界に捕らえると、不安定な体勢のままで、強引に機体を旋回させる。

そして、右手に装備したＡＳＲ(アサルトライフル)「ＨＶ１９２－Ｔ６４」を構えて、

攻撃するためのトリガーを躊躇なく引いたのだが、この時、大量の弾丸を浴びせかけられたのは、迫りくるリベーダー2の機体ではなく、崩れかかった廃ビルの2階付近だった。

脆くも崩れかけていた主要柱部分を吹き飛ばされてしまった廃ビルは、激しい地鳴りを伴って、彼等二人の間にガラガラと雪崩落ちる。

青いDQのパイロットは、すでにこれ以上の戦闘をするつもりはないようだ。

（ランス）
「フェザン。こちらランス。レンサジアにかなりのダメージを負ってしまった。少し早いが撤退する。」

（フェザン）
「解った。セラフィもそろそろミサイルが切れる頃だ。バルベス。そっちはどうだ。」

（バルベス）
「不明な爆発が発生したポイントに、何か戦闘をしたような痕跡があるな。もう少し詳しく調査してみる。」

（フェザン）
「あまり正確な情報は不必要だぞ。でっち上げられる程度なら何でもいい。各自随時撤退を開始しろ。お祭りは終わりだ。」

通信機から流れてくる彼等の上司からの指示に、青いDQのパイロットはゆっくりと、損傷してしまった後部バーニヤに赤々と火を灯し始める。

機体の形状から見ても、かなりのスピードを出すことが可能なタイプだと思われるが、このときようやく点火出来たバーニヤは3分の1程度であり、なにやら時折異常な点滅を繰り返す物まであった。

（ユァンラオ）

「逃げるのか？・・・。ふっ。なかなか物分りの良いパイロットだな。」

ユァンラオは、大量の瓦礫（がれき）の山に阻まれた通りの向こう側を、じっとサーチレーダー上で確認していたのだが、ゆっくりと逃げ出すように戦場を後にし始めた青いＤＱの行動に対して、全く追撃する素振りを見せなかった。

彼にとっては、損傷を負って弱った相手など、もはや戦うに値しない無価値なものだったのだろうか。

徐に胸ポケットから取り出したタバコを銜（くわ）えると、ゆっくりとジッポで火を灯す。

そして、戦闘後の至福の一時を満喫するかのように、大きく吸い込んだ煙をコクピット内に吐き散らしながら、ＴＲＰスクリーンに映し出された廃ビル郡を見つめていた。

帝国軍がここまで表立って動いてくるとはな。

恐らくは小娘を狙って密かに動き出した奴等とは別の。

ロイロマール家に連動して動き出した奴等か。

くっくっく・・・。

ユァンラオは再びタバコの煙を吸い込むと、込み上げる笑いを堪(こらえ)きれない様子で、静かに笑みを浮かべた。

そして、ふと、リベーダー2のＴＲＰスクリーン左下に映し出されていた、細い小道を走る一人の少女の存在に彼は気が付いた。

02－17：〇開戦の雫［6］

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ17「開戦の雫」

それまで周囲に響き渡っていた激しい戦闘音が鳴り止み、小鳥の囀（さえず）りさえ聞こえてきそうなほど、シーンと静まり返った廃都市の中で、キョロキョロと辺りを見渡す少女が一人。

視線の先には目指す工場がもうすでに見えてはいたのだが、どうやら先ほどこの地域で繰り広げられていた戦闘において、一番近い大通りが廃ビルの瓦礫で埋まってしまい、別の道を選択している最中だったようだ。

しかし、元々捨て置かれた廃都市部な上に、過去にＤＱＡ大会の戦闘エリアにもなったこのエリアには、そんな都合の良い裏道が残されてる訳もなく、しばし、彼女はこの近辺を走り回っていたようだ。

そんな彼女が、とある小道を通り抜けて、少し大きめの通りに飛び出した時だった。

決してそれが、何かの気配を発しているような雰囲気はなかったが、漆黒に彩られた大きな物体に気づいた少女は、少し不思議そうな表情で左手の方に向き直る。

ＤＱ・・・？漆黒のＤＱ・・・。これって・・・。

彼女が飛び出した小路地のすぐ左手に立ち尽くしたままの大型のＤＱ。

それは、昨日少女が戦闘を繰り広げた漆黒のＤＱ「リベーダー２」だった。

未だ市場にも出回っていない最新型のＤＱが、そんなに数多くブラックポイントにあるはずもない。

まさか・・・。カーネルのＤＱ・・・？

少女はしばらくの間、呆然（ぼうぜん）と立ち尽くしたまま、その漆黒のＤＱを見上げていたのだが、やがて、真っ黒な上半身の前面装甲がゆっくりと持ち上がり始めると、一人の男が彼女の前に姿を現した。

その男とは、真っ黒なオールバックに無精髭を携えた大男「ユァンラオ・ジャンワン」。

完全に開ききったリベーダー２のコクピットハッチに身を乗り出して、遥かなる高みから少女を見下ろしたその眼光は、冷たいナイフの様に少女の身体に突き刺さり、その行動のすべてを縛り付ける。

激しい怒りと憎しみを抱いて。激しい恐怖と不安を抱いて。

必死になって少女が追いかけていたはずの男。

その男がまさに、少女の前に自ら姿を現したのだ。

しばし、唖然（あぜん）とした表情でその男を見つめていた少女だったが、

次第に彼を睨め付けるその眼光に鋭さが増し、ようやく物凄い威圧感さえ放つ男の視線に、戦いを挑むのだった。

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。何か言いたそうな目だな。」

（セニフ）
「お前・・・・・・。これから一体・・・。何をしようとしているの？」

（ユァンラオ）
「うん？」

（セニフ）
「一体、何をしでかすつもりなのかって聞いてるんだよ！！」

（ユァンラオ）
「さぁな。相手も帰ったことだ。ハンガーに戻ってゆっくりとタバコでも・・・。」

（セニフ）
「そんなことを聞いてるんじゃない！！」

セニフの激しい怒気が、立ちはだかる男に向かって襲い掛かる。

しかし、まるで微風（そよかぜ）でも吹いたかのような涼しげな態度のユァンラオは、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべるばかり。

決してセニフの問いにまともに答える様子など全く無いようだ。

（セニフ）
「なんで・・・。なんで私を付け狙うんだよ！お前・・・。お前が

一体、私の何を知っているって言うの!?」

（ユァンラオ）
「さて・・・。知らないから知りたいんじゃないのか。それとも貴様が教えてくれると言うのか?」

（セニフ）
「ふ・・・!!ふざけんな!!」

（ユァンラオ）
「ふっふっふ・・・。まあ、貴様などに教えてもらわなくとも、真実は必ず明らかになる。楽しみだな。」

見下ろすその表情に浮かべた、悪魔のように恐ろしい微笑が、セニフの背筋を凍りつかせる。

何を言っても無駄なことは解っていた。

解っていながらにして、それをただ見過ごす訳にはいかなかった。

しかし、一体、それを阻止するために、自分は何をすれば良いのか。

どうすれば良いのか。それが彼女には解らなかったのだ。

（セニフ）
「もう放って置いてよ!!私のこと・・・。お願いだからもう放って置いて!!」

（ユァンラオ）
「なぁに。取るに足らん奴ならそのまま捨て置くさ。それとも何か

？貴様自身が、自分を取るに足らない人間だとでも言いたいのか？」

（セニフ）
「・・・そ。・・・そうさ。私みたいな小娘の事調べて・・・。一体何が楽しいんだよ！！私の事調べたって、何もないよ！！絶対にやめて！！お願い！！」

（ユァンラオ）
「あっはっはっはっはっは！！貴様は面白いことを言うな。それだけ必死になるということは、それだけ自分が隠したい、何かがあると言うことか？ふっふっふっふ。」

（セニフ）
「っち！ちが・・・。そんな訳ないじゃん！私は！・・・。・・・・・・・。私はただ・・・。」

（ユァンラオ）
「ただ・・・。何だ？」

（セニフ）
「・・・・・・。ただ・・・。」

次第に言葉を弱めていくセニフに、ユァンラオが問いかける。

いや、問いかけるというよりも、誘導的尋問のような感じであろうか。

ユァンラオは不気味な笑みを浮かべ、一つ一つセニフの発した言葉に対して、重たくて頑丈な錠前を、ゆっくりと、いたぶる様にぶら下げていく。

自らの身を守るために発した言葉すら、自らの身を滅ぼしかねない爆弾となりえる状況で、一体、彼女に何が出来るのだろうか。

泣き叫び、許しを請うて、この男の目の前にひれ伏せば良いと言うのだろうか。

（セニフ）
「・・・何が望みなの・・・？」

力なくうなだれる彼女が、俯(うつむ)いたまま、再びユァンラオに言葉を発する。

このとき、もはや彼女の表情からは、攻撃的意思が消え去ろうとしていた。

（ユァンラオ）
「無駄だ。俺の望みとは、恐らくは貴様が一番知られたくない事実を暴くこと。たとえ貴様が逃げたとしても、地の果てまで追い詰める自身はある。まあ、貴様が俺の奴隷になると言うのなら許してやっても良い。数年も経てば高く売れそうだしな。ふっふっふ。」

（セニフ）
「な・・・!?だ・・・誰がお前なんかに!!」

（ユァンラオ）
「あっはっはっはっは!良いぞ。その目だ。その気概だ。」

突然に高らかに笑い出したユァンラオを睨み付けるセニフは、ギュッと拳を握り締め、再び激しい敵意を彼にぶつけ始める。

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。貴様のその勇気に免じて、良いことを教えてやろう。今ブラックポイントを攻撃している輩は、さっき貴様等を襲った集団とはまた別者だ。奴等の狙いは貴様ではなく、恐らくはストラントーゼ家の手の者だな。」

（セニフ）
「お前ら本気で・・・！お前らの目的は何なんだよ!!それも依頼人の指示なの!?まさか・・・。お前らの依頼人って・・・。」

（ユァンラオ）
「ん?何だ?なんか知っていそうだな。言ってみろ。」

（セニフ）
「・・・くっ・・・。」

そう言って興味津々な冷たい視線を送るユァンラオに、思わず問いかけたくなる言葉を胸に秘めながらも、彼女は決してその扉を開くことは出来なかった。

勿論それは、自分の首を絞めかねない爆弾である可能性を秘めているのだから。

（ユァンラオ）
「まあいい。とりあえず俺の仕事はここまでだ。後はゆっくり寛(くつろ)いで待つとするか。」

再び黙り込んでしまったセニフを前に、最後に大きくニヤけた表情を浮かべたユァンラオは、ゆっくりとリベーダー2のコクピットの

中へと姿を消していく。

（セニフ）

「ま・・・待て！！待ってよ！！」

決して実らない会話を繰り返すことになるであろう事を解っていながらも、セニフは必死に彼を呼び止めるのだが、そんな彼女の静止を完全に無視するかのように、リベーダー２のコクピットハッチが閉じられていく。

そして、巨大な人型兵器を前にどうする事も出来ないセニフを他所に、メインエンジンを始動し始めたリベーダー２のバーニヤが赤々と点滅を始めた。

やがて、ゆっくりと横滑りを始めたリベーダー２は、セニフが佇む位置から少し離れると、一気に吹き上がらせたバーニヤ音を周囲にぶちまけながら、その場を立ち去って行った。

しばし吹き荒れた生暖かい風に晒されながら。

見上げた空の向こうに、彼女は一体何を思ったのだろうか。

激しく彼女の心を包み込んでいく恐怖心と不安感。

出来ることなら、今すぐにも逃げ出したい気持ちで一杯だったであろう。

しかし彼女は、ぐっと唇を噛み締めてこれを堪えると、再び目の前の第二工場へ向けて走り出した。

02－18：○謎だらけのＴｏｍｂｏｙ

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ18「謎だらけのＴｏｍｂｏｙ」

（アリミア）
「外にＤＱが来ている見たい・・・。見たことも無いタイプだわ。部屋を移動したのはこのため？」

（カルティナ）
「そうね。あまり動かないで。見つかっちゃうわよ。彼が帰ったら医療施設までつれてってあげるから、それまで大人しくしてなさい。」

昨晩チームＴｏｍｂｏｙのパイロット達が宿泊した部屋と、全く同じ構造の部屋の中で、アリミアが仕切りに小さな小窓から、外の世界の様子を覗き込んでいた。

なにやら見たことも無い真っ赤なＤＱが１機。

住宅街の周囲をうろついているようだが、位置的に彼女の覗く小窓からでは、何も詳しいことは見て取ることが出来なかった。

彼女達が先ほどいた建物の、対角に位置した建物の中へと身を潜めたのは、カルティナの指示によるもので、彼女はすでにこうなる事を予測していたのだろうか。

部屋の外で忙（せわ）しく活動するＤＱの駆動音を気にする素振りも見せず、彼女はひたすら持ち込んだノート型ＰＣのキーボードを叩き続けて

た。

（アリミア）
「外の奴も貴方達の仲間なの？」

（カルティナ）
「まさか。」

アリミアの言葉に、軽く反応を見せたカルティナだが、打ち込み作業を全く止めることもなく、黙々と作業を続けていた。

こんな危険な場所に潜んでいながらにして、全くそれに脅える様子もなく平静さを装う彼女は、一体何を一生懸命に作業しているのだろうか。

恐らくは先ほどユァンラオから手渡された、ディスクの中身を確認するための作業なのだろうが、彼女としては中々に手子摺(てこず)ってっているようで、少し苛立(いらだ)った様子を伺わせていた。

（アリミア）
「奴らの目的は何？貴方だってそうよ。一体、何が目的なの？貴方達も、セニフを狙っているの？」

小窓のすぐ傍(かたわ)らで壁に張り付くようにして佇んでいたアリミアは、とりあえず応急処置を済ませた右肩を擦(さす)りながら、カルティナに問いかけた。

突然襲いかかってきた集団の仲間でもなければ、今現在外をうろつくＤＱの仲間でもない。

とすれば一体彼女とは何者なのか。何故、セニフが狙われなければならないのか。何を目的としてこれほどの騒ぎを起こすのだろうか。

アリミアの中で沸き起こる疑念の渦は、決して何か良き結論に達することもなく、ただ同じ所をグルグルと循環してしまうのだ。

（カルテイナ）
「貴方・・・。本当になにも知らないの？」

（アリミア）
「何をよ。」

（カルテイナ）
「彼女の事よ。」

（アリミア）
「セニフの事？」

（カルティナ）
「うっふふ。そうよ。私たちより貴方の方が色々知ってるんじゃなくて？」

何か含みのあるような言い草ではぐらかすカルティナは、一つ大きく深呼吸をしてアリミアに微笑んで見せた後、再び激しくキーボードの打ち込み作業へと没頭し始める。

この女・・・。本当にセニフのことを何も知らないまま、あのような騒動を引き起こしたと言うのだろうか。

アリミアのカルティナを睨み付ける視線が強みを増す。

いや、全く知らないのであれば、あの事件は起きなかったはずだ。

ということは、恐らく私達の知らないセニフを、彼女は知っているということか。

自分が知っているセニフの事など、所詮取るに足りない、上辺だけの情報に過ぎない事は解っている。

今でさえ明るく、破天荒な振る舞いを繰り返す元気の良い少女だが、初めて会ったときは全く正反対の雰囲気を醸(かも)し出した無口な少女だった。

勿論、過去に何か辛い事や悲しい事が有ったからなのだと推測はできるが、どこか普通の人とは違った違和感のようなものを、セニフに対して感じたことを覚えている。

当時の私も酷かったけど、セニフとは決して仲良く話をするような仲ではなかったはずだ。

いつから仲良く話をするようになったのだろう。

私がオーナーに拾われてチームＴｏｍｂｏｙに入ったのは2年前。

他の皆もほとんど変わらない時期に集められたと聞いてるが、それでも私が一番最後で８人目のメンバー。

チームから二人が抜け、現在では６人のチーム編成。

そう言えば、抜けた二人はどうしているのだろうか。二人・・・？

そうだ。そのうちの一人。名前は確か・・・。・・・ビアホフ。
長く伸びた顎鬚（あごひげ）に優しい目をした中年男性。

彼は確か、当時唯一セニフと一緒に行動していた人物だ。彼はセニフの事を知っていた人物なのだろうか。何のためにチームを抜けて、どこへと行ったのだろうか・・・。

（カルティナ）
「よーし！！開いたわよ！！」

突然、声を張り上げたカルティナの行動に、一瞬、驚いたような表情をしたアリミアが、現実世界へと引き戻される。

目を輝かせて喜びの笑みを浮かべたカルティナは、更にキーボードの打ち込み速度を加速させると、ブツブツと何か呪文のような独り言を呟きだす。

そして、最後の一打となるエンターキーを勢い良く弾いた彼女は、しばらくの間、表示が切り替わったディスプレイをじっと見つめていたのだが、その後全くピクリとも動くこともなく、次第に驚きの表情を滲（にじ）ませていった。

（カルティナ）
「・・・これって・・・。・・・えっ？まさか。・・・・・・。」

一体、何があったというのだろう。

少し警戒心を抱きながらも、そんなカルティナの様相の変化に興味

を覚えたアリミアは、ゆっくりと彼女の元へと歩み寄る。

すると、不意にアリミアの方へと向き直ったカルティナは、目を細めながら不敵な笑みをアリミアに投げかけた。

（アリミア）
「今度は何の悪巧み？」

（カルティナ）
「さ～て、なんでしょうね。私達の目的なんて、貴方には関係ないんじゃなくて？」

両手を左右に開き、再び惚(とぼ)けた仕草でカルティナが答えて見せたのだが、アリミアはそんな彼女を物凄い形相で睨み付けると、今度は少し低音を利かせた声を発した。

（アリミア）
「これ以上私の周りで何か不穏な動きを見せたら、私が黙っていないわよ。私に出来ないと思う？」

氷のように冷たく突き刺さる瞳の奥底に、激しく燃え上がる怒りの業火を滾(たぎ)らせ、今まさに襲いかからんばかりの殺意を放つアリミア。

しかし、カルティナも一向にこの圧力に屈することなく、じっとアリミアの攻撃的視線を辿って彼女の瞳を見つめていた。

（カルティナ）
「貴方の目・・・。ユァンラオの好みね。気をつけなさい。」

緩やかに流れる部屋の中の空気が異様に一変し、静かながらも激し

い争いを始めた二人だったが、徐にノートＰＣのエンターキーを押下したカルティナが、アリミアの視線を誘導するようにディスプレイの向きを傾けた。

情報屋たる人間は、決して自らの持つ情報を簡単に開示する事はないのだが、もしかして見ろと言う事なのだろうか。

そんな彼女の素振りに、少し躊躇したアリミアだったが、再び目線で誘うカルティナに促されて、ゆっくりとディスプレイを覗き込んだ。

そのディスプレイ情報にはなにやら理解不能な数字の羅列が、びっしりと表示されていたのだが、画面の左側にはなにやら少女の顔写真が映し出されている。

その少女は赤い髪の毛を後ろで結わえた可愛らしい少女で、真っ赤なドレスに高価そうなネックレスを身に付け、綺麗に光り輝く髪飾りを携えた姿からも解る通り、かなり身分の高い人物であることは確かだ。

（アリミア）
「・・・何？・・・これ・・・。」

（カルティナ）
「何って？見ての通りよ。これが今回私達に齎された報酬よ。まさかとは思ったけど、私も驚いちゃったわ。この情報の真偽はまだ解らないけど、かなり信憑性は高くってよ。貴方もどこかで見たことあるんじゃなくて？」

どこかで見たことがある？この少女を？

（アリミア）
「・・・。帝国の・・・・。・・・・皇女??」

（カルティナ）
「当たりね。」

不思議そうにカルティナの表情を伺うアリミアには、彼女が一体何をしたいのかが解っていなかった。

彼女達が必死に欲しがった情報が、この皇女の情報だったのだとでも言いたいのだろうか。

（カルティナ）
「3年程前に、当時の代理皇帝ディユリス帝を、毒殺した容疑で処刑された皇女。こんな噂を聞いたことないかしら?もしかしたら彼女がまだ生きているんじゃないかって噂。」

（アリミア）
「えっ?」

カルティナはそう言うと、さらにエンターキーを押してアリミアの表情を覗き込む。

そして、次に表示された少女の姿を目の当たりにしたアリミアは、石像の様に凍りついたまま動かなくなってしまった。

これは・・・。セニフ・・・?

最近・・・。いや、これはＤＱＡ大会期間中に撮られた写真だ。

年齢に身長、体重。そして身体的特徴。

そして、全く意味不明なこの数字の羅列は・・・？

（カルティナ）

「これはね。貴方達が酒場に来た時に、酔っ払っている彼女から採取したものよ。ＤＮＡ情報を数値化したものね。いい？照合させてみるわよ。」

全くカルティナの問いかけに反応を見せないアリミアを他所に、更にエンターキーを押したカルティナが呟く。

（カルティナ）

「元々依頼人から渡された情報は、彼女の簡単な身体的特徴と、誰のものとも解らないＤＮＡ情報だけ。最初はただの人探しの依頼だと思っていたのよ。人探しってね。一見不可能なように見えるけど、ある程度の情報があれば出来ちゃうものなの。まあ、それなりの情報網を持っていればの話だけど、氏名、年齢、性別、身長、体重、人種、血液型、髪の色、目の色、肌の色。そして、行動、言動、性格なんかからも、対象を絞り込むことが出来るわ。それに今回は対象者のＤＮＡ情報もあったわけだし、私達にしては、かなり時間がかかった方かしら。幾ら成長期とは言え、まさか服装や髪型を変えただけで、誰にも気づかれないなんて。まあ、全く別の国で、しかもＤＱＡ大会でパイロットとして遊んでるなんて、誰も思わなかったでしょうけどね。」

（アリミア）

「でも・・・！まさか！こんな・・・。」

先ほど表示された少女の情報と、後に表示された少女の情報の、照合結果を映し出したディスプレイから、信じられないといった表情のアリミアは、じっと視線を外す事が出来ない。

ディスプレイに表示された照合結果は「完全一致」。

それがこのＰＣが下した照合結果だった。

（カルティナ）

「確かにこれが本当だとすれば、今回の話も納得がいくわ。まあ、彼等が本当にこの情報を信じていればの話だけどね。知っている？まだ表立ってその気配は見せないけど、幼少皇帝誕生から帝国貴族達の動きがおかしいって話よ。そりゃぁそうよね。血系が断絶した形だけの皇帝を、いつまでも仲良く崇（あが）めているような、優しい連中じゃないだろうしね。」

照合結果画面に隣り合って並べられた二人の少女の姿は、似ていると言われれば似ているという程度であり、全く何の予備知識もない他人からすれば、決して同一人物と断定することは出来ないだろう。

誰にも悟られること無く、全く違う人物として普通に暮らしていても、それは不思議なことではない。

だとしても、まさか・・・。そんなことが・・・。

左手で口を覆い、驚きを隠せない表情のまま、晒（さら）された事実から視線を外す事が出来ないアリミア。

目の前にさらされたＤＮＡ鑑定情報が、本当に正しく双方のＤＮＡを用いられて判定されたものだという証拠は無い。

しかし、それが完全に偽りの結果だという証拠も無い。

では一体、本当の真実とは。本当の彼女の正体とは。

（カルティナ）

「貴方のその表情を見たかったのよ。どう？信じられないかもしれないけど、実際に彼等は行動を起こしたわ。この事実を知ってか知らずか、セニフ・ソンロという一人の小娘のためにね。うっふふふ。」

02－19：〇映し出された終焉

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ１９「映し出された終焉」

暗い夜空に輝く紅１つ。もう周りには誰もいない。

風の吹く音さえも・・・。光り輝く太陽さえも・・・。

「うっぅ・・・。」

何かを見ていたつもり。何かを聞いていたつもり。何かを感じていたつもり。

それまで多岐に渡って示された道標も、今はもう１つしか示さない。

すべての可能性は闇へと飲み込まれ、儚くも消え去ってしまった。

「痛っ!!。何・・・?右の頬が・・・。」

暗い夜空に輝く紅１つ。何かを求められていたつもり。何かを話していたつもり。何かを与えていたつもり。

それでも、そこには結局、自分一人しか居なかった。

何気なく辿る道筋に、孤独さを隠し切れないまま、表層の暖かさに触れて、ただ癒(いや)されていたいだけだった。

「何か?何が起きたの??。何か変・・・??」

ズキズキと痛みの走る右の頬を擦りながら、拉げたラプセルのコクピットハッチの隙間から差し込む、ほんの少しの木漏れ日に目を細める。

真っ暗な一人ぼっちの世界へと齎された一寸の光は、包み込むような優しさを携えた綿毛の様でもあり、また、自分を映し出す程に研ぎ澄まされたナイフの様でもある。

抱いた真っ黒な影へと突き刺さり、偽りの自分を脆くも簡単に消滅させるほどの純粋さ。

眩しい・・・。

未だ光に慣れない視力の代わりに、手探りで周囲の状況を確認する。

（ジャネット）
「そうだ・・・。ラプセルの稼動確認中に・・・。」

ようやく自分に起きた出来事を思い出したジャネットは、すぐさまラプセルのメインスイッチを探し始める。

普段から使い慣れたコクピット内部の構造は、たとえ何も見えない状況でも、ある程度どこに何があるのかは解るものだ。

確か、システムカードは刺しっぱなしだったはずよね・・・。えーと・・・。あ、あった。

彼女は簡単に見つかったメインスイッチの電源キャップを開くと、人差し指でそのボタンを少し長押しにする。

すると、周囲にパチパチッという軽快な電気音が広がった後、目の前のＴＲＰスクリーンに明かりが灯り始める。

そして、静かな駆動音にあわせて、ディスプレイ右下から、システムメッセージが流れ出した。

（ジャネット）
「スクリーンは大丈夫みたいね。」

随時表示されるシステム情報には、ＤＱ駆動システム上に深刻な障害が発生したことが示されていたが、どうやらスクリーン系には、さほど大きなダメージは無いようだ。

ジャネットは、すぐさまＴＲＰスクリーンを、外部カメラにリンクするようコマンドを打ち込むと、次第にスクリーン一面にじわり外の世界が浮かび上がってきた。

この時ジャネットは、眩いばかりに光が差し込む明るい風景を、脳裏に思い描いていたのだが、何故か彼女の目に飛び込んできた風景とは、今までとほぼ変わらぬ薄暗い映像であった。

（ジャネット）
「何・・・？これ？」

彼女の目の前に映し出された風景。

それは、サフォークの作業ミスによって、あべこべな表示のままだったのだが、大量の鉄骨や配管がスクリーン一面を覆っていたのだ。

ラプセルが身動き取れないわけだ・・・。

恐らくは爆風によって破壊されたハンガーの外壁が崩れ去り、ラプセルの機体を完全に埋め尽くすほど山積したのだろうと予想できるが、この状態では自力で脱出することなど不可能である。

ジャネットは憂鬱（ゆううつ）な表情のまま、深々とシートに腰を据えると、大きく溜め息を付いてしまった。

誰かが助けに来てくれるまで、どのぐらいかかるのかしら。

まさかこのまま誰も助けに来ないなんて事は・・・。無いわよね・・・。

それにしても、そこまですごい爆発だったのかしら。

こんなに残骸に埋め尽くされてしまうなんて。

ラプセルの中に居たから助かったようなもの。

もし、外にでも居ようものなら・・・。

（ジャネット）
「！？」

ジャネットがふと、あべこべに表示されている、ＴＲＰスクリーンパネルの一つに何かを見つけた。

赤い・・・？ペンキ・・・？いえ・・・。これは血・・・？人の血なの・・・？？

彼女が見据える視線の先には、折り重なる瓦礫の上を伝う真っ赤な鮮血があった。

ジャネットの視線が、彼女の意に反して、その源流となる元へと血の流れを辿って行く。

そして、たどり着いたその先の映像に、思わず目を丸くしたジャネットは、ハッとした様子で両手を口に当て、しばらく呼吸が出来なくなってしまった。

折り重なる鉄骨の奥から這い出した人の腕。そしてその隙間から流れ出す大量の血。

明らかにそこで、誰かが下敷きになっている様だった。

全く動くことも無いその手から、視線を外すことが出来ない。

このシャツの袖・・・。このシャツの色・・・。・・・・・・見た事がある。

そう言えば、マリオはどうしたのだろう。サフォークは?

爆撃の寸前、どこかに走って行く所までは見たけど・・・。大丈夫だったんだろうか。

まあ、あの子の事だから。きっと大丈夫よね。

きっとそのうち、私の事も助けにきてくれるわ。

（ジャネット）
「・・・・・・・・嫌・・・・。そん・・・・・・・・な・・・・。」

いつもそう。マリオは人見知りが激しいけど、私なんかより、ずっとしっかりしていて、賢いし、要領は良いし。

私なんかより、ずっと優しくて、逞(たくま)しいし、頼り甲斐があるし。

マリオは私の大切な弟。私はマリオをずっと見守ってあげたい。

大人にあこがれて、背伸びしているマリオが可愛くて。キスしたくなるほど可愛くて・・・。

馬鹿って言われたっていいんだ。私はマリオが大好きなんだもの。

（ジャネット）
「や・・・。ウソ・・・。ウソよ!!」

脳裏を駆け巡る思考とは別の場所で、非情にも疑念が確信に変わる。

絶対に信じない!!

絶対に信じない!!

絶対に信じない!!

でも・・・涙が止まらない。・・・震えが止まらない。

サフォークの馬鹿・・・。一体、何映しているのよ。全然違う物映

してさ・・・。

後でとっちめてやるんだから・・・。

馬鹿・・・。

馬鹿・・・。

（ジャネット）

「いやぁぁぁ

02－20：●Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ（前書き）

少し長いですが、まとまりが無くなるので分割しませんでした。すみません・・・。

02－20：●Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」
ｓｅｃｔｉｏｎ２０「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」

Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙとは「おてんば姫」の意味で、帝国国内では一般的に「最後の皇帝」ソヴェールの一人娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」をの事を指す。

彼女はＥＣ３８０年7月4日、当時の皇帝「ソヴェール・ランス・セルブ」と、「ディユリス・ランス・コンソート」の間に生まれた第一皇女である。

当時、帝国の皇帝が女性ということで、多くの皇子は望めないであろうという思いから、皇女が元気な姿で生まれた時には、帝国全土が大きな喜びと安堵に包まれた。

その後、ソヴェール帝が崩御（ほうぎょ）するまで、新たな皇子には恵まれず、皇帝血系絶命者となる皇女だが、彼女自身はあまり「皇帝」という地位に、興味を示さ無かったようである。

紅いく細い綺麗な髪の毛に、くりくりした大きい目が神々しい皇女だが、一般生徒に混じり、元気良く学問や武道に励む彼女の姿は、とても「皇女」と言う身分を感じさせなかった。

そればかりか、男子生徒と「帝国セントアンヌ学校」を派手に駆け回り、悪戯（いたずら）ばかりする「おてんば娘」のイメージが強かったようだ。

当時の学校内では、帝国貴族の子供達がその有り余る権力を無為に

行使すると言う社会問題が起きる中、皇女は帝国最強権力を用いることもなく、全く一般生徒と同じ立場で学校生活を送っていたことから、親しみある「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」として、誰からも愛される存在となっていた。

そんな元気いっぱいの「皇女（もんだいじ）」ではあったが、皇室内での生活にはかなり不満を持っていたようで、度々皇居を一人で抜け出して姿を晦（くら）ましては、従事者達の手を相当に焼かせていた。

皇女の一番の親友である「ドリュ・ル・シーフォ」は、よく夕食時を狙って訪れる皇女を密かに匿（かくま）っては、母親の手料理を一緒に食べたていたという。

料理であれば一流のシェフをそろえた皇室料理の方が、絶対に美味しいと解りきっているにもかかわらず、皇女が好んでシーフォの母親の手料理を食べたがったのには、やはり、家族皆で楽しく食事をしたからだったのだろうと思われる。

大陸全土を襲った大戦が終結してから、１５年余りが経過したとはいえ、まだ完全なる平和には程遠かった当時、女帝ソヴェールと皇配殿下（こうはいでんか）ディユリスは、毎日のように公務に追われる忙しいを日々を送っており、ほとんど皇居に居つく暇さえなかったのだ。

少子化問題に直面した皇室内において、兄弟姉妹という一番身近な他人に接する事もなく、且つ、両親と顔を会わせるにも時間の調整が必要とされる状況下で、皇女が「愛情」に餓えていたのだとしても、決しておかしな話ではない。

人と接することにより発生する「ストレスへの免疫力」を、著しく

欠いた当時の帝国貴族の子供達が、学校および家庭内で暴力的、自己中心的に荒れ狂う事件が多発する中で、帝国の皇女だからとはいえ決して例外ではなく、当時の従事者達は皇女の心理状態に対して強い不安感を抱いていた。

女神とも称される女帝ソヴェールの娘でありながら、それが決して「悪魔」と成り得ない保証はどこにも無いからである。

実際問題として女帝ソヴェールは、親子のコミュニケーション不足を気にはしていたが、皇女の世話に関しては、目付役である腹心「ギュゲルト・ジェルバート」に、すべてを任せきりになっていた。

ギュゲルトは帝国将軍の位を授与された、当時最強と歌われた武人であり、皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」の、ほぼ半数を指揮下に収める厳格な人物だ。

彼は御守りとなる相手が例え皇帝の娘であったとしても、その厳格な気質を一切変えることなく、厳しく皇女の生活指導、教育指導を行っていた。

時に悪戯（いたずら）をしでかす茶目っ気は置いておくとして、皇女が誰からも愛される人物に育ったのも、彼の功績なくしてはありえなかったとまで言われている。

更に、そんな皇女を良く可愛がり、面倒を見てくれたのが、「叔母（おば）」に当たる「ラキシス・エマヌエル・プレッソス」である。

皇室を出てタクラマカン地方へと移り住んでいた彼女には、すでに「シングロード・エル・プリンシル」という一人の息子がおり、度

々皇女が訪れては二人でよく悪さをしていたようだ。

皇女を取り巻く環境は、決して恵まれたものとは言い切れなかったのだが、それでも毎日が和やかで楽しく、平穏なものだったといえよう。

勿論、それは、女帝ソヴェールが急死するまでの話である。

EC391年5月15日の昼下がり。

その日、ようやく忙しい公務に一区切り(ひとくぎ)を付け、久々に皇居に戻るための帰路へと着いた女帝ソヴェールは、「王都ルーアン」のど真ん中を突っ切る第一帝道を走る車の中で、突然激しい頭痛と吐き気に襲われた。

原因は全く不明。急遽、彼女は帝国大学病院へと緊急搬送されたのだが、ほとんど有効な治療も施せないまま、2時間後には帰らぬ人となってしまった。

この女帝ソヴェールの突然の急死により、帝国全土では「暗殺されたのではないか」という、疑念が飛び交ったのだが、彼女に帯同していたボディーガードは勿論、女帝の車列を見送っていた周囲の群衆も、全くそれらしい気配を見たものもはおらず、更にはこの女帝には死因に直結するような外傷は見受けられなかった。

それに、大気中に散布するようなガスであれば、必ず周囲に帯同する者全員に影響が出るであろうし、多くの人間達が彼女を見守る中にあって、彼女一人だけを殺すことなど、不可能なことだった。

そのため、この女帝の死は一般的に「急病死」として公表されることとなるのだが、彼女の死が、帝国全土に大きな失望と不安を与えたことは確かである。

そのころの女帝は、献身的に周辺諸国との戦火縮小や自国兵団の軍備縮小、自国内の身分格差の緩和、環境破壊問題への取り組みなど、国内外問わず、あらゆる問題に立ち向かった素晴らしき人物であった。

しかしその反面、行動はワンマン的で、時に彼女が設置した帝国最高評議会の決定をも無視して、独断的政治を行っていたようで、周囲の帝国貴族達の不満は爆発寸前だったようだ。

帝国史には記録されていないが、当時、帝国貴族最大勢力であったストラ派の貴族達は、彼女の死と共に「旧帝都シュトラセ・ゼニーロ」に軍備を集中させ、密かに王都ルーアンへの出兵準備を開始していたとも言われている。

そしてそれに対抗するロイロマール家もまた、密かに軍備の増強を図っていたようで、女帝という眩き威光で押さえつけられていた「箍」が外れ、帝国国内は一気に異常な緊張状態へと陥ってしまったのだ。

しかしこの時、強大でこそあれ、多派閥に解れていたストラ派の貴族達は、うまく意思を統一することが出来ず、内戦強硬派と保守派で対立。

逆にストラントーゼ家の内部抗争をも引き起こしかねない状況となってしまっていた。

この事態に危機感を募らせた当時の家主「オーギュスト・レブ・ストラントーゼ」は、ロイロマール家と関わりの深かった「ランバリア・ノ」を遣わし、帝国皇帝に恭順の意を示した上で、とある提案を持ちかけた。

それは、かなり古典的な手法を用いた和平手段だったのだが、非常に効果的なもので、ストラ派の人間にとっても、ロイロマール派に人間にとっても有益であり、且つ、今後の皇室や帝国国民の未来をも見据えた提案であった。

それは、皇配殿下ディユリスに、新たなる后を迎えるよう、一人の人物との婚姻を薦める提案だったのだ。

その相手となる人物とは「第９代皇帝アヌバース帝」の曾孫に当たる、「クロフティア・レブサーマル・トロ・ストラ」という、当時３４歳の美しい女性。

彼女はストラ派の人間ではあったが、皇配殿下ディユリスとはルーアン帝国学校時代から、共に勉学に勤しんだ旧知の仲であり、聡明で人格的にも優れた人物と称されていた。

女帝の死から、すでに次なる皇帝候補は、皇女の「セファニティール」に決定はしていたのだが、この時まだ１１歳であった皇女が成人するまでの間、その皇帝位に代理として皇配殿下ディユリスが戴冠を受けることが決まっていた。

皇室に対して激しい反発心を抱いていたストラ派の多くは、ロイロマール派の人間であるディユリスが、代理皇帝の位を戴冠することに対して、非常に強い危機感を抱いており、皇室内にストラ派の人間を置く事で、この暴走しかかった意識を緩和しようと言う狙いが

あったのだろう。

一方、ロイロマール派としても、帝国全土を巻き込むような、内戦への突入は絶対に避けたい気持ちが強く、帝国最大勢力ストラ派と対話によって、穏便に事態を回避できるのであれば、それはむしろ望むところであった。

つまりは、帝国最大の権力を有する皇室に、ストラ派、ロイロマール派各々の要人を配することで、皇帝の地位を継ぐべきセファニティール皇女が、成人して皇帝の座につくまでの間、「お互いに協力し合おう」と言う事なのである。

ロイロマール派寄りだった皇室内のバランスを取り、更には反皇室派、反ロイロマール派の人間達の反発心を和らげ、そして軍事衝突直前にまで緊張したお互いの関係をも改善できるこの提案に、帝国全国民の未来を突然に背負わされた皇配殿下ディユリスには、首を横に振ることが出来なかったのだ。

この皇配殿下ディユリスと新皇后クロフティアの結婚式は、代理皇帝ディユリスの戴冠式と共に実施されたのだが、いまだ女帝が崩御してから3ヶ月程しか経過していなかったこともあり、盛大な式典などは一切行われず、書類だけの入籍処理に止める事となった。

しかし、この政治的婚姻に対して、激しく反発を見せたのが「セファニティール皇女」と、女帝ソヴェールを愛した帝国国民達である。

如何に政治的に逼迫した理由があったからとはいえ、女帝の死を悲しむどころか、新しい女性を見つけて結婚してしまうなど、人としてありえない行為として、帝国国民達から一斉に非難されたのだ。

特に皇女の方はと言うと、継母（ままはは）であるクロフティアとは相当に仲が悪く、公務を理由に取り繕（つくろ）ってももらえない代理皇帝ディユリスに反発し、とうとう皇居から逃げ出してしまったのだ。

この時、次期皇帝が皇居から逃げ出したとあって、その事実を簸（ひ）た隠しにしたかった皇室は、フランクナイツを動員してまで、皇女の行方を捜索する騒動にまで発展したのだが、当時「ランス」の皇室称号を破棄して、「ナイテラーデ」の貴族称号を取得していた、「ラキシス・ラント・ナイト」に保護されている事が解ると、ようやく事態は沈静化するに至る。

しかし、代理皇帝ディユリスが自ら皇女の元を訪れることは無く、全く説得に応じない皇女は、頑（かたく）なに皇居に戻ることを拒否したため、結局は半年間に渡ってナイテラーデ家の家に居つく事となってしまう。

しかしその後、突然に彼女の元へ「代理皇帝が倒れた」という報（しら）せが届くと、彼女はようやく皇居へと戻るのだ。

それまで、女帝ソヴェールの手腕によって、なんとか処理されてきた公務の山は、代理皇帝ディユリスの身一つではとても賄（まかな）える物でもなく、彼は昼夜を問わず目まぐるしい公務に追われていたようで、倒れた原因も「過労」によるところが大きかった。

当時、すでに第一子を身籠（みごも）っていた皇后クロフティアは、出産までの間、帝国大学病院に入院しており、ようやく家族としての二人きりの時間を過ごす事が嬉しかったのか、皇女はそれまでのおてんばぶりが嘘のように、献身的に父親の看病に当たったと言う。

しかし、そんな二人の時間も、そう長くは続かなかった。

EC393年4月17日朝方。突如として皇居周辺の動きが慌しくなる。

女帝ソヴェールの死から2年が経とうとしていたこの日、帝国国内を再び激震が駆け巡った。

代理皇帝ディユリスが朝食時に、突然苦しそうな表情と共に、大量の血を吐き出して倒れたと言うのだ。

この時、皇室側近「カスィミヤ」に所属し、皇帝世話役だった「シュリティア・マローナ」は、部屋の中から聞こえてくる異常な呻き声に気がつくと、必死に助けを求める皇女の指示で、すぐさま緊急医師を招聘したのだが、全くその甲斐も無く、彼は間も無く帰らぬ人となってしまったのだ。

この突然の出来事に、周囲が騒然と慌しくなる中で、皇居周辺を警備に当たっていた兵士達は、即座に厳戒態勢を敷くと、皇居に出入りしていた者すべての身柄を確保する。

この時点で皇帝が何者かに暗殺されたのではないかと言う予測の元に、犯人となる容疑者に証拠を隠滅するための時間を与えないようにするためだ。

この事件に関して、真っ先に疑いをかけられたのは、当時、代理皇帝ディユリスの一番身近で世話をしていた、第一通報者の「シュリティア・マローナ」であったが、その他にも、当日の調理担当者から、食材運搬業者、周辺警備担当者に至るまで、事件当日前後に関

係したすべて人間が容疑者として身柄を確保されることとなる。

そしてそれは勿論、代理皇帝ディユリスが死亡した時に、部屋の中にいたセファニティール皇女も例外ではなかった。

それまで皇室は、完全なる聖域として選ばれた者以外の立ち入りは、厳しく制限されていたのだが、その当日中に代理皇帝ディユリスの死因が、毒殺によるものであると解ると、犯行の痕跡（こんせき）を調査する専門員達の手によって、徹底的に調べ上げられることとなった。

犯行当日は朝から皇居周辺に、１００人近い警備員が待機していたため、恐らくは内部の者による犯行であることが予想されていたが、夜通し行われた調査の結果で、驚くべき事実が浮かび上がることとなる。

代理皇帝ディユリスの体内から検出された毒物と同じ反応が、皇女の部屋のクローゼットの中に隠してあった小さな容器から検出されたのだ。

この事実に関して、全くの無関係を強調した皇女だったが、事件当日、代理皇帝ディユリスの部屋に朝食を持ち込んだのが皇女自身であった上に、彼女の自室から犯行を決定付ける物的証拠が発見されたのである。

彼女が幾らそれを否定して見せたところで、簡単に容疑者としての疑いを晴らすことは出来なかった。

そもそも、皇居内に人が立ち入る時には、周辺警備員による厳しい身体検査と持ち物検査が実施されており、このような危険物を持ち込むことは、ほとんど不可能なことだ。

そう、それは、全くの身辺調査も無いままに、皇居を抜け出すことが出来た皇女以外には・・・。

そして、事件の真相を暴くべく急遽設立された調査審議会には、事件前々日の夜に、皇女と代理皇帝ディユリスとの間で、激しい口論があったという証言が数多く寄せられ、更には、重要参考人である「シュリティア・マローナ」が出廷した際に、事件前日に、皇居から抜け出して戻ってきた皇女が、クローゼットの中から見つかった容器と同じような物を手にしていたと証言すると、皇女の「父親殺し」の容疑は、ほぼ決定的なものとなってしまった。

物的証拠、状況証拠、そして第三者による重要な証言と、皇女自身の自白以外については、すべて犯行を裏付けるだけの証拠が出揃い、その動機についても、女帝ソヴェール死後まもなくして、皇后クロフティアを迎えた代理皇帝ディユリスに対して、皇女が強い不満を抱いていたことから、父親を毒殺するに至ったのだと判断されたのだ。

そして、帝国国民が愛した女帝ソヴェールの娘、セファニティール皇女の「父親殺し事件」は、瞬く間に帝国全土へと知れ渡り、全帝国国民に強い驚きと深い失望感を与えてしまうこととなる。

それまで次期皇帝候補として、全帝国国民から愛されてきた皇女だが、もし本当に「父親殺し」という大罪を犯したのであれば、そんな彼女に帝国の未来を任せることなど出来るわけも無く、さらに、たとえ前皇帝の娘だからとはいえ、事を穏便に済ますことも出来ない。

古来より、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国においては、この

ような殺戮劇（さつりくげき）は今まで何度も繰り返されてきたことなのだが、その度に、その事件首謀者となった容疑者については、どのような理由があるにしろ、必ず極刑をもって処罰してきた経緯がある。

勿論、殺人という犯行自体、決して軽い処罰で済むはずも無いが、事に帝国の未来と国民達の平和を担うべく重要な人物を、己の欲望をに任せて殺してしまうことなど、絶対に許してはいけない行為なのだ。

しかし、この事件が公（おおやけ）になってから、皇女に対する信頼と期待は、完全に崩れ去るかに見えたのだが、中にはまだ皇女を支持するものや、事件の真相を暴くために、必死になって捜査を続けた人達もいたと言う。

勿論、前皇帝の娘であり、次期皇帝候補である皇女を、簡単に処刑することなど出来るはずも無く、この後も事件の捜査は、しばらく続行される事となるのだが、新たに真相を解決するための糸口が発見されることも無く、３ヶ月余りが経過した。

皇女はその間、皇居の狭い一室に一人幽閉されることとなるのだが、悲しくも、ようやく迎えた１３回目の誕生日と共に、処刑が決定したという報（しら）せが皇女の元へと届けられた。
この時、皇女は必死に自分の無実を主張したのだが、もはや彼女を救ってやる手立ては全く無かったのである。

そして、さらに、事件はこれだけに収まらなかった。

ナイテラーデ家の家主ラキシスの長男である「シングロード・ラント・ナイト」が、王都ルーアンのルーアン帝国学校に向かう途中、何者かに暗殺されたのだ。

未だその事件の全貌は明らかになっていないが、恐らくは彼を持ち上げたい狂信者達と、それを阻止しようとする反抗勢力とのトラブルに、巻き込まれたのではないかという説が有力だ。

彼は母親であるラキシスと共に、すでに皇室たるランスの称号を破棄してはいたのだが、前皇帝血筋に一番近い男系男子として、それを持ち上げようという輩が存在していたことは確かだ。

これに対し、母親であるラキシスは深い悲しみの意を示すと共に、これ以上の事態の悪化を避けるため、異例とも言える皇室との完全決別を宣言した。

こうなることを予測して、早々に捨て去ったはずのランスの称号だが、それは皇女の処刑という「皇室の断末魔」によって、脆(もろ)くも崩れ去ってしまったのだ。

そして、皇女の処刑が決定してから2ヵ月余りが経過したＥＣ３９３年９月１０日。

刑の執行日すらも公(おおやけ)にしないままに、ひっそりと皇女は処刑された。

何故この日に執行したのか。何故突然に執行しなければならなかったのか。何故公に公表しなかったのか。

当時、この皇女の処刑を断行した者達には、周囲から強い非難が浴びせかけられたが、幽閉された皇女を無理やり解放しようと企てる集団達の動きが活発化し、これ以上、刑の執行を延長できないためだと言う説明がなされた。

皇女の処刑については、その後も激しい論議が巻き起こり、帝国各地で暴動が発生するなどの事態を招きはしたが、周辺地域の警備体制を厳しく敷いた各貴族達の働きもあり、それほど大きな騒ぎには発展しなかった。

おてんば姫として人々に愛された「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国「最後の皇帝」の血を受け継いだ皇女は、親しいものに見送られることも無く、最後の言葉を聞き入れてもらうことも出来ずに、悲しい１３年の生涯に幕を閉じたのだった。

02－90：★【第二話】登場人物一覧

第二話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」

★★★新規登場人物一覧★★★

【ルーアン・ランス・セルブ】（ルーアン・セイル）
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国初代皇帝。

【ディエディリータ・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第五代皇帝。

【オリュンポス・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第八代皇帝。
帝国史上最悪の暴君にして、ムーンスローヴ大陸完全制覇を成し遂げた人物。
軍事至上主義者で非道なる逸話を多く残した人物だが、それとは全く異なる説も存在し、今だ彼の本当の姿は明らかにされていない。

【アヌバース・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第九代皇帝。

【キンヴァル・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十代皇帝。

父アヌバースの残した遺言により、皇位を継承した愚劣なる皇帝。
優れた能力を有した異母弟であるウィルセラムに比べ、全く政治的な事に関心を寄せなかった彼は、ムーンスローブ大陸全土を混沌とした戦乱の時代へと導く結果を引き起こしてしまった。

【ウィルセラム・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
第九皇帝アヌバースの次男にして、ストラントーゼ家の始祖たる人物。
彼は幼い頃から非常に高い知識力と統率力を垣間見せ、次期皇帝候補として常に有力視されていたが、結局は異母兄であるキンヴァルにその座を奪われてしまう。
彼は周囲からの信頼も厚く、非常に優しい人格者として知られているが、一方で黒く淀んだ陰謀に長けた人物と言う説もある。

【タルカム・ターカン・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十ニ代皇帝。

【ソヴェール・ランス・セルブ】
性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝。
帝国全国民から最も愛された帝国史上初の女帝であり、帝国最高評議会を設立した人物。
周辺諸国との戦火縮小や自国兵団の軍備縮小、自国内の身分格差の緩和、環境破壊問題への取り組みなど、大陸全土に蔓延る様々な問題に立ち向かった英雄。
彼女を唯一批判出来うる材料としては、完全なる立憲君主制度への移行を躊躇ってしまった事と、後継者として男子を残さず崩御したと言う事だろう。

【ディユリス・ランス・セルブ】（ディユリス・レブ・ロイロマール）
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝代理。
ロイロマール家の次男として生まれた彼は、非常に優れた頭脳を持つ有能な人物にして、第十三代皇帝ソヴェールの夫。
ソヴェールの死と共に代理皇帝としての責務を背負わされた彼は、政治的理由から新たにクロフティアを新皇后として迎え入れる事になるが、娘であるセファニティール皇女の強い反感を買ってしまい、最後には彼女に殺害されてしまうという悲しい結末を迎える。

【デュランシルヴァ・ランス・セルブ】
性別：男　年齢：３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十四代皇帝。
帝国史上最も幼い皇帝にして、帝国最後の皇帝となる人物。

【セファニティール・マロワ・ベフォンヌ】
性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝ソヴェールの娘であり、第十四代皇帝となるはずだった人物。
帝国第一皇女と言う立場にも関わらず、誰にでも隔たりなく接する元気の良いやんちゃな女の子であり、帝国全国民から愛された可愛らしいお転婆姫。
帝国最後の皇帝血継承者にして、父親殺しの容疑で処刑されるという悲劇的最後を遂げる。

【ラキシス・ラント・ナイト】
性別：女　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十ニ代皇帝タルカム・ターカンの次女であり、ナイテラーデ家の始祖。
第十四代皇位継承権をめぐる争いを避けるために、早々にランスの称号を捨て去り、タクラマカン地方で帝国国民の為に生きた力なき慈愛の女神。

【シングロード・ラント・ナイト】
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
皇室に生まれた男系男子にして、ナイテラーデ家の長男。
皇統直系が原則の帝国皇室内にあって、第十四代皇位継承権を巡る陰謀の彼方に消し去られた人物。

【ゲイリーゲイツ・トロ・ナイト】（ゲイリーゲイツ・レブ・ルフトスピーリング）
性別：男　年齢：２０歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
タクラマカン地方を治めるルフトスピーリング家の長男として生まれ、その後ナイテラーデ家の養子となる人物。
幼少の頃から類まれなる能力に恵まれ、将来を有望視される若者であり、ストラントーゼ軍の旅団長を務める冷静沈着な指揮官。

【オットンハイマー・レブ・ロイロマール】
性別：男　年齢：５４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
南ブランドル地方からセレーヌ地方一帯を取り仕切る帝国最古の名家ロイロマール家の当主。
第十三代女帝の夫ディユリスの兄にして、帝国国民から絶大な人気を誇った偉大なる人格者であり、周辺諸国との関係強化にも積極的に取り組んだ人物。

【オーギュスト・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
メヌシア地方一帯を取り仕切るストラントーゼ家の当主。
統治領土はそれほど多くは無いが、帝国国内で最も強大な軍事力を持つ貴族であり、帝国最高評議会の圧倒的大多数を占めるストラントーゼ派の首領。
非常に好戦的な性格の持ち主であり、薄ら暗い陰謀に長けた黒い不世出の知将。

【クロフティア・ハイネセル・プレッソス】（クロフティア・レブサーマル・トロ・ストラ）
性別：女　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
第九代皇帝アヌバースの曾孫にして、第十三代皇帝代理の妻。
彼女は第十四代幼少皇帝を支える有能な指導者であり、非常に高い知性を持つ聡明な人物だが、裏では完全にストラントーゼの操り人形だったと言われている。

【プリマルクソス・レブ・ブラシアック】（プリマルクソス・レブ・ビノルトス）
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
第五代皇帝ディエディリータ時代に、帝国の繁栄に大きく貢献した事から、ブラシアックの家名を受けた人物。

【トリストライアン・レブ・ブラシアック】
性別：男　年齢：４７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
サンカサロ地方からカルッツァ地方に至るまで、帝国最大の統治領土を誇るブラシアック家の当主。

豪胆にして冷静沈着。温和でいて激しい気性の持ち主であり、武官たる立場にこそ自分の存在意義があるのだと信じる古風な戦士。

【ライネート・タルカートス・レブ・ロートアルアン】（ライネート・タルカートス）
性別：男　年齢：死去　出身：旧アルアンゴーニュ帝国
アルアンゴーニュ地方一帯を治めるアルアンゴーニュ帝国最後の皇帝。
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との戦いに破れた彼は、当時の皇帝オリュンポスの命により、ロートアルアン家の家名を背負って同地域を統率する事となる。
アルアンゴーニュ地方に暮らす人民の為に死力を尽くした人物。

【ボードリクール・レブ・ロートアルアン】
性別：男　年齢：３３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
アルアンゴーニュ地方一帯を治めるロートアルアン家の当主。
アルアンゴーニュ人とは犬猿の仲にあったロゼアル・マリア人を母に持つ彼は、歴代当主の中でも一際変わり者として有名だが、とても物静かで心優しい人物であり、帝国国内に蔓延る黒い陰謀には全く興味を示さなかったと言う。

【ドリュ・ル・シーフォ】
性別：女　年齢：１７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国王都ルーアン地方に暮らす心優しき少女。
セファニティール皇女の数少ない心許せる親友の一人。

【ギュゲルト・ジェルバート】
性別：男　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ

帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国軍最強と歌われた将軍にして、第十三代女帝の腹心であり、セファニティール皇女の教育係を勤めていた厳格な人物。
皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」の双頭の龍たる異名を持ち、帝国内外からその存在を恐れられていた。
女帝の死と共に帝国最北端の地へと左遷されてしまう。

【ランバリア・ノ】
性別：男　年齢：１０５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国最高評議会ストラントーゼ派最高幹部の一人であり、第九代皇帝アヌバースの頃より帝国皇帝に仕える重鎮。
ムーンスローブ大陸完全制覇後の帝国史における激動期の全てを知るこの人物は、派閥を超えて様々な人間とのパイプを持ち、帝国最大派閥の長であるストラントーゼ家当主であっても、決してその存在を蔑ろにすることは出来なかった。

【シュリティア・マローナ】
性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国皇室側近「カスィミヤ」に所属し、皇帝の世話役を勤める温和な性格の女性。
第十三代皇帝代理暗殺に関する重要参考人であり、セファニティール皇女が処刑される前日に、何者かの手によって殺害された。

【ビアホフ・ラ・バスケス】
性別：男　年齢：３６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」の初期構成メンバーの一人であり、心優しき物静かな中年男性。

帝国時代は皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」に所属していた過去を持つ。
ある時期を境に忽然と姿を消した。

【ティーラー・テル】
性別：男　年齢：３３歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ＤＱ製造メーカー最大手「マムナレス社」のＤＱ販売促進部門の総責任者であり、目的の為には手段を選ばない独断的先行者。
小柄な体躯ながらも常に威圧的態度をひけらかす冷淡な性格の持ち主であり、トゥアム共和国内の黒い影に潜んで何かを目論む人物。

【ドルト・ヨシュア】
性別：男　年齢：４１歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の小隊長を務める人物であり、類稀なる戦闘能力を有する作戦任務に忠実な戦士。

【リンダ・ブラフォード】
性別：女　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の隊員。

【ラウル・ベントーザ】
性別：男　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の隊員。

【チッキチャン・ボヤノ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ

帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の隊員。

【レドルー・マクファーソン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の隊員。

【ローザン・クリオス】
性別：女　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家私兵集団「タルナーダメイリン」の隊員。
高圧的態度で弱者を見下す嫌な性格の女性。

【ジジ・トレース】
性別：男　年齢：３７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍所属の国境防衛部隊所属のＤＱパイロット。

【ジルヴァ・ディロン】
性別：女　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍所属の国境防衛部隊所属のＤＱパイロット。
見た目の可愛らしさとは裏腹に、彼女の発する言動はとても汚く、非常に性格の荒い女性。
その素行の悪さはトゥアム共和国軍内でも有名であり、数々の部隊を渡り歩く事になるのだが、責任感が強く、与えられた責務に対しては真面目に取り組む姿勢を見せる。

【ゼフォン・ウィリアムズ】

性別：男　年齢：４６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍の総司令官。
迫力のある眼光とスキンヘッドが特徴的だが、物静かで温和な性格の持ち主。
長きに渡りトゥアム共和国北方一帯を守ってきた守護神たる人物。

【フェザン・ボォスター】
性別：男　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊長。
オーギュスト・レブ・ストラントーゼからの信頼も厚い有能な指揮官。

【アレナルティカ・ユーラシ】
性別：女　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
貧民層からの成り上がり兵士であり、セファニティール皇女に憧れる非常に明るい性格の女性。
少々口数が多い。

【ランス・レッチェル】
性別：男　年齢：１９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
ＤＱ操舵技術と状況判断能力に長けた若きパイロット。
実戦経験不足は否めないが、将来を有望視される人材。

【バルベス・ハッシュ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ

帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
大柄な体躯に似合わず、非常に繊細で温和な性格の持ち主。

【セラフィ・オム】
性別：男　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ
帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ
帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のファーストアタッカーを務める元気の良い女の子。
赤く長い髪の毛が特徴的で、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。
彼女自身、何か重大な過去を背負い、それを付け狙う者達の陰謀の渦に巻き込まれ始める。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める真面目な性格の少年。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、人当たりの良い温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のセカンドアタッカーを務める可愛らしい長身の女性。
抹茶色の癖毛が特徴的な彼女は、おしとやかでとても可愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなるも、ラプセルのコクピット内に居た彼女は、数時間後に無事救出された。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のスナイパーを務める物静かな女性。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。
突然姿を現した謎の武装集団の襲撃によって負傷。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：１３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガ

レージの下敷きとなって死亡。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のＤＱ機体整備担当者を勤める明るい性格の男。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有している。
彼のお調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなるも、奇跡的に無傷のまま助け出された。

【ユァンラオ・ジャンワン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国
チーム「Ｂｌａｃｋ，ｓ」のアタッカーリーダーを勤める得体のしれない怪しげな男。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦闘能力においては無類の強さを有する猛者。
厳つい顔に生え揃った武将髭が彼のトレードマークであり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。
謎の依頼人からの要望でセニフを付け狙い、ＢＰ事件を引き起こす。
彼自身、セニフの正体に非常に強い興味を抱いている。

【カルティナ・エニオアスカ】
性別：女　年齢：２４歳　出身：北ムルアート諸国
酒場「カルティナ」の名前の由来となるほど、攻撃的な魅力を有した美人店員。
紫色のボリュームのある綺麗な髪の毛が特徴的な彼女は、明るく優しい性格の持ち主だが、時として冷酷な一面を垣間見せる不気味な

女性であり、ユァンラオとも深い関係の中に居るようだ。
ユァンラオと共にセニフを付け狙い、彼女の正体を暴こうとする。

03－01：●BP事件

「我が帝国全国民が敬愛する英雄ソヴェール様が、必死に築き上げてきた平和の光城(こうじょう)が今、ロイロマールをはじめとする売国奴共の手によって瓦解(がかい)された。拡大する戦火に苦しむ辺境の国民達の思いを胸に、全国民の真の権利と豊かさを念頭に、天に召されるまで戦い抜いたあの勇姿を、我々は決して忘れはしないだろう。英雄ソヴェール様の意思を継承し、その高き理想の頂へと邁進する帝国国民達よ。我々はこの愛(いつく)しむ女神の加護の元、その熱き志の炎を決して絶やすことなく、歩み続けなければならない。その示された神道が、如何に険しく、果てしないものであろうと。全てを乗り越えるだけの勇気と希望を抱き、我々はこの困難に打ち勝たねばならないのだ。英雄ソヴェール様が抱き望んだ理想の世界を実現しうる者とは、我々帝国国民をおいて他にはいないからである。英雄ソヴェール・ランス・セルブの思いを踏み躙(にじ)り、その名を汚すこの逆賊共の暴挙を、我々は決して見過ごすことはないだろう。帝国国民全員の平和と希望を抱き、そして争いのない統一された和平を目指して。我は裁きの業火を振り翳(かざ)すことをここに誓おう。愛すべき女神のために。そして、帝国国民全員の未来のために。」

これは、EC397年5月6日に勃発した「ブラックポイント事件」直後に行われた、帝国皇后「クロフティア」の声明演説の内容である。

ブラックポイントは、当時の中立国トゥアム共和国北西部の小さな廃都市であるが、事件当日、この都市内において、小さな軍事衝突が発生したのだ。

そして、事件発生後まもなく、ストラ派の諜報員等によって「ロイ

ロマール謀反（むほん）の意あり」と告発がなされると、一気に帝国内部は激しい混乱の渦へと巻き込まれることとなる。

当時、幼少皇帝「デュランシルヴァ」を影で操り、実質上の帝国の実権を握っていたストラ派と、それに対抗するロイロマール派の人間達の間には深い溝があり、両家間の対立がピークに達していた時期でもあった。

ロイロマール家家主「オットンハイマー・レブ・ロイロマール」が帝国最高評議会の決議を無視し、他国との協議の場を設けていたことは、後の調査で明らかにされるのだが、この時、その協議へと向かう途中のロイロマール家使者達を、ストラントーゼ家の兵士達が攻撃してしまったことが事件の発端であった。

この後、両家間の関係は更に悪化し、ついには身柄を拘束されたオットンハイマー・レブ・ロイロマールを巡って、帝国領北方のブランドル地方で、激しい内戦が勃発することになるのだが、事態はそれだけに止まらなかったのである。

事件が発生した地域は、トゥアム共和国領土内であり、この帝国軍の軍事行動に対して、トゥアム共和国側は即座に防衛体制を敷く事となる。

しかし、戦闘行為を一向に停止しないストラ派の兵士達との間で小競り合いが生じると、数多くの死傷者を出す事件にまで発展してしまったのだ。

その後、事態は帝国軍が撤退したことにより、それ以上大きな戦闘は発生しなかったのだが、この事件に関して厳しく詳細情報の開示

を迫ったトゥアム共和国側に対し、帝国側は驚くべき回答を返したのだった。

その回答文書の中には、帝国5大貴族であるロイロマール家を、帝国反逆者として非難すると共に、トゥアム共和国が帝国崩壊を目論む反逆者の一派として、このロイロマール家の軍事力を、帝国国外から支援していたという事実が記載されたものだった。

そして更に、この支援を指示していた共和国政府高官の存在と、実際に支援していた人物の名前もが記されており、完全にトゥアム共和国に対して敵対行動も已む無しという態度を示していたのだ。

これに対し、トゥアム共和国側は事実無根の濡れ衣として真っ向から反論するのだが、このロイロマール家に対して支援をしていたと記されていた人物に対し、詳しい事実確認をしない訳にはいかなかった。

その名指しされた人物とはトゥアム共和国陸軍北方防衛司令官である大物、「ゼフォン・ウィリアムズ」陸軍特佐であり、共和国政府は事件当日、ブラックポイントでＤＱＡ大会を観戦中だった同氏の身柄を即座に拘束すると、事実解明のための事情聴取を開始する。

しかし、この陸軍特佐がその後もしばらくの間、完全に黙秘を突き通したために、その事実が判明するまでに、かなりの時間を要する事となる。

そして、必死に反論するトゥアム共和国政府の主張は全く聞き入れず、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国はついに、我に敵なすものを殲滅するための侵攻作戦を開始するに至るのだ。

このトゥアム共和国北部の小さな廃都市ブラックポイント。

そこで発生した小さな事件は、その後、大陸全土にまで飛び火した帝国貴族間戦争を引き起こす、小さな「雫」であったと言われている。

０３－０２：〇お姉ちゃん

第三話「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「お姉ちゃん」

「お姉ちゃん。もう疲れたよ・・・。もう休もうよ・・・。」

「ダメよ。早くここを抜け出さないと危ないわ。月が出ると湖水が流れこんでくるから、それまでになんとか小丘に上らないと・・・。もうちょっとだから、がんばって。」

延々と果てしなく続く湿地帯。

自分達の背丈よりも大きいシダ系植物の群れ中を潜り抜けながら、二人の男女がとぼとぼと歩いている。

べしょべしょと嫌な音を立てながら、一歩一歩、歩くたびに、二人は疲れきったように大きく息をついた。

すでに日は落ち、時間と共に二人を包みだした黒いカーテンに、周囲の景色どころか、足元さえも覚束無(おぼつかな)い。

周囲は全く人気のない寂しい国境沿いだ。

すでに街からは遠く離れ、そして目指す街もまた果てしなく遠い。

どうか、私達が無事にランベルクまでたどり着けます様に・・・。

そして、どうか、私達の幸せな暮らしが待っています様に・・・。

時々、後ろをついて歩く少年の事をしばしば気にかけながら、彼女はひたすら祈りを捧げていた。

彼女が気にかける少年の姿は惨めなもので、穴のあいた靴にボロボロのGパン。汚れきった上着に泥まみれのスカーフ。

歩くたびに靴の穴から泥が入り込むようで、気持ち悪さが我慢できなくなると、しばしば立ち止まって靴の泥を掃き捨てるのだった。

少年の事を心配する彼女もまた、酷い身形（みなり）をしており、短く切り落とした緑色の髪の毛はボサボサに乱れ、もはや身を覆う事も出来なくなったボロボロの衣服を隠すために、汚いマントを1枚羽織っているだけ。

そして、必死に逃げるように歩き続ける二人の姿は、まるでヴェパール（強制労働奴隷の事）のようだった。

べしゃっ！！

突然、彼女の後ろの方で、泥の中に何かが突っ込んだような音がした。

彼女が後ろを振り返ると、少年が沼地に足を取られ、泥の中へと倒れてしまったようだった。

すぐさま彼女は駆け寄ると、少年のことを気遣うのだが、少年の両目はパッチリ開いており、特にどこかを傷めた様子も無かった。

しかし、少年はどこか不貞腐れた表情で、彼女の方に視線を向けようとしない。

それは彼女に対する、ささやかな反抗の意思の表れだったのだろうか。

気遣う彼女を他所に、少年は泥の中で蹲ったまま、じっと動かなかった。

そんな少年を叱り付けるでもなく、彼女はドロドロになった少年の顔を拭いてやるために、自分のボロボロのマントを少年に差し出した。

少年はじっとその差し出されたマントを見つめていたのだが、ふと、彼女の可愛い手から、じっとりと薄黒い血が滲み出しているのに気がついた。

少年の前を歩く彼女は、何重にも折り重なったシダ植物をかき分けて歩かねばならず、それは、その植物の棘に切り刻まれた痕のようだった。

少年がシダの棘に傷つけられないように、必死にかき分けた優しさの証。

「ほら、キシノダの間からケユキの木が見える。ケユキが立つところまでは湖水が届かないはずだから、あそこまで行こう。」

その言葉に少年はむっくりと立ちあがり、身にまとった泥を振り落

とすと、差し出されたマントでゴシゴシと顔を拭った。

そのマントは、とても汚いものではあったが、少年にとってみれば、それはどうでも良いことだった。

少年は彼女の両手をやさしく握り締めると、自分の分も切り刻まれた彼女の思いに感謝するようにゆっくりと擦(さす)る。

そして、少年が彼女の瞳を見つめて、ニッコリと微笑んで見せると、彼女はいきなり少年に抱きついた。

「お・・・お姉ちゃん。」

突然の彼女の行動に、少年は多少たじろんだが、彼女の体が小刻みに震えているのを感じると、無為にそれを振りほどくことはしなかった。

そして少年は、彼女の暖かな温もりの中に包まれながらも、どこか自分自身に対して、やるせないような、ふがいなさを感じていた。

少年はまだ１０歳になったばかり。自分で自分の身を守る事もできないただの子供だ。

それでも尚、身長が高くて、しっかり者の彼女に頼りきっていた自分が、無性に恥ずかしかった。

「ねえ、おんぶしてあげようか。」

と、彼女が言うと。

「いいよ、自分で歩けるもん。」

と、少年が返す。

普段から「おんぶしてあげる」と言うと無邪気に喜んでいた少年は、不思議そうな目線で見つめる彼女を他所に、トコトコと一人で先を歩き始める。

何か少年の機嫌を損ねる様なことをしてしまったのだろうか・・・。

彼女は少し不安そうな表情で、もう一度少年に言った。

「ねえ、おんぶしてあげるってば。」

すると、少年は、彼女の方へと振り返って「ニッコリ」微笑んでこう言った。

「僕、もう１０歳になったんだよ。自分で、自分一人で歩けるもん。今度は僕が前を行く番だよ。」

そう言って、一生懸命にシダ植物をかき分け始める少年。

目の前には少年の作った道が次第に長く長く出来上がっていった。

彼女はじっと立ち尽くしたまま、そんな少年の後姿を見つめながら思う。

いつからこんなに逞(たくま)しくなったのだろう。

小さな両手で、必死にシダ植物をかき分ける少年の姿はいつもより

大きく見えた。

今度は彼女が少年の後ろをついて歩く番である。

どこか嬉しそうな。でも少し何か物悲しいような。

そんな不思議な表情で少年を見つめていた彼女が、ふと、棘に切り刻まれた自分の両手に視線を落とす。

すると、先ほどまでなんとも無かったはずの両手が、だんだんと痛み出してきた。

滲み出した血をマントで拭いながら、赤くはれ上がった自分の手を擦(さす)りながら。

彼女はとうとう、泣き出してしまった。

ううん。痛いからじゃないの。

彼女は、もし少年が振り返った時の言い訳を、必死に心の中で反芻(はんすう)して、ぽろぽろと落ち行く涙を必死で堪(こら)えようとした。

勇ましく前を突き進む、愛しき少年の後を歩きながら。

ケユキの木の立つところまでもう少し・・・。

私達の幸せまでもう少し・・・。

03－03：○知らないということを知ること［1］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「知らないということを知ること」

暗闇（くらや）んだ夕空に紅く光る星が４つ、ダイアモンド型でゆっくりと南下して行く。

何かしらの飛行物体であろう事は誰が見てもわかる程度に、その紅く光る星には、穂のかな点滅が見て取れる。

それは大型の輸送機であろうか、トゥアム共和国ランベルク地方に横たわる、３０００メートル級の「アルテナス山脈」に木霊するほどの、重爆音を噴出しながらゆっくりと移動している。

この飛行機の機種はトゥアム共和国陸軍重爆撃機「ガーゴイル２」で、この山脈地帯を北東方から南西方へと移動しているあたり、どうやら先ほど事件のあったブラックポイントから出立した機体のようだ。

鈍重な黒い機体に大きな翼。空の帝王と呼ばれる「悪の化身ガーゴイル」を、はっきりと想像させる立派な重爆撃機である。

しかし、共和国軍切っての重爆撃機も、今やただの難民船。

ＢＰ事件直後に共和国政府が発令した緊急特別戒厳令により、一般人に対して廃都市ブラックポイントから緊急避難するよう指令が下されたためだ。

この重爆撃機「ガーゴイル２」は大量の投下爆弾を格納可能な上、大型戦車や戦闘装甲ヘリすらも輸送可能な超大型機のため、格納庫部分を３階に区分けすることで、１機で優に１５００人は収容できる。

この４機の重爆撃機の行き先は、トゥアム共和国副都心「リトバリエジ」の「ネミッサ空港」であり、ＤＱＡ大会関係者、観光客、報道陣、臨時労働者達が、ごった返す様に搭乗していた。

しかし、その中にたった１機だけ、行き先の異なる輸送機があり、どうやらこの空域で進路を変更するのか、一番最後尾に着けていた１機が機体を大きく旋回すると、進路を真南へと変更したのだ。

この輸送機の向かう先はトゥアム共和国最南部「ベラ山脈」の麓にある、「セロコヤーン陸軍基地」だ。

この輸送機には、ＤＱＡ大会に参加したメンバーの内、ＤＱパイロットとＤＱ整備士達のみが選別されて搭乗しており、他の一般人は決して搭乗が許されなかった機体だ。

彼等はこれから、トゥアム共和国陸軍の特殊訓練養成所へと、向かっている最中なのだ。

彼等は、ＤＱＡ大会に参加するに当たり、参加申込書のほかに、とある誓約書にサインしなければならないことになっている。

それは、何かしらの有事が発生した場合は、ＤＱパイロットとして、もしくはＤＱ整備士として、トゥアム共和国軍に従軍するという「事前傭兵誓約書」なのだ。

ＤＱＡ大会という非常に人気の高い危険な遊びを、「ただ」でトゥアム共和国政府が容認するはずも無く、大会運営費に莫大な援助金を支払ってまで促進してきた背景には、こういったＤＱパイロットやＤＱ整備技術者達を、民間企業の手で育成してもらうという狙いがあったのだ。

傭兵制約書にサインした彼等にとって見れば、ようやく訪れた平和が、簡単に崩れ去ると思っていなかった者もいれば、他の職に就くことが出来ずに、仕方なしとＤＱＡ大会で、のし上がろうと考えていた者もいるだろう。

平和な世界に浸り、軍人として戦場にいくことなど、決して望んでいなかった者が多い中、この誓約書の有効期限は大会参加時から２年間。

理由無く逃走すれば、通常の軍内部規約に沿って、一般兵士達と同じ処分が待ち受けているというおまけ付きだ。

時に現実とは非情なものであったりするものだ。

一つだけこの誓約書を破棄する方法があるのだが、それには、莫大な違約金を払わねばならない事になっている。

勿論、ＤＱＡ大会に参加しているパイロット、整備士達で、そんな大金を持っている人間は極僅かであり、お金を稼ぐために大会に参加しているという人間の方が多いのだから、そんな話は鼻から無理な要求ともいえよう。

そして、そんな誓約書にサインをし、連れられるがままこの輸送機へと搭乗したメンバーの中には、チームＴｏｍｂｏｙの「５人」も

含まれており、その内の二人が、格納庫に仕切られた最上階へと続く階段の一番下の段に、こじんまりと座り込んでいた。

（セニフ）
「ねぇ・・・。シル？」

（シルジーク）
「・・・。・・・うん？」

（セニフ）
「・・・。ううん。・・・なんでもないや。」

ふと、何かを言いかけて、それでもやっぱり止めてみる。

（シルジーク）
「・・・・・・なぁ。」

（セニフ）
「・・・・・・んっ？・・・。なぁに？」

（シルジーク）
「・・・・・・うん。・・・。」

浮かんでは消え、思っては俯く。何の進展もない。不毛な長い時間。

周囲では、もみくちゃになるぐらいの若者達で溢れかえり、薄暗い機内には、キーンという耳障りな風を切る音が流れていた。

ざわざわとざわつく若者達の中には、知り合い同士なのか、楽しく会話をするものもいれば、一人黙って寝ているものもいる。

多種多様な若者達の姿を眺めては、再びシルに何かを語りかけようとするセニフなのだが、何故かシルに振り返ったところで、それをまた取りやめるのだった。

長い間、二人はずっと、そんなどこか居心地の悪い雰囲気の中にありながらも、お互いに傍(そば)を離れようとはしなかった。

シルの破れた作業ズボンには、まだべっとりと黒ずんだ血の塊が付着したままだったが、ガーゴイル機内に臨時設置された医療施設で診てもらったところ、それほど深い傷でもなかったようで、先ほど簡単な応急処置を施してもらったところだ。

しかし、それでもやはり少し痛むのだろうか、シルは時折、作業服の下にグルグルに撒かれた包帯を擦(さす)るような仕草を見せる。

セニフはそんなシルの姿にチラリと視線を向けては見るのだが、決して「その話題」に触れようとはしなかった。

そして、シルもまた、その話題に触れることを避けているのだろうか。

二人はただただ、じっと目の前の床を見つめているだけだった。

（セニフ）
「マリオ・・・。死んじゃったんだね・・・。」

ふと、セニフがポツリと一言呟いた。

（シルジーク）

「ああ。」

シルは、それに対して、どこと無く上の空の返事を返す。

彼等がマリオの死を知ったのは、軽トラックにシルを乗せて、再びニュートラルエリアへと戻った後すぐだった。

激しい爆発による被害に混乱する工場付近で、ようやく瓦礫（がれき）の下から救出されたジャネットが、一人、取り乱したように泣き叫んでいたのだ。

サフォークは奇跡的にも、崩れた瓦礫（がれき）の間に出来た大きな隙間によって、ほんのかすり傷程度で難を逃れたようだったが、大きな鉄骨に押しつぶされてしまったマリオは、もはや即死の状態だった。

（セニフ）
「なんかさ・・・。ジャネット・・・。」

（シルジーク）
「・・・。」

彼等には、そんなジャネットに対して、何一つ言葉をかけてやる事が出来なかった。

あんなに優しくて明るかったジャネットが、周囲の静止する声に対して怒鳴り声を撒き散らしながら、必死にマリオの遺体に覆いかぶさるようにして泣いていたのだ。

出来ることならそっと、彼女を慰めてやりたい気持ちで一杯だったろうが、彼等にしてやれる事は何もなかったのである。

（シルジーク）
「いつか、凄い奴になると思ったんだけどな・・・。」

シルはゆっくりと顔を上げると、ガーゴイル格納庫の小窓から少しだけ見える、赤く日に焼けた雲に視線を向けると、目を細めながら呟いた。

（シルジーク）
「サフォークも舌を巻く程の腕だぜ。見た目はまだまだ子供だったけど。あれは絶対。良い整備士になるはずだったんだ。もったいないよな・・・。ひょっとしたらパイロットとしての素質だってあったかもしれない。」

（セニフ）
「・・・うん。」

俯(うつむ)いたままのセニフが、横目でシルの方に視線を向ける。

シルの表情は至って普段と変わり無い表情であったが、それでもどこか物悲しく、何かやりきれない感情を滲(にじ)ませていた。

（シルジーク）
「でもさ・・・。今になってよく考えると・・・。俺ってマリオのこと何にも知らないんだぜ。知っているのは出身がリバルザイナ共和国で年齢が１３歳。臆病だけど茶目っ気があって、聞き訳が良くて、ジャネットにいつもくっついて歩いている。そのぐらいさ・・・。」

（セニフ）

「そ・・・・・・・・・。・・・そだね・・・。」

少し呆れた様に話すシルの表情が少し強張って見える。

それは、マリオを失った事に対する悲しみもあったのだろうが、どこか自分に対しての憤り(いきどう)のような感情も含んでいたようだった。

あれだけ仲良く過ごして来たにもかかわらず、シルはほとんどマリオという人間の事を知らない。

確かに、日常生活を送る中で感じ取れる彼の言動や性格は、良く解っていたつもりだが、所詮それだけの事だ。

それで、友達といえるのだろうか。それで、仲間といえるのだろうか。

マリオが死んで初めて、いや、今まで気づいてはいたのだろうが、その扉に大きな錠前をかけてまで押し込めてきた感情が、心の中に沸々と込み上げてくるのを彼は感じていた。

そしてそれは今、彼の心の中に渦巻く「とある疑念」をも増幅させ、必死に彼の中で叫び声を上げるのだった。

一瞬、チラリとセニフの方へと視線を向けたシルは、再び何かを言い出そうとするのだが、セニフの視線とかち合ってしまうと、どうしてもその言葉を発することができない。

「とんだ爆弾を背負い込んだものね・・・」

シルは、徐にセニフから視線を背けると、その思いを押し殺すよう

に再び項垂(うなだ)れて黙り込んでしまった。

そしてセニフもまた、そんなシルの素振りに、違和感を感じながら、ゆっくりとシルから視線を外して黙り込む。

彼女はシルが本当に言いたいことを悟っていたのだろうか。

目の前で指を重ねた両手を見つめ、じっと何かを考え込むように視線を落とすと、再び二人に長い沈黙の時が訪れた。

０３－０４：〇知らないということを知ること［２］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「知らないということを知ること」

「過去、人種、身分、性別を一切問わず、且つ、一方的な干渉、詮索を禁ず」

お互いに幸せを求めて作り上げた制約に縛られ、それでも今までは、その小さな檻の中で満足げな表情で楽しく過ごせて来れた。

しかしそれは、本当にお互いが望んだ事なのだろうか。

知られたく無い。だから知りたくも無い。

それでは全くの赤の他人も同然。

お互いに知り合うからこそ、真に心の底から安心して楽しめるのであって、知らない事を突き通すことは、どこか心に不安を抱えたまま、後ろめたい気持ちに苛(さいな)まれ続けなければならないと言う事だ。

本当に知らないということは、本当に幸せなこと。

知らないという事実を突きつけられて初めて、人はその知らないという事に対しての不安を抱くもの。

その知らないという事実を知ってしまった以上、その心の闇へと引きずり込もうとする、不安という魔の手から逃れるすべは無い。

その真の事実が照らす光によって、その闇をかき消してしまう以外には・・・。

シルは突然、思い立ったようにセニフの方に向き直ると、じっと彼女の表情を伺うように視線を送る。

しかしセニフは、この彼の視線に気づいてはいたのだろうが、何故かそれに気づかないフリを通し、ずっと俯いているだけだった。

（シルジーク）
「セニフ・・・。お前さ・・・。」

（セニフ）
「いや。お願いだから。聞かないで・・・。シルが何聞きたいかって。そんなの・・・。解ってるよ・・・。」

シルの方に視線を向けるでもなく、ずっとどこかを見据えたままのセニフは、即座にシルの言葉に拒絶反応を見せた。

そんなセニフの態度に、大きく一つ溜め息を付いて見せたシルだが、彼女からそういう返事が返されるであろう事は、もうすでに解っていたことだ。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国出身で現在１６歳。

細く長い赤い髪の毛に、元気がよく人懐っこい性格の小柄な少女。

ＤＱの操作に優れ、動体視力、運動神経は抜群だが、判断力、精神力に乏しい少女。

シルが彼女について知っている事とは、たったこれぐらいなものだ。

（シルジーク）
「俺はさ。今までそれで良かったのかなって。ずっと思ってたんだ。今が楽しけりゃそれで良いだろって・・・。」

（セニフ）
「私は今まで通りで良いよ。」

と、不貞腐れたような表情で返事をしたセニフが、ギロリとシルを睨み付ける。

どうやら彼女は一歩も引く気は無いようだ。

彼女がそこまでひた隠しにするものとは、一体何なのであろうか。

セニフを狙って襲い掛かってきたあの集団は完全に戦闘集団だった。

あの女が言っていた通り、奴等が帝国の人間だとするならば、一体、何を目的としてセニフを連れ去ろうとしたのか。

そして、あのユァンラオとか言う男の目的は何なのか。

再び、セニフを狙って動き出すのだろうか。

恐らく彼が抱くその謎を解く鍵を握るのは、この少女であることは間違いない。

あの住宅街での戦闘からずっと、シルの脳裏に渦巻いて離れないこの疑念は、時を追う毎にどんどん膨れ上がり、彼の心で大きな不安

を掻き立てるのだった。

あれだけ大きな事件に発展したのだ。それは無理も無いことであろう。

（シルジーク）
「なぁ。セニフ。落ち着いて・・・。」

（セニフ）
「やめて。お願いだから・・・。」

それまで優しい口調で話しかけようとしたシルだったが、頭ごなしにすべての会話を遮断するセニフの態度に、少々苛ついた様子で荒らげた声を彼女にぶつけてやった。

（シルジーク）
「セニフ。お前さ。あんな事があっても俺に黙ってろって言うのか？俺はそんなに信用無い人間なのか？まさかあんな事が起きるなんて思っても見なかったけどさ。少しぐらい教えてくれても良いんじゃないのか？」

シルの言葉に反応してかしないでか、セニフはゆっくりと抱えた両膝の間に顔を埋めて蹲（うずくま）る。

（シルジーク）
「なあ・・・。恐らくあの男もこのガーゴイルに乗っているんだろうし、ひょっとしたらまた、襲って来るかもしれないぜ。そんな時、何も知らないんじゃ、俺にはどうする事も出来ないじゃないか。」

少しだけ。ほんの少しだけ。また襲われるかも知れないというシル

の言葉に、ピクリと反応を見せたセニフだったが、決して彼女から良い返事が得られることは無い。

そして、ゆっくりとセニフの肩に手をかけたシルが、再び優しく彼女に語り掛けようとした時、その手を振りほどこうと身を捩った彼女は、不機嫌そうにシルを睨んでポツリと吐き捨てた。

（セニフ）
「・・・いいよ。放っておいて・・・。シルなんかにどうする事も出来ないよ・・・。もう、ほっといてよ!!」

このセニフの態度に、今度はシルが半分キレかけた。

せっかく人が心配して言ってるというのに、何たる言い草・・・。

この女・・・!!ほんと・・・!!

（シルジーク）
「この我儘女!!自分勝手!!放って置けるわけ無いだろうが!!単細胞が!!」

（セニフ）
「何だよ!!シルには関係ないんだからほっときゃ良いじゃん!!このお節介!!怒りんぼ!!」

（シルジーク）
「人の気も知らないで!!せっかく心配してやってんのに!!このチビ娘!!能天気!!洗濯板!!」

（セニフ）

「んなっ!?そこまで言う!?この無神経!!気分屋!!ひねくれ者!!」

突然、声を大きく張り上げて、口論を始めた二人だが、よくもまあ、こんな周囲に人がごった返す狭い空間の中で、完全に低レベルともいえる子供の罵り合いが出来たものだ。

二人の罵り合いは、この後もしばらく続くことになるのだが、周囲の人々からの冷やかで好奇な視線に晒されていることに気がつくと、その恥ずかしさに耐えられなくなり、二人揃ってスゴスゴと身体を小さく丸めて黙り込んでしまった。

シルは、何もこんな幼稚な言い合いをしたいがために、セニフに突っかかったわけではない。

そして、セニフもまた、そんなシルの思いが解らない訳でもないのだが、決して二人の思いが交錯する事もなく、ひたすらに無駄な時間が流れていくだけだった。

頭を抱え込んで項垂(うなだ)れるシルは、大きく溜め息をつくと、疲れたような口調のまま呟いた。

(シルジーク)
「どうすんだよ。・・・これからさ。」

(セニフ)
「そんなこと・・・わかんない。・・・・・・わかんないよ・・・。」

彼女自身、本当にどうしていいのか解らないのだろう。

先ほどの勢いとは打って変って弱々しく、うつろな表情のセニフが再び蹲る。

彼女が何かに脅えていることは確かだが、一体、何に脅えているのかは解らない。

それでも、セニフにもし何かあった場合、どうにかして守ってやりたい気持ちは当然ある。

しかし、当の本人がこれほどまでに協力を拒むとなると、それも中々に難しい。一体、どうすれば・・・。

（シルジーク）
「なあ、セニフ。アリミアを探しにいかないか?」

（セニフ）
「・・・。」

悩んだシルが唯一頼れる人物。それはもう、アリミアをおいて他には居ないだろう。

彼女はセニフとも仲は良いし、それに、どこか頼りがいもある。

もはや自分の力だけでは、このセニフの心の扉をこじ開けることは、不可能だとシルは悟ったのだ。

セニフはこのシルの提案に対して、またもや沈黙を持って拒否したのだが、今度こそはとばかりに、痛む右足を酷使して無理やり立ち上がった。

（シルジーク）
「痛っ・・・。」

（セニフ）
「ちょっと・・・。無茶しないでよ。その足で。」

そして、心配そうな表情でシルを見上げたセニフに向けて手を差し伸べると、躊躇（ちゅうちょ）する彼女の手を掴（つか）み取って、強引に引き起こした。

（シルジーク）
「ほら。セニフ。行こう。ちょっと肩を貸してくれ。」

（セニフ）
「あぁ・・・ちょっ・・・。・・・うん。」

何かを思いつめたような表情のままのセニフだったが、有無を言わさず肩へと手を廻したシルが促すと、彼女は仕方無さそうにそう答えた。

彼女は正直、アリミアに会いたくはなかった。しかし、本当は怪我をしたアリミアを心配し、すぐにでも会いに行きたい気持ちが強かった。

それでも彼女と会うことを拒もうとするのは、彼女の怪我の原因が、自分にあるのだと解っているためであり、これまで何度となく自分のことを気遣い、色々と問いかけてきてくれたアリミアが、今回の事件で黙っているはずが無いと感じていたからだ。

それでも、一生、アリミアと会わずに過ごすこともできないだろう

し、いつかは会って「やり過ごさなければならない」のだろう。

セニフは気が進まないながらも、シルと一緒にアリミアを探し始めた。

03－05：〇辿りし道の色（前書き）

陸軍養成学校を陸軍士官学校に変更しました。

０３－０５：〇辿りし道の色

第三話：「作れば壊れる神前の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「辿りし道の色」

鋼鉄の壁に四方を囲まれた小さな部屋の中に軽いノック音が響き渡る。

部屋の両側には小さなベッドが上下に２つづつ設置されており、外を覗く為の小さな小窓すら無い。

部屋の中を照らす電灯も、一つしか取り付けられておらず、被った埃（ほこり）に遮（さえぎ）られたその光は、どこか弱々しくちらついていた。

そんな陰気臭い感じの漂う密閉された部屋は、セロコヤーン陸軍基地へと向かう、重爆撃機ガーゴイル２の仮眠部屋だ。

金属を擦（す）った様な嫌な音を発して鍵が開けられると、小さな扉を開いて、若い三人の男女が狭い部屋へと入室してきた。

（サルムザーク）
「ゼフォン特佐。サルムザーク予備佐官以下２名入室いたします。」

（ゼフォン）
「何か用かね。」

扉の前に立って、部屋の主に対して敬礼をして見せた３人の内、一番中央に立つ小柄な少年。

黄緑色の細い髪の毛に、少し華奢な体つき、そして深緑の瞳がとても奥深げな好少年で、名前を「サルムザーク・ハイフィリツ」という。

胸からぶら下げられた軍章は、未だ「尉官」クラスの物だったが、彼はこのたび、最年少１８歳での「陸軍三佐」の官位を受けることが決まっていた。

（サルムザーク）
「いえ。御挨拶を兼ねて、少し様子を伺いに参りました。」

（ゼフォン）
「むぅ。将来有望な陸軍最年少佐官の来る様な場所ではないと思うがね。」

そう言って、ギロリと威風（いふう）漂う目つきでこの若者を睨み付けた高年男性が、ツルツルに剃り上げられたスキンヘッドを擦りながら、ゆっくりとベットから上体を起こす。

彼の名は「ゼフォン・ウィリアムズ」。

トゥアム共和国陸軍内では、かなりの権限を持つ大物司令官であり、ブラックポイント駐留軍の総司令官として、トゥアム共和国北方一帯を長年守り通してきた功労者でもある。

何故、彼のような偉大な人物が、このような監獄にも等しい小部屋に、押し込まれているのかというと、それは、つい数時間前に発生したブラックポイントでの事件が関係していた。

事件を引き起こしたセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国が、トゥ

アム共和国へ宛てた通知文書の中に、帝国の反逆者たるロイロマール家に加担する共謀者として、彼の名前が記載されていたからなのだ。

つまり今の彼は、ＢＰ事件を引き起こした重要な容疑者として、共和国政府の事情聴取を受けるために、囚われの身となっていたのだ。

（ゼフォン）
「わしはもうすでに防衛司令官でもなんでもない。後任にはサクラギ一佐が繰上げで就任する事になったそうだ。君は新設部隊を任されるようだが、本当に若い衆３人で本当に大丈夫なのかね。」

（シューマリアン）
「御言葉ですが、心配事ならばご自分の事を、優先してされた方がよろしいかと思いますが。」

ゼフォンが静かに若者達３人を見上げ、老婆心（ろうばしん）ながらの思いを連ねていると、サルムの左脇に立っていた大男が口を挟んだ。

彼の名は「シューマリアン・ベルナール」。

大男といっても縦に大きいのではなく、横に大きく太った男で、よく肥えた大きなお腹に、若いながらも薄っすらと禿（は）げ上がった頭が特徴的な男性だ。

見た目ただのオッサンにしか見えない彼だが、驚くべきことに彼はまだ３０歳になったばかりである。

普段から温厚で、何事にも動じないゆったりとした性格の彼は、軍階級「技術三尉」で、一般的に部隊兵器の整備と管理を担う人物で

ある。

（カース）

「事件発生時には一体何をしてらっしゃったのかしら？パーク見学？それとも御昼寝？平和ボケなされて、良い様に蹂躙（じゅうりん）されたと伺ってますが。」

（ゼフォン）

「有事に対する軍の対応に関しては特に問題は無かったはずだ。わしは彼等の対応に不備があったとは思っておらん。わし自身の対応には、多少問題が有った様だがな。」

全く自身の行動を弁解するでもなく静かに語ったゼフォンを、なにやら厳しい目つきで睨み付ける女性が一人。

サルムの右脇に立つこの女性の名前は「カース・イン・ロック」。

軍階級「陸軍作戦軍曹」である彼女の任務は、主に部隊の作戦立案となるのだが、それ以外にも部下の育成や管理、部隊運営に関するプランの作成や管理、更には部隊の作戦指揮まで行う権限を有する、非常に難しい役割を担うことになる。

彼女は新しい部隊の設立メンバーとして召集されるまでは、陸軍仕官学校の教官として猛威を振るった「鬼教官」でもある。

しかし、兵士達から恐れられた鬼教官の身なりは実に不思議で、分厚く塗られた派手な口紅に、耳元ではピアスがキラキラと光っている。

そして何より、黒髪の間から覗く白いバンダナが特徴的で、どこか

らどう見ても鬼教官たる威風は感じず、27歳の彼女はとても女性的な格好をしていた。

まさにそんな両極端な二人を携える、これまた不思議な最年少佐官。

こんな3人が一つの部隊を任されると聞いた人は、一体どんな思いを抱くだろうか。

（サルムザーク）

「カース。シューマリアン。特佐と二人で話がしたい。少し席を外してくれるか？」

サルムがゆっくりと手を翳し、そう二人に部屋を出るよう指示をすると、カースは、なにやら腑に落ちないような不満げな表情で、サルムに方に視線を向けた。

彼女としては、これからサルムを補佐する立場の人間として、様々な情報に精通しておかねばならず、このように自分の上官たる人物から、どれだけ重要な会話なのだとしても、疎外されたことに不満を抱いたのだろう。

しかし、言われるがままに部屋の扉を開いたシューマリアンの姿に、小さく膨れっ面をしてみせると、仕方無さそうに彼の後に続いて部屋を後にした。

そしてやがて、狭い小部屋に若い男と高年男二人だけを残して、ガチャリと小さな扉が閉められた。

（ゼフォン）

「むぅ。あの二人で本当に大丈夫なのかね。」

（サルムザーク）
「能力的には全く問題ありません。」

部屋の外へと姿を消した二人の気配を耳で追いながら、しばしの時を置いて部屋に残された二人が会話を始めた。

なにやら元々お互いを知っているような話し振りではあるが、これから新設する部隊において、腹心として重宝したいはずの二人を退席させてまで、したかった話とは一体何なのであろうか。

それまで仕切りに辺りを警戒する素振りを見せたままゼフォンだが、ゆっくりとうなずくサルムに促されると再び口を開いた。

（ゼフォン）
「今回の事件を発端に、帝国内部で今後大きな動きがあると見るのが妥当だろう。恐らくは共和国側もそれに気が付いているはずだ。このわしの身柄を即座に拘束した手際の良さといい、元々そういう運命にあったのだろうな。」

（サルムザーク）
「これまで特佐がどれだけ共和国の為に尽力（じんりょく）してこられたか。共和国政府にはそれが解る人物が居ないということなのでしょうか。」

（ゼフォン）
「もはやわしの様な老いぼれに出来ることなど、有りはしないのだよ。これがわしの最後の仕事なのだ。」

（サルムザーク）
「まさか特佐・・・。ご自身で・・・。」

突然、驚きの表情を浮かべたサルムの顔を覗き込みながら、ゼフォンは小さく笑って見せると、再び小さく喉を唸らせて小首をかしげた。

（ゼフォン）

「むぅ。わしぐらいの上役になると、色々と小面倒なこともせねばならぬ。幾ら綺麗事を並べて民衆の支持を集めようと、振るう力が純白の力だけでは、守れるものも守れないのが世の常。様々な色を必要な時に必要なだけ織り交ぜて、思う理想を目指して描き出すのだ。君にもきっと、解る時が来る。もっとも、意に沿った色を生み出すのは、非常に難しいものでな。時に全く違った異物を生み出してしまうこともあるのだ。勿論、それらはなるべく、わしが一緒に洗い流してやろうと思っとるがな。」

そう自分の思いを連ね出すゼフォンは、まるで自分に最後の時が訪れた様な口ぶりでサルムに語り続ける。

それまで彼が抱き続け、理想という真っ白なキャンパスに描き出した、自分という生き様を。そしてこれからを担う若人に対して。

激しい動乱期を生き延びてきたであろう高年の男性は、今や落ちぶれたように狭い小部屋のベッドに座り込んで、ツルツルのスキンヘッドを擦る事しか出来ないのだが、サルムは決して礼を失することの無い態度のまま、この高年男性の姿をじっと見つめていた。

（ゼフォン）

「君の・・・。・・・いや。よそう。もはや君は私の部下でも何でも無い。ましてや君が「それ」に縛り付けられる必要もない。今や君はもう立派な士官の一人だ。君自身が抱く信念に向かって、自由

に日々精進するが良い。」

（サルムザーク）
「いえ。私などまだまだ単なる若輩者。特佐のお力添えが無ければ、とてもここまでは・・・。」

（ゼフォン）
「なに。謙遜（けんそん）するな。わしにしてやれたことなどほんの些細（ささい）なことだ。それに・・・。君には悪いことをしたな。もう少し私に力があれば、何とかしてやれたのだろうがな。」

（サルムザーク）
「もはやそれは、時間の問題だったのでしょう。特佐がなされてきた事には、本当に感謝しております。」

そして二人の間にしばし沈黙の時が訪れると、身じろぎもせずに一言も言葉を発さないまま、見合う視線に意思を乗せて語り合う。

お互いにまだ、色々と語り合いたいことは有ったのだろうが、それでもこの高年男性は、今や国家反逆者として身柄を拘束される身だ。

どうやらサルムは、この人物を相当に慕っているようであったが、これ以上無為に長々と会話を続ける事も出来ないのだ。

（ゼフォン）
「むぅ。では、そろそろ君も行くが良い。これ以上、このわしに関わりあうと、ろくな事は無いぞ。」

（サルムザーク）
「解りました。それでは特佐。お体にお気をつけて。」

そう言うとサルムは、この高年男性に向けて、一つ敬礼をして見せた後、更に深々と頭を下げて見せた。

そして、ゆっくりと振り返り、扉の取っ手に手をかけようとした時、ゼフォンが別れの言葉の変わりに、一つだけ忠告を発した。

（ゼフォン）
「むぅ。今度、君の上役となるグラフティ一佐は相当の切れ者だ。彼は強行派の人間で有能な人物なのだが、切れ過ぎるのが玉に瑕（きず）でな。相応の覚悟で望んだ方が良いだろう。」

（サルムザーク）
「ご忠告ありがとうございます。心しておきましょう。」

サルムはそう言って、ゼフォンに小さな笑みを返すと、ゆっくりと小部屋の中から身を乗り出して扉を閉める。

そして、その扉の鍵をかけた時、彼の表情は次第に強張ったものへと変貌していた。

細い通路に響き渡る甲高い飛行音を身体に受けながら、彼はまっすぐに伸びた通路を一人歩み始めるのだった。

０３－０６：〇作れば壊れる自然の原理［１］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「作れば壊れる自然の原理」

大きな重たい鉄の扉を開くと、そこは真っ暗な闇の中。

じっとりと湿った何も無い空間を飾る壁際のインテリアは、あくまで外見的美しさを保つためのものであり、その本質となる自分自身は、常にその闇の真ん中に位置している。

天井から差し込む光の筋さえ、通さないその真っ黒な球体は、全く外からの呼びかけに応じることも無く、見えない事で安定しているに過ぎない「不安定な物」。

それは、誰しもが持つ表層たる自分とは表裏一体となる影の部分であり、自らの行動に裏なす自分を大量に抱え込んだ重たい重力。

思えば思うほどに中心に。願えば願うほどに中心に。

自分自身の心を基点として、負なる感情を押さえつけるためのみに生まれた悲しき心の病なのだ。

必死になって取り繕い、上辺だけの美しさを求めて着飾った眩いばかりの装飾品は、所詮、すべては脆いガラス細工に過ぎない。

外界から照らす光には反射して、決して簡単に覗くことの出来ないよう、細工が施されてはいるが、一度闇が襲えば簡単に透かして見ることの出来る人の内なる弱み。

それでいながら。それが解っていながら。

人は必死にそのガラス細工を作り上げていくのだ。

誰にも悟られないように。誰にも知られることの無いようにと。

人は必死にそのガラス細工を身に纏うのだ。

いつしか。必ず崩れ去ってしまうことを予感しながら。

今ここに。

外界から完全に隔離された狭い四角い空間の中で、漆黒の球体が４つ蠢いていた。

その中央には質素なテーブルが一つ置いてあり、その四隅に椅子が並べられている。

そして、テーブルの上には、埃を被ったコップが６つほど放置されていて、硬く閉ざされた鋼鉄の壁の傍には、小さな段ボール箱が幾つも積み重ねられていた。

それは何か倉庫に使用していた部屋なのだろうか。

静かに澄んだ空気の中に、頭上から齎された淡い光に映し出された塵が、フワフワと目の前を横切っては消えていく。

そんな陰湿な現実世界に、４人の男女が規則正しく、並べられた椅

子の上に座っていた。

一人は何やら難しそうな表情を浮かべ、テーブルの上に右肘を突いたまま、じっと何かを考え込んでいる金髪の少年が一人。

彼はどうやら、右足の太腿を負傷しているようだが、特にそれを痛がる様子も無い。

彼は元々、集まった４人の内の一人の少女と共に、とある女性を探していただけなのだが、その女性の提案によりもう一人を加えて、たまたま見つけたこの小部屋に集まることになったのだ。

彼の目の前には、三人の女性が座っていた。

左手に座っている女性が、彼の探していた女性であり、長く伸びた紅い髪の毛を邪魔にならない程度に首元で結び、負傷した右腕を包帯で肩から吊り下げて、じっと正面の女性を見つめているようだった。

その彼女の正面に座る女性は、抹茶色の癖毛が特徴的な背の高い女性で、椅子の上で両足を抱えたまま、顔を埋めるようにしてしきりに泣いている。

かなり辛いことがあったのだろうか、決して彼女が泣き止む様子はない。

そして、そんな居心地の悪い雰囲気の中、彼の正面で項垂(うなだ)れたまま、じっと身動きをしない赤毛の少女が一人。

長く垂らしたその髪の毛で顔を隠し、必死に自分の世界へと閉じこ

もろうと努力する彼女。

お互いが心の内に秘める漆黒の球体は、其々（それぞれ）が持つその重みによって引かれ、次第に近づけば近づくほどに色濃く交じり合う。

他の誰かに助けてもらうことで、自分の体が軽くなるというのに。

他の誰かに触れることで、自分の思いが軽くなるというのに。

着飾ったガラスの鎧にガラスの盾を翳（かざ）して、決して誰も寄り付かないように身構えているのだった。

０３－０７：○作れば壊れる自然の原理［２］@

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「作れば壊れる自然の原理」

「貴方の言っている事は矛盾しているわ！！この矛盾人間！！」

＜ジャネット・クライス・ホスノー＞

大好きだった。大好きだったマリオが死んでしまった。私の最愛の弟。可愛い私の最愛の弟。

まだ小さくて、目元はお母さんに似ていて、髪の毛はどこか父親に似ている。

少し気が弱くて、恥ずかしがり屋で、オドオドしていて、いつも私のズボンの影にすぐ隠れていたっけ・・・。

でも最近では、だんだんと大人びて行く感じがして、おっちょこちょいな私なんかよりも、ずっとしっかりしていて、明るくて、元気の良い子になったの。

お姉ちゃんね。嬉しかったんだよ。

いつの間にか、私の知らないところで、チームメイトと楽しく雑談していたマリオ。

私なんか全然わからないＤＱの事だって、いつの間にか全部覚えちゃって。

出来の悪い我儘（わがまま）な私なんか、ちょっと悔しかったりもしたけど、お姉ちゃんね。嬉しかったんだよ。

私が抱きついてキスすると、可愛らしく顔を赤らめて恥ずかしがっていたっけ・・・。

いつも、いつも、守っているつもりだった私だけど。本当は私が守られていたんだよね。マリオ・・・。

「うぅ・・・スン・・・うぁぁ・・・。」

でも・・・。何で突然私の前からいなくなってしまったのよ。

折角、一緒に。これからもずっと一緒に。がんばって生きて行こうって。言ってたじゃないの。

どこに行ってしまったのよ。マリオ・・・。

「うぅぅぅ・・・。・・・・・・・。うぁぁぁぁ・・・。」

泣き始めてから。一体どのぐらいの時間が経ったというのだろう。

心を覆い尽くした残酷な影に取り付かれてから、一体何をしていたのだろう。

悲しみのどん底を這いずり回っている今の感触以外に、もはや何も感じることは出来ない。

ただ確実にそこにあるものは、漠然とした「悲しみ」と矛先の無い

「憎しみ」。

何処を見ても・・・。何処を探っても・・・。必死に呼んでも・・・。

もう、マリオの温もりを感じる事はできないのね・・・。

私が幾ら泣いたって、助けに来てくれないんだね・・・。

（セニフ）

「・・・ジャネット・・・。」

椅子の上で両足を抱えて顔を埋めたまま、ひたすらにひたすらに泣くジャネット。

現実という鋭い刃渦巻く外気から身を守るため、必死に目を瞑り、必死に身を丸めて、ひたすらにひたすらに泣くジャネット。

両親が事故に遭って死んだときも、こんな感じだったんだろうか・・・。

あのときも、枕に顔を埋めて、思いっきり泣いていたっけ・・・。

でも・・・。あのときはマリオがいたから・・・。

マリオがいたから、今まで2人でがんばってこれたんだ・・・。

じゃあ、今の私には・・・？今の私には誰がいるって言うの？

私にはマリオしかいなかったというのに。

私にはマリオが全てだったというのに。

悲しむときも。喜ぶときも。寝るときも一緒だった。

いつも一緒。いつまでも一緒だと思っていたのに・・・。

でも、そんなマリオが死んでしまった。

突然に死んでしまった・・・。スクリーン越しに・・・。

何もできない私の目の前で・・・。私の目の前で・・・!!

あの状況で一体!私にどうしろっていうのよ!!

助けてあげたいのに、助けることも出来ない!!

声をかけてあげたいに、かけてあげることも出来ない!!

もしかしたら、あの時すぐ助け出せていたら!!

もしかしたら、助かったかも知れないのに・・・!!

たすかっ・・・。・・・。

「・・・マリオォ・・・。うぅぅぅ・・・。」

一体、誰がこんなことをしたの・・・?

一体、誰が私からマリオを奪ったの・・・？

一体、誰が！！！

（アリミア）

「残念ね。ジャネット・・・。かけてあげる良い言葉。思いつかないけど・・・。でもね、そう・・・。今は辛くとも、なるべく早い内に忘れてしまう事よ。なるべく早い内に・・・。」

この言葉は良く覚えている。

淀んだ暗闇の中に激しく木霊した、汚らしい自己中心的な言葉。

棘棘しいその刃物が私の心に突き刺さったの。深く、広く、そして毒々しく。

（アリミア）

「死人に取りつかれた人が、瞬間的に生きる目的を見失って、自暴自棄に自らの命を危険な窮地へと晒す姿を、何度となく見てきたわ。今自分が置かれている立場、周囲の状況が全く見えなくなるということね。そして、憎しみに自分を駆り立てる行為は、結局、自分自身を貶(おとし)める行為でしかないのよ。」

この言葉に反応をみせる真っ赤に充血した瞳が、抹茶色の癖毛の隙間から飛び出すと、激しい怒りを吹き荒らしながらアリミアの姿に突き刺さる。

薄暗い部屋の中。照らし出す電灯が二人だけを映し出しているかのように、お互いの視線が、攻撃的意識を含んだままぶち当たった。

目の前の冷たい灰色のテーブル越しに見つめたその瞳には、アリミアの姿しか映し出されていない。

「貴方に何がわかるのよ・・・。何が・・・。年下の貴方に言われたくないわよ・・・。」

再び顔を埋めて外界との接触を断とうとするジャネット。

アリミアは椅子に深々と腰掛けたまま、じっと変わらぬ視線でジャネットを見つめている。

肩から吊るされた右腕が痛々しくはあるが、まったくそんな事を気にする素振りも見せず、ただ、ジャンネットをひたすら見つめていた。

部屋の中に存在する４つの吐息は、それぞれの思いと共に静かに繰り返されてはいたが、それでもどこか、存在自体を消し去るかのように息を殺し、じっと対峙した二人の気配を伺っているだけだった。

それまで、甘い果実のみに視線を奪われていた彼等にとって、お互いの心の根元となる幹の部分は、黒く淀んだ深い霧によって見つめることさえしなかった。

（アリミア）

「いつものジャネットじゃないのね。泣くだけ泣いてすっきりするなら、いつまででも泣けば良いわ。でもねジャネット・・・。貴方にはまだ歩いて・・・。」

「私のことなんかどうでもいいのよ!!絶対!!奴等絶対!!」

顔を伏せたまま、籠もった怒鳴り声を吐き散らす。

誰がマリオを!!マリオを殺したやつらが憎い!!殺してやる!!
絶対に殺してやるんだから!!

ジャネットはGパンの裾(すそ)をギュッと握り締めながら、肩をすぼめて怒りに打ち震えていた。

(アリミア)
「どうでも良くはないでしょう。ジャネット。悲しみを怒りに変えて復讐しようとでも言うの?怒りや憎しみに駆られた復讐劇のヒロインなんて聞こえは良いけど、決して甘く考えてはだめよ。貴方今のままだと。マリオと同じく早死にするわよ。」

(セニフ)
「ちょ・・・。ちょっと・・・。アリミア。あんまりだよ・・・。そっとしておいてあげようよ。ジャネットだって・・・。」

(アリミア)
「セニフは黙っていなさい。貴方も同じ事よ。私達がこれから何処へ向かおうとしているか、解ってないわけじゃないわよね。」

セニフはあまりのアリミアの言い方に耐えかねて言葉を挟んだが、アリミアの鋭い眼光がセニフへと向けられると、まるで捕食者に睨まれたかのように、心が縛り付けられて身動きが取れなくなってしまった。

アリミアが時折みせるこうした冷たい態度はいつもの事で、恐らくはジャネットの事を心配して投げかけた言葉だとは思うのだが、何故に彼女は抱いた思いを伝える事が、こうも下手糞なのだろうか。

（シルジーク）
「トゥアム共和国陸軍セロコヤーン陸軍養成所だろ。まさか現実にそうなってしまうとは思わなかったけどな。」

（アリミア）
「そうね。私達も甘かったのかもしれないわ。情勢が安定している時ならまだしも、さっきのブラックポイント襲撃事件と言い、間違いなく何かやばい事が起きるような気がするわ。そんな状況下で２年間。兵士として戦場で戦わなければならない義務を背負った。生半可な覚悟じゃ、決して生き延びることはできないわ。ＤＱＡみたいな遊びとは違う。負けるという事は、即死に繋がると言うことよ。」

アリミアが「死」という言葉を発したのを最後に、しばし４人の間に暗い沈黙の時が訪れる。

其其（それぞれ）が其其（それぞれ）に「死」という言葉に、何かの思いを重ねるように。

自らが陥（おちい）った立場を再認識しながら。

勿論、彼等に逃げ失せるだけの違約金を払う経済力などありはしない。

甘かった。安易だった。そう言われてしまえばそれまでの話。

ＤＱの扱いに少し長けているというだけで、高額な賞金を稼げるという、国を挙げて大々的にばら撒いた甘い罠に、彼等はまんまと嵌（は）められてしまったのだ。

この世にそんな、甘い話など、何一つ無いというのに。

しかし、彼等がそれ以外の生きる道を、簡単に選択出来たかといえば答えはＮＯであり、特技たる自分の能力を生かした分野に身を投じることは、決して悪いことではない。

彼等の中では、ＤＱＡ大会に参加してしまったこと事態に、それほど強い後悔の念は抱いていないのだ。

今はそんなことよりも、必死に生き延びることを切望して、これからの自分を考えるべきなのだ。

アリミアが真に言いたいこととは、そういった事なのだろう。

（アリミア）

「ジャネット・・・。悲しみや憎しみを含んだ負の思いは、これからの貴方に取ってマイナスにしかならない。いい？決してプラスに働くことはないのよ。勿論、いますぐにとは言わないけど、一度冷静になって・・・。」

「冷静にですって！？」

突然、ジャネットの身体の震えがピタリと止まると共に、次にアリミアが発したかった思いすらかき消してしまうほどの、怒鳴り声が部屋中に投げつけられる。

そして、勢い良く椅子から立ち上がると、ジャネットはアリミアを見下ろすように睨め付けた。

悲しみに打ちのめされてか、怒りに打ち震えてか、プルプルと小刻

みに揺れる彼女の右手は、ギュッと硬く握り締められている。

「貴方は自分の大切な人が死んでしまった時に、平静さを装っていられるって言うの！？貴方にとってマリオはどうでもいい人間だったかもしれないけれど、私にとってはかけがえの無い弟だったのよ！！それが・・・。冷静になれですって・・・！？」

もう、ジャネットの顔は、涙と怒りでぐしゃぐしゃだった。

抹茶色の癖毛は乱れ、涙にぬれた頬にはキラキラと光が反射している。

セニフもシルも、そんな彼女の表情を直視できないほどに、彼女の悲壮の念が、部屋一面に充満していた。

しかし、そんな中でも、いつもの冷静さを失わない視線が１つだけある。

普段から人を刺すような冷たい目つきと、落ち着き払った態度。

そして何様かと思うほどの高慢な指図・・・。

「何よ・・・。私達・・・。チームメイトなのにね。何にも無かったかのように・・・。ケロッとした顔してさ・・・。・・・・・・。ちっとも泣いてくれないんだね・・・。」

ゆっくりと下を向いて俯(うつむ)きながら、ジャネットが呟いた。

皆にとっては、マリオってそんなに軽い存在だったんだ・・・。

取り乱すことも無く・・・。涙の一つも流すことも無く・・・。

（アリミア）

「私の涙は出なくなったの。」

全く普段と同じ態度のまま、何てことは無い能面の様な表情で、ジャネットに軽く返答してみせたアリミア。

なんでこんなに冷たいの？アリミア・・・。なんでこんなに厳しいの？アリミア・・・。

貴方って・・・。貴方って・・・。・・・本当に！！

「この冷血女・・・！！」

ジャネットは更に厳しい表情のまま、アリミアの心へと突き刺すように、激しい怒気を吐き捨てた。

しかし、普段にも増して冷たいオーラを身に纏ったアリミアが、そんなチンケな言葉に動ずるはずも無く、再び正論ではあるのだが、ジャネットの思いを逆なでする様な言葉を発してしまうのだ。

（アリミア）

「じゃあ聞くけど、貴方はこれまでに戦争で死んでいった人達の死を悲しんで、泣いて見せることができるのかしら？人が死んでしまう事は極自然な事で、その人が死んだからって涙を見せてまでして悲しむ必要は無いの。そんなにひたすら悲しんでいるだけの姿を、マリオが喜んで見ているとでも思っているの？ジャネット。」

「大切な人の死なら！泣いたって当然でしょう！？なんで貴方なん

かに、泣くことを止められなきゃならないのよ!!マリオ・・・。
マリオが死んで・・・・・・。こんな気持ちになったなのなら!!
泣いて当然でしょうよ!!解らないの!?本当に解らないの!?・・
・そう・・・。貴方みたいな人間には、解らないのね・・・。解っ
てたまるものですか!!」

小さなテーブル越しに激しく噛み付き合う二人。

長い間一緒に過ごしてきたのだ。これまでもチームメンバー達の間
に、諍(いさか)いが全く無かったわけでもない。

それでも、ここまで逼迫(ひっぱく)した二人のやり合いは見たことも無く、セ
ニフとシルはただ呆然と見守る事しか出来なかった。

マリオが死んで取り乱すジャネットは解らなくもないが、突き放す
ような態度はすれども、アリミアはここまで酷い言動を吐き捨てる
人物ではなかったはずだ。

（アリミア）
「それは単に自賛でしかないわ・・・。」

ジャネットの言葉に、しばし時を置いて。少しだけ悲しげな表情を
浮かべて。

アリミアはジャネットから、ふと視線を逸(そ)らすと、静かにこう呟い
た。

（アリミア）
「本当に大切なのは自分の生命よ。誰かのために泣いてあげるなん
て行為は自賛自慰でしかないわ。」

この言葉を投げかけられたジャネットの表情は、チームの誰しも、今までに見たことも無い様な表情だった。

抹茶色の癖毛が逆立ち、普段は可愛い垂れ下がった目元が吊り上がると、鬼のような形相を醸し出した彼女の肩から、何か殺気のようなオーラさえ沸き立つ雰囲気が見えてしまう。

そして直後、間髪をいれず、ジャネットの右手の張り手がアリミアの左頬を襲った。

＞ｉ４８２８―８２７＜

湿った空気に包まれた部屋の中に、「ばちぃん！！」と乾いた音が駆け巡る。

アリミアの髪の毛を押さえつけていた紅いヘアピンが弾け飛び、紅く綺麗な彼女のストレートヘアが空中で踊り狂う。

「貴方は自分が敷いた真理の上しか歩くことの出来ない最低の奴隷だわ！！本っ当に最っ低な女！！」

叩かれた勢いに押されてよろつきながら、テーブルの上に左手を付いて蹲ったアリミアに対し、軽蔑するような視線で見下ろしたジャネットが、思いきり暴言を吐き捨てる。

すると今度は、垂れ下がる紅い髪毛の間から覗いた鋭い視線がジャネットを襲った。

テーブルから振りぬかれた左手の甲が、ジャネットの左頬をぶち抜

くと、またしても乾いた音が部屋中を駆け回る。

（シルジーク）
「やめろ!!お前等!!」

（セニフ）
「やめてよ2人とも!!」

さすがにこれ以上はまずいと思ったのか、セニフとシルが即座に争う二人の間に割って入った。

シルはアリミアの左腕と腰の辺りに掴(つか)みかかり、セニフはジャネットの腰に後ろからへばり付いて離さない。

が、その余りの背丈の違いからだろうか、セニフはほとんどジャネットの勢いを止めることが出来ず、勢いあまってテーブルに激しく衝突してしまった。

そして、テーブルの上に置いてあったコップが、拠(よ)り所を失ったように暴れまわると、1つ、2つと、床に落ちては割れていく。

「・・・っ痛・・・!!最低よ!!人を自分の思った穴の中に引きずり込もうなんて!!貴方はきっと、他の人の気持ちなんか、全然関心が無いんだわ!!」

（アリミア）
「・・・つっ・・・。私は貴方を引きずり込もうとなんかしていないわ!!私はただ・・・。私の経験・・・。いえ、私の思いを伝えたいだけ!!本当の想いでぶつからなければ、貴方も解ってくれないでしょう!?じゃあなに?貴方は慰めの言葉でもかけて貰えれば

嬉しいわけ?そんなこと!!一番して欲しくないのは貴方自身でしょう!?心に負ってしまった深い傷は決して癒えないの。辛いのは解る。でもね。だからこそ、貴方には早く立ち直ってもらいたいのよ。」

両者共に一向に冷めやらぬその怒気に任せて言い放つと、再びじりじりとお互いの距離を縮め始める。

ほとんど体格の変わらないシルがアリミアを止めることは出来ても、セニフがジャネットを押さえつけることなど、ほとんど不可能なことである。

仕方なしとシルは思い切って、両腕を突っ撥ねる様に二人の間に割って入った。

(シルジーク)
「ジャネット!!ちょっと待て!!アリミアも冷静になれ!!」

ようやくシルによって勢いを止められてしまったジャネットだが、激しく抱いた怒気が収まることも無く、押さえ付けられた体勢のまま、右手を伸ばしてアリミアを指差すと、再び厳しい口調で言葉を投げつける。

「アリミア!!貴方の言っている事は矛盾しているわ!!全然、貴方がやっている事と正反対じゃない!!そんな子供だましの論法で私を丸めこめるとでも思っているの!!自分の事だけが可愛いなんて、平気で言っておきながら!!今度は私の為にですって!!よくもぬけぬけと言えたもんだわ!!この矛盾人間!!」

乱れた飛んだ紅い髪の毛を左手でかき上げて、アリミアはチラリと

シルに目配せすると、少し落ち着きを取り戻した様子で、シルの押さえ付けた手をゆっくりと取り払う。

そして、弾け飛んでしまった紅いヘアピンを拾い上げると、起用に片手で耳元に差し込みながら、静かに言葉を返した。

（アリミア）

「表と裏・・・。矛盾している事こそが、全ての生き物の証よ。全て思った通りに行動するだけなら、人に理性なんて必要無い。欲望や感情だけで行動するなんて人はいないわ。ジャネットの中にも矛盾した点がいっぱいあるでしょう。だからこそ、自分自身が嫌(きら)いなのよ・・・。貴方は。」

アリミアは小さく溜め息を付いてみせると、再びジャネットに視線を宛がう。

もうすでに彼女の表情からは、激しい感情が消え失せていたようだった。

「・・・知った様に・・・。知った様に!!何かにつけて自分はなんでも知っているかのように!!それだから貴方はキライ!!・・・キライよ!!。」

そう叫んだ後、ジャネットは再び泣き出してしまった・・・。

下をうつむき、悔しそうに泣いていた・・・。

身体を押さえつけていた2人の力が自然と緩んで行く・・・。

再び静寂さを取り戻し始めた薄暗い部屋の中で。

シクシクと泣いていた。

自分が情けない事は知っている・・・。

自分がどんなに自分勝手で・・・。強欲で・・・・単純な女だって・・・。そんなことよく解っている。

私は自分がキライ!!大っ嫌い!!

でも、こんな女に私の事を解っているつもりだなんて、絶対に思われたくない!!

こんな女にマリオの事を、あれこれ言われたくなんか無い!!

キライよ!!・・・大っ嫌い!!

03－08：○作れば壊れる自然の原理［3］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「作れば壊れる自然の原理」

「裏切り者よ・・・。でも感謝している・・・。」

＜アリミア・パウ・シュトロイン＞

私は冷血で嫌な女。

誰もが私の事を忌み嫌い、近寄る事さえ避けられるほどの存在。

でも、そんな事は百も承知。私はそんな女。

そういう風に育ってきたのだから。

承知の上での行動。そう・・・それが私。

（シルジーク）

「もう少し言い方どうにかならないのかよ。感情に任せた殴り合いなんて、ただの子供じゃないんだからさ。」

先ほど部屋の中で繰り広げられた二人の争いに対し、シルがそれを辛辣（しんらつ）に批評する。

一つの球体を失った彼等の周囲を、再び静かな空気が取り巻く中、残された者達の雰囲気は次第に黒く沈んだものへと移り変わっていく。

チクチクと肌に刺すように痛く冷たい空気に晒されて、セニフはじっと俯いていることしか出来なかった。

誰しもが通りたく無かった「茨の道」のみを残して、すべての選択肢の扉が閉じられる。

いや、決してすべてが閉じられた訳ではないのだろうが、もはや彼等三人が迷い込んでしまった樹海を抜け出すためには、その道しか残されていないということに、皆気づいていたのだろう。

「誰もジャネットを追いかけないのね。」

疲れきった表情で、ゆっくりと椅子に腰を下ろしたアリミアが、小さくそう呟いた。

この言葉に対して、シルはチラリとアリミアの方に視線を向けるのだが、上体を反らして背凭れに寄りかかると、黙ったまま腕組みをして見せただけだった。

ジャネットの後を追いかけたところで、一体、彼女に何をしてやれるというのだろう。

彼女の為を思って追いかけるという行為自体、彼女の悲しみを増幅させるだけの鋭利なナイフを翳すも同然。

そして、簡単な慰めの言葉をかけてやるなど、そのナイフの刃に激しい苦しみを伴う猛毒を擦り込むも同然。

（セニフ）

「今は、そっとして置いた方がいいよ・・・。そっとして置いた方が・・・。それを・・・。」

「そうね。私が悪かったわ・・・。」

アリミアは少し溜め息を交えながら、セニフの言葉を受け止めると、しばし瞼を閉じて、反省の言葉を口にした。

日頃から冷静さを決して絶やさない彼女だが、時折こういった感情の高ぶりを押さえ付けることが出来ずに、暴走してしまうことは稀にある。

彼女自身、まさかここまでジャネットとやりあう事になるとは思っていなかったのだろう。

「ジャネットには悪いことをしたわ・・・。でも、それでも、ジャネットには早く立ち直って貰いたいの。あんな状態で生きていけるほど、戦場って甘くないものだからね。シルが言うとおり、うまい言い回しじゃなかったけど、あれが私の本気の言葉。私の本気の思いなのよ。」

再び見開いたアリミアの視線が、ゆっくりとセニフの姿を捉える。

アリミアには、決してジャネットを卑下するようなつもりは全く無かった。

勿論、優しい言葉で慰めてやることも出来ないであることを解っていながらも、誰もいない通路の隅ですすり泣くジャネットを、この部屋へと連れ込んだのはアリミア自身だ。

重爆撃機ガーゴイルに設けられた小さな医務室で、負傷した右腕の治療を受けていた彼女の元へとやってきたセニフとシル。

まさか二人の方から自分の前に姿を現すとは思っていなかったのか、アリミアは少し驚いたような表情で彼等を迎えたのだ。

しかし、そんな二人の行動を見て、彼女はある決心へと至ることとなる。

「チームの中にあって、お互いの信頼関係って大切よね。今までは作り笑いのような仮面を被った私達が、必死になって自分を隠して、新しい別の自分を作ろうとした。それはそれで良いと思う。」

これまではチームの皆が誰しもが疑わず、偽りでも楽しい一時が過ごせればそれで良いと思っていた。

自分の本当の思いなど、相手に悟られることが無ければ、それがそのまま相手の真実に成り得るからだ。

隠し通して、隠し通して、永遠に隠し通すつもりでいたはずだった。

「でもね。マリオが死んで、ジャネットがあんな状態で・・・。もう昔の私達みたいな関係は、二度と戻ってこないのかもしれない。それに・・・。あの部屋での一件・・・。貴方達が私の所に来た理由もなんとなく解っているつもりだし、私達はこれからのことを、色々と考えなければならない立場にあるのよね。」

形あるものは必ず崩れ去る。

儚くも脆く。あっさりと崩れ去る。

それを知りながらも、それを感じながらも、人は必死になって偽りの自分を作り上げる。

しかし、それはそれでも良い。

決して人と人とが全てを解り合う事など、不可能なことなのだから。

自分自身を漆黒の球体に擬えて、ガチガチに凝り固まった意識のままに、必死に他人の球体を求めても、お互いに接することが出来るのは、ほんの僅かな一点に過ぎない。

自分の思いを優しく。相手を包み込むように柔らかく。

そして時に激しく。熱く滾る自分の思いを精一杯に広げて。

強く求める想いを込めて接することで、その接地面積を広げることは出来るのだ。

アリミアは、ゆっくりと正面に向き直り、すでに冷たくなった椅子を強い眼差しで見つめる。

「私でさえ実際、そんな関係を壊すのは怖かった。だから私はセニフにも、促しはしても強要はしなかった・・・。見守って上げる事しか出来ない自分が、無性に腹立たしかったけど、それがセニフの望んだことならばと安易に考えて、結局は目の前の障壁から目をそらしているだけだったのよね。私だって結局のところは、自分だけが可愛いという人間なのよ。本気の思いでぶつからない限り、決して相手にその思いが届くことは無いって。言葉では解っているつもりだったのに。」

私は生まれて初めて。何かを守りたい。そう思っている。

それは、私達の間を隔てた「暗な制約」でも無く、そして過ぎ去り
し楽しい過去の一時でもない。

これからの私達のため。訪れる皆の幸せを願って。

本気で「言いたい事」を「言い合える」仲になりたい。

独り善がりでも構わない。自分一人が悪者になったって、全然構わ
ない。

うまく行くのか行かないのかも解らない。

それでも、必死になって自分の思いをぶつけたい。

そして、それを阻害する大きな要因の一つなど、もはや私にとって
は邪魔な存在でしかない。

過去、人種、身分、性別を一切問わず、且つ、一方的な干渉、詮索
を禁ず。

「私はもう、あの約束を破り捨てるわ。」

その言葉を発すると共に、再びアリミアの視線がセニフの心を縛り
付けると、セニフは少し、どこか脅えた様子で顔を背けてしまった。

こうなることは事前に解っていたはずで、なんとしても自分の事を
隠し通そうと決意をしたセニフだったのだが、やはり、実際にその

秘密に手をかけられそうになると、どうしても沸き起こる恐怖が彼女を包み込んでしまうようだ。

「セニフ。貴方は決して言いたくは無いのだろうけど、結局はいつか、誰かに知られてしまうかもしれないモノなのよ。貴方を連れ去ろうとした軍服の連中は勿論、あのユァンラオという男もそう。彼らはもう、貴方の隠したいモノに気が付いているはずよ。でなければ、あんな危険な手段を講じてまで、貴方を連れ去ろうとするはずが無いわ。いい？セニフ。一つ忠告するなら。あのユァンラオという男は危険よ。求めるモノのためならば、どんな手段でも用いる危険人種。彼の目的はまだ定かでは無いけど、決して貴方の事。諦めるはずが無いわ。」

（セニフ）

「私・・・。し・・・知らないよっ。何も・・・。」

このアリミアの言葉に対して、思い立ったように反論を見せたセニフだが、やはり彼女の態度があからさまにおかしいのは、誰が見ても解ることだった。

しかし、恐らく彼女の口から直接真実を告げられる事は、決して無いであろうと考えていたアリミアは、セニフの表情をじっと観察しながら、ゆっくりと鼻から息を吐き出すと、少しばかりの間を置いて、真実の中心から的を外すように言葉を投げかけた。

「私もね。実は追われる身なのよ。実際あの軍服の連中が襲ってきた時、標的は私だと思ったもの。もはや私の素性が知れるのも、時間の問題だと思っていた。でも、もし襲われたら襲われたで、自力で逃げ切る自信も有ったけどね。私の事なんか、興味も無いかもしれないけど、セニフ。私は貴方に、どうしても伝えておかなければ

ならない事があるわ。」

この時、アリミアの性格上、絶対にど真ん中直球勝負を、挑んでくるであろうと身構えていたセニフなのだが、どこか遠くを見つめるような眼差しで黙り込んだアリミアの姿に、少し不思議そうな表情を浮かべた。

それまで頑なに守ってきた自分の殻を破り捨てて。

柔らかく暖かい地肌を直に晒して。

アリミアはゆっくりと口を開いた。

「私はね・・・。帝国トポリ領北部の小さな町「ピピン」で生まれたの。ここまではセニフに話した事があったかしら。母は単なる町外れの酒場の踊り子だったけど、父はある組織の幹部として活動していた人物だった。生まれてからずっと。私もその組織の一員として過ごしていたの。何だと思う?やっぱり聞いたら驚くかしら・・・。」

そう問いかけながら、順番に二人の表情を伺ったアリミアは、少しだけ次の言葉を躊躇(ためら)うように、口元を緩ませて誤魔化(ごまか)して見せた。

セニフもシルも、これまでアリミアという人物に対して、全く何も不信感を抱か無かったのかといえば、決してそうではない。

寧(むし)ろ、彼等としては「気になる不審点だらけ」の彼女の行動に、しばし、えもいわれぬ「恐怖心」のようなものを抱いていたことは確かである。

二十歳そこそこの年齢にしては、有り得ないほど冷静沈着な思考と判断。そして、時折見せる冷たい視線と、殺意のような怒気。そして何より、軍服の連中との戦闘におけるあの行動力は、決して「一般人」が成せる事ではない。

アリミアは再び、狭い部屋の壁の中に思い描く遠い記憶を浮かべて見据えると、突然、厳しい表情を浮かべて、自分で投げかけた問いの答えを示した。

「ファルクラムよ。」

（セニフ）

「え？・・・・・・・・・・ファ・・・！？」

（シルジーク）

「ファルクラム！？」

それまで、興味津々（きょうみしんしん）に、じっとアリミアの話しに聞き入ろうと構えていた二人であったが、話の序編でいきなり彼女の話しを寸断してしまう。

どうやらセニフもシルも、その言葉が示す意味を理解しているようだったが、椅子から少し腰を浮かすように仰け反ってしまった彼等は、物凄い驚きの表情を浮かべたまま、完全に固まってしまった。

それもそのはず、彼女が発言した「ファルクラム」と言う組織は、数年前に壊滅したはずの帝国史上最大最悪のテロリスト集団の名称。

その洗練された戦闘能力に加え、悪魔すら恐れるほどの凶悪振りから、強大な力を持つ帝国貴族達も容易に彼等の行動を押さえ付ける

ことが出来ず、長年にわたって帝国内部を侵食し続けた暗黒の地下組織なのだ。

「生まれたときからずっと。反帝国制を唱えるイカレた思想を叩き込まれて育ったわ。戦闘教育の他にも、薬学とか人体学とか、戦争で兵士として必要な技術は、ほとんど幼少期に覚えさせられたわね。組織の方針が正ならば自分の考えも正とする。組織の方針が負ならば自分の考えも負とする。当時の私にとっては、それが当たり前であって、人を殺す事なんてなんとも思わなかった・・・。全ては組織のため。私自信の考えなんて関係無かった。命令されて行動することが当たり前だったし、死んでこいと言われれば、死にも行ったわ。まあ、実際はなんとか生き延びて、貴方達の目の前にいるわけだけどね。」

どこか普通に、自分の身の上話を淡々と語るアリミアの姿に反し、未だに唖然(あぜん)とした表情で固まった二人。

シルは一つ大きく唾を飲み込んで気持ちを落ち着けると、セニフとお互いを見合うように視線を合わせた後に、ゆっくりとアリミアに問いかけた。

（シルジーク）
「お前・・・。・・・ファルクラムだって!?ストラントーゼとロイロマールが、手を組んでまで壊滅に追いやったて言う・・・。あのファルクラム・・・。なのか?完全に全滅させられたって聞いてるぞ。」

少しどこか。脅(おび)えたような表情でも含んでいたのだろうか。

そんなシルの表情をまじまじと見つめていたアリミアが、その不安

を払拭してあげるように、ニッコリと微笑んでこう答えた。

「表向きにはね。もう他には誰も生き残っていないかもしれないわね・・・。でも過去の話よシル。心配しないで。なんの得にもならない貴方達を、理由無く殺そうなんて思っていないから。ね。」

アリミアが浮かべたのその笑みは、とても優しい感じで二人へと振り撒かれたものだったが、何か作り笑いのような印象も拭い切れずに、逆に彼等二人の恐怖心を煽り立ててしまった。

勿論、彼女としては何の気なしに放った言葉のつもりだったのだが、サラッとそんな言葉を発した彼女の姿に、後ずさりしたくなるほど恐怖したのはセニフの方だ。

殺そうなんて思っていないから・・・。

理由無く殺そうなんて思っていないから・・・。

なんの得にもならない貴方達を、理由無く殺そうなんて思っていないから・・・。

そこに何かの得があり、そして、理由が有ったのなら。

平気で私を殺すのだろうか・・・。2年間も一緒に暮らしてきた私を・・・。

セニフはとっさに、かち合ってしまったアリミアとの視線を無理やりに振りほどくと、どこか挙動不審に視点を部屋中に散らばせた。

狭苦しい薄暗い部屋の中で、猛獣を放たれた檻に閉じ込められてし

まったような感覚を味わいながら、セニフは彼女の送る視線に恐怖していた。

セニフが必死にひた隠している過去。

アリミアはあの悪名高きファルクラムの元兵士。

もし・・・。もしアリミアが、私の過去を知ってしまったのならば。

私を殺してしまうのだろうか・・・。

セニフにとって、ニッコリと微笑むアリミアのその笑みは、天国のような暖かさを与えられながらも、その身を永遠に燃やし続ける地獄の業火のように熱く苦しい。

知らず知らずの内に頬を伝う汗が、やけに冷たくも感じてしまう。

「ファルクラムは帝国貴族達でさえ恐れた最強の反逆者集団。本来なら簡単に壊滅するはずじゃなかったの。それが掃討作戦から2日足らずで壊滅したのには理由があるのよ。恐らくは用意周到に仕組まれた罠だったのだろうけど、話は単純。それは内部的に裏切り行為があったからなのよ。もっとも信頼している人物にいきなり裏切られる。これほど有効な攻撃手段は他に無いわ。結果は貴方達も知る通り。ファルクラムのメンバーは皆、反撃する暇も与えられなかったわ。私みたいに憲兵隊に捕らえられて、監獄行きになった人もいたけれど、恐らくほとんど全員が殺されてしまったでしょうね。」

相当に凄惨な過去を持っているだろう事を予想させながらも、全く悲しそうな表情を見せないアリミアが淡々と話しを続ける。

まるで他人事の様に。そして客観的に。

次々と知ることのなかった友人の過去が露呈(ろてい)されていく。

「父も母も作戦行動中に死んでしまった・・・。私を育ててくれた人も。そして・・・。多分、私の探している人も・・・。」

っと・・・、突然、アリミアの表情に陰(かげ)りが過(よ)ぎったのを、シルは見逃さなかった。

淡々と語り続けていたアリミアの視線が、次第に俯(うつむ)き加減で足元へと落ちて行くと、えもいわれぬ思いつめたような不思議な表情へと変貌を遂げたのだ。

こんな不思議な表情をするアリミアは初めてだ・・・。

(シルジーク)

「その人ってのは・・・。アリミアの恋人か?」

彼女の話し方が、自分の父親、母親よりも比重が大きかったような印象を受けたシルが、ふと、誰しも思いつくであろう疑問を投げかける。

しかし、そんな問いを一蹴するかのように、再び厳しい表情を浮かべたアリミアは、今度は素っ気無く返答を返した。

「その裏切り者の事よ・・・。」

その声は、少し黒味かかった低い声。

激しい怒りがその言葉に込められているであろう事はすぐに解ったが、それでも彼女は再びシルに微笑み返すのだ。

「スパイとして活動している以上、常に死とは隣り合わせ。それがたとえ任務の依頼者であったとしても、口封じのために謀殺される事だってある。陰謀渦巻く帝国内部でのスパイ活動ですもの・・・。もう始末されている可能性の方が高いわ。でもね。私はその裏切り者に、少しは感謝しているの。私をファルクラムという檻の中から解き放った事は事実だし、それにね・・・。私の心の支えでもあった。私がよく本を読むようになったのも客観的世界の情報、知識を得るためなの。偏った世界からの離脱。自立した自我の創作。生きていくって難しい事ばかりなのよね。他人を生命を侵食する行為が、同時に自分の生命をも侵食している事に気づいたのもつい最近。こんな人として最低の人間である私が言うのもなんだけど、人が生きていく為には、相対する他の人の思いが必ず必要なんだって、気づいたのも最近なのよ。」

他人を殺す事に全く何の躊躇(ためら)いもなかった。

他人から何かを奪う事に対して、何の罪悪感も感じなかった。

そしてそういう生き方に、一遍の疑問も抱かなかった。

そんな私が、今一番欲して止まないもの。

「セニフ・・・。さっき私が貴方に話さなければならない事があるって言ったわよね。」

お互いのわだかまりを取り除くの・・・。そして・・・。

（セニフ）
「う・・・。うん・・・。」

こうする事が決して正しいのかどうかなんて、私には解らない。
でも私は、貴方のことを守ってあげたいのよ・・・。守ってあげたいの・・・。

「貴方の過去を知ってしまったの・・・。」

アリミアが突然発した核爆弾のように危険な言葉に、セニフの動きが完全に硬直した。

まるで見えない黒い空気の刃が身体中を包み込んでいるように。少しでも動いてしまったのなら、全身を切り刻まれてしまうかのように。

身じろぎもしない彼女は、ゆっくりと瞳だけをアリミアに宛がっただけだった。

そして少しの間を置いて、ようやく開いたその口から、必死に平静さを装った彼女の言葉が返される。

（セニフ）
「冗談はよしてよ・・・。アリミア・・・。誰も私の事なんて知らない。知っているはず無いじゃん・・・。」

そうね・・・。そうよね・・・。

このセニフの返答に、アリミアは少し悲しそうな表情を浮かべた。

私は冷血で嫌な女。

誰もが私を忌み嫌い、近寄る事さえ避けられるほどの存在。

でも、そんな事は百も承知。私はそんな女・・・。

そういう風に育ってきたのだから。

承知の上での行動・・・。そう・・・それが私。

「私達がまず相手にしなければならない本当の敵は、ユァンラオでも帝国軍でもない。自分たちの中にあるのかもしれない。」

03－09：○作れば壊れる自然の原理［4］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ０９「作れば壊れる自然の原理」

「やめてよ。私は貴方（あんた）の手なんか借りない。」

＜セニフ・ソンロ＞

私は「セニフ・ソンロ」。過去を捨て去った人間。
誰もお互いの事を詮索（せんさく）しなかった楽しい生活。
それが自分にとって、とても心安らぐ安住の場所だった。
チームＴｏｍｂｏｙという生暖かい母体に中で私は生まれ変わったの。

一人の少女として。

（アリミア）
「貴方の過去を知ってしまったの。」

私は「セニフ・ソンロ」。過去を捨て去った人間。
小柄な赤毛の少女で年齢は１６歳。
勝って気ままに自分を主張して、そして抑える事を学んで大人になるの。

泣いて、笑って、怒って、喜んで。そして恋もするの。

「冗談はやめてよアリミア。誰も私の事なんて知らない。知っているはず無いじゃん。」

私は「セニフ・ソンロ」。過去を捨て去った人間。

私の事なんか気にしないで・・・。

私の過去なんてどうでもいいでしょ？

私が何者だって皆には関係無いでしょ？

私も皆の痛い所には触れないからさ。

みんなで楽しく生きていこうよ。楽しくさ。

だから皆。私の事なんて気にしないで・・・。

今までの私達であれば、そう言って自分の心の扉を閉ざしておく事が許されていた。

ううん。勿論、これからもきっと許されるはずなの。

私の事を知りたいなんて人がいなければ・・・。

私の存在に疑念を抱くような人がいなければ・・・。

（アリミア）

「ついさっき医務室で聞いた話だと、どうやら帝国皇后クロフティアの声明演説が有ったそうよ。詳しい事までは良く解らないけど、トゥアム共和国に対する宣戦布告にも等しい内容らしいわ。どうやら事の発端はブラックポイントでの事件に関係しているみたいよ。」

己を隠す自分が、いつの間にか当たり前の自分となり、本当の自分が何処の位置にいるのかさえまったく解らなくなる。

私は誰なの?私はただの女の子だよね・・・。小煩い我儘な女の子だよね・・・?あれっ?違うっけか?

ブラックポイントの宿舎で起きたあの出来事が、それまで心の奥底に仕舞い込んで、自分自身も忘れかけていたはずの過去の扉を抉じ開けてしまった。

そして、私を付け狙う謎の軍服集団と髭男のユァンラオが、ひっそりと楽しく生きていた私の事を、皆に知らしめてしまったの。

「本当の自分」を覆っていたガラスの鎧を粉砕されてしまった私は、これから一体どうすればいいの?

絶対に知られたくないモノを。絶対に知られてはいけないモノを。守り通すためには、私は一体どうすればいいの?

私は力ないただの女の子。強引に相手を排除するような力もなければ、その魔の手から逃げきる力も勇気もない。

私はただ、楽しく幸せに生きたいだけなのに・・・。

今まで通り皆と一緒に、楽しく幸せに生きたいだけなのに・・・。

それだけ居心地の良かったチームＴｏｍｂｏｙ。
決して手放したくない、一種「麻薬」のような精神安定剤だった。

（アリミア）
「セニフ。黙っていても何も解決しないわ。私もまさかここまで大事になるとは思っても見なかったけど、今後、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国とトゥアム共和国との間で、大規模な軍事衝突が起きてしまう可能性が高くなったわ。これまで長い間、友好的な関係を保ち続けてきた両国の間で突然にね。俄(にわ)かに信じ難い事実だけど、あの軍服の集団が貴方を狙っていた事に、何か関係しているのかしら？そうなの？セニフ？」

静かな空気が三人を包み込む中、アリミアの瞳だけが鋭くセニフの姿を見つめている。

事の真実を解き明かす鍵のパーツが、目の前に晒されていることは確かなのだが、それは決して簡単には手に入るものでもなく、更に手に入ったところで、複雑な形状をしたその情報が、いとも簡単に鍵の形に組み上がるはずもない。

「・・・黒のノッポの目的は解らない・・・。知らない・・・。何も知らないよ。私は何も関係無い・・・。・・・うん。今回の事件だって、あの髭男が帝国の馬鹿貴族を扇動(せんどう)したからなんでしょ？私は何も関係ないの！！私は人違いなの！！」

セニフがおどおどとした態度のまま、じっと見据えたアリミアの視線に返答を返す。

少女が何かを隠していることは確か。少女が何かを知っていることは確か。

そしてこの少女の握る情報が、謎を解くためのキーパーツであることは間違いない。

アリミアがこれまで得た情報の中には、確かにこの少女の謎を解くための重要な情報が含まれているのだろうが、それでもそれが本当に正しい情報であるという確証がない以上、無為にその情報を振り翳す訳にも行かない。

（アリミア）

「逃げないでセニフ！！私は貴方が怖いの！！まるで巨大な爆弾を抱えているような！！そんな錯覚さえ覚えるの！！私が得た貴方の情報だって、あのユァンラオと一緒にいた女からの情報だし、もしかしたら彼等の創作した偽造情報の可能性だって有るし・・・。」

アリミアは未だ、あのカルティナから齎されたセニフの情報に関して、その信憑性を疑ってかかっていた。

それは信じろというほうが土台無理な、御伽話のような話であり、現実問題として、まさか自分の目の前にそんな話が舞い込んでくるなど、彼女自身全く想像もしていなかった事だ。

ましてや処刑されてしまっているはずの帝国皇女「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」が生きているなどと。

そしてその皇女が、この目の前にたたずむ少女「セニフ・ソンロ」などと。一体、何処の誰が信じるというのだろうか。

もし皇女が生きていると仮定して話をするにしても、説明のつかない矛盾点は沢山(たくさん)ある。

皇女の処刑に関しては、反皇室派であるストラ派の人間が主体となって執行したと言われているため、身代わりとなる「道化」を使用した偽りの処刑劇であったとは考えにくい。

仮に身代わりを用意したところで、偽者かどうかも解らないまま処刑するほど、彼等も馬鹿では無いであろう。

もし、皇女が一卵性の双子だったと考えるならば、簡単に身代わりを用意することも可能だろうが、少子化に悩む皇室にあって、態々（わざわざ）一人を隠して育てるなんて意味は無いし、女帝ソヴェールが健在な頃から考えると、テロ攻撃から皇帝血を守るためという理由も当てはめづらい。

そして何より、皇女を生き延びさせたことによって。彼等としてはその上に何が出来るというのだろうか。

そもそも、皇女が背負った「父親殺し」の罪が消えるわけでもなく、再び犯罪者として処刑されてしまうのが関の山だ。

すると、やはりあの女の持っていたセニフの情報は真っ赤な偽物ということなのだろうか。

しかし、もしこの情報が偽りのものであったとするならば、帝国５大貴族ともあろう「ロイロマール」や「ストラントーゼ」が、簡単に軍事力を行使するはずもない。

本当に正しい情報とは、何なのであろうか。

「知らないよ・・・。私は何も知らないよ！！」

セニフは俯(うつむ)いてそう呟いた後、チラリとシルの方に視線を送った。

困惑する彼女の瞳から送られるその視線は、どうやら彼に助けを求めるような思いが込められていたのだが、シルはその視線に気が付いてはいても、決して彼女を擁護(ようご)するような言葉を発さなかった。

それは勿論、彼自身があの事件の真相を知りたがっている為であり、セニフに対して少なからず疑惑の念を抱いているからだ。

たしかに今にも泣き出しそうなセニフを守ってやりたい気持ちはある。

しかし、アリミアの考えと同様に、それが本当に彼女を守ってやる事にはならないからだ。

「・・・解んない・・・。」

細かに埃(ほこり)の舞う、じめじめとした薄暗い小部屋の中で。

一向に新しい光が差し込むこともなく、いつまでも真っ暗な闇夜に閉ざされたままの空間で。

一体、自分がどこへ向かって歩けば良いのか、皆目見当(かいもく)も付かない。

自分がどんな立場に置かれ、どんな状況に置かれているのか、今回の事件を通して再認識したつもり。

そしてアリミアやシルが、そんな自分を心配してくれているのも解っているつもり。

でも。それでも。どうすることが一番正しい行動なのか。それが解らない。

アリミアに対して、シルに対して自分の事を正直に告白することが、本当に正しいことなのだろうか。

本当に幸せなことなんだろうか。

「解らないんだよ!!何も・・・。私にとって何が大切で、何の為にどう行動する事が正しいのか・・・。二人して困ったように考え込んじゃってさ・・・。私やだよ・・・。こんな・・・。こんなに苦しんで傷つく必要があるの!?そんなにしてまで私の事を知りたいの!?アリミアはそれで楽しいの!?嬉しいの!?シルもそうなの!?私は!!・・・。私はただ・・・、素朴な幸せの中で、皆と楽しく生きて行けたら良いのにって。思っているだけなのに・・・。」

セニフが放つ必死な思いが、アリミアの心に突き刺さるように攻撃的な抑止力を齎(もたら)す。

この少女を苦しめる過去の呪縛は、それほどまでに辛く、大きいものなのだろうと、一旦少女から視線を外したアリミアが、小さな溜め息と共に哀れみの思いを抱く。

しかし、どんなに可哀想であっても、どんなに辛かろうとも、この呪縛から少女を解き放つには少女自身の心の鍵が必要だ。

再びセニフの姿を見つめたアリミアの瞳には、もはや一点の陰りも見えなかった。

（アリミア）

「セニフ。幸せって最後に掴むものよ。目先の幸せを掴むだけなら誰にでも簡単にできるの。お互いに「幸せの仮面」を被ったまま、一時の楽しさに酔いしれていても、決してそれが最後まで続くはずは無いわ。貴方が望んだ楽しい世界って、いつかは解けてしまう程度に結ばれた関係の事を指すのかしら？違うわよね。茨の棘が痛いからといって、鉄の鎧を身に纏って抱き合ったって、相手の本当の温もりを感じる事はできないのよ。セニフ。貴方はよくシルの事を好きだって言っているけれど、貴方の中に本当にシルを思う気持ちが有るのかしら。愛情の形を幼稚に身体で表現して、それで本当にシルを愛しているの？こんな私が言うのも変だけど、本当に貴方の中で欲しているのは、シル自身の心なんかじゃない。人を愛してるって言う自分の空像に憧れているだけ。」

全く人の言葉に寄せ付けないほどに、心を鉄の鎧で囲ってしまっていたのでは、いつまで経っても解決に至る糸口すら見つけることが出来ない。

そう思ったアリミアが、少し刺々しい言葉をセニフに投げかけたのだが、彼女に取ってはそれが、心の底まで突き刺さるような鋭い刃にでも見えたのだろうか。

「そ・・・！！そんな言い方って無いじゃん！！アリミア！！私が・・・。なんで・・・。何でそんな事をアリミアが言えるんだよ！！私は！！・・・私はシルの事が大好きだし・・・。怒りっぽい所だって大好きだし・・・。たまに優しい所だって大好きだし・・・。」

セニフは泣きそうな表情で、落ち着きなくシルの方に視線を向けるのだが、全くセニフの方に向き直ることもなく、じっと何かを考え込んだままのシルの姿に、やがて、俯いた顔を両手で覆うと、静かに肩を震えさせていた。

お互いを深く知り合う事が、愛し合うための最低条件？その人を深く知りたいと思うことが、その人を愛する最低条件？そんなの嘘・・・。絶対おかしい・・。

私はシルの事大好きだけど、別にシルの過去なんてどうでもいい。本当は知りたいけど、でも、お互いに傷つけ合ってまで知ろうなんて思わない。

好きって思うだけじゃだめなの？それだけじゃ、シルのこと大好きって証明にもならないの？

「私・・・。シルの事、好きだもん・・・。好きだもん・・・。・・・。」

（アリミア）

「解ったわ。ごめんなさい。セニフ。ちょっと言い過ぎ。」

お互いの深部を知り合えなければ、到底真の友情、真の愛なんて感じることは出来ない。

アリミアはそう言いたかっただけなのだが、彼女自身、人を好きになると言う「不安定な感情」に対し、自信を持ってそうだと言い切れるはずもなく、少し後悔したような表情でセニフに謝った。

相手の心の深部を探るためには、相手の心の棘をかい潜(くぐ)るしか道はない。

相手が自分に対して、心の棘を取り除いてくれるのであれば話は簡単なのだが、セニフが心に巻きつけた鋭い棘は、決して彼女が取り除いてくれることは無いだろう。

いや、もはや、セニフ自身ですら、その棘を取り去ることは出来ないのかもしれない。

自ら進んで巻きつけた自衛のためのその棘は、もはや彼女自身をも傷つける諸刃の剣。

拒めば拒むほどに自分の心に深く突き刺さり、身動きすらできないほど、彼女の心を雁字搦(がんじがら)めにする。

彼女をその呪縛から救い出すためには、もはやお互いが傷つき合ってでも、強引にその棘を引き裂く以外、手立ては残されていなかった。

（アリミア）

「セニフ・・・。貴方も元々は帝国の出身だって言ってたわよね。今もなお、国民から愛される女帝ソヴェールって、一体何が他の指導者達と違ったんだと思う?私にとっては、当時、敵としての最大の象徴だった皇帝だから、私が一般的見解で彼女を語る事はできないけれど、貴方ならば彼女に何を感じる?」

俯(うつむ)いたままのセニフの表情は、赤い髪の毛に隠されて様子を伺う事は出来なかったが、もはやそんなことは関係なしとアリミアが一方的に語り始めた。

荒んでいたアリミアの心をも溶かすほどの人懐っこさと、明るさを兼ね揃えた元気のいいおてんばな少女を、その子供のような小さな身体に背負ってしまった過去の呪縛から解き放つために。せめて少しでも、軽くしてあげるために。

（アリミア）

「全ての帝国国民の心に残る永遠の女帝ソヴェール。確かにそれは、私達ファルクラムのメンバー達の目から見ても、人を引きつける魅力があったと思うわ。現に中には彼女を支持する人間も存在したの。」

やがて、ゆっくりと頭を擡げたセニフが、赤く染まり出した瞳を現して、優しく語りかけるアリミアの表情を伺う。

アリミアが何を言わんとしているのか、全く解らないといった様子だったが、もはや彼女はアリミアの言葉に反応する気さえ、無くなっていたのではなかろうか。

ぼんやりと、虚ろな表情で、どこか宙に浮いた視線が逃避行動を始めた精神世界の中で、ひたすら漂い続けるだけだった。

（アリミア）

「でも、そんな誰からも愛された女帝も、どこかで誰かに嫌われていた事は確か。生きている人間全てから好かれるなんて絶対に不可能だもの。どこかの誰かに命を狙われていたとしても、決して不思議じゃない。」

しかし、それまで宙を泳いでいたセニフの視線が、まっすぐに構えられたアリミアの視線と交錯した瞬間、不意に自由を奪われたかの

ような束縛感によって、完全に彼女の瞳に釘付けられてしまう。
いつになく優しい眼差しではあるが、瞳の奥に潜んだ彼女の思いは冷たく燃え上がっているようにも見える。

「表の暖かさ」に「裏の冷たさ」潜(ひそ)めて。セニフの心の奥底を覗き込むようなアリミアの鋭い視線が、セニフが纏(まと)った鉄の鎧を貫通した。

（アリミア）
「女帝が死んでからも、その死因については一切が隠されたまま。病死したと言う偽りの情報を持って、暗殺されたという事実を覆い隠すためにね。」

痛い・・・。痛いよ・・・。アリミア・・・。

「・・・？」

そんな目で見ないでよ・・・。痛いじゃない・・・。

「・・・・・？」

心が痛いの・・・。刺された傷口から、真っ黒な自分が、ドクドクと流れ始めたの・・・。

（アリミア）
「女帝が暗殺されたと言う事実は、極秘中の極秘とさたそうよ。それはそうよね。女帝が倒れた時点で、その事実に気がついた人は誰一人いなかったんですもの。それに、ようやく真実へと辿り着いたところで、疑心暗鬼(ぎしんあんき)に揺れ動く帝国内部において、火に油を注ぐよ

うな真似は、決して出来なかった。」

アリミアの投げかけた言葉が、深く深くセニフの心の奥底に突き刺さり、ぐりぐりと捏ね繰り回されるたびに、大量に溜め込んできた真っ黒な思いが飛沫を上げて噴出した。

「・・・・・・・・・・・・！！？」

この時、アリミアの視線に束縛されていたセニフの意識が、唐突に大きな反応を見せた事は直ぐに解った。

（アリミア）
「これだけじゃ論じるに足りないのかしら・・・・。」

それまで虚ろだったセニフの視線が、はっきりとアリミアの姿を捉え、驚いた表情を隠す事も忘れ、ただ素直にアリミアの一言の余韻を脳裏で繰り返す。

そう・・・。貴方のこの変化を見極めるために、私の過去を伝えた。
そして、女帝ソヴェール暗殺のに関する事実も・・・。

「へ・・・変な事・・・言わないでよ・・・。・・・・アリミア。お・・・。女帝・・・。ソヴェール様が・・・。死んだのは・・・。暗殺って・・・。変な事を言わないでよアリミア！」

勿論、アリミアの言葉の真偽は決して定かではない。

淡々と語ったアリミアの口調から、いうなれば噂の類を飛び出すことの無い虚実のようにも受け止められ、それまでじっと成り行きを見守っていたシルでさえ、不思議そうな表情をアリミアに向けただ

けだった。

しかし、どこかシドロモドロに言葉を途切れさせたセニフの表情は、薄皮一枚のところで溢れ出した思いを必死に押さえ付けている様で、握られた左手拳は、微かにプルプルと震えているようだ。

（アリミア）

「そう、貴方が知らないと言うならいいわ。女帝暗殺の証拠を教えてあげる。実際に女帝暗殺を実行したのはファルクラムよ。そう・・・。私は女帝暗殺の事実に関する生き証人なの。」

突然に打ち下ろされた雷矢によって全身を貫かれたように、一瞬セニフは大きく身震いをした。

その小さな身体だけを現実世界に置き去りにし、暴走した意識だけが彼女の過去の記憶を走馬灯のように駆け巡っていく。

そして垂れ流された真っ黒な思いを媒体として、一気に「怒り」の炎を燃え上がらせると、セニフは物凄い形相でアリミアを睨み付けた。

必死に歯を食いしばり、目元に薄っすらと涙を浮かべて、彼女の中で猛り狂った攻撃的意識を押さえ付けようとしているのは、未だに自分自身を隠し通そうとしているからなのだろうか。

両極端な思いが錯綜する世界で揺さぶられ、全く身動き一つしないままに激しい怒気を示した彼女の瞳から、ようやく一滴の涙が零れ落ちた。

そしてアリミアは確信することになる。

「セニフ・ソンロ」＝「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」。
「目の前の少女」＝「帝国の皇女」であることを。

女帝ソヴェールの暗殺に関する事実を知っているのは、帝国内部においてもごく僅(わず)か。

それも、帝国上層部に位置する人間と、実際に暗殺を実行したファルクラム組織の一部のみ。

今、セニフの中で激しく爆発している怒りは、彼女が愛した母親「女帝ソヴェール」を暗殺したという、組織の一員であるアリミアに向けられたもの。

そして、その感情を必死に押さえ付けているのは、未だ正体を知られていないであろう事に対する、自己防衛機能によるもの。

本当に女帝が暗殺されたのだと言う事実を知らないのであれば、アリミアに対して女帝を暗殺した「手段」を質問してくるはずである。

質問して来ないという事は、セニフは女帝が「一体どうやって殺されたのか」を知っている。

つまり、女帝暗殺の事実を知る一人という事・・・。

（アリミア）
「これが私が貴方に伝えたかったこと。貴方の正体を見極めるため。
ううん・・・。貴方の仲間として・・・。貴方の親友として・・・。
貴方に伝えなければならなかった事よ。セファニティール・マロワ・ベフォンヌ皇女。」

アリミアのその言葉に促されるように、セニフの瞳から涙が溢れ出した。

耐えに耐え抜くために彼女が築き上げて来たその防波堤は、貫かれた小さな傷跡を発端（ほったん）として、一気に決壊してしまったのだ。

そしてついに、涙に押し流され、もはや自分の意思では押さえ付けることの出来なくなった感情と共に、皇女という姿を現した本当の少女が思いの丈（たけ）がアリミアにぶつけられた。

「何で殺したの!?何で!!何でお母様を殺したの!?」

もはや涙を隠そうともしないセニフの叫び声が、薄暗い小部屋の中を駆け巡る。

悲痛なまでの思いを込めて。激しく抱いた怒りを込めて。

それまでに溜め込んだ全ての思いを一気に爆発させるように、勢い良く椅子から立ち上がったセニフがアリミアを睨み付けて叫んだ。

この時、話の途中までしか内容についていけてなかったシルは、何故、セニフが突然激しく怒り出したのか、全く理解できなかった。

何故、彼女が怒っているのか。何故、彼女が泣いているのか。

アリミアが出来るだけ遠回りに会話を進めていった事もあるだろうが、これが一般人たる普通の反応なのだろう。

（シルジーク）

「お母様・・・？セファニティール？・・・・？？って・・・・。帝国の皇女の名前だろ？なんか話がよく・・・・。」

「シルは黙ってて！！シルなんか何も知らなくていいんだよ！！出てってよシル！！出てって！！」

（シルジーク）

「そういうわけにもいかないだろセニフ。俺だってセニフの事が知りたんだ。あの事件の・・・」

「うるさい！！うるさい！！うるさい！！うるさい！！黙って！！何も言わないで！！もう放っておいて！！出てって！！私の事なんか放っておいて！！放っておいてよ・・・。放っておいて・・・。」

完全に取り乱したように怒鳴り散らしたセニフの前に、思うように問いかけることすら出来なかったシルは、しばし口を半開きにしたまま硬直してしまった。

そして、次第にトーンを落とすように、テーブルの上に伏せて蹲(うずくま)って泣き出したセニフに対して、シルはそれ以上の質問を投げかける事ができなかった。

（アリミア）

「セニフ。怒鳴り散らしても駄目よ。自分の事を知られたく無いから出てけという貴方の気持ちも解るけど、私はもう知ってしまったんですもの。結局は、私の口からシルに伝わるわ。それは私の口が軽いからじゃないの。シルは私達の仲間だから。」

そんな泣きじゃくるセニフに対して、更に追い討ちをかけるような言葉をアリミアが投げかけた。

何もそこまで・・・。と、シルがチラリとアリミアの方へと視線を向けたのだが、彼女は厳しい表情のまま、セニフの姿を見つめていた。

そしてやがて、そんなアリミアの態度に対抗するように、ゆっくりと頭を擡(もた)げたセニフは、シルに対して一瞬視線を流した後で、再びアリミアに対して激しい怒りを乗せた視線をぶつける。

もはや彼女は完全に逃げ切ることを諦めたのだろうか。

その真意は定かではなかったが、目に一杯の涙を溜め込んで睨み付けるセニフから、少し視線を外したアリミアが再び口を開いた。

（アリミア）
「シル・・・。よく聞いて。驚くかも知れないけど。セニフが・・・。」

「私が皇女！」

（シルジーク）
「えっ？」

っと、突然、アリミアの言葉の上からセニフが言葉を被せた。

「私がセファニティール皇女なの！何度も言わせないで！」

（シルジーク）
「えっ？」

「だから!!何度も言わせないでって言ってるでしょ!!馬鹿っ!!私が皇女なの!!」

完全に真実となる言葉を、セニフ自身が連呼していると言うのに、全く呆(ほう)けた表情のまま、晒された事実を受け止められないシルを他所に、アリミアはようやく強張った表情を緩めて大きく息を吐き出した。

まさかセニフ自身が言葉に出して真実を吐き出すとまでは思っていなかったが、あのままセニフが頑(かたく)なに自分の殻に閉じこもっていたのなら、全くその先の話をすることも出来なかったからだ。

しかし、セニフ本人が自ら認めたのだとはいえ、それがアリミアに対して協力的姿勢を現すものでは無いことは、怒り冷めやらぬ彼女の表情からも伺えることだった。

「何で殺したのよ!!お母様を・・・。・・・何でよ!?さっきフアルクラムの様なイカレた集団の中にも、お母様を支持する人間はいるって言ってたじゃない!!どうしてテロ組織ってみんなそうなの!?罪も無い人間を平気で殺して!!自分の名前を歴史に刻みたいだけのエゴイストじゃない!!そうやってお父様も殺したんでしょう!?」

(アリミア)

「ディユリス代理帝が死んだ時は、もうすでにファルクラムは潰されていたわ・・・。」

セニフが素直になったのは、アリミアとの戦いに集中するためだったのだろうか。

もはや完全に自分の過去を隠すでもなくアリミアを凝視するセニフは、どこか異様に攻撃的意思を醸し出したままだ。

「ふん・・・。まだまだ色々と私から聞き出そうってわけ？もっと私の事を知りたそうな目をしているよアリミア。もっともっと！！私を事を暴いて楽しみたいんでしょ！？私を暴いてどうするの！？殺すの！？それとも帝国貴族にでも売り飛ばすの！？あの髭男みたいにさ！！あのロイロマールの連中みたいにさ！！何が知りたいの！？私がどうしてこんな所に居るかって事！？それとも私がどうやって生き延びたのかって事！？私がお父様をどうやって殺したかなんて事まで聞きたいの！？」

（アリミア）

「ふざけないでセニフ！！」

有りっ丈の怒りを込めてぶち撒けたアリミアの怒鳴り声に、さすがに調子に乗って喋り続けたセニフも、一瞬脅えたように仰け反った。

勿論、セニフの正体を暴こうとしていたのもアリミア自身。

セニフに対して感情を煽り立てていたのもアリミア自身。

しかし、彼女はこんな風に稚拙な言い合いを繰り広げるためにそんな事をしたのではない。

もはや自暴自棄気味に言葉を吐き捨てるセニフの態度に苛立ちを隠せなかったのだろう。

アリミアはドンと大きな音を立ててテーブルに左肘をを叩きつけると、そのまましばらく頭を抱え込んで俯いてしまった。

本当は心のどこかで、決して「そうでないこと」を願っていたアリミア。

普通の一人の少女でいてくれたのであれば、アリミアもこれほど難しそうな表情を浮かべることも無かったであろう。

再び静寂な気配が漂い始めた中にあって、そんな二人の戦いから完全に蚊帳(かや)の外に追いやられていたシルは、右手をギュッと強く握り締めたまま立ち尽くす一人の少女を見つめながら、未だに先ほど放たれた少女の言葉に囚われたままだった。

皇女？帝国の皇女だって？この小娘が？セニフが皇女だって言うのか？B級映画のワンシーンでもあるまいし、そんな馬鹿げた事実があるか？

確かに少し変わった少女だとは感じていたが・・・。

でもそれは、元気が有り余ってやんちゃし放題だったセニフの振る舞いに対して抱いたのであって、決して何か怪しい点を不審に思ったことなど無い。

・・・。不審に思ったことが無い？・・・いや、待てよ・・・。

セニフと初めて出合った頃は、こんなに明るい奴じゃなかったような・・・。

寧(むし)ろ暗くて近寄りがたいと言うか・・・。その時は人見知りが激しいだけかと思ってたけど、

今思うと余りに不自然な変化だったような気がする。それって、確か・・・。

（シルジーク）

「ビアホフ・・・。って親父がいたよな・・・。確か・・・。」

ふと、シルが自分の巡らせた思考の中から、一人の人物の名前を吐き出した。

それは、アリミアがセニフの過去を知ってしまったあの部屋の中で、すでに彼女が辿り着いていた男の名前であるが、不思議とその名前以上の情報には中々到達できないでいたのだ。

あの中年男性が、元々セニフの正体を知っていた人物なのだろうか・・・。

彼は一体、皇女であるセニフを一人置き去りにして、どこへと姿を消したのだろうか。

「もう・・・。もういいよ！私が知っていることなんてたかが知れてるんだし！・・・教えるよ！・・・教えればいいんでしょ！！？」

セニフは思いっきり目の前の二人を睨みつけると、そう言って不貞腐れた表情のまま、椅子に腰をおろして目を瞑った。

もはや、自分の正体を知られてしまった以上、それに勝る情報を奪い取られることも無くなってしまったセニフが、あれこれ好き放題に想像を巡らされる事に苛立ったのか、ようやく知りえる情報を解き放つ気になったようである。

そして、少し躊躇(ためら)いもあるのか、大きく深呼吸をしてから、彼女が重たい口を開いた。

「アリミアもシルも覚えているんでしょ！ビアホフ！私はね。ビアホフに連れられてトゥアム共和国に来たの。ビアホフは元々私の事を知っている人間の一人。他にも数人いるって聞かされてたけど、本当にほんの数人って言ってた。実際ね。何で私が生きているのかっていう事。私にも解んないんだよ。全然・・・。気がついたらベットの上に寝ていた。私の・・・。私の処刑が決まって・・・。凄く落ち込んで・・・。怖くて・・・。泣きまくったけど・・・。誰も助けてくれないし・・・。でも、気がついたらベットの上で寝ていたの。しかも、私がすでに処刑された事になってた。それ以上聞いても、何も教えてくれなかったし・・・。そんな暇もなく、逃げるようにビアホフに連れ出されたし・・・。私も訳が解んなかったけど、それでも必死に逃げるしかなかった・・・。その時、ビアホフに言われた事があって。そこで初めて、セニフって言う名前を貰ったんだ。そして、絶対に私の正体は他人に知られてはいけないって。そりゃそうだよね・・・。私が生きているなんて知ったら・・・！大騒ぎだよ！絶対・・・。私の事・・・。殺しに来るにきまってるもん・・・。ビアホフは、私の濡れ衣を晴らすんだって・・・。そう言って私の元を去ったんだ。帝国内では結構知られた人物だったからさ。私ね・・・。嵌(は)められたの！全然何が起きたのか！全然解んないの！まさかお父様が・・・。あんなことに・・・。あんな・・・。・・・。」

そう言って、ゆっくりと俯(うつむ)いたセニフの表情に、えもいわれぬ悲壮感が浮かび上がる。

閉じられた瞳からは涙が零(こぼ)れ落ち、肩をすぼめて震えている。

本当にこんな幼い少女が一人。こんな過去を背負っていたなんて・・・。

シルはもはや、そんなセニフの姿を直視することが出来ずに、部屋の隅の方をじっと見つめたままだった。

（アリミア）

「セニフ・・・。出来ればもう少しだけ教えて欲しいの。あのセニフを付け狙った戦闘集団と、その後にブラックポイントを襲った戦闘集団との関係ついて。知っていることがあれば教えて欲しいわ。」

そのアリミアの言葉に、再び厳しい視線で睨み付けたセニフだが、少し眉を顰めて見せた後、即座に視線を断ち切ると、少し強い口調のまま話を続けた。

「私の知っている事なんか！大した事ないよ！最初に襲ってきた集団はロイロマール家の私兵集団だよ！その後の集団については知らない。髭男はストラントーゼ家じゃないかって言ってたけど、私は知らないよ。黒のノッポの目的もよく解んないし。でも・・・。もしかしたら・・・。って。」

（アリミア）

「もしかしたら？」

「私が生きている事を知って！担ぎ上げようって輩かもって思っただけ！ビアホフだって！結局は私の濡れ衣を晴らすって言って！それは単に私をもう一回担ぎ上げたいだけなんだよ！もうね！私！・・・。もう・・・。帝国内のドロドロの殺し合いなんてウンザリ・・・。信念も無いし・・・。ただ権力が欲しいって言うだけで平気で誰

でも殺す。また・・・。そんな事で争いが始まったりするんじゃないかって・・・。そんな帝国貴族達の元に！誰がのこのこ帰るって言うの！？私は！私は・・・！私はね・・・。貧しくても・・・。小さな幸せを持っている家族が羨ましかったよ・・・。」

話途中で俯き始めたセニフの声色が、次第に曇りがかって行くと、瞳の中一杯に溜まった涙が雨露の様に頬を伝って流れ出す。

そして、グッと唇を噛み締めて思いを溜め込むと、無理やり作った笑顔に乗せて、セニフは元気よく言葉を連ね始めた。

「でもね。そんな事はもう私には関係無いんだ。私はね。セニフ・ソンロ。もう皇女でもなんでもない一人の女の子。これからは普通に暮していくんだ。明るく、楽しく、我儘にね。そして、恋もして、結婚して、子供もつくって、幸せに生きてくんだ。そう決めたんだ。そう決めたんだもん。そう・・・決めたんだよ！！そう・・・。うっ・・・。ぅぅ・・・。」

最後にはもう言葉にならないほどの涙を流しながら、込み上げる嗚咽を抑えきれないぐらいに震えて泣いていたセニフ。可愛そうなセニフ・・・。ごめんなさい・・・。こんなに苦しめてしまって・・・。

（アリミア）
「ありがとう。セニフ。」

テーブルに覆いかぶさり、もはや声を殺すこともなく大きな声で泣き出したセニフに、アリミアは優しく感謝の言葉をかけてあげた。

こんなにまで必死に耐えて、私の思いに答えてくれたセニフ。この

か弱き少女のためにも、今後をどうするか。

彼女を守ってあげるために、自分が一体何をしてあげられるのかを、必死に考えなければならない。

勿論、アリミアが本当に目指したものは、それを意図して事の真実を突き詰める事だったのだから。

（アリミア）

「恐らくあの女から、ユァンラオにもセニフの情報は伝わってしまうわね。彼等の本当の狙いが解っていない以上、決して油断は出来ない相手だと思うわ。それに、ブラックポイントで襲ってきた集団だって、セニフの事を簡単に諦めるとは思えないし、今後も何かしらの動きを見せるかもしれない。そういった意味では、軍隊という規律の厳しい組織化に組み込まれる私達にとってみれば、逆に都合の良い事なのかも知れないわね。」

（シルジーク）

「確かにそれはあるな。軍隊の中にいれば、あの男も簡単に手出しすることは出来ないだろうし、帝国貴族に襲われる事も無いって訳だ。」

（アリミア）

「そういうこと。軍隊で兵士として戦う以上、完全に安全なんて無いのだけど、背後から突然襲われるって事は、少なくなると思うわ。それでもあれだけ強引な手段を講じてきた相手だから、全く油断は出来ないけど・・・。相手が相手だしね・・・。」

セニフの口から一部始終とまではいかないが、ある程度納得のいく解答を得た二人が、神妙な面持のまま今後についてを話し始める。

しかし皮肉にも、今後自分達の命を危険に晒すであろう軍隊に組み敷かれることが、逆に彼等の安全性を高めるなどと、思いもよらなかったであろう。

それでも目の前に立ちはだかる相手は、あの帝国5大貴族のロイロマール家とストラントーゼ家であり、決して二人が立ち向かえるような相手ではない。

しかも、要注意人物となるあの髭男「ユァンラオ・ジャンワン」は、今後も彼等と同じように軍所属となるために、決して油断する事は出来ないのだ。

脅威の程度が少し和らいだとはいえ、決して彼等の前から消え去った訳でも無く、しばし二人は難しい表情で考え込んでしまうのだが、もはや動き出した時計の針を戻すことなど不可能なことである。

まずは一つ一つ。目の前に降りかかる火の粉を取り去る位の事しか、今の彼等には出来ない事だった。

（アリミア）

「セニフ。あのユァンラオという男の事は、私が何とかしてみせる。絶対にあの男の正体を暴いて見せるわ。だから心配しないでセニフ。私にとっても、皆にとっても、貴方はセニフなの。これからは皆で力を合わせて・・・。」

「嫌だ！！」

アリミアが優しく投げた言葉を、唐突にセニフが弾き飛ばす。

「嫌だ・・・。嫌だよ・・・。やめてよ。私は貴方(あんた)の手なんか借りない。アリミアみたいな人間達がいるから・・・。ストラやロイロマールやファルクラムのように!!力を欲する人間達がいるからいけないんだよ!!元々、貴方達(あんた)ファルクラムがお母様を殺さなければ、こんな事にはならなかったんだよ!!それなのに・・・。それなのに!!」

アリミアは少し、セニフの怒気に気圧されるように、目を細めて視線を逃がした。

セニフの言葉に全く反論する事が出来い事は、彼女自身がよく解っている事なのだから。

自分が過去に犯してきた数々の罪。それは決して簡単に拭い去れるものではないことは重々承知していたのだ。

「人の世界に土足で踏みこんでおいて!!ぐちゃぐちゃに壊しておきながら!!今度は皆で力を合わせてなんて!!自分勝手だよ!!我儘だよ!!どこにそんなお人好しな人間がいるのさ!!貴方(あんた)との情報の共有なんて絶対いや・・・。絶対に嫌!!」

壊れてもいい・・・。壊してもいい・・・。それでも必死に皆を守りたい・・・。アリミアがそう思い、そう願っていたことは確かだ。しかし、それでも、自分が得た情報に見合うだけの余波が、少なからずあるであろう事は、悲しいかなアリミア自身解っていたことだ。

私だって、なんて都合のいい人間。壊すだけ壊しておいて元に戻すのは簡単なんだって錯覚していたの。

いいえ、自分の興味心に打ち負けて、ただ単に周りの友人達を辱め

るだけにすぎないと気づきながらも、皆を守るという公約を眼前に歌い、独自のねじ曲がった正義を皆に強要していただけなのかもしれない。

（シルジーク）

「セニフ！それは結果論だろ！自己的感情のみでアリミアを責めるんじゃない！何故、俺やアリミアが、ここまでお前の事を苦しめなければならなかったのか理由がわかるのか？」

「嫌だ！！解んない・・・。解んないよ・・・。なんで！？私の過去を知ってどうなるのさ！？私の秘密を暴いて一体どうするのさ！？今だって二人して考えこんでさ！！ストラントーゼやロイロマール相手に！！・・・たった2人で何ができるって言うの？無意味に2人とも危険な道に足を踏み入れてしまっただけじゃない！！皆に知られない方がいいって・・・。皆、知らない方が幸せなんだって思って！！今まで苦しんできた私の思いはどうなんのよ！？馬鹿！！・・・馬鹿！！馬鹿！！」

彼等が訪れるまで、静かにテーブルの上に置いてあったはずのガラスのコップ。

先ほどのイザコザで床に落ちて割れてしまったそのコップ。今や無残な破片を床一面に晒すだけである。

コップ自体にヒビが残っていたのだとしても、元通りコップとしての役割を果たす程に修復は可能だ。

しかし、そのコップに注がれていた、形の無い大量の「人の思い」という「水」は、元に戻ると言えるだろうか。

コップの落ち所が悪ければ、全てが地面へと染込んでしまい、二度と同じ「水」がコップの中に戻ることは無いだろう。

そして大抵の人間は、その「水」をコップもろとも諦めてしまうものだ。

乱暴な感じで部屋を飛び出して行くセニフの後姿に、それまで明るく勝って気ままな自分を表現してきたセニフの姿を重ね合わせて。

シルは、これまで必死にセニフが思い押し殺してきた苦しみを、垣間見てしまったような気がした。

（アリミア）
「シル・・・。シルの思いに答えられなかった・・・。ごめんなさい。反省しているわ。」

足元に転がるコップの破片。誰も気にも止める様子は無い。

音を立てて割れ散ったコップと、音もなく崩れ去った自分達の2年間。

シルは床に落ちているコップの破片を1つ、一番大きいのを手に取ると、ゆっくりとアリミアに手渡してこう呟いた。

（シルジーク）
「割れたコップに注ぐのは新しい水でもいいさ。コップだって、新しいのを使えばいい。今度は絶対割れない、頑丈なコップを用意してな。」

03－10：〇双星はねじれの位置［1］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「双星はねじれの位置」

トゥアム共和国の東部に位置する隣国「アブキーラ連邦バウテア」。
そのバウテアとの国境から約１５０ｋｍｉｌｓ付近の平野地帯にある小さな町が「セロコヤーン」だ。

そこは「トゥアム共和国」「リバルザイナ共和国」「アブキーラ連邦」の、三国を分け隔てる「ベラ山脈」の麓（ふもと）にあたり、ムーンスローヴ大陸東部の２大河「ローア川」と「クリシチア川」の始流となる、綺麗な大自然に包まれた心地のよい高地にある。

元々周囲を険しい山々に囲まれたこの地域は、昔から人々の生活圏とは縁遠く、特異な人工樹木達とはどこか違った、気品溢れる思い深い緑色に包まれているのが特徴的だ。

現在も尚、保護区に指定されてた地域が数多くあり、共和国軍基地周囲に小さく街が広がっているだけで、とても静かな未開の地が、神秘的雰囲気を醸（かも）し出していた。

と、ここまでは建前上の話で、実際の所は国境に程近いということもあり、トゥアム共和国の中でも昔から軍事施設として重要な役割を担ってきた場所でもある。

このセロコヤーン基地には、陸軍駐留所があるだけでなく、重爆撃機クラスの離着陸が可能なＥ級滑走路を３本保有し、東スロベーヌ

地方全土に睨みを利かせているのだ。

現在では三国の間に協定が結ばれているため、大型機の離発着は輸送機のみに限定され、軍事物資や陸軍兵器の輸送のみに使用が限られてしまっているのが現状だ。

完全に日は落ち、涼しげな空気に包まれ始める中にあり、そんな辺境の基地において、少し小面倒な問題が発生していた。

それは、先ほど発生したＢＰ事件で、ＤＱＡ大会参加者達を乗せた一機の大型機が、ここセロコヤーン基地に着陸した事が原因なのだが、その輸送に用いられた機体が「重爆撃機ガーゴイル２」であったからに他ならない。

トゥアム共和国政府も、今回は緊急事態ということもあり、避難民達を乗せたガーゴイル２を、セロコヤーン基地に着陸させる事は、リバルザイナ共和国、アブキーラ連邦両国から快諾されるものだと思っていたのだ。

しかし、実際に蓋を空けて見れば、「アブキーラ連邦政府」から出された解答は否定的な内容であり、いかなる場合においても、セロコヤーンへの中重爆撃機の配備は認めないといった、協定内容がそのまま記載されていた。

これに対し、共和国側は何とかアブキーラ連邦政府の承認を得ようと試みたのだが、それよりも先に、ガーゴイル２の燃料が尽きてしまい、許可を得ないままに着陸することになってしまったのだ。

（カース）

「今回の輸送計画を立案したのはどなたなのです？バウテア地方の制空権協定を考慮すれば、隣国からの反発があって当然。中立国だからといって他国隣国に有害でない国家など存在しませんわ。予備佐官。」

（サルムザーク）

「帝国皇后の演説によって、帝国軍が今後トゥアム共和国に対して軍事行動を起こすのは時間の問題。トゥアム共和国が幾ら中立の立場を突き通しているからとはいえ、帝国の軍事行動を黙って見ている事もできなくなった訳だ。共和国政府は今後の戦局を見据えて、暗にセロコヤーン基地の戦略的使用を隣国に認めさせたかったのさ。緊急事態という混乱に乗じてな。ま、なんにせよ小難しい問題は政府のお偉いさん達が何とかしてくれるだろう。俺達見たいな小物が気に病むことは無い。」

真っ暗な闇に包まれた夜空めがけて、大光量のサーチライトが満天の星空を照らす中、既に地上へと舞い降りてしまった巨大重爆撃機に、横付けされたタラップの上を二人が降りる。

（カース）

「中立国として帝国を含め近隣諸国への、軍事的干渉を完全に停止した我が国に、戦火の矛先を向ける理由は何かあるのでしょうか。ソヴェール帝時代の戦火縮小宣言から、一般民間企業同士の貿易取引を開始するまで至ったというのに、何故今ごろになって再び戦火を拡大する必要があるのでしょう。」

（サルムザーク）

「カース。帝国にとって我々トゥアム共和国の軍事力が、強大で警戒すべきものなのかと言えば答えはＮＯだ。奴等から見れば、トゥアム共和国など、取るに足らない弱小国に過ぎないのさ。奴等が一

番恐れている事は帝国自身が持つ有り余る軍事力だ。帝国国内の実権をほぼ手中に収めているストラントーゼ家と、それに対抗するロイロマール家。この両者が正面切って内戦を始めるようなことがあれば、それこそ近隣諸国に対する戦火拡張どころの話ではない。今回トゥアム共和国に対して戦線布告的な態度を取らざるを得なかったのも、恐らくは帝国内部の政治的問題に深く関係している可能性が高いな。ここから先は俺の想像の中での話しでしかないが、帝国はトゥアム共和国との開戦を望んでいた訳ではなく、ＢＰ事件という都合の良い出来事を利用して、内戦の原因となる火種を潰しにかかった。巧妙に仕組まれた罠にまんまと嵌ったロイロマールを、公の場で堂々と失脚させる事を、全帝国国民に認めさせるためにな。」

やがて、タラップを降りた二人が見上げた先には、黒装束に身を包んだベラ山脈の頂きで、綺麗に輝く半月が浮かんでいた。

周囲を照らし出すための強い光を放つサーチライトにも装飾されたその美しさは、澄んだ空気に増長されるように、普段より一段と綺麗な黄色を滲ませている。

サルムはそんな宝石のような黄色のかけらを見つめながら、淡々と自分の思考の淵を探っていた。

（カース）

「いつの間にか賢くなったものね。サルム。入隊したての頃は生意気で自分勝手な若造だったのに。」

カースはタラップの手摺り部分端に凭れ掛ると、いつの間にやら手のかからなくなった子供を見る様な表情で、そんなサルムの横顔をじっと見つめていた。

サルムがトゥアム共和国陸軍に入隊してからしばらくの間、実際に彼の指導を行っていたのは、当時陸軍養成学校の教官であったカース自身なのだ。

少し皮肉めいた思いを込めて投げかけた言葉には、たった3年という短い期間の間に、いとも簡単に自分を追い抜いてしまった彼に対する、嫉妬感のようなものがあったのだろうか。

上官に対しては常に敬語を怠らない彼女なのだが、どこか少し昔の関係を思い起こさせるような彼女の口ぶりだった。

（サルムザーク）
「カース作戦軍曹。明日からはネニファイン隊の設立に向けた研修期間だ。各パイロット候補者リストと適性リストの整理を急げよ。司令室周りの人員選定に関しては軍曹に一任する。それとシューマリアンには新型機情報の解析と、シミュレーション用コンバートを最優先で作業するよう伝えてくれ。」

サルムはそんなカースの言葉にまったく気にも止めないような感じで、普段の上官と部下たる口調でカースに指示を出すと、巨大なガーゴイル2の後方格納庫から続々と姿を現す若者達の方へと視線を向けた。

（カース）
「解りました。」

一瞬、少しつまらなそうな表情を浮かべたカースだが、すぐさま彼女はニッコリとサルムに微笑んで見せると、彼に続くように後方格納庫の方に向き直った。

ガーゴイル2の格納庫から姿を現した若者達は、つい少し前までブラックポイントでＤＱＡ大会に興じていた人間達であり、今後、陸軍兵士としてサルムの部下となる予定の人間達である。

集められたメンバーを見ても解るとおり、サルムが指揮を取る新設部隊と言うのはＤＱ専門部隊であり、「ネニファイン」という部隊名で正式に陸軍登録されることになっている。

実際にはこの若者達の他にも、共和国各地から集められた若者達がいるのだが、このブラックポイントＤＱＡ参加者分についてが、ネニファイン部隊への「割り当て分」なのだ。

というのも、ＤＱ専門部隊は「ネニファイン部隊」の他に、「カラムス部隊」「ブラックナイツ部隊」が新設されることになっており、トゥアム共和国陸軍におけるＤＱ専門部隊は、合計3部隊新設されることになっていたからだ。

勿論、ＤＱ専門部隊を新設するに当たり、完全なド素人達をかき集めただけで部隊が成立するはずもなく、何人かは陸軍所属の正規軍人達が編入される予定になっていた。

（カース）

「予備佐官？今回の機動兵器ＤＱ専門部隊の設立に関して、予備佐官の考えを聞かせてください。陸上戦での人型兵器にそれほど魅力があるというのでしょうか？近年目まぐるしい進化を遂げたとはいえ、未だ地形的制約を軽減するためのホバー移動から脱却できない同機体を、それほど重要視する必要は無いと思うのですが。」

（サルムザーク）

「シューマリアンみたいなことを言う奴だな。カース。お前に考え

てもらいたい事はＤＱの特性にあった運用法についてだ。軍事兵器の開発思想なんてものは、イカレた開発研究者達に任せておけばいい。ＤＱの機動性、汎用性について考慮すれば、その優位性は自ずと見えてくるだろ。」

（カース）

「低速運動時の機動性を活かした市街戦、密林戦等の局地戦闘。高度な汎用性を活かした輸送、建設等の後方支援任務。」

なんだ、解っているじゃないか・・・。

そんな素っ気無い態度で視線を逸らしたサルムが、ぽっかりと浮かぶ綺麗な半月を見つめながら、ひんやりとした空気を深く吸い込んだ。

（サルムザーク）

「人型にしろ蟲型にしろ、ＤＱという機体は未だ進化の途中にある。結局、人型でなければならない理由など、現時点ではどこにも無いんだ。それでもＤＱが人型兵器としての進化を続けるのは、言ってしまえば開発者達の理想を実現するためのエゴでしかない。ただ、一つそこに可能性を挙げるとするならば、人間が無意識のうちに同じイメージを共有できる機体は、人型兵器以外にはありえないと言う点だろうな。たとえばお前が如何にＤＱ操舵技術に優れていても、６本足のＤＱの歩行操作を制御システム無しでは出来ないだろう？それは俺達人間にとって、６本足を同時に動かすという事が、どういう事なのか解っていないからだ。複雑な行動制御システムがこれを可能にしているとはいえ、結局、操縦者が簡素化されたヒューマンインターフェイスに対して、何かしらの入力をしなければＤＱは動かない。現在の行動制御システムに全て依存している限りは、人型の優位性など余り無いことは確かだな。」

（カース）
「では、行動制御システムに依存しなければ、人型の優位性が浮かび上がってくると。そう予備佐官はおっしゃるのですか？」
それまで彼女は、適当な言葉を並べて内容をはぐらかされるとでも思っていたのだろうか。
まじめな回答を返したサルムの姿に、少し驚いた表情を浮かべると、更に興味を示す視線を浴びせかけながら問いかけた。
（サルムザーク）
「カースも聞いたことがあるだろう？ＢＩＳ（ブレイン・インターフェイス・システム）。今や目の見えない人間が景色を眺め、耳の聞こえない人間が音楽を嗜（たしな）む時代だ。昔、これを軍用に転用しようと考えた研究者がいてな。研究論文を読んだ事があるんだ。ただ、結局のところ、人間がイメージした様々な外乱要素をうまく選別出来ずに、実験は失敗に終わったらしいがな。面白いと思わないか？人間がイメージした通りに、ＤＱの手足が動いたとしたら。」
（カース）
「最終的に人体実験にも等しい研究内容を告発されて、社会的にも問題となった「アレ」ですか？もし実現したのなら夢のような話かもしませんが、今の私達には全く関係ありませんわね。」
（サルムザーク）
「結局のところ、進化の過程には必ず試行錯誤が必要なのさ。強大な帝国の軍事力に対抗するための手段を、上層部も必死に模索しているって訳だ。勿論、結果がそれなりに出ないようであれば、即座に部隊は解散させられるだろう。しかも、俺みたいが若造が隊長を

勤める部隊だ。上層部からの風当たりが相当強いことを覚悟しておけよ。それからカース。一つ面白い事を教えてやろう。俺達の部隊名「ネニファイン」の語源は何だと思う？Ａｎｙ　Ｆｉｎｅ（なんでも良い）なんだとさ。」

このサルムの言葉に、カースは一瞬、目を丸くして驚いた表情を見せたのだが、その後、じわりと込み上げる可笑しさにプッと噴出してしまった。

軍上層部の新設ＤＱ専門部隊「ネニファイン」に対する偏見の念と、阻害心があからさまに見て取れるネーミング。

つまり、使いたいように使って、使えなければすぐにでも厄介払いとなる、「どうでもいい部隊」という意味なのだろう。

（カース）
「後方支援で倉庫からの積荷作業に明け暮れる日々なんて、送りたくないですわね。」

（サルムザーク）
「便利屋となるか御荷物部隊となるかは俺達次第だ。陸軍本隊の作戦行動に直接左右されない分、俺達の運用能力がそのまま問われる事になる。カースもネニファイン部隊を「ナイテラーデ部隊」なんて呼ばれたくないだろう？」

彼の言う「ナイテラーデ部隊」とは、自兵を持たない帝国貴族ナイテラーデ家にちなんで付けられた名前で、実際には存在しない部隊である。

トゥアム共和国内では「役に立たない」という意味を込めて、侮蔑（ぶべつ）

の念を込めてそう呼ぶことがあるのだ。

そうですね・・・。

決して口に出しては返事を返さなかったカースだが、ゆっくりと屯(たむろ)した若者達へと視線を移すと、次第に少し強張った表情を醸(かも)し出した。

便利屋となるか。それとも御荷物部隊となるか。それは勿論、部隊を司(つかさど)る、サルムやカースの手腕が問われることになるであろうが、もっとも重要となるのが、部隊メンバーとなる若者達である。

彼等がどんな人物達であろうと、ネニファイン部隊を発足するためには、否応(いやおう)なしに彼等を使えるレベルまでに引き上げなければならないのだ。

そして、その重要な役割を担うのが、「鬼教官」の異名を持つ彼女の仕事となる。

信念も無く、おそらくは愛国心さえあるかどうか解らないこの若者達に対し、如何(いか)にある程度高額な報酬を約束しているからとはいえ、命を賭して戦える集団まで引き上げることは、決して容易な事ではないだろう。

兵士達が戦う理由とは・・・。

カースは、ふと脳裏に浮かび上がった疑問を、素直にサルムに投げかけてみた。

（カース）

「予備佐官。何故、予備佐官は軍人になろうと思われたのですか？」

カースから見てこのサルムザークは、恐らくガーゴイル２の格納庫後方に屯(たむろ)す若者達と同年代。

いや、更にそれよりも年下なのかも知れないが、そこに何かしら若者共通の思考となるものが有るのかどうか、それが少し気になったのだろう。

しかし、サルムはその問いに対して、即答することを拒むように表情を曇らせると、ゆっくりと若者の集団を見つめながら言葉を返した。

（サルムザーク）

「軍人になった理由か・・・。・・・。まあ、しいて言うなら、俺も戦火を求める亡者なのかも知れないな。」

吹き荒れる風に黄緑色の髪を靡(なび)かせて、どこかその真意を棚上げにしたまま空を見上げたサルムの姿に、カースは少しムッとしたような表情を浮かべた。

（カース）

「予備佐官も無闇に戦火を拡大しようとする、帝国と同じ思想と言うことなのですか？私は教官であった時代から予備佐官を見ていますが、内に秘めた信念は、決して淀んだものではないと感じています。何かこう・・・。勿論、それは私の一方的な見解に過ぎませんが・・・。でも、そう思ったからこそ、私は貴方について行くのです。」

サルムのこの曖昧(あいまい)な答えに対して、カースは業(わざ)と、不満をこぼす様

な言い方をしてみせた。

それは、これから生死を共にする上官の口から、それなりに自分として納得できる回答が欲しかった為であろうが、不思議な表情で夜空を見上げるサルムの姿に、カースはそれ以上詮索することを止めた。

きっと彼の中には、人には言えない理由が有るということなのだろう。

（サルムザーク）

「カースの信念はなんだ？こんな時代に女が一人、軍人として頑張って行く必要は無いと思うがな。」

少しの時間を置いて、ゆっくりとカースの方に向き直ったサルムが、今度は逆に同じ質問を彼女に投げかける。

自分自身、答えをはぐらかしておきながら、なんとも都合のいい問いかけだとは思いつつも、彼は彼女に関して少し気になっていた点があったのだ。

それはカースをネニファイン部隊に引き抜くにあたり、あれほど有能で重宝されていた彼女を、いとも簡単に転属させることが出来たという事についてだ。

勿論、表向きな理由は簡単な事で、ネニファイン部隊メンバー選出時点で、彼女はどの部隊にも属さない「未所属」状態だのだ。

そしてその後解った事だが、どうやら彼女は一度トゥアム共和国陸軍を退役した後、再び何かしらの理由で軍に復役してたようなのだ。

（カース）
「実は2人目の子供が病気なんです。夫を去年、ムルア海峡で亡くしまして・・・。女手1つであの子を養って行くには、どうしても高給職につかないと生活が成り立ちませんので。」

（サルムザーク）
「そうか・・・。確かミザレス一尉だったな。ディエップ艦に乗船していたのか・・・。」

昨年末、ムルア海峡沖にてテスト航海中だったトゥアム共和国最新鋭巡航艦「ディエップ」が、突然未確認艦隊からの砲撃を受け、撃沈されてしまうという事件があった。

大きく北方にせり出したムルア岬より西一帯。ムルア海に浮かぶ島々の集合体「ムルアート諸国連合」は今も尚、激しい内戦の真っ只中であり、中立国のトゥアム共和国に対してもムルアート領海内への進入は硬く禁じられていた。

しかし当時、航行電子羅針盤に難のあったディエップが、誤ってムルアート諸国領海内に立ち入ってしまった際、正規の識別信号を発していなかったこの艦を、反ムルアート政府軍「フランコ中将軍」が、敵艦と誤認して撃沈してしまったのだ。

（カース）
「私の信念は「家族のために戦う」です。戦う相手が帝国軍だろうと、軍上層部だろうと、子供の病気だろうと、私には関係はありません。私は、愛する家族のために戦います。」

淡々と答えてはいるが、決して軽みのある言葉ではない事は、彼女

の表情からも伺い取れる。

当時は「鬼教官」として、新入隊員から忌み嫌われていたカースだが、彼女にも愛する夫もいれば子供もいる。

一人の人間として。一人の母親として。自分の家族の生活を守るために、彼女は戦うことを決意したのだった。

（サルムザーク）
「子供の方は大丈夫なのか？」

（カース）
「ええ。今はランベルクで専門施設に預けてありますので。聞き分けのいい子達なので助かります。でも、出来たら偶(たま)に休暇をくださいね。」

そう言うと、カースは優しい表情でニッコリと微笑んで見せた。

一体、家庭内ではどんな人物になるのだろうか・・・。

鬼教官として怒鳴り散らすカースの姿しか思い浮かばないサルムの脳裏に、ふと浮かんだ素朴な疑問。

彼はあえてそんな事は問いかけなかったが、再び若者の集団に視線を向けて呟いた。

（サルムザーク）
「チーム内で最も必要なのは能力より以前にお互いの信頼関係だ。カースが何を聞きたがっているのかも解っているつもりさ。今はまだ・・・。そうだな・・・。それは決してトゥアム共和国に対する

愛国心や、高尚(こうしょう)たる正義の思想でもないかも知れない。それでも俺は、心に抱いた思いに忠実に生きているつもりだ。この思いに嘘や偽りは無い。そして恐らく、時が来ればお前にも伝えなければならない事だ。その時まで少し待ってくれるか？」

サルムのその言葉に対し、カースは少し残念そうな表情で溜め息を付いてしまった。

仕方ないわね・・・。

（カース）

「やんちゃな若造を上司に持つと言うの大変だわ。貴方に何か表向きに言えない事があるぐらい解ってるつもりよ。でもね。貴方の指導員として一言言わせてもらうなら、決して一人で抱えたまま暴走しないように。私はもう、貴方の部下なんですから。少しは頼りにしてくださいな。」

カースは、再び教え子たるサルムに、昔ながらの言葉使いでそう思いを伝えると、上官たるサルムに対して礼儀良く姿勢を正して敬礼をした。

そして、最後にニッコリとサルムに微笑みかけると、左手に抱えた書類の束を無言で指差して、そそくさとその場を後にした。

恐らく彼女はこれから、部隊設立のために山積みにされた仕事に追われる身なのだろう。

サルムは、そんなカースの後姿を見つめて、少し自責の念を抱いてしまったのだが、綺麗に光り輝く半月と、頭上一杯に広がる満天の星空を見上げながら、大きく深呼吸をしながら気持ちを落ち着かせ

た。

人が抱く信念とは、一体何を目指し、何の為に沸き起こるのだろうか。

何かを欲するため？他人から認められるため？何かを守るため？誰かを守るため？

人が心に抱く信念には、他人から賞賛（しょうさん）されようが卑下（ひげ）されようが、全ては思いを抱いた本人の願望であるという点ではまったく違いは無い。

つまりは、どんなに他人の為に己の身を犠牲にしようとする聖者であっても、心に抱きし信念は結局、私利私欲に塗（まみ）れた思想と違いは無いのだ。

「何かの為に必死に生きる」→「自分自身が何かの為に必死に生きたい」と願っている。

「誰かの為に必死に生きる」→「自分自身が誰かの為に必死に生きたい」と願っている。

その思いを抱いた時点でその人の主観が必ず混じり、そこから沸き立つ思いを心から切望する。

全ては自分の為に。それ以上もそれ以下もなく、全ては自分の為に。

どんな理由をこじつけようとも。どんなに人々の涙を誘うほどの美談であっても。

全ては自分自身が自分自身の為に抱いた「思い」でしかないのだ。

しかし、それが様々な思いを抱く人間であることの証明であり、真に自らの願望を交えない思想を持つことなど、機械仕掛けの操り人形でもない限り絶対に不可能なことだ。

抱く思いを胸に秘め。自分自身の抱いた思いを切望して。その信念が指し示す最終的一点を思い描きながら。

サルムはじっと、夜空に光り輝いた2つの双星を見つめていた。

（サルムザーク）

「・・・・！？」

天から降り注ぐ煌(きら)びやかな星空の下。

見上げた頭上に光る2つの星が、流れ行く大地の波風に晒(さら)されながら、一段とその輝きを増していく。

恐らくはお互いに意図してそこに居た訳ではなく、神様の気まぐれが生んだ偶然性によって、再び巡り会う事を強いられた双星だ。

（サルムザーク）

「・・・・。」

煌(きら)びやかに光り輝く星2つ。

どちらか一方が強く光れば、もう片方の光りがかき消される。

そういったお互いに干渉し合う距離を嫌った二人だが、結局は与え

られた運命から逃れ出る事も出来ないままに、そこに辿り着いたのだった。

（サルムザーク）
「まさかパークで戦争ゴッコして遊んでいたとはな。」

黄緑色の髪の毛を掻き上げながら、サルムが目の前に立ち尽くした一人の金髪の少年に向かって話しかけた。

恐らくはガーゴイル2の格納庫付近に屯(たむろ)した、若者の中から抜け出してきたのだろうと思われるが、何故彼が自分の元まで歩み寄ってきたのかという事は、サルム自身よく解っている事だ。

真っ暗闇に包まれた世界に立ち尽くす2人の少年。

各々黄緑色の髪の毛の少年と、金色の髪の毛の少年。

彼等は髪の毛の色以外に、識別が出来ないほど酷似した双星であった。

（サルムザーク）
「久しぶりだな。シル。」

（シルジーク）
「お前!!何で・・・。何でこんな所にいるんだよ!!お前・・・。まさか・・・。」

合い間見えた双星の光を、怪しげな黒雲が遮(さえぎ)った時。

激しく抱いた怒りの炎により、輝きを増した金色の星が、突然黄緑

色の星へと襲い掛かった。

03－11：○双星はねじれの位置［2］

第三話：「作れば壊れる自然の原理」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「双星はねじれの位置」

（サフォーク）
「おい見ろよアークチャン。こんなでっかいコンテナは初めてだぜ。中型ＤＱでも５機は簡単に格納できそうだ。ほんとにこいつは爆撃機か？使用用途を間違えているんじゃないのか？」

大きく口を空けたガーゴイル２の後部格納用ハッチを見上げながら、子供じみた様に歓喜の声を上げる大人が一人。真っ黒な闇夜に姿を溶かしたその大きな機体は、それまで自分達が乗ってきた機体なのだとは言え、外から改めて眺めてみると、呆れ返るほどの凄みを有しているのがよく解る。協調性に事欠いた若者達の集団から、更に協調性に欠いた「メカマニア」と「メカ博士」の２人が、目の前に晒（さら）された「お宝の山」を前に、マニアな会話に興じていた。

（アークチャン）
「先の大戦でトゥアム共和国を守った守護神ですよガーゴイルは。この型は３タイプある内のＣ型で、主に空挺戦車部隊の輸送も兼ねて設計された機体ですね。」

（サフォーク）
「えっと、対戦車用５０ｍｍ機関砲の銃席はどこだ？あのタイプのノズルデザインがかっこいいんだよな。出来れば銃席のレイアウトも見てみたいぜ。」

そう言いつつ、サフォークが緑色のロン毛をなびかせながら、元気

良くガーゴイルの周りを挙動不審にうろちょろし始める。普段やたら女好きの彼ではあるが、本来の職業上、めったにお目にかかれない軍の機密機種に対し、しきりに湧き上がる興味を拭い去る事ができない様子だ。

（アークチャン）
「高高度爆撃機にそんなものあるわけないじゃないですか先輩。この機種には対空防衛用のバックファイアぐらいしかないですよ。」

（サフォーク）
「なに？俺が見たカタログにはちゃんと2基の銃席標準装備だったぞ。」

（アークチャン）
「型番Ｓｔｒ－２６じゃないですかそれ。対地専用攻撃タイプの開発機で、砲撃反動に耐えられなくて機体が傾くって噂のやつ。そんな失敗作が正式に配備されている訳ないじゃないですか。カタログって・・・。先輩そんな物買う気だったんですか？」

おかっぱ頭に近い髪型が良く似合う色男が、呆れたようにサフォークに言った。彼の名は「アークチャン・コミューン」。

彼はＤＱ技術専門学校時代にサフォークの後輩にあたり、何かにつけてサフォークにこき使われている可愛そうな人物である。本当の所、このような面倒くさい人間とは行動を共にしたくないアークチャンなのが、この先輩はいつも突然に、そして半ば強引に彼の行動を束縛するのだ。

そして、主な後輩の役割としては、この先輩のあつかましい頼み事を聞いてやる事と、馬鹿な先輩の暴走を事前に阻止する事にある。

（サフォーク）
「買えるかよ。軍機密だぜ。カタログだって裏ルートで買ったんだ。今度アークチャンにも回してやろうか？」

（アークチャン）
「要りませんよそんなもの。」

全く冗談なのか本気なのか解らない程の真顔でさらりと返したサフォークに、アークチャンは呆れかえった様な表情で溜め息を付いた。

もしかしたら、先輩ならやりかねないかもしれない・・・。

サフォークとの付き合いは長いとはいえ、彼から見ればこのサフォークという男は全く掴み所の無い不可解な人物である。

恐らくはその有り余る好奇心で収集した知識から、相当博識である事は伺い取れるのだが、何せ興味のあることであれば後先を考えずに行動を起こすのだから、迷惑千万な話だ。

まるで子供の御守りを押し付けられた叔父さんのように、アークチャンは元気なく項垂れていたのだが、ほんの少し目を離した隙に、彼は突然、滑走路の横に建ち並ぶ倉庫群の方へ駆け出していった。

（アークチャン）
「せ・・・先輩！！どこへ行くんですか！！」

（サフォーク）
「ガーゴイルの写真を撮るんだよ！！機体全体を撮りたい！！」

（アークチャン）
「駄目ですよ先輩！！軍機密ですって！！撮影だって禁止されているんだから！！駄目ですってば！！」

本当にこの人、ブラックポイントで死に掛けたその人なんだろうか・・・。

そんな疑問符がフッと脳裏を過ぎるのだが、そんなことを微塵（みじん）も感じさせない彼のパワフルさには、未だ二十歳前のアークチャンでも着いていくのがやっとである。

というより、溜め息をつく暇すら与えない勢いで、連続攻撃を繰り出してくる彼の前に、全てを投げ出して「完全放置」を決め込みたいところなのだが、アークチャンは正式なトゥアム共和国陸軍所属の兵士である。

彼が仕出かすであろう軍規に違反するような暴挙を黙って見過ごすことなど出来やしないのである。

なんで自分がこんな目に・・・。

半場泣きべそ気味で必死に彼の後を追いかけるアークチャンだが、ようやく真っ暗な倉庫の壁際で立ち止まったサフォークに追いつくと、激しく肩で息を整えながら、無意味な説教をぶつけてやるのだ。

（アークチャン）
「ハァハァ・・・。せ・・・先輩・・・。僕にもいろいろ・・・立場って物があるんですよ。ハァハァ・・・。少しは・・・僕のことも考えてくださいよ・・・。ッハァ・・・。フゥ・・・。さっきも移送中にガーゴイル機内の詮索（せんさく）して・・・。あのエリアだって、軍

属の兵士も立ち入り禁止だったんですから・・・。もう・・・。聞いてるんですか先輩！」

（サフォーク）
「黙れ。アークチャン。静かにしろ。」

その途切れ途切れの説教に全く反応を見せなかったサフォークだが、突然アークチャンの前に手を差し伸ばすと、どこか先ほどとは違った雰囲気を醸し出しながらそう言った。

そして、何やら静かに周囲の様子を伺うような素振りを見せるこの先輩に対し、アークチャンも意味がよく解らないなりにも息を殺した小声モードへと移行した。

（アークチャン）
（一体どうしたって言うんですか！！急にこんなところで！！）

（サフォーク）
（しっ！！聞こえるだろ・・・。）

サフォークはそう言うと、アークチャンの小声モードすら制するために、彼の口を大きな手で覆い隠し、後ろから羽交い絞め状態にする。

必死にもがき苦しむように暴れていたアークチャンだが、やがて、倉庫裏の方から不審な物音が聞こえてくる事に気がつくと、ゆっくりとサフォークと視線を合わせて、その音に聞き耳を立てた。

（アークチャン）
（誰かいますね。先輩。）

（サフォーク）
（ああ。1人じゃねえ。複数だな。）

（アークチャン）
（こんな真っ暗な倉庫裏で一体何を・・・。）

（サフォーク）
（もしかしたら帝国のスパイかも知れねえぜ？）

ええっ！！・・・と、無言のまま驚きの表情を浮かべたアークチャンに、興味津々で余裕の笑みを零すサフォーク。

つい先ほどブラックポイントであれほどの事件が勃発したのだ。

如何にセロコヤーン基地が帝国領土から遥か離れているからとはいえ、その可能性を完全に否定できるはずもなく、アークチャンは少し不安な気持ちを抑えられなかった。

（アークチャン）
（せ・・・先輩！警備兵を呼んできましょう。僕等じゃどうにもなりませって。助けを呼びに行きましょうよ。）

勿論、彼はそんな後輩の心配事を聞いてやるような先輩ではない。

やはりと言うべきか、この男の興味心がその程度の不安にかき消されるはずも無く、サフォークは、大人しくなったアークチャンを放り出すと、足音を殺すようにしてゆっくりと倉庫裏の方へと突き進んでいった。

（アークチャン）
（せ・・・せんぱーい。）

臆病さを抱いたままキョロキョロと周囲を見渡しては見るが、決して彼の望む助け人の姿など一切そこには存在しない。

暗がりを照らし出す照明の光すら届かない真っ暗闇に一人残された彼は、やがて沸き起こる不安感に押し負けるように、しぶしぶとサフォークの後に続いて歩いた。

彼は恐らく流されやすいタイプの人間なのだろう。

先ほどまで暗がりを薄っすらと照らし出していた月の光も、今や分厚い黒雲の向こうへと姿をかき消されてしまっている。

ゆっくりと倉庫裏の端まで到達したサフォークは、じっと己の気配を消しながら、倉庫裏の広場の方へと目を凝らし始めた。

そして、やがてサフォークの背後から擦り寄って来たアークチャンと共に、しばらくの間じっと周囲の様子を観察していたのだが、人の気配はすれども、誰がどこにいるのか全く見つけることが出来なかった。

唯一彼等に判別できたものは、ゴミ処理用の焼却炉と、廃棄物の山。そして運動用バスケットゴールが一棟立っているのが解った程度である。

（サフォーク）
（足音の数からして2人・・・かな？）

（アークチャン）
（せ・・・先輩。戻りましょう。本当にスパイだったら、丸腰の僕たちじゃ・・・。）

やはり何者かの足音が激しく倉庫裏に響き渡っているのは確か。

しかも、どうやらその足音は次第に二人の隠れる小屋の方へと近づいてくるではないか。

そして次の瞬間、込み上げる恐怖心を一気に爆発させるような怒鳴り声が、彼等二人へと襲い掛かってきた。

「死んでしまえ!!馬鹿野郎が!!」

（サフォーク）
「うっ!!ひへえぇぇぇぇぇ!!」

（アークチャン）
「うぎゃぁぁぁぁぁ!!」

持てる好奇心を糧（かて）に突き進んできた勇気とは裏腹に、なんとも情け無い叫び声をあげてしまったサフォークと共に、半べそ状態のアークチャンもまたそれに続く。

そして、その叫び声に合わせて飛び掛っていた人物に、二人共々硬いコンクリートの上へと吹き飛ばされてしまった。

（サフォーク）
「馬鹿!!やめろ!!俺はまだ死にたくねぇ!!」

と、自分の体に圧し掛かった人物から、必死にもがき逃げようとするサフォークだったが、何か不思議とその人物が更なる攻撃を仕掛けてくる様子は無い。

「ちっ！！勝手な奴だ！！一人で逃げ出しておいて、お前がとやかく言える立場かよ！！」

「ブッ！！馬鹿げた思想に舞い上がって、結局は同じ穴の狢（むじな）ってか！！てめぇのそのひん曲がった性根！！ぶっ飛ばしてやるよ！！」

ん？なんだ？こいつ？俺に襲い掛かって来たんじゃねぇのか？？

突然飛び掛ってきた人物が発した言葉は、どうやらサフォークに投げつけられたものではないようである。

直後に倉庫裏広場の方から響いていた、もう一人の怒鳴り声と合わせて推測するに、元々はこの二人同士が争っていたという事か。

恐らくイザコザの最中に何かの拍子で一方が吹き飛ばされて、サフォークとアークチャンの二人を巻き込んでしまったのであろう。

なんだ。ただの喧嘩か・・・。

サフォークは少し残念そうな表情で溜め息をついてしまったのだが、その人物の姿にどこか見慣れたような雰囲気を感じると、好奇な視線でじっと彼の観察し始めた。

直ぐ傍（そば）にいたサフォークとアークチャンの存在に気づかないほど激情していたその人物は、何やら軍服のようなものを身に纏（まと）っており、身長は恐らく１７０ｃｍ程で華奢（きゃしゃ）な身体つき。雰囲気や喋り方も、

どこかシルに似ているようだ・・・。

（サフォーク）
「は？・・・。おい！！シルじゃねぇか！！お前何やっているんだこんなところで！？」

倉庫裏を包み込む真っ暗な闇夜の中で、ようやく見慣れた人物の一人であることを確認したサフォークが、驚いたようにその人物の肩に手をかけて話しかけた。

「なんだお前は邪魔だ！！どけ！！」

が、しかし、返された言葉には全くサフォークの事に気付いた様子も無く、その人物は苦痛に表情を歪めながら頬に出来たあざを右手で拭って見せただけだった。

俺の事が解ってないのか・・・？もう一言ぐらい声を掛ければ気がつくか？

そんな変な違和感を感じながらも、サフォークが強引にその人物を振り向かせようとすると、突然、もう一人の男が激しい足音を立てながら、倉庫裏の広場の方から駆け寄ってきた。

「ちぃっ！！」

（サフォーク）
「へっ？」

そして、再度サフォークの身に降りかかった災難の拳。

いきなり飛んできた来訪者の右ストレートは、確実にサフォークの目の前の人物に向けられていたものであったが、彼が小気味良くかわしたがために、その鉄槌の矛先はサフォークの顔面へとすり替わってしまったのだ。

ガツン！！

（アークチャン）
「先輩！」

（サフォーク）
「かっ！！痛てぇ！！」

振り翳された鉄槌の前に、勢い良く吹っ飛ばされてしまったサフォークに、アークチャンが心配そうな声を掛ける。

可哀想にも完全にとばっちりを食らう羽目となってしまった彼だが、元はといえば、何の気なしに余計なことに首を突っ込む自分が悪いのである。

サフォークは殴られた頬の痛みに顔を歪ませながら、ゆっくりと起き上がると、即座に殴りかかってきた犯人へと湧き上がった怒りをぶつけるように、その胸座に掴みかかった。

するとその時、それまで厚い黒雲に遮られていた半月が、長い暗闇の旅を終えて現実世界へと明るい光を注ぎだした。

「何だてめぇ！・・・。あれ・・・？お前サフォークか？」

次第に月の光に照らし出された犯人の姿がサフォークの目の前で露

となる中、どうやらその犯人はサフォークの事を知っていたようである。

（サフォーク）
「シル！！てめぇか！！痛かったぞ馬鹿！！」

（アークチャン）
「ちょっと待ってください！！先輩！！なんか・・・。なんか変ですよ。」

（サフォーク）
「なんだ。俺は今こいつをぶっ飛ばしてやる事で頭がいっぱいなんだ。止めるな。いきなり殴りかかって来やがってシル！！はじめにおまえが俺に追突してこなけりゃ・・・？・・・あ？」

その場の異変にいち早く気がついたのはアークチャンの方だったが、自らが言い放った言葉の矛盾が、ようやく彼にその異変を気づかせた。

サフォークが今、胸座（むなぐら）を掴んでいる男は、彼のチームメートであるシルジーク本人。

突然現れた第三者の存在に、少し驚いたような表情を浮かべてはいたものの、サフォークを知っていた事からも、彼がシルジークであることは確かなはずだ。

しかし、それでは最初にサフォークに飛びついてきたシルジークは一体・・・。

（アークチャン）

「シルさんが2人・・・？」

（シルジーク）
「お前こんな所で何やっているんだ!?手を離せよ!!邪魔すんな!!」

（サフォーク）
「あれ?何でお前こっちにいるんだ?・・・ん?じゃあ、こっちは？」

綺麗な月明かりに照らし出されて浮かび上がった倉庫裏の世界で、ゆっくりと立ち上がり、軍服に付いた埃(ほこり)を払う男の姿に、3人の視線が集中した。

周囲が薄暗いせいもあるのだろうが、服装さえ違わなければ全く見分けをつけることが出来ないほど酷似した二人を順番に見つめ、サフォークとアークチャンは驚いた表情のまま、しばらく黙り込んでしまった。

これは間違いなく双子の兄弟・・・。

誰しもが容易にたどり着くであろうその答えに対して疑いの余地はまったく無い。

それでも、今までシルがその事実に触れることは一切無かったためか、突然の出来事に一瞬思考が停止してしまったような感じである。

（サルムザーク）
「ブッ!ちっ・・・。邪魔が入るとは思わなかったなシル。今度会った時は覚えておけよ。・・・と言いたいところだが、明日から嫌

でも顔を会わせるんだ。いきなり殴りかかってくるような大人気ない行動は慎(つつし)めよ。」

そう言って殴られた頬を擦りながら、血の混じった唾を吐き捨てた彼は、シルに対してニヤリと不敵な笑みを一つ浮かべて見せると、何事も無かったかのようにあっさりとその場を立ち去ろうとする。

しかし、怒り覚めやらぬ雰囲気のシルが、そんな彼の行動を見過ごすはずも無く、再び彼に飛び掛ろうと勢い良く駆け出した。

（シルジーク）
「てめぇ！待ちやがれ！！・・・・・・うがっ！！」

と、突然に彼の攻撃的意思を突然遮断するように伸ばされたサフォークの右手が、シルの上着の後ろ首付近を押さえ付ける。

そして、小柄なシルの身体を後ろから羽交い絞めにすると、不思議な笑い顔のままシルの怒りを宥(なだ)めにかかった。

（サフォーク）
「熱くなんじゃねぇよシル。逆上すると冷静な判断が出来なくなるのがお前の欠点だ。奴が何者なのかなんて野暮な事を聞きはしねぇが、奴の軍服についていた腕章を見たか？あれは共和国陸軍の佐官章だぜ。明日からなんとかって言っていただろ？ひょっとしたら奴の目的は俺達と一緒なのかも知れないぜ。」

やがてシルは、次第に薄暗い倉庫裏から姿を消していく男の後姿を見つめながら、抱いた怒りをやりどころ無くぶちまけるように大きく舌打ちをすると、

強引にサフォークの拘束を振り解いて、恨めしそうな視線をこの男にぶつけてやった。

（シルジーク）
「ちっ！！奴の話しはもう止めろ。これ以上続けたら殴るぞ。」

（サフォーク）
「お前・・・。既に殴ったろうが・・・。」

（シルジーク）
「あ～。そりゃぁ悪かったな。悪かった。悪かった。」

全く悪びれる様子もなく、不貞腐れたように言い放ったシルの後姿に、冷やかな視線を突き刺したサフォークは、殴られ損の自分の身を嘆くように両手を天に翳して溜め息を付いて見せた。

それまで彼等の頭上に立ち込めていた黒雲はいつの間にやら姿を消し、激しく光り輝いていた双星は、やがて落ち着きを取り戻したように緩やかな光を保っている。

そして、怒りによって消え去っていたはずの右足の痛みに表情を一瞬歪めると、空に浮かんだ半月の綺麗な光に身を包まれたまま、片割れが姿を消した真っ暗な闇夜をシルはじっと見つめていた。

０３－９０：★【第三話】登場人物一覧

第三話：「Ｒｏｙａｌ　Ｔｏｍｂｏｙ」

★★★新規登場人物一覧★★★

【サルムザーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍士官学校を１７歳で卒業した秀才であり、トゥアム共和国陸軍最年少佐官。
黄緑色の髪の毛と瞳が特徴的な彼は、体格的には恵まれなかったものの、その卓越した戦術眼は軍上層部内でも非常に評価が高かった。
仕官として最初に配属されたカルッツァ地方ニールベルグにおいて、帝国軍との大規模な戦闘に遭遇。
負傷した司令官の代わりに軍を指揮し、見事帝国軍を蹴散らして見せた。
普段から無気力な怠け者を装っているが、非常時にこそその真価を発揮する異端的才能の持ち主。

【カース・イン・ロック】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍作戦参謀本部出身の作戦軍曹。
厳格な性格の持ち主でる彼女は、軍規律に関しては非常に小うるさいが、逆に自身の身形は少々派手目で挑戦的。
非常に高い統率力と指揮能力を有する人物で、陸軍士官学校時代は鬼教官として恐れられた。
自分の思いに真っ直ぐで頑固な性格を持つが、心優しき二児の母でもある。

【シューマリアン・ベルナール】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍技術部所属技術三尉。
非常に温厚な性格の持ち主で、その体格が指し示す通り、何事にも動じないおっとりとした雰囲気を醸し出しているが、ＤＱ整備を主としたその技術力は、非常に優れたものを有する人物。

【ナツキ・サクラギ】
性別：女　年齢：３９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍陸等一佐。
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍の総司令官後任。

【グラフティ・チャーチル】
性別：男　年齢：４２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍陸等一佐。
トゥアム共和国陸軍機動歩兵部隊を統括する旅団長。

【ミザレス・ロック】
性別：男　年齢：死去　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国海軍海等一尉。

【アークチャン・コミューン】
性別：男　年齢：１９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍技術部所属技術曹長。
おかっぱ頭の良く似合う色男で、少し引っ込み思案な性格の持ち主。
ＤＱ整備に関する技術に止まらず、軍事兵器全般に精通した知識人であるが、自主性に欠け、臆病で周囲に流されやすい少年。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【クロフティア・ハイネセル・プレッソス】（クロフティア・レブサーマル・トロ・ストラ）
性別：女　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
第九代皇帝アヌバースの曾孫にして、第十三代皇帝代理の妻。
彼女は第十四代幼少皇帝を支える有能な指導者であり、非常に高い知性を持つ聡明な人物だが、裏では完全にストラントーゼの操り人形だったと言われている。

【ソヴェール・ランス・セルブ】
性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝。
帝国全国民から最も愛された帝国史上初の女帝であり、帝国最高評議会を設立した人物。
周辺諸国との戦火縮小や自国兵団の軍備縮小、自国内の身分格差の緩和、環境破壊問題への取り組みなど、大陸全土に蔓延る様々な問題に立ち向かった英雄。
彼女を唯一批判出来うる材料としては、完全なる立憲君主制度への移行を躊躇ってしまった事と、後継者として男子を残さず崩御したと言う事だろう。

【オットンハイマー・レブ・ロイロマール】
性別：男　年齢：５４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
南ブランドル地方からセレーヌ地方一帯を取り仕切る帝国最古の名家ロイロマール家の当主。
第十三代女帝の夫ディユリスの兄にして、帝国国民から絶大な人気を誇った偉大なる人格者であり、周辺諸国との関係強化にも積極的に取り組んだ人物。

【オーギュスト・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
メヌシア地方一帯を取り仕切るストラントーゼ家の当主。
統治領土はそれほど多くは無いが、帝国国内で最も強大な軍事力を持つ貴族であり、帝国最高評議会の圧倒的大多数を占めるストラントーゼ派の首領。
非常に好戦的な性格の持ち主であり、薄ら暗い陰謀に長けた黒い不世出の知将。

【ゼフォン・ウィリアムズ】
性別：男　年齢：４６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍の総司令官。
迫力のある眼光とスキンヘッドが特徴的だが、物静かで温和な性格の持ち主。
長きに渡りトゥアム共和国北方一帯を守ってきた守護神たる人物。
帝国より突きつけられた衝撃的事実の真意を解き明かす為、トゥアム共和国軍にその身柄を拘束される。

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のファーストアタッカーを務める元気の良い女の子。
赤く長い髪の毛が特徴的で、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。
彼女自身の告白により、第十三代皇帝ソヴェールの娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」である事が判明。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める真面目な性格の少年。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、人当たりの良い温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。
トゥアム共和国陸軍三佐サルムザークとは、何かしらの深い因縁を持つ。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のセカンドアタッカーを務める可愛らしい長身の女性。
抹茶色の癖毛が特徴的な彼女は、おしとやかでとても可愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
突然に最愛の弟であるマリオを失い、失意のどん底に喘ぎ苦しむ。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：１３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなって死亡した。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のスナイパーを務める物静かな女性。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。
彼女自身の告白により、元は反帝国テロ組織「ファルクラム」の戦闘員であった事が判明。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のＤＱ機体整備担当者を勤める明るい性格の男。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有している。
彼のお調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。

０４－０１：〇ブリーフィングルーム＃１

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「ブリーフィングルーム＃１」

＜トゥアム共和国陸軍　副都市リトバリエジ基地　ＷＢ５－０３＞

作戦名「ディップ・メイサ・クロウ」

諸君。２週間に渡る研修期間ご苦労だった。

これでようやく諸君等は一人前の共和国兵士として、第三機動歩兵部隊「ネニファイン」の一員となるわけだが、我々の部隊は陸軍主要軍団に属さない遊撃部隊に位置づけとなる。

そのため、今後諸君等には多種多様な作戦任務をこなす為の臨機応変さが必要不可欠となるが、その辺は諸君等の能力を大いに期待する事とする。

本来であればネニファイン部隊を発足させるに当たり、部隊長である「サルムザーク陸等三佐」の方から、所信表明を頂きたいところなのだが、何分、三佐は急な全体作戦会議のため、当会議は欠席せざるを得ないとの事だ。

今回我々に与えられた作戦任務の詳細内容については、三佐の代理として、私がそのまま諸君等に説明する事とする。

さて、諸君等も知っている通りＢＰ事件以来、我がトゥアム共和国

は、隣国セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との軍事的緊張が非常に高まっているが、帝国内部で大きな内戦が勃発(ぼっぱつ)したこともあり、これまで我が共和国に対する大きな動きは見られない。

我々が悠々（ゆうゆう）と2週間の研修期間を設けられたのは幸いだったが、このほど、カルッツァ西部「シュツルシルト」周辺において、帝国軍に大規模な軍事行動が確認された。

これまで、ムルア半島周辺海域においては、ムルアート諸島の民族間紛争の件もあり、共和国側は一切干渉を許されていなかったが、この海岸線一帯「デラジェラート」（海岸線に並ぶ断崖絶壁群）が、帝国軍の格好の隠れ家となっている事は確認済みである。

帝国軍のシュツルシルト基地の規模は未だに不明だが、諜報部からの報告書によると、2日ほど前から大量の軍事兵器を積載した揚陸艇(ようりくてい)が、数隻接岸したのが確認されている。

もし仮に、このシュツルシルトから共和国領土内に侵攻を開始すると仮定するならば、恐らく侵攻ルートは帝国トポリ領東部にある大渓谷群「ディップ・メイサ」を、南進してくるのではないかというのが軍上層部の見解だ。

特級河川スーノースーシ川の流線を変化させる事で形成された特異な渓谷群は、非常に高低差の激しい渓谷の集合体であり、崖上棚台はグリーンクラッド作戦による人口樹木が群生する深い森となっている。

そのため、帝国領土と共和国をつなぐ大きなメイサ渓谷のうち、舗装された「メイサ・レフト4」、「メイサ・センター」が侵攻ルートとして予測できるが、副都心「リトバリエジ」への侵攻は絶対に

阻止せねばならない。

帝国のシュツルシルト方面軍は、ストラ派の「パデ軍」であることが確認されており、その兵種は主に戦車部隊で構成されているようだが、デラジェラートに接岸した揚陸艇（ようりくてい）の積荷の正体が判明していないため、安易に対戦車戦だけを想定するにはリスクが高すぎる。

勿論、ディップ・メイサ周辺地域において、帝国軍の一番近い軍事空港が「オクラホマ軍事空港」のみであることからも、恐らくはそれほど帝国軍の航空兵器に悩まされることは無いだろうが、それでも、何の対策も無いままに悠々と戦車部隊だけで南進してくることは無いだろう。

少なくとも陸上高速機動兵器、特殊ＤＱを擁（よう）しているのではないかと想定されている。

また、昨晩、勃発（ぼっぱつ）した北ムルアート政府軍艦隊とフランコ中将軍艦隊との衝突により、現在、ムルア海峡沖は完全なブラックエリアとなっており、この海域に帝国艦隊が停留している可能性も考えられる。

もし、帝国の航空母艦がデラジェラート付近に停留していた場合、多数の艦載機の飛来が予測されるため、作戦開始１時間前から、「ブラックバード隊」と「クラリオンベイル隊」の制空戦闘機が、当海域周辺を警戒に当たる事になっている。

該当戦闘想定エリア内における制空権に関しては、さほど悲観的にならなくとも良いだろう。

帝国軍の主力部隊がどのような進路を取るかは未だ不確定要素が強く、はっきりとしたことは言えないのだが、我が軍は、第三、第五戦車部隊を比較的大き目の「メイサ・レフト４」、第一、第四戦車部隊を「メイサ・センター」の進入口付近に待機させ、帝国軍の南進行動を確認次第、これに合わせて進軍を開始する。

帝国軍の行動に対し、後手を踏む事となるが、我が国が中立国としての立場を貫き通す以上、帝国軍の領土侵犯、または領空侵犯が成立するまで、一切手出しはしない方針だ。

しかし、帝国軍の南進行動を確認してから行動を起こすとなると、一方に配備した戦車部隊の支援が遅れる可能性があり、これに対して何らかの対策を講じる必要性が出てくる。

そこで今回、我々ネニファイン部隊に与えられた任務は、帝国軍の南進行動を確認した時点で、敵主力部隊前面に急襲降下し、我が軍の主力戦車部隊が到着するまでの時間稼ぎをする事だ。

恐らく帝国軍の戦車部隊の進行速度から推測して遭遇ポイントは、リトバリエジ北土Ｎ－３ライン付近だと思われるが、戦術的要素から、「メイサ・レフト４」ならＮ－４５。「メイサ・センター」Ｎ－５８を主戦ポイントと定めることにする。

このエリアは他の場所と比べても、比較的両壁断崖が低く、南方に大きく谷幅が開けているのが特徴で、障害となるボカージュの生息も疎らなため、上空からの対地攻撃も容易に実行できるためだ。

勿論、帝国軍の主力戦車部隊は大部隊であることが予想されるため、我々の降下時刻に遅れて「エア・ビヘイブ」の対地攻撃機が支援し

てくれる事となった。

そして、後方支援部隊である「チッチル」を「メイサ・ライト2」。「リプトンサム」を「メイサ・レフト5」に配備して、両主戦場における支援砲撃を実施する。

我々の任務はあくまで、陸軍主力戦車部隊が到着するまでの時間稼ぎにあるが、決して気を抜かず、諸君等には全員無事で生還して欲しい。

では、次に我が「ネニファイン」の部隊構成を説明する。

今回の作戦は、帝国軍の前面に急襲降下し敵の足止めすることが目的であり、殲滅（せんめつ）することが目的の真意ではない。

よって、小回りが利くようDQ3機1小隊の計5小隊を編成する。

そして、今回使用するDQ機体はティーゲル社製の新鋭機種「トゥマルク」が6機と、マムナレス社製の新鋭機種「リベーダー2」が2機。主力機動兵器「アカイナン」が7機である。

機体選定は各小隊別に設定した戦術行動指標に基づいた選定となっているが、人選については研修時の個人適性値を重要視した選抜となっている。

リストに名前のある者は、当作戦会議終了後、直ちにWarrooに集合すること。

＜配布資料一部内容＞

<Nyifine order>

No. 1 Defencer front [team: frost]

- a Wayharn-karykanis (akynan)
- b Yanrao-jyuanwan (reverdor-2)
- c Janet-cryeece-hosnow (akyna-ne)

No. 2 Defencer front [team: glant]

- a Bernce-Schumacher (akynan)
- b Kalrace-dugras (reverdor-2)
- c Fan-roy (akynan-e)

No. 3 Attacker N-left meisa [team: apach]

- a Heinhertol-oriton (twmalc)
- b Senif-sonro (twmalc)
- c Ruwacy-oscafford (twmalc)

No. 4 Attacker N-right meisa [team: carion]

- a Mediace-elzac (twmalc)
- b Sodom-spirits (twmalc)
- c Mizet-parlpany (twmalc)

No. 5 Row guard [team: kirin]

- a Delpark-shank (akynan)
- b Arimia-paw-shotrin (akynan)
- c Frol-croce (akynan)

新型機トゥマルクについては、諸君等もシミュレーションボールで経験済みかと思われるが、高速機動を歌いながら、重装備志向というプレゼンで聞いたときより、矛盾した扱いにくい機体に成り下がっている。

今回、新部隊設立ということで、新型機がうちに回ってきたわけだが、はっきり言って、主戦力として機能するかどうかは未だに疑問が残る。

この機体を使用するに当たって、実験台にでもなる覚悟で搭乗してほしい。

まあ、我々が活動する時間は限られており、敵の足止めが作戦目標となるため、なるべく軽装高機動力重視で挑めば、そこそこの戦果は期待できる思っている。

もう一方の新型機リベーダー2については言うまでもなく完全高機動志向で、メインウェポンも電磁系ＡＳＲと文句なしの機体だ。

しかしながら、この標準装備の電磁系ＡＳＲに問題が見つかったために、残念ながら今回は使用することは出来ない。

アカイナンについては、アウトレンジ型ＤＱで、陸軍内でも主力機として使用される程の良機だが、改良機Ｅタイプは更に近接戦闘用に、装甲と機動性を高めた機体である。

今回所持する火器については、デフォルトの設定を基本とするが、バックアップ担当者と相談の上、部隊運営に支障をきたさなければ、各チーム小隊長の承認を持って許可する。

ただし、各小隊共に合計５００ポイントを超えない程度で選定するように。

火器設定変更後は、必ず再シミュレーションを実施することを義務付ける。

作戦行動中の各小隊フォーメーションについては、小隊長に一任するが、どの隊もＦ２Ｂ１Ｖフォーメーションが取れる編成で望むこと。

それと、今回編成した部隊の内、第五小隊のみ陸軍戦車部隊の先導護衛任務付きとなる。

第一から第四小隊については、ネニファイン部隊司令部指揮の元、作戦を遂行することになるのだが、第五小隊に限っては解除宣告されるまで、陸軍戦車部隊配下で任務を遂行してもらうことになる。

作戦終了後は各小隊毎に散開、隠蔽行動をとりながら、指定したランデブーポイントα、β、γの何れかまで辿り着くように。

作戦任務に関しては以上だ。

０４－０２：〇ディップ・メイサ・クロー［１］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「ディップ・メイサ・クロー」

純白に染まった巨大な靄（もや）を噴出するどす黒い雲海の上、鋭いかまいたちが鋼鉄の身を切り刻むように甲高い悲鳴を上げる。

彼等に降り注ぐ暖かな昼下がりの日差しは、普段のそれとは違いどこか強く色濃い剥き出しの刃（やいば）の様でもあった。

「こちらラブ１。Ｎ２３方面現在敵影未確認。向こう５０ｋｍｉｌｓ５分間はクリア。」

「こちらラブ３。Ｎ１４方面現在敵影未確認。こちらも向こう５０ｋｍｉｌｓ５分間はクリア。」

「こちらラブ４。間も無くＮ－４５ポイントに到達。ネニファイン輸送部隊護衛任務終了と共に、ミファラル隊は高度１２０００まで散開上昇。現巡回機の援護へと回る。」

「こちらファントム。後方支援部隊リプトンサムの降下支援砲撃と共に降下作戦を開始する。降下作戦終了までの所要時間は５分目処。」

「了解。」

トゥアム共和国空軍主力戦闘機「ＦＸ－７８ベルゲン」を先頭とするリクロス編隊で、只管（ひたすら）北方へと突き進む６機の機影。

彼等が飛行する高度から更に上空には、何一つ視界をさえぎることのない、澄み渡った青空が広がっていたが、逆に彼等の足元には、練り動く巨大な雲海が横たわっていた。

本来であれば、彼等の眼下には大地を爪で引っ掻いた傷のような、深く切れ込んだメイサ渓谷群が広がっているはずなのだが、びっしりと大地を覆い尽くした雷雲によって、地表付近の様子を伺い知る事は全く出来ない状況だ。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国戦車部隊が「メイサ・レフト４」に沿って南進を開始したとの確認報告から約１時間。

帝国軍の主力部隊前面に先行して降下する事になっていたネニファイン部隊の面々達は、隊列中心部で併走する２機の大型機「ＦＣ－２０２セルベーン」の機内に居た。

「リプトンサムの降下支援砲撃準備完了。ファントム。メリアドール搭乗各機パイロットへ。降下作戦開始まで００１０。雲海中のフィールド濃度は極めて高い。作戦行動中は司令部との通信回線が維持出来ない可能性もあるため、各小隊長指示の元、冷静に作戦任務を遂行すること。」

「降下グライダ装着確認。フロア隊降下準備完了。」

「グラント隊降下準備完了・・・・・・・・・。」

真っ暗な闇の中に木霊する静かな鼓動が、耳元に届けられる無線連絡の音声より、大きく聞こえてしまうのは何故だろう・・・。

降下作戦を目の前に控え、狭いコクピット内に閉じ込められていた少女が一人、どこかえもいわれぬ緊張に包まれた空気に晒され、身が切り刻まれるような時間を、じっと耐え忍んでいた。

こんなの、いつも見慣れている風景・・・。いつも感じてる感覚・・・。

そう、ＤＱＡ大会の戦闘開始を待つ時の緊張感と何も変わらない。何も変わらないはずなのに・・・。

ゆっくりと気持ちを落ち着かせるように深呼吸をして見せ、穂のかに震えた右手でモニターの主電源を入れる。

そして、機体制御システムを降下モードに切り替えると、いつも通りの手順で機体状況の最終確認作業へと移行した。

（ハインハートル）
「セニフ。解っていると思うが、フォーメーションは常に俺、セニフ、ルワシーの順だ。メイサ上に降下したら直ぐにグライダーを除装。即座に周囲のフィールド濃度に合わせて、サーチシステムを調整展開しろ。」

（セニフ）
「り・・・了解。」

（ルワシー）
「なんでぇ。ビビリ入っちまってんのか？いつも通りと同じにやってりゃ、死ぬこともすくねぇ作戦だろうがよ。」

（セニフ）
「わ・・・解ってるよ。うるさいな・・・デブ！」

セニフは、通信機を通して「からかい」の言葉を投げかけてきた一人の男に対して、眉間にしわを寄せながら単純な悪口を吐き捨てた。

この男性はネニファイン部隊研修期間中、ずっとセニフと同じチームに編成されていたメンバーで、名前は「ルワシー・オスカフォード」と言う。

よく鍛えた鋼のような筋肉を有しながらも、肥えて太った大きな腹が特徴的で、頭に被ったヘルメットに隠れて見ることは出来ないが、彼のヘアースタイルは「モヒカン」である。

その体躯が示す通りの大雑把な性格であり、常日頃からセニフをからかって面白がっているような奴だ。

そして、ルワシーとは正反対に長髪で細身なもう一方の男性が、今回、彼等二人を統率するアパッチ隊小隊長「ハインハートル・オリトン」だ。

彼は、元々トゥアム共和国陸軍所属のＤＱパイロットで、セニフもつい2日前に初めて顔を会わせたばかりなのだが、真面目そうな見た目とは裏腹に、結構社交的で気さくな感じのする男性である。

（ルワシー）
「なぁんだ?てめぇ。いつもの勢いがねぇじゃねぇか。本当にだいじょぶか?まあ、てめぇみてぇな餓鬼にゃ無理はさせんから安心しな。それとも一人ファントムに残ってお留守番でもしとっか?」

（セニフ）
「・・・。う・・・うるさいんだよデブルワシー！ほ・・・ほっといてよ！」

（ハインハートル）
「おいおい。お前等。作戦前に喧嘩なんかしてる場合じゃないだろう。降下準備は完了したんだろうな。ＯＫシグナル出すぞ。」

ルワシーの執拗（しつよう）な「口撃」に対し、苛立（いらだ）ちを抑え切れないセニフが、各小隊専用回線チャネルを怒鳴りつけたのだが、それでも何か心の奥底に引っかかって取れない妙な恐怖心のようなものに、彼女は取り憑（つ）かれたままだった。

確かにルワシーは口が悪く、相手の気持ちを逆撫（さかな）でするような言葉を平気で投げつけたりもするが、彼がそれほど悪い人間ではない。

彼もどこかいつもと様子の違ったセニフの態度が、少し気になったのだろう。

何で・・・？いつもと何も変わんないじゃん。私はいつも通りだよ。うん・・・。

モニターのセッティングと、降下モードの切り替えは終了したし、火器システムも、サーチシステムも問題なしと・・・。

グライダーは装着完了・・・。大丈夫・・・。大丈夫。うん。

・・・って。そう言えばいつも、こんな事すら考えないでやってたっけか・・・。

やっぱりどこか緊張してるのかな私・・・。何かやっぱり、怖いのかな・・・。

うわ、グローブの中すごい汗・・・。気持ち悪っ・・・。

普段の彼女であれば、3分もあれば完了出来そうな作業を、態々（わざわざ）3回も繰り返してしまったセニフは、どこか1日分の研修を終えた時のような疲れきった表情のまま、ベトベトに汗ばんだグローブを取り去った。

考えないようにしようと考える程に、目に見えない真っ黒な渦の回転が次第に強くなり、負のスパイラルに取り憑（つ）かれた心の不安が大きく募（つの）るばかり。

否応（いやおう）なしに開始される降下作戦が迫る中で、セニフは思い切って、全く別の事を思い浮かべて気持ちを紛らわそうと目を瞑った。

楽しかった事や嬉しかった事なんか丁度いいかも。

楽しかった事・・・。楽しかった事か・・・。

嬉しかった事・・・。嬉しかった事か・・・。

（セニフ）

「昨日・・・。久しぶりに顔見たのに・・・。全然久しぶりって感じ・・・。しなかったな・・・。」

ほんの少しの間を置いて、目を開けてしまったセニフは、どこか悲

しげな表情を浮かべてそう呟いた。

楽しかった事。嬉しかった事を思い起こして、セニフが唯一思い出せる事とは、あのチームＴｏｍｂｏｙで皆と楽しく暮らした２年間の暮らし。

それは決して取り戻す事が出来ないものなのだとして、必死に自分の心の中に押し込めようと努力していた過去だ。

しかし、それほどまでに彼女に安らぎを与えた「瞬間」と言うものを、簡単に忘れ去ることが出来るかと言えば決してそうではない。

ちょっとした何かの弾みで、直ぐにでも昨日の事のように思い出せてしまう、色濃き過去の思い出なのだ。

２週間にも及ぶ研修期間の間、研修チームが別々だった上に、かなりの忙しさに追われていた事もあり、彼女の心の中では少し自分からは見えない片隅に仕舞い込むことが出来ていたその記憶。

昨日のブリーフィングルームで久しぶりに顔を合わせる事となてしまった、アリミアとジャネットの姿に、その記憶はいとも簡単に引き出されることとなってしまった。

なんとなく。ただなんとなく気になって。アリミアの方にちらりと視線を向ける。

すると向こうは、もうすでにこちらを見つめていた。

そして彼女はにっこりとセニフに微笑むのだが、セニフは即座にハ

ッと目線をそらし、手元の資料に顔を埋めてしまった。

そして、顔を埋めた資料の上から、今度はジャネットの方を覗いてみる。

彼女はブスッとした表情のまま資料に目を通していた。

更にまじまじと覗き込んでいると、彼女の方がこちらに気づいた。

う・・・。

でも、セニフが目線を逸らす前に、すぐに視線を外されてしまった。

（セニフ）

「ちょっとでも・・・。・・・・・・・・ううん。・・・・・・・・・・・・・・・絶対に嫌！」

しかし、そんな甘く切ない楽しい思い出すら、一瞬にして真っ黒な闇の底へと吸い込んでしまう「あの部屋」での出来事。

セニフはあの部屋での一件以来、完全に自分自身の居場所を失ってしまったのだ。

それは、彼女にとって物理的な居場所の事ではなく、いわば精神的安心感を得られる心の拠り所の事。

確かにセニフ自身、新しき組織の中で、新しい仲間達との関係を築いていく事が、それほど難しいことなのかと言えばそうでもない。

しかし、もはや生き返る事のない魅惑の世界は、彼女の心の中に永

遠に残る刻印として、深く焼き付けられてしまっている以上、簡単にそれに替わるものが作り上げられるはずもない。

たった一日。たった一日で、全てが失われてしまった彼女の心の拠り所。

そして、それを破壊するスイッチを、いとも簡単に押してしまった紅毛の女性の顔を思い浮かべ、セニフは抱えた頭を大きく左右に振ってしまうのだ。

体が求めては心が拒絶し、心が求めては体が拒絶する。

そして、その大きく穴の空いた心の虚無感を必死に塞(ふさ)ぐ為に、彼女は行き先の見えない安らぎを求めて彷徨(さまよ)い続けるのだ。

その穴を塞ぐもの。その穴を埋めるもの。それが一体何であるのか。

彼女はそれを知ってはいたが、それには気づかなかったのである。

04－03：〇ディップ・メイサ・クロー［2］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「ディップ・メイサ・クロー」

（サルムザーク）
「あーあー。新設部隊のネニファイン所属のパイロット諸君。作戦開始直前にどうも初めまして。私がネニファイン部隊隊長のサルムザーク陸等三佐だ。」

「ディップ・メイサ・クロー作戦」開始まで、残り5分を切った頃であろうか、ネニファイン部隊を輸送する大型輸送機「ファントム」と「メリアドール」の艦内に、突然、一人の若い男の声が響き渡った。

作戦開始直前だったこともあり、艦内の作業員やＤＱパイロット達は、忙(せわ)しく準備作業に追われていたのだが、彼等としても「初めて」耳にする部隊長の声に、少し驚いたような表情で手を止めて、この流れ来る声に聞き入ってしまった。

それもそのはず、彼等ネニファイン部隊のメンバー達は、部隊発足から2週間が経とうと言うのに、未だ自分達を統率すべき、この「若い士官」の姿を見た者はいなかったのだ。

部隊研修中の指導や詳細報告、作戦会議など、彼等に対して指示を出していたのは、全てカース作戦軍曹であり、部隊内のメンバー達の間では、ほとんど噂だけの存在になりかけていた人物だったのだ。

そんな彼が、今更ながらに姿を現した理由とは、ディップ・メイサ・

クロー作戦を開始するに当たり、部隊メンバー達の士気を高めるための大演説でもぶちかますつもりなのだろうか・・・。

誰しもがそう「ありきたりな」予想を思い描いたであろうが、そんな彼等の思いを一掃するように、彼は淡々と言葉を続けた。

（サルムザーク）

「本来であればもう少し早く諸君等の前に姿を現すべきだったのだが、カース作戦軍曹が余りにも優秀すぎた為に、私の出る幕は全く無かったのだ。・・・という事にしておいてくれ。今回の作戦任務についても、散々カースから聞かされたであろうから、改めてもう一度説明するような野暮な事はしない。所詮、一握りの俗物高官達が熱弁を振るった上で民衆を扇動し、自分達の手を汚すことなく、自らの野望と理想を達成しよう等と言う、汚物まみれの争いなど、正義でもなんでもない。そんな腐りきった醜い殺し合いを前にして、諸君等の士気を煽り立てるために、いくら鎮撫な演説を披露したところで、何の意味も無いだろう。もっとも、高い志も強い愛国心も持ち合わせていない諸君等には、何を言ったところで効果が薄いことは目に見えているがな。」

（カース）

「さ・・・！三佐！！」

突然、何を言い出すのだとばかりに、驚いた様な表情で声を張り上げてしまったのはカース作戦軍曹である。

実のところ、ネニファイン部隊の初陣に際し、部隊長として、兵士達に何か一言言葉をかけて欲しいと頼んだのはカース本人である。

しかし、彼女もまさかサルムが突然こんな演説を、ぶちまけ始める

とは思ってもいなかったのだろう。

全艦内放送に切り替わっている事も忘れ、マイクの後ろからサルムを必死に止めようとする彼女の声が流れ響いてしまった。

（サルムザーク）

「言うなれば、諸君等は共和国政府ならびに、私も含む軍上層部に、いいように使われるためだけに集められた捨て駒のような存在だ。諸君等の中にはトゥアム共和国軍の正規軍人もいるが、決して自分達の身を削る事もしない低俗な人間共に操られ、望みもしない過酷な死地へと放り込まれる運命なのだ。」

（カース）

「駄目です！！やめてください！！三佐！！」

もはや彼の放つその言葉は、これから命を賭して戦う戦士達に投げかけるような言葉でも、部隊長として部下達に投げかけるような言葉でもなく、単に彼等の神経を逆なでするような暴言に他ならない。

部隊を統率する立場の人間として、少しは部下達の事を慮(おもんばか)った、有益な言葉を投げかけようとは思わなかったのだろうか・・・。

ざわざわと異様な気配に包まれ始めた輸送機艦内において、恐らく彼の部下達は、呆気(あっけ)に取られた表情で、この彼の演説を聞いていたに違いない。

一体、彼は何がしたいのであろうか。

（サルムザーク）

「諸君等は、そんな奴等の腐った思想の為に、必死な思いで戦場を

駆けずり回る覚悟は出来たのか？それとも、そんな覚悟すら無く、生死を賭した戦場へと身を投じようというのか？悪戯な虚言に導かれて、偶像たる信念を胸に、必死に生きようとする思いを決して否定する気もないが、腐りきった正義で人々の心を煽り立てるだけの奴等の為に、諸君等が無為に命を投げ出すことは無い。そこには、彼等・・・。」

（カース）
「三佐！！時間です！！時間！！」

彼女にはもう、それ以外の方法で彼を止めることは出来なかったのだろう。

どうにか彼を止めたい一心で放った彼女の言葉が「時間です」。

研修中においても一際厳しさの目立った「鬼軍曹」が、ネニファイン部隊メンバー全員が聞く艦内放送の中で、まるで夫婦漫才のようなやり取りを披露してしまったのだ。

これには、ＤＱパイロット、通信オペレーター共々、ほぼ全員が爆笑してしまったに違いない。

そして、ようやくカースの抑止に従うように、しぶしぶと小さく舌打ちをかましたサルムは、仕方無さそうに最後に言いたかった本音の部分を吐き出した。

（サルムザーク）
「かくいう私もそんな俗物高官の一員だ。己の思いを馳せる為に、自らの地位と名誉を求めて、諸君等を利用せんとする悲しき亡者の一人だ。しかしそれは、諸君等とて同じこと。この私を利用できる

者は好きなだけ利用するがいい。トゥアム共和国軍兵士である前に、一人の人間として。諸君等が抱く思いを叶える為に、自分が欲するものを手に入れるために、必死になって戦え。勿論、そのための環境は出来るだけ整えてやる。以上だ。」

はっきりとした口調で。心に一点の曇りも無く言い切った彼の演説は、勿論、人によっては好き嫌い意見が分かれてしまうだろうが、それでも、ここまではっきりと言い切られた方が、かえって気が楽なものである。

自らの野望を叶える為に、ていのいい正義感溢れた言い訳に包まれた思想を、与えられた権力という威光に任せて強要するような腐った輩達とは違い、彼はたった一人の人間としての考え方を、堂々と示して見せたのだ。

軍隊における上司と部下という立場の違いはあれども、自分が求めるもののために、必死に生きていかねばならない立場にあるという点においては、彼等の間に何ら少しも違いは無い。

どんなに高等な身分のものであっても、どんなに低俗な人間であっても、抱く願いに重さは無いのだ。

彼等は皆、戦争と言う政治的交渉の末期的状況に立たされ、命を賭して戦わなければならないという悲しき運命を背負わされた兵士達。

たとえお互いに目指すものが違うのだとしても、共に手を取り合って協力し合わなければならない、密接に絡み合った利害関係者なのだ。

媚びることも無く、諂う事もしない強気な態度の部隊長だが、その

彼の示した真意に対して、激しい不快感を表したものは誰一人としていなかった。

（バーンス）
「こんな馬鹿とは思っていなかったが、息がしやすくいて良いよな。」

（ルワシー）
「そりゃぁ。威張り倒すだけのあのババァよりゃマシだろ。」

（メディアス）
「あんたら二人。呑気（のんき）なもんだね。結局私等の首根っこ捕まえてるのはあの子だよ。まぁ嫌いじゃないんだけどさ。ああいう子。」

（ミゼット）
「要は自分のやりたい様にやれって事だろ？言われなくたってそのつもりさ。」

もし、サルムのこの行動に対して、激しい不快感を示す者がいるとすれば、それは、司令室内で厳しい形相のまま冷たい視線を部隊長に突き刺している、カース作戦軍曹ぐらいであろう。

全く悪びれた様子も無く部隊長席へと腰を掛け、両足を投げ出すようにだらしなく寝そべった上司の姿に、彼女はプルプルと右手を震わせながら、必死に込み上げる怒りに耐えていた。

本来であれば、即座に思いっきり彼を怒鳴りつけたところなのだが、先ほど彼女が述べた通り、もはやそんな時間は少しも残されていなかったのだ。

「ディップ・メイサ・クロー作戦」発動まであと少し・・・。

（チャンペル）
「リプトンサム部隊からの降下支援砲撃を確認。予定飛行ルート上に着弾するまでの予測時間は１０秒。」

（カース）
「ファントム！メリアドール！各機共に降下ゲートオープン！これよりディップ・メイサ・クロウ作戦を開始する！各部隊パイロットは直ちに降下作戦を開始せよ！」

未だ冷めやらぬ怒気をそのままに、大声を張り上げたカースの指示と共に、遂にトゥアム共和国とセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との、過酷な戦いの火蓋が切って落とされた。

不意に騒然とした空気が漂い始めた輸送機内では、慌しく作業員達が走り回り、逐一（ちくいち）送られてくる通信オペレーター達の戦況報告が乱れ飛ぶ。

そして、ゆっくりと大きなメインハッチを開き始めた輸送機格納庫内に、激しい乱気流の渦が舞い込んできた。

（メディアス）
「キャリオン降下開始。」

（バーンス）
「グラント降下する。続けよ。」

真っ白な霧の世界に包まれた外界から差し込んだ強い光に晒されて、思わず目を逸らしそうになる眩さに耐えながらも、

セニフは即座に装着したグライダーと降下モードに切り替えた制御システムの展開を始めた。

研修中に何度と無くこなしてきた降下作業とはいえ、いくらやっても降下時直前の緊張度が弱まることは無い。

セニフは後方カメラに映し出された４機のＤＱの姿をじっと見つめながら、何(いず)れは彼女の元へと訪れてしまう「気持ち悪い瞬間」を前に、高鳴る鼓動を抑えきれなかった。

この降下グライダーは、単に強烈なバーニヤ噴射が可能だと言うだけの代物であり、地表付近に近づくと、一気に逆噴射によって降下速度を落とす仕組みのものである。

この降下グライダーを使用した高高度降下は、ＤＱの重心位置を制御するセンターボールが開発されるまでは、実用化さえされなかった危険な手法であり、幾ら科学の進歩によりその安全性が飛躍的に高まったからとはいえ、元々空を飛ぶように設計されていない鉄の塊に乗って、大空の彼方へとその身を放り出されるのである。

全く少しも恐怖感を感じない人間など、いやしないであろう。

（ハインハートル）
「アパッチ隊降下開始。セニフ。ルワシー。行くぞ。」

（セニフ）
「り・・・りょう・・・かい。」

やがて、ゆっくりと鈍い音を立てて固定アームが解除されると、射

出レールに沿って先頭のＤＱから順番に格納庫を滑り始める。

アパッチ隊小隊長のハインの合図に、なんとも情けない返事を返してしまったセニフは、ギュッと操縦桿を強く握り締めると、全身を強張らせたまま次なる瞬間をじっと待つ。

そして、短いようで長いその恐怖の時間帯が過ぎ去ると、格納庫の外へと放り出された鉄の塊の中で、体の底から内臓をら持ち上げられるような不快感に襲われたまま、一気に地表目掛けてまっ逆さまに突き落ちていくのだ。

（ワイハーン）
「ジャネット!!何してる!!タイムオーバーだぞ!!早く出せ!!」

（ジャネット）
「・・・。」

と、それまで、途切れることなく順番に降下していったネニファイン部隊だが、あと2機を残した時点で、何故か輸送機からの機体射出が止まってしまった。

大型輸送機メリアドールの格納庫内部に居座ったまま、小隊長の怒声にすら何の反応も見せずに、悠々と軍規違反であるコクピット内での喫煙を嗜(たしな)む女性が一人。

これから始まる戦闘への高揚感を押さえつけるためなのかどうかは解らないが、厚く塗られた真っ赤な口紅の上からタバコを銜えた彼女は、両目を瞑ったままゆっくりと煙を吸い込んだ。

（ワイハーン）
「ジャネット！！」

（ジャネット）
「聞こえてるよ。」

再びぶつけられた小隊長の怒声に合わせて、苛立(いらだ)ったような返事を返した彼女は、大量の煙を吹き散らしながら、右手操縦桿の脇に備え付けた小さな真空灰皿の中にタバコを放り投げる。

そして、どこか遠くを見つめるような目線のまま、ようやく制御システムを展開して固定アームの解除を促した。

見開いた瞳の奥に真っ黒な炎を宿したままに、彼女が小さく呟く。

（ジャネット）
「要は帝国の連中を皆殺しにすれば良いんでしょ。簡単じゃないの。」

04－04：〇ディップ・メイサ・クロー［3］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ４「ディップ・メイサ・クロー」

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国トポリ領東部に開ける大渓谷群「ディップ・メイサ」。

それは遥か昔にムルア岬方面へと流れていた特級河川「スーノースーシ川」を、中流より何回かに分けて「スタルアントリオン」方面へと捻じ曲げる過程で出来た、いわば人為的創造物である。

当時、シュツルシルト一帯を支配していたムルアート王国が、国家の一大プロジェクトとして実施したその転流工事は、驚異的な水量を誇るこの大河をうまくコントロールすることが出来ず、大規模な洪水を引き起こしてしまったのだ。

逃げ場を失ったその大量の水達は、荒れ果てた「ディップ大地」を激しく侵食し、カルッツァ地方へとたどり着いた頃には、大量の土砂を含んだ「陸の津波」となって、沿岸地域一帯に壊滅的打撃を与える悲劇を生み出してしまった。

現在ではトゥアム共和国リトバリエジ近郊を基点として二股に分かれ、ムルア岬とスタルアントリオン東部へと静かに流れ着く特級河川となっているものの、その間に挟まれたディップ大地には、今でもその水流が辿って出来た大きな傷跡が残され、巨大な爪で大地を引っ掻いたような地形から、「ディップ・メイサ・クロー」と呼ばれるようになったのだ。

このディップ・メイサは、元々保水力に乏しい地質上、草木の根付き辛い大地であり、赤茶色に日焼けした荒野が広がるイメージが強いかもしれないが、２０年ほど前に実施された「グリーンクラッド作戦」により、今や大量の人工樹木達が鬱蒼（うっそう）と生い茂る、緑の大地へと姿を変貌させていた。

「未確認飛行物６機が頭上を通過。トゥアム共和国軍の空挺部隊と思われます。４：００方面からの弾幕依然切れません。」

（エムレ）

「総員戦闘レベル１種体勢を維持。突撃装甲戦車部隊はメイサ断崖の側面を進行しつつ、各々の対面する渓谷上部に意識を集中しろ。雲下は我々の対空射程に収まる距離だ。敵戦闘機の急降下攻撃に注意しつつ、慎重に行軍を続けろ。」

「少佐！左右前方メイサ上に降下する敵影確認。対空射撃間に合いません！」

ディップ・メイサ渓谷内を四列で行進する大戦車部隊の後方で、大型トレーラーのコンテナ部分に設置された移動式司令室内で、腕組みをしたまま座る小柄な男が、何やら考え込むように難しい表情を浮かべていた。

彼が今回の帝国軍南進作戦で先陣を切る戦車部隊の指揮官「エムレ・コラーデ少佐」である。

彼は元々身分の位が低い家柄の出身者であったが、帝国軍に一兵卒で入隊してから今日までの約２０年間、常に周辺地域で勃発する戦場に身を投じることで、多大な功績を挙げてきた有能な人物だ。

小柄な体つきに似合わない大きな地声と、はっきりとした意思表示。

捻じ曲がった考え方を非常に嫌い、意見が合わない時は、例え相手が軍高官達だったとしても、怯むことなく立ち向かう気概を有している。

彼にはそれほど大きな戦闘を経験してきた経緯があるわけではないのだが、それでも参加した戦闘では常に先発隊に名を連ね、帝国軍内部でも非常に重宝がられる存在まで上り詰めた人物だ。

そんな帝国軍きっての「切り込み隊長」が、耳の上へと挟んでおいたペンを勢いよく弾き取ると、ペン先を横に座る部下に差し向けて質問を投げかけた。

（エムレ）
「アンダーソン軍曹。敵はかかったと思うかね。」

（アンダーソン）
「そうですね。我々南進部隊を迎え撃つには格好のエリアですが、それにしては敵の対抗勢力数が少なすぎます。迂闊にそれとは判断しない方がよろしいでしょう。もう少し様子を見られてはいかがですか？」

何気無い返答の文中に、複雑な思いの内を多数に織り込ませ、冷静に戦況を分析して見せたこの男は、エムレの部下たる作戦参謀であり、名前を「アンダーソン・フェレクス」という。

面長の顔に濃い髭を携え、ぐりぐりの天然パーマが特徴のこの中年男性は、豪胆にも感情を表に吐き散らす上官とは真逆の性格をしており、気品すら感じられるその落ち着きぶりから、逆に彼のほうが

上官なのではないかと疑わせるほどの風格を持ち合わせていた。

（アンダーソン）

「メイサ上右翼に展開した共和国軍のＤＱ隊はサフラン大尉に一任し、我々は一気に戦線を突破してみせる空気を匂わせた方が良いでしょう。左翼側は谷底との高低差もありますし、このまま進めば谷幅が開けます。しばらく放置しても何ら問題は無いと考えます。」

（エムレ）

「ふむ。」

遥か南方から投じられた中距離支援煙幕弾が、ゆっくりと前進する戦車部隊の前面一帯に真っ白な白煙を吹き上げる中、その煙に紛れて降下してきたトゥアム共和国軍のＤＱ部隊は全部で１２機。

大量の戦車部隊を要した帝国軍南進部隊にとって見れば大いに役不足な感は否めないが、それでもエムレは慎重に部隊を展開することを決断するのだ。

（エムレ）

「輸送車両は一時後退し、グアル部隊を降車させろ。広域エリア突入はグアル部隊に先陣を切らせる。突撃戦車部隊は早急に砲撃ラインを形成し、グアル部隊の突入を支援しろ。」

ディップ・メイサ渓谷の最左翼であるメイサ・レフト４を南進する戦車部隊の構成は、上空からざっと確認しただけでも２００輌近い車両で構成されている。

メイサ崖付近をなぞるように進軍する突撃戦車が５４輌。前面に横並びで展開する中重戦車が３６輌。それに続く中距離砲撃装甲車両

が１８輌。中距離支援車両が４２輌。地対空車両２４輌。そして、後方に列を成す４台の大型トレーラーは、１台辺りＤＱ３機は搭載が可能であるであろうサイズを誇っており、少なく見積もっても１０機前後のＤＱを保有しているであろうことが予想される。

狭いメイサ渓谷内を侵攻する部隊構成としては、少しやりすぎなぐらいの部隊構成ではあるのだが、それでもトゥアム共和国の都市まで一気に制圧してしまう事を目論んでいるのであれば、逆に少なすぎる感じも否めない。

そして、もっともその帝国軍南進部隊が不自然さを醸し出している点と言えば、彼等の周囲に航空部隊の存在が全く確認できないということであろう。

それは、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国軍、トゥアム共和国軍双方の激しい鍔迫り合いが生み出した現象なのであろうが、未だ多くの者達がその事実の本質に気づくことは無かった。

０４－０５：〇ディップ・メイサ・クロー［４］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「ディップ・メイサ・クロー」

真っ白な霧に包まれた幻想的の世界の中で、物凄いスピードで風を切り裂く音だけが、彼女の元へと届けられる。

完全に外界との接触を断ち切ったコクピット内部では、自由落下が作り出す一時的無重力状態に煽（あお）られた赤い髪の毛が、ゆったりと彼女の目の前で綺麗な舞を披露していた。

そしてやがて、ＴＲＰスクリーン一面を覆い尽くしていた白い靄（もや）が、一瞬にして晴れ渡ると、彼女の目の前に新緑の絨毯（じゅうたん）が広がる新世界が姿を現した。

が、しかし・・・。次第にその落下速度を増していく機体の中にあり、見晴らしの良い綺麗な世界を全く堪能する暇も与えられなかった彼女は、すぐさま地上から立ち上った真っ白な噴煙の中へと消え去る事となる。

そして、再び前も後ろも、右も左も解らない状況下で、地表付近が迫り来る事を知らせる高度計だけが、猛り狂ったように数値を滑り落としていくのだ。

（セニフ）
「そろそろ・・・く・・・ぅ！！」

降下用グライダーは降下システムによって適時動作するよう、完全

に自動化されているため、パイロット自身の操作ミスによる、墜落事故などが発生するようなことは無い。

しかしそれは、一瞬とは言え強烈な逆噴射を伴って降下速度を落とす装置のため、パイロットは不意に襲い掛かる激しいGに耐えなければならないのだ。

手元でカウントダウンを始めたシグナルを横目で気にしながらも、セニフはどこか、階段を上っている時に「有るはずも無い最後の一段」を空踏みしたような、感覚と現実のギャップに悶えながら、ついには、猛烈な爆音と共に襲い掛かる衝撃に押し潰された。

グヴァァァァ！！

DQの背中に背負わされたグライダー装置を下に向け、巨大な人工樹木達の枝葉を突き破るようにして、地表付近へと舞い降りた鋼鉄の戦士達は、やがて完全に落下速度が打ち消されると、ゆっくりとホバー静止状態のまま両足で大地を踏みしめた。

（バーンス）
「グラント隊降・・・完了。・・・ラス。ロイ。・・・が切れる前に・・・ザザッ・・・ダイブするぞ。」

（カルラス）
「・・・解。」

（ハインハートル）
「アパッチ降下完了。即座にグライダーを除装し、サーチャーで周囲を索敵を開始しろ。セニフは２：００方向、ルワシーは１０：００方向だ。」

厳しい訓練の甲斐もあってか、流れるように手際の良い、降下作業を見せたネニファインメンバー達は、背負ったグライダーを即座に除装すると、一斉に周辺状況を確認するためにサーチシステムを起動し始める。

彼等が降下した地点周域は、巨大な人工樹木が織り成す深い森のど真ん中であり、真昼間ながら天候が悪いこともあって、どこか少し薄暗いじめじめとした雰囲気の樹海内であった。

巨大な人型兵器ＤＱに搭乗しているにも関わらず、大きく見上げなければならないほどに成長した人工樹木達が取り囲む世界は、意外にも地形的にそれほど凹凸が激しいわけでもなく、樹木達の根が邪魔する以外には、比較的行動しやすい地形のようだ。

（ワイハーン）
「ザザ・・・。・・・・・・・戦・・・・。ズザッ・・・・。」

（ルワシー）
「なんだぁ。視界がわりぃだけじゃねぇな。かなりフィールド濃度が濃いぜここぁ。一体どうやって戦闘しろっつんだ？」

先ほどから断続的に繰り返されていた支援砲撃の白煙が、静かな空気の流れに乗ってゆっくりとズレ動いていく様を見つめながら、余りの通信状況の悪さにボヤキを入れたルワシーは、更にサーチシステムの感度を調整してみるのだが、これもまた頗(すこぶ)る反応が鈍い。

どうやら風の流れの弱いディップ・メイサ崖上には、大量の阻害粒子が滞留しているようで、最新鋭のサーチシステムを持ってしても、少し離れた地点へと降下した味方部隊の反応すら、覚束(おぼつか)ない点滅を

繰り返しているだけだった。

（セニフ）
「・・・つっ・・・。・・・いてて・・・。」

周囲の部隊メンバー達が、さっさと戦闘準備を整え始めている最中にありながらも、セニフは一人だけ、未だにグライダー除装すら終えていない有様だった。

ふわふわとした気持ち悪い感覚のまま着地体勢を迎えたセニフは、ホバー状態から機体を立て直す作業時に少しバランスを崩してしまい、情けなくも近くに聳え立った巨大な木の幹へと機体を衝突させてしまっていたのだ。

セニフは研修訓練の時にも、余り降下作業は得意な方では無かったのだが、それでも今の彼女には、決して及第点など与えられるはずも無い。

（セニフ）
「う・・・。グ・・・グライダーが外れないよぉ・・・。」

（ルワシー）
「馬鹿やってんじゃねぇ!!セニフ!!動けんなら木に引っ掛けてでも無理やり外せ!!」

しかも、セニフが幾らグライダーを除装するコマンドを打ち込もうとも、一向に背中に取り付けられたストッパーが外れる気配は無く、もうすでに役目を終えたはずの降下システムが、図々しくも機能エラーのシグナルを返すばかりであった。

恐らくは先ほどの衝突によって、何かしら機体のトラブルが発生したのだろうと考えられるが、勿論、巨大な降下グライダーを背負ったまま戦闘に突入できるはずも無く、セニフはヘッドホンから聞こえて来るルワシーの怒声にも気がつかない様子で、執拗(しつよう)に除装コマンドを連打していた。

何で・・・？なんかおかしいよ・・・。何で外れないの？？

何でこんなにいつも通りじゃないの？？

グライダーつけたまま戦闘しろっていうの？

無理だよそんなの・・・。外れてよ・・・。お願いだから外れて・・・。

焦れば焦るほどにうまくいかず、慌てれば慌てるほどに目指す目的地からは遠く離れてしまう。

少しばかりいつもとは違った気持ちで迎えた初陣に、追い討ちをかけるかのような陰湿な出来事が、彼女の思考から冷静さを奪い取っていく。

そして、パイロットスーツの中に篭(こも)った気持ちの悪い汗の雫が、セニフの背筋にゾクゾクとした悪寒を与え始めた時、突然ヘッドホンを通してアパッチ隊隊長のハインの怒鳴り声が鳴り響いた。

（ハインハートル）

「動くなセニフ！！」

ドゴン！ドゴン！ドゴン！ドゴン！ドゴン！

（セニフ）
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

悪い夢から一瞬に目を覚ました時のような驚きを持ってして、現実世界で彼女を襲った猛烈な爆風の嵐に、セニフは甲高い叫び声を挙げてしまった。

そして、その後も断続的に続けられたその爆風は、薄暗い樹海内に激しい閃光と爆音を撒き散らし、彼女に周囲の状況を確認する暇さえ与えてはくれない。

一体、どちらが夢で、どちらが現実なのだろうか。

いや、どちらがどちらであったとしても、

それは変わりなく最悪の事象だったのかもしれない。

「・・・がやられた！！」

「・・・ザザザァーー・・・。」

「・・・害状況・・・メイサ上に・・・・。」

「・・・事か！？・・・・にこれじ・・・・。」

（ホアン）
「バーンス！！・・・サザッ・・・。・・・からの砲・・・・。」

（ユァンラオ）

「・・・イハーンも・・・な・・・。」

全く何が起きたのか理解できない状況にありながらも、耳元に届けられる味方の通信内容には慌しい怒声が混じり込んでいる。

セニフはどこか、心の叫びと体の動きが乖離したような、浮遊感に煽られていたが、やがて耳元に残り続ける「キーン」という音の響きが、次第に二人の彼女を混じり合わせていった。

そして、思わず驚いたようにハッと我に返ったセニフは、即座にトゥマルクのメインシステムを戦闘モードへと切り替えながら、サーチシステムの起動を促すと、ＴＲＰスクリーン越しに、激しい爆風が舞い上げた粉塵が漂う世界を見渡し、必死に周囲の状況を確認し始めた。

（ハインハートル）
「セニフ。大丈夫か。」

（セニフ）
「・・・。うん・・・。・・・大丈夫みたい。ほとんど機体ダメージもないし。」

ハインの問いかけに、ようやく普段通りの自分を取り戻したような返事を返したセニフは、彼女の直ぐ脇に聳え立つ巨大な木の幹を見上げながら、大きく一つ息を吐き出した。

先ほど彼女達に襲い掛かってきた猛烈な砲撃の嵐は、かなりの広範囲に渡って撒き散らされたようであったが、幸運にも先ほど衝突してしまった巨大な木の幹が盾となり、彼女はほとんど被害を被ることなくやり過ごすことが出来たのだった。

しかし、過酷な戦場において、そんな幸運の恩恵に与れる者が、一体どれほどいるというのだろうか。

彼女にとってもそれは、ほんの些細な出来事が齎した結果であって、その後も幸運の女神が彼女に微笑んでくれる保証はどこにも無いのだ。

そして、今回、彼等の仲間達の中には、不運にも猛烈な殺意の波動に飲まれ、儚い命の灯火をかき消した者達がいた。

（バーンス）
「メディアス。渓谷内ディフェンダーが2人やられた。メイサ・ライトの状況如何で、渓谷内守備隊に回ってくれ。４機だけじゃ敵の圧力を抑えきれない可能性が高い。」

（メディアス）
「了解。・・・ンス。・・・は誰・・・。・・・況なら渓谷内に突・・・。」

（バーンス）
「ジャネットとユァンラオはグラント隊に編入。敵の状況を確認できたら渓谷内へと突入するぞ。」

（ジャネット）
「待ってられないわ。先に行くよ。」

本来、メイサ上へと降下した直後に、すぐさま渓谷内へと突入を開始する予定だった、フロア隊とグラント隊のメンバー達だったが、予期せぬ帝国軍の攻撃により、フロア隊の「ワイハーン・カリカニ

ス」と、グラント隊の「カルラス・ダグラス」両名を、あっさりと失う事となってしまった。

只でさえ大部隊である帝国軍南進部隊を前にして、圧倒的劣勢状態であるネニファイン部隊としては、たった二人を失っただけと言えども、かなりの痛手を被ってしまった事には違いない。

しかも、悠々自適にメイサ上から撃ち下ろそうと目論んでいた作戦も、待ち伏せしていた帝国軍部隊によって、白紙に戻りそうな勢いである。

過酷な状況へと追い込まれてしまったネニファイン部隊は、果たして味方の援軍が到着するまでの間、帝国軍の南進を食い止める事が出来るのだろうか。

そんな不安感が彼等の脳裏を過ぎり始めていたが、その後、彼等の頭上へと降り注いだ事実とは、そんな生易しいものではなかった。

04－06：○ディップ・メイサ・クロー［5］@

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ６「ディップ・メイサ・クロー」

（ルワシー）
「追って攻撃がないってのが腑に落ちねぇな・・・。フィールドも更に濃くなってきやがった。下手に動く事もできやしねぇ。」

（セニフ）
「何か変な感じだね。相手も迂闊に動き出せないでいるのかな。フィールド濃度８９％って・・・。自然界でこんな状況ってありえるの？」

ネニファイン部隊のフロア隊とグラント隊が、渓谷内へと突入してから数分。

それまで慌しさに包まれていたメイサ上が嘘のような静けさを取り戻す中、彼等アパッチ隊のメンバー達は通信回線を保つために密集した隊形のまま、じっと木の幹の裏へと隠れ潜んでいる事しか出来なかった。

と言うのも、彼等の周囲を取り巻く大量の白煙は、微量に流れる風によって、ゆっくりと移動してはいるものの、未だに周囲を見渡せるほどにはなっておらず、しかも、メイサ上に滞留した高濃度フィールドが、サーチシステムの働きを著しく低下させていた為だ。

（ルワシー）
「どうすんだハイン。このままじっと待機してたって何も始まらん

だろ。どうせ敵さんも状況は同じなんだ。一気に行こうぜ。一気によ。」

先ほどネニファイン部隊へと襲い掛かってきた帝国軍の攻撃力から見ても、彼等の目の前メイサ上には、恐らく4～5機ほどの敵兵が潜んでいる事が予想されるが、ルワシーの言う通り、周囲の情報をつかめない状況に陥っているのは帝国軍も同じことであり、そう言った意味ではお互いに対等な立場にあると言える。

しかし、トゥマルクのコクピット内でゆっくりと腕組みをしていたハインは、頼りにならないサーチレーダーをマジマジと覗き込みながら、なにやら難しい表情を醸し出していた。

（ハインハートル）
「少し待てルワシー。何かおかしいと思わないか？メイサ上の伏兵が、帝国軍南進部隊より早く当エリアに潜伏していたとなると、それなりに事前準備が必要なはず。元々我々が降下目標としたこのポイントは、帝国軍の南進部隊を南北に間延びさせるために、選定された位置なのだからな。・・・と、すれば・・・。」

（セニフ）
「・・・。・・・はめられた？」

（ルワシー）
「・・・のかぁ？」

ハインとしても、それは少し考えすぎなのではないかと思った程だが、それでも彼等が遭遇した帝国軍機動兵器が、このメイサ上に潜伏していたという事実は、どう考えても異常なことだ。

彼等ネニファイン部隊のようにメイサ渓谷上へと降下するならまだしも、作戦開始前から既に制空戦闘機部隊「ブラックバード隊」と「クラリオンベイル隊」によって、該当空域制空権は共和国側が保持していたため、ネニファイン部隊に先んじて降下した事実は無い。

それに、舗装されたメイサ渓谷内を南進してくるのであれば、数日前から強化した共和国の索敵網にいち早く察知されるはずであるし、たとえその索敵網をかい潜った所で、ほぼ垂直に聳(そび)え立つメイサ崖をよじ登ることなど容易なことではない。

とすれば、結論は一つ。帝国軍の待ち伏せ部隊は、事前にネニファイン部隊の動きを察知して、不整地である樹海地帯が続くメイサ上を遥か北方から南進してきた事になる。

そして、確信を持って特定したネニファイン部隊の降下ポイントに対し、大量の阻害粒子を散布した上で、ネニファイン部隊が降下してくるのを待っていたのだろう。

巧妙に仕組まれた罠なのであろう事実が、彼等の脳裏を過ぎり始めた頃、サーチレーダーをマジマジと観察していたセニフが、突然驚きの声を上げた。

（セニフ）
「・・・！敵影！か・・・囲まれてるよ！」

（ルワシー）
「ちっ！！どうも話が旨く出来すぎていやがったんだな。作戦が事前に漏れるってことはよく聞く話だが、まさか自分等がこんな目に合うたぁ思っても見なかったぜ。」

それまで全く反応を見せていなかったサーチレーダー上には、今や薄っすらと赤い点滅が姿を現した。

それは、彼等が事前に予想していた程度の機数ではあったが、完全に彼等アパッチ隊の3人の周囲をぐるり取り囲むような陣形を形成していたのだ。

彼等としても、まさか目隠しをされたような状況下において、ここまで鮮やかに包囲されてしまうとは思ってもいなかったのだろう。

慌てた様子で敵数のカウントを始めた彼等だったが、覚束(おぼつか)ない点滅を繰り返し表示するだけのサーチレーダーから、未だに周囲の正確な情報を掴み取ることは出来なかった。

（ハインハートル）
「セニフ！ルワシー！敵の攻撃に合わせてカウンターを食らわすぞ！密集陣形で一点集中突破！」

（セニフ）
「了解！」

（ルワシー）
「おっしゃ！」

アパッチ隊隊長であるハインの掛け声と共に、一斉に戦闘体制へと移行した3人が、大きな木の幹に身を潜めたまま、迫る来るであろう敵の攻勢を迎え撃つ構えを見せる。

本来であれば、相手の機影を捉えた時点で、直ぐにでも攻勢に転じたいところなのだが、この時点で帝国軍機動兵器が保有するサーチ

システムの方が、アパッチ隊のサーチシステムよりも優れた物である可能性が高まったため、彼等としても不用意に敵包囲網へと突っかかる事が出来なくなってしまったのだ。

遭遇戦においては、相手よりどれだけ先手を取れるかが、勝負の行方を握る鍵となる。

この状態で既に先手を取られてしまった彼等に、唯一できた事と言えば、周囲に蔓延(はびこ)る敵意の群れに対して、必死に警戒心を煽(あお)り立て、出来る限り相手の先制攻撃を阻害した上で、次なる先手を打つ為の体勢を形作る事だ。

そう言った意味では、彼等の取った行動は、それなりに理にかなったものだったのかもしれない。

が、しかし、そんな彼等の思いとは裏腹に、サーチレーダーの終端付近で点滅を繰り返していた赤い光点は、本当にそのまま点滅を繰り返しているだけであった。

アパッチ隊に対して、一気に攻撃を仕掛けてくる様子どころか、その場から一歩も動く気配はない。

そして、そんな一瞬の静寂さを漂わせていたメイサ上の空気に、不思議そうな表情を浮かべたセニフが、ＴＲＰスクリーン越しに周囲を見渡していた時だった。

何やらどこからとも無く大きな音が聞こえてくる。

真っ白い煙に包まれた森の奥の方から、樹海の内部に木霊するよう

に響き渡ってきたその音は、何かしらの銃火器を放つ音でもなく、重戦車が大地を快走する音でもない。

その音の正体が一体なんであるのか、直ぐには理解できなかったのだが、確実に彼等の元へと忍び寄る「新たな脅威」である予感はしていた。

（セニフ）

「ハイン！！何かおかしいよ！！」

（ハインハートル）

「解っている！！周囲の警戒を怠るな！！」

次第に彼等の元へと接近してくるその大きな音は、なにやらメキメキと軋（きし）む様な音であり、更には細かな枝葉同士が激しく交錯するざわついた音が交えられている。

木・・・？木が圧し折られている音？？

ようやくその結論へと達したセニフが、徐に大木の陰から北方エリアを覗き込んだ時だった。

ドズーーン！！

周囲一帯を飲み込むような地鳴りを打ち鳴らしながら、包み込んだ白煙を吹き飛ばすように倒れてきた巨木が大地へと吸い込まれる。

しかもそれは、樹海の木々を1本や2本、圧（へ）し折った程度ではなく、北方から彼等アパッチ隊へと続く直線上にある全ての木々が、一斉に奥の方から薙（な）ぎ倒されてきたのだ。

！！！？

一体、何が原因でそのような現象が発生しているのか。

その時の彼等にとってみれば、そんな事を優雅に考察している暇など有りはしなかった。

迫り来る脅威の正体が掴みきれてはいなくとも、それが彼等の身に危険を齎す現象であったことは、言うまでも無いのだから。

セニフは即座に緊急回避するために、トゥマルクの後部バーニヤを吹き上がらせようと、右足で思いっきりフットペダルを踏み込んだのだが、何故かいつものように軽快な足取りで急発進する加速度を身体に感じることも無く、ＴＲＰスクリーンには先ほどと同じ風景が映し出されていたままだった。

（セニフ）

「・・・あっ！！グライダー！！」

その時初めて、彼女は除装しておくべきグライダーが、未だに彼女の搭乗するトゥマルクの背中に固定されたままだった事に気がついた。

それまでいつもとは違う緊張感に曝されていた彼女は、ようやく自分らしさを取り戻すに至る過程の中で、振り解いた重たい呪縛の衣服と共に、重大な記憶を欠落してしまったのだ。

一瞬にして焦りの色が、彼女の心を侵食し始めたのだが、彼女は降下システムとグライダーとの接続がまだ生きていることに気がつく

と、藁(わら)をも掴む思いで、一気にグライダー装置を最大出力でバーストさせる。

すると、猛烈な勢いを持って真っ赤なフレア光を噴出したグライダーに乗って、軽量志向のトゥマルクの機体はいとも簡単に宙へと舞い上がった。

ドゴォォォォン！！

＞ｉ４８２９＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞８２７＜＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞セニフ＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

この時、勢い良く宙へと舞い上がる事に成功したセニフだったが、直後に彼女が元居た地点で発生した大きな爆発によって、猛烈に吹き荒れる爆風に曝(さら)されると、あわやその勢いで機体が巨木へと激突しそうになる。

勿論、元々空を飛ぶようには設計されているはずもないＤＱは、この爆風に煽(あお)られるがまま吹き飛んでしまう事になるのだが、幸いなことに、巨木へと激突したのは、背中に背負ったグライダー部分だけであり、それまで彼女がどうしても除装することが出来なかったこの「厄介者」は、思うよりも簡単に、ストッパーの根元から圧(へ)し折れて吹き飛んでしまった。

そして、ようやく重い足枷から逃れることが出来たセニフは、トゥマルクに取り付けられた推進装置の全てを駆使し、煽(あお)られた勢いを相殺しようと試みるのだが、それも叶わないままに地上への着地を

余儀なくされる。

（ハインハートル）
「セニ・・・！！・・・か！？」

雑音に遮られたハインの叫び声がセニフの耳元へと届けられる中、彼女の巧みのDQ操舵技術によって、半円を描くように大地を切り裂いたトゥマルクは、何とか激しい衝撃を打ち消すことに成功した。

もはや、もう一度やれと言われても絶対に無理であろう、神憑り的操舵によって難を凌いだ彼女に対し、驚嘆の声を持って賞賛したいところではあったが、直後に立ち込めた白煙の中から姿を現した敵の正体に、彼等3人は更なる度肝を抜かれることとなる。

（セニフ）
「・・・な！？？？？？？？？・・・えええええっ！！？？？？？」

（ハインハートル）
「・・・・・・！！」

（ルワシー）
「な・・・な・・・・・・・・・・・な・・・なんじゃいこりゃぁ！！！！！」

それまで、不思議な倒木現象から大きな爆発までの一連性を持って、アパッチ隊へと襲い掛かってきた「敵の正体」を目の当たりにし、3人は驚きの声を上げずにはいられなかった。

それもそのはず、全く走行時に音を奏でるでもなく、ゆっくりと森の奥から姿を現したものとは、恐ろしく巨大な鉄の塊だったのだ。

背丈だけでも彼等の搭乗するトゥマルクの優に5倍はあろうかと言うその超巨大兵器は、全身緑色に塗装されており、胴長の本体が前かがみになった様な体勢で、更に胴体と同じぐらいに巨大な両足を携えている。

尻の部分か腹の部分かは判断しかねるが、後方には馬鹿げたほど大きなテスラポットを背負い込んでいた。

これをＤＱと呼んで良いかどうかは人それぞれ意見が分かれるかもしれないが、大分するなら蟲型ＤＱになるのであろうか。

これは・・・。・・・。なんだ??

前方へと突き出た胴体部分からぶら下がる2本の腕は、完全にそれ自体が巨大な砲塔と化しており、胸部付近に抱えた巨大なガトリングガンからは、それが戦闘兵器以外の何者でもないことを示していたのだが、その余りの常識を逸脱した軍事兵器の登場に、彼等3人は一瞬、それが何であるのか全く解らなかったのである。

しかもその巨体は、周囲の木々を強引に圧し折る以外の音は一切奏でずに、まるで幽霊がその場をスッと横切るがごとく、宙に浮いたまま流れるようにスライドしていくのだ。

（ハインハートル）

「まさか・・・。ＡＬＬ－Ｇシステム・・・。」

その異様な移動法を目の当たりにしたハインが、驚きを隠せないままに小さく呟いた。

このハインの言うGシステムとは、近年各国で研究が盛んに行われるようになった「重力を妨げる」方法を応用したシステムのことである。

「物質と物質は引き合う」このことは、物理学の初歩の段階から学習することができ、この世に存在するものであれば、その力の原理から逃れる事など、決して出来やしないのだと信じられてきた。

しかし、力の発生する根源には理由がある。物質と物質が引き合うのにも理由がある。

物質が物質を引き付ける力の根源は、物質間においてやり取りされるG粒子の影響によって発生しているものだという事は、近年の物理学研究結果により証明された事実だが、簡単に言ってしまえば、このG粒子のやり取りを阻害してしまえば、物質間で引き合う力を制限することが可能だと言うことになる。

この理論の元、各研究機関が挙(こぞ)って研究に研究を重ね、ようやく一つの成果を出すに至った成果物が「硬質３５８２セラミック・タウ」であった。

これは、特定の状況下に置くことでG粒子のやり取りを妨げることの出来る物質であり、様々な分野に応用できる偉大な発明品として期待されていたものだった。

しかし、この物質の生成に当たっては、巨大な生成プラントが必要な上、多大な資金と労力を投資しなければならず、今現在もまだ、一般的に利用できるレベルまでには達していない。

・・・はずなのだが、彼等の目の前に現れた巨大な建造物の移動方

法は、まさにGシステムを使用しなければ出来ない芸当であり、莫大な資金と多大な人力を湯水のように投入することが出来る帝国貴族達であれば、軍事的技術転換は決して不可能な話では無い。

確かにいつかはこのような兵器が登場するであろう事は、各研究機関の研究成果からある程度予測されていたことであるが、まさか現時点でこのような馬鹿げた産物に遭遇することが出来ようなどと、一体、どこの誰が予想しえたであろう。

それはもはや、感嘆を持って尊敬の念を抱くというよりも、驚愕を持って呆れた溜め息をついてしまう程の事実であった事は確かだ。

（ルワシー）
「ハイン！！どうすんでぇこんな化け物！！鉄甲弾が全く利かんぞ！！」

アパッチ隊3人の内、隊列の一番左手に陣取っていたルワシーが、この巨大な化け物の攻撃を大きな旋回でかわすと同時に、右手に装備した「ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４」の弾丸を大量に浴びせかけたのだが、硬く緑光した巨体の外壁には主だった損傷を受けたようには見えない。

そして、全くその進行速度を緩めることも無く、気持ち悪いぐらいの緩やかさを保ったままに、背中に背負った巨大後部バーニヤを吹き上がらせると、新たな巨木をなぎ倒しながら旋回を始めていた。

（セニフ）
「デカブツが反転してくるよ！！」

（ハインハートル）

「セニフ！ルワシー！先ほどの光点は敵のダミーだ！散開しつつ一時デカブツとの距離を取って、特殊誘導マーカーを準備しておけ！こいつはエアビヘイブの対地誘導弾で始末するしかない！アパッチ隊よりファントムへ緊急連絡！ファントム！応答せよ！」

ある程度交えた相手との一戦から判断したものでは無かったが、ハインはこの巨大な帝国軍兵器を目の当たりにした瞬間、既にアパッチ隊３人程度では歯が立たない相手であろう事を悟ったのだ。

急激な加速も細かな旋回も出来ないであろう高価な巨大兵器を、なんの惜しみも無く前線に投入してくる時点で、その兵器自体にそれなりの防衛機能が備わっている事が予測出来る上、それが先ほどのルワシーの攻撃によって、悲しくも証明されてしまった以上、彼等の持ちえる火器程度では、この巨大兵器を葬り去ることが、出来ないであろう事を予感させたのだ。

先ほど彼等を襲った大爆発直後から、彼等周囲を包み込んでいた赤い光点の姿は完全に消失しており、それがダミーイリュージョンを使用した撹乱行為であったことは判明したのだが、それでも尚、彼等に取っての脅威は、全く別のものへと姿を変貌させて、以前にも増した脅威を彼等の頭上から振り落としたのだった。

（ハインハートル）

「ファントム！！応答しろ！！エアビヘイブの対地攻撃を要請する！！ファントム！！」

色濃くメイサ上へと滞留した阻害粒子の渦に阻まれて、全く思うような機能を果たすことが出来ない通信機に向かって、ハインは激しく叫びかけるのだが、一向に彼の思いに答える返答が返される事は無い。

高濃度フィールド下のメイサ上という、限られた空間に閉じ込められてしまった彼等は、さしずめ猛獣を放たれた闘技場（コロシアム）の中に、ナイフ1本を預けられただけで放り出される、悲しき奴隷達とも言えるだろうか。

正確な情報を掴み取ることの出来ない状況が続く中で、周囲に響き渡る不気味な倒木が奏でる音だけが、猛獣の蠢（うごめ）く様を現していた。

隔離された世界の中で、必死に助けを求めようとも、その声が相手に届かないのであれば、彼等の叫びに呼応する者などいるはずも無い。

いや、たとえ届いたのだとしても、その相手が彼等の要望に答えることが出来るとは限らないだろう。

戦場と言う過酷な異界において、人の極限にまで迫った恐怖心と絶望感は、時として容赦なく彼等の希望を打ち砕いて見せるのだった。

04－07：○ディップ・メイサ・クロー［6］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ07「ディップ・メイサ・クロー」

（サルムザーク）
「なんだと!?エアビヘイブの進路が違うだと!!どういうことだ!?」

ディップ・メイサ上空を旋回中の旗艦「ファントム」の司令室内に、思わぬ若い士官の怒声が一つ木霊した。

それまで彼は、司令室上部へと表示された戦況を一望できる指揮官席にだらしなく腰を掛けたまま、じっと戦いの成り行きを見守っていたのだが、突然彼の元へと齎（もたら）された一つの報が、彼の態度を激変させたのだった。

その時、周囲に居合わせた通信オペレーター達は、彼と出会ってから日も間もないということもあり、めったに怒りを面に出すことのない「のんびりとした指揮官」と言うイメージを作り始めていたのだが、突如として激しい怒りを露（あらわ）にしたこの若い上官に対して、驚いたような表情と共に戦々恐々（せんせんきょうきょう）としてしまった。

それもそのはず、メイサ・レフト４へと先行降下したネニファイン部隊には、主力部隊である戦車部隊が到着するまでの間、上空から対地支援を行う「エアビヘイブ隊」が到着する予定だったのだが、到着予定時刻を過ぎても一向に姿を現す様子も無く、挙句の果てには新たに設定された軍事目標へと、進路を変更したという報告を一

方的に送りつけてきたのであった。

（チャンペル）
「三佐・・・。ヘルモア陸将から通信が入ってます。」

その時、厳しい表情で戦況を見つめていたサルムに対し、恐る恐る声をかけたのは、通信オペレーター兼秘書官の「チャンペル・シィ」である。

細く長い深緑色の髪の毛を、片側だけ掻き揚げたヘアスタイルのその女性は、猫目的に目元が釣り上がってはいるものの、温かみのある可愛らしい人物だ。

彼女はトゥアム共和国通信高大卒のエリートであり、ネニファイン部隊を創設するに当たって、カースが引き連れてきた有能な人物の一人ではあったが、時折見せる大きな「天然ボケ」だけが玉に瑕のお嬢様であった。

全く無言のまま怒りに満ちた瞳で受信許可を促すサルムの反応に、彼女は慌てた様子でオペレーターコンソールへと向き直ると、開け放った回線に通信映像を流し込む。

すると、それまでディップ・メイサ一帯の戦況を映し出していた画面が一転、良く肥えた憎たらしい肥満の中年男性が姿を現した。

（サルムザーク）
「説明していただこうか陸将！」

（ヘルモア）
「ふん。ずいぶんな挨拶だな。三佐・・・。」

ギトギトに脂ぎった銀髪に、歴戦の勇者を彷彿(ほうふつ)とさせる傷を顔中に蓄えた中年男性。

目元に光る鋭い眼光は、彼が只者ではないことを物語っていたのだが、頬(ほほ)や顎(あご)に付いた贅沢な肉付きが、彼の長きに渡る私生活の堕落を物語っている。

しかしこの中年男性こそが、トゥアム共和国陸軍における最高権力者、「ヘルモア・トラッド」陸将である。

今回のディップ・メイサ・クロー作戦の最高司令官でもある彼が、佐官に成り立てのド新人部隊長サルムザークに対し、直接通信回線を築くに至ったのには、それなりの理由があったからなのだが、怒りに任せて無礼にもこの中年男性を怒鳴りつけたサルムには、その彼の意図が少なからず見えて来ていたからなのかもしれない。

（ヘルモア）
「何・・・。帝国軍のメイサ・レフト４南進部隊が囮であることが判明したんでね。急遽、エアビヘイブ隊には、帝国軍本体部隊を叩くよう新たな指示を出したまでだ。我が主力戦車部隊に関しても、メイサ・センターを南進してくる帝国軍主力部隊に対抗すべく、戦線を構築する事となる。」

（サルムザーク）
「な・・・。なんだとぉ・・・！」

決して聞こえない声で言ったわけではないのだが、彼としては最高司令官たる陸将に対して、それなりに礼儀を重んじる為に、しばしぐっと怒りをかみ殺すと、厳しい表情のままヘルモアに食って掛か

った。

（サルムザーク）

「それではメイサ・レフト４の帝国軍戦車部隊は一体どうしろと！？幾らメイサ渓谷の両崖に阻害され、全面衝突の恐れが無いとは言え、上空支援も無いままに戦力比１：１０の戦線を維持できると思うのですか！？」

（ヘルモア）

「無論、三佐の守衛ポイントもかなり重要だ。しかし、帝国軍の主力部隊がメイサ・センターを、南進してくるという情報を掴むことに成功したのは、つい先程の事なのだよ。急な作戦変更は私も望むところではないのだが、これも流動的柔軟性を持って戦術を思考せねばならない司令部の苦悩を理解してくれたまえ。戦車部隊の護衛任務に着いていた貴行の部隊は、指揮権を放棄した上で、大至急そちらの支援へと向かわせた。加えて、リトバリエジから出立した後方防衛部隊を増援として急行させる。幸いなことに、帝国軍としても完全に囮部隊となる、メイサ・レフト４方面には、全く航空兵器を投入するつもりは無いらしく、制空権に関する心配事は不要だ。貴行には防衛部隊の到着まで戦線の維持に努めて欲しい。貴行の類稀（たぐいまれ）なる能力に期待している。以上だ。」

プルプルと震える身体を、強く握り締めた右拳で中和させながら、じっと通信回線から流れ来る言葉を聞いていたサルムだったが、完全に言いたいことだけ言い放った後、全く反論を許すことなく一方的に回線を切断した「豚野郎」の態度に、目の前の指揮官机を思いっきり蹴り飛ばした。

メイサ・レフト４の帝国軍南進部隊は、囮部隊とは言え大戦車部隊である。

その総部隊数は恐らく１５０輌を超えていると見られ、幾らメイサ崖に挟まれた狭い渓谷内での戦闘とは言え、ネニファイン部隊の持つ兵力だけでは、絶対に太刀打ちできないほどの戦力差がそこにはあるのだ。

後方から駆けつける１小隊を合わせても、彼の戦力は残りＤＱが１３機しか残されてはいない。

如何に後方支援部隊であるリプトンサムに攻撃を要請したところで、防衛部隊が到着するまでの間、この帝国軍の大部隊の侵攻を食い止める事など、誰の目から見ても不可能なことである。

しかも、完全に撤退を決め込むにしても、既に戦闘状態へと突入してしまったネニファイン部隊のメンバー達を、劣悪な通信状況下にある戦場から無事に撤退させる事は、そう容易な事では無い。

（サルムザーク）
「糞っ・・・！！あの肥満豚野郎が！！都合の良い詭弁（きべん）を並べて、俺達を食い物にするつもりか！？それなりの扱いは覚悟していたが、まさかここまでとはな！！」

（カース）
「上層部は初めからこうなる事を承知の上で、我々を送り出したのですね。恐らく我々の情報をリークしたのも彼等でしょう。囮にかかったと思わせる必要がありますから・・・。」

作戦軍曹であるカースの、淡々とした現状分析が虚しく彼等の心を吹き抜ける。

元々ネニファイン部隊が降下直後に帝国軍の奇襲攻撃を受けた時点で、話の根底には矛盾した陰謀が顔を見せ始めていたのだ。

今回の「ディップ・メイサ・クロー作戦」において、トゥアム共和国軍が目指す作戦目標が、共和国領土内へと侵攻してくる帝国軍を撃退し、副都心リトバリエジを死守することには変わりない。

そして、南進してくる帝国軍主力部隊の動きに合わせて、いつでも作戦を切り替えられるよう、予め二通りのプランを立てていた事も事実だった。

勿論、ここまではネニファイン部隊にも知らされていた情報だ。

しかしここに、一つだけ隠された事実があったとするならば、彼等軍上層部の人間達には、元々「狭いディップ・メイサ渓谷内」で戦闘を行うつもりなど、全く無かったのである。

大規模な兵力戦闘においては、如何に自軍の兵力が強大であったとしても、その持てる火力を有効的に活用しなければ何の意味も成さない。

狭いメイサ渓谷内においては、どんなに大量の兵力を投入したところで、敵軍を射程内へと収める兵力の絶対的総数が制限されてしまうのだ。

そのため軍上層部はとりあえず帝国軍主力部隊を、メイサ渓谷終端に広がるシデーロス平原付近まで侵攻させ、その上で広く布陣した戦車部隊の砲撃を持って、順次狭い渓谷内から這い出してくる帝国軍を殲滅してしまおうと考えたのだ。

戦術的思考においては、賞賛に値する素晴らしき作戦であったのだが、それを実際に実行に移すためには、根本的な問題一つだけ残されていた。

それは、準備万端で強固に築き上げた共和国軍の陣形に対し、馬鹿正直にのこのこと姿を現すような間抜け面は、精錬された帝国軍の中に居るはずも無いと言う事である。

つまりは、帝国軍主力部隊をシデーロス平原まで悠々南進させるためには、それなりに花を開かせるための種蒔(たねま)きが必要であり、この時、軍上層部が事前に取った行動とは、メイサ・レフト４を南進してくる帝国軍囮部隊を、帝国軍主力部隊であると「誤認」する事であった。

そして、囮へと食いついた共和国軍を嘲笑(あざわら)うかのように悠々と南進してきた帝国軍主力部隊を、後戻りが出来なくなる位置までおびき寄せた時点で、これを殲滅するための陣形を形作ればよい。

勿論、これには、それ相応の演技力も必要となり、メイサ・レフト４を防衛主目標と表向きに定めた以上、囮にかかったと思わせる「何か」が必要だったのだ。
そして迷惑なことに、その「何か」に選定されてしまったのが、彼等ネニファイン部隊のメンバー達なのだ。

（サルムザーク）
「奴等の玩具になるために部隊を設立したつもりは無い！カース！即座にファントムを雲下まで降下させろ！チャンペルは複数サーチシステムを起動し、結果をメッシュリング表示が出来るよう設定を変更！リスキーマは全ての通信回線をフリーにして各小隊との連絡網を構築しろ！急げ！」

（カース）
「三佐！この輸送機で雲下に降下するのは危険すぎます！！当機は敵対空砲火に耐えうる運動性能も装甲も持ち合わせていません！！」

怒りに打ち震えながら搾り出したその指揮官の怒声を、慌てた様子でカースが静止する。

本来であれば、彼女の方が周囲に怒鳴り散らしたい気持ちもあったのだが、既に自分の指揮官が猛り狂ったような怒気を放っていたため、彼の参謀である彼女の立場としては、冷静にこの若者の暴走を食い止めねばならなかったのだ。

しかしこの時、猛烈に燃え上がる炎を宿したままに、カースへと視線をぶつけたサルムは、自らの感情を押し殺すように静かに語り始めた。

（サルムザーク）
「カース。お前には、死地に捨て置かれた部下達を、何の手を打つことも無く見捨てることが出来るのか？作戦を指揮するものとして、部隊を統率するものとして、やれるべきことをやらないのは無能なる証だ。確かに、お互い生死を賭して戦う以上、部下達を見捨てるような判断を迫られる時もあるかもしれない。だが、見捨てられる立場の人間の思いも、これで解っただろう？」

（カース）
「それは・・・。」

先ほど部隊全メンバーに対し「自分自身の為に戦え」などと鼓舞して見せた人物とは、到底思えないような彼の話し振りである。

勿論、彼女自身、2週間もの間に付きっ切りで指導してきた部下達を、このような卑劣な作戦の上にむざむざと殉職させてしまうつもりもない。

彼女は一度、真っ直ぐに自分を直視する若者から視線を外すと、大きな溜め息を一つはき捨てながら思い出すのである。

ネニファイン部隊の名前の由来を。

そして、徐にグッと握り締めた拳を高々と振りかざし、司令室全体に響き渡る透き通った声で、了解を意味する指令を高らかに発した。

（カース）

「メリアドールは現状のまま上空で待機!!ファントムはこれより雲下に降下する!!各員作業急げ!!」

持ち上げた彼女の顔に迷いはない。そしてその声にも全く淀みは無かった。

０４－０８：〇ディップ・メイサ・クロー［７］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「ディップ・メイサ・クロー」

深い深い地獄のような渓谷の穴底から、滑り落ちた罪人達を釜茹（かまゆ）でする薪（たきぎ）の煙のように、黒煙がのうのうと立ち上っている。

決して這い出ることを許されない茶褐色の両崖に囲まれた檻の中で、悲鳴にも似た大きな爆音が起きるたびに、過酷な運命を背負わされた人々の表情は強張りを見せ、望まぬ高揚感によって心を突き動かされるのだ。

（メディアス）
「バーンス！崖際右翼はもう持ちそうにないよ！どうするのさ！」

（バーンス）
「エアビヘイブが到着するまでの辛抱だ！ホァン！隊列を乱すな！」

ネニファイン部隊司令部へと齎（もたら）された悲しき一報に先立つことおおよそ１０分、大きなメイサの谷間にうごめく大多数の軍人達は、既に過酷な戦いの火蓋を切り落としていた。

ネニファイン部隊が防衛ラインと定めたポイントＮ－４５は、メイサ渓谷が南に向かって少し開けた地点であり、少数たる彼等が大部隊である帝国軍を迎え撃つには、格好の戦闘エリアとなる。

しかし、隊列を組んで南進してきた帝国軍戦車部隊が、何の作戦をも企（くわだ）てずにいるはずも無く、左右壁際へと強引に突撃戦車部隊を展

開させ始めると、前衛戦車団後方からの大量の支援砲撃を開始したのだ。

勿論、ネニファイン部隊としては、細い小路地から這い出すこの戦車部隊を、展開したＤＱ部隊の全火力を持って殲滅し続ける腹積もりだったのだが、この猛烈な火力を有する帝国軍の支援砲撃を前に後退を余儀なくされ、両崖際を進軍する突撃戦車部隊への攻撃も散発的なものとなってしまったのだ。

壁際の行軍を決め込んだ帝国軍に対し、攻撃を奏でるべき射角を奪われたキャリオン隊もまた、この防衛ラインに加わることとなるのだが、それでも尚、帝国軍の南進を効果的に阻害することが出来ないでいた。

未だ対地支援部隊エアビヘイブからの上空支援攻撃も無いまま、帝国軍戦車部隊にじりじりと圧力をかけられたのでは、圧倒的少数派であるネニファイン部隊に勝機が無いのは目に見えている。

そう思った彼等が、今後の展開に悲観的予測を交え始めた時、更なる叫び声が彼等の通信網を飛び交ったのだ。

（ホァン）
「敵主力部隊の前面に新手の機影・・・・・・。・・・高機！！高速機動部隊だぜ！！機体識別ＮＯＮ！新型機か！？１０機はいるぞ！！！」

（ソドム）
「前面には大戦車部隊が新型ＤＱ付きで大勢いらっしゃるってのに、おもてなしがチンケな俺等だけっていうのは相手に失礼じゃないのか？せめて敵軍と同じぐらいの頭数揃える位の礼儀があってもいい

と思うんだがね。」

金色のつんつん頭にしゃくれた顎（あご）が特徴の男「ホアン・ロイ」に、ぼやく事にかけては部隊内で一番と言われる角刈りの「ソドム・スピリッツ」が、独り言とも取れるような話しっぷりで語りかけた。

両者共にブラックポイントで開催されたＤＱＡ大会上がりのパイロットであったのだが、二人の吐き出した言葉にはかなりの温度差がある。

勿論、これほどまでの劣勢に立たされた状況下で、ソドムのように普段通りぼやき続けられる人間は決して多くはないだろう。

彼等の目の前へと現れた帝国軍の新型兵器は、敵陣突撃を目的とした高速機動兵器であり、見た目は蜘蛛のように脚が６本生えそろった蟲型（インセクトタイプ）ＤＱだ。

この手のＤＱは、ホバー移動をメインに据え置いている点において、他のＤＱと変わらないのだが、人型よりも水平方向のバランスに優れ、急激な方向転換を可能とする多脚制御により、最前線をすべる様に蹂躙（じゅうりん）することから、兵士達からは「高機」と呼ばれ、恐れられていた部類の機種である。

そして、その「高機」の最上位機種ともいえるのが、この「グアルディオアラ」であった。

前へと突き出た右手にはライフルガン、左手にはスタンディスチャーを装備し、背中には大量のグレネード弾を蓄えた射出ポットを携（たずさ）えている。

決して単機での火力において優れている機種ではないのだが、その大地を滑る様にして駆け巡る異常なまでの機動力が持ち味であり、各地の戦場において多大な戦果を挙げてきた機体であった。

ドッゴォォォン！！

（ソドム）
「っつ・・・！おばちゃんどうすんだい！このままじゃ鍋底に穴が開いちまうぞ！」

（メディアス）
「キャリオン隊は一時後退するよ！！ソドム！ミゼット！戦線を２００ｍｉｌｓ後退！！広場出口で戦車部隊の前線を詰まらせるんだ！！」

そんな帝国軍の新兵器へと一時的に意識を奪われつつあった彼等だが、東方の壁際を走行していた帝国軍突撃戦車「レアコンダリス」が、巨大な砲塔を旋回させると共に、眩い閃光と大きな砲撃音を一斉に放つと、激しく襲い掛かった爆風の嵐の中で、再度自分達の置かれた不利的状況を再認識した。

もはやいつ来るとも解らない援軍の到着を待っていられるほど、彼等には時間的余裕も精神的安楽も無かったのだ。

すかさず自軍の形成の悪さを悟った「メディアス・イェルザック」が、キャリオン隊帰下の２人に向けて撤退の指示を飛ばす。

麻色の短い髪の毛を振り回しながら、必死に周囲の状況を確認する行為を怠らない彼女は、決して何かに秀でた能力者では無かったが、辛辣（しんらつ）に酷評される程の愚劣者でもなかった。

一般的に評価すれば「中の中」と言う平均的実績を携えた共和国軍の正式軍人である。

年齢も２４歳とまだ若い方なのだが、見た目よりも歳を重ねた印象が否めないその風貌から、しばし彼女より年齢の高い人達からも「おばちゃん」と称される事が多かった。

勿論、年齢や見た目が戦場で役に立つはずも無く、彼女自身、この失礼な呼称を一向に意に介す素振りも見せなかった。

（ミゼット）
「敵軍勢後方から熱源多数!!カチューシャからのロケット弾だ!!」

（メディアス）
「各機緊急回避!!ボカージュ内から一気に離脱しろ!!」

収まりの悪い天然パーマをヘルメット内へと押し込んだ細身の男「ミゼット・パールパニー」が通信機に向かって怒鳴り込むと、異様な風切音を響かせながら多数の黒点が、メイサ崖に挟まれた北方の狭い空へと舞い上がった。

前面に展開する戦車部隊の頭上を越えるように放たれたその黒点は、帝国軍後方支援車両からの支援砲撃であることは間違いなかったのだが、たった7機のＤＱを持って戦車団の前へと立ちふさがった少数部隊に向けたものとしては、余りに十分すぎる攻撃だったかもしれない。

（バーンス）

「ホァン！！後退しながら炸薬弾を上空にばら撒け！！とてもじゃないがかわしきれる量じゃないぞ！！」

（ホァン）
「了解！」

キャリオン隊が後退に転じたタイミングに合わせて、緩やかに後退を始めていたグラント隊の隊長「バーンス・シューマッハ」が、戦場では初心者たるホァンに向けて指示を出す。

彼はそれほど大柄な体躯ではないのだが、歴戦の勇者を思わせるような迫力をかね揃えた男性であり、顔中に刻まれた傷跡がそれを物語っていた。

彼はまだ十代の頃から長きに渡り、大陸各地で勃発する戦乱の中で傭兵として生き延びてきた実績を持ち、どんな過酷な戦場からも必ず生きて戻って来たことから、人々からは「不死鳥」とさえ称されるようになっていた。

勿論これには、かなり誇大（こだい）された人々の主観が交えられていることは確かだが、彼が実際に経験してきた戦闘の数々を考慮すれば、それは必ずしも偽りであるとは言い切れないものであった。

そんな彼にしてみれば、この程度の砲撃に右往左往（おうさおう）するような事はないのだが、今彼が従えているホァンを始め、ネニファイン部隊のパイロット達の多くが、初めて戦地を訪れた新人達である。

戦場においては、類稀（たぐいまれ）なる戦闘センスを持ってしても、ほんの一瞬でその生命をかき消されてしまう例は少なくない。

準備に準備を重ね、あらゆる努力をしてきた者達ですら、その戦場に潜んだ魔物達の気まぐれに対して、完全な勝利を約束することは出来ないのである。

それが戦場という世界における無常のルールであり、ちょっとしたマイナス要因が、全てを無に帰するほどの巨大な爆弾と、発火性に富んだ導火線で結び付けられているのだ。

バーンスは駆り出したＤＱアカイナンの右手に装備する「ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４」の銃口を、真っ黒に淀んだ北の空めがけて構えると、大量の弾丸を発射する。

決して全てを撃ち落せるつもりはないが、ある程度数を減らす事ができれば、その分だけ生き延びる可能性を高めることが出来るのだ。

（バーンス）
「今の内に一気に離脱しろ！！」

激しい光を伴った破断線が天高くへと舞い上げられ、真っ黒な煙の開花を連鎖される様を気にしつつも、周囲の者達の安否を気遣った指示を飛ばす辺りは、さすが実戦慣れした戦士ともいえる。

しかし、そんなバーンスの目の前で、何故か完全に事の成り行きに従わない、無謀な2機のＤＱの存在があった。

（ミゼット）
「ジャネット！！ユァンラオ！！後退しろ！！ロケット弾の餌食になりたいのか！！」

驚いたように怒声を上げたミゼットの警告に怯む様子も無く、ジャ

ネットとユァンラオ両名の搭乗したＤＱは、頭上から舞い降りてくる無数のロケット弾を見上げながら、じっとその着弾地点付近へと佇んだままだったのだ。

後方から大量のロケット弾を放った中距離支援車両「カチューシャ」は、別名「陸の爆撃機」とも呼ばれ、陸軍に所属するものであれば、その名を知らないものはいない恐るべき兵器だ。

搭載されたロケット弾は、単発でも連発でもなく斉発であり、一気に１０発ものロケット弾を指定エリアに叩き込むという代物で、当たり所さえ良ければ、前線に布陣した戦車隊を、一気に１０輌は撃破してしまうほどの破壊力を有している。

その余りの攻撃力から、乱戦では使用が制限されるという難点もあるが、膠着（こうちゃく）した戦線を一気に壊滅させるなど、これまでに多くの兵士達の命を一瞬にして奪ってきた兵器であった。

（ミゼット）

「ち、馬鹿が・・・。死にたいのか・・・。」

次々と飛来するロケット弾の着弾と共に、強烈な爆風が前線一帯を包み込む中で、爆煙の向こうへと姿をかき消してしまった二人の姿を、その目で追ったミゼットが軽く呟いた。

彼はこの時、無謀にも回避行動に移ることも無く、自ら死の淵へと歩み寄るような行動を取った、二人の死を予感していたのかもしれない。

しかし、その彼等二人の行動に、一瞬意識を囚われてしまった彼自身の方が、地獄の底から顔を出した死神の鎌で一閃されようとは、

思っても見なかったであろう。

突然、重たい音が渓谷内に木霊すると同時に、天高く舞い上がろうとする土煙の中から、猛烈な速度を有した閃光の刃が、複数飛び出してきたのだ。

それは、強力な直線方向への弾速を誇る突撃戦車レアコンダリスの主砲が、一斉に砲弾を放ったものであり、先ほどのロケット弾による攻撃は、妙に手の込んだ目くらましだったのかもしれない。

（メディアス）
「ミゼット！！」

彼はその時、自らの操るトゥマルクの機体が、鋭い殺意の刃によって貫かれた事に気が付いたであろうか。

いや、恐らくその事実に気が付くことが出来たのだとしても、彼にとって訪れた人生の終焉を遮(さえぎ)ることは出来なかったであろう。

被害者となったミゼットが搭乗するトゥマルクのコクピット付近が、煌びやかに輝く光矢が貫通すると同時に、彼の機体の少し後方で大きな爆発が発生した。

本来、目標となる相手の機体へと衝突した時点で、爆発しなければならない種類の弾丸だが、その余りの弾速から炸裂するタイミングを完全に逸(いっ)すると、情けなくも大地へと2回ほど叩きつけられた後に爆発したのだった。

しかし、それでも一人の人間の命を昇華させるには、十分な攻撃だったのかもしれない。

やがて腰の部分から「くの字」に折れ曲がったトゥマルクの姿に、思わず部下への無意味な叫び声を漏らしてしまったメディアスの目の前で、眩い閃光を放った機体が勢い良く四散してしまった。

それは、ネニファイン部隊における3人目の犠牲者が確定した瞬間であり、大きな地響きを鳴らしながら、のうのうと舞い上がった土煙の向こうでは、更なる犠牲者を求める魔の手が蠢(うごめ)いていた。

未だ彼等ネニファイン部隊には、目ぼしい戦果が上げるわけでもなく、ただ一方的に虐(しいた)げられる少数派側として、死線を逃げ惑うことしか出来ないのであろうか。

（ユァンラオ）
「２００ｍｉｌｓ後退だとさ。どうする？」

そんな時、ロケット弾の激しい爆風に曝(さら)されていたはずのユァンラオが、自分の顎に生え揃った武将髭を擦りながら、全く平然とした口調で問いかけた。

彼が問いかけたその相手とは、彼と同じ窮地に追い込まれた一人の女性であり、彼等の周囲を包み込んだ土煙で全くその姿を確認することは出来なかったのだが、彼の中では「おそらく生き延びているであろう」という予測の元に発せられた言葉だった。

（ジャネット）
「そんな面倒なこと、パスに決まってるじゃない。いつも自分から軍規を破るくせに、つまらないこと聞かないでよ。」

抹茶色の癖毛を覆い隠したヘルメットを脱ぎ去り、煩(わずら)わしい物全て

を振りほどくかのように首を左右に振ったジャネットが、吐き捨てるようにユァンラオに言葉を返した。

搭乗したＤＱアカイナンを操作する素振りも見せず。

迫り来る帝国軍の圧力に慌てふためくことも無く。

彼女は次第に薄ぼんやりと渓谷内の景色を滲ませ始めたＴＲＰスクリーンを見つめていた。

カチューシャから放たれた大量のロケット弾の爆風にも。

そして、突撃戦車部隊の砲撃にも当たらなかった。

私は運が良いのだろうか・・・？

いいえ。きっと・・・。運が悪いんでしょうね・・・。

少しだけ俯いて両目を閉じた彼女の行動は、戦場の最前線においてはまさに自殺行為である。

それで居ながらにして、彼女の命が今も尚、彼女の体と共にあるということは、悪戯好きな悪魔が彼女に「生きる事の苦しみ」を与えたいが為の振る舞いなのだろうか。

彼女は突然、何かを思い立ったように顔を上げると、鋭く見据えた瞳の奥に激しい思いを乗せて表情を強張らせた。

（ジャネット）

「どうせ私達だけでやれってことでしょ。いいわ。やりましょう。

突撃するわよユァンラオ。ついてくる？」

彼女の心の中には恐怖心は無かった。

無機質な通信機から流れ来る彼女の声から察することは出来ないのだが、恐らく今の彼女を包み込んでいる感情は、「激しい怒り」と「激しい憎しみ」以外の何者でもない。

しかし、そんなことは彼女自身、既に解っていたことであり、この時彼女は、こんな愚かな振る舞いを見せる自分自身を、心の中で冷たく笑い飛ばすのだ。

そしてジャネットは、たまたま居合わせた部隊メンバーに対し、あり得ない提案を持って手招きするように危険な誘いをかけると、思いっきり踏み込んだフットペダルを通して、自らの抱いた破裂せんばかりに淀んだ思いを、アカイナンの後部バーニヤにのせて吹き曝した。

（メディアス）

「ジャネット！！止まりな！！聞こえないのかいジャネット！！何をしているユァンラオ！！ジャネットを止めるんだよ！！」

（ユァンラオ）

「ふっ。そいつは無理だな。俺も行くからな。」

そんな無謀ともいえる「特攻」を開始したジャネットに、驚いたような表情で怒鳴り声を上げたメディアスだったが、勿論、ユァンラオもこの女隊長の指示に従うつもりは無かった。

ユァンラオは、戦闘用ゴーグルをゆっくりと装着すると、自分の搭

乗するリベーダー2の強烈なバーニヤ群を吹き上がらせながら、怪しげな笑みと共に小さく呟いて見せる。

（ユァンラオ）
「面白い女だ。くっくっく・・・。」

圧倒的大多数の敵を目の前に、無謀な猪突を繰り出して生き延びられるはずも無い。

それは何も知らない子供ですら、簡単に理解できる程の馬鹿げた行為であることは確かである。

しかし、彼は不敵な笑みを絶やさないまま、身の毛もよだつ殺戮の渦中を目指し、彼女の後を追う様にリベーダー2を駆り出したのだった。

０４－０９：〇ディップ・メイサ・クロー［８］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ０９「ディップ・メイサ・クロー」

メイサ・レフト４を悠々と南進している帝国軍戦車部隊の後方で、２４両もの地対空車両「ライパネル」に囲まれた大型トレーラーの司令室内に、じっと戦況を見つめる男が一人。

高級そうなペンを右耳の上に挟み込みながら両腕を組んでいた。

彼を含む一部の兵士達は、自分達が「囮」であることを認識してはいたが、誰しも派手にやられて見せるような「きな臭い演技」を振舞おうなどとは思っておらず、寧ろ自分達の手によってトゥアム共和国副都心リトバリエジへと侵攻する、足がかりを築かんばかりの意思を、熱く滾（たぎ）った闘争本能と共に抱いていたのだ。

しかしこの時、そんな意気を巻いた戦闘集団の手綱を握るエムレ・コラーデ少佐は、予測しえた共和国軍の攻勢の背景に、何ら脅威となりえる要素が含まれていない事に気づくと、なにやら面白くもなさげな表情を浮かべて、隣に座った作戦参謀に、幾度も戦況を問うのであった。

（エムレ）
「敵航空支援部隊は確認しているか？」

（アンダーソン）
「いいえ。未だ共和国軍の航空部隊が姿を現すような気配はありません。」

（エムレ）
「ふむ。降下したＤＱ部隊の動きも緩慢だな。このまま一気に広場を突き進んでも良いが、どこと無く間抜けすぎはしないかね。アンダーソン軍曹。」

その上官の問いに対し、長い顎に生え揃った髭を右手で擦る仕草を見せたアンダーソンは、戦術モニターをじっと眺めながら何かを考え込んでいたようだったが、やがてゆっくりと口を開いた。

（アンダーソン）
「共和国軍が何かしらの罠を張り巡らしていたとして、我が軍の進軍を食い止めるためには、それなりに物理的要素が必要となります。現在のところ降下したＤＱ部隊以外に、目ぼしい戦力が見当たらないことから推測すると、我々は全く相手にされていないのかもしれません。恐らく共和国軍は、メイサ・センターを南進する、我が軍の主力部隊へと戦力を注力するということなのでしょう。」

聊か不満げな表情を醸し出すエムレに対し、その御機嫌を取ろうともしない作戦軍曹が、淡々とした口調で思いの丈を並べて見せる。

エムレとしては、如何に自分達が囮部隊である事が露呈したのだとしても、それなりに大規模な抵抗があって然るべきと考えていたのだが、実際に蓋を開けてみれば、大量の戦車部隊が姿を現すでも、航空戦闘機が飛来するでもなく、たった十数機のＤＱ部隊が降下してきただけである。

一度息を吹きかければ、いとも簡単に吹き飛んでしまわんばかりのＤＱ部隊を、強大な戦車部隊の圧力によって踏み潰し、弱者の惨めな姿に高らかな笑いを響かせる趣味など、この勇猛な指揮官は持ち

合わせていなかった。

彼はそうせざるを得ない状況を作り出したトゥアム共和国軍に対して、沸々と沸き起こる失望の念を込めた舌打ちを奏でると、耳の上へと乗せたペンを再び手に取り、クルクルと起用に指の間を這いまわせながら言った。

（エムレ）

「望まれようが望まれまいが、我々の成すべき事は一つ。いずれにせよ目の前に立ちはだかる敵はすべて掃討し、共和国軍の意識をメイサ・レフト４へと引き付ける事だ。どうかね。確かにそれが罠である可能性は高いが、その誘いに乗る素振りを見せる事も、我々には必要だと思うのだがね。」

（アンダーソン）

「そうですね。」

エムレの示した言葉には、無能たる指揮官をイメージさせる雰囲気は感じられなかったのだが、どこか曇りがかった表情を浮かべたアンダーソンは、極控えめに短い返事で、その言葉を肯定して見せただけだった。

（エムレ）

「なにやら不満そうな面持ちだね。アンダーソン軍曹。それほど敵主力部隊を宛がわれたメイサ・センター部隊のことが心配かね。君の考えを聞いておこうじゃないか。」

そう促したエムレの表情には、どこか興味津々な思いが滲み出ている。

３８歳の指揮官エムレに、３６歳の作戦参謀のアンダーソン。

おおよそ同年代であると言えるこの二人は、見た目が違うのは当たり前としても、性格的にも思考的も異なるということは、既にお互い熟知していたことだ。

考え方の違う人間を傍らに置いて、思うような指揮が取れなくなることを懸念して、常に上官であるエムレの意思を真っ向から否定する事の無いアンダーソンなのだが、安易に増長するでもなく、自分自身の考えを真っ直ぐに発するこの彼の思考を、エムレは頭ごなしに阻害することは無かった。

（アンダーソン）
「我々は囮部隊であると同時に、リトバリエジ都市の占領を目的とした貴重な戦力です。如何に主力部隊であるパデ将軍の軍団が、精錬された兵士達によって構成されているからとは言え、両主力部隊同士の戦闘ともなれば、我が軍もそれなりの損耗を被る事となりましょう。」

（エムレ）
「ふむ。」

（アンダーソン）
「共和国軍の思惑がどうであれ、今現在、我々の目の前に大きな障壁は無く、これを機に全力を持ってシローデス平原へと進軍を果たし、敵部隊の側面から挟撃するのが得策かと考えます。」

（エムレ）
「ふむ。」

再三に渡り、このアンダーソンの言葉に頷いていたエムレだったが、彼はゆっくりと戦術モニターへと視線を移すと、手に持ったペンを作戦指揮卓の上にポンと放り投げた。

決して軍人としてのアンダーソンの考え方が間違っているわけではない。

寧ろ、戦場で勝利を掴み取るのに最適な作戦プランであっただろう。

しかしエムレは、今回の南進部隊全軍の長である「パデ・ピブレジ将軍」の言葉を借りて、アンダーソンを諭すように語り始めた。

（エムレ）

「まさにその通り。アンダーソン軍曹の言うことは正しい。戦術レベルにおける作戦プランとしては素晴らしいものだ。しかし、今回の南進作戦においては、決して局地的な戦況の優劣が物を言うわけではない。最終的に命ぜられた軍事目標が「大都市」であることを考慮すれば、少しは戦局の見方が変わるのでは無いかね。誰しも、一般民間人が数多く暮らしている大都市で、激しい占領戦など繰り広げたくないものだからな。」

（アンダーソン）

「敵軍を効果的に誘き出す事が成功しない限り、我々としても一気に攻勢に出られないという訳ですね。」

即座にその言葉の意味を汲み取ったアンダーソンが、頷くように納得の意を返した。

たとえ皇帝陛下の名の元に命ぜられた作戦であるとは言え、彼等の総指揮官たるパデ・ピブレジ将軍には、非人道的手段を講じてまで

作戦の成功を掴み取ろうなどとは考えていなかったのだ。

出来る限りリトバリエジ都市部周辺に配備されているであろう防衛部隊を、周囲への被害が及ばない無人の地域まで誘き出したい。

その思いは、たとえ異国の市民に対しても決して損なわれることなく与えられ、この作戦が考案される基礎と成り得たのだ。

（エムレ）

「そういうことだ。パデ将軍は今回の事態を既に予測しておられ、メイサ・センター方面での戦闘においては、全く我々の出る幕ではない。我々は我々に与えられた責務を真っ当する事に専念すればよい。無理に南方へとゴリ押しする必要も無いが、出来る限りそれとは気付かれないように、整然と広場包囲陣の構築を急がせろ。もしこの状況下で我が軍に一矢報いることが出来るとすれば、恐らくは上空からの対地攻撃か、遠距離からのミサイル攻撃だけだ。勿論、そのためにこれだけのライパネルを引き連れてきたのだから、各員には安心して軍務を全うするよう、伝達してくれたまえ。」

（アンダーソン）

「解りました。」

帝国軍内でも評判の高い「切り込み隊長」であるこの上官が、囮部隊などと言う姑息な部隊の指揮官に甘んじているのも、ひとえに南進部隊全軍を司るパデ将軍の人柄がそうさせるのだろうな。

そう思ったアンダーソンは、周囲の人に気取られないほどの笑みを僅かにこぼすと、ゆっくりと立ち上がり、新たな指示を部隊全員へと向けて放つのだった。

０４－１０：〇ディップ・メイサ・クロー［９］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「ディップ・メイサ・クロー」

激しい高低差からなる断崖絶壁に囲まれたディップ・メイサ・クロー。

その大きな渓谷群の左から数えて４本目の通路が「メイサ・レフト４」である。

それまで、その大きな渓谷内部を悠々と南進してきた、帝国軍戦車部隊であったが、途中、大きく左右の崖が開いたＮ－４５ポイント付近で、しばらくその歩を緩める事となった。

それは勿論、この地点を目掛けて上空より降下してきた、トゥアム共和国軍のＤＱ部隊と遭遇したからであったのだが、持ちえる帰下の兵力を持ってすれば、いとも簡単に共和国軍の戦線を突破できたであろうが、何故かこの時、帝国軍戦車部隊の行動は、余りに消極的なようにも見受けられた。

その圧倒的多数派である物量に物を言わせて中央突破を計るでもなく、どこか脅えたように壁際を這いずる戦車部隊を、ネニファイン部隊のパイロット達は、一体どのような思いで見つめていたのだろうか。

ほんの少しの間だけ延ばす事が許された自らの命を尊（とうと）ぶように、過去に過ごしてきた楽しい日々に思い耽（ふけ）っていたのだろうか。

それとも、何れは訪れるであろう大部隊の攻撃に対し、激しい恐怖感に煽られて、震える身を必死に押え付けていたのだろうか。

しかし彼等は、各々の感情を各々の心の内に押し込めたまま、逃げ出したい気持ちを鞭で駆り立てて、己の現実と向き合わねばならなかったのだ。

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。とりあえず高機か。」

そんな過酷な状況に直面した最中にありながらも、奇妙な笑みを浮かべたままの男が小さく呟いた。

そして、彼に先行して全速力で敵軍へと特攻を決め込んだ一人の女性が駆る、人型機動兵器ＤＱアカイナンの後姿を見つめながら、彼はゆっくりと顎に生え揃った無精髭を擦って見せるのだ。

帝国軍と共和国軍、両陣営の意思とは完全に乖離（かいり）した二人の行動は、まさに命知らずともいえる行為に他ならなかったのだが、彼等は全く臆することなく、前面へと展開を始めた狂気に満ちたハイエナの群れへと狙いを定めていた。

メイサ渓谷内でもかなり幅が広がるその地域は、谷底の中心部に１本の舗装された道路が存在する以外は、疎らに大きな木々が聳（そび）え立つだけの、凹凸の激しい不整地となる。

勿論彼等は、見晴らしの良い渓谷中央付近を走行して、態々（わざわざ）敵の戦車部隊の標的になるような愚行は犯さなかったものの、まさにその行動自体が愚行そのものに他ならなかった。

（ジャネット）
「来たわね・・・。やっと・・・。」

それまで、役立たずとしか称することの出来ないサーチレーダー上に、薄ぼんやりと敵機の反応が僅かに見て取れる位置まで到達すると、小さく呟いたジャネットの表情が、不意に強張りを見せた。

そして、まもなくＴＲＰスクリーン上に映し出された白い蜘蛛が、北方で不気味な横滑りをしながら踊り狂う様に視線を据え置き、彼女は纏う鋼鉄の鎧の走行スピードを更に最大限まで引き上げ加速する。

やがて、一斉に無秩序に踊りだした１０機のグアルディオアラの内の１機が、迫り来る無謀な灰色のＤＱ１機に狙いを定めると、前面に競り出した左腕に固定されているスタンディスチャーから、気持ちの悪い色めいた光を放った。

これは物理的実体を伴った破壊兵器ではなく、指向性エネルギー砲の一種であり、外部からの破壊を目的とした兵器がその大半を占める中で、珍しくもその機械内部の電気系統や計器類へのダメージを目的とした兵器である。

実際問題として、このような電気的衝撃派を防ぐためには、外界との絶縁処理が必要不可欠なわけだが、圧倒的稼動部分の多いＤＱと言う精密機械において、その全てを防ぎきることは不可能である。

現在では対ＤＱ用兵器として、もっとも有効な火器の一つともなった「スタン系兵器」だが、この火器がかなり高価であるという事と、ＤＱ以外の単純構造兵器の多くが、十分な対策を講じている事からも、あまり数多くは出回っていない火器であった。

勿論この時、その兵器の存在だけは知っていたジャネットは、伝え聞いた対処法を行使したに過ぎなかったが、それでもそれは、確かに効果的な対処法であったことを結果を持って示して見せた。

彼女は即座に、アカイナンの腰部分に装着してあった「デコイ」の一つを前面に射出すると、右足でフットペダルの角度を調節し、大地を削り取るように両足のエッジを利かせて急減速を試みる。

そして、直後に緊急回避行動を持って左手に大きく機体をスライドさせると、標的を見誤った電気的衝撃派を一手に引き受ける事となったデコイが、眩い閃光を放って朽ち果てた。

余りにも単純な方法だが、一度デコイを射出するタイミングを逸(いっ)すれば、彼女自身がデコイと同じ運命を辿らざるを得なかったはずであり、まぐれとは言え高ぶった意識が見せた条件反射は、絶妙のタイミングで発動したのだといえよう。

しかし、今の彼女にとって見れば、そんな些細(ささい)な結果に、喜びを表現している暇などあるはずもなく、兵士達の恐怖心を煽り立てるほどの相手を前に、決して恵まれてはいない己の戦闘能力をフル回転させるのだ。

彼女はアカイナンの左肩に装備された１２０ｍｍミドルレンジキャノン砲と、左手に持ったグレネードガンの火器コントロールを操作しながら、右手に装備したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４を迫り来る先頭のグアルディオアラに向けると、激しく弾丸を放ちまくる。

無論、あからさまに見て解るような単調な攻撃をそのまま食らってやるほど、帝国軍パイロットの技術が劣悪なはずもない。

６本の足で起用に大地を引っ掻きながら移動速度を調節すると、グアルディオアラはまさに本物の昆虫のような気持ち悪い動きを見せ、ジャネットの攻撃を小気味良くかわして見せた。

しかしジャネットは、更に構えたグレネードガンで、この白い蜘蛛の退路を断つと、回避速度を鈍らせた相手目掛けて、大きな叫び声を吐きかけた。

（ジャネット）
「そこぉ！！」

３連続攻撃の最後を飾る１２０ｍｍミドルレンジキャノンの銃口が重たく響く低音を発すると、吐き出された高威力な砲弾が吸い込まれるように、グアルディオアラの機体中心部を貫いた。

（ユァンラオ）
「ほぉぉ・・・。」

それまで水面を滑るかのように移動していていた白い蜘蛛が、被弾の衝撃で突き刺さってしまった片足を軸に弾け飛ぶと、その反動で一気に大地を転がり始める。

そして、大きな爆発を持って四散した無様な「蟲ケラ」に対し、侮蔑（ぶべつ）の意思を込めた笑みを浮かべるユァンラオが、珍しくも感嘆の声を発してしまった。

この女・・・。

ＤＱＡで見た時とは随分違う感じを受けるな。

研修時には出来もしなかった連続性ファイアーコントロールがいつのまにか出来てる。

ただ見てくれだけの能無し女ではないのか・・・？

ふと、そんな思案をめぐらせていたユァンラオは、以降低速戦闘を余儀なくされた９機のグアルディオアラが、二人の周囲を取り囲み始めようとしている最中にあっても、どこか落ち着いた雰囲気を保ったまま、しゅりしゅりと無精髭を撫で回しているのである。

威風漂う古来の武将が、大量の敵兵に囲まれながらも、自らの名を高らかに誇示するかのような態度で見回すその視線には、全く恐怖心と言うものが交えられてはいない。

（ユァンラオ）

「ふっふっふ。ジャネット。ひとつだけいい事を教えてやろう。」

そう一つ静かに言葉を発したユァンラオは、先行したジャネットのアカイナンを右手方向から、一気に急襲しようと試みたグアルディオアラに対して、ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の弾丸を正確に撃ち込んだ。

すると、拍子抜けするほど簡単に、その弾丸の直撃を許すことになってしまった２機目の被害者は、全く言う事を聞かなくなったバランス制御を操る事も出来ないままに、ずるずると胴体部分で地面を這いずる事となってしまった。

そして、ぶすぶすと異臭立ち込める黒煙を噴出し始めた被害者に、既に興味の欠片も示さなくなったユァンラオは、そのままの口調で

灰色の機体を操るジャネットに言葉を続ける。

（ユァンラオ）

「乱戦ではどれだけ多くの事象を把握しきれるか。それがすべても言える。味方の動き、敵の動き、敵の意識がどこにあるか。そして、それ自体もコントロールする事が必要だ。ＤＱの操作技術に長けているなど、二の次でいい。」

彼の撃ち抜いたグアルディオアラのパイロットの意識が、特攻を始めたジャネットにあった事は確かであり、更に言えば、ジャネット自身、９機もの敵意を前にして、一体どの敵意に応じて戦闘を開始すべきか、判断に窮していた事も事実だ。

対峙する１対１の戦闘局面においては、完全に両者の持てる戦闘技術の優劣が、そのままお互いの勝敗を左右することになるのだが、多対多の戦闘局面においては、必ずしもその提言が当てはまるわけでもない。

一番手っ取り早く相手を撃破する方策としては、相手が警戒すべき意識の外からこれを制する攻撃を仕掛けてやれば、通常の数倍の確立を持ってして成功を収めることが出来るであろう。

勿論それは、言う程に容易なことではないことは、誰しもが知るところであったのだが、不思議とこの時、彼等二人を付け狙う８機の敵意が、極自然にジャネットを優先して定められている事に彼女は気が付いた。

おおよそ鋼鉄の鎧に身を包んで戦う両軍としては、お互いのパイロットの容姿や思考、技術や経験など、簡単に読み取れるはずもないのだが、それでも全く平等に与えられるべき相手の殺意に満ちた視

線は、彼女の身体を好んで舐め回す様に取り憑いている様であった。

（ジャネット）
「なにそれ。私の動きが敵に読まれてるとでもいいたいの？」

（ユァンラオ）
「ふっ・・・。こういう戦場では、お前みたいに暴走するだけの馬鹿な猛牛がよく死ぬって事だ。」

普段、こんな露骨な表現を用いられると、すぐにカチンと来てしまうジャネットだが、この時の彼女はどこか妙に落ち着いていた。

それが何故なのかは、彼女にも解らない。

ただ、燃え上がるような高揚感を心の内部で燃焼させ続けながらも、どこか自分の身体から幽体離脱でもしたかのように、客観的に自分自身の姿を見つめられるほど、冷えた思考が不思議と彼女の全身を包んでいるかのようだ。

８機もの高機に囲まれたまま戦闘を続行して、簡単に生き残ろうなどと、都合の言いことを考えているわけでもない。

私はただ・・・。私はただ、帝国軍の人間を一人でも多く・・・。

帝国軍の人間を一人でも多く道連れにしてやりたいだけ！！

（ジャネット）
「うっふふ・・・。出来るなら私を止めて見せてよ。ユァンラオ。」

気持ち悪いほどの薄ら笑いを浮かべたジャネットの意識は、一体、

誰へと向けられたものだったのだろうか。

ふうっと溜め息をついて見せながら、サーチレーダー上に蠢く８つの機影を視線で追った彼女だったが、決して彼等に向けられたものでは無かったのだろう。

（ユァンラオ）

「んん？一体何を止めろと言うんだ？攻撃的な意識をか？違うだろ？」

少しばかり意地悪な言い回しでジャネットの意識を促したユァンラオだが、そんな彼の言葉に左右されるでもなく、彼女は自身が産み落とした闘争心の炎を消し去るつもりは無かった。

このままこの女の死に様を見届けるのも、それはそれで楽しいかもしれないな・・・。

口には出さないまでも、ユァンラオは厭らしい程の満面の笑みを浮かべながら、目の前を駆け出すアカイナンに呼応するように、リベーダー２の強烈なバーニヤを吹き上がらせた。

04－11：○ディップ・メイサ・クロー［10］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「ディップ・メイサ・クロー」

二人の命知らずな戦士を素早い動きで包囲し始めた白い蜘蛛達は、一糸乱れぬ隊列を組んでとまでは行かないまでも、それなりに精錬された秩序を有し、数的にも勝る彼等の方が、戦場に置ける主導権を握っているように見えた。

しかし、実際に彼等の胸中がどうであったかと言えば、高速機動兵器として名を馳せた自分達の姿に恐怖して、逃げ惑う敵ＤＱを追い回す狩りの時間を嗜むつもりであったのだが、事もあろうか、たった二機のＤＱの特攻により、あっさりと二人の僚友を失う羽目となってしまったのである。

混戦状態となってしまったため、後方戦車部隊からの支援砲撃を得ることは出来ないのだが、それでも機数的に勝る彼等の方が、より意識を暗黒の淵へと迫られているのは何故だろう。

全く常識を逸脱した振る舞いを見せ付ける灰色のＤＱと漆黒のＤＱの姿は、照射レンジ越しに覗いているからなのかも知れないが、グアルディオアラのパイロット達の意識の中で巨大に膨れ上がり、何かしら見えない鎖で縛り付けられているような錯覚さえ覚え始めていたのだ。

そんなはずはない！

そう己に鞭を打って心を奮い立たせ、負たる感情を自ら断ち切らん

とする、グアルディオアラのパイロット達は、これまで厳しい訓練を耐え抜いてきた優秀な人材達である。

勿論、相手が如何に不測的行動を取ったからといって、それに手を拱(こまね)いているような、大人しい人間達ではなかった。

そして、ようやく普段どおりの意思を示し始めた1機のグアルディオアラが、途出したネニファイン部隊の食み出し者二名に対して、右手に固定されたライフルガンを構えると、激しく焚(た)かれたマズルフラッシュの閃光と共に、殺意を含めた弾丸を大量に浴びせかけた。

しかしこれは、余りにもあからさまに彼が銃口を構えて見せたため、いち早くそれを察知されることとなってしまい、猛烈に吹き上がらせたバーニヤに乗って、お互い左右へと散開するように弾けた二人に、その攻撃が命中する事はなかった。

（ユァンラオ）
「ジャネット。ツーマンセルな戦い方を教えてやる。お前は物覚えが悪そうだが、死にたくなければ身体で覚えるんだな。」

（ジャネット）
「ふんっ！偉そうに！たとえ生きて帰れたとしても、何の恩にも着ないからね！」

左右へと散り散りに別れた二人が、着弾地点から半円運動を描き出すように後退旋回を見せると、それに続いてグアルディオアラ隊が４機づつに散開し、二手に分かれた男女の後を追跡する。

この時点で対峙したお互いの戦力比が「８対２」から「４対１」と変化したのだが、数字上の比率としては何ら変化が見られたわけで

はない。

しかしこの時、不気味な笑みを浮かべて見せたユァンラオの意図を、正確に汲み取ることが出来た者が果たして何人いたのだろうか。

（ユァンラオ）

「ジャネット。この状況は敵８機に取り囲まれていると捕らえるな。今の敵の意思はたったの２つ。お前に対する殺意と俺に対する殺意の２つだ。見た目の敵数を数えるのではなく、敵の殺意の単位を数えろ。」

普段から物静かで、決して不要なことには口を開かないイメージのあったユァンラオが、珍しくも何を思ったか楽しげな口調で白い蜘蛛達の殺意をかわしながら語り続ける。

彼としては、久しぶりに滾る血流により、高ぶった思いを馳せるように陽気付いていたのかもしれないが、それは長らく戦地に身を投じてきた戦士たるユァンラオだからこそ出来る芸当なのであって、ましてや初めて戦場を目の当たりにしたジャネットに、簡単に要求できる内容ではなかった。

言ってしまえば、ジャネットの能力程度では、対峙するグアルディオアラのパイロット一人分にも満たない事は事実であり、要求した内容を体言も出来ないようであれば、あっさりと死んでしまえと、ユァンラオの不気味な笑みが示していたのだ。

この時、ジャネットにはユァンラオの意図する真意が理解できていた訳ではないのだが、次の瞬間、彼女へと襲い掛かった白い蜘蛛の末路を辿ることで、少なからずその意図する扉に手をかけることまでは出来たのだった。

激しい横Gを身体に受けながら、大きく旋回を見せていたアカイナンに、追走したグアルディオアラの1機が、その進行速度を緩めさせる事を意図したグレーネード弾を発する。

素早く急激に旋回方向をねじ曲げることで、ようやくこれを回避したジャネットだが、彼女が即座に反撃に転じようとするよりも早く、既に2番手の攻撃手となるべきグアルディオアラのライフルガンの照準が、正確に彼女の機体に狙いを定めていた。

これは絶対にまずい・・・。

そう感じた彼女の肌身に、鳥肌を立てるような悪寒が駆け巡った瞬間だった。

ガンガンガンガン！！

（ジャネット）
「！？」

それは彼女が攻撃態勢へと移るよりも早く。

そして、グアルディオアラが構えたライフルガンから弾丸を放つよりも早く。

ユァンラオが完全に不意打ちとなる攻撃を、真横からこのグアルディオアラに叩き入れたのだった。

またしても快走していた勢いのまま大地を転げる様に爆発した3機目の脱落者を、驚いた表情で見入ってしまったジャネットに、ユァ

ンラオが注意を促すように言葉を投げかけた。

（ユァンラオ）

「外せば二流。気付かなければ三流以下だ。」

一瞬、ハッとした表情でジャネットがユァンラオの方へと視線を移すと、不意打ち攻撃後の隙を突かれて、グアルディオアラの激しい攻勢に曝されているリベーダー２の姿が見て取れた。

猛り狂ったまま漆黒のＤＱを追い回す４機の白い蜘蛛の姿に、ジャネットはえもいわれぬ不思議な感覚を覚えながらも、何かしらユァンラオの言わんとしていた事に気がついたようだった。

この時、彼を追走する４機のグアルディオアラは、ジャネットに対して明らかに無防備な姿を曝け出していたのだ。

ジャネットはすかさず、この４機目掛けてＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の銃口を差し向けようとするのだが、彼女を追走する残り３つの殺意の刃が、それを簡単に許すことはなかった。

バチバチとコクピット内部まで響き渡ったその嫌な音は、明らかにアカイナンが被弾していることを示しており、その音に重ねて鳴り響いたけたたましいワーニング音が、彼女の苛立ちを増幅させた。

相手の攻撃的意思は、どんなに素早いものであったとしても「一瞬に付き一つ」。

つまりは一方が引き付けた意識を、もう一方が撃破するという単純なもの。

しかし・・・。

言うのは簡単だけど、こんなの絶対無理よ！！

相手の見せる隙と言ったって、ほんの極僅かな時間じゃないの！！

それを引き連れた敵機の攻撃をかわしながら、狙い撃てなんて！！

呆れてものも言えないわ！！

死にたくなければ身体で覚えるんだな。

彼女は響き渡る被弾音に小さく舌打ちしながらも、機体被害状況を示すモニター上に、ほとんど実質的損害が示されていないことを確認すると、思いっきりフットペダルを踏みしめて大声を張り上げた。

（ジャネット）

「ちょこまかとうざったいのよ！！こいつ等！！」

激しく沸き起こった怒気をばら撒く様に、ジャネットが半場強引に一匹の白い蜘蛛へと目標を定めると、猛然とアカイナンを駆り立てた。

もはや彼女には優雅に相手の攻撃をかわすつもりもなかったのだが、余りに無防備で大胆な彼女の行動に虚を突かれてしまった対象者は、いとも簡単に彼女の接近を許す羽目となってしまった。

ドガッシャーーン！！

そして、構えた銃口からは一発も弾丸を放つこともなく、ただその対象者との距離を詰めることを目的としていたアカイナンは、グアルディオアラの機体に対して信じられない程に古典的な「横蹴り」を浴びせかけたのだ。

恐らくはグアルディオアラのコクピット内には、パイロットに注意を促す警告音が鳴り響いていたはずであったが、少しも弾丸を浴びせかけられるような気配もない状況に、一瞬適確な判断を下すことが出来なかったのであろう。

鈍い金属音を周囲に撒き散らしながら、ジャネットはすかさず白い蜘蛛の足1本を、思いっきりアカイナンの足裏で踏みつけると、大地に杭を刺し込むように相手の自由を奪い取ってしまった。

まさか!?と、グアルディオアラのパイロット達は思ったかもしれない。

無論それは、彼等からしてみればほんの一瞬の僅かな時間でしかなかったはずだ。

しかし、その一瞬の隙を抜け目なく狙い定めることが出来るのが、ユァンラオの歴戦の猛者たる所以であろう。

同士討ちを恐れて彼女の外円を周回する事しか出来なかった白い蜘蛛のパイロットが、たった2秒にも満たない時間、この灰色の敵機を睨みつけていた時、突然魔法にでもかけられたのではないかと錯覚するほど激しい業火の渦に包まれたのだった。

そして彼は、その原因を作り出した犯人の姿に視線を移すことも出

来ないまま、猛烈な爆風に身を引き裂かれて絶命を迎えることとなる。

（ユァンラオ）
「殺れるぞ。」

もはやユァンラオの独り言とも取れるその小さい言葉に反応を見せたジャネットが、すぐさま振り回したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の銃口を狙い定め、ユァンラオの後方から襲い掛かろうとするグアルディオアラ目掛けてトリガーを絞る。

勿論、人質を足場に据えて相手の無為な攻撃に曝される恐れのなかった彼女が、この絶好の攻撃タイミングを逸（いっ）することはなかった。

急激な旋回を見せていた白い蜘蛛の、後部グレネード弾装付近で激しく火花が数回光り輝くと共に、大量に放出された熱量を持って吹き飛ぶ真っ白な破片。

そして更に、拘束された足一本を強引に引き千切って、不名誉なる人質のレッテルを剥ぎ捨てた悲しき蟲ケラもまた、容赦なく浴びせかけられた彼女のグレネードガンの前に、朽ち果てることとなる。

（ユァンラオ）
「ツーマンセルでは必ず一方が囮。一方が狙撃手。囮は相手の意識を奪い、狙撃主は相手の命を奪う。本来は、それが交互に繰り返し行うのが理想だがな。」

（ジャネット）
「私はあなたにとっての囮なの？」

大柄の男と長身の女が戦闘を開始してから、一体どれだけの時間がたったと言うのだろうか。

溢れ出すぐらいに高ぶった意識の中で、何時間も身を投じていたような錯覚を覚えてしまうほど、彼女は激しい吐息を繰り返しながらユァンラオに問いかけた。

自分でも信じられないくらい・・・。

無類の機動力を誇る高速機動兵器の新型機「グアルディオアラ」１０機を相手に、未だ自分は生き永らえる事が出来ている。

しかも、既にその内の６機をいとも簡単に葬り去ることに成功していたのだ。

（ユァンラオ）

「ふ・・・。囮には囮なりの技術と経験が必要だ。今のお前の腕前は囮としてすら信頼に値しない。せめて俺のために這いずり回って敵を撹乱（さくらん）させてみろ。死ぬ気でお前の望みを叶えてみろ。」

彼女の目の前に示された結果は、ジャネット自身の力だけでは決して引き寄せることができない戦果であったことは、彼女自身解っていたことだったが、しかしそれでも、彼女は必死になって立ち振る舞い、彼の要求する過酷な戦闘に耐え抜いて見せたはずだった。

（ジャネット）

「・・・あなたも冷たい男。」

彼女の働きぶりを褒め称えるでもなく、寧（むし）ろ見下すような口調で罵（ののし）ったユァンラオに対して、ジャネットが軽い舌打ちと共に吐き捨て

る。

自分ひとりでは何も出来ないことは解っている。

望んだって叶うことはないと解っている。

私が愚かしい女だってことも・・・。

救い難い馬鹿な女だってことも・・・。

（ジャネット）

「私の望みを叶えることなんて出来やしない・・・。死んで叶うのなら・・・。死んだっていい！！」

大きな声を張り上げて、再びＴＲＰスクリーン越しに戦場を睨み付けたジャネットだが、新たなる敵を求めて彷徨う視線が「ある一点」を通過すると、一瞬彼女の瞼（まぶた）が閉じられてしまった。

そして、歯をぎりぎりと食いしばるように身を固めた彼女は、薄っすらと濡れた瞳の奥に、再び激しい怒りの炎を宿したのだ。

ジャネットの思いを縛り付けた「ある一点」。

それは彼女にとって、一生忘れることの出来ない心の傷を作り出した、忌まわしき場所であった。

04－12：○ディップ・メイサ・クロー［11］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ12「ディップ・メイサ・クロー」

ディップ・メイサ・レフト4渓谷内に犇く帝国軍兵士達の多くは、投入した兵力の数から推測しても、トゥアム共和国軍との激しい大激戦を、演じることになるであろうと予測していたはずであった。

しかし、一旦開かれた戦線は拡大の一途を辿るどころか、寧ろ整然と縮小され行くようにも見えたのだ。

南進する帝国軍戦車部隊はしばしその進行速度を緩め、溜池に注ぐ緩やかな雨水のように、広がりを見せた渓谷内に、徐々に外円からその勢力を染み出すに止めている。

そして、対峙するトゥアム共和国側もまた、初弾に投入した機動歩兵部隊ネニファイン以降、新たな兵力を投入する気配を見せなかったのだ。

それは、ゆっくりと後退を見せる少数派に対し、多数派が無為な行軍を強いなかった事で、細い小路地に敷かれた小さな戦線は、今しばらくの膠着を保ちえたのであった。

どす黒く頭上を覆い尽くした雲海から見下ろせば、実しやかに奇妙なバランスの上に成り立っている様にも見えたが、それはそれとして、両軍共にそれなりの事情があったという事だろう。

お互いがお互いの生命を貪る戦地において、如何に物理的圧力に曝

されなかったとは言え、少数派にかかる心理的負荷は、目に見えずとも確実に彼等の心身を蝕む程の大きさを誇っていたはずである。

しかしこの時、ある程度前線から退くことで出来た微かな余裕の中で、驚き思って賞賛すると言うよりは、固唾を飲んで見守る４人の視線がそこには有った。

（メディアス）
「な・・・なんなのさ・・・。こいつ等・・・。」

（ホアン）
「たった2機・・・。しかも僅かな時間で6機!?高機6機をスクラップにしちまったのか!?」

彼等が後退を余儀なくされてから、ものの１０分程しか経過していないにもかかわらず、サーチレーダー上に映し出された高速機動兵器グアルディオアラの機体反応は４つ。

勿論これは、阻害粒子に阻まれた結果を投影したものではないことは、彼等の目の前で繰り広げられた戦闘の経緯がそれを証明していたのだ。

彼等の指示を完全に無視した挙句、高機と称され兵士達を恐れさせた機種へと猪突するなど、如何に卓越した技術を有するパイロットであっても、その生命を保証する事など出来るはずも無く、この二人に至っては、絶対に生きて帰ることなど無いのだろうと思っていた。

しかし、ある種蔑む様な視線に冷笑を重ねて、二人の末路を眺めていた彼等の表情は、ほんの僅かな時を経ただけで一変してしまった

のである。

（バーンス）

「・・・信じられん・・・。」

トゥアム共和国内でも、彼ほどに過酷な戦場を知り尽くしている人間はいないとまで称されたバーンスでさえ、この二人の戦いぶりには驚きを禁じえなかった。

逆に、彼のような人物から言わせれば、明らかに常識を逸した変人による奇行の一種でしかないと評価せざるを得ないのだが、あくまで結果は結果として、この時、彼等自身はこの二人の働きによって、少しの間降りかかる脅威から身を遠ざけることが出来ていたことも事実だ。

まるで劇場にて三流以下の戦争映画のワンシーンを見ているかのような、第三者的な視点でその戦いにじっと見入っていた彼等だったが、不意に撃ち鳴らされた激しい砲火によって、儚い夢見心地気分を害されたのだった。

北方へと向かうにつれ、次第に狭くなるその渓谷の隙間から、オレンジ色の光を帯びた無数の鋭い刃が撃ち上げられる。

自ずと色めき立つ感情を抑えきれない彼等の願望は、それまで待ち焦がれていた友軍の到着を期待したものであったのだが、それは寧ろ意外な形で否定されることとなった。

彼等ネニファイン部隊を上空から統率するファントムが、その無防備な機体を曝(さら)け出したまま、真っ黒な雲の下へと舞い降りたのである。

（ホァン）
「馬鹿野郎が！ファントムで雲下に降りてきやがった。」

（ソドム）
「お～。お～。鍬も鋤も持たずに天から舞い降りし女神は、一体俺等に何を齎してくれるんだろうねぇ。お供え物として俺達も不満げな花火を打ち上げたら、少しはご利益あるのかな。」

（メディアス）
「ソドム。あんたちょっと煩いよ。」

ソドムが女神と称する輸送機へと浴びせかけられた激しい対空砲火は、帝国軍戦車部隊後方に位置するライパネルから放たれたものであったが、如何に射程圏外ギリギリを漂っているからとは言え、1発でも当たれば撃墜は免れないという高火力を有しているのだ。

しかもその射程範囲は、停滞した帝国軍の前線にたまたま押さえ付けられているからこそ成り立つ境界線である。

帝国軍の指揮官からは「吹けば飛ぶ」とも見なされていた戦線が一度崩壊を見せれば、単なる空に浮かんだ標的と成り下がる運命なのだと知りつつも、一体、何を目的としてこのような愚行を犯すのだろうか。

一瞬、脳裏に様々な憶測を駆け巡らせたメディアスが、耳障りな戯言を垂れ流す一人の男に苦言を呈した時、阻害粒子に乱されながらも綺麗に澄み渡った声が彼女達の元へと届けられた。

（チャンペル）

「・・・ントムよりネニ・・・ン各機へ。・・・ザザッ・・・。通信システムを・・・モードからＡモードへ切り替え・・・ザー・・・。以降、各小隊の指揮権は司令部が・・・ザザッ・・・す。繰り返します。各機通信システムを・・・あっ。」

しかし、体裁を重視するが故に遠回りな発言から切り出してしまった通信オペレーターは、驚きの声を持って伝達者としての権利を剥奪されたことを知らせると、通信マイクを取って変わった意思を発する者が、抱く思いを熱く内に秘めたままにして、多少上ずった声色で言葉を続けた。

（サルムザーク）

「ネニファイン各機は通信システムをすべて開放しろ。今後の行動については、すべて俺の指示に従ってもらう。お前等が生きて帰るためにも、我々には少し時間的猶予が必要だ。本隊護衛任務に回されていたキリン隊が到着するまで、なんとしても戦線の崩壊を阻止しろ。新たな指示は戦況を見渡しつつ、逐次各隊員に直接伝達する。現在、帝国軍は徐々に広場両翼へと展開しつつあるが、後続部隊の多くは未だ小路地の中だ。途出した右翼戦車部隊に細心の注意を払い、ライン陣形を保ったまま緩(ゆる)やかに後退せよ。」

かなりの駆け足で発せられたネニファイン部隊長の言葉だが、少なからずその音声が高濃度フィールドに阻害されていたことを考慮すれば、それなりに聞き手に解りやすい、簡潔な指示であったのかもしれない。

地表付近へと滞留しやすいフィールドの性質上、地対地よりは、地対空の方が通信システムをリンクすることが容易であり、ファイントムが無理にでも雲下へと姿を現すに至ったのは、ネニファイン部隊の通信網の中継点たる上空の拠点を構築するためでもあったのだ。

しかしこの時、戦闘エリア一帯へとばら撒かれた彼の声は、複雑に暗号化した通信内容が復元困難な状況に陥らないためにも、完全に無防備極まりない純粋な音源として発せられていた。
つまりは、彼等のやり取りされる通信の内容は、同じ地域に存在する敵対勢力に対しても筒抜けの状態であるということだ。

これは即時即決が必要とされる戦場において、適確な判断を適確なタイミングで下したいと望んだ、部隊長サルムザークの指示によるものだが、その余りの無防備さに、彼等の部下達は驚きの表情を隠すことが出来なかった。

しかし、実際に過酷な前線に立たされた部下達から見れば、ファントムのように全く戦力にならない援軍の姿よりも、戦況を激変させるぐらいの心強い味方の到着を切に願っているのであり、この部隊長が全く触れることがなかった話題に関して、バーンスが真っ向から問いただした。

（バーンス）
「エアビヘイブ隊到着まではあとどのぐらいだ？」

（カース）
「後退行動は各自の判断に任せるが、最終防衛線をＮ－４５－０９に設定し、最低３０分間はこれを死守せよ。尚、この防衛線を突破された場合、各自の判断での撤退行動に転じることを許可する。」

（バーンス）
「・・・。」

そうか。援軍は無しか・・・。

大きな溜め息を付いて見せたバーンスの視線が、不意に北方に展開し始めていた大戦車部隊の方へと向けられる。

バーンスの発言を完全に無視するかのように、新たな指示を飛ばしたカースの態度は、恐らくは通信状況の劣悪さに偽装した一種の情報封鎖であり、帝国軍にその真意を悟られ無い様にする配慮が成された結果だと思われる。

勿論、彼女は、正確に到着するともしないとも明言してはいないのだが、ファントムが雲下に降下してまで戦況の把握に勤めなければならないあたりからも、新たなる援軍の到着は見込めないのだと、バーンスは悟ったのだった。

（ソドム）
「おいおいおいおい。Ｎ－４５－０９が最終ポイントで、最低でも３０分死守だとぉ？敵さんこちらの十数倍だぞ。無理難題は無理できる優秀な人間に下すべきであって、俺っち見たいな粗悪な人間に、何の期待を抱いているのか、全く理解に苦しむね。」

（メディアス）
「死線の際に迷い込んでも、あんたみたいにいつまでも、ぼやいていられるその性根に期待してるんだろうさ。まぁ。あんたと同列にみなされた私としては、迷惑きわまり無い話なんだけどさ。」

（ホァン）
「いっその事、一気に逃走した方が早いんじゃないか？俺等だけで食い止められる相手じゃないって。」

（バーンス）

「相手がウスノロ戦車だけならそうするだろうよ。お前、中軽量高速戦車相手に足の速さで勝てると思っているのか？態々（わざわざ）身を危険に曝（さら）してまで雲下に降りてきたんだ。あの若造にもそれなりの作戦があっての事だろう。俺は奴の口車に乗せられてやる。まあ、それ以外に良い方法があるなら、前線に出張ってる二人が持ちこたえている間に教えてくれ。」

様々に思いの丈をぶちまけるメンバー達だったが、事に最後に締めくくったバーンスの言葉が、彼等のすべてを物語っていた。

もはや彼等に何ら選択の余地は与えられていないのだ。

現在、メイサ渓谷内に残されたネニファイン部隊メンバーの総数は全部で６機。

メイサ崖上でまだ生存しているならば、アパッチ隊の３人を加えても９機。

そして、後方から合流するであろうキリン隊を含めても、たったの１２機で、様々な機種を揃えた１５０輌からなる戦車部隊の猛攻に耐えなければならないのだ。

もはやそれを成しえるには、人知を超えた神憑り的な恩恵が必要であり、何ら宗教に感心を抱かない彼等でさえ、無為に神たる存在に慈悲を請うのである。

（サルムザーク）

「アパッチ隊の現状把握は出来ているか？」

（チャンペル）

「メイサ上のフィールド濃度は異常に高く、アパッチ隊の動向は全く掴めておりません。恐らくは先ほどの指示も・・・。」

そんな神懸り的采配を暗に切望されるサルムだったが、彼は彼で一個人の人間でしかなく、彼等の無謀な願いに応じる術などあるはずも無い。

依然として厳しい表情のまま、問いかけた若い部隊長は、綺麗な声で返された返答に、しばし親指を噛むような仕草をみせつつ考え込むのだ。

彼自身の心の中に浮かんだ光明とも言うべき一つの作戦は、言うなればありきたりで簡素な手段でもあったのだが、実際にそれを行動に移すとなれば言うほどに安易なものでもない。

しいて言えば、見下ろす渓谷の間に細いロープを一本張り巡らせて、強く吹き付ける強風に煽られながらも対岸まで渡りきるようなものであり、彼にとって、メイサ崖上に存在するアパッチ隊こそが、彼の作戦を成功させるための重要な鍵であったのだ。

本来であれば、雲下へと舞い降りた時点で、アパッチ隊とのやり取りが可能となることを期待していたのだが、それが叶わぬからと言って、彼には簡単にそれを投げ出すことなど出来ようも無かった。

彼は再び燃え上がるような炎を瞳に宿したまま、若い通信オペレーターに向かって新たな指示を出した。

（サルムザーク）

「チャンペル。リプトンサム部隊へ支援を要請しろ。ポイント２－９０において大至急支援砲撃体制の構築を要求するとな。センター

ラインに対しても睨みの利く格好の広場だ。無為に拒絶されることも無いだろう。支援砲撃のタイミングについては、俺の指示を待つように伝えてくれ。」

０４－１３：〇ディップ・メイサ・クロー［１２］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１３「ディップ・メイサ・クロー」

ディップ・メイサの崖上の様相は、その余りに巨大な体躯が作り出す空洞たる森の中と、大きく広げられた枝葉から差し込む弱い木漏れ日が織り成し、一種異様な幻想的風景を作り出している。

大きな凹凸に苛(さいな)まれる事も無く、比較的なだらかな地形が広がるメイサ崖上は、今や四方八方を物理的鉄格子で囲まれた闘技場(コロシアム)の様でもある。

ＴＲＰスクリーンに映し出された静かな森の風景に感銘を受けることも無く、綺麗に囀(さえず)る小鳥達の鳴き声に耳を澄ますことも無い。

せっかちな程に先を急ぐ現代人にあって、忘れかけた緩やかな時の流れと言うものを感じさせてくれる、豊かな精神的安定剤を鏤(ちりば)めた世界がそこにはあったのだが、厳しい表情のまま、しきりに周囲を伺う素振りを見せていた彼女には、そんなものに意識を囚われている余裕は無かったのだ。

「・・・イン。・・・ぎに周った・・・・・・くただ・・・ザザザ・・・。」

（セニフ）
「ルワシー！！ルワシー！！デカブツがそっちに行ってるぞ！！」

それまで、それなりに意思の疎通が可能だった通信システムが、汚

らしい雑音とノイズを交えてお互いの耳を刺すような濁音(だくおん)を奏でる。

透過性と指向性に優れた同システムが、ここまで著しく機能の低下を余儀なくされる地域は非常に珍しいが、素粒子拡散を旨とする妨害フィールドを、あらかじめ人為的に張り巡らせていたことを考慮すれば、それは決して興味をそそられる様な現象でもなかった。

ドゴン！！ドゴン！！ドゴン！！

お互いの意思の疎通を目的とした人知の結晶を持ってしても、容易に望んだ結果が得られない世界に居ながらにして、何故こうも望まぬ不利的状況を示す不快な音だけは、しっかりと耳元まで届けられるのだろうか。

大気を伝って彼女の元へと届けられたその音は、もはや聴覚のみならず、体全体の感覚をも揺るがす程の波動となって、それを感じる者の恐怖心を煽り立てる。

着込んだパイロットスーツの内側に篭(こも)った蒸気が、冷たい汗の雫となって背筋を伝い、彼女は妙な悪寒を感じずにはいられなかった。

そして暗い森の奥深く、彼女から見て右前方方向の密集した木々の隙間に、さらに眩い閃光が2、3迸(ほとば)ったかと思うと、その後を追走するように、決まって耳障りな爆発音が森の中を木霊して周るのだ。

（ルワシー）

「くっそ！！」

彼等の目の前に立ちはだかった巨大なＤＱの攻撃力は、まさに一撃必殺ともいえる高威力を有しており、密集していることの危険性を

悟ったアパッチ隊のメンバー達は、お互いの通信手段を投じる結果となろうとも、散開行動を取らざるを得なかった。

そしてその中でも一際大胆な行動を取っていたルワシーが、「デカブツ」の攻撃的意思を一手に引き受ける羽目になってしまったのも、言ってみれば自業自得と言うことなのだが、この「デカブツ」のパイロットは、どこか根に持つタイプなのだろうか。

自身のＤＱに対して初激を放った一機のトゥマルクに対して、執拗なほどの追撃意思を発しているようにも見えた。

この「デカブツ」は大貴族ストラントーゼ配下のＤＱ開発研究施設で試作された機体であり、未だ固定の型番すらない完全な特注品である。

通称「バスターマンティス」と呼ばれるこの機体は、量産することは不可能であると言われるほど、製造にかかる費用は莫大なものであり、帝国内においてもこの機体以外に同様の機種は存在しない。

（セニフ）
「ルワシー！！もう少し引っ張ってよ！！この根性なし！！」

（ルワシー）
「なんだとぉ！！てめぇがもう少し早く旋回しときゃ問題なかったろがよ！！ちょろちょろ動き回ることしか能のねぇドチビに、とやかく言われる筋合いなんかねぇぜ！！」

ありえないほど巨大な体躯に、彼女達の銃火器程度では全くびくともしない重装甲。

持ちえる火器はそれほどに多くは無いが、腹の下に抱えたガトリングガンの威力は、まさにその一発一発が戦車砲に匹敵するほどの威力が備わっている。

しかも、ぶら下げられた両腕の一本が、超強力なスタン系兵器であることが判明すると、彼女達の行動は大幅な制限を余儀なくされてしまう。

低レベルとしか言いようの無い口論を繰り広げる二人には、もはや呆れて溜め息を付くことしかできないのだが、それでもこれほどの巨大兵器を前に、全く手も足も出ない状況で追い回される身ともなれば、沸き起こる苛立ちを周囲に撒き散らしたくもなるのは当然だろう。

しかし、そんな悲観的状況がアパッチ隊メンバー達を支配していた頃、「デカブツ」の行動を具(つぶさ)に観察していたハインが、一人自分の口の中でのみ発した言葉を噛み締めるかのように、只管状況を打開するための一筋の光明を見出そうとしていた。

（ハインハートル）

「あれだけの巨体にあの重装甲・・・。いくらGシステムを搭載しているとは言え、案外見掛け倒しかもしれんな・・・。」

先ほどからアパッチ隊のメンバー達を追い回し続けているバスターマンティスだが、素早く旋回を見せるトゥマルクの動きには着いていけないようで、その巨大な自身の機体を持て余している感は否めない。

時間を遡(さかのぼ)り、このデカブツの行動軌跡を辿ってみれば、それは一目瞭然の円運動であり、攻撃に際しても一撃離脱がほとんどである。

勿論、超硬質な装甲自体の重みを打ち消すGシステムは、彼等にとって驚異以外の何者でもないのだが、それでも実際に物質自体の持つ質量が変化する訳でもなく、一度付いてしまった慣性力を打ち消すためには、それなりに巨大な加速度を生み出すことが必要となるのだ。

このバスターマンティスが背負う超巨大なテスラポットは、その加速度を生み出すための物であろうが、それでも接近戦において素早い旋回を保証するものではないであろうし、急発進急停止すら容易なはずではなかった。となれば・・・。

人が何かに恐怖心を抱くとき、その要因の多くは自分の想像を超えた何かに対する、漠然とした負の感情にかきたてられる事から始まる。

しかし、逆に注意深くそれを観察し、冷静にそれを分析してみれば、大概の事象は自分の認識する常識の枠から大きく逸脱していることは滅多に無いものである。

ハインはこのデカブツが移動する周回軌道上に先回りするようにトゥマルクを走らせると、密集した木々達に遮られて未だ目視することの出来ない巨大な敵の姿を思い浮かべて、確信にも似た自信を抱き始めていた。

このまま突き進めばデカブツが旋回する前に、奴の後ろを取ることが出来る。

幾ら装甲が厚いからと言って、剥き出しの動力部に関しては完全に外殻を張り巡らせる事など不可能な事だ。

（ハインハートル）

「見つけたぞデカブツ！！」

抱いた希望を現実世界で叶える為の第一歩として、彼はいち早くバスターマンティスの後姿をその視界に捉えることに成功した。

ＴＲＰスクリーン上に映し出されたその緑色の機体は、機体上部を高く聳（そび）えた木々の枝葉に隠されているという、呆れんばかりの大きさを再認識させられるものだったが、彼は即座に装備したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の弾丸を鉄甲榴弾に換装すると、鋭い視線で捉えたデカブツの背後を全力で疾走する。

無様にも簡単に背後を取られることとなってしまったバスターマンティスは、未だ追走するルワシー機へと猪突猛進中といった様子で、全く背後から接近するハインの機体に対応を見せる素振りも無かった。

いや、対応する術が無いんだ。

ハインは心の中でそう呟くと共に、さらに搭乗するトゥマルクの機体を増速させる為にフットペダルを強く踏み込む。

もはや彼の脳裏には、その企（くわだ）てがうまくいかなかった時のことなど、少しも描かれていないのだろう。

その巨大な建造物がようやく彼の射程圏内へと捉えられようとした時、突然目の前に曝（さら）された事実に関して、彼は驚きの声を発してし

まうのである。

ズッズーーーーン！！

バスターマンティスの機体が不意に沈み込む様に落下を始めると、その巨大な2本の両足がゆっくりと大地へと舞い降りる。

機体本隊が両足を吊り下げるような体系から、逆に両足が機体を支えるような体系へ。

猛烈な地鳴りを周囲に響かせながら、両足をめり込ませるように大地を削り取っていくバスターマンティスは、急激にその進行速度を緩めていった。

（ハインハートル）

「なんだと！？まさか！？」

この時点で、彼は完全に敵の能力分析を誤っていたのだ。

信じれら無いほどに巨大な機体に、全く攻撃を寄せ付けないほどの重装甲。

勿論、Gシステムの有効無効の切り替えが自在に出来る事など、一般人ですら知っている事実である。

しかし、このバスターマンティスがGシステムを搭載する理由には、絶対に「自重を支えるだけの機体機構が備わっていない」からなのだと、彼は勘違いしていたのだ。

元々、そう言った重さによる機構的難点を克服するために期待され

たシステムなのだから、彼の思考は一般的に正しい推測によって導き出されたものであったとも言えるのだが、過酷な戦場においては、時に一般的思考自体が、逆に己の身を窮地に追い込む要因となってしまうことも、少なからずあるのだ。

ＤＱの開発技術力に関して、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国よりもトゥアム共和国の方が数年優位的立場を保ちえるだろうと思われていたのだが、現在彼の目の前に聳え立つ巨大なＤＱ「バスターマンティス」は、その展望的人々の思い込みを一掃させるに十分な存在であった。

やがて、大地から生え延びる巨大な2本の両足を軸として、上体をねじる様に向き直ったバスターマンティスの左腕が、ゆっくりとハインの搭乗するトゥマルクに差し伸べられると、異様な砲撃音と共に眩い閃光が彼の視界全てを支配した。

バシュッ！！

この時、即座に回避行動へと転じていたハインは、ありったけの力を込めてフットペダルを踏み込むのだが、もはやそれは無意味な抵抗だったのかもしれない。

バスターマンティスの左腕から放たれた電気的衝撃波は、彼の投じたデコイに引き付けられながらも、その膨大なエネルギーの伝達先として、彼自身の機体を取り逃がすことは無かったのである。

そして、トゥマルクの後部テスラポット付近へと取り付いたその雷光が、一瞬の内にして機体全身へと駆け巡った刹那、真っ白な新型機を黒煙が包み込んだ。

（ハインハートル）
「くそっ！！デカブツの癖に・・・！！」

ＤＱコクピットの周囲を満たしている衝撃緩衝材液体ダンパーが、完全な絶縁効果を齎（もたら）してくれるため、ＤＱパイロットがスタン系兵器の直撃によって、即死してしまうようなことは無い。

しかしこの時、真っ暗闇に閉ざされてしまったコクピットの中で、吐き捨てた一言が彼の最後の言葉となってしまった。

04－14：〇ディップ・メイサ・クロー［13］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「ディップ・メイサ・クロー」

幻想的な異空間の中を快走しながら、セニフが一つ、少し盛り上がった大地を踏み台として軽い空中飛行から着地姿勢を取ると共に、背の低い緑色が密集した塊の中へと己の身を突入させる。

新芽から育ったまだ若い幼木をバキバキと圧し折りながらも、そのままの勢いを保ち、少し開けた場所へと躍り出たセニフは、必死に同僚の危機的状況に駆けつけようとしていた。

しかし、彼女がようやくその巨大なＤＱの後姿を視界に捉えた時、９０度もの旋回作業を終えた巨大ガトリングガンの照準が、ブスブスと焦げ臭い黒煙を放つトゥマルクへと据え付けられた後であった。

（セニフ）
「ハッ・・・ハイン！」

セニフが思わず息を呑んだ後、吐き出した叫び声と同時に、巨大ガトリングガンの砲塔先端部から、眩い閃光が絶え間なく発せられた。

外界の激しいコントラスト変化に順応しようと、目まぐるしく調整を繰り返すＴＲＰスクリーンに一瞬視界を奪われながらも、耳を劈くように響き渡る砲撃音が、彼女の意識のど真ん中を貫き、恐怖にも似た「死」を印象付けるだけの、悪寒が彼女の背筋を駆け巡った。

（セニフ）

「うぅっ！！」

言葉にもならないような呻き声を小さく発したセニフの目の前で、素早く調整処理を終えたスクリーン上に再び映し出されたものは、虚しくも四散し行くトゥマルクの姿だった。

出会って間もない僚友であるハインの死が、彼女の心の中に大きな風穴を抉じ開けるまでには至らないが、それでも何故にこうも心の奥底がズキズキと痛むのだろうか。

大きな閃光の塊に吸い込まれていくように消し飛ぶ機体の行く末に視線を据えながらも、この時、彼女の恐怖心は一瞬奪われた視力と共に、激しく沸き起こる闘争心へと変化を見せた。

視線に据えたものをすべて燃やし尽くしてしまうほどの業火を宿した瞳で凝視するセニフは、目の前に聳え立つ巨大なＤＱの後姿に狙いを定めると、強くフットペダルを踏み拉いてトゥマルクに更なる加速を要求する。

一方、ハインへの止めの一撃を放ったバスターマンティスが、後方から無防備にも突進を見せるセニフ機に気づかないはずも無く、新たなる敵の出現に反応を見せるまでに、さほど時間を必要としなかった。

左方向に目一杯機体を捩っていた為に、逆旋回を余儀なくされた緑色の巨漢だが、即座に巨大なガトリングガンを振り回して、迫り来る１機のトゥマルク目掛けて照準を宛がうと、再びけたたましい砲撃音を周囲にぶちまける。

しかし、このエリアに到着するまで、ほぼトゥマルクの最高速度を

引き出していたセニフ機の方が一瞬早く、巨大ガトリングガンの死角であるバスターマンティスの懐に潜り込んだ。

そして、巨大な両足の間をすり抜ける様に走り去る間、左手に装備したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４を頭上目掛けて構えると、有無を言わさず大量の鉄甲榴弾を浴びせかけた。

ガンガンガンガンガンガン！！

生半可な攻撃でこの重装甲を撃ち破ることなど出来ようはずも無く、極至近で炸裂する弾丸の余波を気にして手加減などしている余裕は無い。

セニフは外側の装甲よりも薄く張られているであろう腹の下部分に、弾装丸々１個分の弾丸をすべて叩き入れて見せたのだが、バスターマンティスの動きを完全に食い止めることは叶わず、ただ目標を見失った巨大ガトリングガンの砲撃が、あられもない方向へとぶちまけられたに過ぎなかった。

（ルワシー）

「なんじゃこりゃ！！ハイン！！なにが起きてる！？」

その無差別ともいえる巨大ガトリングガンの砲火に曝（さら）されたルワシーが、周囲で散発する大きな爆発に身を屈める様にして耐え忍ぶ中、必死に状況を確認しようと通信マイクに向けて大声で怒鳴りつける。

ようやく命からがらバスターマンティスの追い討ちを逃れた彼としては、再び彼に襲い掛かった砲火の雨あられに、舌打ちをして見せるぐらいしか余裕が無かったのだが、突然雑音を交えながら浴びせかけられた少女の言葉に、ギョッとしたような表情を浮かべて身構

えるのだった。

（セニフ）
「引っ込めルワシー！！そこにいてはダメだ！！」

（ルワシー）
「なっ！？てっめぇ！！」

バスターマンティスの腹の下へと潜り込んで攻撃を試みたセニフは、そのままの勢いで一気に離脱しまおうと目論んでいたのだが、すかさずセニフの行動を見て取ったバスターマンティスのパイロットは、足元から躍り出たトゥマルクの姿に素早く照準を合わせる。

勿論、セニフの進入方向へと回頭していた、巨大ガトリングガンが即座に使用可能となるわけでもなく、セニフの逃走方向にもっとも近かった右手が宛がわれた。

恐らくは弾数的制限からであろう今まで使用されることの無かったその火器は、寧ろ彼等アパッチ隊のような小物を相手に使用するものではないのであろう。

物凄い轟音と共に吐き出されたその弾頭は、大きく旋回行動を見せたセニフ機を直接捉えることは無かったが、バスターマンティスの正面に聳（そび）え立つ巨木の幹へとぶち当たると、恐ろしいほどの熱量を撒き散らし、遥か頭上に群生する森の枝葉を突き抜けるほどの火柱を舞い上げたのだった。

（ルワシー）
「ぬぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

（セニフ）
「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

かなりの速度を持って着弾地点から離脱する事が出来ていたセニフはまだしも、それまで爆心地付近に身を潜めていたルワシーまでもが、この強烈な攻撃を耐え凌ぐことが出来たのは幸運とも言うべきなのだろう。

もはや人目を憚ることも無く、断末魔にも似た叫び声を発してしまった二人は、物理的に自分自身の発した声自体の存在によって、未だこの世に命を取り留めていることを確認することが出来た。

勿論、直前にセニフが大声で注意を促していなければ、ルワシーは今頃、激しい業火の最中で、死んだ事にも気付かないまま、取り残された精神世界でのみの断末魔を永久に繰り返していたのかもしれない。

（セニフ）
「バカルワシー！！何でこっちにくるんだよ！！」

（ルワシー）
「てめぇ俺があそこにいるの知ってたな！？俺ごと道連れにするつもりだったのかよ！！」

（セニフ）
「う、う、うるさい！！仕方ないじゃないか！！でっかい腹抱えてあんな所で一休みしている方が悪いんだよ！！」

（ルワシー）
「この糞チビが！！小さすぎて踏み潰されなかっただけのくせに、

偉そうなことぬかすんじゃねぇ！！」

余りの破壊力を有した兵器をまざまざと見せ付けられた二人は、もはや一目散にその場から並走して逃げ去る事しか出来なかったのだが、ようやくお互いの機体同士を近づけたことにより回復した通信機能上で、真っ先にやり取りしたことは、相手を誹謗中傷する言葉の投げ合いであった。

しかし、ある程度お互いに怒気を交えた口論を経て、二人の間にその愚行を問いただす存在が欠けていることに気がついたルワシーは、突然、静かな口調でセニフに問いかけた。

（ルワシー）
「セニフ。ハインはどうした。」

（セニフ）
「・・・。」

セニフは一瞬返答を躊躇った。

自分が目の当たりにした事実をそのまま相手に伝えればいいだけなのに、何故か彼女の思いは言葉となって発せられなかったのだ。

彼女の心の中には、まだどこかハインが死んだと確信するほどの実感が無かった。

彼女が目撃した四散し行くトゥマルクの機体は、間違いなく彼女達の隊長であるハインハートルが搭乗する機体であったことは確かだ。

しかし彼女自身、彼の死を直接見たわけではない。

もしかしたら、爆発の寸前に脱出したかもしれないし、爆発に巻き込まれたとしても、運良くコクピットだけ無事だったかも知れない。

どれだけ確定的な要素が揃(そろ)おうとも、彼女自身の心の淵では、それを認めてしまうことに対する、恐怖感があったのかも知れない。

（ルワシー）

「もしかして、やられちまったっつうのか!?」

再度問いかけられた彼の言葉に、セニフは「うん」と頷(うなず)く仕草をして見せただけだった。

それは決してルワシーに届くはずも無い仕草であったが、俯(うつむ)いたままキッと鋭い視線でサーチレーダを凝視した彼女は、ゆっくりと動き出したデカブツの反応に対し、静かに呟いて見せた。

（セニフ）

「デカブツ倒すよ。ルワシー。」

（ルワシー）

「あぁ?? なに!? なんて言った!?」

訝(いぶか)しげな表情でそう返したルワシーは、この危機的状況下において、そんな言葉を投げかけられるなどとは思ってもいなかったようで、冗談にしても笑えない彼女の言葉尻に、いきり立つ様な濁声を被せて聞き返した。

手持ちの火器では撃破する事も出来ない上に、援軍となるエアビヘイブが到着する気配もない。

たった二人だけがメイサ崖上に取り残されたまま、あの無敵とも言える巨大なＤＱを撃破しよう等と、軽々しく口にしても、実際に実現できるような事ではないのだ。

しかし、そんな彼の言葉に反応を見せる事もなく、どこか曇りない視線を宙に彷徨わせる彼女の瞳には、ハインが身を持って示してくれた幾つかの事実から、一つの希望の光を見出していたのだろうか。

彼女はさらに強い口調をもって、ルワシーに言葉を連ねるのだ。

（セニフ）
「ルワシー。速度を落とせ。デカブツに追いつかせるんだ。私が合図するまで相手射程圏内で並走するよ。」

（ルワシー）
「射程圏内で並走だぁ！？てめぇ！二人そろって丸焼けにでもなるってんか！？」

ルワシーが驚いた表情でセニフに食って掛かったのも無理はない。

あれだけの高威力を見せ付けられたバスターマンティスに対して、事もあろうか相手の目の前を並んで走ろうと言うのだ。

これほどに愚かで命知らずな作戦が他にあるのだろうか。

まさに空いた口が塞がらないというのはこの事であり、彼はしばらくの間、呆れた表情のまま沈黙することになるのだが、不思議と落ち着き払った態度を見せるセニフの方へとチラリ視線を移すと、小さく溜め息をついて見せた。

（セニフ）
「ブタの丸焼けと一緒に食卓に並ぶ趣味なんてないよ。」

（ルワシー）
「俺だっててめぇみてぇな餓鬼のお守りで死にたかねぇがな、こちとらいつかてめぇをぶっ飛ばすのが楽しみで生きてんだ。誰とも解んねぇ緑蟲君にくれてやるほど、俺も気前がいい方じゃねぇぜ。」

お決まりの売り文句に対して買い文句を投げつけたルワシーだが、この時点で、彼としても良い作戦が思い浮かぶこともなく、尤(もっと)もらしい言い訳を並べて、彼女の無謀な提案に乗ることを了承した。

しかし彼の発した「てめぇをぶっ飛ばす」と言う言葉の中には、半分以上本気の意思が込められていたのではないだろうか。

彼はネニファイン部隊を新設する為に実施された研修の中で、セニフと同じチームに構成されていたのだが、そう言った意味では、彼女のＤＱ操舵ぶりをじっくりと観察する機会に、一番恵まれていた人物とも言える。

その中では勿論、ＤＱを用いた模擬戦が行われる事になるのだが、この小さな少女は、そのＤＱ同士の戦闘において一度も敗北することがなかったのである。

彼自身も、この少女と直接戦闘を繰り広げる機会が５回程あり、結果を認めたくはないものの、あっけなく５連敗を喫(きっ)すると言う有様だった。

全く無駄のない完璧な動きを見せたかと思えば、馬鹿でも仕出かさ

ないような隙を見せる。

しかし、その隙自体が罠であったりもし、彼が何を仕掛けようともすべて良い様にあしらわれ、何も出来ないままに苦渋を舐めさせられたのだ。

信じられない事だが、いや、信じたくない事だが、この「ドチビ」が有している戦闘センスは、異常とも言えるレベルにある。

如何に口先では乱暴に扱おうとも、彼の心の中で彼女自身のそう言った部分に関して、少なからず認めないわけにはいかなかったのだ。

（セニフ）
「ルワシー。デカブツが来たよ。死なないでねルワシー。」

（ルワシー）
「うるさいんだよ!!こん餓鬼ゃが!!隊長気取りで偉そうに・・・。」

そして再びかくのごとく口撃を放とうとしたルワシーは、何かしらの違和感を感じてその言葉を飲み込んでしまった。

ん??・・・こいつ今なんて言った??

普段から二人の間でやり取りされる会話とは打って変り、可愛らしい声色で静かに語りかけられたセニフの言葉が、ルワシーの脳裏で繰り返し反芻(はんすう)されるたびに、全身に蕁麻疹(じんましん)が出来てしまったのではないかと錯覚するほどの、痒(かゆ)みを覚えてしまうのだ。

それほどに、彼にとっては想像だにしなかったセニフの言葉だった。

しかし、そんな彼女の言葉に違和感を感じている暇もなく、彼等の後方から緩やかに速度を上げて追いついてきたバスターマンティスが、若干ロングレンジ気味の巨大ガトリングガンを持ってして、再び彼等に襲い掛かってきた。

そう。彼にとって今一番重要なこととは、セニフと幼稚な言葉遊びをすることではなく、この巨大なＤＱを如何にして打ち倒すかと言うことだ。

彼は直ぐ脇を並走するセニフの方を気にしながらも、やがて後方から次第に距離を縮め来るデカブツに対して、意識を集中し始めた。

04－15：〇ディップ・メイサ・クロー［14］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ15「ディップ・メイサ・クロー」

一生懸命になって逃げ惑う「振り」を演出する二人に対して、猛然と追走を見せるバスターマンティスのスピードはそれほど速くはない。

それは、周囲に立ち並ぶ木々達の間隔が狭ければ狭いほど、強引に圧し折らねばならない巨木の数が増えると言うことであり、如何に巨大な体躯を持つバスターマンティスとは言え、目の前に聳え立つ巨木の全てを圧し折りながら直進することなど、不可能ではないが全く意味を成さない事でもあった。

しかしそれ以上に、この機体の進行速度を制限するものとは、その機体自体が持つ総質量が一番の原因であり、余りに速度を上げて慣性力を蓄えすぎてしまうと、今度は停止することすら儘ならない危険な状況に陥ってしまうのだ。

ゆっくりと確実にだが、恐ろしいほどの威圧感を持って接近を試みるバスターマンティスは、いわば巨大な壁が背後から差し迫って来る様でもあり、時折逃亡者に向けて放たれるガトリングガンの雨あられは、まさに空中から大量の爆弾を投下されているような錯覚さえ感じてしまうものだった。

（ルワシー）
「あれ？結構利いたんじゃねぇか？さっきの攻撃よ。」

しかし、森の中に響き渡った轟音の割りに、全く見当違いな方角へと吐き散らされたその弾丸は、いつまで経っても二人の機体を捉える事は無かった。

それは、巨大な木々に遮(さえぎ)られて、うまく照準する事ができないと言うよりは、全くガトリングガンの照準システムが機能していない様であり、どうやら先ほどセニフが腹の下からぶっ放した大量の鉄甲榴弾が功を奏したのだろう。

どれだけ自機の装甲を厚くしようとも、剥き出しの銃火器だけは、決してその恩恵に与(あずか)ることは出来ないものだ。

その事実を悟ったルワシーは、少し安堵の表情を浮かべて溜め息を付いて見せたのだが、次にセニフが発した言葉を耳にすると、いきなり表情を豹変させた。

（セニフ）
「これじゃダメだ・・・。スタンボムの射程にも入る。」

（ルワシー）
「なっ！！・・・なんだとぉ！？ばか野郎！！本当に死にてぇってのかてめぇ！！」

（セニフ）
「確実にデカブツを倒すためだよ。」

（ルワシー）
「確実に倒されちまうのはこっちだろうがよ！！馬鹿な行動はよせ！！おい！！待ちやがれ馬鹿！！」

聴覚を突き抜けて直接脳内にまで響き渡るのではないかと思うほどの怒鳴り声を浴びせかけ、まさにとち狂ったような作戦の変更を示唆するセニフを、必死に止めようと試みるルワシーだが、彼の意思とは相反(あいはん)するように、並走するトゥマルクの走行スピードが見る見るうちに減速して行く。

直接相手の機体に命中させることで損傷を与える実弾兵器とは違い、スタン系兵器の実質有効範囲は、不確定要素に左右され易い上に捉えずらいものであり、この時ばかりはセニフもルワシーを誘いかけるような言葉は投げかけなかった。

しかし、過酷な戦場において、こんなに小さな少女一人に運命を委ねて、一人安全な場所から高みの見物を決め込むほど、この男の気概は薄く冷たいものではない。

半場怒りにも似た感情を押さえ付けるように、彼は次第に大きな顔を紅潮させると、虚勢を張った大声と共に大言を吐き捨てるのだ。

（ルワシー）

「だぁっはっはっは!!てめぇごとき糞餓鬼に出来て、このルワシー様にできねぇことなんざねぇんだよ馬鹿野郎!!うまくいった時や極上のステーキでも奢(おご)って貰うからなセニフ!!」

彼自身うまく行くという確信がある訳でもなく、思いに反して怖気(おじけ)づく気持ちを奮い立たせるための笑い声であり、まさに自身の自暴自棄気味な振る舞いによって、それを覆い隠そうとする意図があったのだろう。

彼は恐る恐るとトゥマルクの走行スピードを緩め始めると、進行方向とは逆方向に先行するセニフの機体を追い始めた。

1機より2機の方が、より効果的に相手の攻撃的意識を逸らす事が出来るのだろうが、それでも相手の攻撃的意識を均等に振り分けることが重要であり、囮の一方が相手の攻撃に萎縮して距離を取ってしまうようであれば、最初から二人で囮を務める意味は無い。

ルワシーの心の中には、もはやその恐怖に躊躇するような迷いの気持ちは無かったのだが、余りに勢いづけて減速してしまったために、背後から追い縋って来たバスターマンティスの初撃は、彼に対して投じられる事となってしまった。

緩やかに左腕を掲げるバスターマンティスの動きに、一瞬、全身を駆け巡るほどの旋律を覚えたルワシーだったが、トゥマルクの進行方向を急激に左手に旋回させると、彼等を繋ぐ射線の間に割って入った1本の巨木が被害を被った。

まさに真横から落雷を受けたかような衝撃を受ける事になった無残な樹木は、焼き焦がされた全身から異臭を含んだ黒煙と大量の水蒸気を発すると、一瞬にして激しい業火の渦へと包まれたのだ。

（セニフ）
「ルワシーの馬鹿っ！！下がりすぎだよっ！！」

（ルワシー）
「わぁってらばぁーろー！！」

その時、後部カメラを映し出すモニターにじっと見入っていたセニフは、余りに迂闊な後退劇を見せたこの大男に対して、罅割れる程に張り上げた黄色い声で怒鳴りつけた。

彼女もまさかルワシーがそこまで相手に接近して見せるとは思わなかったのだろう。

本来であればこの後、しばらく二人の間には、激しい野次の飛ばしあいが繰り広げられるはずなのだが、この時ばかりは二人にもそんな余裕は微塵も無かったようだ。

間髪を置かずして、ルワシーの軽率な行動を補佐するために、更なる危険を承知で速度を緩めざるを得なかったセニフは、バスターマンティスの二つ目の殺意の刃に曝(さらさ)される事となった。

しかし、絶妙のタイミングでデコイを射出したセニフ機は、いとも簡単にこの攻撃をかわしてみせると、更にもう一つ相手の攻撃を誘い出す余裕を見せ付ける。

そして今度は、デコイの助けを借りる事も無く悠々とこれをかわして見せると、意気揚々（いきようよう）とデカブツの目の前で泳ぎまわって見せたのだ。

ちっ・・・！！

そんな舌打ちがバスターマンティスのコクピット内に響き渡っただろうか。

相手の攻撃を全く寄せ付けない装甲と、圧倒的火力を有しながらも、恐れることなく目の前へと姿を現した二匹の小物を見据えて、悠々と攻撃をかわされてしまった方としては、如何(いかよう)様にも気分が優れるはずも無い。強大にして無敵のＤＱバスターマンティス。

その言葉は対峙したセニフやルワシー以上に、搭乗したパイロット

自身が抱いた不遜な自負なのかもしれない。

直後に二人に襲い掛かった攻撃はもはや精彩さを欠き、乱暴にぶちまけただけの怒気に他ならなかった。

しかし、さすがにそこは強力な火器を有するバスターマンティスと言ったところで、乱発するスタンボムの一発が、回避を試みたルワシーの直ぐ傍らに着弾すると、逃走を続けるトゥマルクの左方向から、雷矢にも似た閃光の一本が彼の元へと襲い掛かったのだ。

この時、一歩間違えば、彼の機体は確実に激しい閃光の中へと取り込まれて、汚らしい黒煙を吹き上げるガラクタに成り下がっていたに違いない。

しかし幸いな事に、火花を散らして朽ち果てたものは、トゥマルクの左手に装備していたグレネードガンだけであり、彼の機体自体には全く被害が及ぶ事は無かった。

（ルワシー）
「セニフ！！もうやばいぜ！！」

（セニフ）
「解ってる！！もう少しだけ！！」

悲痛なまでの叫び声を上げるルワシーだが、彼に対して彼女の無常な返答が返される。

一体、いつまでこんな事をやらせるつもりなんだ？

本当にこんなことを繰り返してデカブツをやれるのか？

このままじゃ、セニフの言う合図を待つ前に、やられてしまうのが落ちだぜ。

今更遅すぎる疑心を抱き始めたルワシーだが、快走を続けるトゥマルクの中にあって、次第に明るみだしたＴＲＰスクリーンの風景が、ようやく彼の脳裏に一つの答えを見せ付ける。

そうか！

この時、バスターマンティスのパイロットは、セニフの作戦にまんまと乗せられていることに全く気がつかなかった。

もはや無様に逃げ惑う事しか出来ない二匹の獲物を前にして、中途半端にこじ当てたスタンボムの余韻を脳裏に反芻（はんすう）させ、更なる心の高ぶりを抑えきれないように、猛然と襲い掛かる事しか考えていなかったのだろう。

（セニフ）

「ルワシー！！散開！！」

それまで待ち焦がれた合図をセニフが高らかに発した時、二人は息を合わせて一斉に左右へと別れるように展開する。

そして、激しく大地を削るように急激な旋回を持ってトゥマルクを猛烈に駆り立てると、今度は全力で逃げの体制に入ったのだ。

勿論、バスターマンティスのパイロットにとって、逃げ惑う獲物のが二手に別れて逃げ出す事は予め予測できていた事であり、決して彼自身が慌てるような行動では無かったはずである。

しかし、コクピット内で彼を照らし出す光量が次第に増え始め、それまでスクリーン一杯に映し出されていた巨木の姿がフッと消え去った時、彼はようやく二匹の獲物が意図した真意へと辿り付いたのだった。

しまった！！

目の前に曝された獲物の姿に意気揚々（いきようよう）と夢中になり、完全に周囲に対する注意力を欠如させていた彼が誘き出された場所。

そこは、薄暗い樹海の終点を示すメイサ崖上の縁であり、メイサ渓谷の対岸となる壁面が、彼等のいる場所からでもはっきりと見て取れるほど、高く聳え立った場所だった。

膨大な質量を誇るバスターマンティスが旋回するためには、それなりのスペースが必要であり、この時点で既にバスターマンティスが旋回行動を取れるスペースは、セニフの巧みな誘い込み作戦によって奪われてしまっていたのである。

勿論、バスターマンティスがメイサ崖の縁から飛び出したからと言って、Gシステムを搭載したこの機体が、直ぐに谷底へと転落してしまう事はないだろうが、それまで駆り立てた機体の慣性力を完全に打ち消す事が出来なければ、対岸に聳え立つ壁面への衝突は免れない状況であった。

急激に冷やされ行く闘争心と、顔面の血をすべて失った様な蒼白さを持って、己の迂闊さを怒鳴りつけたパイロットが、即座にGシステムの緊急解除を促した。

ズッズーーーン！！

バスターマンティスの機体は、先ほどハインを撃破したときと同じ要領を持ってして、機体の慣性力を打ち消しにかかった。

そして、ゆっくりとその重さを取り戻した巨大な機体が、両足をを大地に接地させると同時に、猛烈な地響きを伴って荒れ果てた大地を削り取る。

それはまさに、巨大な隕石がゆっくりと大地へとのめり込む様を、スローモーションで眺めているような不思議な映像であった。

この時、ほんの僅かなスペースのみで、バスターマンティスの推進力の全てを打ち消す事に成功したパイロットの行動は、さすがであると賞賛すべきものなのだが、元々重いはずの巨体が、当たり前のような重さを取り戻したとき、不安定な地形であるメイサ崖の縁が、その巨体を支え切れようもなかった。

大地へと突き立てた巨大な両足を発端として大きな亀裂が大地上に駆け巡ると、やがてその重さに耐え切れなくなった足場が、バスターマンティスを地獄の底へと引きずり込むように、一斉に崩落（ほうらく）を開始したのだ。

（セニフ）
「やったぁ！！」

（ルワシー）
「やったか！？おおおおぅ！！やったぜ！！」

一瞬にして谷底へと崩れ落ちていくバスターマンティスの姿を、TRPスクリーン越しに眺めていた二人が、思わず喜びの声を張り上げる。

結局、この巨大なDQに対して、何ら有効な手立てを見出す事は出来なかったのだが、無謀とも言えるセニフの綱渡り的作戦を見事に完遂しきった彼等の元には、これ以上無い結果が示されたのだ。

それまで、極度の緊張感の中に浸りつつ、息をつく暇も与えれない程の戦慄を味わい続けた彼等は、ようやく手にした安堵感と達成感に表情を綻ばせながら、狭いコクピット内で大きなガッツポーズをして見せたに違いない。

しかしこの後、無残にも谷底へと転がり落ちて行ったデカブツの行く末を確認するために、崩落した崖際まで二人が駆け寄った時だった。

ドゴン!!ドゴン!!ドゴン!!

（セニフ）
「な!!?」

（ルワシー）
「なにぃ!!まじか!?」

ようやく長いトンネルの中から抜け出した彼等を待っていたものは、這い出ることも許されない地獄へと続く、新たなトンネルの入り口だったのだろうか。

谷底から猛烈な閃光を伴って撃ち上げられた大量の弾丸が、彼等の

周囲で大きな爆発を生じさせると、再び彼等の表情は青ざめたように一変した。

この時、メイサ崖の崩落と共に落下を余儀なくされたバスターマンティスは、落下の途中ですぐさまGシステムを再起動すると、巨大な後部バーニヤをフル稼働させることで、その落下速度を打ち消しにかかったのだ。

しかも見事なまでに、一度崩してしまった体制を立て直してみせると、緩やかに落下し行く最中にありながら、崖縁から顔を出した憎き二匹の子鼠に向かって、ガトリングガンを撃ち放つ余裕さえ見せたのだった。

勿論、照準システムに異常をきたしたこの兵器は精度も薄く、二人の機体を捕らえることは出来なかったのだが、それでも強烈な破壊力が未だ健在である事を、高らかに示して見せたのだった。

（ルワシー）
「なんて野郎だ・・・。」

呆れたように溜め息を付いて見せたルワシーの眼下では、バスターマンティスが引き起こした崖崩れによって、多少の混乱を余儀なくされた帝国軍戦車部隊の後方集団の姿があったのだが、大きな被害を被った様子も無く、身動きが取れないほど密集した陣形の中に、ささやかながらもこのバスターマンティスが着地出来るスペースを作り出そうとさえしていた。

勿論、このバスターマンティスが再びメイサ崖上によじ登る事は不可能であり、セニフとルワシーがこのデカブツに対して、敗北を喫する事は無くなった訳だが、それでもこの巨体が谷底へと無事に着

地を果たしたのなら、新たにその暴力的な脅威に曝(さらさ)される事になるのは、渓谷内で必死に帝国軍戦車部隊の南進を食い止めている、他のネニファイン部隊メンバー達に他ならない。

（セニフ）

「ルワシー！！デカブツを倒すチャンスは今しかないよ！！奴の後部テスラポット上部を狙うんだ！！早く！！」

それまで唖然とした表情のまま、緩やかに落ちていくバスターマンティスの姿を、じっと眺めていたルワシーだったが、両手に装備した火器を平行に構えて、ありったけの砲撃を撃ち下ろし始めたセニフの行動に、驚いたように我へと立ち返った。

彼等の見下ろす渓谷内に浮遊したバスターマンティスは、完璧に近いほどの着地体制を整え始めていたのだが、それまで同じヘイト上で戦闘していた時とは、明らかにある一点において状況が異なっていた。

それは、彼等がそれまで見上げなければならなかった状況に対し、現在は見下ろせる状況にあるということだ。

バスターマンティスの背負った巨大な後部テスラポットが唯一の弱点となリ得る事は、先立って命を落としてしまったハインが示唆した推測だったのだが、この巨大な機体を見下ろせる状況になって初めて、彼等はそのテスラポット上部に、無数の吸気口が存在している事に気がついたのだ。

特に大きな機体の動力を司(つかさど)る部分なだけに、ちょっとしたダメージでも、深刻な被害を及ぼす可能性は非常に高く、セニフの言葉を即座に理解するに至ったルワシーもまた、ＡＲＳ－ＲＴｙｐｅ４４の

弾装を一番強力な特殊炸薬弾に換装すると、この弱点部分と思わしき部位に激しく撃ち付けるのだ。

しかし、超重装甲を纏うバスターマンティスの機体は、さすがと言うべき防御力を誇り、見るからに大きなダメージを負った様子など微塵も感じさせなかった。

しかもそればかりか、射撃角度ギリギリまで捻じ込んだ左手を高々と崖上の方に構えて見せると、バスターマンティスはスタンボムを断続的にぶちまけて反撃に転じたのだ。

（セニフ）
「やっ！！・・・・・・・。」

（ルワシー）
「セニフ！！」

すると、眩い閃光を放って天へと舞い上げられた電気的衝撃波の一つが、セニフの機体の直ぐ脇で炸裂し、通信機に甲高い叫び声が響き渡った直後に、彼女の機体から一瞬にして大量の黒煙が吹き上った。

それまで巧みにＤＱを操り、バスターマンティスの攻撃をかわしてきたセニフだったが、完全に足を止めた状態でそれを持続出来ようはずも無く、終に彼女はその強力な攻撃の前に、膝を屈する事となってしまったのである。

ほんの数秒前まで真っ白だったはずの新型ＤＱトゥマルクの姿が、ボロボロの中古品にも劣る黒ずんだスクラップへと成り下がってしまうと、ブスブスと汚い黒煙を吐き出しながら、ゆっくりと直立不

動のまま後方へと倒れ込んだ。

（ルワシー）

「てんめぇ！！死に底無いのデカブツの癖に！！とっとと地獄へ落ちやがれ糞野郎が！！」

コクピット内をも揺るがすほどの大声を吐き出して、思いっきり右手でサーチモニターを殴りつけたルワシーは、黒ずんだセニフ機から視線を断ち切ると、鬼の形相にも似た表情で相手を睨み付けて猛り狂ったようにトリガーを引きまくった。

落ちろ！！落ちろ！！落ちろ！！落ちやがれぇぇぇ！！

この時、彼の殺意を含んだ激しい怒りの刃がバスターマンティスの機体目掛けて浴びせかけられたのだが、その意思に反して、彼の構えたＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４から放たれた弾丸は、たったの３発だけだった。

持てる力を振り絞り、ガチガチとトリガーを引きまくるのだが、それ以降の弾丸は一切発射される事は無かった。

そう。何のことは無い。弾切れである。

（ルワシー）

「かぁぁぁぁっ！！ふざけやがって弾切れだと！？」

直前に見せた自身の怒りの炎に、更に油を注いだような心境で、彼は狭いコクピット中を暴れまわったのだが、ここで彼がどれだけ怒りを撒き散らそうとも、それによって事態が好転する事などありえるはずもなく、それはただのエネルギーの浪費でしかなかった。

あれほどの猛攻に曝(さら)されて、攻撃する暇などほとんど与えられなかったにも関わらず、アサルトライフルの弾丸を全てを撃ち尽くしてしまうなどと、彼の優れた能力を示しているのか、それとも重大な欠点を示しているのか。

どう贔屓(ひいきめ)目に見ても、決して前者ではない事ははっきりと言えるだろうが、この時、この愚かなる肥満男の振る舞いを神が哀れんだのだろうか。

次の瞬間、メイサ渓谷一帯に響き渡るほどの轟音を奏で出したのだった。

ドッゴーーーン！！

猛烈に吹き荒れる爆風が、メイサ渓谷上に群生した木々達の身を、引き散らんばかりに暴れ狂う中、突如として大量の黒煙を吹き上げ始めたのは、バスターマンティスの後部テスラポットである。

この時もはや、何ら次なる手を打つ事が出来なくなったアパッチ隊であるが、彼等の狙い所が正しかった事を証明する二度目の爆発が再び沸き起こると、彼等の勝利は確実のものとなったのだ。

後部テスラポット吸気口の中で踊り狂う業火の渦が、止まる事を知らぬ活火山のように黒煙を吹き曝(さら)す中、突然、縋(すが)る手綱を手放されたかのように、バスターマンティスが落下速度を速めて行く。

もはや自慢の重装甲も、強力な火器も、この機体特有のGシステムすらも、自らの滑り落ち行く運命を変えることは出来ず、無残にも巨大な火の玉と化した鉄の塊は、自然の成り行きに従って、深い谷

底へと突き落とされる結末を迎えるのだ。

この時、谷底に屯した大量の戦車部隊は、密集した狭い渓谷内にあって、己の身を守るためのスペースを十分に確保することが出来なかった。

そして、その悲劇的状況巻き込まれてしまった兵士達は、猛烈な大爆発を持って最後を迎えたバスターマンティスの後を追うように、望まぬ殉死(じゅんし)を強要されたのであった。

奇(く)しくもそこは、帝国軍南進部隊の後方に位置する、地対空車両「ライパネル」が配備されていた付近での出来事であった。

04－16：〇ディップ・メイサ・クロー［15］

第四話：「涙の理由＋」
Ｓｅｃｔｉｏｎ１６「ディップ・メイサ・クロー」

（チャンペル）
「敵戦車隊部隊車列後方で大きな爆発を確認！！かなり大きいです！！」

（カース）
「リスキーマ！！映像急げ！！」

（リスキーマ）
「拡大映像メインモニターに出力します！！」

深緑を着飾った広大な台地上に横たわる、南北に伸びた細いメイサ渓谷内で、激しい戦闘が繰り広げられる最中にあって、突然その巨大な火柱が立ち上ったのは、彼等が雲下に舞い降りてから２０分が経過した時だった。

それまで、帝国軍の地対空車両ライパネルの射程範囲外ギリギリの空域を漂い、じっと戦況の成り行きを見守っていた彼等の動きが、俄（にわか）かに慌しさを醸（かも）し出す。

そして、徐に指揮官席から立ち上がった若い司令官が、戦術モニターの右半分に映し出されたその光景に、食い入るような視線をぶつけると、まるでそこが戦場であるかのような目まぐるしい意思のやり取りが開始されたのだ。

（サルムザーク）
「チャンペル！！リプトンサム部隊に支援砲撃指示を出せ！！指定ポイントはＮ－Ｘ５ライン０２から０８・・・。いや、０４から０８まで２００ｍｉｌｓ間隔で計５本だ！！北方はやや東寄りに着弾地点をずらすよう注意を喚起しろ！！リスキーマ！！キリン隊との通信回線は確保できているか！？」

（リスキーマ）
「出来てます！！」

（カース）
「三佐！！前面の部隊メンバーの撤退指示は！？」

（サルムザーク）
「任せる！！デルパーク！！こちらネニファイン司令部だ！！キリン隊は即座に広場へと突入を開始！！友軍の行動を補佐せよ！！所要時間は５分と無いぞ！！急げ！！」

（チャンペル）
「リプトンサム部隊から攻撃支援要請の受領信号をキャッチ！！砲撃開始まで３分と３０秒！！弾道ミサイル到着までの所要時間は２分弱です！！」

（デルパーク）
「了解。アリミア。フロル。一気に突入を開始するぞ。」

（カース）
「リスキーマ！！ネニファイン部隊各員に緊急暗号電文を発信！！Ｇタイプ型原文に３００１２２データを投入！！暗号化コードは作戦名とする！！」

（リスキーマ）
「了解！！」

（チャンペル）
「帝国軍戦車部隊の前進が止まりません！！Ｎ－４５－０９防衛ライン突破されます！！フロア隊が戦車部隊に取り付かれました！！」

（サルムザーク）
「フロア隊の二人は即座に後退！！メディアス！！右翼後方のコスモキャリアに注意しつつ、左翼に火力を集中させろ！！ホァンは出すぎだ！！発信した作戦指示に従い後続のキリン隊と協力して、迅速に目標を達成せよ！！」

（メディアス）
「あいよ！！バーンス！！左右ラインを保って少し後退するよ！！」

（バーンス）
「解っている！！ホァン！！下がれ！！」

（サルムザーク）
「リスキーマ！！帝国軍の後方地対空車両の残存数を直ちに調査しろ！！チャンペルは第二派の支援要請準備を整えつつ、常時戦況の経過を報告！！

（リスキーマ）
「了解！！」

（チャンペル）
「解りました！！」

若い二人の通信オペレーターが、ほぼ同時に元気の良い返事を発した直後、異様なほどの静けさの中へと立ち返った司令室内で、大粒の汗を右手で拭ったサルムが、ゆっくりと指揮官席に腰を下ろした。

そして、疲れきった様子で目の前の机の上に両肘を付いて見せると、目の前で組んだ両手の上から、じっと戦術モニターに視線を宛がい、一つ大きく息を吐き出して見せた。

さてさて・・・。第二派が必要になるだろうか・・・。

彼の口の中にだけで止められたその言葉は、決して好転した事態に油断を感じてしまったからでは無いのだが、それでも、一向に出口の見えなかった闇の中に、強烈な光の一筋が差し込んで見えた事は確かだった。

お互いの意思を乗せてやり取りされた通信内容は、決して相手を欺(あざむ)く意図で、開放的手段を講じたわけでは無いのだが、それでも彼の抱いた真意を覆い隠すのに一役買う事となり、帝国軍の誰しもが、その後に訪れた悲劇的最後を予兆する事は出来なかったのである。

（サルムザーク）
「もし本当に神様がいるんだとしたら、感謝しないとな。」

（カース）
「三佐・・・。うまく行くと良いですね。」

圧倒的に兵力が不足する彼等ネニファイン部隊にとって、強大な帝国軍戦車部隊を前に講じられる有効的手段など、ほとんど無いのだということを、この若い司令官は初めから解っていた。

彼は理論的に作戦を構築せねばならない立場であり、不確定要素を孕んだ精神的願望論などを用いて、部下達の未来を左右すべき作戦を立案するようなことは決してなかったのだが、この時ばかりは降って沸いたに等しい「突然の転機」を利用せざるを得なかったのだ。

圧倒的な兵力を誇る帝国軍戦車部隊に対して、彼が持つ唯一の抵抗手段は、後方支援部隊リプトンサムの弾道ミサイルによる攻撃のみであり、言ってしまえばそれ以外に、彼等が南進部隊に対抗しうる術がない事を示唆していた。

確かに道幅の狭い渓谷内において、前戦で衝突する総兵力だけを見れば、彼等にも一度や二度の局地的優位性が生じるかもしれない。

しかし、連戦に連戦を重ねて、その全てに勝利したからと言って、彼等が持ちえる武器弾薬には物理的な制限があり、浜辺に打ち寄せる波のように次々と兵力を投入できる帝国軍戦車部隊に対して、彼等の力だけでは絶対に最終的勝利を掴み取る事など出来やしないのだ。

実際に彼が思案した作戦は至って単純明快なものであり、ネニファイン部隊の総力を持って、メイサ渓谷内では広場となるＮ－４５エリアへと戦車部隊を誘き出し、漏斗状に窄んだ出口付近を塞いだ上で、後方支援部隊リプトンサムからの弾道ミサイルを撃ち込むというものであった。

しかし、この作戦を断行する為には、帝国軍戦車部隊の後方に陣取る、地対空車両ライパネルの存在が、明らかに重大な障害となって立ちはだかっていたために、彼はリプトンサムへの砲撃指示を直ぐには出せなかったのだ。

それは勿論、ライパネルの対空射撃精度の高さから言って、弾道ミサイルを撃墜するなど造作もない事であって、無闇に砲撃支援を出したところで、ほとんど効果が薄いであろう事は、容易に判断が付く事だったからだ。

しかも、彼等ネニファイン部隊が保有する火器類では、遥か後方に位置するライパネルを攻撃することは容易ではない。

そこで彼は、なんとしてもレフトメイサ上に残ったアパッチ隊に連絡を取り付け、崖上からこのライパネルへの攻撃を行わせようと考えたのだが、結果として高濃度フィールド下にあったメイサ上に、安定した通信回線を確保する事も出来ずに、ただ無情にも流れ行く時間と共に、苦境たる立場が悪化するだけだったのだ。

（サルムザーク）
「うまく行くさ。こう言う展開が望めるとは思ってもいなかったが、アパッチ隊のメンバー達も良くやったもんだ。」

（カース）
「取得した映像は後で鑑識に転送しておきます。爆発の規模から見ても相当な兵器だったのでしょう。まさか帝国軍戦車部隊における重要な兵種を巻き込んで爆発するなど、当のパイロットも思ってはいなかったでしょうが、運にも見放されたのでしょうね。それとも三佐が相当に強運をお持ちと言う事なのでしょうか？」

突然に帝国軍戦車部隊を襲った巨大な大爆発が、彼の思考に引っかかった杭を一瞬にして抜き去り、目まぐるしく事態を好転させたのは事実であり、まさにカースが言うように、それは幸運であったと言う以外に称する事の出来ない出来事だった。

カースの余りに「ありきたり」な表現方法に、サルムはプッと勢い良く息を吐き出して笑みを浮かべて見せたのだが、それでも未だ、彼の中では張り詰めた緊張の糸を緩めるような意思は無かった。

しかし、もはや一度大きく傾いた大勢が、再び反対方向へとうねり動くような事態を招く事も無く、幸運と言う言葉に分類されるであろう事実が、再び彼の元へと報じられたのだった。

（リスキーマ）

「帝国軍戦車部隊後方の被害は甚大なようです。現在無傷で残存している地対空車両は１輌のみ。１輌のみです。他の後方支援車両と合わせて、計５０輌近くが一気に戦闘不能状態に陥ったようです。」

この時彼は、ようやく自分の意識の中に「勝利」という二文字を固定付ける事が出来たのであった。

遥かな時を経て辿り着いた目的地なれども、一度終焉を迎えて立ち返れば、それはほんの一瞬の出来事でしかなかった様な錯覚を覚えてしまう。

それほどに濃密で、過酷であった時の流れに終わりを見つけて、彼はゆっくりと口を開いた。

（サルムザーク）

「もはや俺達にできる事は全てやった。後は部下達を信じて更なる吉報を待つ事としよう。ファントムはこれより進路を０８：３０に変更。最大船速で当戦域を離脱する。」

そしてその後、彼は疲れきったようにだらしなく、上半身全てを指

揮卓の上に放り投げるのであった。

04－17：○ディップ・メイサ・クロー［16］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ17「ディップ・メイサ・クロー」

既に大勢は決していた。

しかし、錯綜（さくそう）した疑念と不安が激しく乱れ飛ぶ状況にありながらも、その兵士達の多くが、自らに与えられた任務を真っ当するために、死力を尽くして最後の戦いに挑む構えを見せていた。

それはもはや、狂信的宗教の信者達が聖戦の中にこそ死を見出す事を誇り思い、いわば自虐的な狂乱状態に駆り立てられているかのようにも見えたのだが、彼等の司令部たる後方部隊が壊滅状態にあった事もあり、それは正しき情報を得る事が出来なかった者達の、生き抜くための最後の術（すべ）だったのかもしれない。

勿論、前線で激しい戦闘を繰り広げていた兵士達にも、自軍の後方で大きな爆発が発生した事は解っており、彼等にとって見ればその事象に対して何をしてやれる訳でもなく、何よりも真っ先に、目の前に立ちはだかる己の敵へと意識を集中しなければならない状況にあったのだ。

しかも、南北に長く連なった戦車部隊にとって、その持てる自身の兵力自体が彼等の行動を縛り付けており、ことさら彼等の退路となる後方で大きな爆発が発生したとあっては、自由に行動できる広場（スペース）を求めて殺到し行く心理も解らなくも無い。

もはやそれは、統制の取れた整然（せいぜん）たる行軍とは呼べない代物だった

にしろ、そこはやはり物量に勝る帝国軍南進部隊だけあって、彼等の行動を阻む者達にとってみれば、恐怖心をかき立てたれるほどの脅威があったに違いなかった。

（バーンス）
「ちっ！！ホァンがやられた！！」

（ソドム）
「後退！！後退！！もうだめだろこれは！！」

そしてついに、ネニファイン部隊の通信網に、５人目の犠牲者が出てしまったことを告げる言葉が発せられた。

お互いのレッドゾーンが激しく侵食しあう中、帝国軍戦車部隊の最前線に展開するレアコンダリスの主砲が一斉に火を噴いて見せると、彼等を分け隔てた空間上に巨大な粉塵の壁が舞い上げられたのだ。

この時、我先にと一斉に広場へと雪崩れ込んだ戦車部隊の行動は、完全に迂闊（うかつ）としか言い様の無いものだったが、それでも取り残された１機のアカイナンに斜線を宛がうと、一斉に二つ目の主弾を解き放ったのだ。

ホァンは決して戦闘能力に劣る人物ではなく、寧ろ新人だらけのネニファイン部隊にあっては、それなりに技術を持った優等生であったのだが、たった一つの能力に事欠いたために、呆気なくその人生に幕を下ろす事となってしまったのだ。

その能力とは、一般の人間達から見れば、弱者ほど長けている能力であると考えられているのだが、戦場という無法地帯を生き抜くためには絶対に欠かせない能力であって、実は強者ほどに強く意識す

る「逃げる」と言う能力なのだ。

逃げると簡単に言っても、攻撃すべきタイミングに脅えて逃げ出すような事を指すわけではなく、敵の攻撃をかわす回避能力を指しているわけでもない。

それは、引くべき時に引く事を決断できる適確な判断力の事を指すのだ。

これは寧ろ、相手を撃破するための能力を磨く事よりも難しい事であって、訓練などでは絶対に養えない経験の積み重ねのみがものをいう能力である。

（ソドム）
「ジャネット!!ユァンラオ!!聞こえてんのか後退しろって!!大馬鹿野郎かお前らは!!いくら死にたい盛りの若者だってな!!もうちっとマシな死に方を選ぶってもんだぜ!!」

（メディアス）
「撤退命令だよジャネット!!ユァンラオ!!早く後退しな!!」

そして、作戦開始から終わりまでを見渡した時に、恐らくは完全に引き際であろうこの時間帯において、未だに前線で戦い続けようとする二人の戦士は、戦場において生き延びるための能力に長けた者と言えるのだろうか。

決して例外が認められる世界ではないはずだが、それでもこの二人の戦い方を見ていると、戦いの神たる存在に贔屓（ひいき）されているような、そんな雰囲気さえ感じてしまうのだ。

撤退を開始した仲間達とは一線を画し、猛烈に駆り立てた戦闘意欲を吐き散らす二人とは、先ほど１０機もの高速機動兵器グアルディオアラを見事に蹴散らして見せた、ジャネットとユァンラオである。

彼等二人は、今や帝国軍戦車部隊に飲み込まれんばかりの状況にあったが、それでも止まぬ鬼神が如き大胆な戦い方が、大多数を占める軍勢に対して、驚異的な圧力をかけていた。

しかも、火力の面では圧倒的に勝る戦車部隊が、己の有利さをかなぐり捨ててまで、渓谷内の広場へと殺到してしまったために、今や前線は混沌とした乱戦状態へと突入していたのだ。

これではさしもの帝国軍戦車部隊も、同士討ちを恐れて迂闊に主砲を放つことが出来なくなったばかりか、低速運動時の機動性では群を抜いているＤＱに対して、非常に不利益な戦い方を選択してしまったと言える。

圧倒的大多数派が抱いた思いの果てに選択した道とは言え、彼等の多くがその状況に表情を歪め、大きな怒声を張り上げるのだが、全く速度を緩めることなく戦場を練り歩く二人の前に、成す術も無く新たな戦死者の中に名を連ねるのだ。

この時、この二人は既に、高速機動兵器１０機、突撃戦車９輌、重戦車１輌、中戦車７輌を撃破していた。

それは、帝国軍戦車部隊の総数から見れば、それほど甚大な被害に及ぶ程度ではなかったにしろ、たった２機のＤＱのみでそれを成しえたという事実に関しては、まさに驚異的スコアを叩き出したのだった。

抹茶色の前髪から滴る大粒の汗が、彼女の強張った表情の上を伝って流れ落ち、彼女の急激な動作によって無作為に振り回されると、一斉にキラキラと光を放ちながら宙へと舞い上がるのだ。

疲労による疲れからか、肩で息を付くように大きく上下を繰り返す彼女の身体は、もはや精神的にも、肉体的にも限界が近いことを必死に訴えかけていたのだが、それでも彼女はその事にまったく気がつかない様子で、鋭い視線の先に次なる敵を姿を捜し求めていた。

搭乗した機動兵器アカイナンの右手に装備したＡＳＲ－Ｒｔｙｐｅ４４と、左手に装備したＧＭＭ３０－グレネードガンを効率よく振り回し、左肩に固定された強力な破壊力を誇る１２０ｍｍミドルレンジキャノンを持って、最後の止めを刺すという一連の流れを１セットとして、彼女は只管に死者の生成にのみ意識を集中しているようだった。

敵を見つけたらトリガーを引く。

考えるよりも先に、沸き起こる憎しみの業火を敵の姿へとぶつける。

１つ・・・。そしてまた１つと・・・。

ズガン！！

（ジャネット）

「きゃうっっっ！！！」

その時、突然に彼女を襲ったものは、ＴＲＰスクリーン左隅一杯に光り輝いた閃光と、コクピットシートから身を投げ出されそうにな

るほどの激しい衝撃だった。

パチパチと不快なラップ音に塗れながら、大きく頭部を揺さぶられる事となった彼女の声は、無意識的に肺の奥底から搾り出された、自制を促す悲鳴だったのかも知れない。

直後に彼女は、左肩に装備していた１２０ミドルレンジキャノンが、完全に吹き飛ばされてしまっている事に気がついた。

彼女は突撃戦車同士の射線が幾重にも折り重なる主戦場の中で、必死にアカイナンの機体を駆り立てて快走していたのだが、とある突撃戦車１輌を撃破してしまったために、相手の同士撃ちの危険性を緩和させてしまったのだ。

しかし、死を意味する真っ暗な谷底を背にして、切り立った崖の縁に立たされるような状況下にあって尚、彼女の瞳に宿った怒りの炎が冷め行く様子は一切無かった。

（ジャネット）

「このぉぉ！！マヌヴェパール（差別用語）が！！」

汚らしい言葉を激しい怒気に乗せてぶちまけた彼女は、己の身へと殺意の矛先を翳したレアコンダリスに向けて、ありったけのグレネード弾を叩き入れる。

前面装甲以外はさほど防御力の高くない突撃戦車を相手に、側面から放った攻撃において、そこまで弾数を浪費する必要性は無かったのだが、彼女はグレネードガンが全く反応を見せなくなるまで、執拗にトリガーを引いていたのだった。

（ユァンラオ）
「ジャネット。撤退命令だ。他の奴らは撤退を開始したぞ。」

（ジャネット）
「嫌よ！！」

今更何言ってんの！？

と、言わんばかりの怪訝（けげん）な表情を浮かべた彼女が強い口調で拒絶反応を示すと、もう既に役に立たなくなった鉄の塊を放り投げ、唯一彼女に残された火器であるＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４を両手で構える。

そして、迫り来る突撃戦車の姿を見つけて即座に照準を宛がうと、猛烈に鉄甲弾を浴びせかけるのだ。

そんな燃え尽きる前の最後の狂喜乱舞（きょうきらんぶ）たる様を、リベーダー２のコクピット内で眺めていたユァンラオは、少し興を削がれてしまったかのような表情で小さく息を吐き出すと、微かに不気味な笑みを浮かべて見せたのだった。

この時、もはや彼の心の中では、戦いの幕を下ろしてしまっていたのだ。

彼は今回の作戦に参加したネニファイン部隊パイロットなの中でも、最軽装であろう必要最低限の銃火器しか装備しておらず、たった１本のアサルトライフルに複数種類の弾丸を保有していただけだった。

勿論彼は、敵を撃破するために必要な弾数を最低限に抑え、行使した攻撃に見合うだけの十分な戦果を上げてはいたのだが、それでもやはり、物資が無限に彼の元へと湧き出す訳も無く、彼の小脇で黄

色く点滅を始めたシグナルの一つが、尽きかけた弾装の状態を示しだしていたのだ。

そしてそれは恐らく、彼と同様に激しい戦闘を繰り広げてきたジャネットにも同じ事が言え、如何に彼女がユァンラオよりも多くの火器、多くの弾装を装備して出撃したからと言え、それが彼よりも長く戦い続けられる保証にはならなかったのだ。

ジャネットは、更にもう1輌の突撃戦車を血祭りに上げた後、チラリと横目で残弾数を示すモニターへと視線を宛がった上で、直後に目の前へと湧き出した突撃戦車を次なる標的と見定めて、再び煌(きら)びやかに輝く光の刃を撃ち放った。

しかしこの時、その突撃戦車へと宛がわれた彼女の最後の武器は、相手に致命傷を与える事も出来ないままにして、静かにその役割を終えてしまったのだ。

（ジャネット）
「えっ!?なに!?これも!?」

ガチガチとトリガーを引く右腕には何の手ごたえも感じない。

一瞬にして青ざめ行く表情の上を、嘲笑(あざわら)うかのように冷たい汗の雫が舞い降りる中、彼女は咄嗟(とっさ)に残弾数表示をリロードする為のコマンドを入力する。

しかし無情にも、未だ十分な弾丸が残されている事を示すバーの横に表示されたものとは、「接続エラー」を示す赤い文字だけであった。

その瞬間、それまで保ち続けてきた緊張感の糸が、ぷっつりと切れてしまったような音が、彼女の脳裏で小さく打ち鳴らされると、疲れ果てた体が鉛のような重さとなって彼女を縛りつける。

そして、目の前で旋回し行くレアコンダリスの砲塔の先が、ゆっくりと彼女目掛けて据え置かれる様を見つめながら、まるで蟲ピンに固定されて身動きできなくなった標本のように、囚(とら)われた彼女の意識が真っ白な世界へと滑り落ちて行った。

その時彼女は、確かに「ドン」と言う鈍い音を聞いた気がした。

それは彼女へと狙いを定めた戦車が放った主砲の音だったのだろうか。

果てしなく長い意識の最中へと旅立ち始めた彼女の感覚は、全ての瞬間がスローに見えてしまう程の暴走を醸(かも)し出し、動かしたくても動かない両腕の感覚や、流れ落ちる冷たい汗の感覚を、どこか空中にでも浮いているような浮遊感と共に、意識に色濃く焼き付けていく。

きっともう直ぐ、私の身体は一瞬にして散ってしまうんだわ・・・。

そして、最後にたどり着いた一つの答えに対し、彼女はゆっくりと大きな溜め息を付いて、ほのかに微笑んだのだった。

バッゴーーーーン!!!

（ジャネット）

「・・・・・・？・・・・・・・・・・・・！！？」

しかし、望んだ結果を簡単に覆すように、直後に吹き荒れた猛烈な爆風に煽(あおら)れらて、激しく揺さぶり起こされた彼女の意識が目を覚ました。

一瞬にして五体を吹き飛ばされる感覚に苛(さいな)まれるでもなく。

激しい業火の渦中に生きたままに焼かれ死ぬ苦しみを味わうでもなく。

彼女は確かに、未だ自分が生きている事を悟ったのだ。

（アリミア）
「間に合ったね。」

（デルパーク）
「フロル、アリミアは左右両翼に弾幕。出し惜しみする必要は無い。最後のフィナーレを盛大な花火で演出してやろうぜ。」

（フロル）
「了解。」

そしてジャネットは、不意に耳元へと伝わってきた友軍達の会話の中に、耳障りな声色が交えられていたことに気がつくと、表情を一変させて、自分を死へと追いやるはずだった敵機の方へと視線を向けた。

するとそこには、真っ黒な黒煙を噴出して朽ち果てた、レアコンダリスの残骸が横たわっており、恐らくはジャネットに主砲を放つ以前に、後方から駆けつけたキリン隊メンバーの何れかに狙撃された

のであろう事が解った。

これほどの長い距離を、しかも一撃を持って狙撃するなど、勿論、容易な事ではないのだが、ジャネット自身それを可能とする一人の人物に心当たりがあった。

しかし彼女は、その人物の事を思い出すほどに激しく込み上げる怒りを抑えきれなくなり、表情を強張らせて唇を強く噛み締めるのだ。

（アリミア）
「死ぬことに何の意味もないのよ。解る？」

そして、更に神経を逆撫でするような言葉が彼女から浴びせかけられると、ジャネットは右手で思いっきり目の前のモニターを叩き付けた。

ぐったりと俯いたまま肩を震わせていた彼女は、瞬きを繰り返すほどに零れ落ちる涙を必死に拭い去り、嗚咽交じりの泣き声にありったけの怒気を交えて言い放った。

（ジャネット）
「・・・！！あの女っ・・・！！」

それは悲しみから来る涙なのだろうか。

それとも、生き延びる事が出来たという安心感が生んだ涙なのだろうか。

いや、それ以上に彼女の心の中に沸き起こる悔しさのような感情が、彼女の涙腺の関を切ったのかもしれない。

（ユァンラオ）
「本当に熟練した兵士は退機の判断に優れているものだ。」
なぜ悔しいの??
（ユァンラオ）
「お前がこのまま、ここに止まるというのなら、別に止めはしない。」
貴方が忌(い)み嫌う「あの女」に助けられた事が悔しいの??
（ユァンラオ）
「所詮お前も、それまでの人間だったということだ。」
自分独りでは何にも出来ない能無しの癖に、よくもまあ、そんなに気高(けだか)く気取っていられるものだわね。
（ユァンラオ）
「ただの殺人行為を存分に楽しんでから死ねばいい。」
貴方が抱いた感情も、勝手な振る舞いも。
如何に稚拙(ちせつ)で迷惑なものなのか。よく考えてみるといいわ。
（ジャネット）
「マリオォ・・・。」
馬鹿みたいに怒気を放つだけ放って相手を威嚇して。

誰も寄せ付けないようにしているのは、本当は怖いからなんでしょう？

（ジャネット）

「寒いよ・・・。寒いし・・・怖い・・・。本当は・・・怖いんだ・・・。」

怖がる必要なんて無いのに。

怖いからと言って、自分だけの殻の中に閉じこもる必要なんて無いのに。

可哀想なジャネット・・・。

大きく心に空いた穴の中に自分から嵌り込んで、身動きが取れなくなってしまったのね。

自分で自分を守る為とは言え、全くいい気味だわ。

（ジャネット）

「・・・私もう・・・。駄目なんだ。・・・駄目なの。」

失った最愛の人の為に、貴方は何もして上げられない。そう、何一つね。

そうやって幾ら泣いてあげたって、結局は自分自身を慰めるためのものじゃないの。

（ジャネット）

「解ってる・・・。解ってても・・・。でも・・・。寒んだもの・・

・。」

心の中の喪失感を「涙」という聖水で満たさなければ、耐えることが出来ない自分の弱さを、貴方は解っているのね。

決して「死んだ者」への鎮魂歌（レクイエム）として、悲壮感を歌い上げたものでもなく。

自分が失った「モノ」に取って変わる、「新しいモノ」が見つかるまでの代用品として、「涙」と言うものを利用しているに過ぎないと言う事を。

だから・・・。

誰かのために泣いてあげるなんて行為は、自賛自慰でしかないのよ。

０４－１８：〇夕暮れと共に訪れる静けさ（前書き）

すみません。ＥＸＣＥＬ計算ミスで部隊編成の数値を見直しました。
１部隊きっかり何機と言う算出ではありませんが、帝国軍が１個師団分も間違えていたので・・・＾＾；

０４－１８：〇夕暮れと共に訪れる静けさ

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１８「夕暮れと共に訪れる静けさ」

ＥＣ３９７年５月２２日。

この日、ムーンスローブ大陸最大の大国であるセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国は、トゥアム共和国に対して宣戦布告を発した後初めて、大規模な軍事行動を起こした。

「リトバリエジ侵攻作戦」と命名されたその作戦は、帝国トポリ領東部にある大渓谷群「ディップ・メイサ」に大量の戦車部隊を投入し、トゥアム共和国の副都心リトバリエジを一気に制圧する事を目的とした作戦であった。

総指揮官「パデ・ピブレジ将軍」の要した帝国軍の総兵力は、２個師団に匹敵するほどの大部隊であり、各侵攻ルート別に兵力を明細化すると、メイサセンターに戦車部隊２個連隊。支援車両１個連隊。戦闘機２飛行中隊。対地攻撃機２飛行中隊。機動兵器１個中隊。メイサレフト４に戦車部隊１個連隊と１個大隊。支援車両１個連隊。機動兵器１個中隊。そして、大きくムルア岬方面を迂回して侵攻した高速戦車１個連隊。機動兵器２個小隊。総計で戦闘地上兵器４７２機、戦闘航空兵器７４機。

一方、それに対するトゥアム共和国側の兵力は、メイサレフト４に展開した機動兵器５小隊以外は、全てメイサセンター付近に展開することになるのだが、戦車部隊１個師団。支援車両１個連隊。戦闘機２飛行中隊。対地攻撃機２飛行中隊。機動兵器１個大隊。総計で

戦闘地上兵器３６９機、戦闘航空兵器６８機。（両軍共に非戦闘車両を除く）

いずれも大部隊を投入する事になったこの戦いは、両軍共に激しい損害を被る結果となったのだが、最終的に勝利を掴み取ったのは、リトバリエジ都市を占領する事に成功した、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国であった。

戦闘開始直後こそ、メイサセンターにおける戦力比で優位に立っていた共和国軍だが、厚く敷いた陣形のサイドを、東方から迂回した形で進軍してきた、高速戦車部隊に抉り取られると、一気に不利的状況を強いられる事となった。

この帝国軍の東方迂回部隊は、カルッツァ方面を更に回り込むようにして、山岳地帯を南進してきた部隊であり、恐らくは開戦に先立って数日前から行動を起こしていたと見られ、少数部隊ながらもその高い機動性と攻撃力を持って、共和国軍主力部隊を一気に瓦解させる事に成功したのだ。

その後、何とか体勢を立て直しつつ、後方から駆けつけた援軍部隊と共に、帝国軍の攻勢を凌いでいた共和国軍だが、ムルア海峡沖から飛来した帝国軍航空部隊により、当該戦闘地域の制空権確保を著しく阻害されると、後方支援部隊であるチッチルが、帝国軍の遊撃部隊により全滅させられてしまう事となる。

それまで帝国軍に前進を躊躇させるほどの、高火力を保有していた同部隊だが、その脅威が戦線から消え失せてしまうと、勢い付いた帝国軍は一斉に南進を開始した。

この時、著しく損害を被っていた共和国戦車部隊はこれを阻止する事が出来ず、一気に雪崩れ込んだ帝国軍の前に壊滅的打撃を被る結果となったのだ。

その後、破竹の勢いで南進を続けた帝国軍は、最終目的地となる副都心リトバリエジをその包囲下に収める事となるのだが、それ以上の南進を許すわけには行かない共和国側が、リトバリエジ郊外付近を流れる特級河川スーノースーシ川に架かる橋の全てを爆破すると、戦線は一気に膠着状態へと陥る事となる。

そして同日夕刻までには、両軍の砲声は完全に途絶え、一時的停戦状態へと移行する事となるのだ。

全体的総括として評するならば、このリトバリエジ侵攻作戦は帝国軍の圧倒的な勝利によって幕を閉じたと言うべきなのだろうが、そこに一つだけ負たる惨禍（さんか）が有ったとするならば、それはメイサレフト４の惨劇に他ならないだろう。

帝国軍がメイサレフト４に投入した地上部隊の総数は１８５機。それに対して共和国軍が投入した兵力は、僅かに１５機であった。

しかし、もはや一方的な殺戮劇しか望めぬ戦場において、事もあろうかこの帝国軍戦車部隊は、たったの１５機の前に壊滅してしまったのである。

勿論それは、共和国軍後方支援部隊リプトンサムの、攻撃力なくして成しえなかった偉業ではあるが、それでも極少数部隊のみで、これほどの大部隊を壊滅させてしまったと言う事実は、帝国軍、共和国軍共に、少なからず衝撃を与えたのだった。

０４－１９：〇心に巣食う見えない枷［１］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ１９「心に巣食う見えない枷」

「・・・続いて最新情報をお伝えいたします。本日、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国軍に占領されたリトバリエジ都市ですが、帝国軍に対し、激しく抵抗を見せた一部の市民に、怪我人が出た模様です。帝国軍の発表によりますと、この負傷した市民達は何れも軽症で、命に別状は無いと言う事です。現在同市は、帝国軍による厳重な監視態勢にあるものの、市民の生活に対しては比較的大きな圧力も無く・・・。」

真っ暗な闇夜から降り注ぐ雨水が、ガラスに当たっては弾け、細かに散り散りとなった水滴が纏(まと)わり付くかのように群をなして、ツルツルと滴り落ちていく。

締め切った薄暗い世界の中に、ほのかに光る速度計のライトに照らし出された自分の顔を、直ぐ脇のガラス越しに、じっと見つめている少女が一人。

やや疲れきった様子の彼女は、左手で衝立(ついたて)をした上に頬を乗せ、淡々と現状報告を垂れ流すラジオの音声に浸りながら、ＤＱを搬送する大型トレーラーの後部座席で、静かに時を過ごしていた。

「・・・両軍共にスーノースーシ川両岸を挟んでの睨み合いが続いており、今後も予断を許さない状況が続くと見られていますが、共和国防衛司令長官メルデンス・ハウアー陸将によれば、帝国軍に新たな動きは確認できず、近日中の首都ランベルク侵攻は無いであろ

うとの見方を強めている模様です。また、帝国軍の支配下に置かれることとなったリトバリエジ都市市民に対しては、決して軽率な行動を起こさぬよう自重を強く促すと共に、帝国軍に対して、人道的判断を求めたと言う事です。尚、今後両軍の間で、７２時間の休戦協定が合意に達する見通しであり・・・。」

夕方過ぎから降り始めた雨足が更に強さを増していく中、只管（ひたすら）に道幅の広いハイウェイを走る事約６時間半。

それまで過酷な戦場に追いやられていた戦士達から見れば、平和で静かな一時を満喫できようとものなのだが、生憎軍用トレーラーに彼等を満足させるような機能が施されているはずも無く、窮屈で退屈な時間を、ただ虚しく浪費するだけであった。

彼等ネニファイン部隊の先発パイロット達は、ディップ・メイサ・クロー作戦終了後に、南方から迂回してきた輸送部隊と接触。

そのままリトバリエジ都市東方に位置する「シムナム基地」へと向かう予定だったのだが、余りにも帝国軍の攻勢が激しかったために、急遽、レイナート山脈麓を南下するような迂回コースを取らざるを得ず、目的地もランベルク基地へと変更を余儀なくされたのだった。

（ルワシー）
「運ちゃん。ランベルク基地まで後どんぐらいなんだ？」

（運転手）
「あと３０分ぐらいですかね。もうしばらくの辛抱ですよ。空港のサーチライトが見えて来たら直ぐです。」

（ルワシー）

「そういやよ。帝国軍に使用されない様にって、ネミッサ空港の滑走路を全部爆破したって話。ありゃぁ本当なんか？」

（運転手）

「さあてねぇ。単なる輸送部隊の下っ端に、そんなこと解るわけ無いでしょが。そういう事は、旦那の方が詳しいんじゃないですか？」

そして、少女の隣の席に座っていた大柄のモヒカン男が、持て余した暇な時間に耐え切れなくなると、しばしば前席に座る運転手を相手に、退屈凌ぎと話しかけるのだが、それでも見知らぬ男同士の会話が花開く事も無く、また直ぐに長い沈黙の時が訪れるのだった。

降り注ぐ大粒の雨水が、バチバチとフロントガラスを叩きつける音が響き渡る車内で、じっとりと湿った空気は何処と無く重く、淀んだもののようにも感じる。

まるで昼間に行われた戦闘の全てが、夢であったかのような静けさを匂わせながらも、すり減らされた感覚は未だ休まる事無く研ぎ澄まされ、眠気を欲する体に反してドクドクと脈打ったままだったのだ。

普段であれば、こと細かい事に関しては、完全に無頓着を突き通すルワシーなのだが、さすがに過酷な戦場を人生で始めて経験した直後とあって、この時ばかりは、そんなもどかしさが彼の心の中に立ち込めたままだった。

そして、彼の隣に座る少女もまた、同様の感覚に苛（さいな）まれていたのであろうか。

一切口を開かずく、ただじっと真っ暗な窓の外へと視線を向ける彼

女は、まるで眠りこけているかのように、ずっと同じ姿勢を保ったままだったのだが、はっきりと見開いたその視線は、薄っすらと曇る窓ガラス越しに、何かを見つめているようでもあった。

（運転手）
「シデーロス平原では主力部隊が、6割から7割もやられたって言うじゃないですか。旦那の部隊は大丈夫だったんですか？」

（ルワシー）
「うちの部隊だって1／3はやられちまったぁぜ。奇襲したつもりが奇襲されちまった挙句に援軍も来やしねぇ。そりゃぁひでぇのなんのってな。あんな状況で良く生きて帰ってこれたもんだ。」

（運転手）
「そりゃ災難でしたねぇ。でもまあ、もっと酷い災難にあった人も多かったでしょうし、生きて帰れただけでも感謝しませんとね。」

（ルワシー）
「まあ、そりゃ違いねぇな。」

そう言うとルワシーは、一つ大きな息を吐き出して深々とシートに持たれかかると、横目でチラリとセニフの方へと視線を向けた。

どれだけの経験を積んだ熟練の者でも、いとも簡単に死んでいく凄惨な戦場において、ほとんど新米部隊に近いネニファイン部隊が相手にしたのは、自分達の十数倍はあろうかと言う大戦車部隊。

しかも自軍の主力部隊からは見放され、挙句の果てには約束された上空からの支援も一切無いという状況を強いられる始末だ。

更には、ありえないほどの高威力を誇る帝国軍の新兵器に追い回される羽目となり、成す術もなく逃げ惑っていた自分は、まさに「死に組」の一員であったはずだった。

ＤＱを操舵する技術に関しては、人より秀でた能力を有していると言う自負もあり、自分が簡単に死の縁へと追いやられる事など、甘っちょろくも考えてい無かった彼だが、おぞましい程にうねり狂う殺意と憎悪が渦巻く戦場においては、そんな僅かな能力の差など、何の役にも立たなかったのである。

あの巨大なＤＱが彼の目の前に立ちはだかった時、もはや彼には、死ぬ以外の道は残されていなかったのかもしれない。

しかし、それでも彼は生き残った。「生き残り組」として今日を生きる権利を、そして明日を迎える権利を手する事が出来たのだ。

勿論それが、決して自分一人の力によるものではない事は十分に解っている事であり、少なくとも、彼の横に座る小さな少女の存在なくして、自分がその権利を手にする事は出来なかっただろうと、彼女へと据えた視線の上に思うのである。

こんな奴。見れば見るほどにただの餓鬼じゃねぇか。

こんなチンケな小娘に、一体どうやってあんな戦い方が出来たんだ？

確かにＤＱを操作する技術に関してだけは、女も子供も関係ねぇが、あれほどの相手を前に逃げ出すどころか、逆に手玉に取っちまうんだからよ。

実戦経験どころか、戦闘経験さえ浅いはずのこの餓鬼に。

覇気の欠片も感じねぇただの小娘によ。

現にこいつを助け出した時だって・・・。

彼はメイサ崖の縁でバスターマンティスとの死闘を終えた後、部隊内でやり取りされる通信内容から、メイサ渓谷内に閉じ込めた帝国軍戦車部隊を、リプトンサムの支援砲撃で一掃するという作戦が発動された事を知った。

このリプトンサムが常備する弾道ミサイルは、ＴＡＧ弾と呼ばれる強烈な破壊兵器の一つであり、ようやく巨大なＤＱの猛威から逃れる事が出来たとは言え、新たな脅威が彼の身に迫っている事を示唆していた。

しかし、いつまでもその戦闘区域に身を置く事は許されない状況下にありながらも、彼はまず、バスターマンティスのスタンボム攻撃で黒焦げにされてしまった、トゥマルクの元へと駆けつけると、即座にセニフの救出活動を始めたのだ。

あれほどに強力な威力を誇った電気的衝撃波をまともに食らった状態で、決して彼女が無事である保証は無かったのだが、それでも彼は、この作戦の最大の功労者であろう少女を見捨て、一人で逃げ失せようなどと言う気にはなれなかったのだ。

（ルワシー）

「セニフ。・・・よぉ。セニフ。」

（セニフ）
「・・・ん?・・・んん・・・・・・。」

真っ黒に焼かれた前面装甲を無理やり機体から引き剥がし、分厚いコクピットハッチを手動で操作する開閉装置にトゥマルクの右手指を宛がうと、ルワシーは体躯に似合わぬ繊細な作業を難なくこなしてみせる。

と言うのも、コクピットの手動開閉装置は、ＤＱなどの大型機械でも簡単にこじ開けられるように、大きめに作られているのがほとんどであり、開閉作業を行うための行動ファンクションも、ＤＱ制御システムの中に標準機能として備わっているため、猿でも出来る作業の一つなのだ。

（ルワシー）
「何でぇ何でぇ辛気臭ぇなセニフ。いつもは糞うるせぇはずのてめぇがそんなんだから、馬鹿みてぇにドカ雨が降んだよまったく。やっぱ初めて戦場ってもんが怖かったんか?ああ?」

（セニフ）
「・・・んん・・・?・・・怖い?」

そして、簡単にこじ開いたコクピットハッチ越しに、彼は覗き込むように少女の様子を窺(うかが)って見たのだが、コクピットシートの上に仰向けに寝そべったままの少女は、何の反応も見せなかったのだ。

彼はすぐさま自分のＤＱのコクピットを開放して身を乗り出すと、鼻に付く焼け焦げた匂いが周囲に立ち込める中、今度は大声で彼女へと呼びかけた。

生きているのか。死んでいるのか。それとも気絶しているだけなのか。

この時、既に時間に追われる身であった彼には、もはやその結果が何れであっても関係なく、彼女の身を引き上げて連れ帰る為に、薄暗いコクピットの中に降りて行こうとしたのだが、そんな時、ようやく彼女の瞼（まぶた）がゆっくりと開いたのだった。

そして、その様子に安堵したように大きく溜め息を付いた彼が、憎まれ口を持って彼女の生還を祝おうとした時、突然彼女は、耳を劈（つんざ）かんばかりの大声で泣き始めたのだ。

（セニフ）

「怖い・・・。怖いか・・・。そうだよね・・・。うん・・・。」

真っ暗な外の世界を大型トレーラーの後部座席からじっと眺めたまま、セニフが覚束（おぼつか）ない口調で静かに肯定して見せたのだが、果たしてそれは、彼の問いに対する答えだったのだろうか。

自分のＤＱのコクピットにセニフを乗せて戦場を脱出してから、輸送部隊の大型トレーラーで延々と身を揺さぶられる間、セニフの態度は一貫して曇ったままだったのだ。

元気が無いのは戦闘の疲れから来るものだろうとしても、それでも彼には、あからさまに彼女の様子が普段と異なっていることに気がついていた。

（セニフ）

「雨。ほんとよく降るよね。流されるだけ流されて。一体、何処まで行っちゃうのかな。」

（ルワシー）
「はぁ？？」

少し視線を傾けて、ようやく意識を外の世界から狭い車内へと寄り戻した彼女が、隣に座る大柄の男に突拍子も無い質問を投げかける。

勿論、彼女の言いたい事は全く別のものを意図しているのだろうが、未だ出会ってから二週間程しか経っていない間柄では、不可解に暗号化された彼女の言動を解き明かす事など不可能に近い。

怪訝（けげん）な表情で彼女を見据えるルワシーには、機械的に発してしまった甲高い声を返す事しか出来なかった。

しかし、持て余した時間をどう使おうが、暇以上に退屈な事は無いわけで、彼はその後も続けられた彼女の不思議な問いかけに対し、すこし相手をしてやる事にした。

（セニフ）
「高いところから、低いところへさ。真っ暗でも、何も見えなくても、水は行き場所を知っているんだ。なんか羨ましいよね。」

（ルワシー）
「はっ。なんのこっちゃよう解らんが、行き先なんてな、解ってても行けるもんじゃねぇだろが。流れ着いた先がちっこい水溜りで、晴れと同時に干上がっちまうのがオチってこともあらぁな。」

（セニフ）
「干上がって空に上れば、また雨になって降ってこれるじゃない。流されるだけ流されて、海にたどり着いてしまったら、深い海底で

一生空に上れない可能性だってあるよね。結局、どっちが幸せなんだろ。」

（ルワシー）
「おっかしなこと言う奴だな。水に幸せも糞もあるかい。自分じゃどっちに行こうかなんて、決める事も出来ねぇ流されるだけの奴等に、そんなもんを感じる意思なんてねぇのさ。行きたい所に行けたら幸せ。行けなかったら不幸せってこったろ？」

（セニフ）
「行きたい所に行けたら幸せ・・・。・・・か。ふぅん・・・。行きたい所に行くためには、一体どうしたらいいのかな・・・。」

（ルワシー）
「ああん？？そりゃぁ努力するしかねぇだろうよ。必死こいて駆けずり回って、泥に塗れながらよ。」

（セニフ）
「ルワシーはさ。努力してんの？」

（ルワシー）
「がはっはっは。俺様のような天才には、そんな努力必要ねぇってもんだ。てめぇみてぇな小馬鹿なドチビと違ってよ。」

（セニフ）
「そっか。そだよね・・・。それなりだもんね・・・。」

（ルワシー）
「・・・。てめぇ・・・。今の一番むかついたぞ。」

（セニフ）
「やっぱさ。頑張らないと幸せになれないのかな。」

（ルワシー）
「あのなぁ。何もしないでポッと手に入った幸せってぇもんが、本当に幸せな事だとおもうんか？過酷な状況を乗り切ってこそ、男ってぇもんだろがよ。頑張りゃ頑張った分だけ、良い事があるってもんよ。」

（セニフ）
「でもさ・・・。実際、何をどう頑張ったらいいのか解んないし・・・。行きたい所って・・・。・・・。」

セニフはふと、そう言いかけると、ゆっくりと俯(うつむ)いて黙り込んでしまった。

さほど長い会話の中でとまでは行かないにしろ、どうやら彼女の心の中には、魚の骨のように煩(わずら)わしい棘が、突き刺さっているような気配がする。

身動きするでもないが、そのむず痒(がゆ)さに耐え切れないように、心を懸命に捩(よじ)っては、取れぬもどかしさが彼女の心に暗い影を落とすのであろう。

（ルワシー）
「ははぁ～ん。なぁんだ。さてはてめぇ。なんか悩み事でもあんな。なんだ?言ってみぃ。ほれっ。」

（セニフ）
「う・・・。うっさいな！」

悩み苦しむ少女を前に、こんな言いかたしか出来ない彼の性格にも問題はあるのだが、それでも一瞬、彼女の心に刺さった棘を、ほんの少し揺り動かす事に成功したようだ。

彼自身、さほど親密でもないこの少女を相手に、自分がしてやれる事などほとんど無いのだということは自覚しており、そのぐらついた意識の片隅にいつもの小娘の姿を確認すると、ほのかに野蛮な笑みを浮かべて、彼女の意識を煽り立てるのだった。

（ルワシー）
「へっへぇ～。てめぇみてぇな糞馬鹿女に悩み事があんなんて思わんかったな。俺ぁまたちっこい頭ん中は、鼻くそ程度の脳みそしかねぇカラッカラの空洞だと思ってたんがよ。喚き散らすことしか能のねぇ馬鹿が、慣れねぇ事ばっかしてっと、残りすくねぇ脳細胞が焼け焦げちまうぜ。それとも何か？スタンボムでもう真っ黒な墨にでもなっちまったんか？」

（セニフ）
「脳みその隅まで脂肪に包まれた誰かさんと、一緒にして欲しくないもんだね。戦闘中でも食べ物の事しか頭に無かったくせに、そんなにお肉が食べたけりゃ、自分の脂肪でも食べてりゃいいじゃん。デブがデカブツにヒーヒーいって追い回されてた癖に。」

（ルワシー）
「はっ！！チョロチョロ動き回るだけの単細胞が、偉そうな事ぬかしてんじゃねぇよ。後先も考えずにてめぇが動きまわっから、馬鹿なデカブツが辺りに弾丸をばら撒くんじゃねぇか。迂闊に身動きが取れなくなった周りの迷惑も、ちったぁ考えて行動したらどうなんだこのボケナスが！」

（セニフ）
「はんっ！あの程度の攻撃で身動き取れなくなるですって？？あ～ぁ。ほんと、心底デブにはなりたくないもんだね！その点、私はスマートな動きだったでしょ？少しは私の事を見習って、ダイエットでもしたらどうなんですか？おでぶちゃん。」

（ルワシー）
「けっ！！てめぇを見習うだと？てめぇみてぇに遺伝子からちっちゃく出来てるような奴には、元々ダイエットなんざ必要ねぇだろよ！身なりに似合わないデカ口を叩く神経に栄養を全部吸い取られて、必要な所に行き届いてないんだろよ！板張り貧乳娘さん！」

（セニフ）
「なっ！？お前みたいに余分な脂肪だらだらの豚に言われたくないね！そのうちきっと食用ラードが取れるよ！食用ラーーード！！幾ら胸が欲しくたって、そんな汚いもん絶対食べたくないけどね！ほら見てよココ、ココ。くびれって言うんだよ。く・・・び・・・れ！何でこの魅力的なラインが解んないのかなぁ。まあ、どんなに絞っても一生凸型体系から抜け出せないデブ男に、同意を求めても仕方が無いっか！あっはは！」

（ルワシー）
「そんな捻（ひね）れば折れそうなガリガリの何処に魅力があるってんだ。女はもっとこう、ムチムチっとした感じの方が良いに決っとるだろが。煮ても焼いても食え無そうなドチビに惹（ひ）かれるほど、俺も暇じゃねぇのさ。」

（セニフ）
「ヤラシイんだよその手つき！！馬鹿っ！！まっ！お前みたいなデ

ブなんか、だ～れも相手にしないけどね！豚は豚らしく豚小屋にでも篭(こも)って、餌でも漁(あさ)ってるがいいさ！！このデブデブデブデブデブ！！」

それまでとは一変して、騒々しい空気が車内へと充満し始める中で、運転席で真面目に大型トレーラーを操る運転手が、バックミラー越しに二人の様子をマジマジと観察していた。

そして、いたって低レベルで、内容にも乏しい詰(なじ)り合いを前に、会話に参加するどころか溜め息を付いて見せる事しかできない運転手は、以前耳にした噂を思い出すのである。

新設部隊「ネニファイン」は、若者を寄せ集めて作られた問題児部隊であるという事を。

後部座席に座る二人の男女の振る舞いは、まさにその噂を肯定すべきものであって、恐らく彼等自身には、そう称される事に対して、何ら自覚が無いのだろう。

やがて、呆れた様子で頭を掻いた運転手は、バックミラーから視線を断ち切ると、その後も続けられた幼稚な戦闘に対して、完全に素知らぬふりを決め込むのだった。

０４－２０：〇心に巣食う見えない枷［２］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２０「心に巣食う見えない枷」

真っ暗な闇夜に包まれた世界にねっとりとした高湿度の空気が渦巻く中で、いまだ休む事を許されない働き蟻達が、光を照らし出す大きな巣の様な建物の中を慌しく駆け回っていた。

４本の大きな道路を飲み込むように聳え立つこの大きな建物は、アルテナス山南方地下奥深くに建設された、巨大なランベルク地下基地へと続く通用口の一つとなっており、激しい戦闘を終えて帰還した多くの兵士達の姿で溢れかえっていた。

夕方から降り始めた激しい雨は、次第に雷を伴った強い嵐の到来を示唆しており、巨大な建物の入り口付近には、吹き込んだ雨水が大量に屯して、大きな水溜りを形成し始めている。

そして、茹だるような湿気が充満する建物の内部では、ようやく仲間達を乗せた大型トレーラーが到着し始めた事により、俄かに慌しさを見せ始めた作業員達の熱気で、さらに激しく蒸しかえるような雰囲気を見せ始めていた。

（ジニアス）
「シル。次のトレーラーは９号機トゥマルクだ。４号機に続けて１１番デッキに流そうぜ。最後の２号機と３号機はどうする？どこか突っ込める工場あるのか？」

（シルジーク）

「後はジョルジュの申請待ちかな。2号機は大型機だから、通常ラインじゃ規格が合わないし、近場で良い場所が確保できれば良いんだけど、どうだろうな。」

（ジニアス）
「アマーウとトムシアが積荷を下ろしたら、もう一度上がって来るって言ってたから、こいつは俺が引っ張っていくよ。荷物も俺が持っててやる。シルは次の9号機を頼むぜ。」

大型トレーラーが到着するなり、すぐさま後部荷台へと駆け上がり、積荷を覆ったブルーシートの中の確認作業をしていた金髪の少年に、厳ついオッサンの「ジニアス・シャルマーニュ」が話しかける。

作業ズボンにタンクトップ姿で、短く刈り込んだ短髪が特徴的なこの男は、まだ30歳を迎えていないのだが、鼻の下に蓄えた茫々（ぼうぼう）の髭が若さをかき消しており、鍛え込んだと見える上半身の筋肉は、見るからにむさ苦しい熱気を放っているようだった。

そして、右肩に大きなワイヤーをグルグル巻きにした状態のまま、小脇に山積みされた重そうな荷物を持ち上げると、トレーラーの荷台に軽々と積み上げ始めた。

（メディアス）
「お疲れさん。あとは頼むわね。よろしく。」

（ソドム）
「やだねぇ。帰ってきて早々、お前さんの裸体拝むとは思わなかったよ。この蒸し暑さはお前さんの両肩から沸いてるんじゃないだろうな。」

（メディアス）
「やだよ。変な事言わないでおくれ。」

（ジニアス）
「うるせぇ。ぼやいてる暇があったら、さっさと風呂入って寝ちまえ。こっからは俺等の仕事だからよ。」

到着した大型トレーラーから身を乗り出した仲間達と軽い挨拶を交わし、一息ついて高い天井を見上げるように反り返ったジニアスは、どこかオッサン臭く右手で少し肩を叩いた後に、再び積荷作業を再開する。

彼等整備士達にとっては、パイロット達が戦闘から帰還してからが本当の戦いの始まりであって、既に２１時を回ろうとしているこの時間帯をスタートラインとするならば、恐らくゴール地点は、翌日の昼過ぎまで伸びてしまう事になるだろう。

勿論、著しく激しい損傷を負ってしまった機体に関しては、予備部品の関係上、完全に修復が完了するレベルには達しないかもしれないが、それでも帝国軍が直ぐ目と鼻の先まで差し迫ったこの状況下では、出来る限り再出撃が可能な体制を維持し続ける必要が有るのだ。

とは言え、彼等にとって、ここランベルク基地は一時的仮宿として設定された駐留基地であり、ネニファイン部隊専用の整備施設が整えられている訳ではない。

しかも、今回のディップ・メイサ・クロー作戦においては、彼等よりも激しい損害を被った部隊が多く存在するため、共和国で最大を誇る駐留基地であるランベルク基地でさえ、整備施設を確保するた

めに、各部隊とも躍起になって取り合いをしている状況なのだ。

（シルジーク）
「ジニアス。チェックシートは事務室に提出しておくよ。下でサフォークに会ったら、直ぐ機体の状況確認作業を始めてくれって伝えてくれ。」

（ジニアス）
「解った。じゃあ。先に降りてるぜ。」

かなりの重労働であったはずの積荷作業を、いとも簡単に終わらせたジニアスは、体中から玉のように噴出す汗の雫を、首から下げたタオルで拭いながら、大型トレーラーの荷台から飛び降りたシルに向かって軽く手を振ってみせる。

そして、ゆっくりと運転席の方へ回りこみ、大型トレーラーの運転席へと身を乗り入れると、小走りに駆け寄ってきた一人の少年と数回言葉を交し合った。

茶色い綺麗な細い髪の毛が特徴的なその少年は、端整な顔立ちと華奢な身体つきから、少女のようにも見えてしまうほど可愛らしい風貌をしており、年齢はシルと同じ１８歳の若者で、名前を「ジョルジュ・ハーツ」と言った。

身体つき、顔つきに似合わず、彼はトゥアム共和国軍の正規整備士の一人であり、とても人当たりの良い性格の持ち主だ。

そしてジョルジュは、トレーラー後方部に突っ立っていたシルの姿を確認すると、身軽そうな身体を跳ね上がらせて、軽快に彼の元へと走り寄ってきた。

（ジョルジュ）
「シル。最後の整備工場取れたよ。東ブロック最果ての３７番。スペースだけの簡易工場みたいだけど、炙(あぶ)れて立ち往生(おうじょう)するよりはいいよね。」

（シルジーク）
「３７番!?地上施設じゃないかそこ。確か地下通路すら届いていない放置区画だったと思うが・・・。」

（ジョルジュ）
「ま。こんな状況じゃ仕方ないかもね。ＤＱを吊り上げるクレーンすら無いみたいだから、私先行ってクレーン車取ってくるよ。」

（シルジーク）
「３号機はかなり損傷が激しいみたいだから、そいつだけは１１番待機だな。２号機は全神経チェックまでするのか?」

（ジョルジュ）
「報告書を読んだ限りだと、そこまでする必要は無いかなって思うけど、なんかメーカー担当者が戦闘後の状況確認をしたいみたいなんだって。ぷーちゃんも嫌がってたけどね。」

（シルジーク）
「この糞忙しい時に、迷惑なもんだな・・・。」

そう言うとシルは、一つ小さな溜め息を付いて見せた後、大きなエンジン音を発して動き始めたトレーラーに向かって軽く手を振った。

ジョルジュの言う「ぷーちゃん」とは、彼等バックアップチームの

リーダーである、シューマリアン技術三尉の事で、その幅広な体躯と温厚な性格から付けられた悪意無き愛称だ。

勿論、本人を目の前にしてその愛称を口にする事は出来ないのだが、彼等のリーダーは既に軍部内に存在していたその呼び名を全く意に介する様子も無く、彼等もそのまま前に習う形を取った訳だ。

シューマリアンは技術的に秀でた有能な人物ではあったが、縦社会である軍部内においても軍規に比較的緩い方であり、どちらかと言えば、ネニファイン部隊隊長のサルムザーク寄りの人間である。

そう言った二人の性格に、軍律に厳しいカースなどは、部下達に示しが付かないからと、怪訝(けげん)そうな表情で小言を言い出したりするものだが、逆に部下達からすれば、様々に行動しやすい環境を提供してくれる、このバックアップリーダーの温和さが十分に心地よかった。

（ジョルジュ）
「あっ。後続のトレーラーが到着したいみたいだよ。」

ジョルジュが指差して発した言葉と共にシルが視線を移動させると、大きな建物入り口付近に降り注ぐ濃密な雨粒の嵐の中から、次なるパイロット達を乗せた大型トレーラーが姿を現した。

そして、強烈に照りつける４つのヘッドライトの明かりが、ようやく人心地着く建物の内部へと逃げ込んで来ると、激しい風雨にされされた車体上からは、大量に蓄えられた雨水が滝のように流れ落ちた。

この季節、雨季を迎える東スロベーヌ地方の中では、比較的穏やか

な方だとされるランベルクだが、夕方から降り始めた雨足は弱まるどころか、更に激しさを増しているようで、同地域における降雨量は、近年稀に見る記録を叩き出しそうな勢いである。

勿論、スーノースーシ川対岸に陣取る帝国軍を足止めしておく意味でも、河川の増水を招く大雨は歓迎すべきものなのだが、橋梁を爆破するにあたり複数箇所の堤防をも巻き込んでしまったために、膨大な水量を誇るこの特級河川の氾濫が、新たな脅威として問題視され始めたのだ。

現段階では十分に整備されたこの河川が氾濫する可能性は低いと見られているが、それでも「水龍」と揶揄される同特級河川の脅威は、過去の歴史を紐解けば自ずと明らかになる事であり、トゥアム共和国政府は陸軍協力の元で、簡易的補修工事の実施を緊急決定した。

この時、汎用的機種であるＤＱを保有する部隊に、この作業の指示が下される予定だったのだが、帝国軍との間に結ばれた７２時間の休戦協定の中に、両岸３ｋｍｉｌｓエリア内には軍事兵器を配備しないという条項があり、奇しくもネニファイン部隊がこの後始末作業に駆り出される事は無かったのである。

（ジョルジュ）
「あれっ？どうしたの？シル。」

（シルジーク）
「ん？・・・。ああ。いや・・・。」

ジョルジュはふと、後続の仲間達の到着と同時に、どこか浮かない表情を浮かべたシルに向けて不思議そうな視線を送ると、彼の目の前にしゃがみ込んで彼の顔色を覗き込んだ。

（ジョルジュ）
「何？どこか身体の調子でも悪いの？」

（シルジーク）
「大丈夫だよ。ほら。ここ蒸し暑くってさ・・・。いっその事、外で大雨に当たっていた方が気持ちいいかなって思って。少し外走ってくるか？」

（ジョルジュ）
「あっははは。私は遠慮しとく。」

ジョルジュの心配そうな表情を他所に、軽い冗談を交えて言葉を返したシルだが、それは全く彼の本心を曝(さら)け出したものではない。

勿論、頭の奥から煮え立ちそうな周囲の熱気に、不快感を感じない訳ではなかったが、それ以上に心の奥底に蔓延(はびこ)った黒い重石(おもし)が、彼の心を暗い深遠へと誘いをかけるのだ。

できる事なら一つ前の大型トレーラーを担当し、さっさと地下基地の作業場で、忙しい整備作業に没頭してしまいたいという逃避的思考が、シルの脳裏の片隅にあったことは確かだが、それがいつまでも続けられるはずも無い事を、彼は解っていたはずだった。

解っていながらにして、尚もそれを避けたい気持ちが渦巻いてしまうのは、彼自身、どんな顔をしてどのような言葉を投げかければ良いのか、今の今まで結論を出せずにいたからである。

たとえ更に考える時間を与えられたところで、最良の結論に達する保証など無い訳だが、それでも容赦なく時は進み、望まぬ瞬間と言

えど、飛び越えることが許されない一つの壁へと差し掛かる。

やがて、彼の直ぐ脇に停車した大型トレーラーの後部座席の扉が開くと、久しぶりに聞く声色が彼の元へと届けられたのだ。

０４－２１：○心に巣食う見えない枷［３］

第四話：「涙の理由＋」

（セニフ）
「べぇ～だ！私だってもう子供じゃないんだし、夜中一人でトイレぐらい行けますよだ！お前なんか便座に尻半分しか乗らないくせに！！」

（シルジーク）
「・・・。」

ネニファイン部隊の研修は、カース作戦軍曹の指揮するアタッカーチームと、シューマリアン技術三尉の指揮するバックアップチームと別々の場所で行われた。

そのため、シルとセニフは軍隊に所属するようになってから2週間もの間、お互いに顔を会わせることなく過ごしてきたわけだが、ここでようやく二人が鉢合わせる事になった。

（セニフ）
「ふっざけんなバーカ！！トイレ詰まらすぐらいしか能が無いデブが、偉そうな事言わないで欲しいもんだね！！」

（シルジーク）
「・・・・・・。」

汚らしい怒声を吐き散らしながら姿を現した小さな少女が、帰りの車両の中でどんなやり取りをして来たのか定かではないが、それで

も聞こえ来る会話の断片から、シルには大体予想が付いてしまう所が痛いところだ。

まさか帰りの道中、ずっとこんな調子だったんじゃないだろうな・・・。

右手を額に当て、あからさまに表情を顰めてしまったシルは、余りにも恥ずかしい罵り合いを繰り広げる嘗ての仲間の姿に、呆れ返って大きな溜め息を付いてみせる事しかできなかった。

普段のシルであれば、こんな彼女の振る舞いに対して、直ぐにでも大声で怒鳴りつけていたに違いないが、最後に目にした少女の姿が彼の脳裏に浮かび上がると、大型トレーラーから飛び降りた一人の少女と重ね合わせて、普段通り言葉を全く発する事が出来なかった。

（ジョルジュ）
「あれって・・・。セニフって言う子だよね。確か前の所属がシルと一緒じゃなかったっけ？・・・ええと・・・。元気のいい子だね・・・。」

（シルジーク）
「え・・・。ああ・・・。まぁ・・・。」

温和な性格の持ち主で、決して人を悪く言わないジョルジュなのだが、この時の彼は、目の前の少女を表現して見せるのに少し窮したようで、変に作り笑いのような笑みを浮かべて誤魔化して見せる。

そして、そんなばつの悪い不穏な空気が流れ始める中、シルもどこか上の空のような、素っ気無い返事を返す事しか出来なかったのだが、ふと、先ほどまで激しい怒気を放っていたはずの少女が、元気

なく項垂れるように歩き始めた姿を目の当たりにし、固定した視線を引き剥(は)がす事が出来なくなってしまった。

（ジョルジュ）
「じゃぁね。シル。私そろそろ行かないと。お互いお仕事頑張ろうね。」

そう言ってシルの背中をポンと叩いたジョルジュは、元気良く通路小脇の出入り口に向かって走り出した。

彼としてもいつまでも他愛の無い会話に興じている暇も無く、それは最後に到着する大型トレーラーを受け入れるための、準備作業に取り掛からねばならなかったからではあるが、久しぶりに顔を会わせる事になるであろう二人の再会に水を差さないようにと、彼なりの「余計な」お世話だったのかもしれない。

（ジョルジュ）
「お疲れ様セニフ。君は少しおしとやかにした方が可愛いと思うよ。」

（セニフ）
「え？・・・あっ・・・。え？・・・。ちょっ・・・。」

ジョルジュは、俯(うつむ)いたまま歩くセニフとすれ違いざま、可愛らしい声色で彼女に語りかけると、驚いた様子で簡単な挨拶すら返せない彼女に向かって、優しくニッコリと微笑んだ。

そして、通路向こうから歩いてきた三人組の作業員達の小脇を、ひらりと身軽くすり抜けて見せると、起用にも踊るように出入り口の向こうへと、その小柄な身体をかき消したのである。

全く何処の誰とも事情を知らないセニフとしては、小首を傾げて怪訝な表情を浮かべる事しか出来なかったのだが、やがて少しの間、建物入り口付近に降り注ぐ雨粒の渦を眺めた後、ゆっくりと踵を返した。

しかし、彼女が再び歩き出そうと、右足を一歩踏み出した時、彼女は目の前に立ち尽くす一人の少年の存在に気がついた。

それは彼女にとって、普段から見慣れていたはずの金髪の少年であり、お互いに同じ部隊に所属しているため、突然の遭遇に驚く事など何もないはずなのだが、彼女の心の奥に衝撃的な高鳴りを奏で出すと、交錯した視線を振りほどく事が出来ないほどに、ドクドクと脈打つ胸の鼓動が彼女の行動を縛り付けたのだ。

「ねぇねぇ。聞いてよシル。私ね。でっかいＤＱ。凄くでっかいＤＱ倒したんだよ。凄いでしょ。それからさ・・・。」

「セニフ。お前なぁ。２週間も会わなきゃ、少しは大人になるかと思えば・・・。あんなに喚き散らして、こっちが恥ずかしくなるぜ。まったく・・・。」

周囲で忙しく動き回る作業員達の声も。

目まぐるしく行き交う大きなトレーラーの走行音も。

滝のように降り注ぐ雨音も聞こえない程に、二人は完全に別世界の最中に漂っているようだった。

お互いがお互いに望んだ言葉を、お互いの世界の中だけに響かせな

がら、二人はじっと、相手の発する言葉を只管(ひたすら)に待っていた。

どちら共に会いたくなかった訳ではない。

どちらかと言えば、会って話がしたいと願っていた相手。

しかしそれでも、実際にその機会を与えられて尚、それに対する拒絶反応が胸の奥で痛々しい棘を持って暴れようとするのは何故なのだろう。

遠い遠い昔。まだ幼い子供だった頃に。

一時期とても仲良く遊んでいた友達と、久しぶりに出会ってしまった時のような感覚だろうか。

あんなに楽しく遊んでいたのに。あんなに何でも話し合った仲だというのに。

ほんの少しの期間離れ離れになっていただけで、一体何を話していいのかと戸惑う感覚。

この話題はもう古いかな・・・。こんな事もあったんだけど、興味を持ってくれるのだろうか・・・。

仲良く遊んでた頃は、そんな事すら考えずに、まず真っ先に話しかけてたっけ・・・。

どんな風に話しかけてたんだっけ・・・。どんな風に遊んでいたんだっけ・・・。

全然こっちに話しかけてくれないなんて・・・。

ひょっとしてもう自分の事を忘れてしまっているんじゃないだろうか・・・。

そんな不安感に似た恐怖心を、この時の両者は抱いていたのかもしれない。

ふと、そんな気まずい雰囲気が渦巻く中で、先に耐え切れなくなったシルの方が、セニフから視線を外した。

そしてセニフもまた、そんなシルの行動を見て、少し泣きそうな表情を醸(かも)し出すと、ゆっくりとシルから視線を外して俯(うつむ)いてしまった。

シルは、本当はセニフと色々話がしたかった。

あの暗い一室での出来事以来、彼は何度と無くセニフに心の中で問いかけ、長い長い会話のやり取りをイメージしてきた。

勿論それは、自分にとって都合のいいやり取りであり、こうあれば良いと言う、いわば彼の願望の塊が、潮の満ち引きの様に繰り返されただけの空想でしかない。

実際に思い通りに事が進むなどと、安易に考えていた訳でもなかったが、それでも最初の一歩目を踏み出さない事には、良くも悪くも次なる展開など望む事すら出来ないのだ。

「今度は絶対割れない、頑丈なコップを用意してな。」

自分が過去に発した言葉の一部を、脳裏で一生懸命に反芻しながら、彼は一生懸命スタートとなる新たなる第一歩目を踏み出そうと、握り締めた拳に更なる力を加えて震わせた。

しかしそれでも、少し開いただけのその口から、望んだ一言を発する事は出来なかった。

それはまるで、金縛りのように身体に巻きつく「恐怖」と言う大きな枷に、彼の心が完全に縛り付けられているようであった。

必死に思い、必死に願えば、望みが叶う簡単な世界であれば、世の中で不幸に喘ぐ人間など居るはずもない。

彼は只管に考えて、考えて、考え抜いた挙句、あれだけの衝撃的事実を前に、信じる事の出来ないほどの現実を前に、どうしても割れない器を用意する方法を見出す事が出来なかったのである。

「何が出来るっていうの？」

やがて、シルはきゅっと口を真一文字に歪めて俯くと、不甲斐ない自分を打ちのめすかのように、大きな溜め息を付いてしまった。

ねっとりとした蒸し暑い淀んだ空気の中に浸りながら、一言も言葉を交し合うことなく立ち尽くした二人の間に、過ぎ去った時間はほんの僅かな時の流れでしかない。

しかしこの時、二人が感じる痛みとも痒みとも取れない違和感は、何時間、何十時間にも渡って心の奥底でのた打ち回っているかのようだった。

一瞬抱いた警戒心から、お互いに翳(かざ)してしまった心の防壁を、全く打ち壊す事が出来なくなるほど、重たい思いで塗り固めてしまった二人は、ただ針の筵(むしろ)にも似た息苦しい時を、永遠に繰り返すかのように思えた。

しかし、この時、少女は心の奥底で、強く望んだ何かを求めていたのだろう。

歪(ゆが)めた苦(にが)い表情の上で、無理やり少年の方へと視線を投げつけると、少女は突然、その少年へと飛びついた。

０４－２２：○心に巣食う見えない枷［４］@

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２２「心に巣食う見えない枷」

（シルジーク）
「うあっ！！・・・っつ・・・。・・・おい！！・・・・・・・。」

小さな身体の全体重を預けるように、目の前の金髪の少年へと身体を預けたセニフは、作業服の上から両手を後ろに回し、力の限りシルの身体を引き寄せる。

そして、シルの顔を見上げるでもなく、ほのかに汗ばんだ彼の胸元に顔を埋めて、懐かしく心地よい瞬間に再び相見（あいまみ）える事を望んで、過ぎ去りし過去の日々を引き寄せようと、彼女は必死に両手に力を込めた。

セニフ・ソンロと言う一人の少女の居場所を求めて。

他の何処にも行き場所の無い少女の帰る家を求めて。

ようやく手にした心安らぐ、あの日々を求めて。

彼女は普段通りの自分を演じて見せる事で、自分に対するシルの態度が、嘗（かつ）ての「彼」であることを求めたのだ。

着込んだパイロットスーツの装甲版により、全身で彼の温もりを感じる事はできなかったのだが、それでも久しぶりに漂う彼の匂いと、頬に当たる暖かさとが、じんわりとセニフの心の縁を指でなぞる。

このまま、一言も言葉を交わさないままでも良い。
閉じた瞳の奥底に、あの時の安らぎを思い浮かべて、包み込まれるような暖かさの中、ずっと眠ったままで居られたのなら・・・。

（セニフ）
「私さ・・・。」

（シルジーク）
「・・・・・・・・・ん？」

パイロットスーツの重さが加味されているからだろうか、普段よりも重たく感じるセニフの身体を抱きかかえながら、シルは彼女の発した小さな一言に、喉の奥ほどで軽く音を奏で出した。

いつもの彼であれば、この稚拙（ちせつ）なセニフの抱きつき攻撃に、表立って表情を歪めて嫌悪感を示す所だが、もはや成す術のなかった彼にとっては、それは有難い救いの振る舞いだったのかもしれない。

場合によっては、彼女に完全無視を突き通される可能性が、無い訳では無なかったからである。

（ルワシー）
「おおおっ？なんだぁ。こんな人目につくところでお熱いこってまぁよ。今度は金髪の色男君に泣きついてかぁ。チビ餓鬼の癖になかなか隅に置けねぇじゃねぇか。ええ？」

そんな時、セニフの後ろから大きな身体を揺さぶるように、歩み寄ってきた一人の大男が、珍しいものを見るかのような眼差しで、二

人にからかいの言葉を投げつけた。

そして、完全に無視を決め込んだセニフを他所に、面識のない金髪の少年の表情をマジマジと覗き込むと、しばし二人を交互に見やる様に視線を往復させた後、セニフの右肩を人差し指でチョイチョイと小突いて見せた。

（セニフ）
「・・・んんっ！・・・うるさいんだよデブ！あっちいけ！シッシッ！」

（ルワシー）
「うっほぉ。怖ぇ顔して睨み付けちゃってよ。ちったぁいつもの馬鹿さ加減が戻ってきたんじゃねぇのか？折角、生きて戻って来れたんだからよ。人生楽しく行こうぜ。なぁセニフ。」

俯(うつむ)いたままにして長い赤い髪の毛の隙間から睨み付けたセニフの視線に、ルワシーは少しばかり肩を窄(すぼ)めると、大きな顔に満面の笑みを浮かべた。

そして、去り際に馬鹿力を持ってして、シルの左肩を叩いた彼は、それ以上二人に絡むことなくあっさりと立ち去るのだ。

どうやら彼は彼で、セニフのことを気にかける一人なのだという事は、シルにもほのかに感じて取れたのだが、それならばもう少し気の利いた言葉の一つでもかけてやれないものなのかと、シルは少し不満そうな視線をその後姿にぶつけてやった。

しかし、彼が望むセニフとの会話を、意図もあっさりと実現して見せた大男の態度は、決して上辺に何かを着飾るようなものでもなく、

極々自然に有り触れたものであり、どんな言葉から切り出すにしろ、最初からセニフが拒絶反応を見せるような言葉を、選ぶ事など出来ようはずもないシルは、彼に習って当たり障りのない言葉から投げかけてみる事にした。

（シルジーク）
「そういやセニフ。お前さ。バスターマンティスのスタンボム食らったんだろ？身体の方は大丈夫なのか？」

（セニフ）
「え・・・？あ・・・。・・・うん。大丈夫。・・・うん。なんとも無いよ。ちょっと髪の毛がガビガビになっちゃったけどね。」

（シルジーク）
「俺も聞いた話でしか知らないけど、そんなバケモノ相手に良く無事に帰って来れたもんだ。大丈夫だと言っても、変な後遺症が残る事もあるらしいから、一応直ぐに精密検査受けに行けよ。」

（セニフ）
「うん。ありがと。」

（シルジーク）
「トゥマルクは乗った感じどうだった？かなり前評判悪い機体だっただろあれ。」

（セニフ）
「う～ん・・・。そんなに酷いって感じはしなかったかな。リベツーなんかより機体軽いし、旋回性も加速性も悪くはないよ。ただちょっと、火器使用後の反動耐性が弱いのが難点かな。重装だとやっぱ、振り回されるかも。」

（シルジーク）
「そっか。本当は記録したデータを参考に、セニフ用にパーソナルデータ調整したかったんだけどな。ほら、お前の設定ってかなり特殊だしさ。」

（セニフ）
「私の機体・・・。真っ黒焦げで放置してきちゃったしね・・・。」

（シルジーク）
「贅沢言うな。死んで帰ってこれなかった人だって大勢居るんだ。身一つでも生きて帰ってこれ事に感謝しないとな。」

（セニフ）
「・・・そだね。」

シルの腰へと巻きつけた両手をスルリと振りほどき、少しだけ距離を置いたセニフとの間で、ありきたりな言葉のやり取りがなされる。

それは、それまで必死に悩んできた自分が阿呆らしくなるほど、スムーズな会話の流れであり、今までに二人が交わしてきた、普段通りの日常会話と大差ないものだったのだが、シルはどこか心の奥に眠る異様な違和感を拭いきれないでいた。

抱く思いを大きな風呂敷で覆い隠したままに、自分の内面を押し殺してやり取りされる上辺だけの関係。

その場を楽にやり過ごすためだけに押し出された、友好的感情を相手の目の前に差し出して、表層上の痛んだ傷を舐め合うだけの、実り無い他人行儀な友情の証。

仲間である彼女の為に、必死になって自分に出来る事を見出そうと思案した結果がこの様(ざま)か・・・。

（セニフ）
「シルはお仕事これからなんだよね。夜遅くまでかかるのかな。頑張ってね。シル。」

（シルジーク）
「ん・・・？・・・ああ。」

実際に彼がその会話の中で、安堵感に浸ることが出来たのは、ほんの最初の出足部分だけであり、もはや流れ去った過去の時間を取り戻す事など不可能である状況下で、彼は否が応にも前へ進まなければならなかったのである。

勿論、抱きつく事で昔通りの上辺だけの関係を求めたセニフの行為を、頭ごなしに否定するつもりは無い。

彼女自身、絶対に表に出したくない思いを胸に、何とかしてお互いの拗(こじ)れた関係を改善しようと、必死の思いで試みた結果なのだと言う事は、シルにも解っていた。

しかし彼は、そんな彼女の思いを察しながらも、彼女の為に何もしてやれない自分自身が嫌だったのだ。

そして、彼女がどれだけ重大な過去を背負っているのだとしても、どれだけ自分達が役に立たないチンケな人間なのだと解っていても、仲間として彼女に苦しみを打ち明けて欲しかったのである。

確かに解決へと漕ぎ着ける良き案を示してやる事は出来ないかもしれない。

結局、ありきたりな慰めの言葉をかけてやる事しか出来ないのかもしれない。

でも、それでも。悩みや辛さの一部さえも打ち明けらない関係の中に、どの面下げて仲間などと嘯く事が出来ようものか。

俺達は赤の他人じゃない。2年間もの間、一緒に過ごして来た仲間達だ。

他に帰る場所も無く、頼れる人間も居ない自分達が、唯一仲間と呼ぶ事の出来る人間達なのだ。

俺も。セニフも。アリミアも。ジャネットも。サフォークも。そしてマリオも。

皆仲間のはずだろう？

（セニフ）

「・・・・・・シル。・・・。」

その後二人の間に訪れた長い沈黙の時は、何も突然に彼らに襲い掛かったわけではない。

寧ろ、訪れるべくして訪れた、本当の思いが滲み出した気まずい瞬間の始まりでもあった。

視線を逸らしたまま、黙り込んでしまったシルの雰囲気に、セニフ

もやがて、落ち込んだ様子で表情を歪めてしまう。

やっぱり・・・。そんなに都合のいい話なんて・・・。無いよね・・・。

左手で顔の半分を覆い、小さく息を吐き出したセニフもまた、シルの思いを理解していないわけではなかった。

無理やり引き出される事になったとは言え、絶対に曝け出してはいけないはずの自分の過去を知られてしまった以上、セニフにとって彼は、危険な人間の一人となってしまったのだ。

自分は何処にも行く当てなど有りはしない。

自分ひとりの力で進むべき道を切り開く能力も無ければ、進む方向さえも見出す事が出来ないでいる。

今自分の居るこの状況こそが、彼女にとっての唯一の安らぎであり、本当の事を言ってしまえば、その状況を破壊してしまいかねない、自分の過去を知る人間達には、二度と会いたくないのだという気持ちが有った。

しかし、たった一人、真っ暗な深遠の底でのた打ち回り、やがて訪れるであろう見えない脅威に脅え、眠れない夜を過ごす日々など彼女が望んでいるはずも無い。

出来る事なら自分の全てを曝け出し、彼の思いに答えるように、必死に助けを請うて甘えたい。

心の奥底から安らげる瞬間を求めて、本当の意味で彼の思いの全て

に抱きつきたい。そう思っていた。

しかしセニフは、ギュッと下唇を噛み締めて身体を小さく震えさせると、今度は大きな溜め息を一つ付いてみせる。

そして、ゆっくりと大きな建物の天井を見上げるように、両目を瞑ったまま天を仰いだ。

一番自分が強く望む思いは、一番自分強く拒む思い。

求めれば求めるほどに自分の手の内からは遠ざかるような蜃気楼(しんきろう)を見据えて、一体、自分は何処へと行くのだろうか。

（シルジーク）
「セニフ。・・・俺達は仲間だよな。」

（セニフ）
「・・・。・・・うん。」

（シルジーク）
「俺なんか口下手で、うまく何かを言ってやることなんか出来ないしさ。何の頼りにもならない人間だけどさ・・・。」

（セニフ）
「そ・・・。そんな事無いよ。・・・。そんなこと・・・。」

（シルジーク）
「少しぐらい。ほんの少しぐらいは、何かの役に立てるかもしれないじゃないか。」

（セニフ）
「・・・うん。」

（シルジーク）
「俺もさ。未だに信じられないし、信じたくも無いけど、あのホテルでの一件から今日までの間にさ、こんなに周囲の状況が変わるなんて、思っても見なかったんだ。」

（セニフ）
「・・・。」

（シルジーク）
「本当に信じたくないんだよ。解るだろ？」

（セニフ）
「・・・・・・。・・・うん。」

（シルジーク）
「でもさ。セニフ。・・・。どう言ったらいいか解んないけど・・・。一人で悩むのはもうやめろよな。少しぐらい、周りの迷惑を考えずに頼ってみたらどうだ？」

（セニフ）
「・・・。」

（シルジーク）
「セニフ。怒らないで聞いてくれよ。」

（セニフ）
「・・・うん。」

（シルジーク）
「確かに。確かにだぜ。俺だって凄い難問というか、手に負えないって言うか・・・。・・・。うん。ほんと正直に言えば、頼られても困るぐらい、大変な問題だと思ってる。でもさ。だからといって、ほっとけないじゃないか。・・・。あ～っと。ほっといてよって言うなよ。お前が迷惑でも、俺は出来るだけの事はしてやりたいと思っているし、アリミアだってそう思っているのさ。」

（セニフ）
「・・・。・・・どうしてそこでアリミアが出てくるの・・・。」

（シルジーク）
「俺一人だけじゃ、どうしてやる事も出来ないだろうって思ったからさ。俺はアリミアの助けも借りたいんだ。確かにあいつも変に頑固な所があるし、嫌な部分もいっぱいある。でも、決して悪い奴じゃないって事は、お前にも解るよな。俺さ。あの後少しアリミアと話をしたんだ。あいつが昔どんな事をしてきたのか、俺も詳しくは解らないけどさ。本当に色々とお前の事心配してたよ。」

（セニフ）
「・・・・・・・・・。」

（シルジーク）
「アリミアから聞いて、お前が怒る理由も何となく理解したつもりだし、俺がこんな事言うのも、余計なお世話かもしれないけどさ。セニフはもう、本当にアリミアの事が嫌いになったのか？」

（セニフ）
「・・・。」

（シルジーク）
「あんまりアリミアの事を冷たく責めないでやれよ。セニフ。あいつだって、好きでそこに居たわけじゃない。それに多分、実際の犯人があいつじゃないって事は、お前にも解っている事だろ？本当にあいつが犯人なら、絶対に自分がやりましたって白状しているはずだしな。そう思わないか？」

（セニフ）
「でも・・・。」

（シルジーク）
「でも結局、お前が幾ら拒絶しても、幾ら嫌がっても、あいつはお前の為に必死に頑張ってくれると思うぞ。俺だって、色々お前の相談に乗ってやりたいって思ってるんだ。俺ってさ。今まで余り我儘（わがまま）言わない方だっただろ？たまには俺の我儘（わがまま）を聞いてくれよセニフ。少しだけでもいい。言える部分だけでもいい。お前と少し話がしたいんだ。」

（セニフ）
「・・・。・・・。」

あの日、あの時以来、心の奥底に何層にも折り重なった募る思いの丈を、包み隠すことなく真っ直ぐに解き放って見せたシルの視線が、真っ黒な霧の中を漂い続けていたセニフの元へと手を差し伸べる。

暖かく、柔らかでいて、包み込まれるほど優しいその手は、それまでたった一人ぼっちで歩まねばならなかった真っ暗な一本道に、一筋の光を差し込ませるのに十分な程、煌びやかに輝く綺麗な思いだった。

セニフはふと、自分の意思ではどうしようもないほどに込み上げる思いに、泣きたくなるほどの嬉しさを表現して、思いっきり笑って見せようとしたのだが、やがて潤んだ瞳から零れ落ちた涙と共に、彼からゆっくりと視線を断ち切ったのだ。

本当に。本当に嬉しい。本当に泣きたくなるほど嬉しい。

こんな自分の為に、必死になって考えて、一生懸命私に思いを伝えてくれたんだ。

嬉しくないはずがない。

でも・・・。でもね・・・。だからこそ・・・。

だからこそ。そんなシルを巻き込むわけには行かないんだよ。

（シルジーク）
「セニフ・・・。」

（セニフ）
「・・・。」

その後、俯(うつむ)いたまま、じっと動かなくなってしまったセニフの姿を、悲しげな表情で見つめていたシルが、差し出した右手を申し訳なさ気に、ゆっくりと下ろした。

うまく表現できたかどうか自分でも解らない。自分の思いが彼女の心に届いたのかも解らない。

それでも彼は、自分の心の内がすっきりと晴れ渡るまで、必死に募る思いを彼女へとぶつけやったのだ。

その上で彼女が彼の思いを拒絶して見せるのであれば、もはや彼にそれ以上の事を出来るはずもなかった。

じめじめとした生ぬるい空気に包まれながら、更にそれをも包み込むほどの淀んだ雰囲気に取り込まれ、ただ立ち尽くす事しか出来なくなった二人の姿を、直ぐ脇へと横付けされた大型トレーラーのヘッドライトが照らし出す。

そして、それまでは聞こえもしなかった周囲の雑音が、俄(にわ)かに二人の意識へと襲い掛かると、虚脱心に引かれた己の身の重さを思い知るのだ。

お互いが取った距離は、決して遠いものではない。しかし、お互いの思いが通い合うほど近いものでもなかった。

手を伸ばせば直ぐにでも掴(つか)み取れそうな位置まで近づきながらにして、どうしても掴(つか)み取る事の出来なかった彼女の思い。

シルは大きな空間を作り出す建物の内部に視線を泳がせると、ゆっくりと長い溜め息を付いた。

（ジャネット）

「何こんなところでイチャついてんのよ。邪魔よ。邪魔。」

ふと、そんな時、眩いほどに照り付けるヘッドライトの向こう側から、久しぶりに聞く女性の声が聞こえてきた。

それは、抹茶色の癖毛と優しげな瞳が特徴的な長身の女性であり、とても優しい性格の持ち主であったはずなのだが、この時二人へと投げつけた低い声色には、寧ろ痛々しい棘が多数、鏤められていた。

その声に驚いたような表情で振り返ったセニフは、一瞬、彼女に何かを語りかけようと口を開いて見せたのだが、それも、彼女の纏う異様な雰囲気に圧され、かき消すように静かに喉の奥へと言葉を飲み込んでしまった。

タバコを銜えたままの口元には、べっとりと厚い口紅が塗られ、耳元には真紅に煌くイヤリングがぶら下げられている。

そこにはもはや、セニフの知る清楚で可愛らしかったはずの友人の姿はなく、全くの別人へと変貌してしまった女性が立っていたのである。

そして、彼女はチラリとセニフに冷たい視線をぶつけた後、何事もなかったかのように目を瞑り、真っ白な煙を周囲に吐き出して、唖然とする二人の目の前を素っ気無く通り過ぎたのだ。

胸の辺りで左手拳をギュッと握り締めるセニフは、かつての優しさを求めて視線を追走させるのだが、周囲を寄せ付けないほどにピリピリとしたオーラを放つ彼女の態度に、一向にその瞳が彼女を映し出す事が出来ないでいる。

マリオが死んで以来、ジャネットが暗く落ち込んでいたことは、勿論セニフも知っている事だ。

しかし。あのジャネットが。あんなに優しかったはずのジャネット

が。

まさかこんなにも変貌してしまうなど、彼女は全く予想していなかったのだ。

すれ違い様にセニフの元へと届けられた香りは、とても心地のよい香水の匂いだったのだが、セニフはどこか、その匂いと共に心の中に吹き荒れた冷たい風に、両腕を組むように握り締めたまま、身を竦めてしまった。

そして、そんな侘しさが充満した心の奥底を、暖める暇も与えられない内に、彼女は再び冷や水に曝される様な悪寒に全身を凍りつかせる事になるのだ。

ジャネットの後ろに続くように姿を現した大男が、ゆったりとした足取りで二人の傍へと歩み寄ってきた。

真っ黒な髪の毛をオールバックに揃え、顎に疎らに生えた無精髭を擦りながら、汚らしい笑みを浮かべるその男は、あのＢＰ事件を引き起こした張本人。

ユァンラオ・ジャンワンだ。

彼ら二人にとって、もはや彼を称する言葉は「危険人物」以外にありえず、その大きな体躯を見つけるや否や、すぐさま心の中で緊急警報を打ち鳴らして、警戒する姿勢を取らざるを得なかった。

しかし、そんな二人の姿を交互に見やりながら、不気味な笑みを浮かべて見せたユァンラオは、鼻先で軽く息を打ち鳴らして見せると、

特に何かを仕出かす様子もなく、先を歩くジャネットの後ろに付いて歩くのだ。

（セニフ）
「ジャ・・・。ジャネット！！」

この奇妙な組み合わせの二人に対し、激しい不安感を禁じえなかったセニフが、思わず彼女の名前を呼んだ。

人を殺める事に何ら罪悪感も感じる事もなく、自分の思い通りに事を進めるためには、平気で仲間をも売り飛ばす卑劣で残忍な男。

帝国貴族達の思惑をすら手玉に取り、国家間の戦争をも引き起こす要因を作り出した危険極まりない男。

そんな危険な男が、事もあろうかかつての仲間と行動を共にしているのだ。

彼女としても、そんな事実を知る由もないジャネットに対して、何かしらの警告を発したかったのだろう。

しかしこの時、不意に突きつけられたユァンラオの鋭利な視線の先に、どす黒い殺意を含んだ刃を見出してしまったセニフは、その後、全く一言も発する事が出来なくなってしまった。

そしてジャネットは、そんなセニフの思いを他所に、かったるそうな表情のまま振り返ると、暗く淀んだ瞳で小柄な少女の姿を睨み付けるのだ。

＞ｉ４８３０＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞８２７＜

＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞ジャネット＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞

「何よ。早いとこシャワー浴びたいの。邪魔しないでくれる？」

温和な雰囲気を全く感じさせないほど冷たく、思いやりの欠片すら見出す事の出来ない一言がセニフの心へと突き刺さる。

じっとりと体に纏わり付く蒸し暑い湿気すら、極寒の地へと放り込まれたような凍てつく寒さに震え上がり、まるで肌を通して骨まで凍えさせてしまうようだ。

やがて全く動かなくなってしまった手足へと圧し掛かる重たい影に、地中奥深くへと引きずり込まれる様な気だるさを覚えながら、力なく肩を落とすようにセニフの視線が足元へと零れ落ちた。

ジャネットは、そんなセニフの事を気にかける様子もなく視線を逸らすと、タバコの煙を周囲に吐き散らしながら、スタスタと二人の元を後にした。

そして、軽いイザコザの最中に、何ら楽しみを見出せなかったユァンラオもまた、つまらなそうな表情で二人を見やった後で、彼女の後に続いて歩き出すのだ。

残された二人は、少しの距離を置いたまま、お互いに視線を交わすことなく佇んでいた。佇んでいる事しか出来なかった。

先を見ず、今を見て、過去を捨て去った人間達が、甘い空想の最中だけに抱いた希望の光を求めて、必死に身を寄り添って作り上げた幻想的世界。

それは、一度崩れ去れば二度とその手に戻る事がない、所詮は砂に水を含めた程度で築き上げた、ただの泥細工だったのだろうか。

セニフは、ゆっくりと頭を擡(もた)げ、大きな溜め息を肩で付いてみせると、一人黙ってとぼとぼと歩き始めた。

（シルジーク）

「セニフ！俺が言った事、少し考えてくれよな！待っているからな！」

シルは、そんな彼女の後姿に向かって、再び思いを乗せるように大声を張り上げる。

しかし、全く精気を失った彼女は、その言葉に反応を見せることなく、やがてゆっくりと彼の前から姿を消して行った。

04－23：〇崩れ行く我城

第四話「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２３「崩れ行く我城」

トゥアム共和国中心部に聳(そび)え立つアルテナス山の麓、南西部平野一帯に広がる煌びやかな街の風景。

真っ黒な闇夜に閉ざされた世界にありながらも、一際目立って周囲に光を放つその街は、遥か昔から商業都市として栄えてきた首都ランベルクだ。

今や共和国内最大の人口を誇るまでに成長を遂げた大都市は、巨大なビル群が織り成す企業集合体地域と、市民達が生活するコロニー群とで明確に区分けされており、いまだ数多くの緑豊かな自然を残した綺麗な街並みを形作っていた。

普段であれば昼夜を問わず、多くの労働者達の姿でごった返すはずの都市中心部であるが、夕刻に共和国政府が発した非常事態宣言の影響からか、どこかいつもとは違った静けさを奏で出しているようにも窺(うかが)えた。

しかし、幾ら常時を逸した事態がすぐそこまで差し迫っているからとは言え、それを理由に普段の生活を疎(おろそ)かに出来ようはずもなく、幾許(いくばく)かの不安感を拭いきれないまでも、多くの人達はその歩みを滞らせる事はなかった。

（リッキー）
「いやぁ。さすがにグラスタワーというだけのことはありますな。

なにね。実はここに上ったのは初めてなんですよ。実に良い眺めですなぁ。」

そして、そんな夜も眠らない街の中心部に聳え立つ、都市最大の高さを誇る巨大ビル「グラスタワー」の最上階で、綺麗に輝く夜景に見入りながら、素直にその艶やかな見晴らしに、一人の中年男性が感嘆の言葉を発した。

背丈の3倍はあろうかと言う、大きな壁ガラスに映し出された街並みは、猛烈に降りしきる大雨の影響で霞んで見えはしたが、それでも薄っすらと漂う夜霧を照らす色鮮やかな光の舞に、幾ら見ても飽きぬ幻想的風景を想像してしまうものだ。

北東方向を向いた角部屋に当たるその大きな部屋は、清潔感の漂う高級応接間であり、巨大なシャンデリアが放つ柔らかな光に照らし出される部屋の装飾品は、どれもみな、高級そうな品々で固められていた。

言うなれば、そのような貴族的雰囲気の中に馴染めるはずもない中年男性は、擦り切れたスーツの右ポケットから、しわくちゃにつぶれたタバコを一本取り出すと、安物のライターで火を灯し、重そうな体を高級なソファーの上へと放り投げた。

（ティーラー）
「ここは禁煙なんですよ。すみませんね保安官。」

（リッキー）
「おおお。こりゃ失礼、失礼・・・。」

そして、大きなテーブルの脇に立っていた小柄な男に注意の言葉を

投げかけられると、慌てた様子で手持ちの携帯灰皿にタバコを押し付け、中年男性はまるで喜劇のように左手をパタパタと左右に振って、意味もなく誤魔化す様に煙の拡散を促した。

男の名前は「リッキー・コーラス」と言い、トゥアム共和国国内の治安維持組織である、中央保安局の捜査官と言う肩書きを持っていた。

ごつごつとした厳つい顔に、優しげに垂れた目元が特徴的な以外は、大して何らとりえの無さそうな平均的中年男性であり、その何処となく憎めない雰囲気に対して、冷たい視線を据え付けるティーラーは、面白くも無さそうに軽い溜め息を付いて見せるのだ。

（サム）

「この資料。5年前の年末決算報告ですが、御社がここまで莫大な収益を上げた要因はなんですか?前年比7倍とはものすごい収益ですよね。」

やがて、そんな居心地悪そうな雰囲気に落ち着かない上司とは裏腹に、テーブルの上に並べ置かれた大量の資料を、食い入るような視線で読み漁っていた一人の若者が、高級スーツを身に纏ったティーラーへと言葉を投げかけた。

この「サム・イシュリン」という若者は、見た目痩せこけて不健康そうな顔つきをしており、窪んだ目元には、何日も徹夜を続けたのではないかと思われるほどの、隈の縁取りが浮かび上がっていたが、人目も憚らず大きな欠伸をしてみせる「駄目親父」とは対照的に、てきぱきと作業を推し進めるその積極的行動は、さすがにエリート候補とされる貫禄を印象付けるのに十分だった。

（ティーラー）
「その年は、我が社の開発したＤＱ制御システムが、ようやく実現化に漕ぎ着けた年でしてね。共和国内外を問わず、様々な分野から受注が殺到したんです。」

（リッキー）
「ほう。それはどんなシステムなんです？」

（ティーラー）
「書いてありますでしょ。」

並べられた資料には見向きもせず、退屈そうな表情を浮かべていただけの中年男性が、時折、絶妙のタイミングを見計らって二人の間へと割って入る。

そして、全く差し障りのないような笑みを浮かべるリッキーの態度に、ティーラーは、一瞬、嫌な顔をしてみせると、軽くあしらうような口ぶりでそう吐き捨てた。

左右に大柄なボディーガードを二人従えて、威圧的視線を絶やす事のないこの釣り目の男は、トゥアム共和国内でも最大手とされるＤＱ製造メーカー「マムナレス社」の、ＤＱ販売促進部門の総責任者たる「ティーラー・テル」である。

（サム）
「ＤＱの行動バランスを統合的に補佐する、補助システムの実用化ですか。ふーむ・・・。」

（ティーラー）
「マサラはそれほど真新しい技術を用いた訳ではありませんが、そ

れでも様々な環境に対応しなければならない、土木作業業界では未だに高い需要があるんですよ。各メーカーの主要制御システムへの割り込み部分も限られていますし、どんな機種にも対応できるのが売りですね。」

サムが手にした資料の一項目を読み上げて、唸(うな)る様に言葉を詰まらせた様子を見やると、すかさずティーラーがフォローを入れる。

この時この若い捜査官が言いたかった事とは、「これほどまでに多大な利益を得る要因としては少し弱すぎる」という点であり、それは勿論、ティーラーとしても予め予想していた反応であった。

ＤＱと言う複雑高度な精密機械を操るためには、それ相応に高速化された制御システムの存在が必要不可欠であり、ことに人型のような機体に関して言えば、常に正常姿勢を保つためのバランサーが重要な役割を担う事となる。

そのため、各メーカーが製造するＤＱ制御システムは、その機体本来の形を逸脱するような改良まで想定する事が困難だったのだ。

特に使用環境下によってそれなりの改良が要求される、軍事用や土木作業用に関しては、多大な費用と時間をかけて制御システムを調整しなければならなかった過去があり、それだけに、改良後の制御システムの設定作業を大幅に軽減してくれる「マサラシステム」の登場は、まさに眼から鱗が飛び出るほどの代物だったのだ。

しかし、各メーカーの努力もあり、時代と共に進化を遂げた制御システムが、ユーザーの様々なニーズに答えることが出来るようになると、同システムは市場から姿を消さざるを得ない、過去の産物に成り下がってしまったのだが、それでも最新システムを購入する事

も出来ない中小企業にとってみれば、未だに必要とされる重要なシステムである事は確かだった。

（サム）
「御社では確か、共和国陸軍との取引が盛んでしたよね。公平な入札制度にあって、これほどまでに競合他社を圧倒するためには、並々ならぬ努力が有ったからなのだと思いますが、御社にとってその強みとは、一体どういった点なのでしょう。ご参考までにお聞かせ願いたいのですが。」

ご参考？

ティーラーは軽く鼻で笑い飛ばすと、決して表には感情を表さないように、丁寧な言葉遣いで語りだした。

（ティーラー）
「余り企業秘密に触れる内容は、私の口から申し上げる事は出来ませんが、はっきり申し上げますと、我が社は現在、ＤＱ開発部門関して、共和国最大手であるアゼセイル社やティーゲル社に遅れを取っています。ＤＱ行動バランスを司る制御機構が、耐圧神経細胞制御から、センターボールマトリクス制御へと切り替わる流れの中で、我が社はうまくその流れに乗る事が出来なかったわけです。」

（リッキー）
「それで居ながらにして、今回陸軍に新型機を８機も導入するとは、お宅も中々にやるものですなぁ。何かこう、凄い必殺技でもあったんですかな？」

（ティーラー）
「は？・・・と言いますと？？」

（リッキー）

「いやなにね。家の息子が最近ロボットアニメにはまってましてな。腕を飛ばすんですよ。ロケットパーンチ。みたいにね。ははははは。」

こいつ・・・。まさか本当にふざけるために、ここに来たんじゃないだろうな・・・。

もはや救いようのないこの駄目親父の言動に、ティーラーは細くつりあがった目元を更に細めて見せると、一瞬でもその言葉に警戒心を抱いてしまった自分に対して腹立たしさを覚えてしまった。

今回この二人の保安官がマムナレス社本社を訪れたのは、彼らが担当する事件に関する捜査協力を依頼された為であり、それが北方廃都市ブラックポイントで起きた事件に関係する事だということは、勿論、ティーラー本人にも伝えられていた。

しかしそれでも、彼が強く警戒心を抱く人物の名前が、この二人の口から一切出てこない事から、何かしらの疑いの目を向けられている事は明らかであり、あからさまに水面下で火花を散らすような化(ばか)かし合いの様相に、彼は異様な不快感を感じずにはいられなかったのだ。

我が社で9つ目の訪問先と言うのも、一体何処まで本当なのか・・・。

心の中で大きな舌打ちを奏でたティーラーだが、それでも全く感情を表に出すことなく、淡々と話を続けた。

（ティーラー）

「我が社が遅れを取っていると言いましたが、それはあくまでＤＱと言う人型を理念としたロボットに関する開発技術進行度のことであって、何も軍事兵器の開発技術力で劣っている訳では有りません。現在、軍事兵器におけるＤＱの運用は高速ホバリングシステム上に限られています。それは、精密機械の塊であるＤＱが過度な衝撃を受けてしまうと、少なからず機体にダメージを負ってしまうからで、言ってしまえば、未だにどのメーカーも、ＤＱが走り回るだけの機構を開発できていないという事になります。現段階で我が社が軍用兵器において優位性を保っていられるのは、まさにその高速ホバリングシステムの技術に優れているからであり、決してそこに、何かしらの他意が有ったからではありません。勿論、各社共に目指す先は、より人間的な動きを有したＤＱの開発ですから、我が社としてもその遅れを取り戻すために、中期計画上で数年以内の実現を目指して日々努力しているところです。」

自信有りげな表情で大そうな演説をぶちまけて見せたティーラーを他所に、小難しそうな話に全く興味を示す素振りも見せなかったリッキーは、かったるそうにソファーから体を持ち上げると、ゆっくりとした歩調で再び大きな壁ガラスの前に張り付く。

そして、まるで鏡のように透き通ったガラスに反射する、小柄な男の姿を横目でチラリと見やりながら、ポケットに両手を突っ込んで口を開いた。

（リッキー）

「おたくの会社。確かブラックポイントに、ＤＱシステム開発研究所がありましたなぁ。ブラックポイントの一等地。あれは確か、高級ホテルのシツアートメアリーが有るあたりでしたかな。設立は・・・。３、４年ぐらい前だったですかねぇ。」

（ティーラー）
「シュチュアート・メアリーです。設立は一昨年程前になります。」

（リッキー）
「おお。そうだった。そうだった。シツアート・・・。シチュ・・・。・・・。ははは。お恥ずかしい限りで。」

その発音の悪さを訂正され、再びホテルの名前を口にしようとして失敗した中年男性は、乾いた笑いを部屋中に響かせながら、頭をぼりぼりと掻いてみせる。

まさにその姿は、周囲の笑いを誘うほど無様で滑稽なものであったのだが、鋭い目つきの中に沸き起こる異様な警戒心と共に、ティーラーはこの中年男性に対して心を仰け反らしてしまった。

（リッキー）
「ＢＰ事件に関しては無論ご存知ですよね。ゼフォン・ウィリアム元総司令官とは面識はありましたか？」

（ティーラー）
「ええ。ブラックポイント陸軍演習場の一部を民間企業に開放してもらい、試作ＤＱの運用テストなどを行っていますので、軍関連者との面識は結構あります。ゼフォン特佐・・・。元総司令官とも２、３回会食の場を設けたことがあります。」

（リッキー）
「ふーむ。」

この親父・・・。結構食わせ者かもしれないな・・・。

全く平静さを装ったままの対応を見せたティーラーは、ふとこの中年男性の姿から視線を剥ぎ取ると、傍に立つボディーガードの一人をチラリと見やった。

ブラックポイントのマムナレス社研究施設は、社内でも極秘に扱いに指定されている、関係者以外知る事の無い秘密施設。

その施設の存在を知り、且つ、のこのこと本社まで姿を現した点から推測するに、もはや一通りの調査は終えたという事なのだろう。

（ティーラー）

「ブラックポイントという廃都市に研究開発施設を持つ理由は、他社の産業スパイや低俗なゴシップから新商品を守るためです。特にサムトーテル地区に関して言えば、完全に軍の管理下にあり、一般市民はおろか、軍関係者であったとしても簡単には立ち入ることが出来ない地域ですので。」

（リッキー）

「一般人が立ち入る事の出来ない。軍の管轄地区ねぇ・・・。」

喋りすぎだとは解っていたが、既に極秘施設まで嗅ぎ付けられている以上、下手な虚言は自身の破滅を早める事になる。

彼は素早く詳細事項に触れない程度の範囲に、心の柵を強く形成すると、協力的な一般市民を装うかのような振る舞いを見せた。

（ティーラー）

「研究開発部門の詳細に関しては、我が社の施設責任者がいますので彼を紹介しますよ。今からお呼びしましょうか？」

（リッキー）
「いや・・・。それはまたの機会にするとしよう。」

そう言うとリッキーは、徐に右手を振りかざし、部下であるサムに撤収の合図を送った。

事の本質に差し迫りつつある会話の中で、何故このタイミングで簡単に引き下がるのだろうか・・・。

ある意味不審とも取れる中年男性の行動に、怪訝そうな表情を浮かべたティーラーは、文句の一つも言わずに並べられた資料を丁寧にまとめ始めたサムへと視線を向けた。

そして、その後一言も発することなく、不穏な空気に包まれ始めた自身の周囲を気にするかのように、ボディーガードとのアイコンタクトを繰り返していたのだが、やがて駄目親父たる中年男性が放った理由とはこうだ。

（リッキー）
「なにね。そろそろタバコが恋しくなってきましてね。もう夜も遅いし帰ることにしますわ。では、お邪魔しましたな。捜査協力有難うございます。ティーラー殿。」

（ティーラー）
「いえ、突然の来訪でしたので、何もお気遣いできなく申し訳ありません。」

そして、丁寧に別れの挨拶を返したティーラーは、一礼をして部屋を出て行くその中年親父の後姿に、別の中年男性の姿をダブらせる

と、次第に鋭い眼差しの中に、激しく燃え上がるような殺意を立ち込めさせた。

やがて、軽い音と共に閉じられた扉を向いたまま、傍に寄り添うボディーガードの一人に小声で呟く。

（ティーラー）
「おい。テストパイロットを任せた会社。」

（ボディーガード）
「解りました。すぐに計画を立てます。」

もはや彼の言わん事を既に理解していたボディーガードが、素早く彼の要求に応じてみせる。

若くして多大な権限を有する地位までにまでに上り詰める為には、それ相応の能力と努力が必要である事は確かだが、時にそれは、黒く暗躍する闇の力でもあったりするのだ。

０４―２４：〇ルアーフィッシング

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２４「ルアーフィッシング」

紅く長い髪の毛を後ろで結わえた目立たない輪ゴムを取り外すと、ようやく窮屈な世界から解き放たれたことを喜ぶかのように、一斉に空間にその身を飛び散らせて踊り狂う。

ほのかに甘い香りを周囲に振り撒(ま)きながら、薄暗い細い通路をひた歩いていたアリミアは、それまでその身を圧し続けていた空気の密度が薄くなった事で、開放感に溢れた安堵を反芻(はんすう)するかのように深く息を吐き出した。

パイロットスーツの中に立ち込めた熱気は、いまだ冷めやらぬ興奮の渦を形成し、研ぎ澄まされた感覚を窘(たしな)めるには、今しばらくの冷却期間を必要とする程であったが、それでも通路の先でぶつかる大きなレストポートの道沿いで不思議な人物の姿を見つけると、ふいにその歩みを止めたのだった。

（ランスロット）
「いつの日も心にゆとりが必要なのさ。齷齪(あくせく)と働いて、働いて、それでいて一体何を楽しむのさ。たまには思い切って、ドーンと遊びに出てみようよ。新しい発見。新しい感覚。これを満喫せずに何が人生というんだい？」

（メルヴィーナ）
「・・・あ。うん。そうだね・・・。そうだけど、でもね。戦闘が終ったばかりで、怪我人とか大勢いるのよ。早く行って手当てしな

いと、大変な患者さんだっているんだから。・・・ね。」

ランベルク基地の地下3階に当たるこの区画には、兵士達が寛ぐためのあらゆる設備が整っており、広い空間の中に並べられたテーブルやソファーには、生き延びた仲間達とようやくありついた遅めの夕食を嗜む、数多くの兵士達の姿でごった返していた。

勿論、最近では珍しくなくなった女性兵士達の姿も数多く見受けられ、男女が組み合わせで会話をする風景は、もはや日常的に違和感を覚えるような光景ではなくなったものの、それでもアリミアは、激しく人が往来する通路の壁際で、なにやら二人だけの世界を作り出そうする一組の男女に視線を固定すると、呆れたような溜め息を付きながら視線を逸らした。

（ランスロット）
「医者の人手は足りてるって聞いてるぜ。だから君も、ここで遅めのディナーを楽しんでたって事だろう?そして、夢も希望も無い過酷な職場へと、再び借り出されていくわけだ・・・。俺はね。そんな君が許せない。そして自分を押し殺して他人のために。・・・ああ。・・・そんな君がとても愛くるしい・・・。」

（メルヴィーナ）
「え・・・?あ・・・。いや、その・・・。」

しかし、覆いかぶさるように自由を奪われていた金髪の女性の方はといえば、この男の問いかけに寧ろ迷惑そうな表情を浮かべ、何とか逃げ去りたい雰囲気を一杯に表していたのだが、それでも全くお構い無しとばかりに、男は歯の浮くような言葉を平気で並べ続けるのだ。

（ランスロット）
「君は自分のために何かをしてやることはあるのかい？いやぁ無いだろう。君は自分の事より他人の事を思いやる優しい女性。そう、君はダイヤの輝きを放つ可能性を持ちながら、黒く沈んだ社会に塗(まみ)れ、ボロボロに汚されてしまった原石なのさ。磨けば眩いばかりの光を放つであろう君の存在に、俺は気付いてしまったんだ・・・。」

（メルヴィーナ）
「・・・う。・・・あ。ちょっ・・・。」

この綺麗なウェーブのかかった金髪の女性の名前は「メルヴィーナ・シャルトル」と言い、その優し気な瞳と見た目の清楚さから、男性兵士達にはすこぶる評判が良い、共和国軍所属の外科医師の一人だ。

しかし、引っ込み思案で周りに流されやすく、決して自分からは強く意思を表に出さないおしとやかな性格からか、このナンパな男の言い寄りに対して、断る事も出来ずにオロオロとしていた。

普段のアリミアであれば、他人の色恋沙汰に対して何ら感心を抱くでもなく、ただ無言のまま無視を突き通したのであろうが、彼女にとって、この窮地的状況に困惑している女性は、全くの他人と言うわけでもなく、更にその加害者男性とは、ネニファイン部隊の研修時に同じチームを組んでいた過去が有る。

そして、通路の少し離れた位置に佇(たたず)んだアリミアの姿を見つけ、追い討ちをかけるように愛くるしい「助けてビーム」を放つメルヴィーナの視線に、アリミアは仕方無さそうに、もう一つ溜め息を付いて見せた。

（ランスロット）

「今度は君が愛されなければならない。そう。君は自分を愛することより、人を愛することを望んでしまう可愛そうなヒロイン。君自身が愛せなくても、俺が愛してあげるよ。だから名前と所属部署を教えて・・・。」

（アリミア）
「はい。そこまでにしなさい。ランスロット。終わりね。」

猛然と最後の追い込み体制へと入った狩人の右肩を軽くポンと叩くと、どこか疲れきった表情でランスロットの暴挙に割って入るアリミア。

そして、怪訝（けげん）そうな表情で振り返るランスロットに気付かれないように、可哀想な子羊の逃亡を小さく促すと、彼の注意を引き付けるための会話を始めた。

（アリミア）
「先発もれで暇だからといって、ナンパとはぶったるんでるわよ。居残り組みは第二種戦闘配備で待機中じゃなかったのかしら。」

（ランスロット）
「おや。アリミアお姉さま。お勤めご苦労様です。ついさっき堅苦しい待機任務から解放されたところでしてね。ようやく羽を大きく伸ばして、寛（くつろ）ごうと思っていたところなんですよ。」

（アリミア）
「貴方が寛（くつろ）いでいない姿なんて、見た事もないわね。」

（ランスロット）
「あらぁ。いつになく手厳しいじゃ有りませんか、お姉さま。きっ

と過酷な戦場帰りで相当疲れ切っているんですね。どうです？これから、ちょいと高級なバーで疲れを癒すってのは。実はですね。今この女性と将来の共和国のあり方について、飲みながら語り合おうって意気投合していたところなんですよ。」

（アリミア）
「・・・。ふ～ん。そうなの・・・。」

呆れるような視線を送る事しか出来ないアリミアの前で、意気揚々（いきようよう）と上半身を翻（ひるがえ）して手を差し伸ばしたランスロットだが、既にそこに彼の求めた女性の姿は無い。

（ランスロット）
「ありゃ？？・・・。あぁ～あ。名前くらい教えてっても良いのになぁ・・・。」

（アリミア）
「あそこまで盛り上がっておいて、名前も知らないなんて驚きだわ・・・。」

女性として悪寒を禁じえないであろう彼の活発的行動力であったが、アリミアがこの程度の男に恐怖を感じるようなことはありえず、突き刺した冷たい視線の上から呆れたような言葉を被せると、既に遠くへ退避する事に成功した女性の手を振る姿に、軽い笑みを返してあげた。

（ランスロット）
「あれっ？あの娘と知り合いなんですか？お姉さま。もし知り合いだったら、名前くらい教えて欲しいなぁ。」

（アリミア）
「いいわよ。別に。」

アリミアよりも1歳年上であるにもかかわらず、何故か「お姉さま」と不思議な敬語を使うランスロットに、何を思ったかアリミアは、軽々しく彼の要求を承諾して見せた。

アリミアとメルヴィーナは、昔ながらの知り合いと言うわけではなく、実はまだ出会ってから2週間ほどしか経っていない仲であったのだが、ＢＰ事件後のセロコヤーン基地へと向かう途中、大型輸送機ガーゴイルの中で負傷した右腕を治療して貰った事を切欠に、顔を会わせては少しの会話を交わすような仲にまでなったのだ。

勿論、アリミアとしても、こんな女誑(たら)しに、可愛らしい彼女を売り飛ばすつもりは毛頭ないが、それでも都合よく巡ってきた絶好の機会に、この男を釣り上げるための擬似餌がどうしても必要だったのだ。

（アリミア）
「その代わり、貴方にも少し聞きたいことがあるの。ランスロット。1時間後に待ち合わせしましょう。直ぐそこのサンドカフェでね。」

（ランスロット）
「カ・・・フェですか・・・？」

彼女の発した待ち合わせと言う言葉に、一瞬だけ目を輝かせたランスロットだが、夜も深け行くこの時間帯にあって、カフェと言う場所を指定したアリミアに、彼は思わず落胆の声を張り上げてしまった。

（アリミア）
「嫌なら別にいいわよ。私も他を当たる事にするから。ランスロットも地道に頑張りなさい。」

（ランスロット）
「いやいやいやいや・・・。お待ちを。しばしお待ちをお姉さま。このランスロット。謹(つつし)んでお受けいたします。」

明らかに不機嫌そうに冷たい態度を示したアリミアを、慌てた様子でランスロットが制止する。

勿論アリミアには、彼が目の前へとぶら下げられた大きな獲物に食いつくであろう事は解っていた事であり、彼との会話を進める上で、自分が優位的立場を保ったままにしておきたかったのだ。

では何故、アリミアがこんなお調子者との会話を望むのかと言うと、それは以前の彼がＤＱＡ大会において、チーム「Ｂｌａｃｋ' ｓ」の一員として名を連ねていたためであり、アノ男に関する情報を、少しでも引き出したいという意図があった為だ。

やがてアリミアは、態度を軟化させてニッコリと微笑んで見せると、嬉しそうな表情で感謝の言葉を並べだしたランスロットを軽くあしらって、そそくさと仮部屋へと足を向けた。

そんなに感謝されても・・・。少し困るわね・・・。

彼女は途中、更に地下奥深くへと続くエレベーターの到着を待っている間、ランスロットの必死な表情を思い浮かべて、思わず失笑してしまった。

彼女の真実を知った時、彼は一体どんな表情をするだろう。

それでもまだ付きまとうつもりなら、私が実力で阻止すればいい訳だし、まあ普通に名前と所属部署ぐらいは教えてあげようかしら。

ただ、彼女にはもう、将来を誓い合った相手がいることは、まだ秘密よね。

０４－２５：〇流れ落ちる涙のバスルーム［１］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２５「流れ落ちる涙のバスルーム」

程よい暖かさを保った細かな雫（しずく）が降り注ぐ幻想的な霧の中で、甘く強いフローラルの香りが漂う空間に一人きり。

滴り落ちる水の音だけが響き渡る、静かでいて温和な空気に包まれた世界に浸りながら、過酷な戦場で疲弊しきった精神を洗い流すかのように、彼女はじっと目を瞑ったまま立ち尽くしていた。

薄っすらと白い靄（もや）を沸き立たせるミストシャワーの水滴が、綺麗な素肌へと纏（まと）わり付いて、小気味良く小さく並んだ粒の絨毯（じゅうたん）を形成しては、次第に周囲の仲間達と身を寄せ合うように膨れ上がっていく。

ドスン！！

そして不意に、室内を揺るがすように鈍い音が打ち鳴らされると、湿気を吸って綺麗なウェーブのかかった抹茶色の髪の穂先から、一斉に彼女の心を擽（くすぐ）るように水滴達が滑り落ちて行った。

その身に抱えた自身の重さに耐え切れずに。

現実と言う残酷な世界から振り落とされるように。

彼女は必死に自分の心の重さを支えるように小奇麗な壁へ右手を付くと、俯（うつむ）いたままの姿勢でゆっくりと両目を開いた。

私は一体、何をしているんだろう。

私は一体、何がしたいんだろう。

たった一人。狭い空間の中に自分を押し込めて。

何もする事なんか無い癖に。

何かをする事なんて出来やしない癖に。

休む事も許されないほど断続的に押し寄せる殺意の波へと曝(さら)され、研ぎ澄まされた氷柱で何度も突き刺されるような悪寒に震え上がりながら、必死に駆けずり回った死地での気持ち悪さに比べれば、これほどまでに温和で心地よい世界は無いというのに・・・。

戦いの果てにようやく手にした安息の一時がこれか・・・。

目に見えぬ黒い影の姿に脅え、未だ止まぬ寒気に身を震わす彼女は、一体、何に脅えているというのだろう。

一体、何が怖いというのだろう。

降り注ぐ気持ちの良い霧の中に身を沈め、次第に温まり行く身体の感触に意識を集中しながらも、どこか自分の物とは思えないほどの気だるさを着込んだ重たい心が、果てしない深遠の底へと落ちていくようだ。

そして、立ち尽くした自分の身体だけをそこに残したまま、がっくりと膝から崩れ落ちるようなイメージの中に、這い蹲る卑下な自分の姿を垣間見ると、チョロチョロと全てを吸い込む真っ黒な排水溝の中に、恐ろしいほどに充血した一つの目を見出してしまった。

「これで貴方も仲間の一人」

確かに聞いたその低い声に、一瞬、驚いたような表情を醸し出した彼女は、慌てて狭い空間の中を見渡す。

そして、ぽかぽかと芯から温まった身体が、見えない何かに脅えて凍りついた心の寒さに震えだすと、彼女は突然、ドタバタとバスルームの扉を開いて、与えられた自分だけの仮部屋の中に注意深く視線を巡らせた。

単に寝泊りする位しか機能的役割を果たさないであろうその小さな部屋の壁際には、小さめのシングルベットが横たわっており、反対側の壁際にシンプルな椅子と机が置かれている。

そして、就寝用の薄暗いライトに照らし出された無機質な床の上には、彼女の荷物を入れた小さなカバンと、無造作に脱ぎ捨てられたパイロットスーツが散乱するだけで、当たり前の事であるが、特に何ら不審な点は見当たらなかった。

しかし、何かしら異様な雰囲気をそこに感じてしまった彼女は、慌ててバスルームの扉を強く閉めると、再び白く靄のかかる個室の中へと閉じ篭り、咽つく様な湿気を帯びた空気の中、2、3軽く咳き込んでしまった。

やがて彼女は、疲れきったように肩を落として、小さなバスチェアーへと腰を下ろす。

そして、霧の濃度を上げるためにと、設定パネルへと右手を差し伸ばした時だった。

（ジャネット）

「うっ・・・。うぁ・・・。あああ・・・。」

何かべっとりと滑(ぬめ)る様な違和感を感じた彼女が、右の掌(てのひら)を翻(ひるがえ)して、呻(うめ)き声を上げた。

赤い・・・。赤い・・・。赤い・・・。

何コレ？何コレ？何なのコレ？？

右の掌(てのひら)へと付着した、その粘性の高い真っ赤な液体は、まるで生き物のようにプルプルと蠢(うごめ)きながら、次から次へと止め処なく湧き出してくる。

そして、それまで周囲に漂っていた心地よい香りが、急激に鼻に付く錆び臭い刺激臭へと変貌を遂げると、漂う水滴の一つ一つが一気に赤黒い色を帯びて、彼女の肌へと取り付き始めるのだ。

「独り。寂しいんでしょ？・・・うっふふ。私達がいるじゃない。」

唖然とした表情で見据える右手を必死に動かそうとするも、じりじりと焦げ付くような熱さを感じ始めた身体が全く言う事をきかない。

まるで全身へと纏わり付いた赤黒い水滴全てが、見えざる重たい鎖

の蔦となって、彼女の精神を縛り付けているかのようだ。

やがて、小刻みに震える右手の上へとせせり出した赤い液体が溢れ出すと、粘り気の強い糸を残したままにして、ドロドロと足元へと流れ落ちた。

「独り。寒いんでしょ？・・・だから同じ境遇の仲間を欲するのね。」

（ジャネット）

「違うわよ！！」

激しい怒気を交えた大声によって、その鎖の蔦を振り千切ると、彼女はとっさに両手で顔を覆った。

勿論、彼女の耳元で囁かれる気持ちの悪い問いかけは、全て彼女自身の心が生み出した幻である事は解っていたが、ポカポカと温まり行く身体と乖離するように、冷え固まり行く心の感情とのギャップが、彼女を激しく身悶えさせるのだった。

「結局、貴方がしている事は、貴方がされた事と同じ。刻まれた傷と同じ程度の傷を求めて、貴方はその先に何を求めているの？」

（ジャネット）

「復讐よ！！復讐！！ただそれだけよ！！死ねばいいのよ！！みんな死ねばいいのよ！！」

幾ら泣いても。幾ら悲しんでも。

どうしようもない事なのだということは解っている。

しかし、どうしようもない気持ちのやり場を探して、更にどうする事も出来ない自分を殴りつけるように、彼女は思いっきり見ざる何かに怒鳴りつけた。

何も見なくて済むように両目を強く瞑り、何も聞かなくて済むように耳を両手で塞ぐ。

そして、バスチェアーに座ったまま、身を屈めるように丸くなると、彼女は辛く切ない悲しみと怒りの突き上げが収まるのを、ただ只管（ひたすら）に待った。

吐き出せるだけ吐き出したはずの悲しみ。

込み上げる怒りの炎に駆り立てられて、殺すだけ殺した自分。

やりたい放題に己を振りかざし、再び自分を省（かえり）みたところで、空虚に曝（さら）された寂しげな心が温かみを帯びる事はない。

そんな事、既に解っていた事でしょうに・・・。

「おねぇちゃん・・・。」

真っ暗な闇の中へと自分を包み隠していた彼女の意識の中で、不意に姿を現した一人の少年が声をかける。

言葉を交わしたくても交わすことの出来ない少年が。触れたくても触れることの出来ない少年が。

必死の思いで手を伸ばして、しがみ付こうとするものの、抱き付け

るのは恨めしい空想の中の自分だけ。

そんなイメージの中に拵えた自分自身にさえ、激しい憎悪を抱きながら、やがて彼女はゆっくりと目を見開いた。

打って変わってシーンと静まり返ったバスルームの中で、暗く長いトンネルの中へと吸い込まれるように、静かに吸水口へと流れ落ちて行く水の音だけが響き渡る。

彼らは一体、どのぐらいの時間を経て、次なる光を浴びる事が出来るのだろうか。

愛する者の死から二週間を経て尚、未だ真っ暗なトンネルの中から抜け出す事の出来ない彼女の瞳からは、枯れることの無い大粒の涙が、再びボロボロと零れ始めていた。

暖かな空間の中に身を浸しながらも、決して温まる事の無い悲しみを心に抱いて、小刻みに震える自分の身体に抱きつきながら、彼女はずっと、そこに佇んだままだった。

04－26：○流れ落ちる涙のバスルーム［2］

第四話：「涙の理由＋」
section26「流れ落ちる涙のバスルーム」

／GO to Army Special Ground for ces……■
／The access is being approved……■
／Black Point district Martial Possession Data■
Approval ID：PressTerm8923
Pass：＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
permission clear……
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

／Ｎｙｉｆｉｎｅ　Ｐａｒｓｏｎａｌ　ｌｉｓｔ
０１．Ａｍａｈｅｒｕ－ｄｉｎｇｅ
０２．Ａｒｃｈａｎ－Ｃｏｍｍｕｎｅ
０３．Ａｒｉｍｉａ－ｐａｗ－ｓｈｏｔｒｉｎ
０４．Ｂａｌｂａｒｏｃｋ－ｄｏ－ｌｙ
０５．Ｂｅｌｔｒａｎ－ｇｕｓｔｒｉａ
：：
４０．Ｓａｆｏｒｋ－ｍｏｒｏ
４１．Ｓａｌｍｚａｒｋ－ｈｉｆｉｌｉｚ
４２．Ｓｅｎｉｆ－ｓｏｎｒｏ
４３．Ｓｈｕｍａｒｉａｎ－ｖｅｌｎａｒｌ
４４．Ｓｈｏｗ－ｉｍｕｒａ
：：

身分を偽り、高度なセキュリティシステムを欺(さざぶ)きつつ、たとえトゥアム共和国軍の高官であったとしても、簡単にアクセスする事が出来ない区域への最短ルートを歩んできた男が、何やら画面一杯に並べられた項目を食い入るように凝視していた。

そして、目的となる項目を選択し、照会コマンドを打ち込んだところで、テーブルの上へと置かれていたブランデーを手に取り、半分ほどを一気に喉の奥へと流し込んだ。

（ユァンラオ）

「さすがの共和国陸軍も、たいした情報を有していないな。まあ、準ランベルク市民権しか持たない流れ者では仕方が無いか。」

＜セニフ・ソンロ＞

▼ステータス

年齢：１６歳　性別：女　血液型：Ｂ－ＡＢ
身長：１４５ｃｍ　体重：３５ｋｇ
出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
人種：セレアニア系
経歴：ＤＱＡ大会参加：３回
所属：ＬＮＲ社
適正：ＤＱパイロット

ある程度事前に予測出来た事とは言え、余りに微量で鎮撫な情報を前にして、ユァンラオは喉元へと込み上げる上気と一緒に、呆れたような溜め息を吐き出した。

勿論、彼が求めている情報とは、自分の疑念に対する真実へと近づくための、多角的方面から分析出来る情報であり、それが彼の見据えた標的へとより迫るための行為である事は明らかだ。

ユァンラオは、ゆっくりと灰皿の上に捨て置かれたままのタバコを掴み上げると、真っ白な煙を引き寄せるように口元に銜え、その大きな身体を力いっぱい椅子の背もたれへと熨し掛けた。

そして、タバコの先端部で赤々と火の元を光り上がらせながら両腕を組むと、彼は目の前に広がる灰色の壁に視線を向けて、何やら脳裏へと描き出したイメージへと意識を集中した。

お互いに軍隊と言う檻の中に身を置く以上、事を急いて荒立てる必要も有るまいが、あれだけの結果を導き出した一人の小娘を放ったままにして、「ヤツ」は一体、何を目論むというのか。

処刑されたとされる帝国最後の皇帝血直系継承者「セファニティー

ル皇女」の幻影を追い続け、居もしない偽者の登場を願って迷走する狂信者ともまた違う人種の人間だ。

帝国内でもそれなりの権力を有し、何かしらの派閥を形成する者の一人であるようにも見受けられるが、それでも実際に組織の黒幕たる人物とも少し違うようだ。

小娘の正体に逸早く気がついていながらにして尚、手を拱いているように見せているのは、何か別に思惑があるからなのか。

もし、仮に皇女が生きていたと仮定し、本当にあのセニフ・ソンロと言う小娘が、セファニティール・マロワ・ベフォンヌ本人であったとして、今後「ヤツ」が取りうる手段の道筋は二通り考えられる。

一つ目は、皇女の存在によって不利的状況へと追い込まれる輩として、人知れず小娘を抹殺してしまう事。

二つ目は、皇帝血の威光を借りて自らの権力を押し上げようと目論んで、自らの陣営に小娘を取り込もうとする事。

簡単に陣営を切り分けて見せるなら、前者がストラントーゼ家、後者がロイロマール家と言う構図になるのだろうが、その対立関係の中で「ヤツ」の立ち位置を定めるならば、まるっきりの中間地点ないし、傍観者たる観客席に陣取っているようにも見受けられる。

もし「ヤツ」が、どちらかの陣営に属していたとするならば、５大貴族と呼ばれる他の陣営の者達にまで、情報を公開するような指示を出す必要は無いからだ。

しかも「ヤツ」は、確証が取れるはずも無い「皇女生存の可能性」

を歌った世迷言のみで、帝国国内でも1、2を争う大貴族であるロイロマール家と、ストラントーゼ家が奔走するで有ろうことを事前に知っていた。

知っていた上で、あえて小娘の情報を流すような指示を出したのだ。

3年前に処刑されているはずの皇女が、今も尚生き永らえているなどと、DNA鑑定を実際に行った自身でさえ、未だに半信半疑で有るというのに、大貴族共が態々（わざわざ）事を荒らげるような危険な行為を犯してまで、行動を起こした事からも、その情報が非常に高い信憑性を帯びている事が解る。

帝国史上最も愛された女帝ソヴェールの娘、「セファニティール皇女」が生きているのだと言う事実が。

ユァンラオは身動ぎもせずに、立ち上る白い煙の行く末を見据えながら、意識の中に疎らに点在した確実性の高い情報から順に繋ぎ合わせていく。

しかし、大半の情報が予測と言う不確実なもので塗り固めなければ、繋がる気配すら見いだせない状況に、面白くも無さそうな表情を浮かべて、大量の煙を吐き出すのだ。

ストラントーゼ派陣営として考察すると、現帝国最高権力者たる皇后クロフティアを筆頭に、帝国最高評議会内でも最大勢力を誇る現状に、不満を抱いているわけではなかろうが、それでも皇帝血が断絶した今の幼少皇帝デュランシルヴァでは、帝国国民の心を掴むことは容易に成らず、同派閥内で燻る火種も有したままの状況にある。

辺境地域を統治する弱小貴族達との軋轢も深みを増し、何かしら帝国国民をまとめ上げるための思想的対象を求める可能性もあるが、それでも長きに渡り対立してきた相手の子孫を頭上に掲げるなど、当然望んで選択するはずも無い。

ストラントーゼが「ヤツ」の黒幕たる人物なのであれば、トゥアム共和国との間に戦線を開く前に事を処理してしまおうと考えるのが極自然な流れであり、現状において小娘の暗殺を要求してこない事からも、「ヤツ」がストラントーゼ派の人間では無いことが窺える。

一方、相対するロイロマール派陣営として考察すると、女帝の病死から狂いだした歯車に巻き込まれるように衰退した勢力と、対抗するストラントーゼ派陣営の急激な台等により、帝国国内での勢力バランスが著しく崩れ始めた事を懸念して、何かしらの対策を打ち出さなければならない状況下に有った事は確かだ。

離れ行く帝国国民の心を一手に引き付けるために、今は亡き女帝ソヴェールの娘であるセファニティール皇女を盟主として担ぎ上げようと、曝された魅惑のカードを手に入れんと欲した心理は理解できる。

皇女が如何に父親殺しの大罪を背負った犯罪者であったのだとしても、帝国国民達の間では、未だに当時の事件に関して疑念を抱く輩が数多いからだ。

3年という月日が流れた今も尚、封印された当時の真実を追い求め、帝国憲兵隊に身柄を拘束される不穏分子が一向に後を絶たず、狂信的反乱者達の間では思想の象徴として崇められているとさえ言われている。

一見、帝国国民の生活は安定して豊かであるように見えるものの、実際にその恩恵に与(あずか)る事ができている人間は、位の高い貴族達や都市部周辺に住まう特権を有した人間達のみだ。

特に辺境地域では激しい民族差別による虐殺や略奪が横行し、貴族間、部族間による大規模な戦闘へと発展する例が少なくない。

女帝ソヴェールが打ち出した身分格差緩和政策により、一時の好転を見せた辺境地域問題だが、それも彼女が生きている間だけに齎(もたら)された僅かな効果に過ぎず、その後帝国最高評議会の採決によって、いとも簡単に破棄される始末となった。

ロイロマール派としては、こうしたストラントーゼ派による、都合の良い政策の狭間で苦しみ悶(もだ)える国民達を取り込みたい狙いがあり、実際、彼らの支持母体となるのも、辺境地域を統括する弱小貴族達だ。

ロイロマール派の人間達が、皇女の汚名を濯(そそ)ぐ目星が付かないまでも、まず誰よりも先に皇女の身柄を確保しておきたい立ち位置にいることは確かで、秘密裏にブラックポイントを襲撃した軍人達の行動を見れば、明らかに彼らがその陣営に属している事が直ぐに解る。

となれば、ロイロマール派の陣営が皇女の身柄を確保する前段階で事を公にするような暴挙に出るはずも無く、「ヤツ」とはやはり異なる陣営に属していると言わざるを得ない。

つまり「ヤツ」は、事の主となる情報を握りつつも、事の大勢からは身を一歩離した立場にいる者であり、帝国国内には第三者的な勢力が存在しているのかもしれない。

ゆっくりと顎に生え揃った無精髭を擦りつつ、短くなったタバコを灰皿の上で捻り潰すと、ユァンラオはグラスの中に残されたブランデーを一気に飲み干して、無造作にテーブルの上へと強く叩きつけた。

仮に第三者的勢力が存在するとして、その筆頭候補に挙げられる奴等といえば、元々ストラントーゼ派であるブラシアック家と、ロイロマール派であるナイテラーデ家を除き、帝国領土の西方一帯を統治するロートアルアン家以外に思い浮かびはしないのだが、奴等に帝国全土を揺るがすほどの力が備わっているのかといえば決してそうではない。

奴等がロイロマール派、ストラントーゼ派どちらにも組しないのは、奴等の支持基盤がアルアンゴーニュ地方のみに存在する事を理解しているからであり、それ以上の野心を垣間見せないのは、帝国内での権力闘争に巻き込まれたくない意思があるからなのだろう。

とすれば「ヤツ」の居場所としてロートアルアン家が相応しいとも言い切れず、帝国国内には「ヤツ」が存在出来るほどの目ぼしい勢力は存在しないという事になる。

しかし、これほど帝国国内の内情に精通した人物が、事の本筋から乖離した場所に居るはずも無く、「ヤツ」の居場所は少なからず何れかの陣営の中にある事は確かなのだ。

（ユァンラオ）

「ふっふっふ。中々に面白い構図だな。いずれの陣営をも否定して

いるように見せているのは、この俺を警戒しているからなのか。謎を解く鍵自体をこの俺の手の内に預けておきながら、解けるはずも無いと高を括っているつもりか。」

ユアンラオは、空になったグラスの中に並々とブランデーを注ぎ入れると、軽い笑いを打ち付けて、再びディスプレイに表示される小娘の情報を凝視する。

そして、無意識の内にタバコを一本手に取ると、使い込んだ愛用のジッポに火を灯した。

こんな小娘が全ての謎を解く鍵を握っているなどと、軽々しくも信用することは出来ないのだが、この小娘を巡って勃発した騒動から考察すれば、何かしらの情報を有していることは確実であり、小娘が皇女自身であるという可能性についても、完全に否定する証拠がある訳ではない。

ストラントーゼ派が主体となって推し進めた処刑劇から、皇女が逃げ延びる事など不可能な事だと言われているが、全くの非公開に、しかも突然に執行された皇女の処刑に、絶対の自信を持って彼女の死を確信できる者など、実際に処刑された彼女の死体を目の当たりにした者でもなければ出来やしないだろう。

勿論、一般庶民達にとってみれば、結局は伝え聞いた事実でしか、事の本質に触れることは出来ないだろうが、それでも当時執行された皇女の処刑に関する事実には、幾つもの不自然な点が見受けられ、その度に皇女がまだ生きているのではないかと言う憶測が飛び交ったのだ。

勿論、それが憶測の範疇を超えることは無く、そう言った皇女生存の可能性を望む人々の思いとは裏腹に、皇女が大衆の前に姿を現す事など無かったのだ。

しかし、今回に限って言えば、事態は異様な雰囲気を奏で出し、事もあろうか帝国二大勢力ともあろう、ストラントーゼ家とロイロマール家が同時に事を起こした。

まさかこれ程の力を有した両家が、何の確証も無いまま偽の情報に踊らされるはずも無く、そこに何かしらの確信を抱いたからなのであろう事は予測できるのだが、奴等は一体、この小娘に何を見出して、行動を起こしたのだろうか。

本当にこの小娘が、皇女本人で有るという確信を持ったのだろうか。

（ユァンラオ）

「元々提供されたＤＮＡ情報が皇女の物ではなく、小娘の物だったとすれば、一致するのは当たり前の事。しかし、そんな偽の情報によって行動を起こすほど、奴等も暇ではあるまい。もし本当に小娘が皇女だとするならば・・・。」

もし本当に、この小娘が皇女本人だとするならば、何の気無しに一般市民を装って周囲をうろつけるものなのだろうか。

確かに他の貴族達とは違い、一般的庶民の生活を好んで、しばしば姿を晦ませていたとされる皇女であるが、それでも周囲の者が、そんな状況を放って置くはずがない。

少なからず皇女の身を守るための護衛は必要であり、決してたった一人で行動させるような事はしないはずだ。

とすれば、あの時小娘の周囲に居た者の誰かが、小娘を護衛する任務を負う者なのだろうか。

周囲から追われる立場を考慮して、ひっそりと身を隠す事を考慮すれば、四六時中行動を共に出来る同姓の方が都合が良いと言う事になるが、果たして・・・。

＜アリミア・パウ・シュトロイン＞
▼ステータス
年齢：２２歳　性別：女　血液型：Ａ－Ａ
身長：１７３ｃｍ　体重：５０ｋｇ
出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
人種：南ムルア系
経歴：ＤＱＡ大会参加：３回
所属：ＬＮＲ社
適正：ＤＱパイロット

見た感じから、相当戦闘能力に長けた女である事は間違いない。
候補として名を上げるとするならば、こいつ以外には考えられんな。

カルティナの話からすると、小娘の正体を知っていたような素振りを見せなかったようだが、正体を知り得なくても、小娘の身を守る程度の依頼をされていたと考えれば、別にその不自然さを勘ぐる必要も無い。

（ユァンラオ）
「少し注意深くこいつの動向を探るか。小娘の方に関しても、ヤツが次の手を打って出るまで、待つ必要もあるまい。ふっ。」

微かに込み上げた笑いを滲ませるように、ユァンラオの口元が歪み上がる。

そして彼は、陸軍のシステム統括センターを経由して、外部へと抜け出るための経路を特定すると、多少強引な手段を講じて、張り巡らされた防壁への攻撃を開始した。

ビーーー。ビーーー。ビーーー。

っと・・・。

唐突に薄暗い部屋の中へと小うるさいブザー音が響き渡る。

ひっそりと身を隠して不正な手段を敢行していた者としては、まさに心臓が飛び出すほどの衝撃を感じてしまったに違いないが、このブザー音の正体は、何のことは無い、彼の部屋に来訪者が有った事を告げるものであった。

勿論、自分の不正行為に絶大な自信を持つユァンラオの表情は、怪訝そうな心情を浮かび上がらせはしたものの、決して驚いた様子を感じさせ無かったが、それでも普段から彼の元を訪ねるような客人は皆無であったために、少なからず心の中で警戒心を強めたのだった。

彼はゆっくりと椅子から立ち上がると、部屋の入り口付近へと備え付けられたテレビドアホンのスイッチを入れ、扉の前に立つであろう人物の姿を確認する。

するとそこには、抹茶色の髪の毛が特徴的な可愛らしい女性が一人、不機嫌そうな表情を浮かべたまま立っていたのだ。

04－27：○流れ落ちる涙のバスルーム［3］

第四話：「涙の理由＋」
ｓｅｃｔｉｏｎ２７「流れ落ちる涙のバスルーム」

（ジャネット）
「ふふ・・・。根暗な貴方のイメージ通り、ほんっと部屋の中も真っ暗なのね。」

開け放たれたドアの向こうから姿を現した私服姿の女性は、何を警戒する様子も見せずに薄暗い部屋の中へと押し進み、壁の脇で腕を組んだまま鋭い視線を突きつける大男に向かって、呆れたような言葉を投げつけた。

そして、時間の経過と共に彼女の背後で自動扉が閉じきると、パーソナルコンピューターのディスプレイが放つ微かな光だけを残して、完全に外界から隔離された、男女二人だけの空間が作り出された。

地上で降り続く雨の影響からか、室内は蒸し暑い湿気に包まれており、薄っすらと視界を遮る薄い靄が、異様に鼻の先に焦げ付くような臭いを漂わせている。

こんな夜分遅くの時間帯に、女性がたった一人で男性の部屋を訪れるなど、完全に危機管理意識が欠落していると言われても仕方ないだろうが、そんな事はお構い無しとばかりに、彼女は未だ暗闇に慣れない目をキョロキョロと移動させ、得体の知れない変人とも揶揄される大男の仮部屋の中を、どこか興味深げに見渡していた。

しかし、当然のことであるが、つい先ほど与えられたばかりの仮部

屋の中に、彼女の興味を引くような物が備わっているはずも無く、必然と電源が入れられたままのパーソナルコンピューターへと、彼女の意識が釘付けられる事になる。

（ジャネット）

「何これ？ＰＣで何かしてたの？・・・っと。ロックなんてかけちゃって。なんか怪しい事でもしてたんじゃない？うふふ。」

粗悪なテーブルの前までゆっくりと歩み寄った彼女は、キーボードの脇に備えついたインターフェイスボールを小突いて見せると、目の前にへと浮かび上がったセキュリティメッセージに軽い笑いを返しながら、部屋の主たるユァンラオの方へと視線を向けた。

壁際に寄りかかるようにして腕組みをする大男は、口元に銜（くわ）えたタバコの煙を吐き散らすのみで、突如として部屋の中に乱入してきた女性に対し、一言も喋りかける様子はない。

ただ、不機嫌そうな表情を浮かべたまま、この無警戒な振る舞いを見せる彼女の姿に、鋭く冷たい視線を突き刺しているだけである。

この二人は、ネニファイン部隊研修時に同じチームだったという事以外には、何ら接点が有るわけでも無く、勿論、親しく語り合うような友人同士でも無ければ、互いに想い合う男女と言う訳でもない。

部隊内でも寡黙（かもく）を通し、決して人を寄せ付けることのないこの男に、ジャネットの方から積極的に語りかける事など、本来ありえない光景なのだが、そんな男の部屋に、たった一人で身を投じて見せた彼女は、一体何を考えているのだろうか。

（ジャネット）

「あ、タバコ1本貰うね。」

（ユァンラオ）
「何の用だ。」

テーブルの上へと置かれた青い箱の中からタバコを一本抜き取り、しっとりとした柔らかな唇で挟み込んだジャネットに、ユァンラオは喉の奥から奏で出したような威嚇めいた低い声色を投げつけた。

そして、彼女の姿をじっと突き刺すように睨み付けた視線の上に、どこか背筋が凍りつくような悪寒を感じるほどの、激しい殺意の色を織り込んで見せた。

それは、彼の持つ真っ黒に塗り固められた自身の正体を、少しでも勘ぐられることを嫌ったためであり、この時のジャネットの不思議な行動に、非常に強い警戒心を抱いたからなのだろう。

しかし彼女は、なにやら少し考え込むような素振りを見せた後、ユァンラオにニッコリと微笑んで静かに答えるのだ。

（ジャネット）
「何？・・・用？・・・。う～ん。そうねぇ・・・。昼間の反省会でもしようか？」

それは彼女にとって、少しでも彼の不信感を和らげるための、可愛らしい振る舞いのつもりだったのかも知れない。

しかし、柔らかい物腰で笑みを浮かべたジャネットに対し、薄暗い部屋の中へと伸びた悪魔の様な大きな影が、突然彼女の身へと襲い掛かった。

まさに瞬間的スピードで振り上げられた男の右腕は、彼女がそれと気付くよりも素早く、彼女の喉元へと食らいつくと、二枚重ねで着込んだ私服の襟元を根こそぎ掴み取る。

そして、衣服を引き千切らんばかりの豪腕で彼女の身を振り回し、思いっきり背中から硬い壁に叩きつけた。

（ジャネット）
「うっ！！ぁはっ・・・！！あぐ・・・。・・・・・・。」

肺から搾り出される様な喘ぎ声に咽び込んだジャネットは、その後も容赦なく首元を締め付ける太い腕を右手で掴み取ると、必死に身を捩って逃れようと試みる。

しかし、効果的に封じ込められた手足を思うように動かす事が出来ず、押し潰さんばかりに圧する大男の身体は、大木が大地に根を張ったかのように揺らぐ気配は無い。

そしてユァンラオは、苦しみ悶える彼女の表情を眺めながら、長身の彼女を軽々と吊り上げて見せると、猛烈に鋭い視線で睨みつけたまま、再び冷たい態度で問いかけた。

（ユァンラオ）
「ここに何しに来たと聞いてるんだ。」

（ジャネット）
「・・・あう・・・。うあぁっ・・・・！！」

まさにこの時、ユァンラオの頭の中には、この女の息の根を止めて

しまわんばかりの激しい殺意が湧き上がっていた。

鋭く光る瞳の奥に真っ黒にうねり狂った凍てつく炎を宿し、掴み取った上着を更に捻り上げて、彼女の白い首元に絡ませる。

そして、次第に紅潮し行く彼女の表情を気にかける様子も無く、非常なまでの暴力を持って彼女を縊り殺しにかかったのだ。

捕らえた獲物を飲み込む寸前に、最後の止めを刺すべくその巨大な身体を持って、巻き付いて締め上げる大蛇のように。

言うなればジャネットは、そこが蛇の巣穴とは知らずに迷い込んだ一匹の野兎だ。

強者たる捕食者に獲物として見定められ、ただ被食者たる悲しき運命を辿る儚い一つの命。

それと気付いた時には全ての終わりの始まり。

己の身へと襲い掛かる「死」と言う恐怖に対し、何ら抵抗する手段を持たず、ただ終焉の縁へと立たされた自分の姿を眺めて、恐怖と言う闇の最中へと食い尽くされる様を体感するのだ。

（ジャネット）

「・・・うぅぅっ・・・。わ・・・わたし・・・。」

甘く切ない危険な香りに誘われて、それが真っ黒に腐りきった果実だと知りながらも、心の空腹感に耐え切れずに手を出してしまったのが運の尽き。

儚(はかな)くも消え去ろうとする命の灯火に最後の鞭を入れて、必死に言葉を発しようとするジャネットだが、もはや底を尽きかけた息が、彼女の思いをうまく音声化することを拒んだ。

そして、もがく彼女の力が次第に弱まり始めると、太い腕へと取り付いた彼女の右手がだらりと垂れ落ち、苦痛に歪んだままの彼女の目元から、スルスルと一線の涙が零れ落ちた。

一体、何を考えているのかと言われれば、全く、何も考えていなかったのかもしれない。

一体、何をしたかったのかと言われれば、全く、何もしたくなかったのかもしれない。

自分だけではどうする事も出来ない真っ黒な塊を一人抱えて、悶え苦しむ事に疲れ果てた精神が、まるで一人歩きしているかのようだ。

一体、私は何がしたいんだろう。

一体、私は何を求めているんだろう。

一体、私は・・・。

一体・・・。

・・・。

やがて、脳裏に渦巻く果てしない自問の螺旋階段(らせんかいだん)の先に、黒く淀ん

だ靄に包まれた終端を見つけたジャネットは、ふと思考の足を止めて、脅えたように仰け反ってしまったのだが、微かにその靄の中に、懐かしい暖かさを感じ取ると、彼女の心は急に軽さを増していった。

マリオ・・・。

ジャネットは一つ、そう呟くと、宙を飛び回れそうな程の軽さを身に着けた心の珠を、不思議と吸い込まれるような靄の中へと投じる向きへと傾いた。

が、しかし、そんな彼女の思いとは裏腹に、彼女の周囲を取り巻く大きな闇の影が、無理やりに彼女の心を鷲掴みにすると、現実世界へと引き戻さんばかりの引力を行使して、彼女の思いを掻き回したのだ。

ユァンラオは突然、何を思ったのか、ジャネットの首を締め付けていた右腕の力を緩めると、左手で思いっきり彼女の頬を引っ叩く。

そして、事もあろうか意識定まらぬ彼女の身体を、強引にベットの上へと放り投げたのだ。

（ジャネット）

「うぁっ！！・・・。う・・・。ゴホッ・・・！！ゴホ！！

ようやく齎された解放感に浸る事も出来ずに、激しく咳き込んでしまったジャネットは、まるで空中を漂っているかのようにとち狂った三半規管のうねりに悶えながらも、ぼやけ見える虚ろな視線の上に大男の姿を見出して固定する。

浴びせかけられる彼の冷たい視線はそのままだったが、疎らに生え

る無精髭を擦りながら歪めて見せた口元が、どこか異様な不気味さを醸し出していた。

（ユァンラオ）

「貴様のような馬鹿な女を、ただ殺してもつまらんだけだ。性欲の捌け口ぐらいしか使い道の無いような低俗な豚に、そんな高尚な死に様をくれてやるほど、俺も慈悲な男じゃない。いっその事、嬲り殺されてでもみるか？どうせお前はそこにいないんだろう？」

口に銜えたままのタバコから吸い込んだ大量の煙を、低俗に蔑んだ言葉と共に吐き散らしながら、ユァンラオは嘲る様な視線で彼女の姿を見下ろした。

真っ暗闇に閉ざされた密室の中で男女が二人。

嫌気がするほどの薄気味悪い笑みを浮かべる男が発した言葉の真意は、勿論、ジャネットにも解る程度の露骨さを含めたものだ。

しかし、いまだ整いきらない荒い呼吸に、激しく身体を上下に揺さぶられていたジャネットは、何やら悔しげな表情で唇を真一文字に歪めては見せたが、その視線はじっとユァンラオを見据えたままだった。

そして、乱れた衣服を直す素振りも見せず、真っ白なシーツの上にゆっくりと視線を落とすと、一言も言い返す事無く項垂れてしまった。

彼女は単に、悲しさと虚しさと、怒りと憎悪とが織り成す、何も出来ない「自由な時間」から逃げ去りたかった。

自由になれる時間を作り出したくなかった。

少しでも。ほんの少しでも動き続ける事で、心へと圧し掛かる重たい影から身を振り解きたかったのだ。

一人では抜け出す事も出来なくなった闇の彼方で、必死に誰かの助けを請うて叫んでいたのだ。

彼女にとっては、それがどんな人物であっても、もはや関係の無いことだった。

０４－９０：★【第四話】登場人物一覧

第四話：「涙の理由＋」

★★★新規登場人物一覧★★★

【パデ・ピブレジ】
性別：男　年齢：６３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国リトバリエジ攻略軍総司令官。
正式には帝国ストラントーゼ軍の所属となる将校である。
周囲からの人望も厚く、非常に温厚な性格の持ち主で、長年培ってきた経験測から展開される戦術には定評があった。
一介の平民出にも関わらず、数多くの功績を積み重ねることで出世した遅咲きの老将。

【フランコ・ナタレード】
性別：男　年齢：４８歳　出身：南ムルアート諸国
ムルアート諸国解放軍の総司令官。
親帝国派である北ムルアート政府の強権指向に反発し、叛乱軍を組織した人物。

【ワイハーン・カリカニス】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、バスターマンティスの砲撃を受けて爆死。

【バーンス・シューマッハ】

性別：男　年齢：３２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
若い頃より大陸各地で勃発する戦乱の中を駆け抜けてきた猛者であり、顔中に刻まれた傷跡が残る強面の男性だが、その見た目とは裏腹に、性格はいたって温厚で非常に仲間思いの頼れる人物だ。
どんな過酷な戦場からでも、必ず生きて帰ってきたことから、人々は彼を「不死鳥」と称するようになった。

【カルラス・ダグラス】
性別：男　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、バスターマンティスの砲撃を受けて爆死。

【ホァン・ロイ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：ティルフィア王国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
金色のつんつん頭にしゃくれた顎が特徴的な男性。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、帝国軍戦車部隊の砲撃により爆死。

【ハインハートル・オリトン】
性別：男　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
茶色の長髪に細い目尻が特徴的な細身の男性。
真面目そうな雰囲気とは裏腹に、結構社交的で人当たりの良い人物。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、バスターマンティスの砲撃を受けて爆死。

【ルワシー・オスカフォード】

性別：男　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
良く肥えた大きな身体に、モヒカン頭と言う特徴的な風貌を持つ人物であり、大雑把な性格柄、余り物事を深く考えないで行動するタイプの人間。
かなり訛りの強い言葉を持って毒を吐き散らすのが常だが、こう見えて中々に男気溢れる熱い男である。
実はその体躯に似合わず、かなりの筋肉質であり、鈍重と言う様な表現を持って称される人物ではない。

【メディアス・イェルザック】
性別：男　年齢：２４歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
短めにまとめた綺麗な麻色の髪の毛が特徴的で、若いながらも非常に落ち着いた雰囲気を持つ女性。
彼女は実年齢よりも歳を重ねた印象を受けるその風貌と言葉遣いにより、周囲からは「おばちゃん」と呼ばれる事が多かったが、彼女自身はそんな事を少しも気にする素振りは見せない。
さばさばとした性格と、何処か親しみやすい雰囲気を持つ大人びた人物。

【ソドム・スピリッツ】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
きりっと綺麗に刈り揃えた角刈りとは裏腹に、事ある毎にぼやき倒す小うるさい人物。
そのボヤキは日常生活の中であろうと、戦場の中であろうと所構わず垂れ流される為、時に人の苛立ちを増長させてしまう傾向にある。
ただし、だからと言って彼のボヤキが止まる事は決して無い。

【ミゼット・パールパニー】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
収まりの悪い天然パーマが特徴的な、細身で長身な男性。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、帝国軍戦車部隊の砲撃により爆死。

【デルパーク・シャンク】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【フロル・クローチェ】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【エムレ・コラーデ】
性別：男　年齢：３８歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国リトバリエジ攻略軍ディップ・メイサ・レフト４南進部隊司令官。
小柄な身体つきながら、周囲を圧倒するほどの大きな地声を持ち、例え相手がどれほど身分の高いものであっても決して怯まない、一本筋の通ったような真っ直ぐな性格の持ち主。
身分の低い家柄の出身であるが、帝国軍に一兵卒で入隊してからの二十年間、常に戦場の最前線に身を置き、多大な戦果を得る事で伸し上がった有能な戦士。
年齢と共に指揮官としての役柄を与えられる事になったが、帝国軍内では「切り込み隊長」の異名を持つほどの人物だ。
リトバリエジ攻略作戦において、バスターマンティスの爆発に巻き込まれ死亡。

【アンダーソン・フェレクス】
性別：男　年齢：３６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国リトバリエジ攻略軍ディップ・メイサ・レフト４南進部隊参謀。
面長の顔に濃い髭を携え、ぐりぐりの天然パーマが特徴的な彼は、非常におっとりとした気品溢れる性格をしており、あまり感情を表に出さないタイプの人間である。
戦場においてはその冷静な分析力と判断力を遺憾なく発揮し、指揮官のエムレからは非常に重宝がられた。
リトバリエジ攻略作戦において、バスターマンティスの爆発に巻き込まれ死亡。

【サフラン・オーシャン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国リトバリエジ攻略軍ディップ・メイサ・レフト４南進部隊所属のＤＱパイロット。
超大型特殊ＤＱバスターマンティスを操り、メイサ崖上でネニファイン部隊と交戦。
最終的に味方戦車部隊を巻き込んで爆死する事となり、レフト４南進部隊を壊滅させる原因を作り出してしまった。

【チャンペル・シィ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター兼部隊長秘書官。
細くしなやかな深緑色の長髪に、ほのかに釣り上がった猫目が特徴的な女性。
トゥアム共和国通信高大卒のエリートお嬢様で、ネニファイン部隊

にはカースの推薦で入隊した。
その能力は非常に優秀なものであったが、時折見せる大きな天然ボケが玉に瑕の可愛らしい女性。

【リスキーマ・サラオ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター。

【ヘルモア・トラッド】
性別：男　年齢：５６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍第一陸将であり、陸軍における最高司令官。
ギトギトに脂ぎった銀髪に、良く肥えて太った身体つきが特徴的な人物だが、無数の傷跡が残る顔貌から放たれる鋭い眼光は、決して最高司令官たる威風を損なうものではない。
軍内部では軍高官思想に凝り固まった堅物として有名であるが、軍の最高司令官としての責務を担う彼の立場柄、それは仕方の無いことなのかもしれない。

【メルデンス・ハウアー】
性別：男　年齢：５３歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍第三陸将であり、首都ランベルク防衛部隊司令官。

【ジニアス・シャルマーニュ】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ正規整備士。
短く刈り込んだ短髪と鼻の下に無造作に蓄えた髭が特徴的な強面の男性であり、鍛え上げた強靭な肉体を駆使し、力仕事なら何でもやってのける体力馬鹿。
見た目は少し怖そうなそうなオッサンであるが、以外に気さくで人当たりのいい人物である。

【アマーウ・ディンジ】
性別：男　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。

【トムシア・パルルマン】
性別：男　年齢：２４歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。

【ジョルジュ・ハーツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ正規整備士。
まだ幼さの残る端整な顔立ちに、細く綺麗な茶髪が特徴的な彼は、まるで少女のような可愛らしい容姿をした少年であり、明るく人当たりの良い性格から、誰からも好まれる人物だ。
軍正規整備士としては最年少となるその若さに似合わず、ＤＱ整備技術に関してはかなりの腕前を有している。

【リッキー・コーラス】
性別：男　年齢：４５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国中央保安局所属の捜査官。
ごつごつとした厳つい顔に、優しげに垂れた目元が特徴的な人物であり、何処と無く憎めない滑稽さを持ち合わせた中年男性。
彼は見た目、全く何のとりえもない「駄目オヤジ」のような雰囲気を装っているが、実はその筋ではかなり名の通った有名な捜査官の一人であり、難解な事件を幾つも解決に結び付けてきた過去を持つ。

【サム・イシュリン】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国中央保安局所属の捜査官。

痩せこけて不健康そうな身体つきに、大きく窪んだ両目が特徴的な男性。
非常に真面目な性格の持ち主で、上司であるリッキーとは対照的に、昼夜を問わずして仕事に没頭するエリート捜査官。

【ジャン・シルバーストルス】
性別：男　年齢：６０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国出身の天才科学者。
あらゆる分野の知識に精通した偉大なる先駆者だが、影では数多くの危険な実験に手を染めていたマッドサイエンティスト。

【メルヴィーナ・シャルトル】
性別：男　年齢：２２歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍所属の軍医。
綺麗なウェーブのかかった金髪と、優しげな瞳が特徴的な女性であり、清楚な身形と優しげな語り口調から、男性兵士達からはすこぶる人気の高い人物だ。
しかし、そのおしとやか過ぎる性格のあまり、自分の意思を強く突き通すことが出来ず、しばし周囲に流されっぱなしの状態へと陥る事が多い。

【ベルトラン・ギュストリア】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ショウ・イムラ】
性別：男　年齢：１９歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
赤く長い髪の毛が特徴的な元気の良い女の子だが、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。
彼女自身の告白により、第十三代皇帝ソヴェールの娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」である事が判明。
喧嘩別れに終わったチームメイトとの話し合いから、微妙となってしまった仲間達との関係に悩む。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、非常に人当たりが良く温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。
トゥアム共和国陸軍三佐サルムザークとは、何かしらの深い因縁を持つ。
セニフの素性を知り、当惑しながらも彼女の為に何かしてやれる事は無いかと苦慮する。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
抹茶色の癖毛が特徴的の長身女性であり、とてもおしとやかで愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず

劣らずの突撃タイプである。
最愛の弟であるマリオの死から、人が変わったように冷たい態度を示すようになった。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：１３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなって死亡。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。
セニフとの関係が悪化してしまった状況にもかかわらず、彼女の事を想い、何か彼女の為にしてやれる事はないのかと必死に模索する。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有している。

彼のお調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。

【サルムザーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍士官学校を１７歳で卒業した秀才であり、ネニファイン部隊の隊長を務める。
黄緑色の髪の毛と瞳が特徴的であり、体格的には恵まれなかったものの、その卓越した戦術眼は軍上層部内でも非常に評価が高かった。
普段から無気力な怠け者を装っているが、非常時にこそその真価を発揮する異端的才能の持ち主。

【カース・イン・ロック】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍作戦参謀本部出身の作戦軍曹。
厳格な性格の持ち主であり、軍規律に関しては非常に小うるさいが、逆に自身の身形は少々派手目で挑戦的。
非常に高い統率力と指揮能力を有する人物で、陸軍士官学校の鬼教官として恐れられた人物。
自分の思いに真っ直ぐで頑固な性格を持つが、心優しき二児の母でもある。

【シューマリアン・ベルナール】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍技術部所属の技術三尉。
非常に温厚な性格の持ち主で、その体格が指し示す通り、何事にも動じないおっとりとした雰囲気を醸し出しているが、ＤＱ整備を主としたその技術力は、非常に優れたものを有する人物である。

【ユァンラオ・ジャンワン】

性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
厳つい顔に生え揃った武将髭がトレードマークの得体の知れない人物であり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦闘能力においては無類の強さを有する猛者。
謎の依頼人からの要望でセニフを付け狙い、ＢＰ事件を引き起こす。
彼自身、セニフの正体に非常に強い興味を抱いている。

【ランスロット・アバンテ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
金髪の天然パーマが特徴的な彼は、そのお調子者たる人柄が示す通り、「酒」と「女」に全てを捧げる堕落者としての烙印を押された人物。
明るく軽い性格が彼の人当たりの良さを醸し出してはいるが、大半の女性は決して無為に彼の元へと近づく事は無かった。

【ティーラー・テル】
性別：男　年齢：３３歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ＤＱ製造メーカー最大手「マムナレス社」のＤＱ販売促進部門の総責任者であり、目的の為には手段を選ばない独断的先行者。
小柄な体躯ながらも常に威圧的態度をひけらかす冷淡な性格の持ち主であり、トゥアム共和国内の黒い影に潜んで何かを目論む人物。

05－01：●カサスの乱

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「カサスの乱」

ＥＣ３９７年５月８日。帝国領北部「南ブランドル地方」で異変が起きる。

ムルア海に面した綺麗な港町である「イサリナ」は、その町の中央部を国境によって分断されているという特殊な街で、北方「アイスクリストフ人」と南方「ムルア人」とが共存する静かで平和な街なのだが、この日ばかりは、どこか普段とは違う異様な雰囲気に包まれていた。

街の中心街に横たわる巨大な自然森林公園「ペンサール」の大広場に、まだ朝靄（あさもや）の残る早朝ながらも、大勢の民衆達が押しかけると、何やら殺気立った様子で声を合わせて叫び上げたのだ。

オットンハイマー・レブ・ロイロマール公爵をお救いするんだ！

公爵が皇帝に叛意（はんい）するなど考えられぬ！

これはシュトラの陰謀だ！シュトラを倒せ！

前日に勃発（ぼっぱつ）したＢＰ事件に関する帝国皇后クロフティアの声明演説により、ロイロマール公に謀反（むほん）の意ありと、不本意ながらも疑いをかけられてしまった主君の為に、集結した民衆の数は軽く１万人を超えていたと言われている。

異なる民族、異なる文化、異なる言葉と言う大きな壁がありながらも、同地方において今日まで豊かで平和な暮らしを営む事が出来たのも、この地を収めるロイロマール公の威光があったからに他ならず、それは国を違えるビナギティア国の民衆達にとっても変わらない思いであった。

しかし時に、その主君を想う人々の敬愛の念が、拠り所を失い歪んで方向性を見失ってしまうと、怒りにも似た憤り（いきどお）が交じり合い、人々の不安感を掻き立てるように渦巻いてしまう。

もはや民衆達の暴動にも発展しかねない程、膨れ上がった群衆を前に、ロイロマール公の留守を預かる腹心「カサス・ベルナルド」も、この状況を放って置く事は出来なかった。

若干２４歳のこの若者は、赤茶色の髪の毛をかき上げるように後ろに流し、高級な装飾品を身に纏（まと）った、いけ好かない成り上がり者であるというのが、一般的な周囲の見解であったが、実際のところ彼の物腰は柔らかく、物静かで誠実そうな好青年であった。

帝国貴族のような華やかな身分を持つでもなく、辺境の貧しい平民の一人として生を受けた彼は、幼い頃よりロイロマール公の下で従者として使えてきた人物で、身分の高い帝国貴族達に良く見られる、自分の意思を押し通して周囲の者と衝突する様な無頼（ぶらい）な者達とは違い、温和で優しげな性格の持ち主だ。

「公のお気に入り」という肩書きさえなければ、ここまで出世する事は無かったであろうとは、彼自身でさえ口にして認める事実であり、実際彼は、自分の身の程を弁（わきま）えて、決して手にした権力を無為に振るうようなことはしなかったのである。

勿論、そんな彼の誠実さこそが、ロイロマール公に気に入られた理由の一つであることは確かなのだが、類稀なる能力を発揮し、ロイロマール公の為に尽力するも、彼の元で働かねばならない有能な人材達から見れば、鬱陶しくも失脚させる事が出来ない邪魔な存在として、時に辛辣な誹謗中傷の対象とされてきたのだ。

ロイロマール公の威光のみで伸し上った腰巾着めが。

豪勢に飾られた大きな執務室内でふんぞり返って居れば良いものを、一体何の邪魔をしにのこのこと姿を現したのか。

カサスがペンサール大広場へと姿を現した時、集結した群集達を窘める立場にありながらも、逆に燃え盛る炎の中に油を振りまく様に煽り立てていた軍の将校達は、一斉に白んだ視線をこの若者へとぶつけて悪態をついた。

それは勿論、いかに主君たるロイロマール公を救うためとは言え、身勝手に群集を率いて武装決起するなど許されるはずも無く、何事にも温厚で覇気の欠片も見えないカサスが、平和的解決を試みてこの大広場へと赴いたであろう事が、誰の目から見ても明らかだったからである。

しかしこの時、大広場の隅に横付けされた装甲車両の最上部へと立ち上ったカサスは、穏やかな表情を保ったままにして、彼らの意表をつく言葉を発したのだ。

「私はロイロマール公に使えて１５年余り、公爵の威光を受けてぬくぬくと育ったボンボンだ。公爵無き世に私の存在する意義など有りはしない。私の思いは皆と同じ。ロイロマール公をお救いする事だ。これまでに受けた数々のご恩に報いる時が来たのだと思ってい

る。しかし、私には大した能力も無い。そして大した力も無い。そんな頼りない男の元でも良いなら、皆の力を貸してはくれまいか。どうか、ロイロマール公をお救いするために、私と一緒に戦って欲しい。」

この地における最高権力を与えられた者が、自らが支配する民衆達の前で深々と頭を下げる。

まさに帝国国内においては決して目にする事が出来ないであろう異様な光景に、それまで騒然といきり立っていた群集も、彼を罵る将校達も皆、まるで水を打ったようにシーンと静まり返ってしまった。

この場にいる誰しもが、まさかカサスがこのように願い出るなどと、思っても見なかったのである。

実際、つい数時間前までのカサスには、このように沸き立った民衆達を無為に扇動するような事は、単にロイロマール公爵の立場を悪化させるだけの軽率な愚行だという考えがあり、如何にロイロマール公が窮地に追いやられてしまった現状においても、冷静な判断の元で行動を選択すべきだと思っていたのだ。

しかし、この消極的とも取れる彼の重たい心積もりを１８０度転換させたのは、イサリナ北東部の港付近で捕らえたストラントーゼ派のスパイが発した一言だった。

それは、この混乱し始めた帝国国内の情勢に便乗して、ロイロマール公を暗殺するための計画が水面下で進行しているのだという証言で、帝都ルーアンより密かにロイロマール公を脱出させ、反逆者としての立場を確立させた後で、正規軍と言う名の追撃部隊に公爵を抹殺しようと目論んでいたのだ。

勿論、このスパイの証言が、信用するに足る確かな信憑性に事欠いていたのは事実だったが、それでも直後、カサスの元に、ロイロマール公が帝都ルーアンを脱出したという急報が届けられると、もはや彼は悠々と事態の好転を願って見守るだけの立場ではいられなくなったのだ。

「ロイロマール公をお救いするために。悪しきシュトラの陰謀を打ち崩すために。」

それまでは決して事の矢面に立つことも無く、何事に対しても消極的だったはずの無能な若者は、この時、ようやく自分の意思を持って大きく羽ばたく事を決意した。

カサスが高らかに右手を翳してそう叫ぶと、大地がうねり狂わんばかりの歓声を持って群集達が復唱する。

忌み嫌うものも。いがみあう者も。心の奥底に交えた共通の思いを胸に、声を張り上げて奮い立ったのだ。

こうしてここに、後に「カサスの乱」と呼ばれるようになる、ブランドル地方武装決起事件の幕が切って落とされた。

同日午前9時。静かな港町であるイセリナの市街中央通りには、５０輌を超える戦車部隊が集結し、ロイロマール家の家紋を背負った金色のド派手なＤＱが歩き回って演説をかます。

そして集結した群集達にも、あらゆる種類の銃火器が手渡され、無統制ながらも一致団結した強固な集団へと変貌を遂げていった。

このカサスの指揮する武装決起軍へと集結した人の数は、同地方に駐留するロイロマール軍に民衆達を加え、最終的には2万人まで膨れ上がり、歩兵部隊に換算して、数の上では1個師団に勝る兵力となったのだ。

勿論、これほどまでの人員を一人で統率することは不可能であり、カサスはこの兵力を大きく3つに分割すると、信頼の置ける3人の将校にその軍団の長たる任を与えた。

第一軍に、長年ロイロマール公爵に仕えてきた「フェネシュテルス・レブ・オルネッツェ」大尉を。

第二軍に、部隊内でもっとも若い有望な仕官「ネリブスト・シーラン」少尉を。

第三軍に、指揮能力に定評のある実力者「ヒューファレス・プレサリオ」中尉を。

そして、同日正午12時に鳴り響いた鐘の合図と共に、一路帝都ルーアンを目指して進軍を開始した。

カサスはまず、ロイロマール公の退路を確保すべく、メヌシア湾を南北に横断する大帝橋北端部を制圧することを主目標に掲げたのだが、武装決起軍の動向を察知したストラントーゼ軍の軍団が、旧帝都「シュトラセ・ゼニーロ」から派兵されたという報告を聞きつけると、即座に第三軍団長であるヒューファレスに対応を命じる。

大帝橋に至る道中において、ストラントーゼ軍の索敵網に察知されてしまう事は、カサス自身も事前に予測していた事態であり、何ら

慌てふためく様な状況ではなかったのだが、このストラントーゼ軍の動きを目の当たりにしたカサスは、どこか不思議な違和感を拭いきれずにいた。

それは、帝国国内でも優れた戦闘集団として名高いストラントーゼ軍の対応が、余りに遅く、散発的で統制を欠いたものだったからである。

勿論、大帝橋を目指すカサスにとって、そのような吉報は寧ろ歓迎すべきものだったのだが、中継地点となる旧ブランドル要塞跡地付近へと差し掛かった時、まさにその不安は現実のものとなって彼らの目の前へと姿を現したのだ。

旧ブランドル要塞は、古風な城をイメージさせる時代遅れの城壁に囲まれた要塞であり、戦略的意味を持ちえなくなった時点で放棄されて以来、誰も立ち入る事の無い廃墟と化していたのだ。

しかしこの時、その城壁の最上部から1発の砲声が鳴り響くと、大帝橋へと向かい南進を続ける武装決起軍の前に、見慣れぬ軍団が立ちはだかったのだ。

それは、帝国最北端の辺境に位置する「ウィルダラネス家」という小貴族の軍団であり、膨大に膨れ上がった武装決起軍から見れば、１０分の1程度にしか過ぎない小軍団であったのだが、その小軍団を率いる人物の名を聞かされた武装決起軍の将校達は、皆一様に青ざめた表情で震え上がったのだ。

その小軍団を率いていた人物が、かつての先帝ソヴェールの腹心であり、皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」の双頭の龍たる異名を持つ、「ギュゲルト・ジェルバート」将軍だったからだ。

彼は女帝ソヴェールの死後、北方へと追いやられるように赴任地を転属させられ、表舞台からは完全に失脚したと言われていたのだが、まさにこの時、疾風のような迅速さを持って、武装決起軍の前へと立ち塞(ふさ)がったのだ。

この時カサスは、指揮車となる巨大な装甲車両の司令室内で、がっくりと肩を落として項垂(うなだ)れてしまったという。

それは、目の前に現れた敵軍の指揮官が、帝国軍最強とも呼ばれたあのギュゲルト将軍であるという事に対して、悲観的観念に纏(まと)わり付かれてしまったからでもあったが、それ以上に彼の中で、一つの疑念が確定的事実となって現れ出てしまったからでもあった。

カサスの率いる武装決起軍の動きに対し、如何に迅速な行動を取ったのだとしても、これほどまでに素早く軍団を展開する事など不可能な事であり、大帝橋へと向かう進路上において、ブランドル地方を抜け出す以前に本隊が食いつかれてしまうなど、事態を予めに知っていたとしか考えられなかったからだ。

つまり、カサスを含む武装決起軍は、そうせざるを得ないよう仕向けられた結果に生み出された「反乱分子の集合体」であり、これを機に叛意(はんい)をなす危険人物達を、一気に吊り上げてしまおうと目論んだ、ストラントーゼの罠に落ちたのだという事を、この時初めて、カサスは悟ったのだ。

事実、ロイロマール公を危機的状況に追い込んだからといえ、北方ブランドル地方からセレーヌ地方までを統治し、西方辺境地域の貴族達に至るまで絶大な信頼を寄せるこの人物に対し、如何にストラントーゼ公の力を持ってしても、簡単に失脚させる事は出来なかっ

たと言われている。

勿論、カサス達ブランドル地方に住まう民衆達を煽り立てたように、ロイロマール公を暗殺してしまおうと目論んだのならば、さほど難なくロイロマール公の命を奪う事は出来たのかも知れないが、事の重要な問題はその殺した後にこそあるのだ。

数多くの民衆達の支持を集めるロイロマール公を無為に処断してしまえば、憤慨（ふんがい）した民衆達が暴徒と化して怒り狂う事は火を見るより明らかな事であり、この求心力を削ぎ落とすために、ロイロマール公を出来る限り悪者に仕立て上げる必要が有ったのだ。

自らの生命を保身するために、帝国皇帝に背いてまで武装決起を企（くわだ）てた反逆者達の長として。

カサスは、旧ブランドル要塞跡地の平原付近へと部隊を展開させつつも、もはや今後訪れる戦いの全てに勝利する以外に、選択する余地が無いことを悟った。

そして、その先に見えるたった一本の細い道筋を見据えながら、彼は全軍に戦闘命令を下したのだ。

カサスの指揮する武装決起軍は、対峙するウィルダラネス軍の１０倍近い兵力を有していたが、洗練された真の戦闘集団とは違い、完全に烏合の衆たる素人軍団である。

両者が最初の砲撃を交えてから３０分と経たないうちに、防衛陣形の一角を突き崩されてしまった武装決起軍は、その後、まさに虐殺と呼ぶに相応（ふさわ）しいほどの蹂躙（じゅうりん）を、ウィルダラネス軍に許してしまっ

た。

ほんの４時間ほどで終結したとされる旧ブランドル要塞跡地の戦闘で、生き残った武装決起軍の人間はたったの２１人だったと言われている。

それも、強引に身柄を拘束する事で捕らえた者のみであり、武装決起軍に加わった人達は、本当の最後の最後まで、ロイロマール公の為に戦い抜く事を選択したのだ。

首謀者たるカサスは、蹂躙するウィルダラネス軍の戦車砲によって憤死（ふんし）。

旧帝都シュトラセ・ゼニーロへと行軍した第三軍も、５日という期間を勇敢に戦い抜きはしたが、最終的に大量の軍団を投入したストラントーゼ軍の前に、無残にも朽ち果てる事になった。

数多くの民衆達を巻き込んだこの「カサスの乱」は、全く効果的な戦果を得る事が出来ないまま鎮圧されてしまったばかりか、その後のロイロマール公の立場を、より一層苦しいものへと追いやる結果を生み出す事となり、更には、彼らに同調して立ち上がった数多くの反ストラ派の人間達もまた、悉く粛清される悲しき運命を辿る事になるのだ。

しかし、このカサスの起こした反乱劇は、混沌とし行く帝国国内の情勢において、帝国全国民に一つの選択肢たる勇気を示して見せたことは確かで、その後の帝国が歩むべき道筋の中に、新たなる一本の小さな横道を築き上げたのだった。

０５－０２：〇平行線の彼方に

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「平行線の彼方に」

（シルジーク）
「シミュレーションボールと制御システムの再連結完了。エネミーシンボルを視界に確認したらレコード開始だ。」

妙に静かで機械的な動作音のみが漂う大きな地下室の中に、少し乾いた少年の声が木霊する。

（シルジーク）
「今度はＡＳＲモーション軌道から、新兵器に移行するタイミングとスピードに気をつけろよ。左手の動きにＲＴ４４のｗｅｉｇｈｔ－ｏｎするからな。」

寂しいぐらいに殺風景な薄暗い倉庫の中で、ただ独り取り残された彼が必死になって目の前のパソコンを相手に格闘していた。

彼が座るコンソールが並べられたテーブルの前には、大きな黒い球体がその体積の半分を床に埋めた形で、横に３つ並べられており、各々から伸びる太いコードは、無造作に置かれた大型の制御システムへと連結されている。

「ねぇ・・・。コントローラーに反動が返ってこないのに無理だよぉ。」

（シルジーク）

「急造部屋なんだから我慢しろよ。」

座る椅子の下にまで散乱した剥き出しの配線を蹴飛ばすと、シルは少し疲れたような溜め息をついて見せながら、マイクに向かってそう呟く。

そして、左手を頬に付いたまま、シミュレーション映像に合わせて、彼がレコーディング開始のボタンをポンと押下すると、程なくしてそのレコーディング結果が画面へと映し出された。

（シルジーク）
「・・・もう一回だ。セニフ。」

これまで記録したシミュレーション結果もさることながら、今回のレコーディング結果にもにっこりと笑みを浮かべるまでには至らない。

シルはしばらくの間、この可もなく不可もなく的な、やる気のない算出値にじっと見入ったまま、何かを考え込むような仕草で頭を抱えていたのだが、一瞬、大きな黒い球体の方に視線を移すと、取りあえず記録できた行動パターンのバックアップを取るためのコマンドを、カタカタとキーボードに入力し始めた。

今彼が行っている作業は、新しく開発されたＤＱ用の新兵器を使用するためのオートモーションデータを、行動パターン別に記録していく作業である。

本来であれば、新兵器を装備させたＤＱにパイロットを搭乗させて、照準訓練や射撃訓練の行動データを記録してしまうのが一番手っ取り早い方法なのだが、ディップ・メイサ・クロー作戦から2週間が

経った今も尚、目と鼻の先に布陣した帝国軍を前に、広い地上でのびのびと訓練など出来るはずもなく、基地自体が地下に存在するランベルク基地においては、ＤＱを稼動させるような広いスペースも存在しない。

そして、稼動すれば必ず何かしらの損耗を負ってしまうＤＱを、そう何度も訓練に借り出せるはずもなく、ＤＱのオートモーションデータを記録する作業は、専ら整備コストを大幅に軽減できる、シミュレーションという手段を用いるのが通例であった。

このシミュレーションには、幾つかの種類と方法があるのだが、一般的にシミュレーションボールと呼ばれる汎用的シミュレーターを使用する事が多い。

これは、実際に行動を司る制御システムを外部に独立させているために非常に互換性に優れ、ＤＱの動作シミュレーションのみならず、様々な兵機種での転用が可能な代物だ。

その使用目的は主に２つあり、一つはＤＱを稼動させるための行動ファンクション群を組み合わせて、ユーザーインプットに対応するオートモーションデータを生成する事。

そしてもう一つは、構築したオートモーションデータを連結し、ＤＱの動作シミュレーションを行う事。

勿論、オートモーションデータの基本構成に関しては、さほど難なく作成する事が可能なのだが、実際に登場するパイロットの特性に合わせたデータを求めるとなると、そう簡単にはいかないものだ。

（シルジーク）

「搭乗者へのフィードバック機能がないと、やっぱり辛いか・・・。」

それまで何度も繰り返されてきたオートモーションの記録データを画面に並べつつ、どこか不満そうに事の原因を呟きだして見せたシルは、再び一からシミュレーションを行うための、面倒くさい準備に取り掛かった。

彼がいるこの大きな地下室は、ランベルク基地の地下5階にあたり、最近ではもう誰も使用しなくなった大きな倉庫スペースを、ネニファイン部隊がDQシミュレーション用に軍から借用した部屋である。

実際に軍のDQ整備専門施設が使用できるのであれば、もう少しシルの作業を軽減してやれようものなのだが、彼らの駐留基地として指定され、受け入れ体勢を整えていたはずのシムナム基地が、スーノースーシ川対岸に陣取った、帝国軍の攻撃射程距離内にスッポリと収められてしまったために、駐留基地としての役割を放棄せざるを得なかったのだ。

そのため、急遽ランベルク基地に居候する羽目となったネニファイン部隊は、DQを整備するための施設を自分達の手で設営しなければならず、このシミュレーションシステムも、正規のものと比べてかなり性能の劣った、急造品たる紛い物なのである。

勿論、他の駐留基地たるブラックポイント基地や、セロコヤーン基地などには、充実したDQ整備専門施設が存在するのだが、この逼迫した戦況下で、貴重な戦力を後方基地へと撤退させる余裕もなく、更に、ランベルク基地内に存在するDQ整備専用施設に関しても、新設したDQ部隊が3つ共に同じ基地内に駐留するという異常事態に、誰かが貧乏籤を引かねばならなかったのだ。

また、一つの方法として、トゥマルクの製造元であるティーゲル社や、リベーダー2の製造元であるマムナレス社の民間整備工場を借用するという手もあるのだが、帝国軍の軍事目標として民間企業の工場が標的にされることを懸念して、その方法を選択する事もできなかったのだ。

（シルジーク）
「セニフ？」

ようやく長く面倒くさいシミュレーション準備作業を終えたシルが、ふと不思議そうにマイクに向かって話し掛けた。

準備作業に夢中だった彼としては、一体どれほどの時間が経っていたのか解らなかったのだが、それでも彼が設定作業を行っている間、マイクの向こうにいる少女は、終始無言を突き通していたのだ。

（シルジーク）
「どうした？セニフ？」

「・・・あ、うん・・・。ごめん。えっと・・・。ちょっと休憩。」

耳元に付けた小さなイヤホンから流れてくる少女の声には、どこか覇気のようなものが全く感じられない。

同じ事を何度も繰り返す羽目となってしまったレコーディング作業に、少なからず嫌気が差してしまったのだろう事は間違いないが、繰り返しＮＧを連発する彼女の集中力にも問題が無いとは言えなかった。

２３回も連続して同じレコーディングをやり直すなんて、ＤＱＡ時代から思い起こして見ても、初めての事じゃないかな・・・。

完全に独り言で済ますつもりで小さく呟いたシルには、その原因の根本がどこにあるのかが解っていたのだが、それでも彼は「その事」になるべく触れないよう、しばらく静かに見守る事に決め込んでいたのだ。

やがて、シルの目の前の大きな黒い球体から薄白い煙が噴出し始めると、ドア開閉を示す上部ランプが赤々と光を放ち、重たそうな銀色の二重扉がゆっくりと横スライドする。

そして、真っ暗に消灯された狭いシミュレーションボールの中から、身軽い体の少女がポンと外へ放り出た。

外見（そとみ）いつもと変わりない様子の彼女だが、不思議と意味もなく大きな倉庫の中に視線を四散させると、開放的空間のひんやりとした空気を思いっきり吸い込んで吐き出して見せる。

そして、ゆっくりとシミュレーションシステムの管制端末の並べられた場所へと続く階段を昇り切ると、椅子の上に腰掛けたシルの姿を見つめたまま、一旦その場に立ち尽くしてしまった。

（シルジーク）

「どうした？最近腕が鈍ってきたんじゃないか？」

黙り込んだまま立ち尽くすセニフに対して、シルは軽く視線を宛がうと、投げかけた言葉と共に、まだ蓋の開いていない缶コーヒーを

一つ、セニフに向かって下から放り上げた。

（セニフ）
「・・・。・・・あっ。」

ガランゴロン！

ゴロゴロ。

静かな部屋の中に大きな鈍い金属音が一つ木霊し、続いて雷がごねり鳴くような音が静かに響き渡った。

（シルジーク）
「・・・。」

シルの放り投げた缶コーヒーは、ゆったりとした放物線を描き、セニフの目の前へと差し掛かったはずなのだが、完全に彼女の意識は投げられた缶コーヒーを追うでもなく、じっとシルに据え付けられたままだったのだ。

彼女が缶コーヒーの挙動を察し、唐突に掴（つか）み取る動作へと転じたのは、既に缶コーヒーが床に落ちる寸前でのことであった。

（セニフ）
「えへっ・・・。へっへぇー。」

セニフはどこか、へんてこな笑みを浮かべて誤魔化（ごまか）しを入れると、可愛らしい動作を振りかざして転がり落ちた缶コーヒーを拾った。

そして、左耳に取り付けたシミュレーション用のワンサイドゴーグ

ルを外し、ゆっくりとシルの元へと歩み寄った後で、彼の後ろで通路を隔てる鉄柵へと身をもたれかけた。

（シルジーク）

「セニフ。大丈夫か？２０回以上もやり直しさせて悪かったな。後は俺の方で何とか補正かけるから、もう休んでいいぞ。」

どこか様子のおかしいセニフの雰囲気を気遣ったのだろうか。

静かに彼の後ろで缶コーヒーの蓋を開いた彼女に対して、椅子の背もたれに右肘をかけて振り返ったシルが、思いもよらず優しい言葉を投げかけた。

セニフ自身、何度もやり直しをさせられた原因が、自分のやる気の無さから来ているのだということは自覚しており、シルに怒鳴りつけられるとでも思っていたのだろうか。

セニフは少し怪訝（けげん）な表情を浮かべて見せると、手にしたデータを元にせっせと設定作業へと取り掛かったシルの後姿を見つめ、何の言葉を返すでも無く缶コーヒーに口をつけた。

セニフとシル。二人を静かに包み込む薄暗い空間に、カタカタとキーボードを弾く音だけが響き渡る中、セニフがゆっくりと天井を見上げて思いを馳（は）せる。

思い願った私の望みを、シルは優しく受け入れてくれた。

まだ少し、ギクシャクした感じは否（いな）めないものの、それでも普通に言葉を交わす事を、シルは拒否する事無く認めてくれた。

ディップ・メイサ・クロー作戦終了後以来、シルは「あの話題」に一切触れようとはしなくなった。

それは勿論、シルが「あの話題」に対して全く興味を抱かなくなったからではなく、私がそれだけ強く拒絶して見せたから。

お互いに抱き持つ思いの深いところを探り合う事も無く、以前のように楽しく、以前のように仲良く、和気藹々（わきあいあい）と会話する事を望んだのは私。

そんな私の我儘（わがまま）をシルは許してくれたのだ。

そう。私が望んだ通りの関係を、私は手にする事が出来たのだ。

うん・・・。・・・そういう安心感はある。

確かにある。・・・けど。あるんだけど・・・。

お互いの距離が近づいた分、お互いの距離が遠くなったような気がする。

・・・って。何言ってんだろ私・・・。

彼女の見上げた天井は、時代遅れの古びた蛍光灯が、薄暗い倉庫の中を照らし出している他は、何も無い殺風景なただの天井。

勿論、汚い壁へと視線を移したところで何も無い。

セニフはふと、もう一口分缶コーヒーに口をつけると、どこかつまらなそうな表情を醸し出して俯き、足元に転がった配線を足で蹴っ飛ばしたり、引き寄せたりした。

（シルジーク）

「このデータに補正かけて連結すれば、全体の行動バランスを崩さず許容範囲内の遊びは保てるか・・・。」

目の前のディスプレイを食い入るように眺めつつ、シルが発したその言葉は、決してセニフに対して語りかけたものではない事を、彼女は良く解っていた。

その後もぶつぶつとディスプレイに向かって話しかける彼の姿が、完全に自分一人の世界でのみやり取りされている独り言である事を示している。

静まり返る地下室の中に、カタカタと勢い良くキーボードを打ち込む音を奏で出し、ふとその手を止めては、手元に並べられた資料にじっと視線を釘付ける。

そして、テーブルの上へと置かれた缶紅茶を手に取ると、一口だけ飲んだ後で、再びディスプレイへと向けて彼の意識を集中させるのだ。

完全に一人取り残されたセニフは、おとなしく黙ってシルの作業を眺めていた。

画面の光に照らし出されるシルの表情は、真剣その物であり、一つの事に集中し始めると、彼が中々その世界から出てこない事は、今までの経験から解っていた。

そんな時、ふと何を思ったのか、セニフは自分の手に持つ缶コーヒーをテーブルの上へと置き、テーブルの上に置いてあった缶紅茶を手に取った。

勿論それは、他愛も無い些細な悪戯に過ぎなかったのだが、セニフはじっと、彼がその缶コーヒーに手をかける瞬間を心待ちにした。

（シルジーク）

「・・・。・・・ん？・・・・・・・・・んんっ？？」

やがて繰り返される彼の作業工程の中において、「缶紅茶を手にして一口だけ飲む」と言う個所で、ふと手を止めてしまった彼が、一瞬、表情を顰めてしまった。

それは勿論、口に含んだ液体が、普段の甘く香り豊かな紅茶の味ではなく、鼻の先まで突き抜けるような苦々しいコーヒーの味だったからである。

彼は特に苦いものが苦手と言うわけではなかったが、小脇でクスクスと笑うセニフの方をチラリと見やると、少しだけ膨れっ面を浮かび上がらせて、渋々とコーヒーにもう一度口をつけた。

（セニフ）

「あ～あ。飲んじゃった。」

そして、再び何事も無かったかのように作業を開始したシルに対して、小さく溜め息をついたセニフは、シルから奪い取った缶紅茶の飲み口をマジマジと見つめると、一気に中身を飲み干した。

間接キッスという子供染みた彼女の好意に、まったく無関心を装って見せたシルは、確かにいつも通りのシルではあったが、セニフはゆっくりと空になった缶をテーブルの上に置くと、静かな語り口調で言葉を発したのだった。

（セニフ）
「私さぁ・・・。シルの事。好きだったのになぁ。」

それは今までに何回彼に発した言葉であろうか。

しかしこの時、セニフの心の中では安易に放ってきたそれまでの言葉とは、どこか意味合いの違う言葉のようでもあった。

セニフ・ソンロと言う新しく作り上げた自分の分身。

いや、彼女にとっては、それが完全に自分そのものであることを望んだ少女。

その少女の想いを代弁（だいべん）して見せるように、セニフはシルに告白して見せた。

もう一人の自分と言う黒い影を必死に押しつぶして。

（シルジーク）
「・・・。・・・知っていたよ。・・・うん。」

するとシルは、どこか驚いたような表情でセニフの方を振り返り、少し困ったように言葉を詰まらせながら、言葉少なめにそう返事を返した。

そして、二人の見つめ合う視線の先で、お互いの抱く想いを探りつつも、不思議な違和感の漂う瞬間に、お互いを隔てた見えない距離の長さを再認識するのだった。

やがてシルは、何事も無かったかのような素振りで、ディスプレイの方へと向き直ると、再び忙しそうに設定作業へと没頭し始めるのだ。

訳の解らん事を抜かすなアホ！！

誰と誰が愛し合う仲だって！？

などと罵(ののし)られる事に比べれば、無為に否定的な回答を投げつけられなかっただけ、マシな答えであると評価できるかもしれない。

しかしそれは、不思議なほど優しげな態度でセニフに接するようになった、シルの態度の変化の表れでもあり、言葉に窮(きゅう)してしまった彼の思いを察するに、もはや彼の中で、今目の前に佇(たたず)むセニフと言う一人の少女が、過去のセニフという一人の少女では無くなってしまったと言うことなのだろう。

セニフは再び天井を見上げると、込み上げる涙を必死に押さえ付けるように笑みを浮かべて見せた。

シルの短い言葉の中に、私の事が好きだという気持ちが含まれているのかどうか。

それは解らない。でも・・・。解らないなりにも解った事がある。

それは、もはやシルの心の中には、無邪気に笑って騒ぎ立てる明るかった頃の、セニフ・ソンロの姿はもう居ないと言うこと。

今シルの中に居る私は、もはやあの大きな黒い影を背負った私でしかない。

シルが優しく私に接するようになったのは、きっと私の事を好きになったんじゃなくて、そんな私の事を同情してくれているからなんだよね。

シルってさ。態度は冷たかったりするけど、やっぱり優しい人だしさ。

本当に・・・。本当に私・・・。シルの事が大好きだったんだよ・・・。本当だよ。

でも・・・。でもね。本当に自分の心に嘘を付かずにその言葉を言えたのは、あの頃の私だからなんだ。

皇女でもなんでもない、単なる一人の少女だったから言えたんだよ。

過去形に置き換えて言い放つにしたって、必死に言葉を振り絞りでもしなければ、もう好きだって言う事が出来なくなっちゃった・・・。

今の私は、シルの必死の想いに何一つ答えようとせず、ただ自分の安楽な居場所だけを求めて彷徨(さまよ)う浮浪者みたいな我儘(わがまま)な女なんだ。

今思えば、確かにアリミアの言う通り。

私はシルの事を好きだって言う一人の少女を演じていただけなのかもしれない。

シルの迷惑も考えず、シルの事を少しも知ろうともせず、ただ、セニフ・ソンロという作り上げた一人の少女をシルに宛がって、強引に自分の居場所を作り上げる事に、必死だっただけなのかも知れない。

もしシルに嫌いだなんて言われたら、私の居場所が無くなっちゃうかもって、思ってたし・・・。

自分の居場所を作り出そうと望んで、シルを好きだって言う言葉に縋(すが)っていたかっただけなのかもしれない・・・。

やっぱり、そうなのかな・・・。そうなんだろうね・・・。結局、私って・・・。自分勝手だしね・・・。

元々お互いの距離って、遠いままだったのかな。

そしてその遠さに気付きもしないで、ただシルの身体に抱きついていただけなんだ・・・。

私にはもう、シルの事を好きって言う資格無いんだよね。

そして、シルに好きって言って貰う資格も無いんだよね。

セニフはもはや、込み上げる涙を堪える事が出来なくなり、自分の着る服の袖で顔を覆って、一生懸命に涙を拭いた。

ディスプレイの前で設定作業に没頭する、優しきシルに気付かれないようにして。

やがて、何度も大きく深呼吸を繰り返して必死に気持ちを落ち着かせると、セニフは唇を噛み締めて何かを決意したような表情でシルの後姿を見据える。

そして、自分がシル用に置いたはずの缶コーヒーを取り上げると、一気に全部飲み干してしまった。

（シルジーク）
「おいおい。俺の分まで飲むなよセニフ。」

（セニフ）
「いいじゃないさ。また買ってきてあげるからさ。」

屈託（くったく）の無い笑顔を振り撒いて、未だ涙の残る目元を誤魔化（ごまか）す様に、セニフは明るさを強調した言葉でシルに返事を返した。

そして、マジマジとシルの顔色を窺（うかが）った後で、ふざけ調子満々の意気を込めた表情をぶつけてやるのだ。

（セニフ）
「買ってきてあげるから、私の質問に答えてよシル。」

突然に態度が切り替わったセニフに対して、シルは一瞬、怪訝（けげん）な表情でその振る舞いを見つめていたのだが、どこか懐かしい彼女の明

るさに、不思議と心の中が軽くなっていくような感じたした。
しかし、そんなシルの思いを他所に、問いかけたセニフの言葉はこうだ。

（セニフ）
「シルはさぁ。好きな人とかいるの？」

（シルジーク）
「はぁっ？？」

今までセニフから聞かれたことも無いような突拍子も無い質問に、シルは驚いた表情を隠しきれなかったが、悲しくも正直な彼の視線は、大きな倉庫の部屋中を駆け巡ってしまった。

それが虚を突かれたために起きた現象なのか、それとも本当に心の中に想う人が居たからなのかは解らないが、その瞬間を待っていましたとばかりに、意地悪な笑みを浮かべて見せた彼女は、罪も無き被告人の追及を開始するのだった。

（セニフ）
「あ～～。いるんだぁ～～。シル～～。へぇ～～。」

（シルジーク）
「な！違う違う！違うって！」

（セニフ）
「そんなに恥ずかしがる事無いじゃんさ。ねぇねぇシル。その人どんな人なの？綺麗な人なの？」

（シルジーク）
「う・・・。関係ないだろそんなこと！疲れてないならもう一回シミュレーションするぞ！ほら！シミュレーションボールに入れ！」

何故か顔を赤らめてしまったシルの表情を覗き込み、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべるセニフに対し、その視線の先のこそばゆさに耐え切れなくなったシルは、途中最中で放り出すことになってしまっていた自分の仕事へと、強引に逃避を開始した。

（セニフ）
「だ～か～ら、どうなのさ。いいじゃん。少しぐらい教えてくれたって。教えてくれたら私も言う事聞くからさ。ほら答えなさいシルっ。」

（シルジーク）
「お前は子供か！アホなこと聞くなっつぅの！」

（セニフ）
「子供だよぉん。だからお姉さんに話してみなさいってば。」

相手の嫌がる箇所をチクチクと刺して、その反応を楽しむかのように振舞う彼女の態度は、まさに普段通りのセニフ・ソンロそのものであったが、セニフにはもう、かつての自分が取り戻せないものである事を悟った。

シルを好きと言えなくなった自分でもいい。

そして、シルに好きって言って貰えない自分でもいい。

私は、シルと一緒に居たい。

これからもずっと、出来る限り一緒に楽しく過ごしたい。

そう心の奥底から願う彼女は、一生懸命、彼に笑顔を振り撒くのだった。

０５－０３：〇新たなる決意

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「新たなる決意」

すっきりと晴れ渡った久々の青空を喜ぶかのように、一斉に枝葉を広げて生い茂る深緑の木々達が、のんびりとした昼下がりのそよ風に乗って、歓喜に沸き立つ舞を踊っている。

雨季の季節には珍しく、ここ数日安定した大気に包まれていたランベルク地方では、もはや初夏を思わせるような強い日差しが、朝から降り注いでいた。

雲一つ無い青々とした空の中には、アルテナス山の綺麗な稜線（りょうせん）が描き出され、眩いほどの色のコントラストを体現するその世界は、まるで自然界を切り取って描写した絵画のようでもあった。

（アリミア）
「・・・と、いいますと？」

分厚いガラス越しに隔てられた綺麗な世界を見つめたまま、アリミアがすっ呆けた様子で、そう切り返した。

彼女は今、ランベルク基地の地上施設で一番高い建物の最上階に居た。

目の前に広がる穏やかで色鮮やかな風景とは打って変わり、ガランとしてだだっ広い殺風景なその部屋は、人工的に作られた観葉植物と、使い古されたキャビネットが数機、壁際に設置されているだけ

の会議室のような部屋であり、中央には木製の古びた大きな机が一つ、ポツンと置かれていた。

そして、机の上に山積みにされた書類の束の向こう側で、座り心地のよさそうな椅子に腰掛けて、なにやら愛用のマグカップを磨く一人の男が居た。

（ヘイトーゼ）

「先日、ある外部の情報筋からそう言うタレコミがあったんだよ。・・・君のね。」

この男の名前は「ヘイトーゼ・マクバラン」。

年齢を重ねる毎に薄くなった頭髪と、大きく出張った頬（ほほ）が特徴的な男で、顔中に広がる細かい皺（しわ）も相俟（あいま）って、見るからに「猿」をイメージさせる小柄な男である。

もう直ぐ５０歳を迎えんとする、この老体のゆったりとした語り口調からは、もはや第一線を退いて隠居生活を送る身であるかのようにも見えてしまうが、彼は今でも尚、トゥアム共和国軍の諜報部を取り仕切る「特佐官」だ。

トゥアム共和国陸軍の「佐官位」には、下級から「三佐」「二佐」「一佐」と、３階級存在するわけだが、この「特佐位」に関しては、何らかの特別任務を負う一佐官が任免される事が多い。

勿論、軍最高位である「将官位」に比べれば、格下である事は間違いないのだが、それでも時に、この将官位の者でさえ立ち入る事の出来ない、特別な権限を有する者も居るのだ。

それがこの「ヘイトーゼ・マクバラン」と言う男だ。

（アリミア）

「諜報部として、外部のタレコミを信用なさるのですか？」

高度に情報化された世界において、トゥアム共和国軍としてだけではなく、共和国全体の生命線ともいうべき重要な部署を取り仕切る男を前に、アリミアは全く臆する事無く、寧ろ（むし）ほのかに怒気を交えた声色で問い返した。

それは、タレコミという低俗な情報に対して、自身の身の潔白を強調してみせるような「演技」であったのだが、彼女としてもそれほど効果を期待した訳ではない。

見るからに出来の悪い無能者の象徴として、大きな執務室内で踏ん反り返るだけの権力者を装いつつも、時折この男の放つ眼光が、アリミアの心の中に異様な圧力を強いるのだ。

（ヘイトーゼ）

「我々の成すべき事は、不測の事態を未然に防止する為に、ありとあらゆる情報に精通する事にあるのだが、入手した数多くの情報の中には、確かに真実を覆い隠す虚偽を含んだものもある。しかし君は、我々がそんなに怠慢（たいまん）な組織にでも見えるのかね。」

彼は一瞬、マグカップを磨くその手を一瞬止めると、澄ました表情で微動だにしない彼女の方へと視線を向け、不意に皺（しわ）の溝をさらに深めるように笑みを浮かべて見せた。

（ヘイトーゼ）

「勿論、我々としてもたかが外部のタレコミを信用して、事を荒立

てるほど暇な職種ではないが、それでも無数にある無益な情報を元に、有益たる情報の片鱗を見出して、今後進むべき道筋の新たなる指標を形作らねばならない立場でもある。どんなに些細な情報であっても、無為に捨て置く事はしないのだよ。もっとも、そう言った些細な情報ほどに、慎重に分析を重ねて見れば、存外大きなものへと変貌する傾向にあるようだがな。」

（アリミア）
「お話の意図が理解できません。」

ヘイトーゼのその言葉に、アリミアは大きく溜め息を付いてみせると、目の前のガラス越しに見える深緑の世界に視線を逃がしながらそう答えた。

アリミア自身、事の原因に心当たりが無い訳ではなかった為、あからさまに白(しら)を切る様な素振りを見せなかったのだが、余りに遠まわしに責め回る彼の言動に、少々苛立った様子を浮かび上がらせた。

するとヘイトーゼは、拭き終わったマグカップを机の上に置き放つと、机の上に両肘を付いて、じっとアリミアの表情を窺(うかが)いながら、話題の中心へと迫り始めた。

（ヘートーゼ）
「トゥアム共和国陸軍に新たなる機動歩兵部隊を設立するに当たり、各地で転戦するＤＱＡ参加者達を召集するという話を聞いてから、諜報部では君等の動きをずっと監視していたのだよ。君等の中に帝国や近隣諸国のスパイが居ない保証は、どこにも無いのだからね。勿論、君のような優秀な人間が居るとまでは予想していなかったが、ずいぶんと好き勝手にやってくれたものだ。共和国軍の情報セキュリティシステムにも、多少の問題はあったようだが、それもでも君

が不正に入手した機密事項は１０や２０では無いはずだ。」

ヘイトーゼの言葉に反応を見せるでもなく、じっと外の景色に見入ったままのアリミアは、確かに過去２週間に渡って彼の示す不正行為を繰り返してきた。

それは勿論、彼女の求める有益な情報を見つけ出したいが為の行為であり、決して下手を打ったつもりは無いが、諜報部の監視網さえかい潜る自身はあったのだ。

トゥアム共和国軍の採用する最新型情報セキュリティシステムは、完全に外部からの不正進入をブロックする強固な防壁を有しているのだが、それはあくまで外部に対してだけの事であり、構築から１０年という長い時を経て、もはや時代遅れとなった内部システム側から見れば、実は幾つもの小さな穴が存在している。

共和国軍内のシステム管理者や高官達を装い、この小さな穴を使用する事で、外部周辺システムへの不正アクセスが可能となる事は、既にアリミアも気がついていた事だった。

しかし、如何に身分を完全に偽る事が出来ていたのだとしても、不可解なアクセスを頻繁に繰り返したのでは、外部周辺システム自体の防衛機能に簡単に検知されてしまう事になる。

そのためアリミアは、共和国軍と外部周辺システムとの間に、細かに情報を分割してダウンロード出来る違法システムを潜ませると、他者のアクセス情報の一部に混入させて、機密情報を抜き取っていたのだ。

（ヘイトーゼ）

「もっとも、我々も外部情報提供者からの告発が無ければ、君の行動を具(つぶさ)に監視する事は出来なかった。そう言った意味では、君の手際は素晴らしく優秀なものだったと言える。勿論、決して褒めて言っている訳ではないのだが、もし君が近隣諸国のスパイとして何らかの任務を負い、機密情報を入手する事以外に目的を定めていたのならば、いとも簡単にそれを実行する事が出来ていたはずだ。しかし、あえてそれを実行に移さなかった点に、何か理由はあるのかね。」

（アリミア）

「答える事は出来ません。」

今までにもっとも怒気を強めた口調でアリミアが返答を返す。

そう、彼女が始めたこの危険な行為は、言わずもがな、ユァンラオという人物の正体を暴くために行った情報収集活動であり、トゥアム共和国を瓦解させるための破壊工作を行うためではない。

その点を知ってか知らずか、アリミアに対するヘイトーゼの態度も、決して犯罪者たる人物を扱うような粗悪ぶりは見えなかったのだが、それでも鋭い視線でアリミアの身体を縛り付ける、この男の真意とはどこにあるのだろうか。

（ヘイトーゼ）

「まあ、不正行為は不正行為として、事を公にして君を処断することは簡単だが、優秀な工作員を育て上げるというのは、そうそう容易な事ではなくてな。それは君も『良く解っている事』だろう？私としても、君のような優秀な人材を、みすみす手放すのは非常に惜しい事だと思っているのだよ。」

この時、ヘイトーゼが放った何気ない言葉は、それまでと全く同じトーンで繰り出されたものだったのだが、突然、表情を強張らせてこの猿親父を見やったアリミアが、殺気すら漲る迫力を交えて、鋭い視線を突き刺した。

彼の言動は非常に回りくどく、未だ彼の本心を照らし出すに足る説明がなされたわけではないのだが、ここで彼女に一つの切り札を提示して見せたのだった。

そして、そんなアリミアの表情をマジマジと見つめていたヘイトーゼは、引き出しの中から数枚に重ねられた紙の束を取り出すと、無造作に机の上に放り投げた。

それは勿論、アリミアがその事実を否定し続けた場合に、突きつけるつもりだった資料なのだろうが、あからさまに態度を硬化させたアリミアの反応を見れば、もはや無用な資料に成り下がってしまった事は言うまでも無い。

（アリミア）
「その情報提供者と言うのは？」

と、アリミアがここで、話題を逸らす様な質問を投げかけたのは、何も突きつけられた事実から逃げ失せようなどと思案したためではなく、その情報源を突き止めようとしたものだ。

勿論、トゥアム共和国の諜報機関が、それだけの情報収集能力を有している可能性もあったのだが、アリミアはどうしても、心の中に生まれた一つの疑念を確認する必要が有ったのだ。

自分がしでかした不正行為は、確かに検知しようと罠を張れば発見

出来なくも無い。

しかし、極微小で検知しにくい分割データを、複数のルートを使用して、他人のアクセスによって持ち出すという手法が、外部の手の者によって簡単に暴かれるはずは無いのだ。

とすれば、アリミアの行動を事前に察知し、内部システム内に予め罠を張っていた者が存在する可能性は非常に高く、彼女自身、そんな事をしでかす人物に心当たりが無いわけではなかった。

（ヘイトーゼ）

「やはり気になるかね。君ももう気付いているのだろうが、君は以前からその人物にマークされていた節がある。そうでなければ今君がここに居る事の説明が付かないからな。もっとも、現時点の私にはこれ以上の事は言えんのだが・・・。」

（アリミア）

「それで、私に何をしろと?」

すると突然、再び長ったらしい会話を繰り広げようとしたヘイトーゼの言葉をかき消す様に、アリミアが彼の本心へと狙いを定めた鋭い一言を放った。

弱みを握った相手に対して、単刀直入に要求を示すでもなく、のらりくらりと相手の心に揺さぶりをかけるのが彼の趣味なのだとしても、アリミアはこれ以上、彼の遊び道具に甘んじているつもりは更々無かった。

（ヘイトーゼ）

「ぬっふっふ。君のような賢い人物には是非とも、私の元で働いて

貰いたいと思ってね。」

ヘイトーゼは一瞬、アリミアの言葉に驚きの表情を見せはしたものの、終始落ち着いた様子で、机の上に置かれている呼び出しベルのスイッチを押した。

そして、大きく一つ息を吐き出して背もたれに圧し掛かり、両手を腹の上に組んだまま、椅子を少しだけ傾けると、全く一言も発する事無く天井を仰いで目を瞑った。

アリミアはその間、じっとこの猿親父の姿を見据えて険しい表情を崩さなかったのだが、ふと視線を外して考え込んだその先に、かすかに光る新たな指標を見出したのだ。

やがて、彼が呼び出しベルを押してから３０秒ほど経った頃だろうか。隣の部屋とを繋ぐ扉が開かれると、サングラスをかけたままの体躯の良い男が一人、二人の前に姿を現した。

そして、ヘイトーゼに対して礼儀正しく敬礼を施した彼は、ゆっくりとアリミアの直ぐ脇まで歩み寄ると、サングラス越しにアリミアの姿を見据えながら右手を差し出した。

（ヘイトーゼ）
「紹介しよう。彼は私の優秀な部下の一人。ギャロップ・リッスモンだ。」

（ギャロップ）
「よろしく。」

彼の物腰は柔らかく、非常に友好的な態度を指し示す優しげな口調

で語りかけたのだが、アリミアは一瞬、心の中で沸き起こった非常に強い警戒心を前に、直ぐには彼の右手を握り返す事が出来なかった。

それは、全く少しの隙も窺わせない彼の立ち姿に、異様な雰囲気を感じてしまったからでもあったが、今後、自分に課せられるであろうヘイトーゼの要求とは、如何なる物なのかを、瞬時に感じてしまったからでもあった。

（アリミア）
「私に工作員たるセンスがあるとお思いなのですか？」

（ヘイトーゼ）
「ぬっふっふ。ほんの少しの会話の中にも、君のセンスを垣間見る事はできる。勿論、実能力の程度を測り知ることは出来ないのだが、君が本当にあのファルクラムの生き残りだというのなら、何の問題も無いと思っているがね。」

不敵な薄ら笑いを浮かべながらそう説明したヘイトーゼは、再び机の引き出しの中から1枚の紙切れを取り出すと、視線に促されて歩み寄るギャロップへと手渡した。

（ヘイトーゼ）
「我々の利害は一致していると思うのだがどうかね。最終的には君の意思を尊重したい所だが、何分我々も人手不足に悩んでおってな。君が自ら進んで協力してくれる事を望んでおるよ。」

よくもまあ抜け抜けとそんな言い回しが出来たものだ。

結局のところ、欲しい情報はできる限り開示してやるから、自分の

手足となって働けという事なのだろう。

アリミアふと、目の前に映し出された綺麗な風景へと視線を向けると、ゆっくりと息を吸い込んで答えを発した。

（アリミア）

「私から条件を一つだけ提示します。私の素性については、他の誰にも口外しないでください。」

この時、彼女は決意したのだ。

この猿親父の要求を受け入れ、かつてファルクラムの工作員として、非情なまで暴挙を振るった自分自身を蘇らせる事を。

そして、様々な情報を有する彼等を逆に利用し、あのユァンラオを失脚させるための情報を掴むために。

考えてみればネニファイン部隊に所属し、誰の手も借りる事が出来ない状況下で、奴の素性により近づけるかといえばそうではない。

ありとあらゆる情報に精通した諜報機関に所属する身ともなれば、それだけ得られる情報の量も、信頼性も向上するという事であり、彼女にとってみれば、決して悪い話ではないのだ。

（ギャロップ）

「我々諜報部員のうち、特殊工作任務を背負う工作員のほとんどは、君みたいな訳ありの人間だ。あまり問題は無いさ。」

そう言って新たなる仲間に気さくに話しかけたギャロップが、サングラスを取り除いて素顔を曝け出してみせると、再びアリミアの前

に右手を差し出した。

そういう彼もまた、重たく暗い過去を背負う一人なのであろう。

アリミアは軽い笑みを投げかけるギャロップの表情を窺(うかが)いつつも、

今度は彼の右手を握り返してやった。

０５－０４：〇闇に潜む黒い影［１］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「闇に潜む黒い影」

ネニファイン部隊に与えられたＤＯ動作シミュレーション用施設は、ランベルク地下基地内でも最果てとされる、地下５階大倉庫のさらに奥深くに位置している。

幾ら軍中枢機能が集中する区画付近に、シミュレーションシステムを構築できるほどの、空きスペースが無かったからとは言え、中央区画から物理的距離にして３ｋｍｉｌｓも離れた辺鄙な区画を宛がわれた辺り、何らかの阻害的感情が働いたのではないかと、部隊内では数多くの不満の声が上がっていた。

しかし軍上層部としても、単なる嫌がらせを行使したいが為に、このような区画を提供したわけではなく、紛いなりにも貴重な戦力であるネニファイン部隊を、スペースが無いからなどと言う間抜けな理由で遊ばせておく事が出来るはずも無い。

それは云わば、トゥアム共和国内でも重要な役割を果たしていた、リトバリエジ基地を失陥してしまった事による影響が大きく、最前線基地として多くの兵力を集中しなければならなくなったランベルク基地内での、苦しいやり繰りの結果なのだ。

勿論、僻地とは言え、このシミュレーションルームのある第四区画と中央区画の間には、大きな地下連絡路が横たわっており、更に旧式ではあるが、地下５階までは大型エレベータの使用も可能である。

そのため、この長い区間を移動する際に、電気自動車を使用する事が出来るため、当初はそれほど移動にかかる時間的懸念は無いものと思われていた。

（セニフ）

「・・・。えーっと。こっち・・・だよね。」

しかし、この第四区画に限って言えば、他の迂回路をまったく整備して居なかったため、一度主たる連絡路が使用できなくなると、全く有効な移動手段が失われてしまうという点が、以前から問題として指摘されていた。

そして、手渡された地図情報を元に、通路脇に印字されている通路番号と照合しながら、薄暗い地下通路を彷徨(さまよ)い歩くセニフもまた、まさかこの両区間を徒歩で移動しようなどとは、思っても見なかっただろう。

右手に大量の資料の束を抱え、キョロキョロと周囲を見渡していた彼女は、ようやく次なる通路番号を見つける事が出来たのだが、それが安易に作られた地図上には、全く印(しる)されていない番号である事を悟ると、思いっきりその壁を蹴飛ばすのである。

そう、今まさに、彼女は道に迷っていたのだ。

と言うのも、つい数時間前まで何の問題も無く稼動していた大型エレベーターが、突如何らかのトラブルを抱えて緊急停止してしまったのだ。

勿論、すぐさま中央区画の管理センターへと連絡を取り付け、早めの復旧を依頼しては見たものの、なにやら対応する作業員が居ないとか何とかで、その日中の対応を断られてしまったのだ。

後日になって解った事だが、不運にもその日、基地内で故障したエレベーターは２０機以上もあったようで、その後の管理センター側の調査報告によると、統合安全管理システムの一部にトラブルが発生した事が原因という事だった。

第四区画などと言う使用率の低い場所よりも、もっと優先して対応すべき重要施設があるのだという言い分は、聞けば最もな話ではあるが、一通りのシミュレーション作業を終えて、中央区画に戻ろうとしていたセニフは、突然、手渡された一枚の地図と共に、薄暗く寂しい地下通路を一人歩く羽目となってしまったのだ。

こんな事なら、シルに一緒に付いてきて貰えば良かったな・・・。

などと小さく呟いてしまうセニフだが、自分の怠惰（たいだ）な成績の後始末に追われる忙しい身の彼に、そんな我儘（わがまま）なお願いを言い出すなど出来るはずも無い。

そして、いつの間にやら見渡せど見渡せど果てしなく続く、鏡面世界のような地下倉庫群を前に、次第に苛立（いらだ）ちを募らせるのだ。

彼女は決して、手渡された地図の経路に反して歩み進んできたわけではない。

寧（むし）ろ、地図に示された経路を「疑う事無く」辿ってきたはずであっ

た。

しかし、長きに渡り幾度も改修を繰り返されたであろう倉庫群の形状も然(さ)ることながら、軍事機密に指定された保管庫が数多く存在するこの区画を詳細に書き記した地図情報など、セニフ達一般兵士に提供する事は出来ないのだ。

（セニフ）
「あーーーーーっ！！もう！！」

そして、密閉された地下通路内に甲高い声色を響き渡らせたセニフは、もはや従うだけ無駄とも言える鎮撫(ちんぶ)な地図を思いっきり投げ捨てる。

すると、その反動を皮切りに、彼女が右手に抱えたバインダーの隙間から、ドサドサと大量の資料が雪崩落ちた。

（セニフ）
「やばっ・・・！！」

咄嗟(とっさ)に崩れ落ち行く資料の波を食い止めようと、必死に左手を翳(かざ)して見せたセニフだったが、瞬間的に訪れた悲劇に対して素早く反応を見せたはずなのに、かえって被害を拡大してしまう事は良くあることだ。

彼女は翳(かざ)した左手でバインダーを弾き飛ばしてしまうと、薄暗い通路の中へと派手に全てをぶちまけてしまった。

こんな事だから、いつまで経っても落ち着きのない子とか、不器用な子とか言われるんだよね・・・。

余りにも情けない対応をしてしまった自分の行動を後悔しながら、セニフは目の前に広がる惨劇にガックリと肩を落として溜め息を付いてしまった。

彼女のぶちまけた資料の多くは、先ほどまで実施していた、シミュレーション結果を記録したものがほとんどであったのだが、中にはDQを稼動させるための個人駆動キーやオートモーションデータを保存した、重要な磁気記録カードも含まれている。

勿論、そう言った重要な記録媒体については、頑丈なケースの中に仕舞い込んでいる為、彼女もさほど慌てる様子を見せなかったのだが、それでも宛がった視線の先に、無様に口を空けたケースの姿を見つけてしまうと、その表情を一変させてしまった。

（セニフ）
「うあぁっ・・・。一枚でも失くしたら、やばいよこれ・・・。」

科学技術の発達と共に超薄型にまで進化した磁気記録媒体は、当然、技術者達の汗と涙の結晶なのだろうが、こういう事態を考慮して、もう少し便利に作り上げる事は出来なかったのだろうかと、セニフは自分の失敗を棚上げしながらにして思うのである。

しかし、彼女が幾ら文句を呟いて見せたところで、それに答える救いの手が差し伸べられるはずもなく、セニフは即座に地面に這い蹲（つくば）ると、薄暗く良く見えない床の上をほとんど手探り状態で、個人駆動キーから優先的に探し始めた。

（作業員）
「大丈夫ですか？」

すると突然、可愛らしいお尻を突き出したまま、馬なりの格好で地面に這い蹲る少女の背後から、見知らぬ男の声が聞こえてきた。

セニフもまさかこんな人気のない地下通路の中に、自分以外の人が居るなどとは思わなかったのだろう。

少し驚いた表情で振り返ると、彼女の背後に一人の男性が立っていた。

その綺麗な声色から２０代前半程であろうと推測されるその男性は、くすんだグリーンの作業服を身に纏っており、深く被った帽子の影響で、その表情を詳しく窺い知る事は出来なかったのだが、どうやらこの倉庫区画の管理者のようであった。

（作業員）
「これはまた派手にやっちゃいましたね。これ。あっちの方まで飛んで行ってましたよ。」

（セニフ）
「えっ・・・？・・・あっ！」

作業員の男は優しげな口調でそう言うと、ゆっくりとセニフの前にしゃがみ込んで右手を差し出した。

セニフは何処か、突然降って沸いたように姿を現したこの男性を、不思議そうな表情で見つめていたのだが、彼の右手に握られた一枚のカードが、彼女の探している一番重要な個人駆動キーカードである事に気がつくと、思わず大きな声を張り上げてしまった。

（セニフ）
「あったぁ！よかった。ありがとぉ。」

セニフはすぐさまその磁気記録カードを受け取り、安堵した感情を思いっきり吐き出すかのように大きな溜め息を付いて見せた。

それは、如何にマスターキーデータでは無いのだとしても、情報守秘義務の観点から言えば、決して紛失することが許されない代物なのだ。

（作業員）
「ここにも2枚カードが落ちてますね。全部で3枚ですか？」

（セニフ）
「うん3枚。3枚です。」

（作業員）
「そうですか。それは良かった。この辺の資料は私が拾っておきますから、君はそっちをお願いします。」

（セニフ）
「ありがとう。」

男はセニフに向かってニッコリと優しく微笑みかけると、足元へと散乱した資料を一枚一枚丁寧に拾い始める。

そしてセニフもまた、この彼の好意に対して可愛らしい笑顔で答えて見せると、彼に背を向けて手前の資料から拾い上げ始めたのだ。

不気味な静けさの漂う薄暗い通路の中にあって、彼女の目の前には、

頼りない蛍光灯の光さえも届かない闇の世界が広がっていたのだが、それでも完全に道に迷い、たった一人で彷徨(さまよ)い歩いていた時の不安感に比べれば、たとえ見知らぬ相手とは言え、彼女にとっては心強い助け舟だったのだ。

（セニフ）
「えーっと。・・・あっちにもか。」

とりあえず、一通り目の前の資料を拾い集めたセニフは、ふと、通路奥の暗がりの方まで飛ばされてしまった一枚の資料を見つけると、ゆっくりとその闇の世界へと視線を移した。

そして、心の中に生じた微かな安堵感から、何の疑いを抱く事も無かった彼女は、黒い靄(もや)の中へと平然と歩を進めていく。

この時、もはや完全に視界の全てを、黒と言う同一色で塗り固められてしまった彼女には、その背後から徐々に近づきつつある、大きな黒い影の存在に気づく事は無かった。

彼女が進めば、それだけ小さく萎(しぼ)んでしまうに違いない黒い影だが、何故か彼女の背中にべっとりと纏(まと)わり付いたまま離れようとしない。

そして、まるで物理的干渉を一切受け付けない霊子のように、物音一つ立てる事無く、黒い影が静かに彼女の背中を侵食し始めた時だった。

０５－０５：〇闇に潜む黒い影［２］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「闇に潜む黒い影」

（フロル）
「セニフか？何やってるんだそんなところで。」

すると突然、薄暗く淀んだ空気に包まれた狭い地下通路内に、何やらセニフを呼び止める声が響き渡った。

それは、細く黄色い声と言うよりは、しゃがれた深みのある特徴的な声色で、セニフにとっても、聞き覚えのある女性の声であった。

ふと、セニフが後ろを振り返ると、勿論そこには彼女がイメージした通りの、背の高い人物が立っており、そしてその傍らには、セニフよりも背の低い少女が佇（たたず）んでいた。

背の高い女性の名は「フロル・クローチェ」と言い、セニフと同じくネニファイン部隊のＤＱパイロットである。

浅黒い肌に、少し厚めの唇が特徴的な彼女は、ジャネットに負けず劣らずの長身で、人当たりが良く温和な性格をしており、ネニファイン部隊研修時からセニフに良く話しかけてきた人物だ。

そしてもう一人の小柄な女性の方は、セニフより3歳も年下でありながら、ネニファイン部隊のパイロットとして登録されている、「ルーサ・シャル・コニャック」と言う少女である。

長い赤毛を旋毛付近で結え上げ、典型的ポニーテールを携えた彼女の風貌はとても可愛らしいものだ。

しかし、全く誰とも会話をしないとまで噂される彼女の表情は、まるで能面のように微動だにしない異様な雰囲気を醸し出していた。

セニフはじっと、そんな親子ほどのギャップを体現する二人の女性に対し、不思議そうな視線を交互に宛がっていたのだが、ようやく己の身の周囲に起きた事態に気がつくと、間抜けにも思いっきり慌てた様子で大きな声を張り上げてしまった。

（セニフ）
「あっれーーーーーーーー！？」

そして、すぐさま忙しく周囲を見渡す素振りを見せたセニフは、足元に積み上げられた資料の束と、手に持つ3枚のカードを確認した後で、再びフロルの表情を仕切りに窺って見る。

しかし勿論、そこに居るのはフロルとルーサの女性二人だけであり、セニフが先ほどまで一緒に居た男の姿は、何処にも見当たらなかったのである。

（フロル）
「どうしたんだ？セニフ。私の顔に何かついてるのか？」

少し怪訝そうな表情を浮かべて問いかけたフロルは、ゆっくりとその場にしゃがみ込むと、足元に綺麗に重ねられた資料を手に取り、挙動不審な行動を見せるセニフに差し出した。

（セニフ）

「いや・・・。あのさ・・・。ここに男の人いたよね。なんか作業員の服着てさ。帽子被ってて。若そうな男の人。」

（フロル）
「ん?今まで誰かと一緒だったのかい?セニフの他に誰も見なかったけどな。一人で奥の方に歩いていこうとしてたから、何処に行くんだろうって声かけたんだ。」

（セニフ）
「えっ・・・?・・・ええっ?・・・。ここでさ。資料落としちゃって。それでその男の人に拾って貰ってたんだけど、突然いなくなっちゃって・・・。えっと・・・・・・。」

この地下倉庫区画は複雑で入り組んだ構造をしているものの、セニフ達3人の女性達が佇(たたず)む通りは一本道である。

無機質な灰色で塗り固められた壁の続く通路左右には、部屋への出入り口のようなものも見当たらず、幾らセニフが暗がりの方を向いていたのだとしても、背後から人が素通りすれば、すぐさま気付くほどの道幅しかない。

勿論、その男がフロルとルーサの歩いてきた方角に歩み向かったのだとすれば、必ず二人と出くわすはずであり、口を半開き状態にして驚きを表現するセニフの意識の中で、一人の男が忽然(こつぜん)と姿を消してしまったのだ。

ええっ??だって、落とした個人駆動キー、手渡して貰ったよね。

拾って貰った資料だって、まとめて置いてあったし・・・。

消えた??・・・消えたって・・・。

（フロル）
「あっはっはっはっは。なんだセニフ。回廊の幽霊にでも出会ったのか？」

（セニフ）
「ち・・・！違うよっ！そんなんじゃないって！」

そう言って、豪快な笑い声を響かせたフロルの非現実的表現を、セニフが必死に否定する。

しかし、そういう表現さえも否定できないほどの不思議な出来事を前に、何処か意思とは反した疑念が、彼女の背筋をゾクゾクと襲うのである。

セニフは決して幽霊亡霊の類を信じるような空想論者ではなかったのだが、時としてそう言った風説に対する異常な恐怖心が、沸き起こったりするものだ。

そして、何やら納得のいかない様子で、しばらくの間ブツブツと独り言を呟いていたセニフは、再び通路奥の暗がりの方へと視線を向けた。

照らし出す光の全てを吸い込んでしまうかのように、綺麗なグラデーションを奏で、真っ黒な闇のうねりを演出する視線の先には、やはり何一つ映し出されるものは無い。

ただ、瞳の奥底にこびり付いた残り火だけが、異様にも自分の意識

に先導されるように形を変え、綺麗な虹の波紋を浮き上がらせているだけだった。

ふとそんな時、セニフとフロルのやり取りに参加する素振りも見せず、じっと黙って立ち尽くしていたルーサが、徐に通路の奥の方へと歩き出した。

そして、セニフに回収される事無く放置された1枚の資料を拾い上げると、ゆっくりとセニフの元まで歩み戻り、左手でその紙を差し出す。

（セニフ）
「え・・・。あ・・・。ありがと。」

このルーサの一連の動きの中に、特に何か違和感を感じるようなものがあったわけではない。

しかし、全く一言も言葉を発する事も無く、表情一つ変える事も無く、差し出した左手をそのままにして、じっとセニフを見据えたルーサの視線に、セニフは何か、説明する事が出来ないほどの不思議な感覚に襲われてしまった。

薄暗い闇夜の中に浮かび上がる少女は、至って普通の平凡な女の子。

薄いTシャツの上からダブダブのパーカーを羽織り、短めの短パンにカラフルなハイソックスとスニーカーを履くその姿は、寧ろこのような殺伐とした軍用施設ではなく、煌びやかに彩られた繁華街にこそ相応しいお洒落な格好である。

誰しもこんな幼い少女が軍用施設の中をうろついていたのなら、驚きを持って好奇の視線を送らずにはいられないのだろうが、この時、セニフの意識を捕らえて離さないルーサの姿は、そんな表層上から表れ出る雰囲気では無かった。

いや、確かに身体的大小を除けば、決して他人であるとは言い切れない程、二人の見た目には共通点が数多く見受けられる。

小柄で細身な身体つき。細く綺麗な長い赤毛。

そして何より、二人を並べて見ても簡単に相違点を探す事が出来ない程顔つきが酷似しているのだ。

恐らく見知らぬ他人が二人を見れば、姉妹である事を疑わない程であろう。

唯一見た目で直ぐ解る相違点といえば、ルーサの口元には大きなホクロが一つあるという事。

二人の身長は頭一つ分の差があると言う事ぐらいだろうか。

ルーサの差し出した資料を、セニフが相対する左手で受け取った後も、じっと絡み合った視線を振りほどく事もせずにお互いを見合う二人。

そして、そんな二人の光景を不思議そうな表情で観察していたフロルもまた、同様の疑いを抱いていたのだろう。

（フロル）

「セニフ。お前ルーサと何か関係あるのか？」

（セニフ）
「え・・・？いや。別に何も。」

（フロル）
「そうか。赤の他人にしては良く似ているなって思ってさ。ルーサも余り人に懐かない奴だから、仲良くしてやってくれよ。珍しいんだぞ。ルーサの方から人に歩み寄るのは。」

（セニフ）
「ふぅーん。フロルはルーサと前から知り合いなの？なんか仲良いみたいだけど。」

（フロル）
「いや。こないだ初めて会ったばかりだよ。私も良く解らないけど、妙に懐かれてさ。何でだルーサ？」

この問いかけに対し、一瞬フロルの方へと視線を移したルーサだったが、彼女はその後も黙り込んだままだった。

そして不意に、それまでセニフに対して見せていた、異様なまでの好奇心を簡単に捨て去ると、まるでそれが返事であるかのように、フロルの傍らまで歩み寄っていった。

こんな会話も満足に交わせない相手と、一体どうやって仲良くしろと・・・。

見れば見るほど謎が深まる少女の行動を、セニフはただ小さく溜め息を付いて見届ける事しか出来なかったのだが、その後、拾い集めた資料の束をバインダーに仕舞い込もうとしたセニフに対し、フロ

ルが悲しき現実を告げる言葉を発した。

（フロル）
「そうだセニフ。私達、これからシミュレーションルームに行くところなんだけど、道に迷ってしまってさ。案内してくれないかな。」

（セニフ）
「えええっ・・・？」

勿論、そう問いかけられて、答えが欲しいのはセニフも同じ事で・・・。

心強い仲間の登場で安心しきった心の拠り所だが、今まさに大きな音を立てて崩れ去る様を彼女は感じてしまった。

その後しばらくの間、彼女達が真っ暗闇に閉ざされた地下通路の中を、探検する羽目になってしまった事は言うまでも無い。

彼女達が再び人に出会う事が出来たのは、それからニ時間ほど経ってからの事であった。

０５－０６：〇クレェアトランペ

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「クレェアトランペ」

トゥアム共和国の北部に位置する廃都市ブラックポイントは、３００メートル級の山々に囲まれた盆地地帯に存在している。

いまや見る影も無く朽ち果てた巨大な建造物の多くは、溢れんばかりの生命力を持って生い茂る木々達に飲み込まれ、徐々に風化し行く時の流れだけを、静かにその身に刻み込んでいるかのようだ。

再建を断念せざるを得ないほどに痛めつけられた都市部は、年に一回開催されるＤＱＡ大会や、トゥアム共和国陸軍の軍事演習等で使用される事はあるが、極少数の人々が暮らす一部の周域を除いて、通常では立ち入り禁止の危険地域に指定されている。

それは勿論、長きに渡り補修されぬまま放置されてきた巨大なビル群が、もはやいつ倒壊してもおかしくない状況であったためであるが、逆に人々の視線に晒（さら）される事の無い特殊な地域として、非合法的に活用できる環境を求める輩達に重宝されてきた事も事実だった。

危険極まりない猛毒によってカモフラージュされたこの都市の、真に甘美なる果汁を啜（すす）る事が出来るのは、その事実を知っている極一部の限られた人間達のみであり、彼らはまさに、共和国軍部内のみならず、共和国政府の作り出した、都合の良い盲点（ブラックポイント）に潜んだ鵺（ぬえ）のような存在であった。

（ボディーガード）

「研究施設の被害状況はまだ確認中ですが、爆発による影響で、格納庫を含め地下3階から7階までがほぼ壊滅状態。現在までに研究員１０名の死亡を確認しています。シルバーストルス博士と残りの３名の研究員については、未だ行方が掴めておりません。」

そしてそんな、一般市民達の目の行き届かない特殊な施設内の一つで、何やら慌しく動き回る輩達がいた。

人数にして凡そ１０人前後の男達であろうか。

鼻に付く焦げ臭い火薬の臭いと、薄っすらと幕を張ったように白煙が漂う秘密の地下施設内で、手持ちのサーチライトを必死に振り回しながら、まるで地獄絵図のように破壊されつくされた施設内を飛び回っていた。

それまで高価な機材が並んでいたのであろう部屋の中は、煤だらけの瓦礫の山に多い尽くされており、大きな亀裂の入った壁や天上からは、大量の水がボタボタと流れ落ちている。

部屋から見下ろせる格納庫とを仕切る強化ガラスも、見事なまでに全て吹き飛ばされ、時折宛がったサーチライトの光を反射して、部屋中を煌く夜空のように彩っていたのだが、無残な施設の成れの果てを見渡していた釣り目の男にとって見れば、そんな幻想的世界の慰みなど、取るに足らないガラクタ同然の現象であった。

（ボディーガード）

「それと、保管庫からノイエブリュケを運び出した形跡があります。恐らく逃走に使用した中型キャンサーに積み込んでいるものと・・・。」

（ティーラー）
「もういい。」

耳元で囁かれる淡々とした現状報告を振りほどくかのように、強引に部下の言葉を制したティーラーは、足元に転がる瓦礫の一つを軽く蹴飛ばして見せる。

一体、何故このような事をしてまで・・・。

心の中に沸き起こる彼の疑念は、自らを包み込む部屋の空気と同じく、異臭を放つ淀んだ闇の中に包まれたままだ。

幾ら思考を巡らそうとも、決して明確な答えへと辿り付く事が出来ないのだと解っていても、大きく舌打ちを奏でた彼の心は、負たる思考のスパイラルから抜け出す事が出来ずにいた。

シルバーストルス博士が目するものとは一体何なのだろうか。

サムトーテル地区に一般向け用のマムナレス社秘密開発研究施設という、迷彩を施してまで建設したこの極秘施設を、こうまでして破壊し尽くさねばならない理由とは一体・・・。

私はこれまで、博士の願望を叶える為に、出来る限りの事はしたつもりだ。

巨大な地下研究施設の建設や、必要な研究機材や研究員達の収集、更には研究にかかる莫大な費用の全てを提供する事を確約し、何一つ不自由なく自身の研究に没頭して貰うための環境を整えたのだ。

そして、それらを実現する莫大な資金を賄う為に、共和国高官や軍

部高官達を取り込んで不正な資金操作を繰り返し、帝国貴族達に自社の開発技術を売り飛ばしもした。

勿論それは、自分の野望を実現するための、一つのプロセスと成り得る価値があると判断したからこそ、博士の無理な要求に悉く応じて来たのだ。

感謝されこそすれ、これほどまでの仕打ちを持って袖にされる覚えは無い。

完全に世間から追放されたその身を救い拾ってもらいながら、抱く野望を実現するための道筋を提供して貰っていながらにして尚、これがその恩人たる人間に対する見返りなのか。

右手拳を強く握り締め、暗闇の中に創作した人物を突き刺すように睨み付けたティーラーは、もはや怒気を超えた殺意めいた感情を必死に押し殺し、暗がりの中をゆっくりと歩き出した。

（ティーラー）
「格納庫の照明はまだ回復しないのか？」

（ボディーガード）
「施設内の配電盤チェックが済み次第、予備の電源を投入します。下に降りられますか？」

（ティーラー）
「いや。ここでいい。」

そして、吹き飛ばされたガラス窓の前まで歩み寄ると、左手をスーツのポケットに突っ込んだまま、部屋の向こうに広がる真っ暗な格

納庫の内部を見下ろした。

シルバーストルス博士の目指した人型兵器は、現在、巷に出回っているような下賤な代物ではない。

二足歩行が可能なほどまで進化を遂げたＤＱだが、結局のところ、人間の運動能力を実現するレベルには至っておらず、ここ数年の間、ＤＱ開発技術レベルが飛躍的に向上するような事も無かった。

それは、人間の動きを実現するための複雑高度な稼動部を司る、制御システム自体の処理能力限界と言う難問が立ち塞がったからであり、如何に年々高速化を見せる演算処理装置とは言え、人間の脳による瞬間的判断速度を補う事が出来なかったのだ。

そして、それを実現するために期待された超並列ＤＮＡコンピューターもまた、実用化に漕ぎ着けるほどの目処が全く立っておらず、ＤＱ開発技術者達にとっては、まさに団栗の背比べたる僅かな差を持って、市場での凌ぎを削る以外、手立てが無かったのである。

ピーピーピー。

やがて、部屋の入り口付近へと立っていた大柄な男が、耳元で小さく打ち鳴らされた発信音を合図に、何やらティーラーに指示を仰ごうとするのだが、無言のまま軽く右手を翳した上司の行動を見るや否や、即座にその意思を汲み取る指示を伝達した。

すると間もなくして、それまで真っ黒な闇の世界に包まれていた地下施設内が、不気味な耳鳴りと共に一斉に眩い光の渦中へと誘われ、

それと同時に、無残にも瓦礫の山で埋め尽くされた格納庫内部が映し出された。

綺麗な薄緑色にコーティングされていたはずの壁面は、爆発の衝撃から黒ずんで焼き爛(ただ)れ、隣接する部屋との仕切りはもはや影も形も無い。

そして、高さにしてビル5階分はあろうかと言う広さを誇った格納庫内部は、ほぼ丸々1階部分を、天井から崩れ落ちた巨大な配管と鉄骨、高価な機材の瓦礫で埋め尽くされていたのだ。

金額に換算して、一体どれほどの損害額に上るのか、直ぐには検討も付かなかったが、もはやその主たる人物を失った研究施設に、再建するに見合うほどの価値は無かったのかもしれない。

（ティーラー）
「先日のＬＮＲ社の社長の件はどうした？」

（ボディーガード）
「はい。抜かりなく。」

格納庫内に隣接する最上階の一室から、じっとその瓦礫の山を見下ろしていたティーラーが小さく呟いた。

彼にとって、今や両肩へと圧し掛かった、濃密で巨大な見えない影の存在に比べれば、極々小さな不安材料の一つに過ぎなかったのだが、少しでも己を保身するために、成すべき事は怠らない気概(きがい)を失ってはいなかった。

しかしそれでも、これまで築き上げてきたもの全てを、一気に崩壊

させるに至る程の人為的破壊行為を前に、如何に気丈な態度で振舞って見せたところで、無意識の内に吐き出される大きな溜め息を止めようも無かった。

そしてティーラーは、もはや高価な機材の掃き溜めと化した格納庫内で、残骸の隙間から見え隠れする黒い部品に視線を宛がうと、ゆっくりと目を瞑り、長い時間黙り込んでしまった。

四散する残骸の中で、異様にもその部品だけが、特別な存在感を放っているようにも見えなくも無いが、それは彼の意識の中に、それだけ強い執着心が根付いていたという事だろう。

人型兵器の究極を追い求め、利己的な発想に終始する開発研究者や科学者達とは違い、会社の利益を第一に追求すべき立場でありながら、費用対効果という天秤の上に、巨額の費用を一方的に積み上げたのは彼自身である。

勿論それは、ＤＱ産業界における今後の展開を見据え、多大な効果を期待しての判断であり、シルバーストルス博士の研究が、如何に人道的に非難される様な如何わしいものだったとしても、彼は業界の最先端へと再び躍り出るための手段を講じたかったのだ。

一時は飛ぶ鳥を落とす勢いとまで称された「マムナレス社ブランド」も、今やＤＱ開発技術力において、最先端を突き進むだけの能力は無く、夢や願望を交えた冒険的提案の多くは、保守的な思考へと変貌を遂げた経営者達の重い腰によって、幾度と無く踏みにじられる事となる。

勿論、それがリスクマネジメントの観点から下された判断であろう

事は解っていても、業界の新たな動きを察する事も出来ず、全てに対して後手を踏まざるを得ない状況を作り出した経営者達の無能ぶりに、彼は既に愛想を尽かしていたのだ。

そして彼は、手にした富と権力を持って、新たなる行動を起こすに至った。

プロジェクト名「クレェアトランペ」

来るべき新たなる時代への幕開けを見越して、ＤＱと言う人型兵器の概念を覆すべく想像力を駆使し、世界の全てを圧倒するほどの、より優れた技術力を求めて邁進する集団。

それはもはや、会社の利益に貢献できるような実益あるプロジェクトではなく、まさに開発技術者達の夢と理想を追い求めた、非現実的空想論の投げ合いとなる結末が目に見える、無益以上に有害なものだったのかもしれない。

しかし、それでも彼は、目先の利益を追求するばかりではなく、未来への効率的投資を目指して、極秘にこのプロジェクトを立ち上げたのだ。

勿論、マムナレス社と言う巨大企業の威を借りずしては、成り立つ事すらままならないプロジェクトであり、如何に彼が社内で多くの権力を握る立場にまで上り詰めたとは言え、湯水のように資金を投入できる訳もない。

会社経営者達を欺く事が唯一、プロジェクトを存続させるための絶

対条件であったため、彼はどうしても外部に金銭面での「協力者」を必要としたのだった。

（ティーラー）

「資金面でゼフォンの手を借りたのは失敗だったか。まさかあんな形で奴が更迭されるとはな。」

数ある候補者の中からティーラーが選び出した協力者の一人。

それが、かつてブラックポイント駐留軍総司令官であるゼフォン・ウィリアムズだ。

今ではＢＰ事件を皮切りに、檀權（せんけん）たる罪に問われる身となった彼だが、経緯（いきさつ）にどういったやり取りが有ったにせよ、これまで長きに渡り、トゥアム共和国とセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との軋轢（あつれき）を緩和させるのに一役買っていた事は事実である。

噂では、かの帝国５大貴族の一角であるロイロマール家と親交が深く、そこに何かしらの薄ら暗い関係が築き上げられているのだと言われ、特佐権限を持ってして排他的効力を行使する彼の行動からも、決して聖人のように清い力だけを振り翳（かざ）して、辿り着いた地位ではない事は明白であった。

ティーラーが彼を協力者として選択した理由は、まさにその相手の弱みを握れるという点と、特佐権限と言う特別な権力を行使しうる彼の立場を有益に活用できると目論んだからであり、聞こえのいい「共犯者」という肩書きを擦（なす）り付けて、金づるとしての役割を大いに担（にな）わせたのだ。

（ボディーガード）

「先日、グラスタワーオフィスに来訪した保安官はどうしますか？消しますか？」

（ティーラー）
「いや。これ以上事を荒立てて自分の立場を危うくする必要もあるまい。この研究施設も今日を持って封鎖とする。速やかに研究資料の全てを処分し、研究施設を完全に破壊しろ。勿論、決して足跡を残さずにだ。」

（ボディガード）
「解りました。」

不意に普段通りの彼らしさを取り戻したティーラーが、部下たる一人の大男にそう告げると、吐き出した言葉を再度自分で呑む込むかのように息を吸い込んだ。

そして、照り付けられる証明の光に浮かび上がる巨大な研究施設をじっと見つめながら、ゼフォンという更迭された一人の共犯者の失墜に抱き合わせて、自分をも簡単に見限ったシルバーストルス博士の行動に、激しい憎悪を抱いた視線で睨み付けるのだ。

しかしそれは、彼が常に勝者の立場で歩むために行使してきた強硬的手段と、全く差異が無い振る舞いであることは、彼自身気がついていた事だ。

いまや敗者的立場へと陥（おちい）りつつある自分の境遇を噛み締めながらも、迫り来る困難に向けて立ち向かう気丈さを失わない彼の気概は、強く彼自身をも奮い立たせるに至るのだが、それでも彼の中で、それまで咲き乱れていた綺麗な花々が、儚くも一斉に散り去ってしまった事を悟ったのだった。

05－07：○心開いて［1］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「心開いて」

窓の外に煌く心安らぐ自然の風景。

その静かに流れる優しげな香りと温和な空気は、とても地下３階の通路脇に存在しているとは思えないほど、心地のよい世界を醸し出していた。

鬱蒼と生い茂る木々達は、ファイバーを通して室内へと齎された太陽の光に向かって吹き抜け構造の天井にも到達せんばかりに枝葉を広げ、庭園中心部に備え付けられた小さな噴水からは、細かに霧散した水滴がひんやりとした冷気を漂わせていた。

ここは、ランベルク基地内の地下３階にあたり、兵士達憩いの場であるレストポート付近に作られた人工の地下庭園である。

（ギャロップ）
「話は急だが出発は今夜だ。身支度を済ませて１８：００までに第２エアポートに集合してくれ。何か必要な物があれば言ってくれていい。」

（アリミア）
「出発が今夜？随分と急な話なのね。実技試験で能力も確認しないまま人員を投入するなんて、そんなに人手が足りてないのかしら？」

そんな庭園の脇をぐるりと一周するガラス張りの地下通路内で、放

し飼いにされた小鳥達の綺麗な囀(さえず)りに浸りながら、アリミアが前を歩く男性に問いかけた。

（ギャロップ）

「ある程度がこなせる人材には事欠かない部署だが、有能な工作員ともなれば極希少な存在になるのさ。勿論、君がそれだけ期待されているという事でもある。」

（アリミア）

「買い被り過ぎだわ。貴方だって、私がどのぐらいの能力を持っているのか解らないでしょう?そんな人間を簡単に信用していいの?」

怪訝(けげん)な表情で質問を重ねるアリミアに対し、ギャロップは分厚い胸板を翻(ひるがえ)して立ち止まると、ゆっくりとサングラスを外してアリミアに微笑みかけた。

（ギャロップ）

「君と初めて出会った時、君は俺が差し出した右手を拒絶しただろう。俺にはそれだけで十分さ。」

そして、一般人には到底理解不能な一つの答えをアリミアに示すと、窓ガラスに映し出される綺麗な庭園内へと視線を逸らし、再びゆっくりと歩き出した。

アリミアはあの時、ギャロップが差し出した右手と言うより、彼自身が醸(かも)し出す雰囲気の中に、異様に殺気めいた圧力を感じてしまった事は事実である。

恐らく彼の発した言葉の意味は、極少数に分類されるであろうその感性を持ちえた人物を、ある種同類のような身近な存在として認め

たと言う事なのだろう。

アリミアとて、ギャロップと初めて対峙したあの瞬間に、彼の持ちうる能力の高さを感じてしまった自分の感情を疑う気持ちは無い。

そういうことね・・・。

歩き去るギャロップの後姿を見つめながら、小さな溜め息を付いたアリミアは、妙に納得のいく彼の回答に少し口元を緩ませると、彼の後に続いて歩き出した。

（ギャロップ）

「大まかな作戦概要については先ほど説明した通りだが、詳しい情報は現地の工作員から調達してくれ。うちの猿親父は考えるより先に行動しろ的な考えの持ち主だから、作戦指令が下る時はいつもこんなものさ。見たところ君もあれこれ事前に作戦を練るより、現場でうまく立ち回るタイプだろう？」

（アリミア）

「・・・。貴方だってそうなんでしょ。」

アリミアは一瞬、不思議と的を適確に射抜くギャロップの言葉に、今まで何処かで合った事がある人物なのかと、疑り深い目つきで彼を凝視してみたのだが、ニコニコと意味もなく愛想笑いを振りまく彼の姿に、呆れたように同じ言葉を突き返してやった。

（ギャロップ）

「そうでなければ今まで生き延びて来れなかったさ。状況によっては生物（なまもの）のようにうねり狂う戦場の中で、言ってしまえば事前に準備できる事なんてたかが知れている。結局、自分の命を守る事が出来る

のは、自分自身でしかないのさ。俺は君ならやり遂げる事が出来ると信じているよ。お互いにまた生きて会えるといいな。」

ギャロップはそう言うと、不意に歩みを止めて、彼の元まで追いついたアリミアに向かって右手を差し出した。

幾多の戦場では数々の相手を薙ぎ倒してきたであろうその右手には、確かに熟練した猛者たる威風が備わっているようだったが、二人が始めて出会った時に込められていた異様な殺気の存在は微塵も感じられず、寧ろ、温和でいて友好的な雰囲気さえ醸し出すものだった。

（ギャロップ）

「それじゃ、俺は次の打ち合わせがあるからこの辺で失礼するよ。もう残り少ないが、任務開始までの時間は好きに使って貰っていい。ではまた現地で会おう。」

そして、じっとギャロップの顔色を窺っていたアリミアもまた、ゆっくりと差し出した右手によって、彼の好意的感情に答えて見せた。

いつ死ぬかとも解らぬ過酷な任務へと身を投じる事となった二人の間には、未だ見えぬ蟠りの様な物が横たわってはいたが、それでもそれなりにお互いの人となりを知り合うには有意義な会話だったのかもしれない。

軽く手を振り翳してアリミアのの元を立ち去るギャロップは、口では個々の能力のみがモノを言う世界なのだと示していながらも、アリミアとの友好的関係を構築するための行為を怠らなかったわけだ。

如何に能力に優れた工作員であっても、たった一人で任務を完遂できるほど甘い世界では無いことは、アリミア自身、身を持って知り

尽くしている事である。

今回与えられた任務に他ならず、今後の事態を見据えて思考するならば、彼のような友好的人物とある程度の関係を構築することは、決して無駄な事ではない。

目の前に積み上げられた難関を乗り越える事は勿論、アリミアにしてみれば、その先にある大きな問題へと立ち向かわなければならない立場なのだから。

アリミアはふと、立ち尽くした通路内から見える、綺麗な庭園の木々達へと視線を宛がうと、開け放たれた窓枠に両肘を付いて、じっとその自然の風景の中へと意識を放り投げた。

その暖かな光が降り注ぐ小さな自然の世界は、云わば人の手によって作り出された人工的な世界であったが、それでも人々の疲れた心を穏やかに癒すのに、十分すぎるほどの魅力を携えている。

そして、静かに漂う優しげな空気が、アリミアの肌身を撫でるように過ぎ去ると、彼女はゆっくりと両目を瞑って、僅かに与えられた安楽の世界観に浸った。

耳を澄ませば、綺麗な小鳥達の囀りが彼女の淀んだ心を和ませ、、噴水の奏で出す静かな水の音が、忌まわしき過去の自分まで洗い流してくれるような感覚さえ覚えてしまう。

昔の私からは、とても想像することが出来ないけど、心に安らぎを覚える瞬間を待ち焦がれる人並の感情が、私にもあったという事よね・・・。

アリミアはふと、そんな温和な空気の最中へと、滑り落ちてしまいそうになった自分に歯止めをかけると、強引に現実世界へと引きずり戻すために険しい表情で両目を見開いた。

殺戮（さつりく）に殺戮（さつりく）を重ね、相手を打ち倒す事のみに注力していた戦闘マシーンたる過去の自分を呼び覚まして。

温和で甘美なる優しい世界観を齎（もたら）してくれた皆の為に。

アリミアは、恐ろしいほどに殺気を滲（にじ）ませた鋭い視線を、和やかな地下庭園の風景から引き剥がすと、目の前に続く一本の通路の先に、自らの求めた険しい道のりを重ね、ゆっくりとその道を歩き出した。

あのユァンラオと言う男に目を付けられてしまっている以上、特に自分自身で身を守る事も出来ないセニフは、非常に危険な状態にあると言える。

そして、ユァンラオの黒い素性を知る私とシルを含め、もはやアノ男を叩き潰さない限り、私達に安息の時が訪れる事は無いのだろう。

ＢＰ事件以来、表立って行動を見せないユァンラオだが、私の不正行為をいとも簡単に見破って見せた手腕は、元々私を備（つぶさ）に監視していた者の成せる業（わざ）であり、恐らくそれが彼の仕業である事は９９％の確信を持って断言できる。

彼の本命がセニフである事には変わり無いだろうが、それでも外堀となる私達への監視を怠（おこた）らない事からも、彼の目指す目標への障害

と成り得そうなものは、既に彼の中で排除対象としてリストアップされていると考えて間違いない。

勿論、私一人に降りかかる厄災のみなら、自分の能力を持って排除する自信はあるが、それでも他のチームメンバー達を守りながら戦う事を強いられるのであれば、一人で全てを背負い込む事など不可能な事である。

少なくともお互いに協力し合う体制を築く事が必要不可欠で、自分と同じ志を抱く仲間が欲しいところだ。

今のところ、私が頼る事が出来る唯一の人物と言えば、セニフの秘密を共有しうるシルだけである。

サフォークに助力を請うたとしても、彼に説明できる範囲は限られてくるだろうし、未だユァンラオと言う危険な存在を認識していない彼を、無為に危険な渦中へと引きずり込む事は無い。

そして、お互いに関係が悪化してしまったセニフやジャネットは、恐らく私の話を聞こうともしないだろう。

私に対して新たな行動を示して見せたユァンラオが、このまま大人しく黙っているはずも無く、必ず忌わしき謀略を張り巡らせているに違いない。

一番手っ取り早い方法として、アノ男を抹殺してしまう手も無くは無いのだが、今回の事の発端を作り出した黒幕たる人物はユァンラオではない。

セニフが皇女である事を知り、ユァンラオやロイロマールの私兵達

を、影から操っていた人物がいるはずなのだ。

恐らくはユァンラオが依頼人と呼んでいた人物がそれに該当するのだろうか。

少なくともその黒幕へと辿る事の出来る蔦を、アノ男から引き出す必要はあるだろう。

その事も有って、ＤＱＡ時代にユランラオと同じチームメートであった、ランスロットに探りを入れたのだ。

本来はアノ男の取り巻きとして警戒すべき人物なのだが、あの馬鹿っぷりを装った軽い性格の中に、何か不思議な匂いを感じてしまったのかもしれない。

ユァンラオに関する有益な情報を得られなかったにしろ、彼の話を聞く限りでは、ユァンラオ寄りの人間ではない事だけは理解できた。

まだ完全に彼を信用する事は出来ないが、それでもユァンラオと言う男の危険性を認識している彼を、出来れば仲間に引き入れたい考えはある。

その見返りとして、彼が私の身体を要求するのなら、そんなもの幾らでも差し出してしまえばいい。

自分の身から出た錆が原因とは言え、味方となるべき仲間達からも忌み嫌われ、一匹狼状態に陥った私には、頼れる人なんてそんなに多くは無いのだから。

アリミアは、じっと何処に据え付けられるでもない虚ろな両目をゆ

っくりと閉じると、重たく渦巻いた自分の意識から吐き出されたような、大きな溜め息を付いた。

私は決して万能な人間じゃない。

寧ろ、標準的な人間に比べれば、数多くの物が欠落した不完全な人間。

私に出来る事なんてたかが知れている。

でも、事の全てをシル一人に頼り切るのも酷な話しだし、やはり嫌がられる事を覚悟で、セニフと少し話をしておかなければならないだろうか。

嫌がられても、嫌われても。彼女が穏やかに安心して暮らせるようにしてあげたい。

それが私に出来る、唯一の罪滅ぼしなのだから・・・。

ドスン！

（アリミア）
「あっ！」

「きゃっ！！」

っと、完全に自分の世界へと意識を埋没させていたアリミアが、地下通路の交差点付近へと差し掛かった時、勢い良く角から飛び出してきた一人の人物と衝突してしまった。

普段の彼女であればこんな無様な光景を演出するはずは無いのだが、それだけ深く強い自分の思いの中に飛び込んでいたと言う事なのだろう。

アリミアは咄嗟（とっさ）に、そのままの勢いで転げそうになった相手を、抱きかかえる事に成功したものの、相手が手に持つ大量の資料までは救ってやりようが無かった。

（セニフ）
「いちち・・・。またやっちった・・・。ごめんなさ・・・。・・・？」

（アリミア）
「ごめんなさい。少し考え事してたから・・・。」

両者共に自分の不注意が招いた結果だと言う事を解っていたのだろうか。

ほぼ同じタイミングで謝罪の言葉を述べつつ、相手の表情を見合った時だった。

お互いに据えつけた視線が絡み合うと、唐突に背後で大きな太鼓が打ち鳴らされたかのように、胸の鼓動が高鳴りを見せる。

そして、思いもよらぬ突然の遭遇劇によって、呆気に取られた表情で凝り固まってしまった二人は、不思議と暖かくも居心地の悪い空気の中で、しばらくの間お互いの表情を見つめ合ってしまった。

セニフとアリミア。

二人がこれほど近い距離でお互いを見合ったのは、あのセロコヤーン基地へと向かうガーゴイル2の小さな倉庫内以来の事であった。

アリミアはゆっくりとセニフの上体を引き起こして彼女を立ち上がらせると、散乱した資料を拾う事を理由にして、久しぶりに見るセニフの表情から視線を引き剥がした。

すると、行き場を失ってしまったセニフの視線は、殺風景な地下通路内をオロオロと彷徨(さまよ)う事となるのだが、やがてアリミアの姿に反発するように横を向いて表情を曇らせてしまった。

直ぐにでもこの場から逃げ去りたい気持ちに駆り立てられながらも、セニフがその場に立ち尽くしたまま動こうとしなかったのは、散乱した資料を捨て置く事が出来ない事を理由としたためだ。

そして、それ以降も一切言葉を交わす事も無く、一生懸命に散乱した資料を拾い集めるアリミアの姿を他所に、セニフはとただその場に突っ立っているだけであった。

勿論セニフは、自分が撒き散らしてしまった資料を、人の手に委ねて踏ん反り返るような人間ではなかったが、長く過ぎ行く時の中で、彼女は彼女なりに自身の心中の葛藤と戦っていたのだろう。

あんまりアリミアの事を冷たく責めないでやれよ。

セニフの脳裏で優しく反芻(はんすう)されるその言葉は、築いた冷たい氷のよ

うな心の壁を、静かに溶かしてくれるようにも感じるが、彼女の真なる心の奥底で沸々と込み上げる怒気との温度差に、何処か気持ちの悪い冷や汗となって、彼女の心の傷を疼かせるのだ。

アリミアは自分の母親を暗殺した組織の一員。

ファルクラムと言う最凶最悪のテトリスト集団の一員。

数々の無関係な人達を巻き込んで、自分達の主張を暴力によってしか体現することの出来ない、最低な人間達の一人だ。

今でさえ自分に優しく、協力的に振舞って見せているが、幾ら過去の罪を認めて懺悔を繰り返したところで、そう簡単に彼女を赦す事など出来ようはずも無い。

（アリミア）

「セニフ。はい・・・。」

やがて、じっと俯いたまま、険しい表情を滲ませていたセニフに、アリミアが拾い集めた資料を綺麗に整えた上で、彼女へと差し出した。

アリミアにとって、作戦開始まであと数時間しかないと言う状況を考えれば、まさに願っても無いセニフとの遭遇である。

しかし、それまで抱いていた彼女の思いとは裏腹に、いつものような口調で言葉を発する事が出来ないのは、やはり、それが余りに唐突過ぎたからだろうか。

これほどまでに消極的で受身な彼女も珍しいが、この時アリミアは、

セニフのみせる反応に、少なからず儚(はかな)い期待を抱いてしまったのだ。

するとセニフは、何処か恐る恐ると言う感じで、チラリとアリミアに視線を宛がうと、徐に彼女の手からその資料を強引に奪い取って、その場から逃げ去ろうとした。

（アリミア）
「セニフ！待って！」

セニフのこの冷たい反応は、事前に幾らでも予測出来た事であり、何も今更驚くような事では無いのだが、叶いもしない願望だけをそこに望んでいた情け無い自分の心に、強い戒めの鞭を振り下ろすと、アリミアは咄嗟(とっさ)に、セニフの手を掴(つか)み取ろうと手を伸ばした。

しかし、アリミアの手がセニフの手首へと触れた瞬間、その想いを無下(むげ)にも蹴り落とすかのように、セニフはその手を強引に弾き飛ばした。

そして、アリミアの方へと向き直ったセニフは、心の奥底に溜まった怒気を一気に吐き出してアリミアを睨みつけるのだ。

（セニフ）
「やめてよ！！私には何も話すことなんて無いよ！！もう私に関わらないで！！」

（アリミア）
「私の事はどう思ってもらってもいい！でも少しでいいから・・・。」

（セニフ）

「聞きたくないよアリミアの言葉なんか！どうせ訳の解らない理由をつけて言いくるめてやろうなんて思ってるんでしょ！？いつまでも子供だと思って馬鹿にしないでよね！」

（アリミア）
「馬鹿になんかして無いわ！セニフ！少し落ち着いて！お願いだから聞いて！」

（セニフ）
「嫌だ！嫌だよ！！」

（アリミア）
「貴方が私の事を嫌がっているのも解っているし、私の顔なんか二度と見たくない気持ちも解る！だけど、貴方に何かあってからじゃ遅いの！事情を知らない赤の他人に助けを求める事もできないし、貴方の事を知っている仲間は私とシルだけでしょう！」

（セニフ）
「仲間だなんて軽々しく口にしないで！！私がいつアリミアに守って欲しいって頼んだの！？余計な事しないでよ！」

（アリミア）
「・・・。・・・。」

（セニフ）
「私の為に私の為にって、それさえ口にすれば赦（ゆる）されるとでも思ってるわけ！？私が、はいそうですかって、素直に応じるとでも思ってるわけ！？」

（アリミア）

「・・・。」

（セニフ）

「自分の母親を殺した犯罪者達の仲間に、誰が好き好んでその身を預けるっていうのさ!?私は人殺しに同情されるほど落ちぶれていないよ!!一体、今までどれだけの人達を殺して来たか知らないけどさ!!そんな人間に・・・。」

荒れ狂う波のようにお互いの激しい意思を被せ合い、全く出口すら見つける事が出来ない不毛な平行線を描き出そうとした時、突然セニフがハッと息を呑んで言葉を止めた。

怒りの爆発に託(かこつ)けて、言葉巧みなアリミアに対抗しようと、勢いを持って思いの丈を連ねていった所までは良かった。

しかし、思いもよらず悲壮な表情を浮かべて、俯(うつむ)いてしまったアリミアの姿が、余りにも劣悪な中傷を投げつけた自分の心に、大きな後悔の念を突き刺したのだ。

アリミアは強く唇を噛み締て出来る限りの気丈さを保ちつつも、何処かセニフから外した視線の置き場所に困っている様子で、二人の間に隔てられた僅(わず)かな空間(ところせま)の中を、所狭しと小刻みに泳ぎ回っていた。

過去2年もの間、多くの時間を共に過ごしてきたセニフにとっても、これほどまでに取り乱したアリミアの姿を見た事は無かった。

（アリミア）

「私だって・・・。」

そして、小さく呟くように言葉を吐き出したアリミアは、何を言っても言い訳にしか聞こえない自分の思いを、最後まで言い切る事は出来なかった。

セニフの為にと強く抱いた彼女の思いは、翳された煌びやかな鏡の盾によって跳ね返され、そこに映し出された自分自身の権化によって無情にも切り裂かれる事となってしまった。

悪役に徹する事に、何の躊躇いも抱かなかったはずの自分の心が、まさかこんなに傷つくなんて、彼女自身思ってもいなかったのだろう。

（セニフ）
「・・・。」

セニフは、自分が最後に繰り出してしまった言葉によって、口をきつく噤まれてしまったアリミアの姿に、幾度と無く視線を寄り付かせようと試みるのだが、それでも何か見えない重い空気の層に邪魔され、思うような軌跡を描き出せないでいた。

それは込み上げる怒りと、抱いた想いとが混沌と渦巻く、彼女の心を具現化した強い戸惑いと迷いの念。

自らが歩み進める道筋を、自らの手で閉ざし、もはや進むべき道を見出す事が出来なくなってしまった彼女は、やがて、その場から逃げ出すように走り去っていった。

05－08：○心開いて［2］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「心開いて」

人の抱く人への想いは人それぞれ。

周囲の様々な外乱要素に揺さぶられ、拠り所無く彷徨(さまよ)い歩く不安定な感情ではあるが、それは純粋にその人自身を投影した分身たる自分想い。

時に優しく包み込む様な暖かな愛情を醸(かも)し出し、時に荒れ狂う嵐のような怒りを放つ。

そして、お互いに抱いた想いを鏃(やじり)の先に括(くく)り付けて、力いっぱい弓の弦を引き絞るのだ。

狙うべき相手の心の的を見定めながら、届かぬやも知れぬその想いを込めて。

アリミアが抱き、力いっぱい引き絞った弓矢の軌跡は一直線。

それは、セニフの心の中の小さな的をすら、適確に射抜かんばかりの想いと願いが込められており、如何にその両手が黒く淀んでいようとも、彼女の抱いた想いを純粋に反映した、暖かな光矢であったのだ。

しかしそれでも、自らの殻の中に隠れるように身を丸め、意固地(いこじ)にその的を小さく萎(しぼ)めてしまったセニフの心に、彼女の想いが届く事

はなかった。

確かにそれは、ほんの極僅か狙いがそれてしまった程度の微々たる誤差である。

受け手となる相手の感情に、それなりの広さと深さが存在すれば、あれほどの激しい口論のやり取りへと発展する事は無かっただろう。

私・・・。何であんな事・・・。

激しい怒りの念を抱きつつも、心のどこかで相手を求めていた事は確か。

嘗(かつて)て味わった大きな悲しみの上に、更に大きな憎しみの想いを被せて、火の出るような怒気を放つ心情に駆り立てながらも、必死な表情で語りかける相手の想いを、心のどこかで欲していたのかも知れない。

真っ暗な闇に閉ざされた脅威(きょうい)の渦中で、ヒタヒタと忍び寄る目に見ない恐怖に脅(おび)え、必死に自分の身体を自分で抱きしめて助けを待っていたのだ。

一体、何処へ向かおうと言うのか。何を求めようと言うのか。

錯乱に錯乱を重ねた思考を必死に振り解こうと、彼女は真っ暗な地下通路を、ただ只管(ひたすら)に走っていた。

そして、進む通路を二つに分かつT字路へと差し掛かると、彼女は

疲れ果てた身体を一時休めるために、突き当たった壁に身体を預けた。

（セニフ）

「はぁ・・・。っはぁ・・・。はぁ・・・。」

右手で胸元を押さえ付け、必死に乱れる呼吸を整えるように深呼吸を繰り返すも、彼女自身の抱く感情の矛盾点と同様に、中々思うように御(ぎょ)する事ができない。

やがて彼女は、示された二通りの道筋の中に、己の心の迷いの逃げ道を探しつつ、自分の辿ってきた道筋を振り返りると、ゆっくりとその場に座り込んでしまった。

右へ進めばいいのか。それとも左に進めばいいのか。

自分では全く検討も付かない。

彼女の左手方向に示された通路は、真っ暗な闇の壁に閉ざされた未知の世界。

そして、右手方向に示された通路は、ある程度の明るさによって照らし出されてはいるものの、長く険しい道のりが続く果てしない細道だ。

どちらを選ぶにしろ、彼女にとっては茨の道になろう事は、その現実を直視せずに逃げ回るだけの彼女にも解っている事だろう。

身の丈に見合わない大きな過去を背負い、自分ではどうする事も出来ない大流を前に、ただ自身を伏流(ふくりゅう)の上に漂わせる事しか出来ない

身でありながら、何故、投げかけられる唯一の命綱を自ら投げ捨ててしまうのか。

セニフは座り込んだ床の上で両膝を抱え込むと、拙い光を醸し出す蛍光灯の光を見上げて大きな溜め息を付いた。

そして、その照らし出す光の残像を網膜の裏に焼き付けながら、それまで歩んでいた過去の記憶を辿るように、ゆっくりと両目を閉じた。

自分ひとりじゃどうする事も出来ないって解ってる癖にさ。

何でまたそうやって人の好意を簡単に蹴り飛ばすのさ。

2年間もの間、一緒に暮らしてきた二人の関係って、その程度のものだったの？

だって・・・。だってそうじゃない。

たとえアリミアがお母様を殺した張本人じゃないとしても、今まで数多くの人間達を殺してきた人間だよ？

でもさ。私達には優しく接してくれたよね？

確かに冷たい感じがする時もあるけど、それも全部、皆の事を想ってくれての事だって、解ってるよね？

ブラックポイントでは、必死に私の事守ってくれたじゃない。

解ってる・・・。解ってるけど・・・。

私だってファルクラムって言う組織が、一体どういった組織なのか知っているよ。

無実な一般市民を巻き込んで、数多くのテロ行為を実行してきた犯罪者の集まり。

そんな中で平然と暮らしてきた人間を、どうやって信用しろって言うのさ？

アリミアが過去に何をして来ようと、私がとやかく言えた立場じゃないでしょ？

私は過去に一体何をしてきたって言うのさ。

自分の父親を殺して、ここまで逃げ延びてきた癖に。

ち・・・。違うよ！私は殺してなんかいないよ！

あれっ？そうだっけ？だって皆そう言ってるよ。

皇女は自分の父親を殺しましたって。

そして惨(みじ)めに処刑されましたって。

そんなの嘘！私は殺していない！

私は嵌(は)められたの！解ってるでしょ！？

でも、そんな証拠、何処にも無いしね。

皆きっと思っているよ。この人殺し！ってさ。

よくもまあ、恥ずかしくもなく生き永らえていられるもんだってね。

私はお父様を殺してなんかいない！

人殺しなんかじゃないよ！

嘘ばっかり！自分の事しか考えていない卑(いや)しい人間が、幾ら喚(わめ)き散らしたって、他の人達は聞く耳持たないよ！

もう私は人殺し！戦場で数多くの人間を殺した殺人者でしょ！？

そんな・・・。それはだって仕方ないじゃない！

有事の時には軍属になりますって、契約書にサインしたのは私でしょ！？

仕方なければ人を殺してもいいんだ。

じゃあ、アリミアだって仕方なかったかもしれないじゃない。

生まれた頃から戦闘マシーンとして教育を受けてきたんでしょ？

抵抗も出来ない、本当に幼い頃からさ。

そんな事・・・。私知らないもん！

そんな事言って。何も受け入れようとしないのは私の我儘でしょ？

少しでも相手の事を知ろうとしてみたの？

少しでも相手と会話してみようと思ったの？

何でもかんでも自分の思い通りにしようなんて、ほんと呆れちゃうほど癇癪(かんしゃく)持ちのお子様なんだから。

もう私、嫌んなっちゃうよ・・・。

・・・。

こんな時代に清く正しく生きていける人間なんてほとんど居ない。

皆辛くて悲しい過去を持っているんだ。

そんな中でも、皆で手を取り合ってさ。仲良く幸せに暮らして行きたいって。

それを望んでいたんじゃないの？

違うの？ねぇセニフ。

違うの？？

（作業員）

「あれっ？こんなところでどうしたんですか？具合でも悪いんですか？」

綺麗に彩られた純粋な自分自身と、疑心暗鬼（ぎしんあんき）に揺れ動く淀んだ自分自身とで、激しく論争を繰り広げていたセニフの意識に、一人の男の声が横槍を入れた。

それまで、余りに意識の深くまで潜り込んでいたため、その声が一体何処から聞こえてきたのか解らなかったのだが、少し驚いたような表情で両目を見開いたセニフが左右を見渡すと、彼女の左手方向通路から、くすんだグリーンの作業服を身に纏（まと）った男が現れた。

それは、セニフの記憶の中にさほど強く印象付いている人物ではなかったが、それでも彼の声色と立ち姿とが、セニフの記憶の鍵を簡単にこじ開ける事に成功した。

（セニフ）
「あっ。あの時の人。」

（作業員）
「おや。これはまた偶然ですね。」

薄暗い地下室の通路内で、つい数時間前に偶々（たまたま）出会った二人が、不思議そうな表情でお互いを見合う。

見知らぬ二人が短時間の内に異なる場所で偶然出会うなど、そこに何かしら必然性があるのではないかと疑いたくなる程だったが、如何にランベルク地下基地が広かろうと、お互いの活動範囲が重なり合ってさえいれば、それほど確立の低い出来事ではない。

セニフはキョロキョロと周囲を見渡しながらゆっくりと立ち上がると、埃（ほこり）を落とすためにお尻を軽く叩（はた）いた。

（作業員）
「こんな薄暗い地下通路を、女の子が一人でうろついていたら危ないですよ。もしかして、道に迷ったとかですか？」

（セニフ）
「ま・・・まあ。そんなとこだね・・・。」

この時セニフには、道に迷ったと言う認識は無かったのだが、見渡した3本の地下通路を眺めてみても、全く見覚えの無い悲しき記憶に大きく肩を落とすと、彼の言葉を否定する事が出来なかった。

そして、考え事をしていた自分が悪いに違いないのだが、こうも簡単に道に迷う事が出来る自分の迂闊（うかつ）さを恨めしく思うのである。

（作業員）
「この辺は軍の機密情報が数多く保管されている場所ですから、余り立ち入らないようにしてください。それで、どちらまで行かれますか？」

優しげな口調でそう問いかけた男だが、セニフの姿をくまなく観察する彼の視線は、如実（にょじつ）に不信感が込められている様にも見受けられる。

確かに彼のように倉庫を管理する側の立場から言えば、似たような場所で二度も出会う事となった少女に、何かしらの疑いを持ってかかるのは当然の事であろう。

（セニフ）
「えっと・・・。」

と、直ぐに返事を返す事を躊躇（ためら）ったセニフは、左手人差し指を唇の下に宛がい、少しの間じっと考え込んだ。

彼女はもはや、自分自身が求めるものの為に、一体何をすべきかを解っていた。

それでもその回答へと辿り着くまでに、ほんの数秒かかってしまったのは、未だに彼女の心の中で燻（くすぶ）る、根強い反意があったからなのだろう。

しかしセニフは、ようやくそこへと辿り着いた足を持って、力強くそれを踏みつけると、何処か吹っ切れた様子で回答を示した。

（セニフ）
「じゃあ、中央区まで。」

（作業員）
「解りました。」

自分の歩んできたその道を振り返り、もう一度、アリミアと会う事を望んで。

セニフは真っ直ぐな自分の想いを、アリミアにぶつけてみる覚悟を決めたのだった。

とにかくアリミアと一度話をしてみよう。

アリミアは決して私を利用しようなんて考える人間じゃない。

いつも私の事を想ってくれている、かけがえの無い友人の一人。

さっきは酷い事を言っちゃったけど、まずアリミアに謝らなきゃ。

セニフはじっと地下通路の先を見据えたまま、胸元に翳（かざ）した左手をギュッと強く握り締めた。

（作業員）
「それじゃですね。まずこの通路を真っ直ぐ進んで、二つ目の十字路を左手に曲がってください。そして突き当たりのT字路を右に行って、三つ目の十字路を更に右に進んでください。その後、右手に階段のある角を左に曲がればグリーンオアシスが見えてきますから。」

（セニフ）
「・・・。」

しかし、そんなセニフの心意気の出鼻をくじくかのように、作業員の男は彼女の辿るべき複雑な道順を淡々と連ねていく。

一体何処をどう歩み進めば、そこまで深く迷う事が出来るのだろうか・・・。

セニフは自分のあまりの方向音痴振りに、少し辟易（へきえき）してしまった。

（作業員）
「なんでしたら、私が案内しましょうか？」

（セニフ）
「あ・・・。いや。大丈夫です。２回も助けて貰って、そこまで迷惑かけらんないし。それじゃ、私急ぐんで。ありがとうございました。」

セニフはほんのりと顔を赤らめてお礼の言葉を述べると、何処か気恥ずかしい気持ちに駆られながらお礼の言葉を述べた。

そして、すぐさま作業員の男に背を向けてその場から走り去ろうとしたのだが、不意に彼女の脳裏を過ぎった一つの疑念に意識を囚（とら）われると、何かに蹴躓（けつまず）いたかのようにその足を止めてしまった。

あれ？２回？

２回って・・・。１回目の時はどうしたんだっけ？

この人に助けて貰ったんだっけか？

いやいや。あの後、フロルとルーサと出会って、そして3人で薄暗い地下通路を小一時間迷い歩いたんだった・・・。

そうだ！そうだよ！あの時この人、私の前から突然姿を消したんだ。

まるで幽霊みたいにいなくなったんで、凄く驚いてさ・・・。

（セニフ）

「そうだ、そう言えば、あの時さぁ・・・。」

と、セニフがその男に問いかけようと、再び男の方へと振り返った時だった。

セニフは不意に、自分の直ぐ背後へと忍び寄っていた大きな影の存在に気が付くと、一瞬驚いた表情で身体を仰け反らせてしまう。

彼女がその影の正体を掴み取るまでに、それほど時間を必要としなかったが、まさかあれほど紳士的に接してくれた男の瞳の中に、これほど背筋に悪寒を覚える程の鋭さと冷酷さが含まれていようとは、思っても見なかった事だ。

そして、一瞬にして血の気が引いて青ざめるセニフを他所に、男は素早く彼女の左手首を掴み上げると、強引に自分の元へと彼女の身体を引き寄せた。

（セニフ）

「なっ！！嫌っ・・・！！ちょっと！！」

セニフは、出来る限りの力を振り絞って、この危機的状況から脱しようと必死にもがいて見せるのだが、男の強烈な力で縛り付けられた身体は、完全に行動の自由を奪い去られており、もはや非力な彼女の力ではどうする事も出来なかった。

男は左腕でセニフの身体を押さえ付けたまま、作業服のポケットの中から一枚の白い布を取り出すと、徐にセニフの口元へと押し付け、もがく獲物がじっと弱るのを待った。

やがて十秒ほど経った頃だろうか。

次第に抵抗力が衰えていったセニフの両腕が力なく垂れ下がると、最後にはぐったりとしたまま薄暗い地下通路の床の上に崩れ落ちた。

05－09：○心開いて［3］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｎ０９「心開いて」

暗黒の黒という色で塗り潰された地下施設の一室で、耳障りな金属音が鳴り響くと共に、重たい鉄の扉が開き始めた。

部屋の外に横たわる通路にもほとんど明かりは無く、部屋の中の薄暗さはそのまま保たれる事となったのだが、大量の収納ケースが山積みにされたその小さな部屋は、何かの保管庫として利用されている場所のようであった。

開け放った扉の隙間から流れ出る、淀んだ空気の重苦しい肌触りと、何処か鼻に付く黴臭い臭いとが、長い間放置されていた部屋であろう雰囲気を漂わせ、おおよそ普段から人が立ち入るような場所で無い事は、床一面に降り積もった埃の層が一様に物語っていた。

そして、人一人分が通過できるほどの隙間を形成するに至った扉の向こうから、何やら用心深く部屋の中の様子を窺う男の視線が差し込むと、ほどなくして一人の少女を抱きかかえた男が、素早く部屋の中へと忍び込んできた。

くすんだグリーンの作業服を身に纏い、深々と帽子を被ったその男は、一見、地下倉庫施設の管理者を装っていたのだが、一人の人間を両手で抱えたままにして、物音一つ立てない彼の行動から、何処か一種異様な人種である事を匂わせていた。

この男が何故こんな薄暗い保管庫へと立ち入って来たのか、その真

の目的は定かではないが、男が抱きかかえた少女の意識が全く無い事からも、真っ当な理由を持って説明付ける事が出来ないであろう予測は付く。

やがて男は、壁伝いに部屋の奥の方へと突き進むと、壁の隅で薄っすらと光り輝く消火栓の赤いランプの前で、少女の身を床の上へと下ろした。

何をするにしても、部屋の明かりぐらい点ければいい様なものだが、如何に人気の無い地下倉庫区画とは言え、電力の消費量をその部屋毎に管理されている以上、下手に自動化された機器に触れること事態、彼の立場を危うくする原因ともなる。

本来であれば開け放った扉も、直ぐに閉じたいところなのだが、思いのほか大きな音を奏で出した重たい扉を前に、男はそれを断念せざるを得なかったのだ。

決して誰にも見つかる事無く。決して誰にも悟られる事無く。

じっと息を殺したまま、再び周囲を伺うような素振りを見せた男は、その後ゆっくりと、あどけない表情で深い眠りに囚(とら)われたままの少女へと視線を当てた。

そして、何ら抵抗する術も持たない幼気(いたいけ)な少女の額を軽く撫(な)で上げると、舐め回す様に少女の顔を観察し始めた。

赤いランプの光によって綺麗に装飾された少女の顔は、まるで造形物のように端整(たんせい)で可愛らしいものだったが、彼女の瑞々（みずみず）しい素肌を這いずり回る男の視線は、その後、不思議なほど奇妙な

軌跡を描き出すのだった。

少女の顔からスタートしたその視線は、少女の左耳付近で小刻みに動き回った後、うなじの滑らかな流れに沿って首元を回り、反対側のコースを同じような道順で辿っていく。

それは何処か、少女の身体に「何か」を捜し求めるような雰囲気を漂わせていたのだが、視線の先が最後の終着駅となる少女の胸元へと到着すると、男は徐に作業服のポケットから、1本のナイフを取り出した。

そして、少女の羽織った黒いジャケットの胸元を掴み取り、逆手に持ったナイフの鋭い刃を宛がうと、男は躊躇無くその衣服を引き裂き始めたのだ。

突き立てられた鋭利な刃物の前に、夏物の薄い上着程度が然したる抵抗を見せるはずも無く、ビリビリと言う情け無い音だけを周囲に響かせると、男の思うがまま、いとも簡単に裁断されて行く。

やがて、中に着込んだTシャツと共に、ジャケットの袖部分すらも剥ぎ取られてしまった少女は、真っ暗な闇の中に燃え上がるような赤を反射して照らす、綺麗な裸体を曝け出す事になった。

もはや全く成す術も無く横たわる少女の裸体は、欲望を激しくかき立てる華美な人形のようでもあったが、じっと鋭い目つきで少女の身体を見渡した男は、再びポケットの中へと突っ込むと、今度は小型カメラのようなものを取り出した。

そして、恐らくは暗視用であろうカメラを少女の裸体へ翳して見せると、複数回に分けて様々な角度からシャッターを切り落としてい

った。

このような少女に対して淫靡な行為を嗜む性癖の持ち主であるなら、この時点で薄ら笑いの一つでも滲ませようものだが、依然、険しい表情を崩さない男の行動からは、また何か別の目的を持っての行為であることは明らかである。

しかし、だからと言って、少女がこの男の辱めから逃れる事が出来るはずも無く、何かを捜し求めて少女の裸体を弄る男の行為は、最終的に男が何かを見つけるまで続けられるのだろう。

男は少女の上半身の調査を一通り終えると、言わずもがな当たり前のように少女の腰のベルトへと手をかけた。

そして、少女を完全に生まれたままの姿へと立ち返らせるべく、手に持つナイフを再び少女の前へと翳した。

しかしこの時、男は少女の足元の方へと視線を向けた瞬間に、何故か突然動きを停止してしまった。

それは、少女の履く厚手のGパンは、普通に脱がせた方が早いのではないかと、悩んだ男の意識が誘った視線の動きでしかなかったのだが、男は少女の足元に自らが犯した大きなミスの痕跡を発見してしまったのだ。

少女の右足に履かれているはずの靴が無い・・・。

通路で揉み合ったときに脱げてしまったのか・・・。

それとも、少女をここまで運んでくる途中に脱げてしまったのか・・・。

俄(にわ)かにざわめきだす意識の中で、必死に自分の辿ってきた道筋を省(かえり)みる男だったが、直後に極至近距離で蠢(うごめ)く謎の黒い影の存在に気がつくと、手に持つナイフで咄嗟(とっさ)に防御姿勢を取った。

まさか男もこれほどまでに巧みに気配を断つ人物に、接近されている等と思っても見なかったのだろう。

一瞬、強い戸惑いと焦りの念から反応が遅れてしまった男は、素早い動きで接近を試みる黒い影に対し、先制攻撃のチャンスを献上してしまうと、正確に繰り出された足蹴りによって、右手に持ったナイフを弾き飛ばされてしまう。

そして、自らの失敗に悪態を付く暇も与えられぬまま、息もつかせぬ連続攻撃に見舞われる事と成るのだ。

（作業員）
「ぐっ！！」

しかし、間一髪のところで追撃の手を免れた男は、素早く転がるように黒い影との距離を保つと、積み上げられた収納ケースにもたれ掛かりながら、鋭い殺意を放った視線で相手の姿を凝視した。

薄ら暗い部屋の中では、対峙する相手の姿をはっきりと確認する事は出来ないのだが、それでもこの時、男の目の前へと立ち塞がった人物が、只者(ただもの)で無いことだけは、即座に理解する事が出来た。

・・・？・・・女？

「随分と好き勝手にやってくれたようね。」

男が見据えた視線の先から発せられたその声は、静かに落ち着き払った綺麗な女性の声色そのものであったが、それでも内に込めた冷たい殺意を低音部に潜めたような、威圧感を感じるものだった。

やがて、その黒い影がゆっくりと支配権を奪い取った少女の元へと歩み寄ると、消火栓の赤いランプに薄っすらと照らし出された長い紅髪の女性が姿を現した。

無防備な立ち姿ながらも、全く隙を窺わせないこの女性の右手には、少女の物と思われる靴が1つ握られており、男が危惧した懸念材料は、まさに最悪のケースを辿り経て、男の元へと降りかかったのだった。

彼女はゆっくりと足元にしゃがみ込んで、寝そべる少女の身体に何ら外傷が無いことを確認すると、着ていた上着を優しく少女の上半身に被せてやった。

そして、少し安心した表情で溜め息を付いた彼女は、再び鋭い目つきで男の姿を睨み付け、静かな口調を保ったまま男へと問いかけるのだ。

（アリミア）

「誰に頼まれたの？正直に話してくれたら、貴方みたいな小物は見逃してあげるわ。」

勿論アリミアは、そう自分で問いかけながらも、男からの返答を全く期待していなかった。

それは、この男が単なる倉庫管理者の一人などでは無く、水面下での活動を得意とする闇の住人であることを察したと言う事もあるが、それ以上に、アリミアの中でその答えとなる人物が一体誰であるのか、既に見当が付いていたからだ。

それでいながらにして、アリミアが強気な態度を崩さず問いかけたのも、それなりに相手への心理的効果を煽り立てる為のものだったのだが、すぐさま体勢を立て直して、濃密な攻撃的意思を放つ男には、ほとんど効果は無かったのかもしれない。

しかし、アリミアにとっては大きな足枷となる無防備な少女の存在に、アリミアが意図的に男の退路を開け放つ態度を示唆すると、男はすぐさま撤退する事を決意したようだ。

たった一人の女性によって、その目的の達成を阻害されるなど、自尊心誇大な人物であれば、決して選択し得ない行動だが、男にとって今回の犯行は、危険な橋を渡らねばならぬほど重要なものでは無かったのだろう。

やがて男は、アリミアに対して攻撃の姿勢を保ちつつも、じりじりと部屋の出口の方へと滲み寄ると、一瞬だけ、ほのかに薄ら笑いを浮かべて見せる。

そして、完全に己の気配を掻き消した上で、暗がりに積み上げられた収納ケースの影と同化した男は、足音一つ立てずに保管庫から飛び出していった。

アリミアは男が立ち去った後も、しばらくの間、保管庫の入り口付近をじっと見つめたまま、何かを考え込むような表情で立ち尽くし

ていたのだが、ほどなくして床の上に寝そべる少女の寝顔に視線を移すと、ゆっくりと大きな溜め息を付いた。

ＢＰ事件以来、特に目立った行動を見せなかったユァンラオだが、今回のセニフ拉致に関する犯行の裏で、彼が蠢(うごめ)いていた事は間違いない。

それは、アリミアの不正行為を暴(あば)きだした直後に、タイミングよく実行に移された事からも見て解る通り、恐らく何かしらの思惑を持って企てられた陰謀なのだろう。

まさか、あれほどのごろつきを手懐(てなず)けているとは予想していなかったが、それまでユァンラオの存在を大きな脅威として強く警戒してきた中で、こうも簡単にセニフに手を出されてしまうなど、思っても見なかった事だ。

これはもはや、私一人の力だけはどうする事も出来ないのかもしれない・・・。

セニフの事を守ってやるのだと、心の中で強く決意して見せはしたものの、やはり他人を守り通すと言う事は、自分一人の身を守る事より非常に難しい事だ。

更にそれが、非協力的態度を持って拒絶反応を示す相手ともなればなおさらの事。

しかも、アリミアは今後、トゥアム共和国軍諜報部の工作員の一人

として、様々な任務をこなしていかねばならない身であり、常にセニフの身の周りで彼女の様子を観察する事が出来なくなるのだ。

今回アリミアが、セニフを救出する事が出来たのも、言ってしまえば偶然が積み重なって実現した、云わば二度と望む事が出来ない奇跡のようなもの。

セニフとの激しい口論の末に一つの希望を逸してしまったアリミアは、打ちのめされた弱い自分の心に負け、走り去るセニフを追いかけることも出来なかったのだが、それでもせめて任務開始前に、シルには全ての事情を伝えておこうと、シミュレーションルームへと足を向けたのが幸いした。

アリミアは、シミュレーションルームへと続く複雑な地下通路の中で、偶々（たまたま）見慣れた女性物の靴を発見する事が出来たのだ。

もしあの時、私がシミュレーションルームへと向かわなければ・・・。

もし、そこにセニフの靴が落ちていなければ・・・。

セニフを助けてあげる事は出来なかっただろう・・・。

やがてアリミアは、ゆっくりとセニフの身体を抱きかかえ上げると、何かを決意した様な強い意志を瞳の奥に滲ませ、静かに眠るセニフの表情を見つめた。

私一人でセニフを守り続ける事に限界を感じ始めている今、最も安全性の高い方法は、他の人間の助けを借りて複数人でセニフを見守る事。

しかし、セニフを襲った男のような人間が相手となると、シルやランスロットでは少し荷が重過ぎるかもしれない。

ここはやはり、折角降って沸いた諜報部とのつながりを持って、猿親父の威を借りる以外に、有効な手立ては無いのだろう。

あの猿親父が信用に足る人物であるかどうかはまだ解らないが、セニフの正体を包み隠したままでも、私が彼に絶対の忠誠を誓い、彼の望む以上の能力を発揮して見せるのなら、一人の少女の身の安全を約束させる事ぐらい出来るはずだ。

（アリミア）

「セニフ・・・。今度また、ゆっくり二人でお話したいわね。貴方の笑顔をまた見られるように、私、頑張るから。」

そしてアリミアは、暗がりの中に示された一本の光明に強く願いを込めると、セニフにそう優しく語りかけたのだった。

05－10：〇ブリーフィングルーム#2［1］

＜トゥアム共和国陸軍　首都ランベルク基地　B3－C－302＞

作戦名「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

我が共和国軍と帝国軍の戦線が膠着状態に入ってから約2週間が経つ。

依然、帝国軍の支配下にあるリトバリエジ都市だが、帝国軍の厳しい監視下に置かれていると言う事もあり、現在のところ大きな混乱は発生していないとの事だ。

しかし、トゥアム共和国最大の経済都市にまで発展を遂げたリトバリエジ都市は、今や東スロベーヌ地方全体の経済流通を担う重要拠点であり、このまま同都市を帝国の手に委ねて置くことは、トゥアム共和国の国益を損なうだけでなく、東スロベーヌ地方全体の経済に大きな打撃を与えかねない、非常に逼迫した状況が差し迫っていると言える。

そのため、リトバリエジ都市の早期奪還を望む声は、国内外を問わず日に日に強さを増してきており、これまで同都市内の巨大な工業地域や都市中心部を含め、取り残された一般市民達が数多く暮らすコロニー群に配慮した形で、首都ランベルクを防衛する事のみに注力してきた軍上層部だが、今回新たに帝国軍の動きに先んじて攻勢に転じる事を決定した。

現在、リトバリエジ都市に駐留している帝国軍の総兵力は、スーノ

ースーシ川対岸に陣取る重戦車部隊が２個連隊と中距離支援砲撃部隊が２個大隊、そして、同都市周域に展開する地対空車両が２個大隊と大部隊であるが、今まさに、我々にとって最も大きな脅威となりえるのが、帝国軍の航空部隊である。

リトバリエジ都市失陥時にネミッサ空港を完全に破壊する事で、今のところその脅威を軽減する事に成功してはいるものの、同都市内の高規格幹線道路の多くは、航空機の離発着を想定して建設されており、帝国軍の補給物資輸送用に利用されているのが現状だ。

しかも現在、帝国軍は長い直線ラインを形成するＲ０３－２２とＲ０５－１３付近で、大型輸送機や戦闘航空機の離発着を可能とする為の補強工事に着手しており、この簡易滑走路が完成する事になれば、ランベルク地方における航空優勢度が、局所的なものに限定されてしまう恐れがある。

そのため、リトバリエジ都市が完全に帝国軍の駐留基地として機能する前に、これを殲滅する事が最重要目標となる訳だが、同都市近辺での戦闘は極力避けたいという共和国政府の強い要望から、今回全く違った視点からの作戦目標を設定するに至った。

それが「オクラホマ攻略作戦」である。

諸君等も知っての通り、帝国トポリ領南東部に位置する大都市「オクラホマ」は、帝国軍東方戦線における重要な補給物資輸送中継点としての役割を担っており、その防衛部隊の総数もリトバリエジ駐留軍を遥かに上回っている。

保有する航空兵器も戦闘機だけで１００機を越えると見られ、都市

周辺部に設置された対空高射砲要塞の威力も驚異的だ。

これは1都市を防衛するための兵力としては、余りに過剰な軍事力であり、まさに最強の対空防御力を備えた強固な軍事都市であると言えるが、それだけ帝国軍にとって、東方戦線における重要な動脈部を担う都市である事は間違いない。

言い変えれば、このオクラホマ軍事基地さえ攻略してしまえば、トゥアム共和国内に侵攻する帝国軍の脅威を、著しく減衰させることが出来るだろう。

現在、ランベルク地方に飛来する帝国軍航空部隊のほとんどは、このオクラホマ軍事空港を経由しているものと見られ、我が軍がリトバリエジ都市への帝国軍物資輸送経路を、完全に断ち切る事が出来ないのもそのためだ。

リトバリエジ都市付近での戦闘を制限されている我が軍にとって、同都市に駐留する帝国軍に効果的な打撃を与えるためには、この物資補給路を断ち切った上で孤立させる以外に有効な手立てが無い事も事実である。

我が軍がランベルク地方において、絶対的航空優先権を獲得する為には、避けて通る事が出来ない軍事基地なのだ。

勿論、ランベルク地方西部レイナート山脈を越えた麓(ふもと)付近に位置しているとは言え、この軍事基地を攻略する事は決して容易な事ではない。

大量の航空兵器を投入しての直線的侵攻によって降下作戦を展開したところで、オクラホマ軍事基地の圧倒的対空防御の前に激しい消

耗戦に陥(おちい)る事は、火を見るより明らかな事である。

しかも、陸路を辿った侵攻ルートに至っては、ディップ・メイサ渓谷が完全に帝国軍の勢力下に置かれているために、レイナート山脈を北方か南方に大きく迂回せざるを得えない。

オクラホマ軍事基地攻略という最終目標を見据えた場合、陸路ルートを選ばざるを得ないのが現状だが、如何に地上からの対空攻撃性能が飛躍的に進歩したからと言え、今だ戦線の優位性を左右するのは航空兵力である事に変わりは無く、帝国軍の航空兵器の目を如何に欺(あざむ)くかが、勝敗の行方を左右すると言っても過言ではないだろう。

このような状況下において、何の対策も無しに大規模な地上部隊を派兵するなど、まさに愚劣な自殺行為のようにも思えるが、今回、諜報部が新たに入手した情報によれば、数日以内にこのオクラホマ都市で、大規模な武装決起が勃発(ぼっぱつ)する可能性が極めて高いとの事だ。

この情報に関して、まだ詳しい内容までは明らかにされていないのだが、それなりに信憑性(しんぴょうせい)の高い情報である確証が得られているようで、この混乱に乗じて諜報部の工作員がオクラホマ軍事空港へと潜入し、警戒索敵レーダー機能や航空機管制システムへの破壊工作を敢行する手はずとなっている。

外部からの攻撃に対しては強固な対空防衛能力を誇るオクラホマ軍事基地だが、内部からこれを無力化してやる事で、同地域における我が軍の不利的状況を打開しようという作戦だ。

しかし、如何にオクラホマ都市内部の警戒警備体制が、他の都市と同レベル程度のものだとしても、この破壊工作任務は非常に成功確

立の低い困難な任務である事に変わりは無く、その任務成功如何に依存しきる様な作戦を立てることは出来ない。

そこで、今回のオクラホマ攻略作戦は、航空兵器能力が最も低下する、夜間を狙って発動される事となった。

作戦の発動時期については今だ未定であり、オクラホマ武装決起軍の動向によって、作戦プラン自体が大幅に見直される可能性もあるのだが、我が軍の主力部隊は、オクラホマ軍事基地への侵攻ルートを南方迂回路一つに定め、共和国南西部の「サルフマルティア基地」に集結する予定だ。

このオクラホマ攻略軍主力部隊の総兵力を大まかに説明すると、高速戦車で編成された先行部隊が2個連隊。軍事基地制圧部隊が2個連隊。戦闘ヘリ部隊が2個中隊。そして、共和国空軍の夜間戦闘飛行隊4個飛行中隊となっているが、それでもオクラホマ軍事基地に駐留する帝国軍地上部隊の兵力を凌ぐ数なのかと言えばそうではない。

今回、主力部隊をこの兵力数に抑えるに至ったのは、肥大化した軍団の中で細かに指揮統制が取れなくなることを避ける為であり、それだけ不確定要素の強い情報の揺れ動きに対して、迅速な対応を求められると言う事だ。

勿論、後続となる追加兵員については、逐次戦線に投入する事を計画しているが、如何にオクラホマ軍事空港への破壊工作が成功したとしても、この強固な帝国軍陸上部隊を殲滅する事は決して容易な事ではないだろう。

そこで今回、オクラホマ攻略作戦に先立ち、帝国軍兵力を少しでも北方へと引き付けるために、カルッツァ地方に対して大規模な陽動作戦を展開する事を決定した。

この陽動作戦に参加する兵員は、ムルア岬海軍基地に停泊中の共和国艦隊を含め、オクラホマ攻略軍主力部隊に勝るほど大規模なものとなるが、まさに今回のオクラホマ攻略作戦は、トゥアム共和国の今後を左右する重要な一戦となるだけに、軍上層部も出し惜しみなどするつもりも無いようだ。

さて、以上がオクラホマ攻略作戦の全体概要となるのだが、この作戦を成功させるための重要なポイントは、如何に我が軍の主力部隊を無傷でオクラホマ軍事都市まで到達させる事が出来るかである。

サルフマルティア基地からのレイナート山脈迂回コースとなると、必然的に主力部隊はＲＮ－３１９を北上する事になるが、侵攻ルート上ナルタリア湖付近には、帝国軍の秘密基地「パレ・ロワイヤルミサイル基地」が存在していると言われている。

このパレ・ロワイヤルミサイル基地は、その存在こそ明らかにされてはいるものの、グリーンクラッド作戦によって形成された濃密な樹海内に存在しており、詳しい位置を特定するまでに至っていない。

恐らく中距離弾道ミサイル発射台を複数保有していると見られ、この基地に対して何ら対策を取らないまま主力部隊を北上させるのは、非常に危険な事であると言うのが軍上層部の見解だ。

そこで今回、我々ネニファイン部隊に下された指令が、このパレ・ロワイヤルミサイル基地を攻略する事である。

セレナ山、カノンズル山の谷間に当たるこの地域は、車両兵器の投入が困難なほど険しい山岳地帯に加え、多数のフィールド防壁の存在が確認されており、恐らくは森林戦、山岳戦に有効なタイプのDQ部隊が多数配備されていると予想される。

我々ネニファイン部隊のようなDQ専門部隊に取っては、まさに打って付けの作戦任務となるのだが、それでも守備軍が圧倒的に有利とされる高濃度フィールド下での戦闘を余儀なくされる可能性が高いため、諸君等もそのつもりで気を引き締めて作戦に望んで欲しい。

パレ・ロワイヤル攻略作戦の目的は、オクラホマ攻略軍主力部隊に脅威(きょうい)を成す、ミサイル発射台を全て破壊する事にあるのだが、このミサイル発射台は地中への稼動格納式である事が予想される上、今後諜報部から得られる詳細情報についても、何処まで正確な情報をなのか不確定要素が強い。

そこで今回のパレ・ロワイヤル攻略作戦は、ミサイル発射台の破壊を第一目標に据え置きながらも、同基地を完全に制圧する事を最終目標に定める事となった。

勿論、ミサイル発射台は発見次第即破壊する事を義務付けるが、特に保有火器による破壊が困難な場合、後方支援部隊リプトンサムへの支援砲撃要請を小隊長権限で許可する。

パレ・ロワイヤルミサイル基地の制圧には、第七機械化歩兵部隊の投入が予定されており、出来る限り早い段階において、この基地周辺部の帝国軍防衛守備隊を殲滅(せんめつ)する事が、我々ネニファイン部隊に課せられる任務となるのだが、今回このパレ・ロワイヤル攻略作戦

においては、隣国であるリバルザイナ共和国軍の夜間航空支援が受けられる事になっている。

この航空部隊は、主に同地域の制空権を確保する事を目的とした兵員であるが、高い対地攻撃能力をも有しており、適宜（てきぎ）戦況にあわせて柔軟に対応してくれるようだ。

ただし、言うまでも無くこの航空部隊はあくまで他国の兵力であり、当作戦における多大な責務を負わせる事は出来ない。

そのため、この航空部隊に対する要請の全ては一旦ネニファイン司令部を通して判断する事とする。

以上が、我々ネニファイン部隊に与えられた任務の概要である。

次に我がネニファイン部隊の編成を説明する。

＜配布資料一部内容＞

＞Ｎｙｉｆｉｎｅ　ｏｒｄｅｒ＜

Ｎｏ．１　ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｌ－ｆｒｏｎｔ　［ｆｒｏｒ］
ａ　Ｊｏｈａｄａｌ－ｍｏｚｅ　（ｔｗｍａｌｃ）
ｂ　Ｆｒｏｌ－ｃｒｏｃｈｅ　（ｔｗｍａｌｃ）
ｃ　Ｓｅｎｉｆ－ｓｏｎｒｏ　（ｔｗｍａｌｃ）

Ｎｏ．２　ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｌ－ｃｅｎｔｅｒ　［ｇｌａｎｔ］
ａ　Ｂｅｒｎｃｅ－Ｓｃｈｕｍａｃｈｅｒ　（ｔｗｍａｌｃ）
ｂ　Ｓｏｄｏｍ－ｓｐｉｒｉｔｓ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｃ　Ｓｈｏｗ－ｉｍｕｒａ　（ｔｗｍａｌｃ）

Ｎｏ．３　ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｒ－ｃｅｎｔｅｒ［ａｐａｃｈ］

ａ　Ｍｅｄｉａｃｅ－ｅｌｚａｃ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｂ　Ａｇｒｉ－ｓｈｏｒｔ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｃ　Ｂａｌｂａｒｏｃｋ－ｄｏ－ｌｙ　（ｔｗｍａｌｃ）

Ｎｏ．４　ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｒ－ｆｒｏｎｔ［ｃａｒｉｏｎ］

ａ　Ｍａｒｃｅ－ｃｈｅｒｅａｓ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｂ　Ｂｅｌｔｒａｎ－ｇｕｓｔｒｉａ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｃ　Ｕｒａｒａ－ａｋｕｉ　（ｔｗｍａｌｃ）

今回の作戦に参加するメンバーは、配布した資料に記載した通りだが、現時点の作戦詳細プラン３種類全てを網羅する編成とした。

使用する機体については高機動軽量型のトゥマルクを使用する事とし、１小隊３機編成４個小隊を投入する予定だ。

装備火器については、ミサイル発射台の破壊する事を想定して、各小隊毎に必ず高威力キャノン系兵器、またはグレネードランチャーを装備する事を義務付けるが、それ以外については各小隊長、バックアップ担当者とよく協議した上で、自由に選定することを許可する。

また今回は、帝国軍防衛守備隊の多くがＤＱであろう事から、近接格闘戦用新兵器「バーナーランチャー」の装備を認めるが、勿論、初めから近接格闘戦を想定した火器選定は硬く禁止する。

今回の作戦詳細プランは、今後諜報部から得られる情報によって、

大幅に見直される可能性があり、確実にこの作戦プランが実行される保証はないが、それでも様々な戦局に素早く対応できるように、作戦内容をしっかりと頭に叩き込んだ上で、当作戦に望んで欲しい。

それと、戦況の優劣如何によって、追加兵力の投入しなければならないケースも有りうるため、先発隊から外れたメンバーも、常時出撃体勢を整えておくように。

私からは以上だ。

05－11：○ブリーフィングルーム#2［2］（前書き）

カースが希望して転属した先は、陸軍養成学校ではなく陸軍士官学校です。呼び方を統一する為に修正しました。

05－11：〇ブリーフィングルーム#2［2］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ11「ブリーフィングルーム#2」

ひんやりとした早朝の香りがほのかに漂う時間帯。

それほど広くもない殺風景な地下会議室に押し込められた兵士達が、無造作に並べられたタブレットチェアに座り、壇上で熱弁を振るう女性の言葉に耳を傾けている。

夜明けと共に叩き起こされる事となった彼等にとって、込み上げる眠気を完全に押さえ付けるのは困難な事だが、それでも自らの生命に関わる重要な作戦会議の中で、ゆったりと夢見心地気分で過ごす事が出来る者など居ようはずもない。

協調性に事欠いたならず者集団として、蔑視（べっし）的な視線を突き立てられがちな彼等だが、軍属の兵士として常に死と言う恐怖を背負った自らの立場を、少しは理解してると言うことなのだろう。

しかし、そんなピリピリとした張り詰めた空気が会議室内を支配する中、集団の中央部で一人俯（うつむ）く少女だけは、少し様子が違うようだった。

何を見るでもなく。何を聞くでもなく。

完全に自分一人の世界へと埋没した意識を廻らせ、ただ只管（ひたすら）に頭の中で同じ問いを繰り返す少女は、一人では決して出口を見つける事が出来ない迷宮の中を彷徨（さまよ）い歩いていたのだ。

私・・・。昨日、何してたんだっけ・・・。

夜、お酒なんか飲んでいないよね・・・。

朝はシルと一緒だったし、昼はフロルとルーサと一緒だった。

そして、お昼を食べた後アリミアに会って・・・。

・・・そう・・・。そうだよね・・・。

やっぱり最後はあの地下通路だよね・・・。

あの時、男の人に襲われたような気がするけど、自分の部屋で普通に寝ていたって事は、夢だったって事なのかな。

でも、昨日の午後の記憶が全然無い。

起きた時に着ていた服も昨日と違う。

私、いつ着替えたんだろ。

昨日お風呂入ったんだっけか？

と言うより、あんな大きな服。私のじゃないし・・・。

解らない・・・。思い出せない・・・。

でも・・・。でもさ・・・。でもだよ。

これが私の部屋の机の上にあったって事は・・・。

長い作戦会議の間中、その行動は何度繰り返される事となったであろうか。

セニフがゆっくりと自分の左手拳を振り解くと、指の隙間から差し込む微かな光によって照らし出された質素な小物が、彼女の掌(てのひら)を綺麗な紅色で染め上げた。

それは見るからに安物であろう事を窺(うかが)わせる、何の装飾も施されていない紅い2つのヘアピンだったが、彼女はそれが、一体誰の持ち物なのかをよく知っていた。

そして徐に何かを思い立ったような表情で顔を上げると、セニフは密集した集団の最中にその持ち主の姿を辿って、キョロキョロと視線を泳がせるのだ。

しかし、ネニファイン部隊のアタッカーメンバー達、全員の参加が義務付けられている重要な作戦会議内にありながらも、いつもは嫌でも直ぐに見つける事の出来る女性の姿が見当たらない。

何かあったんだろうか・・・。

やがてしばらくして、左手に持ったヘアピンをギュッと強く握り締め、不意に表情を曇らせたセニフが項垂(うなだ)れるように下を向いた。

そして、答えとなるべき完成形を組み上げる為には、明らかに部品となる記憶が足りていない事を知りつつも、彼女は再び一から記憶の断片を組み上げ始めるのだ。

深い眠りの最中から目を覚まし、セニフが今日と言う日を迎えたのは午前三時。

ネニファイン部隊の作戦会議への召集がかかる一時間も前の事だ。

普段から悪夢に魘(うなさ)されて夜中に目を覚ます事はあるものの、まさかこんなにも早い時間帯にすっきりと目覚めてしまうなどと、思っても見なかったのだろう。

セニフはしばらくベッドの上でその不自然な目覚めの余韻(よいん)に浸ったまま、ゆっくりと時を刻む時計の秒針の動きを見つめる事しか出来なかった。

しかし、次第にその理由を探り出した彼女の意識が、整理付かない過去の記憶を漁(あさ)り始めると、彼女の心の中に強く刻印された黒い壁へとぶち当たった。

それはもはや、彼女としては悪夢の一部であってほしいと願うほどの、恐怖心を抱き合わせた衝撃的記憶だったが、悲しくも彼女の記憶の中には、それを完全否定するだけの証拠が存在しなかったのだ。

徐々に青ざめ行く意識の中、挙動不審な視線を周囲にばら撒いてしまった彼女は、やがて、全く見知らぬ大きめのシャツを1枚羽織っているだけの自分に気付き、取り乱したようにベッドから飛び降りた。

そして、沸々と込み上げる恐怖心に苛まれ、震えの止まらない両手にもどかしさを覚えつつも、彼女は着込んだ衣服を全て脱ぎ去って、大慌ててバスルームの中へと駆け込んだのだ。

勿論それは、彼女の記憶を決定付ける為の痕跡が、自分の身体に残されていないかどうかチェックする為であるが、その後彼女は、３０分以上もバスルームの中に篭ったままだった。

（カース）

「以上を持って作戦会議を終了とする。今回はこの後、サルムザーク陸等三佐が見えられる事になっているため、１０分間の休憩を挟んで、再度この部屋に集合するように。それでは一時解散。」

会議室内に立ち込めた重苦しい雰囲気を一掃するかのように、壇上で主導権を握っていた女性が長い拘束時間の終わりを告げると、それまで静寂さを保っていた室内が一様にざわめきだす。

形式ばった堅苦しさを嫌う者が多い傭兵達の集いでありながらも、これほど規律正しく長い時間の沈黙を演出するなど、部隊結成時からは到底想像する事が出来ない現象であるが、彼等もそれだけ生きる事に真面目であると言う事なのだろう。

しかし、僅かではあるがようやく与えられる事になった和やかな一時を前に、いつまでも優等生ぶった自分を演出しているような輩達であるはずも無く、ようやく首を擡げた彼等の持ち味によって、室内は一気に騒然とした雰囲気の波に飲まれ始めるのだ。

（ソドム）

「へぇへぇ。たった10分じゃ何することもできないねぇ。大人しく汚い会議室の壁でも眺めてろってのかな。せめて朝食を取る時間ぐらい調整して欲しいもんだぜ。」

（ルワシー）
「確かに腹ぁ減ったな。おい。おめぇなんか食い物持ってねぇか？」

（ショウ）
「てめぇは飯だけ食ってりゃ幸せなのかよ。本当におめでたい奴だな。」

（ジャネット）
「ユァンラオ。タバコ頂戴。ちょっと1本吸ってくる。」

（フレイアム）
「秘密基地攻略を目的とした作戦にしては、やけに先発隊メンバーの数が少なすぎやしないか？それに前回の作戦もそうだったが、パークメンバーが多すぎる。本当にこんな編成で大丈夫なのか？」

（デルパーク）
「部隊編成については奴が全てを取り仕切っているんだ。俺じゃなく奴に直接質問して来いよ。」

（バーンス）
「リバルザイナの夜間戦闘機と言えばクリュプスか？ヘルコンドルか？まさか旧式ビオーネが雁首（がんくび）揃えて飛んで来るとか無いよな。」

（ジョハダル）
「低速ビオーネなら、降下攻撃時にＡＳＲで撃ち落す自身があるぜ。」

（マース）
「そんなのが飛んできたら、真っ先に逃げるな俺は。」

（ウララ）
「ねぇねぇ。私まだ隊長の姿見た事無いんだけど、どんな人か知ってる？」

（ランスロット）
「そういや、俺もまだないな。どうせなら飛びっきりの美女を期待しちゃうね。甘い言葉で迫られたら、どんな過酷な任務でも、二つ返事で引き受けちゃうぜ。」

（メディアス）
「期待するのはあんたの勝手だけどさ。隊長は男だよ。あんたらみたいな不正規軍人以外は皆知っているのさ。何せ陸軍最年少佐官だからね。まだ子供だけどいい男だよ。」

全く統一性を欠いた雑談が無秩序に撒き散らされる中に晒（さら）されながらも、聴覚に捕らえられた言葉を選別消去するセニフの意識は、まだ自分のだけの世界の中を漂ったままだった。

自分が今、一体何処に居るのかすら検討も付かない広大な迷宮の深遠で。

全く何も見えない、暗黒なる冷たい闇の深遠の中で。

彼女は自分自身の非力さに打ちのめされて、呆然（ぼうぜん）とそこに立ち尽くしていたのだ。

しかしこの時、彼女の左手に握られていたものは、まさしく彼女が捜し求めていたはずのアイテム。

強く激しく拒んだ彼女の稚拙（ちせつ）な想いによって、何度と無く踏みにじられてきたモノだったが、今や彼女にとって、それが唯一の出口を示す暖かな光だったのだ。

セニフはやがて、ゆっくりと吐き出した小さな溜め息と共に、おおよその推測の元で導き出した一つの答えを小さく呟いた。

（セニフ）
「アリミアが・・・。」

助けてくれたんだ・・・。

セニフはそっと再び握り締めた左手の指を振り解き、掌（てのひら）の上で紅く光るヘアピンを見つめた。

この紅いヘアピンは、アリミアがいつも肌身離さず所有していたものであり、長い身体検査の上に何ら確固たる証拠を見つけられなかったセニフが、不安そうな表情でバスルームから這（は）い出した時、机の上に置かれていたのを見つけたものだ。

チームＴｏｍｂｏｙ時代、アリミアと同じ部屋で過ごす事が多かったセニフは、部屋のドアキーと一緒に置かれていたそのヘアピンが、アリミアの所有物である事に直ぐ気付いたが、何故こんな机の上に置かれているのか、その時は全く検討も付かなかった。

しかし今、セニフの脳裏に刻み込まれている記憶を順番に並べ、客

観的視点の元でその道筋を辿り見れば、自ずとそこに一つの事実が浮かび上がる。

1．昨日の最後の記憶は地下通路内で男に襲われた事。

2．昨日の夕方以降の記憶が全く無い事。

3．真夜中とも言える午前三時に目が覚めたと言う事。（それだけ早い時間に眠りに付いたと言う事）

4．自分が下着も付けない状態で、見知らぬシャツを1枚羽織っていた事。

5．自分の身体に外傷のようなものが全く見つけられなかった事。

6．アリミアの所有物であるヘアピンが、何故か目立つように机の上に置いてあった事。

これらの記憶が示す事実。

私は昨日、地下通路の中で倉庫管理者風の男に襲われた。

そしてその後、上着を剥ぎ取られて、何かされてしまった・・・。

勿論、意識を失ってしまった私が、その途中経過を知る事は出来ないけど・・・。

でも・・・。最終的にアリミアが私を助け出してくれたんだ。

よく見れば私が着ていた大き目のシャツも、サイズ的にアリミアが着ていてもおかしくない物だし、何より机の上に置いてあったヘアピンが、最後に私を部屋まで運んでくれた人物を示してくれている。

私が助け出したのよ・・・って、暗にそう示したかったんだろうか。

いやいや違う。違うよね・・・。

もし机の上にアリミアのヘアピンが無かったら、私はずっとあのまま、不安な気持ちで震えていたかもしれない・・・。

最後にアリミアが私を助けてくれたって言う証拠があったから、私は少し安心する事が出来たんだ。

アリミアが私を寝かせて、そのまま立ち去った事から考えれば、多分そんなに酷い事まで・・・。されなかったんだろうなって思えるし・・・。

でも、そしたら何で、助けた時に私を起こしてくれなかったんだろう。

私が昨日、酷い事を言っちゃったからなのかな・・・。

私、あんな言葉まで投げつけるつもりなんて・・・無かったのに・・・。

（ジルヴァ）

「ねぇねぇ。あんたさぁ。こないだディップ・メイサでバスターマ

ンティス落としたんだってねぇ。」

（セニフ）
「・・・？」

そんな時、セニフの閉じられた意識を軽くノックするように、左肩付近を後ろから軽く小突いた女性が、可愛らしい透き通った声色でセニフに問いかけた。

名前を「ジルヴァ・ディロン」と言うその女性は、セニフよりも少し背丈が高い程度の小柄で可愛らしい容姿をしており、空席になった目の前の椅子にどっかりともたれ掛かると、不思議そうに振り返ったセニフの表情をマジマジと見つめていた。

（ジルヴァ）
「パーク民出身なのに二戦連続フォワード登録されるなんて、一体どんな奴なのか顔を見てみたかったんだ。へぇ～。」

（セニフ）
「あ・・・。いや・・・。・・・それほどでも・・・。」

（ジルヴァ）
「別に褒めてなんかないよ。」

おおよそ誰が見ても、一瞬はその視線を奪われてしまうであろう綺麗な顔立ちに、優しく温和な笑みを醸し出す彼女であるが、この時セニフへと投げつけられた言葉には、明らかに悪意たる意思が込められている。

彼女はその優しげな見た目とは裏腹に、荒々しい性格の持ち主であ

り、その歯に絹を着せぬ言動から、軍内部では、しばしばトラブルを引き起こす問題児と見なされていた。

彼女がこんな寄せ集めの新設部隊に転属になったのも、その辺の事情に由来している事と推測できるが、それでも彼女は軍人たる能力に秀でた、優秀なＤＱパイロットの一人なのだ。

（ジルヴァ）
「あんたさぁ。作戦会議中、ずっとボケッとしてただろ。戦場を舐めんなのもいい加減にしろよな。ほんとやる気あんのか？どんぐらい戦争ゴッコして遊んできたか知らないけど、でかいの一機ぶち落としたからって、ゲームみたいに簡単にレベルアップするわけじゃないんだぜ。本気で作戦に挑む心構えがないなら、部屋の隅でせっせと床でも磨いてな。てめぇの面倒を見なきゃならない他のメンバー達の迷惑も、少しは考えやがれ。馬鹿野郎が。」

（セニフ）
「あ・・・。・・・う。ごめん・・・。」

（ジルヴァ）
「謝って済むぐらいなら、世の中誰も不幸になんかならないんだよ。戦う志ももたない糞餓鬼が、ホイホイ戦場に出張って行って、意味も無く相手を殺しまくるってか。ひでぇ時代になったもんだぜ全く。てめぇは快楽殺人者かよ。」

（セニフ）
「そ・・・。そんな事・・・！」

（バーンス）
「おいジルヴァ。そのぐらいにしとけ。」

（メディアス）
「あんまし子供を虐めたら可哀想だよ。」
天使のような笑顔から吐き出される死神の鎌のように鋭い言葉が、容赦なくセニフの心へと突き刺さる。
確かに仲間の命をも左右する一蓮托生（いちれんたくしょう）の関係の中にあれば、甘えや油断を抱く者に対して、時に厳しく指導することは必要なことかもしれない。
しかしこの時、ジルヴァの放った言葉の中には、厳しき指導以上に相手を貶（おとし）める様な、大量の毒が含まれていた事は確かだ。
それが彼女が彼女たる所以（ゆえん）なのだろうが、それでも彼女が吐き付けた毒の霧は、向けられた対象者だけでなく、周囲の空気をも黒く汚染するほどの毒性を有しているため始末が悪い。
この時、さすがに彼女の性格をよく知る同僚のバーンスとメディアスは、それ以上の事態の悪化を避けるため、即座に彼女を窘（たしな）めにかかったのだが、体中に導火線を巻きつけた彼女の怒気は、更なる激しさを増して爆発してしまった。
（ジルヴァ）
「お前等本気でこんな餓鬼の御守りで死にたいのかよ！戦い方すらろくに知らないド素人共の集まりだぜ！？手枷足枷（てかせあしかせ）で縛られた状態で、どうやって作戦任務をこなせって言うんだよ！現にワイハーンとハインハートルは死んでしまったんだぞ！私は大昔の奴隷剣闘士になんてなるつもりは無い！」

ジルヴァは勢いよく椅子から立ち上がると、小さな体躯ながらも会議室内を支配していた騒々しさを、完全に一掃するほどの怒りを込めて、周囲に強い不満を吐き散らした。

可愛らしい顔を必死の形相で歪め、激しい攻撃的意思を放つこの女性を前に、その怒りの爆発を誘発させる原因を作り出したセニフは、脅えたように身体を仰け反らせてしまったのだが、ジルヴァが真に抱く不満の矛先は、どうやらセニフに直接向けられているものではないようだ。

やがてジルヴァは、全く物怖じもしない様子で両腕を組むと、自分の元へとゆっくりと歩み寄って来た一人の女性に対して鋭い視線を突き付けた。

（カース）
「ジルヴァ陸等三尉。何事だ？私の作戦プランに何か不満でもあるのか？」

（ジルヴァ）
「ああ。大有りだね。」

この騒ぎを聞きつけてやってきた女性とは、ネニファイン部隊メンバー達全員を管理する立場にありながらも、派手な身なりが特徴的な「カース・イン・ロック」作戦軍曹だ。

軍階級的に比べて見れば、ジルヴァの方が3階級も上と言うことになるのだが、それでも作戦参謀本部出身を示す特別階級を持つカースは、軍内部でも扱いが別格となる。

それは、作戦参謀本部という部署が、超が付くほど有能な人材が集

結する特別な組織である事に由来し、本来、カースほど優れた能力を有する人物であれば、今頃は部隊長であるサルムザーク陸等三佐よりも上位階級を与えられ、大部隊を動かす権限を有する者を補佐する立場にあったかもしれないのだ。

今現在、彼女の階級が「作戦軍曹」程度で止まっているのは、早い段階に指導員を希望して陸軍仕官学校へと転属してしまった為であり、更に一度軍を退役した事によって、エリートだけが歩める出世への道を、外れる事になってしまったのだ。

しかし、復役と共にネニファイン部隊と言う流刑地に追いやられてしまった経緯（いきさつ）はどうであれ、彼女が有能な人材であるという軍部内の認識に変わりは無く、彼女は「作戦軍曹」と言う特別階級を与えられる事となったのだ。

一方、ジルヴァの方はと言えば、陸軍幼年学校を経て陸軍仕官学校を優秀な成績で卒業した、将来有望な仕官の一人であったのだが、彼女の持てる有能さを全てぶち壊すほどの素行の悪さから、どの部隊でも扱いに困る厄介者としてのレッテルを貼り付けられていた人物である。

彼女は今だ２５歳という若さながらも、このネニファイン部隊で３１回目の転属を迎え、その見た目の可愛らしさと様々な部隊を渡り歩く事から、「白鳥」とも揶揄（やゆ）されるようになっていた。

参謀本部出身エリート鬼軍曹　ＶＳ　僻地最凶の核弾頭スワン

まさにこの時、周囲の風評に揺り動かされる事無く、良し悪しは別

としても己の生き方を貫き通してきた二人の女性が、狭い会議室内で笑えない対立構図を醸し出すと、この二人を中心として自然に作り上げられた円陣から、興味津々な熱い視線が注がれる事になる。

しかし、周囲ぐるりを囲んだ群衆達の期待とは裏腹に、この後の二人のやり取りは、一方的な展開を持って勝者を決する事となってしまった。

（ジルヴァ）

「今回のパレ・ロワイヤル攻略作戦は、トゥアム共和国の今後を左右する、重要な作戦の前哨戦とも言える戦いのはずだ。そんな失敗の赦(ゆる)されない重要な作戦を、こんなパーク上がりのド素人共に任せられる訳ないだろ？小隊長以外をパーク民で構成した部隊なんて、たちの悪い冗談にしても限度があるぜ。そんな寄せ集め部隊が戦場で効果的に機能するとでも思ってんのか？」

（カース）

「別に冗談でこの作戦プランを作成したつもりはない。確かにお前の言う事にも一理あるが、この作戦を左右する情報に不確定要素が強い分、初戦に全てを賭けるような構成を避けたまでだ。」

（ジルヴァ）

「初戦を捨ててまでして最終的な勝利を掴(つか)み取るか。てめぇら駒を使う側が考えそうなプランだぜ。こんな使えないド素人共を引き連れて、戦場を這いずり回らなきゃならない私達の事は、どうでも良いってのかよ！」

（カース）

「私は特にパーク上がりの傭兵達が無能だとも低能だとも思ってはいない。寧(むし)ろ中には正規軍人に勝るほどの技術を有した、優秀なパ

イロットもいると思っている。お前達正規軍人に有って彼等に無いものは、軍隊と言う集団の一部として戦う意識と、戦場における実戦経験だ。しかも、お前達でさえ国境付近での小さな小競り合い以外に、大規模な戦闘を経験した者は少ない。正規軍人として有事に備えて日々訓練をつんでいるとは言え、ほとんど実戦経験のないお前がとやかく言えた立場ではないと思うがな。」

（ジルヴァ）
「戦場で一番大切なのは、個々の戦闘能力以上に周囲との連携力だ！幾らこいつ等のＤＱ操舵技術が優れていようと、戦術訓練すらまともに受けていないような人間が、全体の３分の２も占めていたら、部隊として成り立たない可能性が高いだろ！」

（カース）
「見た目と違ってお前も中々理解しているんだな。部隊全体での戦術訓練が満足に行えなかったのは、ネニファイン部隊新設に差し当たって、お前達正規軍人の早期召集を軍上層部に拒否されたためだが、その分パークメンバー同士の連携訓練は、それなりに十分実施したつもりだ。各小隊に編成したメンバーも、その時最も相性のよかった組み合わせを優先して選択している。本来であれば、大々的に全体戦術訓練を行う事が望ましいのだが、帝国軍にリトバリエジまで侵攻された現状では不可能な事であり、彼等に無理なく戦闘経験を積んでもらうための、無難な戦場を選択する事も出来ない。」

（ジルヴァ）
「それじゃせめて今回の作戦ぐらいは、正規軍人を主体として連携力を重視した編成に・・・。」

（カース）
「勿論、我々も部隊の現状を踏まえた上で、お前達正規軍人を主体

とした部隊編成案を幾つか思案しては見た。しかし、前回のディップ・メイサ・クロー作戦の時の様に、部隊が全滅の危機に瀕する状況も想定しておかなければならない。この場合、後続となる援軍部隊にも部隊を統率する小隊長が必要だ。現在の我々の人員構成から見た場合、圧倒的にお前達正規軍人の方が少数派となる。部隊の効率的運営を考えた場合、どうしてもお前達正規軍人の分散化は、やむを得ない状況なのだ。」

（ジルヴァ）
「・・・。」

（カース）
「更に先を見据えて言うのなら、今回の作戦でオクラホマ軍事都市を攻略すれば戦争が終わると言う事でもない。我々は今後もトゥアム共和国軍の部隊として、戦っていかなければならない立場なのだ。そのためには部隊構成員全員のスキルアップと連携力向上が必要不可欠であり、お前達正規軍人達には、パーク出身者達が一人前の戦士として戦える様になるまで、彼等の統率者として厳しく指導にあたって貰いたい。そのための環境と準備は我々の方で出来る限りしてやるつもりだ。今回の作戦に関する編成については、山岳地帯での密林戦戦闘と言うことで、細かなＤＱ操舵を得意とする者達を選別した。勿論、これで完璧と言う答えは無いし、どんなに優れた者であっても、戦場で生き延びると言う事は決して容易な事ではない。しかし、この編成に関しては、私がそれなりの構想の上で導き出した答えなのだ。何ら大きな問題を孕んでいるとは思っていない。以上の説明を持ってしても、まだ不満があるか？ジルヴァ。」

両者ともに正論となる主張を抱き、面と向かって真正面から激しくぶつかり合った二人だが、全く勢いが衰える事無く論説を繰り広げたカースに対し、ジルヴァの威勢の良さは時間とともに尻窄んで行

った。

強く抱いた不満を爆発させるように感情的な言動を投げつけはしたものの、ジルヴァはそれほど無能者でもなければ偏屈者でもない。

それは、カースに示された理論的組み立てからなる説明に対し、少なからずある一定の理解を示したと言う事なのだろう。

しかし、やはりその性根が捻じ曲がっているのか、素直には己の敗北を認めないところも、彼女らしいと言えば彼女らしい。

（ジルヴァ）

「結局、都合のいい御託を並べて、面倒事を全部私達に押し付けようってんだろ？随分と虫のいい話だな。」

（カース）

「どう理解して貰っても構わないが、これでも私はお前達の能力を信用しているのだ。私とてネニファイン部隊メンバー達全員を個別に指導する事など出来ないし、軍隊というピラミッド型組織の中にあって、どうしても彼等をまとめ上げるチームリーダー的存在が必要だ。今後、お前達正規軍人達をリーダーとした小隊の編成を固定化する必要性は感じているが、与えられた作戦任務応じて、その時その状況に見合うメンバーを制限無く選抜するために、あえて現状の体勢のまま突き進む事も考えている。その場合、無作為に選び出された小隊メンバーをまとめ上げる、お前達に相当な負荷がかかるかもしれないが、そこはお前達の能力に期待したい。やってくれるな。」

（ジルヴァ）

「ちっ・・・。はいはい。解りましたよ。カース作戦軍曹殿。こん

な爪弾(つまはじ)きの寄せ集め部隊を率いなければならない、あんたの苦労も解らなくも無いしね。お互い悲しき軍属の身。縦社会のルールには従うさ。」

自らが先頭を切って、その縦社会に噛み付こうとした人間が、一体今更何を言い出すのだろうと、周囲に屯(たむろ)した群集達の中には、不思議に思った者もいたかもしれない。

しかし、この時彼女が言いたかった「縦社会のルール」とは、何も上位者から一方的に与えられる指示を、下位者がその疑いも持たずに実行に移す、ある種の主従関係だけを示しているのではない。

確かに軍隊と言う特殊な組織の中にあり、上位者から与えられた任務に不満を抱いたからといって、下位者がその任務を投げ出すような事があってはならないが、特に過酷な戦地での任務を余儀なくされる下位者たる立場の者からすれば、与えられる指示にはそれなりの理由と明確な説明を要求したいと言う事なのだろう。

ジルヴァはこれまで、転属を繰り返した行く先々で、様々な問題を引き起こす事にはなったが、その多くは然したる理由も無く下される指示に対しての反発心から、上官と激しくやり合う事になってしまったからである。

軍部内で特に扱いが難しいと称されて来た彼女だが、そう言った意味では何ら問題の無い真面目な人間という事なのかもしれない。

カースはこの小柄な女性を客観的視点からそう評価すると、何処か自分と同じような匂いを感じ、少し口元を緩めてしまった。

（ジルヴァ）

「なんだなんだてめぇら!?見せモンじゃねぇぞ!ほら散れっ!散れっ!糞野郎共が!!」

それにしても、この素行の悪さはどうにかならないものなのだろうか・・・。

近くにあった椅子を思いっきり蹴り飛ばし、周囲をぐるり囲んだ群衆に向かって、躊躇(ちゅうちょ)無く汚らしい暴言を吐き散らす可愛らしい女性の姿に、カースは不覚にも緩めてしまった口元から大きな溜め息を吐き出すこととなった。

そして、軍部内でも取り扱いに困る異端児達に協調性の無い素人傭兵集団を加えた問題部隊「ネニファイン」の前途多難な険しい道のりを見据えて、幻滅した表情でやり場の無い視線を外へと逃がすのだ。

(カース)
「・・・?・・・三佐。」

やがてカースは、会議室無いの出入り口付近へと移した視線の先に、一人の若い男性の姿を見つけると、その人物の持つ軍階級呼称を小さく呟きだした。

05－12：〇ブリーフィングルーム#2［3］@（前書き）

ネニファイン部隊の人員構成に関して、少々手落ちがありました。
以下の点を修正します。
ストーリーに影響はありません。
旧：我がネニファイン部隊の約7割が
新：我がネニファイン部隊の約9割が

05－12：○ブリーフィングルーム#2［3］@

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ12「ブリーフィングルーム#2」
＞ｉ4831＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞827＜
＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞サルムザーク＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞
「ん？なんだ？何かあったのか？」

サラサラとした綺麗な黄緑色の髪をなびかせ、ゆっくりと狭苦しい会議室内へと姿を現した若い少年は、部屋に入るなり思わず怪訝（けげん）な表情を浮かべてしまった。

それまでこの会議室内で、一体何が有ったのか知る由（よし）もない彼にとって、部屋の中央部で不思議な陣形を作り出す群集達に、一種異様な雰囲気を感じてしまった為であろうが、それ以上に一人の女性が発した一言によって、彼等の視線が一気にこの少年へと集中してしまった為でもある。

トゥアム共和国軍最年少佐官として、周囲の好奇な視線に晒（さら）される事には慣れていた彼だが、それでも不気味に息を合わせた様に浴びせかけられた彼等の視線に、少し辟易（へきえき）してしまった事は確かだ。

（カース）
「あ・・・。いえ・・・。ほら皆、休憩時間はもう終わりだ。早く席に着け。廊下に居る者達も中に呼び入れろ。」

やがて、そんな彼の表情に気がついたカースは、内心少なからず責任を感じてしまったのか、何処か慌てた様子で部隊メンバー達に席に着くよう促した。

そして、あたかも何事も無かったかのように装いつつ、サルムの元へと歩み寄ろうとしたのだが、ふと彼が背後に二人の人物を引き連れている事に気がつくと、驚いたような表情を浮かべてしまった。

（カース）
「ピエトロ一佐・・・。」

（ピエトロ）
「よう。久しぶりだねカース。元気だったかい？」

この二人の人物の内、深緑色の長い髪に優しげな釣り目が特徴的な女性は、ネニファイン部隊の通信オペレーター兼秘書官の「チャンペル・シィ」であり、常にサルムと行動を共にする事が多い職種柄、特にカースが驚くような事はない。

しかし、もう一方の品位漂う髭を蓄えた大柄な男性はと言えば、ネニファイン部隊の個別作戦会議に顔を出すような人物ではなかった。

彼の名前は「ピエトロ・トレイモイユ」。

サルムザークよりも2階級上の陸等一佐の階級に属するこの人物は、「リプトンサム部隊」や「チッチル部隊」を統括する後方支援部隊の長たる大物だ。

温和な性格の持ち主として知られる彼の物腰の柔らかさは、軍部内でも評判になるほどであり、時にお人好しとも揶揄（やゆ）されるその優し

さは、まさに軍人たる厳しさと威風を完全にかき消しているようにも見受けられる。

しかし彼は、３６歳と言う若さで複数の部隊を管理する、連隊長と言う肩書きを持った有能な指揮官の一人であり、軍内部の組織や対立関係と言う垣根を越えて、誰からも頼りにされる好人物であった。

一体、何処でどの様な繋がりが有ったからなのかは解らないが、この時、そんな頼もしいホワイトナイトを引き連れてやって来たサルムに、カースは懐疑的な視線をぶつけてしまった。

（カース）
「三佐。何の悪巧みですか？」

（サルムザーク）
「まあ、そう言うなよ。とりあえず話を聞いてくれ。」

サルムはゆっくりと会議室の壇上へと歩み寄る過程で、チラリとカースの方に視線を向けると、ふざけた様に右手を振り翳して穏やかな言葉を彼女へと返した。

サルムとしても、ある程度事前に予測できた彼女の反応を、出来る限り和らげようと試みた行動だったのだろうが、嘘を付けない彼の瞳の奥に、何処か普段とは違う不自然さを感じ取ったカースは、すぐさまピエトロの顔色を覗き込んだ。

しかし、優しげな雰囲気を保ったまま、ニッコリと笑みを浮かべたぴエトロは、何も言わず壇上へと向かうサルムの方を指差して見せるだけである。

詳しい内容は部外者たる自分からではなく、彼自身から聞けという事なのだろう。

サルムは確かに優秀な士官の一人に違い無かったが、それでも軍務に忠実で勤勉な努力家などではない。

それは、彼のネニファイン部隊におけるカースへの依存度を見れば、誰が何を言わずとも明らかな事ではあるが、彼はどちらかと言えば、他人に任せられる事は全て他人に任せてしまい、自分は常に楽をしようと考えるタイプの人間だ。

勿論、カースはそのような有能な怠け者こそ、指揮官として相応しい人物である事を知っていたが、この時の彼の働き者ぶりが、彼女に強い警戒心を植え付けてしまった事は確かだ。

彼が自らの重い腰を上げて行動を起こすと言う事は、彼が自ら行動を起こさなければならない状況に陥っていると言う事の証であり、彼が作戦会議の後で顔を出すと言った時から、少なからず疑念を抱いていたカースだが、まさかこのような人物を引き連れてくるなど、思っても見なかったのである。

やがて、会議室の壇上へと続く短い階段を軽やかに上り終えたサルムは、水を打ったように静まり返った室内を見渡した後で、堅苦しさを匂わせない言葉から切り出した。

（サルムザーク）

「さてと。部隊結成から1ヶ月近く経とうと言うのに、初めましてじゃ部隊長として格好がつかないが、俺が諸君等を取りまとめるネニファイン部隊隊長、サルムザーク・ハイフィリツ陸等三佐だ。実際にこうして面と向かって会うのが初めての者もいるだろうが、俺

も堅苦しいのは余り好きな方じゃない。適当に座って聞いてくれ。」

綺麗な緑色の瞳を周囲に振りまいて、会議室内の主導権を手にした若者が、今だ立ち尽くした者達に軽く右手を振って着席を促す。

しかしこの時、そんな彼の隔たりの無い言葉に従って、即座に動き出したのは正規軍人達のみであり、セニフをはじめとするＤＱＡ上がりの傭兵達の多くは、壇上に立つ若者へと不思議そうな視線を据え付けたままだった。

それは勿論、事前に聞かされていた事とは言え、ネニファイン部隊の長たる指揮官が、こんな２０歳にも満たない若造であるなどと、彼等も予想していなかったからなのだろうが、それ以上に彼等の意識を捕らえて離さなかったものとは、彼のその容姿にこそあったのだ。

（サルムザーク）
「どうしたんだお前等？立ったまま話を聞くつもりなのか？」

（セニフ）
「シル・・・？」

それは、セニフが思わず発してしまった言葉の示す通り、この若い司令官の風貌から、全く別の少年の姿を連想してしまった為であり、事前にネニファイン部隊のバックアップ担当者シルジークを知っていた者達は皆、一様に同じ疑念を抱いてしまったのだろう。

確かにこの二人を並べて比較してみれば、その髪の毛や瞳の色合いの違いから、簡単に各々を識別する事は可能なのだろうが、シルよりも若干、緑がかった程度の色合いを基調としたサルムの風貌は、

まさにシル本人として見間違えても決して不思議ではない程、酷似していたのだ。

やがてサルムは、一人の少女の発した言葉に誘われて、ようやく彼等の視線に含められた疑念の真意を理解すると、小さく溜め息を付いたついでとばかりに、蛇足的説明を付け加えた。

（サルムザーク）

「ん？ああ・・・。そうか。そう言うことか。表立って公言するまでも無いと思っていたが、別に隠す必要も無いしな。つまらん事実だが、あえて説明すれば、俺とバックアップ担当のシルジークとは双子の兄弟だ。まあ、俺はそれ以上説明するつもりは無いし、聞いたところでお前等には何の得も無いだろう。さあ、もういいだろう？座ってくれないか？」

双子・・・の兄弟？

そ・・・そうだよね。

雰囲気が一緒だったから、一瞬戸惑ったけど、よく見れば全然シルとは違う人だ。

うん・・・。全然違う人。

でも、双子の兄弟がいるなんて、シルから聞いた事もない・・・。

どっちがお兄さんなんだろ。

私って、やっぱり・・・。シルの事、全然知らないんだな・・・。

抱いた疑念を払拭するだけの完全な回答を示されて尚、無性にやきもきした気分に苛まれてしまったセニフだったが、やがてガタガタと小うるさく椅子を鳴らして着席した周囲の動きに合わせる様に、彼女もまた椅子の上へと腰を下ろした。

そして、会議室内にいるネニファイン部隊メンバー達全員の視線をかき集めるように室内を見渡したサルムは、少し真面目な表情を醸し出して、ゆっくりと話し始めた。

（サルムザーク）

「今回俺がお前達の前に姿を現したのは、パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦の詳細内容を説明するためでも、部隊内の士気を高めるためでもない。どちらかと言えば部隊内、いや、軍内部の動きに関する後ろ向きな内容となる。現在、我がネニファイン部隊の約9割が、有事の際の傭兵契約によって集められた新兵と言う事になるが、この誓約書の内容によれば、お前等傭兵達は今後2年間の間、軍務を真っ当しなければならない事になっている。勿論、各作戦毎に与えられる作戦報酬を積み重ねる事によって、契約残期間に応じた違約金をクリアすれば早期除隊という道も開けるが、それでも契約期間内は、我々の命令に従わなければならない義務があるのだ。しかし、如何に指揮命令権の全てが俺の手に委ねられているからとは言え、ＤＱパイロット、ＤＱ整備士以外の任務をお前等に課す事は出来ない。それは誓約書の第二条第三項に記載されている、「ＤＱパイロット、もしくはＤＱ整備士として」という、文面に制限されるものであり、正規軍人達には無い、お前等傭兵達だけの唯一の特権なのだ。まあ、俺には元々お前等を非効率な不得意分野で起用しようなど、意味を成さない以上に有害な愚行を犯すつもりなど無かったのだが、今回、我がネニファイン部隊の傭兵起用法を巡って、

ある重大な問題が発生した。中には気付いている者がいるかも知れないが、実はこの作戦会議において、一人のアタッカーメンバーが欠席している。それがアリミア・パウ・シュトロインだ。彼女は昨日１８：００を持って、ネニファイン部隊から諜報部第三課に、転属扱いとなったようなのだが、軍上層部から俺の方に正式に通達があったのが昨日２３：００頃。部隊長である俺にすら何の断りも無く、突然、彼女は諜報部に引き抜かれる事となってしまった。」

（セニフ）
「えっ・・・！？」

セニフはこの時、壇上から発せられた友人の名前に、何処か不穏な空気が忍び寄る気配を感じ取ると、転属と言う二文字が放った衝撃的事実によって、思わず驚きの声を吐き出してしまった。

そしてそれは、この会議室内に集まったネニファイン部隊メンバー達は勿論、その事実を今だ知らされていなかったカースも、驚きの表情を隠しきれなかった。

（サルムザーク）
「確かにお前等傭兵達は、トゥアム共和国軍との間に結ばれた契約によって、軍上層部から下される命令に従わなければならない義務があるが、誓約書上にも記載されている通り、ＤＱに関係する軍務以外を強制される義務は無い。もし、今回のような事例を一度認めてしまえば、今後お前等傭兵達は、何の制限も無く軍務に駆り出されるという、非常に危機的な状況を招きかねないのだ。俺は即座に彼女の転属問題に関して、軍上層部に異議を申し立てたのだが、特佐権限命令書付きの特別決定事項に当たる為と言うふざけた理由で、全く取り入れてもらえなかった。俺は今回の彼女の転属を絶対に認めるつもりはないし、強引に彼女を引き抜きにかかった軍上層部の

決定は、お前等傭兵達に対する重大な契約違反に当たると思っている。そこで俺は、彼女の転属問題に関して、特佐権限を行使したヘイトーゼ特佐に直接問いただしてみた。するとヘイトーゼ特佐自身、そこに契約違反となる問題の存在を認識しながらも、彼女本人の同意が得られたため、転属に関する命令書を発行したと言う事だった。」

（メディアス）
「本人の同意があって、軍部の承認が得られれば、特に問題は無いんじゃないの？それに諜報部に引き抜かれるなんて、彼女にとっても名誉な事じゃないのさ。」

（サルムザーク）
「お前はあの部署がどういうものなのか知っているのか？」

淡々と状況の説明を重ねるサルムに対し、麻色の短髪を軽く掻き乱していたメディアスがタイミングよく横槍を入れる。

しかし、話の腰を折られた事に対する怒りでは無いにしろ、サルムの放った言葉の中には、最も強い怒気が込められているようにも感じた。

軍部内では掃溜めとも言われるネニファイン部隊の中にあって、諜報部と言う戦闘のエキスパート達が集結する部署に引き抜かれるなど、彼女のような一般兵士からすれば、まさに栄転とも言うべき人事にも見えたのだろう。

しかし、サルムの不穏な含みを持たせた問いかけに対し、外見の良い偽りのイメージを持って包み隠された、諜報部の真に黒い活動内容を知らないメディアスは、短く「いいえ」と返答するしかなかっ

た。

（サルムザーク）

「トゥアム共和国軍とお前等傭兵達との間に結ばれた契約に関しては、確かにお互いの同意を持って、その条項を見直す事は可能かもしれない。しかし現在、お前等傭兵達に対する指揮命令権を与えられているのは、ネニファイン部隊長の俺自身であり、その俺の判断、決定無くしてネニファイン部隊の人事に手を出す様な行為は、軍部内の組織構成上、決して有ってはならない事なのだ。これに関しては、ヘイトーゼ特佐から素直に謝罪の言葉があったのだが、だからと言って俺は、彼女の諜報部転属を簡単に容認する事は出来ない。現在、同意書に書かれていた彼女のサインの筆跡鑑定を依頼中だが、それが捏造（ねつぞう）された物ではないと言う確証が得られたとしてもだ。ヘイトーゼ特佐と彼女との間に、一体どのようなやり取りがなされたのか解らないが、それでも部隊長である俺を差し置いて勝手に話を進めた事からも、そこに何か後ろ暗い取引があったと見て間違いないだろう。この問題に関しては、まず俺自身が直接彼女にその真意を確認し、その上で確かに彼女自身に転属を認める意思があるなら、俺も彼女の転属を認めざるを得ないと思っている。しかし、俺が彼女への面会をヘイトーゼ特佐に求めたところ、彼女は既に、諜報部工作員として任務を遂行するため、ビナギティアへと飛び去ってしまった後だったのだ。それも、今回のオクラホマ攻略作戦における先行工作任務と言う、非常に危険な任務を背負わされた上でだ。勿論俺は、即座に彼女を呼び戻すよう強く要求したのだが、その時点で既に、彼女が出発してから6時間以上が経過しており、もはや現地へと潜入した工作員と連絡を取る事は、逆に彼女の立場を危うくするため不可能だと言われた。これはもう、ある種の確信犯的思考が、既にあの猿親父の中に有ったと言う事なのだろう。」

サルムはもはや、呼称や人名すらを排除した悪意のある揶揄（やゆ）を用い、

激しい怒りをその言葉に中に込めて発した。

そして、彼の脇に佇んでいた、おしとやかな女性に向けて何やら目線で合図を送ると、少しだけ時間的間を置いた後で、ようやく今回の本題である話へと突入を開始した。

（サルムザーク）

「俺は彼女がまだネニファイン部隊の一員であると言う認識だ。ネニファイン部隊メンバー全員の命を預かる立場の者として、相手が軍上層部であろうと、特佐権限を持つものだろうと、この点において一歩たりとも譲歩するつもりは無い。現時点で彼女を連れ戻す事はもはや不可能な事であるが、それでも彼女の転属に関する問題は、彼女が任務を終えて戻ってきた後で、再度協議するという形で、猿親父に一旦保留させた。勿論、彼女が無事に帰還できる保証など何処にも無いのだが、出来る限り彼女の身の安全を図るため、任務終了後の彼女の退路を確保する特別回収チームを派遣する事を奴に約束させた。」

やがてサルムは、背後に聳える巨大なスクリーンから、ゆっくりその身を退けると、チャンペルの操作によって映し出された、戦術画面を見上げながら言葉を続ける。

（サルムザーク）

「しかし、そこで一つ問題となってくるのが、完全に帝国軍の支配下にあるオクラホマ都市に、如何にして特別回収チームを派遣するかと言う事である。今回トゥアム共和国軍が発動したオクラホマ攻略作戦は、非常に不安定な情勢によって揺れ動く可能性があり、オクラホマ攻略軍本隊の足枷となるような、軽率な行動を取る事は出来ないが、この特別回収チームの進入経路と工作員回収後の退路を確保するため、俺は軍上層部に新たな作戦プランを提案するつもり

だ。勿論、堅物が多い軍上層部において、俺の様な佐官成り立てのド新人の提案が素直に受け入れられるはずも無い。そこで、次回の全体作戦会議の冒頭で、まず諜報部の方から正式に特別回収チームに対する支援要請を提示してもらう事になった。そして更にその上で、今回の作戦プランの発案者をピエトロ一佐と言う事にして、彼の方から軍上層部に提案する事をお願いした。」

なんとまあ・・・。

長い指揮官の話の中で、ようやくこの大物仕官を連れ込んだ理由が示されると、カースは小脇で変に照れ笑いを浮かべた年長者に対して、何処か白々しい視線を彼に突き刺してしまった。

（ピエトロ）
（そんな目で見ないでくれよ。君を抜きにして考案したにしては、中々良い物に仕上がっていると思うよ。作戦が成功したら彼の功績。失敗すれば俺の責任さ。君としては涙が出るぐらい嬉しい配慮だろう？）

（カース）
（何でまた、あの子とそんな危ない橋を渡る約束をしたんです？御自身の立場と言うものを、もう少しお考えください。）

（ピエトロ）
（なぁに。彼の抱き持った大いなる志に感動したまでさ。）

（カース）
（ご立派です事。でも、そうやっていつも真意をはぐらかす所は、以前と余り変わり無いようですね。）

（ピエトロ）
（君も頑固に自分を突き通す性格は直っていないんだろう？お互い様さ。）

決して周囲の者達に聞こえない様にして、小声でやり取りされた二人だけの会話は、何処か公人たる垣根を排除した親密性の漂うものだったが、カースにとってそれは、余り居心地の良いものではなかったのかもしれない。

カースはこのお人好したるピエトロに向かって、大きな溜め息を付いて見せると、そんな雰囲気を強引に振り解くかのように普段通りの自分を強く意識して、壇上へと視線を立ち返らせた。

05－13：○ブリーフィングルーム#2［4］

第五話：「平行線の彼方に」
ｓｅｃｔｉｏｎ13「ブリーフィングルーム#2」

カースは内心、このようなサルムの独断的行動に対して、まずは部隊参謀たる自分に相談が有って然るべきではないのかと、少なからず不満を抱いてはいたが、この時点まで彼女が黙って話を聞いていたのも、事前にピエトロにそう促された為だ。

勿論、彼の話の中に少しでも不可解な点があれば、直ぐにでも噛み付く心積もりで居たわけだが、ここまでの話を聞く限り、特に彼女の攻撃性を刺激するような内容が含まれていた訳ではない。

寧ろ、彼が何故ここまで必死になって行動を起こしたのかと言う、彼女の疑念を払拭（ふっしょく）するだけの明確な理由が示された訳だし、彼が新たに作成したという作戦プランについても、一度、軍上層部の全体作戦会議を通すと言うのであれば、彼女としても何も言う事は無い。

しかし、壇上の大型スクリーンの画面を切り替えて、新しく作成したプランの説明へと移行しようとしたサルムに、彼女はふと抱いた疑問を投げかけてみた。

（カース）
「三佐。一つ質問してもよろしいでしょうか。」

（サルムザーク）
「なんだ？」

（カース）
「今回、我々ネニファイン部隊のメンバーが強引に引き抜かれた事。そして、それに対する三佐の思いも、これからなさりたい事もある程度理解できました。ですが、まだ全体会議で承認されていない作戦プランを、現時点で各隊員に説明する必要は無いと思うのですが。それとも何か、もう一つ裏に思惑でもあるのですか？」

（サルムザーク）
「ん。・・・うーん。」

するとサルムは、このカースの何気ない質問に対し、なにやら難しい表情で考え込んでしまった。

部下達の目の前であるにもかかわらず、両腕を組んだままじっと天井を見上げて考え込む姿は、少し上官としての威厳（いげん）を損なう滑稽（こっけい）な行動に見えなくも無いが、彼もそれだけ逼迫（ひっぱく）した時間の中での行動を余儀なくされていたという事なのだろう。

しかし、己の信念のみを突き通して、他人の言葉に一切耳を傾けない堅物たちとは違い、この若い司令官の中にはそれだけの許容力があるという証明でもある。

カースは、このサルムの行動に少し驚きはしたが、決して心の中でも笑うことはしなかった。

（サルムザーク）
「うん。そうだな。少し順番を変えた方が良いのかも知れない。確かにカースの言う通り、事前にこの作戦内容を、皆に知って欲しかったのは、それなりの理由があるからなのだが、まずはそこから話をするべきだろう。今回俺の考案した作戦プランは、全体作戦会議

で承認を受ければ、トゥアム共和国軍の正式な作戦行動となる。この場合、実際にその作戦を実行する部隊は、軍上層部が決定する事になるのだが、作戦の性質上、恐らく我がネニファイン部隊に、そのまま指示が下される可能性が非常に高い。言ってしまえば、俺がこの作戦プランを軍上層部に提案する事で、お前等はしなくてもいいはずの戦闘を強いられる事になるのだ。そのため俺は、お前等の中にこの作戦に賛同する者。即ち自主的にこの作戦に参加を希望する者が、最低6名以上いない限り、この作戦プランを破棄するつもりだ。恐らく作戦プランの詳細を聞いてからでないと、判断するのは難しいと思うが、参加の是非を希望しないまでも、現時点で俺の考えに賛同してくれる者はいるか？」

壇上の両脇へと手を付き、一旦そこで話を止めたサルムが会議室内全体を見渡す。

サルムの放ったこの言葉に対し、部隊メンバーが一体どんな反応を見せるのか、彼としても知りたかったのだろう。

サルムの真剣な眼差しに映し出された彼等の表情は、決して対岸の火事を装った無機質たるものでは無かったが、それでも完全に安全であるとは断言できない軍の作戦行動において、簡単に賛同の意を示す事が出来ないのも確かである。

何処か重苦しい異様な静けさに包まれた会議室内は、確かに内に篭った彼等の心の揺り動きは見て取れたが、直ぐにはその意思が表に表れ出ることは無かった。

すると、そんな彼等の心の葛藤を察したかのように、ゆっくりと二、三歩前へと歩み出たピエトロが、優しい語り口調でささやかなる指標を示して見せた。

（ピエトロ）

「私が今回、サルムザーク陸等三佐の申し出を受けたのは、当然、彼の考えに賛同したからなのだが、皆も少し考えて欲しい。もし自分が死線を彷徨(さまよ)っていた時、もしくは敵の捕虜となった場合でもいいが、それがどんなに過酷な状況であるにしろ、助けに来ようともしない人間達を、本当に信用する事が出来るのかい？過酷な戦場で生きていかなければならない兵士として、時に冷酷な判断を迫られる事はあるかもしれないが、それでも俺達は皆、優しい感情を持った人間さ。決して簡単に見過ごす事なんて出来ないはずだよ。」

部隊結成からまだ1ヶ月程度と、決して一枚岩と称するに乏しい部隊内において、お互いに仲の良い関係を構築する事が出来ている者達は数少ない。

しかし、一度過酷な戦場へと送り込まれれば、下された作戦目標を達成する為、生き延びる為に必要な、共に助け合わなければならない仲間達となる。

サルムがこの時、彼等に問いかけたかった事とは、まさにピエトロが説明した通り、作戦内容の如何に関わらず、窮地(きゅうち)へと立たされた仲間の為に、戦う意思があるのかどうかと言う事である。

彼の立場から、彼等を単なる道具と見なして命令を下す事は容易(たやす)い。

しかしサルムには、与えられた命令のみを見据えて行動する無機質なロボットではなく、そこに仲間を助けるのだという明確な意思を持って、この作戦に望んでもらいたかったのだろう。

それは、多くの兵士達の命と密接に結びついた一蓮托生たる関係の

中において、決して人の感情に流された軽率な行動は赦されるべきではないが、そんな軍隊と言う組織の中だからこそ、決して人としての感情を失するような事があってはならないのだという、彼なりの強い思いがあったからだ。

（ユァンラオ）
「ふっ。窮地に立たされた仲間を救うために、あえて茨の道たる過酷な任務を選ぶか。涙が出るほど美しい美談だな。」

しかし、そんな彼の思いに真っ先に反応を見せたのは、集団の後ろで椅子の上に踏ん反り返って腕組みをする一人の大男。

周囲の誰しもが、まさかと思ったその人物とは、他人事に余り関心を示す事の無いユァンラオ・ジャンワンだった。

（ユァンラオ）
「結局のところ、お前の思案した作戦とは、一人の人間を救い出すために、他の人間達の命を危険に晒すという事だ。それは部隊を統率する者として、本当に正しい判断だと言えるのか？」

（サルムザーク）
「確かに軍隊における部隊運用を考えた場合、一方的なリスクを背負って行動する事は、決してあってはならない愚行だと言える。今回の作戦は、たった一人の仲間を救い出す事を目的として作り出した物だが、決してそこに多大なリスクのみを積み重ねた暴挙ではなく、それなりに得られる成果を期待してのものだ。俺の考えが正しいか正しく無いかは、不確定な未来を予測する事が不可能で有る以上、実際の成果を持って評価する以外に無いが、それでも俺自身、現時点において、正しい判断だと思っている。」

（ユァンラオ）
「お前の言う得られる成果と言うのは、あの女の事だけを示すのか？どれだけの能力を有した人材なのか知らんが、他人の命を投げ打ってまでして得られる成果としては、落胆するほど鎮撫なモノとも言えるな。」

（サルムザーク）
「彼女が有能な人材である事は、部隊結成時に実施した研修成績から証明済であり、誰もその能力を疑う余地は無いだろう。諜報部が秘密裏に彼女を引き抜きにかかったと言う事実から、決して無能なる人間でない事は確かであり、彼女を救い出すこと行為自体、決して無益な事では無いと思っている。勿論、俺の本心として、彼女を助けたいと言う自己中心的な思いが、沸き起こっているのも事実だ。しかし、俺の言う得られる成果とは、決して彼女のことだけを指し示すのではなく、お前等を含めた我々ネニファイン部隊全員に関する重大な成果の事だ。お前等にその自覚が無いとは思わないが、ディップ・メイサでの「置き去り作戦」に始まり、ランベルク基地における処遇の在り方、そして今回のアリミアの一件。軍上層部から見れば、我々ネニファイン部隊は、ただの無能者達の寄せ集め集団に過ぎず、使い道さえ決まれば、使い方は問わないと言う、まさに都合良く搾取する為に作り上げた集団と言う訳だ。今回のパレ・ロワイヤル攻略作戦に関しても、決して十分なお膳立てを用意する事が出来たは言えないが、それでも俺が全体作戦会議で大立ち回りを演じなければ、我々ネニファイン部隊だけで突入せよと言う、無謀な作戦を強いられる可能性も大いにあったのだ。」

（カース）
「なっ・・・！！」

サルムのこの言葉に、即座に反応を見せたカースが、まさに驚愕と

称するに相応しい表情を浮かび上がらせて壇上の男を睨み付けた。

勿論、その驚きの原因たる理由の一つには、パレ・ロワイヤルミサイル基地を、ネニファイン部隊だけで攻略せよなどと言う呆れた軍上層部の見解が有ったのだが、彼女を激しく憤慨させたのは、寧ろもう一つの事実の方であろう。

ピエトロは、そんな彼女の右肩を後ろから軽く小突くと、振り返った彼女に向かって、疲れたような表情を浮かべて大きな溜め息を付いて見せた。

軍の高官達が集う全体作戦会議の場において、どれほどの暴挙を繰り広げたのか想像も付かなかったが、恐らく彼がその場を取り持ってくれたのであろう。

・・・！全くもうっ・・・！！

（サルムザーク）

「俺はネニファイン部隊を統括する指揮官として、お前等部隊メンバー達全員を管理する立場の者として、相手が軍上層部であろうと、政府高官であろうと、そのような暴挙に対しては、厳しく対応する必要が有ると考えている。それがたとえ、お前等一個人に関する事でしかない、どんなに些細な事であってもだ。この掃溜めたる腐った軍部内において、我々ネニファイン部隊を、助けてくれるような奇特な人間は数少ない。自分達の身は自分達で守って行かねばならなのだ。そのためにはまず、我々ネニファイン部隊に降りかかる、軍上層部のふざけた陰謀を抑制する為の、強い意志を周囲に発する事が重要なのだ。今回の作戦は、あくまで諜報部の支援要請に答える形で、軍上層部に提案される事になるが、それでも諜報部の奴等自身に尻拭いをさせる切欠となる作戦だ。この作戦を提案する事に

よって得られる我々の成果とは、一つの任務を成功させる事より、遥かに大きなものになるだろうと考えている。」

（ユァンラオ）

「ふふん。中々大層な戦略だな。しかしそれならば、お前はただ命令を下せばいいだけのこと。指揮官として従える人間達を正しき道筋へと導くのが、お前の役目のはずだろう。命令できる立場にありながらも、あえてそうでない者達と協議の場を設けるなど、自分で正しいと判断して捻出した道筋に、お前自身が一人で歩み進む事を躊躇（ためら）っているようにも見えるが、お前は今後も、他の部隊メンバー達の顔色を伺いながら指示を出すつもりなのか？俺達の中にお前の意見に賛同する者がいなかった場合、どうするつもりなのだ？」

（サルムザーク）

「お前等の賛同が得られない場合、この作戦を破棄すると言ったのは、あれは嘘だ。俺はこの作戦プランを絶対に押し通し、採用にまで持ち込む腹積もりでいる。にもかかわらず、お前等にあんな問いかけをしたのは、お前等の内に込めた意思を確認する為だ。俺とお前等は同じ部隊に所属する人間として、今後協力していかなければならない立場にあるが、本音を言えば、出会って間もないお前等の事を、完全に信用しているかと言えば答えはＮＯだ。ある意味、お前等が俺の仲間として相応しい人間かどうかを、試してみたと言う事になるな。結局、ネニファイン部隊の為にと、俺一人がいきり立ったところで、部隊としての意思が統一されていなければ何ら意味を成さない。軍部内における俺の発言力を強める為には、少なからずネニファイン部隊として、ある一定の功績を残す必要が有り、それを実現しうる有能な部下が俺には必要なのだ。俺も軍部内に仲間たり得る人物は少ない方だが、それでも無能たるゴロツキ共を数多く懐に溜め込んで、意味も無く戦争ゴッコに興じるつもりは無い。ディップ・メイサ作戦の直前にも言ったが、俺とお前等はお互いに

利用する者と利用される者だ。自らの思いを馳せる為に、俺を利用したいと欲するならば、俺に利用したいと思わせるだけの、強い意思と能力を俺に示して見せろ。俺は利用する価値がある者達への協力は、決して惜しまないつもりだ。」

（カース）

「三佐っ！！」

ようやく本来の彼らしさとも言える、不躾（ぶしつけ）な本音が顔を覗かせ始めると、カースは咄嗟（とっさ）に彼の言動を差し止めるために大声を上げた。

彼女はこの若い指揮官の行動力や思考力を含め、内に抱いた強い志を高く評価してはいたが、時に粗悪な本音を無造作に垂れ流してしまうその性格には、人の上に立つ者としての自覚を欠いた不適切なものとして、強い嫌悪感を抱いていたのだ。

しかしこの時、カースの怒鳴り声から一転、不気味な静けさを醸（かも）し出して黙り込んだ二人の男は、お互いの内に秘めた思惑を探りあうかのように鋭い視線を交錯させる。

じっと腕組みをしたまま、身動（みじろ）ぎもしないユァンラオの眼光には、まさに背筋に悪寒を覚えるほどの殺気が含まれているようにも見えるが、それを受けて立つサルムもまた、全くそれに気圧（けお）される様子も無く、この異様な雰囲気を放つ大男を睨みつけていた。

やがてユァンラオは、衝突したその視線の先に何かを見出したのだろうか。

不意に口元を緩めると、高らかに笑い声を張り上げたのだった。

（ユァンラオ）
「あっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！面白い。青臭い小僧の分際で、世間一般的風評を蔑ろにしてまで、自我を押し通すその気概は気に入ったぞ。その作戦。俺が行ってやろう。」

（ジャネット）
「えええっ？」

思いもよらない人物の一言とは、まさにこの時、彼の発した言葉を指して言うのだろう。

新設されたばかりのネニファイン部隊内において、一匹狼たる立ち位置を好んで、常に周囲との一線を画すこのユァンラオが一体どの様な人物なのか、その人となりを知るメンバーは今だ少ない。

しかし、これまで他人事に対して全く関心を示さなかったこの男が、他人を救い出す為の作戦に、自ら進んで参加を希望するなど、その場の誰も予想し得なかった事態であることは確かだ。

彼の隣の席で退屈そうに事の成り行きを傍観していたジャネットは、まさに寝耳に水といった感じの驚きの表情を余儀なくされてしまった。

（サルムザーク）
「他の者達はどうだ？」

騒然とざわめき出す会議室内の中で、次なる賛同者を求めてサルムが周囲を見渡す。

すると今度は、集団の中央部で何やら思い詰めた表情を浮かべて席

を立った少女が、次なる名乗りを上げた。

（セニフ）
「あっ・・・！あの！・・・私も・・・。」

（カース）
「セニフ・ソンロ。お前は駄目だ。お前は既にパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略部隊のメンバーとして、正式に作戦リストに登録済みだ。あと、三佐の指定した希望枠は６名以上との事だが、如何に我が部隊が余力を残しているからといえ、作戦主目標を疎(おろそ)かにするようなことは出来ない。希望枠は６名までと言う制限を設ける事とする。いいですね三佐。」

強い口調で横槍を入れたカースの言葉が、無情にもセニフの抱いた強い想いを打ち砕く。

カースは勿論、セニフとアリミアがＤＱＡ時代に、同じチームメートであった事を知ってはいたが、ネニファイン部隊に与えられた任務は、あくまでパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略にあり、正式に決定した部隊の作戦をも覆す事態は、絶対に避けなければならないと言う思いがあったのだ。

セニフは一瞬、何か言いたそうな表情を浮かべてカースの方に向き直ったのだが、毅然(きぜん)とした態度で壇上へと視線を移してしまったカースに、その後何も言う事が出来なかった。

（ジルヴァ）
「それじゃ私が行ってやるよ。こんな糞餓鬼が行くより少しはマシだろ？」

（ランスロット）
「じゃあ、俺も行くぜ。毎日お留守番ばかりで寂しかったんだ僕ちゃん。よろしくね。ジルヴァちゃ～ん。」

（ジルヴァ）
「あ？ふざけてんのかてめぇ？後ろから股座蹴り上げるぞ。」

（ルワシー）
「そりゃぁ面白そうだな。俺も付いてくぜ。」

（アイグリー）
「報酬もそれなりに出るんだよな。それなら俺も行く。こんな場所からはさっさとオサラバしたいんでね。」

（フレイアム）
「お前等も相当物好きなんだな。どうせ2小隊各3人で、正規軍人の御守りがもう一人必要なんだろ？俺が行ってやるよ。」

やがて、一人の男の発言を皮切りに、次々と作戦への参加を希望する者達名乗りを上げる。

それまで会議室内に充満していた彼等の重苦しい雰囲気は、まさに関を切ったかのように、一気に示された方角へと雪崩（なだれ）出たのだった。

彼等に対するサルムの問いかけは、作戦に参加する意思まで確認するものではなかったが、この時点で既に指定要員となる6名枠を全て埋め尽くす事となった。

サルムは壇上で、そんな部隊メンバー達の表情を見渡した上で、自然と緩む表情を必死に引き絞ると、真っ直ぐに据え付けた視線の上

に、最後を締めくくる言葉を放った。

（サルムザーク）

「よし。お前等のその心意気、確かに受け取った。ネニファイン部隊の指揮官として、お前等の勇気ある判断には深く感謝している。今後も我々の前には、様々な困難が待ち構えているだろうが、ネニファイン部隊メンバー全員が、これに立ち向かう意思の元に集い、お互いに協力し合う事を惜しまなければ、決して乗り越えられない事は無いだろう。・・・と、真面目に指揮官ぶって偉そうな大言を吐き付ける役目は、そこに居る鬼軍曹に任せる事にしよう。またこんなことを言うとカースに怒鳴り付けられそうだが、俺は余り軍部内の上下関係に凝り固まった関係は好きじゃない。お前等も何か有ったら気軽に話かけてくれると俺も嬉しい。俺もまだ青臭い餓鬼には違いないが、ネニファイン部隊と言う同じ船に乗る事を余儀なくされた者同士、これからも仲良くやって行こう。それではこれを持って、ネニファイン部隊の「決起集会」を解散とする。先ほどの６名については、諜報部特別回収チーム支援任務についての作戦詳細説明をするため、１時間後に再びこの会議室に集合してくれ。それでは皆、朝早くから長い時間ご苦労だった。」

歩み進む一寸先、何も見えぬ闇なれど。

抱き信じて踏み出したその一歩は、確かにしっかりとした大地の上へと踏み下ろされた。

その後サルムは壇上の上で、天井から照り付ける眩い光の中を見据え、一つ大きく息を吐き出したのだった。

０５－９０：★【第五話】登場人物一覧

第五話：「平行線の彼方に」

★★★新規登場人物一覧★★★

【カサス・ベルナルド】
性別：男　年齢：２４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国貴族オットンハイマー・レブ・ロイロマールの腹心。
後ろに流した赤茶色の髪の毛に、ひ弱そうな華奢な身体つきが特徴的な若者であり、煌びやかな高級装飾品を好んで身に付けている。
周囲からは公爵のお気に入りと言う肩書きのみで成り上がった、いけ好かない人物として冷笑される事が多かったが、南ブランドル地方イサリナで、いきり立つ民衆達を見事まとめ上げると、投獄されたロイロマール公爵を救い出す為に武装決起軍を組織する。
実際彼は、非常に物腰の柔らかい誠実な人物であり、人を傷つける事を人一倍嫌う優しい心の持ち主であったが、自分を育ててくれたロイロマール公爵を見捨てる事などできず、意を決して武器を手に取る道筋を選択したのだった。
最終的に彼は、旧ブランドル要塞跡地付近で、ウィルダラネス家の軍勢と対峙し、無残にも朽ち果てる運命を辿る事になる。

【フェネシュテルス・レブ・オルネッツェ】
性別：男　年齢：４７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家軍団所属の兵士の一人で、長年ロイロマール公爵に仕えてきた忠義の帝国軍大尉。
旧ブランドル要塞跡地付近で対峙したウィルダラネス家との戦闘で

憤死。

【ネリブスト・シーラン】
性別：男　年齢：２３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家軍団所属の兵士の一人で、将来有望な若手仕官。
帝国軍階級は少尉。
旧ブランドル要塞跡地付近で対峙したウィルダラネス家との戦闘で憤死。

【ヒューファレス・プレサリオ】
性別：男　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家軍団所属の兵士の一人で、非常に優れた指揮能力を有した仕官。帝国軍階級は中尉。
旧帝都シュトラセ・ゼニーロ近辺で対峙したストラントーゼ軍との戦闘で行方不明となった。

【ヘイトーゼ・マクバラン】
性別：男　年齢：４９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍諜報部を取り仕切る特別一佐官。
大きく出張った頬と、顔中に広がる細かい皺から、見るからに「猿」を連想させる小柄な中年男性であるが、洞察力、分析力、判断力に優れた人物であり、薄ら黒い陰謀にも非常に長けた切れ者。
愛用のマグカップを只管に磨き続ける姿と、ゆったりとした語り口調からは、まったく想像する事も出来ないが、実はトゥアム共和国軍の影の支配者とまで言われる大物である。

【ギャロップ・リッスモン】
性別：男　年齢：３６歳　出身：トゥアム共和国

トゥアム共和国軍諜報部工作員。
金色の短髪にがっしりとした身体つきが特徴の男性で、一種異様な黒いオーラを身に纏っているが、非常に物腰が柔らかい人物であり、人と接する彼の態度は常に温和でいて優しいものだ。
いつも愛用のサングラスをかけている。

【ルーサ・シャル・コニャック】
性別：男　年齢：１３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
旋毛付近で長い赤毛を結え上げ、お洒落な衣服に身を包んだ可愛らしい少女であり、見るからに戦闘員である事を疑われるほどの幼さを残す人物だ。
他人と全く会話をしないとまで噂される彼女は、非常に内向的な性格の持ち主であり、フロル以外の者と行動する事は稀である。
彼女は非常にセニフと良く似た容姿をしており、出身が帝国であるという事以外、ほとんど有効な情報は公にされていない。

【ジョハダル・ムーズ】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【アグリ・ショート】
性別：男　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【バルバロック・ド・レイ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ウララ・アクイ】
性別：女　年齢：２０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【フレイアム・モートン】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【ピエトロ・トレイモイユ】
性別：男　年齢：３６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍後方支援部隊の総指揮官たる一等陸佐官。
品位漂う髭を蓄えた大柄な男性であり、非常に大らかで優しい性格を持った人物。
時にお人好しとも揶揄される程のその優しさは、まさに軍人たる厳しさと威風を完全にかき消しているようにも見受けられるが、非常に卓越した戦術眼の持ち主であり、周囲からの人望も厚い頼れる大人の男性だ。
ネニファイン部隊の作戦参謀であるカースとは、知り合い以上の関係にあるようだ

【アイグリー・コートン】
性別：男　年齢：１９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【オットンハイマー・レブ・ロイロマール】
性別：男　年齢：５４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
南ブランドル地方からセレーヌ地方一帯を取り仕切る帝国最古の名

家ロイロマール家の当主。
第十三代女帝の夫ディユリスの兄にして、帝国国民から絶大な人気を誇った偉大なる人格者であり、周辺諸国との関係強化にも積極的に取り組んだ人物。

【オーギュスト・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
メヌシア地方一帯を取り仕切るストラントーゼ家の当主。
統治領土はそれほど多くは無いが、帝国国内で最も強大な軍事力を持つ貴族であり、帝国最高評議会の圧倒的大多数を占めるストラントーゼ派の首領。
非常に好戦的な性格の持ち主であり、薄ら暗い陰謀に長けた黒い不世出の知将。

【ソヴェール・ランス・セルブ】
性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝。
帝国全国民から最も愛された帝国史上初の女帝であり、帝国最高評議会を設立した人物。
周辺諸国との戦火縮小や自国兵団の軍備縮小、自国内の身分格差の緩和、環境破壊問題への取り組みなど、大陸全土に蔓延る様々な問題に立ち向かった英雄。
彼女を唯一批判出来うる材料としては、完全なる立憲君主制度への移行を躊躇ってしまった事と、後継者として男子を残さず崩御したと言う事だろう。

【ギュゲルト・ジェルバート】
性別：男　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国軍最強と歌われた将軍にして、第十三代女帝の腹心であり、セファニティール皇女の教育係を勤めていた厳格な人物。
皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」の双頭の龍たる異名を持ち、帝国内外からその存在を恐れられていた。
女帝の死と共に帝国最北端の地へと左遷されてしまう。

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
赤く長い髪の毛が特徴的な元気の良い女の子だが、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。
彼女自身の告白により、第十三代皇帝ソヴェールの娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」である事が判明。
喧嘩別れに終わったチームメイトとの話し合いから、微妙となってしまった仲間達との関係に悩む。
しかし、ランベルク地下基地において、突然謎の男に襲われた彼女は、アリミアによって救い出された事実に気が付くと、やがて次第に彼女に対する想いを軟化させていく事になる。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、非常に人当たりが良く温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。
トゥアム共和国陸軍三佐サルムザークとは、何かしらの深い因縁を

持つ。
セニフの素性を知り、当惑しながらも彼女の為に何かしてやれる事は無いかと苦慮する。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
抹茶色の癖毛が特徴的の長身女性であり、とてもおしとやかで愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
最愛の弟であるマリオの死から、人が変わったように冷たい態度を示すようになった。
ディップ・メイサ・クロー作戦以降、ユァンラオと行動を共にするようになる。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。
セニフとの関係が悪化してしまった状況にもかかわらず、彼女の事を想い、何か彼女の為にしてやれる事はないのかと必死に模索する。しかし、その用いた情報入手方法があまりに行き過ぎた行為だったため、諜報部の監視網に引っかかる事となり、彼女は半場ヘイトーゼに脅しをかけられるような形で諜報部へと転属する事になってしまった。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、
ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有した人物。
お調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕
出かす問題児。

【ユァンラオ・ジャンワン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
厳つい顔に生え揃った武将髭がトレードマークの得体の知れない人
物であり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦
闘能力においては無類の強さを有する猛者。
謎の依頼人からの要望でセニフを付け狙い、ＢＰ事件を引き起こす。
彼自身、セニフの正体に非常に強い興味を抱いている。

【ランスロット・アバンテ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
金髪の天然パーマが特徴的な彼は、そのお調子者たる人柄が示す通
り、「酒」と「女」に全てを捧げる堕落者としての烙印を押された
人物。
明るく軽い性格が彼の人当たりの良さを醸し出してはいるが、大半
の女性は決して無為に彼の元へと近づく事は無かった。

【フロル・クローチェ】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

浅黒い肌に少し厚めの唇が特徴的な長身女性であり、独特のしゃがれ声を持ち、しばし女性らしさから逸脱した言葉遣いから、豪胆で野坊主なイメージを持たれがちな人物。
しかし彼女は非常に温厚で優しい心の持ち主であり、誰にでも分け隔てなく接する気持ちの良い性格から、誰からも親しまれる好人物である。

【ジャン・シルバーストルス】
性別：男　年齢：６０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国出身の天才科学者であり、あらゆる分野の知識に精通した偉大なる先駆者だが、影では数多くの危険な実験に手を染めていたマッドサイエンティスト。
ブラックポイントにあるマムナレス社の秘密研究施設を爆破し、幾つかの研究資料と共に逃走。

【ティーラー・テル】
性別：男　年齢：３３歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ＤＱ製造メーカー最大手「マムナレス社」のＤＱ販売促進部門の総責任者であり、目的の為には手段を選ばない独断的先行者。
小柄な体躯ながらも常に威圧的態度をひけらかす冷淡な性格の持ち主であり、トゥアム共和国内の黒い影に潜んで何かを目論む人物。
ゼフォンの失脚から保安部にマークされ始めた彼は、情報が漏れそうな端々を整理し始めていたが、シルバーストルスの破壊的行為により、その目論見の根本を完全に撃ち砕かれてしまった。

【ゼフォン・ウィリアムズ】
性別：男　年齢：４６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍の総司令官。
迫力のある眼光とスキンヘッドが特徴的だが、物静かで温和な性格

の持ち主。
長きに渡りトゥアム共和国北方一帯を守ってきた守護神たる人物。
帝国より突きつけられた衝撃的事実の真意を解き明かす為、トゥアム共和国軍にその身柄を拘束される。

【バーンス・シューマッハ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
若い頃より大陸各地で勃発する戦乱の中を駆け抜けてきた猛者であり、顔中に刻まれた傷跡が残る強面の男性だが、その見た目とは裏腹に、性格はいたって温厚で非常に仲間思いの頼れる人物だ。
どんな過酷な戦場からでも、必ず生きて帰ってきたことから、人々は彼を「不死鳥」と称するようになった。

【ソドム・スピリッツ】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
綺麗に刈り揃えた角刈りとは裏腹に、事ある毎にぼやき倒す小うるさい人物。
そのボヤキは日常生活の中であろうと、戦場の中であろうと所構わず垂れ流される為、時に人の苛立ちを増長させてしまう傾向にある。
ただし、だからと言って彼のボヤキが止まる事は決して無い。

【ショウ・イムラ】
性別：男　年齢：１９歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【メディアス・イェルザック】
性別：男　年齢：２４歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

短めにまとめた綺麗な麻色の髪の毛が特徴的で、若いながらも非常に落ち着いた雰囲気を持つ女性。
彼女は実年齢よりも歳を重ねた印象を受けるその風貌と言葉遣いにより、周囲からは「おばちゃん」と呼ばれる事が多かったが、彼女自身はそんな事を少しも気にする素振りは見せない。
さばさばとした性格と、何処か親しみやすい雰囲気を持つ大人びた人物。

【マース・チェリーズ】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＯ非正規整備士。
性格は好戦的だが、周囲の状況を冷静に分析して作戦を練るタイプ。
トゥアム共和国軍の傭兵として５年の実戦経験があり、小部隊を統率するリーダーとしては、周囲からそれなりに高い評価を得ていた。

【ベルトラン・ギュストリア】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【サルムザーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍士官学校を１７歳で卒業した秀才であり、ネニファイン部隊の隊長を務める。
黄緑色の髪の毛と瞳が特徴的であり、体格的には恵まれなかったものの、その卓越した戦術眼は軍上層部内でも非常に評価が高かった。
仕官として最初に配属されたカルッツァ地方ニールベングにおいて、帝国軍との大規模な戦闘に遭遇。
負傷した司令官の代わりに軍を指揮し、見事帝国軍を蹴散らして見せた。
普段から無気力な怠け者を装っているが、非常時にこそその真価を

発揮する異端的才能の持ち主。
完全に違法たる強引な手法で突然部下を引き抜かれる事になった彼は、部下を助けだ為に新たなる作戦を打ち出す事になる。

【カース・イン・ロック】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍作戦参謀本部出身の作戦軍曹。
厳格な性格の持ち主であり、軍規律に関しては非常に小うるさいが、逆に自身の身形は少々派手目で挑戦的。
非常に高い統率力と指揮能力を有する人物で、陸軍士官学校の鬼教官として恐れられた人物。
自分の思いに真っ直ぐで頑固な性格を持つが、心優しき二児の母でもある。
後方支援部隊の長たるピエトロとは、知り合い以上の関係にあるようだ。

【チャンペル・シィ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター兼、部隊長サルムザークの秘書官。
細くしなやかな深緑色の長髪に、ほのかに釣り上がった猫目が特徴的な女性。
トゥアム共和国通信高大卒のエリートお嬢さんで、ネニファイン部隊にはカースの推薦で入隊した。
その能力は非常に優秀なものであったが、時折見せる大きな天然ボケが玉に瑕。

【ルワシー・オスカフォード】
性別：男　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

良く肥えた大きな身体に、モヒカン頭と言う特徴的な風貌を持つ人物であり、大雑把な性格柄、余り物事を深く考えないで行動するタイプの人間。
かなり訛りの強い言葉を持って毒を吐き散らすのが常だが、こう見えて中々に男気溢れる熱い男である。
実はその体躯に似合わず、かなりの筋肉質であり、鈍重と言う様な表現を持って称される人物ではない。

【デルパーク・シャンク】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【ジルヴァ・ディロン】
性別：女　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍所属の国境防衛部隊所属のDQパイロット。
見た目の可愛らしさとは裏腹に、彼女の発する言動はとても汚く、非常に性格の荒い女性。
その素行の悪さはトゥアム共和国軍内でも有名であり、数々の部隊を渡り歩く事になるのだが、責任感が強く、与えられた責務に対しては真面目に取り組む姿勢を見せる。

【ワイハーン・カリカニス】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、バスターマンティスの砲撃を受けて爆死。

【ハインハートル・オリトン】
性別：男　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国

トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
茶色の長髪に細い目尻が特徴的な細身の男性。その真面目そうな雰囲気とは裏腹に、結構社交的で人当たりの良い人物。
ディップ・メイサ・クロー作戦において、バスターマンティスの砲撃を受けて爆死。

06－01：〇ローゼイト・サーペント［1］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「ローゼイト・サーペント」

私の名前は「アリミア・パウ・シュトロイン」

本名「カル・ジャンヌ」

帝国トポリ領北部に位置する「ピピン」の繁華街で生まれた。

父の名前は「アイリス・タウーザ」

帝国史上最大のテロリスト集団と言われた「ファルクラム」に所属していた父は、ピピン一帯を取り仕切るリーダーとして、その悪名を帝国中に轟かせていた人物だ。

母の名前は「マリー・ダディ・ジャンヌ」

貧しい身分の出身でありながら、その美貌と歌声で街の踊り子として生計を立てていた母は、父との出会いから人生が一変、次第にその身を死臭の漂う過酷な闇事業へと投じる事になる。

２人とも、私が幼い頃に戦死した。

私は物心付く前から、父に裏の世界で生きていくことを強要され、３歳の頃からすでに工作員としての戦闘訓練を受けていた。

私の記憶の中で、一番古い記憶はと言えば、薄暗い地下室の射撃場で、ひたすらに標的を狙ってトリガーを引いている自分の姿と、その傍らで、不出来な私を激しく叱責（しっせき）する父の怒鳴り声だ。

幼いながらも父の怖さを身体に染み込ませ、決して父の言葉に背くような真似はしなかった。

来る日も来る日も過酷な戦闘訓練を強いられ、身体が全く動かなくなる事で、初めてその日の終わりを告げられる。

私にとって、泣き叫ぶだけで済んだ日は、まさに幸運とも言える日だった。

私がまだ幼い頃は、ずっと薄暗い地下室の中に閉じ込められ、ほとんどその部屋から出る事を許されなかった。

重く閉ざされた鉄の扉が開く時は、必ずと言っていいほど険しい表情を浮かべた父の姿があり、私がその部屋を出ることを許可されるのは、厳しい戦闘訓練へと連れられて行く時だけだった。

命令されれば当たり前のように従い、決して目上の者には逆らわない。

勿論、一度でも反抗の意思を示せば、戦闘訓練が生易しく思えるほどの拷問を強いられるのだから、幾ら不出来な私でも、逆らう事の無意味さは身に染みて解っていた。

しかし、外界との接触を一切断たれ、偏った思想教育を施されて育った私には、他の同年代の子供達が一体どんな生活を送っているのかなど、気にかけたことも無かったし、過酷な戦闘訓練でのた打ち

回る毎日こそが、私にとっての日常であり、極普通な事だった。

そんな私がファルクラムの工作員として、初めて作戦に参加したのは7歳の時だ。

当時活動の最盛期であったファルクラムは、まさに猫の手も借りたい程の人手不足であり、トポリ領北部のスタルアントリオン都市部弾薬集積庫襲撃作戦を行うにあたって、略奪した武器弾薬の運び出しぐらいは出来るだろうと、父が私を後方支援部隊のメンバーに組み込んだのだ。

それまで薄暗い地下室の中のみで育って来た私にとって、初めて経験する地上での大規模作戦。

後方支援任務とは言え、周囲にはけたたましい銃声が烈火のごとく鳴り響き、人々の恐怖に慄く悲鳴が薄暗い裏路地に木霊する。

私はまだ、一人では何も出来ない子供には違いなかったが、仲間達から罵倒されながらも、初めての任務を成功させようと一生懸命になって働いた。

しかし、一歩間違えれば即死に繋がる過酷な状況にありながらも、私は惨劇に脅える恐怖心よりも、何処かお祭りに参加したようなドキドキ感を強く感じていた。

鼻を刺す異様な硝煙の匂い。そして耳を劈く程のけたたましい銃声。

私にとって、それは普段と余り変わりの無い状況であったと言えるし、見るもの全てが珍しい外界の風景に心躍らせてしまった事も確

かだ。

まさかこの時、自分の命が死の危険に晒されているなど、私は愚かにも全く考えていなかったのだ。

その後、私と少し距離を置いた位置で必死に叫び声を上げていた一人の仲間が、帝国憲兵隊の砲撃によって吹き飛ばされてしまうまでは・・・。

この時、ようやくファルクラムの行動に対して、先手を打つ体勢を整えた帝国憲兵隊は、都市部郊外の弾薬集積庫へと突入したファルクラムの退路を断つため、大規模な包囲網を形成し始めていた。

そのため私の居た後方支援部隊は、真っ先に円陣を形成した帝国憲兵隊と砲火を交える事となり、私の目の前には数十人にも及ぶ憲兵隊員が雪崩れ込んできたのだ。

その時、一体何が起きたのか正確に理解する事が出来なかった私は、激しく銃弾の飛び交う通路の真ん中で、一人ポツンと立ち尽くしてしまった。

相当な手錬(てだれ)であるはずの仲間達が、次々と無数の凶弾の前に薙(な)ぎ倒されていく中、私が奇跡的にも生き残る事が出来たのも、「まさかこんな幼い子供が」と言う気持ちが憲兵隊隊員達の中にあったからなのだろう。

お嬢ちゃん！早くこっちへ！危ないからこっちへ来なさい！

これがこの時、私に対して背後から投げかけられた言葉だ。

私がふと後ろを振り向くと、通路左右の建物の影に憲兵隊隊員が５人ほど潜んでおり、その内の一人が必死になって私を手招きしていた。

勿論、それが私の身を案じての行動であろう事は直ぐに解ったのだが、私の意思とは無関係に動き出した身体が、素早く右腰にぶら下げた短銃を引き抜くと、返事をする代わりに彼の顔面へと狙いを定めてトリガーを引いた。

これが私の奪った初めての命だ。

そして私は、立て続けにトリガーを４回引き絞り、残る４人の男達を撃ち倒すと、すぐさま近くの建物の影へと身を隠す。

そして、大きく打ち鳴らされた胸の鼓動に強く突き上げられ、全身を襲った激しい悪寒に震えながら、私はようやく自分が今置かれている立場を理解した。

そこが、普段慣れ親しんだ戦闘訓練場などではなく、お互いに相手の命を奪い合う戦場なのだという事を。

私は恐怖に脅える暇も与えられず、すぐさま浴びせかけられた銃弾の雨を掻い潜り、ただ無我夢中で構えた短銃のトリガーを引いた。

弾丸が尽きれば倒れている兵士の武器を奪い、相手の攻撃から身を

守るために、遮蔽物となる物陰を必死に渡り歩く。

そして、目に見えたもの全てに、動くもの全てに照準を絞り、何度も何度もトリガーを引いた。

それはまさに、日々繰り返してきた戦闘訓練と、ほとんど変わりの無い行為には違いなかったが、それでも一つ、決定的に異なる点があった。

それは、私の体力が尽きてその場に倒れ込んだ時は、私と言う人間の命の終わりを告げるのだと言う事だ。

もはや私を助けてくれる仲間達の姿はどこにもない。

そして、泣きつける父の姿もそこには無い。

唯一私の直ぐ傍らにあったのは、大量の血を垂れ流してうつ伏せる、数多くの人間達の死体だけである。

私はやがて尽きかけた自分の体力に、初めて冥府（めいふ）への扉の存在を背後に感じてしまった。

その後のことは良く覚えていない。

迫り来る死への恐怖に駆り立てられ、どれだけ必死に駆けずり回ったのか。

朦朧（もうろう）とした意識の中、どれだけの人間を撃ち倒したのか。

自分が生きているのか、死んでいるのかさえも、全く解らない状態だった。

地獄の責苦（せめく）にも似た過酷な試練のみが並べられた一本道を、たった一人で歩み進まねばならない状況に、私の意識は完全に飛んでしまっていたに違い無いが、それでも私が生き延びる事が出来たのは、まさにそれまで強いられてきた戦闘訓練の成果を、自分の身体が体現してくれたからなのだろう。

やがて、周囲に響き渡っていた銃撃音が次第に散発的なものへと移り変わると、私はようやく周囲の状況を冷静に見て取る事が出来た。

何年経っても脳裏の奥深くへと焼き付いて離れないその光景は、まさに地獄絵図と言うに相応しく、周囲に横たわる死体の数は、敵味方合わせてざっと５０人は超えていただろう。

決して全ての人間を私が殺したわけではないだろうが、私は余りの気持ち悪さから激しい吐き気を催（もよお）してしまうと、その場に力なくへたれ込んでしまった。

この時、次に私の前に現れた人間が、帝国憲兵隊の兵士であったのなら、確実に私の人生はその場で終わりを告げられていたに違いない。

しかし幸運にも、もはや戦う気力すら失ってしまった私が次に目にしたのは、数多くの部下達を従えて前線から帰還した、父の姿だった。

普段から決して甘やかす事をせず、常に厳しい態度で私を躾（しつ）けて来

た父だが、この時ばかりは、足元へと縋り付いて大泣きしてしまった私を、黙って優しく撫でてくれた。

父が手を上げる時は、必ずと言って良いほど殴られてきた私にとって、それはまさに今までに味わった事の無い嬉しい出来事であり、一生忘れる事の出来ない父の優しさだった。

そして父は、私に満面の笑みを浮かべながらこう言った。

よくやったな。カル。

父から投げかけられた、この優しい言葉。

私は本当に、心の底から嬉しかった。

しかし今思えば、これが悲劇の始まりだったのかもしれない。

それからの私は、年齢と共に徐々に任される任務の数も増えて行き、そして回数を重ねる度に、与えられる任務の重要性、危険性も増して行く事になるが、私は父から下される命令が、如何に過酷なものだったとしても、決して首を横には振らなかった。

どんな時でも決して逃げ出さず、決して諦めず、私はその後与える任務の全てを、必ず成功させるのだという強い意志を抱いて、過酷な戦場を駆けずり回った。

それは勿論、作戦任務の成功を報告した時、父が見せる喜ぶ顔を見

たかったからだ。

たったそれだけの事と言ってしまえば、たったそれだけの事に過ぎない。

しかし当時の私に取ってはそれが全てであり、それ以外に何ら生きる糧として自らを奮い立たせる理由など無かった。

数え上げたらきりが無いほど数多くの作戦任務を与えられ、そしてその全てにおいて、成功と言える成果を持って父の期待に答えて見せた私は、やがて１５歳になった頃には、帝国憲兵隊の兵士達から「ローゼイト・サーペント」とあだ名され、その悪魔的存在を恐れられるようにまでなっていた。

作戦任務を成功させた後に、素早く逃げ去る私の紅い髪の毛が、闇夜へと消え行く「紅い大蛇」のようにも見えた事から付けられたあだ名だ。

作戦任務を成功させるために、自らの障害となりえる邪魔者をすべて排除し、命乞いをする者も、泣いて脅える者も、時にはまだ幼い子供さえも、何のためらいも無く撃ち殺す。

心の中に存在する人間的感情を一切排除し、ただ目的を達成する為の道筋を突っ走るだけの、完全なる戦闘マシーン。

それが私だった。

そしてその後、父と母を共に失ってからも、私の中で求めるものは

変わらなかった。

06－02：〇ローゼイト・サーペント［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「ローゼイト・サーペント」

その後私は、ファルクラムメンバー達からもその功績を認められ、ようやく念願であるツーマンセルへと格上げされた。

作戦行動における部隊最小単位であるこの二人一組体制は、相棒となる人物以外との足並みを揃える必要も無く、個人の持てる能力に頼った行動を好む私にとっては、前々から熱望していた、まさに打って付けの体制と言えた。

この時、私の相手役となった人物が「シュバルツ・ノイン」だ。

彼は私よりも2歳年上なだけの若者であり、決して歴戦の勇者たる威風（いふう）を漂わせていたわけではないが、太い眉毛と堀の深い顔立ちから覗（のぞ）く鋭い二つの眼光が、彼のそれまでの戦闘経歴を物語っているようであった。

勿論、身長が私とほとんど変わらない程度の彼の身体付きは、屈強な体躯を誇る他の男性戦闘員達に比べれば、寧ろ小柄な方に分類されるであろうが、それでも彼の小さな身体に集約された濃密な覇気は、決して他人の能力に依存するつもりの無い私の意識までも、少し浮き立たせる程のものだった。

しかし、相手役となるパートナーの能力が如何に高いものだったとしても、過酷な作戦任務をたった二人で遂行しなければならないツーマンセル体制においては、お互いの連携力が最も重要視される事

になる。

この時、非常に困難な作戦任務を主体に与えられるようになっていた私にとって、パートナーとなる彼との間に、親密な関係を構築する事は絶対条件であり、私は自分の非社交的性格を心の奥底に押し込めると、自分から積極的に彼とのコミュニケーションを取ろうとした。

それは、新参者としてファルクラム組織に入隊したての彼の立場を、少しは慮った行動とも言えるが、私の第一印象として、まるで能面を被ったかのように顔色一つ変えない彼の表情が、完全に人との関わり合いを排除しているかの様にも見えてしまい、私は彼と歩まねばならないその先の道筋を少なからず不安視してしまったためだ。

しかし、その彼の性格以上に大きな問題として私の前に立ちはだかったのが、彼の耳が全く聞こえず、言葉も話せない完全な聾唖の兵士であったと言う事だ。

彼には読唇術の心得があり、こちらの意思を伝える事に関してはそれほど大きな問題なかったのだが、それでも彼の意思を確認する時には、どうしても別のコミュニケーション手段が必要となってしまう。

簡単な方法として、文字を紙に書くと言う方法を用いる事も出来たのだが、それでも一瞬の判断が必要とされる戦場において、そんな手間のかかる方法で意思の疎通を行う事は出来ず、私は手話を覚える羽目となってしまった。

勿論、折角与えられたツーマンセル体制を剥奪されたくない私としては、今まで自分とは全く無縁だった手話を必死になって勉強する

事になるのだが、実際その成果を持って彼とスムーズに会話出来るようになったのは、随分と後になってからの事だ。

しかし、お互いに意思の疎通がままならない状況にありながらも、作戦行動において彼の障害が大きな足枷(あしかせ)となったかと言えばそうではない。

確かに戦場での彼の動きは、まさに非凡たる戦闘員としての能力を垣間見せる、非常に優れたものであったのだが、初めて彼と作戦行動を共にした時、私は不思議なほど彼と息の合った連携プレーを奏でる自分の姿に、驚きを隠せなかった。

敵陣へと深く切り込み、相手を撹乱する突撃役を彼に。

そして彼の動きを援護しつつ、誘(おび)き出された敵を撃ち倒す狙撃役を私に。

二人の相性が良かったと言ってしまえばそれまでだが、全くお互いに意思のやり取りを経ずとも、彼は私のイメージした通りに行動し、私もまた彼が次にどの様な行動に移りたいのか、何の迷いも無く予測する事が出来た。

それはまるで、言葉ではなく行動、いや、その時その時の状況にあわせて、私にそうさせる様に戦場の雰囲気を作り出すと言った方が良いだろうか。

私は今まで数多くの作戦任務を、数多くの仲間達とこなして来たが、これほどまでにお互いのイメージを共有できた経験は無かったし、自分一人の能力を持ってして作戦任務を成功させてきた私にとって、他の戦闘員の挙動に誘(いざな)われるように行動を起こすなど、全く考えも

しなかった事だった。

この時私は、自分の持ち得る高い戦闘能力をも凌駕する、「何か」を彼に見せ付けられたような気持ちになり、少なからず卑しい嫉妬心を心の奥底に燻らせてしまった事は確かだ。

しかしそれでも、私が彼の事を嫉んで激しい敵意を抱いたりしなかったのは、彼の行動を備に観察する事で、自分の能力をより高めようと、前向きに考えを転換したと言う事もあるが、それ以上に、作戦任務終了後に彼が見せる、不思議な行動や心理に対して、私が強い興味を抱いてしまったからなのだろう。

彼はどんな時でも作戦任務に忠実な戦闘員であり、まさに鬼神のごとく相手を捩じ伏せるように前線を蹂躙する姿からは、全く想像する事が出来なかったが、彼は作戦任務を完遂させた後で、何故か決まって遠くを見つめたまま、大粒の涙を流し始めるのだ。

幼い頃からファルクラムの戦闘工作員として育ってきた私に、彼の流す涙の理由を暗に察する事など出来ようはずも無い。

私は怪訝に小首を傾げながら、そんな彼の背中を見つめる事しか出来なかった。

結局、最後の最後まで、彼の真意を解き明かす事は出来なかったのだが、それまで他人事に全く関心を寄せなかった私が、ノインと言う人物に興味を持ったのはそれが切欠だった。

勿論、彼も私と同じく、人付き合いを苦手とする一匹狼タイプの人間であり、私はしばらくの間、彼の心の奥底を知り得るような機会

に巡り合う事は無かったのだが、意外にもある時、私は彼の不思議な優しさに触れる事になるのだ。

当時私は、作戦行動中に長い髪の毛が邪魔にならないように、耳元にヘアピンを差し込んで髪を留めている事が多かった。

それは真っ白な花弁（はなびら）をイメージして形作られた本体に、黄色い宝石が一つ埋め込まれた煌（きら）びやかなヘアピンで、女っ気の無い私を唯一女性らしく描き出してくれる、かけがえの無い母の形見だった。

私はこのヘアピンを、自分の身を守ってくれる御守りとして、常に肌身離さず身に着けていたのだが、ある作戦任務で相手と激しく揉み合った時、どこかに弾け飛んで失くしてしまったのだ。

その時は作戦任務終了直後という事もあり、無尽蔵（むじんぞう）に湧き出す帝国憲兵隊の圧力に耐え切れなくなった私は、満足に母の形見を捜索することも出来ず、泣く泣くその場を立ち去ることを余儀なくされてしまった。

その後、ようやくファルクラムのアジトへと辿り着いた私は、自分が唯一大切に持っていた品物を失くしてしまった事に、酷く落ち込んだ気分に苛（さいな）まれてしまった事を覚えている。

そして、長く伸びきった紅い髪の毛を掻き上げては、もう短く切ってしまおうかなどと、しばらくの間悩んでいた。

しかしそんな時、ノインが不意に私の前に姿を現すと、右手を差し出してなにやら目線で合図するのだ。

この時はまだ、彼の方から私に近づいてくる事など滅多に無かった

為、私は不思議そうに彼の表情をマジマジと覗き込んでしまったのだが、やがて彼の差し出した掌（てのひら）へと視線を移すと、そこには紅い二つのヘアピンが乗せられていた。

もしかして・・・。私にくれるの？

その時私は、どんな表情でノインの顔を見上げてしまったのか解らない。

恐らく、間抜けなほど驚いた表情を浮かべてしまったに違いない。

すると彼は、普段見せないような慌てぶりで私との視線を断ち切ると、半場強引にそのペアピンを私に手渡し、そして何事も無かったかのように私の前から立ち去って行った。

それは単に、紅いだけのヘアピン。

何の装飾も施されていない、ただ紅いだけのヘアピン。

私はこの時、えもいわれぬむず痒（がゆ）さのベールに包み込まれた心が、不思議と早まる鼓動の波に打ち付けられて、高鳴る音を聞いてしまった気がした。

他の人から物を貰うなんて、初めてのことだったし、嬉しい気持ちにかき立てられてしまった自分の心を、一体どうやって落ち着ければ良いのか、私には全く解らなかった。

しかし、この出来事以来、私のノインに対する見方が変わった事は

確かだった。

その後、私とノインは、全く休む暇も与えられず過酷な作戦任務へと立て続けに駆り出され、何度も何度も戦場とアジトの往復を余儀なくされるが、私は何かにつけて、ノインと一緒に居る時間を作るように努力した。

そして、慣れない手付きで手話を繰り出し、作戦任務に関する内容や、戦闘訓練に関する内容を持って、必死に彼に話しかけるのだ。

勿論、人付き合いを苦手としてきた私が持ちかける話題など、何の教養も面白みも無いつまらない物だったに違いないが、それでも彼は、不明瞭な私の手話をじっと見つめながら、一生懸命話の内容を読み取ろうとしてくれた。

やがて時を経ると共に、次第に彼の表情に笑みが交えられるようになると、私の両手は決して普段口にしないような心の揺り動きまでも、自然と奏で出すようにまでなったのだ。

私が自分の思いを彼に伝える時、必ず手話を使うようになったのは、自分の抱いた思いを口に出す事が、妙に気恥ずかしかったからであり、私が他人であるノインと極自然に話をする事が出来るようになったのも、恐らくは彼が聾唖（ろうあ）であった事が、一番の大きな要因だったのだろう。

決して相手に負ける事を許されない過酷な戦場を、唯一の生業（なりわい）として与えられた私の人生。

相手を薙ぎ倒す事で初めて示される自分の未来を、必死に手繰り寄せるだけの私の人生。

そんな数多くの人々の屍の上に築かれた人生において、こんなにも楽しく会話に興じる自分が登場しようとは、それまで全く想像する事も出来なかった事だ。

私は酷く淀んだ心の中に差し込む、ノインと言う木漏れ日の存在に、何処か心安らぐような暖かな雰囲気を感じ、それを求めるようになっていた。

しかし、そんな彼との楽しい一時は、それほど長くは続かなかった。

ＥＣ３９２年の１０月１日。あれはまだ、ほのかに暑さの残る初秋の真昼時だった。

私はその日、次なる作戦任務の打ち合わせのため、他の仲間達と一緒に地下アジトの作戦会議室に居たのだが、突然、仲間の一人が血相を変えて部屋の中へ飛び込んでくると、激しく息を切らしながら、驚愕の事実を告げたのだ。

他のアジトが憲兵隊の襲撃を受けている！

それも一つや二つじゃない！

確認できているだけで十二箇所ものアジトが同時に攻撃されているようだ！

一瞬にして騒然とざわめき出す会議室内において、青ざめた表情を浮かべた幹部の一人が、大きな声を張り上げて男を問い質すが、それでも彼の返答が覆る事は無かった。

ルーアン地方におけるファルクラムのアジトは、その多くが一般市民の生活に紛れ込んだものであり、決して簡単に見つける事が出来ないように、常に活動の拠点を定期的に移動する事が義務付けられている。

勿論、決してそれが発見されないと言う保証は無かったが、それでも複数箇所のアジトが同時に摘発されるなど、そこに何かしらの必然性が無い限り、絶対にありえない事なのだ。

となると、このアジトも危ない・・・。

その場に居た誰しもがそう思ったであろう。

ピリピリと緊張した冷たい空気が張り詰める会議室の中で、屈強な戦士達が一様に顔を見合わせ、唖然とした表情のまま凝り固まる。

それはまさに、今まで予想だにしなかった緊急事態が到来した事を告げていたのだが、もはやこの時点で、私達に選択肢はほとんど残されていなかったのだ。

私達は満足に戦闘態勢を整える暇も与えられぬまま、地下施設内へと鳴り響いた激しい銃撃音によって、敵の侵入を知らされる事となってしまった。

それは、地上施設入り口付近を見張っていた仲間達が、迫り来る帝国憲兵隊と激しく撃ち合っている様子を如実（にょじつ）に物語っていたのだが、それでも撃ち鳴らされた銃撃音の数的に、どちらが勝者と成り得たのか、もはや推測するまでも無かった。

私達ファルクラムの戦闘工作員達は、決して帝国憲兵隊の能力に劣るような粗悪な烏合の衆ではなく、たった一人でも数多くの敵を撃ち倒せる有能な人材の集まりである。

しかしそれは、急襲、不意打ちを得意戦術とするテロ組織内にあって、初めて発揮される局所的な能力であり、正攻法を持って数的ゴリ押しを強いる帝国憲兵隊の前には、全く意味を成さないと言っても良かった。

そのため私達は、有無を言わさず退却と言う二文字を選択せざるを得なかったのである。

勿論、地上施設入り口付近を帝国憲兵隊に制圧されてしまった以上、真正面から強引に逃走を図る事は出来ないが、この地下施設内には、迷路のように入り組んだ地下下水施設へと続く、抜け道が幾つも存在している事は解っていた。

この施設をファルクラムのアジトとして選定した理由の一つには、このような緊急事態に備えて予め退路を確保する意味もあったのだろうが、私達は即座に部屋の武器庫から銃火器を手に取ると、一斉にその抜け道を目指して薄暗い地下通路内を走り出した。

しかし私はこの時、逃げ去る仲間達の集団から一人外れると、別の地下区画へと続く通路に駆け込んだ。

それは、作戦会議が終わるまで別室で待機する事になっていたノインに、訪れた緊急事態を知らせてやる為であり、如何に激しい銃撃音が地下施設内に鳴り響いたとは言え、耳の聞こえぬ彼には、それを察知する術が無かったからである。

帝国憲兵隊が目と鼻の先にまで差し迫った危機的状況下において、私にはもはや、一刻の猶予も残されていなかったのだが、それでも彼を一人置き去りにして逃げ去ろうなどと言う利己的意識は、この時の私には全く無かった。

自らの命を守りうるものは、自らの能力をおいて他になし。

力なき者は倒れ、力のある者だけが生き残る。

今まで、そんな父の教えを常日頃（つねひごろ）から擦り込まれて来た私だが、不思議と湧き出す強い感情に煽（あお）り立てられ、薄暗い地下通路内を必死になって駆け抜けたのだ。

勿論、もう既に彼がその部屋にいない可能性もあったが、ようやく辿り着いた部屋の前で、私は直ぐに彼の姿を見つける事になった。

ノイン！！憲兵隊の摘発よ！！

早くここから脱出しないと危ないわ！！

両耳を覆いたくなるほど大きな戦闘音が地下施設内に木霊する只中で、全く何ら慌てる様子も無く、じっとそこに立ち尽くしたままの

彼の姿は、まさに私が想像した通り、この緊急事態を少しも察する事が出来ていなかった。

私は必死に手話を交えながら、彼に早く逃げるよう強く訴えかけた。

しかし、私の言葉に全く反応を見せる事もなく、まるで蝋人形（ろうにんぎょう）の様に立ち尽くした彼の視線は、じっと私へと据え付けられたまま微動だにしなかったのだ。

どうしたのノイン！！

早く・・・！！

この時、私は彼の余りの反応の悪さに、妙に異様な雰囲気の漂いを感じてしまったのだが、それでもじっくり自分の意思を彼に伝えている暇など無かった為、私は強引に引きずってでも彼を連れ去ろうと、再び彼の傍まで駆け寄って行った。

しかし次の瞬間、私の動きに合わせる様にして振り翳（かざ）された彼の右手が、それまで全く予想だにしていなかった衝撃的展開を明示すると、私は踏み出した足を完全に差し止めなければならなくなった。

それは余りに突然の出来事であり、私の望みを全て打ち砕くに等しい残酷な事実だった。

彼の下した合図と共に突然姿を現したもの。

それは十数人にも及ぶ帝国憲兵隊兵士達だった。

彼等はノインの背後に横たわる地下通路から一斉に姿を現すと、彼の背後に隊列を形作り、殺意を込めた銃口を私に向かって突きつけたのだ。

この時、その異変に気付いた瞬間に私が即行動を起こしていれば、もしかしたら上手く逃げ失せる事が出来たのかもしれない。

しかし、私はむざむざとその瞬間を見逃してしまった。

そして、帝国憲兵隊の殺意の渦中に晒されながらも、全く眉一つ動かさずに立ち尽くしたノインの姿を、ただ呆然と見つめていたのだ。

ファルクラムのアジトが複数箇所同時に攻撃を受けていると聞かされた時から、何かしらそう言った疑念を抱いてはいた。

長年帝国内部に広く蔓延った不治の病たるテロ組織ファルクラムは、如何に力を持ちえた勇者が外科手術を試みたところで、完全に完治させる事は不可能な事であり、帝国内部から徐々に蝕む病を完全に死滅させる為には、とある「良薬」を持ってして対策を講じる以外に何ら有効な手立ては無い。

勿論それは、ファルクラム組織内においても、最も重大な懸念事項として認識されており、新しく組織に組み込まれる人間の身辺調査、意識調査は、常に入念にチェックされていた。

しかし、月に一人か二人、必ず裏切り者たるレッテルを貼り付けられて、断末魔を吐き出すに至る人間が存在する事も確かで、私はこの時、組織内部に潜んだ裏切り者の手によって引き起こされた事件

なのだろうと予想していたのだ。

私の視線の先に佇む（たたず）一人の男性。

それは無表情で、人付き合いが苦手で、作戦任務中は全く容赦の無い残虐性を持ちえた人物。

言葉による意思のやり取りがままならない関係だったが、それでも様々な手段を用いて数多くの言葉を交わし、私が生きてきた中で一番心を通わせる事が出来た人物。

そんな人物を前に、私は絶対に信じる事が出来なかった。

帝国憲兵隊兵士達が、逃走経路となる地下施設の奥深くから姿を現した事。

彼の背後に隊列を組んだ兵士達の銃口が、決して彼の方へとは向けられず、全て私の身体を打ち抜くために、一糸乱れず方角を定めている事。

これらが示す事実とは、どの様な経路を辿り経ようと、たった一つの答えにしか行き着かない。

「シュバルツ・ノイン」＝「帝国憲兵隊のスパイ」

彼に対する懐疑的思考と願望的思考を複雑に絡み合わせ、私は必死に導き出された回答を否定しようと試みたのだが、虚しく描き出さ

れた二重螺旋の行く末も見ぬままに、私の身体は素直な反応を示していた。

ノイン！！！

無数の殺意の切っ先に立たされた危機的状況にありながらも、私は素早く腰にぶら下げた短銃を抜き去ると、大きな声で彼の名前を叫ぶ。

そして、短銃の凹型リアサイト、凸型フロントサイトを経由して、いつも見慣れたノインの顔へと正確に照準を定めると、激しい怒気と殺意を込めた鋭い視線を突き刺した。

完全に自由を剥奪（はくだつ）された虜囚（りょしゅう）たる者が、無闇に相手に敵意を示して見せるなど、余りに軽率な自殺行為だと言われても仕方が無いが、私は裏切り者たる彼の存在を目の前にして、決してそれを見過ごす事は出来なかったのだ。

見据えた視線の先で激しい殺意を突きつけられた彼の表情は、完全に他人たる隔たりを持ってそこにあるだけの無表情な仮面。

何をするつもりなのか、全く解らない無表情な仮面。

何を考えているのか、全く解らない無表情な仮面。

しかし、私が死を覚悟してまで、投げかけた威圧的問いかけに対し、彼は少しも答えを示す事無く、全く否定して見せるでもなく、ただじっと私の方を見つめたままだった。

私は右手の人差し指に力を込めた。

私は彼に否定して欲しかった。

次の瞬間、一発の銃声が狭い地下通路内に木霊した。

私がトリガーを引けば、裏切り者である彼は死ぬ。そして私も死ぬ。

もはや逃げる道さえ断たれてしまった私にとって、それでよかったはずだった。

しかしこの時、真っ赤な鮮血を飛び散らせて床の上へと倒れこんだのは、彼ではなく私の方だった。

私は帝国憲兵隊の一人の兵士が放った銃弾によって、右脇腹付近を撃ち抜かれてしまったのだ。

殺意を込めてトリガーを引く。

それは、これまで何度と無く繰り返して来た行動だったが、必死に力を込めた人差し指は、何か強い意思に縛り付けられている様でもあり、私は全くピクリとも動かす事が出来なかったのだ。

無様にも彼の目の前に力なく崩れ落ちてしまった私は、全身を駆け巡る激しい痛みに悶えながらも、必死になって彼の表情を見上げた。

これが私の見た、彼の最後の表情だった。

決して悲しむでもなく。決して喜ぶでもなく。

暖かくもなく。冷たくもなく。

薄れ行く私の意識の中に焼き付いた彼の表情とは、それまで彼と通わせてきた心の行き交いを完全に否定するような、初めて彼と出会った頃に見せた、あの人形のように無機質な能面だった。

私はノインを撃てなかった・・・。

ノインを撃つ事が出来なかった・・・。

裏切り者を・・・。

撃つ事が出来なかった・・・。

やがて、右手に握り締めた冷たい短銃の重みが、ほとんど感じられなくなると、私は完全に意識を失ってしまった。

06－03：〇ローゼイト・サーペント［3］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「ローゼイト・サーペント」

それからどのぐらいの時が流れただろうか。

その後私は、薄暗い地下室の中で目覚める事になる。

四方を強固な石の壁で囲われたその部屋は、薄汚い毛布が一枚置いてあるだけで、他には何も無い冷たい牢獄の中だった。

私は咄嗟（とっさ）に、今自分の置かれている立場を確認しようと、勢い良く起き上がろうとしたのだが、右脇腹に走った激痛によってそれを阻止される。

そして、両手両足に填（は）められた頑丈な枷（かせ）によって、完全に自由を奪われてしまっている事に気がつくと、私はようやく敵の手に落ちてしまった事を悟った。

帝国憲兵隊に撃たれた右脇腹の傷は、特に命に関わるような深刻なものではなく、不思議と丁寧に施された手当てによって、少なくとも悪化の一途を辿っているような気配は感じられなかったのだが、いっそその時に死ぬ事が出来ていたのなら、どんなに楽だったのだろう。

帝国憲兵隊の捕虜として私が送りつけられたその施設は、帝国国内でも重犯罪を犯した囚人達が送り込まれる過酷な強制収容所。

「トンダルシア囚人収容所」だった。

凶悪な犯罪者達を別個に監禁する為のその牢獄は、寝る為のベッドも無ければ、水場も無いという倉庫のような部屋であり、トイレすら設置されていないと言う酷いものだった。

唯一支給されたのは、誰のものとも解らない血糊（ちのり）が大量に付着した薄汚い毛布一枚のみ。

食事も一日一回のみで、異臭を放つ粗悪なスープ一杯以外は、満足に水を飲むことも許されなかった。

勿論、その程度の劣悪な環境ぐらいで、簡単に音を上げるような私ではなかったが、その後次第に傷の癒えた私の前には、今だ嘗（かつ）て無いほどの過酷な茨の道が用意されていたのだ。

何故、暴虐の破壊者「ローゼイト・サーペント」たる私が、処刑される事もなく生かされ続ける事になったのか、その理由が明確に示された訳ではないが、恐らく今だどこかに隠れ潜んでいるであろうファルクラムメンバー達の情報を、聞き出したいと言う意図が有ったからなのだろう。

勿論、実行部隊の構成員に過ぎない私が持ちえた情報など、ほんの一握りの些細（ささい）なものに過ぎ無かったのだが、収容所の監守達に取ってみれば、私が情報を持っていようと持っていまいと、何ら関係の無い話だったのかもしれない。

その後私は、取り調べと称した凄惨（せいさん）な拷問を強いられ、まさに家畜以下とも言える非道な扱いを受ける事になる。

牢獄から拷問部屋まで続く長い通路を、首輪から伸びる鎖によって引きずり回される事は当たり前だったし、まるで意思無き人形を弄(もてあそ)ぶかのように繰り返される過酷な拷問は、剥ぎ取られた衣服と共に、私の人間としての理性や尊厳をも、完全に奪い去ってしまう程のものだった。

私は毎日のように連れ込まれた拷問部屋の中で意識を失うと、夢も希望も無い薄暗い牢獄の中に放り込まれ、そして、再び監守の遊び道具になる為だけに、次の朝を迎えるのだ。

自業自得の報いと言われれば、そうなのかもしれない。

私が幾ら泣いても。幾ら叫んでも。

私の事を人間として扱ってくれるような高尚(こうしょう)な人間は、誰一人としていなかった。

しかしある時、そんな地獄の淵をのた打ち回っていた私の目の前に、突然、不思議な光の筋が差し込んだ。

その日は前帝ソヴェールの誕生祭が行われる日で、ほとんど日常化していた私への拷問作業も珍しく免除され、私は朝から汚い毛布に包まったまま、薄暗い牢獄の中に蹲(うずくま)っていた。

すると、正午を告げる鐘(かね)の音が鳴り響いた後、普段は粗悪な食事が配給される小窓から、不思議な小箱が部屋の中へと放り込まれたのだ。

この時、私はもう既に食事を取る気力すら沸き起こらない極限状態

にあったが、毎日食事が配給される時間は夕刻１７：００と決まっていたため、不思議に思った私は、満足に動かす事もできなくなった手足を引きずり、小箱の元まで這いずって行った。

その小さな小箱は、何の変哲も無いスチール製の入れ物であり、外見（そとみ）何が収められているのか全く検討も付かなかったが、小箱の上に添えられた１枚の紙切れに書かれていた文字を読み取ると、すぐさまその小箱を毛布の中へと仕舞い込んだ。

「今日の夜間巡回予定は２０：００以降一人体制」

勿論、私はその紙切れに書かれている内容は直ぐに理解する事が出来た。

しかし、何故このような知らせと共に小箱が放り込まれたのかは、全く理解する事が出来なかった。

今日の拷問を免除された私に対する、悪意のある悪戯（いたずら）なのではないか。

私は毛布の中で抱きかかえた小箱をじっと見つめながら、少なからずそんな疑念を抱いてしまったのだが、もはや何も失う物の無い私が、今更何かに脅（おび）えて躊躇（ちゅうちょ）する理由などどこにもない。

私は思い切って小箱の蓋（ふた）を開いて見る事にした。

手に持った感じから、中には何か重量感のある物が入っているであろう事は予想していた。

しかし私は、まさかこのようなものが小箱の中に納められていようとは、全く思っても見なかったのだ。

小箱の中に収められていたものとは、まさに脱獄を幇助（ほうじょ）する為に、選（え）りすぐられた小道具の集合体であり、鋭利な小型ナイフや短銃は勿論、使い道多様な細長い針金や布製の袋、枷（かせ）の鎖を切断する為の鑢（やすり）ワイヤーの他、脱獄する為の逃走ルートを示した地図や、硬く先の尖った２０本の鉄の棒までもが収められていたのだ。

一度私を逃がしておいて、その後狩りでも楽しもうと言う事なのだろうか・・・。

この時私は、この小箱の中身に大きな衝撃を受けてしまった事は確かだが、それでも何かの罠である可能性を否定する事も出来ず、用心深く誰もいない牢獄の中を見渡してしまった。

勿論、そこには何かしらの意図が隠されているのであろう事は間違い無い。

しかし、それまでローゼイト・サーペントとして暴虐の限りを尽くしてきた私を、無為に脱獄させて喜ぶような人間は誰もいないはずだ。

もはや監守達の欲望を満足させるためだけの、汚れた道具へと成り下がってしまった私に、一体何処の誰が、何を求めてこのような道

具を分け与えたのだろうか。

私はふと、手にした短銃をマジマジと見つめながら、小さく溜め息を吐き出してしまった。

これで頭を撃てば・・・。楽になれるのかしら・・・。

日々繰り返される過酷な拷問は、それを必死に耐え抜いたからと言って、その後の未来に安楽な世界が約束されている訳では無い。

恐らく私が力尽きて朽ち果てるか、または監守達の興味が削がれてしまうまで、その行為は延々と繰り返される事になるのだろう。

苦痛のみが約束された過酷な人生。

私はそんな自分の光無き未来に失望し、何ら生きる糧をも見出す事もできない状況で、自分の命を絶ってしまおうと何度も思い詰めた。

しかし、そこに一体何を望んでいたのか解らないが、結局私は、死後の世界へと逃げ去る決意を断行する事が出来なかったのだ。

勿論、与えられたこの道具を用いて脱獄し、監守達の追撃の手を逃れたからと言って、帰れる場所も無い犯罪者たる私に、明るい未来が訪れる保証も無い。

ファルクラム組織のためだけに自分の生きる道筋を重ね、作戦任務を成功させるためだけに生きてきた私にとって、それ以外の何かに生き延びる為の糧を築き上げるなど、簡単に出来ようはずも無かっ

た。

しかし、そんな絶望の淵へと追い詰められた私が、小箱の中で微かに光る不思議な小物の存在に気が付いたのはその時だ。

それは脱獄する事を目的とした道具の中で、唯一全く関係の無い日用品の一つであり、私が収容所へと連れ込まれる過程で行方不明となっていた、私の紅いヘアピンだった。

何の装飾も施されていない、味気ない紅いヘアピン。

私が唯一、心を通わせた男性からの贈り物である紅いヘアピン。

この時私は、小箱の中から取り出した紅いヘアピンを見つめながら、完全に我を見失ってしまうほどの強い殺意が心の中に沸き起こるのを感じていた。

私の奪い取られた数ある持ち物の中から、態々（わざわざ）この紅いヘアピンを選択して小箱の中に収めるような人間は、世界にたった一人しか居ない。

つまりこの小箱は、その人物が私の為に用意したものだと言う事だ。

それは、ファルクラム組織を裏切り、壊滅へと追いやった人物。

私が最も信頼し、心を寄せた男性。

そして、そんな私の想いを引き千切り（ひきちぎ）、私をこんな目に合わせた張本人。

「シュバルツ・ノイン」ただ一人。

私は即座に道具を小箱の中へと押し込めると、薄汚い毛布を頭から被り、時が訪れるのを只管(ひたすら)に待った。

そう、紙に印されていた脱獄する機会が訪れるを。

この期に及んで、この私に一体何の希望を抱いて生きろというの!?

私の想いを踏みにじった癖に!!

私をこんな酷い目に合わせた癖に!!

ファルクラム組織を裏切り、メンバー達全員を地獄の底へと突き落としておきながら、何故今頃になって私にこんな物を!!

貴方なんか、欲望で肥満しきった下衆共にいい様に操られながら、心の通わぬ人形として朽ち果てればいいのよ!!

後悔するといいわ・・・。

私にこんな物を与えてしまった事を。

貴方の情報が正しいかどうかなんて関係ない。

私は絶対に生き延びる!

絶対に生き延びて、そして絶対に貴方を殺してやる！！

やがて時は過ぎ、私のいる牢獄の前を２０：００定期巡回担当の監守が見回りに訪れる。

普段であれば、常に二人体制で見回りが行われるのだが、この日は帝国国民達にとって特別な夜であり、恐らく監守達にもその恩恵が与えられる事になったのだろう。

確かに紙に記されていた通り、２０：００の見回り担当の監守は一人だった。

私は監守が鉄格子で仕切られた小窓から顔を覗(のぞ)かせるタイミングを見計らうと、苦しそうな素振りを装って、立て続けに激しい咳(せき)を演出して見せた。

勿論、私のような奴隷にも等しいゴミ屑(くず)がどうなろうと、監守達にしてみればどうでもいい存在だったに違いないが、それでも私が助けを懇願(こんがん)するような上目遣いを監守に差し向けると、彼は私の様子を確認する為に牢獄の扉の鍵を開け放ったのだ。

この時私は、既に両手足を括(くく)り付ける枷(かせ)の鎖を、鑢(やすり)ワイヤーで切断し終えていたのだが、肩から毛布を被って全身を覆い隠すと、監守の目を欺(あざむ)く為に、無抵抗たる奴隷を演じて脅えたように震えて見せる。

すると監守は、全く何ら警戒する素振りを見せずに、完全に無防備なまま私の目の前へと歩み寄って来た。

恐らく彼は、私に対して何らかの虐待を加えるつもりでいたのだろう。

愚かにも私の目の前へとしゃがみ込んだ彼の表情には、吐き気がするほど厭らしい笑みが浮かび上がっていた。

私は即座に毛布の中に隠し持ったナイフを強く握り締めると、全く躊躇する事無く、彼の喉元へとナイフの刃を突き立ててやる。

監守は一瞬、自分が何をされたのか理解できずに驚いた表情を私に向けたのだが、今更彼がそれに気付いたところで、何ら意味の無い事であった。

やがて、私が突き立てたナイフを勢い良く引き抜くと、監守は全く一言も発する事が出来ないまま、おびただしい量の鮮血をぶちまけて汚い牢獄の床へと蹲った。

私は即座に、監守の腰にぶら下げられてる鍵束を剥ぎ取ると、即死を免れもがき苦しむ監守を他所に、素早く牢獄の外へと飛び出した。

そして、薄ら暗い通路の左右を見渡した後で、一瞬、脱出経路の反対側となる通路奥へと視線を釘付ける。

もしかしたら、まだそこにノインが居るかもしれない・・・。

一寸の光さえも差し込まない暗黒の牢獄の中で、ようやく私が見出した生きる為の唯一の目的。

ファルクラム組織を裏切ったノインを殺す事。

私を裏切ったノインを殺す事。

私はこの時、沸々と沸き起こる激しい殺意の波に後押しされ、僅(わず)かな可能性に微(かす)かな望みを繋いで、監守達の屯(たむろ)す監視部屋へと、玉砕覚悟で特攻を仕掛けようかと言う気持ちに駆り立てられてしまった。

しかし、如何に今日の監視体制が脆弱(ぜいじゃく)なものであったにせよ、確実に彼が監視部屋に居る保証など何処にも無く、望みの薄い無謀な行為に打って出るなど、私にとっては無駄死にを意味する愚かな暴挙以外のなにものでもなかった。

私は高鳴る自分の思いを必死に心の奥底へと押し込めると、長きに渡って痛めつけられ五体に新たな生命の業火(ごうか)を宿し、逃走ルートとして示された道順を走り始めた。

不思議と溢れ出す、熱い涙を必死に拭い去りながら。

それは悔しいからなのか。それは悲しいからなのか。私には全く解らなかった。

私は貴方を殺す為に生きる！

私は貴方を殺す為だけに生きる！

絶対に貴方を探し出して、私の目の前で殺してやる！

私はそれまで・・・。

それまでは、絶対にもう泣かない！！

やがて辿り着いた収容所の出口となる扉の前で、私は最後の涙を拭い去ると、監守から奪い取った鍵を用いて扉の鍵を開け放つ。

そして、ほぼ３ヶ月ぶりになろうかと言う久しぶりの外気を全身に浴びて、私は収容所の外へと躍り出た。

真冬の真っ只中であるこの時期の空気は、まさに身を切るような凍てつく寒さであり、ボロボロに擦り切れた薄手の囚人服程度で、簡単に凌(しの)ぎきれるものではなかったが、もはやこの収容所から逃げ去る以外に、生き延びる道が残されていない私にとって、そんな事に気を取られている余裕など全く無かった。

私はすぐさま収容所をぐるり取り囲んだ高い石垣付近の建物の影に身を隠すと、布製の袋の中から先の尖った鉄の棒を取り出す。

勿論、高さ１５メートル程はあろうかと言うこの石垣には、よじ登るため取っ掛かりとなるようなものは、全て硬いコンクリートで埋め尽くされており、簡単に囚人達が逃げ出せないよう細工が施されてはいたが、逃走ルートを示した紙によれば、老朽化によって所々、綻(ほころ)びが見え始めた場所と言うのがここだった。

私は即座に、石と石を繋ぎとめるコンクリートの脆(もろ)くなった部分を見定めると、短銃の硬いグリップを使い、細長い鉄の棒を互い違いに二列になるように打ち込んでいく。

そして、出来上がった取っ掛かりを足場としてよじ登り、更にその上段に新たな足場を形成する為の作業へと取り掛かるのだ。

それは一見、終わりの見えない地道な作業のようにも感じられたのだが、やはり逃走ルートとして指定された場所だけ有って、私が思うほど困難な作業ではなかった。

やがて私は、難なくその高い石垣を登り切る事に成功し、石垣の外側に隣接した建物の屋根を辿って地上へと舞い降りる。

するとこの時、ようやく収容所施設周辺に異常事態を知らせるけたたましいサイレンの音が鳴り響く事になるのだが、この時点でそれは、もはや余りに遅すぎる対応だったと言わざるを得ないだろう。

私は追っ手らしい追っ手に全く出会う事も無く、トンダルシア囚人収容所施設を脱出する事ができたのだ。

勿論、施設周辺には脱獄した囚人達の逃亡を阻止するべく、様々なトラップが張り巡らされてはいたが、私にとってみれば、所詮子供だまし程度のものに過ぎなかった。

それから私は、険しい山岳地帯を必死に逃げ回る事になるのだが、丸一日が経過した頃、ようやく山の麓（ふもと）に広がる大きな街「シャルム」へと降り立った。

流通中継都市として栄えていたその街は、夜も深け行く時間帯にありながらも、街中は活気に満ち溢れた人々でごった返し、逃亡者たる私が身を隠すには、まさに打って付けの場所とも言えた。

しかしこの時、私が身につけていた衣服はボロボロの囚人服であった上に、身体には拷問によって刻まれた痛々しい傷が多数残されており、無闇に人目に付く様な行動は差し控えねばならなかった。

私はとりあえず、近くの露店から食べる物と衣服を盗み出すと、近くに停車していた長距離用運送トラックの荷台に潜り込む。

長きに渡り酷く痛めつけられてきた私の身体は、丸一日に及ぶ逃走行為で完全に疲弊しきっており、私はまず、少しほとぼりが冷めるまでこの地域を離れる事を決意をしたのだ。

06－04：〇ローゼイト・サーペント［4］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「ローゼイト・サーペント」

それから私は、ガタガタと揺れ動く不安定な荷台の上で、一体どのぐらいの時間を過ごしたのだろう。

冷たい真冬の風から身を守る為、積み上げられた大きな荷物の隙間に潜り込み、盗んだ厚手の衣服を被って、じっと寒さに耐え忍んでいた私は、ふと所々穴の開いたブルーシートから差し込む、眩い光の筋によって現実世界へと引き戻される事になる。

それまで毎日のように監守達の暴行によって、強制的に叩き起こされていた私にとって、優しい寝覚めを促すように降り注ぐ朝の光は、まるで天国にでもいるような暖かな雰囲気を感じるものであり、私はしばらくの間その安息の一時に身を委ね、じっとその光の筋に見入っていた。

しかし、そんな久しぶりとも言える心の安らぎを、一瞬にして打ち砕く程の記憶がようやく私の脳裏に蘇（よみがえ）ると、私は自分の犯した余りに軽率な行動に対して、背筋が凍りつくほどの強い悪寒を覚えてしまう。

如何に過酷な収容所を脱出する事に成功したとは言え、所詮私は犯罪者たるレッテルを貼り付けられた逃亡者。

久しぶりに感じた安らぎの中に現（うつつ）を抜かし、事もあろうか完全に無防備な状態で熟睡してしまうなど、絶対に有ってはならない行動だ

ったのだ。

この時、乗り込んだトラックが停車するような気配はまだ無かったが、それでも何かしらの検問に引っかかる可能性もあるため、ハッとした私は即座に右手で短銃を握り締めると、トラックの荷台を覆ったブルーシートの隙間から恐る恐る外の世界を覗き込んでみた。

あ・・・。あれが有名なアルテナス山か・・・。

するとまず、私の目に飛び込んできたのは、綺麗に澄み渡った青空に映える、真っ白に雪化粧を施した大きな山だった。

山の裾野（すその）は完全に空の色へと取り込まれ、朝日に照らし出された山頂付近だけが空の彼方に映えるその幻想的風貌は、まさに伝え聞い通りの「天空の城」そのものであり、私の抱いた不安を一瞬にしてかき消してくれたのだ。

綺麗なアルテナス山の姿を左手に、長い一本道を南下しているという事は、私を乗せたトラックが既に、トゥアム共和国領内へと足を踏み入れた事を示唆（しさ）している。

どうやら私の懸念していた検問所は、私が深い眠りの淵へと沈んでいる間に、難なくやり過ごす事が出来ていたらしい。

行き先が入国管理のずさんなトゥアム共和国でよかった・・・。

今でさえ入国には厳しい審査が義務付けられてはいるが、当時、高度経済成長期にあったトゥアム共和国は、疲弊（ひへい）した国力を増強する為に、諸外国からの難民達を新たな働き手として幅広く受け入れてきた過去があり、各所に設置された国境検問所の体制は、決して褒められた機能を有してはいなかった。

しかも、前帝ソヴェールの戦火縮小宣言以降、帝国と共和国の間では頻繁に貿易取引を行う輸送車両が往来するようになっており、私を乗せたトラックはお得意様貴族のトラックか何かだったのだろうか、次なる検問所においても、積荷の検査すらされない有様だった。

私は運が良いのだろうか・・・。

いえ・・・。決してそんなはずは無いわよね・・・。

私は酷い拷問の爪痕が残された両腕を擦りながら、そう思ったものだ。

やがて程無くして私が辿り着いた先は、トゥアム共和国の副都心リトバリエジ郊外にある工業地帯だった。

当時このリトバリエジ都市は、都市中心部を取り囲むように建設された、巨大な工業地帯によって成り立つ製造の街であり、首都ランベルクをも凌ぐ勢いで、著しい経済発展を遂げていた時期でもある。

貧しい者も、身分の低い者も、皆平等に働く為のチャンスを与えられ、能力さえあれば誰でも成り上がる事が出来と言う、まさに夢の街。

この都市に新たな希望を見出して、各地から集結した労働者達の中には、莫大な富と名誉を手にして、人生の勝ち組たる存在にまで伸し上がった者も少なくなかった。

しかし、そんな数多くの人々の夢を乗せた希望の都も、強く光を放てば放つほどに、真っ黒に淀んだ色濃い影を作り出してしまうもの。

数多くの成功者を生み出すに至ったその過程の中には、それ以上に数多くの人々の礎（いしずえ）が有ったからに他ならず、この時、志半ば（こころざしなか）に朽ち果てた人々によって、近代的栄華を誇る巨大な都市群の周囲には、汚らしいスラム街が作り出されていた。

そこは昼夜を問わずして凶悪的犯罪が横行する危険な集落であったが、私のように国外から逃亡してきた犯罪者にとっては、格好の隠れ家となりえるため、寧ろ歓迎すべき事であった。

私はとりあえず傷ついた身体を休める為、しばらくの間この場所を仮の根城とする事に決めた。

ここでの暮らしには何ら不自由はしなかった。

何せ私は黙って町を歩いているだけで生活ができたのだから。

完全に無法地帯とも言える危険なこのスラム街には、夢破れて人生を転げ落ちた敗北者達の他に、弱者を狙い弱者を貪（むさぼ）る数多くの犯罪者達が住み着いており、何故か私はみすぼらしい格好をしているにも関わらず、このような「ならず者」達の集団に取り囲まれる事が多かった。

それは恐らく、私が女であった事が原因の一つなのだろうと思われるが、それでもいきり立って私の目の前に立ちはだかるなど、何とも可哀想な連中だった。

如何に屈強な身体を有した猛者達であろうと、所詮いくら素人達が徒党を組んで見せたところで、全く私の敵ではない。

私は軽く彼等の相手をしてやると、逆に金品を巻き上げてやった。

何とも簡単な話だ。

しばらくの間は、この方法で飢えを凌ぐ事ができた。

しかしやがて、そんな私の噂が周囲へと知れ渡ってしまうと、私を狙おうなどと考える愚かな獲物達の数も次第に激減の一途を辿る事になる。

それは当然の事と言えば当然の事だが、その後私は、結局彼等と同様に弱者を狙う略奪者の一人として、数々の暴挙を振るう事になるのだ。

人通りの激しい場所に紛れ込んでのスリや引ったくり、置き引きや万引きは、ほぼ毎日のように繰り返したし、身なりの良い婦人を見つければナイフを突きつけて恐喝したり、豪華な店や家を見つければ、白昼堂々と真正面から強盗に押し入ったりもした。

勿論この時、ほんの小娘に過ぎなかった私を軽んじて、無駄な抵抗を見せた者には、愚かなる殺人被害者の烙印（らくいん）を押し付けてやったし、

必死に泣き叫んで命乞いをする者でも、私の要求を拒んだ場合には、情け容赦なく振り翳したナイフで、身体を切り刻んでやった。

自分が生き延びる為に他人から物を奪う。

自分が生き延びる為に他人を殺す。

それは、幼い頃からファルクラムと言う犯罪組織の中で育って来た私にとって、唯一持ちえた生き延びる為の手段であり、私はそこに何の罪悪感も、何の躊躇いも感じていなかった。

私の名前は「アリミア」。

私はこのスラム街で、自分をそう名乗るようになっていた。

「アリ（一匹の）・ミーア（猫）」を意味するこの名前は、当時このスラム街で妙に私に懐いて来た一匹の子猫から取って付けた名前であり、私のような人間にとっては、何ともお似合いのネーミングとも言えた。

ミドルネームとラストネームは適当につけた。

やがて、私がこのスラム街に住み着いてから2ヶ月も経つと、次第に私の周りには数多くのならず者達が集まり始めた。

それまで彼等の縄張りだったこのスラム街を、一人我が物顔で練り歩くようになった私を、今度は寄って集って撲殺でもするつもりなのだろうかと、私は素っ気無くも白々しい視線で彼等を睨み付けたものだ。

しかし、実際に彼等が私に激しい敵意を示して見せたのかと思えばそうではなく、私のような小娘一人にさえ立ち向かう勇気の無い彼等は、媚び諂うかのように私の足元に平伏したのだ。

とどのつまり、彼等は私の犯罪行為のお零れに預かろうと集まった、意地汚いハイエナの集団であり、私は何の有り難味も無い、彼等の畏敬の象徴にされてしまった訳だ。

私にとってそれは、煩わしい以外の何者でもなかったが、徒党を組んでいた方がより大きな獲物を獲られる事を知っていた私は、しばらくの間彼等と行動を共にする事になる。

しかしこの時、私が一緒に行動していた男達の名前は、誰一人として覚えてはいない。顔すらも思い出せない。

ただ、彼等と一緒に数多くの獲物を仕留め、大量の略奪品を得る事に成功したという、虚しい記憶だけが私の頭の中に残っているだけだ。

私にとっての彼等は共に戦う仲間達などではなく、単に都合よく利用するだけのゴミにも等しい存在に過ぎなかったと言う事なのだろうが、それは彼等としても同じ事だった。

何ら生きる価値も無い掃溜めに屯す亡者達の群れに囲まれ、ただ持ちえた暴力的能力をひけらかす私の存在は、全く何者と交わる事も無く、自分自身のみの為に生きる孤独な悪魔。

決して纏わりつく目障りな男共の為に生きていた訳ではない。

決して誰かの為に破壊的猛威を振るった訳でもない。

私は略奪行為を終えた後に彼等が見せる、腹黒い友好的態度を強引に断ち切ると、いつも決まって直ぐに彼等の元を立ち去った。

そして、たった一人だけの世界の中に身を埋(うず)めながら、復讐者としての自分が抱いた目標を見定めて、裏切り者たるシュバルツ・ノインの姿に強い憎しみの念をぶつけるのだ。

しかしやがて、長い時間が経過すると共に、癒えた身体が凄惨(せいさん)な拷問で受けた傷跡を消し始めると、それまで強く抱き続けてきた激しい殺意の念が、私の心の奥底から徐々に風化し行く兆しが見え始めた。

勿論、私には決してこの裏切り者を赦(ゆる)してやるつもりなど無かったのだが、普段の生活に何の不安も感じなくなった私は、何をするでもなく一人で過ごす時間を持て余すようになり、不思議と沸き起こる一つの疑念に対して、意識を囚(とら)われるようになっていったのだ。

何故ノインは、私を助けたのだろう・・・。

恐らく彼は、ファルクラム組織を壊滅させる為に送り込まれたスパイの一人。

ファルクラム組織の一員に成りすまして、数多くの作戦任務をこなして見せたのも、周囲の信頼をそれなりに獲得する為であり、決して彼の本意ではなかったのだろう。

それは作戦任務を終了させた後に見せた、彼の涙がそれを物語っている。

彼の抱く思いがどんなものであったにせよ、彼にとってファルクラムと言う組織は戦うべき敵以外の何者でもなく、私とノインは最初から対峙すべき敵同士だったという事になる。

とすれば、彼に私を助ける理由など何処にも無いはずであり、それまでローゼイト・サーペントとして、数々の猛威を振るって来たこの私を助けるなど、まさに彼自身の立場をも危うくする危険な行為に他ならなかった。

拷問部屋でのた打ち回る私の姿を哀れに思い、助けてやろうとでも考えたのだろうか。

言葉による意思のやり取りが儘(まま)ならなかったにしろ、お互いに思いを通わせたあの頃の日々を思い起こして。

結局私自身、幾ら心の中で激しい憎悪と殺意の炎を滾(たぎ)らせてみた所で、彼と過ごした思い出の日々を完全にかき消す事が出来ないでいる。

彼からこの紅いヘアピンを貰った時の、あの大きな胸の高鳴りを、私はいつまでも忘れられずにいる。

彼は一体、何を思って戦っていたのだろうか。

彼は今、何処で何をしているのだろうか。

少しでも私の事を、思い出してくれたりするのだろうか。

私は明かりも無い真っ暗な廃墟の屋上で一人、綺麗な星空を見上げながらそんな思いに耽る事が多くなっていた。

しかし、ノインがファルクラム組織を壊滅に追いやった事実は消えはしない。

ノインが私を過酷な強制収容所へと突き落とした事実は消えはしない。

身体へと刻み付けられた傷跡以上に、彼に踏みにじられた心の傷は深く、どれだけ時を経ても私の中で忌まわしい記憶を疼かせるのも事実だった。

裏切り者であるノインを殺す。

裏切り者であるノインを殺す為に生き延びる。

いつか必ずノインを探し出して、この手で殺してやる。

そう心の中で強く決意した思いが私を突き動かしているのは間違いない。

しかし、彼の消息を掴み取る事も出来ない逃亡生活に託けて、ただその日を生きる為だけに犯罪行為を重ねる自分が居る。

もはやこの時、抱いた思いとは裏腹に、私は自分が生き延びる為の目的を半分見失いかけていたのかも知れない。

そして、決して答えを見つける事の出来ない疑念を胸に、自問自答を繰り返した挙句、疲れ果てて眠りにつく。

そんな毎日を無為に過ごす日々が続いていた。

06－05：〇ローゼイト・サーペント［5］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「ローゼイト・サーペント」

しかし、そんなある時、私は不思議な老婆と出会う事になる。

それは、裕福な身分を持つと思われる高価な衣装を身に纏い、眩いほどの装飾品を身につけた小柄な老婆であり、真昼時とは言え無法地帯と化した危険なスラム街の中を、右手に持った杖に頼りヨタヨタと彷徨い歩いていたのだ。

私は一瞬、その老婆の余りに無防備な姿に強い警戒心を抱いてしまうと、崩れかけた建物の影からじっとその様子を観察している事しか出来なかった。

この頃になると、リトバリエジ都市周辺の余りの治安の悪さに、業を煮やしたトゥアム共和国政府が、このスラム街の取締りを強化し始めた為、私はそれまでのように、簡単に獲物を得る事が出来なくなっていたのだ。

何か武器を隠し持っているのだろうか。

それとも何か別の罠なのだろうか。

私の脳裏で渦巻く様々な憶測から、鳴り響く警戒心が払拭される事は無かったが、それでも他の略奪者に先を越される可能性もあったため、私は念入りに周囲の状況を見渡すと、思い切って老婆の前へと姿を現した。

勿論、老婆から見えないように後ろ回した右手にはナイフを握り締めており、いつでもこの老婆に襲い掛かる準備は出来ていたつもりだった。

しかし、激しい殺意を放って睨み付ける私の姿を見つけるや否や、事もあろうか老婆の方から私の方に歩み寄って来るではないか。

老婆の動きは、まさに老婆たるゆっくりとした動きでしかなかったが、私は老婆が自分の目の前に到達するまで、全く一歩も動く事が出来なかった。

やがて老婆は、そんな私の姿をマジマジと覗き込むと、疲れたように大きな溜め息を吐き出して、その場へと座り込んでしまった。

狩りをする野生の動物は、相手が逃げるから追うのである。

逃げもせず堂々とその場に居座る獲物を前に、狩る側の動物はしばし襲う事を躊躇(ちゅうちょ)してしまう事がある。

それがまさにこの時の私を現すに相応(ふさわ)しい言葉だった。

自分が狩られる側の人間であると言う事実に気付きもせず、堂々と狩る側の人間の前に座り込んで見せた老婆に対して、私は少なからず恐怖心を抱いてしまった。

お嬢さんは、何でこんなところに居るの？

それが、老婆の発した最初の言葉だった。

私はその問いかけに対して、特に返事を返すつもりなど無かったのだが、他に行く当ても無いからだと言う、ありきたりな言葉を返してしまった。

私はこの老婆から金目の物を奪い取る為に姿を現したのであって、老婆との会話を希望していた訳ではない。

私はさっさとこの無防備なる老婆を食い物にする為に、後ろ手に隠し持ったナイフを強く握り締めた。

しかし、激しい敵意を放つ私とは対照的に、それに何ら脅える様子も無く、全く逃げ出す様子も無い老婆の振る舞いは、まるで私の抱いた鋭い毒牙をも完全に抜き去ってしまうような、そんな不思議な雰囲気を醸(かも)し出しているようにも見えた。

そしてこの老婆との間に生じた、長い長い沈黙の時の果てに、後ろ手に隠し持ったナイフを、とりあえず一旦小さな鞘(さや)へと仕舞い込むと、やがて私は老婆から少し距離を置いた階段の下へと、静かに座り込んでしまった。

私が直ぐにその場を立ち去らなかったのは、この身なりの良い老婆の事を、簡単に諦める事が出来なかった為であるが、それでも余りに普通の会話をやり取りする事になってしまった経緯(いきさつ)から、私は振り上げた拳の下ろし所に窮(きゅう)してしまったのかも知れない。

私はじっと両膝を抱え込んだまま、しばらくの間その老婆の姿を見

つめていたのだが、再び襲い掛かる為の攻撃的意思が自分の中で沸き起こることも無く、やがて軽い溜め息と共に視線を足元へと落としてしまった。

この後、私はどうすればいいのだろう。

もう、この老婆に襲い掛かろうという気持ちは、完全に無くなってしまった。

かと言って、無闇にスラム街を徘徊したところで、次なる獲物に簡単に巡り会える保証は何処にも無いし、逆に巡回する保安官と出会してしまう可能性だってある。

このままいつものよう廃墟に戻り、たった一人の時間を無為に過ごしたところで、私の頭の中で反芻される疑念が整理される事も無し、またいつものように考える事に疲れ果てて眠り込んでしまうのがオチだった。

私は階段の下に座り込んだまま、抱えた膝の間に顔を埋め、何処を見るでもなく、何をするでもなく、ただ静かに時が流れ去るのを待っていた。

勿論、別にそれによって何か事態が好転する事を期待していた訳ではない。

しかしこの時、小さく身体を窄めて、完全に自分一人だけの世界に塞ぎこんでいた私に対し、不思議と愛嬌のある笑みを浮かべていた老婆は、やがて優しい語り口調を持って私の心に触れ始めたのだ。

普段から人と関わり合う事を嫌い、自分一人の時間を好んで過ごす事が多かった私にとって、それは直ぐにでも逃げ出したくなるほどの纏わりを感じるものであったが、知的でいて温和な空気を奏で出すこの老婆の雰囲気に、私は既に飲み込まれてしまっていたのかもしれない。

まずこの老婆は「チピタ」と言う名前である事を明かし、不思議な間を取りながら、ゆっくりと話をし始めたのだ。

勿論、最初はお互いに差し障りの無い程度の会話だったが、私の事を根掘り葉掘り聞き出すような無粋な態度を見せる様子も無く、自分の過去を主体にして言葉を連ねる老婆の話に、私はじっと耳を傾けていた。

それまで他人事にはほとんど関心を寄せなかった私が、ここまで老婆の話に聞き入ってしまったのも、この老婆の語り口調や言い回しが巧みであったからなのだろうが、私はそれ以上に、話の途中に時折交えられる老婆の優しげな笑顔に、不思議と心が引き寄せられるような印象を受け、時折投げかけられる老婆の問いに対しても、妙に躊躇う事無く、短い返事を返してしまうのだった。

小さく老いてしまったその身体とは裏腹に、大きく優しげに広げられた暖かな雰囲気。

私は今だ嘗て感じた事も無いような居心地の良さの中に浸り、終いには、この老婆の微笑みに釣られて、思わずニッコリと微笑み返してしまいそうになる。

忌まわしい過去の記憶で多くを埋め尽くされていた私にとって、他

人との会話の中に楽しさを覚えるなど、本当に久しぶりの事だったし、私はこの時、必死に平静さを装っては見たものの、沸き起こる興味心からチラチラと老婆の姿を伺う自分の視線を、完全には押さえ付ける事が出来なかった。

しかしやがて、老婆の身の上話が、自分の家族の話へと展開すると、次第に老婆の言葉が濁り始める。

どうやらこの老婆は、このスラム街の程近くにある高級住宅街で、一人息子とその妻、そして二人の孫達と一緒に、幸せな日々を送っていた言う事なのだが、そこまで話を進めた時点で、突如として老婆は深い悲しみの表情を浮かべて口を閉ざしてしまったのだ。

不思議に思った私は、全くこの老婆の思いを察する事も無く、無神経にもその理由を問いかけてしまったのだが、老婆はそんな私に対して再び優しく微笑みかけると、ゆっくりと私に答えを示してくれた。

それは半年ほど前に、スラム街付近の街道沿いを歩いていた息子夫婦と孫達が、突然暴漢達の集団に襲われ、全員殺されてしまったのだと言う事だった。

私はこの時、悲しげな笑みを浮かべて老婆が放った言葉を、今でも忘れる事が出来ない。

一瞬ハッとして、私は老婆に向けた視線を即座に切り捨てた。

そして、地面に落とした視線を挙動不審に這いずり回して、必死に激しく動揺してしまった自分の心を落ち着けるよう、努力する他無かった。

もしかしたら、私が殺したのかもしれない・・・。

私が今まで襲ってきた人間の中に、そのような子供達二人を連れた夫婦が含まれていたのかと言われれば、解らないとしか答えることが出来ない。

このスラム街に流れ着いてから1年以上が経過する中、それまで自分が食い物にしてきた他の人間達の事など、少しも気にかけたことは無かったし、その一つ一つを備(つぶさ)に記憶しているはずも無かった。

もし、私が殺した人間の中に、この老婆の家族が含まれているとしたら・・・。

私は今までに感じた事も無い強い恐怖心に苛(さいな)まれながらも、恐る恐る老婆の方へと再び視線を向けた。

すると老婆は、その話を聞いて脅(おび)える私を、優しく宥(なだ)めるかのように、再度暖かい笑みを持ってこう言ったのだ。

お嬢さん。長い人生辛い事ばかりではないのよ。

辛い事もあれば楽しい事もある。

それが人生なのよ。

こんな老い先短い私のような人間にだって、楽しい日々が待っているかもしれない。

貴方にだって、きっと楽しい日々が訪れるに違いないわ。きっとね。

そうだわ。他に行く当ても無いのなら、私の家にいらっしゃいな。

私も一人で寂しいし、息子夫婦が使っていた部屋でよければ、いつまで居てもらっても構わないわよ。

恐らく老婆は、私が過去に一体何をしてきた人間なのか、全く知らないのだろう。

私は数多くの人間達の命を奪ってきた殺人者であり、数多くの物を奪ってきた略奪者。

私はその老婆の優しい誘いに黙って下を俯(うつむ)くと、小さく首を横に振ってみせる事しか出来なかった。

私は知らなかった。いえ、知ろうとしなかった。

自分がそれまで犯してきた、人の命を奪うと言う行為が、一体どういうものであるのかを。

人を一人殺すと言う事は、その人と関わりの強かった残された者達に、深い悲しみを与えてしまうもの。

その悲しみは、その人との関わり合いが強ければ強いほど大きくなり、どんなに些細な関わり合いであっても、人々の感情に何らかの感傷を与えるもの。

こんな私でさえ、自分の両親が死んだ事を告げられた時、部屋の隅で泣いていたと言うのに・・・。

私が人を殺す事に、何ら躊躇(ためら)いを覚えなかったのは、殺される側の人間との関わりが全く無かったから。

人との関わり合いを嫌い、他人との交わりを頑(かたく)なに避けてきたから。

もしそこに、何らかの友好的関係を構築するに至っていたのなら、私はその人を殺す事が出来るのだろうか。

私に対して優しく微笑みかけてくれるこの老婆を、私は殺す事が出来るのだろうか。

やがて老婆は、少し残念そうに溜め息を付いた後で、右手に持った杖を使ってゆっくり重たい腰を持ち上げると、じっと下を俯(うつむ)く私の傍に歩み寄ってきて、優しく私の頭を撫(な)でてくれた。

私が不意に老婆の顔を見上げると、そこには変わらぬ老婆の優しい笑顔がある。

私はこの時、最後の別れを告げた老婆に対して、全く一言も言葉を返す事が出来なかった。

そして、覚束(おぼつか)ない足取りで立ち去る老婆の後姿を、見えなくなるまでじっと見つめていた。

私にはもう、この老婆を殺す事など、出来やしないのだろう・・・。

自分が生きるために人を殺す。

これは私の中で、至って普通の行動だった。

自分が生きるために人から物を奪う。

これも私の中で、至って普通の行動だった。

自分がこれまでしてきた数々の行動は、悪い事なのだろうか。

自分の愛する者を失った老婆を前にして、あんなにも後ろめたい気持ちを抱いてしまうなんて・・・。

人との交わりに安らかな感情を芽生えさせつつも、人との間に築かれた関係性が壊れてしまう事に恐怖し、それまでの自分を押し殺さなければならないなんて・・・。

幼い頃から父に教えられたことは、間違いだったのだろうか。

人を殺せば認められる。人を殺せば誉められる。

これは一体、なんだったんだろうか・・・。

今までの私は、すべて間違っていたのだろうか・・・。

私の心の中は寒かった。

私はそれまでの自分自身の全てを、否定された気分だった。

06－06：〇ローゼイト・サーペント［6］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「ローゼイト・サーペント」

数日後、私は意味も無く、スラム街を練り歩く。

それは、いつものように新たなる獲物を探し出す為の、自分自身が生き延びる為の行動に他ならなかったが、私はそこで、何も得ることは出来なかった。

いえ、私は何も得ようとしなかった。

私はあれから満足に食事が取れていない。

あの老婆と出会ったあの日から。

私はまた再び、あの老婆のような人間と出会うのが怖かった。

また再び、あの老婆のような人間を生み出してしまうのが怖かったのだ。

それでもこの時、私が歩く事を止めなかったのは、歩く事を止める理由すら無かったからだ。

やがて、私がスラム街の大通りへと辿り着くと、目の前を曲がった細い裏路地の奥から、激しく怒鳴り立てる男の声が響き渡ってきた。

勿論それが、このスラム街で日常的に横行する、略奪の現場である

事は直ぐに解ったのだが、私は直後に鳴り響いた二発の銃声に釣られるように、裏路地の方へと足を向けた。

私は別に、他人の略奪行為を見物して楽しもうなどと言うつもりは無い。

ただ、それまで私が犯してきた略奪行為が、一体どんなものであるのか、今一度自分の目で確かめて見たかっただけなのかもしれない。

しかし私はそこで、私と言う人間の全てを崩壊させる、まさに衝撃的な事実と巡り合う事になってしまった。

私がゆっくりと裏路地の中を覗き込むと、両側を高いレンガで挟まれた狭い通路の中に、十数人にも及ぶ男達が屯(たむろ)していた。

彼等の形作る輪の中には、苦痛に悶(もだ)える悲しき被害者の姿があり、必死に助けを求めて苦しそうな声を上げていたのだが、それが彼等に聞き入れられる事は無かった。

彼等は何ら抵抗する事も出来ない被害者を容赦なく蹴り飛ばすと、意味も無く奇声にも似た笑い声を高らかに張り上げる。

そして、惨(みじ)めにも地面へと這い蹲(つくば)る被害者に対し、何ら躊躇(ちゅうちょ)する事無く鋭い刃物を突き立てたのだ。

狭い裏路地へと飛び散った真っ赤な鮮血が更に彼等の欲望を増長(ぞうちょう)し、周囲へと響き渡る被害者の断末魔(だんまつま)が嘲笑(あざわら)う彼等の咆哮(ほうこう)によって掻き消される。

これが・・・。これが私・・・。

私は咄嗟(とっさ)に、その光景から目を逸(そ)らすと、心の奥底から沸き起こる強い冷気によって思わず身震いしてしまう。

如何にここまで酷い仕打ちを相手に強いる事が無かったとは言え、目の前で繰り広げられる略奪行為は、まさにそれまで自分がしてきた行為そのものであり、どんな言い訳を用いようとも、自分自身の心の中でさえ、それを否定する事は出来なかったからだ。

私には、この男達の行為を非難する資格など無い。

私もこの男達と同じ、人の思いを少しも意に介さない略奪者。

人の命を奪うことに、何の躊躇(ためら)いも感じない殺人者。

結局私もこの男達と何ら変わらない。

人々の悲しみを生み出すだけの最低な存在なんだ・・・。

私はもはや、その略奪行為の結末を見届ける勇気すら打ち砕かれて、すぐさまその場から逃げ去りたい気持ちに駆られてしまったのだが、目の前に横たわる自分自身の影の中に、私の身体を雁字搦(がんじがら)めにする重たい鎖の存在を見出してしまうと、全く身動き一つ取れなくなってしまった。

しかしそんな時、我先(われさき)にと金目の物を奪い取る為に、哀れな屍の元へと群がった男達の方から、その欲望を満足させるに至らなかった

粗悪品の一つが放り投げられる。

それは、かなり使い古された形跡が見て取れる一本の杖であり、恐らくはその被害者の愛用品か何かであったのだろう。

周囲に乾いた音を響かせながら、私の足元へと転がり落ちたのだ。

勿論それは、確かに何かの価値を見出す事もできない、ただの木で出来た棒切れに過ぎない物だったのだが、私は一瞬、この杖の姿形に目を奪われてしまった。

この杖・・・。何処かで見た事が・・・。

私は咄嗟(とっさ)に男達の方へと振り返り、胸の内で必死に否定的願望に縋(すが)り付きながら、その被害者となった人物の姿を凝視する。

しかしこの時、そんな私の思いを打ち砕く悲しき現実が目の前に示されてしまうと、直後に全身を駆け巡った激しい電撃によって、私はそれまで影を潜めていた恐ろしい程の殺意を滾(たぎ)らせてしまった。

そう、男達の手によって惨殺(ざんさつ)された被害者とは、私に優しい笑みと言葉を投げかけてくれた、あの老婆だったのだ。

私はもはや、激しく駆り立てられた感情を押さえ付ける事が出来ず、ただ心の赴(おもむ)くままに身体を委ねた。

鋭く抜き去った一本のナイフを、右手に強く握り締めて。

その後、私は激しく激高した意識の中に埋もれて、一体自分が何を仕出かしたのか、全く何も覚えていなかった。

一体自分が何を求めてそのような行為に及んだのかさえも解らなかった。

しかし、ふと我に立ち返った私の目の前には、十数人に及ぶ男達の屍が横たわり、狭い裏路地の中全てを真っ赤な血色で染め上げていたのだ。

これが私の今まで築き上げてきたもの全て。

これが私の犯してきた行為の全て。

これが私と言う人間の正体を指し示す全て。

私はドロドロと薄黒い鮮血が滴り落ちる右手から、力なくナイフを地面に滑り落とすと、心の中で脆くも崩れ去った自分自身を省みながら、呆然とその場にへたり込んでしまった。

そして、目の前に広がるおぞましい惨劇の中に一人佇み、沸き起こる恐怖心からガタガタと震えの止まらぬ自分の身体を、必死に両手で押さえ付ける事しか出来なかった。

人は何かを求め、何かを欲する願望から、心の中にある程度推測した指標を刻み込み、示された現実値との差異によって生み出された

様々な感情に揺り動かされる者。

私が激しい殺意に駆り立てられて、抱いた憎しみの感情によって突き動かされたのも、私に好意を示してくれたこの老婆を目の前で惨殺されてしまうと言う、悲しい現実を見せ付けられてしまったからに他ならない。

確かにこの老婆とは、一度会話を交わした程度の関係でしかなかったが、荒(すさ)んだ私の心に暖かい温もりを与えてくれた老婆の存在は、決して小さなものではなかったのだ。

しかしこの時、抱いた憎しみの感情を爆発させて、力無き者達を縊(くび)り殺した私の行為は、結局この老婆を惨殺した男達と何ら変わりない。

奪う側の立場に君臨するだけの能力を持ち、それを行使するだけの残忍さと冷血さを有した私と言う人間。

自分勝手な感情の揺り動きによって、独断的裁定を下す事が出来る私と言う人間。

そんな私がそれまで犯してきた行為そのものが、私と言う存在そのものが、この老婆を殺してしまったのかと思うと、私は怖かった。

私は心の底から私と言う人間に、強い恐怖心を抱いてしまった。

その後私は、人を殺す事を止めた。人を襲う事を止めた。

私はそれまで生き延びる為の手段として用いて来た行為そのものを、

捨て去ってたのだ。

勿論、そんな私が簡単に生きていけようはずも無い。

当ても無く街を徘徊(はいかい)しては、必死に人の情けに縋(すが)り付き、物乞(ものご)いをする汚らしい浮浪者。

それが私の成れの果てだった。

誰の為にもならない自分。

自分の為にもならない自分。

生きる為の目標を失い、生きる為の手段すら失ってしまった私は、やがて、再び肌寒い季節がスラム街に訪れる頃、とうとう道端に倒れこんでしまった。

裏切り者を殺すなどと、大そうな志を抱いたところで、所詮こんな落ちぶれた私に実現できるはずも無い。

彼には彼の立場があり、誰かからそう望まれて、私達を裏切ったのだろう。

幾ら私が彼を憎んで見せたところで、それは犯罪者の逆恨みにも等しい感情に過ぎない。

私は数多くの人間を殺し、数多くの物を奪ってきた最低の人間。

処分されて当然。

殺されたって文句は言えない。

出来ればあの時、私を殺してくれていたのなら・・・。

いえ・・・。

恐らく私に、死ぬまでもがき苦しめと言う意味だったのでしょうね・・・。

もういい・・・。それでいい・・・。

この時私は、ようやく長く辛い人生の終わりを予感した。

そして、吹き荒れる冷たい風の中、寒さすら感じなくなってしまった私は、ゆっくりと両目を閉じたのだ。

しかし、私が次に目を覚ました時、私は見知らぬ部屋の中でベッドに横たわっていた。

それは小さな本棚と小さな机以外には何もない、粗悪で汚らしい部屋だったが、小窓から差し込む優しい太陽の日差しに照らし出されて、何処か温和な空気を漂わせていた。

私は一瞬、その部屋の醸(かも)し出す静かな雰囲気の中に、死後の世界を連想してしまったのだが、やがて私の目の前に姿を現した一人の男によって、私がまだ死んでいないのだという事実を知らされる事になる。

どうやら私は、道端で倒れている所を偶然通りかかった彼に助けられたようで、その後丸二日間も眠りっぱなしだったらしい。

私は既に自らの死を覚悟し、生き延びる意欲さえも失ってしまっていたが、彼が私の目の前に食事を乗せたトレイを差し出すと、私は思わず夢中でそれに齧り付いてしまった。

暖かな食事を口にするのは、本当に久しぶりのことだった。

私の命を救ってくれたこの男の名は「ラックス・ムーズ」。

彼は見るからにお調子者そうな雰囲気をそのままに、とても口数の多い人物であり、最も私が苦手とするタイプの人間だった。

しかし彼は、私が一体どの様な人物で、何故道端に倒れていたのかなど、詳しい経緯を一切気にする様子も見せず、常に明るく優しい態度を持って私の面倒を見てくれたのだ。

見ず知らずの人間である私に対し、何故彼がここまで親身になって接してくれるのか、私はそこに少なからず退廃的な疑念を抱いていたのだが、やがて私の体力がある程度回復した頃、彼は私に不思議な要求を提示したのだった。

それは、彼が新しく設立したＤＱチームのパイロットとして、働いてみないかと言うものだった。

勿論、私はファルクラム時代に、ＤＱの操作に関する訓練も受けており、ＤＱを操る事自体に何ら不安は無い。

しかし、その事実を知るはずも無い彼が、何故他の優秀な人間達を

度外視して、私のような行き倒れの人間を選択するのか。

不思議に思った私は彼にその真意を問いただしてみた。

すると彼は、満面の笑みを携(たずさ)えながら、何の恥ずかしげもなく「そう言う運命だったのさ」と答えて見せたのだ。

この時私は、現実問題としてお金が無いからなのだと言う極一般的な返答を予測していた為、この彼の余りに脱俗(だつぞく)した表現に、思わず込み上げる笑いを食い止める事が出来なかった。

運命・・・。運命か・・・。

私が幼い頃からファルクラムの戦闘員として生きてきたのも運命。

その後ノインに裏切られ、過酷な収容所に送り込まれたのも運命なら、脱獄できたのも運命。

リトバリエジで汚らしい浮浪者に成り下がり、彼に命を助けられたのもまた運命か。

それなら今後、私にはどんな運命が待ち受けているのだろうか・・・。

私はたった一つの言葉だけで、その全てを安易に言い表してしまう、この「運命」と言う表現を、余り好きにはなれなかったのだが、偶然にもその後を与えられる事になってしまった自分の人生を、命の恩人である彼の言う、この「運命」に委ねてみる事にした。

人の人生を運命と言う言葉で言い表すなら、何故私はこの世に生まれる運命にあったのだろうか。

人の命を奪い、人の物を奪い、人の世に何ら存在する価値の無い私であっても、私がこの世に生れ落ちた真の理由が、きっとどこかにあるはずだ。

それは、私がこの世に生み出されたという「事実」そのものが、その理由の存在を物語っている。

人が生きるという事は、どういうことなのだろうか。

人が死ぬと言う事は、どういうことなのだろうか。

人を憎み、人を妬み、その命をも奪う激しい感情を抱きうる存在ながらも、何故人に魅かれ、人を愛し、新たな命を生み出していくのだろうか。

人は皆、必ず死ぬと解っていながらも。

それまで、生き延びる事にだけ必死だった私が、ようやく訪れた安息の一時の中に、持て余した時間を思案に当てる。

考えれば考えるほどに数多くの疑念が浮かび上がり、決して答えとなる道筋に辿り着く気配すら見いだせない。

その後私は、数多くの書物の中にその答えを求めて、本を濫読（らんどく）するようになった。

私は彼の提案を快諾し、彼の元で働く事を決意したが、直ぐにそのＤＱチームに合流する事は無かった。

それは、私の身体に刻み込まれた無数の傷跡が、表の世界で生きて行く事を妨げていた為であり、幾ら袖の長い衣服や手袋で隠して見せたところで、左の頬に刻まれた大きな切り傷だけは、簡単に隠しようがなかった。

私は別に他の人間達からどう見られようと、全く気にするつもりも無かったのだが、それでも彼は多額の医療費を負担し、私の身体から傷跡を消し去る為の手術を受けさせてくれたのだ。

その後私は、三ヶ月もの間、専門の医療機関で治療を受ける事になるのだが、全ての手術を終えた後で目の当たりにした自分の姿は、まるで別人のように綺麗な素肌を身に纏(まと)っていた。

殺戮に殺戮を重ねた戦闘マシーン「カル・ジャンヌ」はもう死んだ。

今ここにいるのは、極普通の一般人として新たな人生を歩み始めた「アリミア・パウ・シュトロイン」と言う一人の女性だ。

やがて私は、ＤＱチーム「Ｔｏｍｂｏｙ」に合流する為、長い時間を過ごす事になったリトバリエジ都市を後にした。

そしてそこで、セニフ達チームＴｏｍｂｏｙのメンバー達と出会う事になる。

こんな私が普通の人間としての生活に慣れるのは簡単な事ではないかもしれない。

こんな私が他人と間に友好的関係を作り上げるのは簡単な事ではないかもしれない。

しかしそれでも、その後チームＴｏｍｂｏｙのメンバー達と過ごした二年間は、私の人生において最高に楽しい瞬間に成り得たのだ。

決して忘れる事が出来ない楽しい毎日。

心の底から永遠に続く事を願った関係。

貴方にだって、きっと楽しい日々が訪れるに違いないわ。きっとね。

私は今なら言える。

私にも、ようやく楽しい日々が訪れたわ。お婆さん・・・。

06－07：〇仮面パーティ［1］@

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「仮面パーティ」

真っ赤に染まった西の空が、次第に薄暗く真っ黒なカーテンで身を包んで行く頃、見下ろした眼下には、ゆっくりと煌びやかに光り輝く装飾品を纏った、巨大な建造物達が姿を現し始める。

帝国トポリ領南東部平野一帯に広がる大都市「オクラホマ」は、夕刻を告げる古き良き鐘の音と共に色鮮やかな光を放ち、真っ暗な闇の世界に星空のような絨毯を広げるのだ。

そして、その観る者全ての心を掴んで離さない、綺麗な夜景を一望できると噂される絶好のポイントが、ここ「サイレンス・タワー」である。

都市部を形成する平野部から、少し頭の突き出た小丘の上に建つこの建物は、豪華さで言えば帝国内でもトップクラスを誇る高級ホテルであり、敷地内に作られた雰囲気の良い緑地公園が一般市民達にも開放され、旅行客や恋人達にとても人気の高い観光スポットとなっている。

実は正式名称として「オクラホマロイヤルホテル」と言う、極ありふれた名前が存在するのだが、その小丘から見渡せる綺麗な夜景を目の当たりにした人々が、皆一様に言葉を失ってしまう事から、いつしかそう称されるようになっていたのだ。

（アリミア）

「もうそろそろ到着してもいい時間なのですけど。渋滞にでもつかまってしまったのでしょうか。困ったわ・・・。もうすぐ会議の時間だというのに・・・。」

（警備員）
「都市区画整理事業が始まって以来、Ｒ３５は東方住宅街に帰宅する人達の迂回路になってしまいましたからね。最近では夕刻になるといつもこうなんですよ。」

そんな幻想的風景を作り出す街並みを見下ろしながらも、そわそわと落ち着かない様子で誰かを待つ女性が一人。

サイレンス・タワーの正面ロータリーの傍らで、目の前の大通りを埋め尽くした長い車列の先を見据えては、困り果てたように溜め息を付いて、仕切りに時計を気にする素振りを見せていた。

休日前夜のこの時間帯ともなれば、サイレンス・タワーの緑地公園は、訪れた数多くの一般市民達の姿で賑わいを見せるのだが、彼女の背後に付いて廻る三人の警備員達の持つ威圧的な銃が示す通り、周囲には何処か普段とは違った物々しい雰囲気が漂っている。

と言うのもこの日、ここサイレンス・タワーの国際会議場では、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国とビナギティア国との間で、重要な国家間会議が開催される予定となっており、同施設周辺を警備する帝国憲兵隊によって、会議関係者以外の立ち入りが厳しく制限されていた為だ。

この両国間の会議に出席するメンバーについて、詳しい情報は一切公にされていないのだが、それでもこのサイレンス・タワー周辺の厳重な警備体制を見れば、どれほどの大物人物が訪れるのか、容易

に予想する事が出来るだろう。

勿論、アリミアが待つ人物と言うのも、その中の一人と言うことだ。

（警備員）

「もう1時間以上も立ちっ放しで疲れたでしょう。少しエントランスでお休みになられてはどうですか？もし大佐が到着されましたら、私が呼びにいきますから。」

（アリミア）

「ええ。お気遣いありがとうございます。でも大丈夫です。大佐を待つことも私の仕事ですから。」

そう言って、優しい気遣いを見せる警備員の一人に、アリミアがニッコリとさりげない笑みを浮かべながら言葉を返す。

履き慣れないハイヒールに、足が疲れてきている事を気づかれたんだろうか・・・。

彼女は内心そんな疑念を抱きつつも、美しく品のある女性を演じたまま、再び綺麗なオクラホマ都市の夜景へと視線を移した。

普段から身を飾る事に無頓着なアリミアだが、この時彼女が身に纏（まと）った衣装は真っ赤な高級スーツドレス。

首からは豪華に宝石が鏤（ちりば）められた銀のネックレスがぶら下げられ、耳元では三日月形の綺麗なイヤリングが光り輝いている。

そして、衣装から肌蹴(はだけ)た白い素肌が街の夜景に照らし出され、涼やかな風に靡(なび)く紅い髪の毛を掻き揚げる姿は、薄っすらと控えめに施された化粧も相俟(あいま)って、非常に魅力的な女性らしさを醸(かも)し出していた。

彼女からしてみれば、普段の様相と全く異なる自分の姿に、戸惑う心を必死に押し殺す意識の方が強かったのかも知れないが、それでも極自然に美しい秘書官たる立場を勤め上げる彼女の雰囲気は、付いて廻る警備員達の目の色さえも変えてしまうほどのものだった。

＞ｉ４８３２―８２７＜

（警備員）
「あの。クリスティアーノさん。今日の会議の後は、何かご予定でもあるのでしょうか？」

（アリミア）
「ええ。会議後の晩餐会(ばんさんかい)が終わりましたら、すぐに明後日の会談予定地となるランズメアリーに向かいます。大佐は明日朝まで当ホテルに宿泊されますから、大佐の身辺警護をよろしくお願いしますね。」

それは予め決められていた返答なのだろうが、完全に別人である名前で呼ばれながらも、全く相手に違和感を感じさせること無く、対応して見せる辺りはさすがである。

彼女はそっと真朱(まそほ)色のルージュを引いた口元を歪ませると、小声で話しかける警備員の男にそう答えた。

（警備隊長）

「おい。勤務中だぞ。」

（警備員）
「す・・・。すみません。」

するとそんな部下の不謹慎（ふきんしんな）な行動を見かねた隊長格の中年男性が、訝（いぶか）しげなしかめっ面を浮かべて、この青年兵の背中を小突いてみせる。

この若い警備員も、まさか少し離れた所に居たこの中年男性に、会話の内容まで聞かれていると思っていなかったのか、驚いたように後ろを振り返ると、慌てた様子で謝罪の言葉を発した。

規律に厳しい帝国憲兵隊の中にあって、要人を警護すべき立場にある者が、事もあろうかその要人の一人に手を出すような軟派な行動に出るなど、どんな理由があろうとも決して許されるべき行動ではない。

勿論、客人となるアリミアがいる目の前で、この若者を厳しく叱責するような醜態を晒（さら）す事など出来ないのだが、それでもこの隊長格の中年男性が醸（かも）し出した厳しい表情は、まだ未熟な若者の表情に、暗く淀んだ影を落とすのに十分な程の威圧感を有していたようだ。

（アリミア）
「あ・・・。私なら構いませんよ。こう長く時間を持て余してしまったので、逆にいい一時を過ごせましたわ。隊長さん。どうか彼を叱らないでやってください。」

（警備隊長）
「あ、いえ・・・。まあ・・・。貴方がそう仰（おっしゃ）られるなら。」

アリミアからしてみれば、この青年兵がその後どんな処罰を受けようとも、全く何ら関係の無い立場にあったと言えよう。

しかし彼女は、自分に対して好意的感情を抱いて話しかけてくれたこの若者の事を、決して無為に捨て置くような真似はせず、穏やかな口調で中年男性の怒りを宥めにかかったのだ。

この時、青年兵は少し驚いたような表情を見せたが、再びアリミアが優しい微笑みの表情を投げかけると、少し顔を赤らめて下を俯いてしまった。

素直で真っ直ぐな想いほど、気持ちの良いものはない。

そんな初々々（ういうい）しい若者の素振りは、何処か微笑ましくも爽やかで甘い胸の高鳴りを感じるものであり、アリミアは少し、過去に抱いた自分の想いをこの若者の姿に重ねて、しばし懐かしい思い出の淵に耽入ってしまった。

再びその視線を、綺麗なオクラホマ都市の夜景に添えて。

しかし、不意に吹き荒れた冷たい気流の渦に紅い髪の毛を舞い上げられると、アリミアは大きく息を吸い込んで、和やかで暖かな空気に浸る心の熱を冷ます。

そして、それを吐き出すと同時にゆっくりと両目を瞑り、それまで穏やかな雰囲気を醸し出していた美しい女性の表情に、自分自身の本性を薄っすらと浮かび上がらせた。

今の彼女の名前は「クリスティアーノ・サブラコシュ」。

彼女が北方アイスクリストフ系の名前で身分を偽りながら、ここオクラホマ都市を訪れたのは、何も観光を楽しむ為でも、甘く切ない恋心を実らせる為でもない。

トゥアム共和国諜報部の特殊工作員として、オクラホマ軍事空港への破壊工作任務を完遂させる為に、遥々ビナギティア国経由で乗り込んできたのだ。

オクラホマ都市滞在中も、決して怪しまれる事が無いようにとの配慮から、彼女に与えられた身分は、ビナギティア国でも指折りの権力者、「ヴァラジン・オーム」の秘書官と言う立場。

偽名で使用している「クリスティアーノ・サブラコシュ」と言う人物も、実際にビナギティア国内に実在する人物の名前であり、彼女に手渡された身分証明証も正式にビナギティア政府から発行された本物と言う事になる。

彼女は今後、オクラホマ軍事空港破壊工作任務を実行に移すまでの間、ビナギティア国外交団の秘書官という難しい立場を演じきらねばならないが、それでもこの強力な肩書きが、彼女の当分の身の安全を保証してくれる事は間違いなかった。

しかし、幾ら作戦発動までの安全を手にしたからとは言え、最終的にオクラホマ軍事空港への破壊工作任務を成功させる事は、決して容易なことではない。

今回の作戦任務には、アリミアの他に四名の諜報部工作員が参加しているのだが、それでも直接このオクラホマ軍事空港へと乗り込んで破壊工作を試みるメンバーは、アリミアを含めてたったの二人だけであり、他の三人の工作員達は、別の施設を狙った破壊工作を実行する計画となっている。

しかも、このオクラホマ都市で勃発する予定の武装決起についても、「今夜２１：００頃に決行」と言う大まかな情報しか得る事が出来ず、お互いに強力し合うような連携体制を築くまでには至っていなかった。

（警備員）

「クリスティアーノさん。到着されたようですよ。」

やがて、目を瞑ったまま静かに自分一人の世界へと埋没していたアリミアの意識を、若い警備員が優しく揺り起こす。

それは、彼女が一時間以上も待ち続けた人物が、ようやくこのサイレンス・タワーへと到着した事を告げるもので、青年の爽やかな声色に誘われて、アリミアが正面ロータリーの方へと視線を向けると、そこにはゆっくりとエントランス付近に停車する三台の真っ黒な高級車の姿があった。

アリミアはすぐさまエントランス前へと駆け寄ろうとしたのだが、最後にこの若い警備員に、お礼の意味を込めた笑みを投げかける事を忘れなかった。

短い時間であったにせよ、それなりに相手の心の内を察して気遣いをしてみせる辺り、昔の彼女からは決して容易に想像する事が出来ない姿だろう。

アリミアは正面ロータリーの外縁を小走りに駆けながら、願わくば敵として彼と対峙しない事を心の底で強く祈った。

（ギャロップ）

「お待たせいたしました。貴方がクリスティアーノさんですね。初めまして。私が今回ヴァラジン大佐の身辺警護を担当する事になった、シュミット・マハーキフです。よろしく。」

履き慣れないハイヒールに悪戦苦闘しつつも、アリミアがようやく目的地へとなるエントランス前へと到達すると、目の前にがっしりとした体格のサングラスをかけた男が姿を現した。

彼は高級車の助手席から誰よりも早く身を乗り出すと、仕切りに辺りを警戒するような素振りを見せていたが、やがてアリミアに対して穏やかな口調で白々しくも初対面の挨拶をして見せた。

（アリミア）

「初めまして、シュミットさん。大佐の警護任務ご苦労様です。」

そしてアリミアもまた、別人たる自分を少しも崩す事無く満面の笑みを浮かべて見せると、完全に無関係を装ったまま、彼の差し出した右手を強く握り返した。

彼はこれまでビナギティア国内で、数々の要人達を警護してきた、やり手のＳＰ（セキュリティーポリス）と言う肩書きを持っていたのだが、その経歴から身分から名前に至るまで、全てが偽装された物である事を彼女は知っていた。

と言うよりも、既にこの二人はトゥアム共和国のランベルク地下基

地内において、一度お互いに顔を合わせをしている仲だ。

勿論、それほどお互いを深く知り合う仲ではないのだが、それでも同じ作戦任務を背負って、ここオクラホマ都市へと送り込まれた仲間と言う事である。

アリミアはお互いに一通りの形式ばった挨拶を済ませると、すぐさま車の傍まで歩み寄り後部座席の扉を開く。

そして、中から姿を現した一人の中年男性に対して深々と頭を下げた。

（アリミア）

「長旅お疲れ様です。ヴァラジン大佐。先方はすでに37階大広間にてお待ちになられてます。」

（ヴァラジン）

「うむ。」

強固な防弾ガラスを張り巡らせた車のドアに手をかけ、その大きな体躯を車から乗り出したこの男こそ、北方ビナギティア国軍指揮権の大半を掌握していると言われている強大な権力者、「ヴァラジン・オーム」である。

彼は屈強な男達の集うSP（セキュリティポリス）をも、遥かに上回るであろうその上背と鍛え上げられた肉体を持ち、額から右目を辿るように頬にかけて伸びる大きな傷からは、まさに戦士たる威風が如実（にょじつ）に醸（かも）し出されているようにも見受けられた。

彼の指揮するビナギティア国軍は、強大な軍事力を誇る帝国軍を持

ってしても、簡単に打ち破る事は出来ないとまで言われ、彼の存在こそが、長きに渡り大陸北方部アイスクリストフ地方に、平和と秩序を齎(もたら)していたと言っても過言ではなかった。

（マキュリアーニ）
「クリス。これが今回の会議資料とビナギティア側の参加者名簿よ。資料は大至急ＤＣ(データセンター)に転送をお願い。」

（アリミア）
「解りました。大至急手配いたします。」

（マキュリアーニ）
「大佐。メイン会場へご案内いたいします。どうぞこちらへ。」

そして、その高級車の反対側から降り立った一人の女性が、大きな車体をぐるり廻ってアリミアの元へと駆け寄ると、何やら小さな磁気記録媒体を手渡す。

彼女は「マキュリアーニ・ビジクタシュ」と言う女性で、アリミアと同じこのヴァラジンの秘書官を勤める人物である。

彼女はアリミアよりも頭一つ分背の低い小柄な女性であったのだが、はきはきとした自己主張の強い性格と、何事にも物怖(ものお)じしない度胸の据わった３３歳の年長者だ。

長い間ヴァラジンの元で秘書官を勤め上げてきた彼女は、ヴァラジンが最も信頼を寄せる人物の一人であり、彼女の言葉は時にヴァラジンの判断をも左右するとまで言われている。

しかし今回奇妙な事に、オクラホマ軍事空港に対する破壊工作任務

を携えて、ビナギティア国を訪れたアリミアを、最初に出迎えたのがこのマキュリアーニと言う美人秘書官だった。

勿論アリミアも、ビナギティア国内に身を潜めるための引受人として、一時的に宛がわれただけの人物なのだろうと思っていたのだが、彼女はトゥアム共和国諜報部工作員としてのアリミアの素性を全て知っていたのだ。

しかも、当作戦におけるアリミアのパートナーであるギャロップを、ビナギティア国内でも有数の警備会社に配属させ、オクラホマ都市を訪問するビナギティア国外交団の専属ボディーガードに選抜したのも彼女である。

トゥアム共和国の工作員でも無い、純粋なビナギティア人であるこの女性が、何故他国での破壊活動を目的とした他国の工作員を受け入れる事になったのか、その思惑を窺い知るまでに至っていないのだが、定期的に武装決起集団の情報を齎してくれる人物と言うのが彼女自身である以上、そこに何か複雑な構図が隠されている事は間違いないだろう。

これまで長きに渡りセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国との間に、友好的な関係を築き上げてきたビナギティア国にとって、如何に両国間の平和の為に尽力してきたロイロマール公爵が投獄されたからと言え、帝国が不利益を被るような謀略を自ら進んで幇助する事などありえないし、帝国内部の混乱に乗じて帝国領土へと侵攻を開始しようなどと考える野心に満ちた過激な指導者も皆無だった。

結局のところ、ビナギティア国としては、帝国との関係を悪化させる事無く、今後も友好的関係を維持していきたい立場にあるはずで、今回ヴァラジンがこのオクラホマ都市を訪れる事になったのも、そ

れに起因するところが大きい。

とすれば、このマキュリアーニという女性の行動は、完全にビナギティア国の思惑から逸脱(いつだつ)した背信行為に他ならず、もしアリミアとギャロップの素性が周囲に暴かれるような事にでもなれば、彼女自身の立場はおろか、両国間の関係をも悪化させかねない、非常に危険な行動なのだ。

彼女が一体どの様にして武装決起集団の動向を入手しているのか定かでは無いが、その情報をトゥアム共和国側に流す事で利益を得られるのは、オクラホマ都市攻略作戦を目論むトゥアム共和国と、そして恐らくはその恩恵に与る武装決起集団と言う事になるだろう。

ビナギティア国にとっては、全く何一つ得る物の無いこの構図の中に、一体彼女は何を求めて、何を企んでいるのだろうか。

アリミアはふと、ヴァラジンを引き連れて颯爽(さっそう)とホテル内へと歩き去る、この女性の後姿を見つめながら、しばし憶測の上に様々な思案を巡らせてしまった。

（ギャロップ）

「クリスティアーノさん。今夜開催される晩餐会(ばんさんかい)では、会場に武器類を持ち込む事が出来ないため、大佐の周囲を警護する人員を増員する方向で検討しています。私はこれから明日のルートを下見に出かけますが、晩餐会(ばんさんかい)が終わるまでには戻りますので、何か有りましたら私の部下にお申し付けください。」

（アリミア）

「解りました。シュミットさん。よろしくお願いしますね。明日の大佐のスケジュールに変更はありませんが、ランズメアリーでの大

佐の訪問先が少し変更になりましたので、とりあえず現時点の詳細をお渡ししておきますわ。」

やがて、部下達への細かな指示を終えたギャロップが、真っ黒な高級車の傍らで佇(たたず)んでいたアリミアの元へと歩み寄ると、業務的な内容でオブラートされた会話を投げかける。

そしてアリミアもまた、そんなギャロップとの間に、何ら周囲に違和感を感じさせない返答を返し、一枚の紙切れを手渡して見せたのだが、この時工作員たる二人の間でやり取りされた言葉の中には、全くそれとは異なった真意が含まれていたようだ。

「アリミア。今夜決行される武装決起軍の数は、かなりの規模になりそうだとの事だ。それと、我々が作戦任務で使用する武器をこれから受け取りに行ってくる。晩餐会(ばんさんかい)が終わるまでには戻るよ。」

「そう。お願いするわね。これがオクラホマ空港の見取り図と経路よ。今の内に渡しておくわ。」

お互いに偽(いつわ)った身分を突き通しつつも、制限された会話の中に必要最低限の情報を織り込んで意思の疎通を図る二人。

如何に二人の周囲を取り巻く情勢が、複雑怪奇に思惑が折り重なった疑念の尽きないものなのだとしても、彼女達に与えられた任務はオクラホマ軍事空港への破壊工作任務を成功させる事であり、このマキュリアーニと言う女性の目論みを暴く事ではない。

二人には二人の目的があり、この女性にはこの女性の目的がある。

そして、そのお互いが目指す最終目的地への道のりの中で、お互い

の利害が一致する部分があったからこそ、諜報部は彼女の指示に従うよう、二人に命令を下したのだろう。

確かに彼女の目指す最終目的地がどこに有るのか解らない状況で、彼女を完全に信用しろと言う方が難しいのかもしれない。

しかし現時点において、彼女を頼る以外に手立ての無い二人からしてみれば、そこに疑念を抱く事自体無意味な事だった。

（ギャロップ）

「それでは私はこれで。」

やがて、短い一言と共にアリミアに軽く会釈をしたギャロップがその場を立ち去ると、再び乾いた涼しげな風がアリミアの紅い髪の毛を宙へと舞い上げる。

そして、帝国領土内の懐かしい雰囲気の中に晒され、嘗（かつ）ての自分自身をしみじみと省みながら、ゆっくりとオクラホマ都市の綺麗な夜景へと視線を向けた。

羊の皮を被った狼は、どんなに羊を演じたところで、所詮は狼なり。

生き延びるために他人を食い殺し、力を誇示することでしか己の存在を示せない悲しき狼なり。

そんな悲しき狼たる私が唯一持ち得たものとは、それまで積み重ねてきた自らの暴力的な戦闘能力のみであり、自分が欲するものを手に入れる為には、自分を欲する者達の為にその能力を行使して戦う以外に手段は無い。

アリミアは次第に闇夜へと溶け込んで行く山の稜線を見つめながら、もう決して開けることは無いだろうと思われていた過去の扉にそっと手をかける。

そして、嘗(かつ)て「ローゼイト・サーペント」と呼ばれた過去の自分自身を、この世に再び解き放つのだった。

06－08：〇仮面パーティ［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０８「仮面パーティ」

（ゲイリーゲイツ）
「カルッツァ地方、及びオクラホマ地方、加えてムルア海域における、侵略的武力行使権の放棄につきましては、オットンハイマー・レブ・ロイロマール公爵が、独断で締結した不公認の条約であり、我々セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国と、トゥアム共和国政府との間で正式な外交交渉が、成立していなかった事を改めて強調します。ロイロマール公爵が帝国最高評議会を度外視（どがいし）し、他国との間に独断的な協力体制を築いていた事は紛れも無い事実で、トゥアム共和国政府が帝国国内各地に点在する叛乱分子に対して、密かに裏で支援活動を行っていた事実も判明しています。トゥアム共和国に対する宣戦布告は、我が帝国の平和を脅かす叛乱分子を一掃する為の、真に妥当な判断によるものと考えています。ロイロマール公爵と叛乱分子の因果関係につきましては、現在も多角的な方面から調査中ですが、ブランドル地方で発生した武装決起事件からも解る通り、帝国各地で叛乱を起こす指導者達の多くが、ロイロマール公爵に仕えていた忠臣達であり、公爵自身に全く叛意（はんい）が無かった事を、証明するものは何も有りません。従って、貴行の要求されるロイロマール公爵の早期釈放については、現段階で直ぐにお約束出来るような事ではありません。」

（ヴァラジン）
「では我がビナギティア国とのブランドル地方停戦条約、ムルア海峡における両国間の協力体制も、不公認の条約であったと仰（おっしゃ）るのですかな。アイスクリストフでロイロマール公爵と結んだ、条約のす

べてを無効と言われるのであれば、これまでお互いに築き上げてきた友好的関係を、根本から否定する事になりますが。」

（ウィンチェスター）

「貴国ビナギティアとの停戦条約、ムルア海峡における安全保障条約に関しては、帝国最高評議会派遣員ヴァシャール外交官立会いの元に締結された、正当な条約であることを認めます。」

（トリストライアン）

「帝国最高評議会外交官を伴った正式な外交会談については、その会談内容の一切を否定するつもりはない。特にロイロマール公爵に関しては、帝国最高評議会を完全に度外視（どがいし）した、独断的外交交渉についての罪を問うものであり、決して不当な弾圧行為でない事を理解してほしい。」

（ヴァラジン）

「我がビナギティア国との間で締結された安全保障条約については、お互いに有効性が有ると言う認識で理解した。しかし、我々ビナギティア国海軍の約五割がムルア海における保安活動に従事しており、ビナギティア艦隊を再編成するには、それなりの時間がかかる事をご理解いただきたい。それに、ビナギティア艦隊をブランドル地方に派遣する事は、我がビナギティア国とトゥアム共和国の間に締結された、ラ・スレブッチ協定に抵触する事になる為、私一人の判断で決断を下す事は出来ませんな。」

（ゲイリーゲイツ）

「トゥアム共和国に対する貴国の立場は理解しているつもりですが、現ムルアート政府がムルア海域の制海権を、完全に掌握する事が出来ていない現状において、トゥアム共和国艦隊が複雑に入り組んだ当海域を西進してくる恐れもあります。スタルアントリオン地方か

らカルッツァ地方にかけて、海岸線一帯を防衛しなければならない我が帝国艦隊において、依然情勢が不安なブランドル地方を差し置いて、当海域に艦隊を派遣する程余力が無いと言うのが正直なところです。トゥアム共和国艦隊がムルア海へと進軍を開始した場合、最初にラ・スレブッチ協定に違反するのは、トゥアム共和国側と言う事になりますが、トゥアム共和国艦隊の西進を確認してからでは余りに時間的猶予が無さ過ぎます。」

（トリストライアン）

「今のところ我々はカルッツァ地方における戦闘に注力してはいるが、遥か東方へと伸び切った戦線に対して強い懸念を抱いている。今だトゥアム共和国の真意がどこに有るのか定かではないが、恐らく占拠されたリトバリエジ都市奪還に向けた、ある種の陽動作戦である可能性が高い為だ。この場合、トゥアム共和国がこの戦線を迂回して挟撃に転じる可能性もある為、我が帝国軍は南方リトバリエジ都市部周辺と、北方シュツルシルト海岸線一帯の防衛体制を強化する為に、必要以上に兵力の投入を余儀なくされている。陸路を辿った進軍経路に関しては、オクラホマ都市に駐留する、強力な航空師団を持って対抗し得る術を持つが、トゥアム共和国艦隊にムルアート諸島を経由して直接「砂漠の岬」を越えられた場合、スタルアントリオンに残された僅かな兵を持って、これに当たらなければならない事態に陥る可能性もある。トゥアム共和国艦隊の砲火の切っ先から帝国王都ルーアンを死守する為には、ムルア海中域を警戒する兵力がどうしても必要になるのだ。我が帝国軍としては、現在ブランドル地方へと釘付けになっている第7艦隊をムルア海へと派遣し、当海域の警戒任務に宛がいたいと思っているのだが、ブランドル地方海域の治安維持活動を、貴国で引き受けてはくれまいか。」

（ヴァラジン）

「ムルア海域へと侵攻したトゥアム共和国艦隊が実在するのであれ

ば、我がビナギティア国は全力を持ってこれを排除する。しかし、然したる確証も無くビナギティア艦隊を派遣する事は、貴国の振るう軍事活動を支援する行為に当たり、トゥアム共和国に対して敵対行動を示す事になる。我々ビナギティア国と貴国との間に結ばれた条約は、共闘を強制するような同盟条約では無く、両国間での停戦条約と、ムルア海域における安全保障条約だ。勿論、ブランドル地方の治安悪化については、我がビナギティア国内でも大きな問題になっている事は事実で、近々大規模な治安維持軍を投入する事を検討している。しかし、我がビナギティア国軍が目指すべきは、国民の平和と秩序を目指したものであり、決して他国を侵略する武力行使に加担する為のものではない事を、お解り頂けますな。」

だだっ広い大広間の中央部に敷かれた真っ赤な絨毯を、ぐるり取り囲むように並べられた長テーブルに、２０人程の男女がお互いに対峙して座り、なにやら激しく討論を繰り広げている。

ゆうに5メートルを超えるであろう部屋の天井からは、三つの大きなシャンデリアがぶら下げられ、もの侘しさすら感じる閑散とした部屋の中を、優しげな光で煌々（こうこう）と照らし出していた。

ここサイレンス・タワー３７階に位置する大広間は、実用的機能のみを追求した多目的ホールとして作られたものであり、生憎オクラホマ都市の綺麗な夜景を一望できるような、大きなガラス窓など取り付けられていなかったのだが、それでも両陣営が抱える様々な現実問題から、目を逸らす事の許されない彼等にとっては、都合の良い隔離部屋だったのかもしれない。

部屋の中に漂う空気も何処か淀んで重苦しい雰囲気を醸し出しており、両腕を組んだまま太い眉毛の間に険しい皺を寄せる、ビナギティア国有数の権力者「ヴァラジン・オーム」の言葉を最後に、長い

沈黙の時間が彼等を包み込んでいた。

上座を示す大きな帝国旗が掲げられた壁側に座る一団は、皆セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国の権力者達で占められ、その中央部でどっしりと構えて座る一人の男が、異様なまでの威圧感を漂わせている。

彼は若干貧相な上髭を携えた中柄の中年男性であり、両脇に従えた大柄な男達に比べれば、特にこれと言った特徴の無い人物だったのだが、彼の着込んだ軍服の上には帝国軍の中でも最上級を意味する、豪華な軍階級章がぶら下げられている。

時折会議の中にで割って入る彼の言動からも解る通り、ただの高階級貴族の一人ではないことが窺えた。

そう。彼こそが帝国国内でも最大の統治領土を誇る歴史深い名家の一つ、ブラシアック家当主「トリストライアン・レブ・ブラシアック」その人だ。

近年ストラントーゼ家とロイロマール家両家に、大きく水をあけられてしまった感のあるブラシアック家だが、「眠れる獅子」とも揶揄されるその強大な軍事力は今も尚健在であり、帝国軍東方戦線における主力部隊を担うのもこのブラシアック家である。

先祖代々名将を排してきた名門の名に恥じぬ１０代目当主として、帝国軍東方部隊の総司令官を勤め上げるこのトリストライアンは、物腰の柔らかいゆったりとした語り口調ながらも、何処か鋭く光る眼光の奥に、激しい闘争心を抱いている様にも見えた。

そして、そのトリストライアンの右手側に座るふくよかな身体をした大男が、ストラ派の中でも一際異才を放つ人物。

「ウィンチェスター・ボォクリューユ」である。

彼はお世辞にも覇気に満ち溢れた有能な仕官とは言えず、見るからに怠け者たる劣等者のイメージを拭いきれなかったが、これでも周囲からは天才と称される程、卓越した戦術眼を持つ若き軍参謀の一人だ。

ブラシアック家の遠い親戚一族でしかなかった彼は、幼い頃から平民達と同じ学校に通う、全く何の取柄も無い太った少年に過ぎなかったのだが、ブラシアック軍に志願入隊し、配属された先でようやくその才能を花開かせる事になる。

当時、帝国南西部に位置する「トロス王国」と戦闘状態にあった帝国軍は、「ネルブリア砂漠」戦線において、敵将である「セヒロス・ジェフティ」率いる「砂漠の堕天使部隊」の猛攻を受け、壊滅的打撃を被る結果となってしまったのだが、その時、敵軍の行動を適確に察知して、敗走する味方部隊を全滅の危機から救った男が、このウィンチェスターだったのだ。

普段から何をするにも他人より劣る運動能力しか持っていなかった彼だが、有事の時に垣間見せる彼の思考の速さは、まさにその欠点を補って余りある程の稀有な能力とも言われ、今ではこのトリストライアンの右腕として、他の重臣達と肩を並べる存在にまで上り詰めたのだ。

そして、トリストライアンを挟んで彼の反対側に座る強面の若者が、当会議の進行を勤める「ゲイリーゲイツ・トロ・ナイト」である。

端整な顔立ちに光る鋭い眼光が特徴的な黒髪のこの男性は、まだ若干二十歳の若者であり、タクラマカン地方一帯を取り仕切る名家「ルフトスピーリング家」の長男として生まれ、帝国内でも将来を嘱望される有能な人材の一人だ。

本来であれば、ルフトスピーリング家の跡取りとして、タクラマカン地方を治める領主となるべき人物だが、彼が名に背負う家名の示す通り、現在彼は第１３代皇帝ソヴェールの妹「ラキシス・ラント・ナイト」の養子と言う少々複雑な立場にある。

と言うのも、彼がまだ幼い頃、重い病を患って病床に臥せていた彼の父「グネービルム・レブ・ルフトスピーリング」が、長い間統治してきたタクラマカン地方の領主権を、皇居を離れる事になったラキシスの為に、献上する事を決意したからである。

勿論ラキシスは、他人の領土を搾取してまで、自らの生活に安泰を求めるような思いなど全く無かった為、始めの内は彼の申し出を丁重に断り続けたのだが、既に自分の死期が近いことを知っていたグネービルムの決意は固く、決して揺るぐ事はなかった。

常にタクラマカン地方に住まう領民達の事を、第一に考えていたグネービルムにとって、まだ幼い一人息子に領主としての多大な責務を背負わせるような事は出来ず、彼には帝国国民から絶大な人気を誇っていたラキシスにその領土を提供する変わりに、タクラマカン地方の未来の全てを託したい思いがあったのだ。

ラキシスは、そんなグネービルムの強い思いを、いつまでも無碍に

断り続ける事が出来ず、最後には彼女が折れる形で彼の意向を汲み取る事になるのだが、その時彼女がグネービルムに提示した一つの条件と言うのが、彼の一人息子であるゲイリーゲイツをナイテラーデ家の一員として、養子に迎え入れると言うものだった。

それは、本来タクラマカン地方の領主となるべき人物であった、ゲイリーゲイツのことを慮(おもんばか)って、彼にタクラマカン地方の領土相続権を残そうとラキシスが考えた為であり、ゲイリーゲイツが成人した暁(あかつき)には、ルフトスピーリング家の当主として独立させる事を思い描いていたのだ。

しかし、当の本人であるゲイリーゲイツに、どの様な思いが有ったからなのかは解らないが、彼はようやく成人を果たした今も尚、ナイテラーデ家の家名を背負ったままである。

しかも、彼の養親実子である「シングロード」が何者かに暗殺された事を切欠に、１６歳の誕生日を待たずして突然ラキシスの元を飛び出すと、事もあろうかストラントーゼ家の軍団に身を投じてしまったのだ。

そして今や、ストラントーゼ軍の旅団長を任される存在にまで成長を遂げ、将来の将軍候補とも呼び声高い有能な仕官の一人としての立場を確立したのだった。

私が帝国を離れてから４年半余り・・・。

時代が変わったと言う事なのかしら・・・。

シーンと静まり返った大広間の片隅で、会議の進行記録係を任されていたアリミアが、小型ＰＣに添えた両手をしばし休めながら、目の前のテーブル席に並んだ帝国要人達に対して、ゆっくりと順番に視線を据え付ける。

過去に帝国国内でテロ活動を行っていたアリミアにとって、最大の標的とも言えた帝国貴族達の顔ぶれは、その多くが年老いた老人達で占められていたはずなのだが、このビナギティア国との重要会議上に姿を現した若々しい陣容を見る限り、以前とは少し様相が違ってきているようだった。

トリストライアン・レブ・ブラシアックや、北方外交官「アムベルト・レブ・ブロクホルスト」はともかくとして、ウィンチェスター・ボォクリューユはまだ三十台半ばの中堅所であり、ゲイリーゲイツ・トロ・ナイトや、その脇に座るオクラホマ地方領主「チミン・オマール」の息子「リュチアーノ・オマール」に至っては、まだ二十台前半の若者だ。

それに、帝国要人達が並ぶ末席に座る一人の少年。彼は何処からどう見たって二十歳にも満たない少年だ。

アリミアは、小型ＰＣの裏面から会議参加者名簿のウィンドウを呼び出すと、一番最後に記載されていた彼の名前をまじまじと眺めた後で、再びこの少年の顔へと視線を移した。

綺麗な翡翠（ひすい）色の髪の毛が特徴的なこの少年の名は「レジェス・ウィルナー」。

勿論、アリミアの過去の記憶の中に、彼と同じラストネームを持つ人物は存在しない。

この重要会議に参加する以上、それなりの功績を持って周囲に認められた者か、または高い身分を持ちえる者かのいずれかに該当するはずなのだが、彼の名前に帝国貴族たる称号を示す表記は無く、年齢的に見ても何かしらの功績を持って伸し上がった人物という訳ではないだろう。

この少年は一体、何者なのだろうか・・・。

06－09：〇仮面パーティ［3］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ０９「仮面パーティ」

（レジェス）
「解りました。このまま議論を続けても、お互いの利に叶う結論に達することは無いでしょう。」

すると突然、静まり返った会議場の中に、この少年が綺麗な声色を響かせた。

そして、ゆっくりと椅子を引いて席から立ち上がると、ぐるり周囲を見渡した後で、辿り着いた視線の先にいたヴァラジンに向けて不敵な笑みを浮かべて見せた。

（レジェス）
「それでは、我々帝国側からの譲歩案を提示します。まず、ロイロマール公爵の身柄拘束から、情勢が不安定となっているブランドル地方に対しては、特別治安維持部隊を設立して派遣する事にしましょう。勿論、ブランドル市民に対して過度な刺激を与えぬよう、その指揮官には、ロイロマール公爵の右腕と称される「オルカス・フォーロ」将軍を任命します。ブランドル市民からも信頼の厚い将軍自らが治安維持に乗り出すとなれば、彼等も決して無闇に暴動を起こす事はないでしょうし、貴国ビナギティアにとっても決して悪い話では無いと思います。」

（ヴァラジン）
「その見返りとして、ビナギティア艦隊をブランドル地方に派遣し

ろと？」

（レジェス）

「いいえ。ブランドル地方の制海権掌握には、同海域に停泊する我が帝国第7艦隊をそのまま宛がう事にします。ブランドル地方の情勢が安定さえすれば、貴国も色々と動きやすくなるでしょう。貴国ビナギティアの艦隊には、逆に北ムルア海の治安維持活動を強化していただきたいと思っています。大佐が仰(おっしゃ)られる通り、ムルア海における貴国の軍事活動については、トゥアム共和国を刺激する恐れもありますが、現ムルアート政府の要望により、北ムルア海の治安維持活動を主目的とするならば、ラ・スレブッチ協定に反する事無く、正規の軍事行動が可能だと思います。」

まさかこんな少年と重要な言葉のやり取りをするとは思っていなかったのだろう。

ヴァラジンは少し驚いたような表情を浮かべると、この少年がどの様な人物なのかその器を計り見るように、鋭い眼光を持ってして彼の姿を凝視した。

しかしレジェスは、そんなヴァラジンの威圧的視線を全く意にも介さない様子で、ゆっくりと後ろ手に回した両手を組むと、全く少年とは思えない程の落ち着き払った態度を保ったまま、たった一人でこのヴァラジンの相手を勤め上げるのだ。

（ヴァラジン）

「確かに貴行の言う通り、北ムルア海の治安維持活動は、我がビナギティア国周辺海域の秩序を安定化させるための行為であり、ラ・スレブッチ協定に制限されるものでない。しかし、もし我がビナギティア艦隊が、ムルア海域を西進するトゥアム共和国艦隊を発見し

たとしても、即座にそれを抑止する行動に移れない事をご承知いただきたい。」

（レジェス）

「その点に関しては、貴国ビナギティアの艦隊が、北ムルア海域における警戒行動を強化することで、自然と解消される問題なのです。大佐。フランコ中将率いる反ムルアート政府軍は、ムルアート諸島に点在する無数の島々に活動の拠点を持つ、云わば海賊の一種に過ぎない烏合の衆ですが、今では現ムルアート政府軍をも遥かに凌ぐ軍事力を有するまでに勢力を拡大しています。勿論、その軍事力を軽視するつもりは全く有りませんが、それでもビナギティア国が本腰を入れてこれを摘発し始めたとなれば、彼等にとっては大きな脅威となりえるでしょう。ムルアート諸島一帯に勢力を拡大した彼等が、北方から強力な攻撃を受けた場合、果たしてどういう行動を余儀なくされるのか、聡明な大佐であれば既にその答えはお解りだと思います。貴国ビナギティア艦隊には、北ムルア海に存在する反ムルアート政府軍の幾つかの拠点を攻撃していただきたいのです。」

（ヴァラジン）

「我々ビナギティア艦隊が北ムルア海域における警備の手を強める事で、それを警戒する反ムルアート政府軍の艦隊を南下させ、トゥアム共和国艦隊の西進を妨害しようという訳ですな。確かにトゥアム共和国は、ラ・スレブッチ協定において、ムルアート諸国の内戦問題に対して、一切関与しない立場を表明している。しかし、もしトゥアム共和国が反ムルアート政府軍と内通し、一方的にこの協定を破棄して西進を開始した場合、いかがなされるおつもりですかな。如何に我がビナギティア艦隊が、北ムルア海まで南進するからとは言え、貴国の帝都ルーアン地方へと支援に駆けつけるまでには、かなりの時間を要する事になると思いますが。」

（レジェス）
「その可能性は全く有りません。大佐。」

（ブラシアック）
「レジェス！」

それまでビナギティア国外交団を率いるヴァラジンを相手に、全く臆する事無く言葉を連ねて来たレジェスだが、彼が短くヴァラジンに返答を返して見せた際、突然トリストライアンの大きな怒声によって言葉を遮られた。

この少年の放った短い言葉の中に、一体どのような思惑が隠れ潜んでいたのか、周囲にいた者達の多くは見当も付かなかったであろうが、帝国外交団のど真ん中で打ち鳴らされた大きな銅鑼（どら）の音は、そんな周囲の疑念をもかき消さんばかりの迫力を秘めていた。

一瞬にして静寂さに支配された会議室の中には、何処と無くピリピリと張り詰めた空気が漂い始めていたが、それでも何ら悪びれる様子も無く、レジェスは不敵な笑みを浮かべてトリストライアンの方へと視線を宛がうと、あからさまに見て解るように軽い溜め息を付いて見せる。

そして、静けさに包まれた会議室の中で、唯一自分の奏で出した音だけを残して、彼はゆっくりと椅子の上へと腰を下ろした。

思えばそれまで、帝国外交団の要となる人物達を差し置いて、たった一人で会議の進行を始めたこの少年に対し、何故トリストライアンが黙ってそれを見過ごして来たのか、不思議と言えば不思議な現象であるが、この時少年の見せた態度から察するに、少なからずそこに小難しい関係図が存在するのであろう。

やがて、会議の主導権を取り戻したトリストライアンが、大きく咳払いをして周囲の注意力をかき集めると、静かにヴァラジンの先の問いに対する新たな答えを示してみせた。

（トリストライアン）

「勿論、我々帝国側としてもその可能性を大いに憂慮（ゆうりょ）している。もしそのような事態が生じた場合には、我々はカルッツァ地方の防衛戦線を放棄してでも、トゥアム共和国の西進艦隊を追撃する覚悟だ。確かにスタルアントリオンに残された兵力は僅かだが、それでも友軍が転進してくるまでの時間を稼ぐ事は出来る。その場合、我々帝国はカルッツァ地方の多くの都市を失陥（しっかん）してしまう危機に陥ってしまうのだが、トゥアム共和国がラ・スレブッチ協定に違反した場合、我々帝国は即座に貴国ビナギティア艦隊に対して、手薄となったカルッツァ地方沿岸部の防衛任務を要請する方針だ。北ムルア海から帝都ルーアンまでの距離はかなり有るが、そのままカルッツァ地方沿岸部へと南進するのであれば、それほど多くの時間を必要とするまい。」

（ヴァラジン）

「ほーう。自国の民衆の命運を他国の軍事力に頼るなど、何とも他人任せな戦略ですな。我々ビナギティア艦隊がカルッツァ地方に赴くにしても、まずは目の前に立ちはだかる反ムルアート政府軍を攻略してからの話になります。それに、今まで中立国としての立場を突き通してきたからとは言え、トゥアム共和国の軍事力が決して他国に劣っているとは思えませんが。」

（トリストライアン）

「我々は貴国の強大な海軍力を高く評価している。貴国ビナギティア艦隊の能力を持ってすれば、必ずや我々の期待に答えてくれるも

のと信じている。我々帝国側の要求ばかり突きつけて申し訳ないが、それでも貴国ビナギティア国と我が帝国との関係強化の為にも、我々の要望を受け入れてはくれまいか。貴行の望まれるロイロマール公爵の処遇についても、決して粗悪に扱わない事を、このブラシアック家の名に駆けて約束しよう。」

この時、右手を顎の下に添えて、少し何かを考え込んでいたヴァラジンだが、先ほど少年の放った一言に関する内容について、あえて見て見ぬ振りを突き通した。

トリストライアンが示して見せた対応策はあくまで最終的手段であって、少年が思わず発してしまった一言が示す通り、そのような事態へと陥らない為の方策を幾つも用意しているはずなのだ。

とすれば、ビナギティア国がトゥアム共和国と対峙する可能性は、本当に最悪の事態が振ってかからない限りありえない事である。

しかも、ヴァラジンの要求するブランドル地方の治安維持問題や、ロイロマール公爵の処遇に関して、帝国側からある程度誠意のある回答を得た今、何も不穏な空気の漂う藪(やぶ)の中を、無闇に突付いてみせる必要も無い。

ヴァラジンは直ぐ脇に座っていたマキュリアーニに、少し小声で耳打ちをして見せると、やがて大きな身体を椅子から立ち上げて、会議を締め括(くく)る事になる最後の言葉を放つのだ。

（ヴァラジン）

「了解した。今回貴国から提示のあった要望事項に関しては、即刻検討するよう本国に通達いたします。早ければ明日の朝には正式な回答があるでしょう。貴国セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国と

の友好関係強化の為に、我がビナギティア国も出来る限りの誠意を尽くして、対応に当たりたいと考えておりますので、どうか今後ともよろしくお願い致します。」

そして、ヴァラジンが一同に対して深々と頭を下げて見せると、大きなどよめきと共に広い会議室内を双方が奏で出した拍手の雨が包み込み、一時間半にも及ぶ両国間の激しい論争に幕が下ろされる。

両国共に思い描いた要求には届かなかったかもしれないが、それでもお互い納得行く落とし所を見出す事が出来た結果に、誰しもがホッと胸を撫で下ろした事であろう。

アリミアは、そんな安堵感に包み込まれた会議室の片隅で、妙に疲れたように右肩をグルグルと回してみせると、ゆっくりと椅子の背もたれに身体を預けながら小さな溜め息を吐き出した。

慣れるはずも無い秘書官と言う難しい立場を預けられ、目まぐるしくやり取りされた会議の進行を、長い間備(つぶさ)に記録し続けなければならなかった彼女にとって、それは過酷な戦場で戦う事を強要されるより、神経を擦り減らす作業だったのかもしれない。

何より彼女の周囲に屯した人物達の多くは、過去に彼女が敵として対峙してきた相手の親玉たる人間であり、逃亡者として身を潜める立場にあるはずの彼女も、まさかこのような公の場に出席する事を強要されるとは思ってもみなかったのだ。

勿論、魅力的で可愛らしい清楚な女性へと変貌を遂げた彼女の姿に、嘗(かつ)て帝国中にその悪名を轟かせていたローゼイト・サーペントの影を重ねて、疑いの目を向けるような者は誰もいなかったのだが、そ

れでも彼女は、自分の素性を見抜く者が現れ出るのではないかと、少なからず心の中に不安感を抱いていたのだ。

（マキュリアーニ）
「クリス。どう?疲れた?」

（アリミア）
「ええ・・・。少し。」

すると、そんなアリミアの溜め息を聞きつけたのか、大量の資料を片手に抱え、ゆっくりと歩み寄って来た小柄な先輩秘書官が、彼女を労(ねぎら)うかのように優しい言葉を投げかける。

しかし、今回オクラホマ都市を訪れるに至った主目的の一つを果たして尚、秘書官たる彼女達がこなさなければならない仕事は山のように存在し、アリミアがホッと一息を付いたのも束の間、直ぐにマキュリアーニが次なる仕事を彼女の前に差し出したのだ。

（マキュリアーニ）
「クリス。今回の会議の内容を議事録にまとめて、早急に本国のグレシュビッツ大臣宛てに送信して。勿論、秘守レベルAの暗号化を忘れないようにね。それと、大佐からの託(ことづけ)で、メットネル中佐に東方沿岸警備部隊の再編成を推し進めるよう指示があったわ。防衛本部のムロミンツ作戦副部長を通して、彼に指示を出すよう依頼して。はい。これ。連絡用の暗号化携帯。」

（アリミア）
「解りました。」

一体いつまでこんな秘書官ゴッコを続けなければならないのだろう

か・・・。

この時、アリミアの疲れた脳裏に浮かび上がった言葉は、彼女の心を映し出した素直な感想とも言うべき本心なのだろうが、それでも彼女は愛想の良い笑顔を振りまいて、先輩秘書官の依頼に了承を持って答えると、差し出された白い折りたたみ式携帯に手を伸ばした。

敵国に潜入しての工作任務と言うのは、たった一つのミスから全てを瓦解させるに至る程、非常にデリケートで不安定なものであり、彼女の思いがどのようなものであれ、然るべき時が訪れるまで、決して着飾った秘書官たる毛皮を脱ぎ去る事は出来ないのだ。

しかし、ふと手渡された折りたたみ式携帯の間に、一枚の紙切れが挟み混まれている事に気が付くと、アリミアは綺麗に束ねられた髪の毛を掻き揚げるような素振りを見せながら、マキュリアーニへと視線を向ける。

それが恐らく、彼女から齎された新たな情報であろう事は、それまでの成り行きから窺い知る事は出来たのだが、それでもこの時、不意にアリミアの耳元まで顔を寄せたマキュリアーニは、アリミアの心の中に驚愕の嵐を呼び込むのに十分な程の言葉を発したのだ。

（マキュリアーニ）
（晩餐会が終わったら大佐の部屋まで来て。今夜そこで大佐の身柄を拘束するわ。貴方にはそれを手伝って欲しいの。）

（アリミア）
「えっ！！！！？」

彼女の付けたほんのりと甘さを含んだ香水の香りが漂う中で、耳元

で囁(ささや)かれた綺麗な声色が、巨大な鉄のハンマーと化してアリミアの心を激しく叩きつける。

（マキュリアーニ）
「そんな顔してもダメよ。クリス。いつまでも貴方を新人秘書官として甘えさせておく余裕なんて無いの。このぐらいの仕事は難なくこなして貰わないとね。」

大人びた笑みを浮かべながら、スッとアリミアの傍から身を離したマキュリアーニは、まるで妹を叱る姉のような口ぶりで、唖然とするアリミアにそう苦言を吐き散らしてみせる。

それは恐らく、アリミアが思わず発してしまった驚きの声を、カモフラージュする為の行為に他ならなかったが、それでも先に彼女が発した爆弾発言の内容は、決して難なくこなせるような仕事ではない。

ヴァラジン大佐の身柄を拘束する??

彼女が??何故??何の為に??

そしてそれを私に手伝えですって??

（マキュリアーニ）
「それじゃクリス。頼んだわよ。後はよろしくお願いね。」

（アリミア）
「マキュリ！」

アリミアは、この美人秘書官の示した目論みの真意を探り当てようと、必死になって様々な思考をめぐらせて見たのだが、それまである程度予測していた構図をも、簡単に瓦解させるほどの一手を放たれてしまった今、ゆっくりとその場を立ち去ろうとした彼女を呼び止めることしか出来なかった。

しかし、そんなアリミアの思いに反して、静かに振り返ったマキュリアーニは、左手首に付けた腕時計を人差し指で二回ほど小突いて見せただけであった。

要するに直(じか)に詳細な説明をしてる時間的余裕など無いと言うことだ。

やがて、会議室を出て行ったヴァラジンの後を追うように、小走りに駆けて行くマキュリアーニの姿を見つめつつ、アリミアは手渡された折りたたみ式携帯を、素早く胸の内ポケットの中へと仕舞い込む。

そして自分が既に、目まぐるしく蠢(うごめ)く陰謀の渦中に居る事を自覚したのだった。

０６－１０：〇解れ始めた糸［１］（前書き）

セニフがジョルジュ、サフォークと会話するシーンは、通信システムを通してのものだった事を明確にする為に、１箇所だけ文章を変更しました。ストーリーに変更は有りませんのでご了承ください。

０６－１０：〇解れ始めた糸［１］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「解れ始めた糸」

真っ黒な薄いカーテンを重ね引くように、青と言う色を次第に消し行く空の彼方で、巨大な焚き火を燃やしたような紅色が綺麗なグラデーションを形作る。

涼やかな北風と共に訪れた闇の世界は、大地に根付く木々達の足元からヒタヒタと忍び寄り、それまで活発に動き回っていた動物達の意識を、優しく静かな眠りの中へと誘って行くようだ。

やがて四方を濃密に囲った木々達の周囲に、夜と言う黒い香りが色濃く漂い始めた頃、闇に溶け込んだ彼等の影をくっきりと浮かび上がらせるように、森の中を迸る光の筋が、忙しく動き回る働き蟻達の姿を映し出していた。

（チャンペル）
「東方ＲＮ－３１９北端２０から５４までクリア。オクラホマ攻略部隊通過予定時刻まであと０３３０。リプトンサム部隊の支援砲撃地点到着まで００２０です。」

（バーンス）
「パレ・ロワイヤル基地の周辺状況は？」

（チャンペル）
「現在の所、ナルタリア湖周辺部に大きな動きは見られません。」

（リスキーマ）
「三佐。第七機械化歩兵部隊のフレッチャー三佐から通信が入っています。」

（サルムザーク）
「リスキーマ。回線を回せ。」

（シューマリアン）
「各機体整備作業員は、ＤＱ最終点検作業が終了次第、動力ポットへのテスラマター注入作業を開始。１０分以内にＦＥ転換機能チェックまでを完了させるように。ＤＱシステム整備担当者はメインデータ投入後、パラレルシミュレートシステムとの接続テストを開始。ＤＱパイロットの受け入れ態勢構築を急げ。」

（カース）
「各部隊ＤＱパイロットは、速やかにＤＱに搭乗せよ。繰り返す。各部隊ＤＱパイロットは、速やかにＤＱに搭乗せよ。」

黒いキャンパスの上に色鮮やかな緑色で描き出したような密林の中で、珍しく木々達が疎らに生え揃う傾斜のなだらかな平原地帯。

ここは帝国南東部に位置するナルタリア湖から東へ約１００ｋｍｌｓ離れた地点であり、帝国軍のパレ・ロワイヤルミサイル基地を軍事目標に見据える、ネニファイン部隊の仮駐屯地となる場所だ。

１台の牽引車と３つの積載車からなる大型トレーラーが、まるで建物で有るかのように綺麗な４列を形成し、大きな荷台の上にはトゥアム共和国最新鋭人型兵器である、ＤＱトゥマルクが仰向けに寝そべっている。

その他にも、ネニファイン部隊本部付き指揮車となる大型装甲バスや、ＤＱ火器輸送車輌、高出力通信車輌、索敵車輌、補給車輌、ＤＱ整備車輌などが周囲に屯し、まさに移動する小さな軍事基地と言った様相を醸し出していた。

そして、各車輌を網の目のように繋ぎ合わせた無数の太いケーブルの上を、汗びっしょりになりながら駆け回る作業員達が、飛び交った指揮車からの指示に煽られて、更なる慌しさを奏でるのだ。

（マース）
「チャンペル。諜報部からの続報はまだ無いのか？」

（チャンペル）
「現在の所ありません。作戦開始５分前まで続報を待つようにとの指示です。」

（ジョハダル）
「久々の元隊復帰の癖に、余り色んな事に気を回しすぎるもんじゃないぜ。続報が有ろうが無かろうが行く事には変わりないんだ。もう少しリラックスしたらどうだ？」

（マース）
「全く余計なお世話だぜ。俺はてめぇ見たいな楽観主義者とは違うんだよ。」

（ウララ）
「なぁに？喧嘩？喧嘩？」

（メディアス）
「それだけ仲が良いって事だろうさ。あんたみたいな娘は触れちゃ

ダメだよ。」

大きな木々の隙間から満天の星空を拝(おが)める綺麗な空気に包み込まれ、緩やかに流れ行く風の中に、赤く長い髪の毛をなびかせながら、セニフは右耳に装着したイヤホンマイクから流れ来る仲間達の会話を聞き流していた。

そして、一番左手にある大型トレーラーの最後尾に到達すると、セニフはその荷台の上へと軽やかに飛び乗り、トゥマルクのコクピットへと続く鉄梯子(てつはしご)をよじ登り始めた。

やがて、天空へと向けて大きく口を開け放ったコクピットハッチの元まで辿り着くと、セニフは綺麗に光り輝く無数の星々を見上げて、一際目立って強い光を放つ一つの星をじっと見つめた。

（チャンペル）
「リバルザイナ共和国軍ドラン大佐から入電です。リバルザイナ共和国の飛行編隊は当初の予定通り、２１：３０を持ってアザンクウルを出立。２２：００から２４：００までの間、ナルタリア湖上空半径１００ｋｍｉｌｓの制空権を確保するとのことです。尚、追加兵員の要請については、２２：３０を最終期限とするそうです。」

（カース）
「ドラン大佐宛てに三佐の名前で返信。貴国の協力に感謝すると。」

（チャンペル）
「了解。」

（リスキーマ）
「サルフマルティア基地から入電。カルッツァ地方の陽動部隊が最

後の攻撃を開始との事です。」

淀む事無く透き通った頭上のスクリーンに映し出されたのは、個々が持つ意思を放つかのように、光る事で周囲にその存在を示す「星」と言う存在。

その光の色。その光の強さ。その光の大きさに違いは有れど、そこに何かの価値を見出され、呼称を与えられるまでに至った者は、極僅かに過ぎず、その多くが人々に認識される事も無く、じっと夜空に光り輝いているのだ。

彼女の見上げた視線の先には、「星空」と言う大きな概念的言葉で括られた、極ありふれた自然の風景が広がっていたのだが、彼女は見据えたこの名も無き一つの星に対して何かを強く願い掛けると、ゆっくりと両目を閉じたのだ。

（ジョルジュ）
「セニフ。三号機のデータ投入作業完了したよ。コクピットに入ってメインシステムを立ち上げて。」

（セニフ）
「うん。」

（ジョルジュ）
「センターボールの比率は、三号機の火器装備に合わせて、Ｌ４．５：Ｒ５．５に調整してあるから、除装時は火器に合わせて比率を微調整してね。」

（セニフ）
「うん。」

（ジョルジュ）
「それと、パラレルシミュレーションに投下するデータは、低威力火器から順番にお願い。システム規模の問題で、敵機の出現数が制限されているから。」

（セニフ）
「うん。」

耳元のイヤホンマイクから流れ来るジョルジュの可愛らしい声色に対して、何処か上の空な返事を三つほど返したセニフは、頬を撫でるように過ぎ行く優しげな夜風の中、再び見開いた瞳の奥に願いを込めた星の光を取り込む。

そして、上向きに開いたトゥマルクのコクピットハッチに左手をかけ、搭乗者を待つばかりの薄暗い操縦席へと視線を落とすと、セニフは勢い良くシートの背凭れに飛び乗った。

（チャンペル）
「ネニファイン部隊各機へ。パレ・ロワイヤル攻略作戦開始まで残り００３０。各自速やかにＤＱ最終調整作業を完了させ、作戦開始５分前にはスタートエリアに集合してください。」

普段ハンガーで直立不動に立っているＤＱに乗り込むのとは違い、狭いコクピット内で真横に９０度傾いたシート上に座ると言うのは非常に骨が折れる作業だが、体の大きな他のメンバー達ならいざ知らず、小柄な体躯のセニフにとって見ればそれは造作も無い事だ。

セニフは小さな身体を更に小さく丸め込んで、シートの背凭に腰を下ろすと、細い両足を左から順番にフットペダルの上へと押し上げ

た。

そして、正面のメインモニターの脇に取り付けてあるカード差込口に、ＤＱ駆動キーを差し込むと、メインスイッチとなる透明なパネル部分に、右手人差し指を軽く宛がう。

すると程なくして、認証完了を示す甲高い音が鳴り響くと共に、目的別に彩られた綺麗な光が、一斉に薄暗いコクピット内部を照らし出した。

やがて、即座にＤＱシステムと投入データのリンク作業を開始したセニフは、以前ディップ・メイサ・クロー作戦の時に見せた戸惑いや不安を少しも見せず、まさに普段の訓練通りといった感じで、テキパキと流れるように、機体設定作業をこなして行った。

（サフォーク）
「セニフ。バーナーランチャーの出力レンジは、ご希望通り手動で５０から１５０％まで調整出来るようにしておいてやったぜ。火器動力はテスラポット直結だから、指定基準値を超えて使用した場合、直後の機体挙動に支障をきたすからな。気を付けろ。」

（セニフ）
「うん。」

個人パーソナルデータシステム展開・・・完了。

ＤＱ機体神経接続作業・・・完了。

（サフォーク）
「左肩装備の１２０ミドレンは、暗視センサーの都合で、照準距離

が普段の3分の2まで低下している。森の中で狙撃戦も無いだろうが、普段の感覚のまま使用するなよ。」

（セニフ）
「うん。」

センターボールマトリクスシステム・・・異常なし。

火器コントロールシステム・・・異常なし。

（サフォーク）
「ジョルジュ。一号機から三号機のテスラマター注入作業完了。テスラポットＦＥ転換機能に異常は無しだ。キャンサーとのライフラインを切断するぞ。」

（セニフ）
「うん。」

サーチシステム・・・異常なし。

パラレルシミュレーションチェック・・・開始。

（サフォーク）
「・・・。」

この時サフォークの投げかけた言葉は、勿論セニフに向けられたものではない。

しかし、やはりと言うべきか、先ほどから気の無い返事を繰り返していたセニフは、耳元から流れて来た音声に対して無条件に同じ反

応を示したのだ。

過去二年間に渡り、チームＴｏｍｂｏｙの仲間として戦ってきた二人は、お互いにお互いをチームメイト以上の言葉で言い表す事の出来ない、薄っぺらな関係しか構築する事ができなかったのだが、それでもこの時、余りに奇妙な雰囲気を醸(かも)し出すセニフの事を、彼も少しは気にかけたのだろう。

ふとサフォークは、緑色の長い髪の毛を掻き揚げながら、軽く溜め息を付いて見せると、そんな彼女に向かって、ちょっとした悪戯(いたずら)を兼ねた、からかいの言葉を投げつけてみた。

（サフォーク）
「なぁセニフ。今回の作戦が終わったら、お前の知り合いで誰か綺麗な女性を紹介してくれよ。」

（セニフ）
「やだよ。」

（サフォーク）
「じゃあ、数年後のお前でも良いぜ。」

（セニフ）
「もっとやだよ。」

何もこんな時ばかり、普通に返事を返さなくても・・・。

先に習ってセニフの上の空な返事を期待した彼の目論見(もくろみ)は、即座にそれを拒絶して見せた彼女の反応の前に、儚(はかな)くも簡単に消え去ってしまう事になるのだが、それでも彼は大型トレーラーの荷台の上に

横たわる、トゥマルクの姿を見上げて少し口元を緩めて見せると、静かな口調でセニフに語りかけた。

（サフォーク）
「へっへ。少し安心したぜ。俺はまたてっきり、お前の意識が遠く離れた北の大地にあるんじゃ無いかと思ってな。アリミアの話は俺も聞いてるが、今のお前にはそんな余裕はないだろ？まずは目の前に与えられた仕事を、きちんとこなさなきゃな。」

（セニフ）
「そんな事言ったって。心配なものは心配なんだもの。サフォークはアリミアの事、心配じゃないの？」

（サフォーク）
「そりゃまあ。心配じゃないって言ったら嘘になるかも知れないが、それでも幾ら俺達が心配したからって、奴が無事に帰ってくる保証はないだろ？」

（セニフ）
「そっか・・・。サフォークって、案外冷たい人間だったんだね。」

（サフォーク）
「まあ、悪く言われんのは、まさにその通りだから仕方ねぇが、でも、お前が今すべき事は、アリミアを心配してやる事じゃない。そこん所は解っているよな？」

（セニフ）
「解ってる！解ってるけど・・・。解ってるけどさ・・・。」

（サフォーク）

「じゃあさ。少し考え方を変えて、前向きにこう考えてみたらどうだ？アリミアを救出に向かった奴等が、幾ら有能な人間達だとしてもだ。オクラホマ都市の防衛機能全てを相手に回して、難なく目的を果せる程、世の中甘くないだろ？」

（セニフ）
「・・・・・・・・・うん。」

（サフォーク）
「と、すればだ。奴等の負荷を少しでも軽減させる為に、共和国軍の本隊には、出来る限り早くオクラホマ都市へと、到達して貰わなければならない訳だ。」

（セニフ）
「・・・・・・うん。」

（サフォーク）
「本隊がオクラホマ都市へと進攻する過程で、一番の障害と成り得るのが、パレロワイヤルミサイル基地だ。となると、ネニファイン部隊がどれだけ早く、この基地を制圧できるかが、大きなポイントとなって来る。確かにお前が直接アリミアを助けに行く事は出来ないが、それでもお前一人の力だけで、アリミアを助け出すことはできないだろ？」

（セニフ）
「・・・うん。」

（サフォーク）
「だったら他の人間達の手を借りるしか無いよな。折角うちの隊長がアリミアを助け出す為の作戦を、あれこれ思案して捻(ひね)り出してく

れたんだ。皆の力を合わせて、アリミアを救い出そうって言ってくれてるんだぜ。それを利用しない手は無いと思うがな。」

（セニフ）
「うん。」

（サフォーク）
「今回の作戦でお前が頑張れば頑張るほど、それだけパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略と言う目標が近づく。そしてそれは、オクラホマ攻略部隊の為にもなるし、最終的には、アリミアを助ける事が出来る可能性を高める事にもなる。今はあれこれ余計な心配をするより、目の前の作戦をどうこなすか、どう自分が戦うかが、お前にとっては重要な事だと思うぞ。」

確かにサフォークの言う通り。

幾ら私がアリミアの事を心配したからと言って、アリミアが無事に帰ってくる保証は無い。

幾ら私がオクラホマ都市へと乗り込む決意したところで、何も出来ないただの小娘一人に、困難な状況を打開する力なんて無い。

逆にかえって足手まといになるだけだ。

こんな私に唯一出来る事とは。

アリミアを救出する作戦を成功させる為に出来る事とは。

トゥアム共和国軍の作戦を成功させる為に出来る事とは。

セニフはふと、開いたままのコクピットハッチの向こうに広がる綺麗な夜空を見上げながら、着込んだパイロットスーツのジッパーを首から胸元まで引き下ろすと、内ポケットに忍ばせていた二つの小さな紅いヘアピンを取り出した。

そして、真っ暗な闇夜に光輝く星の元にそれを翳(かざ)して、下唇を強く噛み締めると、再び両目を瞑(つむ)って強い願いを心の中で呟いたのだ。

私は、アリミアに会いたい・・・。

私は、アリミアに会って、話がしたい・・・。

本当に色々。何でも。自分の想いの全てをぶつけて話をしたい。

アリミアはずっと、それを待ってたんだ。

アリミアはずっと、それを願っていたんだ。

アリミアの事をとやかく言う前に、まずはアリミアの事を知らなきゃならなかったのに。

我儘(わがまま)な私は、全然アリミアの言う言葉に耳を傾けず、ただ必死に、必死になって逃げ回ってただけ。

拭い去れない忌(い)まわしき過去は変わらない。

でも、アリミアが私の事を助けてくれた事実も変わらない。

ブラックポイントの時も。ランベルク地下基地の時も。
アリミアはいつも、私の事を想ってくれていたんだ。
こんな私の為に・・・。こんな自分勝手な私の為に・・・。

パラレルシミュレーションチェック・・・完了。

（セニフ）
「そだね。そうだよね。」

やがて、トゥマルクの戦闘準備作業が全て完了した事を告げるグリーシグナルが、セニフの表情を強く照らし出すと、彼女は左手に持った紅いヘアピンを、ギュッと強く握り締めた。

（セニフ）
「いっつもちゃらんぽらんなサフォークに言われて納得するのは、少し癪(しゃく)だけど、たまにはまともな事も言うんだね。」

（サフォーク）
「なぁに。別働隊に駆りだされたシルの代わりに、少し奴の真似事をしてみただけよ。どうだ?俺の口ぶり奴に似てただろ?」

（セニフ）
「あっはは。全然似てない。全く似てない。」

セニフは軽い笑い声をコクピット内に響かせ、何処か少し吹っ切れ

た様子で小さく息を吐き出すと、すぐさま手に持つヘアピンを内ポケットの中へと仕舞い込んだ。

そして、シートの直ぐ後ろにぶら下げてあったヘルメットを手に取り、中に入っていた真っ白なグローブを両手に嵌めた後で、コクピットハッチを閉じる赤いスイッチを軽快に弾き飛ばした。

（カース）

「ネニファイン部隊司令部から各機パイロットへ。パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦開始まで００１０。各自作戦準備を進めながら聞くように。現在の所、諜報部からの続報はまだ無いが、この情報は入手出来次第、信号弾を使用し各機にデータを送信する。作戦開始時点のプランはＡタイプとなるが、もし作戦プラン変更指示が出た場合、即座に新たな作戦プランを順守する事。ファーストアタッカー部隊４小隊は、ネニファイン部隊仮駐屯地αから西方４０ｋｍｉｌｓ地点βまで、ＦＴＰフィールド展開隠蔽モードで前進。その後、指定時間到達まで同ポイントで待機する事。現在ナルタリア湖周辺部には、高濃度フィールド防壁が存在している事が確認されている為、司令部への情報伝達においては、各小隊長の判断で信号弾を使用する事を許可する。セカンドアタッカー部隊2小隊は、第一種戦闘体制を維持したまま、次の私の指示を待つように。」

私に出来る事。

それは、目の前のパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦に全力を尽くす事。

出来るだけ早く、障害となる敵部隊を排除殲滅する事。

どんなに私の手が汚れようと関係ない。

どんなに私の心が汚れようと関係ない。
私はアリミアの為に戦うんだ。

（サフォーク）
「なぁ。セニフ。この作戦が終わったら、皆で一緒に飲みに行こう。昔みたいに皆で楽しく騒ごうぜ。だからちゃんと生きて戻って来いよ。」

（セニフ）
「うん。」

再びサフォークの言葉に頷(うなず)いて見せたセニフの口調に、もはや先ほどのような迷いは感じられない。

セニフは胸の内ポケットの中に収めた紅いヘアピンを、パイロットスーツの上から、そっと両手で優しく包み込むと、やがて外界とを遮断するコクピットハッチが閉じきると同時に、満天の星空を浮かび上がらせたＴＲＰスクリーンを見つめる。

そして、遥か北の空に輝く星に向かって、心の中に強く抱いた切なる願いを、小さく呟いたのだった。

（セニフ）
「神様・・・。どうか神様・・・。アリミアを守って・・・。」

黒く淀んだ闇の世界に、微かに輝く光の温もりに希望を抱いて。

彼女はゆっくりとヘルメットを被ると、やがてスタートエリアへと

召集を促すシグナルに合わせて、トゥマルクの機体動力部を大きく吹き上がらせた。

ＥＣ３９７年６月１６日深夜。

静けさと冷たさに包み込まれた自然の大地が静かに眠りに落ちる頃、もはや解(ほつれ)れ様も無く複雑に絡み合った陰謀の渦が、激しい殺戮(さつりく)の業火を求めて目覚めた亡者達の手によって抉(こ)じ開けられる。

それは燦燦(さんさん)と光り輝く眩い未来への道筋なのか。

それとも、暗黒の闇に閉ざされた悲しき絶望への末路なのか。

その終局となる答えを必死に手繰(たぐ)り寄せようとする、人々の思いを察するかのようにして。

パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦が開始された。

０６－１１：〇解れ始めた糸［２］（前書き）

ジルヴァが投げ捨てたのは、ドリンクホルダーではなくボトルですね・・・＾＾

本当にお馬鹿でごめんなさい。修正しました。

06－11：〇解れ始めた糸［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「解れ始めた糸」

帝国トポリ領南東部にある「オクラホマ都市」は、トゥアム共和国との国境を形作る「レイナート山脈」の西側麓（ふもと）に位置し、強力な八個の固定対空高射砲によって守られる強固な軍事都市である。

広大な敷地面積を誇るオクラホマ空港には、強力な航空部隊が数多く駐留し、都市南部と北部にそれぞれ建設された防衛基地の存在も、決して侮れない軍事力を有していた。

遥か東方で勃発したカルッツァ地方戦線に対しての強い警戒心から、帝国軍東方戦線最高責任者「トリストライアン・レブ・ブラシアック」の命により、北部防衛部隊の大半が東方戦線へと送り込まれる事になるのだが、それでもオクラホマ都市南方防衛基地内には、まだ一都市を防衛するのに十分なほどの戦力が残されていた。

都市南部に広がる「ソリアス平原」一帯を見渡せる小丘に建設された、このオクラホマ都市南方防衛基地は、一見小規模な軍事基地のようにも見えてしまうのだが、実の所その軍事施設の多くが地下に埋（うず）められており、地上に綺麗に並べられている大戦車団の数も、保有する兵力の約3分の1程度に過ぎない。

それは勿論、周囲を広く見渡せる地域にあって、上空からの爆撃や遠方からのミサイル攻撃に対処する為の防衛策であり、この時この南方防衛基地内には、優に一個師団を超える兵力が存在している事が報告されていた。

そして、そんな強力な防衛基地を西に臨む山間の森林地帯に、じっと息を潜めて時を待つ六つの巨大な人型兵器の姿があった。

彼等はランベルク地方から険しいレイナート山脈を越え、密かにこの地へと潜入を果したネニファイン部隊の別働隊であり、オクラホマ軍事空港破壊工作員達を、無事帰還させる為の作戦任務に従事する部隊だ。

彼等はこの時点で既に、当初の第一目標である工作員回収部隊の輸送任務を完了しており、この後工作員回収部隊のオクラホマ都市突入を手助けする為に、オクラホマ都市南方防衛部隊に対して、陽動作戦を展開する手はずとなっていた。

そしてそれは、トゥアム共和国軍主力部隊である、オクラホマ攻略部隊の攻撃に先んじて、同地域に駐留する帝国軍戦車部隊の注意を引き付ける為の役割も担っており、軍上層部に容認されたサルムザーク陸等三佐の作戦は、まさにオクラホマ都市の防衛能力を早期攻略する為の重要な鍵として、オクラホマ攻略作戦の中に組み込まれたのだった。

しかし、そんな重要なキーパーツを担うべき部隊の中にあって、真っ暗な闇の世界を映し出すスクリーンをじっと眺めていたランスロットが、狭苦しい一人部屋の中で大きな欠伸(あくび)を吐き出した。

それは、目の前へと差し迫った強大な帝国軍防衛部隊との戦いを前に、極度の緊張状態に曝された精神が奏でる、生理的現象のようにも見えたが、ふてぶてしいまでの態度で両足をコンソール画面の上

へと放り投げ、眠たそうな表情を浮かべてコクピットシートに寝そべる彼の態度からは、少しも緊張感を指し示す雰囲気は感じられなかった。

彼は無造作に右手で金色グリグリの短髪を掻き乱すと、長い時間待機状態を強いられる事になってしまった現状に対し、当て付けの意味も兼ねて、退屈さを紛らわすボヤキを発した。

（ランスロット）
「ほんと暇だねぇ。このままだと作戦が始まる前に寝ちまいそうだぜ。誰か歌でも歌ってくれないもんかね。ジルヴァちゃん。よろしく～。」

（ジルヴァ）
「てめぇの末路に絶望して、一人寂しく鎮魂歌（レクイエム）でも歌ってな。」

（フレイアム）
「工作員回収部隊からの合図があるまでの辛抱だ。奴等からの最後の定期連絡があってから既に2時間。もう直ぐ眠れない夜がやってくるさ。」

作戦開始からカウントを重ねていくコンソール画面の数値に目を通しながら、大きく鰓（えら）の張った顎（あご）が特徴的な「フレイアム・モートン」が静かに呟く。

彼は今年三十路（みそじ）を迎えるトゥアム共和国軍の正規軍人であり、ルワシー、ランスロット両名を従える小隊長の一人だ。

軍務に誠実で規律正しい彼の性格は、非常に真面目でお堅い印象を受けてしまうものだが、それでも意固地（いこじ）に軍規だけを優先させて、

周囲にむさ苦しい雰囲気を作り出すような人物ではない。
時折、意味不明な言動を繰り返すランスロットに対して、触れれば切れるナイフのように鋭い毒舌を突きつけるジルヴァとは異なり、彼が発する言動は常に温和でいて親しみやすいものだった。

（ランスロット）
「眠れない夜を君と共に・・・か。涙が出るほど良いシチュエーションだねぇ。これが居心地の悪いコクピットの中じゃなく、愛を語らうに相応しいベッドの上ならなぁ。右腕に抱いたジルヴァちゃんの吐息を肌で感じながら、吐き散らしたタバコの煙に余韻を馳せる俺。そして無造作に両腕を伸ばして、身体を纏わり付かせるジルヴァちゃんに向かって、格好良い俺は静かな口調で語りかけるんだ。眠れないのかい？君の気持ちも解るが、少しは眠らないと明日に差し支えるよ。大丈夫。君の綺麗な瞳の虜になってしまった俺の心は、決して君の元から逃げ出したりはしないよ。だから安心して俺の右腕の中で眠るといい。すると、そんな俺の優しい言葉に対して、切なそうな表情を浮かべて見せたジルヴァちゃんが、こう言うんだ。」

（ジルヴァ）
「この変態スケベ野郎が！気持ち悪い妄想に私を使うな！」

（ルワシー）
「あっはっはっはっは。ベタベタで何の捻りもねぇ妄想には違いねぇが、中々おもしれぇ結末を見たぜ。暇さえありゃぁ女の尻追い回すこと事しか考えてねぇ奴だからな。狭いコクピット内に押し込まれて身動取れねぇ分、馬鹿な妄想に逃避するしかねぇんだろうぜ。」

（ランスロット）
「失敬な事言わないで欲しいねルワシー君。俺とジルヴァちゃんの

恋仲は、今始まったばかりなのよ。両者の初々しい想いの芽を早々に摘み取るような言動は、極力避けてくれたまえ。」

（ジルヴァ）
「ふざけんなよ！誰がてめぇなんかに恋心を抱くかってぇの！鏡で自分の顔を良く眺めてみろっつうの！」

（ルワシー）
「一方的に蹴り付けられるだけの関係の上に、一体何を求めてんだかぁ知らねぇが、こんなガサツで女っ気もねぇ女相手に、おめぇも良くやるもんだぜ。」

（ランスロット）
「おや。ほんとルワシー君は女性を見る目がないねぇ。俺は彼女の透き通った純粋な心に魅かれているわけよ。ガサツな性格だろうと、少しも女っ気が無かろうと、背が小さかろうと、胸が小さかろうと関係ないのさ。」

（ジルヴァ）
「てめぇ。私に喧嘩売ってんのか？戦闘中、私の視界内に姿を見せたら、躊躇（ちゅうちょ）無くトリガーを引いてやるからな。覚えとけよコラ。」

（ランスロット）
「解っている。解っている。何も言わなくても解っているよジルヴァ。君は自分の感情を表現する事が苦手な女性なんだ。そうやって言葉で俺の事を切り付けながらも、実は心の奥底では泣いているのさ。さぁ。心を解き放って！素直に自分を表現して！俺の事を好きだと言ってしまいなさい！」

（ジルヴァ）

「ほんっっっと！こいつウザ過ぎだろ！てめぇみてぇなカス男は死ね！即座に死ねっ！！」

（アイグリー）
「うっるさいなぁ。待機時間中ぐらい、ゆっくり音楽聴かせといてくれ。醜いヒステリーは戦闘が始まってから起こせば良いだろ。少しは静かにして欲しいもんだね。」

（ジルヴァ）
「何だと！！糞生意気な小僧が偉そうな口叩くんじゃねぇよ！！大体待機中に音楽聴いている奴があるか！！私の指示が聞こえないだろうが！！」

（アイグリー）
「だから低音量で聴いてるんだって。誰もあんたに迷惑かけたりしないから、俺に迷惑かけるもやめてくれ。」

（ジルヴァ）
「・・・んっっっだとこのぉ！！」

（ランスロット）
「んー。怒ったジルヴァちゃんの声も色っぽいわ。良いもんだねぇ。」

（フレイアム）
「おいおいお前等。幾ら有線通信だからと言って、無闇に大声を張り上げるもんじゃないぜ。作戦開始前に敵に察知されたら元も子もないぞ。ジルヴァもそんなにいきり立って突っ掛かるなって。」

過酷な戦火の渦中でのた打ち回る状況ならいざ知らず、偶（たま）に持て余

した時間を好きに使うぐらい、本人達の自由にさせたい気持ちが有ったフレイアムだが、さすがに底なしに繰り広げられる実りの無いやり取りに苦言を呈すると、呆れ返る様に溜め息を吐き出した。

自らの命を賭して戦う過酷な戦場を前に、これほど能天気に語らえる彼等の神経の図太さは頼もしい限りなのだが、それでも遊びの延長線上で楽にこなせるほど、今回の作戦任務は甘くない。

それは勿論、放蕩(ほうとう)主義者達の口車に乗せられて、見苦しくも稚拙な怒鳴り声を発する事になってしまったジルヴァ自身も、それは解っている事だった。

（ジルヴァ）
「ちっ・・・。解ってるよ。」

彼女は苛立ちを込めた拳で目の前のモニターを強く叩き付けると、少し不貞腐(ふてくさ)れたように舌打ちを奏で出して、コクピットシート脇に取り付けられているドリンクホルダーから、ストロー付きボトルを掴み取った。

そして、何処か無性に疲れ果てた身体を預けるように、コクピットシートの背凭(せもた)れに圧し掛かると、大量に怒気の溜まった意識を無理やり冷却する為に、勢い良く冷たい紅茶を体内へと流し込んだ。

（フレイアム）
「時間的にそろそろオクラホマ攻略部隊が北上を開始する頃だな。もう、いつ回収部隊からの合図があってもおかしくないぜ。ジルヴァ。」

（ジルヴァ）

「そうだな。」

ジルヴァは半分程度量を減らしたボトルを、無造作にシート後部の籠の中に放り投げると、フレイアムの投げかけた言葉に呼応するかのように、綺麗な顔立ちに統率者たる真剣な表情を浮かべた。

（ジルヴァ）

「各員共に現状陣形を保ったまま第一種戦闘配備に移行！回収部隊からの連絡が入り次第、即座に戦闘行動へと突入する！作戦は当初の予定通り、オクラホマ南方防衛守備隊に対して、遠距離からの陽動作戦を展開！敵戦車部隊の注意を引き付けつつ、北東山岳地帯へと逃走する！戦闘エリアは森林地帯及びボカージュ周辺地域のみに限定。敵戦車部隊との正面衝突は絶対に避けろよ！」

小隊長としての責務を背負い、与えられた作戦任務を、成功へと導かなければならない彼女の立場からすれば、戦力として与えられた彼等を、幾ら使い物にならないからとは言え、決して蔑ろにする事は出来ない。

ただでさえ彼女達の目の前に屯すオクラホマ南方防衛守備隊は大部隊であり、たった6機のDQを持ってして立ち向かえる相手でないことは、戦う前から解りきっている事だ。

彼女達ネニファイン別働隊に与えられた作戦任務は、オクラホマ南方防衛守備隊の注意を引き付ける為の囮攻撃を敢行する事。

そして、トゥアム共和国軍オクラホマ攻略部隊が到着するまでの間、小気味良く逃げ回って見せることである。

勿論、彼女が言葉で示す通り、帝国軍の強力な戦車部隊との直接的

交戦を展開する必要など全く無いのだが、それでも帝国軍の猛攻に曝される事になる彼女達には、少しのずれも許されない一糸乱れぬ部隊行動が必要不可欠となるのだ。

ジルヴァはＴＲＰスクリーンを通して森の中に見え隠れする、灰色に緑の迷彩を施したＤＱ「アカイナン」にチラリと視線を移すと、部隊メンバー達の緊張感を煽り立てる為に、敢(あ)えて大きな声で更なる激を飛ばした。

（ジルヴァ）
「いいか！今回私等に与えられた作戦任務は、たった一人の人間を助け出す事じゃない！大勢の仲間達の命運を背負った重要な作戦任務なんだ！いつまでもグダグダグダグダと馬鹿な会話に興じている暇は無いぞ！トゥアム共和国の未来の全ては私等の手にかかっていると思え！いいな！てめぇら！！」

（ランスロット）
「おおぅー。なんとも勇ましい限りです事。ジルヴァちゃん。俺もやるときゃやる男だって事、少しは見せてあげないとね。」

（ルワシー）
「まぁ。俺等も馬鹿やるためだけにここに来た訳じゃねぇしな。はえぇとこ暴れたくてウズウズしてらぁよ。」

（アイグリー）
「はいはい。解りましたよ。戦闘準備ね。」

彼女の抱き持った意思の全てが、彼等に正確に伝わったかどうかは別としても、彼等も生死を賭した戦いに挑むにあたり、それなりの心構えを持って挑まねばならない事は解っていた。

国家の命運を賭けた戦争と言う大きな力の流れの渦中で、彼等のようにか弱き戦士達が生き延びる為には、常に高い集中力を持続し続ける事が絶対的必要条件であり、一瞬の気の緩みが全てを無へと帰する暴力的世界を目の前にして、彼等も何の備えもなしに身を投じる勇気は無いと言うことだ。

先ほどからランスロットやルワシーが無闇に馬鹿騒ぎして見せたのも、何もこの可愛らしい小隊長をいびり倒す事が目的だった訳ではなく、それが戦闘前における彼等なりの気の紛らわせ方なのだ。

勿論、そんな彼らの矢面に立たされたジルヴァにとっては、迷惑千万極まりない話なのだが、彼女が彼等の無駄話に対して、完全無視を決め込むような態度を見せなかったのも、それを暗に察していたからなのだろう。

（ジルヴァ）
「おいユァンラオ。お前も少しぐらい返事したらどうなんだ?戦闘準備は完了したのか?」

（ユァンラオ）
「ん・・・。ああ・・・。OKだ。」

（ジルヴァ）
「ライン陣形の最左翼はお前に任せたんだ。周囲の警戒行動は常に怠るなよ。解ってんな。」

（ユァンラオ）
「ああ。・・・解っている。」

そして彼女は、ネニファイン部隊内でも一際異様な雰囲気を醸し出す謎の男「ユァンラオ・ジャンワン」に対しても、何ら臆する事無く小隊長としての言葉を投げつけた。

普段から何ら他人と関わり合いを持つ事もなく、たった一人唯我独尊の信念を貫き通すこの男は、彼女とは違った意味で周囲から疎まれる存在だが、彼がネニファイン別働隊の貴重な戦力の一人である事に変わりは無く、ジルヴァにとってユァンラオと言う男の存在が如何なるものであったとしても、決して無為に捨て置く事は出来なかったのだ。

ランベルク地方を出立してからと言うもの、古びた置物のようにその存在感をかき消していたユァンラオは、ランスロットやルワシーの吐き出す無意味な言動に対して、何ら少しも反応を見せる事は無かったのだが、この時珍しくもジルヴァの投げかけた言葉に素直な反応を示して見せた。

「貴方にも少し聞きたい事があるの。」

そんな二人の会話を、通信機越しに聞いていたランスロットは、少し唇を尖らせて誰にも聞こえないように口笛を吹いて見せた。

そして、ライン陣形を形成する部隊最右翼の位置から、ＴＲＰスクリーン越しに反対側最左翼方面へと視線を切り替えると、彼は不思議と脳裏に浮かび上がったアリミアの言葉を反芻させるのだ。

その言葉は、先に行われたディップ・メイサ・クロー作戦後に、彼女がランスロットに対して投げかけた言葉である。

ディップ・メイサ・クロー作戦において、何ら面白みの無い待機組

みに編成されてしまったランスロットは、待機任務終了後に、ランベルク地下基地のレストポート付近でアリミアと出会う事になったのだが、その後二人きりで話がしたいと言う彼女の要望から、静かな雰囲気の喫茶店で待ち合わせをする事になったのだ。

ネニファイン部隊研修時から、アリミアと言う女性に対して強い興味を示していたランスロットとしては、全く誰にも邪魔される事の無い二人きりと言う状況を、心躍るような気持ちで迎えたに違いないが、その時アリミアから真に聞きたかった内容を示されるに連れ、次第に心の中で興を削がれてしまう気分に苛(さいな)まれてしまった事を覚えている。

勿論、彼自身アリミアの話の内容に全く興味がなかった訳ではないが、出来れば彼としても「余り触れない方が良いな」と認識していた話であった。

それは、嘗てブラックポイントＤＱＡ大会で、ランスロットと同じチームに所属していた、ユァンラオ・ジャンワンと言う男についての話だ。

ランスロットから見て、彼は一体どんな人物なのか。

普段彼はどんな事をしているのか。どんな事に興味があるのか。

彼の周囲にはどんな人物が集まるのか。

それが男性なのか女性なのか。

若年者なのか熟年者なのか。等々・・・。

テーブルを挟んで真剣な眼差しで問いかけるアリミアに対し、お調子者のランスロットも、少なからず真面目に受け答えして見せたつもりだったが、彼女の問いかけの内容から総合的に導き出した一つの答えを、彼は無謀にも直接彼女にぶつけてしまったのだ。

「ひょっとして、ユァンラオの事が好きなんですか？」

ランスロットはその直後、本気でアリミアにぶん殴られそうになった事を思い出し、思わず額に滲んだ汗を拭い去るような仕草で、少しだけ表情を歪めさせた。

ランスロットから見て、このユァンラオと言う人物は、ただ一言で言い表すならば「得体の知れない人物」と言う言葉に尽きる。

勿論彼等二人は、チーム「Ｂｌａｃｋ' ｓ」と言うＤＱＡ大会屈指の最強チームに所属し、１２回に及ぶ大会総合優勝と言う栄光を勝ち取ってきた訳だが、それでも彼が、このユァンラオに対して、心の中に張り巡らせた絶対的防衛線を取り除く事はなかった。

決して誰に媚びる事なく、己の抱き持つ思いのみに忠実なこの一匹狼は、恐らく誰にも理解されない所に自分自身を置く異世界の住人。

鋭く黒光りする怪しげな視線の先に、一体何を見据えているのか見当も付かないが、上っ面だけでやり取りされる会話以上の深度まで、ランスロットは立ち入る事さえ出来なかった。

しかし、そんな相手の恐怖心を煽り立てる攻撃的防壁に包まれたユ

ァンラオに対して、事もあろうか好意を寄せて自ら近づこうとする奇特な女性がいる事も事実であり、ランスロットがアリミアに対して、先のような失言を投げかけてしまったのも、彼がそんな不思議な現象を目の当たりにしているからに他ならなかった。

「私はね。いつも自分一人の力で生きてきたから、本当に頼れる人がいないの。」

勿論アリミアには、そんな気は毛頭無いらしく、ユァンラオと言う男に対する彼女の興味心は、もっと別の所から来ているのであろう事は理解できたのだが、それでもアリミアがその本心を明かす事を拒んだ為、結局ランスロットには、何故彼女がこの危険な男の事を探ろうとしているのか、その理由まで詳しく知る事は出来なかった。

「ランスロット。出来る範囲で良いから、彼の様子を見ておいて欲しいの。そして何かあったら、直ぐに私に連絡をちょうだい。もし貴方が私の期待に応えてくれたら、私も貴方の期待に何でも応えてあげるわ。だからお願い。」

この時、ランスロットに頼み込むアリミアの表情は真剣そのものであり、ランスロットが当初の目的を完全に忘却してしまう程の、強い印象を植え付けられてしまった事は確かだ。

好意なくして相手の事を知ろうとする心理。

そこには少なからず、逆説的心の揺り動きが見て取れる。

勿論、自分から寄り付かなければ、ほとんど無害に近いこの男に対し、アリミアの方から一方的に悪意を抱いていると言う事は無いだろう。

とすれば、ユァンラオに何らかしらの危害を加えられている側・・・。

と言うことか・・・。

（ルワシー）
「ランスロット。この作戦が終わったら、またミリタリードーンに飲みに行くかぁ？」

（ランスロット）
「お、いいね。また朝まで浴びるほど飲みまくるか。ユァンラオもどうだい？いい女がいるかもしれないぜ。」

普段のお調子者振りを前面に押し出しつつ、ランスロットは以前と変わりの無い態度のまま、元チームメイトに誘いの言葉を投げかけたのだが、この時、彼からどのような返事が返されるのか、ランスロットは既に解っていた。

（ユァンラオ）
「興味がない。」

その後の会話の一切を遮断するかのように冷たく突き放す言葉。

自分の興味心をそそられる事象以外には、何ら少しも関心を寄せない不感症なる男。

そんな男が今回の作戦に自ら進んで参加を決意するなど、ランスロットも全く予想する事が出来なかったのだが、少なくともアリミア

の事を助け出そうと言う正義感に駆り立てられた訳では無いのだろう。

アリミアが本気でこの男の素性を暴こうとしていた事と、何か関係があるのだろうか・・・。

ビーッ。ビーッ。ビーッ。

（ルワシー）
「んおっ？やっと来たか？」

（フレイアム）
「予定時刻を１５分もオーバーしているな。」

すると突然、コクピット内部に鳴り響いた警告音と共に、目の前のコンソール上で緑のシグナルが激しく点滅を開始した。

勿論それは、工作員回収部隊からの最終連絡受信を知らせるシグナルであり、と同時に、ネニファイン別働隊に対する作戦任務を開始せよと言う合図でもある。

ランスロットはすぐさま、だらしなくシートの上に寝そべった体勢を起き上がらせると、勢い良く掴み取ったグローブを手に嵌めた後で、搭乗するＤＱの最終機動作業へと移行した。

（ジルヴァ）
「よし！これよりネニファイン別働隊は、オクラホマ南方防衛基地

に対する陽動作戦を開始する！レアル隊、エミーゴ隊の各員共に、エリア３５－２３までラインシフトで前進！その後はお互いに等間隔を保ったまま大きく左右に展開せよ！いいかてめぇら！絶対に遅れるなよ！ソリアス平原の夜空に、盛大な花火をド派手に打ち上げてやろうぜ！」

可愛らしい声色に乗せて下された指示を皮切りに、それまで静けさを保っていた森林地帯が一斉にどよめき始める。

そして、等間隔に綺麗に並んだ6機のＤＱアカイナンが、後部テスラポットに取り付けられた複数のバーニヤを同時に吹き上がらせると、鳴り響いた大きな爆音と共に、薄暗い闇夜の中を静かに照らし出した。

（ランスロット）
「さーてと。ほんじゃまぁ、ぼちぼち行きますか。」

アリミアの事にしても、ユァンラオの事にしても。

まずは自分がこの戦場から生きて戻ってからの話になる。

あれこれ小面倒くさい事に頭を悩ませるのは、まず目の前の仕事を終わらせてからにしますか・・・。

ランスロットは、ＴＲＰスクリーンの左端に視線を置きながら小さい呟きを発すると、ひんやりと冷たい操縦桿を握り締めて、勢い良くフットペダルを踏みしめた。

やがて、森の中に浮かび上がった綺麗な六つの篝火（かがりび）は、激しい風圧

によって周囲を吹き散らしながら、真っ暗な森の中へと姿を消していった。

０６－１２：○解れ始めた糸［３］（前書き）

なんか改行が壊れていたので修正しました。
ほんと、何ででしょう・・・＾＾；

06－12：〇解れ始めた糸［3］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１２「解れ始めた糸」

エレベータールームの直ぐ脇に設置された、指紋認証用リーダーの上に右手の人差し指を翳（かざ）すと、細く狭い通路への扉が開かれる。
そして、その通路に敷かれた真っ赤な絨毯（じゅうたん）を足元に、長い通路を抜けて歩き始めると、やがて大きく開けたドーム型広場へと突き当たった。

ドーム型広場の天井には、巨大なシャンデリアが吊り下げられており、豪勢な光を持ってして周囲の風景を薄っすらと照らし出していた。

壁際に素っ気無く置かれた４体の高級鎧飾りは、今にも動く出しそうな程の異様さを滲（にじ）ませ、まるで来訪者を品定めしているかのようにも見受けられる。

全く人の気配を感じないその広場には、東西南北四方向に伸びる細い通路への入り口があり、その通路で区切られた四区画に、他国から招かれた要人達が使用する、最上級の設備を整えた高級宿泊施設が用意されていた。

ここ、オクラホマ都市内における最高級ホテル「サイレンス・タワー」最上階は、要人達の身の安全を確保する為の様々なセキュリティシステムが完備されており、関係者以外は絶対立ち入る事が出来ないように設計されている場所だ。

ビナギティア国外交団の長「ヴァラジン・オーム」大佐が使用する宿泊施設は、そんな強固な防御システムに守られた一角に存在していた。

ふぅー。

アリミアはふと、宙を舞う綺麗なガラス細工の造形物から視線を外すと、南側に抜ける通路の奥を見据えながら大きく息を吐き出した。

そして、通路の奥へと続く赤い絨毯（じゅうたん）をなぞる様にゆっくりと歩き始め、やがてその先に見えた部屋の扉に鋭い視線を突き刺して表情を強張らせた。

「今夜のパーティーは３０分遅れて開始」

それは、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国と、ビナギティア国との間で開催された国家間会議の後、彼女の先輩秘書官であるマキュリアーニから、手渡された紙切れに記載されていた短い一文だ。

勿論、その文章の指し示す内容が、予定より３０分遅れて開催される事になった、晩餐会（ばんさんかい）を指し示しているのではないと言う事を、アリミアは直ぐに理解したのだが、それでもマキュリアーニが去り際に残した衝撃的発言について、何らかの詳細説明が書いて有るのではないかと期待していた。

しかしそこに、アリミアの望む様な真実を示す言葉は一切無く、彼女はその後、秘書官としての最後の仕事をこなす為に与えられたホテルの小さな一室で、一人悶々（もんもん）とした二時間を過ごす

羽目になってしまった。

確かに秘密裏に推し進められるべき陰謀の内容を、物理的文字として紙に書き出す事など、危険極まりない行為に他ならないが、何ら詳しい状況説明もしないまま、ヴァラジン大佐の秘書官以上に難解な役柄を与えるなど、それこそ無謀にも等しい危険な行為では無いのだろうか。

彼女は一体、私に何を望んでいるのだろうか・・・。

アリミアはふと、左手首に付けた煌(きら)びやかな腕時計へと視線を落とすと、辿り着いた部屋の扉の前でしばし立ち止まる。

そして、決してそうとは悟られないようにして、しきりに周囲の気配を窺(うかが)うと、短銃を忍ばせたドレススーツの左胸付近へと静かに右手を宛がった。

この時既に時計の針は２０時３５分を回っている。

時間的には、そろそろトゥアム共和国軍のオクラホマ攻略部隊が北上を開始する頃であろう。

マキュリアーニから齎(もたら)された情報が正確なものだとすれば、オクラホマ都市で勃発する武装決起は、２１時３０分頃に予定を繰り下げられると言う事になるが、オクラホマ都市にある主たる軍事施設への破壊工作任務を背負うアリミアにとって、それほど多くの時間が残されていた訳ではない。

トゥアム共和国軍の作戦が予定通り実行されるとすれば、オクラホマ攻略部隊がナルタリア湖付近を通過するまで、残り二時間を切ったと言う事であり、同部隊の負担を極力減らす事を目的とした彼女達工作員には、出来る限り早い段階での作戦任務を開始する必要があったのだ。

勿論、彼女達が破壊工作任務を敢行するに当たり、武装決起による混乱に乗じる事が、作戦任務を成功させる最良の方策となる為、そのタイミングを蔑ろにしてまで、機動的行動を追求する事は出来なかったのだが、それでも過酷な作戦任務を直前に控えたアリミアには、いつまでも秘書官たる立場を演じている余裕などなかったのである。

「晩餐会が終わったら大佐の部屋まで来て。今夜そこで大佐の身柄を拘束するわ。貴方にはそれを手伝って欲しいの。」

このマキュリアーニと言う女性が何を企んでいるにしろ、帝国との友好的関係を目指すビナギティア国政府の思惑に相反し、トゥアム共和国の計画に加担する態度を固持している事からも、突然アリミア達の行動を阻害するような暴挙に転じる可能性は低い。

勿論、その全てを理論的に構築した言葉で説明付ける事は出来ないが、彼女はビナギティア国側の人間でもなく、帝国側の人間でもないと言う立ち位置にいる事は確かだ。

ただ、彼女が完全にトゥアム共和国側の人間なのかと言えばそうでは無く、彼女にとってトゥアム共和国は利用すべき道具の一つに過ぎない存在である事は間違いはない。

とすれば、その答えとなる真実はたった一つ。

それは、帝国の不利益を望み、トゥアム共和国のオクラホマ攻略作戦の成功を願う者。

逐一有益な情報を齎す彼女自身が、武装決起軍の一員であると言う事だ。

チリン。チリン。

アリミアは古典的な鈴の音を奏でる呼び鈴を二回ほど押すと、人気のない通路の中で一人、静かに返事を待った。

確かにマキュリアーニが、武装決起軍の一員である可能性は非常に高い。

彼女を取り巻く複雑な情勢下において、敢えて彼女の立場を各陣営に配して考察してみれば、最後に辿り着く結論は「そこ」以外に存在しないだろう。

しかし、彼女が武装決起軍の一員であったとして、何故ヴァラジン大佐の身柄を拘束すると言う行為に及ぶ必要があるのだろうか。

帝国に友好的な態度を示すビナギティア国に対して、何らかの圧力をかけるつもりなのだろうか。

そして、何故そこに私を必要としたのだろうか。

やがて部屋の扉のロックが外れる音が通路内に響き渡ると、少しだけ開いた扉の隙間からマキュリアーニが顔を覗かせる。

そして、通路左右に人影が無いことを注意深く見渡した後で、扉の直ぐ傍に立っていたアリミアの顔色をマジマジと覗き込みながら、静かに殺した小声でこう言うのだ。

（マキュリアーニ）
（来たわねクリス。その様子だと、部屋で色々と考え込んでいた見たいね。それで？答えは見つかったのかしら？）

（アリミア）
（・・・・・。いいえ。）

アリミアは少し何かを考え込むような素振りでマキュリアーニから視線を逸らすと、不意に怪訝（けげん）そうな表情を浮かべて短くそう答えた。

アリミアの脳裏には、それまで様々な視点から考察する事で導き出した、ある程度具象化された答えが存在していたのだが、それもまた確実性に欠けた推論に過ぎない事を自覚していた。

（マキュリアーニ）
（そう・・・。ごめんなさいね。私も貴方の事を完全に信用していた訳じゃないし、さっき貴方が居た部屋に盗聴器を仕掛けさせてもらったの。気付いていた？）

えっ・・・？？

アリミアは一瞬、密かに奏でた驚きの声を心の中に響かせて、マキュリアーニの表情を覗き込んだ。

彼女が放つ言葉は、事あるごとに鋭い懐疑的(かいぎてき)刃となってアリミアの心に突き刺さり、まるで全く出口の見えない迷宮の上に、更に難解な迷宮を重ね置かれて行くような、そんな嫌悪感すら抱くものである。

勿論それは、アリミアがこの女性に対して、心から信頼を寄せるような思いに至らないと同時に、彼女もまたトゥアム共和国の工作員であるアリミア達の事を、完全には信用していないと言う事の表れなのだろう。

今回に限らず、ずっと何か探りを入れられていた・・・。と言う事なのかしら・・・。

（マキュリアーニ）
（クリス。私が思うに、私達は決して敵同士じゃないと思うの。お互いの目指すべきものは違っても、歩む道筋は恐らく一緒だわ。そう思わない？）

（アリミア）
（・・・そう願いたいものね・・・。）

（マキュリアーニ）
（貴方がまだ私の事を信用できない気持ちも解る。でも私一人では失敗する可能性もあるし、どうしても貴方に手伝って欲しいの。貴方に迷惑はかけないわ。作戦任務開始前には終わらせるつもりだか

ら。）

マキュリアーニはそう言うと、徐に部屋の扉を大きく開け放ち、アリミアを中へと誘うように小さく首を傾げてみせる。

そして、今だ疑心暗鬼に揺れ動くアリミアに対して、静かに愛くるしい微笑みを投げかけるのだ。

ほのかに涼しげな空気の漂うその部屋は、如何にも高級そうな家具や装飾品で彩られた異世界のようでもあり、何処か異様な雰囲気を感じさせる濃密な黒い霧が立ち込めているようにも見える。

アリミアはこの時、答えを見つけることも出来ない思考の渦へと、再び意識を埋没させてしまいそうになったが、一つ大きく息を吐き出すと、彼女の誘いに従うように、ゆっくりと部屋の中へと足を踏み入れた。

（マキュリアーニ）

（中に入ったら私の行動に合わせて大佐の行動を抑止して欲しいの。後は私の言う通りに従って。）

ビナギティア国内でも有数の権力者ヴァラジン・オームが今夜宿泊するその部屋は、入り口となる扉を開くと、まず縦二階分に相当する大きな部屋が来訪者達を迎え入れる。

部屋の天井からは、もはや当然のように巨大なシャンデリアがぶら下げられ、柔らかな絨毯に描き出された無数の文様を綺麗に浮かび上がらせていた。

そして、部屋の中央部に置かれたテーブルの周囲には、お洒落なデ

ザインを施した椅子が6つ並べられており、その各々の椅子が指し示す方角には更に6つの部屋が用意されていた。

アリミアはふと、目の前を歩いて行くマキュリアーニの後ろ姿に視線を宛がうと、テーブルの直ぐ傍で一旦その足を止めた。

彼女の目論見が如何なるものであったとしても、作戦任務開始直前となる現時点において、もはや私が秘書官たる立場を突き通す理由などどこにもない。

もしここで彼女が私達を裏切るような行為に及ぶなら、さっさと彼女を始末して自分の任務へと立ち返ればよいだけの話だ。

勿論、これまで献身的に私達の為に行動してきた彼女が、無為にその全てを投げ出すような真似はしないだろうし、彼女が私達に対して疑いを持っていたのだという本心を明かした以上、それなりに私達の事を信用したという意味なのだろう。

やがてアリミアは、一番右手奥側の開いた扉の中へと姿を消した、マキュリアーニの後を追う様に再び歩き始める。

そして、恐らくはヴァラジンの寝室であろう部屋の中へと足を踏み入れると、目の前のソファーに座る大柄な男へと視線を据え付けた。

（ヴァラジン）

「おや？クリスティアーノ秘書官。まだこんな所に居たのか。もうランズメアリーへ出発した後だと思っていたのだがな。時間の方は大丈夫なのか？」

すると、並々とブランデーの注がれたグラスを片手に、美しき新人秘書官の姿を見上げたヴァラジンが、少し驚いたような声色でそう問いかけた。

彼は既に、その日予定されていた公務の全てを終了させ、後はもはや寝るだけと言うバスローブを羽織った状態だったが、晩餐会と言う名の外交業務に忙殺されて、少々飲み足りなかったのか、就寝前の安らかな一時で軽く飲み直している様子だった。

（マキュリアーニ）
「はい。ランズメアリーへの最終便にはまだ間に合う時間です。私がここに呼び寄せました。」

（ヴァラジン）
「まさか今から明日以降の打ち合わせを始めようと言うんじゃないだろうな。酔った私が翌朝まで記憶を維持できない事ぐらい、君も知っている事だろう？面倒事は全て明日の朝にしてくれないか？」

（マキュリアーニ）
「申し訳ありません大佐。事は急を要するもので、仕方なく・・・。」

マキュリアーニは柔らかな口調でそう答えると、ソファーに座るヴァラジンの傍までゆっくりと歩み寄る。

そして、固く表情を強張らせたまま小さなポーチの中へと右手を入れると、徐に中から取り出した短銃を、静かに彼の頭部へと突きつけた。

もう、後戻りは出来ないのね・・・。

アリミアもまた、彼女の行動にタイミングを合わせるようにして、ドレススーツの左胸内側から短銃を引き抜くと、素早くヴァラジンへと目掛けて銃口を構えた。

（マキュリアーニ）
「現時点を持って、大佐の命を私に預けていただきます。どうかご容赦くださいませ。」

この時ヴァラジンは、決して悪い冗談では無いのだという事を指し示すマキュリアーニの真剣な表情に、少し驚いたような表情を浮かべたが、やがて鋭い眼光の奥底に背筋が凍りつきそうな程冷たい業火を宿す。

そして、徐に周囲の気配を探るような素振りを見せると、マキュリアーニと少し離れた位置に陣取ったアリミアの方に一瞬だけ視線を宛がい、手に持つグラスのブランデーを一気に飲み干して見せた。

（ヴァラジン）
「君達二人だけかね。」

（マキュリアーニ）
「はい。」

（ヴァラジン）
「そうか。」

ピリピリとした肌を刺すような殺気を部屋中に吐き散らしながらも、静かな口調でそう問いかけるヴァラジンは、咽(むせ)びくように大きく息を吐き出して、空になったブランデーグラスをテーブルの上へと置く。

そして、テーブルの隅に置いてあったアイスペールから、新たなる氷を2、3、グラスの中に放り入れると、ゆっくりと綺麗な外形をしたブランデーボトルへと手を伸ばした。

（ヴァラジン）
「君と出会ってから、もう何年になるかな。」

（マキュリアーニ）
「もう7年になります。大佐。」

（ヴァラジン）
「そうか。もうそんなに経つのか。時が過ぎ行くのは存外早いものだな。」

（マキュリアーニ）
「はい。」

（ヴァラジン）
「あの頃の君は、まだ学校を出たばかりの駆け出しの若輩者だったが、今となっては決して欠かすことの出来ない私の第一秘書官だ。これまで色々と苦労が絶えなかったと思うが、君も立派な大人の女性に成長したものだ。」

（マキュリアーニ）
「今の私が有るのも、全て大佐のおかげです。本当に大佐には感謝

の言葉もありません。」

グラスの中で今だ溶け切らぬ氷と、大量に降り注ぐ褐色（かっしょく）の液体とが奏でる心地よい音が、甘く濃密な香りに乗せて部屋中に染み出していく中、静かに二人が会話を続ける。

それは決して相手の抱き持った真意に、直接強く問いかけるようなものではなかったが、それでもそれが、長年連れ添った者同士が奏でる、対話への入り口である事は確かだった。

アリミアはこの時、屈強な体躯を有するこの大柄な男と、激しい格闘戦を余儀なくされるのではないかと予想していたのだが、並々と酒を注いだブランデーグラスを手に取り、ゆったりとソファーに凭（もた）れ掛かったヴァラジンには、全くその気は無かったようだ。

相手が華奢な女性二人だけとは言え、二つの銃口を二つの方角から同時に突きつけられて尚、全くそれを意に介する様子も見せないヴァラジンの素振りからは、相当酒に酔っているようにも見受けられたが、マキュリアーニは決してヴァラジンに対する態度を軟化させる事はなかった。

やがて、しばしの無言の時を経て、徐に視線を交わした二人が、新たなる言葉を発し始める。

アリミアはじっと、そんな二人の奏で出す二人だけの世界の中に浸り、幾重にも折り重なる難解な真実への道筋を歩み始めた。

０６－１３：〇解れ始めた糸［４］（前書き）

話の後半で、マキュリアーニがその目論見を語る言葉の中に、彼女の思いが少しだけ抜けていたので付け足しました。彼女がシナリオを語る部分です。
書き直しまくった挙句の脱文ですＴＴ

06－13：〇解れ始めた糸［4］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１３「解れ始めた糸」

（ヴァラジン）
「私は君の事を良く知っている。非常に頭のよい女性だと言う事も。思いやりのある優しい女性であると言う事も。そして、決して目先の利益だけに囚われて、このような暴挙に及ぶ女性では無いと言う事もな。」

（マキュリアーニ）
「はい。」

（ヴァラジン）
「君は一体何をしようと言うのだ？まさか帝国の連中に私の事を捕らえろと、命令された訳じゃないのだろう？」

（マキュリアーニ）
「大佐・・・。私がこれから話す内容をどうか最後まで聞いてください。そして、私の事を信じて、私の指示に従ってください。」

（ヴァラジン）
「・・・・・・。解った。とりあえず話を聞こう。」

（マキュリアーニ）
「はい。ありがとうございます。実は私達はロイロマール公爵を救い出す為に立ち上がった義勇兵です。今夜ここオクラホマ都市で武装決起を敢行します。」

（ヴァラジン）
「武装決起だと・・・？それは本当なのか？」

（マキュリアーニ）
「はい。大佐。もう間もなく決行の時刻を迎えます。」

そう・・・。
そこまでは私にもある程度予測できた事。
やはり彼女は武装決起軍の一員だったと言う事か・・・。
しかし、ヴァラジンに銃口を突きつけながら、自分の事を信用して欲しいなどと、一体何を考えているのだろうか・・・。

（ヴァラジン）
「すると君達二人は、元々ロイロマール派の人間であり、ロイロマール公爵を助け出す為に、敢(あ)えて力による強引な奪還を目指す、刹那主義(せつなしゅぎ)の無頼漢(ぶらいかん)と言う事か。君とは長い間共に仕事をしてきたが、まさかそこまでロイロマール公に忠義を誓った人間だとは知らなかったな。いや、それとも、何か別の目的を持って同じ道筋を辿る、支援者と言う事なのかな。」

（マキュリアーニ）
「真実を明かせば私は後者。クリスは前者と言う事になります。」

私が前者？
私に武装決起軍の一員として行動しろと言う意味なのかしら。

（ヴァラジン）
「投獄されたロイロマール公爵の身を案じているのは何も君達だけじゃない。私とてロイロマール公爵を出来るだけ早期に救い出して

やりたい気持ちがある。確かに帝国最高評議会の定めた法に触れ、それを犯した罪でその身を拘束されるロイロマール公爵を、救い出す事は決して容易な事ではないが、だからと言って、事もあろうか武力を持って開放しようなどと、聊か思慮に欠ける暴挙と言えるのでは無いかな？先のブランドル地方における武装決起軍が、一体どのような結果を齎したのかを考慮すれば、決してそのような軽率な行動を取る事は出来ないはずだがな。」

（マキュリアーニ）

「今回の武装決起軍に参加する義勇兵の多くは、ロイロマール派の兵士達であり、彼等にはもはや、それほど多くの時間的猶予が残されていないのです。帝国国内を牛耳るストラントーゼ派の人間は、ロイロマール公爵を処刑する為の事前準備として、大佐のようにロイロマール公爵を支持する者達を、秘密裏に消し去る事を計画しています。それに対して彼等が何の対策も取らず、事態の改善をただ待っている事は、自分達自身の首を絞める行為に相当します。そしてそれは、ロイロマール公爵の死期を早める事にもなりましょう。彼等には決して折れることの無い強い意思を持って、常にストラントーゼ派の人間達対して、脅威を成すべき存在である事を示し続けなければならないのです。」

（ヴァラジン）

「その脅威を示すべき行為が武装決起か。同じ過ちを何度繰り返しても、解らぬ者には解らぬものだな。人間切羽詰った状況下では、往々にして正しい判断に事欠くものなのだよ。」

（マキュリアーニ）

「ロイロマール派の人間達は、ストラントーゼ派よる厳しい弾圧行為により、思った以上に疲弊しきっています。彼等は自分達の力が完全に衰退しきる前に、何かしら行動を起こしたかったのでしょう。

それだけブランドル地方で吊り上げられた仲間達の敗北が、彼等にとって大きかったと言う事になります。」

（ヴァラジン）
「君はあのブランドル地方での武装決起事件が、ロイロマール派の人間達を消し去る為に、ストラントーゼ派の人間が目論んだ陰謀であると言いたいのか？」

（マキュリアーニ）
「はい。ほぼ間違いありません。ブランドル地方における武装決起事件においては、我がビナギティア国に対しても、帝国側から正式な説明がなされていませんが、ブランドル地方の戦闘に参加したと言う兵士の一人が言うには、完全にその行動を相手側に察知されていた節があるとの事です。」

（ヴァラジン）
「ふーむ。・・・。」

なるほどね・・・。今回のオクラホマ都市武装決起の背景にはそんな舞台裏があった訳か。
ブランドル地方で発生したと言われている内戦から、ロイロマール派の勢力が急激に衰退したとは聞いていたけど、まさかそこまで逼迫した状況に追い込まれていたとは・・・。
オクラホマ都市の武装決起に関して、諜報部がかなりの自信を持っていたのも、そんなロイロマール派兵士達の動きを察知したからなのだろうか。
いえ・・・。それは少し違うわね・・・。
トゥアム共和国が自力で今回の武装決起を察知したのだとしても、完全に他国であるビナギティア国、それもヴァラジン大佐の秘書官がそれに関わっているなど、簡単に突き止められる事実ではない。

マキュリが私に疑いを抱いていた事からも解る通り、彼女自身がトゥアム共和国に情報をリークしていたと言う線は消えた。
すると他の誰かが、トゥアム共和国に情報を漏らしたと言う事なのだろうか。

（ヴァラジン）
「それで?君がその武装決起軍に加担する理由は何だ?先ほどの回答からすると、君はクリスティアーノ秘書官とは別の目的を持っているようだが、私に銃口を向ける事と関係あるのかな?」

（マキュリアーニ）
「武装決起軍の要求は、ロイロマール公爵の身柄引き渡しと、ブランドル地方での戦闘で捕虜となった仲間達の解放です。実はブランドル地方における武装決起事件には、私の弟が参加していました。弟は今、帝国軍の捕虜として、ルーアン地方の収容所に囚われています。」

（ヴァラジン）
「弟を助け出す為に、君は自分自身の全てを投げ捨てるつもり。・・・と言うことか。」

（マキュリアーニ）
「はい。私はこれまで、帝国国外から武装決起軍の為に、様々な支援活動を行ってきました。本当は私も、本日の会議が終了した時点で、武装決起軍に身を投じる覚悟でした。」

（ヴァラジン）
「その決意を取り下げてまで、私に銃口を向ける事を選んだと。」

（マキュリアーニ）

「はい。大佐。余り時間が無いので単刀直入に言います。先ほど申し上げた通り、武装決起に参加する義勇兵の多くが、ロイロマール派の元兵士達であり、高い志を持ちながらも、ブランドル地方での敗北から、それを成すべき手段と、生きる希望を奪われた悲しき戦士達です。しかし今回、そんな彼等に再び立ち上がるための強い希望を与えた人物がいます。その人物は、ロイロマール公爵と非常に親密な関係を持つ人物であり、周囲からの信頼も厚い偉大な人物です。彼等はその人物の名の元に集い、再び戦う事を選んだのです。」

（ヴァラジン）
「ほーう。凄い人物だな。それは誰だね？」

（マキュリアーニ）
「その人物は・・・。ヴァラジン大佐。貴方です。」

カラン。

この時、ヴァラジンの手に持つグラスの中で、少しばかり溶けた氷が居場所を失い、小さな音と共に崩れ落ちた。

えええええっ！？
今回のオクラホマ都市武装決起を誘発する人物が、このヴァラジン大佐本人ですって！？
まさか！？

（ヴァラジン）
「馬鹿な！！その武装決起軍の首謀者が私だと言うのか！？私は確かにロイロマール公を支持する人間の一人だ！しかしだからと言って、帝国との友好的関係を悪化させるような、暴挙に加担できる立場ではない！！何かの間違いではないのか！？」

（マキュリアーニ）
「いいえ。事実です。ただし、表向きの黒幕は・・・。と言う事になります。」

（ヴァラジン）
「表向きの黒幕だと・・・？・・・。表向きの・・・。」

表向きの黒幕・・・。
と言う事は、ヴァラジン大佐は武装決起軍の首謀者として祭り上げられた被害者・・・と言うことか。
武装決起軍の狙いは、ロイロマール公爵を救出する為のもの。
ロイロマール公爵と関わりの深かった者を陥れる事を主目的とするのであれば、何も首謀者はヴァラジン大佐で無くとも良かったはず。
ビナギティア国随一の権力者ヴァラジン・オームに焦点を宛がい、彼を優先的に排除しなければならない理由とは何なのだろう・・・。

（ヴァラジン）
「私が表向きの黒幕だとするならば、真の黒幕は一体誰なのだ！君はその人物の素性を知っているのか！？まさか君はその人物に頼まれ、私の事を失脚させようと目論む輩なのか！？私の名を語り、兵力をかき集めるだけかき集めた後で、必要がなくなったから処分する。そう言うことなのか！？」

（マキュリアーニ）
「いいえ。それは違います。私が大佐の身柄を拘束しようと思ったのは、大佐の為を考えての行動なのです。真の黒幕が一体誰なのかと言う事実は、私にも今だはっきりとした確証を得る事が出来ていませんが、大佐の身を陥れようと陰謀を巡らす危険な存在である事に間違いありません。確かに私は、幾ら弟を助け出す為とは言え、

大佐の名が利用されていると言う事実を知りながらも、黒幕たる人物に加担し続けた、自分勝手で我儘（わがまま）な女です。でもこれだけは信じてください。私には元々、大佐の事を陥れようなどと言う考えが有った訳ではありません。」

（ヴァラジン）
「では何故、君は事前にその人物の陰謀を知りながらにして、その事実を私に知らせなかったのか。それ自体が私を陥れる行為に相当するのではないのか？」

（マキュリアーニ）
「勿論、私がその事実を大佐に告げなかったのは、武装決起の成功を第一優先に考えたからです。その事実は決して否定しません。ですが、私がその事実を知ったのは、極最近の事なのです。その時点で既に、大佐の名の元に立ち上がった数多くの兵士達がオクラホマ都市へと集結しており、幾ら大佐にその意思が全く無かったからとは言え、大佐の名の元に集結した彼等が何かしらの問題を起こせば、全ての疑いは大佐自身に降りかかると言う状況が作り上げられていました。」

（ヴァラジン）
「ううむ・・・。」

（マキュリアーニ）
「今回の武装決起事件に関しては、前々から用意周到に練られた作戦であり、その時点では既に、後戻りする事など出来ない状況にまで至っていました。もし大佐がその真実を知り、彼等の武装決起を食い止めよう試みたところで、ロイロマール公爵を助け出す為に、集まった兵士達がそれを思い止まるでしょうか？逆に統制を失って暴走し、破壊と暴虐の限りを尽くす狂戦士と化す恐れもあります。

恐らく真の黒幕の目論見は大佐を陥れる事のみであり、決して武装決起を成功させる事などではないのだと私は推測します。」

これだけ事前に仕組まれた大規模な武装決起を、成功させる事が目的ではない？
ヴァラジン大佐を陥れる為だけに、態々（わざわざ）こんな大掛かりな陰謀を巡らせたと言うの？

（ヴァラジン）
「その黒幕は私を失墜させて、一体何を仕出かそうというのだ！私が帝国国内で発生した武装決起事件に関与しているなどと知れれば、帝国が黙っているはずが無い！帝国とビナギティア国との関係悪化を目論む輩達の仕業なのか！？」

（マキュリアーニ）
「恐らくその線で大筋合っていると思います。しかし、今回の武装決起事件に関する真の首謀者は、案外身近な場所に存在しているではないかと疑っています。」

（ヴァラジン）
「身近な場所にだと？・・・。ビナギティア国内に、そんな大逸れた陰謀を目論む輩が居ると言うのか君は！？」

（マキュリアーニ）
「はい。私はこの武装決起に大佐の名が利用されている事を知った後、直ぐにその黒幕が誰なのか調査を始めました。今だ確かな物的証拠や証言などは掴めていないのですが、恐らくはその人物が黒幕である可能性が非常に高いです。」

（ヴァラジン）

「それは誰だ!?私も知っている人物なのか!?」

（マキュリアーニ）
「その人物は武装決起軍への多額の資金を提供していた張本人で、常に何かと黒い噂の耐えない若手の政治家です。ビナギティア国内で最近急激に力を伸ばしつつある新興勢力のリーダー。大佐がいつも「礼儀を知らぬ若造」と称す人物と言えば、もうお解りでしょう。」

（ヴァラジン）
「ヒルクライムの奴か・・・!!」

ヒルクライム?
聞いた事の無い名前だ・・・。
ビナギティア国の政治家であると言う彼が、ヴァラジン大佐を失脚させる事を目論んでいた・・・。
それは解るが、ビナギティア国の政治家が、態々（わざわざ）帝国との関係を悪化させるような陰謀を巡らせるであろうか・・・。
もし事が公になれば、ビナギティア国もトゥアム共和国と同じように、帝国に対して開戦の口実を与えてしまう事にも成りかねない。
・・・?トゥアム共和国と同じ・・・?

（マキュリアーニ）
「勿論、確かな証拠はありません。ですが、今も調査を続ける私の友人の話によれば、彼が帝国の人間と頻繁に密会している事は事実です。そして彼の率いる新興組織「ボルテアス」の幾つかの隠し口座で、不透明な資金操作が行われている事も確認済みです。」

（ヴァラジン）
「奴は一体何を企んでこの私を・・・!!奴はビナギティア国を滅

ぼすつもりなのか・・・！？」

（マキュリアーニ）
「彼が武装決起事件に関する真の首謀者であったとしても、恐らくそれは更にその裏に存在する、大きな黒い影の傀儡に過ぎないのかも知れません。」

（ヴァラジン）
「・・・。と言うと・・・？更にヒルクライムを裏で操る人間がいるとでも・・・？」

（マキュリアーニ）
「勿論、本当の真実は今だ闇の中ですが、何かおかしいと感じませんでしたか？晩餐会の途中で王都ルーアンから緊急招集がかかり、途中で退席した人物達の顔ぶれを。」

（ヴァラジン）
「・・・。まさか・・・！彼等・・・！帝国が今回の武装決起事件に関与していると！私には帝国に叛意を成すつもりなど無い！帝国との友好的関係を維持し、北ムーンスローブ大陸の平和の為に、これからも死力を尽くそうと志しているのだぞ！」

（マキュリアーニ）
「我々ビナギティア国が友好的な関係を築き上げてきた者達は、その多くがロイロマール派の人間達であり、現在帝国の実権を握っているのはストラントーゼ派の人間達です。トゥアム共和国がロイロマール公爵に加担する叛徒として扱われ、帝国との開戦を余儀なくされた事実からも、その可能性を完全に否定する事は出来ません。彼等にとって、ビナギティア国と言う存在自体が、ロイロマール公爵を支持する叛徒達の集まりとして捉えられているのだとしたら・・

・。」

（ヴァラジン）
「ううむ・・・。確かに君の言う通り・・・。その可能性は否定できないが・・・。しかしそれでも、それは余りに飛躍しすぎた妄想に類するのではないかね？」

（マキュリアーニ）
「そうですね。私もその全てが杞憂に終われば良いと思っています。でもこれだけは心得ていてください。常に民衆の為に。常に平和維持の為に。その大佐のお考えはご立派ですが、それを疎ましく思う輩も存在するのだと言う事を。人それぞれに考え方があるこの世の中で、全ての人間が平和を望んでいるとは限らないのです。」

確かにトゥアム共和国が帝国と開戦を余儀なくされたのは、ロイロマール公爵に加担する叛徒として扱われた為だ。
帝国は更にビナギティア国に対しても、皇帝に仇成す叛徒としてのレッテルを貼り付けるつもりなのだろうか。
トゥアム共和国の時もそうだったが、帝国はその先に何を見据えていると言うのだろう・・・。

（マキュリアーニ）
「勿論、事の真相は私にも解りません。数々の陰謀を解き解し、その真実へと辿り着くまでには、まだ多くの時間を必要とするでしょう。大佐には今後ともビナギティア国の為に、色々と尽力していただかなければなりません。こんな所で簡単に失脚してもらう訳にはいかないのです。」

（ヴァラジン）
「・・・。うーむ。・・・君の思いは解った。勿論、それなりにだ

がな・・・。しかし、君達が何故私に銃口を突きつけているのか。その肝心な部分の説明が今だなされていない。君達に囚われる事になった私に、君達が望む事とは何だ？勿論、今回の事象に対して様々な思考を巡らせて来た君の事だ、それなりに考えが有っての事なのだろう？」

（マキュリアーニ）
「はい。大佐。大佐にはこの後、睡眠薬を飲んで頂き、直ぐに眠りについてもらいます。」

（ヴァラジン）
「睡眠薬・・・？・・・それで？・・・君はどうするつもりなのだ？」

（マキュリアーニ）
「ご心配なさらずに大佐。これは大佐にかかる疑いの目をできるだけ少なくする為の措置です。大佐の秘書官である私自身が、武装決起を成功させる為に大佐の名前を利用した。そして、ブランドル地方で囚われた仲間達との人質交換に利用する為、大佐の身柄を拘束する事を目論み、飲み物の中に睡眠薬を仕込ませ眠らせた。・・・と言うシナリオです。勿論、それによって大佐への疑いが、完全に払拭できる訳ではありませんが、それでも武装決起事件の発生時刻に眠りについていたとなれば、大佐自身が自ら進んで武装決起事件に関与したのではないと言う事実を、信じる者も出てくるでしょう。」

（ヴァラジン）
「君は本当にたった一人で、この私を救おうと言うのか？」

そうか・・・。ようやく飲み込めた。

マキュリがヴァラジン大佐を拘束すると言った意味が。
彼女は弟を助け出す為に、今回の武装決起軍に加担する事を決意した。
武装決起軍の目的は、ロイロマール公爵の身柄引き渡しと、ブランドル地方で囚われたロイロマール派兵士達の解放。
しかしそこで、実際に武装決起軍を手引きする黒幕の陰謀を知り、秘密裏に大佐を助け出す事を思い立った。
マキュリが私に疑いを持っていたのは、トゥアム共和国自身がヴァラジン大佐を陥れる為の陰謀に加担しているのでは無いかと勘ぐった為。
そしてマキュリは会議終了後、私にその目論見をわざと明かしてみせる訳ね。
私がもしヴァラジン大佐を陥れる側の人間であれば、必ず何かしらそれを阻害する行動に出るだろうと予測し、その黒幕たる人物に繋がる情報を少しでも入手しようと、私の居た部屋に盗聴器を仕掛けた。
勿論、オクラホマ軍事空港への破壊工作任務以外に、なんら情報を与えられていなかった私には、彼女の望むような振る舞いは出来なかったが、それによって彼女は、私が自分の敵では無いと言うある程度の確信を抱いたと言う事ね。
ヴァラジン大佐の身柄を拘束する現場に私を立ち合わせたのは、恐らく彼女の言う通り、ヴァラジンと言う屈強な大男を前に、一人ではその行動を抑止しきれない可能性もあったからなのだろう。
それにしても、そんな重要な目論見の中に、全く関係の無い、しかも他国の工作員を参加させるなんて・・・。
いえ、それだけ彼女には、真に信用できる仲間が少ないと言う事なのか・・・。

（マキュリアーニ）
「ええ。今の私があるのも大佐のおかげです。私はそんな大佐の為

に、少しでも大佐の助けとなる為に、毎日必死に働いて来たつもりです。そして本当はこれからも・・・。・・・・・・・。でも・・・。私の仕出かした行為の全ては犯罪行為に当たります。恐らくはもう、大佐と一緒に仕事する事も無いでしょう・・・。これが私の最後の仕事です。大佐。」

（ヴァラジン）

「マキュリアーニ秘書官・・・。」

それにしても彼女は、これだけ事の真実をヴァラジン大佐に明かしながら、何故トゥアム共和国の存在を隠し通しているのだろうか。今回の一件にトゥアム共和国が関与していると、何か不都合でも生じるのだろうか？

確かにトゥアム共和国が、オクラホマ都市武装決起事件の真相を知りながらも、今回の作戦を敢行したのであれば、それはそれで大きな問題に発展するが・・・。

まさかトゥアム共和国はその事実を知っていて・・・。

いえ・・・。それは無いわね。

トゥアム共和国にとって、ヴァラジン大佐を失脚させる事に何の意味も無いもの。

寧ろロイロマール派支持者の彼には、帝国の大きな障害として生き続けて欲しいと願っているはずだわ。

ビナギティア国側としても、帝国との友好的関係を維持したい考えとは言え、無為にトゥアム共和国と対立する事を望んでいるはずも無いし。

とすれば、両国が対立するような火種を、少しでも消したかった・・・。

と考えるのが妥当か。

（マキュリアーニ）

「大佐。今回の件が落ち着いたら、私の友人である「ライーザ」と言う女性を訪ねてください。今頃何か新しい情報を掴んでいるかも知れません。彼女は私の弟が囚われている事を知らせてくれた人物であり、今回の武装決起事件に私を引き込んだ張本人でもあります。しかし彼女自身も、自分の家族を助ける為に、武装決起軍に加担する事を決意した人物で、私と同じ思いを共有する仲間です。」

マキュリアーニはそう言うと、ようやくヴァラジンに向けて構えていた銃口を取り払った。
そして、可愛らしい笑みを浮かべながらヴァラジンの元まで歩み寄ると、静かにソファーの上に腰を下ろし、隣に座るヴァラジンの目の前に一粒の小さなカプセルを差し出した。

（マキュリアーニ）
「大佐。もう余り時間が有りません。これを飲んでください。」

（ヴァラジン）
「・・・・・・。」

ヴァラジンは、ふと差し出された小さなカプセルを手に取ると、それをマジマジと見つめながら静かに溜め息を吐き出した。
そして、背中にスッと左手を添えたマキュリアーニへと視線を移し、しばらくの間、不思議な静寂さの中で抱く想いを滲ませるのだ。
アリミアは、そんな二人の様子をじっと見つめていたのだが、やがてもはや必要の無くなった右手をゆっくりと下ろし、短銃をドレススーツの内ポケットへと仕舞い込んだ。

（ヴァラジン）
「本心を言えばだな・・・。私も君達と一緒に銃を手に取り、ロイロマール公爵を救い出すための戦いに参加したい気持ちがあるのだ。

君達だけに損な役回りを任せて、私は一人夢の中か・・・。」

（マキュリアーニ）
「大佐・・・。大佐には大佐にしか出来ない事が沢山あるのです。大佐の事を必要とする数多くの人達の為に、どうかこれからも末永くご活躍ください。」

ヴァラジンは、マキュリアーニの優しく語りかけた言葉が途切れると同時に、大きく開け放った口の中にその小さなカプセルを放り込んだ。
そして、長い時間放置され、氷の欠片すら見えなくなってしまったグラスを手に取り、一気に喉の奥へと流し込んだ。

（マキュリアーニ）
「クリス。もう良いわ。ありがとう。大佐。クリスはこれから武装決起軍に参加するためここを離れます。私はずっと大佐と一緒にこの部屋に残りますから、何も心配しないでください。」

（ヴァラジン）
「何っ!?眠らせた私をどこか別の場所に連れ出すつもりじゃなかったのか!?こんな所にいつまでも居たら・・・。君は・・・。」

（マキュリアーニ）
「クリスにはもう時間が有りませんし、私のようにか弱い女性が重たい大佐を一人で運ぶのは無理です。それに大佐を引きずって厳重な警備体勢が敷かれている、このサイレンス・タワーを抜け出す事は出来ませんわ。」

（ヴァラジン）
「君はまさか・・・。ここで死ぬつもり・・・。のか・・・。」

やがて、強力な効き目を有した睡眠薬の効果により、次第に意識が朦朧としてきたヴァラジンが、床の上にグラスを落としたその手を、必死にマキュリアーニへと伸ばした。

（マキュリアーニ）
「私は大佐が武装決起軍に囚われているのだと言う決定的証拠を掴まれるまで、大佐の元を離れる訳にはいきません。ですが大佐。私はこう見えても昔は足が速かったんです。大丈夫ですよ。だから安心してお休みになられてください。」

（ヴァラジン）
「そ・・・。・・・。」

マキュリアーニ・ビジクタシュ。
ビナギティア国きっての権力者ヴァラジン・オームの第一秘書官にして、卓越した戦略眼と行動力を兼ね揃えた恐るべき女性。
彼女が然るべき立場でその手腕を振るえば、恐らくは国一つを自由に操る事が出来るほどであろう。
戦いは何も最前線でのみ発生しているわけではない。
彼女のように、銃や剣を手にしていなくとも、黒い陰謀の渦巻く暗黒の世界で必死に戦っている者達がいるのだ。

（マキュリアーニ）
「クリス・・・。いえ、アリミア。もう時間が無いわよ。行きなさい。貴方が作戦任務を成功させる事を心から祈っているわ。頑張ってね。」

（アリミア）
「マキュリ・・・。貴方もどうか。ご無事で・・・。」

アリミアは、そんな小さき勇者の姿をじっと見つめながら、心の奥底から沸き立つ何かに濁されながらも、ようやくそうとだけ言葉を発した。
そして彼女に対して、敬意を表するかのようにして深々と頭を下げて見せると、すぐさま後ろを振り返る事無くその場を走り去った。

人の奏で出す人への想い。それはとてつもなく重い物で形成されている。
時にそれは、想いを向けられた対象者に、非常に辛い重荷となってしまう事もある。
しかしそれは、その人の抱く全てが詰まった濃密な想いであり、とても優しく、暖かな物でもあるのだ。

06－14：○沸き起こる高揚感［1］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「沸き起こる高揚感」

見渡す限りの地平線に隔(へだ)てられた天と地とで、無数に鏤(ちりば)められた綺麗な宝石達が、艶(あで)やかな光を放つ世界。

新月を迎えるこの時期、頭上で光り輝く星々の営みは、普段より一層際立って見えるが、赤色、青色、黄色とを、思い思いに混ぜ合わせて作り出された街の光もまた、真っ黒な闇に包まれたオクラホマ都市を綺麗に描き出している。

大地より滲(にじ)み出す幻想的な光の野外劇(ページェント)は、時間と共に静けさを纏(まと)い始めた大気のステージ上に、まるで穏やかに舞う風の妖精達の姿を浮かび上がらせているようだ。

サイレンス・タワーの正面玄関を潜り出たアリミアの目の前には、そんな見る者の心を奪う煌(きら)びやかな風景が広がっていたのだが、彼女は正面ロータリーに横付けされた、二台の真っ黒な高級車の脇に、見知った男の姿を見つけると、美しき景観には全く関心を寄せる事無く、彼の元へと駆け寄った。

（アリミア）
「シュミットさん。大分お待たせしました。申し訳ありません。」

（ギャロップ）
「お待ちしておりました。クリスティアーノさん。これも私の仕事ですので、どうかお気になさらずに。」

アリミアはまず、がっしりとした体躯のこの男に対して、出発予定時刻を１５分も遅らせてしまった事を謝罪し、申し訳無さそうに深々と頭を下げる。

そして、長く垂れ落ちた紅い髪の毛を掻き上げながら顔を上げると、にっこりと愛くるしい微笑を浮かべて、暗に彼の意識に問いかけるように周囲へと視線を巡らせた。

サイレンス・タワーの正面ロータリー前に停車した二台の車は、要人護送を主目的とした装甲車並みの防御力を有する高級車であり、彼女をオクラホマ空港へと送り届ける為に用意されたものである。

勿論、ヴァラジン大佐の秘書官と言う役柄を演じる彼女には、それなりの警護が付いて回る事は避けられないのだが、先導車の運転席付近で、なにやら談笑している二人の若い警備兵の存在に、何処か怪訝（けげん）そうな表情を浮かべてしまった事は確かだ。

（ギャロップ）

「オクラホマ空港までの道中は、帝国憲兵隊の方々が先導してくれるそうなので、早ければ３０分程度で到着できると思います。最終便にはまだ十分間に合いますよ。お荷物はそれだけですか？」

アリミアはふと、その二人の若い警備兵達が、先ほど出会った少年兵ではない事を確認すると、少し安心した様子で溜め息を吐き出して見せる。

そして簡単な状況説明を済ませて右手を差し出したギャロップの方へと向き直り、手荷物を手渡そうとした所で一瞬動きを止めた。

彼はゆっくりとサングラスを外し、にこやかな笑みをアリミアに投げかけると、不意にかち合った視線の先で、一つ目配せをして見せた。

（アリミア）
「はい。これだけです。よろしくお願いします。」

（ギャロップ）
「解りました。お預かりします。」

アリミアはこの時、おしとやかな声色を維持しつつも、注意深く辺りを警戒するような素振りを見せた後で、引き渡した荷物の代わりに、小さな黒い物体を彼から受け取った。

そして、再び交錯した彼との視線の間で、無音なる言葉のやり取りを済ませると、やがて長い後ろ髪を旋毛（つむじ）付近へと結（ゆ）い上げながら、ゆっくりと先導車の方へと歩き始めた。

この時、彼女の周囲で直に見て取れる警備兵の数は全部で十人。

直ぐ目の前の先導車付近にいる二人の男達に加え、ホテル正面玄関入り口前に四人と、ロータリー入り口付近左右に二人づつだ。

少し前までの厳重な警備体制に比べれば、それは余りに閑散（かんさん）とした粗悪なものとしか言いようが無かったが、その日（と）執り行なわれる事となっていた一通りの行事を無事済ませ、数多くの要人達を送り出したサイレンス・タワーには、もはやそれほど大量の兵員は必要無いと言う事なのだろう。

辺りを強く照らし出していたサーチライトの光は全て落とされ、よ

うやく普段通りの穏やかな雰囲気を纏い始めたサイレンス・タワー周辺部では、まるでそれまで目まぐるしく駆け巡った一過性の繁忙期が嘘だったかのように、静かに鳴く蟲の声が響き渡っていた。

（アリミア）
「すみません。遅れてしまって。オクラホマ空港までの先導よろしくお願いしますね。」

（警備兵Ａ）
「いえいえ。貴方のような綺麗な女性が相手なら、待たされた方も本望と言うものですよ。この時間なら高速道路はかなり空いてます。何かの事故で渋滞でもしてない限り３０分もかからないでしょう。」

（警備兵Ｂ）
「貴方も何かとお忙しい身でしょうが、道中の安全は私達が保証しますから、その間ゆっくりとオクラホマ都市の夜景でも楽しんでください。」

（アリミア）
「お言葉に甘えて、そうさせて頂きますわ。」

アリミアは、先導車に屯した二人の若い警備兵の前まで歩み寄ると、愛想の良い笑顔を振りまきながら、麗しい声色で二人と会話を交わす。

そしてその後、警備兵の一人が運転席に乗り込むのを確認した後で、残ったもう一人の男に何処か意味ありげな艶やかな視線を投げかけて見せると、彼女は美人秘書官劇の締め括りとなる最後の演目へと突入を開始した。

薄暗い闇夜を背景として、薄っすらと浮かび上がる彼女の微笑みは、まるで男の情欲をそそる魔物のような淫靡さを醸し出し、彼女の身体を下から上へと舐め回す様に視線を這わせた男の視線と共に、その意識さえも思うが侭に抜き去ってしまうかのようだ。

勿論、何かしらの物語のように、抜き去った彼の意識を、意のままに操る事など不可能であるが、それでもアリミアの視線の先で、不意に厭らしげな笑みを浮かべてしまった彼の意識には、押し殺しようも無い怠慢な助平心が、強く沸き起こってしまった事は確かだろう。

やがてアリミアは、そんな男の視線を嘲笑うかのように、涼やかな風に靡く紅くしなやかな前髪を左手で掻き上げると、耳元に付けていたヘアピンをわざと弾き飛ばして見せた。

キーン。

キン。キン。

大地へと舞い降りる度に綺麗な金属音を周囲に響かせたヘアピンは、まさに彼女の思い描いた通りの軌跡を描き出しながら、直ぐ脇の車の下へと転がり込む。

（警備兵Ｂ）
「あ。」

（アリミア）
「あ・・・。いえ、お構いなく。」

男はすぐさま転がり落ちた彼女のヘアピンを探し出そうと、車の下を覗き込むような格好で体勢を低くして見せたのだが、アリミアは即座にそれを制止した。

そして、真っ赤なドレススーツの短いスカートを、更に上まで捲り上げると、再び長い前髪を大きく掻き上げるような仕草と共に、何ら躊躇(ちゅうちょ)なくその場へとしゃがみ込んだ。

捲り上げたスカートから露(あらわ)となった彼女の太腿は、ホテル正面玄関入り口前に降り注ぐ、優しげなオレンジ色の光によって照らし出され、彼女が必死に車の下へと手を伸ばすたびに、男の欲望を掻き立てるように妖美な踊りを舞う。

しかも、前屈みとなった彼女の胸元には、はっきりと見て解る程に白く形の良い山間が浮かび上がっていた。

（アリミア）
「ん・・・。あら？・・・んっ。」

車の下へと転がり落ちたヘアピンは、彼女が思うよりも手前側で直ぐに見つける事が出来たのだが、アリミアはわざと少し手間取るような素振りで、卑猥(ひわい)な声を小さく呻(うめ)き出すと、更に厭(いや)らしく身体を捩(よじ)って見せる。

そして、男の視線が完全に自分の身体へと据え付けられている事を横目で確認した後で、左手に隠し持っていた小さな黒い装置を車の裏へと貼り付けた。

（警備兵Ｂ）

「どうです?見つかりましたか?」

(アリミア)

「ええ。大丈夫です。ありがとうございます。」

やがてアリミアは、拾い上げたヘアピンを耳元に嵌(は)め込むと、差し出された男の手を借りてゆっくりと起き上がる。

そして、わざとらしくも自分の衣服が乱れている事に、慌てて気付いた素振りを演じて見せた。

この時点で、当初の目的を無事に果し終えた彼女にとって、もはやそれ以上、彼の気を引くような素振りを突き通す必要はなかったが、それでも自身の見せた振る舞いの全てを、しっかりと締め括(くく)るように、変に誤魔化(ごまか)しを兼ねた可愛らしい微笑みを彼に投げかけた。

勿論、彼女が二人の警備兵の元を訪れたのは、何も儀礼的(ぎれいてき)な挨拶を交わすためでも、この男を誘惑して見せることでもない。

警護とは名ばかりに監視役を兼ねた警備兵達は、過酷な作戦任務を背負う彼女達にとって邪魔者以外の何者でもなく、彼女の目的はそれを容易に排除する為の一つの処置だったのだ。

しかし男は、そんなアリミアの目論見(もくろみ)に、少しも気付く様子もみせず、何処か照れ臭そうに帽子を深く被って、アリミアにへんてこな笑みを投げ返した。

好意的感情を寄せる相手に対し、好意的感情を沸き立たせるのは、人の心の揺り動きとして極自然な感情の成り行きであるが、アリミアはこの時、彼から投げかけられた好意的視線を強引に断ち切ると、

時間が無いと言う理由に託けて、即座に別れの挨拶へと転じた。

（アリミア）
「それでは兵隊さん。オクラホマ空港までの道案内、よろしくお願いしますね。」

（警備兵B）
「あっ・・・。は、はい。解りました。」

そしてその後、行儀良く敬礼を施して見せた彼の振る舞いを他所に、アリミアは一度も彼の方を振り返る事無く、急いでその場を立ち去った。

ほんの数時間前に出会ったあの少年兵の存在を、一瞬浮かび上がらせてしまった自分の意識を強く戒めながら。

人と人とが織り成す感情のやり取りの中に、少なからず芽生え始める暖かな人との繋がり。

それは回数を重ねる毎に太くなり。強くなり。暖かなものへと変貌を遂げていく。

アリミアはトゥアム共和国の破壊工作員であり、帝国を守る彼等兵士達にとっては、忌むべき排除の対象でしかない。

勿論それは、作戦任務の成功を目指す彼女達にとっても同じ事が言えるだろう。

戦場で顔を合わせればお互いに敵同士となる関係の中において、相手に好意的感情を芽生えさせる事は、己の判断を狂わす気の迷いを

生じさせる可能性を孕んでいるのだ。

アリミアには、その事が良く解っていた。

（ギャロップ）

「どうだ?うまく行ったか?」

（アリミア）

「ええ・・・。」

やがて、アリミアが後続車の近くまで辿り着くと、後部座席のドアを開いて彼女を待っていたギャロップが声をかけた。

アリミアは一瞬、ギャロップの浮かべた笑みに対してチラリと視線を宛がうと、そう小さく返事を返しただけで、素っ気無い態度のまま即座に車内へと乗り込んだ。

ギャロップは、そんなアリミアの素振りに対し、少し肩を竦めて見せると、徐に後部座席のドアを閉めて、直ぐ前の運転席へとゆっくりと身体を預けた。

そして、車内を完全に密閉状態にする最後の扉を強く閉め、バックミラーに映し出されたアリミアの表情を窺い見ながら、明るい口調で問いかけた。

（ギャロップ）

「どうしたんだ?何か不機嫌そうだね。俺が君に雑用を押し付けた事を怒っているのかい?」

（アリミア）
「いいえ。そうじゃないわ・・・。別になんでもないのよ。ただ、私にも少しは女としての使い道があったんだなと思って。ただ、それだけよ。」

（ギャロップ）
「何言っているんだ。君はその辺に転がってる女性とは、比べ物にならない位、魅力的な女性だぞ。気付いていないのは君ぐらいなものさ。」

（アリミア）
「えっ??・・・。ええ・・・。ありがとうございます。シュミットさん。」

アリミアは、自分の醸し出す態度が、少々荒ぶっていた事に気が付いていたが、大きな溜め息を一つ吐き出して気持ちを落ち着けると、変に捻くれた様に美人秘書官の立場を再度掘り起こして、全く別人である彼女の言葉でお礼を述べた。

勿論、アリミアの抱く苛立ちの正体は、彼女自身の気持ちの中に直接の原因がある事は確かだが、彼女は自分の真意を軽くはぐらかして見せると、薄っすらとスモークのかかったガラス窓から外の景色へと視線を逃がした。

昔はもっとこう・・・。他に何も考えずに。

作戦任務を成功させる事だけを考えていたと思う。

それはまだ、私が子供だったからと言う事もあるんだろうけど、そ

れでも周囲の様々な事象に対して、こんなにも心を揺り動かされるなんて・・・。

作戦任務を目の前に控えた私に、敵であるはずの少年兵の事を、心配なんてしている余裕は無いはずなのに・・・。

しかも私は、新たにあの少年兵のような存在を、自分の中に作り上げる事を恐れた・・・。

（ギャロップ）
「そんな怪訝そうな顔するなよ。作戦任務開始前でピリピリするのも解るが、折角人が褒めてやっているんだ。少しは嬉しそうな顔してくれたっていいんじゃないか？」

（アリミア）
「・・・。そうね。ごめんなさい。」

アリミアは、バックミラー越しにギャロップの顔色をチラリと覗った後、少し浮かない表情を浮かべながら小さな声で彼に謝罪した。

そして、再び外の世界へと意識を放り出すと、何かを考え込むような素振りで完全に黙り込んでしまった。

アリミアと出会って間もない彼にとって、彼女の抱く深層心理を正確に把握する事など不可能だが、何処か妙な雰囲気を醸し出す彼女の事が少し気になったのだろう。

先導車から放たれた出発を意味するクラクションに合わせて、車のエンジンを始動させた彼は、直後に思いも寄らない要求を彼女に突

きつけたのだ。

（ギャロップ）
「どうだい？アリミア。この作戦任務が終わったら、何処か二人でバカンスにでも行かないか？」

（アリミア）
「えっ？？私と？？・・・二人きりで？？・・・。」

アリミアは、突然振って沸いた彼の思わぬ要求に、驚いた表情で運転席に座るギャロップに視線を投げかけたのだが、その後どう返答を返して良いものやら少し困った様子で、視線を足元へと落としてしまった。

やがて先導車の後に続いてゆっくりと動き出した車内には、先程とは全く様相の異なる静寂さが漂い始めていたが、ギャロップは全く臆する事無く、自分の素直な思いを連ね始めた。

（ギャロップ）
「俺と一緒じゃ嫌かい？」

（アリミア）
「嫌とか、そう言う訳じゃないけど・・・。私には余り近付かない方が良いわ。危険よ。」

（ギャロップ）
「女性が危険な存在だって事ぐらい、俺も十分承知しているさ。君がとても用心深い心を持っていると言う事もね。でも、まさか君もベッドの中にまで、ナイフを忍ばせている訳じゃないだろ？」

（アリミア）
「そういう言い方・・・。好きじゃないわ。」

（ギャロップ）
「俺もそんなに女性の扱いが上手い方じゃないし、その辺は少し大目に見てくれよ。これからゆっくり君の事を理解して行く事にするからさ。俺も作戦任務を成功させて生き延びる為の、何か強い意志を抱く目標が欲しいんだ。」

（アリミア）
「それで私??・・・。貴方も相当物好きなのね。何かこう・・・。他には無かったの?」

（ギャロップ）
「昔はあったさ。」

サイレンス・タワー正面ロータリーをぐるりと回り、目の前の大通り交差点へと差し掛かった所で、ギャロップが放った一言が、再び車内の空気を止めた。

そして、信号待ちの為にゆっくりと停車した車の中で、何処か不思議な哀愁（あいしゅう）を醸（かも）し出すギャロップの背中を、アリミアはじっと見つめていた。

（ギャロップ）
「人が生きて行く為には、何かしらの強い意志を抱く目標が必要だ。それが生死を賭した戦いの中に身を置く者ならば当然の事さ。生きる為の目標を何も持たず、自分に対する価値観すら見失った中で、相手に対してトリガーを引くのは決して簡単な事じゃない。そこで手が止まれば自分は死ぬ。俺がここまで生き延びてこれたのも、結

局は運が良かったからなのさ。生きる為の目標を見失って以来、俺はずっと闇の中で必死にトリガーを引き続けていただけだ。そして作戦任務が終わった後でいつも思うんだ。何で俺は生き延びてしまったんだろうって。」

やがて、目の前の信号が青へと変わり、先導車に釣られるようにして動き出した車が右折を開始する。

（ギャロップ）

「まあ、だからと言って俺も死にたい訳じゃない。出来れば毎日を楽しく過ごしたい気持ちはあるし、他人から自分を認められたいという気持ちもある。他の人間が聞いたら、人として最低の屑（くず）だと、罵（ののし）られるかもしれないが、俺がこんな世界で生きているのも、自分の能力を一番発揮できる唯一の場所がここだからさ。今更他の生き方なんて、俺に出来るはずも無いしな。結局俺も怖いんだ。何の目的意識も無く相手を撃ち殺している自分がさ。勿論それは、自分自身の思いを納得させたい為だけの、自分勝手な理由付けにしかならないかもしれないが、それでも一瞬の判断が要求される戦場のど真ん中で、何ら躊躇（ためら）う事が無いようにだけはしておきたいんだ。」

（アリミア）

「見かけによらず結構お喋りなのね。お酒でも飲んだの？」

（ギャロップ）

「まさか。・・・でも、何でだろうな。突然目の前に現れた女性に、心を奪われてしまったからじゃないのか？作戦任務前にこんな事を言うのは不謹慎かもしれないが、全く心の内を明かさずに死んでしまうのも、気持ちの良いものじゃないだろうしね。」

（アリミア）

「臭いセリフね・・・。」

アリミアは静かにそう返答してみせると、フッと落とした視線の先に全く別の世界を映し出して、脳裏に渦巻く彼の言葉と共に意識を埋没させた。

戦場においては一瞬の判断ミスが命取りになる。勿論それは解っている。

そして、それらが自分の抱く思いの中に生じた気の迷いから来るのだと言う事も。

何が起こるのか全く予測も付かない混沌とした世界の中で、迫り来る恐怖に脅えながらも、必死に弱る心に鞭を打ち付け、無数に飛び交う外乱要素の中から、最良の道を最速で選び出していく。

それこそが、戦場で生き延びる為の唯一の方策なのだ。

確かにそれは、実戦経験や戦闘訓練によって、ある程度の能力を向上しうるものではあるが、それでも不安定に揺れ動く「心」を有した人間である以上、何かしら判断を下す時には、自らの心の中に持つ指標と照らし合わせ、最終的結論を生み出して行かねばならない。

勿論、その照合作業に時間を費やせば費やすほど、自らの命を危機的状況へと引きずり込む結果を生み出す事は目に見えている。

様々な比較対照との間に、瞬間的判断を持って結論を導く為には、まずその照合先となる自らの指標を、自分の心の中で出来るだけ簡素化し、出来るだけ明るく見やすい状態にして、出来るだけ強く、

出来るだけ深く刻み込む事が必要なのだ。

恐らく戦闘経験が豊富な彼には、その事が良く解っていたのだろう。

アリミアが心の中で自分自身の姿に苛立(いらだ)っていたのも、その答えとなる最終的帰着点を知りつつも、様々な心の揺り動きによって、自分の意識が中々その域まで到達出来ないでいたからである。

自分自身が何を目的としているのか、解っているはずだった。

自分自身が何をしなければならないのか、解っているはずだった。

セニフを守る為。セニフを守りたいと言う自分自身の意思を貫き通す為。

その最終的目標を見据えて判断するならば、その他の要素は全て取るに足らない、些細(ささい)な事でしかなかったはずのだ。

勿論それは、彼の言うように、自分自身を納得させる為の、自分勝手な理由付けにしかならない事は解っている。

セニフを守る為なのだと言う「大儀名分」をひけらかして、平気で他人を殺める事に対して、強い後悔の念に押し潰されない様に、必死に心の防波堤を築き上げているに過ぎないのだと言う事も。

しかし、それでも、人は全てを選択する事など出来やしない。

自らが達成可能なものだけに対象を絞込み、その何れかを選択して生き続けなければならないのだ。

自分を取り巻く様々な対象物の中から、彼女が選び出すものとは。
それは自分で問うまでも無く、答えは解りきっている事だった。

（アリミア）
「いいわよ。その気持ち。私にも解るもの。勿論、バカンスに行っている余裕なんて無いけど、こんなつまらない私でも良ければね。」

この時アリミアは、必死に生き延びる為の強い目標を、自分の心の中に作り上げたいと願う彼の素直な気持ちによって、ようやく自分の真に願う目標へと視線を立ち返らせると、やがて彼の言葉を了承する意思を示して見せた。

（ギャロップ）
「そうか。良かった。ありがとう。これでようやく俺も、生きて帰る為の強い目標を手に入れる事が出来たよ。」

（アリミア）
「余り私を煽（おだ）てないで。戦場での判断が鈍っちゃうわ。」

アリミアはそう言って、少し呆れたような表情を醸（かも）し出すと、小さく溜め息を吐き出して見せた。

しかし同時に、彼女は決してそうとは悟られないようにして、心の奥底から沸き起こった微笑を、静かに彼の背中へと投げかけてやった。

（ギャロップ）

「それは困るな。俺の望みは作戦終了後に君と過ごす楽しい時間だ。折角見つけた新たな目標を直ぐに失うつもりは無いぞ。勿論、俺も出来る限り君の行動を支援するつもりだから、絶対に生きて帰って来いよ。アリミア。約束だ。」

（アリミア）
「なんとも自分勝手な言い分ね。でも、貴方に言われるまでも無く、私は必ず生きて帰ってくるつもりだからご心配なく。まあ、貴方の想いも少しは意識しとくわ。」

（ギャロップ）
「少しなのか・・・。まったくつれないな・・・。」

（アリミア）
「うふふ。・・・ごめんなさい。・・・あっはははは。」

アリミアは笑った。

きっと、嬉しかったのだろう。

自分の心の中に抱き持つ自分だけの想いとは別に、他人の心の中に作り上げられた自分への想いが、彼女の心を少し軽くする。

勿論、自分の中で最優先にすべきものは何も変わらない。

しかしそれでも、その目的地は違えども、同じ方角を指し示した別の想いが、彼女の抱く想いを強く後押しした事は間違いない。

やがてアリミアは、快適なスピードで大通りを北上し始めた車の中

から、綺麗なオクラホマ都市の夜景へと視線を移すと、心の奥底から次第に沸き起こる、懐かしい高揚感の存在を感じ始めた。

０６－１５：〇沸き起こる高揚感［２］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１５「沸き起こる高揚感」

サイレント・タワーを出発して１０分ほど経った頃であろうか。

縦にニ台並んで高速道路の上を走る黒塗りの高級車は、やがて巨大な一本のトンネルへと差し掛かった。

大型爆撃機ですら優に滑走可能なほどの広さを誇るこのトンネルは、都市北部に位置するオクラホマ空港までを一直線に繋ぐ大動脈であり、更に合流した二本の幹線道路を飲み込むと、次第に大都市の地下奥深くへと潜り込んで行く。

周囲にはほとんど他の車は並走しておらず、時折すれ違う対向車のヘッドライトだけが、物凄い勢いで彼女達の横を通り過ぎて行った。

（アリミア）
「ＳＳＭＧ－１０４にＫＢスナッチャー。ワイヤーカッターにクレイモアＧＮＧ。こんなにかき集めて、帝国の警備を舐めているとしか思えないわね。」

そして、薄暗いトンネル内を照らし出す果てしない光の破断線に、流れ行く無数の影を纏（まと）ったアリミアが、後部座席のシート裏からゴロゴロと現れ出た武器類を眺めながら、呆れたような表情で溜め息を付いて見せた。

彼女達トゥアム共和国工作員の為に用意された武器類は、全て武装

決起軍の一員であるマキュリアーニが手配したものだが、彼女もまさか、彼がここまで大量の武器弾薬を運んでくるとは、思っても見なかったのだろう。

（ギャロップ）
「なあに。彼女も別に舐めてそうした訳じゃない。逆に帝国の都市防衛能力を強く警戒していたからこそ、これだけの武器を俺達に持たせたのさ。俺はクレイモアとＳＳＭＧを使うから、準備しといてくれ。」

（アリミア）
「解ったわ。私はブリッチルとＳＥＳ爆弾を３つ貰うわね。後はナイフ１本で何とかするわ。」

（ギャロップ）
「えっ？？・・・たったそれだけで良いのか？」

（アリミア）
「必要なら相手から奪うわよ。身動き取れなくなるの嫌いなの。」

（ギャロップ）
「それはなんとも頼もしい限りで・・・。」

ギャロップはそう言って、少し呆れたような素振りで溜め息を付いて見せると、バックミラーへとチラリと視線を宛がって、アリミアの姿を見つめた。

今年で３６歳を迎える彼は、これでも過去に幾度と無く死線を垣間見てきた経験を有しており、人と人との直接戦闘においては、それなりの自身を持っていたつもりだったが、それでもこの一回り以上

歳の離れた小娘に対し、内心では恐れを抱くほどの奥深い威風(いふう)を感じていた。

確かにそれは、彼自身が直感的にそう感じただけの、見えぬものに対する恐怖心が生み出した感情に過ぎないのかもしれないが、戦場を目の前にして何ら少しも脅(おび)える様子も無く、静かに後部座席で戦闘準備を整え始めるアリミアの姿は、彼にとって少し特異なものとして映ったのかもしれない。

（アリミア）
「ねぇギャロップ。一つだけいいかしら。」

（ギャロップ）
「ん？・・・何だ？改まって。」

するとアリミアは、バックミラーを通して投げかけられる彼の視線に対し、一瞬だけ横目でチラリと目配せすると、静かな口調で彼にそう問いかけた。

そして、手馴れた手付きで銃火器の状態を入念にチェックしながら、まるで他人事のような素振りで、彼に不思議な要求を投げかけたのだ。

（アリミア）
「もし万が一、私が戻らなかった場合、諜報部メインＤＢのコード８０５を覗いてみてくれないかしら。」

（ギャロップ）
「おいおい。なんだ。縁起でもない事言うなよ。」

（アリミア）
「念のためよ。」

アリミアはそう言うと、右手に持つ短銃「ブリッチル」のスライドを左手で軽く引き、弾丸をチェンバーに装填（そうてん）させた状態でセーフティロックをオンにする。

そして、徐にそれまでドレススーツの内ポケットに忍ばせていた短銃を抜き取ると、新たに用意した短銃を代わりに仕舞い込み、次なる武器の準備作業へと取り掛かった。

この時、彼女が醸（かも）し出す態度は妙に素っ気無く、勿論、抱き持った真意の全てを彼に明かして見せるつもりなど全く無かった訳だが、それでも万が一の事態に備えて、彼女はその入り口となる場所の在り処を、彼に打ち明ける事にしたのだった。

（ギャロップ）
「何か大事なものでも隠してあるのかい？」

ギャロップはふと、猛烈なスピードで前方を快走する先導車の動きに合わせ、緩やかな左カーブを曲がり終えると、再びバックミラーへと視線を宛がって、サングラスを外した曇りない視線の上に、彼女の姿をじっと見据えた。

薄暗い車内を映し出すバックミラーの中央部には、まるでフラッシュライトを浴びたかのように、断片的に強調された彼女の姿が浮かび上がっていたが、珍しくも自分の死後を懸念して言葉を発した彼女の表情までは、窺い知る事は出来なかった。

（アリミア）

「見れば解るわ。私も貴方の事を、少しは信用する事にしたの。勿論、私が生きて戻れば、直ぐ別の場所に移動させるけどね。パスワードは私の昔の通り名になっているから。」

（ギャロップ）
「君の昔の通り名？なんだいそれは？」

（アリミア）
「・・・？・・・。ローゼイト・サーペントよ。」

（ギャロップ）
「ローゼイト！？・・・。サーペント！？」

ギャロップは一瞬、過去に聞き覚えのある言葉との照合作業に、少し手間取るような素振りで言葉を詰まらせてしまったが、やがて、激しく沸き起こった驚きの感情と共に、彼女の言葉をそのままに大きな声で復唱してしまった。

（アリミア）
「・・・。貴方本当に何も聞かされていないの？」

（ギャロップ）
「いや全く・・・。今初めて知ったよ。本当なのかい？君がまさか、あの有名なローゼイト・サーペントだったなんて・・・。この世界に生きるものなら、誰しも一度は耳にした事のある名前だ。そうか。あの猿親父がえらく君にご執心だったのも、なんか解る気がするな・・・。」

これは少しマズったかしら・・・。

アリミアは徐に左手を口元に宛がうと、少し視線を脇に逸らした上で表情を歪めてしまった。

あの猿親父に、自分の事を口外しないで欲しいと頼み込んだのは確かに自分自身だが、まさかあの時点で、ギャロップが私の素性を知らないとは思わなかった。

態々（わざわざ）しなくても良い自分の素性への道筋を、自らの手で開け放ってしまうなんて・・・。

実はもしかすると、あの猿親父ですら私の素性には気付いていないのでは・・・？

いえ。・・・それは無いわね。

もし私が、ローゼイト・サーペントでもなんでもない、ただのファルクラムの生き残りだったとしたら、あの猿親父も私の事を諜報部に引き込もうなんて考えには至らなかったはずだ。

組織と言う大きな枠組みで括（くく）られた人間達の能力は、高い者もいれば低い者もいると言うのが、世間一般的に知られる世の理（ことわり）。

勿論、ファルクラムと言う組織に所属する兵員達もまた、例外なくその能力はピンからキリだし、その得意とする分野も様々だ。

まさかあの猿親父が、それを理解していないという事は無いだろう。

（ギャロップ）

「ローゼイト・サーペントは、ファルクラム壊滅時に憲兵隊に捕ら

えられて、その後、獄中で死んだって聞かされていたけどな。上手く逃げ出すことが出来たのかい？」

（アリミア）

「・・・昔の事は余り思い出したくないの。」

（ギャロップ）

「・・・・・・。そうか。・・・そうだな。すまない。」

ギャロップはこの時、アリミアに対して沸き起こった非常に強い興味心から、思わず無粋な問いかけを投げかけてしまったのだが、少し俯き加減で、そう拒絶して見せたアリミアの反応を察すると、すぐさま謝罪の言葉を述べた。

そして、再びゆっくりとサングラスをかけて、まだ先の見えぬ長いトンネルの行く末に視線を据えると、心の中に形作られた好奇心と言う名の鋭い刃を強く握り潰して、じっと黙り込んでしまった。

彼もまたアリミアと同じように、人に聞かれたくない過去を持ち、決して開けまいと固く決意して、真っ暗な意識の底へと沈めた深い傷を有していたのだろう。

（アリミア）

「いいのよ別に。気にしないで。」

アリミアはそんなギャロップの気遣いに対して、全く少しも気にするような素振りを見せず、優しい口調でそう言葉を投げ返してやる。

そして、ゆっくりと後部座席の柔らかい背凭れに身体を預けると、やがて何事も無かったかのように、再び使用武器の準備作業へと舞

い戻った。

彼女はこの時、自分の発した軽率な発言に対して、少し悔いるような表情で小さな溜め息を吐き出してしまったのだが、それでも、自分の想いを仕舞い込んだ聖域への入り口を、彼に指し示して見せた事までは後悔していなかった。

信用に足る仲間達に事欠いた彼女の人間関係の中において、彼ほど好意的で頼れる人物と言うのは、今後もそう多く現れ出るものではない。

勿論彼女が、彼の好奇心を鼻から挫き飛ばすように拒絶して見せたのも、まだ完全には彼の事を信用していないと言う、否定的な感情に苛まれてしまったからに他ならないが、それでも彼女は、実際に自分の口で発した言葉の通り、これから少しづつでも、彼の事を信用していく事に決めたのだった。

彼女が真に心の中で追い求める、強い願いを叶える為に。

アリミアはもはや、自分一人の力だけでは、その想いを叶える事は難しいと言う事を悟っていた。

そう、ランベルク地下基地の倉庫内で、男に襲われたセニフを奇跡的に助け出す事が出来たあの日から。

勿論アリミアは、既にその脅威となる敵の正体が、一体誰であるのかと言う事を察知していたし、最終手段として奴を抹殺してしまう

と言う、簡単な手立てがあった事は確かだが、それでもセニフを付け狙う最終的黒幕の素性を暴くよりも先に、自分自身が早々に失脚してしまう事など出来なかった。

そして、全く何の証拠の一つも残さないアノ男に対して、完全に後手を踏まざるを得ない状況下で、悪意に満ちた奴等の見えぬ魔の手からセニフを守り抜く為には、もはや誰か他の人間の手を借りる以外に、全く有効な手立てを見出す事は出来なかったのである。

やがてアリミアは、突然降って沸いた自身の転機を利用して、諜報部の最高責任者である猿親父の権力を利用しようと言う考えに至るのだが、それもまた、彼等にセニフと言う護衛対象を無闇に晒(さら)してしまう事により、周囲の懐疑的な視線を彼女に集中させる危険性もあった為、最終的にそれを断行する事を思い止まったのだ。

結局アリミアは、基地内の警備を担当する保安部隊に、ランベルク基地内で強姦があったと言う事実だけを告げ、被害者のプライベート保護を理由に、その真相を有耶無耶(うやむや)無耶にしたまま、基地内の警備強化を要望して見せる事しか出来なかった。

勿論、それによって、少しは奴等の行動を抑止する事は出来るだろうし、奴等に次の手を打たせるまでの時間を稼ぐ事ぐらいは出来るであろうが、それでも、セニフを守り抜くという最終的目標に対して、今だ有効な対策を取る事が出来ていなかったアリミアにとって、単なる時間稼ぎに満足している余裕など無かったのだ。

しかしそんな時、完全に八方塞(はっぽうふさがり)とも言える状況下で、彼是(あれこれ)と苦慮していたアリミアの元に、ようやく希望に満ちた光の筋が差し込んだ事は確かだ。

（ギャロップ）

「アリミア。そろそろトンネルを抜けるぞ。オクラホマ空港までは、もう目と鼻の先だ。準備はいいかい？」

彼は決して私利私欲の為に他人を売るような人物ではない。

そのぐらいは私にも解る。この作戦が終わったら、彼に真実を明かしてみよう。

勿論、彼に断られてしまえばそれまでだが、それでも彼に相談してみる価値は絶対有るはずだ。

彼女が真に求めていた信用に足る人物。

彼女がようやくそう感じ取る事が出来る人物。

この時の彼女にとって、ギャロップと言う新たな人物の登場は、まさに願っても無い好機と言っても過言ではなかったのだ。

（アリミア）

「ええ。いいわ。貴方も死なないでね。ギャロップ。」

ギャロップの投げかけた優しげな言葉に対し、不意に意識を舞い戻されたアリミアが、今の自分の素直な気持ちを言葉に表して発してみせる。

そして、車のフロントガラスの中央部で次第に膨張し行く、綺麗なオクラホマ都市の夜景に視線を据え付けながら、彼女は心の中で強い決意を込めた拳（こぶし）を握り締めたのだった。

06－16：〇沸き起こる高揚感［3］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１６「沸き起こる高揚感」

延々と果てしなく伸びる殺風景なトンネルの中から這い出すと、やがてアリミア達の乗る車を、煌びやかに光り輝く大都市の夜景が出迎えた。

オクラホマ都市中心部の最北端となるその街並みは、遥か頭上高くまで聳える数々のビルディング群が立ち並んでおり、その足元を煌々（こうこう）と照らし出す賑やかな光が、真っ黒に彩られた夜空のベールを背景として、巨大な建造物達を立体的に映し出してた。

猛烈なスピードで左右をすり抜ける道路照明は、まるで流れ星のような閃光を醸し出して、直進する高級車の淵に眩い光沢を齎し、やがて建物の隙間から見え始めた広大な暗がりの中に、彼女達の進むべき道筋をくっきりと浮かび上がらせていた。

（ギャロップ）
「武装決起予定時刻をとっくに過ぎているな。」

高速で巡航する車の運転席で、街の明かりにキラキラと照らし出される腕時計に、チラリと視線を宛がったギャロップが、静かにそう呟く。

そして、運転席の左側に取り付けられたナビゲーションシステムを、空いた左手を使って手際よく操作してみせると、目的地となるオクラホマ軍事空港への到達予想時刻との兼ね合いから、少しだけ車の

進行スピードを緩めにかかった。

この時、アリミアとギャロップ二人の工作員に課せられた任務は、オクラホマ軍事空港に対する破壊工作を敢行することであるが、それは決して外部の周辺施設を直接破壊する事が目的ではない。

逆に言えば、たかが二人の人間の手によって、広大な敷地面積を誇る軍事空港施設を、片っ端から破壊し尽くす事など不可能な事であり、彼女達二人には、もっと最小限の労力を持って最大限の効果を発揮し得る、基幹的な軍事施設への破壊工作が主目標として設定されていたのだ。

そして、その彼女達が目標とする最終的軍事目標と言うのが、帝国軍東方戦線における中継基地として重要な役割を担う、オクラホマ軍事管制システム本体そのものであった。

しかし、如何にこのオクラホマ軍事空港が、民間旅客機も離発着する併用空港であるとは言え、帝国軍の最重要システム本体を抱える中枢施設周辺は、数多くの警備兵達の手によって、強固な防御陣が築き上げられており、人が簡単に潜入できるルートなどほぼ皆無といっても過言ではない。

勿論彼女達も、そんな半要塞化した中枢施設に対して、無謀にも真正面から直接攻撃を仕掛けようなどと言う考えは無かったのだが、それでも間接的な破壊工作を試みる過程で、少なくともこの防衛部隊に何かしらの混乱を生じさせ、彼等の視線をあらぬ方向へと誘き寄せておく必要が有ったのだ。

そしてその主たる混乱を招く役割を担うのが、オクラホマ都市内部で敢行される武装決起だ。

長い直線トンネルの出口を突き出てからと言うもの、車の後部座席から見渡せる視界内には、特にこれと言った変化は見られない。

近代的巨大な建造物が数多く軒(のき)を連ねる大都市の中心部で、まさに天空をも映し出さんばかりの輝きを放つ繁華街の光が、時折過ぎ去る遮蔽物を間抜いて、アリミアの瞳を鮮やかに浮かび上がらせているだけだ。

しかしやがて、オクラホマ空港到着まで10分程を切った頃合であろうか、それまでじっと繁華街の光を見つめていたアリミアの眼前で、突如として迸(ほとばし)った眩い閃光と共に、真っ黒な黒煙が立ち上った。

（アリミア）
「ギャロップ！始まっているわ！」

（ギャロップ）
「みたいだな。さすがに現職を追われた身とは言え、ロイロマール派の兵士達は優秀だ。」

ギャロップはそう言って、軽い笑みを浮かべて口元緩ませると、前方を突き進む先導車に対して、車のヘッドライトを忙(せわ)しく上下に動かして見せる。

そして、もはやその答えとなる真実を知っていながらにして、ハンドルの直ぐ脇に取り付けてあった無線機へと手を伸ばすと、彼は白々しくも業(わざ)と先導車に乗る二人の警備兵に問いかけるのだ。

（ギャロップ）

「後続車アフレアーノから先導車テルザレモへ。たった今、繁華街の方で何か爆発したようにも見えましたが、何か問題でも発生したんですか？」

（警備兵Ａ）
「こちら先導車テルザレモ。こちらも確かに繁華街の方で爆発を確認しました。詳細については現在調査中。恐らく事故か何かだと思われますが・・・。・・・。えっ！？武装集団！？」

（警備兵Ｂ）
「たった今入手した情報です！現在、オクラホマ都市Ｅ地区５１番街にて、帝国憲兵隊の兵士達が謎の武装集団と交戦中との事です。今のところ、この武装集団の正体は不明ですが、数的にはそれほど・・・。」

（警備兵Ａ）
「あっ！！いえ。Ａ地区の１１番街でも戦闘中・・・。ええ！？Ｇ地区・・・。Ｂ地区も・・・。一体これはどうなっているんだ！？」

（警備兵Ｂ）
「本部！！本部応答せよ！！オクラホマ都市で、一体何が起きているんだ！？」

突然慌しく騒ぎ立て始めた警備兵達の様子を、如実（にょじつ）に伺わせる音声が無線機から垂れ流される中、ギャロップがバックミラーを通して、後部座席に座るアリミアと視線を交わす。

この時、それまで彼等が心の底から待ちわびていた武装決起軍の行動は、まさに彼等の期待した通りの効果を発揮しながら顕在化（けんざいか）し、彼等の目の前で固く閉ざされていた門の扉を、ようやく抉（こ）じ開け始

めたのだった。

しかし次の瞬間、オクラホマ都市の綺麗な街並みを舞台として、情熱的で激しい踊りを披露し始めた戦いの渦から、思いも寄らぬ殺意の閃光が飛び火すると、猛烈なスピードで爆走する二台の車の目の前に降り注ぐ。

そして、耳を劈(つんざ)くと言うよりは、身体全体に浴びせかけるような爆音を放ち、綺麗な光を勢い良く四散させた。

ドッゴーーン！！

（ギャロップ）
「ちっ！！」

キュルキュルキュルキュルッ！

（アリミア）
「きゃっ！！」

ゴン！

ギャロップは即座にハンドルを左に回し、それを戻すタイミングに合わせて一瞬だけブレーキペダルを強く踏みしめる。

そして、直ぐに横滑りし始めた車の挙動によって、突然降りかかった厄災を大きく回避して見せると、小刻みなハンドル操作とアクセルワークで、巧みに車の体勢をコントロールして見せた。

しかし、その反動で逆に自身のコントロールを失ってしまったのはアリミアの方で、彼女は突然激しく横移動した車の反動に耐え切れず、無様にも後部座席の強固な窓ガラスに頭を打ち付けてしまった。

（アリミア）

「痛っ・・・。何にしても、もう少し穏やかにやって欲しいわ・・・。」

彼女は殴打した右後頭部付近を静かに擦りながらそうぼやいて見せると、ゆっくりと身体を起き上がらせて、後部座席に散乱してしまった武器類をまとめにかかる。

そして、後部座席シート裏から取り出した一枚の黒い大きなシーツで、一目でそれとは判断できないように武器類を覆い隠すと、やがて再びオクラホマ都市の様子を覗い見るように、車の外へと視線を向けた。

高速道路の上を快走する車の中から見る限りでは、都市部地上付近でどのような戦闘が繰り広げられているのか、その詳細を窺い知る事は出来なかったが、それでも断続的に鳴り響く銃撃音から察するに、それは時を追う毎に激しさを増しているようにも見受けられる。

この時、彼等の周囲で騒ぎ立て始めた荒くれ者達は、オクラホマ都市全域に展開している武装決起集団の極一部の兵士達に過ぎない事は明白であり、やがて、彼等の持ちえる無分別（むふんべつ）な武力が、この大都市の全てを混沌とした戦乱の業火に陥れるであろう結末は、もはや火を見るより明らかな事であった。

（警備兵Ａ）

「街中でロケット弾を撃ち付けるなんて尋常じゃないぞ！奴等一体何者なんだ！？」

（警備兵Ｂ）
「本部が呼び出しに応じない！どうする！？」

（ギャロップ）
「謎の武装集団の正体がいずれのものにせよ、我々の任務はクリスティアーノさんの身の安全を確保しつつ、オクラホマ空港まで送り届ける事が最優先です。もう間もなくオクラホマ空港入り口の検問所が見えてきます。とりあえずそこまで全速力で移動しましょう。」

（警備兵Ａ）
「解りました。検問所には私の方から連絡しておきます。急ぎましょう。」

ギャロップはそう言って、冷静に彼等の混乱した思考を窘めにかかると、徐に進行速度を加速させた先導車に釣られる様にして、右足でアクセルペダルを強く踏みしめた。

そして、オクラホマ都市の終焉を示す、最後の大きなビルの合間をすり抜けると、やがて目の前に広がった真っ暗な闇夜のど真ん中で、一際強い光を放つ巨大な空港へと視線を据えつけた。

オクラホマ都市から少し距離を置いた場所に建設されたその空港は、大都市の醸し出す雰囲気とは大分様相が異なる印象を受けるが、それでも天空を支えるかのように立ち上る無数のサーチライトの光の筋が、人の作りし偉大なる建造物を大々的に誇大して見せているようにも窺える。

黒と言う色で塗りつぶされた平原を広大な大海原に見立てて、そこに浮かぶ光の島へと伸びる一本の架け橋は、まさに彼等にとって、その先に見据えた明るい未来への道筋に他ならなかったが、逆説的に捉えれば、それはその運命から逃れようも無い彼等の境遇を、漠然とした表現で描写した風(ふう)でもあった。

そして、その長く伸びた直線道路をしばらく突き進むと、やがて彼等の目の前に、真っ赤な赤いライトを点滅させて注意を促す、常設検問所の建物が見えてきた。

（ギャロップ）
「来たぞ。検問所だ。」

ギャロップは何処か緊張感を匂わせる口調でそう強く言葉を発すると、外したサングラスを無造作に助手席の上に放り投げ、暗がりに揺れ動く赤いライトの動きに誘(いざな)われるように、車の進行速度を落としにかかる。

そして、通常遮断機の前に列を成した数台の民間車輌を避けるように、左手の脇道に逸れた先導車の動きに合わせて検問所裏手側の広場へと躍り出ると、特別な人間達の為にだけに用意された専用ゲートの前で車を停車させた。

広大な草原地帯のど真ん中に佇(たたず)むこの検問所は、距離にしてオクラホマ空港まであと１ｋｍｉｌｓ有るか無いかの場所に位置し、周囲の監視が効果的に行えるよう、非常に見晴らしの良い小丘の上に建てられている。

巨大空港の出入り口の一つにしては、それほど機能的な設備を有していない様だが、それでも道沿いに並んだ三台の強力な装甲先頭車

両が、威圧的雰囲気を周囲に吐き散らしていうようにも見え、頭頂部に取り付けられた各銃座には、周囲を警戒する監視兵の姿が見て取れた。

この検問所の周辺に配備された兵士達の総数は、装甲車や検問所建物内に篭る兵員達を勘案したとしても、ざっと二十人程度といったところであり、アリミア達二人の戦闘能力を持ってすれば、力押しによる強引なゴリ押しのみでも、突破する事は決して不可能な事ではない。

しかし、彼女達の見据える真の作戦目標に留意すれば、検問所などと言う瑣末（さまつ）な障害に対し、無用な労力を費やす必要性など皆無であった事は確かだ。

やがて、アリミア達の乗る車に駆け寄った兵士の一人が、固い防弾ガラスを軽く小突いて、運転席の窓を開くように指示を出すと、ギャロップは全くそれに逆らう事無くドアウィンドウを下ろした。

（検問所兵士Ａ）
「ご苦労様です。お話は担当の警備兵から伺っています。お怪我はありませんでしたか？」

（ギャロップ）
「はい。大丈夫です。私もまさか突然あんな事態に遭遇するとは思っても見ませんでしたが、何とか無事に逃れる事が出来ました。街中ではかなり激しい戦闘が繰り広げられているように見えましたが、一体何が起きたのですか？」

（検問所兵士Ａ）
「余り詳しい事は申し上げられませんが、どうやら叛乱軍の残党達

がオクラホマ市内で暴れ回っているようです。現在、憲兵隊の兵士達がこれの対応に当たっていますので、直ぐにこの騒ぎも収まると思います。ご安心ください。」

直ぐに収まる？

ギャロップは一瞬、余りに楽観的な願望を抱いて、非現実的現実を直視出来ていなかったこの男に対し、何処か同情めいた感情を寄せてしまったのだが、すぐさま運転席の脇にあるアームレストボックスの中から身分証明書を取り出すと、何食わぬ顔で男の目の前に差し出して見せた。

そして、男の視線が身分証明書に据えつけられている隙に、同じ場所に隠してあった小さな装置を取り出すと、少し離れた位置に停車した先導車へと視線を向けた。

（ギャロップ）

「先導車に乗っていた警備兵の方が言うには、オクラホマ都市の各地で騒ぎが起きていると言う事でしたが、このオクラホマ空港は大丈夫でしょうか。幾ら周囲の見晴らしが良いからとは言え、背の高い雑草に覆われた草原地帯は、敵が身を隠すのに最適なエリアとも言えます。ひょっとしたらもう既に何者かが潜んでいるかもしれません。」

（検問所兵士Ａ）

「我々も定期的に雑草駆除はしているんですが、この季節の雑草の生命力と来たらご覧の通りでして。でも大丈夫です。このオクラホマ空港には隣接した軍事基地も在りますし、敵もまさかこんな強大な敵の拠点に、攻撃を仕掛けるなんて無謀な事はしないでしょう。ご安心ください。」

馬鹿ね。だからこそ相手にとっては、格好の標的になるんじゃないの・・・。

ファルクラムのような潜在的脅威が無くなると、こうも平和ボケしてしまうものなのかしら・・・。

車の後部座席に座っていたアリミアは、じっと黙り込んだまま二人の会話に聞き入っていたのだが、彼に心の奥底でそんな厳しい突っ込みを叩き入れてやると、やがて再びバックミラーを通して、ギャロップとアイコンタクトを交わした。

（ギャロップ）

「そうですか。安心しました。空港内にはすぐに入れますか？」

（検問所兵士Ａ）

「一応規則なので、軽く車内を点検させて貰います。それほどお時間は取らせませんので、少々お待ちください。」

やっぱりそう来るわよね・・・。

アリミアはこの時、咄嗟（とっさ）に後部座席のシートの上に、身を伏せたい気持ちに駆り立てられてしまったが、直ぐ近くにいた兵士の存在にそれを阻害されてしまうと、せめてもの自衛手段として、暗がりの中で両目をギュと強く閉じた。

ドッゴーーーーン！！！

次の瞬間、彼等の左前方に停車していた先導車から、周囲の平野部一帯を照らし出すほどの火柱が立ち昇ると、猛烈な爆発音と風圧を伴って検問所付近一帯を暴れまわる。

そして、その余りの破壊力から、車体を軽々と宙に持ち上げられた先導車が、悲しくも無様に一回転した後、耳障りな衝撃音と共に地面へと叩きつけられた。

この時、強固な装甲を有した車輌に身を守られていたアリミア達二人は、全く何の被害を被(こうむ)る事無く、その爆発をやり過ごす事が出来たのだが、これほどまでに至近距離で爆風を浴びせかけられるのは、決して気持ちの良い事ではない。

（検問所兵士Ｂ）
「何だ！？叛乱軍の襲撃か！？うわっ！！火だ！！早く火を消せ！！倉庫に燃え移るぞ！！」

（検問所兵士Ｃ）
「それより負傷者を救出するのが先だ！！急げ！！」

（ギャロップ）
「おおい！！左手の草原地帯から、何かが発射されるのを見たぞ！！西側の草原地帯に何かいる！！」

（検問所兵士Ｄ）
「西側の草原地帯だと！？確かか！！」

（ギャロップ）

「はい！！確かにロケット弾のような物がこちらに向かって飛んできました！！街中で暴れている連中の仲間かもしれません！！私はとりあえず秘書官を安全な空港内へとお連れしますので、ゲートを開けてください！！」

（検問所兵士Ｄ）
「解った！！おい！！ゲートを開けろ！！動ける戦闘員は直ちに戦闘レベル１種体制に移行！！西側の草原地帯に敵が潜んでいるとの事だ！！敵の第二派に注意しつつこれを殲滅しろ！！」

俄(にわ)かに慌しさを見せ始めた検問所の兵士達を他所に、事の発端を作り出した張本人であるギャロップが、有りもしない敵の攻撃をでっち上げて、大法螺(おおぼら)を吹いてみせる。

すると、余りの突然の出来事から、完全に平静さを失った兵士の一人が、ギャロップの虚言をそのまま鵜呑(うの)みにすると、全く思慮に欠いた愚鈍(ぐどん)なる指示を周囲に吐き散らした。

確かにオクラホマ都市内で暴れまわる叛乱軍兵士達の存在を知らされた上で、このような身近な場所で爆発が発生したのなら、それが彼等による仕業なのだろうと思い込んでしまう気持ちは解らなくも無い。

しかし、よくよく考えてみれば、重要な軍事施設の立ち並ぶオクラホマ空港を目の前にして、たった一発のロケット弾をもって、その一つ手前の検問所を威嚇して見せるなど、全く何ら意味を成さない行為に他ならなかった。

もしこの時、混沌とした慌しさの中で、その事実に気付く者が現れていれば、二人は即座に望まぬ戦闘を余儀なくされていた事だろう

が、完全に統制を失って乱雑な行動に終始していた兵士達は、いとも簡単に強固なゲートを開け放ってしまったのだ。

ギャロップは、目の前でゆっくりと首を擡げ始めた遮断機を見据えると、即座にアクセルペダルを思いっきり踏み込んで車を急発進させる。

そして、間抜けにも開け放たれたゲート付近を勢い良く駆け抜けると、やがて再びオクラホマ空港へと向かう一本道に車を滑り込ませた。

まだ赤々とした炎の光が残る検問所付近では、大慌てで動き出した装甲車輌から、西側の草原地帯に向かって強いサーチライトの光が浴びせかけられ、これから全く実りの無い捜索活動が始められようとしている。

この時、オクラホマ空港の内部施設へと潜入を目指す彼女達にとって、その周囲を警備する兵士達の目を、出来る限り外の世界へと誘い出しておきたい思いが有った事は確かだが、最終的手段として強行突破をも辞さない構えだった二人の覚悟を他所に、その目論見は思いのほか造作も無く実を結んだのだった。

オクラホマ空港ターミナルへと向かって一直線に伸びるその道路は、草原地帯に盛られた土台の上を走るように作られており、背の高い雑草が群生する平野部に向かって、なだらかな斜面を形成している。

もはやこの時点で、彼女達とオクラホマ空港とを分け隔てる障害は、何一つ無くなったと断言する事が出来るだろうが、それでも軍の重

要施設への破壊工作任務を背負った彼女達に、数多くの警備兵達が屯(たむろ)した正面ゲート付近から、堂々と空港内に乗り込む事など出来ようはずがなかった。

するとアリミアは、後部座席シート裏からなにやら小さな小箱を一つ取り出して、側面に取り付けられていた電子機器のスイッチを素早く数回押す。

そして、徐に後部座席の下へと小箱を設置すると、スライド式に切り替えた車のドアを無造作に開け放ち、次なる行動へと移行すための合図をギャロップに向けて発した。

（アリミア）
「ギャロップ！あと１０秒！」

（ギャロップ）
「了解！」

彼女の合図に合わせるように、車の進行速度を少し緩めて見せたギャロップが、右手側の反対斜線へと車をスライドさせると、アリミアは躊躇(ちゅうちょ)無く事前に用意した武器類を車の外へと放り投げる。

そして、自分の直ぐ脇に置いてあった、少し大き目のボックスのスリングベルトを掴み取ると、最後は自分だとばかりに、走行中の車から思いっきり身を投げ出した。

（アリミア）
「くっ！」

猛スピードで駆け抜ける車から飛び降りたアリミアは、咄嗟(とっさ)に手に

持つボックスを手放すと、鬱蒼と雑草が生い茂る平野部目掛けて、勢い良く坂道を転がり落ちていく。

そして、その背丈の長い草木達を柔らかなクッション代わりとして、ようやくアリミアがその回転速度を落ち着けさせると、やがて道路を挟んだ反対側の平野部から、再び大きな爆発が発生した。

（アリミア）
「ギャロップは!?」

アリミアはすぐさま体勢を立て直して起き上がると、小高い道路の向こう側に立ち昇った黒煙を見上げつつ、ギリギリまで車に乗り込んでいたギャロップの安否を気遣う。

この爆発の正体は、アリミアが先ほど車の後部座席でスイッチを入れた、時限式の小型爆弾によるものであり、オクラホマ空港へと差し迫った武装集団の幻影を、より強く匂わせる効果を期待した他、更には自分達自身の存在を有耶無耶の内に、かき消してしまおうと目論んだものだ。

（ギャロップ）
「アリミア!!俺の方は大丈夫だ!!君はスパイロウを持って、直ぐに空港内に侵入しろ!!後の事は俺に任せてくれ!!」

（アリミア）
「解ったわ!!」

検問所から５００ｍｉｌｓ程遠ざかった薄暗い草叢の中で、オクラホマ空港側に少し離れた位置から聞こえてきた、ギャロップの元気そうな大声に、アリミアは安堵した表情を浮かべて、そう返事を返

した。

そして、一瞬だけ背後にある検問所方面へと視線を宛がうと、すぐさま放り投げたボックスを拾い上げて、青臭い草叢（くさむら）の中へと潜り込んでいった。

（検問所兵士E）
「放水機能付き装甲車をこっちに回せ！！早く火を消すんだ！！」

（検問所兵士F）
「馬鹿野郎！！四の五言わずにさっさと秘書官を救出せんか！！大問題になるぞ！！」

（検問所兵士G）
「完全にやられ放題じゃ無いか！！直ぐに警備兵を西側の草原地帯に突入させろ！！」

さあ。ここからが本当の勝負よね。

低い大勢を保ちつつ、草叢（くさむら）の中を突き進むアリミアは、やがて聞こえ始めた検問所兵士達の怒鳴り声に耳を傾けながら、目の前に横たわる巨大なオクラホマ空港を見据えた。

心の中で次第に高鳴る高揚感に煽られつつも、草原地帯を吹き抜ける涼やかな風によって、優しく窘（たしな）められた意識が、彼女に妙に懐かしい感覚を呼び起こさせる。

そして、熱くも無い、冷たくも無い、程よい緊張感に包み込まれた

彼女は、ゆっくりとオクラホマ空港へと向かって、前進を開始したのだった。

06－17：○沸き起こる高揚感［4］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ17「沸き起こる高揚感」

心地よい夜蟲の鳴き声が響き渡る、真っ暗な草叢（くさむら）の中で。

自分の背丈程にも伸びたイネ科の植物達をかき分けるように突き進むと、やがて目の前にオクラホマ空港全体を取り囲む、フェンスの縁（へり）が見えてきた。

鋼鉄のワイヤーを斜めに組んで編みこんで作られたそのフェンスは、オクラホマ空港北側に位置する軍事関連施設のそれとは異なり、高さこそあれ決して侵入者を強く拒む風格を有してはいない。

アリミアが隠れ潜むその場所は、位置的に民間航空機管制施設の裏手側と言う事になるが、周囲には巡回する警備兵の姿も無く、遥か遠くの倉庫付近で荷物の整理作業を行っている、作業員数人の姿が見て取れるだけだ。

アリミアは鬱蒼（うっそう）と生い茂る草叢（くさむら）の影から、一通り周囲の状況を確認し終えると、脇に抱えたボックスの小さな扉を開け放って、中から真っ黒な運動靴を取り出した。

そして、もはや彼女にとって何の役にも立たなくなってしまった、真っ赤な高級ハイヒールを無造作に脱ぎ捨てると、素早くその運動靴に履き替えて、靴紐（くつひも）を固く結びつけた。

本来であれば、このような作業は移動中の車の中で済ませておくべき行為なのだが、確実に秘書官と言う仮の立場を捨て去るタイミングが訪れるまで、彼女にはこのハイヒールを脱ぎ去る事を許されなかったのだ。

やがてアリミアは、ようやく脱ぎ去る事が出来た窮屈なハイヒールを拾い上げると、ボックスの小さな収納スペースへと仕舞い込み、ゆっくりと目の前に聳え建つ民間空港機管制施設を見上げた。

オクラホマ空港管制塔の脇に隣接したその建物は、巨大な民間旅客ターミナルビルとは異なり、少しこじんまりとした佇まいとなっているが、民間航空管理システムの全てを司る重要な施設の一つである事に間違いなく、実は物理的機能の多くを軍事施設に依存している関係から、軍事管制システムに対する幾つものアクセス経路を有していた。

勿論、当然の事ながら、重要な機密情報を有した軍事管制システムに対しては、主体的処理を制限するセキュリティ防壁が何重にも張り巡らされており、必要最低限の情報以外、決して取得する事も、操作する事も出来ないよう、厳重な防衛対策が取られている。

しかし、幾ら完璧な防御システムに守られているからとは言え、１００％人間の手を借りない独立したシステムなど存在するはずも無く、それらを取り扱う内部関係者の中に、何かしらの悪意を含み持つ者が、絶対に居ないと言う保証も無かった。

彼女が破壊工作任務の最終目的地として、この建物を目指すよう指示されていたのも、そんな一部の内部関係者が作り出した、秘密の抜け道がこの施設内に存在していたからに他ならず、彼女に課せら

れた任務の真の目的は、その抜け道を利用して、民間航空管理システム側から、オクラホマ軍事管制システム側に、論理的破壊工作を仕掛ける事にあったのだ。

アリミアはやがて、静かにボックスのスリングベルトを左肩にかけると、徐に草叢(くさむら)の中から顔を覗かせて、オクラホマ空港敷地内への侵入タイミングを見計らう。

この時、オクラホマ都市中心部で勃発した武装決起に加え、検問所付近で騒ぎ立てた彼女達の撹乱(かくらん)行為によって、数多くの警備兵達の目が外部へと向けられていた事は確かだが、その余りにも無防備な姿を曝け出した目標物を前に、彼女は少なからず心の中に否定的な抵抗感を感じていた。

心配性な性格に加え、様々な事象に対して彼是(あれこれ)と考え込んでしまう、彼女の悪い癖が出たと言う所だろうが、それでも彼女には、折角降って沸いた願っても無い機会(チャンス)が、それほど長くは続かないと言う事を良く解っているようだった。

やがて彼女は、建物周辺部に全く人気が無い事を確認し終えると、思い切って草叢(くさむら)の中から身を乗り出し、目の前の金網フェンスへと飛び付く。

そして、彼女の背丈より少し高いだけのフェンスを軽々と乗り越えると、すぐさま近くにあった建物の影へと身を滑り込ませた。

旋毛(つむじ)付近で結(ゆわ)え上げられた彼女の綺麗な紅い髪の毛が、悠然(ゆうぜん)と薄暗い闇夜の中を駆け抜けるその姿は、まるで獲物を付け狙う紅い大蛇の様相を呈(てい)しており、嘗(かつ)てのローゼイト・サーペントたる彼女の姿

を髣髴とさせるものだ。

建物周辺部へと駆け寄る際、彼女は見晴らしの良い広場を、突っ切る嵌めとなってしまったのだが、それでも周囲では全くその異変に気付くような気配すら匂わせず、彼女の抱いた不安は完全に杞憂のものとして終わりを見せたのだった。

やがて彼女は、建物の遮蔽物に身を隠しながら、注意深く周囲の様子を窺うと、素早く建物の壁沿いを伝って目標となる建物の裏手口付近へと忍び寄る。

そして、徐にそのドアノブに手をかけると、ゆっくりと左右に数回それを捻り回してみた。

ガチャガチャ。

（アリミア）

「まあ、当たり前よね。」

当然の結果と言えば当然の結果だが、アリミアの前で固く閉ざされたその鋼鉄の扉は、部外者が簡単に開け放てるような、粗悪な作りになっているはずも無い。

アリミアは少し残念そうに、そう呟いてみせると、すぐさま別の侵入口を探って、薄暗い建物周辺部へと視線を這わせた。

この時、彼女が所持している爆発物を使用すれば、強引にでもそこから中へと侵入する事は出来るのだろうが、同施設の最上階を目指していた彼女にとって、外部へと向けた敵の目を欺き続ける必要が有った訳だ。

やがて彼女は、管制施設建物に隣接した巨大なタンクの存在に気が付くと、そこから上に伸びる二本の四角いダクトをゆっくりと見上げ、静かに息を殺して近くまで歩み寄った。

管制施設の三階付近まで高く伸びたそのダクトは、まさに彼女にとって好都合な程度の隙間を有し、剥き出しとなった大きなボルト伝いによじ登れば、何とか三階ベランダへと乗り込む事が出来そうな状態である。

彼女はすぐさま鉄の梯子(はしご)を伝ってタンクの上へと這(は)い上がると、剥き出しになったボルトの様子やダクトの強度をマジマジと見定める。

そして、素早く一通りのチェックを済ませた上で、行けそうだと言う判断を脳裏に導き出すと、彼女は一つ大きく息を吐き出して心に弾みを付け、一気にそのダクトをよじ登り始めた。

幼い頃から厳しい戦闘訓練を積み重ねて来た彼女にとって、この程度の障壁を乗り越える事など全く造作も無い事であろうが、それでも彼女が過酷な戦闘員としての生活から離れて、もう五年の月日が経とうとしている。

まだ成長期の過程に有ったあの頃に比べ、かなり体力が落ちてしまった事は否定出来ないし、体格が一回りも大きくなってしまった事は確かだ。

しかしこの時、そんな一抹の不安を抱えたまま望んだ彼女の登頂劇も、何のことは無い、ものの三分で終劇を迎える事となった。

勿論それは、彼女がダクトの最上部へと到達するまでに要した時間

の事である。

私もまだまだ捨てたもんじゃないわね。

草原地帯から吹き荒れる優しげな風に煽られながら、見晴らしの良いダクトの頂上付近で、ほんの少しの優越感に浸る彼女は、やがて直ぐ傍らに見えていたベランダの外壁へと視線を据えつけると、勢い良く身体を放り出して飛び移った。

そして、全く何も置かれていない殺風景なベランダの内部へと潜入すると、すぐさまドレススーツの左側内ポケットから短銃を取り出し、右側内ポケットから取り出したサイレンサーを取り付けながら、脳裏に描き出した空港管制施設の見取り図を参照し始めるのだ。

施設三階東側の大部屋と言う事は、第五会議室付近かしら。

位置的には北側の非常階段の方が近いけど、ギャロップがそろそろ行動を起こす頃だろうし、南側の非常階段を目指すのが得策よね。

アリミアは慎重に大きな窓ガラスを通して部屋の中を覗き込むと、抱えたボックスの中から小さなスプレー缶を取り出し、素早く窓ガラスの内鍵付近に円を描くように白い泡を吹き付ける。

そして、間髪を置かず、右手に握り締めた短銃のスライドを引き絞ると、躊躇(ちゅうちょ)無くその円の中心部目掛けて弾丸を撃ち込んだ。

パリン！

高性能なサイレンサー効果により、けたたましい銃声は完全に押さえ付けられ、非常に粘着性の高い泡が、割れた窓ガラスの全壊を食い止める。

勿論、描き出した円内部で飛び散った、ガラス片の細かな音色まではかき消す事が出来なかったが、それでも全く人気の無い大会議室内においては、それで十分な程度であったと言えよう。

やがてアリミアは、無様に穴の開いた窓ガラスから左手を差し込んで中から鍵を開けると、物音を立てないよう静かに窓ガラスを開いて、素早く大会議室内へ潜入した。

廊下側への出入り口となる通用口小窓から零れる光によって、薄っすらと照らし出されたその大会議室の様相は、非常に質素で機能的な作りとなっており、整然と並べられた長テーブルとパイプ椅子以外に、特に彼女の目を引くような物は無かった。

彼女はすぐさま足音を殺したまま通用口付近まで忍び寄ると、その扉に右耳を宛がうような仕草で静かに両目を閉じる。

そして、ドクドクと脈打つ胸の鼓動を、ゆったりとした深呼吸で整えつつ、聴覚のみで形成された想像の世界観によって、廊下側の様子に探りを入れ始めた。

時間的にはまだ多くの労働者達が、この施設内に残っていると推測されるが、この時扉の向こうから聞こえて来たのは、断続的に唸り

を上げる機械的な音だけであり、外の通路に人が居るような気配は全く感じられなかった。

それもそのはず、彼女がいるこの区画は、非定期的に使用される多目的会議室や、自動で運行する機器類が数多く存在する空白地帯であり、普段からそれほど人が多く出入りする場所ではなかったのだ。

勿論、だからと言って、このまま他の誰とも出くわさずに、施設最上階の空港管制室まで到達する事など不可能な事であろうし、空港関係者である事を示す身分証明証すら持たない彼女が、道に迷ったなどと言う与太話(よたばなし)で、無用な戦いを避け続ける事など出来るはずもなかった。

この時、彼女が直ぐにこの会議室を飛び出さなかったのは、今だ数多くの一般民間人達が残されたこの施設内において、激しい銃撃戦を展開するような事態を避けたい思いが強かったからであり、彼女は出来る限り人目を憚(はばか)った行動を突き通すつもりだったのだ。

ズッズーーン！！

しかし次の瞬間、そんな彼女の願いを聞き入れるかのように、突然大きな爆発音が周囲に響き渡ると、続いて地鳴りにも似た小刻みな震動が、空港管制施設全体を揺り動かす。

爆発の規模としてはそれほど大きくは無いようだが、やがて異常事態を察知した警報システムが、けたたましいサイレンを吐き散らし始めると、空港管制施設内は俄(にわ)かに慌しい雰囲気へと包み込まれていった。

勿論、この爆発を誘発した人物とは、アリミアの行動を外部から補佐する為に、武装決起軍を装って草原地帯へと身を潜めたギャロップであり、彼はアリミアが工作任務を遂行する間中、ずっと外部に敵の目を引き付ける役割を担っていたのだ。

（館内放送）

「非常事態発生。非常事態発生。現在オクラホマ都市に出現した武装集団の一部が、ここオクラホマ空港施設に対して攻撃を開始した模様です。館内に残る作業員は、速やかに地下シェルターへと非難してください。尚、空港警備部隊からの情報によれば、武装集団の攻撃は施設南側に集中する可能性が高いとの事で、非難時は北側の非常階段を使用してください。また、万が一の事態に備え、エレベーターの運行を完全に停止します。現在エレベーターに搭乗している方は、最寄の階で停止した後、速やかにエレベーターから降機してください。繰り返します・・・。」

さすがギャロップね。良い仕事するわ。

まさにベストタイミングとはこの事よね。

まるで私の事を何処かで見ているみたい。

ズッズーーン！！

そして再び大きな爆発音がアリミアの耳元へと届けられると、彼女はすぐさま手に持つ短銃を強く握り締め、静かに開け放った会議室の扉から勢い良く通路へと飛び出した。

館内放送を聞く限り、彼女の一番の懸念事項であった一般民間人達は、どうやら北側の非常階段から地下へと非難してくれるらしい。

勿論、それによって彼女の目指す空港管制室が、完全に蛻(もぬけ)の殻となる事は無いだろうが、それでも彼女が多くの一般民間人達を巻き込む可能性はかなり低くなったのだ。

やがてアリミアは、躍り出た通路の壁際に背を向けて張り付くと、南北に伸びる一直線の道筋をそれぞれ見据えた後で、全く躊躇(ちゅうちょ)無く、南側の非常階段を目指して南下を開始した。

今彼女が居る地点から南側非常階段までの道順は、突き当たったT字路を左。次の十字路を右。最後のT字路を右の順で辿れば問題ない。

後は他の誰とも出くわさない事だけを祈って、全速力で通路を駆け抜けるだけだ。

彼女は通路の曲がり角へと差し掛かるたびに、次なる経路の様子を注意深く観察する行動だけは省略しなかったが、それでも完全に足音を消し去ったまま、俊敏(しゅんびん)な動きで順調に道筋を辿って行った。

しかし、やがて彼女がようやく最後のT字路へと差し掛かった時、突然何かの異変を感じ取って足を止めると、即座に彼女は壁際に体勢を低くした状態でへばり付いた。

誰か来る！人数は・・・。一人・・・か。

こんな状況下で施設内を一人で徘徊するなんて、この施設の警備員か何かかしら。

可哀想だけど・・・。

機密性の高い通路の中に響き渡るその足音は、ゆっくりとでは有るが確実にアリミアが潜む通路角へと向けられている。

それは恐らく、彼女の存在を察知しての行動ではないだろうと推測されるが、周囲に全く身を隠す場所など無い寂寞（せきばく）とした通路内において、もはや二人の遭遇劇は避けようの無いものだった。

アリミアは、その人物が通路の角へと差し掛かろうとした瞬間、先手を打って勢い良く相手に飛び掛ると、有無を言わさず左手で相手の首元を掴み取り、思いっきり右膝を相手の腹部へと突き立てた。

ドスッ！！

するとこの時、全く一言も発する事を許されなかったこの男は、悲しくもアリミアに対して少しも抵抗する事も出来ずに、更には、一体何が起きたのかと言う詳しい事態を理解する暇も与えられないままに、彼女の目の前で無様にも膝を屈する事となってしまった。

背中に自動小銃を抱えたこの男は、明らかに施設警備員と言うよりは、何処かの兵士である事を匂わせる風貌をしており、恐らくは日々訓練に明け暮れる毎日を送る兵士の一人なのだろうが、アリミアはその余りにあっけない幕切れに、少し軽い溜め息を吐き出してし

まった。

その後アリミアは、とりあえずこの倒れこんだ男の身体を、出来るだけ目立たぬよう通路の隅まで引き摺って行くと、途中で男の頭から滑り落ちたベレー帽を拾い上げるため、徐に左手を伸ばした。

しかし次の瞬間、彼女の視線の先に浮かび上がった小さな軍章に気が付くと、彼女は突如として表情を強張らせてしまった。

親衛隊！！！？

彼女の過去の記憶に強く刻まれていたその軍章は、「梟」をモチーフとして装飾された特徴的なものであり、帝国内では親衛隊と呼ばれる畏敬集団「フランクナイツ」の兵士である事を示すものだ。

勿論、皇帝を守る事にのみ主観を置いたこの皇帝専属自兵集団が、何の理由もなくこんな地方空港施設内に配備されているはずも無い。

彼女はこの時、少なからず静かな意識の水面に、突然巨大な雫を叩き落されたかのような衝撃を打ち付けられてしまったのだが、すぐさま体勢を低くして壁際に張り付くと、注意深く周囲の様子を窺う素振りへと移行した。

何故こんな所に親衛隊の兵士が・・・。

見たところ単独行動のようだけど・・・。

何か有るのかしら・・・。

彼女が潜む通路周辺部は、その後も全く人気の無い廃墟のような雰囲気を保ったままであり、別の兵士達が後に続いて一斉に押し寄せてくるような気配も感じられない。

アリミアは、不意に心の中に充満した強い疑念と強い警戒心を、直ぐに払拭する事が出来なかったが、それでもやがて、周囲の状況に何ら変化が見られない事を確認すると、直ぐ目の前に見えていた南側の非常階段へと向かって、再び走り出した。

06－18：○沸き起こる高揚感［5］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ１８「沸き起こる高揚感」

南側の非常階段へと続く重たい扉を開け放つと、その隙間から勢い良く涼やかな夜風が吹き込み、彼女の綺麗な紅い髪の毛を一斉に巻き上げた。

固いコンクリート製の素材で塗り固められたその非常階段は、横に三人並んで歩ける程度の幅を有しており、風雨を凌ぐ手摺り壁で周囲を覆われているものの、腰の高さから上階の階段底面までは、完全な吹き曝しとなっている。

彼女はすぐさま非常階段の踊り場へと身を乗り出すと、静かに重たい扉を閉めた上で、抱えたボックスの小さい蓋を開け放った。

そして中から掌サイズのＳＥＳ爆弾を取り出すと、脇に取り付けられたホイールをグリグリと回し、一瞬だけ真っ暗な外の世界へと視線を向けた。

ドッゴーーーン！！

するとその直後、彼女の居る非常階段から外側に見て、右手の方向にある建物へと命中した一発の擲弾が、真っ白な閃光を周囲に振り撒きながら強固な建物の外壁を吹き飛ばした。

薄暗い平原地帯の中心部から放たれたその光矢は、勿論、アリミアの居るこの建物を直接狙ったものではないのだが、それでも瞬間的判断で手摺り壁の陰へと身を伏せた彼女の周囲に、破壊的な乱気流の渦を生み出す程度の威力は十分に有していた。

広範囲に渡る破壊兵器の脅威に曝された施設南方部において、そこに身を置く事自体が、非常に危険極まりない愚行であったに違いないが、言うまでも無くそれは彼女達自身が望んでそうした一つの演出であり、このような状況下を作り上げる事で、彼女の目指す施設最上階への道筋を、確実に確保して置きたい思いが有ったのだ。

やがて、周囲で激しいうねりを見せていた大気の渦が次第に和らぐと、アリミアはすぐさま手に持つＳＥＳ爆弾の時限装置を作動させ、手摺り壁の直ぐ横に置き放つ。

そして、草原地帯に潜むギャロップが、次なる砲撃を開始するまでの間隙を縫って、勢い良くその非常階段を駆け上がり始めた。

この管制施設の外観は、一、ニ階を構成する複雑な施設部分と、その上に建つ複数の小さな建物群を除けば、綺麗なスクエア状を縦に伸ばした直方体となっているが、施設三階部分から直接最上階までを繋ぎとめるこの非常階段だけが、唯一その形状に歪さを添えている。

この南側非常階段は、施設内部に存在する北側の非常階段とは事情が異なり、何かしらの有事が発生した時以外、完全に出入り禁止となっている場所だが、部外者の侵入を拒むように固く閉ざされた各階の扉も、破壊的手段を持ちえた彼女に対して、何ら有効な防衛機能を有していなかった。

やがて、延べ九階分もの階段を全速力で昇り終えたアリミアは、終端を示す最後の手摺り壁へと右手を付いて俯くと、激しい無酸素運動の連続から悲鳴を上げ始めた肺を労わる様に、ゆっくりと深く深呼吸を繰り返した。

さすがにこれだけの段数を一気に駆け上がった直後ともなれば、せめて激しい胸の鼓動が治まるまで、しばしの休息を取りたい所ではあったが、アリミアはすぐさまボックスの中から粘土状の物体と取り出すと、ほとんど休む事無く次なる行動へと移り進んだ。

彼女は静かに最上階フロアへと続く扉の前まで歩み寄ると、起用に左手だけを使用して、ドアノブの下に見えていた鍵穴の中へと、その粘土状の物体をネリネリと捻り込んで行く。

そして、徐に右手に持った短銃のスライドを引き絞り、完全に穴を塞がれたその鍵穴へと照準を宛がうと、三階踊り場付近に設置したＳＥＳ爆弾が起爆するタイミングに合わせて、即座にトリガーを引き放った。

ドドーーーン！！

強烈な衝撃音を伴って非常階段下階部分を吹き飛ばした大きな爆発とは異なり、彼女の目の前で炸裂した閃光は、それほど大した威力を有していなかったが、どうやら彼女の目論んだ鍵の破壊と言う目的だけは達せた様である。

悲しくもドアノブ付近を完全に吹き飛ばされてしまったその扉は、ブスブスと鬱陶しい黒煙を吹き上げながら、ゆっくりと彼女の目の

前に最上階フロア内部を晒し始めたのだ。

アリミアは即座にその機能を完全に失ってしまった扉の隙間へと手をかけると、思いっきりそれを開き放った勢いを持って、建物内部へと転がり込む。

そして、その通路内に屯(たむろ)していた二人の警備兵の存在を素早く察知すると、すぐさま短銃の照準を二人へと定めて、猛然と襲い掛かった。

（警備兵A）
「な！何者だ！？」

（警備兵B）
「うあっ！！何っ！？」

しかしこの時、まさか建物の最上階に突然侵入者が姿を現すなど、二人は少しも予測していなかったのだろう。

警備兵としては劣悪と非難されるほど、鎮撫(ちんぶ)な反応しか示す事のできなかった彼等は、鋭い戦意を持って二人に迫り寄るアリミアに対して、全く成す術もなく床に這(は)い蹲(つく)る運命を辿る事になるのだ。

警備兵の一人は、余りの突然の出来事から気が錯乱(さくらん)したのか、腰にぶら下げたホルスターを完全に放置したまま、事もあろうか銃を構えるアリミアに対して、無意味な警棒による反撃を試みる。

一方、後方に控えて脅えるもう一人の警備兵もまた、瞬間的反応を要求される状況下において、一生懸命になってホルスターの中から短銃を取り出そうとしていた。

もはや彼女はこの時点で、短銃のトリガーを引く事を止めた。

彼女は一人目の警備兵が振り翳す警棒の軌跡を、ヒラリと小気味良くかわして見せると、すれ違い様に思いっきり振り上げた右足を、彼の側頭部へと叩き入れる。

そして間髪を置かず、今だ短銃を取り出す事も出来ない、情け無い警備兵へと素早く接近すると、心の中に滲んだ謝罪の言葉と共に、強烈な鉄拳を腹部に突き刺してやった。

先手必勝とはよく言ったものだが、これ程までの醜態を曝け出してしまった二人が、如何にアリミアに対して先手を取る事が出来ていたのだとしても、訪れる結末はやはり少しも変わらぬ悲惨なものであったに違いない。

長いブランクを少しも感じさせぬ彼女の素早い行動は、まさに電光石火と言うに相応しいものであり、実戦経験すら無いような一介の警備兵などに、それを抑止する事など出来るはずもなかった。

やがてアリミアは、無残にも床の上へと倒れこんだ警備兵の首元から、一枚の認証カードをそっと奪い取ると、空港管制室へと続く自動ドアの前まで歩み寄り、丁度彼女の胸の高さへと取り付けられていた認証システムにそれを翳した。

そして、正当な要求に対しては全く抗う事さえ知らぬ愚鈍なシステムが、機械的な甲高い音を放って彼女の目の前に新たなる進路を示し出して見せると、彼女は何ら躊躇う事無く直ぐにその内部へと足を踏み入れた。

空港管制室前の警備兵二人を難なく打ち倒しす事に成功した彼女だが、まだこの施設内には数多くの警備兵達が残されている事は確かであり、その全てがこの空港管制室前に殺到してしまえば、如何に彼女の能力を持ってしても作戦任務を続行する事は不可能となる。

彼女が南側非常階段を爆破したのは、この最上階の異変に気付いた警備兵達が、容易に上階へと到達する事が出来ないようにする為の手段であり、彼女が外部攻撃に迷彩した行動を順守しているからとは言え、いつまでも彼等の目を欺き続ける事など出来るはずもなかった。

本来であれば、北側の非常階段も爆破しておく事に越した事はないのだが、それでは折角ギャロップの仕業に見せかけたカモフラージュが、容易に見抜かれてしまう恐れもあったし、何より今だ施設内の異常事態に気付かぬ一般民間人達が、整然と避難行動を完了させているとも考え難い。

それは警備兵達の移動ルートを残すと言う危険な行為に他ならなかったが、彼女は最終的に北側の非常階段は残しておくべきと言う判断を採用したのだった。

やがて彼女が空港管制室へと続く短い通路を抜け出ると、正面と両側面を大きな窓ガラスで囲われた小広い部屋へと突き当たった。

オクラホマ空港滑走路一帯を見渡せるその部屋は、民間航空管理システムを操る様々な機材が並ぶ先進的な作りとなっており、天井からぶら下がる巨大なモニターが一際人目を引く他、部屋の中央部には管制官達が使用する業務端末が、設置された机毎に綺麗に並べられている。

先ほど打ち鳴らされた避難警報の効果もあってか、部屋の中は普段の慌しい様子を少しも感じさせない、閑散(かんさん)とした雰囲気が漂っていたが、それでも彼女が懸念した通り、一般民間人の中には、避難警報に全く従わなかった者もいたのだ。

（アリミア）
「そのまま動かないで！抵抗しなければ危害は加えないわ！」

アリミアは即座に、右手に構えた銃口を彼等へと翳(かざ)すと、大きな声を張り上げて不正侵入者らしい挨拶を発して見せた。

この時、アリミアの大声に驚きの表情を見せて振り返ったのは、管制官らしき体格の良い男が一人と、小柄で細身の女性が二人であり、彼等は何か急を要する残務にでも追われていたのだろうか、爆発音が響き渡る施設内においても、自分の業務端末の前に張り付いたままだった。

（管制官男）
「ん・・・？何ですか？何か御用でも・・・。あっ！！」

（管制官女Ａ）
「きゃぁっ！！じゅ・・・！銃を持ってるわ！」

（管制官女Ｂ）
「えええええっ！？ちょ・・・ちょっとぉ！！何の冗談！？悪ふざけはやめてよ！！」

真っ赤な高級ドレススーツを身に纏(まと)い、見るからに社長秘書のような気品さえ感じられるアリミアの立ち姿に、一瞬だけ普段通りの反応を見せてしまった男の一人が、彼女の右手に構えられている短銃

の存在に気付いた直後に驚きの声を上げる。

そして他の二人の女性もまた、背後から突然銃口を突きつけられると言う非日常的状況に、至って新鮮味に欠けた甲高い悲鳴を張り上げた。

（管制官男）
「何者だ！？何にしここに来たんだ！？」

（管制官女Ａ）
「だ・・・駄目よ！！無茶しないで！！」

（管制官女Ｂ）
「そうよ！相手は銃を持っているのよ！」

（管制官男）
「心配するな。こう見えても俺は普段から格闘技で身体を鍛えているんだ。俺が時間を稼ぐから、お前達二人はその隙に外へ逃げろ。」

唐突に訪れた危機的状況の中で、二人の女性を守り抜くと言う、勇猛果敢で健気な男性を演じて見せるつもりでもいるのか、男が威圧的態度を持ってしてアリミアに鋭い視線を投げつける。

そして、まるでドラマや映画のワンシーンを再現するかのように、格好の良い決め台詞（ぜりふ）を言い放って見せると、徐に机の脇に立て掛けてあったモップを手に取り、大上段に振りかぶって見せた。

これだから素人は・・・！！！

（アリミア）
「動かないでって言ったでしょう！！」

パシュッ！！

アリミアはすぐさま、この軽率で愚かな行動に打って出ようとした男に対して、躊躇（ちゅうちょ）なく短銃のトリガーを引き放った。

彼女にとって、動くなと言う宣言をいとも簡単に無視して見せた彼の行動は、まさに撃ち殺してくださいと言わんばかりの自殺行為に他ならず、更には反撃さえ試みようとする相手に対して、いつまでも寛容（かんよう）な態度を突き通す事は出来なかった。

しかし、彼女の放った怒りの弾丸が男の身体を捕らえたかと言えばそうでは無く、全く事なる弾道を描き出した弾丸は、男の持つモップの柄先（えさき）へと命中し、乾いた金属音を周囲に吐き散らしただけだった。

（管制官男）
「うあっ！！」

（管制官女Ａ）
「きゃぁぁぁぁっ！！」

（管制官女Ｂ）
「嫌ぁぁぁぁぁっ！！」

（アリミア）
「静かにしなさい！！」

吹き飛ばされたモップの柄先(えさき)が、綺麗な放物線を描き出して床の上へと転がり落ちると、恐怖に掻き立てられた彼等の叫び声が管制室内へと木霊した。

一方的暴力をひけらかして抑圧を強要する相手に対し、あえて自ら立ち向かおうとする彼の意識は賞賛に値するが、それでも無駄な抵抗と言うものが、どれだけ無駄な行為であるのかと言う事を、少しは理解しておくべきである。

勿論、平和的世界の中に頭の先までどっぷり浸かり切った彼等を、一様に非難する事など出来るはずも無いのだが、アリミアは再び鋭い殺気を込めた銃口を男へと宛がうと、沸き起こる苛立(いらだ)ちを吐き散らすかのようにして、軽率な行動を取ろうとしたこの男の姿を睨め付けた。

（アリミア）
「貴方の勇気は認めてあげるけど、向こう見ずにも程があるわ。彼女達の事を守りたいのなら、そこでじっと大人しくしてなさい。いいわね。」

（管制官男）
「う・・・。ぐっ・・・・。」

そして、完全に男の戦意を削ぎ落とすほどの威圧的態度を持って、彼にそう強く釘を刺して見せると、やがて彼女は一番近くにあった管制端末へと歩み寄り、肩にかけたボックスを床の上へと置いた。

彼女としても、彼等の事を無為に虐(しいた)げるつもりなど全くなかったのだが、それでも本当の殺し合いと言うものを露ほども知らぬ彼等に

対しては、口で言って聞かせるよりも、遥かに効果を期待できる行為であった事は確かだ。

その後彼女は、全く一言も発する事無く後退(あとずさ)りしてしまった男から、ゆっくりと銃口を取り除いてやると、少しだけ優しげな笑みを投げかけた上で、静かに椅子の上へと腰を下ろした。

彼女としても、偶々（たまたま）ここに居合わせただけと言う不運なる三人の男女に対し、少しでもその恐怖心を和らげてやりたい気持ちがあったのだが、その元凶こそが自分にあるのだと言う当たり前の事実を再認識すると、何一つ気の利いた言葉を投げかけてやる事が出来なかった。

やがて彼女は、全く抵抗する素振りを見せなくなった三人から視線を逸らすと、再び厳しい表情を醸(かも)し出して自らの任務へと立ち返った。

彼女は床の上に置き放ったボックスの大きな蓋を開け放つと、中に収められていた円筒形の物体から、何やら細長いコードを引き伸ばす。

そして、目の前にある業務端末の小さなジャックに、その先端部分を差し込むと、端末を操作するキーボードなどには一切目もくれず、円筒形の物体に取り付けられていた電子機器の赤いスイッチを押した。

アリミアが持ち込んだこの円筒形の物体は、「スパイロウ」と呼ばれる小型巡航ミサイルの一種であり、その中のシステムに内蔵された強力なハッキングソフトが、彼女に与えられた論理的破壊工作任務の大半を、全自動で代行してくれる事になっている。

勿論、彼女自身も情報工学分野に精通した高い情報処理能力を有している訳だが、非常に短期間でそれを可能とする特化型ソフトウェアに取って代われるはずも無く、この作業に関して彼女の出る幕は全く無かったと言えよう。

その後アリミアは、このハッキング処理が完了するまでの間、手に持つ短銃を無意味にひけらかして見せ、恐怖による抑止力を持って管制官三人の行動を縛り付ける事に注力するのだが、彼女の元に訪れた静かな一時は、それほど長くは続かなかった。

やがてボックスの中から、ハッキング処理の進行状況を知らせる機械的音声が鳴り響く。

ピー。

一つ目に鳴り響いた音声の意味するところは、民間航空管理システム側から、軍事管制システム側への強制アクセスルートを確保する事に成功した事を示すものである。

このハッキングソフトを製作した人物と言うのが、両システム間に秘密の抜け道を用意した張本人である以上、この作業はそれほど困難なものでは無かったと言えよう。

勿論、その人物がロイロマール派の人間であった事は言うまでも無い。

ピー。

二つ目に鳴り響いた音声の意味するところは、軍事管制システム内に、隠蔽型情報収集ウィルスを投入し、密かに帝国軍機密情報を抜き取る事に成功した事を示すものである。

この機密情報の中には、オクラホマ軍事基地管轄下にある全ての軍事基地情報が含まれており、その中に、パレ・ロワイヤルミサイル基地の詳細情報が存在している事は、もはや考えるまでも無く当然の事であった。

ピー。

三つ目に鳴り響いた音声の意味するところは、軍事管制システム内に、増殖型超攻撃的ウィルスを投入し、システム内でその発症を確認した事を示すものである。

警戒レベル特A級の扱いを受けるこの凶悪なウィルスは、物理的に繋ぎとめられたシステムの全てを、一気に瓦解させる程の爆発的増殖力を有しており、これに対抗する為には、特殊な抗体を予めシステム内に常駐させて置く以外、何ら有効な手立てが存在しない。

勿論、帝国軍の東方戦線における重要な軍事管制システムともなれば、常時このようなウィルスに対抗し得る防御策が、幾つも講じられている事は間違いないが、それでもこの時、アリミアが投入したウィルスは、攻撃を受ける度に三度の変異を繰り返す、完全新種の変身型ウィルスだったのだ。

ボックスの中で三度目のシグナルが打ち鳴らされた時、アリミアは

ウィルスの破壊的活動の逆流を防ぐ為に、素早く業務端末に接続したプラグを引き抜いた。

そして、部屋の中央部に並べられた他の業務端末達が、破壊工作任務の成功を祝福する悲痛な叫び声を一斉に奏で始めると、彼女は不意に浮かべた笑みと共に、そのプラグコードをボックスの中へと放り投げて蓋を閉じた。

（アリミア）

「北側の非常階段はまだ安全よ。貴方達は直ぐに地下シェルターに避難した方が良いわ。私は用事が済んだから先に帰るわね。」

その後、ボックスのスリングベルトを肩から担ぎ上げて席を立ったアリミアは、俄（にわ）かに異常な気配を漂わせ始めた管制室内で、オロオロとするばかりの三人の管制官達に対し、優しげな口調を持ってそう忠告した。

そして、もはや彼女の障壁とは成り得なくなった彼等に向けて、可愛らしい笑みと共に軽く右手を振り翳（かざ）して見せると、今度は先を急ぐようにして管制室内を飛び出して行った。

この時点で彼女は、与えられた作戦任務の九割方を、ほぼ完璧に近い形で成功させる事が出来たと言っても過言ではない。

しかもそれは、敵の強大な軍事拠点に対する破壊工作を敢行すると言う、軍上層部内でも非常に成功確率が低いと言われていた作戦任務においてだ。

オクラホマ都市を攻略するという、最終的作戦目標を掲げるトゥア

ム共和国にとって、この作戦の成功如何によって齎される戦局への影響度は、かなり高い比率を占めており、この時彼女の成し遂げた功績は、決して小さなものでは無かった。

しかし、彼女がその功績を称えられ、多大な恩賞を受けるにしても、それは彼女が無事に生還を果した時のみに限られる。

作戦任務の残り一割が、この敵地のど真ん中から逃げ果せる事に有る以上、如何に破壊工作任務を成功させたからとは言え、まだ彼女には、おいそれと気を緩める事など出来なかった。

やがてアリミアは、管制室入り口付近へと舞い戻ると、今度は北側の非常階段を目指して通路を爆走し始めた。

彼女は既に、逃走ルートとして別の道筋を見出していた為、敵の警備兵達が殺到するであろう北側の非常階段を利用して、下階に下りようなどとは考えていなかったのだが、この時彼女が目指していたのは、寧ろ屋上へと上り詰める為のルートだった。

それは彼女が入手した帝国軍機密情報の全てを、出来る限り早い段階で友軍へと送り届ける為の手段であり、彼女はこの情報を納めたスパイロウ巡航ミサイルを、この管制施設屋上から打ち放つつもりなのだ。

正確な情報のやり取りを妨害する為の技術が、著しく発達した近代戦争の中において、より確実にその情報を相手の元に送り届ける為には、その発信側を出来るだけ受信側に近付ける事が、最大の近道であると言っても過言ではない。

しかし、物理的に遠く離れた敵の拠点に身を置く彼女が、自ら仲間達との距離を詰める事など不可能な事であり、彼女はその役割を、このスパイロウ巡航ミサイルに担(にな)わせようとしていたのだ。

ドドーーーン！！

アリミアの目の前に、ようやく北側の非常階段が姿を現し始めた頃、再び重たい爆発の震動が管制施設内を襲った。

一つ前の爆発から勘案しても、それはかなりの時間差を生じていたようにも感じられるが、ギャロップの方もそれなりに苦労を強いられていると言う事なのだろう。

やがてアリミアは、薄暗い北側の非常階段の入り口まで到達すると、何ら躊躇(ちゅうちょ)する事無く屋上へと続く短い登り道を駆け上がった。

そして、程無くして辿り着いた最後の扉の前で、簡易的なシリンダー型キーを素早く開錠すると、彼女は逆手に回したドアノブと共に、満天の星空が迎え入れる綺麗な闇夜の中へと身を乗り出した。

少しばかり強い風が吹き荒れる物静かな施設屋上部は、建物の形状そのままの広さを有していた事は間違いないが、出入り口となる非常階段を囲う塔屋以外にも、大きな四基の貯水タンクや、積み上げられた資材の山々が軒(のき)を連ね、決して解放的なイメージを有してはいなかった。

しかし、彼女が屋上の最南端パラペット付近まで歩み寄ると、全く様相の異なる神秘的な自然の暗がりを背景に、眩(きら)いほど煌びやかな

オクラホマ都市の姿が浮かび上がり、彼女の意識を不思議な情緒(じょうしょ)が優しく包み込むのだった。

アリミアは、吹き荒れる涼やかな風に舞い上げられたポニーテールを、静かに左手で掻き揚げて見せると、ひんやりと冷たいコンクリート製の手摺(てす)り壁の上に右手を付いて、遥か南の夜空に浮かぶ星々へと視線を宛がった。

綺麗ね・・・。

見せ掛けの美しさなんて、今まで全く何の興味も無かったけど、それでも人の心を揺り動かすのに十分な程の魅力を有しているのよね。

人と人との交わりに際しても、それは良き緩衝材(かんしょうざい)となって、お互いの心を穏やかにしてくれるもの。

私ももっと・・・。

いえ・・・。私のような人間に、そんな生き方は無理よね・・・。

やがてアリミアは、徐にボックスを床の上に置き放つと、まず始めにその中からスパイロウ巡航ミサイル本体を取り出し、次いでその奥へと仕舞い込まれていた幾つかの部品を手際よく取り出した。

軽くて丈夫な素材で作られたその部品の数々は、スパイロウ巡航ミサイルの発射台を構築する為の部品であり、全てを組み終えるのにさほど多くの時間を必要としない代物だったが、彼女は直ぐにその

発射台の組み立て作業へと取り掛かった。

細長い折り畳み式部品を開いて、もう一方の対となる部品に括り付け、支えとなる予備を含めて合計六本の脚部を床の上へと斜めに置く。

そして、瞬間的凝固性の高い吸着液を排出するボタンをそれぞれ六回押下し、ミサイル発射台の土台となる骨組みを床の上に固定化すると、更にその上に半円筒形の発射レールと、スパイロウ巡航ミサイルを取り付け、最後にミサイルの推進力を生む動力棒をミサイル本体に差し込んだ。

このスパイロウ巡航ミサイルは、見た目はかなり小さな部類に属するものだが、それでも遠く離れたナルタリア湖付近をも、軽く飛び越える程の巡航距離を有している。

しかも、この巡航ミサイルに記憶された機密情報を取り出す為に、態々（わざわざ）その着地点まで本体を回収に赴く必要は無く、勿論、その本体を決して捨て置く事は出来ないのだが、それでも時間的浪費を避ける為、上空を飛行中でもアクセス可能なように、特殊な暗号化通信機器を搭載していた。

アリミアは、一通りの手順に従い発射台を組み終えると、躊躇無くスパイロウ巡航ミサイルの発射ボタンを押し、発射までのカウントダウンを開始した赤いランプの点滅に合わせて、直ぐに逃走する為の準備作業へと取り掛った。

彼女はボックスの中からナイフシースを取り出すと、後ろ腰へとそれを回して括り付け、更に取り出した三本の弾装マガジンを、真っ赤なドレススーツの内ポケットの中に捻じ込んだ。

そして、徐に床の上に置き放った短銃を拾い上げると、やがて彼女は再び南側手摺(てす)り壁から覗き込むようにして、管制施設周辺部の状況に意識を巡らせた。

屋上から見渡す限りでは、激しい銃撃戦が展開されている様子も無く、また、数多くの兵士達が蠢(うごめ)いている気配も感じられない。

ここまで出来る限り隠匿(いんとく)した行動に徹してきたとは言え、私が軍事管制システムに対して行った破滅的行為に、彼等が今だ気付かぬはずも無いし、対応が余りに遅すぎるのではないのだろうか・・・。

それとも発生した異常事態の大きさに、あたふたと手を拱(こまね)いているとでも言うのだろうか・・・。

彼女はこの時、しばし心の中に沸き起こった疑念の中に思考を泳がせていた。

勿論、この巡航ミサイルの発射を見届けさえすれば、後は逃走するだけと言う終幕を迎えつつあった状況に、たとえそれが容易なものではないにしろ、何処か心の奥底に油断のようなものが存在していたのかもしれない。

その瞬間は、彼女の全く予期せぬ事態として、突然、彼女の元に舞い降りたのだった。

（アリミア）
「！！？」

不意に彼女が後ろを振り向いた時、彼女は全身を駆け抜けた電気的衝撃によって、その活動の全てを停止してしまった。

驚きの余りに半開きとなった口元からは一言も発する事が出来ず、全てを白霧（はくむ）の中へと誘（いざな）われた思考が、一点に収束した視線すら動かせずにいる。

幾ら彼女が油断していたからとは言え、彼女に全く気付かれる事無く、その背後を取るなど決して容易な事では無いはずだが、この時何故か、彼女の振り返った先には、一人の男が立ち尽くしていたのだ。

（アリミア）
「シュバルツ・・・。ノイン・・・。」

しばしの時を経て、彼女がようやく発した言葉の中に、彼の名前が示されていた。

彼女は彼の事を知っていた。

やがて、管制施設屋上に佇(たたず)む二人の元へと、冷たく強い風が吹き荒れた直後、空気を切り裂くような鋭い発射音と共に、スパイロウ巡航ミサイルが夜空へと舞い上がった。

06－19：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［1］（前書き）

ジョハダルのセリフを一部修正しました。
新：オクラホマ攻略部隊がナルタリア湖周域に到達するまで残り2時間弱
旧：オクラホマ攻略部隊がナルタリア湖周域に到達するまで残り1時間

ストーリーには影響ありませんが、後続の戦闘で結構時間を使う羽目になってしまい、本隊の到着想定時刻をずらしました。
ご了承くださいＴＴ

すみません。同じ内容でもう一箇所修正しました。
新：残り2時間を切ったと言う逼迫（ひっぱく）した・・・
旧：残り1時間を切ったと言う逼迫（ひっぱく）した・・・

06－19：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［1］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ19「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

前へ前へと突き動こうとする闘争心を、優しく包み込むような静寂さの中に、何処か懐かしい安らぎを与える蟲の歌声が響き渡っている。

りんりんと。

一寸先さえも見えぬ真っ暗闇の中で、ふんわりと心地よい香りを漂わせる緑の木々達が、緩やかに流れ去る風の妖精達と一緒に、和やかな踊りを踊っている。

さらさらと。

閉じた瞼の裏側からでも解る、そんな心安らぐ自然の風景は、全く俗世間の蠢きを少しも感じさせない、穏やかで静かな空気の流れだけを漂わせているようにも感じられるが、それもまた、過酷な死闘の幕開けを呼び覚ます、虚飾の前触れに過ぎない事を、彼女は知っていた。

薄暗いコクピット内に漂う綺麗な薄緑色の燐光の中に浸り、じっと両目を瞑って静かなる時を過ごしていた彼女は、しばし心の奥底で逸る気持ちを抑えられなくなると、決まって直ぐにコンソール脇のインフォメーション表示ボタンを押した。

この時、彼女達パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略部隊が、ネニファイン部隊仮駐屯地を出立してから、既に二時間が経過しようとしていたが、今も尚、彼女達はその作戦軍事目標に対する攻撃を開始してはいない。

勿論、それが予め予定されていた作戦通りの行動なのだと、頭の中では解っていても、何処かヤキモキとした心の葛藤に突き立てられると、気持ちを鎮める大自然の慰みすら、鬱陶しく感じてしまうのだ。

彼女達は今、パレ・ロワイヤルミサイル基地が存在すると言う、ナルタリア湖南東部周域の密林地帯に身を潜め、じっと息を殺して作戦開始予定時刻を待っていた。

セレナ山、カノンズル山の谷間に当たるこの地域は、密林地帯と称される事からも解る通り、未開の地たる風貌をそのままに残した完全不整地地帯であり、装輪車輌を用いた移動はほぼ不可能であると言っても良い。

当然それは、帝国軍の秘密基地が存在するこの地域において、その場所を容易に特定できるような道筋を、綺麗に描き出す事が出来なかった為であり、現在では遥か昔に栄えた西方の都から伸びる細道が、僅かに残されているだけであった。

その為、この地方周域に展開していると予測される帝国軍の防衛守備隊は、その多くが装軌車輌か低空移動機構を備えた兵器に限定されている事は間違いなく、保有する兵力も決して多くは無いであろうとの見解が一般的だ。

勿論、この秘密基地に関する確固たる情報がほとんど得られてない以上、その見解は憶測の範疇を超えない、机上の空論であると言わざるを得ないが、それでも帝国軍の有する軍事開発技術力が、著しい進歩でも見せない限り、そこに然したる違いは存在し得ないであろう。

（セニフ）

「突入開始時刻まで後１０分。・・・。後１０分か・・・。」

セニフはコンソール画面上に映し出された、先程とほとんど変わらぬ間怠っこしい情報に対し、鼻で軽く溜め息を吐き付けて見せると、自分自身の心を静かに説き伏せるように小さく呟いた。

トゥアム共和国軍のオクラホマ攻略部隊がナルタリア湖周辺を通過するまで、残り2時間を切ったと言う逼迫した時間帯にありながらも、今だ彼女達がパレ・ロワイヤルミサイル基地に突入を開始していないのは、諜報部から齎されるであろう同基地に関する情報を、作戦開始時間ギリギリまで待っていたからである。

勿論、南方都市アザンクウルを出立したリバルザイナ共和国空軍の到達を持って、パレ・ロワイヤルミサイル基地に対する軍事行動が明らかとなってしまう為、彼女達に与えられた待機時間は間もなく終了を迎える事になるが、それでもネニファイン司令部は、この不確定要素の強い秘密基地の情報を、出来れば入手してから攻撃を開始したい思いが有ったのだ。

コツン。

セニフは目の前のＴＲＰスクリーン上に映し出される、薄暗い森の中を一通り見渡した後で、ゆっくりと戦闘開始の準備に取り掛かろうとしていたが、不意にコクピット内部に響き渡った軽い金属音に気が付くと、直ぐに通信機の受信モードを切り替えた。

これは敵軍事拠点周域で隠蔽状態を堅持する必要の有った彼女達が、仲間達との通信を可能とする為の唯一の方策であり、有線した通信機装置を相手方の機体近くまで射出すると言う、全く古典的な通信手段であった。

（ジョハダル）
「セニフ。フロル。聞こえるか？そろそろ突入開始の時間だ。最終確認をしておくぞ。フロア隊は陣形最左翼に展開し、カノンズル山麓まで一気に突入する。フィールド防壁内部での通信は困難な事が予測される為、戦闘中の判断は各自に任せるが、なるべく密集隊形を維持して通信回線の維持に努めるように。」

（セニフ）
「了解。」

（フロル）
「了解。」

（ジョハダル）
「それから敵兵器の多くは俺達と同じＤＱ部隊だろうが、敵の軍事拠点周域には数多くの地雷原や、野戦砲台が設置されている可能性もある。前進には細心の注意を払えよ。まあ、こんな密林の中なら、遠方から狙撃されるような心配も無いだろうがな。」

（フロル）

「突入フォーメーションはラインで良いのか？」

（ジョハダル）

「小隊フォーメーションはバックスラッシュ隊形で、左からセニフ、俺、フロルの順で並ぶ。最前衛のセニフは何か不穏な気配を察知したら、直ぐにワイヤーロープ付きセンサーで周囲の状況を確認しろ。センサー回収が困難な状況でも、出し惜しみする必要はないからな。」

（セニフ）

「うん。解った。」

今回のパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セニフの上官となる小隊長「ジョハダル・ムーズ」が、軍事目標突入前の小隊内最終確認作業をする為、低く渋い声色を通信システムへと投下する。

今年３１歳を迎える彼は、面長な顔貌（がんぼう）に、細く垂れ下がった目尻が特徴的な人物であり、それなりの軍歴を有したトゥアム共和国軍正式軍人の一人だ。

年齢的に人の上に立つべき立場柄、最近では周囲を気遣うような言動が見られるようになったが、これでも若い頃は上官泣かせの荒くれ者として有名を馳せた人物である。

彼の有するＤＱ操舵技術に関しても、凡人を遥かに凌駕（りょうが）する熟練したものであり、ネニファイン部隊内においても常に上位者たる存在感を醸（かも）し出す、有能なＤＱパイロットであった。

一方、セニフの同僚として同じフロア小隊に名を連ねる「フロル・

クローチェ」は、浅黒い肌に少し厚めの唇が特徴的な２６歳の長身女性で、ブラックポイントで開催されたＤＱＡ大会に、チーム「ガンナール」の攻撃的アタッカーとして参加していた経歴を有している。

彼女はその独特のしゃがれ声と、女性らしさを脱色した言葉遣いから、しばし豪胆で野放図（のほうず）なイメージを植え付けられがちなのだが、実際の所は、心優しく温厚な性格の持ち主であり、ネニファイン部隊初期研修時に、何処か暗く落ち込んでいたセニフの事を気遣って、優しく話しかけてきたのも彼女である。

以降二人は、何の気兼ねも無く会話をする間柄にまで至るのだが、どんな相手に対しても分け隔てなく接する気持ちの良いその性格は、セニフに限らず誰からも好まれるものであった。

（ジョハダル）

「オクラホマ攻略部隊がナルタリア湖周域に到達するまで残り2時間弱。第七機械化歩兵部隊による基地制圧を考慮すれば、周辺周域の敵部隊掃討にそれほど多くの時間をかけている余裕は無い。当面は目の前に立ちはだかる敵機だけを撃破して、残りは後続部隊と支援部隊に任せる事にしよう。俺達先発隊はまず、帝国軍の防衛ラインを突破し、敵陣奥深くまで進攻してパレ・ロワイヤルミサイル基地の周辺状況を探る。そして、その上で適宜（てきぎ）状況に応じて、後続部隊への行動指標を提示する。尤（もっと）も、司令部が待っている情報が入手出来さえすれば、もっと楽な戦局を望めようものだが、現時点で何ら音沙汰（おとさた）の無い砂上の楼閣（ろうかく）に、多大な期待を置く事も出来ないしな。」

セニフはこの時、ジョハダルの発した言葉の内容を、悲観的な意味合いで捉えてしまうと、頭から被ったヘルメットの重みに任せて静

かに下を俯き、真一文字に伸ばした下唇をキュッと強く噛み締めた。

そして、ゆっくりとパイロットスーツの上から、紅いヘアピンを忍ばせた内ポケット付近へと両手を宛がい、声にならない呟きを持って、心の中に浮かび上がった人物の名前を口ずさんだ。

胸の奥底で再び重たい鎌首を擡げ始めた、短絡的な焦りの想いを、必死に強く心の中で捻じ伏せるようにして。

（ジョハダル）
「まあ、それはそれとして、とりあえず当初の作戦プラン通りの行動を開始するぞ。二人とも準備はいいな。」

（フロル）
「ちょっと待て！！何か来るぞ！！方角０１３０！！」

（セニフ）
「？」

その時、不意にサーチレーダー上に浮かび上がった、不思議な光点の存在に気が付いたフロルが、慌てた様子で部隊メンバー達への注意喚起を促す。

そして、直ぐに正面モニター脇のサーチ感度計をグルグルと回して調節すると、しばしこの不審な光点の動きに意識を注力させた。

見たところそれは、北方からほぼ一直線にこちら側へと突き進んで来る様子が窺え、移動に際する地形的制約を受けていない事から推測しても、何かしら上空を飛来してくる物だと判断される。

この時彼女達は、自分達の隠蔽行動が、帝国軍に察知されてしまったのではないかと言う疑念を抱き、即座に戦闘態勢への移行を余儀なくされてしまったのだが、自動追尾システムに対する警戒警報を発する気配すら見せなかったサーチシステムは、ただ静かにその進行軌跡を描き出すだけであった。

（セニフ）
「ミサイル？・・・かな。」

（フロル）
「そうみたいだな。」

（ジョハダル）
「小型の巡航ミサイルか？帝国軍の攻撃にしては余りにチンケなものだな。もしかして司令部が首を長くして待っていた物が、ようやく到着したってことか？」

やがて、周囲に何の被害を齎す事もなく、悠々と頭上を飛び越えて行く一発のミサイルに対し、彼女達は懐疑的視線を持って、静かにそれを見送る事しか出来なかったのだが、ジョハダルが何気なく口にしたその憶測は、決して真実と遠く離れたものではなかった。

昨今、高濃度フィールド粒子を用いた敵通信システムへの妨害行為が、恒常化した戦場においては、その通信連絡中継ポイントを上空に構える例は決して少なく無く、このように攻撃を意図しないミサイルのほとんどが、何かしらの情報伝達を目的としたものであると言っても過言ではない。

この時、帝国領土奥深くから飛来したそのミサイルは、紛れも無くアリミアがオクラホマ空港管制施設屋上から撃ち放った、スパイロ

ウ巡航ミサイルに間違いなかったが、彼女達が駆るトゥマルクの通信機能程度では、その事実までを察知する事は出来なかった。

（フロル）
「どうする?ジョハダル。このまま司令部からの新しい指示を待つか?」

（ジョハダル）
「いや。どちらにせよパレ・ロワイヤルミサイル基地に対する、攻撃指示は変わらんだろう。新しくプランの変更が必要となれば、その時、司令部から追って指示があるはずさ。先発隊は先発隊らしく、戦闘の口火を真っ先に切り落とす役割を、忠実に担う事としよう。・・・っと。どうやら同じような決断を下した奴等に、先を越されてしまったようだな。」

その時、彼女達の隠れ潜む場所から東側に望む密林の奥深くで、大きな木々達の間隙を縫(ぬ)って見え隠れする、三つの光点が煌(きら)びやかに浮かび上がった。

それは勿論、彼女達と同じ立場でこの戦場の入り口手前付近に潜伏していた、キャリオン隊の発したバーニヤ光である事は言うまでも無く、その光は先発隊としての責務を語ったジョハダルの思いを、軽く嘲笑(あざわら)うかのようにして、勢い良く北上を開始したのだった。

（セニフ）
「行こう!!」

やがてセニフは、力強い声色の号令を通信システム内に響き渡らせて、小隊長たるジョハダルのお株を完全に奪い去ってしまうと、素早くトゥマルクのシステム状態をアクティブモードへと移行し、そ

の上で思いっきり右足でフットペダルを踏み込んだ。

そして、トゥマルクの後部バーニヤから吹き曝(さら)した激しい熱波によって、静かな深い眠りへと落ち込んでいた密林の中を、煌々（こうこう）としたオレンジ色の光で照らし出すと、彼女は搭乗するトゥマルクの機体に急激な加速度を与えて、一気に待機ポイントを飛び出して行った。

（フロル）
「全く・・・。落ち着きの無い娘だね。少しばかり大人しいかと思って見ていれば、直ぐにこれだ。」

（ジョハダル）
「まあいいさ。この際、セニフの熱い戦意に乗せられてやろうぜ。」

（フロル）
「良いのかジョハダル。お前は立場上、制止する側に回る役だろ？」

（ジョハダル）
「なぁに。俺もこういうのは嫌いじゃないんでね。そう言った損な役柄はフロルに任せる事にするよ。それに、噂に聞くあいつの暴れっぷりを、得と拝見したくもあるしな。」

ジョハダルはそう言い放つと、ヘルメットゴーグル越しに不敵な笑みを浮かべ、チラリと視線を宛がった右手後方に控えるフロルに、トゥマルクの右手を軽く振り翳(かざ)して見せた。

彼は自らに与えられた小隊長と言う立場を良く理解してはいたが、それでも自分の持てる能力の全てを、凡将たる指揮官らしく、後方からの叱咤激励(しったげきげい)のみに浪費するつもりは無かった。

勿論、それなりの自制心と統制力を持ってして、暴れ狂う部下達の手綱をしっかりと握り締める必要はあったが、彼はこの時、目の前で産声を上げ始めた過酷な戦場に対して、それほど誇大な恐怖心を抱いてはいなかった。

トゥアム共和国軍がパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略の為に投入した兵力は、先発隊となるネニファイン部隊ＤＱ４個小隊１２機に、後発隊のＤＱ４個小隊１２機と、決して大部隊と称するには程遠い戦力であったと言わざるを得ないが、それでも同基地の完全なる占領を目標として投入される歩兵部隊には、第七機械化歩兵部隊の精鋭達１個中隊１５０名が名を連ね、更には強力な火力を有したリプトンサム部隊の支援砲撃車輌２個中隊２０輌が後方に控えている。

そして何より、隣国であるリバルザイナ共和国空軍の協力により、同地域における絶対的航空優勢権の掌握が期待できる状況下と有らば、大部隊の運用が困難を極める密林地帯での戦闘において、それほど悲観的な雲行きに萎縮してしまう必要もなかった。

やがて二人は、真っ暗な闇夜の中へと先行したセニフに感化される様にして、搭乗するトゥマルクの後部バーニヤを大きく吹き上がらせると、彼女の辿り経た軌跡を少しずらしたライン上を北上し始めた。

そして、無数の木々達が生い茂る黒と言う大地上に、眩い光のペイントを持って綺麗な曲流を描き出すと、まるで導火線を辿る火花のような様相を醸し出して、濃密な殺意の渦巻く戦場と言う巨大な爆発物へと直走るのだった。

06―20：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［2］（前書き）

脱字を一箇所修正

06－20：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２０「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

暗視モードへと切り替えたＴＲＰスクリーン上に、映し出された色濃い密林の木々達が、ほんの数秒を待たずして画面の左右へと消え去る刹那的光景の中で、必死に次なる進行ルートを見定めようとするセニフの視線が軽快な踊りを披露する。

小刻みな震動で身体を揺り動かされながらも、卓越した操舵技術で凹凸の激しい山岳地帯を快走するその姿は、まさに凡庸ならざる彼女の能力の高さを物語っていたが、近接戦闘におけるＤＱの扱いを最も得意とする彼女にとって、それは至極当然の器量であったかもしれない。

彼女は猛烈なスピードに駆り立てたトゥマルクの挙動を、巧みなレバー操作によって安定化させつつも、時折視線を配したサーチレーダー上から、周囲の状況を読み取る作業を決して怠らず、更には来るべき帝国軍との戦闘に備え、所有する火器の最終チェック作業をも、新たに平行作業リスト内へと加え込んだ。

普段から「おっちょこちょい」で「ずぼら」な性格の持ち主として知られるセニフだが、殊更ＤＱを操る技術に関して称するなら、類稀なる資質を持ち合わせた人物である事は間違いない。

勿論それは、頭で考えてどうこう出来る類のものではなく、恐らくは彼女の身体に染み付いた動作が、思考を飛び越えて自然と表面化したものなのだろう。

（セニフ）

「・・・！！見つけた！！敵哨戒機３機！！機体識別ポールポンド３０３型。」

やがて、森の奥深く奥深くへと侵入を果したセニフは、北西部へと向かってなだらかな上り坂を形成する小丘を登り切った先で、サーチレーダー上に浮かび上がった三つの頼りない光点に直面した。

この時彼女は既に、パレ・ロワイヤルミサイル基地周辺部へとばら撒かれた阻害粒子の海、高濃度フィールド防壁内部へと潜行した状態にあり、透過性と指向性に飛んだサーチシステムも、近視眼的世界を投影するに止まっていたのだが、彼女の目の前に虚ろながらも浮かび上がった赤い光点の反応は、まさに彼女が敵機体反応を感知しうる位置にまで、接敵した事を意味していた。

彼女は程無くして判明した帝国軍防衛守備隊の機種情報にチラリと視線を宛がうと、一瞬だけ後方から追随してくる味方機の様子を気にする素振りを見せたのだが、帝国軍防衛守備隊の機体反応が三つ以上出現しなかった事と、１５年も前に製造された型遅れＤＱのみで編成されていた事から、彼女は味方機の到着を待たずして、直ぐに単独での突貫攻撃を決断するに至った。

この帝国軍防衛守備隊を編成するＤＱ「ポールポンド」は、拠点防衛用に開発された重装甲、重火力志向の鈍重な機体であり、「鈍足の亀」の異名を持つ旧式ＤＱである。

全体的にゴツゴツと角張った機体フォルムに、弁当箱のような四角く不細工な頭部を乗せ、各所マニピュレーター稼動域を食い潰してまでも、分厚い装甲を身に纏うその姿は、まさに動く要塞と称する

に相応しいものであった。

しかしそれは、機動性と汎用性が特長であるＤＱ開発思想から完全に逸脱した、過去の異物であると言っても過言ではなく、勿論、その機体総重量から装備できる火器も、高火力の兵器を装備できるという利点はあるのだが、射線を遮る数多くの遮蔽物が存在する密林地帯においては、機動性で勝るトゥマルクの敵とは成り得ない代物であった事は確かだった。

事前になるべく密集して行動するようにと、小隊長のジョハダルから釘を刺されていたにもかかわらず、セニフがその指示に反するような行動を選択したのも、まさにその点に勝機を見出したからに他ならず、一定の間隔を置いたデルタ隊形で周囲の警戒に勤めていた敵哨戒部隊に、お互いを支援する為の集結時間を与えない意味も込められていたのだ。

やがてセニフは、ある程度帝国軍防衛守備隊との遭遇ポイントを見定めると、トゥマルクの走行スピードをより高きものへと駆り立てた上で、乗機の右手に装備した新兵器「バーナーランチャー」の出力を上げ始める。

この時既に、帝国軍防衛守備隊側も、突然密林地帯に姿を現したセニフ機に対応しようと、定石通りの迎撃体勢に移行する意図を示し出していたのだが、それもまた猛烈なスピードで接近を試みるセニフの行動によって、脆くも初期段階で早々に頓挫してしまうと、彼等は差し当たって各々の力量のみでセニフの相手を務める羽目となってしまった。

セニフはまず、一番最初に各個撃破すべき対象を有効射程範囲内に

捕らえると、即座に左手に装備したアサルトライフル「ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４」を構えて、数発の鉄甲榴弾を撃ち放ってみせる。

そして、遥か前方の森の奥深くで炸裂した鉄甲榴弾が、瞬間的閃光を伴って密林地帯の内部を華々しく照らし出した直後、彼女は搭乗するトゥマルクに急激な左旋回を加えた。

これまで、あからさまに攻撃的意欲を滲み出しつつ、相手への猪突を敢行してきたセニフだが、彼女は元々強力な火器を有するこのポールポンドと、馬鹿正直に真正面から撃ち合うつもりなど無かったのだ。

ドッゴーーーン！！

すると次の瞬間、周囲に轟音を吐き散らしながら炸裂した大きな爆発が、旋回を試みる以前のセニフの進行方向先で華を開かせた。

眩い閃光と激しい爆風によって周囲の木々達を暴れ狂わせたその爆発は、帝国軍ＤＱポールポンドの放った強力な範囲攻撃型兵器「ＫＧＮ－１０１グレネードガン」によるものであり、猛烈なスピードで接近するセニフ機を牽制する意図が含まれていた他、あわよくばその一撃を持ってして、一気にセニフ機を撃破してしまおうと言う、打算的願望を込めたものだった。

しかし、ポールポンドのパイロットが思い描いた贅沢（ぜいたく）な目論みは、直前に進路を左方向へと切り替えていたセニフに対して、全く何ら少しもダメージを負わせる事が出来ず、挙句の果てに、爆風で乱れ飛んだ阻害粒子の渦によって、セニフ機の反応を完全に見失う結末

を引き起こしてしまう事になる。

勿論、高濃度フィールド下と言うお互いに対等な条件下においての戦闘である以上、セニフにとってもそれは同じ事が言えたが、両者が搭乗するＤＱの単位時間当たりの移動距離を考慮すれば、どちらがより優位な立場にあったのかは一目瞭然であっただろう。

セニフはすぐさま周囲に立ち聳(そび)える木々達の間を間抜いて、トゥマルクに急激な右旋回を強いると、先程とほぼ変わらぬ位置に鎮座しているはずの敵ＤＱ目掛けて、再度フットペダルを強く踏みしめる。

そして、目標地点へと向かって、ほのかに下り坂を形成する山の斜面を利用して、トゥマルクに急激な加速度を加え付けると、相手に全く反撃の余地を与えぬ勢いで猛然と襲い掛かった。

この時、完全に旧式の機器のみで構成されるポールポンド側としては、機動性に勝るトゥマルクをなるべく接近させない様、持てる強力な火力を振り翳(かざ)して、相手に中遠距離戦闘を強いる他、有効な戦い方は無かったのだが、一瞬の判断の遅れからトゥマルクに対する牽制機を取り逃がしてしまうと、何ら成す術も無く簡単にセニフの接近を許す羽目となってしまった。

バシャ！！

ドドドーーーン！！

次の瞬間、鈍足の亀たる異名に恥じぬ、緩慢な旋回行動に終始したポールポンドが、更にその後方へと回り込むような形で急接近した

トゥマルクの攻撃によって、猛烈な破壊力を有する特殊な近接格闘用兵器の生贄（いけにえ）に吊るし上げられた。

分厚い装甲板に覆われた機体の各所から飛び散った無数の火花が、眩いばかりの白濁（はくだく）とした世界を作り上げると、瞬間的に増殖した異様な色彩の業火と共に勢い良く四散する。

外部からの物理攻撃に対しては非常に強固な防御力を誇っていたポールポンドだが、セニフがすれ違い様に放ったバーナーランチャーは、非常に発火性の高い粒子の塊を相手機体へと浴びせかけるものであり、装甲の隙間から入り込んだ粒子自体が爆発の根源となる為、その持てる防御力は何ら効力を発揮する事無く、脆（もろ）くも内部から打ち砕かれる事になってしまったのだ。

勿論、その粒子の猛威が敵味方関係なく発揮される事を考慮すれば、相手と余りに接近し過ぎた状況下では使用を控えざるを得ないだろうし、逆に相手と離れすぎた状況下では粒子が相手の機体内部へと浸透しきらない恐れもある。

機動性を売りに開発されたに関わらず、近接格闘戦を不得意とする精密機械ＤＱにおいて、バーナーランチャーのような非接触型近接戦闘用兵器は、非常に有益な武器の一つであると断言できるが、それでもかなりシビアな運用を余儀なくされる難儀（なんぎ）な武器である事は確かだった。

（セニフ）
「次は・・・右後ろ！！」

この時、一機目の敵を難なく撃破する事に成功したセニフだが、単独で複数の敵へと突撃を敢行した彼女に休む暇は一時も与えられな

い。

密林内部へと迸った眩い閃光の中に、仲間の無残なる敗北を見出した残りのポールポンドが、まさに仇討ちと言わんばかりの勢いを持って、白い小鼠へと襲い掛かってきた。

セニフはすぐさまフットペダルを目一杯まで踏み込んで、一つ目の戦場からの離脱を図ろうと試みたのだが、比較的距離の近い場所に位置していた右後方のポールポンドに、攻撃の手番を奪い取られると、強力な破壊力を有する「ＬＧＧ－５０５Ｌガトリングガン」によって、激しい炸裂弾の雨霰に見舞われてしまった。

ガンガンガンガンガン！！

周囲のぐるりを取り囲んだ木々達の妨害をもろともせず、トゥマルクの機体周辺部へと到達を果した弾丸が、幾重にも織り成す小さな花火を打ち鳴らしながら炸裂する。

高濃度フィールド下に置かれた密林地帯での中遠距離攻撃としては、まさに最も有効な手段と言えるであろう物量を持った波状攻撃に対し、素早い旋回行動を持って回避を試みたセニフだが、その余りにも無分別に繰り出された大量の弾丸を、全てかわす事など不可能な事であった。

やがて、回避するに至らなかった炸裂弾の破片が、トゥマルクの装甲板を叩き付ける耳障りな音を発し続ける中で、セニフはすかさず反撃の意思を示すかのように機体を反転させると、左肩に装備された「１２０ｍｍミドルレンジキャノン」を相手の射撃地点付近へと

撃ち放った。

勿論この時、今だ直視射撃できるはずもない暗がりの先に居る敵に対し、正確な精度を持って砲撃を見舞う事など出来るはずもなく、彼女の放った一撃は、単に相手を牽制する意味を込めたものだった。

しかし、やはりと言うべきか、当てずっぽうに撃ち放った彼女の砲弾は、敵の潜む暗がりに到達するより以前に、その射線上に立ち塞(ふさ)がった大きな木の幹へとぶち当たり、あらぬ方向へと兆弾した後に、無意味にその破壊力を披露して見せただけに終わった。

（セニフ）
「ちっ・・・！！くぉぬぅぉっ！！！」

するとセニフは、真っ暗な密林の中を猛スピードで突っ走りながら、左手に装備したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４を構え持つと、もはや目には目を的な思想で、相手の攻撃に対抗すべき量の鉄甲榴弾を浴びせ返し始める。

勿論、この程度の火力で簡単に撃ち倒せるような相手ではない事は、彼女も十分承知の上だったが、完全に自由な攻撃を繰り広げるポールポンドに対し、何かしらの阻害要因を付け加えてやる必要は有った訳だ。

パチパチと周囲に激しい火花を吐き散らしながら応酬されたその撃ち合いは、お互いを隔てる大量の木々達の存在が無ければ、数機分のＤＱを一気に血祭りに上げられる程の殺傷力を有していたが、この時彼女達はお互いにほとんどダメージを与える事が出来ず、双方の有する大量の弾丸と少しの時間を浪費しただけだった。

このままじゃ、残るもう一機が支援に駆けつけるのも時間の問題・・・。

その前に何としても、こいつに接近して・・・。

やがて、一本目の弾装を丸々撃ち切ってしまったセニフが、思いのほか梃子摺る結果となってしまった状況に、小さな溜め息を吐き出しながら、素早く弾薬の換装作業を走らせた。

そして、両者が吐き散らした濃密な硝煙の立ち込める森の中を、大きく迂回するような動きで旋回しつつ、猛烈な攻撃力を見せ付けるポールポンドに対して、何とか付け入る隙を見出そうと、不毛な反撃を開始しようとしていた。

しかしその後、不思議と一度鳴り止んだ相手の攻撃は、何故かその後もしばらくの間、再開される事は無かった。

それはセニフと同じように、弾装を全て撃ち切ってしまったからなのか。

それとも機体に何かしらのトラブルを抱え持ってしまったからなのか。

セニフの目の前で拙い光点を浮かび上がらせていただけのサーチレーダー上からは、その事実を備に読み取る事は出来なかったが、実際の所、このポールポンドが攻撃を停止した本当の理由とは、単に先の激しい撃ち合いの最中で、セニフ機の反応を完全に見失っていた為であった。

自らが望んで無差別攻撃を敢行したのだとは言え、自らの行為で自らの立場を不利的状況に陥れてしまったこのパイロットの行動は、まさに自業自得と呼ぶに相応しい愚行であったと言えるが、現時点でほぼ最新型と言えるサーチシステムを搭載していたトゥマルクでさえ、相手の所在を掴み取るのに四苦八苦している状況である。

彼に与えられた古臭い骨董品を思えば、それは当然致し方無い結果と言うべきなのだろう。

しかしこの時、セニフに与える事になってしまったその僅かな時間が、その後の彼の運命を左右するものに成り得た事は確かだった。

セニフはその一瞬の間隙を利用して、すぐさまサーチレーダーを広短域モードから狭長域モードへと移行すると、搭乗するトゥマルクの走行スピードを急激に緩めた上で、アクティブ型サーチシステムを起動する。

そして、敵ポールポンドが潜伏する周域に向かって索敵用素粒子を大量に照射すると、１２０ｍｍミドルレンジキャノンに次弾を装填して、相手の一挙手一投足に意識を集中させた。

セニフの用いたこのアクティブ型サーチシステムは、自らが索敵用素粒子を周囲に照射する事で相手の居場所を突き止める、云わば能動的サーチシステムの事であり、主に戦闘エリア等で使用されるパッシブ型サーチシステムとはタイプの異なるものである。

このサーチシステムを利用する当たって特筆すべき点は、まさにその持てる索敵距離の長さと精度の高さにあるのだが、索敵の為に照

射する素粒子が相手サーチシステムに逆探知される可能性が非常に高く、自らの所在をなるべく隠匿（いんとく）して行動すべき戦場においては、しばし使用を敬遠される代物だ。

しかしながらこの時、セニフがこのアクティブ型サーチシステムに期待していた効果は、寧ろその欠点部分によって導かれる相手の動向にあり、挙動不審な動きを見せる敵ポールポンドの詳細動向を掴み取る事などではなかった。

やがて程無くして、セニフの発した索敵用素粒子による不可視ビーム攻撃は、彼女の望んだ通り、相手ポールポンドの感知センサーに捕らえられる事となり、彼女の目の前に映し出されていた赤い光点が、まるで疑似餌に誘われ泳ぎ寄る魚のような動向を見せ始めた。

するとセニフは、すかさずトゥマルクの後ろ腰付近に取り付けた、ダミーイリュージョンカプセルを出力最大値に設定した上で投下し、高濃度フィールド下であるにも関わらず、自機の周囲にＦＴＰフィールドを張り巡らせる。

そして、敵ポールポンドが再び強烈なガトリング攻撃を再開したタイミングを見計らって、相手との射線上中間点地表付近へと１２０ｍｍミドルレンジキャノンを撃ち放つと、その爆発の咆哮（ほうこう）に身を眩（くら）ませて、一気に全速力でトゥマルクを駆り出した。

そう。彼女はこの時、アクティブ型サーチシステムの欠点を利用して、相手サーチレーダー上にトゥマルクの機体反応を強く刻み込むと、１２０ｍｍミドルレンジキャノンの砲撃で混沌としたフィールド粒子の嵐を作り上げ、更にその上で、ダミーイリュージョンと言う姑息な身代わりにその機体反応を引き継がせようと目論んでいた

のだ。

ダミーイリュージョンと言う相手サーチシステムへの撹乱兵器は、戦場において非常に優れた効果を発揮する小道具であり、最近では特に物珍しくも無い極一般的な兵器の一つである。

その為、前線で戦闘を繰り広げるパイロット達は、常にこの撹乱兵器の存在を頭の片隅に置きながら戦う事を余儀なくされるのだが、この時セニフが発動した変わり身の術は、その可能性に十分留意していた相手パイロットの意識を、完全に欺(あざむ)いて見せるほど巧妙且つ手際の良いものであり、ＦＴＰフィールドを展開しながら大きく反時計回りに旋回したトゥマルクの存在に、ポールポンドは少しも気付く気配を匂わせなかった。

やがて、無意味にも偽りの光点目掛けて、強力な火力を血気盛んに撃ち放ち続けていたポールポンドは、左側面から急襲したセニフにバーナーランチャーの放つ幽玄な濃霧を浴びせかけられる直前まで、その実り無き行為にずっと意識の全てを注力し続けていた。

バシャ！！

ドドーーーン！！

完全に棒立ち状態のままセニフの側面攻撃を受ける羽目となったポールポンドは、トゥマルクの右手から噴射された、見えない粒子の渦に取り囲まれた刹那(せつな)、自らの放つガトリングガンのマズルフラッシュによって、自らの運命に終止符を打つ事となる。

薄暗い密林内部に迸(ほとばし)る無数の火花が、ポールポンドの機体周辺部で鮮やかなイルミネーションを形成すると、その鈍重な機体の各所から一斉にブスブスと焦げ臭い黒煙を立ち上らせ、無残にも単なる鉄屑(てつくず)同然の姿に成り果てたのだった。

この時、ポールポンドの機体が爆発四散と言う結末を免(まぬ)れる事が出来たのは、幸いにもこのパイロットが遮二無二(しゃにむに)ガトリングガンを乱射していた為であり、セニフは相手の吐き散らす大量の火花によって、離脱を図る以前に発火粒子が引火してしまう事態を危惧し、バーナーランチャーによる攻撃を少し遠目から実施する事にしたのだ。

勿論、この無差別的破壊力を有するバーナーランチャーの特性を考慮すれば、この時下した彼女の判断は、純然たる正当性を有していたと言えるのだろうが、それでも彼女は、その有効射程範囲標準値を超える距離を補う為、必要以上にエネルギーの浪費を余儀なくされる羽目となってしまった。

06－21：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［3］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２１「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

（セニフ）
「やっぱ・・・！！出力が足りない！！」

猛烈なスピードに駆り立てたトゥマルクの機体を、そのままの惰性で離脱させた後、すかさず背後から迫り来る三つ目の殺意に相対（あいたい）する為、軽快な足取りでステップを刻み込んだセニフが、思わず大きな声を張り上げてしまった。

この時、二機目のポールポンドを撃破する際に使用したバーナーランチャーによって、大量の蓄積エネルギーを吐き出してしまったトゥマルクには、もはや彼女の思いを体現できるほどのエネルギーが残されていなかったのだ。

しかも、最新型ＦＥ転換システムによるエネルギー充填処理も、トゥマルクの出足の遅さを完全に払拭する事が出来ず、彼女はサーチレーダー上に映し出された敵影の接近を目の当たりにしながらも、何ら打つ手の無いと言うもどかしい状況下で、表情を顰（しか）めてみせる事しか出来なかった。

トゥマルクのフル稼動最低ラインまで・・・。あと・・・３０秒！？

（セニフ）
「そんなっ・・・・！！」

フットペダルを踏めども踏めども、一向に加速度を伴わないトゥマルクの反応に、さすがのセニフも己の身の危険を察したのだろうか、生き延びる為のせめてもの抵抗と題して、即座にトゥマルクの機体を敵ポールポンド側へと反転させると、左半身に構えた体勢のまま、ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４と１２０ｍｍミドルレンジキャノンの銃口を翳(かざ)した。

そして、トゥマルクの特長である機動性を完全に捨て去った状態で、強烈な攻撃力を有するポールポンドとの真っ向勝負を挑まねばならない事態を覚悟し、森の奥深く闇の向こう側から出現する敵の動向に意識を集中した。

ドガッ！！

しかし次の瞬間、彼女の目の前で炸裂した一つの閃光が、真っ暗な密林地帯を表示していたＴＲＰスクリーン中心部で強い光を四散させると、その全てを覆い潰すかのように蒼白(あおじろ)い世界を爆発的に増殖させた。

（セニフ）
「う！！・・・なにっ！？」

ＴＲＰスクリーンの瞬間的光量調節機能をも、一瞬にして半壊状態へと陥れたその特殊な光は、機体被弾時に生じる激しい衝撃を少しも感じさせなかった事からも、単に相手の視界に対する目晦(めくら)まし攻撃であった事が解る。

勿論、頭から被ったヘルメットゴーグルによって守られていた彼女の視力は、ほとんどその機能を失う事無くやり過ごす事が出来たのだが、コクピット内部から外界の様相を窺い見る、唯一の手段を奪

われてしまった彼女は、目前へと差し迫った敵ポールポンドの動向を、全く察知する事が出来なくなってしまった。

彼女はすぐさまモニターの感度調節ダイヤルをグリグリと回し、ＴＲＰスクリーンの表示機能回復に努めるが、スクリーン中央部で不気味にうねり狂う虹色の波紋は、彼女が思うほど簡単に消え去ってくれるものではない。

彼女はサーチレーダー上のほぼ中心点付近まで接近した敵影にチラリと視線を宛がいつつ、何ら成す術もなく敵の殺意に曝されると言う恐怖と、中々に訪れない敵の攻撃の狭間で、焦燥（しょうそう）たる思いに苛（さいな）まれてしまったのだが、やがて、徐々に隅の方からその機能を回復していったＴＲＰスクリーン上に、不思議な二つの光点が映し出されると、彼女の立場を一気に好転させるほどの、激しい銃撃音が撃ち鳴らされたのだった。

（ジョハダル）
「お転婆娘が。一人で気張るなよ。ポイントを独り占めにしようったって、そうは行かないぜ。」

（セニフ）
「ジョハダル！？」

彼女の元に訪れた二つの光点の内、先行する一つ目の光点から、眩い光矢の群れが一斉に放たれると、まるで激しい横殴りの雨を髣髴（ほうふつ）とさせる軌跡を描き出して、セニフの直ぐ目の前まで迫っていた、敵ポールポンドの巨体へと襲い掛かる。

そして、敵機体周辺部で炸裂した無数の閃光が、半狂乱的爆風の渦を形成すると、間髪を置かずして、後方から進行速度を増速させた

二つ目の光点が、敵ポールポンドとの距離を一気に詰め、構えた「ＧＭＭ３０－グレネードガン」から、止めとなる五つもの擲弾（てきだん）を相手へと撃ち放った。

ドドドーーーン！！

完全に無防備となる右側面からの奇襲攻撃に加え、全く反撃する間も無く浴びせかけられた強力な五つの擲弾（てきだん）によって、強固な防御壁を完全に打ち砕かれてしまったポールポンドが、巨大な火柱を立ち昇らせて朽ち果てる。

これまでトゥアム共和国軍最新式のＤＱトゥマルクを相手に、骨董品である旧式ＤＱポールポンドのみで苦戦を強い、セニフ機を撃破寸前にまで追いやる事に成功した帝国軍パイロット達だが、暴走するセニフ機を追って駆けつけた二人の手練（てだれ）を前に、最後は呆気ない幕切れを迎える事となってしまった。

勿論、高濃度フィールド防壁下と言う状況にあって、後続の二人が難なくセニフの元へと辿り着く事が出来たのは、セニフが二機目のポールポンドとの間で繰り広げた激しい撃ち合いによって、真っ暗な密林地帯に眩い閃光を轟かせていた為であり、そう言った意味では、無闇やたらとガトリングガンをぶちばら撒いた帝国軍パイロットの行為は、少し軽率な行動だったと言えるかもしれない。

とは言え、機動性に劣るポールポンド側が、セニフのトゥマルクを圧する為には、少なからずその優位性を剥奪する必要性が有り、彼等は持てる火力を振り翳（かざ）す事でしか、セニフの行動を抑止する事が出来なかったのだ。

やがて、真っ暗な大自然の闇夜に産み落とされた真っ赤な炎が、慌

しかった森の中を鎮める穏やかな朱色（しゅいろ）を周囲に漂わせる中で、静かに一人佇んだままのセニフ機の元へと、二人の仲間達が駆け寄ってくる。

（ジョハダル）
「どうだセニフ。動けそうか？」

（セニフ）
「うん。大丈夫。ありがと。機体ダメージはほとんど無いし、チャージもようやく４０％超えた所。でもＴＲＰスクリーンのど真ん中に、少し黒円が残っちゃった・・・。」

（フロル）
「ごめんごめんセニフ。まさかあの状況で、お前が相手と向かい合ってるなんて思わなくってさ。」

（セニフ）
「あー。あれ、フロルの仕業だったんだ。私はてっきり敵の攻撃かと思って、かなりドキドキしちゃったよ。」

（フロル）
「ドキドキするのはお前の勝手だけどさ。セニフ。相手だってプロなんだぞ。態々（わざわざ）危ない橋を選んで渡る必要もないじゃないか。もう少し私達との連携も考えて行動して欲しいな。」

（セニフ）
「あ・・・。うん。そだね。・・・あっはは。」

（フロル）
「あはは・・・。セニフ。お前ねぇ。」

（ジョハダル）
「まあいいさ。猪突猛進が売り物の突撃系跳ね馬相手に、自重しろって言う方が無理ってもんだ。初っ端からいきなり作戦無視して特攻するのも構わんが、せめて俺達が常に援護できる体勢を維持して突っ込め。いいな。セニフ。」

（セニフ）
「・・・うん。・・・解った。」

（ジョハダル）
「それと、その新兵器だが、連続して使用するには少々難があるな。敵部隊が全てポールポンドだけとは限らんが、もし同じようなタイプが相手なら、接近してグレネード弾を浴びせかける方が有効的だろう。攻撃パターンは当初の予定通り、セニフが囮。俺が牽制。フロルが止めの順で行くがどうだ？セニフ。何か不満は有るか？」

（セニフ）
「・・・ううん。・・・別に無いよ。」

（ジョハダル）
「それならばいい。セニフのＦＥチャージ処理が完了するまでの間、しばらくここで待機する。二人とも周囲の状況確認を怠るなよ。」

（フロル）
「了解。」

（セニフ）
「了解。」

ジョハダルは事前に「戦闘中の判断は各自に任せる」と言った手前、敢えてこのセニフの暴走行為を強く咎めるような事はしなかったが、それでも平然と危険極まりない単独戦闘に及んだ彼女に対し、程よくやんわりとオブラートされた言葉で釘を刺しにかかった。

勿論彼には、部隊内でも噂に高い彼女の戦闘能力を直に見物したいと言う、遊興的心情が存在していた事は確かであり、彼女の最も得意とするその能力を、必要以上に縛り付けてしまうつもりも無かったのだが、彼女と同様突撃系戦士である彼の目から見ても、この時彼女の見せた行動は、齎される成果に対して、リスクのみを一方的に積み上げているようにも感じてしまうものだった。

やがてジョハダルは、遭遇した三機の帝国軍哨戒部隊以外に、全く新手が現れる気配が無い事を確認すると、この暴れ馬たるセニフに対して、少し年長者らしき言葉を投げかけ始めた。

（ジョハダル）
「セニフ。お前は少し気持ちが逸っているようだが、功を焦って目的を失すれば、本末転倒もいい所だ。もう少し落ち着いて戦況を見定めてからでも、攻撃を仕掛けるのは遅くないんじゃないか？」

（セニフ）
「でも、それじゃあ、折角の奇襲攻撃が意味なくなっちゃうし、ぐずぐずしていると直ぐに敵の増援が駆けつけて来ちゃうよ。あんなガチガチの火力馬鹿相手に強固な防御ラインを敷かれたら、それこそ突破するのが難しくなっちゃうじゃん。」

（ジョハダル）
「いやいや、そういう事じゃない。俺が言いたいのは、危ない橋にも渡り方があるって事さ。幾らお前の戦闘能力が高くても、複数の

敵を相手に回して、簡単に勝利を収められないと言う事は、今の戦いで解っただろう。でも、今の戦いを俺達3人で同時に迎える事が出来ていたら、もっと楽に戦闘を終わらせられたと思わないか？」

（セニフ）
「・・・・・うん。まあ・・・。」

（ジョハダル）
「戦況を見渡すって事は、敵の動きだけでなく、味方の動きも良く見るって事だ。急造部隊に緻密（めんみつ）なチームプレーを望むのは無理かも知れないが、それでも一人より二人。二人より三人の方が、瞬間的攻撃力もアップするし、敵の攻撃意識を分散出来ると言うメリットもある。自分のDQ操舵能力を過信するのも良いが、もう少し俺達の力を頼ってみても良いんじゃないか？」

（フロル）
「そうそう。確かに私なんかじゃ、セニフの足元にも及ばないんだけどさ。セニフから見て、私はそんなに頼りない人間に見えるのか？こう見えて私だって人並みに傷付くんだぞ。」

（セニフ）
「そ・・・！そんなつもりじゃ・・・！そんな事、思って無いよ・・・。ただ私は・・・。私が頑張れば、頑張った分だけ、他の皆が楽になるんじゃないかって思って・・・。あ、勿論、相手の陣形や機種情報から色々ちゃんと考えて、一人で戦闘を開始する事に決めたんだよ。・・・結果は確かにこの通り、無駄に時間を浪費する羽目になっちゃったんだけどさ・・・。」

（ジョハダル）
「いいかセニフ。お前のその心意気は立派だが、戦場では常に能力

の高い方が最終的な勝利を掴み取る訳じゃない。射撃能力や回避能力に秀でているからと言って、必ず生きて帰れる保証なんて何処にも無いんだ。どんな高い能力を有した者でも、どんなに戦闘経験を積んだ者でも、常に生き延びる為の確率を上げる方策を捜し求めなければならないし、それを達成する為の努力を怠ってはならないんだ。確かに俺の目から見ても、お前は優れたＤＱパイロットだと思うが、勿体無い事に、お前はその持てる優位性を、態々（わざわざ）溝の中に放り込んで、必死に一人でもがいているようにも見える。もっと周りをよく見てよく状況を把握し、利用できるモノを出来るだけ有効的に利用すれば、お前にはもっと簡単に目的を達成する事が出来ると思うがな。」

（フロル）

「そう言う事。セニフはもっと周りの人間を信頼して、任せられる所は私等に任せときなって。うちの部隊の隊長を見てみなよ。部隊内の雑用は全部、あの鬼軍曹と猫目の姉ちゃんに任せっきりじゃないか。この戦場には、私やジョハダル以外にも、頼れる仲間達が一杯いるんだ。自分一人で何でもこなそうとしないで、他の仲間達と協力して戦って行こう。セニフ。私もお前の事、頼りにしてるんだからさ。」

（セニフ）

「・・・・・・うん。そだね。・・・・・・うん。」

セニフは、少し俯き加減で、そう前向きな返答を返して見せると、じっと目の前のＴＲＰスクリーン中央部に焼き付けられてしまった黒円へと視線を据付け、心の中に溜め込んだもどかしさを、大きな溜め息に乗せて吐き出した。

そして、自分が無意識の内に胸の内ポケット付近へと左手を宛がっ

ている事に気が付くと、無理やり両目を瞑って、胸の奥底から突き上げる強い想いを、静かに宥めにかかった。

彼女はジョハダルやフロルの投げかける極一般的な正論に対し、全く同意する意思が無かったかと言えばそうでは無く、寧ろ、戦場においては、周囲の仲間達と協力し合う事こそが、自らの願いを叶える上でも最良の方策であると言う事を既に知っていた。

しかし彼女は、例えそれが独善的判断による暴走行為である罵られる事になろうとも、自らの正当性を安易に擁護する正論の効用に囚われて、折角降って沸いた瞬間的攻撃のチャンスをみすみす見過ごす事など出来なかったのだ。

勿論、最終的に無駄な時間を浪費する結末を生み出してしまった以上、彼女も忸怩たる思いで自らの非を認めざるを得ず、彼女が尻すぼみに口篭ってしまったのもその為であるが、彼女は自身の心の水面下で不完全燃焼を起こしてしまったもやもやとした気持ちに、はっきりとした方向性を見出す事が出来ないでいた。

06－22：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［4］

第六話：「死に化粧」
Ｓｅｃｔｉｏｎ２２「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

（フロル）
「なんだなんだセニフ？歯切れの悪い返事だな。まだなんか納得いかないのか？」

（セニフ）
「あ・・・。いや。別にそう言う訳じゃ・・・。」

（ジョハダル）
「セニフ。正しい答えがはっきりとしない不安定な世界で、無理やり答えを見出せと言う方が理不尽なのかもしれんが、これでも俺はお前より実戦経験が多いんだ。少しは俺の考えを含み持つ意思を見せても良いと思うんだがな。勿論俺は、結果的に三機の敵ＤＱを撃破するに至ったお前の判断を、頭ごなしに否定するつもりはないし、お前の言う事にも一理あると思っている。ただ、たった一人の狭い視野の中で下された判断と言うのは、時として周囲の状況を見落とす危険性があるし、次も同じように上手く事が運ぶとは限らないんだ。解るよな。」

（セニフ）
「・・・うん。・・・それは解ってる。」

（ジョハダル）
「素直でよろしい。俺もまあ、パレ・ロワイヤルミサイル基地を、出来るだけ早く攻略したいと言う、お前の気持ちが全く解らない訳

じゃないし、仲間想いの健気なお前の為に、少しは協力してやりたいと思っているのさ。だからもう少し、俺の事を信用してくれてもいいぞ。」

（セニフ）
「えっ？」

（フロル）
「えっ？じゃないよ全くこの子は。さっき作戦開始前にさ、整備班のサフォークって奴が、お前の暴走を気にかけて、私達に注意するよう忠告してきたんだよ。アリミアの為に戦いたいって思うお前の気持ちも解るが、お前一人でどうこう出来る問題じゃないだろ？私も彼女とはディップ・メイサ作戦の時、同じ小隊メンバーとして一緒に戦った仲だし、彼女の事を心配して、彼女の為に戦いたいって思っているのは、私だって同じなんだ。お前はそんな私や他の皆の思いを完全に無視してまで、自分一人で勝手に突っ走ろうって言うのか？」

（セニフ）
「あ・・・。いや・・・。」

セニフはこの時、完全に返す言葉に窮（きゅう）しながらも、何処か心の奥底に溜まった真っ黒な靄（もや）を、一気に吹き飛ばしてしまう程の強い風が吹き荒れたのを感じた。

そっか・・・。そうなんだ・・・。

アリミアの事を心配しているのは、何も私だけじゃない。

それは解っていた。それは解っていたんだけど、でも、誰しもが生き延びる事に必死な戦場の中で、与えられた作戦目標に以外に、パレ・ロワイヤルミサイル基地を攻略すると言う目標以外に、アリミアの事を気にかけながら、戦っている人が居るなんて、思っていなかった・・・。

だから私は、だからこそ私は、たった一人でも、アリミアの為に、出来るだけ早く、このパレ・ロワイヤルミサイル基地を攻略できるよう、頑張って戦って行くつもりだった。

私一人だけでも、頑張れば頑張った分だけ、アリミアの生き延びる可能性が高くなるんだって、・・・そう思って。

セニフは少し、熱くなった目頭を素早い瞬(まばた)きで誤魔化(ごまか)して見せると、直ぐに二人の優しき思いに答えるよう、必死に言葉を振り絞った。

（セニフ）
「ううん。・・・ごめん。私さ・・・。やっぱ、私一人じゃさ。やっぱ・・・。どうする事も出来ない・・・。出来ないし・・・。えっと、私・・・。二人の力をさ・・・。二人の力を借りたい。お願い！二人の力を貸してっ！」

（フロル）
「おいおい。泣くなよセニフ。これから頑張って戦って行かなきゃならないんだろ?幾ら私とジョハダルが加わったからと言って、直ぐに何とかなるもんでも無いだろうけどさ。出来るだけ私も頑張って戦うからさ。セニフ。ほら、泣いてちゃ駄目だろう?」

（セニフ）

「・・・。・・・うん。」

（ジョハダル）

「セニフ。俺達三人に出来る事は、大局に対して微々たるもんだが、決して無駄な行為なんかじゃない。俺達には俺達にしか出来ない役割があり、それを必死にこなす事で、最終的に得られる成果を、より大きなものへと変える事だって出来る。自分に出来ない役割はそれを出来る仲間達に全部任せて、俺達は俺達にしか出来ない役割を、最大限努力してこなして行こうぜ。」

（セニフ）

「うん。」

確かにジョハダルが言う通り、私に出来る事は、本当に微々たるものなのかもしれない。

でも、それでも、私一人じゃ、どうにもならない事だって、皆の力を合わせれば、きっと・・・。きっと・・・。

セニフは頬を伝い落ちる涙の中に、それまで心の周りを囲っていた、忌(い)まわしき黒い靄(もや)を溶け込ませると、すっきりと洗い流された曇りない視野の先に、ようやく見据えるべき暗夜(あんよ)の灯(あかり)を見つけた。

そして、ゆっくりと涙を拭い去り、優しくそっと胸の内ポケット付近に左手を宛がうと、彼女は再び心の中に強い意志を込めて「うん」と頷(うなず)いて見せた。

やがて、朽ち果てたポールポンドの機体を苗床(なえどこ)に、真っ赤な火柱を

立ち昇らせていた炎の光も下火へと回り、セニフ機のＦＥチャージ処理が完了する頃には、周囲の木々達もようやく普段通りの静けさを取り戻し始めていたが、次第に暗闇の中へと取り込まれようとしていた彼女達の元に、再び新たなる騒乱の呼び水となる続報が届けられたのはそんな時だった。

大量の阻害粒子がばら撒かれた高濃度フィールド防壁下において、その機能を半分程度にまで制限されていた彼女達のサーチレーダー上の辺（ほとり）に、突然、複数の光点が浮かび上がった。

勿論、トゥマルクに搭載されたサーチシステム程度では、即座にこの反応の正体を突き止める事が出来なかったのだが、識別不能を指し示す黄色い光によって示されていたその反応を見つけるや否や、思わず大声を張り上げてしまったフロルには、既にそれが、何れの陣営に属するものなのか、解っていたようだった。

（フロル）
「おおっ！来た！来たぞ！ほらほら！見なよセニフ！頼りになる援軍様のご到着だぞ！」

（セニフ）
「え・・・？えっと・・・、これって友軍機だよね。」

（フロル）
「当たり前だろ。帝国軍の航空部隊が、態々遠回りして私達の背後から飛んで来ると思うか？きっとお前の強い願いに釣られて、皆集まって来てくれたんだぜ。」

（セニフ）
「ええっ？・・・それはちょっと、飛躍しすぎかな・・・。」

（フロル）
「いいのいいの。そう思っときなって。」

それは４つの光点で構成される一つの鏃(やじり)を、更に一つの頂点と見立てて組み上げられた、綺麗なダイアモンド型を成す集団であり、彼女達にとっては非常に頼もしい援軍の到着を意味するものであった。

不意にサーチレーダー上の最南端付近へと姿を現したその反応は、つい先日トゥアム共和国と同盟条約を正式に締結した、西方隣国リバルザイナ共和国軍所属の航空支援部隊を示すものであり、全く地形的制約を無視した進行速度で北上を開始すると、瞬く間にセニフ達の頭上を飛び越えて行った。

（ジョハダル）
「ほう。凄いな。まさかリバルザイナ共和国軍が、ヘルコンドルを１６機も投入してくるとは思わなかったぜ。これは思った以上に楽な展開が期待できるかもしれんな。まあ、更に贅沢を言えば、このまま帝国軍防衛守備隊を、上空から狙い撃ちにでもしてくれれば、何も言う事は無いんだがな。」

綺麗な隊列を組んで飛び去って行く、総数１６機もの飛行中隊(スコードロン)の動きを見据え、容易にその機種を判別して見せたジョハダルが、少しだけ欲深(よくぶか)な展望を吐き出してみせる。

このリバルザイナ共和国の万能型戦闘爆撃機「ＧＲ－３０９ｂヘルコンドル」は、防空戦闘機並みの対空戦闘能力に加え、精度の高い対地攻撃能力をも兼ね揃えた機種であり、昼夜を問わず高い戦果を期待できることから、まさに戦場における空の支配者たる威風を感じさせるものだ。

勿論、帝国軍防衛守備隊の正確な布陣を特定する事が出来ていない現状に加え、高濃度フィールドに覆われた地表付近に、精度の高い対地攻撃を加える事は決して容易な事では無く、先程彼の発した言葉は、希望的観測による他愛の無い願望にしか過ぎないものだった。

しかしこの時、彼等の頭上を飛び越えて行った飛行中隊（スコードロン）が、まるで大空に羽ばたく怪鳥の様に大きく翼を広げて見せると、その内最後尾に位置した４機のヘルコンドルが、自然の摂理に従って急激な降下を開始する。

そして、その奏で出す轟音と共に地表付近目掛けて、鋭い４本の光の雷矢を突き立てると、一斉に蜘蛛の子を散らすように急旋回し、再び綺麗な夜空へと舞い上がって行った。

ズッゴーーーーン！！！！！

すると次の瞬間、セニフ達の目指すカノンズル山麓付近へと舞い降りた光の筋が、猛烈な爆音と地響きを伴う大爆発を呼び覚ますと、ナルタリア湖周辺部一帯を照らし出す程の巨大な火柱を立ち上らせた。

（ジョハダル）
「なっ・・・！！・・・なにっ！？」

（フロル）
「げげっ！！」

（セニフ）
「う・・・。ぁぁ・・・。」

それはまるで天にも昇る勢いで打ち上げられた、巨大火山の噴火を連想させる程の恐ろしい大爆発であり、真っ暗な闇夜に包み込まれていた密林地帯を一気に真昼の世界へと誘う、驚天動地（きょうてんどうち）の大魔法の様でもあった。

この時、戦場における優位性を、著しく高めてくれるであろう頼もしき友軍の到着に、心浮き立つ気持ちで歓迎の意を示していた三人だが、突然目の前に曝された強烈な爆撃に対し、多少なりとも強い恐怖心を煽（あお）り立てられ、三者三様の驚愕の声色を持ってして、間抜けなアンサンブルを奏で上げてしまった。

（フロル）
「な・・・何だあれっ！？リバルザイナの新兵器なのか！？」

（ジョハダル）
「いや・・・。戦闘爆撃機程度の攻撃で、あれだけの破壊力を生み出すのは不可能だ。これはひょっとして・・・。」

（フロル）
「ああっ！！司令部からの作戦変更指示だ！！作戦プランＣに変更！！・・・パレ・ロワイヤルミサイル基地の詳細情報付きだぞ！！」

次の瞬間、彼女達の後方より接近した非攻撃的飛行物体が、乾いた音を周囲に響かせながら一気に頭上を駆け抜けると、彼女達のＤＱシステムに登録されている作戦プラン情報を、素早く書き換えた事を知らせる注意喚起シグナルを発動させた。

それは予め作成された主要な作戦概要に対し、新たに判明した断片的な情報を塗(まぶ)した大雑把なものであったのだが、高濃度フィールド防壁下と言う、一寸先も見えぬ戦場に投入された彼女達にとっては、十分すぎる程の効果的情報であった事は間違いなかった。

そして、彼女達に新たに与えられる事になったこの作戦プランCとは、当作戦における最も楽観的な展開を見越して作成されたプランであり、パレ・ロワイヤルミサイル基地の詳細情報を入手出来ている事を前提としている他、ナルタリア湖周辺部に設置されたミサイル発射台の詳細位置までを特定できている事が、発動の絶対条件と定められていたものだ。

言うまでも無くそれは、オクラホマ都市へと潜入した諜報部工作員の破壊工作任務が、全て滞りなく成功を収めた時のみ発動される作戦プランであり、勿論、この作戦プランが採用される事を願って作成されたに違いないが、それでも、ほとんど利用される可能性の薄いものとして、軍上層部からは完全に愚弄(ぐろう)されてきた代物であった。

（ジョハダル）

「ミサイル発射台への攻撃はヘルコンドルの対地爆撃と、リプトンサムの支援砲撃に一任する・・・か。とすると、さっきの爆発はミサイル貯蔵庫に対する、ピンポイント爆撃だったと言うことだな。ヘルコンドルに搭載できる空対地ミサイル程度で、良く地下弾薬貯蔵庫までの装甲をぶち抜けたもんだ。」

（フロル）

「ミサイル発射台の位置が特定できたにも関わらず、今だ軍上層部がパレ・ロワイヤルミサイル基地占領に固執するのは、もしかして、入手した情報にそれほど大きな信頼を寄せていないって事なのか？」

（ジョハダル）
「その辺の詳しい経緯までは良く解らんが、軍上層部が作戦プランCを選択した事から考えても、入手した情報には、それなりの信憑性が有ったと見て良いだろう。まあ、さすがに敵防衛守備隊の最新情報までは含まれていないようだが、ナルタリア湖周辺部の地雷原敷設場所と、野戦砲台設置位置に加えて、基地有線索敵エリアまで特定してくれたんだ。諜報部にしては出来すぎた成果と言うべきだな。尤も、大幅に負荷が軽減されたとは言え、俺達が帝国軍防衛守備隊を、相手にしなければならない事に変わりは無い。二人とも、攻撃パターンは当初の予定通りで行くぞ。」

（フロル）
「了解。」

（セニフ）
「・・・。」

この時、耳元のヘルメットスピーカーから聞こえ来る仲間達の声色に、何ら少しも反応を示す事の無かったセニフは、森の分厚い枝葉の隙間から見え隠れする、真っ赤な火柱を見上げると、黒い煙を渦巻いて夜空へと溶け込んで行く情景に、しばし意識を囚われてしまっていた。

そして、遥か北の大地で必死に戦っているであろう友人の姿を、やがて浮かび上がった綺麗な星空のスクリーンに薄っすらと描き出しながら、今だ彼女が無事に居る事だけを切に願い、必死に祈りを捧げながら、彼女は静かに、小さく彼女の名前を呟いた。

アリミア・・・。

（フロル）
「ほーら。セニフ。折角アリミアがこれだけの成果を、私達に齎（もたら）してくれたんだ。今度は私達がその成果に答えてやる番だろ。いつまでもボケッとしてたらダメだぞ。」

（セニフ）
「・・・あっ、うん！そうだね。ごめん。」

（ジョハダル）
「よーし。セニフ。ＦＥチャージ処理は完了してるな。俺達はまず、パレ・ロワイヤル基地本部へと通ずる、進行ルートＫ０２を目指して北上を開始する。道中、友軍の爆撃想定ポイントを迂回する必要が有るが、右辺から先行したキャリオン隊も、恐らくＭ０４付近で地雷原の足止めを食っているはずだ。ここから一気に遅れを挽回するぞ。」

（フロル）
「了解。」

（セニフ）
「了解っ！」

小隊長であるジョハダルが発した新たなる指示に対し、ようやく普段通りの元気の良い返事を返して見せたセニフは、目の前で勢い良く後部バーニヤを吹き上がらせた二人のトゥマルクに続き、軽快な足取りでフットペダルを強く踏みしめた。

彼女の見据える視線の先には、もはや迷いとなる障壁は何も存在しない。

ただ彼女は、真っ直ぐに。自分の気持ちに正直で真っ直ぐに。

出口の見え始めた真っ暗な迷宮を、必死に駆け抜けて行くだけだった。

この時、ナルタリア湖周辺部で燻り続けていた濃密な破壊的呪力が、焚き付けられた1本の巨大な火柱によって一気に解き放たれると、まるで堰を切ったかのような勢いで、一方的な流れを形成し始める。

上空を旋回する狂暴な地獄の怪鳥が、更なる獲物を狙って再び急降下を開始すると、次の瞬間、遥か東方から放たれた十数本の弾道ミサイルが、まるで暴力的死神の鎌の軌跡を描き出すかのように、パレ・ロワイヤルミサイル基地へと降り注いだのだ。

この時点でもはや、パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦と命名された、この戦いの大局は決していたのかもしれない。

しかし、密林地帯の暗がりを全速力で突き進む彼女が、その最終的帰着点へと到達するのは、まだ少し先の話だった。

06－23：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［5］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２３「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

黒塗りの静かな闇夜の中に、大筆で一気に殴り描いたかの様に赤墨が放たれると、無慈悲な陽光に照らし出された、鬼気白濁とした世界が浮かび上がる。

そして、鬱蒼と生い茂る木々達を背景に、忙しく躍動する無数の影絵が幾重にも折り重なり、人々の奏で上げる悲痛な慟哭を如実に映し出すと、そこはまさに煉獄の淵たる悪夢のような情景を醸し出し始めた。

激しくのた打ち回る地獄の業火に焚き付けられ、勢い良く吹き荒れる黒煙と白煙とが、朽ち果てるまで止める事を許されない「死の舞」を踊り始めると、周囲で慌てふためく人々の思いが、一つ、また一つと、容赦なく虚空の彼方へと誘われていく。

そう。それはまるで、決して抗う事の出来ない、神々の咆哮によって、儚くも簡単にかき消されて行くかの様だった。

（バニッシュ）
「一体何をしておるのか！！直ちにライパネル隊を展開して応戦させろ！！基地対空砲火塔も全門解放して上空からの爆撃を牽制するんだ！！貴様等が日々過酷な訓練に勤しんで来たのは、何たる為だと思っている！！もっとシャキシャキと行動せんか！！馬鹿者！！」

（通信兵Ａ）

「バニッシュ中佐!!スパイダネット前面部に敵影を確認!!移動速度から判断して、敵ＤＱ部隊と推測されます!!」

（バニッシュ）
「基地内に残る戦車部隊を全て出撃させ、３番、５番ルートに防御陣を構築させろ!!南方エリアを哨戒中のＤＱ部隊各機には、後続部隊が到着するまでの間、敵ＤＱ部隊の北上を阻止するようにと伝えよ!!」

（通信兵Ａ）
「了解!!」

しかし、そんな殺伐とした砲煙弾雨の只中に曝されながらも、必死に自身の運命を切り開こうと、力強い怒声を放って周囲の兵士達を鼓舞する男が一人。

激しい震動と唸るような轟音とが響き渡るパレ・ロワイヤル基地司令室内で、兵士達の焦りや不安と言った悲観的思考を少しでも拭い去ろうと、平常時通りの厳格な態度を持って対応にあたっていた。

カノンズル山南東部麓の強固な岩盤をくり貫いて建築されたパレ・ロワイヤル基地は、上空からの爆撃程度で容易に陥落してしまうものではなかったが、それでも司令室内の戦術モニター上に映し出された外界の様相は、兵士達の意識を恐怖のどん底に貶めるに十分な驚異的凄惨さを描き出していた。

（バニッシュ）
「オクラホマ基地からの返信はまだ無いのか!?」

（通信兵Ｂ）

「駄目です!!現在オクラホマ基地との連絡が全く取れません!!これが敵の通信妨害行為によるものかどうか、容易に判断できませんが、オクラホマ地方に存在する全ての軍事基地において、通信アクセスが拒絶されています!!」

（バニッシュ）
「ちっ!!オクラホマ基地の連中は一体何を考えているんだ!!このままでは1時間も経たない内に、パレ・ロワイヤル基地は陥落してしまうぞ!!ゴエップ!!ランズメアリー基地を経由して、トポリ要塞のエルポドス将軍に連絡を付けろ!!大至急増援を請うとな!!もし通信機器にオクラホマ基地と同様の現象が生じたら、直ぐに緊急連絡用ミサイルを発射しろ。」

（ゴエップ）
「了解しました!!」

（バニッシュ）
「それと、万が一の事態に備えて、いつでも基地の全データを消去できるよう準備を整えておけ!!急げよ!!」

（ゴエップ）
「はい!!」

パレ・ロワイヤル基地司令室内の指揮卓を完全に放り出し、巨大な戦術モニターの目の前に仁王立ちで陣取ったバニッシュは、そう言って信頼の置ける部下の一人に新たなる指示を飛ばすと、苛立(いらだ)ちを隠せない様子で、ゆっくりと両腕を組んだ。

そして、目の前に映し出されたナルタリア湖周辺部の惨劇へと再び視線を移すと、彼は脳裏を過ぎった最悪の事態を想定し、自らの豪

胆でいて積極性に飛んだその性格を無為に廃してまでも、悲観的指示を付け加えざるを得なかった。

彼の名前は「バニッシュ・イドリー」。

このパレ・ロワイヤルミサイル基地駐留軍地上部隊の総隊長を勤める帝国軍中佐である。

彼はそれほど屈強な体躯を持ち合わせてはおらず、自身の戦闘能力もそれほど秀でたものを有して居なかったが、中の上程の背丈に厳格さを醸し出す顔付きが特徴的な人物であり、その高い統率能力を買われてこの基地に赴任してきた有能な指揮官であった。

勿論、彼が口先だけの男では無い事は、彼の従える部下達が一番良く知っている事であり、常時投げつけられる荒々しい彼の叱咤に対しても、部下達が強い不満を抱き持つような事はほとんど無かった。

（セラフィ）

「バニッシュ。バニッシュー。聞こえるー？ナコレアフ司令官が逃げ出す・・じゃなかった。後方基地まで後退されるみたいだから、第ニ滑走路周辺の警戒警備よろしくー。僕は適当に交戦したらトポリ要塞に帰るからさー。後は頑張ってくれよなー。」

しかし、それは彼の支配下にあって、彼の良さを知る、彼の部下に限って言えばの話であり、この時、不意にバニッシュが装着するヘッドホンへと直接送り届けられた男の声は、決して彼を尊敬したり、敬ったりするような感情は一切込められてはいなかった。

（バニッシュ）

「セラフィか！？何を言っているんだ！？既にナコレアフ司令官か

らは、パレ・ロワイヤル基地を絶対死守せよとの厳命が下されたばかりなんだぞ！！直ちにＤＱ部隊を率いて敵部隊の迎撃に向かわんか！！敵部隊はもう直ぐ目と鼻の先まで迫っているんだぞ！！」

（セラフィ）

「えーっ。それはちょっと中々に面倒くさい要求じゃないかー。僕は単にちょっとだけ、ここにお使いに来ただけだって言うのにさー。お菓子ぐらいゆっくり食べさせてくれたっていいじゃないのー。ねぇー？大体、パレ・ロワイヤル基地防衛任務は、僕の仕事じゃないしねー。君には僕に命令できる権限が無いはずなんだけどなぁー。」

（バニッシュ）

「くっ・・・。」

のらりくらりとした軟調な言葉遣いに加え、帝国軍階級においても、年齢においても目上の立場にあるはずのバニッシュに対し、完全に人を食ったような態度でタメ口を吐き付けるこの男は、「セラフィ・オム」と言う名のストラントーゼ軍麾下の兵士である。

勿論、帝国軍所属の兵士たる者、所属する軍団の如何を問わずして、帝国軍階級における上下関係は絶対的なものであるべきなのだが、この時、このセラフィの発した侮蔑的発言に対して、吐き出そうとした言葉を無理やり捻じ込んで見せたバニッシュは、あからさまに怒りを押し殺したような表情で、目の前の通信機を思いっきり蹴飛ばした。

と言うのも、このセラフィと言う男の所属する部隊は、非常に秘匿性の高いストラントーゼ公爵家直属の特殊部隊であり、バニッシュはおろか、特に階級の高い将軍クラスの人間であっても、容易にその行動を縛り付ける事が出来ないと噂される特別な集団だったのだ。

ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」。

それは、帝国皇帝陛下を絶対的君主として仰ぐ帝国国内にありながらも、完全に帝国正規軍から逸脱した行動を暗に許された正規的非合法組織であり、ストラントーゼ公爵の命令にのみ付き従う、完全なる私兵集団とまで揶揄されし精鋭部隊である。

本来であれば、彼等のような存在は、完全に隠匿された影の組織として、表舞台に立つ事を禁じられているケースが多く、決して無為に公の場に姿を曝け出すような真似はしないのだが、殊更帝国内において絶大な権力を有する貴族に至っては、その存在自体が帝国中に知れ渡っている例は少なくない。

それは、長年の間、帝国貴族達の間に蔓延る、疑心暗鬼の成れの果てとも言え、絶大な影響力を有した第十三代皇帝ソヴェールの力を持ってしても、廃する事の出来なかった悪しき風習の一つであった。

とどのつまり彼等は、帝国貴族達の力の象徴たる存在に成り代わるものであり、非公認ながらも周囲に認められた黒い力を有する事で、自らの持つ権力を高らかに誇示しているのだ。

勿論、このエイリアンホースのように、きっちりとした枠組みを持って、黒い集団である事を周囲に指し示す例も珍しいのだが、帝国内においてストラントーゼ公爵家の有する権力の強大さが、如何程のものなのかを窺い知る、良い証例である事は間違いなかった。

ドドーーーン！！

ドーーーン！！

やがて、再び地下司令室内まで響き届けられた大きな爆発音に、小さく舌打ちを吐きつけて見せたバニッシュは、全く不愉快なる感情を強く押し殺しながらも、通信マイクへと向き直り、パレ・ロワイヤル基地防衛部隊長としての責務へと舞い戻る。

（バニッシュ）

「グルーデン隊。スニキオ隊は、即座に南方哨戒部隊の援護に向かってくれ。ゲルティス。シニョール。オリビアの三人は第ニ滑走路の警備だ。セラフィ。せめて戦車部隊が防御陣を構築するまでの間、敵部隊の足止めを手伝ってくれないか？」

（セラフィ）

「しょうがないなぁーもう。わかったよぅー。これ食べ終わったらそのまま出撃してあげるよー。上官が無能だと、部下も大変だよねぇー。めげずに頑張るんだよー。バニッシュー。」

（バニッシュ）

「・・・・・・。済まない。頼んだぞ。」

時折、通信機を通して耳元へと届けられる、何かを食べるような物音が、更にバニッシュの苛立（いらだ）たしさを激しく刺激するのだが、静かに両目を閉じて己の気持ちを落ち着ける様に溜め息を吐き出した彼は、穏やかな口調でセラフィにお礼の言葉を引き渡した。

これほどまでに礼儀知らずで、規律を軽んじる無法者でありながら、

帝国内でも一、二を争う精鋭部隊に所属するこの男は、勿論、それなりに高い能力を有しているからなのだろうが、過去にちょっとした顔見知り程度の仲でしかなかったバニッシュには、全くそれが理解できなかった。

完全に覇気を欠いた穏やかな表情に加え、何処か陰気な人柄を匂わせる青み掛かったロングヘアーが特徴的な彼の風貌は、その不摂生な生活ぶりを、そのまま体現するかのように、コロコロと良く肥えた脂肪に包まれている。

そして、人の苛立たしさを増長させるように繰り出される軟調な言葉遣いは、面倒臭がり屋な彼の性格そのものを指し示しており、どう贔屓目に見ても、彼の姿に有能な軍人たる威風の片鱗を見出す事は出来なかった。

（セラフィ）
「さーてー。食べるもん食べたら出撃するよー。お二人さん。準備は良いかいー？」

リバリザイナ共和国軍戦闘爆撃機による、激しい空襲の惨禍に見舞われながらも、搭乗するＤＱ「ＳＮＤｆブロホン・ツィー・ゲルン」のコクピット内で、呑気にお菓子を頬張っていたセラフィは、やがて食べ終えた菓子袋をコクピットシート裏へと放り投げると、なんとも無気力でやる気の無い声色を通信機内へと流し込んだ。

彼は今、パレ・ロワイヤル基地の巨大な兵器格納庫内で、新しく受領した新型ＤＱの初期設定作業を行っていた最中であり、直ぐに出撃できるような体勢には無かったのだが、珍しくやる気満々でバイザー稼動式ゴーグルを装着すると、すぐさまシステムの立ち上げ作

業へと移行した。

この時既に、彼の取り扱う機器の多くが、先ほどまで彼が食していたお菓子の油でギトギトに塗れ、卸したてのはずの綺麗なコクピット内部は、完全に不清潔な食べ物の匂いで制圧されてしまっていたが、ズボラな性格を持つ彼の意識は、そんな事を少しも気にする素振りを見せなかった。

（アレナルティカ）

「えーっ！？このままトポリ要塞まで帰るんじゃなかったの！？私、嫌だよそんな面倒臭い事。セラフィの御守りなんて疲れるだけだしさ。あんた一人で行ってきなさいよ。あんたなら一人でも大丈夫でしょ。ねぇ。バルベス。」

（バルベス）

「期待した予想が外れて、鬱積したフラストレーションを解消したい気持ちも解るが、フェザンからは直ぐ戻って来るように指示があったんだろ？余り好き放題ばかりやらかしていると、幾ら大人しいフェザンでも、頭に角を生やしてしまうぞ。」

しかし、そんなセラフィの珍しくも意気込んだ思いに反し、彼の部下たる二人の男女から返された返答は、初っ端からそれを挫く冷たい叛意を込めた言葉だった。

セラフィが搭乗するブロホン・ツィー・ゲルンの足元付近に屯していた二人は、既に受領した三機の新型機の内、自分達が担当すべき機体の初期設定作業を終え、後は小隊長たるセラフィの設定作業完了を待つばかりと言う状態で、のんびりと珈琲を飲んでいた。

ボロボロに擦り切れたGパンに、真っ赤なタンクトップ1枚だけと言う、扇情的な風貌で巨大格納庫内を練り歩くこの女性は、「アレナルティカ・ユーラシ」と言う27歳の綺麗な金髪女性であり、旋毛付近で結え上げた可愛らしいポニーテールが特徴的な人物だ。

彼女は思った事を直ぐに口に出してしまうと言う、始末の悪い性格の持ち主ではあったが、とても明るく元気な雰囲気を醸し出す陽気な女性で、どちらかと言えば人懐っこいタイプの人間である。

勿論、彼女の持つその雰囲気自体が、帝国軍兵士たらぬ印象を周囲に与えてしまう感は否めず、彼女もまた、セラフィ同様、規律正しい帝国軍内部においては、少し浮いた存在として扱われ気味だった。

一方、大柄でがっしりとした体格の、如何にも軍人らしい威風を纏う人物の方は、「バルベス・ハッシュ」と言う名の野性味溢れる32歳の男性だ。

色濃く門型に携えた口髭と、覇気に溢れた太い眉毛が特徴的な彼は、その見た目同様、力作業には何ら不安のない力強い豪力の持ち主であり、特殊歩兵部隊で鍛え上げたと言うその白兵戦能力も、非常に高い技術を有していた。

しかしその反面、彼の性格はとても穏やかで繊細な部分があり、決して戦闘員たる気質に恵まれていたとは言い難いのだが、それでも彼の能力を生かすには、DQパイロットではない方が良いとの風評が一般的であった。

（セラフィ）
「僕もねー。面倒臭い事は嫌いなんだけどさー。バニッシュとは少

し付き合いがあってさー。頼むようー。ちょっとだけ手伝いをしてくるだけだからさー。ほーらー。アレナちゃん。帰ったら美味しいチョコパフェ奢ってあげるからさー。いいだろうー？」

（アレナルティカ）
「この私を甘い物で釣り上げようなんて、ほんっと甘い甘い。私ね。このティーゲルって機体、大っ嫌いなの。私、いーかないっと。」

（セラフィ）
「ええー。・・・うんむぅー。」

（バルベス）
「ちゃんと整備が完了していない機体で出撃するなんて、とても俺にはできないな。俺はセラフィみたいに自分一人で何でも出来る人間じゃないし、整備不良で戦闘中に立ち往生するなんてごめんだしな。今回俺は不参加と言う事にしておくよ。」

（セラフィ）
「ううー。・・・うんむぅー。」

セラフィの提案に全く乗り気でない二人の部下達を目の前にして、まるで駄々を捏ねる子供のような唸り声を発して見せた彼は、もはや短時間の内に自分専用機へと成り下がってしまった新型機のコクピット内で、少し捻くれた様な表情を醸し出して、コクピットシートへと凭れ掛かった。

彼は地位的に、この二人の上官と言う立場にあるはずなのだが、その幼稚染みた行動や言動から、しばし部下達からは軽く扱われ気味である。

勿論、彼自身が有する技術の高さを良く知っていた二人は、心の底からあからさまにこのセラフィを卑下しようとは思っていないのだが、彼が見せる幼稚な反応にも、少なからずそれを増長させてしまう原因があり、この表層的下克上状態に歯止めが掛かる雰囲気は、ほぼ皆無であると言えた。

やがて、少しだけ「仕方が無いな」と言うような表情で溜め息を吐き出したセラフィは、ブロホン・ツィー・ゲルンのシステム各種設定ウィンドウを複数同時に機動させると、再び通信マイクを通して、パレ・ロワイヤル基地の防衛部隊長を呼び出した。

（セラフィ）
「バニッシュ。バニッシュー。パレ・ロワイヤル基地防衛システムの暗号キーを教えてよー。ティーゲルのメインシステムとリンクさせるからさー。」

（バニッシュ）
「管理者権限レベルEまでなら開放してやる。ただし、高フィールド防壁下だと、五秒ディレイアウトプットしか出ないぞ。それでもいいのか？」

（セラフィ）
「十分。十分だよー。暗号キーの転送よろし・・・ゲフッ。」

その後セニフィは、この基地内において、唯一好意的態度を持って接してくれたバニッシュに対し、汚らしいゲップを添えてそう締め括って見せると、すぐさまブロホン・ツィー・ゲルンの残りの機体設定作業へと取り掛かった。

彼はまず、コクピット前面に広がるＴＲＰスクリーン全てを目一杯

に使用し、代わる代わる凄い勢いで未設定項目を「完了」と言う二文字で埋め尽くしていくと、直ぐにＤＱの火器管制システムの調整作業へと移行する。

そして、先ほどバニッシュに対して出した注文の品が、軽く奏で上げられた機械音と共に届けられた事を確認すると、直ぐに左右両手に別々の作業を課して、基地防衛システムとのリンク作業をも開始した。

この時、彼が垣間見せた高い情報処理能力は、それを専門として取り扱う技術者達と言えど、容易に到達できる領域（レベル）にはなく、まさに生けるコンピューターたる正確な振る舞いを見せ付けているかの様でもあった。

（セラフィ）

「あんらー？スパイダネット前面に識別不能機の反応が六つかー。哨戒機は全滅しちゃったのかなぁー？・・・っと、まだちょっとは残ってるかー。えっとー。防衛システムの稼働率は７６％でー、フェイタルラインはまだ問題なしとー。ふむふむー。まっ。使い物にならなくなった時点で、僕の仕事は終わりだけどねー。・・・ゲフッ。」

やがて、ブロホン・ツィー・ゲルンの設定作業を続けながらも、逐次送信されてくるパレ・ロワイヤル基地周辺部の戦況に、チラチラと視線を宛がっていたセラフィは、ブツブツと念仏の様に軽快な独り言を奏で出しては、最後に大きなゲップで言葉を締め括（くく）る。

この男。

食後のゲップは一度繰り出すと、しばらくは止まらないと言う得意

体質の持ち主だ。

（アレナルティカ）
「やっぱり行くんだね。セラフィ。見かけによらず、あんたも結構物好きなのね。」

（セラフィ）
「えー？それは中々に心外だなぁー。僕だって必死に頑張っている友人の為に、戦ってあげたいと思っているんだよぅー。こんな僕の暖かい思いやりが理解できないなんて、案外二人共冷たい人間なんだねー。」

（アレナルティカ）
「あーあ。明日雨降らなきゃいいわね。この時期の雨って言ったら、鬱陶(うっとう)しくて嫌んなっちゃうし。」

（バルベス）
「セラフィ。行く行かないは、お前の判断を尊重するが、憂さ晴らしで死ぬ事ほど馬鹿な事はないぞ。俺達は北上してポイントＰ５２－１１付近に待機しておくから、なるべく早く追いついて来い。」

（アレナルティカ）
「そうそう。１時間待ってもこなかったら、直ぐに置いてっちゃうからね。忘れないでよ。」

（セラフィ）
「解ったようー。もう冷たいなぁー。」

ふっくらと膨らんだ頬を更に膨らませるようにして、そう不快感を露(あらわ)にして見せたセラフィは、程無くして完了を迎えた設定作業から、

一気にブロホン・ツィー・ゲルンの機体を戦闘モードに切り替えると、柔らかな足踏み操作で機体をゆっくりと動かし始める。

この巨大格納庫内に色栄えする黄土色（おうどいろ）を基調とした、ブロホン・ツィー・ゲルンの機体は、胴体腹部を完全に貫通するように取り付けられた「１８０ｍｍナルセスキャノン砲」が特徴的な機体であり、長距離射程からの狙撃戦闘を目的として開発された機体である。

勿論、これだけの巨砲を担ぎ上げて移動するともなれば、最新型の機体と言えど、それなりの機動性しか有していない事は明らかであったが、強固な前面装甲に加えて強力な火力を有するこの新型機に、セラフィは自らの能力の相性の良さを感じていた。

（セラフィ）
「さーてー。それじゃ行ってくるよんー。二人ともちゃんと待っててよねー。・・・ゲフッ。」

やがて、巨大格納庫の分厚い防護シャッターを潜り抜けて、ブロホン・ツィー・ゲルンの機体を薄暗い森の中へと運び出したセラフィは、倉庫内で見送る二人の部下達に向かって、耳障りな出発の挨拶を投げかけると、搭乗する機体の動力部出力を最大限まで引き上げる。

そして、甲高く音階を一気に駆け上がるヒート音を持ってして、後部バーニヤ部に真っ赤な炎の渦を滾（たぎ）らせると、次の瞬間、強烈な噴射の勢いに後押しされた黄土色のＤＱは、真っ暗な密林地帯の南側に向かって、姿をかき消して行った。

06－24：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［6］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２４「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

真っ暗な大海原に突き立てられた、艶(あで)やかに光る炎の風媒花(ふうばいか)。

切り立った岩肌から構成される大きな二つの山間に、見るも鮮やかな炎の燐粉(りんぷん)を飛散させ、力いっぱい天にも昇る勢いで花を開かせるその姿は、まるで自らの短く儚(はかな)い生き様を憂(うれ)うように、激しく情熱的に踊り狂っているかの様である。

そして、大地を叩くような銅鑼(どら)の音が唸(うな)り響く度に、ざわつく木々達の枝葉から煌(きらめ)く様な紅さが零(こぼ)れ落ち、暗がりを快走する三機の白いＤＱの姿を綺麗に浮かび上がらせた。

（セニフ）
「あれっ？ジョハダル。フィールド濃度計の数値が極端に下がっているよ？まだ谷間付近から抜け出てないのに、なんだろ。」

（ジョハダル）
「ヘルコンドルの強烈な対地爆撃で、ナルタリア湖周辺部の大気の流れが変わったのかもしれん。セニフ。この隙に一度周囲の状況を確認する。少し進行速度を落とせ。」

やがて、バックスラッシュ型に隊形を組んで、猛然とパレ・ロワイヤルミサイル基地へと突き進んでいたフロア隊のメンバー達は、ゴツゴツとした岩場が連なる崖沿いの谷間付近で一度その足を緩めた。

そこはパレ・ロワイヤルミサイル基地まで、後数ｋｍｉｌｓで到達できようかと言う谷川沿いの緩斜面であり、濃密な密林地帯の奥深くにあっては、珍しくも結構見晴らしの良い疎林地帯であった。

険しい山岳地帯に相応しい狭い川幅を保ったまま、彼等の目指す上流地点へと向かうその川の流れは、少し北上した地点で左右へと大きく二手に分かれており、鬱蒼と木々達が生い茂る山岳地帯を無為に突き進むよりは、遥かに楽な道筋を描き出しているようにも見えた。

しかし、既にパレ・ロワイヤルミサイル基地の有線索敵網内部へと、足を踏み入れていた彼等にとって、あからさまに浮き出た有益たり得る条件を、何の考慮も無くそのまま選択して突き進む事など出来るはずも無い。

勿論、彼等の頭上を自由に飛び回る友軍機の振る舞いを見れば、彼等の属する陣営側が、完全なる優位的立場にある事は間違いないのだが、それでもジョハダルは、進めど進めど一向に次なる敵が姿を現さないという不気味な展開に、少なからず心の中に消極的警戒心を燻らせてしまった。

（ジョハダル）
「もう少し上流へと遡ると、崖上から綺麗に撃ち下ろせる地形が広がっているな。帝国軍がこのラインに防衛部隊を展開させていると考えると、進行ルートＫ０１、Ｋ０２付近は、地獄へと続く茨の花道って可能性も無くは無いか。さてさて今だにその全貌を垣間見せぬ敵さん達は、一体何を目論んでいるのやら・・・だな。」

（フロル）
「敵固定砲台の設置位置から考えても、このまま川沿いを北上する

のは危険、と言うよりも自殺行為かも知れないな。帝国軍の対空攻撃車輌もチラホラ動き始めた事だし、ここから一気に敵が攻勢に転じる可能性もある。どうする？ジョハダル。」

（ジョハダル）
「最終的に基地を占領する事を考えれば、後続の機械化歩兵部隊には、このルートを駆け上がってもらわねばならん。見たところ、パレ・ロワイヤルミサイル基地へと続く進行ルート上で、ここが一番谷幅の狭いエリアと言う事になるが、帝国軍にとっても重要な防衛ポイントとなるはずのこのエリアに対して、配備された敵の数がやけに少なすぎると思わないか？」

（フロル）
「うーん。確かに静か過ぎるってのは少し気になるな。」

（セニフ）
「でもさ。パレ・ロワイヤルミサイル基地って秘密基地だよね。だとしたらさ。たとえそこが重要な防衛ポイントだったとしても、無闇にＤＱを配備するなんて事、出来なかったんじゃないかな。相手だってまさか、私達が基地の所在を突き止めるなんて、思っても見なかっただろしさ。今頃大慌てで基地を飛び出してたりして。」

（ジョハダル）
「ふむ・・・。確かにそれは一理あるかもしれないな・・・。」

ジョハダルはふと、低速で突き進むトゥマルクのコクピット内から、ＴＲＰスクリーンを通して映し出される外界の様相へと視線を切り替え、セニフの吐き出した希望的観測に、少なからず賛同する意思を込めた言葉を吐き出した。

確かにセニフの言う通り、このパレ・ロワイヤルミサイル基地が、秘密基地であるという観点から事態を考察するならば、あからさまにその周辺部に基地の存在を指し示すような防衛体制を敷けるはずも無く、更に今回のトゥアム共和国側の奇襲攻撃に対して、全く対策を取ることすら出来ていなかった状況を勘案すれば、このたどたどしい帝国軍の動きにも説明は付く。

しかし、だからと言って、帝国軍が帝国領南東部におけるこの最重要基地を、漫然と捨て置くような防御体制を維持するなど有り得ない話であって、ジョハダルはそこに、何かしらの罠が仕組まれているのではないかと疑念を抱いていたのだ。

勿論、本来であれば、如何に大量の防衛守備隊を配置できない状況にあったとしても、他国からの突然の侵略行為に対応する備えは、幾つも講じられているはずであり、少なくとも今回のようなケースに関して言えば、予めある程度の事前準備が成されていて然るべきである。

ところが今回、このパレ・ロワイヤルミサイル基地における帝国軍防衛守備隊の行動は、まさに緩慢と言う二文字で形容するに相応しいものであり、トゥアム、リバルザイナ両共和国連合軍の先制攻撃に対して、何ら成す術も無く一方的に虐げられる側へと転落すると、以降、一切再浮上する気配を匂わせぬまま、惨憺たる戦局を甘受し続けたのだ。

大陸最強との呼び声高い軍事大国セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国が、戦場においてこれほどまでに一方的な展開を余儀なくされるケースは、非常に稀な事態であると言えるのだが、今回の戦いの中で、パレ・ロワイヤルミサイル基地の防衛守備隊が、ここまで愚鈍なる行動に終始してしまったのも、そこにとある一つの陰鬱な理

由が存在していたからに他ならなかった。

と言うのも、このパレ・ロワイヤルミサイル基地の総司令官たる「ナコレアフ・レブ・トールネイ」と言う人物は、軍事関係の知識に乏しい無定見な男であり、お世辞にも有能な指揮官とは評価し得ない凡庸な人物だったのだ。

しかも、この無能なる総司令官。単に凡庸な人物であるだけなら、然したる悪害を周囲に齎す事は無かったのだろうが、自身の有する上流階級貴族たる特権を持ってして、パレ・ロワイヤルミサイル基地の防衛体制を好き放題に弄び始めると、彼はまさに己の無能さをひけらかす、無意味な兵器のひな壇を作り上げてしまったのだ。

勿論、彼の指揮する軍団の麾下には、彼よりも遥かに優れた有能な士官達が数多く在籍しており、この防衛基地全体が戦う軍団としての機能を、完全に逸する事態だけは避けられたのだが、それでも帝国ならではと言える、無能な権力者の振るう痛ましい暴挙が、彼等防衛守備隊兵士達の行動を強く縛り付けていた事は確かだった。

（ジョハダル）
「よし。それじゃとりあえず、セニフの予感が的中する事を祈りつつ、一気に目の前の高台を制圧してしまう事にするか。どうせいつかは通らにゃならん地獄の架け橋だ。渡れる内に渡っとこうぜ。」

（フロル）
「おいおい。なんか投げやりな作戦だな。本当に大丈夫なのか？」

（ジョハダル）
「駄目なら駄目で、その時はまた別の手を考えれば良いさ。勿論、前進には細心の注意を払う必要はあるがな。セニフ。」

やがて、ジョハダルはしばしの沈黙を破って、二人の女性に新たなる行動指標を指し示して見せると、トゥマルクの左手を軽く振りかざして、呼びかけたセニフに前進を促した。

勿論この時、彼は帝国内部に蔓延(はびこ)った深刻な裏事情など、全く知る由も無かったが、それでも帝国軍の動きが不安定な内に、ある程度自分達の優位的な立場を確立しておきたかったのだ。

（セニフ）
「解ってますよって。先行して二股河川の中州付近に、探りを入れれば良いんでしょ？行ってくるよ。」

（ジョハダル）
「ほぉお。中々に察しがいいな。じゃあ次に俺が言いたい事も、ちゃんと解ってるよな。」

（セニフ）
「ブーブーッ。」

（フロル）
「あっはははは。暴走型の猪がいつの間にか可愛い仔豚ちゃんになっちまったよ。これなら一人で猪突する心配も無いよな。」

セニフは、フロルから投げかけられた他愛ないからかいの言葉に対し、少し口を尖らせて不貞腐(ふてくさ)れた表情を浮かべて見せたが、何ら反論できる余地の無い自らの立場によって口を噤(つぐ)まれてしまうと、やがて沸き起こるもどかしさを吐き散らすかのように、無闇にフットペダルを強く踏みしめた。

そして、急激に加速度を増したトゥマルクの機体を、川沿いギリギリの滑らかな斜面へと誘い出すと、激しく吹き曝したバーニヤ風を持ってして、大きな水飛沫を吹き上げながら、一気に川の上流方面へと駆け上がって行った。

現在、彼女達フロア隊の居る谷間付近から川の上流方面を望むと、左右二手に分かれた川の中央部に、大きく切り立った崖の高台へと続く緩斜面が横たわってる。

彼女達がカノンズル山麓に存在するパレ・ロワイヤルミサイル基地を目指す場合、この左右に分かれた川のいずれかを渡河する必要が有るが、左手側へと分かれた河川は、切り立った崖に囲まれた急流となっており、目的地方面崖上へとよじ登れるようなポイントはほとんど見当たらない。

一方、右手側へと分かれた河川の方はと言うと、上流部へと突き進むにつれて次第に平坦な地勢が顔を覗かせ、戦場に適した幾つもの開放的空間が広がっているが、右辺に聳える切り立った山々を東側に迂回するルートは、大量にばら撒かれた地雷源によって完全に封鎖されており、また、谷川沿いにそのまま北上するルートも、河川向こう岸に聳え立つ高い断崖の存在によって、防衛守備隊に頭上から撃ち下ろされる危険性を孕んでいた。

とどのつまり、彼女達にとって現時点における最良の選択肢とは、この二股河川中央部の緩斜面を強引に突破し、正面崖上の支配権を完全に掌握する事にあり、パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略と言う最終目標に向けた、重要な橋頭堡をこの場所に作り上げる事である。

勿論、今だ後方部隊が到着せぬ希薄な戦力を持って、これを成し遂げるのは決して容易な事ではないと推測されるが、それでもあからさまに不活発な帝国軍の防衛体制が完全に整い切らぬ内に、この重要なポイントの支配権を奪取してしまいたい思いが、彼女達には有ったのだ。

やがてセニフは、高速で巡航するトゥマルクを巧みに操りつつ、目指す二股河川中州付近へと照準を定めると、トゥマルクの右肩に装着した発射装置からワイヤーロープ付きセンサーを射出する。

そして、非常に軽くて丈夫なワイヤーロープを引き連れたセンサーが、一気に正面高台の森の奥へと舞い降りた事を確認すると、彼女はすぐさまセンサーから送られてきた周辺情報へと視線を宛がった。

（セニフ）
「やっぱり居る！敵機の反応が四・・・。いや、五・・・。内三つは０４００方向デルタ陣形で、もう一つは更に上流。残りの一つは・・・位置的に・・・。あれっ？崖下・・・？？」

やはりと言えばやはりと言うべきなのだろうが、彼女の投げ入れたサーチセンサーによって捕らえられた敵機の反応が、セニフ機のサーチレーダー上にくっきりと浮かび上がった。

この時既に、敵の有線索敵網内部へと侵入を果していた彼女達にとって、突入を前に相手の所在を特定できたと言う事は、彼女達の不利的要素の一つを相殺する事に成功した事を意味していたが、それでも、三機一小隊での行動が一般的なＤＱ部隊において、中途半端な四、五機と言う数を釣り上げてしまったセニフは、不本意ながらも後ろ向きな警戒態勢を強いられる事になってしまった。

セニフは即座にトゥマルクの進行スピードを減速させると、自らの機体反応を高濃度フィールド防壁下に埋没させる為のＦＴＰフィールドを展開し、しばしジョハダルとフロルの追い付きを待つ。

しかしこの時、彼女が注意深く視線を泳がせていた河川上流部で、不意にけたたましい銃撃音が鳴り響くと、激しく光輝いた無数の閃光の応酬によって、細い谷川の間に綺麗な光の架け橋が形作られる事となった。

（セニフ）
「・・・！・・・戦闘中！？」

（ジョハダル）
「セ・・・フ！・・・のまま・・・！！ザザッ・・・気に・・・。ザザ。」

セニフは一瞬、自機の後方から追い上げてくる、味方機の様子を窺い見るような素振りを見せはしたが、間髪を置かずして投げかけられたジョハダルの指示の内容を察すると、すぐさまセンサーへと伸びるワイヤーロープに高い電圧をかけて焼き切り、思いっきり右足でプットペダルを強く踏みしめた。

そして、すかさずトゥマルクの左手に装備した、ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の弾丸装填状況をチラリと横目で確認すると、左手側に捻じ曲がった河川を横断するように、一気に川の中へと突入を開始した。

右手側に流れる河川の両岸を挟んで、激しい銃撃戦が繰り広げられていると言う事は、勿論、セニフ達フロア隊の到着に先んじて、このエリアへと突入した友軍部隊の存在があるからに他ならない。

友軍の進撃ルートと作戦経過時間から推測すると、恐らくこれは、彼女の右手側に聳え立つ山の崖上を、西側に迂回してきたキャリオン隊以外には考えられないのだが、敷設された地雷源を大きく迂回する羽目になってしまった同小隊が、これほどまでに早い段階でこのエリアに突入しているとは、まさか彼女達も思っても見なかっただろう。

しかし言うなれば、対岸の高台エリアへの突入を目論んでいたセニフ達にとって、その周辺部に屯す帝国軍ＤＱ部隊の注意を一手に引き受けてくれる友軍部隊の登場は、まさに願っても無い好機の到来を告げるものである。

この時セニフは、ジョハダルの下した指示の全てを聞き取る事が出来た訳ではなかったが、それでも彼の意思を理解するには、それほど多くの時間を必要とはしなかった。

セニフは激しい水飛沫を吹き散らしながら、ほぼ一瞬にして狭い川を渡り切ると、すぐさま目の前に横たわる緩斜面へと突入を果す。

そして、再び鬱蒼と色濃い緑によって構成される密林の中へと、真っ白なトゥマルクの機体を滑り込ませた。

ドン！！ドン！！ドン！！ドン！！

（セニフ）
「！？」

すると突然、彼女から見て右手側崖下付近で無数の眩い閃光が迸り、細く鋭い鋭利な光の鏃が一斉に綺麗な夜空へと舞い上がった。

セニフは一瞬、高濃度フィールド防壁に加え、更にＦＴＰフィールドを張り巡らせると言う、入念な索敵妨害措置を施していた自身の行動が、いとも簡単に敵有線索敵網に察知されてしまったのでは無いかと勘ぐってしまったのだが、猛烈な連射性と弾速を伴って天空へと駆け上がるその光の筋は、どうやらセニフ機に対して砲じられたものではなかったようだ。

その直後、波立つような怒号を周囲に響かせながら飛来した三機のヘルコンドルが、超低空姿勢を保ったまま彼女達の頭上を一気に飛び去ると、それに合わせて殺意を込めた光の筋が素早くスライドして行く。

勿論それは、予めこの位置に設置されていた、帝国軍の固定式対空砲台による攻撃であろう事は、全く疑いようも無かった。

この固定式対空砲台と言うのは、砲撃反動耐性に不安を抱えるＤＱに比べて、遥かに精度の高い射撃能力を有しており、対地攻撃を実行する戦闘機パイロット達からはすこぶる毛嫌いされる厄介者だ。

しかしこの時、激しく撃ち鳴らされた無数の弾丸は、飛び去った三機の戦闘爆撃機に対して、何ら少しも手傷を負わせる事無く空を切り裂くと、やがて意気消沈するかのように静かに鳴り止んでしまった。

（セニフ）
「ジョハダル！崖下に敵対空砲台１！私はこのまま突っ込むよ！」

（ジョハダル）
「フロル！今の対空砲撃発射地点はトレースできたか！？」

（フロル）
「もうバッチリ。狙撃ライン上に遮蔽物なし。」

（ジョハダル）
「よし！こいつの処理はフロルに任せる！ただし、狙撃は俺達の攻撃タイミングを見計らってくれ！」

（フロル）
「了解。私も直ぐ追いつくよ。」

ジョハダルはそう言って、並走するフロルに対して新たなる指示を飛ばすと、先行したセニフ機の後を追うようにして、勢い良く河川を渡り切り、そのままの勢いを保って一気にトゥマルクの機体を緩斜面へと突入させた。

一方フロルの方はと言うと、すぐ川の辺（ほとり）に横たわっていた、大きな岩石付近でトゥマルクを停止させると、その岩に両手を付いて機体の安定化を図り、目標地点へと狙いを定めて、右肩に装備した１２０ｍｍミドルレンジキャノンを構えた。

彼女達が北側高台付近に屯（たむろ）す敵部隊の排除を第一目標と定めるならば、とりあえずこの固定対空砲台を無視して突き進むと言う手も無くは無いのだが、総兵力で劣るトゥアム共和国側が、当該戦闘区域で優位的立場にあるのも、このリバルザイナ共和国空軍の戦闘爆撃機の存在があってこその話であり、彼女達にはその事実を、決して蔑ろにするような真似は出来なかったのだ。

ズッゴーーーーン！！

やがてフロルは、再び北方で産声を上げた巨大な火柱にチラリと視線を宛がうと、ヘルメットゴーグルに映し出されるターゲットサイトを、ゆっくりとロングレンジ狙撃モードへと切り替える。

そして、徐に小さく吐き出した息と共に、河川上流部の狙撃地点へと視線を宛がうと、狙撃タイミングが訪れるまでの僅かな時間を使って、河川上流部で繰り広げられる激しい銃撃戦の様子を窺った。

06－25：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［7］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２５「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

起伏の激しい山岳地帯にあって、如何にその川幅が狭いからとは言え、お互いにほとんどリスクを背負わぬまま展開されるその戦闘は、まるで歯痒(はがゆ)い鍔迫(つばぜ)り合いを、延々と演じ続けているかのようにも見える。

直ぐ目と鼻の先に敵の部隊を見据えながらも、両者の間に横たわる谷川の存在により、いきなり相手に接近を許す危険性も皆無であり、ほぼ安定的な戦線を構築するに至った両者は、全く次なる一手を繰り出す事が出来ずに、ただ無駄な時間と無駄な弾丸を浪費するに終始していた。

しかしそんな時、フロルがじっと見据えた視線の先で、断続的に輝き続けていた光を覆い隠すような眩い大きな閃光が迸(ほとばし)ると、周囲を叩き付ける様な強い爆発音を伴って、真っ赤な業火に塗(まみ)れた鉄屑(てつくず)が崖下へと転がり落ちた。

（フロル）
「おっ！？」

お互いにそれなりの距離を保ち、相手の射線を遮(さえぎ)る無数の木々達に囲まれた中で、正確に相手の機体を射抜く事など、そう簡単に成せる業(わざ)ではなかったが、この時、帝国軍ＤＱを撃破したキャリオン隊のパイロット達は、根気良く相手が攻撃態勢に移行するタイミングを狙う事で、ようやくその苦労を実らせる事に成功したのだった。

ドッドーーーン！！

そして、無残にも崖下へと転落する事になった帝国軍ＤＱは、谷川を囲む険しい岩肌に二、三回激突した後で爆発し、細かい火の粉を周囲にぶち撒きながら勢い良く川の中へと水没する。

（ウララ）
「やったぁー！また当たった！！私ってやっるぅ！」

（マース）
「ウララ！馬鹿みたいに騒いでいる暇があったら、さっさと次を狙え次を！ベルトラン！もう少し下がっとけ！敵の標的にされちまうだろうが！」

（ベルトラン）
「・・・了解。」

細い谷川を挟んで南方高台付近に陣取っていたキャリオン隊のメンバー達は、小隊長である「マース・チュリーズ」の指示により、帝国軍ＤＱ部隊に対してライン陣形を形成すると、自分達の有する最大火力を持って、相手を一機づつ集中攻撃で撃破する戦法を用いていた。

勿論、彼等の相手となる帝国軍ＤＱ部隊が、先ほどフロア隊のメンバー達が戦ったポールポンド型であったならば、こうも簡単に敵ＤＱを撃破する事は出来なかっただろうが、彼等の突き進んだ進行ルートは非常に地形的に不安定な大地上ばかりであり、必然と彼等の前に姿を現した敵ＤＱは、中軽量高機動型の人型汎用タイプが多かったのだ。

彼等はこの戦場において、これで六機目の敵ＤＱを撃破した事になる。

小隊長のマースは、途出してＤＱ操舵能力に長けている訳ではなかったが、非常に安定的な戦術を展開する事で知られる経験豊富な戦闘屋であり、過去にもトゥアム共和国陸軍所属の兵士として、幾つもの戦場を渡り歩いて来た経歴を有していた。

彼のトレードマークである色濃い口髭と、鋭く跳ね上がった太い眉毛からは、猪突猛進型である荒くれ者のイメージが付きまとうのだが、こう見えて非常に冷静な思考の元で判断を下す人物だ。

とは言え彼は、一度頭に血が上ると周囲が見えなくなると言う欠点が非常に痛いところであり、過去にブラックポイントで開催されたＤＱＡ大会において、完全に格下となるチームＴｏｍｂｏｙを相手に、彼があっさりと敗れ去ってしまったのは、少なからずそう言った彼の暴走に原因が有った事は確かだった。

そして、彼の指揮下で巧みにＤＱを操る二人の男女は、二人ともが同じＤＱＡチーム上がりのパイロットであり、実は小隊長であるマースよりも格上となる、ハンタークラスのチーム「ダフマリン」に所属していた人物達だ。

今年で二十歳を迎える女性の方は、名前を「ウララ・アクイ」と言い、短めの茶髪にのっぺりとした顔立ちが特徴的な、非常に明るい性格の持ち主だ。

勿論、小隊長であるマースとは違い、実戦経験そのものは皆無であったが、中距離戦闘をもっとも得意とする射撃の名手であり、ＤＱ

A時代には数多くの相手パイロットを駆逐してきた若きポイントマンでもあった。

一方、若くして禿げ上がった頭髪が特徴的な男性の方は、必要が無ければほとんど言葉を発さないと言う寡黙な人物であり、名前を「ベルトラン・ギュストリア」と言った。

彼もまた、ウララと同様、DQA時代には数多くの功績を挙げてきた、優秀なパイロットの一人であったが、専ら自ら率先して、敵陣に切り込むような獰猛さを持ち合わせておらず、比較的チームメイトに足並みを揃えて行動するタイプの人間だ。

彼はその控えめな性格からも解る通り、自らが敵を撃破するのではなく、味方に敵を撃破させるアシストシュートを非常に得意としており、実際この時、最終的にウララが撃破する事になった帝国軍DQの行動を、事前に上手く抑止していたのは、彼の巧みな銃撃によるものであった。

（ウララ）
「マース！カリッツォが・・・ザザッ。・・・ザーザー。・・・ンサーをもう・・・ザザ。」

（ベルトラン）
「・・・。」

（マース）
「ああ！？何！？何だって！？」

有線通信機装置をお互いの機体近くへと放り投げているにもかかわらず、大気の流れと共に時折荒れ狂う妨害フィールドの渦に、しば

し彼等の通信機は不快な雑音を響かせる。

濃密な妨害フィールド粒子に取り囲まれた彼等が、お互いに絶妙の位置取りを奏で出して、帝国軍防衛守備隊に対応できていたのも、膠着(こうちゃく)した戦線の中で、半有線通信を用いる事が出来ていたからに他ならないが、それでもこの時、戦場に不似合いな程可愛らしい声色を持って、小隊長に要求を投げかけたウララの言葉は、そのほとんどが意味不明な雑音の渦にかき消されてしまった。

現時点において、彼等の周囲に浮かび上がる敵影の数は全部で四つであり、川縁(かわべり)の高台に布陣した彼等から見て、完全に死角となる崖下に存在する一つの光点は、先ほど打ち上げられた激しい対空砲撃によって、固定式対空砲台であろう事が判明している。

そして、彼等が対岸へと投げ入れたワイヤーロープ付きセンサーによって、捕らえられた他の三つの機影は、その布陣場所となる地形から推測しても、間違いなく全て中軽量高機動タイプであろう事が予想された。

最終的にパレ・ロワイヤルミサイル基地攻略を見据えた場合、彼等もまた、この対岸の高台付近を早期に制圧してしまう事が、最も有効な手段である事を理解していたが、彼等の布陣する南側高台からの進行ルートは、何れも北側高台から狙い撃ちが可能な危険な崖道であり、彼等はこの北側の敵ＤＱ部隊を排除しない限り、一歩も前進する事が出来ないと言う、袋小路(ふくろこうじ)へと突き当たってしまっていたのだ。

勿論、対岸に数多く群生した木々達を隠れ蓑(みの)とし、強固な防衛体制を築こうとしていた帝国軍ＤＱ部隊を、簡単に排除する事は出来ないであろうが、彼等はこの時、一度辿り経た道筋を後戻りするより、

少しでも目標目掛けて前進する事の方を優先的に選択したのだった。

（ウララ）
「・・・ザザ・・・よ！左！カリッツォが一機左翼方面に流れて行くわ！敵の動きを追跡して！」

（マース）
「そんな事は言われなくたって解ってる！お前はまず目の前の敵にだけ集中してろ！敵の反撃が来たぞ！」

（ベルトラン）
「！」

ガンガンガンガンガンガン！！

やがて、再び彼等の通信機能が回復の兆しを見せ始めた頃、しばしお互いに様子を見合うような雰囲気から一転、帝国軍防衛守備隊が崖際ギリギリまで前進を開始すると、まるで撃墜された仲間の仇討ちとばかりに、激しい攻撃を繰り出し始めた。

それまで両者共にリスクを背負う事を嫌い、遠目から無為に弾丸を放つだけと言う退屈な戦いに終始していた訳だが、不思議と何かに煽り立てられるように行動を開始した帝国軍の動きによって、キャリオン隊のメンバー達は、突然、緊迫した慌しさに追われる事となった。

マースはすぐさま途出した二機の帝国軍ＤＱに対し、１２０ｍｍミドルレンジキャノンの砲弾を見舞ってやると、直ぐに左翼方向へと流れた敵機の行動をケアする為にトゥマルクを駆り立てる。

そして、相手の動きに合わせて谷川を下るように崖沿いを突き進むと、トゥマルクの左肩に装備した発射装置から、もう一本のワイヤーロープ付きセンサーを対岸へと撃ち放った。

（マース）
「ちっ！そう言うことか！」

激しい銃撃戦を繰り広げ始めた二人の部下達の様子を気にかけながらも、対岸へと投じたセンサーが捕らえた情報に視線を宛がったマースは、思わず大きく舌打ちを奏で出してしまった。

帝国軍防衛守備隊側から見れば、当該戦域における最も有利たる地形を占拠した現状において、無為に相手を撃破する為の攻撃に打って出る必要など何処にもない。

戦局全体を見渡せば、帝国軍の方が完全に不利的状況下にあった事は確かで、彼等にしてみれば、小さな戦局での勝利を獲得する事より、出来るだけ自軍の戦力を消耗しない事を念頭に置きつつ、味方の増援を待つと言う戦法の方がより適切な判断であったはずだ。

勿論、防衛拠点を堅持するにあたり、ただ頑なに守勢を保っていれば良いと言うものではなく、時に強い攻撃的意識を匂わせて攻勢に転ずる構えを見せ、「守る為の攻め」を意図した行動も必要になってくるだろう。

しかしこの時、奇妙な形で攻勢に出た帝国軍側に、それを意図して行動を起こす程の余裕があったのかと言えば、全くそうでは無かった。

マースがこの時対岸へと投じたセンサー上に捕らえられた機体反応

は全部で三つ。

言うまでも無くその内の一つは、先ほど左翼方向へと移動を開始した帝国軍ＤＱのものに違いなかったが、その敵影へと向けて、猛然と襲い掛かるように突進する二機のＤＱは、どうやら帝国軍の増援部隊では無かったようだ。

マースが何やら苛立ちを隠せない表情を醸し出し、対岸の森の奥深くへと視線を投げかけると、次の瞬間、急激にその距離を縮めつつあった光点同士が、眩い閃光を吐き散らしながら、激しい銃撃戦を繰り広げ始めた。

そう。この時対岸の高台付近へと姿を現した二機のＤＱの正体は、先ほど二股河川中州付近から一気に緩斜面を駆け上がっていった、フロア隊のセニフとジョハダルである。

彼女達はＦＴＰフィールドを展開する事により、出来るだけ自機の行動を隠匿して、この高台付近へと突き進んできたつもりだったが、パレ・ロワイヤルミサイル基地周辺に張り巡らせた有線索敵網によって、事前にその存在を検知されてしまっており、完全なる不意打ちを披露するまでには至らなかったようだ。

しかし、今だ前線付近での戦力が整いきらない帝国軍防衛守備隊側が、この姿をかき消したフロア隊に対応する為に宛がえた兵力は、先ほど左翼方向へと移動を開始したＤＱ一機のみであり、崖下への進攻を匂わせていたキャリオン隊の存在によって、それ以上南方高台付近への砲撃手を減らす事が出来なかったのだ。

（マース）

「折角の獲物を美味しい所だけ横取りかよ！！汚ぇぞ！！ジョハダ

ル！！」

深い谷川で隔てられた対岸を見据えつつ、相手に届くはずも無い毒付きを吐き散らして見せたマースだったが、それは極めて自軍優勢にある戦場において、戦況の成り行きを遠目から見守る事しか出来ないと言う、自身の歯痒(はがゆ)い立場に対してのものだったのかもしれない。

ドッゴーーーン！！

ドッゴーーーン！！

やがて程無くして、左翼方面へと展開した帝国軍ＤＱが、襲い掛かったフロア隊のメンバー達によって、あっさりと敗れ去った事を示す爆発音が奏で上げられると、その直後、マースが居た場所から直ぐ真下に当たる谷川付近でも同様に大きな爆発が発生する。

これは勿論、二股河川下流部で狙撃体勢を整えていたフロルによって導き出されたものであり、彼女は北側高台付近で銃撃戦が開始されたタイミングに合わせて、十分に狙いを定めた弾丸を発射すると、見事、崖下に存在する固定式対空砲台の本体を一撃で射抜く事に成功したのだった。

そして更に、一機目の敵ＤＱを撃破したフロア隊のメンバー達は、すぐさま北側高台中央部へと躍り出ると、少しも攻撃の手を緩める事無く、崖際に陣取っていた残る二機の帝国軍ＤＱの背後を一気に脅(おびや)かし始める。

すると、そのフロア隊の放つ攻撃的圧力が呼び水となり、不意に安易な隙を生み出してしまった帝国軍ＤＱの一方が、射撃を得意とす

るウララの銃撃によって、後部テスラポットを射抜かれる事となってしまった。

ドッゴーーーン！！

（ウララ）

「やったぁー！！もう一機戴（いただ）きっと！！」

この時、三つ目の爆発の苗床（なえどこ）として朽ち果てる事になった帝国軍ＤＱは、先ほど崖下へと転がり落ちた仲間と同じ末路を辿る事は無かったが、真っ赤に燃え盛る炎の渦を立ち上らて、薄暗い密林を照らし出すその姿は、残された最後の帝国軍兵士の末路を如実に映し出しているかの様にも見えた。

やがて、もはや自らの運命を悟るかの様に、無謀な反撃へと転じた最後の帝国軍ＤＱは、猛然と迫り来るセニフ機の銃撃によってその動きを完全に封じ込まれると、最終的に彼女の背後から追走して来たジョハダルによって、最後の止めとなる一撃を見舞われる事となる。

そして、瞬間的に炸裂した閃光を持って、吐き散らされた断末魔が周囲に木霊すると、ようやく北方崖上高台を巡る一連の戦闘に、終焉を告げたのだった。

０６－２６：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［８］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２６「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

相手を薙ぎ倒す事でしか歩み進む事の許されない過酷な戦場の中で、程よく火照った身体の熱を冷ますかのように、思わず弛緩の吐息を漏らす戦士達。

長かった様で短かった濃密な時の流れを泳ぎ切り、見事、己の命脈を勝ち取る事に成功した彼等は、しばし訪れた安息の一時に包まれながら、静かに波打つ自らの鼓動を感じていた。

勿論、一方的な展開へと傾き始めた戦局の中で、完全に優位的立場側に属していた彼等は、比較的安易な道筋を突き進む事を許されていた訳だが、それでも一瞬の気の緩みが全てを無に帰する「死」を招き出す可能性もあり、彼等は決して自らの優位性に甘え驕る事は許されなかったのだ。

セニフはすぐさま次なる戦闘に備えて、ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の弾装を新しい物へと切り替えると、サーチレーダーの感度調節ダイヤルをキリキリと回し、自機周辺部の様子を注意深く観察する。

そして、自機周辺部半径３００ｍｉｌｓ以内に、当面の障壁となりうる敵機の姿が、全く捉えられていない事を確認すると、彼女は大きく肩で深呼吸して見せながら、静かにＴＲＰスクリーンに映し出される薄暗い森の中へと視線を這わせた。

激しい銃撃戦から一転、普段通りの静けさを取り戻し始めた森の中

では、今だ燻り続ける帝国軍ＤＱの残骸が、ほのかに放つ赤色を持ってして、周囲の綺麗な大自然の風景を滲み出していたが、言うまでも無くそれは、戦いの終焉を告げる侘しいエンディングなどではなかった。

（セニフ）
「周辺周域半径３００ｍｉｌｓ以内オールクリア。今の所、敵の後続部隊が押し寄せてくる気配は無いね。」

（ジョハダル）
「セニフ。とりあえず味方の後続部隊が到着するまでの間、このポイントを防衛ラインに定めるぞ。北東方向ポイントＫ０１－Ｃ４岩場付近と、Ｋ０１－Ｅ５河川付近に索敵センサーを撃ち込んで、該当戦域の状況を確認してくれ。」

（セニフ）
「了解。東側の川辺まではちょっと届かないかも知れないけど、もう少し前進した方が良いかな。」

（ジョハダル）
「いや。ワイヤーが届く範囲だけで構わない。東方崖上に並ぶ固定野戦砲台の射程範囲を考えると、崖を降ったキャリオン隊が、そのまま河川上流部に抜け出るのは不可能だ。東側戦闘エリアは当面無視を突き通して良いだろう。キャリオン隊には一応、俺達の通った二股河川中州付近を、登攀するよう指示を出しておく。」

（セニフ）
「固定野戦砲台の位置が解っているならさ。リプトンサム部隊に、やっつけてもらえば良いじゃん。何でまたキャリオン隊の皆に、遠回りさせる必要があるのさ?」

（ジョハダル）
「東方密林地帯には固定野戦砲台の他に、敵の別動部隊が潜んでいる可能性もあるし、態々（わざわざ）危険な藪（やぶ）の中を突（つっ）いて、大蛇に出くわす必要もあるまい？」

（セニフ）
「うーん。確かにそう言われればだけど・・・。あんまり戦力を一箇所に集中させるってのも、少し考え物のような気もするなぁ。相手にしてみれば、敵が一箇所にまとまっていた方が守りやすいんだろうし。」

（ジョハダル）
「まあセニフ。お前の言いたい事も解るがな。現状俺達の方が上を取っているんだ。ここは無闇に戦線を拡大するより、戦場を一箇所に固定化した方が、より効率的だと思うぞ。」

（セニフ）
「それって、私達が敵部隊を誘（おび）き出す、囮（おとり）になるって事？」

（ジョハダル）
「そう言う事。勿論、敵の範囲攻撃型兵器に対する警戒だけは、十分にしておく必要が有るがな。」

ジョハダルはそう言って、少し不満げな態度を示すセニフを説き伏せると、すぐさま南側崖上付近を見渡せるポイントまでトゥマルクを移動させる。

そして、短く簡潔にまとめた作戦指示データを信号弾に流し込んで、左手に装備した「ＧＭＭ３０－グレネードガン」に装填すると、対

岸の森の中に屯(たむろ)すキャリオン隊目掛けて撃ち放った。

極少数である彼女達先行部隊が、迫り来る帝国軍防衛守備隊を相手にするには、少なからず地形的優位性を生かした戦術が必要不可欠であり、そう言った意味では、横幅の狭い河川北側崖上付近を防衛ラインと定めた、ジョハダルの判断は正しいと言える。

しかし、彼女達の居るこの河川北側の高台付近を北東方向に抜け出ると、そこには比較的なだらかな上り坂の続く岩石地帯が広がっており、密林地帯内部と変わらぬ見通しの悪さを保っているとは言え、数多くの兵力を投入できそうな地形をしていた。

パレ・ロワイヤルミサイル基地の占領が当面の目標である彼女達にとって、その防衛守備隊の全てを殲滅(せんめつ)する必要など、何処にも無い訳だが、それでも基地へと続く侵攻ルート上で出くわした敵は、全て排除する必要がある。

その為セニフは、後続となる基地占領部隊の負荷を出来る限り軽減する為、なるべくこのエリアに敵部隊を集結させない方向で考えを巡らせていたのだ。

敵防衛部隊の分散化を目指した作戦行動となると、それは必然的に相手の意識を他方へと逸(そ)らす、陽動作戦が必要不可欠と言う事になり、フロア隊、キャリオン隊共に別行動を取る事で、敵防衛守備隊に二正面作戦を強いると言う考えも、全く持って理に適(かな)った戦術の一つであった。

（セニフ）
「他の皆の力を・・・。借りるって事だよね。うん。解った。ジョハダルに任せるよ。」

しかし、セニフは「俺達の方が上を取っているんだ」と言う、ジョハダルの言葉の真意を持って、自身の否定的な思いを無毒化すると、直ぐに彼の意見に賛同する態度を示し、指示された該当エリアの索敵行動へと移り進んだ。

確かに守る側に断然有利な地形的条件の上に、強固な防御陣を敷かれてしまえば、彼等はこのエリアを簡単に突破する事が出来なってしまう訳だが、幸いにも彼等は、現状、一箇所に集中した敵部隊を一気に殲滅（せんめつ）する事ができる攻撃手段を持ち得ている。

この時、ジョハダルが画策（がさく）していた思いとは、まさにそう言った相手の意図を逆に利用して、帝国軍防衛守備隊を一箇所に誘（おび）き出す事であり、上空を自由に飛び回るリバルザイナ共和国空軍と、遥か東方に布陣したリプトンサム部隊の強力な対地攻撃を持って、帝国軍防衛守備隊に壊滅的打撃を与える事を目論んでいたのだ。

勿論、それは妙計奇策（みょうけいきさく）にも類さない、極一般的な戦術論の世界で生み出される「ありきたりな作戦」と言うに等しいものであり、数々の有能な人材によって形成される帝国軍が、その意図に全く気付かないはずも無い。

しかしこの時点で、完全に劣勢たる立場へと転がり落ちた帝国軍側に、数多くの選択肢が残されていたかと言えばそうでは無く、たとえ彼等がその意図に感付いていたのだとしても、このエリアの支配権を簡単に放棄する訳にはいかなかったのだ。

現在、帝国軍側の有線索敵網に捉えられているトゥアム共和国軍の陸上部隊は、ネニファイン部隊の先発隊である6機、プラス、後方から姿を現した6機のDQのみであるが、ほぼ間違いなくパレ・ロ

ワイヤルミサイル基地の占領を目的とした、トゥアム共和国軍本隊が後方に控えているはずである。

とすれば、パレ・ロワイヤルミサイル基地まで、もう目と鼻の先となるこのエリアの支配権を放棄する事は、帝国軍側にとって敗北を意味する事に他ならず、もはや彼等はこの時点で、苦心惨憺（くしんさんたん）たる茨の道筋の、何れかを選択しなければならない立場にあったのだ。

（マース）
「ちっ！ジョハダルの野郎！そんな解りきった指示を、改めて出すんじゃねぇよ！このハイエナ野郎が！」

（ウララ）
「あーあ。崖を降（くだ）ったら、直ぐに後戻りか。なんだか、あっち行ったりこっち行ったり、ややこしいわね。」

（ベルトラン）
「・・・。」

帝国軍の領土南東部防衛戦略における最重要軍事拠点である、パレ・ロワイヤルミサイル基地は、これまで長きに渡り、同地域の軍事バランスを保つと言う重要な役割を担ってきたのだが、それは何も、この基地が強大な軍事力を保有していたからではない。

勿論、陸上兵器に関してだけ言えば、それなりの数を保有していた訳だが、秘密基地たる存在を突き通す役柄から、巨大な滑走路を建設する事が出来ず、保有する航空兵力に関しては、ほぼ皆無に等しい程度のものでしかなかった。

その為、ナルタリア湖周辺部の航空優勢権の確保については、その

ほとんどをオクラホマ軍事空港の航空兵力に依存してきた過去があり、このパレ・ロワイヤルミサイル基地単独での航空優勢権確保は、ほぼ不可能に近い話であった。

トゥアム共和国諜報部工作員の破壊工作により、軍事管制システムに壊滅的打撃を与えられてしまった帝国軍は、現在、周辺基地との連絡が全く取れない状況へと陥ってしまっており、現状パレ・ロワイヤルミサイル基地の立場は、全く上空からの支援を見込めない孤立した状況下で戦わなければならないと言う、厳しい現実に直面していたと言える。

それはまさに、冥府へと続く薄暗い穴蔵の中に、身体の半分までが取り込まれてしまった状態とでも表現するのが適切であろうか。

そしてそれが、やがて全身に及ぶであろう事は、もはや逃れる事の出来ない悲しき現実だったのかも知れない。

（ウララ）
「ねぇねぇ。そろそろ後続部隊が到着する頃だろうし、しょうがないから、いっその事、本隊側に取り込まれちゃった方が良くない？」

（マース）
「何馬鹿な事言ってやがんだ！こんな楽勝モードの温い戦場なんて、そう滅多に巡り会えるもんじゃねぇぞ！折角ポイントを荒稼ぎするチャンスなんだ！みすみす見逃してたまるかってんだよ！ウララ！ベルトラン！さっさと崖下に降りるぞ！」

現時点において、このパレ・ロワイヤルミサイル基地を巡る攻防に関して、トゥアム共和国側の方がより勝利者たる立場に近かった事は間違いない。

しかしそれは、対峙する両勢力の優劣を指し示した、概括的総評に過ぎないものであって、決して各個人個人の生き死にを決定付ける確定的要素とは成り得ないものだ。

人が最終的に勝利の喜びを感じる事が出来るのは、その戦いを生き延びた者達だけ与えられる特権であり、死んでしまえば敗者と何ら変わらない虚空の闇に沈む運命が待っているだけだ。

勿論、その事を良く知る彼等にとっては、どれほど自分達が優位的立場にあったのだとしても、決して油断する事無く、決して慢心する事無く、生き延びる為の努力を続ける必要があったはずだった。

（ウララ）

「まあ確かにね。どうせもう勝ちは決まってるんだろうし、今の内に稼げるだけ稼いでおいた方がいいかもね。でも、また私が美味しいところ、全部持って行っ・・・。」

ズゴーーーーン！！！

しかしこの時、彼等の周囲にしばし訪れた静寂な雰囲気が、彼等の張り詰めた緊張の糸を一瞬弛ませてしまうと、次第に楽観的展望を吐き散らし始めた彼等の元に、突然姿を現した気紛れな死神が、戒めの鉄槌を振り翳した。

キャリオン隊の隊列中央部で、意気揚々（いきようよう）と、勝ち誇った表情を浮かべていたウララの姿が、一瞬の内に灼熱の白霧の世界へと誘われると、彼女は全く自分の身に何が起きたのかを理解

する暇も与えられぬまま、強烈な地獄の業火（ごうか）の渦に包み込まれた。

（ベルトラン）
「！！・・・ウララ！！？」

（マース）
「何っ！！？」

瞬間的に周囲を駆け抜ける猛烈な爆音と猛烈な爆風の余波を浴びせかけられながら、驚愕（きょうがく）の声を張り上げてしまった二人は、極至近距離で生み出された巨大ない炎の渦から逃れる為、即座にトゥマルクを緊急発進させて回避行動へと移行する。

そして、完全に跡形も無く消し飛んでしまった仲間の方へと、一度だけチラリと視線を流し当てたマースは、直ぐに周囲に隠れ潜む敵の所在を特定する為、サーチモニターへと視線を落とした。

（セニフ）
「何！？一体何が起きたの！？」

（ジョハダル）
「セニフ！！周囲に敵の姿は無いのか！？」

（セニフ）
「無い・・・！！何処にも反応が無いよ！！」

しかしこの時、セニフが思わず張り上げてしまった言葉の通り、彼等の有するサーチシステム上には、全く敵機の反応を指し示す光点は映し出されていなかった。

勿論、つい先ほどジョハダルから指示された二箇所の索敵ポイントについては、セニフが撃ち込んだワイヤーロープ付きセンサーによって、既に彼女の索敵範囲内に取り込まれた状態にある。

ドン！

マースは思わず大きな舌打ちを奏で出しながら、何の役にも立たないサーチモニターを思いっきり右手で殴りつけると、すかさず装備したＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の弾丸換装作業を行いながら、ＴＲＰスクリーン越しに目視での索敵行動を開始した。

（マース）
「一体どっから撃って来やがった！！ベルトラン！！周囲の警戒を怠るなよ！！」

（ベルトラン）
「・・・・・了解。」

河川南側高台付近は、右手側を切り立った崖、左手を深い谷川に挟まれた密林地帯であり、北側高台付近をフロア隊が完全に制圧している現状から推測しても、至近距離からの攻撃された訳ではない事が窺える。

そして、自動追尾機能付きミサイルや、特定ポイント指定型ミサイルによる攻撃であれば、ほんの一瞬であってもサーチシステムが叫び声を上げるはずであり、上空からのピンポイント爆撃と言う可能性も、リバルザイナ共和国空軍の戦闘爆撃機が、空の支配権を完全に掌握している事から、まずありえない話であろう。

とすると、北側に広がる山岳地帯から狙い撃ちされたとしか考えられないのだが、どう見ても濃密な密林地帯を間抜いての狙撃は不可能なように思える。

もしかしてあいつ等、あの岩石地帯の索敵を怠(おこた)ってるんじゃねぇだろうな・・・。

岩石地帯手前側付近からの狙撃ならば、十分考えられる範囲だぜ！

この時マースは、北側高台に布陣するフロア隊に対して、そんな疑念を投げかけると、静かに北東部に広がる岩石地帯の方へと視線を向けた。

もしかして、完全に意表をついて背後からの攻撃か！？

最新型のサーチシステムで全く捉えられない攻撃となると、至近距離からの攻撃である可能性もあるが・・・。

この時ベルトランは、後方から味方の援軍が到着する前に、自分達の背後に取り付いた敵部隊が存在するのではないかと言う疑念を抱くと、静かに彼等の背後となる南方向へと意識を逸らした。

ん？

すると次の瞬間、マースの見据えた視線の先、つまり、彼等から見て北東方向に広がる岩石地帯の更に奥の密林内部で、何やら一瞬だけ眩い閃光が迸(ほとばし)ると、全く間髪を置かずして彼の視界が、真っ白な闇の世界へと取り込まれて行った。

ズゴーーーーン！！！

（ベルトラン）
「！！？」

そして、再び打ち鳴らされた狂乱的大爆発が、隊列の最左翼で身構えていたマース機を一瞬の内に掻き消してしまうと、暴れ狂う灼熱の業火(ごうか)を吐き散らしながら、一気に不安定な崖際を撃ち砕いてみせる。

それはもはや、彼が一命を取り留めているのでは無いかと言う、儚(はかな)き希望すら抱く事を許さない、驚異的破壊力を有した攻撃であった。

（ジョハダル）
「マー！！・・・！！」

真っ赤に燃え盛る炎の渦によって生み出されたどす黒い黒煙が、綺麗な夜空へと勢い良く立ち昇って行く中で、ジョハダルは無残にも谷川へと崩れ落ちる無数の岩塊(がんかい)へと視線を走らせると、言葉にならない想いを喉元に詰まらせた。

勿論、恐らくは跡形も無く吹き飛んでしまったであろうかつての僚

友を、救い出す事などもはや出来るはずもないのだが、ジョハダルは一瞬だけ両目を瞑って、静かに哀悼(あいとう)の意を示すと、直ぐに厳しい表情を浮かび上がらせて、周囲へと意識を張り巡らせた。

（セニフ）
「ス・・・！スナイパー！！？まさか！？・・・こんな場所で！？」

（ジョハダル）
「セニフ！！一旦後退する！！どういう理屈かは解らんが、敵の射撃精度が余りに高すぎる！！このままだと俺達も狙い撃ちされるぞ！！」

二人目の被害者となるマース機が撃墜されるまで、全くと言っていいほど敵の攻撃手段を特定する事が出来ていなかった彼女達だが、この時セニフは確かに、瞬間的に撃ち出された一筋の閃光が、南側崖上付近へと向かって、薄暗い森の中を疾走する様を目の当たりにしていた。

それはまさに、南側崖上へと結び付けられた一直線上を、綺麗に辿った長距離射撃であり、彼女達が警戒する岩石地帯よりも更に向こう側となる、密林地帯奥深くから放たれたもののようだった。

ほとんど何も見えない薄暗い闇の中で、密林内部に潜んだ相手を正確に狙い、しかも起伏の激しい岩石地帯と、鬱蒼(うっそう)と生い茂る木々達を、見事間抜いて相手を狙撃するなど、全く持って不可能に近い芸当である。

しかし、完全に一発一中となる高精度射撃を立て続けに披露して見せたその攻撃は、どう見ても偶然が折り重なって生み落とされた産物などではなく、確実に何者かの手によって放たれた殺意の刃であ

ろう事は確かだった。

０６－２７：○パレ・ロワイヤル攻略作戦［９］

第六話：「死に化粧」
Ｓｅｃｔｉｏｎ２７「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

（セラフィ）
「はっはー。はーはー。またまた命中だねー。もしかして僕ってやっぱり、天才って言う奴なんじゃないのかなー。こーんなにも簡単に敵のＤＱをやっつけちゃうなんてさー。もう美味しくって美味しくって、止められない美味しさだねー。これは。・・・あーあー。アレナちゃんもバルベスも、一緒に着いて来ればよかったのにー。こんな楽しいパーティーをふいにするなんて、二人ともどうかしてるよー。まったくー。・・・？あーっ。そうかー。そう言う事かー。うんうん。解っちゃったよー。二人が僕に着いて来なかった理由ー。二人ともどうせ天才の僕が、獲物を全部持って行くって、解ってたんだねー。やーるなぁー。二人ともー。」

完全に優位的立場にあったはずのネニファイン部隊のメンバー達を、禍々（まがまが）しい悪魔的狙撃術を持って、一瞬にして窮地（きゅうち）へと追い遣（や）った一人の男が、気持ちの悪い軟調な言葉遣いで自画自賛を繰り返す。

黄土色（おうどいろ）を基調とした大型ＤＱ「ブロホン・ツィー・ゲルン」に搭乗し、セニフ達が警戒する北東側岩石地帯の更に奥の密林地帯内部に身を隠していた彼は、やがて撃ち終えた「１８０ｍｍナルセスキャノン砲」から、巨大な薬莢（やっきょう）を一つ吐き出してみせると、サーチモニター上の手前側に映し出された、三つの光点へと静かに視線を落とした。

（セラフィ）
「さーてー。お次はどれがいっかなー。奥側の一機かなー。それとも手前側の二機かなー。ほらほら、折角次の攻撃まで時間があるんだからさー。今の内に逃げないとだめだよー。君達ー。このままだと、また天才の僕ちゃんにやられちゃうよー。それでもいいのかいー？・・・。まー。逃がさないけどねー。」

全く聞き手となる相手が居ないにも関わらず、薄暗いコクピットの中で一人、ブツブツと意味の無い独り言を呟き出していたセラフィは、じっくりと次なる獲物の品定めをしながら、メインコンソール脇へと置き放っていた菓子袋へと徐に手を伸ばした。

そして、ブロホン・ツィー・ゲルンの胴体腹部を前後に貫通する、巨大な長距離砲に次なる砲弾を装填すると、大量に掴み取ったお菓子を口一杯にほおばりながら、静かにサーチレーダーの反応に意識を集中した。

彼はこの時、自らの陣営が完全に劣勢たる立場に追い込まれていた中で、しばらくの間、たった一人で複数の敵を相手にしなければならない状況下にあったのだが、彼の奏でる能天気な言葉尻からは、不安や恐怖と言った、マイナス的感情は一切感じられなかった。

それは勿論、彼が自身の有する戦闘能力の高さに、絶対の自信を持っていたからであり、セラフィはまるで気軽にゲームでも楽しんでいるかのような素振りで、不敵な笑みを浮かべて見せると、やがてサーチモニター上に光り輝く、一つの光点を指差してみせた。

（セラフィ）
「よぉーしー。こいつこいつ。こいつで決まりー。ちょっと可哀想だけど、仕方ないよねー。って言うかー。たった一人だけ仲間外れ

って方が、もっと可哀想だよねー。待っててねー。今すぐ仲間達の元へと送り届けてあげるからさー。・・・。んー。・・・あれー？・・・あんらー？・・・あー？あーあー？？」

しかし次の瞬間、河川南側高台付近を指差したまま、しばし動きを差し止めたセラフィが、何処か気違いのような甲高い呻き声を上げると、少しばかり顔色を曇らせながら、大げさにサーチモニター画面を覗き込む。

そして、次第に笑みを掻き消して行ったその表情の上に、鋭い殺意を滲ませた眼光を並べ揃えると、まだ半分程度中身を残した菓子袋を無造作に置き放って、突然、思いもよらぬ行動へと打って出た敵機の反応へと視線を据え付けた。

現在、彼の機体に備え付けられた最新型サーチシステムは、パレ・ロワイヤルミサイル基地の有線索敵網と、索敵情報をリンクした状態にあり、完全にリアルタイム情報とまでは行かなかったが、それでもほぼ五秒遅れ程度の新鮮な情報を得る事が出来ていた。

勿論それは、ＤＱなどの単独兵器に搭載されるサーチシステムとは、全く比較にならない程の索敵能力を有しており、その有効索敵範囲は、有線索敵網を張り巡らせた範囲と同値である。

言うなれば彼は、セニフ達ネニファン部隊メンバー達が、如何に最新型のサーチシステムを駆使しようとも、到底及びも付かない広範囲の情報を入手する事が出来たと言う訳だ。

（ジョハダル）

「馬鹿野郎！！セニフ！！止めろ！！戻れ！！戻るんだ！！」

（セニフ）
「このままじゃ皆逃げる前に狙い撃ちされちゃうよ！！私が敵の注意を引き付けておくから、その隙にジョハダルは後退して！！」

（ジョハダル）
「何言っているんだ！？お前一人で・・・ザザッ。・・・。ザザザ・・・るまで・・・。ザー。」

しかしこの時、完全に狩られる立場側へと転がり落ちってしまった悲しき獲物達の中にあって、たった一人、この危機的状況を打開しようと試みる人物がいた。

それは、狂乱的猪突猛進を売り物とする無鉄砲な少女、セニフ・ソンロであり、彼女は今だ敵の詳細所在を特定できていない状況にも関わらず、完全に単独での特攻を選択したのだった。

勿論、彼女には、味方が安全な場所まで逃げ果(おお)すまでの時間を稼ぐと言う、殊勝(しゅしょう)な想いを胸に抱いていた訳だが、味方からも馬鹿野郎呼ばわりされる事からも解る通り、その行動は完全に自暴的暴走とも取れる行為であった。

（セラフィ）
「おーっ。やるねー。当たりー。当たりだよー君ー。当たりだけどー。・・・果たしてそれが上手くいくかな？・・・ゲフッ。」

味方を危機的窮地(きゅうち)から救い出すために、己の身を呈(てい)して危険な火の海へと飛び込む。

聞けばそれはなんとも涙ぐましい献身的とも言える彼女の行動だが、フットペダルをベタ踏みにして密林地帯を快走するセニフには、己

の命を簡単に投げ捨ててしまうような考えは更々（さらさら）無かった。

彼女には彼女なりの考えが有り、彼女が特攻と言う危険な道筋を選び出したのも、完全に彼女達の索敵範囲外から放たれる、敵の驚異的長距離攻撃に関して、少なからず弱点となる点を見出していたからである。

（セニフ）

「敵に撃たせるのは後一発・・・。一発だけだ。」

その一発で敵の所在を完璧に突き止める。

あれだけの長距離をほぼ一直線で駆け抜けた弾道から、使用された武器は固定野戦砲台に匹敵する程の巨大砲のはず。

とすると、先ほどの攻撃からも解る通り、連続して使用するには難があるはずだ。

これだけ視界が悪ければ、敵の狙撃ラインも限られてくるだろうし、常に動き回る相手を狙撃する事は、決して簡単な事じゃない。

敵の次なる攻撃を上手くかわす事さえ出来れば、敵が弾丸換装作業を完了させる前に接近戦を仕掛ける事が出来る。

お互い接近しての戦闘なら、私は絶対に負けない！

やがて、セニフは密林地帯を勢い良く抜け出し、北東方向に広がっていた岩石地帯へと身を乗り出すと、すぐさま北方の密林地帯に向

かって、二本のワイヤーロープ付きセンサーを、各々左右三十度の角度へと撃ち放つ。

そして、サーチシステムの感度計を最大限まで引き上げ、前方方向に広げられた索敵範囲に全神経を研ぎ澄ませると、大きな岩山の立ち並ぶ起伏の激しい凸凹(でこぼこ)道を疾走しながら、次第に高鳴る胸の鼓動に合わせるかのようにして、心の中でひた叫んだ。

撃て！！

撃て！！

撃て！！

撃って来い！！

ドッゴーーーーーン！！

すると次の瞬間、北の密林地帯内部で産声を上げた眩い曙光(しょこう)が、猛烈な弾速を有した破壊的殺意の源を吐き出して、強い願いを抱いて身構えていたセニフの元へと巨大な爆発を齎(もたら)した。

右足神経損傷５％！！

その他機体、計器共に異常無し！！

いける！！

見据えた視線の先で発せられた瞬間的閃光に、全く遅れる事無く素早い反応を示したセニフは、三重に張り巡らせたサーチシステムの警告音が鳴り響くよりも早く、トゥマルクの機体に急旋回を加えるで、何とかこの攻撃をやり過ごす事に成功した。

この時、彼女がほとんどダメージを被(こうむ)らずに済んだのは、その周囲に聳(そび)え立つ岩山が盾となり、爆発の衝撃がある程度緩和されていたからであり、彼女の目論んだ作戦は、まさに最高の形を持って、次なる展開(ステージ)へと続く階段を昇り終えたのだった。

彼女は一度、機体の被害状況へとチラリと視線を宛がうと、すぐさま索敵センサーのワイヤーロープを焼き切り、ようやく特定する事が出来た敵の潜伏地点へと目掛けて、更に思いっきりフットペダルを踏みしめた。

敵の弾丸換装作業は、まだしばらくの間完了しない。

その間、出来る限り敵との距離を詰めるんだ。

あれほどの威力を見せ付けた高火力武器を抱えたまま、敵がこのトゥマルクの足を上回る機動力を有しているもずがない。

もし別の手段を講じて反撃に転じたとしても、所詮はスナイパーがサブウェポンとして保有する程度の予備武器だ。

この私の突進を止める事は出来ないよ！

やがてセニフは、猛烈なスピードを保ったまま一気に岩石地帯を突破すると、素早く北側の密林地帯へとトゥマルクを突っ込ませ、直ぐに新しいワイヤーロープ付きセンサーを準備した。

そして、程無くして目標地点となる周辺周域へと差し掛かると、敵が先ほど砲撃を敢行した場所となる小高い丘の裏側に向かって、索敵センサーを撃ち込んだ。

（セニフ）

「・・・！！いたっ！！」

この時、セニフの投じた索敵センサーに捉えられた敵機の数は一つのみ。

それは恐らく、先ほどセニフ機へと攻撃を仕掛けた張本人にほぼ間違いなく、今だ次なる砲弾の換装作業が終わっていないのか、接近するセニフに対して全く攻撃を仕掛けてくるような素振りを見せなかった。

セニフは敵の反撃に細心の注意を払いながらも、密林地帯への突入口からほぼ一直線となる道筋を疾走し、そのままの勢いを保ったまま一気に小高い丘の裏側へとトゥマルクを滑り込ませる。

そして、鬱蒼（うっそう）と生い茂る木々達の枝葉を振り払い、目の前に姿を現した敵機に向かって、ＡＳＲ－ＲＴｙｐｅ４４の銃口を正確に翳（かざ）して見せた。

（セニフ）

「・・・え!?・・・・・・ダ、ダミー!!!?・・・何でこんな所に!!」

しかし次の瞬間、彼女は完全に予想を裏切られる不測の事態を突然に突き付けられ、大きく打ち鳴らされた心臓の鼓動と共に、思わず驚きの声を発さざるを得なかった。

彼女は気づいていたであろうか。

先ほどキャリオン隊のメンバー達に放たれた砲弾と、自身に放たれた砲弾の違いを。

彼女が捕らえた敵機の反応は、サーチモニター上、確かにDQタイプである事を示す表示が成されていたが、実際に彼女の目の前に現れた敵兵器は、大型の固定野戦砲台一基のみだった。

しかもそれは、諜報部から入手した情報には、全く記載されていない固定野戦砲台であり、戦術的には意味を成さない密林地帯のど真ん中と言う、摩訶(まか)不思議な場所に設置されたものである。

彼女が驚くのも当然の事であろう。

それは奇(く)しくも、パレ・ロワイヤルミサイル基地の総司令官たるナコレアフが、上空から見て配置的に綺麗だからと言う、とんでもない理由で最近設置されたものだった。

（セラフィ）

「はっはー。パレ・ロワイヤル基地の防衛システムとリンクしてるんだー。遠隔操作で野戦砲台を撃ち放つことぐらい、簡単に出来るよー。」

そしてこの時、彼女は気付いていた。

先ほどから狙撃を実行していた敵の本当の正体が、この固定野戦砲台ではない事を。

それは彼女が捕らえたＤＱ機体反応が、この固定野戦砲台周域から発せられていると言う事実が示唆しており、帝国軍がこの固定野戦砲台を主として、相手を殲滅せしめる算段を目論んでいたならば、態々（わざわざ）相手に見つかるような反応をそこに示すはずも無い。

この固定野戦砲台をＤＱであると誤認させる意図が有るからには、そこに自らの所在を隠匿したい他のＤＱが存在するからに他ならず、セニフはこの時、完全に敵の罠に嵌められてしまったのだ。

絶望と恐怖とを身に纏った死神に、黒い影を落とされた思考が取り乱し、何ら成す術を見出せ無い極限状態に、意図せぬ震えに塗れた体が硬直する。

自らの五体の頭の先から足の先までを駆け巡っていた真っ赤な血の流れが、全て逆流するような気持ちの悪い悪寒を背中に感じながら、次第に血の気を失うセニフの表情に、光を見失った漆黒の瞳が挙動不審な虚ろいを見せる。

（セラフィ）

「君もさー。結構頑張った方だと思うけどー。これで終わりだゲフッ。」

やがて、罠を仕掛けた固定野戦砲台の辺(ほとり)で、完全にその足を止めてしまったトゥマルクの反応に、薄気味悪い笑みを浮かべて見せたセラフィが、正確に狙いを定める。

そして彼は、全く何を躊躇(ちゅうちょ)するでも無く、即座にナルセスキャノン砲のトリガーを引き放った。

06－28：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［10］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２８「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

密林内部を駆け巡った瞬間的閃光と共に、強烈な爆音を周囲へと吐き散らした巨大な火柱が、おびただしい量の紅蓮（ぐれん）の炎を渦巻いて、色取り取りに輝く夜空の星々を掻き消していく。

そして、ざわめく森の木々達の様相を、より一層激しく煽り立てる爆風が密林内部を駆け巡ると、やがてゆっくりと巨大な黒煙を天空へと立ち上らせた。

緑豊かな自然の風景を真っ赤な朱色（しゅいろ）で焚（た）き付けて、しばし幻想的な夕暮れ時を演出して見せたその赤光（しゃっこう）は、やがて直ぐにその輝きを失う運命にあったが、それはまるで人の儚き人生の終焉を映し出しているかの様でもあった。

（ジョハダル）
「セニフ！！」

（ベルトラン）
「！！」

再び次第に薄暗い闇夜へと閉ざされ行く暗黒の牢獄の中で、全てを見透かす悪魔的視線に魅入（みい）らし者達が、新たに産み落とされた暴力的裁断の前に、憂色（ゆうしょく）を滲ませた表情を浮かべる。

彼等は依然として、回避困難な敵の長距離砲射撃レンジ内に身を曝

した状態にあり、直ぐにでもその場から逃走を開始する必要に迫られていたのだが、それでも、仲間達が逃走する時間を稼ぎ出す為に、たった一人で北の密林地帯へと姿を消した少女の事を見捨てて、自分達だけおめおめと逃げ出す事など出来なかった。

しかし、密林地帯内部に渦巻く濃密な妨害フィールドから逃れる事も出来ない彼等に、索敵範囲外へと飛び出していった彼女の行く末を確認できるはずもなく、ただ、一縷(いちる)の望みに願いを込めて、北方より届けられし巨大な爆音の余韻(よいん)を噛み締める事しか出来なかった。

北の密林地帯から発せられた巨大な爆発は、果たしてどちらの陣営側が奏で出した断末魔(だんまつま)なのであろうか。

もし仮に、彼女が先ほどの爆発を運良くやり過ごす事に成功していたならば、恐らく即座に反撃の狼煙(のろし)となる、けたたましい銃撃音を撃ち鳴らすはずである。

勿論、彼女が一撃を持ってして敵を撃破したと言う可能性も全く否定できないが、それならば彼女は、自分が相手を倒した事を仲間達に知らせる為、信号弾を使用するなり銃を撃ちつけるなりして、何らかのアクションを起こすはずだ。

それが無い。・・・と言う事は・・・。

彼等の周囲を静かに滑り落ちて行く時の流れが、まるで彼女の死を確定付ける、後付(あとづけ)のカウントダウンのように、無情なる刻みを続け

る中で、ジョハダルは自身の抱き持つ願望を、必死に心の奥底へと捻じ伏せると、すぐさまトゥマルクの機体周囲にＦＴＰフィールドを張り巡らせ、フットペダルを強く踏み込んだ。

彼等の願いが天へと通ずるか否かは別問題として、彼等は彼等なりに生き延びるための最良の方策を選択し続けねばならない立場にあり、彼等は希望的観測と言う思考的安楽に縋り付いたまま、命と等価となる時間を無駄に浪費する事など出来なかった。

勿論、これほど強力な攻撃兵器ともなれば、持てる砲弾の数も限られてくるであろうし、味方の後続部隊さえ到着してしまえば、数によるゴリ押しのみで突破する事も可能であろう。

しかし、彼女が敵に撃破されてしまったと言う事実を冷静に受け止めるならば、敵の次なる狙い所が彼等へと移り変わる事は言うまでも無く、彼等は当面、この驚異的な命中率と破壊力を誇る敵スナイパーの攻撃を、何とかやり過ごす方策を導き出さねばならなかったのだ。

お互いに相手を直視する事すら適わぬ長い距離を置いた密林内部において、敵が何故これほどまでに高確率で長距離射撃を成功させられるのか、彼等はその詳細を今だ特定する事ができていなかったが、それでも恐らく、このパレ・ロワイヤルミサイル基地周辺部に張り巡らせた、有線索敵網の情報を利用しているであろう事までは察知していた。

とすれば彼等はまず、この地域に網の目の様に敷設された索敵センサーに、捕捉されない為の手段を真っ先に講じるべきであり、ジョハダルがこの時、即座にＦＴＰフィールドを展開したのも、敵の索敵センサーを欺く為のものだった。

勿論、使用する環境や索敵距離によって効果がまちまちとなるＦＴＰフィールドに、多大なる信頼を置いて隠蔽行動を突き通す事は、非常に危険な行為そのものであり、彼等は少なからず、先ほどセニフが敵の初撃をかわして見せたように、遮蔽物の多い密林内部を常に動き回る必要が有ったのだ。

やがて程無くして、ジョハダルと全く同じ結論へと達したベルトランが、素早くトゥマルクを駆り出すと、ＦＴＰフィールドを大量に吹き散らしながら、確実に逃げ延びる為の蛇行運転を開始する。

周囲に生え揃った幹の太い木々達を、出来るだけ数多く遮蔽物たる存在に巻き込むようにしながら。

再び撃ち鳴らされるであろう恐るべき閃光の刃（やいば）に対し、瞬間的反応を呼び込む為の全神経を鋭く研ぎ澄ませながら。

彼等は生き延びる為の道筋を、必死になって走り始めたのだ。

しかし次の瞬間、望みはしないが予測し得た眩い閃光が、あたかも当然の如く北の密林地帯内部に迸（ほとばし）ると、再び周囲の密林地帯に猛烈な爆発音を吐き散らした。

ズゴーーーーン！！

この時、彼等は確かに、彼等にとっての最善の方策を導き出し、そして行動に移していた事は間違いない。

だがしかし、それでもこの敵スナイパーの撃ち放った弾丸は、その神懸り的狙撃術によって全ての阻害要因を難なく貫通し、河川南側高台付近を走行中のベルトラン機へと、正確に一直線の光の筋を引き放ったのだ。

（ジョハダル）
「ち・・・！！・・・くっそ！！」

何をしても報われない。何をしても無駄と言う事はよくある事だ。

元々そこで死する運命にある者は、そこで死する運命から逃れる事は出来ないのだろう。

激しい爆風を周囲に吹き曝しながら、巨大な白球のような閃光を奏で出し、真っ黒な闇夜を食い潰して行くその爆発は、もはや彼等には何ら成す術が無い事を、如実に指し示しているかの様でもある。

ジョハダルはこの時、己の持てる能力の全てを費やしても、決して打ち破る事の出来ない巨大な障壁を前にして、沸き起こる不快感と共に、やるせなさを込めた舌打ちを吐き出してしまった。

（セラフィ）
「むっふー。これで四機目ー。もうお腹一杯だねーこりゃ。・・・ゲフッ。でもさー。昔から食後のデザートは別腹って言うしさー。まだまだ食べれそうな予感がするんだー。僕はー。」

そして、そんな理不尽とも取れる一方的な展開を演出する男が一人、北の密林地帯に隠れ潜んだＤＱ「ブロホン・ツィー・ゲルン」のコクピット内で、悠々自適な時の流れにのんびりと浸りながら、慌てふためく獲物達の姿に、心無い哀れみの視線を送っていた。

完全に劣勢たる陣営側に与しながらも、迫り来る複数の敵を全く恐れる事無く、たった一人で蹴散らしてしまった彼の働きぶりは、まさに鬼神が如き威風を醸し出しているようにも見える。

勿論、実際に彼が持つ独特の雰囲気は、虚脱感満載の陰鬱なものであり、時折交えられる子供染みた独り言もまた、戦いに挑む覇気さえ全く感じさせぬものだが、いとも簡単に四機の手錬を葬り去ったその腕は、疑いようも無く確かなものだ。

彼はこの時、彼専用に誂えられたフカフカのコクピットシート上で、全くやる気も無さそうにして、大きな欠伸を繰り出していたが、最速で砲弾の換装作業を終える為の処理を、決して疎かにはしていなかった。

そして、呆れ返るほどゆったりとした動作を持って、再び食べ残した菓子袋に手を伸ばすと、今度は軽快なテンポで口元へとお菓子を運びながら、サーチモニターに映し出された残り物へと冷たい視線を突き刺して見せた。

彼の言う食後のデザートが、一体どちらの事を指し示しているのかは不明だが、それでも抜群の狙撃センスを有する彼からしてみれば、そのどちら共が食後のデザートに該当する代物だったのかもしれない。

戦局全体を見渡して評するなら、確かにそれは極局所的な戦場に過ぎないものであり、彼の優位的立場も程無くして終焉を迎える事になるのであろうが、この時まさに、彼はこの戦場における捕食者であった。

（セラフィ）

「それにしても皆遅いなー。味方の部隊が防御陣を作るまでって、バニッシュは言っていたけどさー。これじゃー僕の手持ちが無くなる方が先かもしれないねー。えーっとー。ナルセスキャノン砲の残弾数はっとー。・・・八発。・・・あと八発かー。うんむー・・・。じゃあ、あと八機分しか食べられないって事だねー。寂しいなー。僕ー。」

中身の無くなった菓子袋を逆さまにひっくり返し、業(わざ)とらしく半べそをかく様な素振りを見せたセラフィは、ブロホン・ツィー・ゲルンの主力武器である、１８０ｍｍナルセスキャノン砲の残弾数にチラリと視線を宛がうと、あまりにも有り得ない贅沢すぎる算段をさらりと言ってのけた。

言うなればそれは、夢や希望と言った曖昧(あいまい)な願望のようにも感じられるものだが、この戦場において自身が直接狙いを定めた狙撃に関して、完璧に１００％となる命中率を叩き出している彼の実績から見れば、それは自由に作品の筋書きを思い描ける、脚本家の予告とも取れる発言であった。

やがて彼は、ＴＲＰスクリーン上に映し出された外界の様相に、パレ・ロワイヤルミサイル基地が有する地形情報を貼り付けて表示すると、更に有線索敵網から入手した索敵情報を重ね合わせ、静かに１８０ｍｍナルセスキャノン砲の照準を見定める。

そして、目標となる光点が示し出す断片的な情報から、予測しえる敵機の移動軌跡を脳裏に描き出すと、彼は自身の持てる感覚的照準点へと目掛けて、すぐさまトリガーを引き放った。

ドッドーーーーン！！

ズゴーーーーン！！

（ジョハダル）

「ぐっ！！」

目も眩むような強烈な閃光を伴って、勢い良く発せられたその砲弾は、対峙した彼等の間に立ちはだかる無数の遮蔽物を見事に間抜いて、確かにセラフィの見定めた照準点へと突き進んでいった。

しかし、本来であれば彼の描き出したシナリオの通り、五人目の犠牲者として名を連ねるはずであったジョハダルは、間一髪の所でこの猛烈な爆発の魔の手を逃れる事に成功した。

（セラフィ）

「・・・うんむぅー？」

それまで絶対的命中率を持って、逃げ惑う獲物達を撃ち倒してきたセラフィだが、この時、自らの狙いとは全く反対方向となる位置へと逃げ延びた獲物の反応に気が付くと、にわかにその表情から笑みを掻き消した。

彼自身、何故この獲物を撃ち漏らす事になってしまったのか、直ぐにはその原因を察知する事が出来なかったが、やがてサーチモニター上に映し出された無数の索敵センサーの内、その幾つかが反応を示し出していない事実を突き止めると、静かに後方を振り返って大きな溜め息を付いて見せた。

それは、彼がトリガーを引き放つ直前に生み出された、大きな爆発

に起因する物理的機能障害であり、パレ・ロワイヤルミサイル基地周辺部に対して、断続的に続けられていたリバルザイナ共和国空軍の対地爆撃が、遂にこの有線索敵網の情報伝達ラインの一部を切断するに至ったのだった。

その為セラフィは、狙撃する直前に急旋回を見せたジョハダルの行動を、全く察知する事が出来なかった。

（セラフィ）

「あーっ。あー。そう言うことかー。上空からの攻撃で23番から25番のラインが断線しちゃった訳ねー。僕はまたてっきり、相手が何か凄い魔法でも使ったのかと思って、ちょっとびっくりしちゃったよー。・・・ゲフッ。うーん。これはもうパレ・ロワイヤル基地も駄目かなー。後手後手に回った挙句、上空からの爆撃で、二進(にっち)も三進(さっち)も行かない状況だしー。僕もそろそろ潮時かねぇー。」

セラフィはそう言って、少しつまらなそうな表情を浮かべると、直後に頭上を飛び去って行く戦闘爆撃機の意気揚々（いきようよう）たる様を見上げ、全く好転する気配も見せない戦局に、サジを投げるように両手を広げて見せた。

パレ・ロワイヤルミサイル基地に程近い戦場であるにも関わらず、未だに味方の防衛守備隊が、彼の元へと駆けつけてくる気配は全く感じられない。

確かに上空にのさばる恐ろしい戦闘爆撃機の攻撃力を考えれば、前進する事すら躊躇(ためら)ってしまう兵士達の心情も理解できなくは無いが、それでも何ら手を拱(こまね)いて敵部隊の横行を許す事は、敗北と言う二文字を無条件で甘受するに等しい行為である。

勿論、この地を守る兵士達の能力は非常に優秀なものであり、決してその程度の目算を見誤るような輩達ではなかったのだが、この時、自らが先頭に立って兵士達を鼓舞すべき総司令官たる人物が、事もあろうか真っ先に逃げ出したと言う噂が基地内を飛び交うと、彼等の多くは戦う意欲を完全に剥ぎ取られてしまったのだ。

悪夢のような煉獄（れんごく）の中に捨て置かれ、全く成す術も無く虐げられるだけの運命を迎えた彼等は、もはや戦う集団として成り立つ存在では無かったと言えよう。

セラフィとしても、こんな馬鹿げた戦場に、いつまでも身を委ねておくつもりも無く、出来れば直ぐにでも仲間達の後を追って、撤退行動へと移りたい気持ちがあったのだが、それでも、これほどまでに圧倒的な力の差を見せ付けて、戦場に君臨する自らの姿に、少なからず快感めいた感情を感じていた。

敗色濃厚な戦場の中、たった一人勇敢にも気を吐く屈強な戦士と言う、誰しもが憧れる虚像を、自分自身の姿に投影しながら。

（セラフィ）

「・・・。でもさー。でもだよー。まだ左右5ラインづつ残ってる訳だしさー。食べ残しはいけないと思うんだよねー。僕はー。ほらほら。昔からよくママが言ってたじゃないかー。出された料理は全部きちんと食べなさいってー。やっぱり食べ残しは良くないよねー。」

やがてセラフィは、ナルセスキャノン砲の射撃可能ラインから逃れ、必死に川沿いの崖上を南下する獲物の再び見据えると、直ぐに次なる狙撃地点を探して移動を開始した。

如何に彼が類稀(たぐいまれ)なる狙撃能力を有していようと、完全に狙撃不可能となるエリアに砲弾を送り届ける事など出来るはずも無く、彼はこの時、射角的にある程度融通の利く見晴らしの良い場所を、再び探し当てなければならない状況にあった。

彼の居る北側の密林地帯から見て、川縁(かわべり)に広がる南側の密林地帯までは、南北に横たわる岩石地帯を跨(またい)いで、なだらかな降り斜面が続いていたが、濃密に生え揃った木々達や、凹凸の激しい岩山に阻まれ、十分に相手を狙い定められる場所は限りなく少ない。

しかしこの時、パレ・ロワイヤルミサイル基地の防衛システムから、周辺地域の地形情報を全て入手する事が出来ていた彼は、それほど労せずして、次なる狙撃地点を探し当てる事に成功した。

それは勿論、彼の狙撃手としての本能が直感的に見出した場所を、優先的に選別して行く事で齎(もたら)された成果と言っても過言ではなかったが、それでも、周囲に群生する木々の一本一本に至るまで、ほぼ忠実に再現できるほどの情報量を誇っていたこの地形情報が、彼に多大なる恩恵を齎(もたら)していた事は確かだった。

（セラフィ）

「んーっ。もうー。そんなに急いで逃げたって無駄だよ無駄ー。ナルセスキャノン砲の射程距離は、もっともっと長いんだしねー。君ももう潔く観念して、・・・ゲフッ。僕が新しい場所に着くまで、大人しく待っていなよー。苦しまないように一瞬で殺してあげるからさー。いいだろぅー。ねーねー。ねーってばー。」

セラフィはそう言って、サーチモニターに映し出された獲物に対して、ニッコリと優しげな笑みを振り撒いて見せると、小気味良く黄土色(おうどいろ)のDQを操りながら、ナルセスキャノン砲の砲弾換装作業を開

始した。

狭いコクピット内部で無邪気にはしゃぎたてる彼の行動は、まるで子供が欲しい物をせがむ様に、駄々を捏ねる仕草にも見えなくも無いが、彼が手にした巨大な玩具は、単なる遊び道具などではない。

振るえば振るっただけ、人の命を一瞬にして地獄へと引き摺り込む、凶悪な死神の鎌なのだ。

そして悲しくも、そんな子供の遊び相手に指名されてしまったジョハダルとしては、己の数奇な運命を呪う暇すら与えられず、ただ只管に逃げ惑う事しか出来なかった。

この時ジョハダルは、トゥマルクが有する全ての動力をフル稼働させ、一気に戦場を離脱する構えを見せていたのだが、思うほど一向に速度の上がらない機体に、もどかしさを込めた舌打ちを吐き出した。

彼は先ほど放たれたナルセスキャノン砲の砲撃を、運良く回避する事に成功したものの、その時生じた強烈な爆発の余波を完全にかわすまでには至らず、機体にかなりのダメージを負う事になってしまったのだ。

現在彼の搭乗するトゥマルクは、機体後方部に取り付けられた六つのメインバーニヤの内、左側に並んだ三つのバーニヤ全てが完全に活動を停止してしまった状態であり、トゥマルクの走行スピードを上げるどころか、機体を安定的に走行させることさえ儘ならない状況にあった。

「・・・ハダル！！無・・・！？ザザ・・・。」

（ジョハダル）
「・・・！！？」

するとそんな時、必死に逃げ延びる事だけに注力して凝り固まっていた彼の意識が、突然送り届けられた女性のしゃがれ声によって、新たなる戦慄を打ち付けられる事になる。

その声は今だ途切れ途切れに聞こえる程度で、決して彼の直ぐ傍から発せられているものでは無かったが、それでも途中から別行動を取っていたフロルが、既にこの凶悪な敵スナイパーの縄張り内へと、足を踏み入れてしまっていた事を示唆していた。

（ジョハダル）
「フロル！！戻れ！！敵スナイパーに狙われているぞ！！後退するんだフロル！！」

「・・・ザザッ。・・・ザー。」

ジョハダルは重症を負ってしまった己の機体を懸命に操りながらも、必死になってＴＲＰスクリーンに映し出された闇の中へと視線を這わせ、今だ姿を見つけ出せぬ仲間へと向けて、危機的状況を知らせるための銅鑼声（どらごえ）を打ち鳴らして見せる。

しかし、無情にも耳障りな雑音に支配された通信装置からは、一向に彼女の声が流れ出て来る様子は無く、彼の言葉もまた、正確に彼女の元へと届ける事が出来たのかどうか、全く解らない状況であった。

しかも、事もあろうか、ジョハダルが次に見つける事になったオレ

ンジ色の閃光は、フロルの操る機体から発せられたバーニヤ光ではなく、恐らくは更に後方から追い付いて来た味方部隊のもののようだった。

それは彼から見て南側の方角に浮かび上がった六つの篝火であり、真っ黒に彩られた木々達の隙間から零れ、不規則に瞬きながらゆっくりと彼の元へと近付いて来ていた。

くそっ！！これ以上は・・・！！

すると次の瞬間、ジョハダルはすぐさまトゥマルクの右手に装備したＡＳＲ－ＲＴｔｐｅ４４を構え、味方部隊の前面へと目掛けて躊躇無くトリガーを引き放った。

（フロル）
「ジョハダル！？」

唐突に撃ち放たれた無数の弾丸が、全く予期せぬ方向へと光の筋を形成し、目も眩むような激しい閃光を伴うマズルフラッシュが、闇夜に包まれた密林地帯内部を強く焚き付ける中で、フロルは思わず、仰け反る思いを強く表情の上に滲ませ、懐疑的色合いを交えた声色で彼の名前を呼んだ。

それまで、パレ・ロワイヤルミサイル基地に程近い河川両岸高台付近で、複数回に渡って生じた不可解な爆発から、非当事者であったフロルもまた、この密林地帯に蔓延る異様な雰囲気を感じ取ってはいた。

しかし、遠目からでもはっきりと解る程の自軍優勢の戦局の中で、まさかこれほどまでに味方部隊が一方的虐殺劇を強いられているな

どと、彼女も思っても見なかったのだ。

後方から支援に駆けつけてきた友軍に対し、思いもよらぬ「味方撃ち」を断行して見せたジョハダルの行動は、それだけ逼迫（ひっぱく）した危険な状況である事を周囲に知らしめるものであり、彼女はこの時、不意に背筋を駆け巡った激しい悪寒に、えもいわれぬ恐怖心を煽り立てられてしまった。

そしてその行動は、彼女の背後を追走して来たメンバー達にも、はっきりと見て取れるほどの派手なパフォーマンスだった。

彼等はフロルよりも更に、事態の真相から遠く離れた位置に存在していた事は確かだが、自らが抱いていた楽観的意識の中に、少々の警戒心を交えるのに十分な程であったようだ。

（バーンス）
「・・・。」

（アグリ）
「何だ今の攻撃は？前方にはフロア隊とキャリオン隊のメンバー達が、出張（でば）っているはずじゃなかったのか？」

（バルバロック）
「うむ。ついさっきまでフロルの機体反応を確認できていた。奴等が前方にいる事は間違いない。ただ、この真っ暗な密林内部に、敵兵が潜んでいる可能性も無くは無い。」

（メディアス）
「いや、今の攻撃はタイプ４４だよ。私達を敵として誤認したか、あるいは別の何か・・・。嫌な理由があるのかもしれないねぇ。」

（ソドム）
「やれやれ、まったく・・・。何が悲しくて味方の兵士に撃たれなきゃならんのか。これだけ長い距離走らせて、ようやく出会えた最初の敵が、見たくもないいつもの面構えとはねぇ。ちょいと刺激的なピクニックに、パレ・ロワイヤル基地でバーベキューパーティでもするしかないじゃないか。」

（ショウ）
「ったく。うるっせんだよテメェは。」

（バーンス）
「ソドム。ショウ。一旦後退するぞ。ここは一度様子を見た方が良い。今の位置からは絶対に前に出るなよ。」

（ショウ）
「はあっ！？」

先行したフロア隊、キャリオン隊に続き、ようやく前線たる戦場周域へと到達した、グラント隊、アパッチ隊のメンバー達六人は、突然目の前に曝された攻撃的意識を前に、一時的にその歩を緩めにかかった。

勿論、彼等の意識の中には、今だ先行した二つの友軍部隊の存在が色濃く根付いていており、ジョハダルの示し出したけたたましい緊急警報に対し、直ぐに対応するような素振りを見せなかったのだが、この時、顔中に無数の傷跡を残す歴戦の勇者バーンスだけは、鋭く見据えた視線の先に、一種異様な匂いの気配を感じ取っていた。

それは長年に渡り、過酷な戦場を生活の場として生き永らえてきた

者が感じる、「カン」とでも言うのだろうか。

（ショウ）

「けっ！臆病風に吹かれた中年オヤジは、これだから邪魔臭ぇんだよ。こんだけ有利な展開でも逃げ出す準備をしてるなんてな。さすがに不死鳥って呼ばれるだけの事はあるぜ。」

（バーンス）

「不死鳥なんてものは、この世に存在しない物なのさ。ありもしない幻想に舞い上がって自分を見失うほど、俺もまだ落ちぶれちゃいない。とにかくこれは小隊長命令だ。口を動かすのはお前の勝手だが、行動だけは管理させてもらう。」

バーンスは決してＤＱ操舵能力が途出している訳でも、戦闘員としての格闘能力や射撃能力に秀でていた訳でも無く、言ってしまえば中の上程度の能力の持ち主である。

とは言え、彼の持ちえる「生き延びる為の嗅覚」は、どんなに高い戦闘能力を有した者であっても敵（かな）わない、凄惨（せいさん）な戦場を駆け巡る事でしか蓄積しえない、血と涙の結晶とも言える得難き貴重な財産なのだ。

彼としては、どんなに周囲の者達から非難されようとも、従えた部下達を無闇に危険に曝すような真似だけは絶対にしたくなかった。

大量に押し寄せる敵兵達の脅威に曝された中で、戦場の初心者たる新米兵士達を引き連れて戦う事が、如何に難しい事であるのか、彼は少なからず、先の戦いで痛感させられたのである。

（セラフィ）

「おやおやー。まーまー。皆さんお揃いでー。僕の撃墜数を増やす為だけに、こんなに集まってくれるなんて、僕はもう大感激だよー。折角これだけ集まってくれたんだからさー。僕もちゃんと君達の期待に答えるようにー。一人一発づつ。僕の華麗なる狙撃術を披露してあげるよー。・・・あっ。あーっ。さっき一発外しちゃったから、一人分足りなくなっちゃった・・・。・・・。まーっ。いいっかー。」

確かに前回の戦闘と打って変って言える事は、彼等ネニファイン部隊メンバー達が、大量の敵兵に押しつぶされるような展開を余儀なくされている訳ではなく、逆に自軍が完全に優位的立場にあると言う点であろう。

現時点において彼等は、ほぼ勝利を手中に収めつつある勝ち組に属していた事は、紛れも無い事実だ。

しかし、だからと言って、いとも簡単に人の命を奪い去る戦場において、彼等の命を絶対的に保証してくれるものなどありはしない。

この時、そんな彼等の様相を、サーチモニター越しに眺めていたセラフィは、程無くして迎える新たな狙撃地点を前に、不気味な薄ら笑いを浮かべていた。

06－29：〇パレ・ロワイヤル攻略作戦［11］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ２９「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

「・・・っつ。」

赤々と燃え盛る炎に包み込まれた灼熱の渦中（かちゅう）において、ゆらゆらと揺らめくように立ち昇る上昇気流が、目には見えない天への架け橋を形成する。

それは儚くも戦いの中で散った、哀れな敗北者達が辿る、冥府への入り口たる昇り階段だ。

激しくうねり狂う業火によって焼き尽くされた者も。

飛来した残酷な鉄片によって四足を引き千切られし者も。

猛烈な爆発によって一瞬にして肉体を消滅させられし者も。

人それぞれ、千差万別の根源を持って、無残にも己の体との離別を余儀なくされた者達の全てが、最終的に帰する場所なのだ。

「・・・。」

彼等はもはや、この階段を昇る事しか許されない異世界の住人達。

決してそこに止まる事も、決して戻る事も許されない、死後の世界

の悲しき奴隷達。

高らかに奏で上げた悲痛な叫び声の中に、現世に残した様々な思いを強く込めながら、彼等は再びこの世に立ち戻る事の出来ない、己の立場を嘆き続けるのだ。

そしてやがて、彼等は悟る事になる。

ああ、私は死んだのか・・・。と。

しかし、それまで自己を形成していた物理的組織の全てを失い、拠り所を失った御霊(みたま)だけが己の自我を保ち続ける事など、本当に有り得る事象としては、中々に受け入れがたい事実だ。

言うなればそれは、機械で言う物理的ハードウェアを失った論理的ソフトウェアが、何のトリガーも無しにひとりでに暴走を開始し、自己のプログラムを処理し続けるようなものである。

勿論、誰しもがはっきりとした否定的事実を示し出せない以上、その幻想世界の存在を頭ごなしに否定する事など出来ないのだが、逆にそれを肯定してみせる術が無い事も事実であり、実際にその真実を知る者は、既に己の死を受け入れた者達に限られている。

今だ現世へと命を繋ぎ止めた者達には、決して見ることの出来ない世界。

決して理解する事の出来ない世界。

存在するかどうかも解らぬ世界。

それが、死後の世界なのである。

しかし、そんな地獄とも、天国とも揶揄(やゆ)され死後の世界にも、たった一つだけ周知の事実が存在する。

それは、その世界へと足を踏み入れた者達は、二度と戻っては来ないと言う事だ。

「・・・！？」

ふらふらと漂う己の意識に薄ぼんやりとした赤色を滲ませて、次第に浮き上がり来る感覚を、じっとりと重たい手足の真へと重ね合わせる。

そして、メラメラと燃え盛る真っ赤な炎の妖美な踊りを、静かに見開いた視線の先でゆっくりと捕らえ、徐に上体を起こした少女が驚いたような表情を浮かべた。

咽(むせ)び返るような熱気が渦巻くトゥマルクのコクピット内で、ようやく意識を取り戻した小さき少女は、最終的にその生と死を分け隔てる、最後の一線を乗り越えてはいなかった。

死んでない・・・。

生きてる・・・。

（セニフ）

「上手く行ったんだ・・・。」

幾多にも折り重なるワーニングランプの光に照らし出され、未だ虚(うつ)ろいを隠しきれぬセニフが、ようやく色濃く焼き付けられた最後の記憶へと辿り着くと、静かなる目覚めの第一声を呟き出した。

そして、酷く右斜めに傾いていたトゥマルクのコクピット内部で、右手側の操縦桿台へとへばり付いていた自分の身体を引き剥がすと、彼女は少し不安定な体勢のまま、周囲の様相へと視線を這わせる。

私、一体どのぐらい、寝てたんだろ・・・。

フロルは？

ジョハダルは？

他の皆はどうなったんだろう。

無事に逃げ延びる事が出来たんだろうか。

敵のスナイパーは・・・？

一体、どのぐらい長い時間眠り込んでいたのかも解らぬ程、混沌とした思考の中で、彼女はふと、敵スナイパーの激しい攻撃により、危機的状況下へと追い込まれていた仲間達の安否を気遣うと、直ぐにトゥマルクを再始動する為の作業へと移り進んだ。

彼女から見て、右手側に広がるＴＲＰスクリーン一帯は、完全に死

滅してしまった状態であり、左手側に広がるそれもまた、所々点在する真っ黒な四角い穴によって、完全にクリーンな映像を作り出すまでには至っていない。

そして、運良く残されたスクリーンパネルもまた、トゥマルクの周囲で忙(せわ)しく燃え盛る炎の強いオレンジ色の光に遮(さえぎ)られ、外界の様相を備(つぶさ)に窺い見る事までは出来なかった。

外部から強い力で押し込まれたように拉(ひしゃ)げてしまったコクピットハッチからは、肌に纏(まと)わり付くような重たい熱気が、逐次(ちくじ)外部から漏れ出しているようで、着込んだパイロットスーツの内側に充満した気持ちの悪い汗の粒が、彼女の敏感な柔肌(やわはだ)の上を、擦(さす)るようになぞり落ちて行くのが解った。

勿論、この熱気を生み出す炎の苗床(なえどこ)は、その強烈な爆発によって、一瞬にして水分を奪い取られた木々達の死骸であり、トゥマルクの機体動力部に引火すると言う、最悪の事態を招く勢いは感じられなかったのだが、それでも彼女には、この程度で済んでよかったと言う思いに、安堵する気持ちなど全く無かった。

メインコンソール上に羅列された大量の被害報告文からも解る通り、現在彼女が搭乗するトゥマルクは、致命的損傷を数多く抱え込む羽目となってしまい、一通りの再始動作業を終えた彼女の元は、やがてその機能のほとんどが麻痺した状態にあると言う、悲しき現実を突きつけられる事になったのだ。

（セニフ）

「・・・これも駄目。これも・・・駄目か。唯一生き残ったのは、左肩の１２０ミドレンだけ。機体も全然動かないし・・・。」

と、そこまで小さく言葉を呟き出した後、彼女は思わず吐き出してしまった溜め息の中に、連ねるべき言葉を掻き消した。

トゥマルクを稼動させる為のオートモーション機能は、彼女の問い掛けに対して全く反応を示さず、各機体駆動系に直接行動を促す行動ファンクションもまた、唯一生き残った左肩部分を除いては全滅の様相である。

サーチシステムも通信システムも機能停止状態から復帰する様子は無く、後部テスラポットのＦＥ転換機能も、新たにエネルギーを充填する気配は無い。

彼女はトゥマルクの機体が、一体どれほどの損傷を負ってしまったのか、外部から見て客観的に判断する事は出来なかったが、それでも現時点において、完全に戦力外となるガラクタ同然の存在へと成り下がってしまった事を悟った。

そして、ゆっくりと紅いヘアピンを収めた内ポケット付近へと左手を宛がうと、綺麗なオレンジ色を滲ませる左側のＴＲＰスクリーンへと視線を移した。

セニフ自身、あの状況下で敵スナイパーの放つ強烈な砲弾から逃げ延びる事など、決して容易な事では無い、至難の業（わざ）である事を認識していた。

そして、やがて訪れる自らの死に、少しも抗（あらが）う事も出来ず、ただ虫けら同然に縊（くび）り殺される事を覚悟していた。

一瞬にして真っ白な閃光の中へと誘われた仲間達と、全く同じ運命

を辿るかのようにして。

しかし、それでも尚、セニフはまだ生きている。

激しく損傷し、満足に手足さえも動かす事の出来なくなったトゥマルクのコクピット内部で、セニフはまだ生きているのだ。

勿論それは、頭の中で彼是（あれこれ）と考えて行動した訳ではないし、もう一度やれと言われても、二度と成功を望む事が出来ない、困難な荒業であった事は確かだ。

しかし言うなれば、あの死に直面したギリギリの状況下において、彼女は生き延びる為の唯一の最善策を選び出したと言えるだろう。

迫り来る死へのカウントダウンが、高鳴る心臓の鼓動と共に、確実にゼロを目掛けて滑り落ちていく中、彼女は敵スナイパーが潜んで居そうなエリア方向をある程度見定めると、バーナーランチャーの発火粒子を大量に噴射しながら、即座に反対方向へと後退行動を開始した。

そして、敵スナイパーが砲弾を撃ち放つタイミングに合わせて、バーナーランチャーの発火装置を作動させると、その砲弾が駆け抜けるであろう狙撃斜線上に、不気味に光り輝く灼熱の炎を走らせたのだ。

そう。この時彼女は、高速で飛来する高威力の砲弾を、出来る限り自分の機体から遠く離れた位置で誘爆（ゆうばく）させる為、見えない発火粒子の導火線を、その狙撃ライン上に引き放つ手法を選択したのだ。

それは確かに、運的要素に左右される部分が多く、彼女も決して成功すると言う確信を持って、そのような行動に及んだ訳ではない。

しかしそれでも、この敵スナイパーの攻撃を左右に旋回してかわしてみせるよりは、遥かに生き延びる確立の高い選択であった事は間違いない。

あれほど高い狙撃能力を有したスナイパーであれば、相手が左右のいずれかに回避する事など、既に予測しえる範囲内の対応であろうし、辛うじて砲弾の軌道を逸らした所で、一度完全に足を止めてしまったセニフが、その驚異的な爆発から逃れ出るなど、ほぼ不可能な事であったからだ。

そして、この回避行動を成功させる上で、一番重要になってくるキーポイントが、この敵スナイパーが一体どの方向から狙撃してくるのかと言う点である。

その時点で、完全に敵影を見失っていた彼女には、新たに敵機を探し出す為の時間的猶予も無く、彼女は全く索敵行動を取る事も出来ずに、敵スナイパーの砲撃を迎え入れる事になってしまったのだが、それでも彼女は、敵が狙撃してくる方向に関しては、ある程度確信めいた予測を見出す事が出来ていた。

勿論それは、彼女の周囲に広がる密林地帯の地形的条件から、狙撃されそうなラインを大まかに絞り込んだ上での判断となるが、彼女は当戦域において、完全に優位的立場にあったこの敵スナイパーが、ほぼ手中に収めていた獲物達を簡単に放り出して、無益な後退行動に転じる事などありえないだろうと考えていた。

河川南側の高台に布陣したキャリオン隊のメンバー達は兎も角として、河川北側の高台に居たジョハダルを狙撃する為には、どうしても西側に立ち並ぶ傾斜のきつい山の斜面を、狙撃ライン上から除外する必要があり、必然的に敵スナイパーの移動予測範囲は、その射線上より南東部に限られる事になる。

そして更に、岩石地帯中央部を一度経由して、北側の密林地帯へと押し入ったセニフの行動から、この敵スナイパーが岩石地帯へと顔を出す事はありえないだろうし、移動速度に勝るトゥマルクとの距離を離そうと考えたならば、出来る限り北側のルートを選択するであろうと、彼女は予測していたのだ。

勿論、ある程度敵スナイパーの狙撃方向を特定できた所で、引き放つ発火粒子の導火線上と少しでも食い違いを見せれば、飛来する砲弾を途中で誘爆させる事が出来なかったかもしれない。

しかしこの時、幸運な事に、その予測し得た狙撃方向には、四本もの巨大な木々達が立ち並んでおり、彼女は完全に正解となる狙撃ラインを引き当てる事に成功したのだった。

（セニフ）
「・・・アリミア。」

結果的にセニフは、この綱渡りに等しい回避行動を見事最後まで歩みきり、引き放った導火線のほぼ最先端部分で、飛来する砲弾を誘爆させると言う、当初の目論見通りの成果を勝ち取る事が出来た。

それはまさに、奇跡的と言うに相応しい生還劇であり、この時見せた彼女の勇気と行動力は、真に賞賛すべき素晴らしきものだった。

しかし、やはりと言うべきか、その代償として彼女が失ってしまったものは、決して小さなものではなく、彼女は自らの命を生き永らえさせるのと同時に、自らの意思を具現化する手段を失う事になってしまったのだ。

勿論、どのような手段を講じて見せた所で、今以上の結果を生み出す保証がある訳でもなく、せめて生き延びる事が出来たのだと言う、最低限の結果に満足すべき所なのだろうが、彼女は静かに呟き出した言葉への強い想いから、後付(あとづけ)で浮かび上がって来る、可能性と言う名の多くの選択肢に苛(さいな)まれていた。

もしかして、もっと上手く回避する方法が、他に有ったんじゃないかな・・・。

トゥマルクを完全に無傷・・・。いや、無傷とまでは行かないまでも、もっとこう、ダミーイリュージョンを駆使して相手の狙いを撹乱するとか、砲弾をもっと遠くで誘爆(ゆうばく)させる為に、タイプ４４を使うとか、炸薬弾を装填した１２０ミドレンを使うとか・・・。

閃光弾は持っていないけど、狙撃ライン上に１２０ミドレンをぶっ放したら、良い目晦(めくら)ましになったかもしれない・・・。

やっぱり確かにジョハダルが言う通りだ。

たった一人の狭い視野の中で下した判断なんて、所詮はその程度のものでしかない。

もし他の皆と一緒だったら、誰かがもっと良い方法を見つけてくれたかもしれないし・・・。

ほんと私って、駄目な奴・・・。

セニフはじっと、目の前でゆらゆらと影を躍らせる炎の光を見つめたまま、不意に力を入れて左手を握り締めると、掌（てのひら）の上に感じる、紅いヘアピンの外形を脳裏に描き出しながら、ふと、大きな溜め息を付いてしまった。

ドッゴーーーン！

しかしそんな時、再びパレ・ロワイヤルミサイル基地周辺部で生じた巨大な爆発が、周囲の密林地帯を真っ赤な閃光で色濃く照らし出すと、セニフは生き残ったＴＲＰスクリーンパネルの一つに、なにやら不気味に蠢（うごめ）くオレンジ色の物体を発見する事になる。

（セニフ）
「・・・？・・・あれは！？」

燃えるような赤色に包まれた森の向こう側を、彼女から見て左手側から右手側へと、ゆっくりと横断し行くそのオレンジ色の物体は、自然界に存在する大型生物と言った類のものではなく、人工的に作り上げられた巨大な製造物であった事は間違いない。

それは一目で大型機であると解る程に酷く鈍重なＤＱのようで、森の枝葉に隠れて備（つぶさ）にその形状まで特定する事はできなかったが、なにやら巨大な長い棒を腹部に抱え込んでいる事までは見て取る事が出来た。

敵スナイパー！！？

そう確信したセニフは、即座にサーチシステムを起動し、狭長域パッシブモードに切り替える為の作業へと移り進もうとした。・・・のだが、彼女は軽快にスイッチを弾き飛ばした時点で、サーチシステムが完全に死んでいる事を思い出し、直ぐにＴＲＰスクリーンを拡大表示する為の操作へと移り進んだ。

しかし、直後に拡大表示されたその物体は、程無くして掻き消える事となった爆発の光と共に、静かに薄暗い森の中へと姿を消してしまった。

（セニフ）

「南下している！間違いない・・・。・・・と言う事は！」

そして、この敵スナイパーが奏でる行動軌跡から、直ぐに仲間達の危機たる状況を感じ取ったセニフは、唯一残された武器である１２０ｍｍミドルレンジキャノン砲の照準を、鋭く突き刺した視線の先、暗闇に包まれた森の奥深くへと這わせる。

彼女の目の前には、直ぐ傍らで燻（くすぶ）る炎の光に炙（あぶ）り出された、極々直近の狭い世界しか映し出されていなかったが、セニフはじっと、暗闇に潜んだ敵スナイパーの動向を、食い入るように見つめていた。

相手を全く捉え見る事すら適わぬ薄暗い闇の中で、頼みの綱であるサーチシステムは完全に沈黙を保ち、朽ち果てたトゥマルクの機体は全く言う事を聞かないと言う、最悪の状況下にあって、これ以上

彼女に何ができると言うのだろうか。

再びこの地に舞い降りた巨大な爆発が、周囲の密林地帯を明るく照らし出したからと言って、彼女が敵スナイパーを直視できるとは限らないし、機体を動かす事もできない状況で、１２０ｍｍミドルレンジキャノン砲の射角から外れてしまっていては、結局彼女には何ら成す術はない。

幸いな事に、この敵スナイパーがセニフの生存に気付いている様子は全く無く、彼女は完全に敵スナイパーの意識外から攻撃を繰り出せそうな雰囲気を感じ取っていたのだが、それでも、狙撃と称するに十分な程の距離を置いたこの敵スナイパーを、一撃で仕留めて見せる自身が、彼女には無かった。

（セニフ）
「アリミア・・・。アリミアなら・・・。」

セニフ？貴方は近接格闘戦専門だって威張っているけど、もっとチーム戦術の幅を広げる為に、少しは狙撃の練習をしなさい。

私は貴方ぐらいの射撃技術があれば、十分可能な事だと思っているわ。

近接戦闘が常に危険と隣り合わせって事ぐらい、貴方にも解っている事よね？

さっきもシルに、お前は機体に負荷をかけ過ぎだって、怒られたばかりじゃないの。

勿論私は、貴方にその戦闘スタイルを変えろって言ってる訳じゃない。

相手に接近するにしたって、相手の動きを抑止する射撃は必要な訳だし、遠方の相手を逸早く足止めしたい場合にだって使えるわ。

まあ、遠方からの攻撃で相手を仕留める事が出来れば、それが一番楽なんだけどね。

ほらセニフ。苦手だからって言ってないで。私が教えてあげるから。

今更ながらにして、昔アリミアに言われた言葉が、セニフの胸に突き刺さる。

結局その後、セニフは各人の得意分野を生かした適材適所と言うありきたりな逃げ台詞で、遠距離射撃の全てをアリミアの技術力に頼りきり、少しも狙撃の練習をする事は無かった。

あの時少しでも、アリミアの言う事を聞いて、狙撃の練習をしておけば・・・。

と、不意に彼女は他人を頼る事が出来た過去の自分を省(かえり)みて、強く下唇を噛み締めるのだが、それはもはや完全に後の祭りであった。

エネルギー残量は極僅か。

ミドレンの換装作業もできないし、私に残されたチャンスは後一回だけだ・・・。

もし、それを外してしまったら、身動きの取れない私に次は無い。
敵スナイパーに見つかって、直ぐに止めの一撃を食らわされる事になるんだろう。
こんな時、アリミアが居てくれたら・・・。
・・・。ううん駄目。甘えちゃ駄目だ。
いつもアリミアに頼りっぱなしだった私だけど、今は私一人しかいない。
アリミアを助ける為に。皆の手助けをする為に。
私がやらなきゃ駄目なんだ。

セニフはそっと、紅いヘアピンが収められた胸の内ポケット付近を右手で擦ると、左手でギュッと操縦桿を強く握り締めた上で、静かに１２０ｍｍミドルレンジキャノン砲の発射トリガーへと人差し指宛がった。
そして、真っ暗闇に包まれた密林地帯の奥深くに、じっと狙いを定めながら、再びこの地に舞い降りるであろう強烈な爆発を、ただ只管に待ち焦がれた。

（セラフィ）
「さーてー。ここからなら、よーく狙えるねー。皆さんお待ちかねのショータイムと行きましょーかー。でも、こっちのお尻にも結構

火が付いちゃってるからさー。一気に一網打尽と言う事で、よろしくお願いしますー。」

分厚い装甲板を抱えてゆっくりと目的地へと到達した、黄土色のDQ「ブロホン・ツィー・ゲルン」のコクピット内で、俄かに怪しげな笑みを浮かべたセラフィが陽気に呟く。

彼の見つめるサーチモニター上には、小癪にも、周囲を警戒する素振りを匂わせて動きを止めた六つの光点と、全速力で南下し行く二つの光点が映し出されていたが、彼はそんな事を少しも気にかける様子も無く、ゆっくりと狙撃準備へと取り掛かった。

彼は既に北側の密林地帯を抜け出し、岩石地帯の北側辺へと歩を進めており、狙撃するには十分過ぎる程に安定した地盤の上に大きな機体を落ち着けると、人間で言う両足の脛と脹脛部分から、合計八本ものフットダンパーを繰り出し、硬い大地上へと固定付けた。

そして、TRPスクリーン上に浮かび上がる地形情報に炙り出された、十二本もの狙撃ラインを静かに見据えると、有線索敵網によって捉えられた敵機の動きを先読みし、狙撃する為のイメージを脳裏に描き出していった。

しかしこの時、完全なる捕食者として、獲物達に狙いを定めていた彼自身が、もはや哀れなる獲物に成り果てていようとは、思っても見なかった事であろう。

次の瞬間、再びパレ・ロワイヤルミサイル基地周辺部から発せられた強い閃光に、赤々と照らし出した彼の表情には、不気味な笑みが交えられたままだった。

絶対に！！

絶対に！！

絶対に！！

（セニフ）

「当れーーーーっ！！」

刹那の瞬間、その視界に浮かび上がったオレンジ色の機体へと目掛けて、セニフは躊躇無くトリガーを引いた。

彼女の抱く想いの全てを一斉に解き放って。

思い描く弾道をそのままに突き進む事だけを信じて。

一撃で敵スナイパーを仕留める事だけを考えて。

彼女は人差し指に全ての願いを込めるようにして、力一杯トリガーを引き放った。

完全に身動きの取れないトゥマルクの左肩から発せられた一発の弾丸は、一瞬だけ周囲に迸った閃光によって、猛烈な加速度を加え付けられると、薄暗い密林地帯に潜んだ無数の木々達の間をすり抜けて、真っ赤な炎に彩られた岩石地帯へと突き進んで行く。

周囲に屯す様々な外乱要素の全てを突き崩し、彼女の想いを体現するかのように描き出されたその弾道は、まさに一直線と称するに相応しいものであった。

勿論、帝国軍最新型ＤＱである黄土色（おうどいろ）の機体、ブロホン・ツィー・ゲルンは、分厚い装甲板を体中に纏（まと）った不沈砲台であり、如何に動きを完全に停止していたからとは言え、生半可な攻撃で簡単に撃破できるものではない。

しかしこの時、狙いを定めたセニフに対して、無防備にも右側面を曝け出していたブロホン・ツィー・ゲルンは、後部テスラポットの左右から途出した唯一の弱点である、巨大な弾装部分が剥き出しとなっており、彼女の放った鋭い弾丸は、まさにその弱点部分へと吸い込まれるようにして突き刺さったのだ。

（セラフィ）
「ゲフッ。・・・！！？」

ズッゴーーーーン！！！

一瞬の間隙を置いて発火した弾丸が、この巨大な弾装に詰め込まれた強力な砲弾の覚醒を促した。

そして、それと同時に生じた灼熱の業火が、唯一最後の断末魔（だんまつま）として、この世にゲップを置き放った彼の肉体もろとも、白霧の世界へと葬り去る。

彼がそれと感じた時には、もう既に、彼の肉体はこの世に存在し得ない、無なる物へと変化を遂げてしまっていた。

四方八方へと吹き散らされる無数の残骸を他所に、真っ赤な炎を身に纏（まと）った暴れ馬が、凝縮された狭い空間から一気に解き放たれ、艶（あで）

やかな光の楼閣(ろうかく)を描き出しながら、真っ暗な闇夜へと駆け上がっていく。

一度ならず、二度、三度と同様の爆発に塗れた岩石地帯からは、幾重にも織り成す爆煙の渦が吹き上がり、やがて、自然豊かなカノンズル山の麓付近に、巨大なキノコ雲を形成していった。

（ショウ）
「な・・・なんだ!?」

（メディアス）
「何!?この衝撃波は・・・!!」

（アグリ）
「ヘルコンドルの対地爆撃・・・じゃないよな?まさか帝国軍の新兵器か!?」

（バーンス）
「ソドム。ショウ。周囲の警戒を怠るなよ。まずはフロア隊のメンバー達と合流する事を最優先とする。」

（ソドム）
「へいへい。バーベキューパーティーをするには、十分過ぎるほどの火力だねぇ。これじゃ肉を焼く前に、こっちの身が焼かれちまうよ。本体様のご到着まで、大人しく待っていた方が良いんじゃないか?」

（ジョハダル）
「・・・。まさか・・・。まさかセニフが!?」

この時、ナルタリア湖周辺部に分厚く振り撒かれた高濃度フィールド粒子の妨害により、全く周囲の状況を掴みとる事が出来なかったネニファイン部隊のメンバー達だが、突然、恐ろしい程の轟音を奏でて舞い上がった黒煙に気付かないはずもなく、彼等は直ぐに、戦闘体制を敷いて身構える羽目となってしまった。

しかし、そんな疑心暗鬼（ぎしんあんき）に揺れ動く部隊内にあって、ただ一人、その爆発の原因たる真実について、ある仮説を元に導き出された回答を呟き出したジョハダルは、不意に逃走するトゥマルクの進行スピードを緩めると、静かに後方を振り返って、その巨大なキノコ雲へと視線を宛がった。

彼がそれまで抱いてきた一つの憶測。

それは、セニフがまだ生きているのではないかと言う、一方的な彼の思い込みであり、己の力だけではどうする事も出来ない危機的状況に、藁（わら）をも掴みたい彼の思いが勝手に作り上げた、保身的妄想であった。

しかし実際にそれは、正しくご名答であったと言えるだろう。

はぁ・・・。はぁ・・・。はぁ・・・。

ダラダラと玉粒のような汗を垂らしながら、斜めに傾いたコクピットシートの上に、ゆっくりと背を凭（もた）れ掛けたセニフが静かに天を仰ぐ。

そして、鬱陶（うっとう）しいヘルメットを脱ぎ去り、大きく乱れた呼吸を整え

るように深呼吸をして、ふっとＴＲＰスクリーンに映し出された眩い赤光（しゃっこう）へと視線を据え付けた。

（セニフ）

「えっへへ・・・。私にも・・・。私にもできたよ。アリミア。今度、自慢してやるんだから。」

やがて、彼女が静かに両目を瞑（つむ）るのと同時に、全てのエネルギーを使い果たしたトゥマルクの全システムがダウンする。

もはやこの時点で、彼女にできる事は本当に何一つ無くなった。

焦げ臭い生暖かな空気の漂う真っ暗なコクピット内で、セニフは再び胸の内ポケット付近へと両手を宛がうと、静かに黙り込んだまま、じっと神に祈りを捧げた。

普段から神なる存在を崇拝（すうはい）も信仰もしない身でありながら、こんな時ばかり・・・。なんとも都合の良い小娘だと、自分で自分の振る舞いをせせら笑って見せたものの、彼女にはもう、神に祈る事しかできなかった。

かけがえの無い友人と、再び再会する事を願って。

また楽しく、あの頃のように楽しく、和気藹々（わきあいあい）と会話できる事を願って。

切に願って。

アリミア・・・。

０６－３０：〇オクラホマ南方防衛基地陽動作戦［１］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３０「オクラホマ南方防衛基地陽動作戦」

ひっそりとした暗闇に包まれた大都市郊外の平野部。

そこには近代的な巨大建造物も、忙しく動き回る人々の影も、車のライトも存在しない、静かでのどかな田園風景が広がっている。

緑豊かな大自然と言うには、少々人の手が入りすぎている感は否めないものの、広大な土地に植え付けられた農作物が元気良く生い茂り、濃く甘い柔らかな風に乗って流れる綺麗な蟲のハーモニーが、より一層、人の心を穏やかに落ち着けてくれるようだ。

雲ひとつ無い新月の夜空には、まるで頭上に落ちて来んばかりに凝縮された星々が光り輝き、洒落（しゃれ）っ気の無い農村部を、唯一煌びやかに彩る存在として、優しい光を地表に振り撒いていた。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国と、トゥアム共和国を分け隔てるレイナート山脈の麓、その西側に広がる平野部には、科学の進歩と共に急激に発展した現代社会とは、全く時代の異なった、昔ながらの景色が広がっていたが、どんなに長い時を経ようとも、人の腹を満たすべき第一次産業が完全に潰える事は無い。

勿論、端的に農業と言えば、気紛れな天気振り回される過酷な重労働と言う、悲観的イメージが拭いきれず、年々その担い手が不足し行く現状に変わりは無いのだが、それでも世界が食糧難と言う危機的状況を回避する事ができているのは、生物工学の進歩と、農作業

用機器の進歩によって、それが補われているからに他ならなかった。

（ジルヴァ）

「全機進軍停止！ＦＴＰフィールドを継続展開しつつ、第一種戦闘体制のまま所定の配置場所で待機！」

そして、そんな生産的思考とは全く対照的な、破壊的思想の元に生み出された巨大な六つの人型兵器が、山間部から平野部へとかけて広がるなだらかな疎林地帯で、可愛らしい隊長格の女性の声を合図に、一度その足を止めた。

彼等は険しいレイナート山脈を乗り越え、遥々ランベルク地方からやって来た、トゥアム共和国軍の遊撃部隊メンバー達であり、遥か南方サルフマルティア基地より北上を開始したオクラホマ攻略部隊に先んじて、ここオクラホマ都市南方平野部で、小規模な陽動作戦を展開する任務を与えられていた。

勿論、彼等としては、たった六機の僅かなＤＱ部隊を持って、馬鹿正直に真正面から帝国軍防衛守備隊と事を構えるつもりなど無く、できればその道中で、帝国軍の索敵網に捕捉して貰う算段を思い描いていたのだが、それも驚く程の無警戒振りを見せ付けた帝国軍の緩慢な行動によって、実現する事は無かった。

結果、彼等は思いもよらず簡単に、オクラホマ南方防衛基地の程近くまで接近する羽目となり、今まさに彼等は、この防衛基地に対して直接攻撃を仕掛けられる位置にまで接敵していたのだ。

現在、彼等の目の前に広がる西側の平野部には、少し小高い丘を切り崩して建設された、巨大な防衛基地が横たわっており、周囲に広がる農業区画のそれとは、明らかに違った近代的威風を漂わせてい

た。

（フレイアム）

「ざっと見積もって戦車が１００、装甲ヘリが１０、ＤＱが１０ってとこか。残りはまだ地下格納庫の中か？」

（ジルヴァ）

「奴等の様子から見て、恐らくそれは間違いないだろう。レアル隊はまず、敵戦闘装甲ヘリをターゲットとして狙撃を開始する。エミーゴ隊は剥き出しの地下入り口ゲート付近を中心に、ミサイル攻撃を敢行しろ。攻撃開始のタイミングは私の合図を待て。ダミーイリュージョンの敷設も忘れんなよ。」

ジルヴァはそう言って、従える隊員達に新たなる指示を飛ばすと、不思議と未だ静けさを保つオクラホマ南方防衛基地から一度視線を外し、チラリと左腕の腕時計に意識を流した。

予定では一時間程前に、オクラホマ都市で大規模な武装決起が勃発しているはずだが、このオクラホマ南方防衛基地の様子を見る限り、何ら少しも慌しい雰囲気を醸し出す気配は感じられない。

と言うより、至って普段通りの平穏な待機状態を保っているようにも見受けられる。

帝国軍東方戦線の重要な中継基地であるオクラホマ都市内部で、大規模な武装決起が勃発したとなれば、当然、その周囲に点在する防衛基地にも、何らかの動きがあって然るべきであり、その事実を知っていながらにして、黙って静観を突き通していると言う事は、まずありえない話であろう。

とすると、もう既に武装決起軍は鎮圧されてしまった・・・。

あるいは、武装決起その物が情報操作された欺瞞であった・・・。

と考えるのが妥当であり、この時ジルヴァは、帝国軍が軍事管制システムに深刻な打撃を被ってしまったと言う事の真実に、少しも思考回路を直結させる事ができなかった。

しかし、オクラホマ攻略作戦と銘を打たれた今回の作戦において、トゥアム共和国側がこの武装決起軍の優劣如何に、全てをかける様なプランを採用していたかと言えばそうでは無い。

勿論、その切欠を作り出す一つの転機となった事は言うまでも無いが、最終的にトゥアム共和国は、この武装決起が完全に失敗に終わる可能性まで十分に考慮し、この作戦を発動させるに至ったのだ。

（フレイアム）
「ジルヴァ。エミーゴ隊は全機、所定の配置に着いたぞ。」

（ジルヴァ）
「了解。こちらの配置も完了した。ユァンラオ。アイグリー。戦闘開始準備は万全か？」

（アイグリー）
「別に準備って程のもんじゃ無いでしょ。もう終わってるよ。」

（ユァンラオ）
「問題ない。」

透き通るような青い瞳を持って、静かにオクラホマ南方防衛基地を

見つめたジルヴァは、小隊長としての慣用的な言葉を用いて部下達の様子を確認すると、その視線を若干遮る程に伸びた、こげ茶色の前髪を左右に掻き分け、ＤＱパイロット専用ヘルメットを被った。

そして、レイナート山脈から伸びる森林の際、疎林地帯に、綺麗に並んだ六つのＤＱ機体反応へと視線を移し、再び周囲の様相へと意識を集中させた。

確かにオクラホマ都市に出没する武装決起軍の動向如何で、今後繰り広げられるオクラホマ攻略作戦が、大きく揺り動かされる事は間違いないが、それでも予測しえる最悪の筋道を辿り経たからと言って、トゥアム共和国軍上層部が、この期に及んで作戦自体を中止するなどありえない事だろう。

勿論、数多くの一般市民達が暮らす同都市内部で、激しい戦闘行為を繰り広げたく無い思いは、軍上層部にもあるであろうが、それでももし仮に、この武装決起軍に誘発された南方防衛部隊が、オクラホマ都市内部へと投入される事になれば、トゥアム共和国軍も望まぬ市街戦を強いられる事になる。

そこで今回、トゥアム共和国側が用意した回避策と言うのが、オクラホマ南方防衛守備隊の注意を引き付ける為の遊撃部隊を投入する事であり、その重要な囮役を担うべく存在するのが、ジルヴァ達ネニファイン部隊メンバー六人と言う訳だ。

先に行われたディップ・メイサ・クロー作戦において、帝国軍南進部隊の南下を塞き止められない事態を察知したトゥアム共和国軍は、即座にリトバリエジ都市周辺部での戦闘を回避する為に、スーノースーシ川の対岸まで軍を撤退させる事を決意した。

そしてその結果、リトバリエジ都市は帝国軍の手に落ちる事にはなったが、同都市にほとんど目立った被害を被る事無く、今日を迎える事が出来ている。

今回のオクラホマ攻略作戦における、トゥアム共和国の最終的帰着点は、リトバリエジ都市失陥したトゥアム共和国軍と、全く同じ状況を帝国軍に強いる事であり、帝国軍に対して、オクラホマ都市防衛がほぼ不可能である事を認識させ、そして更に、帝国軍に次なる機会に望みを託した行動が取れるよう、ある程度の逃げ道を作ってやる事にあったのだ。

この際、武装決起軍が本当に存在するか否かと言う思索は別に置いておくとして、未だに帝国軍の南方防衛守備隊が、このソリアス平原に止まっていると言う現状は、まさにトゥアム共和国軍が目論む理想の展開と言うに相応(ふさわ)しい状況である。

この時点において、ジルヴァには何ら陽動作戦の発動を躊躇(ためら)う理由など、何処にも存在しない事だけは確かだった。

しかし、このオクラホマ南方防衛基地での戦闘において、如何にトゥアム共和国軍が勝利を勝ち取る事が出来たとしても、それに余り時間をかけ過ぎてしまえば、北西部カフカス砂漠に存在するトポリ要塞から、直ぐに帝国軍の増援が駆けつけてくる事は明白であろうし、一路カルッツァ地方へと行軍を開始した、北方防衛守備隊が転進してくる可能性も考えられる。

圧倒的兵力を有する強固な南方防衛守備隊を前にして、短時間の内に壊滅的打撃を与える事は、決して容易な事ではなく、それを成し遂げる為の事前準備を賄(まかな)わされた立場の者としては、心の中にそれ

なりの強い意思を凝縮させねばならなかった。

やがてジルヴァは、静かに両目を瞑って、一つ大きく深呼吸をしてみせると、再び見据えた攻撃目標へと鋭い視線を宛がい、静かに作戦開始を意味する扉の取っ手へと手をかけた。

（ジルヴァ）

「オクラホマ攻略部隊の到達まで、後二時間ほど時間的猶予があるが、現状は私達にとって安易に楽観視できる状況ではない。本来であれば、オクラホマ都市へと行軍中の帝国軍と鉢合わせし、その注意をしばし引き付ける程度で良いと考えていたが、南方防衛基地に何の動きも無い以上、それなりの苦労を強いられる事になるはずだ。オクラホマ攻略部隊が当戦域において、数的優位性を得られるようにする為には、出来る限り多くの帝国軍兵力を、この南方防衛基地より引き摺り出す必要が有る。その為にはまず、私達が相手にとって脅威たる存在である事を知らしめ、そしてその上で、上手く相手を誘き出すよう、攻撃的意思を前面に押し出したまま、逃げる振りをして見せなければならない。そしてそれを実現する為には、私達六人全員が一糸乱れぬ部隊行動を取り、常に帝国軍防衛守備隊の先手を取り続ける必要がある。いいか。各々の勝手な判断による行動だけ許さないからな。作戦行動は全て私の指示に従う事。これだけは守れよ。」

（ユァンラオ）

「ふっ。」

（ランスロット）

「愛しきジルヴァちゃんの為なら何なりと。何でも言う事を聞くよん。」

（ルワシー）
「年下の女に、こうも偉そうに指示されんのは少し癪だがぁよ。まぁ、こりゃしゃあねぇ状況だわな。」

（アイグリー）
「俺はポイントさえ稼げれば文句は無いよ。勝手に指示してくれ。」

強大な敵兵力が醸し出す猛烈な威圧感を、直ぐ目と鼻の先に突き付けられた状況にありながらも、全く普段と変わらぬ不遜たる態度を突き通せる彼等の神経には恐れ入るが、少しぐらいは過酷な戦場に臨む気構えを見せてもいいのではないかと、ジルヴァは思わず滅入る気持ちを押し殺すように、小さく舌打ちを吐き出してしまった。

とは言え現状、彼女に与えられた戦力は、彼女を含めたこの六人以外には存在せず、それが例え無気力な半端者であっても、糞の役にも立たない無知無能者であっても、彼女は彼女なりに、与えられた任務を成功へと導かねばならない立場にあった。

（ジルヴァ）
「戦闘は全てボカージュ地帯より東側で行う。例え瀕死の獲物が目の前に転がっていたとしても、決して前に出るなよ。それと、出来る限り農業区画への攻撃は避ける事。いいな。」

（ランスロット）
「おおー。さすがはジルヴァちゃん。天使のような思いやりだねぇ。」

（フレイアム）
「幾ら敵国とは言え、善良なる一般市民に罪は無いからな。」

心に宿した濃密な可燃性ガスの中に、ゆらゆらと揺らめく真っ赤な灯火（ともしび）を一つ投げ入れて。

ジルヴァは徐に狙撃モードへと切り替えた自動照準システムを機動すると、グローブを嵌めた両手で操縦桿を強く握り締める。

そして、ＴＲＰスクリーン上で素早く敵ターゲットを捕らえたガンレティクルが、射撃可能を示す赤色へと変色したタイミングを見計らって、即座に戦いの火蓋を切って落とす合図を通信システムに流し込んだ。

（ジルヴァ）

「よし！行くぞ！レアル隊！エミーゴ隊！全機攻撃開始！」

おおよそ戦場には似つかわしくない、ジルヴァの可愛らしい声色が、感度良好の通信システム内を駆け巡ると、それに合わせて一斉に行動を開始した部隊メンバー達が、完全に先制攻撃となる鋼鉄の咆哮（ほうこう）を奏で上げる。

ソリアス平原の東側疎林地帯に潜伏したＤＱ「ＭＫ－０５アカイナン」六機の内、南側に陣取ったレアル隊所属の三機が、装備した「ＧＲＭ－８９スナイパーライフル」を撃ち放つと、漆黒の闇夜に包まれていた田園地帯に、綺麗な三本の光の筋が描き出された。

そして、その道筋を正確に辿り経た鉄甲榴弾が、オクラホマ南方防衛基地の管制塔付近に停機していた戦闘装甲ヘリへとぶち当たると、周囲に鈍い金属音を撒き散らして、直後に猛烈な爆発を順々に誘発して行った。

（フレイアム）

「ルワシーは奥側。ランスロットは手前側だ。俺はガレージ付近のDQを狙う。」

（ルワシー）
「了解。ランスロット。スラインダぁ重いから全部撃ってこうぜぇ。」

（ランスロット）
「って言うより、全部撃ち切らないと、この後が大変でしょ。もし余ったらルワシー君にあげるから、遠慮なくもらってくれたまえ。」

（ルワシー）
「馬鹿言えぇ。阿呆が。」

一方、北側に陣取ったエミーゴ隊の三機は、レアル隊の第二斉射を確認した直後、アカイナンの両肩に装備したミサイルポットから、各々二つづつの小型ミサイルを射出した。

通称、スラインダと呼ばれるこのミサイルは、小さいながらもそれなりの破壊力を有した攻撃兵器であり、自動追尾システムを搭載した自律型のミサイルだ。

勿論、自動追尾システムを無力化するＥＣＭ兵器の登場により、その持てる能力の全てを発揮する場が、失われつつあった事は事実だが、完全に自己システム内だけで飛行経路を導き出せる、目標地点指定型攻撃も可能であり、トゥアム共和国陸軍では良く用いられる兵器の一つとなっている。

しかし唯一つ、そこに問題点があるとすれば、それはＤＱが装備するには重過ぎる兵器であるという点であろう。

アウトレンジ型ＤＱとして重火器の装備を想定して作られた、アカイナンクラスならいざ知らず、華奢（きゃしゃ）な機体であるトゥマルクとの相性は、最悪と言うに相応（ふさわ）しい風評が一般的であった。

とは言え、極少数の部隊で大量の敵軍と相対する彼等にとって、一撃を持って高火力を得られる兵器はまさに必需品であり、幾ら移動速度に支障をきたそうと、持って運ぶに値する兵器である事は間違いなかった。

アカイナンの機体より斜め上方向の空中へと放り出されたスラインダミサイルは、一旦緩やかに落下し行くタイミングで、後部推進装置から大量の白煙を吐き出すと、空気を切り裂く鋭い噴射音だけをそこに残し、一斉に指定された攻撃目標へと邁進（まいしん）し始める。

そして、ようやくその異常事態を察知したオクラホマ南方防衛基地が、けたたましいサイレン音を周囲に鳴り響かせる頃には、目標物との間に立ち並ぶ疎らに生え揃った木々達を全て飛び越え、未だ無防備なままの地下施設入り口付近へと、次々に突き刺さっていった。

06－31：〇オクラホマ南方防衛基地陽動作戦［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３１「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

ドドドーーーン！！

（ジルヴァ）
「レアル隊前進！次のターゲットは待機中の戦車部隊！出入り口付近に固まる一団から、徹底的に破壊して行け！」

断続的に放たれるエミーゴ隊のスラインダミサイル攻撃を他所に、管制塔付近に並んだ戦闘装甲ヘリを、粗方壊滅状態へと追い遣ったジルヴァは、すぐさま次なるターゲットを指定し、配下の部隊メンバーに前進を促した。

勿論、帝国軍防衛守備隊が即座に行動を開始できぬよう、出入り口付近の一団から始末していくよう指示する事だけは忘れなかった。

如何に彼女達が完全に不意打ちとなる攻撃の先手番を獲得していたからとは言え、後手番となる帝国軍の兵力は、単純に計算して彼女達の三十倍以上に相当する数にのぼり、その全てと対峙しようものなら、簡単に蒸発してしまう運命をそのまま辿る事になってしまう。

完全に少数派である彼女達にとって、敵の戦力を削ぎ落とすと言う考え方は、決して間違っていないのだが、それでもそれ以上に、当面、目の前に立ちはだかる敵兵力を、出来る限り少なくするようコントロールする事も、より重要な事であったのだ。

やがて、疎林地帯ギリギリのラインまで隊列を押し上げたレアル隊のメンバー達は、オクラホマ南方防衛基地の広場に停車した大量の戦車部隊を見据えると、即座にＧＲＭ－８９スナイパーライフルによる狙撃攻撃を開始した。

灰色に緑の迷彩を施したアカイナンを、背丈の低い木々達が密集した小島付近に停機させ、片膝を地面に付いた体制で機体の安定化を図ると、細く長いその銃身をターゲットとなる戦車部隊へと翳（かざ）す。

そして、自動照準システムによる目標ターゲティング処理が完了を指し示したのと同時に、彼等は一斉にトリガーを引き放った。

（ジルヴァ）
「斉射！」

再び通信システム内に響き渡った黄色い声に合わせて、と言うより、今回はそれよりも若干早く、しかも見事なまでに同じタイミングを持ってして、虚空の闇夜に煌びやかな光の筋を形成した。

オクラホマ南方防衛基地の広大な停車場に並んだ大量の戦車部隊は、様々な機種によって構成されているようであり、彼女達が狙いを定めた出入り口付近には、帝国軍で最も良く目にする事が出来る、ＳＨＴシリーズの傑作機「レアコンダリス」が停車していた。

それは幾多の戦場において、その高い防御能力から、最前線で活躍する事を期待された突撃重戦車であり、その他にも「ＭＨＴ－１０２バミューダ」「ＧＴ－０５ｘゲビューラ」と、帝国軍の驚異的突破力を物語る上で、決して除外する事の出来ない良機が軒を連ねていた。

しかし、全く無防備なるままに放置されたこの戦車部隊は、レアル隊の放った鋭い鉄甲榴弾の前に何ら成す術も無く、一番防御力の低い側面側、または背面側を貫かれると、開きっぱなしのハッチ部分から不気味な火花を吐き散らして、敢え無く内部から爆発炎上する事になる。

勿論、運良く積載燃料部への被弾を免れた車輌は、爆発四散と言う悲しき運命をしばし逃れる事が出来たのだが、搭乗者のいない彼等が一人で危機的状況を回避できるはずも無く、最終的には直ぐ傍らで激しい炎を噴き上げた犠牲者達の断末魔（だんまつま）に巻き込まれ、メラメラと燃え盛る真っ赤な炎の海で焼き殺される始末となってしまった。

この時、まさにやられ放題と称するに相応（ふさわ）しい惨劇を、被る格好となってしまった帝国軍防衛守備隊は、キッカリと同じ射撃間隔を置いて飛来する鉄甲榴弾の雨霰（あめあられ）と、白い雲糸を引いて次々に到来する激しいミサイル攻撃の前に、後手番となる自らの攻撃タイミングすら、中々に見出せない状況が続いていた。

のどかで静かな雰囲気から一転、突如として視界に焚（た）き付けられた朱色の業火が、帝国軍兵士達の恐怖心を煽（あお）り立てると、著しく混乱した思考が重たい足枷となって彼等の身体にへばり付く。

それはまるで重たい甲冑（かっちゅう）を着込まされて、突然、流れの激しい川底へと叩き込まれたような感じとでも言うのが正しいだろうか。

最前線からは程遠い後方駐留基地で発生した突然の出来事となれば、日々行われている過酷な訓練の成果を発揮出来ずにいる、彼等の心情も解らなくもないが、それでも余りに一方的な展開を甘受し続け

る帝国軍の様相に、円らな瞳を細くしたアイグリーが思わず呟いた。

（アイグリー）
「なぁ。このままここで全弾を撃ち尽くしたら、そのまま帰ってもいいのか？」

（ジルヴァ）
「馬鹿。余計な心配してんじゃねぇよ。」

しかし、そんなアイグリーの能天気な発言に対し、呆れた様子で溜め息を付いたジルヴァは、彼に短く苦言を呈して見せた後で、直ぐに撃ち切ったＧＲＭ－８９スナイパーライフルの弾丸換装作業に取り掛かった。

そして、真っ赤な炎を立ち上らせ炎上するオクラホマ南方防衛基地へと視線を投げつけると、サーチシステムを広域モードに切り替え、周囲の状況を備に観察し始めた。

これまで、決して優秀とは評価し得ない、緩慢な動きに終始していた帝国軍だが、数の上で圧倒的に勝る彼等の全てが、混乱の深遠に突き落とされていた訳ではない。

彼等の行動を縛り付ける火力も、見た目ほど足りている状況にはなく、その内こちら側の攻撃の網の目をかい潜って湧き出した帝国軍が、圧倒的兵力差と言う強力な武器を片手に、その恐ろしい鎌首を擡げる事は、もはや時間の問題であると言えた。

（ユァンラオ）
「ふっ。やっと出て来たか。随分と待たせてくれたものだな。」

（フレイアム）
「基地倉庫裏手側から敵ＤＱが六機出現。そのままこっちに向かってくるぞ。」

（ルワシー）
「基地北西部の建物からは、戦車部隊がワラワラとお出ましだぁぜ。地下通用口を防護壁で囲うなんざ、ふてぇ野郎共だ。」

（ランスロット）
「防衛基地として当然あるべき姿でしょルワシー君。君が寝泊りしていたランベルク基地だって、きっと同じ作りになっていたと思うよ。」

それまで、一方的に攻撃する事を許された先手番を、意気揚々（いきようよう）と謳歌（おうか）し続けたネニファイン部隊メンバー達だが、この時、ようやく新たな動きを見せ始めた帝国軍の行動によって、その権利を剥奪される時が来たのだと言う事を察知した。

基地の四隅に建てられた監視塔最上部から、強い光を放つサーチライトが焚（た）き出されると、この惨憺（さんたん）たる有様を生み出した犯人達を炙（あぶ）り出すべく、一様に東側疎林地帯へと光の筋を押し当ててくる。

そして、ネニファイン部隊の攻撃射線上の死角から姿を現した六機のＤＱが、その不公正な相手の優位性を早急に断ち切ろうと、猛烈なスピードで東側疎林地帯へと迫ってきたのだ。

基地北西部の建物内から這い出してきた戦車部隊に関しては、直ぐに攻勢に転じる様子も無く、まだ程しばらくの間は、ネニファイン部隊メンバー達の優位性が保ち得そうな雰囲気を感じ取る事が出来たが、それでもそれは、この戦車部隊が迎撃体制を整え終えるまで

の時間が、有効期限である事は確かだった。

勿論、彼等が最終的に目指す展開は、帝国軍防衛守備隊をこの基地周辺部から引き摺り出す事にあり、拙(つたな)い火力を持ってして、みみっちい戦果を上げる事ではない。

寧ろ彼等は、その優位的立場を剥奪される事になろうとも、早々にこの戦車部隊に動き出してもらう必要が有ったのだ。

（アイグリー）
「おっと。南側にも新たな敵影を三つ確認。移動速度は結構速そうだよ。どうするんだい姉ちゃん？」

（ランスロット）
「どうするもこうするもない訳よ青年。勝ち目が有れば戦いを選択。勝ち目が無ければ尻尾を巻いて逃走。」

（アイグリー）
「だからそのどっちだよ。」

（フレイアム）
「俺達の目的は、あくまで帝国軍防衛守備隊の戦力を分断する事にあるんだ。チンケな相手だけを引き連れて逃げ回っても仕方あるまい？」

（ランスロット）
「そそ。そう言うこと。」

（ルワシー）
「おめぇ、本当は逃げ出す準備してたんじゃねぇだろうな。」

そう。彼等は現状において、ただ単純にその場から逃げ出す事など出来なかったのだ。

彼等が最終的に目指す展開は、帝国軍防衛守備隊のある程度の数を、この南方防衛基地から引き摺り出す事にあり、南方より進軍して来るオクラホマ攻略部隊が、当戦域において数的優位を保てるよう、そして帝国軍が直ぐに防御体制とる事が出来ないよう、仕向ける事にこそ、その真意があったのだから。

見たところ、帝国軍の攻撃手番を担うべく派兵された戦力は、オクラホマ南方防衛基地内部から這い出したＤＱ六機と、突然彼等の南側に姿を現したＤＱ三機のみであるが、彼等は帝国軍がその強大な兵力を持って縊り殺すと言う最終手段を選択するまで、迫り来る幾多の障壁を全て帰り討ちにしなければならない状況にあったのだ。

サーチシステムの識別情報によれば、オクラホマ南方防衛基地より姿を現したＤＱ六機は、「ｂｌｃａｒｌ：バル・レンサカール」と呼ばれる飛行機型の高速機動ＤＱで、最高巡航速度に長け、急襲急撃を最も得意とする機種だけあり、大きな砂漠地帯や平野部の広がるオクラホマ地方においては、余り珍しくない機体である。

しかしその反面、様々な遮蔽物に取り囲まれた戦場においては、取り回しに難を残す機体である事が知られ、ある程度小回りの利く人型兵器アカイナンに取って見れば、疎林地帯での戦闘に、それほど難色を示す相手でもなかった。

そして、そのバル・レンサカールよりも遥かに早い巡航速度で迫り来る三つの機体は、南側の疎林地帯を難なく移動している様子からも、恐らくＤＱタイプであろう事までは予測できたが、サーチシス

テムが示したその機体反応については、識別不能を示す黄色い光が宛がわれたままだった。

（ジルヴァ）

「全機攻撃中止！一旦後方ポイント０２まで後退する！その間、部隊編成をツーマンセル体制に移行！フレイアム、ルワシーはスラインダによる基地攻撃を続行しろ！攻撃目標は基地前面に停車する敵戦車部隊と定める！出来る限り敵の戦力を削ぎ落とすよう、しっかりと狙いを定めて撃って行け！南方の敵ＤＱ三機については、私とユァンラオで対応する！ランスロットとアイグリーは、フレイアムとルワシーの護衛だ！スラインダを全弾撃ち尽くすまで、レンサカールの動きを牽制しろ！」

ジルヴァはサーチモニターに映し出される、オクラホマ南方防衛基地の周辺情報を一通り確認し終えた後で、すぐさま部隊メンバー達に、一度疎林地帯の奥深くへと後退するよう指示を飛ばした。

それは、直近ネニファイン部隊メンバー達の前に立ちはだかる帝国軍ＤＱ部隊が、細かな動きを不得意とする機種で構成されていたからに他ならなず、自分達の優位性を発揮しうる戦場を相手に強いる意図が有った為だ。

勿論、南側から接近する三機のＤＱについては、未だその詳細が明らかになってはいないが、それも予めダミーイリュージョンを敷設したエリア内に身を置く事で、ある程度相手の様子を窺うと言う、打算的目論みも含み込まれていた。

（ランスロット）

「ちょっとちょっと。俺のスラインダはどうすんのよ。」

（ジルヴァ）
「スラインダを抱きかかえたまま戦う勇気があるなら、私は別に止めやしないよ。あんたの好きにすりゃいいじゃん。」

（ランスロット）
「えーっ？そりゃまたなんとも冷たい台詞で・・・。それじゃまるで、俺が除装したら格好悪いみたいじゃないか。」

（ジルヴァ）
「あんたってほんっと馬鹿な奴。この馬鹿！二流以下の男が変に格好良い所見せようなんて、色気出してんじゃねぇよ。四の五の言う前にさっさと除装して後退行動に移れ！置いてっちまうぞ！」

（ランスロット）
「おおーう。やっぱ強気に攻めるジルヴァちゃんの言葉は心にジーンと来るなぁ。待ってましたよその言葉。重たい足枷を外したこのランスロットの戦いぶり、とくと期待して頂戴ね。ジルヴァちゃーん。」

（アイグリー）
「この人ほんとウザイ人だね。」

（フレイアム）
「ウザイだけなら何とでも扱えるさ。」

（ルワシー）
「馬鹿と鋏（はさみ）は使いようってかぁ。がははっ。」

周囲に蔓延（はびこ）る圧倒的大多数の殺意の視線に、ぎりぎりと睨みつけられた状況にありながらも、なんとも気の抜けた会話を終始垂れ流す

部隊メンバー達の様相に、溜め息を付く事すら躊躇(ためら)ってしまったジルヴァが、眉間に深い皺(しわ)を寄せた。

本来であればここで、思いっきり怒鳴り散らしてやりたい所であったが、どうせ上から説教染みた怒声を浴びせかけた所で、更にその上から砕けた言葉を被せられる事は解りきった事であり、ジルヴァはそれ以上何も言わなかった。

と言うより、一瞬彼女が言葉を発しようとした時、彼等は既に、彼女の指示に従って迅速に後退行動へと移り進む佳境にあり、彼女は心の中に溜め込んだ怒りを吐き散らすタイミングを逸してしまったのだ。

彼女はここでようやく、大きな溜め息を付いた。

そして、迫り来る九つの敵ＤＱの動きにチラリと視線を宛がうと、自らが発した指示を、一番最後に体現する羽目となってしまった自分の姿に、小さく舌打ちを打ち付けてやった。

０６－３２：〇オクラホマ南方防衛基地陽動作戦［３］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３２「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

雲ひとつ無い綺麗な星空の元、黒と言う闇の世界に包み込まれたのどかな平野部に、無数の紅蓮華（ぐれんげ）が花を開かせると、なまめかしい舞を踊る炎の渦が、まるで夕焼けのような赤色を持って、天空を焼き焦がす。

そして、断続的に放たれる強い閃光によって、更にその力強さを増長させると、続いておどろおどろしい重たい轟音を周囲に吐き散らし、目には見えない暗雲を色濃く漂わせて行った。

オクラホマ南方防衛基地より、南に約５ｋｍｉｌｓ程離れた疎林地帯内部からは、基地の様相を直接視界に捕らえる事は出来なかったが、それでも疎らに生え揃った木々達の頭上で、真っ黒な闇夜を赤々と焦がす燈火（とうか）の様相から、明らかに逼迫（ひっぱく）した異常事態に見舞われている事が窺えた。

サーチモニター上に映し出される索敵情報へと視線を宛がい、仕切りに辺りを警戒する素振りを見せる一人の男が、ほぼ全速力に近いスピードで北上するＤＱを巧みに駆り立て、まるでレールの上を走っているかのような正確さで、木々達の間をすり抜けて行く。

そして、彼の前方を直走（ひたはし）る二機の青いＤＱの様子を気にかけつつ、再びオクラホマ南方防衛基地上空へと視線を流すと、頭部を保護するヘルメットではなく、演習用のバイザー式ゴーグルを手に取った。

Ｆ２Ｂ１Ｖフォーメーションを維持したまま、疎林地帯を並走する三機の青いＤＱは、飛行機型高速機動ＤＱの中で、最も最新型となる「ｆｌｇｅｒ：フォル・レンサジア」であり、未だ帝国軍内部においてもそれほど出回っていない、希少な機体の内の三機だ。

前後へと長い本体を軸に、その中央部から這い出た二本の両足によって大地を踏みしめ、後方に突き出た巨大なバーニヤ部から、強力な推進力を得る独特の姿形。

そして、同機種系統の最も苦手とする旋回性能を補うべく、左右へと大きく広げた翼の下には、前後に噴射可能なバーニヤが四基づつ備え付けられており、まさに、地上に降り立つ事で最大の機動力を獲得するに至った、陸の戦闘機とも言うべき機体であった。

（ランス）

「ちっ。演習場に向かう途中、基地との交信が途絶えた時から、何かがおかしいとは感じていたんだ。それがまさか、この有様とはな。」

前方に向かってナブラ陣形を敷いた隊列の一番後方部で、不穏なる気配に包み込まれたオクラホマ南方防衛基地の様子を、じっと見つめていた男が、手馴れた手付きでフォル・レンサジアを操りつつ、心に沸き起こった所感を静かに呟き出す。

黒を基調に青みがかった柔らかな頭髪に、細く釣り上がった目尻が特徴的な彼は、ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」に所属する、ＤＱパイロットの一人であり、名前を「ランス・レッチェル」と言った。

彼はまだ二十歳にも満たない若さながらも、その卓越したＤＱ操舵

技術と高い状況判断能力から、一個小隊を完全に独立した形で運営する事を許された人物であり、この時も、新たに小隊を構成する事になった新兵二人を引き連れ、新型機の慣熟訓練を行う為、演習指定区域へと向う途中であった。

しかし、その道中において、突然基地との交信が全く途絶えてしまった事に気が付くと、彼は即座にオクラホマ基地へと帰投する事を決意する。

勿論、それは何かしら通信系統にトラブルが発生しただけと言う、微々たる問題に過ぎない可能性もあったが、トゥアム共和国軍がカルッツァ地方で攻勢に転じると言う噂を耳にしてから、彼は何処と無く漠然とした不信感を抱き持っていたのだ。

（ランス）
「メビル。アリン。聞こえているな。オクラホマ基地の状況は見ての通りだ。恐らく敵はトゥアム共和国軍に間違いないだろうが、攻撃パターンから察するに、敵の数はそれほど多くは無い。今回が初めての実戦となるお前等にとっては、丁度良い遊び相手になるはずだ。ここでお前等の実力を見せてもらう事にする。勿論、俺はこんな場所に長居するつもりは無いからな。さっさと片付けて来い。」

（アリン）
「はい。ランス様。」

（メビル）
「了解しました。」

ランスはそう言って、従える二人の若い部下達・・・、と言っても、彼より若干四歳年下なだけなのだが、幼い少年少女二人に対して、

少し突き放すような口調で戦闘命令を下すと、徐に踏み込んだフットペダルを戻し、フォル・レンサジアの進行スピードを緩めた。

そして、最新型サーチシステム「ジュダ」が捕らえた情報の内、特に緊急性の高いものだけをバイザー式ゴーグルに表示するよう設定を切り替えると、完全に高見の見物を決め込んだような様子で、一気に急加速し行く二つのバーニヤ光を見送った。

兵士としてはまだ若輩者たる立場にあるはずのランスに対し、全く反抗する態度を匂わせない二人の返事は、まさに屈託の無い透き通った印象を感じさせるものであり、彼の意のままに動く従順な僕（しもべ）と言う己（おの）が立場に、何ら少しも疑いを感じていないようにも見受けられる。

二人は共に、帝国内でも最下層に当たる貧しい家庭の下に生まれ、幼い頃に親に売り飛ばされた経験を持つ子供達であり、同じような境遇にありながらも、特殊部隊の小隊長を務めるまでに伸し上がったランスの事を、ある種、崇高視していたのかもしれない。

少年の方は、巻きの強い短めの黒髪と、浅黒い肌が特徴的な人物であり、名前を「メビル・クオーラン」と言った。

一方、少女の方は、襟足から先に少しウェーブのかかった桃色の長髪と、色白の肌が特徴的な人物であり、名前を「アリン・サザー」と言った。

先代皇帝ソヴェールの時代、帝国国内に蔓延（はびこ）る身分格差緩和政策の一環として、このような苦境に喘ぐ子供達を救済うべく、「アモルパラシオン」なる特別機関が設立され、数多くの人身売買組織を摘

発する事に成功したのだが、それでも、人身売買と言う卑劣な犯罪行為を完全に撲滅するには至らず、今尚、闇の世界では、人知れず取引される子供が後を絶たないと言われている。

しかし、この二人、メビルとアリンは、そんな同機関の活動によって、運良くも人身売買組織から助け出された子供達であった。

二人はその後、アモルパラシオンの施設に保護され、各々が自律して生活できるよう、必要最低限の学習と訓練を受ける事になるのだが、この機関が最も力を入れていた訓練と言うのが、戦闘員を育成する為のカリキュラムだった。

勿論、このようにして、闇の世界から救い出された子供達の全てが、無理やり戦闘員に仕立て上げられる訳ではなく、真に適正のある子供達だけが、特別な計らいを持って軍に引き上げられるのだが、女帝ソヴェールが崩御した後も、精力的に活動する同機関の真の目論みは、こういった優秀な子供達を、何の後腐れも無く、自由に扱えるからと言うのが専らの噂であった。

言うなれば彼等は、一度、人身売買組織を経由する事によって、簡単に身元不明と言うレッテルを貼り付ける事のできる人間であり、まさに権力者達が思うがまま操るために生み出した、悲しき道具の一つと言う訳だ。

しかし、元々親に売られた過去を持つ彼等にとって、何処にも帰れる場所がなかった事は事実だし、何より自分達を危機たる状況から救い出してくれた人達に対する恩義から、彼等自身がその流言を否定する傾向にあった事も確かである。

このメビルにしろ、アリンにしろ、決して例外ではなく、自分達を

救ってくれた人達に対する感謝の気持ち、そして、こんな身分の卑しい自分達を、何の分け隔ても無く拾い上げてくれた人達に対する感謝の気持ちは、決して覆る事の無い強固なものだった。

恐らく彼等は、上官から死んで来いと命令されれば、はいと二つ返事で自ら望んで戦場に赴く忠実な僕であり、それが恩人達に報いる唯一の方策である事を、彼等は良く理解していたのだ。

エイリアンホースと呼ばれ、帝国内でも一、二を争う強力な戦闘集団にあって、極貧民層出身者がその半数を占めると言う事実には、こういった理由があったからに他ならなかった。

（ランス）
「言うまでも無い事だが、前面に捕捉された敵ＤＱ反応の多くはダミー。実際にその中に隠れ潜んでいる敵機はほんの数機だ。何機か解るか？」

（アリン）
「一機・・・。いえ、二機だと思います。」

（メビル）
「僕も二機だと思います。」

（ランス）
「ではメビルは左側、アリンは右側の奴を撃墜しろ。所要時間は１５分だ。」

（アリン）
「はい。ランス様。」

（メビル）
「了解しました。」

やがてランスは、サーチモニター上の前方部に、ワラワラと姿を現した不気味な光点へと視線を宛がうと、人並みに親心を醸し出すかのような口調で、幼い二人の部下達に注意を促す。

しかし、アモルパラシオン機関より非常に優秀であると認定され、エイリアンホース部隊に引き上げられた二人は、そんなランスの懸念を完全に払拭する真実を簡単に突き止めて見せると、素早い動作を持ってランスの指示を体現し始めた。

この時点でもはや、トゥアム共和国軍ネニファイン部隊のリーダーであるジルヴァの目論見は、いとも簡単に端から崩れ去ってしまったと言えよう。

ランスはＴＲＰスクリーン上で大きく左右へと分散し、急速に先行し行く二人の姿を、過去の自分の姿に照らし合わせると、十五歳当時の自分に、これほどの素養が備わっていただろうか・・・などと、少々親馬鹿的と言うか、半場、自嘲気味な感情を沸き起こしてしまった。

とは言え、戦場においては、如何に相手より戦闘能力が高かろうとも、決して無事に帰ってこれる保証は無いし、攻撃するタイミングと、後退するタイミングを、少しでも間違うような事があれば、一瞬にして死を招き入れる結果を引き当ててしまう可能性もある。

今回が初めての実戦となる二人に、唯一欠けていた能力と言えば、様々な不確定要素を孕（はら）んでうねり動く、戦場の流れを読む能力であり、絶対的に経験が少ない二人とっては、それが一番の不安材料で

あった。

勿論、それは相手にも同じ事が言え、戦闘能力的には申し分ない二人が、相手よりも先にミスを犯す可能性は少ないであろうし、例え二人が先にミスを犯してしまったとしても、相手がそのミスに気付かない、または、気付いてもつけ込めないような輩達であれば、特に心配するような事でもない。

自らの命を脅かす危険性を孕んだ戦場においてしか、決して積み上げる事の出来ない貴重な実戦経験。

確かに、いきなり過酷な最前線へと突き落としてやるのも一つの手と言えるが、折角振って沸いた自軍有利の甘い戦場を利用しない手は無く、ランスは取り敢えず、少しでも二人に実戦経験を積ませる為、二人だけで戦闘を行うよう指示したのだった。

しかしこの時、彼等にとっては最悪な事に、目の前に立ちはだかった二機のDQは、彼が予想したような凡庸な戦士達ではなく、寧ろ戦場において幾多の実戦経験を持つ男が一人と、卓越した戦闘能力を誇る女が一人、パイロットとして乗り込んでいた機体であった。

（ジルヴァ）
「ちっ！仕方無い！私は右の奴を相手する！ユァンラオは左だ！」

（ユァンラオ）
「ふっ。まあ、それもよかろう。」

灰色に緑の迷彩を施したトゥアム共和国軍の人型兵器、「アカイナン」を疎林地帯内部へと潜ませ、じっと息を殺して相手の出方を窺っていた二人の熟練兵士は、やがて、その行動が相手に対して、何

ら影響を及ぼしていない事を悟ると、すぐさま自らが搭乗する機体を駆り立て、迎撃体勢へと移行する。

そして、相手の意図する所を敢えて汲み取るかの様に、素早く左右へと離別行動を取ると、急速に接近する青いＤＱと、完全に一騎討ちとなる体勢を構築して行った。

勿論、各々一機づつとなる最小単位へと分散化した相手に対しては、二機以上の火力を持って集中攻撃をし、各個に撃破して行く方が有効的であると言えるが、見るからに移動速度の速いＤＱが相手となれば、その一方を攻撃している間に、もう一方に防御ラインを突破される恐れもある。

この時既に、六機もの高速機動ＤＱを相手にしなければならない、他の部隊メンバー達の事を考えれば、彼等にこれ以上の負担を強いる訳にも行かず、ジルヴァ達は、この防衛ライン上から、一機たりとも敵ＤＱを、後方へと逸らさない為の戦い方が要求されていたのだ。

その為ジルヴァは、一対一と言う身も蓋もない、稚拙な戦い方しか選択する事が出来ず、その指示に軽い笑い声を飛ばしたユァンラオの態度も、そのやむない状況を察した上での事だった。

しかし、幸いな事に、ジルヴァが最も懸念していた三機目の敵機は、全く戦闘に介入する気は無いらしく、どうやら索敵レーダーの有効範囲ギリギリのエリア周域で、その足を完全に停止したようである。

サーチモニター上で未だ黄色い点滅を繰り返す機種不明機が、一体どれほどの性能を持ち合わせた機体なのか見当は付かなかったが、取り敢えずは、一対多となる不利的状況を回避し得た状況に満足す

べき所ではあった。

（ランス）

「おぉ。一騎討ちを選択するとは、中々に勇気のある奴等だ。メビルとアリンを相手に回して、何処まで頑張れるか見ものだな。」

しかし、二人の幼い少年少女の戦闘力の高さを知るランスは、急速に距離を詰めつつあった二対（について）の対戦カードを興味深く観察しながら、ニヤリと思わず零れた不敵な笑みを持って、口元を歪ませた。

昨今、真新しい戦闘兵器が次々と登場する戦場においては、子供より大人、女性より男性の方が優れていると言う一般的概念が、徐々に崩れ始めていた事は確かであり、とりわけＤＱと言う人型兵器を扱う事に関しては、大人よりも子供の方が優れているケースが、数多く見られるようになって来た。

それは、常にその時代の最先端技術を投入して形作られるＤＱと言う兵器に、子供達の方が柔軟に対応する事が出来ていたと言う事実を証明付けるものであり、まだ身体的に不完全な子供達が、戦場において大人達を圧倒する例は、決して珍しい光景ではなくなってきていたのだ。

やがて、これまでの模擬訓練において、幾多の大人達を打ち倒してきた少年少女が、フォル・レンサジアの機体主翼付け根部分から生える大きな右腕で、機体下腹部に備えたアサルトライフル「ＨＶ１９２－Ｔ６４」を取り外すと、もう一対の小さな腕を持って、炸薬弾入りの弾装を装着させる。

そして、既に目前へと差し迫った相手ＤＱに対して、攻撃タイミングを見計らうように移動速度を緩めると、それぞれ相手との距離を

ある程度保つようにして、旋回行動へと移り進んだ。

それは勿論、そつなく迎撃体勢を整えた相手ＤＱに対し、少し様子を窺い見る事を意図した行動であったが、サーチモニターに浮かび上がる無数の光点内に紛れてやり取りされる、目に見えない敵意の鍔迫り合いは、それほど長くは続かなかった。

程無くして、相手を撃破するイメージを構築するに至ったアリンが、対戦相手となる敵ＤＱアカイナンに対して、激しい攻撃的意識を集中させると、真っ先に戦いの火蓋を切り落とす役目を担った。

彼女はまず、疎林地帯を緩やかに移動し行くアカイナンの動きを封じ込める為、フォル・レンサジアの最上部に取り付けられたミサイルポッドから、「シャルベリン」と呼ばれル小型ミサイルを三発発射すると、すぐさまフットペダルを最大限まで強く踏み込んだ。

そして、フォル・レンサジアの右手に強く握り締めたＨＶ１９２－Ｔ６４を前方へと翳し、不意に動きを停止したアカイナンに向かって猛烈な突進を開始すると、ＨＶ１９２－Ｔ６４の有効射程範囲ギリギリのライン上から、更なる追加攻撃を加え始めた。

ドドドーーーン！

その直後、上空へとスルスルと舞い上がった三つのミサイルが、アリンの意図した飛行軌跡を正確に辿り経て目標地点へと突き刺さり、アカイナンの機体周囲で眩い閃光を三度弾けさせた。

ネニファイン部隊メンバー達が所有するスラインダミサイルより、

遥かに小型軽量化されたそのミサイルは、それほど強力な破壊力を有した兵器ではなかったが、それでも直撃を受ければ、即死を免れない程度の威力は十分に有している。

この時、アカイナンの進行方向に加え、左右への回避旋回するコースをも、正確に遮断して見せたアリンの攻撃は、歴戦の猛者ユァンラオに対して、機体を一時停止せざるを得ない状況に追い込む事に成功した。

そして、まさにそのタイミングに狙いを定めていたアリンが、これまた正確な射撃能力を持って、大量の炸薬弾を浴びせ掛けると、爆発の余波に塗れたアカイナンとの距離を急速に縮めていく。

それはもはや、ランスに指示された所要時間１５分を待たずして、一気に片を付けてしまおうと目論む彼女の意思が、強く凝縮されたような連続攻撃であった。

（ユァンラオ）
「ほうー。この距離から当ててくるのか。意外に優れたパイロットだな。」

しかし、そんな撃墜間際の危機的状況に曝されながらも、何ら少しも動揺する素振りを見せなかったユァンラオは、疎らに武将髭の生え揃った口元を不気味に歪め、静かに相手を褒め称える言葉を呟いた。

彼は、相手のミサイル攻撃によって、機体を一時停止せざるを得なかった。

・・・と言われれば、確かにそうなのかも知れないが、彼ほどの能

力を有していれば、その状況へと追い込まれる以前に、危機を回避する事が出来たはずだ。

では、何故？

（アリン）

「あっ！？ランス様っ！！あああぁっ・・・！！」

ドッゴーーーーン！！

次の瞬間、アカイナンへと向かって、勢い良く突進していたフォル・レンサジアが、突然、その青い機体から色取り取りの眩い閃光を吐き散らすと、続いて吹き上がった真っ赤な業火に取り憑かれ、身悶えする暇も与えられぬ内に一気に爆発四散した。

０６－３３：〇オクラホマ南方防衛基地陽動作戦［４］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３３「パレ・ロワイヤル攻略作戦」

（メビル）
「アリン！！」

（ランス）
「何っ！？」

激しい攻撃的意識を前面に押し出し、一気に相手ＤＱを縊（くび）り殺そうと目論んだアリンの行動は、瞬間的に獲得した己の優位性を、全く無駄なく活用する、素晴らしき妙技であったと言えるが、何故かこの時、相手の前に跪（ひざまず）いて死に際の叫び声を奏で上げたのは、攻勢にあったアリンの方だった。

アリン自身、自らが搭乗する青い機体の異変に気付いたのは、もはや機体が爆発寸前の最後の予兆を示し出した瞬間であり、彼女は、コクピット内の足元から噴出した炎に包み込まれるまで、ずっと正面に見据えた敵機に意識を集中させたままだったのだ。

恐らく彼女は、一体自分がどうやって殺されたのかを全く知る事無く、この世から掻き消されて行ったのだろう。

（ランス）
「あのアリンが・・・。まさか！？」

（ユァンラオ）
「まずは一機。」

疎林地帯で執り行われる事が決定した二つの戦いの内、先に火花を散らし始めた右手側の戦いを、サーチモニター上で備(つぶさ)に観察していたランスは、強い光の余韻だけをそこに残して、静かに消え去って行ったアリン機の反応に、総毛立(そうけだ)つような戦慄に震えた視線を据え、たちどころに表情を強張らせた。

彼は勿論、その戦闘の一部始終を直接視認出来た訳ではなく、アリンを葬り去った相手の攻撃が、一体如何なる手段を用いたものなのか、正確に把握する事は出来なかったが、それでもその攻撃を繰り出した張本人が、このアカイナンである事実に何ら少しも疑いを持たなかった。

確かに、周囲へとばら撒かれたダミーイリュージョンの効果を考えれば、その光点の何れかに別の敵機が隠れ潜んでいる可能性も否定できなかったが、感度良好であるサーチシステムが、別の場所から繰り出された攻撃を、少しも感知しなかった事からも解る通り、この戦闘に関しては、その他の敵機が介入した形跡は無いと思われる。

そして何より、アリンの激しい攻撃に対して、全く後退する素振りを見せず、逆に何かを狙って前進するような挙動さえ垣間見せたアカイナンの動きが、ランスの脳裏に確信めいた推測を齎(もたら)したのだった。

もしかして奴が足を止めたのも、アリンの攻撃を回避する為ではなく、アリンを撃墜する為に取った偽装行為だったのか？

そう、この時、彼が直感的に達したその推測は、正しく事の真実を射抜いていた。

見るからに機動性に飛んだ帝国軍の青いＤＱに対し、ユァンラオが保有していた主要武器は、アカイナンの右手に装備したＧＲＭ－８９スナイパーライフルと、右肩に装備した１２０ｍｍミドルレンジキャノン砲と言う組み合わせであり、そのどちら共が、連射性能に劣る中長距離攻撃用兵器である。

唯一近接戦闘用にと保有したサブマシンガン「ＸＭＧ－１５Ｐ」も、連射性能を有したアサルトライフルに勝るような代物ではなく、機動性に劣るアカイナンを持って、この青いＤＱに対抗する為には、少なからず相手を接近させない戦い方を選択しなければならなかった。

しかし、この青いＤＱとの距離をある程度保つ事が出来たとしても、疎林地帯内部を高速で移動する相手を一撃で撃破する事は困難であるし、一度攻撃を外してしまえば、相手に接近するチャンスを与えてしまう事になる。

その為、ユァンラオは、自らの機体を囮に使い、撃破されそうな場面を業（わざ）と演出して見せる事で、相手が自分に対して直線的動きを取るよう仕向けたのだった。

そして、まんまと罠に嵌り込んだフォル・レンサジアが、アカイナンへと直線的に突進を開始した刹那（せつな）、彼は飛来する無数の炸薬弾の雨中に紛れさせ、ＧＲＭ－８９スナイパーライフルによるカウンター攻撃を正確に繰り出した。

勿論彼は、機動性を売りにしたこの青いＤＱが、訳もなく長距離射撃用の兵器を保有していないであろう事を予測しており、相手に接近を許す以前であれば、同じ射撃ラインを使用した撃ち合いで、自分が撃ち負ける事は無いであろうと確信していたのだ。

結果は言うまでも無く、彼は一撃を持ってアリン機を粉砕する事に成功し、未だ年端も行かぬ子供達との実力差を、まざまざと見せ付けたのだった。

しかしこの時、相手が繰り出してきた炸薬弾は、ユァンラオの予想を超えた正確さを持ってアカイナンへと襲い掛かり、彼は機体に思わぬ被害を被る結果となってしまった。

彼が思わず発してしまった相手への賛辞は、決してお世辞などではなかったと言う訳だ。

やがてユァンラオは、アカイナンの機体被害状況へとチラリと視線を宛がい、それほど機体の主要機関に深刻なダメージを負っていない事を確認すると、ＴＲＰスクリーンの右手側方向で繰り広げられる、もう一方の戦いへと意識を投げかけた。

それは先ほど一瞬にして終結を見た戦いとは裏腹に、お互いにある程度距離を保ったまま、激しい弾丸の応酬を繰り広げていたようであり、両者の搭乗するＤＱの特性をそのままに、余り大きく移動しないアカイナンと、それを中心に小気味良く動き回るフォル・レンサジアとが、しばし膠着状態と言うに相応（ふさわ）しい戦いに終始していた。

（ユァンラオ）

「どうした？中々梃子摺（てこず）っているようだが、手を貸して欲しいか？」

（ジルヴァ）
「うっさい！！誰に向かって口聞いてんだコラ！！私はてめぇなんかに半人前扱いされる覚えはねぇんだよ！！」

可愛らしい黄色い声の中に、高揚した怒気を汚らしく交え、上から目線でものを言うユァンラオに、思いっきり叩きつけて見せたジルヴァは、目の前で激しく動き回る青いＤＱに対し、１２０ｍｍミドルレンジキャノンによる牽制弾を放った。

そして、すぐさま次弾の換装作業へと転じると、続いて繰り出された敵機の攻撃を、必要最低限の動きのみでかわし、アカイナンの傍に立ち並ぶ幾本かの木々達を遮蔽物に使い、ＧＲＭ－８９スナイパーライフルを構えた。

この時、ジルヴァが保有していた武器は、ユァンラオが保有していたそれと、全く同じ構成となるものだったが、彼女はユァンラオとは異なり、二つの中長距離攻撃兵器の射撃間隔をお互いに補うよう被せ合わせると、交互に撃ち出す事によって、ある程度の連射性を維持するよう努めていた。

しかし、やはりと言うべきか、帝国軍でも希少となる最新型ＤＱ、フォル・レンサジアの機動力には凄まじいものがあり、ジルヴァが断続的に放つ巧みな射撃を、その機体性能を持って強引に回避すると、すぐさま激しい敵意を剥き出しにして反撃に転じてくる。

機動性で遥かに劣るアカイナンを必死に駆り立て、持てる武器を駆使して目一杯対抗してみせるジルヴァだったが、傍から見れば、ただ一方的に虐げられる側へと、追い詰められているようにも見受けられた。

やがて、再びＧＲＭ－８９スナイパーライフルのトリガーを引いたジルヴァは、左手方向へと弾丸をかわしたフォル・レンサジアの動きに注意深く視線を宛がい、全く手元を見ないままに次弾の装填作業を実行に移すと、今度は１２０ｍｍミドルレンジキャノンの射角を微妙に調整しながら、フットペダルを強く踏みしめた。

（ジルヴァ）

「そっちも行き止まりなんだよ！！」

そして、猛烈な加速度で増速し始めたフォル・レンサジアに対し、その進行方向を遮断するように、的確な偏差撃ちを敢行してみせると、相手を防衛ライン上から内部に割り込まれないポジションへと、素早く機体を移動させた。

勿論、この砲撃も敢え無くフォル・レンサジアにかわされてしまう結果となるのだが、彼女自身は、再三に渡り繰り返してきた攻防の中に、とある一つの光明を見出し始めると、次第に端整な表情を妖しく歪め、軽く鼻先で笑いを奏で出した。

ジルヴァがこれまで相手に対して放ってきた弾丸は、その何れもが、素早い動きで疎林地帯を駆け走るフォル・レンサジアの行動を牽制する為のものであり、一撃を持って相手を撃ち倒す事を目的としたものではない。

しかし直近、最後に放った彼女の砲弾は、それ以前に放たれた弾道よりも、遥かにフォル・レンサジアの機体近くへと接近し、強烈な爆発の閃光を持って、相手の機体を飲み込みかけたのだ。

言うなれば彼女は、幾度も繰り返す事となった同じ様な展開の中で、

相手の動きに慣れ始めた、・・・と言うより、パイロット個人個人が持つ動きの癖のようなものを捕らえ始めたのだ。

一見して相手ＤＱの高い機動力に翻弄され、かなり梃子摺(てこず)っているようにも見えるジルヴァの戦いぶりであったが、この戦闘に関して、寧ろ梃子摺(てこず)っていたのは、メビルの方であった。

高い瞬発力と巡航能力、そして旋回性能を有した最新型ＤＱを擁しながらも、メビルの繰り出した弾丸は小気味良く相手に回避され、一向にアカイナンへと取り付くチャンスを見出す事が出来ない状況が続いている。

しかも、相手が断続的に繰り出す攻撃は、常にメビルの意図を察したかのように、嫌なタイミングを見計らって撃ち放たれ、更には、砲撃回数を重ねる度に、その精度が増してきているようだった。

僕の動きが読まれ始めている・・・？

メビルは、自分の方が優位的立場にある事実に、何ら少しも疑いを抱いてはいなかったが、意思に反して熱く火照(ほて)り行く背中に、今まで感じた事の無いような戦慄を覚え始めると、パイロットスーツの内側に篭(こも)る熱気の中に、ゾッとするような冷たい氷塊を放り込まれたような、そんな強い悪寒を感じてしまった。

（ランス）
「メビル！後退しろ！これ以上の戦闘は無意味だ！」

（メビル）

「しかし、ランス様！！」

（ランス）

「いいから直ぐに後退するんだ！アリンをやられて苛立つのも解るが、このままだとお前もやられるぞ！」

お前もやられるぞ・・・。と、唐突に発せられたランスの不穏なる言葉に、思わず驚いた表情を醸し出したメビルは、熱く沸騰してブレーキの利かなくなった自らの思考に、突然、強く杭を打ち込まれたような感覚で、次に発する言葉を失ってしまった。

彼は勿論、正規軍とは明らかに一線を画した、自分達の特異な立場を理解してはいたし、実戦経験が無い若輩者たる自分達の為に、ランスがこの戦闘を始めたと言う事も理解していた。

言うなればこの戦いは、運否天賦に身を任せ、自らの命を削り取ってまで成し遂げなければならない過酷な任務などではなく、自分達が実戦経験を積む事以外に、何の目的も無い戦いなのだ。

不本意ながらも、早々にアリンを失う事になり、彼女の仇を討つべく、目の前の敵機だけでも縊り殺してやりたい気持ちも当然有るのだろうが、これ以上損害を出す事は出来ないと判断したランスの思いを察し、メビルは悔しさを滲ませた表情で、真一文字に結ばれた口元を静かに解いた。

（メビル）

「・・・了解しました。ランス様。」

やがてメビルは、ＴＲＰスクリーン上の暗がりに潜むアカイナンの方へと、鋭い殺意を込めた視線を押し当てた後、苦々しく残る後味

の悪さを振り解く様に、大きく息を吐き出すと、直ぐに後退行動へと転じる為、フットペダルを踏み込んだ。

しかしこの時、そんなメビルの思いを露とも知らぬジルヴァが、不意に訪れた不思議な空白の時間を利用し、それまで噛み合っていた攻撃の歯車の歯と歯を重ね合わせると、待ってましたとばかりに、勢い良く攻勢に転じた。

そして一瞬、妙に動きの鈍ったフォル・レンサジアに対して、連続使用が可能となった二つの中長距離攻撃兵器を振り翳すと、猛烈な勢いでアカイナンを駆り立て、鋭く研ぎ澄ませた第一撃目を撃ち放った。

ドゴーーーーン！！

（メビル）
「うっ・・・！！」

真っ暗な疎林地帯に描き出された一直線の閃光が、メビルの搭乗するフォル・レンサジアの直ぐ傍らへと到達し、爆発的増殖力を見せ付けるかのように炸裂した炎の渦が、真っ青に彩られた機体に華やかさを添え付ける。

猛烈に吹き荒れた爆風に煽られて、やむを得ず体勢を崩してしまったメビルは、直ぐに機体を立て直すために、フォル・レンサジアの両翼に取り付けられたバーニヤを勢い良く吹き散らすと、次なる相手の連撃に備え、攻撃を繰り出す根元たる闇の中へと視線を据え付けた。

これなら何とか次も回避できるっ！！

チョロまかと逃げ回るのもこれまでだ！！もらいっ！！

瞬間的に両者の胸の内に抱かれた言霊（ことだま）が、綺麗な星空へと舞い上がり、熾烈（しれつ）な戦いが繰り広げられる大地上で弾け飛ぶ。

フォル・レンサジアの巨大な右足踵（かかと）部分で大地上を大きく削り取り、半場強引に機体を旋回させ始めていたメビルが、後部バーニヤ部から眩いフレア光を焚き付けた刹那（せつな）、その姿をガンレティクル中央部へと捕らえたジルヴァが、ＧＲＭ－８９スナイパーライフルを撃ち放つため、トリガーへと伸びた人差し指へと力を込めた。

ドッゴーーーーン！！

しかし次の瞬間、ジルヴァがトリガーを引き放つよりも逸早く、フォル・レンサジアの機体全てを取り込む眩い閃光が迸（ほとばし）り、力強い怒号を持って誘爆した青い機体の動力部が、一瞬にしてメビルの肉体を消滅せしめる大きな爆発を生じさせた。

（ジルヴァ）

「なっ！！」

照準システム中央部へと意識を注力していたジルヴァは、突然奏で上げられた強い光の球体に目を細めるしかなく、しばし、何事が起

きたのか判断付かない混沌とした思考と共に、意味なく周囲へと視線を巡らせる羽目になってしまった。

しかし、そんな彼女の慌てふためき様を、まるで背後から見て楽しむかのように、浴びせかけられたユァンラオの一言とはこうだ。

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。遅いな。」

（ジルヴァ）
「てっめぇ!!ユァンラオ!!余計な手出しすんじゃねぇよ!!」

それは正しく、先の爆発を生み出した張本人が、ユァンラオである事を指し示す言葉であり、嘲笑（ちょうしょう）めいた笑い声を交えて送り届けられた、嫌味ったらしい声色に、ジルヴァは思いっきり怒りの感情を叩き付けてやった。

ジルヴァの放った第一撃目を、何とか回避する事に成功したメビルは、その後、再度撃ち出されるであろうジルヴァの攻撃に対し、全神経を集中させ、素早くその攻撃を回避する為の体勢を整えていた。

勿論、完全にその攻撃をかわし切る確証はなかったものの、メビルにはそれを回避し得る能力と自信とが有り、まさかそこで自らが命を絶たれるなど、全く思っていなかったかもしれない。

しかし、完全に一方向へと据え付けられた彼の意識は、別の角度から撃ち放たれたユァンラオの殺意を察する事が出来ず、彼は１２０ｍｍミドルレンジキャンの破壊力を、まともにその身で受け止める結果になってしまった。

（ランス）
「・・・ちっ！！」

二人目の犠牲者を生み出すに至った爆発の光を、ＴＲＰスクリーン越しに遠目から眺めていたランスは、強い失望の念と、強い怒りの念を込めた鋭い視線を、サーチモニター上へと落とすと、疎林地帯を蠢く二つの敵機に対し、大きな舌打ちを吐き付けてやった。

そして、非常に優秀である若手パイロットを、二人も同時に失う事になってしまった、自身の判断の甘さをしみじみと省みながら、激しく沸き起こる復讐心に燃える己の意識を、必死に捩じ伏せるかのようにして、強く下唇を噛み締めた。

彼にとってこの戦いは、二人の若手パイロットに、実戦経験を積ませる事だけを目的としたものであり、既に二人がこの世から消え去った現状とあらば、これ以上戦闘を継続する理由など何処にも無い。

勿論、可愛い部下達の仇を取る為、猛り狂った復讐心を胸に、敵機に特攻を仕掛けると言うのも、真っ当な人間的感情の揺り動きと言えるのだろうが、戦場においては、感情に任せた行為その物が、自らの破滅を招きやすい事を、彼は十分に理解していたのだった。

やがて彼は、屈辱的敗北に塗れた自身の姿を無様に晒す事になろうとも、その醜態を敢えて甘受するかのように、静かに戦場を離脱する行動へと移り進んだ。

（ユァンラオ）
「ここで後退する？・・・ふーむ。」

そして、サーチモニター上に唯一残された最後の敵機たる反応へと、じっと視線を据え付けていたユァンラオは、彼にとっては思いもよらぬ行動を選択した敵パイロットに対し、少し感慨深い表情を滲ませると、喉元で唸(うな)るような声を奏で出した。

それは勿論、二機の味方機を撃墜されながらも、何ら少しも抵抗する気配を見せず、おめおめと戦場を逃げ出した臆病者を罵(ののし)るようなものではなく、何処か少し興味心を抱くような、そんな雰囲気が彼の瞳には宿されていた。

（ランスロット）
「ねぇねぇジルヴァちゃん。俺ったら、もう既に三機も撃墜しちゃったよ。俺の勇姿、ちゃんと見ててくれた？」

（ジルヴァ）
「ばっか野郎！！こっちはこっちで手一杯だったんだよ！！んなもん見てる暇があるかってぇの！！」

（フレイアム）
「ジルヴァ。こっちは後一発づつでスラインダ撃ち切りだ。今の所、レンサカールは何とかなっているが、更に基地から蟲型ＤＱが六機這い出してきたぞ。武装装甲車が二輌付だ。」

（ジルヴァ）
「解った。私達も直ぐにそっちに向かう。」

（ルワシー）
「一番奥側の戦車部隊もようやく重い腰を上げたみてぇだぁな。景気付けに最後の一発を見舞ってやっかぁ。」

（フレイアム）
「止めとけルワシー。密集して停車した戦車部隊の方が効率が良い。」

（アイグリー）
「なぁウザ男君。最後の一機は俺にくれよ。あんたそんなに弾数持って無いだろ？」

（ランスロット）
「馬鹿言っちゃいけないよ青年。早い者勝ちよ。早い者勝ち。」

やがて、南側の攻防に終止符が打たれたのを機に、ネニファイン部隊メンバー達の砕けた会話が、再び通信機内を飛び交い始めた。

それまで、ツーマンセル体制三チームへと部隊編成を切り替えていた彼等は、出来るだけお互いに干渉し合わないように、その編成単位毎に専用の通信チャンネルを開設して使用していたのだ。

勿論、緊急性の高い非常事態が発生した場合など、部隊メンバー全員に敢えて通知する必要のある情報は、逐次、全体通信チャンネルを通して連絡する事になっていたのだが、今回の戦いにおいて、彼等はそれほど差し迫った緊急事態に見舞われる事無く、再度全員が終結するタイミングを迎え入れる事が出来たのだった。

（ジルヴァ）
「おいユァンラオ。被弾した機体状況に問題はないか？」

そして、そんな新たなる戦いへと移り進もうかと言う節目において、ジルヴァはふと、先の戦いで機体に被弾を許したユァンラオに対して、その被害状況を問う質問を投げかけた。

（ユァンラオ）
「ん？何だ？気になるのか？」

するとユァンラオは、何処か陰湿な遊び心を込めたような問い掛けを上から被せ、彼女に投げ返してきた。

（ジルヴァ）
「ん？何だ？その切り返しは？てめぇは黙って機体の被害状況を報告すりゃいいんだよ。訳の解らん変な含みを持たせんな。ばーか。」

しかし、常に勝気な態度を突き崩さない彼女は、ユァンラオと言う得体の知れぬ男に対しても全く臆する事無く、完全に上から目線で捩じ伏せるように、再び問い掛けと言う風呂敷で包み込んだ言葉を叩き返してやった。

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。別に問題はない。」

（ジルヴァ）
「よし。それじゃ、さっさと奴等の所に戻るぞ。急げよ。」

（ユァンラオ）
「了解した。」

その後、ユァンラオは、不気味な笑い声と共に、大人しく彼女の指示に従うような素振りを示して見せたが、彼が決して人に恭順するような人間では無い事、そして、決して人に媚びるような人間ではない事は、ジルヴァ自身、心の中でひしひしと感じていた事だった。

彼は完全に一匹狼たる存在。

己の意思のみで行動し、己の意思のみで戦う孤高の戦士たる存在。

このユァンラオ・ジャンワンと言う男は、一体何を求めて、戦っているのだろうか。

ジルヴァはふと、このユァンラオと言う男に、強い嫌悪感を抱きながらも、そんな問い掛けによって、少なからず彼の思いの淵を覗き見てみたい、と言う気持ちを沸き起こしてしまったが、それが自らの破滅を呼び込む切欠になるであろう予感を、決して拭い去る事は出来なかった。

やがてユァンラオは、コクピットシート後部に放置したままのヘルメットへと手を伸ばし、中に入れておいたタバコとジッポを取り出すと、ゆっくりとフットペダルを踏み込んで、アカイナンの機体を震わせ始めた。

そして、無造作に銜えた一本のタバコに、手馴れた手付きでジッポの火を翳すと、ドきつい煙を大きく吸い込んで、綺麗に星々が輝く北の夜空へと視線を宛がった。

（ユァンラオ）

「生き延びる為に。願いを叶える為に。必死になって這いずり回ってみせろ。死と言う終焉が齎されるその瞬間まで、厭らしく、妖艶に、小気味良く、踊り狂うが良い。必死になって舞を踊る人間の姿は、またとなく素晴らしい輝きを放つものだ。ふっふっふ。」

ＴＲＰスクリーンに映し出される北の夜空が、吐き散らされた真っ

白い煙によって覆い隠されると、鼻を刺すほど良い刺激臭に塗れたユァンラオの表情が、次第に不気味な笑みを浮かび上がらせる。

それはまるで、過酷な生き様を強要されし奴隷達が、闘技場の中で必死にのたうち回っている様を、遠目からじっくりと眺め、嗜(たしな)むかの様でもあった。

０６－３４：〇貴方を殺す為に生きてきたというのに［1］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３４「貴方を殺す為に生きてきたというのに」

頬を撫でるように過ぎ去る涼やかな風は、ほのかに心地よい初夏の香りがした。

それは、心の中で頑なに閉ざしてきた闇の扉を、そっと優しく開け放つような。

嫌な思い出の全てに蓋をし、楽しかった思い出だけを、強く際立たせるような。

柄にもなく、心浮き立つような毎日を過ごしたあの夏の日を、冷め切った脳裏にふっと思い出させるような。

そんな、懐かしい感覚を擽る、甘く切ない夜風だった。

（アリミア）
「・・・確かに、私も貴方の存在を忘れていた訳じゃないし、その可能性も少なからず考慮しとくべきだったわ。もしかして、私がオクラホマに着いてからずっと監視していた・・・って事なのかしら。」

差し込む光の全てを掻き消す、真っ黒な闇の靄に包まれていた私の心を、頭上に広がる新月の夜空に擬えるなら、心に強く焼き付けられたそれらの記憶は、無数に鏤められた星々の瞬きに等しいものだ。

どんなに深い悲しみを持ってしても。

どんなに激しい怒りを持ってしても。

どんなに強い憎しみを持ってしても。

それは決して消える事の無い、永遠の輝きを放ち続ける暖かな光だったのだ。

（アリミア）

「もし、そうなら・・・。いえ・・・。いいわ。何も聞かない。貴方とこうして、再び出会う事が出来たんだから。私はね。・・・ずっとずっと、貴方に会いたいって、そう思ってたの。本当に、会いたかったわ・・・。」

それは唯一、私に優しげな温かみを与えてくれる、かけがえの無い光。

必死に手を伸ばそうとも、決して掴み取る事は出来ないが、それでも私と言う人間を形成するに至った、重要な思い出の数々なのだ。

時が経つと共に、次第にその強さは押し止められ、いつの日か、それ以上の強い光によって、その存在が有耶無耶（うやむや）にされていた事は確かだが、今更ながらに立ち返った負たる感情が、非常に強い軋轢（あつれき）を生み出している事が、私の中では、いささか驚きを禁じえなかった。

（アリミア）

「でもいいの？こんな簡単に、私の目の前に姿を現すなんて・・・。私はね・・・。私は・・・。」

彼は何も言わず、ただ黙って、私の目の前に佇んでいるだけだった。

私が最後に見た、無機質で能面のような作り物の表情をそのままに携えて、私の目の前に佇んでいるだけだった。

ほぼ五年ぶりとなる再会に、何ら少しも感動する様子もなく、次第に語尾を震わせていった私の言葉に、全く関心を寄せる素振りも無く、ただ黙って、私の目の前に佇んでいるだけだった。

彼は私に、身悶えする程、胸が高鳴る切ない瞬間を与えてくれた人物。

彼は私に、決して忘れ去る事の出来ない、楽しい時間を与えてくれた人物。

そして、組織を裏切り、私を裏切り、私を残酷な地獄の底へと叩き落した張本人。

それが、シュバルツ・ノインと言う男。

（アリミア）

「貴方を殺す為に！！生きてきたというのに！！」

右手に握り締めた短銃を前へと突き出し、目の前に佇む男に向けて、激しく沸き起こる強い怒気を込めた言葉のブレッドを撃ち放つと、アリミアの中で、冷たく凍り付いていた心の秒針が、静かに時を刻み始めた。

それまで、何度も何度も自問自答を繰り返し、捏ね繰り回す度に次第に黒ずんでいった、数々の想いを胸に。

一つ潰しては二つ増えると言った、永遠に細胞分裂を繰り返していた数々の疑念を、再び心の奥底から引き摺り出して。

緩やかな風が吹き抜ける、延べ十二階建てのビルの屋上で、凡そ十歩分程度の歩幅を置いて対峙した彼の姿は、五年前とほぼ変わらぬ風貌を保ち、全く微動だにしない屈強な身体からは、相も変わらず濃密なオーラが滲み出ているようにも感じる。

深い紺色の軍服に身を包み、上から防弾チョッキのような物を羽織っていた彼は、突き付けられた銃口に、何ら少しも動揺する様子を見せず、全く精気の無い機械的な視線を、彼女へと据え付けたままだった。

彼は全く耳が聞こえない、言葉も話せない聾唖の戦士である事は、彼女も良く知る事実だが、それでも彼には、人の口の動きで会話を読み取る読唇術の心得があり、彼女の放った言葉の意味を理解できていないはずは無かった。

そして、恐ろしい程に濃密な殺意を漂わせて、銃口を翳した彼女の想いを、少しも読み取る事が出来ない愚鈍なる人物ではなかったし、無機質な能面を被る表情の裏側には、確かに人間らしい心の揺り動きが存在した事は、彼女が一番良く知っている事だった。

しかしこの時、彼は全く動こうとしなかった。

嘗ての良きパートナーであった彼女を前にして。

自身の裏切り行為によって、凄惨な過去を刻み込まれるに至った彼女を前にして。

激しい怒りと強い殺意を抱いて、自分に銃口を突き付ける彼女を前にして。

彼は、全く動く気配すら見せなかったのだ。

それはまるで、射撃訓練場でよく目にする、人型の標的を連想させる雰囲気を醸し出しており、じっと動かぬ彼の視線が、彼女に撃てと訴えかけている様でもあった。

短銃のトリガーへと宛がった人差し指に、僅かにでも力を込めれば彼は死ぬ。

シュバルツ・ノインと言う、裏切り者を殺す事が出来る。

そう。人差し指に力を込めさえすれば・・・。

両者の間に据えられた短銃を挟んで、複雑に絡み合った二人の視線は、非常に強い引力と斥力とを有して、引き合う様にも、反発し合う様にも見え、お互いの身体から乖離した思念だけが、相手に何かを伝えようと必死にもがいている様にも感じられる。

今更、彼に何を伝えても仕方が無い。・・・と言う事は、彼女自身、それとなく解っていたつもりだったが、それでも彼女は、しばし訪れた沈黙の時間を、ただ無為なる思惟に費やすばかりであった。

それは、あまりにも突然に振って沸いた思わぬ出来事から、混乱した彼女の思考が、正しき道筋を選び出す事に苦慮していたからなのだろうが、それでも彼女は、少なからず心の何処かで、彼からの返事を期待していたのかも知れいない。

結局その間、彼女が短銃のトリガーを引く事はなかった。

やがて、そんな静寂さを醸し出す二人の元に、一際強い夜風が吹き付けると、それまで空港管制施設屋上部に立ち込めていた温和な空気が、鋭い刃物を持って切り裂かれたような狂騒を奏で始めた。

強い夜風によって舞い上げられたアリミアの紅い髪の毛が、結え上げられた旋毛付近を軸に、綺麗な踊りを披露し始めると、それまで石像の様に動かなかったノインの左手が、ゆっくりと左耳付近に装着したインカムへと伸ばされる。

そして、先ほどと全く変わらぬ視線をアリミアへと突き付けたまま、静かにインカムを取り外すと、全く何を仕出かす様子もなく、無造作に足元へと放り投げた。

一瞬、不思議な挙動を垣間見せたノインに対し、非常に強い警戒心を抱いたアリミアは、即座に短銃を握り締める右手に力を入れ、彼の行動を抑止する威圧感を彼へと叩き付ける。

しかしはやり、彼の不思議な振る舞いが気になったのであろうか、彼女はほぼ条件反射的に、放り投げられたインカムへと視線を流してしまった。

（アリミア）
「・・・うっ！！？」

すると、その刹那の瞬間に合わせて、放り投げられたインカムから激しい閃光が放たれた。

それは恐らく、事前にインカムの中に仕込まれた、閃光弾のような物が発火した為だと推測されるが、彼女がそれと気付いた時には、既に彼女の視力は強い光によって奪い取られてしまっていた。

まずい！

アリミアは咄嗟に、右手に持った短銃のトリガーを引き放ち、直前までノインの姿を捉えていた射線上に一発の弾丸を発射する。

しかし、あたかも彼女の動きを見透かしたかのように、絶妙のタイミングで身体を逸らしたノインは、難なくこれをかわし、更に、電光石火と呼ぶに相応しい動きで、アリミアとの距離を一瞬にして詰めると、勢い良く振り上げた右足によって、アリミアが右手に持つ短銃を弾き飛ばした。

（アリミア）
「あ！！」

突然、濃密な攻撃的意識を前面へと押し出し、攻勢に転じたノインに圧倒されつつも、アリミアは即座にノインとの距離を取ろうと、素早く後方へと仰け反る。

勿論彼女は、彼が狙った獲物を簡単に見逃すような相手では無い事は解っていた。

その直後、軍用ブーツの足音が一つと、何か金属製の長物を引き抜く音が一つ鳴り響く。

アリミアは、遠い過去の記憶の中から、彼の攻撃パターンに関する情報を呼び覚ますと、何も見えない真っ白な視界の中に、彼の行動を備(つぶさ)に描き出し、直ぐに後ろ腰に括(くく)り付けたナイフシースから、右手で軍用ナイフを逆手に引き抜いた。

そして、ほぼ間違いなく首元を一閃するように振り抜かれるであろう彼の刃軌道に対し、当たり負けしないよう左手を右手首付近へと付け添えると、力一杯握り締めた軍用ナイフを縦に突き立て、防御姿勢を取った。

ガキン！

すると、アリミアが予想した通りの軌跡を描いて繰り出されたノインのナイフが、アリミアの突き立てたナイフと激しく交錯し、甲高い金属音が周囲に吐き散らされた。

お互いに刃の根元同士を噛み合わせ、歪(いびつ)な十字型を形成した二つの得物は、両者の抱く激しい攻撃的意識を代弁(だいべん)するかのように、ギリギリと気味の悪い引っ掻き音を奏でるだけで、全く動こうとしない。

一瞬にして相手を死に至らしめる、凝縮された殺意を込めた刃を眼

前で交えながら、相手の次なる行動に対して細心の注意を払うよう身構えていた二人は、その後、しばしの間、単なる意地の張り合いにも見える、鍔迫り合いを演じる事となった。

アリミアとノイン。両者が共に良きパートナーとしてチームを組んでいた頃、高い格闘戦技術に物を言わせて、最前線へと突入する役割を担っていたのはノインの方だった。

アリミアは専ら、彼の行動を援護する役割と、彼の行動によって炙り出された敵兵を狙撃する役割を担い、彼とチームを組むようになってからは、ほとんど敵兵との格闘戦を演じる必要がなくなってしまった。

勿論、アリミア自身、決して他者には負けない格闘戦能力を有している自負はあったが、常に彼の行動を背後から備に観察してきたからだろうか、彼女は接近戦と言う土俵上においては、絶対的に彼の方が有利である事を内心で認めていた。

唯一つ、彼女の側に有って彼の側に無い利を指し示すなら、それは彼女の方がより多く、彼の行動を観察する事が出来ていたと言う点だけであろう。

この時、ノインが即座に追撃の構えを見せなかったのも、そう言った彼女の分析力を高く評価していたからであり、難なく初撃を受け止めて見せた彼女に対して、強い警戒心を沸き起こしてしまったからでもあった。

やがて、次第に薄ボンヤリと視力を取り戻しつつある瞳の先に、嘗てのパートナーであるノインの表情を捕らえ見たアリミアは、激し

く殺気を漲らせる一対の目と視線を交錯させると、沸々と浮かび上がる疑念の一つ一つを、静かに呟き出していった。

（アリミア）

「貴方は、何の為に戦っているの？」

太い眉毛の下、堀の深い目元に浮かぶ鋭い眼光は、確かにアリミアの視線に絡み付いていた。

それは普段彼が見せる冷め切った虚無な眼差しではなく。

次第に心を通わせて行ったあの頃の、穏やかで優しげな眼差しでもない。

それは完全に敵として相手を捕らえた鋭い眼差し。

身体全体から滲み出る殺気を、縊り倒す相手へと突き付けた眼差しだった。

（アリミア）

「貴方は何故、私を助けたの？」

五年もの間、心の中に形作った彼の虚像に、只管そう問いかけてきた質問を、今度は見据えた視線の先にある、本物の彼自身に吐き付ける。

その答えとなる本心を、彼から示される事が無いのだとしても。

結局はその答えに、自分自身、納得する事は無いであろう事を暗に予感しながらも、アリミアは彼に問いかけられずにはいられなかっ

たのだ。

（アリミア）

「そして、貴方は何故、再び私の前に現れた！！」

右手にズシリと圧し掛かるノインの存在を、確かにその肌身で感じ取りながら、最後にそう言って強い怒気を吐き付けたアリミアは、僅かに身を捩ってノインの力を左側に軽くいなした。

そして、ノインの持つナイフを自分のナイフで巻き込むように制し、瞬間的に到来した彼の左手拳を、クロスした左手で上手く逸らして見せると、即座に彼の側頭部を狙うように、大きく右足を振り上げた。

お互いにナイフを振り翳しての格闘戦において、大きな隙を生み出してしまうハイキックを繰り出すなど、まさに自殺行為とも取れる大胆な攻撃であるが、近接格闘戦専門で慣らした実力者ノインを前にして、恒常的戦い方に終始した所で、勝機を見出す事など出来るはずも無い。

アリミアはこの時、非常に危険な道筋を辿り経る事になろうとも、常に相手の先を取るように、勇気を持って、より攻撃的に戦う事で、近接戦闘におけるノインの優位性を潰そうと考えたのだ。

しかし、当然の如くアリミアの反撃を警戒していたノインは、彼女の攻撃を完全に見切ったかように、髪の毛をかする程度で回避して見せると、ナイフを持った右手を素早く彼女の元から引き剥がした。

そして、攻撃直後で体勢を崩したアリミアへと攻撃的視線を括り付け、徐に左手でアリミアが着た真っ赤なスーツドレスの右肩付近へ

と掴みかかると、逆手にナイフを握り締めた右手を、大きく後ろに振りかぶった。

・・・が、次の瞬間、打ち放ったハイキックの勢いを保ちつつ、着地した右足を軸にアリミアが体勢を更に捻り込むと、掴み取られた衣服を引き千切らんばかりの勢いで、連撃となる左後ろ回し蹴りを繰り出した。

これには流石のノインも完全に虚を突かれた様子で、彼は慌てて真っ赤なスーツドレスごと、強引に彼女の身体を引き寄せようとするのだが、彼女の衣服は右肩繋ぎ目部分からビリビリと破れてしまい、その挙句、彼は彼女の攻撃をかわすタイミングまで逸してしまう事になる。

しかし、やはりと言うべきか、即座に衣服を放り出した左手で、難なくこれをガードして見せた彼は、少しも体勢を崩す事無く、逆にこれを跳ね返して見せると、ギラリと光る鋭い眼光を僅かに大きく見開いて、ナイフを握り締めた右手を思いっきり水平方向へと掻き込んだ。

すると、何かしらの手応えを感じると共に、彼の視界に無数の真っ赤な糸屑が弾け飛び、緩やかな風に煽られて、綺麗な夜空へと舞い上がった。

それは言うまでも無く、嘗て「ローゼイト・サーペント」とあだ名され、帝国憲兵隊から恐れられた、アリミアと言う人物を象徴する真紅の長い髪の毛であり、ノインの攻撃をかわす為、しゃがみ込んだ彼女の動きに、旋毛付近で結え上げられた髪の毛が付いて来れず、振り翳された鋭い刃によって、根元から切り裂かれてしまったのだ。

ノインは、それと気付いた瞬間、自分がアリミアの次なる攻撃を、捻り潰す事が出来ない体勢に有る事を察し、直ぐに防御体制へと移行せざるを得なかった。

しかしこの時、次なる攻撃の手番を入手したアリミアは、これ以上自分に取って、不利となる舞台での戦闘を押し続けるつもりはなく、彼女はすぐさま彼の元から逃げ去るようにして、とある方向へと駆け出していた。

それは、先ほどノインによって蹴り飛ばされてしまった短銃が転がり落ちていた場所・・・。

アリミアは、ノインと激しい格闘戦を繰り広げながらも、飛ばされた短銃の所在を探り当てる行為を怠っていなかったのだ。

やがて、転がるように短銃へと飛びついたアリミアは、一転した勢いを持ってノインの方に向き直り、即座に短銃のトリガーを引く。

ブシュ！！

銃口の先に括り付けたサイレンサーが、まるで炭酸飲料水の蓋を開け放ったような、気の抜けた音を奏でだし、アリミアの鋭い殺意を凝縮させた弾丸を、一つ発射した。

しかし、そんなアリミアの行動を、ノインが黙って見過ごすはずも無く、彼女が駆け出すとほぼ同時に、退避行動へと移り進んでいたノインは、屋上に積み上げられた資材置き場へと向かって走り出すと、アリミアが銃を構えたその瞬間、勢い良くその裏側へと飛び込

み、寸での所でこの弾丸をかわした。

ちっ・・・。

アリミアはその直後、彼の身体を僅かに掠め飛んで行った弾丸を見据え、無念さを込めた舌打ちを吐き出してしまったのだが、それも束の間、直ぐに彼と同じように退避行動へと移ると、背後に聳え立つ貯水タンクの裏側へと向かって走り出した。

この時点で、アリミアは、ノインが最も得意とする近接格闘戦から、自身が最も得意とする遠距離射撃戦へと、戦いの局面を切り替える事に成功した訳だが、それでも、自分だけが身を曝した状態で、射撃戦へと移行できるはずも無い。

ノインが有する射撃能力は、アリミアが有するそれより、やや劣っていた事は事実だが、それでも、一般的評価基準に当て嵌めれば、確実に凄腕の部類に入る優秀なものであり、彼女はまず、射撃戦へと突入する以前に、直ぐにでも身を隠す遮蔽物を獲得せねばならなかった。

パン！パン！

すると次の瞬間、思いもよらず早いタイミングで攻勢に転じたノインが、資材置き場の陰から短銃を突き出し、施設屋上南側を疾走するアリミア目掛けて、素早く二発の弾丸を発射した。

物陰に飛び込んだ体勢から即座に攻撃を繰り出すその速さは、目指す貯水タンク裏側まで、まだ少し距離を残していた彼女にとって、全く予期せぬ出来事であり、この時ばかりは然しもの彼女も、運に身を委ねる他無かった。

しかし、半場祈るような気持ちで体勢を低く保ち、全く躊躇する事無く全速力で貯水タンクまで駆け抜けた事と、最後には防水加工された屋上床を滑るように頭から飛び込んだ事が幸いし、彼女はこの攻撃を何とかやり過ごす事に成功した。

繰り出された弾丸は、一発が彼女の背中を掠めて、施設屋上南側の手摺り壁へと突き刺さり、もう一発は、彼女が滑り込んだ貯水タンクの外壁へとぶち当たった。

彼女は直ぐに上体を起こし、貯水タンクに背中を宛がうようにして寄りかかると、貯水タンクから漏れ始めた水の音を、無意識の内に聞き流しながら、チラリと資材置き場へと視線を宛がった。

そして、引き裂かれたスーツドレスの状態を気に掛けるでもなく、切り刻まれて短くなったボサボサの髪の毛を気に掛けるでもなく、徐に右手に持った短銃のマガジンを引き抜くと、残りの弾数を確認した上で、再び勢い良くグリップの中に収めた。

作戦行動中は、常に頭の中で残弾数をカウントする事を教え込まれていたアリミアにとって、このように直接残弾数を確認するなど滅多に見せない行為なのだが、全く予想だにしなかったノインとの遭遇戦に、彼女もそれだけ気が動転していたと言う事なのだろう。

やがて彼女は、ここでようやく、荒ぶる吐息を整えるように深呼吸

してみせると、短銃のスライドを引いて初弾を装填し、視界を塞ぐように垂れる前髪を掻き揚げた。

そして、耳元で髪を押さえ付けていたヘアピンへと親指が触れた瞬間、まるで時が凍り付いたかのように静止し、じっと何も無い暗がりの中を見つめたまま、小さな声で呟いた。

（アリミア）
「何の為に戦っている・・・か。」

今現在、彼女が身に着けているヘアピンは、それまで彼女が好んで身に付けていた、紅いヘアピンではない。

オクラホマ都市潜入工作任務において、偽りの秘書官を演じる事になったアリミアの為に、それなりに着飾らないとね、と言って、マキュリアーニが用意してくれた、非常に高価で気品溢れるヘアピンだ。

ノインからプレゼントされた紅いヘアピンは、ランベルク基地を出立する直前、アリミアが業と目立つように、セニフの部屋の机の上に置いて来たのだった。

それは、突然ランベルク基地内で、男に襲われてしまったセニフの為に、最後の救出者の存在を指し示す事を意図したものであり、アリミアは、自身の代名詞とも言える紅いヘアピンを置き放つ事によって、セニフに少しでも安心感を与えようとしたのだった。

本来であれば、セニフに直接、事の顛末を説明してやるのが、一番望ましい形だったのだろうが、アリミアはその時、セニフを眠りの淵から呼び覚ます事をしなかった。

出立まで、もう余り時間が無いと言う自身の都合に託けて、アリミアは、自分が最も望んでいたセニフとの会話を黙過したのだ。

勿論、アリミアはその時、少なからず、セニフと会話をしたいと言う気持ちに駆られてしまったのだが、それでも極短時間の内に済ます程度の会話の中で、強い反感を抱くセニフとまともに対話する自信がなかった。

出来ればもっと、セニフとゆっくり話し合える機会が齎されるその時まで、彼女を刺激しないようにしておきたかったのだ。

セニフを救い出した人物が自分であると、彼女に事実を伝える方法として、アリミアが書置きなどの簡易的な手法でなく、紅いヘアピンを置き放つ事を選んだのも、実の所は、次にセニフと再び出会う理由をこじつける為でもあった。

あの紅いヘアピン。今頃はセニフが持っているのだろうか。

それとも、もう既に、捨てられてしまったのだろうか。

やがてアリミアは、頭上に広がる綺麗な新月の星空を見上げ、優しく吹き抜ける夜風の香りに意識を漂わせると、ゆっくりと大きく息を吸い込み、静かに両目を瞑った。

嘗ての私は、裏切り者であるノインを殺す為だけに生きていた。

それ以外に、何ら生きる目的などなかった。

深い悲しみに明け暮れ。激しい怒りに震え。強い憎しみを抱いて。

ノインを殺す事だけを考えて生きていた。

でも、それはやがて、自分の心の中で、小さく萎(しぼ)んでいくのが解った。

時を経る毎に、心の中で膨れ上がる様々な疑念によって、ノインと言う人物に対する様々な想いによって、次第に塗り潰されて行くのが解った。

ノインに対する激しい怒りの念。これはまだ、私の心の中に存在していた。

ノインに対する強い憎しみの念。これもまだ、私の心の中に存在していた。

でも、それでも、今の私は、裏切り者であるノインを殺す事以上に、何故、彼が私を助けたのか、何故、今更私の目の前に姿を現したのかと言う、疑問に対する答えを欲して止まない。

少しでも、私の心のジグソーパズルを埋めるような、絡み合った無数の糸を解き解すような、そんな鍵となる答えが欲しい。

何でも良い。一言だけで良い。

私の疑問に答えて。

「お願いだから!!何か喋ってよ!!」

ひんやりとした貯水タンクに凭れ掛かりながら、静かに目を見開いたアリミアは、目の前に広がる綺麗な星空をじっと眺め、しばし全ての事象を忘れ去ったかの様な表情を浮かべた。

そして、たった一つ、降り落ちた流れ星に視線を宛がうと、儚くも消え去った光の筋道に、新たなる願いを込め始めた。

お互いに殺すか殺されるかの過酷な世界に身を投じながら、敵として現れたノインとの会話を望むなんて、なんとも都合の良い馬鹿な考えだ。

私は、トゥアム共和国の人間として、帝国に攻撃を加える兵士の一人。

一方ノインは、帝国の人間として、帝国を守る立場にある兵士の一人。

そんな二人が戦場で出会ったのなら、お互いに殺し合う以外に、他に選択肢は無いだろう。

話し合いで全てが解決するのならば、世の中に戦争が起こるはずがない。

最終的手段である戦争へと投じられた兵士には、もはや話し合う余

地など残されていないのだ。

ノインを殺す。

これはもはや、私にとって生きる為の最低限の条件。

中途半端な逃亡を試みた所で、ノインがそれを見過ごすはずも無い。

私の心の中で、裏切り者であるノインを殺したい気持ちが、弱々しく薄れてしまった事は確かだ。

しかし、それでも、私は今、生き延びたい気持ちで一杯だ。

そう。生き延びて、再びセニフと出会う為に。

生き延びて、再びセニフと話をする為に。

これが私の生きる目的だ。

やがてアリミアは、右手で短銃のグリップを強く握り締めると、不意に恐ろしい程の殺気を両眼に宿らせ、再び資材置き場へと視線を宛がった。

今の私は、裏切り者であるノインを殺す事を、目的として生きているのではない。

目の前に立ち塞がった敵を排除し、再びセニフと出会う事を目的と

して生きているのだ。

その為に、私はノインを殺すのだ。

「貴方を殺す為に！！生きてきたというのに！！」

自身が吐き付けたその言葉を、静かに脳裏に反芻（はんすう）させて。

アリミアは、心の中に凝縮した強い意思の中に、激しく燃え盛る業（ごう）火の種火を放り投げた。

06－35：○貴方を殺す為に生きてきたというのに［2］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３５「貴方を殺す為に生きてきたというのに」

黒く淀んだ鋭い殺気に満ち溢れた閉鎖的空間。

それは、コンクリート製の手摺(てす)り壁によって四方を囲われた、全く逃げ場の無い闘技場(コロシアム)を連想させる限定的な世界だ。

オクラホマ軍事空港の一角にある、民間空港機管制施設の屋上部は、南北に長く伸びた長方形を形成しており、下階へと続く非常階段を取り囲う塔屋小屋は、その屋上の北東部に位置している。

そして、屋上の中央部から南方部にかけて、大きな貯水タンクが四基、ある程度の距離を隔てて立ち並び、北側に位置する開放的空間の多くは、大量に積み上げられた資材の山々によって埋め尽くされていた。

周囲を真っ暗な闇のベールで包み込まれたその屋上部は、オクラホマ空港南側に広がる近代的大都市の放つ眩い威光によって、微かに薄っすらと照らし出されているようにも見受けられるが、それでも遮蔽物の陰に潜む何かを正確に捉え見るのは、ほぼ不可能であると言えた。

お互いに身を隠す事の出来る数多くの遮蔽物に恵まれた中で、相手の隙を見出す事は、中々に簡単な事ではないが、それまで両者が辿り経た幾多の戦場を、あたかも全て掻き集めて再現したかのような様相に、アリミアは、激しく高揚(こうよう)する意識の熱を感じていた。

熱といっても、熱過ぎてはならず、だからと言って冷え過ぎてもならず、強い攻撃意識を心の中心部で激しく燃え上がらせながらも、出来る限り冷静に第三者的視点に立ち返り、周囲を見渡す事を念頭に置く。

そして、視界には捉えられない殺意の蠢きを察しては、素早く構えた短銃のトリガーを、適宜引き放つのだ。

頭上で光り輝く綺麗な星々の瞬きも、心地の良い香りを漂わせる涼やかな風の装いも、完全に意識の外へと放り出し、相手の醸し出す一挙手一投足にのみ、感覚を鋭く研ぎ澄ませた状態。

それは、自分が自分ではない感覚、とでも言うのが正しいだろうか。

常に意識の影たる存在として、自らの思いを体現する鈍重な五体の呪縛を解き放ち、勝手に暴走した意識だけが、次なる展開を求めて、前へ前へと疾走して行くような、そんな物憂い錯覚が、彼女を包み込んでいた。

薄っすらと額に滲み出る汗を左手の甲で拭い去り、瞬きする時間すら惜しむように、資材置き場の方へと視線を括り付けていたアリミアは、それは私の動きが鈍いからじゃない・・・と、心に生じた葛藤を捩じ伏せると、静かに息を殺して暗がりに潜む男の気配を窺った。

そして、二つ目に取り付いた貯水タンクの裏側から、僅かに身を乗り出して、一発の牽制弾を撃ち放つと、すぐさま意を決したように三つ目の貯水タンク目掛けて走り出した。

パン！パン！

すると、約一拍ほどの時を置いたタイミングで、反撃に転じたノインが、軽い銃声を二つほど撃ち鳴らし、屋上南側を横切るアリミアへと弾丸を浴びせかけた。

アリミアが駆け出すと同時に、攻撃を繰り出すのならまだしも、優秀な戦闘員である彼にしては、異常に遅いと感じられる反応であったが、それもそのはず、彼から見て南側屋上付近は、オクラホマ都市の放つ強い光に妨げられ、体勢を低くして突っ走るアリミアの姿が、南側手摺(てすり)壁の影に融け込んだ様に見えてしまっていたのだ。

結果、ノインの放った弾丸は、地の利を生かして疾走するアリミアを捕らえる事が出来ず、その何れもが虚しくも空だけを切り裂いて、手摺(てすり)壁に激突する羽目となってしまった。

やがて、塔屋小屋に一番近い貯水タンクまで到達したアリミアは、転がるように裏手側へと身体を滑り込ませると、間髪を置かずして鳴り響いた軍用ブーツの足音に反応し、直ぐにノインの行動を封じ込める動作へと移り進む。

パン！パン！

・・・と、アリミアが貯水タンクの陰から身を乗り出そうとしたその瞬間、牽制の意味を込めて放たれた二発の弾丸が、再びアリミア

を襲った。

精度を度外視して放たれたその弾丸は、言うまでも無く、アリミアに脅威を成すような存在ではなく、虚しく貯水タンクの外壁を叩き付けると、鈍い金属音と共に、小さな閃光を連続して産み落とした。

聞こえ来る足音の様子から察するに、ノインがアリミアの方へと向かって、走り寄って来たのではない事だけは解ったが、移動に際して牽制弾を撃ち放つ辺り、それなりの移動距離を駆け抜けている事は間違いなかった。

とすれば、移動の最中、継続的に牽制弾が撃ち放たれる可能性も無きにしも非ずで、アリミアはこの時、相手がノインでなければ、反撃する事を躊躇っていた所だった。

アリミアはすぐさま貯水タンク裏から上体を曝け出すと、出来る限りノインに相対する表面積少なくなるよう横身で右手を突き出し、資材置き場から塔屋小屋付近へと疾走する、ノインのシルエットに銃口を翳した。

しかし、これまた攻撃のタイミングが少し遅かったようで、トリガーを引き放つ以前に命中させる事を断念したアリミアは、威嚇を目的とした弾丸を一発、放ってやる事しか出来なかった。

やがて、直ぐに上体を貯水タンク裏側へと引き戻したアリミアは、手に持つ短銃のマガジンキャッチをスライドさせ、まだ数発の弾丸が残るマガジンをグリップの中から引き抜く。

そして、真っ赤なスーツドレスの内ポケットから、予備のマガジンを一本取り出すと、屋上床の上へと置き放った使用済みマガジンの

代わりに、手際よくグリップの中に収めた。

攻撃時、トリガーを二回引いて止める癖は、まだ治っていないようね。

それは嘗て、アリミアがノインのバックアップとして狙撃手を担当していた頃、アリミアが後方から見ていて、非常に気になった彼の癖であり、彼は戦局が膠着状態に陥ると、何故か決まって攻撃時にトリガーを二回連続して引き放つのだ。

確かに考えてみれば、常に激しい動きを要求される最前線においては、正確に狙いを定めて撃てる機会の方が少ない訳で、連続的に弾丸を撃ち放つ事で、その帳尻を合わせようと言う考えも、尤もらしい理由である。

しかし、アリミアが記憶する限りでは、このようなケースにおいて、撃ち放った弾丸が二発とも相手に当たらなかった場合に限り、彼は必ず三発目の発射を見送るのだ。

アリミアはその癖に関して、過去何度もノインに指摘しようと考えていたのだが、彼の癖自体が作戦行動に悪影響を及ぼさなかった事と、相手に直ぐ感知されるような癖ではなかった事、そして何より、彼が癖を気にし過ぎて行動リズムを崩してしまう事が一番怖く、最終的にそれを断念したのだった。

（アリミア）

「イレイサー、コルトムなら残り六発。ブリッチルなら残り五発か・・・。」

アリミアは、貯水タンクに背を合わせるようにして、背後にある塔屋小屋付近へと視線を流すと、ノインが放つ短銃の発砲音とその取り回し様から、ある程度特定した銃の種類と、残りの仮想残弾数を呟き出した。

そして、強く握り締めた短銃を顔の前へと振り上げて翳し、左手でスライドを引いて、再び攻撃態勢を整えると、自身を奮い立たせるように、大きく息を吸って吐き出した。

このままお互いに撃ち合いを継続すると仮定して、ノインの弾切れを待つと言うのも一つの方法ではあるが、彼の性格上、弾丸を無駄に浪費する愚行を犯すはずはない。

しかも、ノインは普段から予備弾装を多く持ち歩く傾向にあり、恐らく着込んだ防弾チョッキの裏側に、最低四本は予備弾装を備えていると見て間違いないだろう。

ノインの弾切れを誘発する為に、遮蔽物の間を走り回って見せるにしても、かなりの回数を重ねなければならない事は確かだし、何より、ノインが弾切れの直前まで、射撃戦に付き合ってくれる保証も無い。

ノインに接近戦を挑まれた時点で、私の勝ち目が薄くなる事は解りきった事だし、とすれば、ノインを倒すチャンスは、お互いが銃に頼っている今を置いて他に無いだろう。

今、ノインが居る塔屋小屋の向こう側は、北側の手摺り壁との間に設けられた、小狭い空き地となっており、私が屋上へと立ち入った

際に確認した所では、何も置き放たれていない、がらんどうとした袋小路となっていた。

しかも、手摺り壁の向こう側には、何の取っ掛かりも無く、身を置く事さえ許されない、のっぺりとした壁面が広がっているだけだった。

恐らくノインは、私が塔屋小屋から逃走するのでは無いかと勘ぐり、その袋小路へと身を潜めたのだろうが、言うなればそれは、自分で自分の逃げ道を封鎖したも同然の行為だ。

ノインが弾丸の換装作業を行うタイミングは、ほぼ決まって残弾数が二発になる直前。

私の予想が正しければ、次の攻撃を繰り出した直後、ノインは弾丸の換装作業を行うはずだ。

それを遮った上で、ノインに撃ち合いを強いる事が出来れば、ノインは少ない弾丸で私と撃ち合わなければならなくなる。

お互いに身を曝した状態での撃ち合いなら、私は絶対ノインには負けない！！

やがてアリミアは、濃密な殺気を滲ませた表情を不意に強張らせ、力を溜め込むようして体勢を低く構えると、ノインの癖である二発撃ちを誘発する為、牽制弾を塔屋小屋付近へと撃ち込んだ。

そして、彼女の誘い弾に釣られて撃ち放たれた二つの弾丸が、鈍い金属音を伴って貯水タンクを軽く振るわせた直後、彼女は意を決し

たように、素早く貯水タンクの裏側から身を乗り出した。

塔屋小屋の向こう側で蠢く、ノインの動き出しに細心の注意を払いながら、右手に持った短銃を、いつ何時でも発射できる姿勢を維持しながら、アリミアは全速力で、塔屋小屋の裏手側へと向かって、突っ走って行った。

防水加工を施された屋上床と、彼女の履く運動靴との摩擦音が、軽快なテンポを刻みながら遮蔽物に反響し、健常者であれば、その様を見ずとも、何者かが塔屋小屋付近へと押し迫って来るのが解ったであろう。

勿論、如何にノインの耳が聞こえないからと言って、彼がアリミアの行動に気が付かないはずはなく、アリミアは必ず、ノインが何かしらのアクションを起すであろうと予測していた。

しかしこの時、屋上部に滞留した緩やかな空気を鋭く切り裂いて、猛然と疾走し行くアリミアは、塔屋小屋付近へと差し掛かるまでの間、彼の反応を全く見て取る事が出来なかった。

・・・？

不意に彼女の脳裏に幾つかの疑念が沸き起こる。

もしかしして、弾丸の換装作業を優先させるつもりなのか。

それとも、塔屋小屋の角で出会い頭に私を撃つつもりなのか。

あるいは、直前になっていきなり飛び出し、私に掴み掛かるつもりなか。

そう簡単には・・・！！

ズザザーーーー！！

脳裏に渦巻いた数々の疑念を、一気にまとめて殴り倒すかの様にして、塔屋小屋の裏手側付近へと頭から一回転して転がり込んだアリミアは、そのままの勢いを保って体勢を立て直した直後、袋小路へと素早く翳（かざ）した銃口の先で、ノインの姿をひた探す。

その間、一秒もかからずに達した答え。

（アリミア）
「！？・・・いない！？」

上か！？

全く予想だにしなかった展開から、混乱し行く思考の片隅で、微かにそう叫んだ意識に促され、アリミアは即座に塔屋小屋の上を見上げた。

しかし、誰しもが真っ先に辿り付くであろう回答の中に、彼の姿を見出す事は出来ず、綺麗に光り輝く満天の星空だけが、アリミアを

嘲笑うように広がっていただけだった。

アリミアはすぐさま、幾つも積み置かれた資材置き場の方へと視線を流し、物陰の何れかに隠れ潜んだであろうノインの姿を求め、忙しく瞳を右往左往させたのだが、ひっそりと静まり返った管制施設屋上部には、緩やかに流れ行く夜風以外に何者も存在しない、無機質な雰囲気が漂ったままだった。

何処だ・・・。何処に隠れた・・・。

見失うなんて・・・。絶対にそんなはずは無い。

私がノインの反撃をやり過ごす為に、塔屋小屋付近から視線を切ったのは、僅か二秒か三秒程度だ。

その間、ノインが走り出したような足音は聞こえなかったし、塔屋小屋の上へと這い上がった様子も無い。

塔屋小屋と手摺り壁によって囲われたこの袋小路から、一体どうやって逃げ出したのか・・・。

カツッ。

その時、屋上中央部へと視線を括り付けていたアリミアの背後で、何か妙な物音が一つ、微かに奏で上げられた。

それは、夜風に舞い上げられた何かが、屋上床や手摺り壁を叩く様

な音ではなく、管制施設周辺で散発的に撃ち鳴らされる銃撃音とも全く異なる音であり、何処かどす黒いピリピリとした気配を感じさせる、嫌な臭いを含んだ重たい音だった。

アリミアは即座に、その音の正体を確かめる為、後ろを振り返る。

勿論、右手に握った短銃を、直ぐに構える用意は出来ていた。

すると次の瞬間、屋上部をぐるり半周して、北側の手摺り壁方面を直視した彼女の表情が、俄かに驚愕と言う一色を持って塗りつぶされ、激しく打ち鳴らされた胸の鼓動と共に、一瞬にして粟立つ肌の震えに塗れた。

まさか!?・・・と、彼女も一瞬思ったであろう、本来そこにあるべき綺麗な夜空を掻き消し、突然、彼女の目の前に現れ出たものとは、何処かしらへと行方を晦ましていた、ノインの姿であった。

屋上部の終わりを指し示す手摺り壁の向こう側、それは何の取っ掛かりも無い、のっぺりとした壁面が広がるだけの虚空の世界であり、アリミアもまさか、ノインがそんな場所に身を潜めていよう等とは、少しも考えていなかった。

恐らくは両手の力のみで這い上がってきたであろう体勢をそのままに、一つ右足で手摺り壁を踏み拉いて見せたノインが、後ろ腰に納めたナイフを素早く引き抜き、完全に虚を突かれたアリミアへと襲い掛かる。

瞬間的に死に際を直感した意識が、目まぐるしく全ての感覚を研ぎ澄ませ行く中で、アリミアは、闇夜を切り裂いて飛びかかって来るノインの姿が、まるで宙に浮かんでいるかのような錯覚を目の当た

りにした。

そして、右手に握り締めた短銃を素早く移動させ、ノインへと銃口を宛がう為の行動を、必死になって体現する。

やがて、ゆっくりと無音なる意識の中で、奏でられていた二人の瞬間的反応が、交錯する事でようやく終焉を迎える・・・。

一瞬。

ほんの一瞬だけ。

アリミアの翳（かざ）した銃口が、ノインの姿を捕らえる方が早かったであろうか。

短銃の凹型リアサイト、凸型フロントサイトを経由して、正確に定められた照準の先に、くっきりとノインの表情を見て取る事が出来た。

恐ろしいほどの冷徹さと残忍さを滲ませたノインの眼差しが、そこにはあった。

それは間違いなく、私に対する殺意を宿した眼差しだった。

逆手に構えたナイフで一突きする事を意図したノインの挙動が、そこにはあった。

それは間違いなく、私を刺し殺す為の挙動だった。

撃て！！撃て！！撃て！！・・・。

・・・と、何回、何十回、脳裏に響き渡ってであろう、心が奏でる強い言葉。

ただトリガーを引けばいいだけの事。

たったコンマ何秒かの時間が、何故、こんなにも長く長く感じられるのだろう。

ただトリガーを引けばいいだけの事。

「・・・あの時と、・・・同じだ。」

その時不意に、アリミアの脳裏に、嘗ての記憶が蘇った。

様々な想いを絡ませて形成された、目には見えない強靭な鎖が、自らの意思を強く縛り上げる、あの不思議な感覚を・・・。

０６－３６：〇貴方を殺す為に生きてきたというのに［３］（前書き）

作者的に非常にテンポが悪いと感じたので、ノインの第一声が発せられた後の一文を変更しました。
前よりは良くなったと思います。

文章、ニュアンスが変わっただけで、内容には影響ありません。

０６－３６：〇貴方を殺す為に生きてきたというのに［３］

第六話：「死に化粧」
ｓｅｃｔｉｏｎ３６「貴方を殺す為に生きてきたというのに」

ドッ！！

一つ一つの場面を緩やかに繋ぎ止めていた意識の中で、五体に繋がる全ての感覚に纏(まと)わり付いていた重たい鎖が、奏で上げられた鈍い音と共に、一斉に細切(こまぎ)れになって四散して行くのが解った。

それは何か強靭な素材で作り上げられた重たい鎖であり、瞬間的に沸き起した己の思考とは相反する、目には見えない拘束具に違いなかったが、自由を奪われた意識が鬱陶(うっとう)しさを訴えかける中にあっても、不思議と嫌な臭いを感じさせないものだった。

生物が生物として感じる本能的意志を、人が人として感じる理性的意志によって絡め取り、今ある自分を忠実に体現して見せた彼女の行動は、全く疑いようもなく、感情によって揺り動かされる人間の姿を、如実(にょじつ)に描き出している様にも見受けられた。

そこにいたのは、たった一人の人間。たった一人の女性。

暖かな温もりさえ感じる強固な心の鎖に縛り上げられ、無数の殺人術を教え込まれた身体を、少しも動かす事が出来なくなってしまった女性が一人、そこにいただけだった。

沸き起こる感情の全てを押し殺し、目の前に現れた敵のみを、ただ本能の赴くままに縊り殺してきた嘗ての彼女は、もういなかった。

冷酷で残忍な戦闘マシーンとして、帝国中に悪名を轟かせていた嘗ての彼女は、もう何処にいなかった。

「ローゼイト・サーペント」は、もう既に死んでいたのだ。

身体を通して聞き及んだ現実と言う鈍い鐘の音に促され、掻き消えた鎖の喪失感に苛まれながらも、開放感に満ち溢れた彼女の意識が、次第に取り戻した視野の中に彼の姿を捉え見る。

そして、お互いに見つめ合う事が出来る程に接近した彼の表情を、じっと食い入るように見つめたまま、彼女は本能が感じるがままの想いを詰め込んだ言葉を小さく呟いた。

ノイン・・・。

・・・が、しかし、アリミアが発したつもりのその言葉は、全く空気の震えを生み出す事が出来ず、僅かに動いた唇だけが、彼女の想いを描き出して終わった。

アリミアはふと、ノインを捉えていたはずの銃口、伸ばした右手に握り締めた短銃の先が、既に彼の顔の右側に逸れ、遥か遠くまで行き過ぎている事に気が付いた。

そして、全く感覚のなくなった右手が次第に垂れ落ちて行き、しっかりと握っていたはずの短銃が、力なく掌から零れ落ちていく様を目の当たりにした。

アリミアは再び、目の前にあるノインの表情へと視線を戻し、相も変わらず鋭い殺気に満ちた彼の瞳をマジマジと覗き込むと、微かに視線を逸らした彼の瞳の挙動に合わせて、自分の右胸に宛がわれた彼の右手へと視線を落とす。

・・・！！

その直後、アリミアは、ノインの右手に握られた鋭利なナイフが、自分の右胸奥深くへと突き刺さっている様を見て取った。

（アリミア）
「！！ぅっ！！・・・ぐっ！！」

そして、唐突に襲い掛かってきた激しい右胸の痛みに悶え、苦悶の表情を浮かべたアリミアが、苦しそうな呻き声を発する。

アリミアの右胸へと突き立てられたそのナイフは、その身の丈の半分以上を、彼女の体内へと埋め込んだ状態にあり、じわりじわりと傷口から滲み出した鮮血が、徐々に真っ赤なスーツドレスをどす黒く染め上げていくのが解った。

結局アリミアは、ノインへと突き付けた短銃のトリガーを引く事が出来なかった。

そして、ノインが振り下ろした鋭いナイフを、小気味良くかわして見せる事も出来なかった。

唐突に呼び覚まされた数々の記憶と、心に宿した彼への強い想いに取り憑かれ、彼女はただ、短銃の照準越しに浮かび上がる、ノインの表情を見つめる事しか出来なかったのだ。

しかしこの時、何故？・・・と言う疑問が、彼女の頭には浮かんでこず、妙に納得感のある感情を沸き起こしてしまった彼女は、直ぐに震える左手でノインの右手へと掴みかかると、弱々しい力ながらも、即座にナイフを引き抜こうとした。

するとノインは、直ぐに彼女の懇願を聞き入れるかの様にして、彼女の右胸からナイフを一気に引き抜いた。

（アリミア）
「あぅっ！！」

全身を駆け巡る程の強烈な痛みに身を捩られて、上体を少し屈めるようにして蹲ったアリミアは、左手で右胸の傷口を強く押さえ付けると、ガクガクと力の入らなくなった両足を必死に震わせ、少しづつ後退りを始めた。

しかし、より勢いを増して噴出し始めた真っ赤な鮮血が、彼女の意志に反して、容赦なくボタボタと屋上床に滴り落ちて行き、一歩、二歩と後退する度に、まるで重石のような倦怠感が、次々と彼女の身体に重く圧し掛かっていく。

やがてアリミアは、塔屋小屋の壁際まで到達した直後、背中を壁に打ち付けた衝撃によって、力なく両膝を挫き折られると、まるで何

かの力で上から押し潰されるかのようにして、ずるずるとその場にへたれ込んでしまった。

焼けるように疼く胸の痛みから、荒ぶる鼓動は全く収まる気配を見せず、ドッと顔中に滲み出した汗が、激しく肩を上下させる彼女の頬を静かに伝い落ちていく。

休みなく苦しそうな吐息を漏らし続けるアリミアは、噴出した大量の血と共に次第に遠のき行く意識を、必死に心の中で強く握り締めると、ゆっくりと頭を擡げ、重さを増した瞼を見開いた。

小刻みにうつろう瞳の先で捉えた世界には、たった一人の男が立ち尽くしていた。

それは嘗て彼女の仲間だった男。

彼女の良きパートナーであり、心の拠り所にもなった男。

そして、組織を裏切った男でもあり、彼女を凄惨な地獄へと突き落とした男。

激しい殺意を抱いて、絶対にこの手で殺してやるのだと、心に誓った男。

（アリミア）

「ご・・・五年間の・・・ブラン・・・うっ!!ゴホッ!!ゴホッ!!」

五年間のブランクは、やっぱり大きかったようね・・・。

この時、アリミアが発したかった言葉は、こんな他愛の無い文面だったが、唐突に沸き起こった激しい吐き気によって、どす黒い血反吐を吐き出したアリミアには、その言葉を最後まで言いきる事が出来なかった。

本当はそれ以上に、もっと言いたい言葉が、山ほど存在していたはずなのだが、彼女はシュバルツ・ノインと言う男を前にして、常に平静さを保つ強い自分の姿を、崩して見せたくなかったのかもしれない。

アリミアはやがて、右胸へと押し当てていた左手を引き剥(は)がし、掌(てのひら)に付着した大量の血痕へとチラリと視線を宛がうと、まるで他人事の様に素っ気無い態度を保ったまま、再び左手を右胸に押し当てた。

そして、酷く湿り気を帯びた溜め息を一つ吐き出してみせると、鉛の様に重たくなった上体を引き起こし、塔屋小屋の壁に凭(もた)れ掛かる様にして、ゆっくりと満天の星空を仰ぎ見た。

細く見開いた瞼(まぶた)の向こう側には、雲ひとつ無い綺麗な星空が広がっていた。

それは、真っ黒なシーツ上を舞台として描き出された無数の星々が、それぞれに抱き持った思いを表現するかのように、艶(あで)やかに瞬(またた)き続ける透き通った世界。

明るく煌びやかに輝く星もあれば、薄ぼんやりとして存在を確認する事さえ難しい星もある。

一箇所に密集して星団を形成する星もあれば、虚空の中でたった一つ孤立している星もある。

それはまさに、この汚れきった世界の中で、混沌とした世界の中で、不安定な世界の中で、必死に生きようとする人々の思いを具象化したような、そんな人間模様を描き出しているようにも見受けられた。

私は、どの星なのだろう・・・。

周囲で瞬く星々の思いなど気にも留めず、それを頭から踏み潰すように、一際強い光を吐き付けるあの星だろうか・・・。

それとも、周囲から完全に隔離されたかのように、隅の方で薄ボンヤリと瞬いているあの星だろうか・・・。

（アリミア）
「うぅっ！！・・・・・・カハッ！！」

これはもう、助からないわね・・・。

・・・などと言う、冷静な自己分析結果が脳裏を掠(かす)め、死に際に瀕した自分の姿を理解したつもりになったが、彼女は不思議と、死に対する恐怖心を感じていなかった。

激しい混乱を見せた直前までの様相とは打って変り、ようやく穏やかな凪(なぎ)を示し始めた心の波模(なみも)に、彼女は静かに両目を瞑り、最後の

思いを連ね出していった。

諜報部に所属して、あの男・・・ユァンラオの素性を暴き出し、私達の前から完全に排除するつもりだった。

それがこのザマか・・・。

あの男を排除するどころか、その素性すら暴く事が出来ず、挙句の果てには、裏切り者であるノインに殺される事になるなんて・・・。

私もよくよく間抜けな女よね・・・。

非情に徹し、殺戮に殺戮を重ねてきた「ローゼイト・サーペント」は、もう私の中に存在していなかった。

いえ、そんな過去の自分を捨て去ったのは、他でもない自分自身。

今までそれに気付かなかったなんて、嘘よね。

人を傷つける事、人を殺す事に酷く臆病になった私は、それまで持っていた生きる為の手段を、自分から投げ捨てた。

投げ捨てざるを得なかったと言うのが、本当の所かしら・・・。

過去の私は、ローゼイト・サーペントは、あの時、リトバリエジで死んだの。

今の私は、アリミア・パウ・シュトロインと言う一人の人間。

偶然にも助けられた命を運命に委ね、新しき人生を歩み出した一人の女性。

勿論、閉鎖的空間の中で育てられた私にとって、それは決して簡単な事ではなかった。

皆が言う極一般的な日常生活と言っても、どうやって生きて行けばいいのか解らなかったし、何より、どうやって自分を振舞えば、どうやって人と接すればいいのかが解らなかった。

負ける事は即死を意味する過酷な世界で生きて来た私は、他人に自分の弱さを曝け出してしまう事に脅え、触れれば直ぐに切れる鋭いナイフを全身に纏(まと)っていた。

・・・と言うのは建前で、本当は他人との触れ合いから、相手の事を深く知ってしまう事に、恐怖していたのかもしれない。

チームＴｏｍｂｏｙの皆と出合った頃、私は頑なに自分の世界へと塞(ふさ)ぎ込み、決して誰も寄せ付けない、氷のような冷たい雰囲気を醸し出していた。

絶対に誰にも近寄られたくなかった。

自分を知られる事よりも、相手を知る事の方が怖かった。

でも、そんな冷え切った私の心を、暖かく融かしてくれたのが、セニフ、貴方だった。

勿論、他の皆もそうだけど、私は貴方に随分と救われた気がするの。

貴方も出合った当初は、全く誰とも関わり合いたく無い的な、冷え切った目をしていたわ。

それは私と同じで、生きる為の目的を見失った目だった。

私は当時、貴方の醸し出す雰囲気の中に、自分と同じような匂いを感じていたけれど、全く関わり合うつもりも無かったし、恐らくは貴方もそうなんだろうって、逆に都合が良いとさえ思っていた。

でもある時、貴方は急に人が変わった様に明るくなったわよね。

あれは、ビアホフが突然いなくなった日の翌日ぐらい・・・、同性だからと言って、私と一緒に二人部屋で暮らす事になった、その日からかしら。

今にして思えば、そう言う事だったの・・・って思えるけど、あの時私は、本当に驚いたわ。

それまでの貴方がまるで嘘だったかの様に、ずけずけと人の世界に勝手に入り込んできて、屈託の無い笑みを浮かべながら、明るく話しかけて来る・・・。

私は正直、そんな貴方の存在が、凄く鬱陶しくて、直ぐにでもその部屋を飛び出したい、何処か別の世界に一人で逃げ出してやりたい気持ちになった。

でも、その日の夜、貴方はベットの中で一人、静かに泣いていたわよね。

私、気付いてたわ。

それまで、常に一緒に行動していたビアホフがいなくなって、挙句の果てに、私みたいな冷たい女と二人きりで暮らす事になったんですもの。

貴方は、本当に不安だったんでしょうね。

貴方は見るからにか弱い少女だった。

私とは違って、たった一人では何も出来ない、力なきか弱い少女だった。

その場所が嫌だからといって、私みたいに別の世界に逃げ出してやろうなんて、思う事すら出来なかったのよね。

それから、明るくて無邪気な女の子を演じるようになった貴方は、次第にチームの皆からも親しまれるようになって行ったけど、突然自分を変えるなんて簡単なことじゃなかったと思うし、それだけ貴方が必死に生きようとしているのが解った。

何も出来ないか弱い身でありながらも、必死に皆に取り入る事で、自分が生きて行く為の居場所を作ろうと頑張っていた。

私はね・・・なんて言うか、貴方のその姿に、凄く心打たれたの。

弱々しくも、必死に生きようとしている貴方のその姿にね。

私はその時、ふっと、あのお婆さんの事を思い出してしまったわ。

力無いばかりに、何ら抵抗する事すら出来ずに、無残にも縊(くび)り殺されてしまったあのお婆さんの事を・・・。

私は、そんな貴方の事を守ってやりたいと思った。

私は初めて、自分自身ではなく、他人の事を守ってやりたいと思ったの。

私が貴方の事を守りたいと思うようになったのは、その時からかしら。

そしてその思いは、貴方の事をより深く知る度に、私の中で更に強さを増して行くのが解った。

私は貴方と、何の気兼ねもなく話し合うようになった。

私は貴方と、何ら他愛の無い事でも楽しく笑い合うようになった。

時には激しく罵(ののし)り合ったりもして、貴方を泣かせてしまった事もあったわね。

私にとって、何の目的もなくただ傍らに居る貴方の存在が、いつしか不思議と違和感を覚えない存在に、逆に居ない方が違和感を覚えるような、そんな特別な存在になっていたの。

それまで、たった一人で生きて来た私にとって、こんなにも他人の事を多く知る事はなかったし、こんなにも自分の事を多く知らしめる事は無かった。

私の中では、ただ只管（ひたすら）に楽しい日々が続く世界。

それが、チームＴｏｍｂｏｙで過ごした日々だった。

私は、こんなにも人と話す事が出来るんだ。

私は、こんなにも楽しく笑う事が出来るんだ。

私は、こんなにも嬉しいと思う事が出来るんだ。

私にとっては、毎日が驚きの連続だった。

自分と言う人間を知る為には、自分自身を映し出す、他人と言う鏡的存在が絶対に必要なの。

たった一人で自分を省みた所で、狭き視野から見渡せる範囲は、極僅かなものでしかない。

自分の奏で出す態度、表情、言動は、相手の態度、表情、言動となって返り、それを見て取る事で初めて、新たなる自分の心の揺り動きを感じる事が出来る。

そして、それを繰り返す事によって積み重ねられる自分の姿が、本当の自分と言う人間を築き上げて行く。

勿論、相対する他人の性格によっては、構築される自分の姿が変わってしまうのかもしれないけど、私は貴方と言う鏡を通して作り上

げた自分の姿に、結構満足しているわ。

私にとって、自分と言う人間を知る為の鏡、かけがえの無い半身とも言うべきなのかしら、そう言った自分自身を知る事のできる鏡的存在が、セニフ、貴方だった。

そして嘗ては、それがノインだった。それは認めるわ。

私はね、一度、失ってしまったからなのかもしれないけど、貴方を絶対に失いたくなかった。

いつまでもいつまでも、一緒に暮らして行ければ、楽しい日々が続けば良いなと、そう願っていた。

でも・・・。結局それは、私自身の手で、壊してしまう事になるのよね・・・。

自分の身勝手な思いだけを一方的に突き通して、皆の事を考えている振りをしながら、実は少しも考えていなかった。

壊れたものをまた作り直す事が、いちから作り始める事より大変な事だなんて、知っているつもりでも知らなかった。

自分だけが悪者になれば良い・・・。そう思って・・・。

「貴方の言っている事は矛盾しているわ!!全然、貴方がやっている事と正反対じゃない!!そんな子供だましの論法で私を丸めこめ

るとでも思っているの!!自分の事だけが可愛いなんて、平気で言っておきながら!!今度は私の為にですって!!よくもぬけぬけと言えたもんだわ!!この矛盾人間!!」

ほんと、そうよね。

貴方にとってのマリオは、私にとってのセニフ、ノインと同じ存在。

そんな事、解っていた。

自分の事だけが可愛いと言っておきながら、貴方の事を思い遣るような態度をして見せたのは、結局、私自身、またあの楽しかった日々を取り戻したかったから。

貴方はそれを解っていたのよね。

貴方はそんな私の態度が、許せなかったのよね。

ごめんなさい。本当にごめんなさい。ジャネット。

「まだまだ色々と私から聞き出そうってわけ?もっと私の事を知りたそうな目をしているよアリミア。もっともっと!!私を事を暴いて楽しみたいんでしょ!?私を暴いてどうするの!?殺すの!?それとも帝国貴族にでも売り飛ばすの!?あの髭男みたいにさ!!あのロイロマールの連中みたいにさ!!何が知りたいの!?私がどうしてこんな所に居るかって事!?それとも私がどうやって生き延びたのかって事!?私がお父様をどうやって殺したかなんて事まで聞きたいの!?」

私は貴方の事を色々と知りたかった。

貴方の為にって、口先だけでは取り繕(つくろ)いながら、私は貴方の事を暴いて楽しみたかっただけなのかもしれない。

そんなつもりは無かった・・・と言うのは、余りにも図々（ずうずう）しいわよね。

でも私は、本当に心の底から貴方の事を知りたかった。

そして、私の事も知って欲しかった。

お互いに心を解き放って、持っている悩みや不安を含め、思いの全てを曝け出すような、そんな会話がしたかった。

貴方の迷惑を顧(かえり)みず、それをする事で、貴方が更に傷付いてしまう事が解っていながらも、私は貴方と会話がしたかった。

ほんと、自分勝手過ぎるわよね。

ごめんなさい。本当にごめんなさい。セニフ。

でも、二人とも・・・いえ、シルも、サフォークも、マリオも、そして、その他の皆も、私と言う人間を作り上げる事に携わった人達全てに、私は感謝しているわ。

これまで出合った人達全てに、私はありがとうって言いたい。

それが出来ずに死んでしまうのは少し癪(しゃく)だけど、結局、生きている

内は、私はそんな言葉を言えやしないだろうし、仕方無いわよね・・・。

でも、今の私は、素直に皆にありがとうって言えるわ。

私は、そんな人間になる事が出来たんだ。

こんなに嬉しい事は無い・・・。

あぁ・・・ギャロップ。私、貴方との約束、守れそうにも無いわ・・・。

貴方の言葉、嬉しかった・・・本当に・・・。

そして・・・ノイン。最後に貴方と会えて、本当に嬉しかった・・・。

貴方を殺す為に生きて来た・・・って言ったけど、私には貴方を殺す事は出来ない。

・・・それは、解っていた。

でも、それで良い。・・・それで良い・・・と思う。

もし最後に一つ、何かを願うとしたら、心に残った疑問を少し、ほんの少しでもいいから、解いておきたかったな・・・。

（ノイン）

「何故・・・。帰って来た・・・・。」

その時、次第に薄れ行く意識の中で、唐突に舞い降りた思わぬ雫が、鏡の様に澄んだ心の水面(みなも)に大きな波紋を呼び起こした。

それは、はっきりと聞き取れたわけではない、微かに聞こえた程度の人の声。

アリミアはハッとした表情を浮かべ、闇の底へと沈みつつあった意識を必死に浮き上がらせると、その虚ろな視線をノインへと宛がった。

それは、死に際にあって、そう「聞きたかった」彼女の想いが、意識上にその言葉を作り上げただけなのかもしれない。

アリミアは、もはや全く痛みすら感じなくなった右胸から、重さすら失った左手を振り落とすと、必死に上体を前へと傾け、幻のように発せられた彼の言葉を、何度も脳裏に反芻(はんすう)させた。

（ノイン）
「この俺を・・・。何の躊躇(ちゅうちょ)も無く・・・。殺せるようなら・・・。また、再び・・・。」

しかし、アリミアが凝視した視線の先で、ゆっくりと動き出したノインの唇が、次なる言葉を確かな肉声として奏で上げる。

それは、初めて聞く彼の声色。初めて聞く彼の思い。

それまで、全く一言も発する事が出来なかった聾唖(ろうあ)の戦士が、初めてアリミアに対し、言葉を投げかけたのだった。

それは元々喋(しゃべ)れる事を隠し通していたのか、それとも後天的に手術、あるいは訓練されたものなのか、直ぐには判断がつかなかったが、アリミアにとってそれは、どうでも良いことだった。

アリミアは、どす黒い血反吐を垂れ流す口元を僅かに開け放ち、唖然とした表情のままノインの姿を、ノインの表情を必死に見つめた。

するとやがて、彼の瞳から滲み出した大量の雫が、一斉に堰(せき)を切ったかの様に彼の頬を伝い、零れ落ちていった。

（ノイン）
「しかし・・・。お前は殺せなかった・・・。」

アリミアは解っていた。

そう。解っていた。

アリミアは自分の中で、恐らくはそうでは無いのかと言う答えを、既に察していた。

しかし、アリミアは、その答えへと辿り付く自分を想い必死に差し止めると、重たい扉の内側へと仕舞い込んで、自分では決して開ける事の出来ない鍵で、硬く施錠していたのだった。

本当にそうである事を確定付ける心の鍵が、齎(もたら)されるその時まで。

キン。

今ここに、彼女の心の中に、微かな金属音を響かせて、舞い落ちた一つの鍵が、彼女の心の重たい扉を、静かに開け放っていくのが解った。

緩やかに流れ行く心地の良い夜風に、切り刻まれた紅い短髪をなびかせながら、ノインの姿を見つめるアリミアの瞳に、枯れ果てたはずの涙が、薄っすらと染み出していくのが解った。

決して十分にコミュニケーションを取れたとは言い切れない二人。

決して恋人同士であるとは言い切れない二人。

相手を殺す事でしか生き延びる術を知らなかった二人。

数多くの他人の命を踏み拉(しだ)いて生きて来た二人。

そんな二人が、最後の最後に、お互いに抱く想いをぶつけ合う。

アリミアは必死に、自分の想いを込めた最後の言葉を吐き出そうとした。

・・・が、それも適わず、それならせめてと言う思いで、必死に唇を動かそうとした。

・・・が、それすらも適わず、僅かに口元を緩めて、ノインに小さな笑みを投げ返してやる事しか出来なかった。

そして、ゆっくりと閉じた目元から、一筋の涙を零れさせると、やがてアリミアは、静かに頭を傾けていった。

綺麗な化粧を施した清楚で可愛らしい女性。

真っ赤なドレススーツに身を包み、真っ赤な鮮血に塗れた可愛らしい女性。

瞑る瞼（まぶた）から零れ落ちた涙が、まるで宝石の様に彼女を彩り、僅かに浮かんだ微笑（ほほえみ）が、彼女の美しさに更なる華を添える。

掻き消えた命と引き換えに、その時彼女が手にしたもの。

それは恐らく彼女にとって、命よりも価値のある、素晴らしきものであったに違いなかった。

06－90：★【第六話】登場人物一覧

第六話：「死に化粧」

★★★新規登場人物一覧★★★

【カル・ジャンヌ】
性別：女　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国史上最大最悪のテロ組織「ファルクラム」の戦闘員。
幼い頃から日々過酷な戦闘訓練に明け暮れ、若干7歳の時に初めて組織の作戦行動に参加。
以降、帝国憲兵隊に「ローゼイト・サーペント」とあだ名され、その悪魔的存在を恐れられるようにまでなった。
性格は生真面目で冷静、冷酷と言う印象が強く、他の仲間たちともほとんど馴れ合う事はなかった。
帝国貴族総出で実施されたファルクラム壊滅作戦によって囚われの身となり、公式記録では獄中で死亡した事になっている。
実際は幼き頃のアリミア。

【アイリス・タウーザ】
性別：男　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国史上最大最悪のテロ組織「ファルクラム」の幹部で、帝国トポリ領ピピン一帯を取り仕切るリーダーとして、その悪名を帝国中に轟かせていた人物。
娘であるカルを一流の戦闘員に育て上げるため、幼い頃から執拗に過酷な戦闘訓練を強いていた。

【マリー・ダディ・ジャンヌ】
性別：女　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国

貧しい身分の出身でありながら、その美貌と歌声で街の踊り子として生計を立てていた美しき女性。
夫となるアイリスとの出会いから、次第にその身を過酷な闇事業へと投じる事となり、ファルクラム組織の潜入工作員として暗躍する。

【シュバルツ・ノイン】
性別：男　年齢：２４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」に所属する戦闘員であり、ファルクラムを壊滅させる為に同組織へと送り込まれたスパイ。
言葉も話せず、耳も聞こえない聾唖の戦士だが、非常に優秀な戦闘工作員で、作戦を成功させる為ならば、女子供を殺す事も躊躇わない。
組織の命令に忠実な僕たる己の立場を崩す事はなかったが、作戦を成功させた後は、必ず決まって遠くを見つめ、人目を憚らず泣いていた。

【チピタ・マウアー】
性別：女　年齢：死亡　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国副都心リトバリエジに住む、裕福な身形をした老婆。
何不自由なく暮らせる程の蓄えを有していたが、突然暴漢に殺されてしまった息子夫婦への思いから、何の当ても無くスラム街を徘徊する日々を送っていた。

【クリスティアーノ・サブラコシュ】
性別：女　年齢：２２歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国でも指折りの権力者「ヴァラジン・オーム」の新人秘書官。
オクラホマ軍事空港への破壊工作任務を背負ったアリミアの仮の姿。

【ヴァラジン・オーム】
性別：男　年齢：４４歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国軍指揮権の大半を掌握していると言われている強大な権力者。
迫力のある眼差しと、鍛え上げられた肉体によって、一種異様な威風を醸し出す大男で、額から右目を辿るように頬にかけて伸びる大きな傷が特徴的な人物。
帝国貴族「オットンハイマー・レブ・ロイロマール」と個人的な結び付きも強く、北方アイスクリストフの平和と秩序を保ってきた功労者でもある。

【シュミット・マハーキフ】
性別：男　年齢：３６歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国内で数々の要人達を警護してきた、やり手のセキュリティーポリス。
オクラホマ軍事空港への破壊工作任務を背負ったギャロップの仮の姿。

【マキュリアーニ・ビジクタシュ】
性別：女　年齢：３３歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国でも指折りの権力者「ヴァラジン・オーム」のベテラン秘書官。
端整な顔立ちと小柄な体躯に似合わず、はきはきと自己主張の強い性格と、何事にも物怖じしない度胸の持ち主であり、時にヴァラジンの判断を左右するとまで言われるその頭脳は、まさに彼の右腕と揶揄するほど優秀なものであった。
カサスの乱によって囚われの身となった弟を助け出す為に、自ら先頭に立ってオクラホマ武装決起軍の支援を行い、他国の工作員であるアリミア達をも補佐する複雑な立場を難なくこなす。
ビナギティア国のみならず、帝国の内情、トゥアム共和国の内情に

精通し、様々な勢力が織り成す混沌とした世界で堂々と渡り歩くその姿は、まさに武器を持たぬ強大な力と称するに相応しいものであった。

【ラブアン・ヴァシャール】
性別：男　年齢：４６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国最高評議会派遣外交官。

【ウィンチェスター・ボォクリューユ】
性別：男　年齢：３４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属の東方戦線作戦参謀長であり、卓越した戦術眼を持つ若き異彩の士官。
普段から何をするにも他人より劣る運動能力しか持っていない堕落者のイメージが強いが、有事の際に垣間見せる彼の思考の速さは、まさにその欠点を補って余りある程の稀有な能力とも言われ、今ではトリストライアンの右腕として、他の重臣達と肩を並べる存在にまで上り詰めた。

【セヒロス・ジェフティ】
性別：男　年齢：５４歳　出身：トロス王国
長らく戦乱の続く砂漠の国「トロス王国」において、最強の将軍と呼び声の高い猛将。
強大な軍事力を誇る帝国ブラシアック軍団、ロートアルアン軍団を相手に回し、小国であるトロス王国が長年に渡って戦線を維持できたのも、彼の功績無くして有り得なかった事だとも言われている。
ただ国内外に蔓延る陰謀に関しては非常に疎く、最前線で戦う一兵士としての立場を弁えた行動に終始したため、策謀を弄する輩達に翻弄される事が多かった。

【グネービルム・レブ・ルフトスピーリング】
性別：男　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国領タクラマカン地方一帯を取り仕切る名家「ルフトスピーリング家」の領主。
常に領民達の為を思い、領民達の為にのみ生きた心優しき人物であり、重い病を患って伏せていた彼は、自らの死期を悟ると、皇室を離れる事になったラキシスに領民達の未来を託し、静かにこの世を去った。
長きに渡り受け継がれてきたルフトスピーリング家の歴史は、彼を持って幕が下ろされる事となるのだが、誰一人として、彼の決断を公然と侮蔑する者はいなかった。

【アムベルト・レブ・ブロクホルスト】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国最高評議会派遣外交官。

【チミン・オマール】
性別：男　年齢：５９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国領オクラホマ地方一帯を取り仕切る領主。
名前に貴族称号を持たない、極希少な帝国貴族の末裔。

【リュチアーノ・オマール】
性別：男　年齢：２３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国領オクラホマ地方一帯を取り仕切る領主の息子。

【レジェス・ウィルナー】

性別：男　年齢：１９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国とビナギティア国との間で開催された国家間会議の場に出席した若き少年。
出身地域、所属勢力、軍歴など、その一切が不明とされる謎の人物。

【オルカス・フォーロ】
性別：男　年齢：３７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール軍団所属の最強将軍と呼び声の高い将軍の一人。
皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」に所属ていた頃、ギュゲルトと共に双頭の龍たる異名を授けられ、帝国内外からその存在を恐れられていた人物。
ギュゲルトとは相対して、その性格は非常に温和で人当たりのよいものがあり、各勢力派閥を超えた親密な関係を各所に持ち、衰退したロイロマール派を支える最後の砦ともなった。

【ジローエン・グレシュビッツ】
性別：男　年齢：４９歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国の外務大臣。

【アネサ・メットネル】
性別：男　年齢：４０歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国の海軍中佐。

【キャスパー・ムロミンツ】
性別：男　年齢：５１歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国防衛本部の作戦副部長。

【フレッチャー・ブリアスキニ】

性別：男　年齢：４５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍第七機械化歩兵部隊の隊長。

【ドン・ドラン】
性別：男　年齢：４３歳　出身：リバルザイナ共和国
リバルザイナ共和国の空軍大佐。

【ボーデン・ヒルクライム】
性別：男　年齢：３８歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国内で急激に勢力を拡大しつつある新興勢力「ボルテアス」を率いる若手議員。
一方、陰では様々な陰謀を巡らす野心家であり、オクラホマ武装決起軍に多額の資金を提供していた張本人。
自分が伸し上がる為には、どんな犠牲をもいとわぬ非情の人物。

【ライーザ・マルグリット】
性別：女　年齢：３３歳　出身：ビナギティア国
マキュリアーニの友人で、オクラホマ武装決起軍に加担する女性。
ビナギティア国でとある調査業者に勤めていた彼女は、帝国国内で勃発したブランドル武装決起事件に関する調査に携わり、そこで自分の両親と、マキュリアーニの弟が囚われてしまった事実を知る。
その後、ボルテアスに所属する一人の人物から、オクラホマ武装決起に関する情報を入手し、マキュリアーニ共々オクラホマ武装決起軍に加担する事を決意した。
しかし、その陰謀の裏に潜む更なる陰謀の影を察知した二人は、単独で事の真相を突き止めるための調査行動を開始する事になる。

【バニッシュ・イドリー】
性別：男　年齢：４２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国

帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の総隊長。帝国軍階級は中佐。
自身の戦闘能力はそれほどでも無いが、非常に高い統率能力を持って部隊を指揮する有能な指揮官であり、厳格な性格をそのままに、激しく部下達を叱咤激迎する様は、まるで台風のようであるとも揶揄される人物。

【ゴエップ・ジュクサーナ】
性別：男　年齢：２４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は少尉。

【ナコレアフ・レブ・トールネイ】
性別：男　年齢：５３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国領オクラホマ地方南部に位置する秘密基地パレ・ロワイヤル基地の総司令官。
軍事関連の知識に乏しい身でありながら、上流階級貴族の特権を利用して同基地の総司令官の座を奪い取った彼は、安定した情勢下を良い事に、駐留軍を好き放題荒らしまくり、防衛基地としては何ら意味の無い兵器の雛壇を作り上げてしまった。
そして、パレ・ロワイヤル基地へと侵攻したトゥアム共和国軍の動きを察知すると、彼は総司令官の職務を全て投げ出し、たった一人で後方基地へと逃走を図る。
しかし、逃走用の飛行機が滑走路を飛び立つ直前に突如爆発してしまい、敢え無くその人生に幕を閉じた。
公式記録では、上空からの爆撃による戦死となっているが、基地の滑走路には爆撃痕は一つも残されていなかった。

【グルーデン・ピアニス】
性別：男　年齢：３３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は中尉。

【スキニオ・ベブレゼマ】
性別：男　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は中尉。

【ゲルティス・バッハトネル】
性別：男　年齢：３０歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は少尉。

【シニョール・セレシュコフ】
性別：男　年齢：２６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は少尉。

【オリビア・ボエーノ】
性別：女　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ブラシアック軍団所属パレ・ロワイヤル基地駐留軍地上部隊の兵士の一人。帝国軍階級は少尉。

【アリン・サザー】
性別：女　年齢：１５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
襟足から先に少しウェーブのかかった桃色の長髪と、色白の肌が特徴的な人物であり、非常に卓越したＤＱ操舵技術を有する小さな少女。
幼い頃に親に売り飛ばされた経験を持ち、アモルパラシオン組織の精力的活動によって、人身売買組織から助け出された子供達の一人。

【メビル・クオーラン】
性別：男　年齢：１５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
巻きの強い短めの黒髪と、浅黒い肌が特徴的な人物であり、非常に卓越したＤＱ操舵技術を有する小さな少年。
幼い頃に親に売り飛ばされた経験を持ち、アモルパラシオン組織の精力的活動によって、人身売買組織から助け出された子供達の一人。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
赤く長い髪の毛が特徴的な元気の良い女の子だが、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。

彼女自身の告白により、第十三代皇帝ソヴェールの娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」である事が判明。
喧嘩別れに終わったチームメイトとの話し合いから、微妙となってしまった仲間達との関係に悩む。
しかし、ランベルク地下基地において、突然謎の男に襲われた彼女は、アリミアによって救い出された事実に気が付くと、次第に彼女に対する想いを軟化させていく事になる。
その後、パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略部隊に編成された彼女は、再びアリミアと出会う事を切に願いながら、必死に戦い抜く事を決意する。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、非常に人当たりが良く温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。
トゥアム共和国陸軍三佐サルムザークとは、何かしらの深い因縁を持つ。
セニフの素性を知り、当惑しながらも彼女の為に何かしてやれる事は無いかと苦慮する。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
抹茶色の癖毛が特徴的の長身女性であり、とてもおしとやかで愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
最愛の弟であるマリオの死から、人が変わったように冷たい態度を示すようになった。

ディップ・メイサ・クロー作戦以降、ユァンラオと行動を共にするようになる。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。
セニフとの関係が悪化してしまった状況にもかかわらず、彼女の事を想い、何か彼女の為にしてやれる事はないのかと必死に模索する。しかし、その用いた情報入手方法があまりに行き過ぎた行為だったため、諜報部の監視網に引っかかる事となり、彼女は半場ヘイトーゼに脅しをかけられるような形で諜報部へと転属する事になってしまった。
その後、オクラホマ軍事空港破壊工作員として、オクラホマ都市へと潜入を果した彼女は、裏切り者であるシュバルツ・ノインと出会う事となり、激しい格闘戦を繰り広げるに至る。
最終的に彼女は、彼の前に敢え無く敗れ去る事となり、セニフとの再会を果す事無くこの世を去ってしまった。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有した人物。
お調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：死亡　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなって死亡。

【サルムザーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍士官学校を１７歳で卒業した秀才であり、ネニファイン部隊の隊長を務める。
黄緑色の髪の毛と瞳が特徴的であり、体格的には恵まれなかったものの、その卓越した戦術眼は軍上層部内でも非常に評価が高かった。
仕官として最初に配属されたカルッツァ地方ニールベングにおいて、帝国軍との大規模な戦闘に遭遇。
負傷した司令官の代わりに軍を指揮し、見事帝国軍を蹴散らして見せた。
普段から無気力な怠け者を装っているが、非常時にこそその真価を発揮する異端的才能の持ち主。
完全に違法たる強引な手法で突然部下を引き抜かれる事になった彼は、部下を助けだ為に新たなる作戦を打ち出す事になる。

【カース・イン・ロック】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍作戦参謀本部出身の作戦軍曹。
厳格な性格の持ち主であり、軍規律に関しては非常に小うるさいが、逆に自身の身形は少々派手目で挑戦的。

非常に高い統率力と指揮能力を有する人物で、陸軍士官学校の鬼教官として恐れられた人物。
自分の思いに真っ直ぐで頑固な性格を持つが、心優しき二児の母でもある。

【シューマリアン・ベルナール】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍技術部所属の技術三尉。
非常に温厚な性格の持ち主で、その体格が指し示す通り、何事にも動じないおっとりとした雰囲気を醸し出しているが、ＤＱ整備を主としたその技術力は、非常に優れたものを有する人物である。

【チャンペル・シィ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター兼、部隊長サルムザークの秘書官。
細くしなやかな深緑色の長髪に、ほのかに釣り上がった猫目が特徴的な女性。
トゥアム共和国通信高大卒のエリートお嬢さんで、ネニファイン部隊にはカースの推薦で入隊した。
その能力は非常に優秀なものであったが、時折見せる大きな天然ボケが玉に瑕。

【リスキーマ・サラオ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター。

【ユァンラオ・ジャンワン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

厳つい顔に生え揃った武将髭がトレードマークの得体の知れない人物であり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦闘能力においては無類の強さを有する猛者。
謎の依頼人からの要望でセニフを付け狙い、ＢＰ事件を引き起こす。
彼自身、セニフの正体に非常に強い興味を抱いている。

【ランスロット・アバンテ】
性別：男　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
金髪の天然パーマが特徴的な彼は、そのお調子者たる人柄が示す通り、「酒」と「女」に全てを捧げる堕落者としての烙印を押された人物。
明るく軽い性格が彼の人当たりの良さを醸し出してはいるが、大半の女性は決して無為に彼の元へと近づく事は無かった。

【フロル・クローチェ】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
浅黒い肌に少し厚めの唇が特徴的な長身女性であり、独特のしゃがれ声を持ち、しばし女性らしさから逸脱した言葉遣いから、豪胆で野坊主なイメージを持たれがちな人物。
しかし彼女は非常に温厚で優しい心の持ち主であり、誰にでも分け隔てなく接する気持ちの良い性格から、誰からも親しまれる好人物である。

【ジルヴァ・ディロン】
性別：女　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍所属の国境防衛部隊所属のＤＱパイロット。

見た目の可愛らしさとは裏腹に、彼女の発する言動はとても汚く、非常に性格の荒い女性。
その素行の悪さはトゥアム共和国軍内でも有名であり、数々の部隊を渡り歩く事になるのだが、責任感が強く、与えられた責務に対しては真面目に取り組む姿勢を見せる。

【ジョハダル・ムーズ】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
面長な顔貌に、細く垂れ下がった目尻が特徴的な人物であり、凡人を遥かに凌駕するＤＱ操舵技術を有したパイロット。
若い頃は上官泣かせの荒くれ者で通っていたらしいが、人の上に立つべき年齢の到来と共に、大らかでいて周囲を見渡せる上位者としての自覚に目覚めた。

【バーンス・シューマッハ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
若い頃より大陸各地で勃発する戦乱の中を駆け抜けてきた猛者であり、顔中に刻まれた傷跡が残る強面の男性だが、その見た目とは裏腹に、性格はいたって温厚で非常に仲間思いの頼れる人物だ。
どんな過酷な戦場からでも、必ず生きて帰ってきたことから、人々は彼を「不死鳥」と称するようになった。

【マース・チェリーズ】
性別：男　年齢：死亡　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規軍人。（出戻り）
性格は好戦的だが、周囲の状況を冷静に分析して作戦を練るタイプ。
トゥアム共和国軍の傭兵として５年の実戦経験があり、小部隊を統

率するリーダーとしては、周囲からそれなりに高い評価を得ていた。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによって狙撃され爆死。

【メディアス・イェルザック】
性別：男　年齢：２４歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
短めにまとめた綺麗な麻色の髪の毛が特徴的で、若いながらも非常に落ち着いた雰囲気を持つ女性。
彼女は実年齢よりも歳を重ねた印象を受けるその風貌と言葉遣いにより、周囲からは「おばちゃん」と呼ばれる事が多かったが、彼女自身はそんな事を少しも気にする素振りは見せない。
さばさばとした性格と、何処か親しみやすい雰囲気を持つ大人びた人物。

【ジョルジュ・ハーツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ正規整備士。
まだ幼さの残る端整な顔立ちに、細く綺麗な茶髪が特徴的な彼は、まるで少女のような可愛らしい容姿をした少年であり、明るく人当たりの良い性格から、誰からも好まれる人物だ。
軍正規整備士としては最年少となるその若さに似合わず、ＤＱ整備技術に関してはかなりの腕前を有している。

【フレイアム・モートン】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
大きく鰓の張った顎が特徴的な人物で、非常に真面目な性格の持ち主だが、意固地に軍規だけを優先させて周囲にむさ苦しい空気を作り出すような人物ではなく、非常に親しみやすい雰囲気を持った男

性。

【ルワシー・オスカフォード】
性別：男　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
良く肥えた大きな身体に、モヒカン頭と言う特徴的な風貌を持つ人物であり、大雑把な性格柄、余り物事を深く考えないで行動するタイプの人間。
かなり訛りの強い言葉を持って毒を吐き散らすのが常だが、こう見えて中々に男気溢れる熱い男である。
実はその体躯に似合わず、かなりの筋肉質であり、鈍重と言う様な表現を持って称される人物ではない。

【アイグリー・コートン】
性別：男　年齢：１９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
短くまとめた群青色の頭髪と、円らな瞳が特徴的な人物であり、目上の者に対する態度が全くなっていない若きＤＱパイロット。
普段からやる気の無さそうな態度を醸し出しているが、こう見えて結構ＤＱの扱いには長けている部類に入る。
全く周囲の目を気にせず、一人我が道を進むマイペースな青年。

【ウララ・アクイ】
性別：女　年齢：２０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
短めの茶髪にのっぺりとした顔立ちが特徴的な、非常に明るい性格の女性で、実戦経験こそ無いが、中距離戦闘をもっとも得意とする射撃の名手であり、ＤＱＡ時代には数多くの相手パイロットを駆逐してきた若きポイントマンである。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによっ

て狙撃され爆死。

【ベルトラン・ギュストリア】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
若くして禿げ上がった頭髪が特徴的な人物であり、必要が無ければほとんど言葉を発さない寡黙な男性。
性格は控えめで、自ら率先して敵陣に切り込む獰猛さを持ち合わせていなかったが、味方に敵を撃破させるアシストシュートを最も得意とする優秀なパイロット。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによって狙撃され爆死。

【アグリ・ショート】
性別：男　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【バルバロック・ド・レイ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ソドム・スピリッツ】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
綺麗に刈り揃えた角刈りとは裏腹に、事ある毎にぼやき倒す小うるさい人物。
そのボヤキは日常生活の中であろうと、戦場の中であろうと所構わず垂れ流される為、時に人の苛立ちを増長させてしまう傾向にある。
ただし、だからと言って彼のボヤキが止まる事は決して無い。

【ショウ・イムラ】
性別：男　年齢：１９歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
黒くサラサラな頭髪に、細く釣り上がった目尻が特徴的な血気盛んな若者。
言葉遣いが非常に悪く、誰か彼かに食って掛かる陰湿な性格の持ち主。

【フェザン・ボォスター】
性別：男　年齢：２９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊長。
オーギュスト・レブ・ストラントーゼからの信頼も厚い有能な指揮官。

【セラフィ・オム】
性別：男　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
青み掛かったロングヘアーと、コロコロと良く肥えた肥満腹が特徴的な陰湿な男性であり、全くやる気を感じられない軟調な言葉遣いから、従える部下達にも軽くあしらわれがちである。
しかし、情報処理能力、狙撃能力に関しては、全く他を寄せ付けない天才的能力を垣間見せ、パレ・ロワイヤル基地へと侵攻してきたネニファイン部隊を大いに苦しめた。
最終的には、セニフが繰り出した砲弾によって爆死する運命を辿る。

【アレナルティカ・ユーラシ】
性別：女　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国

帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
細く長い金髪を旋毛付近で結え上げたポニーテールがトレードマークの綺麗な女性で、思った事を直ぐに口に出してしまうと言う、始末の悪い性格の持ち主だが、非常に明るく人懐っこい人物。
貧民層からの成り上がり兵士であり、セファニティール皇女に憧れている。

【バルベス・ハッシュ】
性別：男　年齢：３２歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
大柄でがっしりとした体格の、如何にも軍人らしい威風を纏う野性味溢れる男性。
色濃く門型に携えた口髭と、覇気に溢れた太い眉毛が特徴的な彼は、その見た目同様、力作業には何ら不安のない力強い豪力の持ち主であり、特殊歩兵部隊で鍛え上げたと言うその白兵戦能力も、非常に高い技術を有している。
しかしその反面、彼の性格はとても穏やかで繊細な部分があり、決して戦闘員たる気質に恵まれていたとは言い難いのだが、ＤＱパイロットとしての能力は申し分ないものを有している。

【ランス・レッチェル】
性別：男　年齢：１９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ストラントーゼ軍第４０３部隊「エイリアンホース」の部隊員。
黒を基調に青みがかった柔らかな頭髪に、細く釣り上がった目尻が特徴的な男性であり、その卓越したＤＱ操舵技術と、高い状況判断能力から、非常に将来を有望視される人物。

【ソヴェール・ランス・セルブ】

性別：女　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝。
帝国全国民から最も愛された帝国史上初の女帝であり、帝国最高評議会を設立した人物。
周辺諸国との戦火縮小や自国兵団の軍備縮小、自国内の身分格差の緩和、環境破壊問題への取り組みなど、大陸全土に蔓延る様々な問題に立ち向かった英雄。
彼女を唯一批判出来うる材料としては、完全なる立憲君主制度への移行を躊躇ってしまった事と、後継者として男子を残さず崩御したと言う事だろう。

【オーギュスト・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
メヌシア地方一帯を取り仕切るストラントーゼ家の当主。
統治領土はそれほど多くは無いが、帝国国内で最も強大な軍事力を持つ貴族であり、帝国最高評議会の圧倒的大多数を占めるストラントーゼ派の首領。
非常に好戦的な性格の持ち主であり、薄ら暗い陰謀に長けた黒い不世出の知将。

【オットンハイマー・レブ・ロイロマール】
性別：男　年齢：５４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
南ブランドル地方からセレーヌ地方一帯を取り仕切る帝国最古の名家ロイロマール家の当主。
第十三代女帝の夫ディユリスの兄にして、帝国国民から絶大な人気を誇った偉大なる人格者であり、周辺諸国との関係強化にも積極的に取り組んだ人物。

【トリストライアン・レブ・ブラシアック】
性別：男　年齢：４７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
サンカサロ地方からカルッツァ地方に至るまで、帝国最大の統治領土を誇るブラシアック家の当主。
豪胆にして冷静沈着。温和でいて激しい気性の持ち主であり、武官たる立場にこそ自分の存在意義があるのだと信じる古風な戦士。

【ラキシス・ラント・ナイト】
性別：女　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十ニ代皇帝タルカム・ターカンの次女であり、ナイテラーデ家のの始祖。
第十四代皇位継承権をめぐる争いを避けるために、早々にランスの称号を捨て去り、タクラマカン地方で帝国国民の為に生きた力なき慈愛の女神。

【ゲイリーゲイツ・トロ・ナイト】（ゲイリーゲイツ・レブ・ルフトスピーリング）
性別：男　年齢：２０歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
タクラマカン地方を治めるルフトスピーリング家の長男として生まれ、その後ナイテラーデ家の養子となる人物。
端整な顔立ちに光る鋭い眼光が特徴的な彼は、幼少の頃から類まれなる能力に恵まれ、将来を有望視される若者であり、ストラントーゼ軍の旅団長を務める冷静沈着な指揮官である。

【フランコ・ナタレード】
性別：男　年齢：４８歳　出身：南ムルアート諸国
ムルアート諸国解放軍の総司令官。

親帝国派である北ムルアート政府の強権指向に反発し、叛乱軍を組織した人物。

【ヘイトーゼ・マクバラン】
性別：男　年齢：４９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍諜報部を取り仕切る特別一佐官。
大きく出張った頬と、顔中に広がる細かい皺から、見るからに「猿」を連想させる小柄な中年男性であるが、洞察力、分析力、判断力に優れた人物であり、薄ら黒い陰謀にも非常に長けた切れ者。
愛用のマグカップを只管に磨き続ける姿と、ゆったりとした語り口調からは、まったく想像する事も出来ないが、実はトゥアム共和国軍の影の支配者とまで言われる大物である。

【ギャロップ・リッスモン】
性別：男　年齢：３６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍諜報部工作員。
金色の短髪にがっしりとした身体つきが特徴の男性で、一種異様な黒いオーラを身に纏っているが、非常に物腰が柔らかい人物であり、人と接する彼の態度は常に温和でいて優しいものだ。
いつも愛用のサングラスをかけている。

【ビアホフ・ラ・バスケス】
性別：男　年齢：３６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」の初期構成メンバーの一人であり、心優しき物静かな中年男性。
帝国時代は皇帝専属自兵部隊「フランクナイツ」に所属していた過去を持つ。
ある時期を境に忽然と姿を消した。

【ラックス・ムーズ】
性別：男　年齢：３９歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のオーナーで、合法的不正規部品を取り扱う「ＬＮＲ社」の社長。
周囲の事象に対して無頓着で流されやすい性格だが、無駄に明るい雰囲気を醸し出して、誰にでも隔たり無く優しく接する温厚な人物。
時におかしな言動を放って、周囲に変人たるイメージを植え付けてしまう悲しき中年男性。

０７－０１：〇闇夜の反抗

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１「闇夜の反抗」

ＥＣ３９７年６月１６日深夜。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国の東方地域各地で、大規模な軍事衝突が発生した。

先の戦いにおいて副都心リトバリエジを失陥してしまったトゥアム共和国は、同都市奪還に向けた前段階として、帝国軍東方部隊の補給経路を分断する作戦を発動。

その中継基地である軍事都市オクラホマへの侵攻を開始した。

「オクラホマ攻略作戦」と銘を打たれたその作戦は、極短時間の内にオクラホマ都市を占領すると言う、云わば力押しの突撃作戦とも受け取れる代物だったが、非常に数多くの陽動作戦を各所に塗（まぶ）す事によって、帝国軍の軍事行動を著しく阻害し続けると、最終的には、ほとんど完璧に近い形でシナリオを完結させる事に成功した。

それはまさに歴史的大勝利と言っても過言ではない戦果であり、各地で苦戦を強いられた帝国軍兵士達の多くは、トゥアム、リバルザイナ両共和国連合軍に対し、何ら成す術も無く敗走に敗走を重ねる結果となった。

トゥアム共和国軍は、オクラホマ攻略作戦を発動させるに先んじて、

帝国領東部カルッツァ地方への大規模な陽動作戦を敢行。

帝国軍陸上部隊を北方へと引き摺り出すと、共和国南西部サルフマルティア基地へと集結させた主力本隊を、帝国領南東部から一気に帝国本土奥深くへと侵攻させた。

当作戦における最大の懸念事項と言われた、秘密基地パレ・ロワイヤルミサイル基地に関しても、諜報部工作員が直前に入手した帝国軍機密情報から、ミサイル発射台の詳細設置位置を特定する事ができ、リバルザイナ共和国空軍の対地爆撃によって、その機能を完全に沈黙させる事に成功した。

パレ・ロワイヤルミサイル基地に対して、トゥアム共和国軍が投じた総兵力は、人型機動歩兵部隊８個小隊と、中軽量戦車部隊２個中隊、支援車両部隊２個中隊、そして、同基地占領を目的とした機械化歩兵部隊１個中隊と言う編成で、陸上兵器総計６０機（歩兵部隊、非戦闘車輌を除く）であり、それほど多くの人員を投入した訳ではなかったが、リバルザイナ共和国空軍の戦闘爆撃機１個飛行中隊が、驚異的な対地攻撃能力を発揮すると、パレ・ロワイヤルミサイル基地の防衛守備隊は、全く有効的な反撃を講じる事ができずに、敢え無く基地の陥落を迎える事となってしまった。

パレ・ロワイヤルミサイル基地における帝国軍防衛守備隊の総兵力は、人型機動歩兵部隊３個中隊と、蟲型高速機動部隊２個小隊、戦車部隊５個小隊、対空支援車輌３個中隊、支援車輌２個小隊、その他装甲車輌１個中隊、戦闘装甲ヘリ１個中隊に加え、中距離弾道ミサイル発射台９基、固定対空砲台１２基、固定野戦砲台１１基と言う編成で、陸上兵器総計１０２機、航空兵器総計１８機（歩兵部隊、固定式兵器、非戦闘車両を除く）と、数字上で比較してみても、共和国連合軍の倍近い兵力を有していた。

しかし、トゥアム共和国の諜報部工作員による破壊工作から、軍事管制システムに壊滅的打撃を被ってしまった帝国軍は、パレ・ロワイヤルミサイル基地の危機的状況を察知する事ができず、同地域に航空部隊を全く派兵する事ができなかった。

その為、パレ・ロワイヤルミサイル基地防衛守備隊は、共和国連合軍に航空優勢権を掌握されたままの戦闘を余儀なくされ、損失率八割を超える壊滅的打撃を被って敗走する事となった。

今回このオクラホマ攻略作戦において、トゥアム共和国の諜報部工作員が成し得た数々の工作任務は、作戦全体の優劣を根底から揺るがす程、重要な戦果を両共和国軍に齎(もたら)したと言えるのだが、その成果が如実に現れ出たのは、やはりオクラホマ都市周辺部での戦闘に関してであろう。

トゥアム共和国軍主力本隊がナルタリア湖周辺部を突っ切り、一気にオクラホマ南方防衛基地へと差し迫った時、オクラホマ南方防衛守備隊は、トゥアム共和国軍の別働隊による奇襲攻撃を受け、著しい混乱に陥っていたのだが、大量の陸上兵器と大量の航空兵器を備えたオクラホマ都市は、まだ共和国連合軍に対抗しうるだけの十分な戦力を有していた。

しかし、トゥアム共和国の諜報部工作員による破壊工作は、軍事管制システムに対する論理的破壊工作だけに止まらず、都市防衛本部や固定対空高射砲、索敵レーダー施設への物理的破壊工作をも完遂させ、同都市の防衛機能を完全に麻痺させる事に成功していた。

勿論それは、同都市内部で勃発した武装決起軍の活躍があってこそ

の戦果とも言えるが、彼等の働きによって、帝国軍は完全に同都市周辺部の状況を把握できなくなってしまい、レイナート山脈を越えて飛来した、トゥアム共和国空軍の爆撃編隊によって、完膚なきまでに駆逐されてしまったのだ。

言うまでも無く、真っ先に爆撃を受ける羽目になったのは、大量の航空兵器を停機したオクラホマ軍事空港であり、この時、トゥアム共和国軍の爆撃編隊の襲来を察知し、緊急スクランブル発進で離陸できた戦闘機は、たったの５機だったと言われている。

その後はもはや語るまでも無く、一方的に虐げられる側へと転落した帝国軍は、やむなくトゥアム共和国側の思惑に乗る形で、オクラホマ都市の一時放棄を決断すると、一路トポリ要塞へと向けて撤退行動を開始した。

やがて、オクラホマ攻略作戦発動から約十六時間が経過した翌６月１７日の昼過ぎには、オクラホマ都市周辺部で鳴り響いていた砲声は完全に沈黙し、同日夕刻にはトゥアム共和国軍第二陸将「ロン・ロベルト・ミューラー」が到着、オクラホマ武装決起軍総司令官である「ヒューファレス・プレサリオ」と対面した。

オクラホマ都市周辺部での戦闘に関して、トゥアム共和国軍が投入した総兵力は、高速戦車部隊２個連隊と、重戦車部隊２個連隊、機動歩兵部隊２個小隊、戦闘装甲ヘリ２個中隊、歩兵部隊１個大隊、戦闘機２個飛行中隊、戦闘爆撃機２個飛行中隊と言う編成で、陸上兵器総計３３０機、航空兵器総計５４機（歩兵部隊、非戦闘車輌を除く）であった。

一方、それに対する帝国軍の総兵力は、重戦車部隊３個連隊、支援

車輌２個大隊と２個中隊、対空車輌４個中隊、装甲車輌１個中隊、人型機動歩兵部隊３個中隊と１個小隊、蟲型高速機動兵器１個中隊、戦闘機４個飛行中隊、マルチロール機３個飛行中隊、高高度爆撃機１個飛行小隊、ステルス型索敵機１個飛行小隊、戦闘装甲ヘリ１個大隊、固定対空高射砲台８基と言う編成で、陸上兵器総計３９９機、航空兵器総計１４３機（歩兵部隊、固定式兵器、非戦闘車輌を除く）であった。

勿論、帝国軍の航空兵器に関しては、そのほとんどが全く戦闘に参加する事ができず、破壊、もしくは捕獲されてしまう結末を迎えた。

このオクラホマ都市を巡る戦いにおいて、何れの陣営が勝利を得たのかは、誰が見ても明らかな事であるが、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国とトゥアム共和国、両陣営が実際に得た物と失った物は、複雑に絡み合う情勢上に照らし合わせて見ると、一概に判断し得ない難物が数多く含まれていた。

トゥアム共和国が得た物、それは言うまでも無く、オクラホマ都市と言う帝国軍東方戦線における、重要な補給中継基地を占領できた点にある。

しかし、それと同時に、オクラホマ都市で武装決起したロイロマール派兵士達と言う、多くの不確定要素を孕（はら）んだ集団を抱え込む羽目となり、帝国との間に更なる強い軋轢（あつれき）を生み出す結果となった。

勿論、トゥアム共和国側は、今回の作戦において、武装決起軍との関連性を表向きには否定して見せたのだが、そこに何か薄ら暗い関係が存在していたのではと言う疑念を、ほとんど払拭（ふっしょく）する事ができ

ず、ロイロマール公爵に加担する叛徒（はんと）と言う、帝国が開戦の口実とした言い分を、真っ向から否定できない立場となってしまった。

更にオクラホマ都市を占領したトゥアム共和国にとっては最悪な事に、一番恐れていた帝国国民による暴動が多発。

同都市を占領したその日だけを数えても、合計１１箇所で大規模な暴動が発生した。

トゥアム共和国軍内部では、同都市市民に対して、決して手を出さないよう通達があったのだが、市民達の暴動は次第に過激さを増して行き、一時、全く手が付けられない状況まで陥る騒ぎとなってしまった。

その為、同都市占領軍司令官であるロン・ロベルト陸将は、放水攻撃に交えて威嚇射撃と催涙ガスの使用を認め、暴動の鎮圧に乗り出す事になるのだが、この混乱によって帝国国民側に、十数人の死者と数十人の負傷者を出す始末となり、更に帝国国民の反感を買う始末となってしまった。

トゥアム共和国はこれを受け、同都市内に大きな混乱が生じないよう、厳しく統制を敷く一方で、一般的な生活を必要最低限保障する事を宣言。

同都市外への行き来も、審査を受けて認められれば可能とする案を作成し、リトバリエジ都市も含めた一般市民達の取り扱いについて、帝国側と協議する場を設けた。

しかし、完全に侵略者として都市を制圧したトゥアム共和国に対する、帝国国民の反感は根強く、その後もしばらくの間、余談を許さ

ぬ混沌とした情勢に苛まれる事となった。

セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国が得た物、それは表向きに見れば、全く無いと言えるだろうが、唯一得た物として上げるのであれば、トゥアム共和国に対する反感を、帝国国民に植え付ける事ができた事と、大都市内部で戦闘を繰り広げたロイロマール派兵士達への、悪感情を煽り立てる事に成功した点であろう。

帝国軍東方戦線における重要な補給基地オクラホマ軍事都市を失陥し、数多くの要人達をロイロマール派武装決起軍に捕らえられてしまった現状は、帝国側にとっても由々しき事態であったと言わざるを得ないが、帝国内部に存在する幾つかの派閥に取ってみれば、それは思わず頬を緩めてしまう状況にあったかも知れない。

複雑に織り成す人々の思惑全てが、目で見て捉えられる事態に合わせて、悲痛な叫びを上げる訳ではなく、帝国の内情を勘案して考察すれば、中には歓喜の雄叫びに沸く輩も居たと評するのが、一番妥当であると言えるだろう。

そして、今回の軍事衝突が生み出した様々な余波は、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国、トゥアム共和国のみならず、その周辺各国にも多大な影響を齎す事となる。

トゥアム共和国と同盟条約を締結したリバルザイナ共和国は、戦闘終了後、直ちに南方サンカサロ地方へと全軍を終結させ、メルタリア海周域の防御体制を強化し始める。

そして、メルタリア海を挟んで対岸に位置するトロス王国と連携を

取り、帝国国内で不穏な動きを見せ始めたブラシアック軍、ロートアルアン軍に対し、真っ向から対抗する構えを構築した。

一方逆に、トゥアム共和国東部に位置するアブキーラ連邦は、トゥアム共和国に対する軍事物資の支援を約束してはいたが、自国の軍隊を直接戦闘に参加させる事を認めず、敢えて静観を突き通す態度を崩さなかった。

そして今回、一番大きな影響を受けた国が、北方アイスクリストフ周辺部を統治するビナギティア国である。

表向きビナギティア国は、大陸西方軍事大国ロスアニア王国と同様、帝国と非常に良好な関係を保つ帝国派として周囲に認知されていたが、今回オクラホマ都市で勃発した武装決起事件を巡り、混沌とした戦乱への強制参加を余儀なくされる次第となってしまった。

オクラホマ都市で武装決起事件が発生した当初、武装決起軍を率いる影の首謀者が、ビナギティア国の「ヴァラジン・オーム」では無いかと言う憶測が飛び交うと、ビナギティア国内には驚愕を交えた強い緊張が駆け巡る事となった。

しかし、程無くして、武装決起軍の一人がヴァラジン本人を捕らえた事を公表し、ロイロマール公爵との身柄交換を要求する声明を発表すると、その噂自体は一過性に過ぎないものとして終焉を迎える事となる。

その後、オクラホマ・ロイヤルホテルの最上階に監禁されていたヴァラジンは、帝国憲兵隊の迅速な対応により、即座に武装決起軍の手から救出される事となり、撤退する帝国軍と共に、一時トポリ要塞へとその身柄を移送される事になった。

しかし、この武装決起軍を巡る事態の変化は、それだけに止まらず、再びビナギティア国民を驚愕させる事実が、帝国皇后クロフティアによって、公然と示し出される事となる。

それは、この武装決起軍を誘発した真の首謀者が、ビナギティア国政府自体であった事実を公表し、激しく糾弾する内容の声明であった。

この声明に対し、ビナギティア国政府は真っ向から反論、事実無根の言い掛かりだとして、発言の撤回を求めたが、その後直ぐに、ビナギティア国政府高官と密取引をしていた犯人数名が捕らえられ、ビナギティア国政府ぐるみの陰謀であった事が判明した。

それは、ビナギティア国で絶大な支持を集めるヴァラジンを、帝国に対する反逆者として祭り上げる事で、抹殺してしまおうと目論む姑息な陰謀であった。

帝国はオクラホマ都市市民達を巻き込んで騒動を起したビナギティア国の行為を、完全に帝国に仇名す敵対行為と判断、即座に帝国最北端の地、フィリプス地方に軍を集結させた。

一方、ビナギティア国は、お互いの主張の食い違いを、何とか埋め合わせる為の対話を要求し、事態の改善に向けて色々と奔走(ほんそう)するのだが、軍事的行動をも辞さない帝国軍の動きに対し、完全に無防備なまま事態の解決を待っている訳にはいかなかった。

ビナギティア国政府は、取り合えずフィリプス地方に陸上部隊を派兵する事を決定し、できる限り帝国軍を刺激しないよう防御陣の構築に勤めていたのだが、政府高官達の思いとは裏腹に、その五日後

には、帝国軍との最初の砲火が交えられる結果となってしまった。

帝国でも有数の近代都市オクラホマを巡るこの戦いは、ムーンスローブ大陸全体から見れば、極々局所的な戦いに過ぎないものであったが、周辺各国を含め、大陸全土に及ぼした影響は、計り知れないものがあった事は、確かな事実であると言えた。

０７－０２：〇理想と現実の齟齬に塗れて［１］

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ２「理想と現実の齟齬（そご）に塗れて」

薄緑色に塗装された清潔感溢れる壁面と、綺麗に塗り固められた灰色のコンクリート床が、大きな十字架を描き出す閉鎖的通路の交差点に、その一画を球体で削り取ったかのような独特の空間が横たわっていた。

通路からその空間へと続く三段ばかり短い階段を降りると、空間の形に合わせて誂（あつら）えられた、真っ赤な円形の絨毯（じゅたん）が来訪者を迎え入れてくれ、高級感溢れるテーブルの横に三つ並んだ、小洒落（こじゃれ）た面持（おもも）ちのソファも、何処か場違い的な雰囲気を漂わせている。

頭上から降り注ぐ人工的な光も、ほのかに穏やかなオレンジ色を滲ませており、周囲に漂うピリピリとした空気を、しばし和ませるのにも一役買っているようだった。

横に並んで三人は座れそうなフカフカのソファ上に腰を据え、カタカタと音を立てながら、自分の膝の上に乗せたノート型ＰＣを操作する女性が一人、じっと食い入るようにモニターを覗き込んでいた。

そして、長く伸びた緑色の前髪を掻き揚げる仕草と共に、ふと手を休めた彼女は、鼻で小さく軽い溜め息を奏で出し、左手首に巻かれた可愛らしい腕時計にチラリと視線を宛がった。

ランベルク基地の地下三階に当たるこの通路は、様々な施設が集中

する中央区画の程近くにあっても、それほど人通りの激しい場所ではない。

兵士達の憩(いこ)いの場であるレストポートの程近くにあって、兵士宿舎とを繋ぐショートカットルートとして知られる便利な通路なのだが、下士官以下一般の兵士達で、このルートを好んで利用する者達は、軍の中でも食み出し者と称される輩達が多かった。

勿論、彼女自身は、それなりの理由があって、この通路沿いに設けられた休憩所に座っていた訳だが、彼女はその理由を知らないと言うよりも、その事実に少しも疑念を抱かぬ楽天家だった。

この時も彼女は、その通路を歩いてきた一人の中年男性に対して、何ら思う所無く優しげな笑みを投げかけると、深々と頭を下げて会釈して見せたのだが、軽く頷(うなず)いて返事を返したその男性は、何処か少し眉を顰(ひそ)めて、訝(いぶか)しげな視線を彼女に据えるのだった。

やがて男は、特に何を注意するでもなく、そのまま通路を歩き去って行ったのだが、彼の胸に付けられた階級章が、一体如何なる位のものであったか、彼女は少しも気にかけない様子だった。

この通路を挟んで左右に設けられた施設の多くは、将官佐官クラスの上級仕官達が常時利用する大会議室であり、その程近くには、ランベルク基地の全てを統括する司令室がある。

言うまでも無く、それらの重要施設に立ち入る為には、複数の生体認証セキュリティチェックを受けなければならないのだが、それでも、滅多矢鱈(めったやたら)に一般兵士達が近寄って良い場所では無いのだ。

彼女はふと、再び誰も居なくなった地下通路に漂う、しんみりとした空気の装いに身を任せると、ゆっくりと周囲の様相へと視線を投げかけた。

シンと静まり返った通路奥からは、ほのかにざわざわとした人の声が流れ込んで来ていたが、恐らくそれは、レストポートで兵士達が楽しく談笑している声なのだろうと思い付き、彼女は再びノート型PCのモニターへと意識を舞い戻した。

普段から周囲に天然ボケである事を指摘されがちな彼女だが、トゥアム共和国通信高大、情報理工学科卒のインテリお嬢様だけあって、その情報処理能力は流石の素早さを誇っている。

与えられた仕事は難なくテキパキとこなし、時に二、三人分の仕事量をもこなす彼女の能力は、全く疑いようも無く優秀な部類に入るであろう事は、ネニファイン部隊のメンバー達全員が認める事実であった。

しかしやがて、真剣な眼差しで自らの仕事と向き合っていた彼女は、不意に影を落とした暗い表情と共に、モニター画面を突き抜けた向こう側にある「何か」を見つめた。

オクラホマ攻略作戦以降、戦後処理と言う山の様に膨大な仕事量を一手に押し付けられ、溜め息を付いて呆れ返りたい彼女の心情も解らないでは無いが、この時見せた彼女の表情は、連日の激務に疲れ果てたと言う感じではなかった。

今現在、彼女が処理している作業の内容は、軍上層部並びに共和国政府に提出する、ネニファイン部隊メンバー達の死亡報告書作りである。

（チャンペル）
「さっ。仕事、仕事・・・。」

・・・と、彼女はだしぬけに発したありきたりな言葉と共に、何処かしらへと漂っていた意識を引き戻すと、有無を言わさず忙(せわ)しい仕事の中へとのめり込ませた。

そして、まず一人目の報告書の作成作業へと取り掛かると、まるで機械の様な精密さと素早さを持って、次々と必要記載項目を埋め尽くしていった。

今回のオクラホマ攻略作戦において、ネニファイン部隊に与えられた任務は、帝国領南東部に位置する秘密基地パレ・ロワイヤルミサイル基地を攻略する事にあった。

作戦立案当初は非常に困難な任務であると目され、誰しもが不毛な消耗戦に陥るのではないかと懸念していたのだが、諜報部工作員達の活躍によって、中距離弾道ミサイル発射台の設置位置を含めた、同基地の所在地が判明すると、戦局の優位性は一気にトゥアム共和国軍側へと傾いた。

しかし、当然と言えば当然の事ながら、勝利者たる立場の側も、完全に損失ゼロで戦闘を終える事など出来るはずも無く、今回の作戦において、ネニファイン部隊から、三名の戦死者を出す結果となってしまった。

そして、全く奇妙な形ではあるが、諜報部の破壊工作員として、作戦に参加する事となった一人の女性パイロットもまた、何処(いずこ)かへと

姿を晦ましたまま、行方不明となってしまっている。

トゥアム共和国軍がオクラホマ都市を占領したその日、同都市に潜入した諜報部工作員を回収すべく、投入された救出部隊の隊員達は、同都市市民達が引き起こした激しい暴動騒ぎに振り回されながらも、何とか負傷した工作員二名を救出する事に成功し、二名の遺体を回収した。

しかし、ネニファイン部隊から参加した一人の女性、アリミア・パウ・シュトロインの姿を見つけ出す事は出来ず、スパイロウ巡航ミサイルの発射地点と目される、オクラホマ空港管制施設屋上部でも、彼女が使用したと見られるミサイル発射台とその他小道具が多数、そして、塔屋小屋付近に付着した大量の血痕以外、何も発見する事が出来なかった。

・・・これほどの大量出血となれば、恐らく当の本人はもう生きていないでしょう。

恐らく彼女は、スパイロウ巡航ミサイル発射後、この屋上で何者かと遭遇し、そして殺害されたものと推測します。

他二名の工作員の遺体を放置しておきながら、何故彼女の遺体だけを持ち去ったのか、その理由は定かではありませんが、我々としては、これ以上彼女の捜索を続けるつもりはありません。

医師の判断を待つまでも無く、この大量の血痕を含めた状況証拠だけで、彼女の死亡証明書は発行出来ると思います。

鑑定の結果と遺留品については、直ぐそちらの方に配送しますので、

後の処理はよろしくお願いします。

オクラホマ都市を占領した三日後。

オクラホマ空港管制施設屋上部で発見された大量の血痕が、アリミア本人のものであると鑑定結果が出されたその日、諜報部に所属する生真面目そうな中年男性に言われた言葉だった。

チャンペルは、忙(せわ)しく作業に没頭する意識の中で、再び何処かもやもやとした思惟(しい)に取り憑(つ)かれると、自分の手の動きが完全に止まっている事に気付き、徐に別のウィンドウをノート型ＰＣモニター上に展開させた。

そして、画面上に現れたネニファイン部隊メンバーリストから、今回帰らぬ人となってしまった四人の名前を探り、上から順に視線を這わせると、仕事に集中できずに苛立(いらだ)つ思いを振り解くかのようにして、大きく溜め息を付いて見せた。

アリミア・パウ・シュトロイン。２２歳。

諜報部工作員として、オクラホマ攻略作戦に参加。

オクラホマ空港管制施設屋上部に残された大量の血痕と、そのままに放置された遺留品の状況から推測して、何者かに殺害された後に連れ去られたものと断定。

ベルトラン・ギュストリア。２９歳。

ネニファイン部隊ＤＱパイロットとして、パレ・ロワイヤル攻略作戦に参加。

同部隊メンバー達による複数の証言により、帝国軍防衛守備隊の砲撃によって爆死したと断定。

マース・チェリーズ。３１歳。

ネニファイン部隊ＤＱパイロットとして、パレ・ロワイヤル攻略作戦に参加。

同部隊メンバー達による複数の証言により、帝国軍防衛守備隊の砲撃によって爆死したと断定。

ウララ・アクイ。２２歳。

ネニファイン部隊ＤＱパイロットとして、パレ・ロワイヤル攻略作戦に参加。

同部隊メンバー達による複数の証言により、帝国軍防衛守備隊の砲撃によって爆死したと断定。

戦争と言う人の命を奪い合う事を前提とした戦いの中で、両軍共に死者を出さずに結末を迎える事など、ありはしないのだと頭では解っていても、何処かやはり、人の死に対して陰鬱（いんうつ）な感情を沸き立たせずにはいられない。

例えそれが、ほんの二、三回程度しか会話を交わした事の無い間柄であったとしても、同じ部隊に所属する仲間が死んだとなれば、少なからず心に刻み込んだ彼等の存在が、ぐずぐずと傷を掻き乱すように疼き出してしまうのだ。

勿論、自分の両親や恋人、はたまた親友が死んだ時と比べ、こう言っては何だが、程度の軽い傷には違いないのだが、それでも改めて人の死と言うものに対して、感慨深い思考を巡らせてしまう。

人は死ぬ。簡単に死ぬ。つい先ほどまで元気だった人間が、いとも簡単に死ぬ。

老衰死を迎え入れられる段階まで生きた人間ならまだしも、重い病にかかって余命僅かと宣告された人間ならまだしも、その日その時、死するべき時を大幅に繰り上げて、突然何の予告も無く死んでいく人間達がいるのだ。

戦争で人が死ぬ事は至極当然の出来事であるが、果たして自分は、今回の戦いにおいて、彼等が死んでしまうなどと、思っていたのだろうか。

前回の戦い、ディップ・メイサ・クロー作戦の時もそうだったが、自分は身近な人間達が死んでしまう事を、少しも予期していなかったのではないか。

考えが甘いと言えば全く持って甘い。

戦後間もなくして生まれた身でありながら、何不自由なく過ごせる裕福な家庭環境で育ち、戦争と言えば、遠い国での出来事でしかな

いと思っていた。

戦争をするのも、戦争で死ぬのも、いつも見知らぬ人間達であり、自分達が暮らす平和な世界とは縁の無い、非現実的な物語であるとさえ思っていた。

世間知らずのお嬢様・・・と、周囲から言われるのは、そう言った自分の非現実的感覚にある事は自覚しているのだが、この期に及んで自分はまだ、戦争と言う過酷な渦中に身を投じている自身の姿を、まるで他人事の様に考えてしまっているのではないか。

確かに後方司令部勤務である自分は、最前線で戦う事を余儀なくされた兵士達に比べ、圧倒的に死ぬ確立が低いと言えるが、それでも何が起こるか解らぬ戦場で、突然降りかかった厄災により、無理矢理死後の世界へと誘われる可能性だってあるのだ。

幼い頃から温和でいて平和的な世界の中、ぬくぬくと育ってきた自分は、いま直面している過酷な現状から、反射的に目を逸らしている様な気がしてならない。

人は死ぬ。簡単に死ぬ。他人だけでなく、自分も決して例外ではない。

いつかは必ず死ぬと解っていながらも、それが明日だとも、今日だとも思っていない自分は、やはり世間知らずと言われても仕方の無い未熟者なのだろう。

子供の頃、両親や先生達の言う事はいつも正しく、解らない事は何でも教えてくれるのだと思っていた。

悪い事をすれば直ぐに保安官に捕まり、国を守る軍隊は決して負けないのだと思っていた。

誰からも尊敬される政治家達は、常に国民達の事を思って素晴らしき政策を打ち出し、彼等に出来ない事は何一つ無いのだと思っていた。

しかし、神が作り出した造形物のようにも感じていたその世界は、子供達を守る為に、大人達が必死になって作り出した、脆くも儚い虚飾の温室に過ぎなかったのだ。

一歩一歩年齢を重ね歩むたびに、ガラス張りの向こう側から透けて見え始めたものは、現実世界と言う、余りにも不安定な土台上に築き上げられた、至極あやふやな大人の世界だった。

ひょんな事から右にも左にも大きく傾く危険性を孕み、それで成り立っている事自体が、まさに奇跡的とも言える混沌とした世界だった。

大人達の作り出した温室を這い出し、ようやく大人としての第一歩を踏み出した自分は、まだ何も出来ないひよっ子同然の存在でしかない。

未だ右も左も解らぬ最中で、目まぐるしくうねり動く現実世界に振り回され、自分が一体何をしているのかさえ覚束なくなる時がある。

自分は一体何を求め、何の為に、何をすれば良いのだろうか。

この混沌とした大人の世界の中で、一体どうやって生きて行けば良いのだろうか・・・。

（サルムザーク）
「何だ？こんな所にいたのか？」

・・・と、全く埒も無い思考の渦へと意識を埋没させていたチャンペルは、突然背後から投げかけられた言葉によって、不意に現実世界へと引き戻された。

高価そうな装飾品が並ぶ壁面を背に、一人ぽつねんとソファに座っていた彼女は、それまで漂わせていた重苦しい雰囲気を一掃すると、直ぐに普段通りの明るい自分を纏い直して後ろを振り返った。

そして、振り返った先に佇んでいた若い士官の顔を見上げると、堅く強張った表情を思わず緩ませて、何処か浮き立つ気持ちを滲ませるように口を開いた。

（チャンペル）
「あ、三佐。お疲れ様です。随分と遅かったですね。」

（サルムザーク）
「ああ。全体会議の終了時間ほど当てにならないものは無いな。それよりお前、ずっとこんな所で待っていたのか？」

（チャンペル）
「はい。仕事は別に執務室でなくても出来るものもありますし、三佐に直ぐ決裁を戴かないといけない書類もありましたので、ここで仕事しながら三佐の事をお待ちしてました。三佐はこの後直ぐ、また別の会議に入られるんですよね？」

そう言って、サルムに無邪気な笑顔を振り撒いて見せたチャンペルは、直ぐに膝の上に乗せたノート型ＰＣへと向き直り、少しばかりの操作を手際よく施すと、彼の入力を待つだけの状態としたノート型ＰＣを、彼の前へと差し出した。

サルムは何処か少し、不思議そうな眼差しと共に彼女を見つめ、中々に度胸のある奴だな・・・などと、軽い笑みを浮かべて見せたが、それとも単にそれと気付いていない天然者の成せる業なのか・・・とも思い被せ、背後からゾロゾロと這い出して来た高官達の姿へと視線を振り向けた。

ランベルク基地で一番大きな会議室がある通路の奥から姿を現した高官達は、着込んだ軍服の上に色取り取りの勲章を並べた軍の重鎮達であり、陸軍最高司令官ヘルモア陸将を始めとする将官の一団が横を過ぎると、続いて佐官階級のお歴々（れきれき）が顔を見せ始める。

サルムは、その中でも一際砕けた表情で笑みを投げかけるピエトロ一佐に対し、軽い一瞥を投げ返してやると、彼の直ぐ隣を歩いていたグラフティ一佐の陰気な視線の存在に気付き、何処かばつの悪そうな表情を浮かべ、少し肩を竦めて見せた。

（チャンペル）
「三佐？」

（サルムザーク）
「ああ、いい。この後の会議はなくなったんだ。書類の承認作業は執務室に戻ってからやるよ。」

（チャンペル）
「あっ。そうなんですか。」

目の前を歩き去るお偉いさん方に対して敬礼を施す事も忘れ、ただ目の前に居る四歳年下の上官に、ノート型ＰＣを差し向けていたチャンペルは、それまでの自身の行為が全くの無駄に終わってしまった事を少しも気にする風でもなく、彼に軽い返事を返すと、静かにノート型ＰＣの蓋を閉じて、じっと彼の表情を窺った。

（サルムザーク）
「ところでチャンペル。カースはまだ帰っていないのか？」

（チャンペル）
「ええ。カース作戦軍曹は、今日の夕方までには戻る予定になってましたけど、最悪、明日の朝になるかも知れないって、先ほど連絡がありました。何か有れば直ぐに呼び戻して良いとの事でしたが、何せ子供の容態が悪化したって話でしたから・・・。」

（サルムザーク）
「そうか。」

やがて、地下通路脇に設置された風変わりな休憩室で、まるでお姉さんとその弟と言う奇妙な雰囲気を醸（かも）し出していた二人は、過ぎ去っていく大勢の人影を、サルムの作り出した沈黙と共に見送った。

そして、何やら一つ小さな溜め息を吐き出したサルムは、チャンペルが佇むソファの左隅へと腰を下ろし、何やら真剣に考え込むような表情で、背凭（せもた）れに圧し掛かった。

（チャンペル）

「どうしたんです？三佐。何かあったんですか？」

（サルムザーク）
「いや、特にこれと言った問題では無いんだ。それより急な話だがチャンペル。実は明日以降三日間に渡って、大規模な軍事演習が開催される事になった。ネニファイン、ブラックナイツ、カラムス三部隊による合同演習だ。」

（チャンペル）
「へぇー。それはまた急な話ですね。」

チャンペルはこの時、サルムから投げかけられた新しい話題に対し、何か重大な事実を完全に見落としたまま、気の無い返事を返して見せると、再びゆっくりとソファの上に腰を据えた。

しかし、つい先ほど自分が言い放った言葉を、再度脳裏に浮かび上がらせると、唐突に滲ませた驚きの表情を持って、サルムの方へと向き直った。

（チャンペル）
「えーっ！？明日からですか！？もしかして・・・。」

（サルムザーク）
「そう。その軍事演習に関する事前準備を、お前にお願いしたいんだ。俺はこの後少し用事があって、夜から出かけなきゃならないし、明朝１０：００までに軍事演習に関わる部隊編成と実行プランを作成してくれ。軍事演習に関する詳細事項は、追って上層部から送信されてくると思う。」

ようやく気付いたな・・・、と言うような表情でチャンペルを見返

したサルムは、全く普段通りの口調を持って、彼女に新たなる仕事を依頼したつもりだった。

しかし、彼が全ての説明を終える以前に、思いっきり泣き入りそうな表情を浮かべて、俯いてしまった彼女の姿に気が付くと、何処か面を食らってしまった様な慌て振りで、必死にその場を取り繕う言葉を並べ立てた。

（サルムザーク）

「あ、いや、カースが居ないからと言って、お前一人に全てを押し付けるつもりはない。DQ機体整備に関する準備作業はシューマリアンにやらせるし、お前が今抱えている仕事はリスキーマに頼んで良い。・・・ああ、それなら始めからリスキーマに・・・。いや、やはり作業種別的に考えても、お前の方が良いだろう。本来であれば、カースが居なくなった時の事を想定して、部隊内の組織を固めて置くべきなんだろうが、中々そこまで手が回らなくてな。俺も何かと言うと、直ぐにお前とカースに頼ってばかりだが、この埋め合わせは必ず何処かでするから、頼まれてくれないか？」

二十歳にも満たない若輩者でありながらも、軍の高官達を相手に回し、全く気後れする事無くと堂々と渡り合う、やり手の最年少佐官と言う肩書きを持つ彼だが、この時彼は、不意に悲壮感を漂わせて項垂れてしまった女性を前に、極一般的な男性と同じような慌てふためき様を奏で上げてしまった。

彼とて人の上に立つべき役職に付く身ながらも、数多くの経験を積み重ねた熟練の指揮官と言う訳では無く、まだ大人の世界へと飛び出して間もない、彼女と同じ「幼芽」であるに違いないのだ。

彼女は少し、彼の垣間見せた態度に新鮮味を感じる一方で、何処か

親近感にも似た暖かな感情を沸き起こすと、涙を滲ませた目元を軽く拭って、フッと小さく口元を緩ませた。

（チャンペル）
「いえ、・・・すみません。私やります。私頑張ります。大丈夫です。」

年齢の差で比較すれば自分の方が四歳も年上のお姉さんとなる。

そんな自分が子供みたいに駄々を捏ねて、大人達の世界で一生懸命頑張っている三佐を困らせる訳にはいかない。

そう強く思い直したチャンペルは、一瞬だけ下唇を噛んで見せると、顔中に満面の笑みを浮かべてサルムの方へと向き直り、不意に滲ませてしまった感情的な態度を反省した。

（サルムザーク）
「そうか。すまないな。俺も日付が変わる頃には戻ってくるつもりだし、何ならその後手伝ってやるよ。」

（チャンペル）
「あ、いえ、それはいいです。三佐が居ない方が作業が捗ると思いますし。」

・・・。

それは、様々な作業を一手に押し付けられ、日々激務に追われるチャンペルの事を、慮って発した彼の優しさであったが、直ぐに真っ向から拒否して見せた彼女の言葉によって、儚くも頭から叩き落されてしまった。

確かに思えば、何かにつけてカースとチャンペルに頼ってきた自分だが、それほど実務能力の無い人間だと思われているのだろうか・・・などと、サルムは自嘲気味な感情を沸き起こしてしまった。

そして、何もそこまではっきりと言わなくても・・・とも思ってしまったサルムは、多少呆れ気味の視線を用いてチャンペルの表情を窺い見たのだが、彼女がようやく自身の失言に気付いたのは、彼の浴びせかける白々しい視線に小首を傾げた時だった。

（チャンペル）

「あっ！いえ！違うんです！・・・そんなつもりで言ったんじゃなくて、一人でやった方が・・・じゃなくて、ええと・・・その・・・。えっと・・・。うー。・・・・・・ふぇーん。どうしよう・・・。」

この時チャンペルは、自分が抱いた想いの丈を、上手く表現する（誤魔化す）事が出来ずに、下を俯いてしまうと、再び泣き出しそうな表情を浮かべ、声を振るわせ始めた。

サルムは、そんなチャンペルの態度に、甚だ困り果てた様子で、無造作に頭を掻き乱しながら溜め息を付いてしまったのだが、もはやどうする事も出来ない自分の不甲斐なさに嫌気がさすと、やがて当て所なく通路側へと視線を逃がし、誤魔化して見せる事しか出来なかった。

０７－０３：〇理想と現実の齟齬に塗れて［２］

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ３「理想と現実の齟齬（そご）に塗れて」

（ランスロット）
「おおうおおう。こんな所で女性を泣かせるなんて、三佐殿も中々隅に置けませんなぁ。」

するとそんな時、サルムが視線を逃がした先、レストポートへと続く通路の奥側から三人組みの男達が姿を現し、不意にサルムと視線がかち合った一人の男が、不思議と愛嬌（あいきょう）のある笑みを浮かべながら、冷やかしの声を上げた。

その男達は、見るからに仕事終わりを示唆するラフな格好をしており、恐らくはレストポートでしばし休憩を取った後、自分達の部屋へと戻る途中だったのであろう。

真っ先に口を開いた金色のグリグリ頭は、上半身だけ脱ぎ去ったパイロットスーツを腰からぶら下げ、汗だくになったＴシャツ一枚にサンダル履きと言う出（い）で立ちだった。

その次に続く太ったモヒカン男は、ダブダブに伸びきったハーフパンツにＴシャツ、加えて全く意味不明な事に、茶色のロングブーツを履いており、首の肉に食い込まんばかりに巻かれた銀のネックレスが、無意味な光を放っていた。

そして、一番最後尾を歩く金髪の男に至っては、油や埃（ほこり）に塗れた汚らしい作業服を着たままであり、首から提（さ）げられた黒ずんだタオル

も、元は真っ白であった事を少しも窺わせない代物だった。

この地下通路がレストポートと兵士宿舎を繋ぐ最短ルートである事は、この基地に居る者のほとんどが知る事実であるが、軍の高官達が常時蔓延(はびこ)るこの通路を、何の臆面(おくめん)もなく、その格好のまま渡り歩くつもりなのかと思うと思うと、その不遜(ふそん)さを、多少褒めてやりたい気持ちにもなる。

しかし実際、そんな野放図(のほうず)な食み出し者を従える、部隊長たる立場の者からしてみれば、それは全く持って迷惑千万、頭の痛い話であった。

（ランスロット）
「破壊と殺戮に塗れた混沌とした世界の中で、必死に手を取り合って新たなる未来を生み出そうとする男女が二人。うーん。まさに男女が織り成す美しきパ・ド・ドゥと言うに、相応(ふさわ)しい光景ですな。微笑ましい限りです。」

（チャンペル）
「ち！・・・違います！そんなんじゃありません！誤解しないでください！」

（ランスロット）
「あーらー。また、そんなに慌てて否定しなくたって、良いじゃないのお嬢さん。綺麗な女性の瞳に浮かぶ涙は、その人の真実を物語っているんだよ。僕には君の本心が見える。ああ、叶わぬ愛に殉(じゅん)じる君の心は、いつまで経っても満たされる事の無い美しき花瓶。想いを込めた薔薇(ばら)の華をそっと添えて、ずっとそこに愛と言う水が注がれるのを待っているんだ。」

（チャンペル）
「違いますったら！もうっ！」

（ランスロット）
「愛と言う水は、お互いに持った想いを重ね合わせなければ生まれないもの。たった一人では生み出す事の出来ない、可憐なる相思相愛の雫なのさ。君と出会った僕の心は今、君の心に囚われてしまった。君の心を愛の雫で満たす為、君の想いを僕の想いに重ねてくれないか？」

（チャンペル）
「お断りします！・・・いやぁ！そんな格好のまま近寄らないで！」

（ルワシー）
「まぁたこいつの病気が始まったぁぜ。」

（シルジーク）
「・・・確かにこれは、聞きしに勝る酷さだな・・・。」

サルムはこの時、風の噂では聞いていた、彼の傍若無人振りを目の当たりにし、彼の背後で呆れ顔を浮かべる二人の男と共に、更にげんなりとした表情を浮かび上がらせ、大きな溜め息を吐き出してしまった。

全く人目を憚らず、平気でむず痒い言葉を並べ立てる、ランスロットの神経の図太さには恐れ入るが、それを増長させるかのように反応してみせるチャンペルも悪いと言えば悪い。

大人しくやり過ごす方策を取りさえすれば、こんな輩に捲くし立てられる事もなかろうに・・・。

と、サルムは、もはや呆れ返るしかないと訴えかける思考の片隅に、客観的考察を巡らせてしまった。

勿論、その原因を作り出した一因が、自分にもあった事は事実であり、やがて彼は、いいように弄(もてあそ)ばれるチャンペルを助ける為、柔らかに苦言を呈して見せるつもりで口を開きかけた。

しかし、不意に彼の小脇を小走りに駆けて行く若い女性兵士達の存在に気が付くと、すれ違い様に浴びせかけられた冷やかな目線と、小さな含み笑いを交えた陰口に、しばし言葉を失ってしまった。

そりゃそうだろうな・・・。

自分の率いるネニファイン部隊の評判が、如何にして落ちていくのか、彼はその理由を多少なりとも認識していたつもりであったが、実際にその光景を目の当たりにすると、吐き出した溜め息と共に、沸き立つ強い虚脱感に苛(さいな)まれてしまうものだ。

軍規以前に風紀と言って、部隊内の秩序を正そうとするカースの締め付けを、出来るだけ緩和してやりたい気持ちから、課せられた軍務以外は、部隊メンバー達にある程度の自由を許してきた彼だが、流石にこの時ばかりは、それも如何なものかと、激しく自問する羽目となってしまった。

やがてサルムは、怪訝(けげん)な表情を浮かべたまま小さく首を左右に振り、心に取り憑(つ)いた感覚的疲労感を振り払うと、再び彼の暴挙を差し止めるべく行動に移ろうとした。

しかしその直後、そんなサルムの思いを尻目に、ようやく事態の解決に乗り出した二人の男が、ランスロットの注意を引き付けるべく言葉を交互に放つと、彼の言葉は再び蹴躓く事となる。

組織の上では彼の方が彼等を取り仕切る身分であるが、この場に漂い始めた異様な空気は、もはや彼の掌中には無いと言う事なのだろう。

（ルワシー）
「おめぇはほんと、女なら誰でも見境無しに齧り付くんだぁな。さっきもガラのわりぃ白鳥ねぇちゃんに引っ叩かれたばっかだろうが。ちったぁ懲りたらどうなんだ？」

（シルジーク）
「ほんと、周りの迷惑を考えない辺り、うちの誰かさんとそっくりだぜ。羞恥心って言葉を知らずに育った人間が、幾ら必死に女性を口説いたって、駄目なものは駄目だろ。少しは察してやれ。」

（ランスロット）
「おおうー。シル君。君も中々に痛い言葉を吐き付ける毒舌家じゃないか。良い男が台無しだよー。そんなんじゃ駄目駄目。男子たるもの、もっと大らかで優しく包み込むような心を持たなきゃ。そんな陰険に心を尖らせていると、幾ら心の優しい女性だって、直ぐに逃げてっちゃうぞ。」

（シルジーク）
「目の前で女性に激しく拒絶されていた人間には、言われたくない言葉だな。」

（ルワシー）
「がっはっは。まさにこいつの言う通りだぁな。ランスロット。おめぇもたまには男らしく、堂々と踏ん反り返ってたらぁどうなんだ？いつもより少しはマシに見えっかもしんねぇぜ？」

（ランスロット）
「ルワシー君。男の生き様は前のめりよ前のめり。偉そうに踏ん反り返って見せたって、気紛れな女性の心が、いつまでもそこに居てくれるとは限らないのさ。寄せる想いに対して返す想いがなければ、女性の心はどんどん離れて行ってしまうもの。女性の想いを繋ぎ止める為にも、男は決して前進する事を怠（おこた）ってはいけないのさ。ねぇ。三佐殿。」

やがて、一人の女性から突き返された会話のバトンが、助けに入った男達の思惑通り、順々に三人の男達を巡り経ると、最後にはサルムの前へと差し出された。

（サルムザーク）
「まあ、お前のその考え方が正しいかどうかは知らんが、取り敢えずそう言う事にしておいてやるよ。」

サルムは、俺に振るな。と言うような視線を、ランスロットに浴びせ返したが、その場を丸く治めるための締め括りを演出して見せると、その作戦が取り敢えずの成功を収めた事に、ホッと胸を撫で下ろした。

そして、チャンペルの様子を窺う為、不意に彼女の方へと視線を流すと、そこには何故か、睨みを利かせた彼女の白々しい視線が待ち受けていた。

う・・・。

恐らく彼女は、サルムに助けて欲しかったのだろう。

不意に直走(ひたはし)った激しい悪寒を背筋に感じ、一瞬にして心を仰け反らせてしまったサルムは、鬱陶(うっとう)しくもどや顔をちらつかせる、ランスロットの表情を確認するでもなく、何処か居心地が悪そうにして、外の世界へと視線を逃がした。

勿論この時、彼にはチャンペルを助けようと言う気持ちが無かった訳ではなく、ただ単に行動を起こすタイミングを逸してしまっただけなのだが、不覚にもそれと説明付ける事の出来ない現状へと陥ってしまった以上、下手に言い訳するよりはマシと、不貞腐(ふてくさ)れたように両手を放って見せた。

一方、チャンペルはと言うと、そんなサルムの態度にムッとした表情を隠そうともせず、可愛らしく口を尖らせて見せ、あからさまにサルムに背を向ける様にしてソファに座り直した。

ランスロットは、そんな二人の若人(わこうど)が織り成す、他愛の無い喧嘩事をマジマジと見据え、満面の笑みを浮かべながら、意味不明に頷(うなず)いてみせる。

この男、望みもせぬ来訪者として、偶然その場を通りかかったにも関わらず、その場にある空気の全てを荒らすだけ荒らして、最後には一人だけ満足気な表情で自己陶酔に浸るとは、流石に「ウザ男」として、その名を轟かせているだけの事はある。

サルムは、そんなランスロットの姿に横目でチラリと視線を宛がうと、一回、蹴り付けてやろうか、などと言う思いを沸き起こしてしまった。

（シルジーク）
「そうそう。そう言えばさ。サルム。」

するとそんな時、その場に蔓延(はびこ)った淀んだ空気を紛(まぎ)らす為か、高級感溢れるテーブルを挟んで、サルムの目の前へと歩み寄ったシルが、思わぬ問い掛けをサルムに投げかけた。

それはお互いにお互いを敬遠し合ってきた間柄である、二人にしか解らない違和感には違いなかったが、この時、サルムに投げかけられたシルの言葉は、不思議とそんな余所余所(よそよそ)しさを感じさせないものだった。

（シルジーク）
「今日から整備班に回されて来たパイロット達さ。あれどういうつもりなんだ？」

（サルムザーク）
「何がだ？」

（シルジーク）
「いや、見たところ元々ＤＯ整備士の技術を持っている奴等みたいだし、特にこれと言って問題は無いんだけどさ。プーちゃん・・・、いやいや、シューマリアン技術三尉の指揮下に入るなら入るで、それなりに編成の見直しがあっても良いと思うんだが、その件に関する裁量権は、まだお前が握っているって言われてさ。お前、あいつ

らをどうするつもりなんだ?そのまま整備班に転属させるつもりなのか?」

(サルムザーク)
「貴重なDQパイロットである彼等を、そのまま整備班に転属させるのかと言われれば、答えはNOだな。本音を言ってしまえば、今の所どうするとも詳しくは決めていない。ただ、今後のネニファイン部隊の運営を見据えた場合、色々と試行錯誤していく必要が有ると、俺は考えている。今回一部のDQパイロット達を整備班に回したのも、その一環だな。現状、俺達ネニファイン部隊は、保有するDQ機数に対して、所属するDQパイロットの数の方が圧倒的に多い状態になっている。勿論、部隊発足後約一ヶ月程で九名を失ってしまった事実を省みれば、決して数が多いとは言い切れないのだが、それでも現時点において、軍の作戦任務や軍事演習に参加できないDQパイロット達が、数多く出てしまうと言う問題は避けられない。今回の試みは、言うなれば部隊として、出来る限り隊員達の不稼動を出さないようにする為の一つの案だ。そう思ってくれて良い。」

(シルジーク)
「ふーん。」

(ルワシー)
「だってよ。よかったなぁ俺達、DQパイロット以外に能がなくってよ。」

(ランスロット)
「ほんとほんと。僕ちゃんのような機械音痴には、到底無理な相談事ってやつですな。こんな僕ちゃんに唯一出来る事と言えば、彼等の分まで楽しい軍属ライフを満喫してやる事だけ。悲しいけどこれ仕方が無い。くぅーっ。」

シルが一体、自分に対して何を聞きたくて話しかけてきたのか。

サルムは内心、そこに様々な憶測を巡らせてしまったのだが、彼の思いに反して投げかけられた言葉は、全く当たり障りの無い一般的な内容の質問であり、彼は至って普段通りの自分、ネニファイン部隊隊長としての立場を突き通したまま、返事を返すことが出来た。

するとシルは、軽く鼻を唸らせる様にして、何処か気の無い返事をサルムに返し、一瞬テーブルの上に視線を落とした後で、直ぐにお茶らけた態度で会話に割り込んできた二人の男の方へと視線を流した。

サルムは、そんなシルの様子をマジマジと窺い見つつ、こいつが本当に聞きたい事は、もっと別の事なんだろうな・・・と言う、思いの壁に突き当たってしまったが、直ぐに自分がシルに対して、何ら臆する事も、何ら身構える必要も無いのだと言う気概を奮い立たせると、静かに両腕を組みながら、ソファの背凭れに圧し掛かった。

そして、不思議と心に霞がかった黒い靄を、一気に吹き飛ばすように大きな溜め息を繰り出し、無意味に錯綜する会話を、継続させる為の言葉を被せ重ねてやった。

（サルムザーク）

「ああ、そうそう。そう言った奴等に関しては、今後、他の部隊にDQパイロットとして貸し出す事も検討している。」

（ルワシー）

「ぬぁーにー!?そんな話聞いていねぇぞ!」

（ランスロット）
「うっへぇ！？そんな話聞いてませんがな！」

（サルムザーク）
「当たり前だ。今、初めて言ったからな。」

（ランスロット）
「そんな殺生（せっしょう）な・・・。折角楽しみにしていた僕ちゃんの軍属ライフは、一体どうなっちゃう訳よ。そのような理不尽な話、私目（わたくしめ）の耳には、一切聞こえませんでしたぁ。」

火を見るより明らかな彼等の反応を、冷やかな視線で受け止めたサルムは、少しだけ周囲を窺うような素振りを見せた後、再びゆっくりと彼等の方に向き直った。

そして、何もそこまで詳しい補足説明を付け加える必要は無いのではないかと、内心では思いつつも、彼は出来る限り部隊メンバー達との対話を重要視したい考えから、敢えて全てを包み隠さず、軍内部の裏事情に触れ始めた。

（サルムザーク）
「本当に理不尽な話って奴はな。お前達を一般兵士達と同じ立場で、戦場に駆り出そうとする連中の思惑の事さ。お前達が軍と結んだ傭兵契約書には、確かにＤＱパイロット、ＤＱ整備士として、任務に就く事を示唆する文面が存在してはいるが、その契約内容はあくまで、軍の任務を真っ当する事が前提となっている。現状、ネニファイン部隊で余り者となったＤＱパイロット達は、軍から指示された作戦任務に従事する事が出来ず、後方基地での待機任務を言い渡されるだけだ。当然の事と言えば当然の事なんだが、これを良く思わない連中が数多く居てな。命を賭して必死に戦う兵士達を尻目に、

奴等は一体何をしているのかと、臆面もせず堂々と吹聴する奴等が居るのさ。」

（ルワシー）
「まあそりゃよ。確かに考えてみりゃ、作戦任務に駆り出される奴と、そうでない奴とが出るっつう時点で、不公平感はあるわな。」

（サルムザーク）
「勿論、その事もあって、作戦任務に従事するパイロット達には、それに見合った特別報酬が支払われる仕組みになっている。ただ、だからと言って、自ら率先して戦場に身を投じる馬鹿共ばかりではないだろうし、命が惜しいのは誰でも一緒だ。今後、後方基地で楽ばかりしている奴等を見て、疎ましく思う輩も出てくるだろうし、そう言った不公平感を極力無くして行く方向で、検討を重ねて行く必要が有ると思っている。まあ、部隊長である俺の立場としては、その場その場に見合った、有能なパイロット達を優先して選抜して行く必要があるし、どうしても先発要員に偏りが出てしまう事態は避けられないだろう。余ったＤＱパイロットを他の部隊に貸し出すと言う案は、そう言った事情を踏まえた上で考え出した、云わば苦肉の策なのさ。」

（ランスロット）
「そりゃぁ早い話、他部隊に転属するって話なんですかい？」

（サルムザーク）
「いや、あくまで所属はネニファイン部隊、あくまでＤＱパイロットと言う立場を保持したままで、特定の作戦任務、あるいは特定の期間、他部隊に貸し出すと言う形を想定している。ＤＱ専門部隊と言う肩書きが取れたのを良い事に、お前等にＤＱを降りて戦うよう、強いる可能性もあるからな。」

（ルワシー）
「でもよ。他の部隊に行くっつったって、肝心のＤＱがなけりゃ、話にもなんねぇんじゃねぇか？結局何処行ったって、難民は難民で終わりって気もすんがよ。」

（サルムザーク）
「いや、トゥアム共和国陸軍内には、ＤＱ専門部隊以外にも、個別にＤＱを保有している部隊が数多く存在しているんだ。勿論、それなりに規模の大きい部隊に限られてくるがな。基本的に、ＤＱパイロットを貸し出す先として考えているのは、主力戦車部隊や後方支援部隊、防衛基地駐留部隊と言った大規模部隊だ。本来であれば、そう言った各部隊のＤＱ部門を全て統合して、ＤＱ専門部隊を新設すべきだったんだが、軍上層部も、共和国軍初となる試みに対して、そこまで過剰な戦力を与えるつもりは無かったんだろう。実際、軍上層部では、いまだＤＱと言う軍事兵器に、疑問符を投げかける輩も多いし、ＤＱ専門部隊の必要性を問う声も後を絶たない。ＤＱを取り扱う事以外に何ら能が無いお前達にとって、ネニファイン部隊存続の是非は、死活問題に関わってくる話だ。俺達は今後も、ＤＱ専門部隊としての利用価値、俺達自身の存在価値を、軍上層部に示していかなければならない立場にあるのさ。今回の話は、そう言った意味を込めたものでもあるし、お前達の活躍如何では、今後、部隊のインフラが劇的に改善される可能性だってある。ネニファイン部隊の未来、お前達自身の未来は、自分達自身の手の中にあるのだと言う事だけは、決して忘れるなよ。」

（ランスロット）
「軍の作戦任務中、後方基地で遊んで過ごすような輩達には、未来は無いって事なのね。そりゃまあ、聞けば解る話ってもんだけどさ。ＤＱを保有している部隊には、勿論、専属のＤＱパイロットが居る

訳でしょ？そんな所に余所者である俺達が割り込めるもんなのかね。」

（サルムザーク）

「確かにお前の言う通り、ＤＱを保有する部隊の多くには、専属のＤＱパイロット達が存在する。しかし各部隊共に、予備のパイロットまでは用意できていないし、何より、そのパイロット達の多くが、臨時で宛がわれた急造パイロットと言うのが実情だ。ネニファイン部隊を設立するに当たり、集める正規軍人達の実能力には相当気を配ったが、奴等のように根っからのＤＱ乗りと言う人種は、軍の中でも希少な存在なんだ。それはＤＱと言う軍事兵器に対する、軍上層部の見解からも見ても解る話だろう？俺は生粋のＤＱパイロットであるお前達が、各部隊の専属パイロット達より能力が劣っているとは思っていないし、お前達にも少なからず、入り込む余地はあると思っているんだ。」

長々とした会話の中で、断続的に浴びせかけられる質問に対し、少しも考えを詰まらせる事無く、己の一貫した思いを示し出して行くサルムの言葉に、やがて二人は「ふーん」と納得した表情を浮かべて顔を見合わせた。

堅物が多いと称される軍上層部において、自分の揮下にある一兵士達に、これほどまで丁寧な応対を見せる指揮官も珍しいのだろうが、サルムは彼等の質問が途切れるまで説明を連ね続けた。

見るからに血気盛んな若者である彼が、あたかも経験豊富な年長者たる威風を醸し出し、実際に年上となる者達を説き伏せるその姿は、有能な軍人、有能な指揮官と言う立場以上に、何処か不思議な魅力的風格を感じさせるものであったが、逆にそんな風を着飾らない態度が好感的でもあり、彼等は、そんな彼の持つ不思議な雰囲気に対

して、何処か親しみを込めた笑みを滲ませていった。

（サルムザーク）
「まあ、そうは言ったがな。俺自身、他人に頼ってばかりいたんじゃ、お前達に示しも付かないし、今後もっと部隊をより良く改善して行く方向で、色々と行動を起こしていかなければならないと思っている。尤も、だからと言って、直ぐにどうこうなる問題でも無いだろうが、取り敢えず目先の問題として、現状、整備班にかかっている膨大な作業負荷を軽減する為、直近十名のＤＱ整備士達を追加する話を取り付けた。今よりはもう少し楽になると思うぞ。シル。」

（シルジーク）
「・・・ん？ああ・・・。」

やがてサルムは、収束に向かいつつあった会話の中で、不思議と全く会話に参加する意思を見せないシルに対して、極自然な流れでの言葉を投げかけた。

しかしこの時、彼から帰って来た返答は、何処か心ここに在らずと言った感じの声色だった。

（ランスロット）
「だってさ。その中に女性は居るのかね。」

（ルワシー）
「居ようが居まいが俺はパスだぁな。軍隊所属の女なんて、所詮、女っ気の欠片もねぇ、ガサツな奴しかいねぇだろうしよ。」

（チャンペル）
「あら。女っ気の欠片も無い、ガサツな女で悪かったですわね。」

そしてもう一人、男達三人だけで繰り広げられていた会話の中から、完全に蚊帳の外に置かれていた一人の女性が、唐突に振って沸いた悪意ある言葉に噛み付き、可愛らしく釣り上がった目元をあからさまに歪ませて、モヒカン頭の男を睨み付けた。

彼女は別に、女っ気が無い訳でも、ガサツな性格の持ち主でも無かったのだが、出口の見えない会話の流れが、ようやく淀み始めたタイミングを見計らうと、強引に捻じ込んだ言葉と共に、スッとサルムの方へと向き直った。

そして、部隊長であるサルムに、いつまでも長々と会話に興じている暇は無いのだと言う事を暗に告げるように、彼の軍服の袖を摘んで引っ張った。

（サルムザーク）
「ん？・・・ああ。解ってるよ。」

するとサルムは、直ぐにチャンペルの意図を察して、チラリと彼女の方に視線を流し、小声で短く返事を返した。

しかしその後、直ぐにその場を立ち去る行動に移るかと思われた彼は、不思議と一瞬何かの間を取るように長嘆息を奏で出して見せると、両膝の上に両肘を乗せるように前屈みとなり、組んだ両手の上からじっとシルの様子を窺うように視線を据え付けた。

自ら進んで会話をスタートさせる一石を投じていながら、その後全く会話に参加する意思を垣間見せず、ただ自分の頭の中だけでグルグルと思案を巡らせている様にも見えるシルの態度は、長い間顔を合わせていなかったサルムにとっても、あからさまに不自然だと感

じるものだった。

サルムは、そんなシルの姿を頭の片隅で捉え見ながら、ある程度推測し得た彼の思いを察して見せると、カーテンコールさながらの最後の一幕を、無理やりにではあるが、何かを躊躇(ためら)うシルの為に用意してやったのだった。

するとやがて、そんなサルムの意図にようやく気付いたシルが、一瞬だけ交錯したサルムとの視線上に、小さな溜め息を吐き出した。

（シルジーク）
「・・・なぁサルム。・・・あいつは本当に死んだのか？」

あいつとは一体誰の事を指すのか、もはや問い質すまでも無く解りきった事で、サルムはその後、不意に切り捨てた視線と共に、短く「ああ」とだけ答えて見せた。

勿論、サルム自身、彼女の死を直接見た訳でもなく、諜報部から一方的に送りつけられてきた状況証拠品のみで、彼女の死を確信するのは、そうそう容易な事ではないと思っていた。

しかしこの時、決してそうでは無いのだと言う、望みの薄いあやふやな情報によって、拙(つたな)い希望の光を指し示す事など、シルは望んでいないのだと、サルムは暗に察していた。

（サルムザーク）
「すまなかったなシル。彼女を救ってやれなくて。」

戦争と言う過酷な殺戮劇の荒波に揉(も)まれながらも、出来る限りの手を尽くし、たったの一人の仲間も失う事無く、作戦任務を完遂させ

たい思いは確かにある。

例えそれが、決して叶わぬ子供染みた幻想だと解っていながらも、己のもてる能力の全てを結集して、その事実に抗いたい気持ちがある。

勿論、非情なる結末を容赦なく突き付けて来る現実世界においては、幾ら必死に最善の努力を試みた所で、望んだ結果を得られない事は、良くある事だろう。

確かに考えてみれば、歴史的大勝利とも称される今回のオクラホマ攻略作戦において、それ以上の結果を更に望むなど、余りにも欲深な考えだと言われても仕方ない。

しかし、それでもサルムは、当初一番最初に望んだ結果を得られなかった事実から、自らの選択が本当に正しかったのかどうか確信が持てず、シルに対して素直に謝罪して見せる他無かった。

（ルワシー）
「おいおい。何も隊長が悪いって訳じゃねぇだろ。あやまんなってよ。」

（ランスロット）
「そうそう。三佐殿が素晴らしき案を軍上層部に捻じ込んだからこそ、助かったって言う人間だって数多いんだろうしさ。三佐殿がアリミアお姉さまの為に、必死に最善の手を尽くそうとしていたのは、皆解っている事だし、誰も責めやしないと思うよ。」

シルは、サルムの謝罪に対して、何も返事を返さなかった。

直ぐにサルムを擁護する言葉を並べ立てた二人の発言を上の空で聞き流し、少し俯き加減で視線を外の世界へと放り出すと、アリミアを失った悲しみによる感情からか、心に強く圧し掛かる重たい何かに、肺を押し潰されるような感じで大きな溜め息を漏らした。

勿論、シル自身、サルムに非があるなどと考えていた訳ではなく、サルムから直接言い渡されるその言葉によって、自身のもやもやとした感情に、終止符を打ち付けたかっただけなのだ。

やがて、地下通路の片隅に充満した湿り気を帯びた雰囲気を、一気に吹き飛ばすかのように大声を張り上げたモヒカン男が、手加減する事を忘れた右手で、シルの背中をドンと叩いた。

（ルワシー）
「おっし！！今日は飲むかぁシル！！朝まで浴びるほど飲みまくってやろうぜぇ！！」

（ランスロット）
「そうそう、そうだね。嫌な事は全部酒で洗い流すのが一番よ。」

（シルジーク）
「ああっ！？お前等朝までって、俺は今日、夜番もあるんだぞ。」

（サルムザーク）
「ああ。いい。いいぞお前等。この後部隊メンバー全員に通達するが、今夜から明日の午前中にかけて、ネニファイン部隊の活動を完全にオフにしてやる。俺達に課せられていた第三種戦闘体制も、本日夕刻１８：００を持って解除される事となった。但し、明日の午後からは軍事演習を予定しているからな。羽目を外しすぎて使い物にならないって状態だけは避けるようにな。」

（ランスロット）
「うっほー！さすが三佐殿。話が解る方でいらっしゃる。俺が女性だったら直ぐに愛しちゃうタイプだね。」

（サルムザーク）
「俺が例え女でもお前だけは願い下げだな・・・。」

（ルワシー）
「おっしゃ！そうと決まれば即行動！シャワー浴びて着替えたら、直ぐレストポート集合な！」

（シルジーク）
「ちょ、ちょっと待て！集合時間は１８：００ぐらいで良いだろ？そんなに慌てなくてもいいじゃないか。」

（ランスロット）
「あらー？シルちゃん。もしかして、またあの赤毛の少女の所に寄って行きたいって事なのかなぁ。中々に君も隅に置けない男だねぇ。」

（シルジーク）
「違っ！！・・・・・うー・・・わないけどさ。ちょっと様子を見てくるだけだ。」

（ランスロット）
「またまた。照れる事ないじゃない。良い事よ。良い事。」

（ルワシー）
「んじゃまぁ、集合は１８：００つう事で決まりな。じゃあよ隊長。

ちょっくら外出してくっからよ。チャンペル。外出申請書は任せたぜぇ。」

（チャンペル）

「えっ!?ちょ・・・!ちょっとぉ!!そう言うのは各個人で作成するようにって、お願いしてるでしょ!?それに飲酒も基地内の施設で済ますようにって・・・!」

やがて、突然弾ける様な盛り上がりを見せ始めた二人の男が、止まる事を知らぬ強引さを持って、シルの身柄を拘束する。

そして、一体誰の気分転換を目(もく)しているのか、容易には判断付かないようなはしゃぎ振りで、彼等は兵士宿舎へと続く地下通路を歩き去っていった。

勿論、背後から浴びせかけられるチャンペルの怒鳴り声には、全く聞こえない振りを突き通した。

（チャンペル）

「んもう!全く、どういう神経しているのかしら!私だって暇な訳じゃないんですからね!三佐からも何か言ってやってくださいよ!」

チャンペルは、完全に自分の事をネニファイン部隊の雑用係だと勘違いしている彼等に、激しい憤(いきどお)りを感じていたが、頼めば何でもやってくれる便利屋チャンペル、とまであだ名されているらしい自分が、何を言った所で効果が薄い事を知っていた。

そこで彼女は、折角振って沸いたチャンスとばかりに、部隊長であるサルムから直接苦言を呈してもらおうと、深緑色の長い前髪を勢い良く掻き揚げて、サルムの方へと向き直った。

（チャンペル）
「三佐？」

するとサルムは、そんなチャンペルの言葉に全く反応を示さず、ずっと誰もいない地下通路の奥の方へと、視線を据え付けたままだった。

左手でノート型ＰＣを胸元に携え、不思議そうにサルムの顔色を窺ったチャンペルは、何処か恐る恐ると言う感じで彼を呼び、完全に自分だけの世界観に潜り込んでいるサルムの意識を揺り動かす。

（サルムザーク）
「チャンペル。」

（チャンペル）
「はい。」

（サルムザーク）
「お前、こないだの作戦について、どう思う？・・・もしも・・・。」

（チャンペル）
「はい？？」

チャンペルはこの時、サルムの発した思いも寄らぬ問い掛けに、一瞬戸惑いを隠しきれずに、おざなりな返事を返してしまったのだが、神妙な面持で目の前に佇むサルムの姿から、その意図する所を察してみせると、直ぐに引き締まった表情を浮かべて、続くサルムの言葉を待った。

しかしその後、サルムはいつまで経っても、「もしも」に続く言葉を吐き出そうとしなかった。

チャンペルは、部隊長であるサルムが、自分に対して一体どんな回答を求めて、そんな問いを投げかけてきたのか、よく理解できなかったが、歴史的大勝利とも称される今回の作戦に、「もしも」と言う言葉を突きつけて見せた彼の思いが、今回の大戦果に満足していないのだと言う事を悟った。

それは、たった一人の女性を助け出す事が出来なかった自責の念からなのか。

三人の戦死者を出してしまった、パレ・ロワイヤル攻略作戦を省みての事なのか。

それともももっと全体的に最善の道筋、最良の方策を選び出したかった思いがあるからなのか。

何も言わない彼の素振りからは、何も察する事が出来なかったが、それでもサルムが、必死により良き道を模索しようと様々な思案を巡らせ、悩んでいる事だけは間違いなかった。

少なくともこの時、彼女はそう感じていた。

人は死ぬ。簡単に死ぬ。

どんなに手を尽くしても、どんなに努力しても、人の死全てを回避する事は出来ない。

それが戦争。それが戦いと言うものなのだ。

ちっぽけな存在でしかない人間には、どうにもならない事だってある。

言ってしまえば、どうにもならない事の方が多いのかもしれない。

しかし、それでも人は生きていかなければならない。

毎日必死に頑張って、より良き道筋を捜し求めて、歩み進まねばならないのだ。

チャンペルはふと、そんなサルムに対して、可愛らしくニッコリと微笑んで見せると、まるでお姉さんが弟に言って聞かせるような感じで、優しく言葉を投げかけた。

（チャンペル）

「三佐。世の中きっと、うまく行かないんだと思います。だから皆頑張って、必死に生きているんだと思います。私、三佐のそう言う考え方、好きです。」

私「考え方」って、確かに言ったわよね・・・。

チャンペルは、間違いなく発した自分の言葉を、再度確かめるように脳裏で反芻（はんすう）させると、意思に反して頬の辺りが急に火照り行く熱を感じてしまった。

そして、ゆっくりとこちらの方に向き直ったサルムの視線から、唐突に逃げ出すように視線を切り捨てると、「そうか」とだけ聞こえて来た彼の言葉に、ほのかに口元を緩めた。

（サルムザーク）
「さーて。そろそろ戻るとするかチャンペル。彼是（あれこれ）と思案するよりまず先に、片付けなければならない目先の仕事が山程あるしな。取り敢えず奴等の外出申請書は、俺が作っといてやるよ。」

やがて、何事も無かったかのように、普段通りの言葉をチャンペルに投げかけたサルムは、思いもよらず長居する事となったソファから立ち上がり、少しも名残惜しさを感じさせない素っ気無さで、直ぐに短い昇り階段へと足をかけた。

（チャンペル）
「はい。三佐。」

そして、チャンペルもまた、元気良く返事を彼に返して見せ、直ぐにソファから立ち上がって、彼の背中を追いかけるように、小走りに駆け寄っていった。

０７－０４：〇底の見えぬ穴蔵の中で

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ４「底の見えぬ穴蔵の中で」

何かを見つめているかの様でもあり、また何も見ていないかの様でもある、虚ろな瞳。

黄色い枕カバーの向こう側、無造作に放り出された赤い髪の毛の更に向こう側から覗く、薄ら寒い雰囲気を醸し出す、虚ろな瞳。

時折、ぱちくりと瞬きを奏で出しはしているものの、その視線の行く先は、薄暗い部屋の様相を一顧だにせず、ただ何処か遠くにある虚空の彼方へと、じっと据え付けられたままだ。

絶妙の弾力を有した心地よいベッドの上、サラサラと肌触りの良いシーツと、ふんわりと柔らかな毛布の間に包まれ、じっと身を横たえていた少女は、静かな眠りの淵へと吸い込まれそうになる喪失感に揺さぶられながらも、何処か鎮めようの無い、心の疼きに悶えていた。

静かに休める身体の全てが、ポカポカと温かな火照りを宿す中、たった一箇所だけ温まる事の無い、失意に喘ぐ心の冷たさが、むず痒い違和感を激しく訴えかけてくるようだ。

周囲に漂う温和な空気も、何処か酷く凍て付く様な刺々（とげとげ）しさを感じ、部屋の中をほのかに照らし出す、優しげなブラケットライトの光も、自責の念と言う黒い靄に取り憑かれた少女にとっては、鬱陶しさを増幅させる種火にしかならなかった。

完全に周囲との関わりを隔絶した意識の中で、何度も何度も深い吐息を繰り返し、必死に心を落ち着けようと試みるも、その度に沸き起こる苦々しい思いの全てが、ぽっかりと穴の開いた少女の心を激しく叩き付ける。

そして、やるせなさ、不甲斐なさ、悔しさ、うしろめたさと言った、怒りと哀しみに塗れた負たる感情によって、心に出来た穴の全てが溢れかえると、やがて、瞬きする度に零れ落ちる涙が、再び止まらなくなってしまった。

少女は不意に、ギュッとシーツを強く握り締めて、小刻みに震え出した身体を静かに捩(よじ)ると、ほのかに湿り気を帯びた柔らかな枕の中に、深々と顔を埋めた。

（セニフ）

「・・・うっ。・・・うっ。・・・うっ。」

人が死ぬなんて、当たり前の事。

生れ落ちたその瞬間から、必ず死する運命を定められ、どんなに懸命に生きようとも、どんなに必死にもがこうとも、何人たりとも、決して死の恐怖から逃れる事は出来ない。

しかしそれでも、人は己の力が尽きて果てるその時まで、小さくとも儚(はかな)い命の灯火(ともしび)を燃やし、輝かせるだけ輝かせて、必死に死から逃れようとのた打ち回る。

背後からヒタヒタと忍び寄る、真っ黒な闇の世界の存在を感じながらも。

死んだら屍。ただの屍。

呼びかけても、揺さぶっても、何の反応も示さない、ただの屍。

命と言う躍動を生み出す拠り所を失い、暖かな温もりさえも失い、人として感じる感情の全てを具象化出来なくなった、ただの屍。

優しかった笑顔も、悲しそうな泣き顔も、怒った表情も、もう二度と、見る事の出来ない、ただの屍。

それまで有していた光の全てを完全に喪失し、再び輝く事を許されぬその屍は、もはや、そこにあるだけの、単なる物としての存在以外の何者でもない。

それは、残された者達に、容易には癒えぬ心の傷を、深々と背負わせるだけの存在でしかなく、決して取り繕う事もしない、決して優しく慰めてもくれない、無慈悲なる存在でしかない。

悲しみしか生み出さぬと解りきったこの屍が、何故この世には必要なのだろうか。

人の死。人が死ぬと言う事実は、一体何の為に存在しているのだろうか。

それは、生きていると言う充実感を人の心に与える為・・・と、嘯く者がいる。

それは、必死に生きようとする人の心に活力を生み出す為・・・と、

口走る者もいる。

尤(もっと)もらしく聞こえはするが、結局、最後に掻き消える運命にある事を知りながら、そこに生きる意味があるのかと問われれば、良く解らないとしか答えようが無い。

儚(はか)くも消え行く新たなる命を次々に産み落とし、永遠に受け継がれて行く人の生と人の死には、一体何の意味が込められているのだろうか。

命と言う儚(はかな)いおぼろげな光を、たった一つだけ与えられ、この世に産み落とされた人の多くは、一体自分が何の為に生きて、一体何の為に死んで行くのか、全く解らないままに生きている。

人は皆、全くその意味を解らないまでも、必死に生きて行こうとしている。

人は必ず皆死ぬのだと解りきっていながらも、人は皆、必死に生きて行こうとしているのだ。

では何故、人は生きたいと思うのか。

何故、人は生きたいと願うのか。

（セニフ）

「・・・うっ。・・・ううっ。・・・スン。」

人が生きようと思う心。その心を突き動かす原動力と成り得る存在。

それは勿論、人が人として感じる欲望の全てに集約された強い思いであり、それを満たしたいと渇望する人の意志が、人に生きる為の活力を与える。

何かを願い、何かを求め、何かを欲する人の感情。

生きている間に成し遂げたい、死ぬ前にやり遂げたい、それが例え、決して容易には叶わぬ願いであっても、夢や希望と言った光の導が、人に生きる為の活力を与える。

人は皆、心の中に抱いた思いや願いを叶える為に、必死になって生きているのだ。

（セニフ）
「・・・アリミア・・・。ううっ。」

しかしこの時、ほんの極僅かなりとも、叶う望みがあるならまだしも、それが決して叶わぬ望みなのだと言う、絶望的現実を突き付けられてしまった少女は、全く出口すら見えない暗黒の迷宮の只中へと落ち込み、一人寂しく喘ぐようにして泣いていた。

己の抱く望みの全てを一つに集約し、只管に心の中で祈り願っていた強い想い、心の支えとも言うべき強い想いを、根幹から挫き折らてしまった少女は、新たに生きる為の活力を奮い立たせる事も出来ずに、一人寂しく喘ぐようにして泣いていた。

一体どれ程の時間泣いていたか解らない。

一体どれ程の涙を流したのか解らない。

でも、それでも、止め処なく流れ落ちる涙は、一向に差し止まる気配を匂わせなかった。

生きて帰ってきて欲しい。そう願っていた。

お互いに生きて帰って、再び出会いたい。そう願っていた。

そして、他愛の無い会話に興じながら、アリミアと一緒に楽しい一時を過ごしたかった。

楽しく笑って、楽しくはしゃいで、また、楽しい毎日を送りたかった。

私は、楽しげに笑うアリミアの表情が好きだった。

普段から堅くてきついイメージもあったけど、私は、アリミアの笑った表情が好きだった。

アリミアの笑顔。とても綺麗だった・・・。とても優しかった・・・。

アリミアが笑った顔・・・最後に見たのは、いつだったっけか。

レストポートでチラッと見かけた時だっけか。

それとも、もっと前の、作戦会議の時に、チラッと視線が合った時だっけか。

あの時は直ぐに、私の方が視線を逸らしてしまったけど、ほんとは

もっと、ちゃんと見ておきたかったんだ。アリミアの笑顔。

正直言うとね、ほんと気が動転しちゃってさ、もう、どうして良いかわかんなかったんだ。私。

馬鹿だよね。ほんと・・・。

勿論、その事は、アリミアも、解ってくれてたよね？

私ね。アリミアの笑顔が見たいんだ。

ねぇ。アリミア。もう一度、私に笑顔を見せてよ。

お願いだからさ。もう一度だけで良いから。私に笑顔を見せてよ。

私が我儘（わがまま）だって事ぐらい、アリミアも知っているでしょ？

だからもう一度だけ、私に笑顔を見せて。

お願いだから、私に笑顔を見せて！微笑んで見せて！

お願いだから・・・！！

私やだよ！！最後にあんな・・・。あんな顔・・・。

アリミアに、あんな顔させたままで・・・。

あんな別れ方・・・。

（セニフ）
「うあああっぁぁぁ！！・・・やだよぉ！！・・・そんなのって無いよぉ・・・。」

誰も居ない、シンと静まり返った薄暗い部屋の片隅で、胸が張り裂けそうになる程に膨らんだ、激しい後悔の念に苛(さいな)まれ、やがて抱え込み切れなくなってしまったセニフが、唐突に悲痛な叫び声を上げた。

そして、身を丸め込むようにして、両手に握り締めたシーツと毛布を強引に抱き寄せ、寒さに凍える心の回りに、巻きつけるようにして引っ張った。

自分の身体が妨げとなり、それ以上引っ張れない状況にあっても、セニフは必死にシーツと毛布を引っ張り続けた。

自分が求めていたものを、必死に手繰(たぐ)り寄せるようにして。

死んでしまった人間と、再び出会う事なんて、出来やしないって・・・解ってる。

自らの死を選択した所で、再び出会える保障なんて、何処にも無いって・・・解ってる。

でも、本当にアリミアが死んだかどうかなんて、誰にもわかんないじゃない。

今も何処かで生きていて、誰かの助けを待っているかもしれないじゃない。

「・・・は、まだ見つかっていないようですが、巡航ミサイル発射地点と目される・・・。」

「・・・は、死亡した・・・と言うのが、諜報部の見解、いえ、軍の見解のようです。残念ですけど・・・。」

（セニフ）

「嘘だ!!嘘!!そんなの絶対、嘘に決まっている!!私、信じない!!信じないよ!!」

突然、思い立ったようにベッドから上体を起し、俄(にわ)かに激しい怒りを吐き散らして見せたセニフは、徐に枕元に置かれていた空っぽの花瓶を手に取ると、思いっきり部屋の壁にぶち当てるように投げ捨てた。

ガッシャン!!

はあはあと途切れる事の無い、忙(せわ)しい吐息を逐次漏らしながら、無残にも四散し行く花瓶の乾いた断末魔(だんまつま)を聞いたセニフは、ボロボロと零れ落ちる涙を拭き取ろうともせず、ただ虚しさを増幅させるだけの、花瓶の屍へと視線を宛がった。

それまで、幾度となく繰り返されてきた同様の行為から、彼女の部屋の床一面は、破壊された小物達の屍で埋め尽くされていたが、彼女は少しもその事に気を止める様子を見せなかった。

やがて、全く無意識の内に、薄暗い部屋の片隅を順々に辿った彼女の視線が、力なく放り出された右手の掌（てのひら）へと落とされる。

涙に滲んだ視線の先で、ゆっくりと開かれ行く掌（てのひら）の中には、ずっと大事に握り締めていた、二つの紅いヘアピンがあった。

それは単に紅いだけの、非常に質素な作りの小物だったが、彼女にとって見れば、それは如何なる高価な宝石よりも、遥かに価値のあるかけがえの無い小物だった。

死んだ・・・。アリミアは死んだの。解るでしょ？

解らない！解らないよ！

絶対に嘘だよ！馬鹿にしやがって！！

残念だけど、何者かに殺されてしまったの。解るでしょ？

違うよ！違うよ！絶対に違う！

アリミアがそう簡単にやられるはず無い！

今までも私の事、ずっと守ってくれてたじゃない！

アリミアは強いんだ！死ぬはずが無い！その内絶対に帰ってくるよ！

オクラホマ空港管制施設の屋上で発見された大量の血痕。

あれ、アリミアのものなんだってね。

致死量に達する程の大量出血だって。

そんな状態で生きてられるはず無いよ。

アリミアはもう、帰ってこないの。解るでしょ？

そんなの嘘！私見てないもん！私信じないもん！

そんなの、諜報部の奴等が勝手にでっち上げた、作り話なんでしょ！？

絶対、嘘に決まっているじゃない！

なんでそんな嘘を付く必要があるの？

アリミアの死を確定付ける確固たる証拠を手に入れたって言うのに、生きているかどうかも解らない人間を捜索し続けるなんて、組織としては有り得ない話だよね。

そんなの簡単に解る話じゃないの。

違うよ！アリミアは生きている！アリミアは生きているよ！

それなのにあいつら、アリミアを捜索するのが面倒臭くなって、それで・・・！

あれだけ優秀だって言われていた人間を、諜報部が簡単に見捨てると思う？

疚(やま)しい手を使ってまで、ネニファイン部隊から引き抜こうとした奴等だよ？

出来る事なら何とか救い出して、また困難な作戦任務を任せたいって、そう思うのが普通だよね？

彼等は知ってしまったの。彼女が死んでしまったと言う事実をさ。

そんな事言ったって！信じられない！

アリミアが死ぬ所を直接見た訳でも無いのに！信じられる訳ないじゃない！

それは単に、信じたくないだけの、一方的な思い込みじゃない。

突き付けられた現実を受け止める事が出来ず、いつまでも駄々を捏(こ)ね続けるだけでさ。

子供みたいに幼稚な、自分勝手な我儘(わがまま)じゃない。

解ってるよそんな事！！そんな事解ってる！！

そうだよ！！我儘（わがまま）だよ！！

そんな事、自分でも解ってるんだ！！

私は我儘（わがまま）な人間なの！！

いつもいつも自分勝手に、好き放題に自分を表現してさ。

他人の思いなんか、全然関係ないって感じで、自分だけの殻に閉じ篭（こも）ってさ。

アリミアが、あんなに必死になって、私の事を考えてくれてたって言うのに。

アリミアが、あんなに一生懸命になって、手を差し伸べてくれてたって言うのに。

全く見向きもしないで、一人だけ被害者ぶっちゃってさ。

アリミアにだけ全部罪を擦（なす）り付けて、自分だけ楽になろうなんて、都合の良い事ばっか考えてさ。

少しもアリミアの事を考えてあげる事が出来なかったなんて、ほんと最低！この我儘（わがまま）女！この卑怯者！この弱虫！この臆病者！

アリミアがどんなに苦しい日々を送ってきたか、どんなに悲しい日

々を送ってきたか、それを知ろうともしないで、ただ無意味に無茶苦茶な言葉だけを投げつけて、あんなにアリミアを傷つけるなんて！

最後に見た、アリミアの悲しそうな表情が忘れられない・・・。

最後に見た、アリミアの苦しそうな表情が忘れられない・・・。

「やめてよ！！私には何も話すことなんて無いよ！！もう私に関わらないで！！」

馬鹿！！馬鹿！！馬鹿！！

何でそんな事言ったのよ！！

「聞きたくないよアリミアの言葉なんか！どうせ訳の解らない理由をつけて言いくるめてやろうなんて思ってるんでしょ！？いつまでも子供だと思って馬鹿にしないでよね！」

何でそういう風にしか言えなかったのよ！！馬鹿！！ほんと馬鹿！！

「仲間だなんて軽々しく口にしないで！！私がいつアリミアに守って欲しいって頼んだの！？余計な事しないでよ！」

いや！！やめてよ！！馬鹿！！

「私の為に私の為にって、それさえ口にすれば赦(ゆる)されるとでも思ってるわけ!?私が、はいそうですかって、素直に応じるとでも思ってるわけ!?」

いや!!やめて!!それ以上言わないで!!

「自分の母親を殺した犯罪者達の仲間に、誰が好き好んでその身を預けるっていうのさ!?私は人殺しに同情されるほど落ちぶれていないよ!!一体、今までどれだけの人達を殺して来たか知らないけどさ!!そんな人間に・・・。」

いやぁぁぁぁぁ!!駄目!!それ以上言わないで!!

「そんな人間に見られてるんだって思うと、背筋がゾッとしちゃうよ!!殺人鬼に付き纏(まと)われてるんだって思うと、気持ち悪くて夜も眠れないよ!!」

やめて!!やめて!!やめて!!もうやめて!!お願いだからやめて!!

「人の気持ちを知りもしないでさ!!自分勝手に人を殺して!!全然平気なんでしょ!?人を殺す事に何の躊躇(ためら)いもないんでしょ!?

人を殺すのが好きなんでしょ！？この人殺し！！その内きっと、私の事も平気で殺すんでしょ！！近寄らないでよ！！この人殺し！！」

お願いだからやめて！！やめて！！それ以上言わないで！！

私はそんな言葉まで投げつけるつもりはなかったの！！

そんな酷い事まで言うつもりはなかったの！！

ほんと！！本当だよ！！私は！！・・・私は・・・。

ほんとはね。・・・あんな別れ方するつもりじゃなかった・・・。

ほんとはね。・・・アリミアと話がしたかった・・・。

ほんと。・・・ほんとだよ・・・。

でもさ。私さ・・・。私・・・。あんな態度で・・・。あんな自分勝手な・・・。

ほんともう、馬鹿だよ・・・。馬鹿・・・。馬鹿・・・！馬鹿！！馬鹿！！馬鹿！！馬鹿！！馬鹿！！

もうこんな馬鹿で！自分勝手で！卑怯者の私なんて嫌だ！！もう嫌だ！！

もし、やり直せるなら・・・。あの時、あの瞬間・・・。

壊れてしまう前のあの瞬間まで、アリミアと最後に出会ったあの瞬

間まで戻りたい。

そして、自分だけが可愛いと考えていた、最低の自分を後ろから蹴り飛ばしてやりたい。

我儘(わがまま)だって解っている。

自分勝手だって解っている。

でも、それでも、何でも良いから、どうなっても良いから、時を戻して欲しい。

お願いだから、時を戻して。

お願いだから・・・。

（セニフ）

「お願いだから、時を戻して・・・。お願いだから、時を戻して・・・。お願いだから、時を戻して・・・。お願いだから・・・。時を戻して・・・。お願い・・・。お願い・・・。」

右手に持った紅いヘアピンを、ギュッと強く握り締め、両手で顔を覆うようにしてその場に蹲(うずくま)ったセニフは、突き上げる激しい後悔の念に殴り付けられ、蹴り付けられ、全くどうしていいのか解らない様子で、ただ只管(ひたすら)に涙を流し続けた。

全く落ちる場所すら解らないままに落ち続ける、真っ暗な悲しみの渦へと取り込まれてしまった彼女の心は、支えとなる取っ掛かりも、

差し込む光も見つけ出す事が出来ずに、ただただ、虚空を切る様に四足をバタつかせ、もがき足掻(あが)いているだけだった。

やがて、止め処(ど)なく押し寄せる激しい後悔の念が、冷たく鋭い真空の刃となって、幾度となく彼女の心を深々と切り刻み続けると、彼女は再びその傷跡から噴出した大量の雫の重みに耐え切れなくなった。

溜まりに溜まり込んだ大量の雫を、強く閉じた瞼(まぶた)から一斉に振り落とし、不意に天を仰いだ彼女が言葉にならない叫び声を張り上げた。

（セニフ）

「うわぁぁぁぁあああっ！！ああああっぁぁぁぁ！！」

０７－０５：〇ようこそランガ・カカの屋敷へ（前書き）

すみません。東と西を間違えて書いてました。
以下の文を修正します。ほんとお馬鹿ですねＴＴ

〇スーノースーシ川イーストライン
×スーノースーシ川ウェストライン

０７－０５：〇ようこそランガ・カカの屋敷へ

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ５「ようこそランガ・カカの屋敷へ」

西の空へと傾いた初夏の日差しが、次第に優しげな肌触りを交え始める頃。

一年で一番の躍動期を迎えた森の木々達も、周囲に漂わせる色濃い自然の香りだけを残して、次第に黒と言う影色によって塗り潰され始める。

焼き付けるような赤さを纏った夕暮れ時の空色を背景に、皆一様に同じ色へと染まった自然の風景は、吹き抜ける穏やかな薫風に妖美な揺らめきを醸し出し、まるで侘しい演劇の終幕を見ているかのようだった。

次第に夜と言うひんやりとした気配を漂わせ始める森の中で、サラサラと心地よい葉音に塗れながら、一日の終わりを示唆する幻想的情景を見つめていた一人の女性は、やがて、しっとりと潤った上唇に舌を這わせると、木々の隙間から見える大きな屋敷へと視線を宛った。

そして、注意深く周囲をぐるりと見渡して、辺りに全く人気が無い事を確認すると、屋敷を囲う古風な赤煉瓦塀の傍まで素早く歩み寄った。

彼女が着込んだ可愛らしい衣装は、周囲の様相に相反して、一際目立つ純白の色を放っていたが、この時見せる彼女の挙動には、何処

か人に見つからないよう、気を配っている様子が窺えた。

帝国領東部スーノースー シ川イーストライン沿いに栄える、流通中継都市「シャルム」の中心街から、おおよそ南に１０ｋｍｉｌｓ程離れた山間の一画に、たった一軒だけぽつねんと佇むその大きな屋敷は、さほど入念な手入れが施されていない様子で、何処か不気味な雰囲気を醸し出している様にも見受けられる。

しかし、だからと言って、全く生活観を感じさせないかと言えばそうでは無く、勿論、一般市民達が住まうには、余りに無意味な大きさを誇っていると言わざるを得ないが、それでも高級貴族達の離宮として建てられたものだと考えれば、それほど不思議な存在でもなかった。

彼女は、自分の背丈程の赤煉瓦塀に、背中をぴったりと押し付けた状態で、屋敷の母屋へと括り付けていた視線を取り除くと、足首まで巻き付いたお洒落なブーツへと視線を落とし、その汚れ具合に小さな溜め息を吐き出した。

そして、幾重にも生地が折り重なった可愛らしいスカートに、絡み付くように付着した草木の端々を丁寧に払い除けると、紫色のボリュームのある細い髪の毛を掻き上げ、再び周囲の様相をくまなく見渡して見せた。

こんな人気の無い山奥でたった一人、怪しげな行動に終始する彼女の目的が、この大きな屋敷以外にありえない事は明白だが、言わずもがな彼女は、この屋敷に立ち入るのに、正門を利用するつもりなど無かった。

彼女は徐に、赤煉瓦塀の上辺りに両手を添えると、軽快に塀の上へ

と細身の身体をよじ登らせ、短いスカートを妖美にひらつかせながら、一気に塀を飛び越える。

そして、着地すると同時に素早く左右に視線を巡らせ、屋敷の裏手側へと忍び寄ると、全く間髪をおかず、小高いウッドデッキ上へと続く短い階段を駆け上がった。

流れるような一連の動作の中で、全く目立った物音を一つも排出しない彼女の所作（しょさ）は、確かに洗練された闇の実能力を有している様（さま）を匂わすものであり、着込んだ派手目の衣装が一際異彩さを放ってはいるものの、まさに隠密行動に手馴れた工作員たる威風を感じさせるものがあった。

やがて彼女は、取り付いた勝手口の小窓から、マジマジと屋敷の中の様子を窺い見ると、中に全く人気（ひとけ）が無い事を確かめた上で、そっと勝手口のドアノブを回す。

ガチャリ。

すると、思いがけずも簡単に、彼女の手の動きに合わせて口を開いた勝手口の扉が、ギィと言う微かな摩擦音と共に、何処か妖しげな雰囲気を漂わせながら、彼女の目の前に進むべき道筋を曝け出した。

もう既に日没間際の時間帯にあって、屋敷の中はほとんど闇の中へと埋没した状態にあったが、彼女は少しも躊躇（ちゅうちょ）する素振りを見せず、低い体勢を保ちながら、直ぐに屋敷の中へと身を滑り込ませた。

まず最初に彼女を迎え入れてくれたその部屋は、ほのかに湿り気が

漂うだだっ広いダイニングキッチンであり、中央部に置かれた大きな長テーブルの周囲には、お洒落な文様を施された六つの椅子が並べられていた。

小奇麗に片付けられたキッチンの様相は、普段から余り利用されていないのかと思わせる程の清潔感に満ち溢れ、直近、何かの料理に使用したような形跡は、全くと言っていいほど皆無であった。

しかし、良く見れば不思議な事に、テーブルの周囲に置かれた椅子の前には、ディナー皿、ナイフ、フォークと言った、食事道具一式が並べられており、テーブルの中央部に活けられた鮮やかな花々もまた、何処かこの屋敷に人が居る事を匂わせていた。

変ね。人の匂いはするのに、人の居る気配がしない。

彼女はじっと身を屈めたまま、薄暗いキッチンの中をキョロキョロと見渡し、徐に短いスカートを更に捲り上げると、右太腿に巻きつけたホルスターから一丁の短銃を取り出し、スライドを引いた。

そして、キッチンから抜け出る為の真っ暗な出入り口へと視線を宛がうと、静かに息を殺しながら、暗がりの隅を辿るようにして、ゆっくりと前進を開始した。

キッチンを抜け出ると、そこは思いの他広々とした横に長い通路へと突き当たり、彼女から見て右手側に伸びる通路には、幾つもの部屋が立ち並んでいる様子だった。

閑散とした様相を紛らす為か、各部屋の入り口と入り口の間には、

高級そうな絵画が一枚づつ掛けられており、その逆側の通路を突き当たったL字角には、大きな槍を持った等身大の古びた甲冑が置き飾られていた。

窓の外から差し込む夕暮れ時の微光に照らし出され、通路一杯に敷き詰められた綺麗な絨毯が、燃え上がるような赤さを滲ませる中、彼女は入念に周囲の気配を探りながら、壁際を擦る様に通路左手奥へと進み出す。

・・・するとそんな時、いまだ物音一つ聞こえ来ない静寂さの中から、不思議と聞き心地の良い静かな音色が響き渡って来るのを、彼女は聞いた。

彼女は直ぐさま周囲へと視線を這わし、しばしその音色に聞き入ってたのだが、一体この大きな屋敷の何処から聞こえ来るものなのか、直ぐには察しようがなかった。

パイプオルガンの音かしら・・・などと、どうでも良い推測を脳裏に浮かび上がらせ、やはりこの屋敷には誰かが居るのだと言う確信を得た彼女は、非常に強い警戒心を渦巻かせながら、ゆっくりと音色が流れ来る源を辿り、歩き出す。

古めかしい甲冑に一瞥をくれ、突き当たりのL字角を右手側に曲がり進んだ彼女は、やがて、一階と二階をぶち抜いて形成された、大きな吹き抜けの空間へと這い出した。

恐らくは屋敷のど真ん中に位置するであろう箇所に拵えられたその空間は、部屋の中央部に大きな暖炉が一基備え付けられており、天井からは、これまた見事なシャンデリアが四つぶら下がっていた。

季節外れの灯火を宿す暖炉の炎が妖美な揺らめきを奏で出す中、周囲に並べられた大きなソファや観葉植物の影達が織り成す、無機的な舞踏会の様相を見て取った彼女は、やはりここにも誰もいない・・・と思い付いた直後、再び聞こえ来るパイプオルガンの音色に意識を舞い戻した。

屋敷の中に篭る空気の全てに浸透するように響き渡るその音色は、いつの間にやら薄ら寒いイメージを連想させる曲調へと移り変わり、時折テンポを急激にペースアップして見せては、激しく鍵盤を叩き付ける様な狂騒を吐き出すようになる。

そして、再びなだらかな調子へと繰り返し舞い戻っては、何処か人の恐怖心を煽り立てるような、おどろおどろしい音色を静かに紡ぎ出し、突然の来訪者に対する悪意ある持て成しを、彼女に押し付けている様でもあった。

ほんと悪趣味ね。家主の人格を疑っちゃうわ。

彼女は握り締めた短銃を胸元に構え、生理的嫌悪感を沸き立たせる偏執的な曲調に、深い溜め息を付いて見せたのだが、やがて、吹き抜けの空間を上下に繋ぐ、螺旋状の階段へと視線を据え付けると、恐らくは二階から聞こえ来る音なのであろうと言う予測と共に、素早く階段へと駆け寄った。

そして、吹き抜けをぐるりと囲んだ二階の通路にも、全く人気が無い事を確認すると、彼女は螺旋階段の中腹部に備え付けられていた、小広い踊り場へと一気に取り付き、軽やかに木製の手摺りを乗り越

えて、素早く二階へと駆け上がった。

するとやはり、彼女が思った通り、屋敷内に響き渡るパイプオルガンの音色が、俄(にわ)かにその大きさを増して行き、彼女が屋敷の二階奥へと続く、真っ暗な通路脇まで辿り付く頃には、より鮮明に禍々(まがまが)しき旋律(せんりつ)を、聞き取る事が出来るようになっていた。

日没間際とは言え、それまでである程度の明るさを持って、周囲の様相を見て取る事が出来た訳だが、今、彼女の目の前に横たわる通路に限って言えば、完全なる闇に取り込まれた世界と言っても過言ではない。

通路入り口の左右に置かれた、二匹の巨大な虎の石像を見ても解る通り、そこから先は、屋敷内でも一際異様な雰囲気を放っている様にも見受けられた。

彼女は、徐に短銃を握り締めた右手拳にグッと力を入れると、激しい躍動を奏で始めた不気味な音色に合わせ、意を決したように真っ暗な通路内へと突き進み始めた。

完全に闇の中へと埋没した通路内には、特に何か仕掛けが施されてる風でもなく、彼女の行く手を遮るような存在は何も感じられない。

ただ、流れ来る不気味な旋律(せんりつ)だけが、ゆるりゆるりと歩を進める度に、次第にその大きさを増して行くのが解った。

やがて彼女は、一際大きな音を垂れ流す部屋の扉の前で足を止めると、手探りで扉の取っ手を探り当て、静かにゆっくりとそれを引く。

僅かに開いた扉の隙間から漏れ出す一段と大きな音の波動と共に、

ほのかに流れ来る甘くて心地よい香りも感じ取った彼女は、部屋の中から全く光が漏れ出さない事に懐疑的心情を沸き起しながらも、確実に人が居ると言う気配を直感した。

するとその直後、盛大な盛り上がりを見せ始めていた不気味な旋律が、激しく乱雑した異音の集合体によって唐突に終止符が打ち付けられ、それと同時に、一斉に通路内の灯りが灯された。

彼女は一瞬、見つかった!?・・・と言う反射的意識の激しい突き上げにより、咄嗟に扉の取っ手から左手を引き剥がすと、眩さから細めた目元へと宛がい、仕切りに辺りの様子を警戒した。

しかし、如何なる事態に対しても、直ぐに対応出来るよう、若干身を屈めるようにして短銃を構えて見せた彼女の行動を他所に、新たに示し出された次なる異変は、彼女の予想とは全く相反した、実に静かなる現象だった。

最後に打ち付けられたパイプオルガンの音色だけが、掻き消えそうで掻き消えない微かな余韻を周囲に漂わせる中で、彼女の手を放れた部屋の扉が、無音なるままにゆっくりと開かれていく。

遊ばれてたのね・・・。

この時、彼女はそう思った。

開かれた扉の向こう側、彼女が構えた短銃の先には、部屋の壁一面にへばり付く様に設置された、巨大なパイプオルガンが横たわっており、そしてその前の演奏席には、真っ黒で清楚な執事服を纏った

老人が一人座っていた。

老人はゆっくりと立ち上がり、背筋を伸ばしたまま行儀良く彼女の方へと向き直ると、右手をお腹の辺りにそっと添えて、彼女に深々と一礼を施した。

「ようこそ。ランガ・カカの屋敷へ。」

静かに頭を擡(もた)げ、真っ白な口髭を小さく上下させながらそう言い放った老人は、面白くも無さそうに仏頂面(ぶっちょうづら)を浮かべる彼女に対して、優しげな笑みを一つ振り撒いて見せると、静かに部屋の奥の方へと手を差し伸べた。

それは言うまでも無く、彼女に部屋の中へと入るよう促す仕草であり、老人は無断で屋敷の中へと立ち入った彼女の非を問うでもなく、あたかも最初から彼女が来る事を予見していたかの様な素振りで、すんなりと彼女を迎え入れる態度を示し出して見せたのだ。

雪の様に澄んだ白髪と、何処か人の良さを匂わせる、優しげな瞳を持つこの老人が、つい先ほどまで、屋敷中に不気味な音色を響かせていた当の本人には間違いないのだろうが、老人の醸(かも)し出す雰囲気は、そう言った人の負たる感情を全く刺激しない、物柔らかさを感じさせるものがあった。

やがて彼女は、心の中に生じた警戒心を、更に強く脳裏に渦巻かせながらも、不思議と毒気を抜かれてしまった様子で、構えた短銃を静かに下ろした。

そして、全く微動だにしない老人の立ち姿に、一瞬だけチラリと視線を宛がうと、老人の誘いに従ってゆっくりと部屋の中へと歩を進

めた。

元はといえば、彼女もそれが罠である可能性を十分考慮した上で、この屋敷を訪れたのであって、今更目の前に鬼が出ようが蛇が出ようが、何ら臆するつもりもなかった訳だが、彼女もまさか、こんな子供染みた悪戯を持って迎えられようとは、思っても見なかった事だ。

「ようこそおいでくださいました。私共のお持て成しは如何でしたか？」

思ったよりも小狭い部屋の雰囲気は、外界を覗き見る窓のようなものが、一切取り付けられていないせいもあってか、何処か陰湿な雰囲気を帯びた粘着性の高い空気に包み込まれていた。

部屋の四隅に置かれた古めかしいスタンドライトからは、煌々（こうこう）と煌くオレンジ色の光が滲み出しており、部屋の様相を窺い見るのには十分な程の光量が保たれていたが、こう言った類の建物には、絶対的必需品であるはずの巨大シャンデリアの姿も無く、程高く設定された天井付近は、何処か閑散とした雰囲気を漂わせていた。

部屋の壁面は一様に淡い薄黄色で統一され、丸みを帯びた大きな柱にも、全くこれと言って目立った装飾などは施されていない。

大豪邸と称するに相応しき屋敷の中にあって、今一つ精彩さを欠くこの部屋は、恐らく客人を持て成すような品性漂う応接間ではないのだろうが、部屋の奥で一段高い場所に座っていた一人の少年は、贅を凝らすより趣を添えると言った趣向の持ち主・・・と言う事なのだろう。

綺麗な翡翠色の髪の毛を持つその少年は、いまだ二十歳にも満たない幼さを残した顔立ちであり、何処か興味有り気な視線を彼女へと括り付けると、綺麗に澄んだ声色を持って、形式的挨拶文をそのまま彼女に投げかけて来たのだ。

「最悪ね。余り大人をからかうものじゃなくってよ。」

子供・・・？と、彼女は一瞬虚を突かれた様子で少年の眼差しを見返し、何処かむしゃくしゃした気分を吐き付けるように、邪険な言葉を投げ返した。

そして、その少年の直ぐ左脇に立っていた黒髪の女性へとチラリと視線を宛がい、更にその反対側の右脇に立っていた厳つい中年男性を経由して、再び翡翠色の髪を持つ少年へと視線を戻す。

少年の脇で姿勢良く直立した二人の男女は、あからさまに悪意ある視線を、彼女に突き付けている様にも感じられたが、彼女は然して気にも留めない様子で無視を突き通した。

「いやぁ。私も驚きましてね。まさか貴方のような可愛らしい女性が訪ねて来るなんて、思っても見なかったものですから。急遽考え付いた催し物を持って、貴方を持て成そうと考えたのですが、どうやらお気に召さなかったようですね。」

少年は彼女にそう語りかけながら、右手を小さく振り翳すと、パイプオルガンの傍らに佇んでいた老人に退出を促した。

そして次に、黒髪の女性の方を向いて何やら目線で合図を送ると、加えて中年男性の方にも左手で新たなる指示を出す。

「私もまさか、貴方みたいな子供に迎えられるとは思ってなかったわ。私、この屋敷の主人にお会いしたいの。お取次ぎ願えるかしら？」

その少年が醸し出す雰囲気と、周囲の者達の振る舞いとを見て取れば、それは恐らく問うまでもなく解りきった事実なのであろうが、彼女は業とらしく周囲をキョロキョロと見渡すと、白々しくも敢えてそれを確認する問い掛けを投げかけた。

「この屋敷の主は私ですが、何かご不満でしょうか？」

「そりゃあ不満よ。折角苦労してここまで辿り着いたって言うのに、ようやく出会えた相手が、貴方みたいな子供だったなんて。業と食い付き易い撒き餌を目の前に曝しておきながら、かなり面倒臭い手順を踏むよう仕組まれていたのも、癪に障るし、私は子供の遊びに付き合っている暇はなくってよ。」

「それは申し訳ありません。私も貴方の力量を知りたかったんです。」

そう言って、殊勝にも謝罪の言葉を並べ返した少年は、少しも悪びれる様子もなく、彼女に無邪気な笑顔を振り撒いて見せる。

彼女は、そんな少年の醸し出す友好的振る舞いから一度視線を切り離すと、何処か心の中に溜まり込んだモヤモヤを拭い切れないと言った様子で、大きな溜め息を一つ吐き出した。

そして、程無くして部屋の隅から椅子を持ち出してきた中年男性へと視線を宛がうと、直ぐに「このままでいいわ」と、その好意を切

り捨てる言葉を投げ付け、綺麗な紫色の髪の毛を妖美に掻き揚げて見せた。

やがて、背後で静かに部屋を出て行った老人が、退出間際に部屋の扉を閉める音を聞いた彼女は、訝しげな表情を浮かべた中年男性の視線を完全に無視したまま、部屋の奥にある小さな扉へと姿を消し行く、黒髪の女性へと視線を据え付けた。

これまでの彼等の振る舞いを見て取る限り、何か怪しげな企てを持って罠に落としいれようと言う、無粋な行為に及ぶ気配は微塵も感じられない。

勿論、安心だけさせておいて、いきなり背後から襲い掛かる可能性も無きにしも非ずだが、この少年が本当に依頼人本人であるならば、自分のような小者を陥れて満足するような輩ではないだろう。

彼女はふと、そう思い付き、不思議な雰囲気を漂わせる少年の方へと視線を戻すと、ようやく妖しく笑みを浮かべて見せた後で、静かに相手の真意を探るべく会話へと突入を開始した。

「・・・で?私の力量を知って、貴方はどうするつもりなのかしら?」

「ご覧の通り、私は帝国の人間でして、帝国国内の時事に関しては、それなりに精通している自負がありますが、帝国国外の時事となると、そう簡単にはいきません。見た所、貴方はトゥアム共和国にも活動拠点を持つ、非常に優秀な人物であるようですし、できれば私に協力してもらいたいと、そう思っていたんですよ。」

「そう。・・・やっぱり諦めた・・・って訳じゃなかったのね。」

「諦めた？どうしてですか？」

「だってそうでしょう？あの事件以降、何か新しい指示があるのかと思って、黙って大人しく待ってれば、全く何の音沙汰も無し。貴方が別ルートを使って、新たに行動を起こしている風にも見えなかったし、そう思われても仕方が無い事じゃなくって？あんな強力な爆弾を野放しにしたまま、貴方は一体何を企てようとしているのかしら？」

「別に野放しているつもりはありませんよ。私が提供した情報によって、「貴方達」が彼女を監視下に置くであろう事は予測してましたし、次の機会が来れば、また貴方に協力を要請しようと思っていました。」

「次の機会？」

「勿論、それがいつだと、直ぐにお約束できる様なものではありませんが、時が来たら、追って私の方から連絡します。今回の事で、貴方が非常に優秀な人物である事が解りましたし、それを利用しない手はありませんからね。私が一体何を企てているのか・・・と言う質問に関しては、直接私の口からお答えする事は出来ません。ですが、実際に起きた出来事を順に並べて検証してみれば、自ずとその答えは明らかになると思います。貴方も既に、それとなく感じ取ってはいるのでしょう？」

そう言って、可愛らしい微笑み投げかけた少年の表情をじっと見つめ、その中に、何処か異様な底暗さを感じ取った彼女は、やがて、右手に握り締めたままとなっていた短銃を、右太腿に括り付けたホルスターの中へと仕舞い込んだ。

そして、奥の部屋へと姿を消していた黒髪の女性が、二人分の飲み物を乗せた四角いトレーを持って、直ぐに部屋の中に舞い戻って来た様を見て取ると、少年の脇に直立した中年男性の醸し出す攻撃的威風と合わせて、妙に納得感を滲ませた表情を浮かべ、静かに腕組みをした。

「まあ、それなりにね。でも、だからこそ腑に落ちないのは、何故貴方があの小娘を放置したままにしておくのかって事よ。貴方にとってあの小娘は、最終的には邪魔な存在になるんではなくって？」

「そうですね。彼女が本当に本物なのであれば、そう言う事になるでしょうね。」

「本当に本物なのであれば？？・・・どういう事？？」

少年の発した思いがけない言葉に、思わず驚きの声を張り上げてしまった彼女は、黒髪の女性が差し出した珈琲カップを手に取り、暢気にその香りを嗜むかの様な素振りを見せる少年の姿に、多少じれったさを感じつつも、じっと少年の姿を見据えたまま、次なる言葉を待った。

やがて、残る一つの珈琲カップを差し出してきた黒髪の女性に、無言なる断わりを突き返してやった彼女は、「飲まないんですか？美味しいですよ？」と、あっけらかんとした表情で口を開いた少年の方を睨み付けた。

少年はゆっくりと珈琲を二口ほど啜り、手に持つ珈琲カップを、右手側にあった木製の置き台の上に載せると、静かに彼女の方へと向き直って、興味津々なる視線を彼女に据え付ける。

「貴方から戴いた彼女の写真。あれは私が探している人物とは多少異なる人物なのではないかと、そんな気がしてならないのです。本当に彼女で間違いないのでしょうか？」

「何言っているのよ。ＤＮＡ鑑定結果もちゃんと添付して送信したでしょう？私が直接彼女から毛乳頭付き毛根を採取したんだから、絶対に貴方の探していた当の本人で間違い無しよ。それとも貴方・・・まさか私が鑑定結果を捏造（ねつぞう）したんじゃないかって、そう思ってるんじゃないでしょうね。」

「いえいえ。それならそれで良いのです。・・・ふーん。そうですか・・・。」

何？何なの？この子の反応は・・・。

この子は、あの小娘を探してたんじゃないの？

帝国の皇女である、あの小娘を・・・。

ＤＮＡ鑑定結果を蔑（ないがし）ろにしてまで、写真の見た目だけで、その事実を疑ってかかるなんて・・・。有り得ないわ。・・・一体どう言う事？

見た目・・・。見た目だけで判断・・・。

・・・と言う事は、実際にこの子は、自分の探している人物を、直近、何処かで見た事がある・・・って、そう言う事に・・・。

「解りました。少し思い当たる節があります。」

するとやがて、両者の間にしばし形作られる事となった沈黙の時を経て、彼女よりも先に新たなる道筋を見出した少年が、そう発した言葉と共に、その身を椅子から立ち上がらせた。

そして、一段高い場所から彼女を見下ろすように視線を据え付けると、ゆっくりと両手を後ろ手で組み、不意に彼女の視線とかち合ったタイミングに合わせて、続く言葉を連ね出して行った。

「貴方にとっては、多少後ろ向きな内容になるかも知れませんが、私にはどうしても確認しておきたい事があるんです。貴方にはそれを手伝って欲しいのですが、いかがでしょうか？勿論、報酬もそれなりにお渡ししますよ。」

彼女はその時、脳裏に渦巻く激しい混乱の淵から中々抜け出す事が出来ず、少年が突き付けた要求に即答する事が出来なかった。

しかし、この少年が一体何を目論んでいるのかと言う真意を含め、その背後に見え隠れする真の黒幕たる存在に、少しでも近付く事が出来るのであれば・・・と思い付くと、彼女はニヤリと不敵な笑みを浮かべて、短く「いいわ」と返事を返して見せた。

そしてやがて、彼女は小さく吐き出した溜め息と共に、紫色の髪の毛をなまめかしく掻き揚げて見せると、黒髪の女性へと視線を宛がい、こう言った。

「やっぱりそれ戴くわ。少し喉が渇いちゃった。あ、勿論、中に毒が入ってなければの話だけどね。」

すると少年は、黒髪の女性に一瞥（いちべつ）をくれ、少しだけ不思議な間を置

いた後で、静かにこう言って見せた。

「オルティア。この方にもう一杯珈琲を入れて差し上げて。」

「解りました。」

彼女は一瞬、その二人のやり取りに驚いた表情を浮かべ、俄かに険しさを増した鋭い視線を持って、少年を睨み付けたのだが、そんな彼女の反応を見て取った少年は、何処かクスクスと込み上げる笑いを堪えきれない様子だった。

「あっははは。冗談ですよ冗談。そんなに怖い顔しないでください。可愛らしい容姿に似合わず、貴方が余りに堂々とした立ち振る舞いを見せるので、少し驚かせて見たかったんです。申し訳ありません。」

彼女はあからさまに苛立ちを滲ませた口元を大きく尖らせると、呆れたように短く鼻から息を吐き出しながら、少年の醸し出す表情をじっと観察し続けた。

自分の仕出かした子供染みた悪戯に、無邪気な笑顔を浮かべて喜ぶ少年の様は、まさしく本当にまだ子供である雰囲気を拭い切れない、幼さを感じさせるものがあったが、彼女は何処か、その笑みの中に、得も言われぬ不気味さを感じ取ってしまった。

０７－０６：〇見据えし道の色

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ６「見据えし道の色」

どっぷりと闇に浸かった綺麗な街並みを一望できる、巨大な楼閣の一室において、じっと外界の様相へと視線を釘付けていた中年男性が、並々とブランデーを注ぎ入れたグラスを口元に宛がい傾ける。

ほんのりと甘い香りを漂わせるブランデーは、確かに最上級クラスの名に恥じぬ気品と風格を兼ね揃えている様で、男は静かに両目を瞑り、その味わいに舌鼓を打つと、僅かに口元を緩めてゆっくりと息を吐き出した。

そして、再び絵に描いたような艶やかさを滲ませる、夜の街並みへと視線を舞い戻すと、やがて、巨大なガラス窓に背を向けるように踵を返し、テーブルの脇に佇む、凛とした女性ウェイターに目配せをした。

窓際の程近くに置かれた長テーブルの上には、数々の料理が所狭しと並べられ、少しばかり光量を落とした心地よい照明の雰囲気も相俟って、一見して高級レストランかと見間違わんばかりの様相を呈していたが、程無くして、女性ウェイターが礼儀正しく一礼を施して退出すると、その部屋にはこの男を含め、もう一人の若い少年以外に誰も居なくなってしまった。

茶色い髪の毛をキリリとオールバックに纏め上げた中年男性の風貌は、常に穏やかな雰囲気を纏った品の良い紳士的風格と言った所で、男は無意識の内に着込んだ高級スーツの襟元を正すと、ゆっくりと

自分のテーブル席へと歩み寄った。

そして、テーブルを挟んで対席に座る少年へとチラリと視線を宛がうと、その少年が食事の手を休めた間隙を見計らって、優しげな笑みを投げかけた。

（クオタール）
「いかがですかな？本日の料理は、君のお口に合いますかな？」

すると少年は、素っ気無く息を吐き出して見せた後で、目の前に並べられた数々の料理をぐるり見渡し、黄緑色の柔らかな髪の毛を静かに右手で撫でながら、率直な感想を述べた。

（サルムザーク）
「そうですね・・・。はい。・・・と、言いたい所ですが、正直、私の口には勿体無い料理ばかりですね。私の口に料理が合うかどうか、と言うよりもまず、料理に私の口が合っていない様に感じます。こう言ったものは、もう少し私が身の丈に合う成長を遂げてから、お会いしたかったですね。」

（クオタール）
「おやおや。これはまた以外にご謙遜なさる。聞く所によると、我が道阻む者全てに挑みかかる若き勇者と、窺っておりすが？サルムザーク陸等三佐。」

（サルムザーク）
「真っ向から否定できないのが痛い所ですね。名士たる軍の重鎮方が集う軍上層部会議の場において、何の経験も無い、何の実績も無い、私のような若輩者が生きて行く為には、それなりの若さに託けた勢いと言うものが必要です。どっしりと構えて対処できる風格さ

え備わっていれば、無闇に事を荒らげる必要も無いのですが、何分私にはまだ、そこまでの余裕は無いもので。」

（クオタール）
「ふむ。」

思ったよりも落ち着いた雰囲気を纏っているのだな・・・と、この少年に対する第一印象を脳裏に刻み付けた中年男性は、穏やかな表情を浮かべたままゆっくりと自分の席へと腰を下ろした。

そして、テーブルの片隅に置かれていたブランデーボトルへと手を伸ばすと、いまだノンアルコールしか口にしていないサルムの事を気遣い、静かにボトルを翳してみせる。

（サルムザーク）
「あ、いえ。私は結構です。」

（クオタール）
「おや。そうですか。今日日若い者が珍しいですな。ささ、どうぞ遠慮無く召し上がってください。料理が冷めないうちに。」

（サルムザーク）
「はい。それでは遠慮なくいただきます。」

断られたブランデーボトルを徐に自分のグラスへと傾け、一見して軍人とは思えない一般的服装に身を包んだサルムへと視線を差し向けた中年男性は、作り笑いにも見えなくも無い微笑みを浮かべると、サルムに食事を再開するよう促した。

中年男性の醸し出す視線の奥底には、この幼さで軍の陸等三佐官か・

・・などと言う、好奇的な色合いが交えられている様にも感じられたが、サルムは少しもそれを気にする素振りを見せず、目の前に並べられた料理へと意識を埋没させた。

現在、二人が居るこの部屋は、ランベルク都市中心部にある、「アシュラート・ブルージュ」と言う高級ホテルの最上階スイートルームであり、何処も彼処も非常に高踏的な雰囲気を漂わせている。

同都市最大の高さを誇る「グラスタワー」には及び付かないものの、ランベルク都市の夜景を一望できるその見晴らしの良さは、まさに珠玉の絶景と言うに相応しいものがあり、勘所を押さえて要所に配された数々の装飾品と、綺麗なクリスタルガラスで構成された巨大なシャンデリアが、艶やかに光り輝く大都市の夜景に、上品な華を添えていると言った感じであった。

頭上から降り注ぐ温和なオレンジ色の光に包み込まれた中で、ほのかに漂う心地よい音楽を聞き流しながら、カランと言うグラスに氷を入れる綺麗な音を聞いたサルムは、やはり場違いだな・・・と感じた直後、目の前の中年男性に視線を据え付けた。

「クオタール・ディロン」と言う名のこの中年男性は、トゥアム共和国内でもかなりの実力者と称される大物政治家の一人であり、端整な顔立ちと温厚な人柄から、共和国国民からの人気も非常に高く、周囲からの信頼も厚い一角の人物だ。

本来であれば、彼のような大物政治家が、佐官成り立ての若造一人を相手にして、無意味な食事会を開く事など有り得ない話なのだが、今回サルムをこのホテルへと呼びつけたのは、他でも無い彼自身であり、その持て成し様からも窺える通り、何かしらサルムに用事がある事だけは間違いなかった。

勿論、サルム自身、その用事と言うものについて、全く心当たりが無かった訳ではなく、サルムは凡(おおよ)そ見当の付く範囲内で思考を巡らせると、じっとクオタールの方を見つめて出方を窺った。

右手に持ったアイストングを使い、アイスペールから掴み取った氷を、二、三、グラスへと放ったクオタールは、そんなサルムの視線に軽く一瞥(いちべつ)をくれると、静かに持ち替えたグラスを口へと運び、一口ほどのブランデーをもって口内を湿らせた後で、ゆっくりと口を開いた。

（クオタール）
「そう言えば、明日からの三日間。大規模な軍事演習が予定されているようですが、準備の方はもうよろしいのですかな？」

（サルムザーク）
「準備・・・と言う程の準備は、今回は特にしてません。勿論、必要最低限の準備作業は部下達に任せてきましたが、明日からの軍事演習では、緊急時を想定した訓練も兼ねたいと考えていまして、逆に準備作業が出来ない様、ほとんどの部隊活動を休止状態にして来ました。」

（クオタール）
「ほーう。それはまた中々に思い切った事をしましたな。それで他の二部隊に勝てますかな？」

（サルムザーク）
「私は演習において相手に勝つ事、良い成績を残す事に、それほど強いこだわりを持っていません。演習を実施するに当たり、一番重要なのは、本番に向けた様々な問題点を抽出する事、そして、部隊

内の連携力を強化する事だと考えています。勿論、いい結果を残すに越した事はありませんが、一度ボロボロに打ち負かされて見るのも、面白いのでは無いかと思っています。」

（クオタール）
「ふーむ。」

何かに臆すると言う事を、全く知らぬ様な素振りで、淡々と自分の思いを連ね出す若い士官を見遣りながら、クオタールは思わず感嘆の意を交えた吐息を漏らすと、あからさまに綻ばせた口元に、再びブランデーを運び込んだ。

周囲の風説を一顧だにせず、自分自身の考えをしっかと真っ当しようとするその気概は、彼の心の中に存在する、確かな芯の格調高さを窺わせるものであり、クオタールは、自身の最終的人選に誤りが無かった事を再認識すると、大きなソーセージへと齧り付いたサルムに意味ありげな視線を投げ掛け、やがて、本題へと繋がる会話を演出して行った。

（クオタール）
「しかしまあ、今やトゥアム共和国の英雄とも称されるようになった君の事だ。そう易々と悲観的結果に甘んじるつもりもないのでしょう？」

（サルムザーク）
「英雄だなんてとんでもない。私は単に周囲にあるものを利用して来たに過ぎません。自分一人では何も出来ない、些細な人間だと思っています。」

（クオタール）

「いやいや。それこそが、君の非凡たる所以を物語っているのですよ。周囲にあるものを有効利用する所か、その存在にすら気付かぬ者達が数多い中で、そう言った真に利用すべきものをしっかと見出し、そしてそれを自分の力として利用する。それはまさに、他人には無い秀でた能力だと私は思います。ディップ・メイサ・クロー作戦で、十倍近い敵軍を殲滅させた戦術的手腕も然る事ながら、オクラホマ攻略作戦で、トゥアム共和国を歴史的大勝へと導くよう、様々な根回しを施した戦略的手腕も見事なものです。これに更に政略的手腕をも加え入れたのなら、もはや向かう所敵無しと言った所でしょう。」

（サルムザーク）
「政略的知識を身に付ける事に、全く興味が無いとは言いませんが、私は軍人ですので、政治に関わる様な真似は出来ません。この国は貴族主義に塗れた軍事国家とは違うのですから。」

（クオタール）
「お若いのに中々の良識家でいらっしゃる。特佐が後釜として唯一推す人物と言うのも、解る気がします。」

クオタールはそう言って、再びブランデーグラスを口に運ぶと、残るブランデーを一気に口の中へと流し込み、軽い笑みを浮かべて見せた。

そして、空になったグラスを静かに置き、テーブルの上でゆっくりと両手を組み合わせると、食事の手を休めて真剣な眼差しを送るサルムの表情を覗き込んだ。

（クオタール）
「特佐の元で様々な任務をこなして来た君の事です。私が今日、君

をここに呼んだ理由も、凡(おおよ)そ察しが付いているのでしょう？」

（サルムザーク）
「そうですね。恐らくですが、大体察しは付いています。」

（クオタール）
「そうですか。それならば話は早い。改めて申しますと、私はトゥアム共和国のみならず、その周辺諸国を交えた、ムーンスローブ大陸東方地域全体の平和維持の為に活動している、「メリオル」と言う組織の人間です。組織を構成する人員の多くが、他国から流れてきた移民者達で占められていますが、私を含め、トゥアム共和国出身者も数多く所属しています。以前まで君の上官だったゼフォン特佐も、組織の重要な役割を担う仲間の一人でした。」

（サルムザーク）
「はい。そこまでは私も知っています。」

サルムはこの時、完全に過去形を用いて言い放ったクオタールの視線を、あからさまに見てそれと悟られぬよう、心の中で睨み付けた。

そして、この次に提示されるであろうクオタールの要望に、答えるべき回答を脳裏に強く反芻(はんすう)させると、一拍ほどの不思議な間を取ったクオタールの表情を見遣りながら、じっと彼の言葉を待った。

（クオタール）
「特佐を失って以来、我々はずっと彼の後釜と成り得る人物を探していました。軍内部でもそれなりの地位に就き、将来性も見込める優れた人物をです。我々も多角的な視点から数多くの候補者をリストアップし、何度と無く議論を重ね続けてきましたが、最終的に、特佐が最も信頼を寄せる君に、辿り着いたと言う訳です。私も今日

初めて君とお会いして、特佐の言葉通りの非常に優れた人物である事を確信しましたし、是非とも君に、ゼフォン特佐の後釜を担ってもらいたいのですが、いかがでしょうか？」

（サルムザーク）

「私はこれまで、ゼフォン特佐には色々とお世話になってきた身です。特佐がなされようとしていた事に対しても、それなりの理解があるつもりです。特佐への恩返し・・・と言うのも少し変かもしれませんが、特佐が真に目指されていたものの為に働きたいと言う思いもあります。こんな私で良ければ、喜んで特佐の後任を勤めさせていただきます。」

（クオタール）

「そうですか。それはありがたい。君ならきっと、そう言ってくれるだろうと思っていました。実を言うと、ゼフォン特佐からは、出来る限り君の意志を尊重するよう釘を刺されていたのです。君が快諾してくれて、私もホッとしていますよ。」

・・・と言う事はやはり、元々この役割を担う者に対しては、何かしらの圧力を持って望んでいた・・・と言う事か。

サルムはふと、そう思い付くと、不気味に見え始めたクオタールの笑みから視線を逸らし、小脇に置いてあった水の入ったコップを手に取った。

そして、何処か浮ついた気分を落ち着かせるように一口だけ水を含み込むと、やがて再びクオタールから浴びせかける視線を押し戻すかの様にして、じっと彼の両目を見据えて口を開いた。

（サルムザーク）

「一つだけお聞きしたい事があります。」

（クオタール）

「なんでしょう。私にお答えできる事なら、何なりとお答えしますよ。」

サルム自身、その問いを投げ掛ける事によって、このクオタールと言う人物に懐疑的思念を植え付けてしまう、自身の立場を悪くする切欠と成り得る事を理解していた。

しかし彼は、ゼフォンの後釜と言う役割を担うに当たり、どうしても聞いておかねばならない事があった。

（サルムザーク）

「組織は・・・特佐を見限ったのですか？」

サルムの放った言葉は、静かでいて温和な雰囲気によってオブラートされたものだったが、その中に含み込んだ棘の全てを隠し通す事は出来なかった。

クオタールは、不意にサルムとの視線を断ち切ると、ゆっくりと席を立ち上がり、美しきランベルク都市の夜景を映し出す窓際まで、静かに歩を進めた。

そして、艶（あで）やかに光り輝く街の様相を、じっと見下ろしながら後ろ手で両手を組み、サルムに背を向けた状態のままで回答を示し始めた。

（クオタール）

「君としてはやはり、その事が気になるようですね。無理も無い事

です。よろしい。お答えしましょう。我々の組織も、何も好き好んで彼を排した訳ではありません。寧ろ、これまで組織の為に色々と尽力してくれた彼の事を救い出そうと、様々な策を思案してまいりました。しかし、ＢＰ事件の発端となった要因、とある重大な事実に関して、彼が未だに黙秘を続けている以上、組織として彼を救う事は出来ないのです。」

（サルムザーク）
「ＢＰ事件の発端となった要因・・・重大な事実・・・ですか。」

（クオタール）
「そうです。君も知っての通り、我々の組織は、帝国のロイロマール公爵と非常に親密な関係を持っています。そしてそれは、親ロイロマール派である帝国領辺境貴族達との関係についても同様です。これまで我々は、帝国国内で絶大な権力を握るロイロマール公爵と手を結ぶ事で、ムーンスローブ大陸東方地域の平和と安全を確保しようと考えていたのです。しかし、それは言うまでも無く、帝国国内での勢力図が一変するまでの話であり、我々は、ストラントーゼ派貴族達が、帝国の実権を握る様になってからは、それまでロイロマール派寄りだった活動を限定化するよう、組織の方針を転換する事にしました。我々が現在でも、親ロイロマール派組織である事に変わりはありませんが、それでも、帝国最大派閥にまで上り詰めたストラントーゼ派貴族達と、あからさまに敵対するような行為、彼等を著しく刺激するような行為だけは、絶対に避けるよう配慮してきたのです。勿論それは、帝国と事を構えたくない我がトゥアム共和国政府の、トゥアム共和国国民全員の意向を汲み取っての判断であり、私個人としても、已む無き選択であったと思います。しかし、そんな我々の苦渋の決断とは裏腹に、ゼフォン特佐は、我々の全く預かり知らぬ所で、ロイロマール派貴族達と密なる関係を保ち続けていた様で、最終的には、ＢＰ事件を勃発（ぼっぱつ）させる、何かしらの要因

を作り出してしまったのです。既に帝国と戦争状態に陥ってしまった今、我々はロイロマール派貴族達を支援する事以外に、何ら有効な手立てを見出せない状況へと嵌り込んでしまいましたが、それでも、組織の方針を完全に無視し、独善的行為に及んだ彼の真意が明確にならない限り、組織として、彼を救う事は出来ないのです。尤も、戦争を引き起こすに至った人物を、簡単に救い出す事など出来やしないのですがね。」

（サルムザーク）

「ＢＰ事件に関しては、未だその多くが謎に包まれたままですが、組織がそれまで行ってきた活動と、何ら因縁が無いと言いきれますか？」

サルムは、それまでメリオルと言う組織が行ってきた行為、彼等自身が自ら行ってきた行為を、棚上げにして進められるクオタールの説明に、多少嫌気が差した様子で強く言葉を吐き付けた。

すると、クオタールはゆっくりとサルムの方へと向き直り、静かに両目を瞑って一つ溜め息を吐き出して見せると、優しげな様相を突き崩さぬまま、サルムに次なる言葉を示し出した。

（クオタール）

「君も中々に歯に絹を着せぬお方だ。君のそう言った所が、私には非常に魅力的に映ります。何ら因縁が無いか・・・そう問われれば、あったのかも知れません。ロイロマール派貴族達と密なる関係を保つ・・・と言う構図を作り出したのは我々ですし、特佐にその役割を担わせたのも我々です。しかし我々は、ストラントーゼ派貴族達が著しく台頭し始めた頃、ディユリス皇配殿下が暗殺された頃には、既にその活動を限定化し始めていたのです。そうですね。今からもう、四年も前になるでしょうか。そして昨今では、ロイロマール派

貴族達との接触を、極力皆無に等しい状況まで落とし込み、ストラントーゼ派貴族達との関係をより強化しようと全力を尽くしていました。それまで我々が築き上げてきたロイロマール派貴族達との関係が、ＢＰ事件に何ら関わり合いが無かったと証明するものはありませんが、それでも我々組織として、ストラントーゼ派貴族達を刺激するような軽率な行為は、一切行っていなかったと断言できます。ＢＰ事件が勃発（ぼっぱつ）する直前、ロイロマール派貴族達と何かしら会談の予定があったかと言えば、全くありませんでしたし、我々もブラックポイントで帝国軍兵士達の遺体を、多数発見したとの報告を受けた際には、相当錯乱してしまいましたよ。」

（サルムザーク）

「・・・。そうですか・・・。」

サルムはふと、そう短く返答を返して見せると、一瞬にして火の気を生じさせた感情を、強引に押さえ付けるかのようにして、切り捨てた視線を手に持つコップへと据え付けた。

そして、綺麗なシャンデリアの光を映し出す、ほのかな水面（みなも）の揺らめきの中に、しばし意識を漂わせると、じっと黙り込んだまま、脳裏に浮かび上がった言葉を反芻（はんすう）させた。

「幾ら綺麗事を並べて民衆の支持を集めようと、振るう力が純白の力だけでは、守れるものも守れないのが世の常。様々な色を必要な時に必要なだけ織り交ぜて、思う理想を目指して描き出すのだ。君にもきっと、解る時が来る。」

振るう力が純白の力だけでは・・・。

様々な色を必要な時に必要なだけ織り交ぜて・・・。

ゼフォンが発した言葉の意味。

ゼフォンの求めた純白では無い、何かしらの色が交えられた力。

それは一体、何なのか。

それは一体、どんな色を放つものなのか。

その色を生み出す為には、何色が必要なのか。

様々に思案を巡らすも、必死になってその答えを導き出そうとするも、この時のサルムには、全く解らなかった。

やがてクオタールは、俯(うつむ)いたまま、一言も喋らなくなってしまったサルムの姿を、チラリと見遣った後で、再び自分のテーブル席へと歩み寄り、ゆっくりと腰を下ろした。

（クオタール）

「直接特佐に関わりがあるかどうか解りませんが、ＢＰ事件に関して、とある噂を耳にしました。」

そして、空になった自分のグラスを左手に取り、ブランデーボトルを右手に取り、静かに新たなるブランデーを注ぎ入れながら、先ほどと変わらぬ口調でサルムへと語りかける。

（サルムザーク）
「とある噂・・・ですか？」

（クオタール）
「根も葉もない瑣末な噂ですよ。余りにも低俗な内容なので、逆に耳にこびり付いて離れなくなりましてな。酒のつまみには丁度良いかも知れません。」

サルムは何処か、興味津々と行った眼差しをクオタールへと括り付け、直ぐに「どんな噂なのです？」と、彼の言葉尻に噛み付く様に言葉を被せた。

するとクオタールは、ニッコリと不敵な笑みを浮かべて見せ、ブランデーが零れぬようグラスを見守る視線を、一度だけサルムの表情へと宛がうと、本当にくだらない低俗な内容を彼に示して見せた。

（クオタール）
「実は帝国の皇女が、まだ生きているのでは無いか、・・・と言う噂です。しかもその皇女は、このトゥアム共和国の何処かに潜伏しており、ＢＰ事件は、その皇女を巡るものだったと言う、呆れた内容まで付け添えられていました。挙句の果てには、それに増長した一部の過激派が、皇女を匿っていたのはゼフォン特佐であったと、何の臆面も無く喧伝し始める始末。流石にこれには、私も笑うしかありませんでしたな。」

くだらない・・・。

直後、サルムは、激しく意気消沈する気分に苛まれながら、大きな溜め息を吐き出してしまった。

（サルムザーク）
「本当に身も蓋も無い話ですね。」

（クオタール）
「はっはっは。一体何処の誰が、何の目的で、こんな瑣末な噂を撒き散らすのか、私などには皆目見当も付きませんが、いつの時代にも、こう言ったつまらぬ与太話で、盛り上がる輩達はいるものです。君はこう言った話はお嫌いですかな？どうやら見た所、余り興味が無い様に感じられますが。」

興味があったら、どうだと言うのだろう・・・。

そんな詮無い思考を巡らせてしまったサルムは、改めてクオタールの方へと向き直ると、好奇的色合いを帯びた彼の青い瞳を凝視し、真面目な表情を浮かび上がらせた。

（サルムザーク）
「冗談事は嫌いではありませんが、もう少し捻りを利かせた面白味のある話で無いと、私の興味心は擽られませんね。それよりも私は、どちらかと言うと、もっと現実味を帯びた話の方に興味があります。」

（クオタール）
「そうですか。解りました。話を戻しましょう。」

やがてクオタールは、サルムの言葉に含み込まれていた彼の意向を直ぐに察すると、短くそう返事を返した後で、ブランデーを並々と注ぎいれたグラスを片手に、サルムとじっくりと話し込む体勢を形作った。

そして、もはや小さくなってしまった氷を、グラスを持つ右手で起用にクルクルと回して見せながら、聞く体制万全と言った様相を醸し出すサルムの表情を一瞥し、ゆっくりと口を開き始めた。

（クオタール）

「我々組織が君に望む事。それは君も既に理解している事だと思いますが、何分、こう言った状況下にありますので、組織としての活動方針に、度々変更が加え入れられる恐れがあります。それに今後、君達ネニファイン部隊は、ここランベルクから遠く離れた、パレ・ロワイヤル基地へと配属される事が決定していますし、常にお互いに密なる連絡が取り合えるよう、配慮しておいた方が良いでしょう。そこで一つ、私の方から提案なのですが、連絡要員として我々の方から一名、信頼の置ける部下をそちらに手配したいと思っています。それについては、いかがでしょうか？」

（サルムザーク）

「・・・そうですね。解りました。その点については問題ありません。」

（クオタール）

「ありがとうございます。それではこの件に関しては、私の方で最も適した人物を用意させていただきます。ネニファイン部隊の一員として、全く違和感の無い人物となると、やはり若い人の方が適任・・・と言う事になるのでしょうが、何分、組織の中からの選抜になりますので、都合良くお互いに見知った人物を選抜できるかどうかは、お約束できません。本来であれば、我が不肖の娘などが、その役割に最も適した立場にあるのでしょうが、恥ずかしながら、娘とは余りうまく行っていないもので、恐らく私の言う事など、聞きもしないでしょう。」

（サルムザーク）
「はあ・・・。」

（クオタール）
「どうです?娘は元気にやっているでしょうか?」

それまでとは全く異なる興味心を強く滲ませ、いささか前のめりになる様、テーブルに片肘を付いて見せたクオタールは、不思議な色合いを宿した瞳を、じっとサルムの表情へと括り付けながら、そう問いかけた。

サルムは一瞬、ほのかに不自然な話題の切り替え方をした、クオタールの表情を軽く一瞥すると、もしかして今日、この男が一番聞きたかった事は、これなんじゃなかろうか・・・などと言う、懐疑的思考を沸き起してしまった。

そして、何処かお茶を濁すように、ブランデーを口に含んで見せたクオタールから、一度視線を切り捨てると、軽く溜め息を吐き付けた後で、「すこぶる元気にやっていますよ。」と、短く答えてやった。

勿論サルムは、彼女が部隊内で怒鳴り散らしている、好き放題暴れ回っているなどとは言わなかった。

（クオタール）
「そうですか。それは良かった。親の反対を押し切って家を飛び出した挙句、女だてらに一端のＤＱパイロットなどと、全く身勝手な娘です。私も人並みに親として娘の事を心配しておりましてな。出来の悪い娘ですが、これからもどうか、よろしくお願いします。サ

ルムザーク陸等三佐。・・・ああ、そう言えば、もう直ぐ二佐に昇進されるのでしたな。三佐になられて、まだ一ヶ月程しか経っていないと言うのに、本当に素晴らしい躍進振りです。おめでとうございます。」

（サルムザーク）
「ありがとうございます。」

サルムはこの時、クオタールが放った月並みの賛辞に、礼儀正しくお礼の言葉を投げ返す事を躊躇(ためら)わなかったが、いつまで経っても終わりが見えぬ彼の饒舌(じょうぜつ)振りに、多少辟易(へきえき)してしまった。

彼は、これから自分の歩む道筋が、決して平坦(へいたん)では無い事を自覚していたが、まさに前途多難とはこの事を指して言うのだろう・・・などと、埒(らち)も無い思いを沸き起してしまうと、やがて再び、一際大きな溜め息を吐き出した。

その後、彼等二人だけの夜の密会は、彼の望みとは裏腹に、夜遅くまで続けられる事となった。

０７－０７：〇何処かしらのパトロン

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ７「何処かしらのパトロン」

「・・・続きまして、只今入りましたニュースです。　元ブラックポイント防衛司令官で陸軍特別一佐官、ゼフォン・ウィリアムズ容疑者による陸軍特別国防費横領事件で、ランベルク中央保安局は、この事件に何らかの関わりがあったとされる、ランベルク都市在住の３３歳男性を、重要参考人として特定したと発表しました。繰り返します。つい先ほど、ランベルク中央保安局は・・・。」

地中深くに拵えられたとは思えぬ程の、深緑に包み込まれた地下庭園のど真ん中で、一人静かにベンチの上で寝そべっていた金髪の少年は、ほのかに漂う心地よい自然の香りを感じ取りながら、その虚ろな瞳を天井へと釘付けていた。

ファイバーを通して天井から降り注ぐ初夏の日差しは、時間的にもまだ、肌を撫でる様な弱々しさが残されていたが、それでも切々と休息を欲する彼の意識にとっては、眩しすぎる光だった。

「この男性は、ＤＱ産業界最大手マムナレス・インダストリー社の営業部販売部長で、トゥアム共和国陸軍に配備されている、マムナレス社製ＤＱ三十四機の販売に関して、不正取引をした疑いが持たれています。ランベルク中央保安局は、以前からゼフォン容疑者と、何らかの癒着があったのではないかとの見方を強め、この男性の所在については、未だ明らかになっておりませんが、　ランベルク中央保安局では、この男性の身柄を確保でき次第、事情を聞く方針との事です。以上、

ニュース速報でした。引き続き、次のニュースです・・・。」

上下にジーンズ、足元にスニーカーと言うラフな格好のまま、力なくベンチの上に横たわっていた彼は、胸の内から込み上げる不快感と、ズキズキとこめかみの辺りを襲う、鬱陶(うっとう)しい頭痛に苛まれながらも、せめて少しだけでも睡眠を取っておこうと、徐に右手で目元を覆い隠し、静かに両目を閉じた。

そして、地下庭園の片隅に設置された巨大スクリーンから流れ来る、民間テレビ放送を無意識の内に聞き流しながら、すぐ傍らで舞う心地良い噴水の水音へと、疲れ果てた意識を漂わせた。

昨晩から朝方にかけて、絶え間なく積み上げられたアルコール分の残り香は、既に午前九時を回ろうかと言う時間帯に及んだ今も尚、一向に掻き消えてくれる様子はなく、何処か気持ちの悪い微温湯(ぬるまゆ)の中へと漬け込まれた意識が、グラグラと揺さぶり続けられる様な不快感に喘(あえ)ぎ苦しんでいる。

普段であれば、心地良さの一つも感じる小鳥達の囀(さえず)りも、今はただ、無意味に尖った神経を刺激する一因にしかならならず、彼はやがて、中々に眠りの淵へと落ち込めない苛立ちから、鬱陶(うっとう)しさを込め入れた深い溜息と共に、恨み節な呟きを吐き出してしまった。

（シルジーク）

「畜生・・・。あいつら・・・。本当に明け方近くまで連れ回しやがって・・・。」

勿論彼は、酒に弱い性質(たち)では無く、人並み以上には飲める口なのだが、流石に前日十九時頃から、ぶっ続けで十時間以上も飲み歩かされた後とあっては、酔い潰れた駄目親父張りの醜態を曝け出す自分

の姿を、堰き止める気力すら沸き起こらないようだ。

やがて彼は、まどろんだ表情のまま、ゆっくりと上体を起こすと、ベンチの片隅に置いてあったペットボトルを手に取り、徐に開け放った口の中へと、ガボガボと水を流し込んで行く。

そして、程なくして途切れてしまった水流の余韻に、幾許かの名残惜しさを覚えながら、力なく大きな溜息を一つ吐き出すと、崩れ落ちる様に滑り落ちた右手と共に、がっくりと頭を垂れ下ろした。

直後彼は、ヒンヤリとした水の流れが、身体の芯を辿って全身へと染み渡る心地良さを感じはしたが、それもまた、ほんの一瞬程度の糠喜びに終わり、いまだ生気を欠く彼の瞳に、普段通りの光が舞い戻る様子はなかった。

午後からの演習に向けた事前会議の時間まで、まだ二時間程度程空きがある。

会議が始まる三十分前になったら、サフォークに呼びに来てくれるよう頼んではいるし、それまで、できるだけ、ゆっくり身体を休めておかないと・・・。

彼はやがて、空っぽになってしまったペットボトルを、不意に宛がった視線の先、ベンチ脇に設置されたゴミ箱へと放り投げると、その行く末を見届けぬ内に、直ぐにベンチの上へと横たわった。

ガコン！コロン。

疲れ果てた身体を真に休めたいのであれば、最初から潔く自室へと戻り、柔らかなベッドの上に横たわるのが一番であろう事は、彼自身、考えるまでもなく解りきっていた事だが、それでも尚、彼がこの地下庭園へと辿り着いてから、そこに根を下ろした様に居座ってしまったのは、何のことはない、そう言う気分だったから、と言うに他ならなかった。

酔っ払いが仕出かす行為の一つ一つに、大真面目になってその理由を問い質すのも馬鹿らしいが、敢えて一つだけ彼の心理を言い擬(なぞら)えるなら、彼は薄暗い地下通路を潜り抜けた先に辿り付いた、ランベルク地下基地の「グリーンオアシス」、この地下庭園が醸(かも)し出す、暖かな光と柔らかなざわめきの中に、不思議と心が吸い寄せられてしまったのだ。

それは、とある思考へと偏りつつあった自分の意識を、レストポート付近に数多く屯(たむろ)した兵士達の喧騒さに紛れさせて、有耶無耶(うやむや)の内に眠りに付きたい思いがあったからであり、彼はこの時、じっと一人で考え事ができるような状況には、なるべく身を置きたくないと言う潜在的意識があったのだろう。

考えまいとすればする程に、心の奥底から強く滲み出て来る漠然とした不安感は、同じ思いを共有する仲間、心から頼りにしていた仲間の死によって、より一層その黒々しさ、禍々（まがまが）しさが増して行き、たった一人では背負い切れない程の重圧を持って、ずっしりと彼の心に圧し掛かってくる。

朝食時を過ぎた辺りから、活動期を迎えた兵士達が一人、また一人と、各々の持ち場へと姿を消し行く中で、周囲は再び閑散たる静寂

の気配を取り戻しつつあったが、疲れ果てた身体がじんわりと癒され行く充実感を感じる一方で、中々寝付けずにもがいていた彼の意識は、既にその大半が、どす黒い重苦しい靄(もや)の中へと、取り込まれてしまっていた。

アリミアは死んだ。死んでしまった。

幾ら叫んでも、幾ら望んでも、もう決して帰ってはこない。

セニフと言うか弱き少女の真実を知る唯一の仲間。

自分一人だけでは決して支えきれぬ難問を前に、心の底から頼りにしていた唯一の仲間。

その仲間は、アリミアはもう、帰ってはこないのだ。

勿論、自分自身、決してそれを信じたい訳じゃない。

何かの間違いであって欲しいと願う心は、いまだ自分の中でグズグズと燻(くすぶ)っている。

しかし、儚い望みに一縷(いちる)の願いを必死に込め入れた所で、都合良くアリミアが帰ってくるはずがないし、目の前に立ち塞がった強大な難問は、知らぬ間に自然と掻き消えてくれる程、甘く楽観的な存在では無い。

最近では、全くと言って良いほど、鳴りを潜めてしまったあの男だが、決してセニフの事を諦めた訳じゃないだろうし、それに関わり合いのある輩達を含め、今も尚、何処(いずこ)かしらで蠢(うごめ)きを奏で出してい

るのだろう。

とすれば、今の自分に最も必要とされる事は、必死に何かを思い願う事では無く、その思いを現実のものとする為に行動を起こす事。

セニフを付け狙う奴等の前に自らが立ちはだかり、奴等に対する物理的抑止力となる事だ。

アリミアも、自分がそうなる事で、必死にセニフの事を守ろうとしていた。

アリミアが死んでしまった今、それに代われる存在は自分しかいない・・・それは解っている。

しかし、アリミアほどの能力が備わった人間ならまだしも、戦闘技術に関して、いや、その他全ての能力に関して、アリミアよりも劣る自分が、そんな大逸れた役割を担えるものなのだろうか。

セニフを付け狙う輩達の動きを正確に察知し、そしてその全てを防ぎきるなど、絶対に自分一人だけでは実現し得ない困難な行為であろうし、だからと言って、セニフの素性を露(つゆ)とも知らぬ、何処ぞの誰かに頼り切る様な真似もできない。

勿論、アリミアがそうしたように、セニフの素性を他の誰かに知られる様な行為は、絶対に避けるべきだし、如何にネニファン部隊のメンバー達と言えど、その全てを信用してかかる訳には行かないだろう。

セニフと自分以外の人間全てが敵。

そう言う見方を常に念頭に置きつつ、自分一人、たった一人でセニフを守っていかなければならない。

そう。たった一人で・・・。

それが自分に出来るかと問われれば、出来ないとしか答えられないような自信しか持てず、頼れる者が誰も居ない敵地にも等しい只中に曝されたまま、自分は一体、何をどうすればいいのだろうか。

・・・いっその事、セニフをここから連れ出して、何処か遠くへと逃げ出した方が得策なのではなかろうか・・・。

いや、どこの誰から付け狙われているかも解らない状況下で、色々と自由が利く外の世界に逃げ出す行為は、自殺行為にも等しい愚行だ。

そもそも、全てを投げ出して軍から脱走すると言う事は、その後、トゥアム共和国軍から、共和国政府からも追われる犯罪者的立場に陥る事になる。

ＤＱパイロットとして最前線に送り込まれるセニフの事を考えれば、ここが決して安全な場所とは言えない事は解るが、それでも多くの不確定要素を切り捨てられる軍属と言う状況は、比較的安全な部類に入る場所と見るのが妥当だ。

しかし、いつまでも軍属で居る事に不安を覚えない訳じゃないし、帝国が本気でトゥアム共和国を潰そうと考えれば、瞬く間に捻り潰されてしまうであろう事は、一端のＤＱ整備士でしかない自分にも解る事だ。

セニフが軍との契約を解除できるだけの違約金を稼ぎ出すのを待って、勿論それは自分にも言える事だが、その後、外の世界へと逃げ出した方がいいのか。

それともこのまま、軍属のままで居る方がいいのか。

解らない・・・。どちらがより安全と言えるのだろうか・・・。

それに、もっと目先の問題もある。こちらの方がより大きな問題なのかもしれない。

セニフの素性を知るあの男の存在。まずは奴をどうにかしないと・・・。

自分はあの男に勝てるのか？

アリミアでさえ強い警戒心を抱いていた、あのユァンラオと言う男に。

いや、この際、まともに遣り合って勝とうなどと言う甘い考えは、端から捨て去ってしまった方がいいだろう。

そして今、自分に今、出来る事だけを考えるんだ。

今の自分に出来る事。それは、なるべくセニフの傍に居てやる事しかない。

セニフに何らかの危害が及びそうになった時、それを周囲に知らしめる為の警報装置になってやる事ぐらいだ。

全く情けないったらありゃしない・・・。

セニフの素性を知ったあの日から、全く何ら変わらぬ思考を幾度と無く巡らせるだけで、少しも進歩しない拙(つたな)い方策しか見出す事が出来ないなんて・・・。

もっと何か、いい手立ては無いのだろうか。

もっと自分に、何か出来る事は無いのだろうか。

アリミア。お前は一体、何をどうしようと考えていたんだ？

何か良い案を見つけ出していたのか？

教えてくれアリミア。

これから一体、どうすれば・・・。

（サフォーク）

「おーおー。流石に部屋に戻って爆睡ぶっこいてんのかと思いきや、まーだこんな所でのた打ち回ってたのか。お前も以外に、だらしない奴だねぇ。飲み終わったペットボトルぐらい、ちゃんとゴミ箱に捨てとけよ。使用人抱えたお坊ちゃんでもあるまいし、日々大量に吐き出されるゴミの気持ちも、少しは考えてやったらどうなんだ？行き先の解らなくなった迷子ちゃんじゃ、こいつらも困るだろ？」

やがて、薄暗い迷宮の只中をグルグルと彷徨(さまよ)い歩いていたシルの意識に、聞き慣れた男の声色が投げかけられると、彼の目の前に一番簡単な出口へと続く導(しるべ)が姿を現した。

それは言うまでも無く、考える事を差し止める事で抜け出せる、後ろ向きな出口であった事は確かだが、現実世界に引き戻される事で、重苦しい雰囲気から逃れようと思い付いたシルは、あれからそんなに時間が経ったのか？・・・などと直ぐにその思考を切り替え、薄っすらと両目を見開いた。

そして、ベンチ脇に佇んだ一人の男にチラリと視線を投げかけた後で、不意に右手首に巻きつけた腕時計で現在の時刻を確認する。

午前九時十分・・・。

その直後、シルは直ぐに事切れた様に、僅かに持ち上げた身体をグタリと投げ出し、あからさまに大きな溜息を一つ吐き出して、再び静かに両目を瞑った。

（シルジーク）
「捨てといてくれ・・・。」

（サフォーク）
「全く情けない奴だ。くぷぷ・・・。酒にやられてへ垂れ込むなんざ男じゃないぞ。しっかりしろ。シル。」

会議が始まる三十分前に呼びに来るよう頼んだ覚えはある。確かにある。

しかし今はまだ、会議まで二時間程余裕がある空白の時間帯であり、真に休息を欲する身体が、ようやく静かなる安らぎの淵へと誘われ

し時頃だ。

勿論、最後の最後の所で、脳裏へとへばり付いた刺々（とげとげ）しい思考の渦に巻き込まれ、中々に眠りの境地まで達し切れて居なかった事は事実だが、それでも、じっと意識を静かに落ち着ける事で、午後からの軍事演習に向けた鋭気を少しでも養いたい所ではあった。

普段から時間にルーズで、決まった時間に姿を現す事など滅多にない性分の癖に、何故でこんな時ばかり、予定を大幅に繰り上げて姿を現すのだろうか。

ここぞとばかりにニヤ付いたサフォークの垂れ目が癪に障る。

もしかして、新手の嫌がらせか？・・・とも思ってしまったシルだが、怒鳴り付ける気力すら沸き起こらず、ただゆっくりと持ち上げた右手を、フルフルと左右に振り翳して見せる事しか出来なかった。

やがて、呆れたように軽い溜息を付いて見せたサフォークは、拾い上げたペットボトルを無造作にゴミ箱の中へと放り投げると、笑うに笑えない醜態振りをひけらかす仲間の姿を見つめながら、再度シルの意識を揺り起こそうと試みる。

（サフォーク）
「もう、しょうがない奴だな。ほら。起きろ。お前に何か用事があるって、外からお客さんが来てるんだぜ。」

（シルジーク）
「ああ？・・・外からお客さんが来てるだぁ？・・・今日は面会謝絶だって言って追い返してくれ。俺は眠い。死にそうなぐらい眠い。

面白くもないお前の冗談に付き合ってる暇はないんだよ。俺は寝る。もう寝る。・・・寝かせてくれ。」

するとシルは、サフォークが繰り出す鬱陶(うっとう)しい絡み付きを、軽くはぐらかすような返事を返し、ゆっくりと彼に背を向けるように、ベンチの上で寝返りを打った。

そして、今度は丁度上向きに収まっていた左手を使い、サフォークの煩(わずら)わしい戯(たわむ)れを強引に振り払うかのような仕草を奏で出すと、「あっち行け」「話しかけるな」と言うサインを出した。

ランベルク基地内の誰か、それもネニファイン部隊内の関係者に限った話であれば、シルも少なからず何かしらの反応を見せたのだろうが、彼にはランベルク基地の外から訪れた人間に、名指しで呼び出しされる様な覚えも無く、彼はその後、世迷言(よまいごと)の塊とも思(おぼ)しきサフォークの虚言を、当分無視してやる事を決め込んだ。

（リッキー）
「おやおや。これはまた、だいぶ飲まれたようですね。大丈夫ですか？」

しかしその直後、シルの決意とは裏腹に、全く聞き覚えの無い男性の声が、硬く閉ざしたはずの彼の耳元に届けられた。

思いがけずも虚を突かれてしまったシルは、直ぐに驚いたように上体を起き上がらせると、キョロキョロとその虚ろな瞳を周囲に巡らせる。

すると、何処か呆れたように口元を綻(ほころ)ばせたサフォークの背後で、草臥(くたび)れた灰色のスーツを纏(まと)った中年男性の姿を見つける事になった。

それほど上背がある訳でもなく、かと言って小柄でもない、太っている訳でも、痩せている訳でもないその中年男性は、一見して強面（こわおもて）な印象を受けてしまうが、ほのかに温和な雰囲気を添え付ける垂れた目じりが特徴的で、何処か憎めない表情を形作っており、優しげな話し口調からも見ても、明らかに人当たりの良さそうな大人の男性だった。

（シルジーク）
「ええと・・・・・。どちらさまで？」

シルはこの時、何処か心ここに在らずと言った表情のまま、この中年男性の頭の天辺（てっぺん）から足の先まで、視線を二度ほど往復させると、中年男性が醸（かも）し出す、余りにも一般的サラリーマン風の姿容（しよう）に、懐疑的思念を渦巻かせ、直ぐにその問いを彼に投げかけた。

トゥアム共和国内でも主要軍事基地に指定される、このランベルク基地は、普通の一般市民が好き勝手に自由に歩きまわれる様な開放的な施設ではなく、軍関係者以外、一切立ち入る事が許されない軍の重要施設である。

勿論、軍から特別に許可された場合に限り、限定された一部区画内への立ち入りが許される例はあるが、それでもそうそう滅多に見かけるものではない。

（リッキー）
「いやいや。これは失礼しました。実は私、こういうものでして。」

すると、その中年男性は、行儀良くベンチの上に座り直したシルの目の前に、スーツの内ポケットから取り出した一枚の名刺を差し出

し、優しげな表情の上に更に一目見てそれと解る笑みを浮かべて、シルの顔を覗き込んだ。

ランベルク中央保安局捜査部第二課
捜査保安官　リッキー・コーラス

（シルジーク）
「はぁ・・・。」

受け取った名刺に記載された内容を、頭の中だけで静かに読み上げたシルは、不意に見上げた視線をこの中年男性の表情へと据え付け、何処かおざなりな返事を返すと、再び手渡された名刺へと視線を落とした。

軍の関係者じゃないのか？

保安局の捜査官？

（シルジーク）
「で、警察の方が、俺に何か用ですか？」

（リッキー）
「いやぁ。別に大した事ではないのですがね。少しだけ、シルさんとサフォークさんに聞きたい事がありましてな。こうして面倒な手続きを経て、ランベルク基地を訪れた訳なんですよ。」

（サフォーク）
「え？俺もなのかよ・・・。」

中年男性は穏やかな口調を保ったまま、そう二人に軽い説明を施すと、シルが座るベンチの片隅へと静かに腰を下ろし、徐にスーツのポケットから、くしゃくしゃになったタバコと安物のライターを取り出した。

そして、キョトンとした表情を浮かべたまま、しばし言葉を失ってしまった二人の若者を他所に、彼はゆっくりと一本のタバコを口に銜(くわ)え入れ、何度も何度も付きの悪い安物ライターのフリントホイールを回す。

やがて、十数回ほど軽い摩擦音が響き渡った後、ようやく火種を受け入れたタバコが赤々とした光を放ち始めると、彼はどっかりとベンチに背中を凭(もた)れ掛けながら、気持ち良く煙を吐き出した。

（リッキー）
「いやぁ。こう言った開放的空間の中で、堂々とタバコが吸えると言うのは、非常にありがたいものですな。なにね。最近では何処の施設に行っても、タバコが吸える場所と言うのが無くなってきてましてな。施設によっては、まだ喫煙所を残している所もあるのですが、非常に狭苦しい隔離部屋ばかりですし、何かこう、少し寂しい思いをしておったのですよ。お二人はタバコはお吸いになられない？そうですか。そうですか。健全な事ですね。良い事です。」

（シルジーク）
「はぁ・・・。」

まさか、こんな場所まで、タバコを吸いに来た訳じゃないよな・・・と、全く的外れな思い付きを持って、気分を紛らわせようとしたものの、チラリと中年男性の横顔に視線を宛がったシルは、何処か訝しげな表情を浮かべ、先ほど中年男性から投げかけられた「聞きたい事」と言う言葉を脳裏に反芻させた。

勿論シル自身、何か警察に追われるような犯罪的行為を仕出かした覚えはないのだが、態々（わざわざ）小面倒くさい申請手続きを経て、この基地を訪れた事からも解る通り、中年男性は単に世間話をしに来た訳でもないのだろう。

・・・とすると、自分の身の回りに居る誰かが、警察に目を付けられる様な事を仕出かしたのだろうか。

・・・まさか。セニフに関係のある事じゃないだろうな・・・。

（リッキー）
「いや、なにね。私も口下手なものでして、一体何からお話すれば良いのか、迷っておるんですよ。いつもならうちの若いのが話を進めてくれるんですが、今日は生憎、別件で駆り出されてましてな。」

（シルジーク）
「はぁ・・・。」

（サフォーク）
「・・・。」

そう言って、右手で額の辺りをポリポリと引っ掻いて見せた中年男性は、再びゆっくりとタバコの煙を吸い込みながら、返答に窮(きゅう)してしまった二人の若者へと、交互に視線を投げかけた。

何処からどう見ても、有能な保安官である威容を感じない彼の態度は、警察と言う肩書きから来る意味なき畏怖(いふ)心を、ある程度和らげる効果はあったものの、穏やかな喋り口調ながら不思議と心に纏(まと)わり付く様な粘り気のある彼の雰囲気に、シルは、のけぞらせた心を中々に舞い戻す事が出来なかった。

やがて中年男性は、吸い込んだ煙を大きく天に舞い上げるかの様に勢い良く吐き散らすと、両膝の上に両肘を突いて、静かに口を開き始めた。

（リッキー）
「お二人は以前まで、ＬＮＲ社と言う、ＤＱ部品製造会社に勤められてたのですよね。確かトゥアム共和国内でも有数の大企業マムナレス・インダストリー社系列の会社でしたかな？」

（サフォーク）
「大企業って・・・。マムナレス社系列と言っても、ＤＱ部品リサイクルが本業の単なるジャンク屋ですぜ。」

（リッキー）
「まあ、それでも、そのマムナレス社との取引はあった訳ですよね。」

（シルジーク）
「あったとは思いますけど、余り詳しくは・・・。」

（サフォーク）
「マムナレス社との取引は、全部オーナーが取り仕切ってたからな。」

（リッキー）
「では、その時、マムナレス社の営業担当だった方は、どなただったか覚えてますか？」

（シルジーク）
「営業担当って・・・。サフォーク、知ってるか？」

（サフォーク）
「シャナちゃん？あの細身で可愛い感じのお姉さんだろ？よくオーナーの部屋に来てたぜ。見た事無いのか？シル。」

（シルジーク）
「ああ・・・。あの人、マムナレス社の営業だったのか・・・。」

（リッキー）
「ふむふむ。シャナさん・・・と。では、お二人の言うシャナさんと言うのは、この写真に写っている方で間違いないですな。」

中年男性は、まるでテレビドラマでよく見るワンシーンを、忠実に再現するかの様にそう言葉を連ねると、徐にスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出し、二人の目の前へと差し出した。

その写真は、何処（いずこ）かの高級ホテルの玄関前を背景とし、黒い高級外車から身を乗り出す可愛らしい女性の姿をとらえたもので、ＬＮＲ社を訪れた時とは、全く似ても似付かぬ高級な衣装に身を包んでいたが、二人は確かに、この女性がシャナと言う人物で間違いない事

を確信した。

（サフォーク）
「おおぅー。我が愛しきシャナちゃーん。やっぱ綺麗だなぁ。あの。この写真、貰ってもいいですか？」

（シルジーク）
「・・・。確かにこの人で間違いないです。・・・けど、彼女がどうかしたんですか？」

（サフォーク）
「もしかして、不倫調査で関係者に聞き込みとか・・・。」

（シルジーク）
「馬鹿。もうお前は黙ってろよ。」

一度調子に乗り出すと歯止めが利かないと解り切ったサフォークの言動を、端から縊り潰すように釘を刺して見せたシルは、軽い溜息を吐き出すと同時に、サフォークの手から写真を奪い取ると、直ぐにベンチの左手側に座る中年男性へと視線を舞い戻した。

この中年男性が一体何を聞こうとしているのか、いまだシルには皆目見当も付かなかったが、それでも不意に神妙な面持ちを浮かべて、遠くの方へと視線を投げ出した中年男性の表情から、何かしら重大な事実を含み込んだ不吉な言葉が飛び出してきそうな予感がした。

（リッキー）
「実はですね・・・。彼女、二週間ほど前に、ランベルク工業地帯のとある貸倉庫内で、変死体で発見されましてね・・・。」

（シルジーク）
「はあっ！！？」

（サフォーク）
「はあっ！！？」

この時、予め予測しえた範囲内を遥かに超える衝撃的事実を突き付けられ、二日酔いから来る気持ちの悪さすら完全に失念してしまったシルは、驚愕（きょうがく）と言う二文字によって形容する以外に無い驚きの表情を持って、サフォークと全く同じ言葉を、全く同じタイミングで繰り出してしまった。

（シルジーク）
「・・・殺されたって・・・。」

（サフォーク）
「・・・マジかよ。なんてこった・・・。」

そしてその直後、真っ先に行き着いた所感を短く呟き出しながら、驚きの余韻（よいん）に浸る二人を他所に、噴水が作り出す煌（きら）びやかな水の幾何学模様へと、じっと視線を据え付けていた中年男性は、全く間髪を置かず、直ぐに立て続けとなる悲劇的事実を並べ立てた。

（リッキー）
「そして、お二人がオーナーと呼ぶ人物、ラックス・ムーズさんも、その事件の二日後に、ランベルク都市中心街の裏路地で、射殺体となって発見されました。」

（シルジーク）
「え・・・。」

（サフォーク）
「へ・・・。」

あんぐりと大きく口を開け放ったまま、完全に次に発するべき言葉を失ってしまった二人は、やがて、ゆっくりとお互いの顔を見遣った後で、一つ生唾を飲む様な仕草を奏でると、再びそのままの表情を中年男性へと差し向けた。

殺された?オーナーが?まさか?誰に?何かの間違いではないのか?・・・などと、何処か疑り深い思いを強く滲ませたて、中年男性の横顔を窺い見たシルだが、この時、中年男性が醸し出す重々しい雰囲気の中には、そんな冗談事を面白半分で吹聴している様な気配は、一切感じられなかった。

（シルジーク）
「何かの冗談・・・。では無いですよね・・・・。」

（サフォーク）
「怖えぇぇー。本当にあんのかよ、そんな話・・・。」

（リッキー）
「ああ、勿論、この事件に関して、お二人の事を疑っている訳ではないのですよ。事件発生当日前後に、お二人が軍務に携わっていたと言う、複数人からの証言も取れてますし、今日私がこうして参ったのは、お二人が少しでも事件解決の糸口と成り得る、有益な情報をお持ちなのではないかと思いましてね。どんな些細な事でもいいのですが、この二人の被害者の身の回りで、何か不審な点などございませんでしたか?」

二人の若者を相手にして、全く紳士的態度を崩さない中年男性の口振りは、出会った当初から相も変わらず温厚な色合いを鏤(ちりば)めたものだったが、二人に面と向かった彼の表情は非常に真剣そのものと言った様相で、適当な会話ではぐらかす様な真似は出来ないな・・・と感じたシルは、直ぐに真剣な表情を浮かべて、過去の記憶を探り出した。

（シルジーク）
「うーん。最後にオーナーと連絡を取ったのは、確かＢＰ事件発生直後、軍への入隊手続きに必要な書類を揃えてもらった時か・・・。サフォーク。あれ以来、オーナーとは連絡取ってるのか？」

（サフォーク）
「いんや。全く音沙汰無しってやつさ。今更オーナーに何の用事がある訳でもないし、こっちから連絡するのも、ちょっと面倒くさかったしな。あの人、連絡取ろうにも中々捕まらない人だったからな。」

（シルジーク）
「そうだよな。うーん。何か不審な点。不審な点かぁ・・・。言ってしまえば、オーナー自身が不審者だったと言えなくも無いなぁ・・・。」

（サフォーク）
「へへっ。それは確かに言えてるな。」

（シルジーク）
「貧相な格好している割に、やたらと金の羽振りは良かったし、でも、だからと言って、自分自身に金を費やしている様には見えなかった。オーナーって、一体何が楽しみで生きてたんだろうな。」

（サフォーク）
「お前、それ結構酷い言い様だぞ。」

（シルジーク）
「サフォーク。シャナちゃんについては、何か知らないのか？」

（サフォーク）
「年齢に誕生日、血液型に身長と体重、スリーサイズまでなら知ってるぜ。残念ながら、連絡先まではゲットできなかったけどな。」

（シルジーク）
「お前、結構知ってるな・・・。」

やがて、再び「うーん」と唸る様に下を俯いてしまったシルは、何の足しにもならない瑣末（さまつ）な情報しか、捻（ひね）り出す事が出来ない自分に、多少嫌気が指した様子で、ゆっくりと腕組みをしながら、大きな溜息を吐き出してしまった。

チームＴｏｍｂｏｙに所属する以前から、ラックスには何かと世話になってきたシルだが、これまでの長い付き合いの中で、彼の事を深く知る何かしら有益な情報を、積み上げる事が出来ていたのかと言えばそうではなく、この時彼は、幾ら必死に過去の記憶を探索して見た所で、無いものは無いと言う、全く埒（らち）も無い結論しか導き出す事が出来なかった。

確かに考えれば考えるほどに、不可解な人物であった事に疑いは無く、シル自身、そこに様々な憶測を渦巻かせた記憶はある。

しかしシルは、それまで自分達自身が頑なに守り通してきた暗な制

約を理由に、それらを問い質す全ての機会を意図的に看過すると、沸き起こった数々の疑念を心の奥底に深く仕舞い込んで、出来るだけ直視しない様努めていたのだ。

（リッキー）

「お二人は以前、ラックスさんが運営されていたＤＱＡチームで、三回ほどＤＱＡ大会に参加されてますよね。確か記録では、他のスポンサー企業を一切擁さずに、単独一社で大会に参加した唯一のチームとか。私は余り、ショービジネス的な分野に詳しい方では無いのですが、ＤＱＡチームの運営には莫大な費用がかかると窺っていますし、ＬＮＲ社が一体どのようにしてＤＱＡチームを運営してきたのか、非常に興味がある所です。その辺の事について、詳しくお聞かせ願えませんでしょうか？こう言って何ですが、私は中小企業でしかないＬＮＲ社に、ＤＱＡチームを運営する程の力、資金力があったのかどうか、非常に強い疑念を抱いているのですよ。」

（シルジーク）

「まあ、その点に関しては、俺もおかしいとは感じていましたけどね。チームを運営するにあたって、資金繰りに困る様な事は一度も無かったし、必要な物は全部オーナーに頼めば揃えてくれるって言う、不思議な環境だった事は間違いないです。勿論、一端のジャンク屋風情を気取って、出来るだけ廃品を利用する様心がけてはいましたけど、でも結構金はかかってたと思います。」

（サフォーク）

「確かに不思議っちゃ不思議な状態だったよな。そんなに儲けが出る会社でも無い癖に、必要な時には必ず、何処からとも無く金が湧き出して来るんだからさ。これはもう、どっかに奇特なパトロンが存在して、俺達に資金を提供してくれてたんじゃないかって、そう考えてもおかしくない状況だよな。」

（シルジーク）
「でもさ、仮にパトロンが存在したとして、俺達に資金を提供する理由は何だ？奴らに一体何の得がある？単なるジャンク屋が趣味で始めたＤＱＡチームに、資金援助するなんて、溝に金を捨てるのと同じ事だぞ。そもそも、俺達がＤＱＡ大会に参加したのは、中古部品の寄せ集めＤＱでも、それなりに戦えるんだって事を、証明して見せたかっただけだし、ＤＱ新製品のデモンストレーションとか、他の企業、他の団体の宣伝とかを目的としていた訳じゃない。大会で上位に食い込める程の実力も無い俺達に、好き好んで資金を提供してくれる奴らなんて、何処を探しても見つからないと思うけどな。」

（サフォーク）
「そりゃまあ、確かにお前の言う通りだがなシル。実際にオーナーは金を持っていたんだ。何も無い所から金が自然と湧き出すはずが無いし、そこにパトロンなる何かしらの存在があっても、不思議じゃねぇよな。」

（シルジーク）
「うーん。パトロンねぇ・・・。」

（サフォーク）
「じゃあさ、少し見方を変えて、こう考えてみたらどうだ？実際にパトロンは存在していた。でも奴らは、俺達の為じゃなく、もっと別の何か、パトロン自身が望む何かの為に、資金を提供していた・・・とかさ。」

（シルジーク）
「なんだそれ。パトロン自身が望む何かって、何だよ。」

（サフォーク）
「そんな事、俺に聞かれても解る訳ねぇじゃねぇか。」

やがて、全く不確かな情報をもって、不毛な会話へと突入しかけた二人は、多少途方に暮れた様子で、軽い溜息を吐き出すと、静かに中年男性の方へと視線を投げかけ、行き先を失った会話の出口をこの中年男性に求めた。

チームＴｏｍｂｏｙの中でも一番の古株である自分達二人が揃って、有益な情報の一つも見出す事が出来ないのであれば、これ以上彼是（あれこれ）と思案を巡らせても仕方が無い事だ・・・と、彼等はそう思い至ったのだ。

（シルジーク）
「すみません。俺達何か、事件の解決に繋がりそうな情報とか、そう言うの、余り持ってないみたいで・・・。正直言って俺達、オーナーの事良く知らないって言うか、会社の事とか、ＤＱＡチームの事とかも含めて、余り良く理解していなかったんです。」

（サフォーク）
「長い間オーナーに世話になって来たって言うのに、案外薄情な奴だねぇお前も。」

（シルジーク）
「うるさい。オーナーとの付き合いはお前の方が長いだろ。」

（リッキー）
「いえいえ。十分ですよ。十分です。ありがとうございます。」

しかし、そんな二人の役立たず振りを、少しも気にする風でもなく、ほのかに満足げな笑みを浮かべて見せた中年男性は、吸い終えたタバコの吸殻を手持ちの携帯灰皿の中へと押し込め、ゆっくりとベンチから重たい腰を上げた。

そして、静かに地下庭園の天井を見上げ、肌を刺すような力強さを増してきた初夏の日差しに目を細めて見せると、二、三度軽く身体を背伸びさせるような仕草を奏で出した後で、再び二人の方へと向き直った。

（リッキー）
「余りお二人には関係ない事かも知れませんが、最後にこの写真を見ていただきたいのですが。」

すると中年男性は、スーツの内ポケットへと仕舞い込んだ携帯灰皿の変わりに、再び一枚の写真を取り出すと、まだ何かあるのか？・・・と、怪訝（けげん）そうな表情を浮かべた二人の前にスッと差し出した。

（リッキー）
「どうです？この写真に写っている人物に、見覚えはありませんか？」

中年男性から手渡された一枚の写真に、そう促されるままに視線を落としたシルは、そこに写し出されていた一人の男性へと焦点を絞り込み、マジマジとその風貌を観察し始める。

その男性は、周囲に屯す黒服の男達との相対関係から、割と背が低い小柄な人物である事が窺え、着込んだ高級スーツや凛（りん）とした立ち姿から、それなりの身分に属する者である威風を漂わせていたが、細く釣り上がった目元から受ける印象は、何処か酷く陰湿な色彩が

交えられている様にも感じてしまった。

（シルジーク）
「いえ、全く見覚えのない人ですね。サフォークはどうだ？」

（サフォーク）
「どれどれ？・・・うーん。俺も見た事無いなぁ。」

（リッキー）
「そうですか。解りました。お手数をおかけしましたな。」

やがて、シル、サフォークと手渡されて戻ってきた写真を、いそいそとポケットの中へと押し込んだ中年男性は、再びにっこりと愛嬌（あいきょう）のある笑みを浮かべると、丸みを帯びた背格好のまま深々と頭を下げ、徐に持ち上げた右手で頭を数回掻いて見せた。

その写真に写し出された男性について、この中年男性から詳しい説明が施される事は無かったが、その時二人の脳裏に浮かび上がった「この人が何か？」と言う疑念もまた、この中年男性へと投げかけられる事は無かった。

（リッキー）
「それでは、私はこれで失礼させていただきます。お忙しい中、長々とお手を煩（わずら）わせて、すみませんでしたな。色々とありがとうございます。」

（シルジーク）
「いえ、こちらこそ、何の役にも立てなくてすみません。」

中年男性は、二人の若者を交互に見遣った後、丁寧な言葉遣いで最

後の挨拶を施すと、礼儀正しく返事を返したシルに向けて再び頬を緩ませた。

そして、ゆっくりと踵(きびす)を返し、二人の目の前に草臥(くたび)れたスーツの背中側を曝け出すと、のそのそと言った擬音(ぎおん)が良く似合う歩き方で、ゆっくりと二人の元を立ち去っていった。

見るからに何の取り得も無さそうな中年男性の後姿は、まさに哀愁が漂う駄目親父と言った様相を如実(にょじつ)に漂わせており、時折無造作に右手で頭を掻き乱す仕草が、更にそれに拍車(はくしゃ)をかける様で、気を抜けば、彼の持つ肩書きさえ忘れ去りそうになる程だった。

しかし、そんな印象の薄い瑣末(さまつ)な中年男性が残した衝撃は、決して微々たるものなどではなく、まさに静かな水面の上に、突然強力な爆弾を投下したかのような威力を持って、彼等二人の心を揺さ振り続けるのだった。

やがて、ようやく静けさを取り戻した意識の中に、静かなる噴水の水音を捉え始めたシルは、一度大きく吸い込んだ息をクッと胸元に溜めて、ゆっくりと吐き出しながら言った。

（シルジーク）
「なんか、もう酔いも覚めちまったな・・・。余りに突然の話で、まだちょっと混乱しているけど、そっか・・・。オーナーも死んじまったのか。」

（サフォーク）
「生きてる人間、いつかは死ぬ。それが単に早いか遅いかってだけの話さ。まあ、オーナーもまだ、死ぬには早すぎる年齢だったとは思うけどな。」

何処か意気消沈した様な面持ちで、無意味に辺りへと視線を泳がせたシルは、直後に聞こえたサフォークの素っ気無い言い回しに対し、ふと自然と彼の方に視線を差し向けたのだが、捻(ひね)くれ者で通っている彼の性格をほのかに慮(おもんばか)ってやると、全く無言なる返答を用いて、直ぐに綺麗な噴水の様相へと意識を漂わせた。

そして、たった一ヶ月の間に、見る影も無く激変してしまった周囲の状況を、一つ一つ脳裏に思い起こして備(つぶさ)に省みながら、再び彼は大きな溜息を吐き出してしまった。

（サフォーク）
「さーて。どうすっかな・・・。」

やがて、二人の元にしばし訪れた静寂の時を突き破り、そう短く言葉を発したサフォークが、腰に両手を宛がったままの体勢で、ゆっくりと天を仰ぐ。

シルはふと、彼の言動に釣られる様に僅かに顔を傾けたのだが、それが何かの返事を期待しての言葉ではない事を察すると、またしても何も返事を返さなかった。

自分達の思いとは裏腹に、止まる事を知らぬ時の流れは、これからも容赦なく前へ前へと突き進んで行く。

決して立ち止まる事も、決して立ち返る事も許されぬ過酷な時の流れは、これからも永遠に時間軸と言う一本道を辿り経て、真っ直ぐに突き進んでいく。

しかしそれは、一本道であっても、決して一直線ではなく、人々の抱く思い、人々の抱く願い、人々の抱く望みによって右にも左にも揺れ動く、至極不安定なものだ。

一つ高い次元から世界を見下ろして、たった一つの歴史を形作る様、定められし時の流れ。

逃れようのない運命なんて言葉は嫌いだ。

絶対に何処かに、明るい未来へと続く道があるはずだ。

やがてシルは、静かに天井を見上げると、照り付ける強い初夏の日差しに押し負けない様にと、あからさまに強くひそめた眉を携えて、クッと下唇を噛み締めた。

０７－０８：〇燃えないゴミ

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ８「燃えないゴミ」

はっきりと目を見開いても、何も見えない真っ暗な闇の中で、意図的に切り捨てた身体の全てを、纏わり付く黒い靄の中へと放り投げる。

ねっとりとした生温い気配に包み込まれた、黒い靄の中へと。

波打つ様に聞こえ来る気持ちの悪い吐息が渦巻く、黒い靄の中へと。

それは、全てを飲み込み、全てを掻き消してくれる、全く持って都合の良い逃げ場所であり、痛々しくも切り刻まれてしまった心の傷跡を癒す為の、辛く悲しい思い出の数々を忘れ去る為の、一番手っ取り早い禍々（まがまが）しき掃き溜めだった。

寒々とした虚空の只中で、前も後ろも、右も左も解らぬままに、彷徨い続ける事しか出来なかった惨めな心は、妬ましい思いを強く募らせる事になろうとも、中身を抜かれた人形の様な身体を餌に、おぼろげなる意識の釣り糸を、その黒い靄の中へと垂れ下ろす他無かった。

そして、身体と全く同じ形をした卑しき心の全てが、釣り糸を辿って流れ来る悪魔的快楽によって、完全に麻痺してしまうのを、ただ只管に待ち焦がれる・・・。

それはまさに、麻薬のような傷薬。

こうしていれば、しばらくの間は、辛い思いを忘れていられる。

こうしていれば、しばらくの間は、何も考えずにいられる。

本来であれば、心も含めた自分の全てを、その黒い靄（もや）の中へと放り込みたかった。

こんな消え入りそうなか細い意識の釣り糸越しではなく、直接触れ合う事で感じる暖かな安らぎを求め、堪え難き幸福感に満ち溢れた深い深い悦（よろこ）びの深海へと、自分の全てを沈め入れたかった。

そうする事で、深い傷を負わされた心の痛みが、少しは和らぐと解っていたから。

そうする事で、心の奥底に溜まった真っ黒な重石が、少しは軽くなると解っていたから。

でも、やっぱり、それは出来なかった。それだけは出来なかった。

何故なら、その黒い靄（もや）の中の住人は、人の心を優しく食して満足するような愛くるしい小動物などではなく、物理的肉欲を満たしたいが為に、死肉すら貪（むさぼ）る凶暴な魔獣なのだから。

勿論、そんな事は、初めから解っていた事だった。

「あんっ・・・。はぁっ・・・。はあっ・・・。」

やがて、時折激しく跳ねる様に切なさを弾けさせる身体の衝動が、意識の虚空に稲光にも似た虹の閃光を鋭く迸らせると、意図せずも硬く強張った身体の各所に、容赦なく次々と突き刺さって行く。

そして、その傷跡から漏れ出した真っ赤な恍惚の雫を、薄ら暗いガラス素材で拵えた心の器へと注ぎ入れ、じっと静かに溢れかえるのを待ちながら、もっと・・・もっと・・・もっと・・・と、身を捩るよ様にして搾り出した卑しき言霊を、何回も、何十回も、脳裏に反芻させる。

持てる意識の全てを身体中に張り巡らせ、決して一滴も零れ落とさぬようにして。

決して他の何物も視界に取り入れぬよう、その事だけに意識の全てを集中させて。

「あっ・・・。あっ・・・。あんっ・・・。」

徐々に水嵩を増し行く欲望の雫が、作り上げた小さな心の器の中で、細かなうねりを生じさせる度に、次第に下腹部から突き上げる快楽の小波が、より大きな荒波を紡ぎ出して、押し寄せて来るのが解る。

背筋を辿って首筋、後頭部付近へと到達した電気的衝撃波が、心躍るような刺激的閃光を弾けさせる度に、堪え難き性的興奮に塗れた身体の全てが、じわじわと剥き出しの神経を尖らせて行くのが解る。

しかし、恐ろしい程の快楽の波間を目の当たりにして、ドクドクと脈打つ胸の鼓動が、より強い高鳴りを奏で出す中で、火照り行く身

体とは相反した心の静けさが、不意に彼女の意識を途切れさせてしまった。

それは、最初から心を切り離していたからなのだろうか。

完全に自由を奪われた操り人形の様に、弄ばれる厭らしき身体を、まるで他人事のように見つめながら、何処か急に冷え行く隙間風を感じて取った心の陰影が、纏わり付く黒い靄の中に、白々とした客観的自分の存在を作り上げて行く。

それは、快楽の深遠へと溺れたいが一身で胸をときめかせていた、強欲で卑猥なる心とは全く別物の、鋭く尖った無数の棘を何重にも纏って、近づく者へと容赦なく突き付けていた弱々しき臆病なる心とは全く別物の、暖かな優しさに包まれた、清楚でいて可憐なる真っ白な華だった。

それは、いつ何時であれ、誰にでも優しく、誰にでも素直で、本当の意味での純粋さを抱き持った、透き通るような心の持ち主であり、自分自身が常に憧れとしてきた理想の存在・・・。

そうだ・・・。私、こう言う人間になりたかったんだ・・・。

見渡す限りの真っ黒な世界に、虹の様な波紋を広げる不思議な土台を足場として、眩いばかりの燐光を放つ、真っ白な華の風体を見て取りながら、情けなくも感嘆にも似た大きな溜息を吐き零してしまうと、それまで無理矢理に押し込めてきた熱い涙が、静かに心の外壁を伝い流れ落ちた。

それは一体、何処から流れ出した涙なのか解らない。

だけど、心の全てが泣いている様な感じがする・・・。

絶え間なく突き上げるおどろおどろしき快楽の波間に、激しく両肩を上下させながら、じっと見つめた瞳の奥底に、真っ白な華のイメージが焼き込まれると、やがてそれは、鏡に映し出したかの様な自分自身の姿へと徐々に変貌を遂げていく。

それは、真っ白でいて綺麗なる輝き纏った自分自身の心の一部。

それは、暖かな思いやりの油膜を纏った自分自身の心の一部。

絶えず暖かな微笑みを浮かべる、優しげでいて人当たりの良い温厚な女性。

そう。確かに私にも、こんな一面があったっけ・・・。

こんな自分になろうなろうって、いつもいつも思ってたっけ・・・。

優しく笑った笑顔。自分で見ても、一番可愛い表情だと思っている。

私はいつも、こんな笑顔を浮かべていたかったんだ。

そして、周りの人達にも、笑顔を分け与えてあげられる様な、そんな優しい人間に、私はなりたかったんだ・・・。

しかし、そんな美しき女性の姿形に、じっと見惚れていた嘗ての自

分は、不意にこちら側を向いた真っ白な華の軽蔑的視線によって、無残にも粉々に打ち砕かれてしまった。

そして、直ぐ傍らで惨めにもみだらな姿を曝け出す今の自分を省みて、快楽に溺れる事でしか自分を守る事が出来なかった今の自分を省みて、絶望的な悲壮感に溢れかえってしまった心の中に、痛烈な言葉を響かせるのだ。

ありえない。こんなのただの売女。

糞みたいな醜い身体をひけらかして、何の努力も無しに、欲しい物だけ得ようなんて、ほんと欲深で恥知らずな女。

見るに耐えないいかがわしい姿だわ。

救いようが無い変態女の分際で、清楚で可憐な女性になりたかったなんて、よくもまあ恥ずかしげもなく言えたものね。

笑うにも笑えない腹立たしい冗談だわ。

腐敗臭すら漂う汚らしい死体の分際で、決して手が届くはずも無い、可憐なる華の外面（そとづら）だけを見つめて、未練がましくも涙を零して見せるなんて、全く同情する価値も無いはしたない行為そのものよ。

今、貴方が垂れ流している涙は、もはや悲しみの雫なんかじゃない。

それは自分でも解っている事でしょ？

今、貴方が垂れ流している涙は、快楽に溺れる悦（よろこ）びの雫よ。

ほら、見てみなさい。

「あぁぁっ！・・・あんっ！・・・ぁあぁっ！・・・はぁっ！」

自らが放つ痛々しい言葉の鏃が、ぐっと硬く閉じた心の瞼を貫通して、容赦なく心の深遠部を切り裂いていく中で、思わず薄っすらと両目を見開いてしまった彼女は、目の前でゆさゆさと揺れ動く黒い塊の蠢きを見て取ると、直ぐに狂おしく迫り来る快楽のうねりへと、再び意識を埋没させた。

既に大きな穴の空いた彼女の心には、立ち込めた黒い靄の他は何も無い、がらんどうとした虚空の世界が広がっていただけであり、幾ら鋭い言葉の鏃を持ってしても、彼女の心を揺り動かす事はできなかった。

やがて、心の中に広がる黒い靄の中へと掻き消えて行った言葉の余韻を、酷く浮付いた脳裏に何度も何度も反芻させながら、再びギュッと強く両目を瞑った彼女は、何処か妙に冷え切った感覚の中で、卑猥なる躍動を生み出す自分自身の姿へと視線を据え付ける。

そして、そのいやらしき醜態が醸し出す、淫靡な香りに釣られる様にして、ゆっくりと一歩一歩、快楽に満ち溢れた地獄の様な秘境へと歩を進めて行った。

私は厭らしい女。そんな事は解ってる。

私は浅ましい女。そんな事は解ってる。

でも、目の前に現れた真っ白でいて可憐なる華のイメージは、確かに私の心の中に存在していた、優しく温和な人柄を形作ったもの。

いつもいつも心の奥底で思い描いていた、私が最も理想とする愛(いと)おしい自分の姿そのもの。

私が必死になって追い求めていたものは、自分自身の心の中に確かに存在していたんだ。

勿論それは、私一人だけでは決して気付く事が出来なかったし、私一人だけでは、決して辿り着く事が出来なかった。

私は、貴方が差し出した暖かな手の温もりに触れられる事で、貴方と言うかけがえの無い存在に包み込まれる事で、心の中に残った微かな希望の火種を、ようやく守り通す事が出来ていたんだ。

ほんと、弱いお姉ちゃんだよね。

ほんと、情けないお姉ちゃんだよね。

こんなお姉ちゃんの姿、貴方には絶対に見られたくない。

貴方だけには絶対に見られたくない。

絶対に・・・。絶対に・・・。

見られたくなかったのに・・・。

「あぁっ・・・。はぁんっ・・・。はぁんっ・・・。あぁんっ・・・。」

でも・・・。でも・・・。私・・・。寒くて寒くて仕方が無かったの。

心の奥底から凍り付く様な寒さで、身体の全てが引き裂かれそうになるほど苦しくて、頭から毛布を何枚被っても、必死に身を丸めて手足を擦(さす)っても、全然寒さが和らいでくれなかったの。

貴方に守られる事で暖かな光を宿していた心の種火も、唐突に振り落ちた残酷な現実によって、無残にも踏み潰されてしまったし、私はもう、自分一人だけでは暖(だん)を取る事も出来ない、死人(しびと)の様な無機的な存在に成り下がってしまったの。

貴方と言う暖かな存在を失い、自分の心の中の暖かさを失い、新たなる別の何かを見出す事も出来ない真っ暗な闇の中で、私はもう、自分自身の手で自分自身の身体に火を放つ事しか出来なかった。

まるでゴミ屑(くず)の様に自分の身体を放り出して、足の先から手の先に至るまで、厭(いや)らしき欲望と言う油を塗りたくって、燃やしてしまう事以外に、暖まる方法を見つける事ができなかったの。

でも、本当に燃やしたいと思っていたのは自分の心。

本当に暖めたいと思っていたのは自分の心。

心と身体を切り離した状態で、身体だけを真っ赤な業火(ごうか)の中に埋め入れた所で、結局は少しも暖かくないんだって事、それも解っていたつもりだった。

冷え切った心に火を付ける為には、もっともっと別の他人の強い想いが必要なんだって事、それも解っていたつもりだった。

でもね・・・。それでも、意識を伝って沸き起こる興奮が、少しは寒さを忘れさせてくれるんだ。

「あんっ・・・。あはぁん・・・。」

貴方に代わる存在なんて、他にいないから。

「あんっ・・・。はぁっ・・・。あぁっ・・・。」

こうする以外に、寒さを掻き消す事が出来ないんだ。私・・・。

「あっ！・・・あううっ・・・ぅっ！・・・・・・っはぁ！」

やがて、吐き出された悦び(よろこ)の嗚咽(おえつ)すら、掻き消し始める頃合を向かえ、次第に薄れ行く意識の中に、ぼやけた新たなる世界への扉が見え始める。

もう少し・・・。もう少し・・・。まだ足りない・・・。もう少し・・・。

「あうっ！・・・・・・っうぅぅ・・・。」

しかし次の瞬間、思いがけずも唐突に握り潰された左胸の激痛によって、彼女は無残にも半場強引に現実世界へと引きずり戻される事となってしまった。

ようやく見え始めた甘美なる異世界への扉を前にして、ようやく手の届きかけた精神的楽園への扉を前にして、彼女の中でそれまで積み上げられてきた快楽の階段が、脆くも儚く一気に打ち砕かれてしまったのだ。

険しく表情を歪め、目の前の黒い塊から延びる右手へと徐に掴み掛かった彼女は、なんて意地悪な奴！・・・などと、その顔に唾を履きかけてやりたい思いを強く滲ませながら、暗がりに浮かぶ不気味な薄ら笑いを睨み付けた。

左胸へと食い付いた右手は、決して暖かな温もりを与えてくれる様な感触を有しておらず、あからさまに悪意を強く込め入れた、嫌がらせ的意図しか感じ得ないものだったが、必死になってその右手を振り解こうと身を捩る度に、快楽に満ち溢れた身体の全てが、おんおんと悦びの雄叫びを上げているのが解った。

意図せぬ焦らしに鬱陶しい不快感を覚えつつも、それによって欲望を満たし入れる心の器が無理矢理押し広げられたのも事実。

強引に外された抑制のタガが、彼女の心の中で一気に弾け飛んだ。

「あぁっ・・・！あぁぁっ・・・！あああぁっ・・・！」

もはや自分でも、どうなってしまうのか全く予測できぬ程に、巨大化してしまった心の器をじっと見つめながら、滝の様に流れ落ちる

快楽の湯水を、少しも堰き止める事が出来ない自分の姿に、彼女は愕然とする。

いいのよ。これで・・・。これでいいの・・・。

次第に荒さを増し行く呼吸の合間に、渇いた喉元を微かに潤す様に生唾を飲み込み、恐ろしくも速いスピードで水嵩を増し行く自分の厭らしさに、激しく両肩を上下させながら、ときめく胸の鼓動が快感に打ち震える。

一度は小さく萎んでしまった浅黒い風船も、今や大量に溜め入れた快楽の水面に揺さぶられて、次第に赤々とした光沢を纏って大きな膨らみを形成し、岩の様に重かった彼女の心に、まるで翼が生えたかの様な身軽さを与えていく。

これなら届く・・・。きっと届く・・・。

全身から流れ来る甘く切ない快楽の突き上げを、心の全てでしっかりと受け止めて、何もかも忘れ去る、何もかも掻き消す事の出来る、天国の様な心安らぐ温和な世界へと続く階段を、ただ只管に駆け上って行く。

そして、時折喉元に詰まる吐息を荒々しく吐き出しながら、零れ落ちそうになる程十分に満たされた快楽の雫を熱く熱く滾らせながら、震え上がる身体の悲鳴を天へと向けて高らかに奏で上げる。

「あああああぁぁぁぁぁっ・・・・・・・!!」

やがて、身体の重たさ全てから開放された彼女の心が、濃密な白霧を切り裂いて天高く舞い上がったのを期に、彼女はようやく待ち望んでいた眩い楽園の陽光を目の当たりにする。

そこは真っ白でいて他には何も無い暖かな広がり。

見渡す限りの白さに包み込まれた眩いばかりの果てしない広がり。

性的興奮の絶頂へと至った者のみに与えられた、極上の悦(よろこ)びに満ちた快楽の最終地。

そこはただ、それまで只管に積み上げてきた快楽の余韻に浸る事だけが許された、完全個人の密室であり、何を見る必要も無い、何を考える必要も無い、と言うより、何を見る事も許されない、何を考える事も許されない、全く持って不条理だが、非常に居心地の良い幸福感に満ち溢れた新世界だった。

そして、白い白い空間の全てに心の全てを溶かし入れて、自分自身の存在すら感じ得ない、とろけるような無たる境地の只中(ただなか)で、ずっとずっと・・・こうしていたい・・・と、永遠なる漂いに強い強い願いを込め入れる。

しかしそれは、ほんの一瞬の出来事で終わりを迎えてしまう儚き世界だった。

不意に沸き起こした思いとは裏腹に、周囲に立ち込める真っ白な濃霧が、一瞬にして目の前から掻き消えてしまうと、暗い暗い闇の中で灰の様に燃え尽きてしまった身体の中へと、無理矢理に心が引き

落とされてしまう。

今だ止む事の無い快楽の余波に打ち拉がれた身体が、彼女の脳裏に激しい倦怠感を、次々と擦り付けて来る中で、咽ぶ様に漏らし続ける絶え間ない嗚咽が、彼女の意識の耳朶を打つ。

震える両手でベッドのシーツをギュッと強く握り締め、しばらくの間、じっと静かに身を丸め込むようにして、その波が収まるのを耐え忍んでいた彼女は、やがて、ああ・・・、戻ってきてしまった・・・と言う無念なる思いと共に、そっと見開いた視線の先に、何も無い真っ暗な部屋の天井を見据えた。

それまでねっとりと身体に纏わり付いていた、猥りがわしい陰湿な黒い塊も、今はもう完全に何処かへと姿を掻き消した様子で、ただ一人、薄ら寒い雰囲気の中に放置されていた彼女は、徐に額へと右手を宛がって静かに両目を瞑ると、次第に収まり行く吐息を溜息へと書き換えて、無言なる呟きを心の中に吐き出してしまった。

男って、皆こうなのかしら・・・。

その後、ゆっくりと身体を捻るようにして上体を起こした彼女は、ベッドの脇に備え付けられていたテーブルスタンドへと手を伸ばすと、真っ暗な部屋の中に優しげな灯火を宿し入れる為のスイッチを押し、戻すその手で直ぐその脇に置いてあったティッシュを何枚か摘み取った。

そして、ある程度簡単に後始末を済ませた後で、不意にベッドの上で大の字になって寝そべる大男へと視線を宛がうと、唐突に沸き起

こった大きな溜息をもう一度吐き捨てて、ゆっくりとテーブルの上に置いてあったタバコを手に取った。

欲望に任せてあんなにも荒々しく食らい付いて来た癖に、事一つ終えると、こうも簡単に無頓着になれるなんて、なんとも都合の良い性格してるわね。

ほんと、呆れちゃうわ。

でもまあ、その方が私も気が楽でいいんだけどね。

やがて彼女は、口元に銜(くわ)え入れた一本のタバコに、手際よく右手でジッポの炎を振り翳(かざ)すと、ほんの数回程の吸引と共に真っ白な煙を周囲に吐き散らした。

そして、オレンジ色の光沢に照らし出された綺麗な脚を、ゆっくりと交差させて組み合わせると、その上に左手で艶(あで)やかな衝立(ついたて)を拵(こしら)え、更にまたその上にどっかりと頭を乗せ加えて、何処か気の無い視線を部屋中に巡らせた。

しかし、兵士達の仮部屋でしかないその小狭い空間には、特にこれと言って目を引くような物が置かれている訳でもなく、無造作に脱ぎ捨てられた彼女の衣服だけが、閑散とした部屋の床面に、唯一の無意味な装飾を施していただけだった。

彼女はふと、右手に持ったタバコから伸びる、静かな煙の立ち昇りへと視線を移し変えると、特に何をするでもなく、じっとその煙が織り成す綺麗な踊りに意識を集中させた。

くねくねと妖美なうねりを見せつけるその揺れ動きは、時折解(ほつ)れてはまた再び絡み合うと言った、全く飽きの来ない不規則な揺らめきを奏で出しており、彼女はしばらくの間、その不思議なる煙の幻想的ダンスへと見入ってしまった。

「タバコ。いつから吸い始めた？」

すると突然、彼女の背後から全く予想だにしなかった男の言葉が発せられた。

彼女は思わず驚いた表情を浮かべ、直ぐに男の方を振り返ったのだが、その男の視線が天井へと括(くく)り付けられたまま、全く自分の方へと向けられる気配が感じられない事に気が付くと、不意に陰りを落とした薄ら暗い表情を醸(かも)し出して、素っ気無くタバコの煙を吸い込んで見せた。

「私の事なんか少しも興味ない癖に、そんなつまらない事聞かないでよ。」

そして、何処か苛付(いらつ)いた態度をほのかに滲ませて、吐き出した白い煙と共にそう言い放って見せた彼女は、徐にベッドの上から重たい身体をすっくと立ち上がらせると、床上に散乱した自分の衣服を一つ一つ拾い上げながら、テーブルに置いてあった小さな時計にチラリと視線を宛がった。

まだ十時半前か。部屋に戻ってシャワーを浴びるぐらいなら、まだ

大丈夫な時間よね。

「私、作戦会議の前に、一度部屋に戻ってシャワー浴びてくるわ。」

その言葉に対する返答は無い。

彼女自身、それも解っていた事だ。

彼女は吸いかけのタバコを、これまたテーブルの上に置いてあった灰皿へとグリグリと押し付けると、男の無粋な態度を問い質すでもなく、やがて、集め終えた衣類をいそいそと着込み始めた。

そして、ようやく全ての衣服を纏い終えた後で、少しばかり乱れた抹茶色の癖毛へと何回か手櫛を通して見せると、最後にタバコとジッポを左胸のポケットへと押し込んで、もう一度男の方へ視線を宛がった。

特にお互いがお互いに惹かれあって結ばれた関係ではない。

お互いがお互いに求めた物同士を補い合う為の上辺だけの関係。

勿論、それ自体が悪い事だとは思っていない。

結局それは、自分自身が望んだ事で、そして貴方自身が望んだ事。

誰にも迷惑のかからない、二人だけの乱れた関係。

貴方もそれでいいんでしょ？

彼女はその後、心の中に浮かべた男への問い掛けに対し、不気味な薄ら笑いを浮かべて見せた男の態度を、その返答として受け止めると、再び呆れ返った様な深い溜息を吐き出した。

そして、直ぐさま素っ気無く部屋の出口がある方向へと意識を逃がすと、重たい気だるさに包み込まれた身体を引き摺(ひきず)る様にして、全く無言のままその部屋を後にした。

彼女がほぼ毎日の様に足を運び入れてしまうこの薄暗い二人だけの密室は、確かに彼女の心に纏(まと)わり付く凍える様な寒さを、一時的に忘れさせてくれる効果があった。

しかし、それは決して悪い事ではないのだ・・・と強く強く自分自身に言い聞かせる反面、彼女の心の奥底には、非常に重々しい罪悪感がどっぷりと溜まり込んでいる様だった。

０７－０９：〇ブリーフィングルーム＃３

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ９「ブリーフィングルーム＃３」

＜トゥアム共和国陸軍　首都ランベルク基地　Ｂ３－Ｃ－３０１＞

軍事演習事前作戦会議　第一日目

あー諸君。非常に短い時間だったが、久しぶりの休暇、満足してもらえただろうか。

これまで、リトバリエジ都市周辺部に駐留した帝国軍の脅威により、長らく第三種戦闘体制での待機任務を、言い渡されてきた我がネニファイン部隊だが、ようやく昨日夕刻１８：００を持って、解除される運びとなった。

これは、オクラホマ都市攻略作戦の成功により、帝国軍東方戦線が次第に縮小傾向へと傾きつつある事実が判明した為であり、諜報部から齎（もたら）された情報によれば、帝国軍は既に、カルッツァ地方から軍を撤退させる動きを見せ始めているとの事だ。

勿論それは、カルッツァ地方を完全に蛻（もぬけ）の殻にしてしまう様な、大規模な撤退行動ではなく、細くなった補給線規模に対して、それ相応の軍団に部隊を再編成する意図を匂わせるものである。

カルッツァ地方、およびムルア地方における戦闘に関しては、恐らくこれまでより大分負荷が軽減されると予測されるが、それでも、まだまだ予断を許さぬ状況が続きそうだ。

また、今回の一連の動きに伴って、帝国軍リトバリエジ都市占領部隊にも、少なからず影響が出始めているようで、スーノースーシ川対岸に布陣した帝国軍占領部隊の陣形が、以前のランベルク都市侵攻を匂わせる攻撃的なものとは異なり、リトバリエジ都市周辺部の防御陣を固める様な様相へと変化しつつある。

このほど、我々ネニファイン部隊が、明るく開放的な外の世界で、伸び伸びと軍事演習が行えるようになったのは、こう言った戦況の変化があったからで、首都ランベルク都市を戦火に巻き込むと言う、最悪の事態を回避し得たこの状況は、我々にとっても大いに歓迎すべき展開と言えよう。

尤も、それによってリトバリエジ都市奪還が、より困難なものになってしまった事も事実で、攻勢に転じたリトバリエジ都市占領軍を、スーノースーシ川河堤付近で、一気に殲滅すると言う当初の目論見も、これで完全に頓挫してしまった形だ。

リトバリエジ都市は、我がトゥアム共和国にとっても、東スロベーヌ地方全体にとっても、今尚、非常に重要な経済流通都市である事に変わりは無く、我々としても、いつまでも帝国軍の手に委ねて置く事は出来ないのだが、武力を用いた無血開城がほぼ不可能である事実からも解る通り、一介の軍人でしか無い俺達には、何ら手の打ち様が無いと言うのが正直な所だ。

まあ、この小難しい問題に関して、彼是と思案を巡らせるのは、共和国政府の高官達に任せて置くとして、手足を動かす事が本業である俺達は、まず、目の前に与えられた仕事を順々に処理して行く事としよう。

それでは、少し前置きが長くなってしまったが、本題である軍事演習について話題を移そう。

本日１４：００から開始される、ブラックナイツ部隊、カラムス部隊を含めた、合同軍事演習についてだが、演習会場となるランベルク北東地区山岳エリアは、元々はＤＱＡランベルク地区大会の試合会場として用いられてきた場所だ。

お前達の中には、既にこの会場での戦闘経験がある者も居ると思うが、今回の軍事演習は、実際の試合会場より四倍近い広さの敷地面積を使用して行われる。

そして、一般的に良く知られているＤＱＡ大会の様に、複数チームが入り乱れて戦闘するような無益な事はせず、あくまで部隊同士一対一での戦術戦闘訓練に主観を置いたものとなっている。

各部隊に課せられる細かなレギュレーション、ルールについては、配布した資料に記載してある通りだが、一応念の為に、大まかな概要説明をしておこう。

今回の軍事演習は、まず本日第一日目にネニファイン部隊とブラックナイツ部隊、二日目にブラックナイツ部隊とカラムス部隊、そして、三日目にネニファイン部隊とカラムス部隊が対戦する予定となっているが、その間、手隙（てすき）となった余り部隊については、ランベルク基地内において、第三種戦闘体制での待機任務が課せられる事になっている。

幾らランベルク地方の戦局が膠着状態に陥ったからとは言え、トゥ

アム共和国軍唯一のＤＯ専門部隊が、三部隊とも軍務を放棄して軍事演習に没頭する事など、許されるはずも無いからな。

よって我々は、手隙（てすき）きとなる軍事演習二日目は、朝からランベルク基地で待機任務に当たる事になる。

軍事演習一日目から張り切りすぎて、全機体損傷持ちと言う失態だけは、出来るだけ避けるよう注意してくれ。

では次に、今回の軍事演習における大まかなルールと戦闘の仕方について説明するが、これまた一風変わった手法が取られる事になっている為、各人共に良く聞いて理解するように。

今回の軍事演習の最大の目的は、各パイロット個人個人が持つ、戦闘技術の底上げを図ると言うより、部隊と言う一個体における戦術運用、即ち、各パイロット同士の連携力の強化と、その場その場に合わせた、適切なポジショニングを学ぶ事にあり、刻々と変化する戦況の中で、如何に周囲の状況を正確に把握できるか、如何に素早く次なる行動に移れるか、そう言った高い洞察力、判断力を養う事にある。

一見して何かのゲームの様な遊び心を感じてしまうルール設定になっているが、実際の所は、非常に要所を突いた秀逸（しゅういつ）な演習内容となっている為、決して手を抜かない様にして挑んでもらいたい。

軍事演習における勝敗の決し方は、これまでの従来方式とは大分異なり、相手機体を何機撃墜したか、相手機体に何発弾丸を命中させたかによらず、演習会場各所に設けられた各拠点エリアを、どれだけ長い時間制圧出来たかによって争われる仕組みとなっている。

勿論、相手ＤＱを撃墜状態に陥れる事自体に、何ら意味が無いとは言わないが、それでも、戦術的に相手部隊を効果的に封じ込める事で、相手より一分でも長く拠点エリアを制圧する事が出来れば、例え相手ＤＱを一機も撃墜できなくとも、勝利する事ができると言う仕様になっている。

演習会場となる該当エリアは、アルテナス山南側麓に広がる起伏の激しい山岳地帯であり、周囲に群生する森の深さも、パレ・ロワイヤル基地周辺部に、負けず劣らずの色濃さを誇っている。

周囲のフィールド濃度は平均２０％前後に保たれており、完全にクリアとまでは行かないが、それなりの感度を持って通信、索敵が行える状況だ。

演習会場各所に点在する拠点エリアの数は全部で二十箇所。

演習会場北東部と南西部に設置された両軍の作戦本部を基点にして、その距離と制圧難易度によって、制圧ポイントに補正がかかる事になっている。

つまりは、自軍作戦本部から近い場所に存在する拠点エリアは制圧ポイントが低く、自軍作戦本部から遠い場所に存在する拠点エリアは、制圧ポイントが高く設定されていると考えれば、一番手っ取り早いだろう。

実際はその拠点エリア周域の地形的複雑性と制圧難易度によって、更に細かな計算が必要になってくるが、お前達ＤＱパイロットは、そこまで気にする必要は無い。

また、演習会場周辺部にはニュートラルラインと言う、非戦闘地域が設けられており、このエリア内で戦闘を行う事は硬く禁じられている。

このニュートラルラインは、撃墜状態に陥ったＤＱが、各々の作戦本部へと帰還する為の退避経路になっており、このエリア内に進入して発砲した部隊側には、かなりのペナルティが課せられる事になっている。

勿論、ニュートラルライン進入と共にモニター前面部に、ワーニングシグナルが表示される様、機体に細工を施してはいるが、何かしらの故障で機能しない場合も考えられる為、戦闘中は常に自分が居る位置を正確に把握するよう努めてくれ。

さて、それでは次に、本日の軍事演習に参加するメンバーを発表する。

＜配布資料一部内容＞

＜Ｎｙｉｆｉｎｅ　ｏｒｄｅｒ＞
＜Ｍｉｌｉｔａｒｙ　ｅｘｅｒｃｉｓｅ　１ｓｔ－ｒｅｇ＞

Ｎｏ．１　Ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｌ－ｆｒｏｎｔ　［ｆｒｏｒ］
ａ　Ｇｉｌｖａ－ｄｉｌｏｎ（ｔｗｍａｌｃ）
ｂ　Ｙａｎｒａｏ－ｊｙｕａｎｗａｎ（ｒｅｖｅｒｄｏｒ－２）
ｃ　Ｊｏｉｒ－ｌａｎｄｒｙ（ｔｗｍａｌｃ）

Ｎｏ．２　Ａｔｔａｃｋｅｒ　Ｌ－ＣｅｎｔｅｒＢｏｔｔｏｍ　［ｇｌａｎｔ］

a Delpark-shank（twmalc）
b insar-poljuo（twmalc）
c Huganne-benjaming（twmalc）

No. 3 Attacker R-CenterBottom［apach］
a Keric-vilajera（twmalc）
b Ruwsa-shall-cognac（twmalc）
c Frol-croce（twmalc）

No. 4 Defencer R-front［carion］
a Johadal-moze（reverdor-2）
b Malsran-cent（twmalc）
c Ruwacy-oscafford（twmalc）

No. 5 Defencer Lastwall1［real］
a Rancerot-avante（talcnus-X）
b Pegy-simon（akynan）
c Munia-roy（akynan-e）

No. 6 Defencer Lastwall2［emigo］
a Hasan-al-gascoin（gunbritz-T13）
b Sacks-seroian（akynan）
c Show-imura（akynan-e）

これは本日の軍事演習における先発隊メンバー表であり、その他に途中交代要員として、２０名の予備パイロットを登録してある。

配布資料最終頁に名前が記載してある２０名については、先発隊メ

ンバー達と同様、本日の軍事演習参加者として、部隊行動を共にしてもらう。

その他のメンバーについては、軍事演習三日目に参加させる予定で、残念ながら本日の軍事演習には不参加と言う扱いになるが、演習会場各所に設置された監視カメラの映像を、ランベルク基地内のモニタールームで観戦できるようになっている為、出来るだけ味方部隊の戦い方、相手部隊の戦い方を見て、脳内訓練に励むように。

勿論、軍事演習が行われている時間中、待機組みの行動を完全に拘束するつもりは無いが、言うまでも無くそれは休暇扱いではなく、待機任務扱いである事を、決して忘れないようにしてくれ。

軍事演習三日目の先発隊メンバーについては、空き日となる明日中には決定する予定で、負傷者、体調不良者などを除き、出来る限り全員が軍事演習に参加できるよう、配慮するつもりだ。

ただ、軍事演習におけるＤＱパイロット交代作業、弾薬の補給作業、ＤＱ整備作業などは、全て軍事演習時間内に流動的に行う必要があり、そう言った様々な不確定要素を考慮すると、ＤＱパイロットの交代ローテーションを、そのまま予定通りに実行できるかどうかは定かではない。

その為、軍事演習に参加出来るトータル時間は、人によってそれぞれ異なり、場合によっては大きな差異が生じてしまう事を理解しておいてほしい。

そして、この表で示した部隊編成についても、一貫して固定化するような愚策を取らず、その場その場の局面に応じて、流動的に変更を加えて行くつもりだ。

まあ、不慣れなルールをふんだんに盛り込んだ特殊な軍事演習に対して、開始する以前から彼是（あれこれ）と思案した所で、所詮は机上の空論を抜け出す事は出来ないだろうし、取り敢えず軍事演習初日となるブラックナイツ戦は、全体のバランスを重視したこの編成を持って望む事とした。

先発隊の編成は、六つの小隊を目的別に三つに分類した形を取り、汎用性の高いトゥマルク二機に、機動性の高いリベーダー2を加えた、フロア隊、キャリオン隊を拠点攻撃チーム、トゥマルクのみで編成したグラント隊、アパッチ隊を拠点制圧チーム、そして、アウトレンジ重装型であるアカイナン二機に、長距離支援型のタルカナス、ガンブリッツをそれぞれ加えた、レアル隊、エミーゴ隊を最終ライン防衛チームとして機能するよう配置してある。

本番ではこれに、予備機として登録したトゥマルク三機と、E型アカイナン三機を合わせた全二十四機を持って、ブラックナイツ部隊と戦闘を行う事になるが、各小隊同士の流動的入れ替えについては、トゥマルク、アカイナン同士での入れ替えのみに限定するつもりだ。よって、リベーダー2は常に攻撃組、タルカナス、ガンブリッツは、常に防御組に固定して運用する事になる。

戦闘エリアに投入できる機体総数は十八機までと定められており、如何なる場合においても、予備機との入れ替え作業は、必ず自軍作戦本部前のスタートエリアで執り行う必要がある。

これは、撃破状態を宣告された機体、並びに何かしらの損傷を負って、自走不能状態に陥ってしまった機体についても例外ではなく、その機体が自軍作戦本部へと辿り着くまでは、新たに機体を投入す

る事が出来ない。

自走不能状態に陥った機体については、該当エリア周辺部をニュートラルエリア化した上で、各部隊の回収作業班が機体を回収する事になっているが、どんなに急いだ所で、大幅なタイムロスは免れないだろう。

精密機械の塊であるＤＱを用いた戦闘において、機体に損傷を与えないよう配慮する事は、決して容易な事ではないと理解しているが、それでも、なるべく自走不能状態にだけは陥らないよう注意してくれ。

ＤＱパイロットの交代タイミングについては、このＤＱ入れ替え時に執り行う予定で、予備となる六機のＤＱに関しては、常に次回投入されるパイロットの機体設定に合わせた形で、交代のタイミングを待つ事になる。

勿論この時、パイロットを交代する事で、小隊長が不在となるケースも出てくると思うが、小隊同士の統合、分離、または入れ替えのケースも含めて、新たに小隊長となる人員については、作戦本部側で指名する事とする。

そして一つ、ここでお前達に前もって言っておくが、小隊長として選抜する人員は、正規軍人、非正規軍人に関わらず、無作為に指名する事とする。

これは、我がネニファイン部隊の実情として、圧倒的に少数派である正規軍人に代わり、部隊を指揮し得る人材を、お前達の中から見出したい考えがあるからであり、少々乱暴な手かもしれないが、今回は敢えてこう言った手法を用いる事にした。

場合によっては、正規軍人が非正規軍人の指揮下に入るケースもあると思われるが、私情を挟んでのイザコザを起こすような真似だけは、決してしないようにしてくれ。

それでは次に、軍事演習で使用する攻撃火器について説明する。

今回の軍事演習で使用可能な攻撃火器は、サブマシンガン、アサルトライフル、アジャスターノズルを装着したキャノン砲のみと定められており、炸裂弾を用いた兵器、ミサイル系兵器など、ＤＱ機体に著しく損害を与えるような、破壊的兵器は完全に使用が禁止されている。

勿論、相手ＤＱに接近しての格闘戦も基本的には禁止で、已む無いケースでの衝突事故以外は、運営本部からペナルティが課せられる場合もある為、各パイロット共に、その点に十分留意して戦闘するよう心がけてほしい。

戦闘で使用する弾丸の種類は、特殊マーカー付きペイント弾で、被弾した箇所に付着したマーカーペイントの状況に応じて、運営本部が機体損傷度合いを判断、その機能神経を遠隔操作でカットする仕組みだ。

部分的損傷を受けた機体については、そのまま継続して戦闘に参加する事が出来るが、撃墜と見做（みな）された機体については、ニュートラルラインを辿って、自作戦本部脇に設置された仮設整備工場へと移動し、ペナルティ時間を消化する必要がある。

このペナルティ時間は、ＤＱ機体に対して課せられるものと、ＤＱ

パイロット個人に対して課せられるものと二種類が存在し、ＤＱパイロットに課せられるペナルティ時間は、ＤＱ機体に課せられるペナルティ時間の三倍となる一時間半に設定されている。

勿論、このペナルティを課せられた、ＤＱ機体、ＤＱパイロットについては、その設定時間を消化し切らない限り、戦闘エリアに戻る事が出来ない。

予備登録メンバーの数から見ても、全員がペナルティ時間消化状態と言う、馬鹿げた状況には陥らないと思うが、予備機が六機しかないＤＱに関しては、投入できる機体が頭打ちとなってしまう可能性もある為、なるべく部隊として被撃墜数を連続して発生させないよう、気を付けなければならない所だろう。

今回の軍事演習は、完全に休みなしで執り行われる八時間耐久レースであり、目先の勝利だけに固執するのではなく、その後の展開をも見据えた、有効的な部隊運用が必要となってくる。

その為、戦場で著しく劣勢に立たされた場合には、余り無理をせず、思い切って部隊を退却させる事も必要だろうし、逆に相手を一気に殲滅できそうな状況であれば、無理なゴリ押しも吝(やぶさ)かではないと考えている。

戦闘エリア全体を見渡した大まかな行動指標については、作戦本部側から適宜(てきぎ)指示する事とするが、戦場における細かなな部隊行動については、各小隊長の判断に一任する事とする。

以上が今回の軍事演習に関わる大まかな概要説明だ。

本来であればこの後、質疑応答の時間を設けたい所なのだが、余り演習開始まで時間がないと言う事で、本日の作戦会議はこれで終了とする。

ほとんどぶっつけ本番に近い形で軍事演習に突入する事になるが、これはある意味、業(わざ)とそうした側面もある為、余り気にしないようにしてくれ。

最後に、我がネニファイン部隊は、軍事演習最終日より五日後の六月三十日には、新たな任務地であるパレ・ロワイヤル基地へと配属され、基地の防衛任務に当たる事になるが、今回の軍事演習は、それを見越した上での、非常に有益なシミュレーションとなるはずだ。

各人共に、常に本番を想定した意識を持って、この軍事演習に望むようにしてほしい。

以上だ。

07－10：○光を無くした影達の集い［1］

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１０「光を無くした影達の集い」

心地良いしっとりとした音楽の流れる薄暗い部屋の中で、ぽつぽつと無造作に置き放たれた蝋燭（ろうそく）の灯りが、木製の古びた長いカウンターテーブルを優しく照らし出している。

時折頬を撫（な）でる様に過ぎ去る柔らかな空気も、何処と無くサラサラと肌触りが良く、幻想的でいてミステリアスな印象を受けるナイトクイーンの香りも、そう悪くは無い。

大きく吹き抜けた天井部で回るシーリングファンも、それほど真新しい様相を具（そな）えておらず、吹き抜けの二階部分に当たる飲食ホールも、全て木製で拵（こしら）えられた古色蒼然とした造りとなっている。

薄暗がりに包まれた部屋の向こう側に並ぶ、こじんまりとした丸テーブルも非常に質素な物で、床一面に張り巡らされたムラのある石畳と、不規則に積み上げられた石レンガ造りの壁面が、まるで時代を逆行したかのような古めかしさを、より一層浮き立たせている様にも感じられた。

ここは、トゥアム共和国ランベルク基地地下三階に位置する、基地内で唯一の飲酒店「ドリーミネス」であり、日々の軍務に疲れた兵士達の心と身体を癒す為に、様々な工夫が施された、言うなれば趣味の施設だ。

周囲をぐるり見渡せば、不思議な背格好をした大きな観葉植物達が

幾つも目に付き、部屋の片隅で唯一煌びやかなスポットライトを浴びるグランドピアノが、一段高いステージの上で一際高雅な異彩を放っている。

壁際に置かれた本棚には、いつの物とも知れぬ古雑誌が軒を連ね、更に意味不明に置き放たれた子供向けの玩具や縫い包み、用途不明な置物の数々などが、所狭しと並べられていた。

多少ごちゃごちゃとした雑多な感じは否めないものの、こう言ったある種の「良い味」を滲ませる店の雰囲気は、逆に居心地の良ささえ感じてしまう魅力があった事も確かで、ジャネットは、妙に落ち着ついた心の淵から、一つ軽い溜息を吐き零して見せると、手元に置かれていたブランデーグラスを静かに持ち上げ、口元へと運んだ。

（ジャネット）
「ふぅ・・・。」

そして、不意に店の入り口付近へと視線を流し、隅に置かれたビリヤード台でゲームを楽しむ三人の男性達へと視線を宛がうと、特に何を思うでもなく直ぐに視線を切捨て、今度は逆に、店の置くの方で何やら楽しげに談笑している、二人の男女の方へと一瞥をくれた。

ここドリーミネスは、日々不規則な勤務体制を強いられる兵士達の為に、二十四時間三百六十五日休まず扉を開き続ける不眠の店であり、繁忙期ともなれば、席に座る事すら儘ならぬ賑わいを見せる人気店なのだが、やはりと言うべきか、時刻してまだ夕刻１６：００前と言う早い時間帯にあっては、閑散たる寂しげな雰囲気を少しも払拭する事が出来ないでいる様子だった。

彼女が座るカウンターテーブル席からは、店内の全てを見渡す事は

出来なかったが、それでも恐らく、両手の指の数に満たない程度の人数しか、居ない事だけは間違いなかった。

ジャネットはふと、右手に持ったグラスを、蝋燭の光と重なり合うようにして翳すと、濃密なオレンジ色の中で踊り狂う、黄色い閃光の揺らめきの中にじっと意識を埋没させた。

グラスの中に満たされたブランデーと、そこに積み上げられた氷の結晶が、時折激しく揺らめく蝋燭の炎によって、艶やかに照らし出され、チラチラと眩いばかりの閃光を幾つも弾けさせながら、彼女の目の前に、神秘的な光のイルミネーションを浮かび上がらせる。

それはまるで、暗がりの中へと沈んだ彼女の事を慮って、励ましのダンスを披露してくれているかの様でもあり、ほんのりと周囲に漂う甘く蕩けるようなブランデーの香りもまた、まどろみ行く彼女の意識を、そっと優しく包み込む様な雰囲気を醸し出していた。

ほとんど人気の無い寂しい店の中でただ一人、何を考えるでもなく、何をするでもなく、じっと時間が過ぎ去ってくれる事だけを願っていた彼女は、やがて、グラスの中で溶けた氷が、カラン・・・と言う、透き通るような心地良い音色を打ち鳴らしたタイミングに合わせて、一気に残るブランデーを飲み干した。

そして、口の中一杯に広がった濃密な甘味を、じっくりと堪能するかの様に、ゆったりとした長い吐息を鼻から吐き出すと、直ぐに空っぽになったグラスをバーテンダーの方へと差し向けて、フルフルと左右に揺り動かして見せる。

（バーテンダー）

「同じものでよろしいのでしょうか？」

（ジャネット）

「ん？・・・ぅん。」

丁寧な口調でそう問いかけたバーテンダーの言葉に、返事とも取れない様な微かな頷き(うなずき)を返して見せたジャネットは、ゆっくりと左手で抹茶色の癖毛を掻き揚げると、空いたグラスを彼に引き渡した後で、徐にその身をカウンターテーブルの上へと放り出した。

程良いザラザラとした感触を残したテーブルの上に、そっと両手を重ね合わせ、更にその上に火照った左頬を静かに寝かし付けると、綺麗なオレンジ色の花を咲かせる蝋燭(ろうそく)の炎が、艶(あで)やかなる温和な世界観を持って、彼女の意識を優しく迎え入れてくれる。

しかしこの時、目の前で繰り広げられる妖美なる火影(ほかげ)の舞踏会に、全く新たなる興味心を沸き起こす事が出来なかった彼女は、程なくして目の前へと垂れ落ちて来た髪の毛と共に、次第に重たさを増した両瞼を静かに閉じると、不意に思い付いた全く別なる思考を、脳裏に呟き出した。

今頃、他の皆は、軍事演習の真っ最中か・・・。

いいなぁ・・・。

そしてその直後、ビリヤードの玉が激しくぶつかり合う音を聞いたジャネットは、店の奥の方で時折笑い声を交える男女の話し声に、ちょくちょく意識を奪われながらも、全く何もする事が無い自身の

境遇に、多少嫌気が差した様子で大きな溜息を吐き出した。

勿論この時、彼女は本当に全く何もする事が無い程、暇な立場にあった訳ではなく、本来であれば、ネニファイン部隊の待機組として、現在進行形で執り行われているブラックナイツ部隊との軍事演習を、モニタールームから観戦するよう義務付けられた立場にあった。

部隊長であるサルムの計らいにより、待機組のメンバー達は、その行動を半強制的に縛り付ける窮屈な待機命令を免れる事が出来ていた訳だが、だからと言って、こんな場所で暢気(のんき)に酒を呷(あお)っていて良いはずもなかった。

軍事演習開始から三十分も経たない内に、少しぐらいなら良いわよね・・・と、モニタールームを一人抜け出したジャネットは、基地内の喫煙ルームで立て続けに二、三本のタバコを吸った後、直ぐにまたモニタールームへと戻るつもりでいた。

しかし、他人同士の戦いを傍から眺めて、一喜一憂する程の興味心があった訳でも無く、次なる戦いに備えて、勤勉なる自分を引き摺(ず)り出す気力も沸き起こらなかった彼女は、通路脇ですれ違った待機組の一人を捕まえ、少し気分が悪いと適当な理由をこじ付けると、退屈な観戦作業からばっくれて来たのだった。

（バーテンダー）
「お待たせしました。」

やがて、テーブルの上でぐったりと項垂(うなだ)れていた彼女の元に、バーテンダーの機械的な声色が届けられると、彼女は徐に頭をのっそりと擡(もた)げ、差し出されたブランデーグラスに虚ろいだ視線を据え付け

た。

そして、全く取り付く島もない素っ気無さを醸し出して、すぐさま自らの業務へと舞い戻ったバーテンダーの後姿へと視線を切り替え、もう少し愛想良く振舞えないものなのかしら・・・と、接客業務に携わる彼の人間性に疑問符を投げかける様に、多少呆れ気味の溜息を吐き付けてやった。

しかしこの時、彼女は別に、彼に話し相手になってもらいたかった訳ではなく、直ぐにどうでも良い事だと思い直して視線を切り捨てると、テーブルの上に置き放っていたタバコとジッポに手を伸ばした。

左手に持ったタバコケースの端を、右手の人差し指でトントンと軽く小突き、小気味良くせり出した一本のタバコを唇に挟み込むと、手馴れた手つきでジッポに赤々と火を付け灯し、もはや喫煙者として全く違和感を感じさせない振る舞いを奏で出して、白々とタバコの煙を吐き散らして見せる。

そして、カウンターテーブル席の背凭れに、思いっきり身体を預ける様にして天井を見上げ、タバコを口に銜えたまま、静かに両目を閉じた。

ほんと暇ね・・・。ほんとに・・・。

このままモニタールームに戻っても良いけど、なんかもう・・・面倒臭くなっちゃったし、部屋に帰ってシャワーでも浴びて、さっさと寝ちゃおうかしら。

どうせ居残り組みは明日までする事が無いんだし、それに体調が芳(かんば)しくないってのは事実なんだしさ。

まあ、体調が良くないって言うよりは、少し気分が優れないって言った方が正しいのかな。

なんかこう、鬱陶(うっとう)しくモヤモヤとした感じで、何もしたくないって言うか、でも逆に、何かをしていたいって言うか、何もやる気が沸き起こらないのに、何かをしていなければならないって、そんな漠然とした不安感が、常に意識の片隅に居座っている感じ。

何もする事が無いって、こんなにも辛い事だったんだ・・・。知らなかったな。

今までなら・・・。

・・・・・・。

そう、今までなら・・・。

やがて、不意に気持ちの悪い思考の渦へと陥りかけた自らの意識を、強引に引き戻すかの様に体勢を戻したジャネットは、きつく吸い込んだタバコの煙を割と強めの吐息と共に吐き出した。

そして、半分程度吸い終えたタバコの残りカスを、テーブルの上に置いてあった灰皿にグリグリと押し付け、妙に落ち着きを無くした意識の拠り所を求めて、再び店内の様相へと視線を巡らせた。

（ジャネット）
「ん？」

するとそんな時、見渡した視界の片隅に捕らえられた、不思議な人影の存在に気付いたジャネットは、思いもよらず唐突に虚を付かれたと言う感じで、小さく喉元を鳴らした。

それは彼女も良く知る人物の姿であり、上に薄手の半袖Tシャツを二枚羽織り、下はGパンにサンダル履きと言う、全く持ってラフな格好で姿を現した赤毛の少女だった。

この少女は一体いつからそこに居たのだろうか。

カウンターテーブル席に座るジャネットの左手後ろ側に、三歩程離れた位置で、じっと気配を殺して佇んでいた少女は、ジャネットが横目で据え付けた視線に、気付く素振りは見せはしたものの、全く一言も喋り出す様子も無く、ただモジモジと落と視線を床の上に泳がせているだけであった。

ジャネットはふと、そんな少女の歯切れの悪い振る舞いに、面倒臭そうに小さな溜息を吐き出して見せると、何事も無かったかのように視線を切り捨て、カウンターテーブル席へと向き直った。

そして、置き放たれたままになっていたブランデーグラスを手に取り、一口、二口ブランデーを口に含み入れると、完全に消え切っていなかったタバコの火を消す為、灰皿に右手を伸ばした。

しかし、ほとんど無視に近い態度を突き付けてやったにも変わらず、背後に纏(まと)わり付いた少女の気配が消える様子は無く、ジャネットは仕方無しとばかりに、あからさまに冷たさを込め入れた口調で、「

何か用？」とだけ、短く言葉を発して見せた。

（セニフ）

「あ・・・。えっ・・・と。・・・うん。」

するとセニフは、ジャネットの問い掛けに一瞬だけ反応を見せた後、直ぐに何かを話し出そうとして徐に両手を持ち上げたのだが、じっと見据えたジャネットの後姿に、以前の様な暖かさ、物柔らかさが、少しも感じられなかった事に気が付くと、何処かまごまごと躊躇（ちゅうちょ）する様に言葉を濁しまった。

予め予測出来た反応とは言え、やはり目の前で直にその様な態度をぶつけられると、思い切って会う事を決意した心の滾（たぎ）りも、何処か急に冷え行くような寒さに震えだしてしまい、これまで彼女に、一体どのように接して来たのかと言う簡単な事さえ、覚束（おぼつか）ない白霧の中へと、思考が迷い込んでしまう。

なまじ優しかったあの頃のジャネットを知っている分、その違和感は更に大きな物となってセニフの前に立ちはだかり、まるで見えない鉄格子によって、その行く手を阻まれている様にも感じてしまった。

今、セニフの目の前に居る人物は、勿論、彼女も良く知るジャネット本人に間違いは無いのだが、酷く怖気（おじけ）付いた振る舞いを見せるセニフに対し、全く救いの手の一つも差し出そうとせず、無言を突き通すジャネットの態度は、セニフの目から見ても、やはり別人と言わざるを得ない雰囲気を醸し出していた。

しかしやがて、次第に泣き入りそうな表情を浮かべて、項垂（うなだ）れてしまったセニフの姿を、横目でチラリと窺ったジャネットは、再び大

きな溜息を吐き出して見せた後で、徐に自分の座る右手側の椅子を静かに引いた。

まあ、どうせ暇を持て余してた訳だし・・・と言うのが、彼女の中での言い訳だったが、情け容赦なく振り翳(かざ)した邪険なあしらいにも負けず、必死に耐え忍んでいたセニフの姿に、彼女の方が根負けしてしまったのは間違いなかった。

（ジャネット）
「どうしたの？座りなさいよ。セニフ。」

（セニフ）
「えっ？・・・あっ・・・うん。」

セニフはこの時、ようやく自分を受け入れてくれる態度を示した、ジャネットの行動に直ぐには気付かず、しばらくの間、チラチラとジャネットの顔色を窺いながら、じっと下唇を噛んでいたのだが、意外にも温和な喋り口調でそう促したジャネットの言葉に、少し驚いた表情を浮かび上がらせた。

そして、久しぶりに聞いたようにも思える、ジャネットの優しげな声色に、ほのかに小さな笑みを零して見せると、不意に流れ落ちた涙を必死に拭い去りながら、ゆっくりとカウンター席へと歩を進めた。

ジャネットはその後、全く無言なるままに隣の席へと着席したセニフの方を見遣るでもなく、素っ気無い態度で再びタバコを手に取り、静かにジッポで火を付けたのだが、何処か居心地が悪そうに落ち着かないセニフの素振りを感じて取ると、吐き出した白い煙の中に視線を漂わせ、多少罪の意識に苛(さいな)まれてしまった。

（セニフ）
「えっと・・・。マスター。私にもヴィーナスをロックで・・・。」

やがてセニフは、テーブルの上に置き放たれていたブランデーグラスを見つけるや、カウンターの奥で静かにグラスを拭いていたバーテンダーを呼び付け、不思議と愛想の良い作り笑いを浮かべながら、ジャネットが飲んでいた物と全く同じ物を注文する。

どんよりとした気まずい雰囲気を無理に誤魔化して見せようとしたのか、普段通りの明るさを込め入れたその声色には、何処か微かな震えが混じり入ってしまった様で、自分自身それと気付いてしまったセニフは、次第に語尾を窄ませながら下を俯いてしまった。

つい今しがたシャワーを浴びてきたのであろう彼女の赤い髪の毛には、まだほのかに湿り気が残っている様で、テーブルの上で揺らめく蝋燭の炎に照らし出されて、キラキラと艶やかな光沢を放っていたが、俯いた状態からでも直ぐ解る程の赤さを残した彼女の瞳は、全く生気無く暗い影を落としたままだった。

恐らくはここ数日の間、ろくに睡眠を取る事も出来ずに、ろくに食事を取る事も出来ずに、ただ只管に泣きじゃくっていたのだろうと、そう直ぐに思い至ったジャネットは、特に面白くも無さそうに仏頂面を携えたままに、横目でじっとセニフの姿を見つめていた。

しかし、その気持ち、解るわ・・・と、唐突に痛々しい思いを沸き起こしてしまった彼女は、徐にテーブルの上からグラスを取り上げ、一気に残るブランデーを口の中に流し込むと、咽びく様な甘い吐息を大きく吐き出した後で、静かにこう言った。

（ジャネット）
「マスター。ボトルにして。」

セニフはその言葉に、思わず驚いた様な表情を浮かべて頭を持ち上げ、直ぐにジャネットの方に視線を据え付けたのだが、ジャネットは別段、セニフに何かを言うでもなく、ただ右手に持ったタバコを柔らかな唇に挟み込んで、赤々とした光を口先に輝かせただけだった。

ジャネットが言い放った言葉の真意は、もはや問うまでも無く解り切った事であり、セニフは不意に込み上がった嬉し涙を持って目元を潤ませてしまうと、直ぐにジャネットからソッポを向くように椅子を回した。

そして、やっぱりジャネットはジャネットだと、当たり前の言葉を脳裏に浮かび上がらせながら、しばらくの間、何回も何回も鼻をすする事になってしまった。

やがて、二人の前に一本のブランデーボトルを携えて歩み寄ってきたバーテンダーが、ジャネットの軽い頷(うなず)きを見るや、用意した二つのグラスに氷を入れ、手際良く開け放ったボトルの口先を、ゆっくりと交互にグラスへと傾けて行く。

しかしこの時、何処か訝(いぶか)しげな表情を色濃く滲ませて、この奇妙な二人組みの女性にチラチラと懐疑的視線を宛がっていたバーテンダーは、左手に座る少女、セニフの首元からぶら下がっている軍団証を確認する事を忘れなかった。

この軍団証は、トゥアム共和国軍在籍の兵士である事を示す身分証

明書であり、各軍団別に色分けされた外装に、軍階級、所属部隊、氏名、年齢、生年月日、性別、顔写真など、間違いなく本人である事を示す情報が記載さたものだ。

そしてその他にも、基地内の各通路に設けられたセキュリティ認証や、各個人に与えられた部屋の鍵、基地内での買い物、飲食などの支払いにも使用できる、全く持って便利なカードであったが、その分、紛失してしまった時の後処理が非常に大変で、基地内で暮らす兵士達にとっては、命の次に大事と言える代物の一つだった。

勿論この時、このバーテンダーが一番気にした項目は、見るからに幼いこの少女の年齢が、十六歳以上であるかどうかと言う事であり、男女共に十六歳で成人扱いとなるトゥアム共和国において、彼女にお酒を出して良いものかどうか、疑ってかかっていた訳だ。

喫煙に関しては二十歳以上である事と言う制限が設けられているが、飲酒、結婚、各種免許の取得、選挙権など、成人としてのその他の権利は、全て十六歳の誕生日を迎えたその日から与えられる事になっている。

如何に見た目が子供の様に幼いセニフであっても、この国ではもう、一人の成人女性として見做(みな)される身分に達している事になるのだ。

バーテンダーはその後、セニフの軍団証に記載された「１６」と言う数字を読み取ると、並々とブランデーを注ぎ入れたグラスを二人の前にスッと差し出し、静かにカウンターテーブルの上にボトルを置き放った。

そして、もう一度だけセニフの方に視線を宛がうと、本当に十六歳なのだろうか・・・と言う拭い切れない疑念を軽い溜息と共に吐き

捨て、直ぐにカウンターの奥の方へと姿を消していった。

子供と大人を分け隔てる成人年齢に関しては、今尚、各国で様々な意見が飛び交い、幾度と無く議論を重ねて来てはいるのだが、人によって成長度合いが異なり、更にそれを正確に見計る術が無い以上、一概にこれと言った区切りを見出す事は出来ないのかもしれない。

現に、十六歳を超えた身でありながら、何処の誰が見てもまだ子供と言う幼さを残し、人前でも沸き起こる感情を上手く御(ぎょ)し得ないセニフの姿は、ジャネットの目から見ても、やはりまだ子供と言わざるを得なかった。

07－11：○光を無くした影達の集い［2］@

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１１「光を無くした影達の集い」

（セニフ）
「あのさ・・・。」

やがて、彼女達二人の間で静態していた空気が、新たなる展開を切望するセニフの小さな呟きを振るわせたのだが、この時、彼女がようやく搾り出した言葉は、全くその先へと進む導とは成り得ない短さのまま途切れてしまった。

そして、一体何から話したらいいのか解らないと言った素振りで、太腿付近へと据え置いた両手でＧパンをグッと強く握り締めると、挙動不審に右往左往させていた視線をテーブルの上に落としてしまう。

ジャネットは、そんなセニフの振る舞いを横目で窺い見つつ、新たに差し出されたブランデーグラスを片手に、じっとセニフの次なる言葉を待っていたのだが、その後、口元で何回グラスを傾けようと、セニフが口を開く気配は感じられなかった。

すると、やはり自分の方から折れてやるしか無いと悟ったジャネットが、静かに口を開いてセニフの背中を後押ししてやる。

（ジャネット）
「酷い顔してるわ。セニフ。」

（セニフ）
「そ・・・。そんな事ないよ・・・。」

そんな事ない訳が無い・・・と、怪訝な表情を浮かべたジャネットは、テーブルの上にグラスを無造作に置き放ち、大きく吸い込んだタバコの煙をあらぬ方向へと強く吐き散らして見せた。

そして、吸い終わったタバコを灰皿へと押し付け、徐にセニフの方へと体勢を翻すと、何処か釈然としない態度のまま、再び黙り込んでしまったセニフに、少し苛立った様相を強く滲ませた、刺々（とげとげ）しい視線を突き刺してやった。

（ジャネット）
「アリミアの事なんでしょ?言いたい事があるなら、はっきり言いなさいよ。一人で黙り込んでたって、解らないじゃないの。」

ジャネットは、それは少し冷たい言い草だ・・・とは解っていながらも、彼女自身、自分の心の中に空いた深い穴蔵の底に落ち込んで、身動きが取れなくなってしまった過去の経験から、今のセニフには、外部からある程度強い揺さ振りをかけてやった方が良いと、そう思った。

勿論、自分自身が心に負った深い傷と、セニフが心に負っ深い傷とが、全く同じ物であるはずも無いのだが、それでも、たった一人でその状況から立ち直る事が、如何に困難で苦しい事なのか、彼女は既に知っていたのだ。

するとセニフは、小さな身体を小刻みに震わせながら、恐る恐るジャネットの顔を見上げると、ようやく意を決したように、彼女の思いに答えて見せるかのように、か細い声を必死に吐き連ねていった。

（セニフ）
「あのさ・・・。」

（ジャネット）
「うん。」

ジャネットは、優しく前後を接続する頷(うなず)きを発した。

（セニフ）
「あのさ。こういう時、どうしたらいいのか解んない・・・。どうしたらいいのか・・・。ほんと、悲しいし・・・、寂しいし・・・。でも、それだけじゃなくって、すごく、すごく、・・・苦しいし・・・。そして、悔しいし・・・、情けないし・・・。やっぱりあの時・・・。・・・。やっぱり・・・。そうだよね・・・。もう・・・、どうしたらいいんだろ・・・、私・・・。どうしたら・・・。ぅっ・・・。ぅっ・・・。」

赤さの残る大きな瞳に溢れんばかりの涙を湧き上がらせながら、必死に今の自分の心の内をジャネットに明かそうとして見せるセニフだったが、振るえる声色で紡(つむ)ぎ出された言葉は、全く持って不明瞭でいて、且つ、意味不明だった。

しかし、再び下を俯く様に項垂(うなだ)れてしまったセニフが、Gパンの太腿付近へとポタポタと涙を零し落とす度に、ズキズキと痛いぐらいにセニフの想いが伝わって来る様で、ジャネットはやがて、そんなセニフの姿を見ていられなくなってしまった。

（ジャネット）
「飲みなさいよセニフ。飲むんでしょ。」

（セニフ）
「あ・・・。・・・・うん。」

そして自分には、セニフに対して何ら気の利いた言葉を投げかけてやる事が出来ないのだと、そう思い付いたジャネットは、静かに自分のグラスを口元に宛がいながら、セニフにも飲むよう優しく促しをかけた。

お酒を飲んで、全てが洗い流される訳ではない。

辛く悲しい過去の記憶が消え去る訳でもない。

ただ単に、一時的に気分を高揚させる事によって、まどろみの中に意識を沈め入れる事によって、しばらくの間、それを自分の傍らへと退けて置く事が出来るだけ。

お酒のアルコール分に陶酔した意識が、温和な偽りの世界観の中で凍結され、時間の流れを早く感じ取れる様になるだけ。

やがてセニフは、ジャネットが差し出した薄ピンク色のハンカチを受け取ると、一生懸命に鼻をすすりながら丁寧に目元を拭き、高ぶった気持ちを静かに落ち着けるよう、ゆっくりと深く、大きな深呼吸を繰り返した。

そして、最後に両目を瞑ったまま天井を見上げ、一際大きな吐息を長く緩めに吐き上げて見せると、徐に目の前のブランデーグラスを左手で掴み取り、一気に口の中へと流し込んだ。

（セニフ）
「ふぅー。」

おおよそ十六歳とは思えぬ豪快さを醸し出して、グラスの三分の二程度のブランデーを一気に飲み干して見せたセニフは、焼ける様な強い熱さを喉元に感じながらも、何処か心地良さげな表情を浮かび上がらせ、静かにグラスをテーブルの上へと置いた。

口の中で溶け行く柔らかな舌触りと、鼻元に残る甘く切ない優美な香りとが、まるで微温湯の様な暖かさを持って、彼女の意識へと纏わり付くと、深々と抉り取られた心の傷跡が、じんわりと癒される様な錯覚を覚える。

しかしそれが、ほんの一時的なものでしかない事は、セニフも既に解っていた事であり、彼女は「せめて」との思いを強く込め入れ、右手を胸元にそっと据え置くと、アルコール分に煽り立てられた意識が、まともに会話できるぐらいの自分を、奮い立たせてくれる事を強く願い、ギュッと下唇をかみ締めた。

ジャネットは、そんなセニフの行動をじっと横目で窺い見つつ、この子も必死なのよね・・・と言う思いを沸き起こすと、やがて、しばらく口元に宛がわれたままとなっていた、ブランデーグラスを静かにテーブルの上へと置き、その代わりとばかりに手にした一本のタバコを口元に銜え入れた。

そして、次第に落ち着きを取り戻し始めたセニフと、不意にチラリと視線を交わし合うと、ゆっくりとカウンター席の正面へと向き直り、優しげな語り口調で口を開いた。

（ジャネット）
「そうね。・・・まずは泣く。泣いて、泣いて、泣きまくる。涙が出なくなるまで、必死に泣きまくる。」

右手に持ったジッポの蓋を、意味なくカチカチと開いたり、閉じたりしながら、ジャネットは、真っ先に思い付いた回答をセニフに示し出して見せた。

勿論それが、ジャネット自身、それまで何度も何度も繰り返してきた行動であろう事は、セニフにも直ぐに解った事だ。

（セニフ）
「でも・・・。それでも・・・。辛さが消えなかったら？」

（ジャネット）
「うん。そうね。・・・そしたら何か・・・、なんでも良い、何かに没頭すると良いわ。辛い事を考える暇がないぐらいにね。」

残酷な現実に打ちのめされないように、悲しい記憶に切り刻まれないように、負たる思考のスパイラルから抜け出す為に、必死になって別の何かに意識を没頭させる。

それは確かに、辛い思いが薄らいで行くまでの、一時的麻酔薬としては有効的な手段である。

しかし、これだけ深い傷を負った心の至る所から、大量の血飛沫（ちしぶき）が立ち上っていると言うのに、それを全く無視したままに、何か別の事を考える事などできるのだろうか。

別の何かに意識を没頭させるにしても、何かをしようと言う気持ち

さえ沸き起こらない中にあって、セニフは何処か、釈然としない様な表情浮かべて、ジャネットに視線を差し向けた。

そして、再び持ち上げたブランデーグラスに、チビリと口を付けた後で、セニフは不意に沸き起こった一つの疑問を投げかける。

（セニフ）
「・・・。・・・ジャネットは、何に没頭したの？」

しかしこの時、唐突にほんの一瞬だけ、セニフが投げかけた言葉に、ピクリと反応を見せたジャネットが、見た目には解らぬ程の暗い影を落として、完全にその動きを止めてしまった。

セニフは、二人の間に流れ始めた異様な雰囲気の存在を感じ取ると、多少うろたえた様子で正面へと向き直り、変に誤魔化しを入れる様にして、ブランデーグラスに口を付けた。

勿論セニフも、当然それと気付いていながらにして、ジャネットにそう問いかけた訳ではなく、次なる答えを欲して止まない心に、素直に順じただけなのだが、それは余りに、ジャネットに対して失礼な質問だったと言わざるを得なかった。

最終的に、セニフがそれと気付く事は無かったが、あの忌まわしきＢＰ事件が発生してからまだ一ヶ月、ジャネットが最愛の弟であるマリオを失ってから、まだ一ヶ月しか経っていないのだと言う事を考慮すれば、それを「どうやって乗り越えたのか」とも取れる発言を、彼女に投げかけて良いはずも無かった。

ジャネットは、やっぱり、そう見えるのかしら・・・と思いはしたが、セニフの失言に対して特に何を言うでもなく、口に銜えたまま

になっていたタバコに火を付けた。

そして、ゆっくりと大きく深呼吸をする様にして、大量の煙を吸い込んで見せると、静かに両目を閉じて口を開いた。

（ジャネット）
「ＳＥＸ・・・。」

（セニフ）
「ブフッ！！」

＞ｉ２０５５７―８２７＜

セニフはこの時、唐突に放たれたジャネットの卑猥（ひわい）なる言葉に、思わず口に含んでいたブランデーの全てを吐き出してしまった。

（セニフ）
「ジャ・・・ジャ・・・ジャ・・・ジャネット。」

そして、あたふたとうろたえる大きな瞳を更に大きく見開いて、ジャネットの横顔を覗き込むと、全く返す言葉も見つからないと言った様相のまま、何度も何度もつんのめりながら、彼女の名前を呼んだ。

それまで、優しくて清楚なお姉さんと言うイメージを形作っていたセニフにとって、それはまさに、頭上からいきなり爆弾を投下されたに等しい衝撃的発言だった。

セニフはその後、あからさまに落ち着きを無くした心の動揺を、ほ

とんど隠しきれない様子で、しばし、可愛いらしき挙動不審者を演じる事になってしまったのだが、やがて程なくして、自身の仕出かした悲しき惨劇に気付くと、テーブルの上に置いてあった白い布巾を手に取り、その後処理に託けて、バツの悪い思いを紛らわしにかかった。

しかし、そんなセニフの慌てふためき様を見て、クスクスと笑い声を上げていたジャネットは、何処か少し意地悪な思いを滲ませた笑みを浮かべて、セニフにからかいの言葉を投げかけるのだ。

（ジャネット）
「あーらやだ。赤くなってやんの。可っ愛いんだから。」

（セニフ）
「ち・・・違うよ！・・・これは、お酒のせいだよ！」

微笑ましい程に初々（ういうい）しい反応を持って、真っ向から否定しにかかるセニフだが、ほんのりと赤く染まった頬の火照りは、ジャネットの仕掛けた悪戯心によって、更なる赤味を増して行き、意に反して急激に熱せられた意識の高鳴りが、更に彼女を慌てさせる。

ジャネットは、ふーん。そうなの・・・と、白々しくも疑心に塗れた細目を浴びせかけ、ゆっくりとタバコの煙を吸い込んで見せると、意図的に作り出した不思議な間を持って、セニフの羞恥心を煽り立てた。

そして、恥ずかしそうに俯いてしまったセニフの表情を、下からマジマジと覗き込む様に身を寄せると、にやりと歪めた可愛らしき笑みと共に、更なる追い討ちをかけて行った。

（ジャネット）
「うっふふ。無理して誤魔化して見せたって駄目よ。まだまだ子供だと思ってたのに、貴女も結構いけないおませさんなのね。一体何を想像しちゃったのかしら？」

（セニフ）
「えっ！？違っ！・・・違うって！ジャネット！変に誤解しないでよ！これは・・・、その・・・、違うんだって！」

（ジャネット）
「えっへへー。いいじゃない。いいじゃない。セニフ。別に悪い事じゃないでしょ？考えれば貴女だって、もう年頃の女の子なんだし、エッチな事の一つや二つ、考えてたっておかしくないものねー。」

（セニフ）
「そんな事！・・・そんな事考えてないもん！・・・そんな事・・・。」

（ジャネット）
「あら。そんな事って、どんな事よ？」

（セニフ）
「えっ？・・・あ。・・・えっと。・・・・・・うー。」

（ジャネット）
「ほらほら。考えちゃってる。うっふふ。セニフもさ、ほら、そろそろしたいなーなんて、そう思う年頃なんじゃないの？・・・例えばさー。シルと一緒に、ベッドの中でー・・・、とか。」

（セニフ）
「うわーーっ!!やめて!!やめて!!やめてよジャネット!!そんな事無い!!・・・そんな事無いって!」

（ジャネット）
「あっはははははは。可っ愛いー。」

やがて、茹蛸（ゆでだこ）のように真っ赤に染め上がった表情を僅かに俯けながら、滑稽（こっけい）な慌て振りを披露するセニフの姿を見遣り、ジャネットは、自然と沸き起こる可笑（おか）しさを食い止める事が出来なくなってしまった。

そして、少し意地悪しすぎかしら・・・とは思いつつも、一人満足気な気分でゆっくりとタバコをふかして見せると、ほとんど嫌がらせに近い好奇的視線を携えたままにして、セニフににっこりと優しげな微笑を投げかけて、こう続けるのだ。

（ジャネット）
「ねぇねぇセニフ。本当の所はどうなってるのよ。シルとはうまく行ってるの?あの子、ああ見えて女の子の扱いが苦手なタイプっぽいし、いざって言う時、結構尻込みしちゃうんじゃないかって、私はそう思ってるのよね。貴女のあからさまな引っ付きアタックも、そう悪くは無いと思うんだけどさ、ああ言うタイプは、一度ソッポ向いてやった方がいいんじゃないかって・・・。・・・あれ?・・・セニフ。どうしたの?」

しかしその直後、不意にかち合った視線越しに、一瞬だけ驚きの色合いを滲ませたセニフの表情を見て取ったジャネットは、その後、次第に暗い影を落として俯いてしまったセニフの様子を気に掛け、優しげな口調に甲高い色合いを交えて問いかけた。

（セニフ）
「いや・・・。えっと・・・・。」

セニフはその後、再び小さく篭(こも)る様な声色でそう切り返し、怪訝(けげん)な表情を携えたまま、ゆっくりとカウンターテーブル席へと腰を下した。

そして、まずい、やりすぎたかな・・・と言った、不安げな表情を浮かべるジャネットのそわ付きを感じ取りながらも、じっと目の前のブランデーグラスに視線を据え付け、キュッと軽く下唇を噛んだ。

セニフはこの時、ジャネットと交わした短いやり取りの中で、ようやく彼女の中に、とあるものを見つける事が出来た自分に気が付いた。

それは、触れれば切れるナイフの様な鋭いオーラを、あからさまにひけらかしていたジャネットの姿ではなく、嘗ての優しいお姉さんと言った、温和で柔らかな彼女の雰囲気だった。

（セニフ）
「えっと・・・。ほら・・・。久しぶりだったからさ・・・。うん。久しぶりだったから・・・。ジャネットの笑った顔、見たの・・・。」

小さな身体を更に小さく窄(すぼ)める様にして、次第に下を俯いて行ったセニフは、長い赤い髪の毛でその表情を隠したまま、静かにそう言葉を連ね出した。

嘗てのセニフにとって、それは至極当然とも言える、ジャネットの雰囲気に間違いなかったが、それでもその声色には、本当にそれが本物なのかどうかを確かめるような、そんな戸惑いが込められていた風でもあった。

ジャネットは、そんなセニフの姿をじっと横目で窺いつつも、終始無言を突き通し、何の気なしに右手に持ったタバコを口元へと運ぶ。

（セニフ）

「なんかさ・・・。ちょっと、別人みたいだったから・・・。ちょっと怖かったんだ。ジャネットに話しかけるの・・・。なんか・・・、なんて言うか・・・、ジャネットが、何処か遠くに行ってしまったような、そんな気がして・・・。怖かったんだ・・・私。」

セニフは、恐る恐るながらもそう静かに呟き出し、僅かに頭を傾けて、ジャネットの顔色をチラリと窺い見たのだが、自分へと宛がわれていたその瞳の中に、不思議と不気味な素っ気無さが滲み出している事に気が付くと、直ぐにカウンターテーブルの上へと視線を落とした。

ジャネットは、大きく深い溜息をゆっくりと吐き出し、正面に向き直した視線を何処に宛がうでも無く、じっと遠くの方へと据え付ける。

そして、何処か変に纏(まと)わり付いた心の鬱陶(うっとう)しさを紛らわせるように、大きくタバコの煙を吸い込むと、白い煙を勢い良く吐き付けながら、

「別に。私は何も変わっていないわよ。」と、静かな口調で言い放った。

そう。私は何も変わっていない。

今の私も私自身。昔の私も私自身。

素っ気無く人を突き放すような態度を滲み出す私も私自身。

優しく人当たりの良い雰囲気を纏った私も私自身。

（セニフ）

「ううん・・・。変わった・・・。変わっちゃった・・・。」

（ジャネット）

「変わってない。」

誰しも皆、黒く淀んだ汚らしい心を内に秘めているもの。

誰しも皆、そんな自分をひた隠しにして人と接しているもの。

誰しも皆、本音と建前をうまく使い分けて、狡賢く生きているもの。

表と裏、その両者が完全に一致した聖者の様な人間なんて、この世には存在しない。

いるはずも無い。それは私も同じ。そして貴女だって同じはず。

（セニフ）

「変わったよぉ・・・。」

（ジャネット）

「変わってない。」

貴女は単に、私の白い部分を見ていただけ。

貴女は単に、私の白い部分に触れていただけ。

私の黒い部分を見る事も無く、私の黒い部分に触れる事も無く、ただ私の白い部分の眩さに目が眩んでいただけ。

本当の私の姿、私の心の白い部分と黒い部分、表と裏、その全てを知っているのはマリオだけなの。

私の事なんて何も知らない癖に、私の事、勝手に白い人間だって決め付けないでよ！

私の事なんて何も知らない癖に、あの冷血女みたいに、知った風な口きかないで！

（ジャネット）

「私は何も変わって無いわよ！！」

直後、グラスに残されていたブランデーを一気に飲み干したジャネットは、空いたグラスを少し強めにカウンターテーブルに叩き付けると、あからさまにそれと解る怒気を強く滲ませて、そう言い放った。

セニフは一瞬、驚いた様に上半身をビクリと跳ね動かし、項垂れた頭を更に前へとのめり倒すと、酷く脅えた様子で小さな両肩を小刻

みに震わせる。

しかし、込み上げる涙を必死に堪える様に、二、三、小さく鼻をすすって見せたセニフは、太腿の上に置かれた両手にグッと力を強く込め入れると、唐突に顔を上げて、ジャネットの方へと向き直った。

（セニフ）
「違う！・・・やっぱりおかしい！・・・こんなのジャネットじゃない！」

（ジャネット）
「別におかしくなんかないわ。私は私よ。」

（セニフ）
「ううん、違う・・・。私の知っているジャネットは、もっともっと、優しくて・・・、暖かくて・・・、こんな・・・、こんな冷たい態度を取るような人じゃなかった。マリオが死んで・・・、ジャネットが酷く落ち込む気持ちも、解らなくは無いけど、アリミアと喧嘩してからのジャネット、やっぱり変だよ・・・。」

（ジャネット）
「あの女は関係ない！！私は元々こう言う人間だったのよ！！私の事、何も知らない癖に、勝手な事言わないで！！気分が悪くなるわ！！・・・それから今後、私の前で、あの女の話はしないでくれる！？私・・・、あの女、大っ嫌いなの！！」

（セニフ）
「そ・・・、そんな・・・。そんな言い方って無い！！幾ら喧嘩してたからって・・・、そんなの冷たいよ！！・・・酷いよ！！アリミアは・・・、アリミアは・・・、アリミアは死んじゃったんだよ

!?ジャネット!!」

（ジャネット）

「そんな事、・・・もうとっくに知ってるわよ。」

セニフはこの時、余りに素っ気無くそう切り替えしたジャネットの態度に、しばし唖然とした表情を浮かべてその動きを止めた。

そして、程なくして零れ落ちた涙と共に、僅かに顔を横に背けると、違う・・・、違う・・・、と心の中で強く否定する思いを反芻（はんすう）させた。

（セニフ）

「違う・・・。やっぱり違う・・・。おかしいよ・・・。変だよ・・・。ジャネット・・・。アリミアとジャネットって、・・・そんな程度の仲だったの?・・・今まで一緒に、二年間も一緒に暮らして、楽しい事だって、一杯あったじゃない・・・。皆で楽しく、笑ったりしたじゃない・・・。それなのに・・・、アリミアの事、そんな風に言うなんて・・・、絶対におかしい・・・。絶対におかしいよ!!ジャネット!!・・・昔のジャネットなら泣いてたよ!!絶対に泣いてた!!ねぇそうでしょジャネット!?違うの!?ねぇ!!」

再び顔を持ち上げ、ジャネットの右手へと掴み掛かり、必死にそう訴えかけるセニフの表情は、もはや流れ落ちる大量の涙でぐしゃぐしゃだった。

じっとジャネットへと据え付けられたその瞳は、何処（いずこ）かへと姿を消してしまった、嘗ての優しきジャネットの姿を探し求めているかの様でもあり、セニフは、小刻みに震える小さな身体を、込み上げる嗚咽（おえつ）で何度と無くしゃくり上げながらも、挫（くじ）けそうになる想いを必

死に奮い立たせ、真っ直ぐに、真っ直ぐに、ジャネットの心へと突き刺していった。

しかし、不意に鬱陶(うっとう)しさを覚えたジャネットは、悶々（もんもん）と苛立(いらだ)った意識を、手元に置いてあった灰皿へと逃がすと、吸い終わったタバコをじりじりと押し付けながら、強引に紛らわせる。

そして、大きく吐き出した溜息の後に、全く間髪を置かず手に取した新たなるタバコを口に銜え入れると、手際良く右手に持ったジッポで火を灯しながら、真っ先に思い付いたままの言葉を口にした。

（ジャネット）
「私の涙はね、もう・・・。」

・・・出なくなったの。

しかし、そう途中まで言いかけて、思わずその語尾の部分を飲み込んだジャネットは、唐突に驚いた表情を浮かべたまま凝り固まってしまった。

そして、強引に喉元で堰(せ)き止めたその言葉を、真っ黒な壁で四方を覆われた薄ら寒い心の中に仕舞い込み、木霊(こだま)の様に飛び交う言葉の余韻(よいん)を、酷く打ち拉(ひし)がれた意識の手先で追い回した。

それはまるで、真っ暗な部屋の中で、突然眩い照明を焚(た)き付けられた様な、突然深い眠りの淵から叩き起こされた時の様な、一瞬の忘却の白霧に囚われた意識が、周囲の状況を中々把握できずに、もがき苦しむ物憂(ものう)い感覚に似ている。

ゆらゆらと揺らめくジッポの炎へと釘付けられた彼女の視線は、全く動く気配すら見せず、口元に銜(くわ)えたタバコの先端部では、燻(くすぶ)った様に点火し損ねた種火が、「パスッ」と言う音と共に、虚しい煙を上げた。

・・・私の涙は出なくなったの・・・。

それは嘗て、私自身に対して言い放たれた冷酷な言葉。

全身の血液が沸き立つ程に、怒りを覚えた言葉。

忘れたくても忘れられない、思い出す度に腸(はらわた)が煮えくり返る程の、忌々（いまいま）しき言葉。

それは勿論、私自身、その意味を取り違う事も、言い間違う事も無いはずの、自分とは対極にあるはずの言葉。

それなのに・・・、それなのに・・・。

何をどう間違ったのか・・・、まさか私自身が、そんな言葉を吐き出そうとするなんて・・・。

しかも、あの時とほとんど同じ様な状況で、あの女とほとんど同じ立場で・・・。

そんな・・・、ありえない・・・。

ジャネットは直後、酷くうろたえた様子で瞳を小刻みにバタつかせながら、目の前に放置されていたブランデーグラスへと視線を取り付かせると、ぐらつく意識の拠り所として、必死にそれを凝視した。

空っぽになったブランデーグラスの中では、唯一残された氷の破片が二、三、今尚、煌びやかな光を放っており、暖かな外気によって融け出した雫を、止め処なく滴り落としている様子が、遠目からでもはっきりと見て取る事が出来た。

胸の奥深く、心の淵へと突き刺さった現実と言う鋭利な鏃を氷に見立て、そこから解け出す雫を涙と称するなら、それを取り巻く思いの強さは、外気の温度に等しいと言える。

セニフから浴びせ掛けられた鋭い言葉の鏃に対し、何ら少しも動ずる素振りを見せない彼女の心は、確かに完全に冷え切っていた。

心の淵へと深々と突き刺さった言葉の痛みに悶えるでもなく、その傷口を少しも癒そうとしない彼女の心は、確かに完全に冷え切っていた。

それは勿論、それまで胸の奥に突き刺さっていた痛々しい過去の記憶を、必死に融かそうとして、持てる熱気を使い果たしてしまったから。

心の中に新たなる熱を生み出す、源となるべき志、目標、希望と言ったものを、いまだ全く見出す事が出来ていなかったから。

他人との物理的干渉から来る、一時的な温もりだけ切望して、他人との論理的干渉から来る、真なる暖かさを拒み続けていたから。

仲間の死。二年も一緒に暮らしたチームメイトの死。

親友と呼べる程の心の通い合いは無かったかもしれないが、それでも友人と呼べる程の楽しき遣(や)り取りを幾つも重ね経て来た仲間の死。

アリミアが死んだと言う事実を前にして、全く涙が一滴も零れ落ちてこないのは、今だ彼女の心の中で、アリミアに対する激しい怒りの念が、グズグズと燻(くすぶ)っているから・・・と言うのも、あながち嘘では無いのだろうが、マリオの死と言う、もはやこれ以上無い深い悲しみを知ってしまった心が、その他の悲観的事象に、何ら揺り動かされなくなってしまったのも事実だった。

打ちのめされ、這い上がる度に人は強くなる。

それは人の身体についてのみ言える事ではなく、人の心に関しても同じ事・・・。

精神的に強くなった・・・と言われれば、それは正しくその通りなのかもしれないが、精神的に不感症になった・・・と言われれば、それもまた正しくその通りでもあり、ジャネットはふと「この冷血女・・・」と、心の中で自分の事をそう吐き捨ててやった。

そして、暖かな温もりを失った心の冷気に、じっと意識を曝し漬けたまま、脳裏に思い描いたアリミアと言う人間像に、自分自身の姿を重ね合わせると、そっと宛がった内なる視線を持って、彼女を作り上げるに至った様々な出来事(ひげき)を連想してしまった・・・。

私は、アリミアと言う人間、アリミアという人間の性格が嫌い。大っ嫌い。

それはそれで良いと思う。無理して自分を曲げて考える必要なんて無いと思う。

でも・・・、それでも・・・、なんとなく・・・・、アリミアと言う人間が、少し解ったような気がする・・・。

（ジャネット）
「ふー。」

やがて、吸い損ねたタバコを灰皿の中へと放り投げ、左手で軽く前髪をクシャクシャと掻き乱して見せたジャネットは、まるでタバコの煙を吐き出す様に溜息を付き、目には見えない心のモヤモヤを周囲へと撒き散らした。

そして、徐にカウンターテーブルの奥の方に置かれていたアイスペールへと右手を伸ばし、静かに手元まで引き寄せると、自分のグラスとセニフのグラスに、手掴みで取った氷を二、三、放り込んだ。

（ジャネット）
「ねぇ。セニフ。」

静かに心を落ち着けるように、そうセニフの名前を呼んだジャネットは、その後、手にしたブランデーボトルを、ゆっくりと二人の空いたグラスへと傾けながら、チラリとセニフの方へと視線を流す。

（ジャネット）

「何で私の名前に、ミドルネームが付いてるか解る？」

セニフはじっと、下を俯いたままの体勢で、身体を小さく窄めていたのだが、涙に濡れた目元を軽く拭い去った後で、静かにジャネットと視線を交錯させると、「解らないよ」とだけ小さく返事を返した。

ジャネットの表情を見る限り、先ほど急激に熱を帯び爆発した怒気は、完全に何処かへと掻き消えてしまったらしく、セニフの前にグラスを差し出す素振りも、静かなる所作だった。

（ジャネット）
「私とマリオの違い。」

ジャネットは、持ち上げたブランデーグラスを目の前でクルリと回し、カラン・・・と言う綺麗な氷の音色を一つ響き渡らせると、ブランデーにチビリと口を付けた後で、静かにそう呟いた。

それは、決して誰にも言うつもりの無かった過去の話。

自分とマリオだけが知っていれば、それでよかった過去の話。

勿論、それをセニフに話して聞かせた所で、何がどう変わると思った訳では無い。

しかし、ほろ酔い加減にまどろんだ意識が、不意に静けさを取り戻した心の水面に、何処か居心地の悪いむず痒さの様なものを、感じてしまったからなのかも知れない。

ジャネットは、薄暗い店内に流れるしっとりとした音楽が、次の曲

へと切り替わるタイミングを見計らって、再びブランデーを口に含み入れると、周囲にふんわりと漂い始めた甘美な香りに誘(いざな)われる様にして、少しだけ昔の話を語り始めた。

07－12：○光を無くした影達の集い［3］

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１２「光を無くした影達の集い」

私はね。元々「ジャネット・クライス」って言う名前だったの。

「ホスノー」って言う名前は、母が再婚してから付いた名前なんだ。

つまりね。私とマリオは、父親が違うの。

私達二人が、リバルザイナから来たって事は、セニフも知っている事だと思うけど、実は私、こう見えて、結構いいとこの一人娘だったんだ。

母は「メルタリア」で代々続く大資産家の跡取り娘で、父はリバルザイナでも有数の大企業の社長だった。

セニフは「クライス」って言う名前、何処かで聞いた事無いかしら？

リバルザイナでＤＱなんかも作ってる、結構大きな会社なんだけどね。

父が、その会社の社長だったの。

私は、生まれた時から何不自由無い、人も羨（うらや）む様な裕福な生活を送っていたんだ。

リバルザイナ南西部「ギド砂漠」の辺（ほとり）にある「ヴォルドォ」って街

でね。

ヴォルドォは、そんなに大きな街じゃないんだけど、街周辺部の砂漠地帯には、大きな工場が幾つも立ち並んでいて、すごく近代的な街・・・、そうね、リトバリエジ都市の工業地帯みたいな感じって言ったら、解りやすいのかな。

「不滅の楽園」って呼ばれている「メルタリア島」も、すぐ目と鼻の先にあったし、私が小さい頃は、結構リゾート地としても有名な場所だったのよ。

工業都市って言う割りには、すごく綺麗な街だった事を覚えているわ。

私の家は、そんな綺麗な街並みを一望できる、少し小高い丘の上にあって、大きな建物が幾つも連なって出来た、まるでお城の様な、真っ白いお屋敷だった。

家の使用人なんか、何人いるのか数え切れないほど居たし、専属のコックや家庭教師以外にも、医師や弁護士まで居て、ほとんど家の外に出なくても、普通に生活できたぐらいね。

欲しい物も、言えば何だって手に入ったし、自分では何もしなくても、全部使用人達がやってくれる、そんな贅沢な暮らしだった。

でもね。そんな暮らしも、見た目ほど幸せじゃなかったんだ。

確かに私は、大勢の使用人達に囲まれて、何不自由無い暮らしを送

っていたけど、誰も親身になって私の相手をしてくれる人は居なかったし、私が通っていたエレメンタリースクールの先生達も、何処かみんな、変に余所余所(よそよそ)しかった。

私は周囲の大人達から、他の子達とはちょっと違う特別な存在なんだって、そう思われてたみたいで、まるで腫(は)れ物に触る様な扱いを受けていたんだ。

クラスの中でも、私はやっぱり変に浮いた存在で、誰も私に話しかけてくれる子は居なかったし、友達と呼べるような友達も全く出来なかった。

勿論、家に帰れば母が私の相手をしてくれたけど、父は仕事が忙しいからと言って、ほとんど家に帰ってこなかったし、母はいつもいつも、何処か暗く寂しげな表情を浮かべていた。

私はその頃、仕事が忙しいなら仕方がないかって、幼いながらにそう自分に言い聞かせて、ずっとずっと我慢してたんだけど、実際は仕事だなんて、全然嘘っぱちだった。

私の父は、世間でも有名な好色的人間。

毎晩のように違う女の人を引き連れて、遊びまわっていたんだって。

私がその事を知ったのは、かなり後になってからの話なんだけど、ある時、使用人の一人が、こっそりと私に教えてくれたの。

ほんともう、最低の父親だった。

少しも家族を省みない、仕事と女の事しか頭に無い男なんて、ほんと最っ低・・・。

私は父の事が大っ嫌いだったわ。

母は毎晩、私を寝かし付けた後で、一人寂しくベッドの中ですすり泣いているの。

ほんと毎日のようにね。・・・とても可哀想だった。

私さ、そんな母の事を見ていられなくって、何も知らない振りして、無闇に抱きついたり、明るく無邪気に振舞ったりして、少しでも母の事を元気付けてあげようとしてたんだけど、やっぱり母の顔から暗い影が消える事は無かった。

あの頃の私にとって、母は唯一心の許せる存在。

母は私にとても優しかったし、・・・ううん、私だけじゃなくって、他の使用人達にも優しくって、誰からも慕われる、心優しい人だったの。

子供の私が見ても、綺麗だなって見とれてしまうぐらいの美人だったしね。

父が何故、そんな母の事をほっぽり出して、他の女の人と遊びまわっているのか、ほんと私は不思議で不思議でしょうがなかった。

男って、よく解らない生き物よね。

本当に大切なものが何かなんて関係ない、目先の事しか考えていない馬鹿な生き物。

母を悲しませるぐらいなら、いっその事、居ない方がいいのにって、そう思ってた。

でもね、正直言うと、私はそんな父でも、帰って来て欲しいって思ってたんだ。

勿論、父の事は許せなかったし、憎んでさえいたけど、私が幾ら頑張った所で、母は元気になってくれないんだって事が解っていたしね。

それに私は、やっぱり家族三人で暮らしたい・・・、何処かに遊びに行ったり、楽しく食事したり、普通の家族みたいになりたいって思ってた。

でもね、やっぱり、そんな日は訪れなかったの。

偶(たま)に父が帰ってきても、母といがみ合うばかりで、二人が顔を会わせれば必ず激しい口論になる。

二人の関係が良くなる気配なんて、全く無かったわ。

それは私が間に割って入っても同じ事だった。

父と母はね。元々愛し合って結婚した仲じゃなかったの。

二人が結婚したのも、単に私って言う子供が出来たからって、ただそれだけの話。

母は私が生まれる際、結婚に反対する親の制止を振り切って、歴史ある名家の跡取り娘と言う身分を投げ捨てて、父の元に嫁(とつ)いで来たらしいけど、本当は私の事を厄介者だと思ってたんだわ。

母がある時、父と喧嘩している最中にこう言ったの。

あの娘が生まれたから仕方なく・・・ってね。

もうね、涙も出ないぐらいショックだった。

いつもなら、きりの良い所で二人の喧嘩を止めに入るんだけど、その時ばかりは、頭が真っ白になってしまって、何も考えられなかった。

私は父だけじゃなく、母にも望まれずに生まれて来た子供なんだって、そう考えると、悲しさよりも虚しさって言うか、・・・凄く寂しい気持ちになってしまった。

そして、その日の晩、母は終(つい)に家を出る決意をした。

私にとっては唐突な話だったけど、母にとっては、もう我慢の限界だったんでしょうね。

母は家を出る時、私にこう言ったわ。あなたはどうするの？・・・って。

私は直ぐに、母が出て行くなら私も付いて行くって、そう返事を返そうとしたんだけど、母の顔はあからさまに付いて来て欲しくないって顔をしてた。

ほんと、口には出さなかったけど、そう言われているような気がしたわ。

でも私には、母の居ない生活なんて考えられなかったし、あんな父の元に一人残るのは嫌だったし・・・、母は私の事、本当は嫌いなのかも知れないけど、一生懸命良い娘にしてれば、その内母も私の事を好きになってくれるだろうって思って、私は母に着いて行く事に決めたの。

私は母の事が大好きだったしね。

他に選択肢なんて無かった。

私が母と一緒に家を出たのは、確か私が八歳の時。

大した荷物も持たず、誰にも見送られず、いつもなら車で通るはずの大きな庭を抜けて、真っ暗な夜道に出た時は、本当に不安で不安でしょうがなかった。

これから何処に行くの？って母に尋ねても、ずっと泣いたままで、何も答えてくれなかったしね。

母は元居た自分の家から、既に勘当された身だし、何処に行く当ても無ければ、帰れる場所も無い、本当に頼れる人も居ない、そんな心細い旅立ちだった。

その日は、もう時間的に遅いって事もあって、取り敢えず街のホテルに一泊する事にしたんだけど、母は少しでも早く父の元から遠ざかりたいって思ってたみたいで、私達は次の日の朝早くに、ヴォルドォの街を離れる事にしたの。

まだ夜が明ける前から始発を待って、何処行きかも解らない、古びた長距離列車に飛び乗ってね。

その後、丸二日かけてようやく辿り着いた先は、「アブキーラ」、「ケープリア」に程近い、「シャロン・ロン・シャオロン」って言う小さな街。

そこは「アエル川」って大きな川を挟む渓谷沿いに作られた街で、近代的な雰囲気なんて全く無い、昔ながらの建物が多く建ち並んだ、凄く静かで綺麗な街並みだった。

緑が多かったし、空気もひんやりとしていたし、今まで住んでいたヴォルドォとは、根本的に匂いが違うなって思った。

母と私は、その街で新しい生活をスタートさせる事になるの。

街外れにある集合住宅に、小さな部屋を借りてね。

勿論、右も左も解らない、全く見知らぬ他所の土地で、母とたった二人で生活を始める事に、全く不安が無かった訳じゃないわ。

やっぱり最初の方はうまく行かなかった。

母も私も、自分一人では何にも出来ないお嬢様。

料理はおろか、掃除や洗濯も満足に出来なかったし、お風呂のお湯を沸かす事だって出来なかったの。

その部屋で暮らし始めた最初の日は、近くの店で買ったパンとお惣菜を食べて、水のシャワーを浴びたっけ。

今じゃ笑える話だけど、その時は結構必死だったのよ。

その内、一週間が経ち、二週間が経ち、三週間も経つ頃には、ようやく母も私もその生活に慣れ始めたんだけど、母は新しく働き始めた仕事場で、相当苦労していたみたいだったし、私も新しく通い始めたエレメンタリースクールに中々馴染めなかった。

私ね。やっぱりそう言う環境で育って来たから・・・って言うのもあって、凄く我儘（わがまま）な子だったし、凄く自分勝手だったし、周りの子達からは酷く煙たがられてたの。

周りの子達に自分を合わせようなんて、少しも考えなかった。

当たり前って言えば当たり前だけど、新しい友達なんて一人も出来なかったわ。

母も仕事場から帰ってくると、毎日毎日溜息を付くばかりで、その内直ぐに仕事も辞めさせられて、ずっと一人で頭を抱えて込んでいた。

母はその後も、色々な仕事にチャレンジしていったけど、どれも長続きしなかったわ。

何不自由無い優雅な暮らししか知らなかった私達にとって、外の世界で普通に生活する事が、こんなにも大変な事だなんて思ってもいなかったし、世間知らずのお嬢様が二人揃った所で、その辺で遊んでいる小さな子供にすら勝てないんだなって、そう思えるほど、私達には生活力が無かった。

でもね。そんなある時、私達は一人の男性と出会うの。

家の近くにあるスーパーの精肉店で働いていた、とても明るくて感じの良い人。

・・・そう。当たり。その人がマリオの父親よ。

そして、私の新しいお父さんになる人。

名前は「コイリア・ホスノー」って言って、母よりも九歳年下のおじさん・・・、ううん、その時はまだ、おじさんと呼ぶには、若すぎる年齢だったかな。

私はずっと、コイリアおじさんって呼んでたんだけどね。

そのコイリアおじさんが、いつまで経っても満足に買い物もできない母の事を見かねて、色々と手助けしてあげてたんだって。

私が初めておじさんと会ったのは、夕飯を作ってくれるからって、母がおじさんを家に連れて来た時かな。

買い物に行くって出かけたのに、突然知らない男の人を連れて来るんですもの。

私ほんと、びっくりしちゃって、最初はおじさんとまともに会話する事も出来なかった。

でもね、おじさんは本当に優しい人だったし、明るくて気立てが良い人だったし、何より、母の事を好きだって言ってくれてたし、私がおじさんと打ち解けるのに、そんなに時間はかからなかったんだ。

母もおじさんの事を好きなんだなって事は、最初連れて来た時に直ぐに解ったしね。

私はもう、この人が私の新しいお父さんになるんだなって、そう思ったわ。

私とおじさんは、親子って呼べるほど歳が離れていた訳じゃなくて、どちらかって言うと、優しいお兄さんが出来たみたいな感じだったんだけど、おじさんの事をお兄さんって呼ぶと、本当のお父さんになった時、ちょっと困るじゃない？

・・・かと言って、いきなりお父さんって呼ぶ訳にもいかないし、だから私、コイリアおじさんって呼ぶ事にしたんだ。

何か変な感じでしょ。

その後、母はおじさんと同じスーパーで一緒に働く事になって、ようやく私達も人並みの生活を送れるようになったんだけど、毎日の食卓におじさんが加わるようになったのは、その頃からかな。

仕事が休みの日なんかは、三人で何処かに遊びに行ったりもしたし、私達三人は、本当の家族みたいに過ごしていたんだ。

エレメンタリースクールでの私は、相変わらずだったけど、おじさんと出会ってからの毎日は、私にとって本当に楽しい毎日の連続だった。

でもね。そんな楽しい日々も、ずっと長くは続かなかったんだ。

私達がおじさんと出会って、一年ぐらいが経った頃、・・・その頃はもう、おじさんは私の家で一緒に暮らしてたんだけど、・・・母がね、新しい命を宿したの。

・・・そう。私の弟、マリオをね。

その時は、母もおじさんも、ほんと大喜びしてたわ。

勿論、私も一緒になって喜んであげた。

母とおじさんは、ずっと籍を入れないまま、私の家で同棲を続けていたんだけど、マリオが生まれる二ヶ月前に、ようやく街の小さな教会で結婚式を挙げた。

おじさんの親戚が、二十人ぐらい出席しただけのこじんまりとした小さな挙式だった。

私ね、綺麗な純白のウェディングドレスに身を包んで、幸せそうに笑っている母の顔を見て、凄く凄く嬉しい気持ちになった反面、何故か凄く不安な気持ちにもなったの。

二人の結婚を境に、私の名前にも「ホスノー」って言う文字が付いたんだけど、なんて言うか、・・・二人の間に割って入っちゃ駄目なんだって、躊躇(ちゅうちょ)する気持ちの方が強くなって、酷く居心地が悪いような感じがしたんだ。

私の名前に、「クライス」って言う文字が残されたままだったしね。

本当は私、「ジャネット・ホスノー」って言う名前で良かったんだ。

でも母は、何故か私の名前に「クライス」と言う文字を残した。

それが何でかって、母に尋ねてはみたけど、結局その理由を教えてくれなかったわ。

勿論私は、何となくその理由に気付いてはいたけどね。・・・それを口にするのが怖かった。

それまでの楽しい生活が、一瞬にしてなくなっちゃうんじゃないかって思って、その事に全く気付かない振りをして、普段通りの自分を演じようとしてた。

でもね、やっぱり・・・。

マリオが生まれてからは、母もおじさんもマリオに付きっ切り。

そりゃあ、生まれたての赤ん坊は、誰が見たって可愛いでしょうし、色々と手間がかかるってのも解っているけど、その頃から私は、母の態度が妙に素っ気無くなったのを感じた。

同じ家に暮らしていながら、私の事を一人だけ蚊帳の外に置くような態度って言うか、酷く突き放した目で私の事を見るようになったの。

・・・あからさまに私の事、煙たがっているような感じだった。

確かに考えてみれば、私は愛してもいない男との間に出来てしまった子供だし、本当に愛し合う仲で授かった子供の方を優先して、大切にしたいって思う気持ちも解らなくは無いわ。

でもね、私だって、まだ子供だったんだ。

母に優しく微笑んで欲しかったんだ。

母に優しく抱きかかえてもらいたかったんだ。

それなのに・・・母は厄介者を振り払うように、要らない物を放り出すように、冷たい視線を突き付けて、私を軽くあしらう様になった。

私には友達も居ない、母しか居ないんだって、解ってた癖にさ・・・。

ほんと辛かった・・・。

私は母をマリオに盗られたと思った。

自分一人では何も出来ない癖に、ただ泣き喚くだけで、母の全てを手に入れる事が出来るマリオが憎かった。

私は何とかして母を振り向かせようって、泣きながら抱きついたり、甘えて見せたりしたんだけど、それでもやっぱり駄目だった。

その内私は、意味も無く駄々を捏ねたり、悪戯なんかもする様になって、母の事を酷く困らせるようになったわ。

優しく微笑んでくれなくても良い、どんな形でも、母が私の方を向いてくれればそれで良いって、そう思ったんだ。

私が悪さをすればするほど、母の態度があからさまに冷たくなって行くのが解ったけど、いつまでも物分りの言い出来た娘を演じ続けたって、優しい母は帰って来ないんだって思ってたしね。

でも結局、母が私の事を本気で叱る事は無かった。

いつもいつも呆れた顔して、無言のまま大きな溜息を付くの。

ほんと、私の事なんか少しも眼中に無いって感じだった。

母が私に「クライス」って名前を残した理由、・・・勿論これは、私の想像でしかなくって、本当に母がそう思っていたのかどうか、今となっては解らない話なんだけど、ひょっとしたら母は、私に元

居た家に戻って欲しかったんじゃないかって、・・・そう思ってたの。

そうじゃなきゃ、私の名前に「クライス」なんて残すはずが無いし、・・・信じたくないけど、それ以外に考えられなかった。

母はおじさんと一緒に、新しい生活をスタートさせて、マリオって言う大きな幸せを手にして、とても嬉しそうだったけど、裏ではもう、私って言う厄介者をどう処理するか、考えていたのかも知れないわね・・・。

でも私は、その後もずっと母の元に居座り続けた。

母の口からはっきりと「出て行け」って言われるまでは、望みを捨てないでおこうって思ったの。

勿論、だからと言って、母の態度が直ぐに変わるとは思ってなかったんだけどね。

私が母の元に残ろうって思ったのは、おじさんが居たからってのが一番の理由かな。

おじさんは、母と喧嘩ばかりする私の事を、優しく宥(なだ)めてくれたり、私が一人で寂しそうにしていると、一生懸命励ましてくれたりしたんだ。

本当に優しい人でね。私は本当におじさんの事が大好きだった。

でもね、ある時私は、おじさんの本音を聞いてしまう事になるの。

あれは確か、私がジュニアハイスクールに通うようになった頃かな。

夜、私が寝静まったと思って、おじさんが母と二人で話し込んでいるのを、私、隣の部屋から聞き耳を立てていたんだ。

そんな日に限って、中々寝付けなかったりしね。

そしたらおじさん、母との会話の中で、はっきりとこう言ったの。

あの娘をどうするんだ・・・って。

私、まさかおじさんの口からそんな言葉が出てくるとは思ってなかった。

あんなに優しかったおじさんが、いつもいつも私の味方をしてくれていたおじさんが、実は私の事、母と同じように、厄介者だって思ってたなんて、・・・信じられなかった。

悲しくて悲しくて、涙も出なかった。

私は本当に誰からも愛されない、本当に誰からも必要とされない、そこに居るだけで周囲に害を与える厄介者なんだって、ゴミ同然の存在なんだって、そう思った。

その時私ね・・・なんて言うか、・・・ほんとおかしくなっちゃって、酷く自暴自棄になって、大声で怒鳴り散らしたり、意味も無く物に八つ当たりするようになったの。

そして、ジュニアハイスクールも頻繁にサボるようになったし、家

出してみたり、物を盗んだりするようになった。

挙句の果てには、警察に捕まったりもしてね・・・。

ほんと、今考えても呆れるぐらい馬鹿な事してたわ。

・・・うっふふ。そうよね。信じられないでしょうね。

でもね。これは本当の話。

私は元々そう言う人間だったの。

・・・ううん。でも本当はもっと酷い人間。

・・・最低の人間なんだ。

その後、私は案の定、何処に行っても誰にも相手にされない、人から疎(うと)まれる存在に成り下がってしまったんだけど、自分の馬鹿な行為を省みて反省する所か、更にエスカレートした酷い行為に手を染めるようになるの。

セニフなんかは、やっぱり聞いたら驚くかしら。

・・・私ね、母やおじさんが見ていない所で、・・・マリオの事を虐めるようになったんだ。

ほんと、執拗(しつよう)に、・・・可哀想なぐらいに・・・虐めまくった。

汚い言葉を浴びせ掛けたり、嫌がらせをするぐらいならまだマシな方で、叩いたり、髪の毛を引っ張ったり、蹴ったり、殴ったり、投げ飛ばしたり、マリオの身体に痣(あざ)が出来ても構わないって感じで、本気で虐めてた。

・・・うん。・・・だけど、これは事実なの・・・。

その頃の私は、自分の幸せをマリオに奪われたと思ってたし、やり場の無い怒りや寂しさ、やるせなさを、自分より立場の弱い、まだ幼いマリオにぶつける事で、気分を紛らわせようとしていたの。

それに、私がマリオを虐めていれば、母も私の事を見過ごす事ができなくなるって、そう思ってたから・・・。

ほんと、最低の人間よね・・・。軽蔑するわよね・・・。

私は貴女が思っているほど、実際に出来た人間じゃないの。

欲しい物が手に入らないと、直ぐに癇癪(かんしゃく)を起こして、物に当たる我(わが)儘(まま)で卑(いや)しい人間なの。

欲しい物を手に入れるためなら、他人を傷つける事も厭(いと)わない、人として最低のクズなの。

・・・もう、ほんと最低の人間！・・・最低っ！！

ほんと、自分で自分の事が嫌になるわ・・・。

こんな人間、早く死んでしまえば良いのにって・・・、いつもいつもそう思って・・・。

そうよ。あの時だって、私が死ぬべきだった。

マリオじゃなくて、私の方が死ぬべきだったのよ。

なのに何で・・・、何で・・・、マリオなの・・・。

ううっ・・・うっ・・・。

07－13：○光を無くした影達の集い［4］

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１３「光を無くした影達の集い」

・・・あ。・・・ごめんなさい。

ちょっとお酒に酔っちゃったみたい・・・。

ちょっと待ってね・・・。

えっと、・・・ごめん。

何処まで話してたのか、解らなくなっちゃった・・・。

・・・ううん。いいの。

ここまで話したんですもの。貴女には最後まで聞いて欲しいわ。

逃げようったって駄目よ。

貴女が私の所に来たのが運の尽き。覚悟しなさい。

うっふふ・・・。本当は貴女の方が、慰めてほしい方なのにね。

ごめんなさいね。セニフ。

えっと・・・、確か、私がマリオを虐めてた・・・って所までは話したわよね。

それじゃあ次は、何で私とマリオが、こんなにも仲良くなったのかって話からかな。

私とマリオ、・・・ここまで聞いた話じゃ、仲良くなるなんて想像もつかないでしょ？

私もね、実際にマリオと、こんなにも仲良くなるなんて、思っても見なかったんだ。

私はその後も、ずっとマリオの事、虐め続けてたしね。

ほんと、酷かった・・・。

その内マリオは、私の姿を見つけると直ぐに逃げ出して、母の後ろに隠れるようになった。

そして、私の虐めに気付いた母も、私の事を厳しく叱るようになった。

それまで母は、私がどんなに悪い事をしても、ただ呆れるだけで、ほとんど関心を寄せない、無視に近い態度を取ってたんだけど、その時ばかりは、流石（さすが）に私の事を、見過ごす事が出来なくなったみたい。

勿論、母が私の事を必死に叱ったのは、私の為なんかじゃない、マリオの為なんだって事は解っていたけど、私は母の目を自分の方に向けさせる事が出来ただけでも、十分に嬉しかった。

そして、マリオを虐めれば虐めた分だけ、母が私の相手をしてくれるんだって、そう勘違いして、一生懸命マリオの事を虐め続けたの。

その頃の私にとって、マリオは母の目を私の方に引き寄せる為の道具でしかなくて、マリオの事なんて少しも考えてなかった。

私の幸せを奪い取った張本人なんだから、そのぐらいの報いは当然よね・・・って感じで、ほんと物を扱うみたいな酷い仕打ちをしてた。

・・・でも、やっぱり、そんな事ばかりしていたら、私は母にもおじさんにも完全に見放されちゃって、全然相手にされなくなってしまった。

何があっても一切口をきいてくれなくなったし、いつの間にか、私の分の食事も用意されなくなってしまった。

勿論、一人で勝手に冷蔵庫を開けたりして食べてはいたけど、私は同じ家に暮らしていながらも、全く居ないも同然の扱いを受けるようになったんだ。

そして、私の機嫌が悪くなると、直ぐに三人で逃げるように外に出かけて行って、次の日まで帰ってこなかった。

酷い時には、丸々一週間も放置されたわ。

ま・・・、当然って言えば当然の報いなんだけどね。

私はとうとう、本当の一人ぼっちになってしまったの。

本当に・・・、本当に寂しかったわ。

私はその時、本当に全てを壊してしまったんだなって思った。

もう絶対に修復は不可能なんだって、もう二度と優しい頃の母は戻ってこないだって、そう思ったわ。

そして、もう・・・何もかもが、どうでもどうでも良くなっちゃってね・・・。

ある時私は、一本のナイフを握り締めて、三人の寝室に忍び込んだの。

夜、皆が寝静まった後でね。

・・・そう。私その時、母も、おじさんも、マリオも、みんな殺してやろうって思ってた。

そしてその後、自分も一緒に死のうって考えてた。

今考えると、ほんと馬鹿で、浅はかな考えに行き着いたなって思うけど、その頃の私を助けてくれる人なんて誰も居なかったし、お前なんて生きてる価値が無いんだって、皆からそう言われているよう

な気がして、もう本当に生きているのが嫌になった。

勿論、一人で死ぬ事も考えたけど、私は、私が居なくなった後に三人が幸せに暮らす姿なんて、見たくなかったし・・・、それに、私の幸せを奪い取ったマリオの事を憎んでいたし、私の事を裏切ったおじさんの事も怨んでいたし、こんな私を作り出す元々の原因になった、母の冷たい態度も許せなかったしね・・・。

もう全てをブチ壊して、終わりにしようって、そう思い詰めちゃったのよ。

ほんと、馬鹿だなって思うわ。

・・・でもね、やっぱり私には、そんな勇気すら無かった。

大きなベッドの上で静かに眠る三人の姿を見て、私はナイフを持った右手に力を込める事すら出来なかった。

ただ震えて立ち竦(すく)んでいるだけだった。

寝室に忍び込む前までは、あんなに激しい殺意が沸き起こっていたのに、一番手前側で眠る母の姿を見た瞬間、私の中で霧のようにかき消えてしまったの。

そして、不思議と流れ出した涙が急に止まらなくなってしまった。

その時は、こう・・・、なんて言うか、優しかった頃の母を思い出して、急に悲しくなったって言うか、それまでの寂しい思いの全てが、溢れ返ってしまったって言うか、自分の心の中にあった感情の

全てが、ごちゃごちゃに混ざり合って、一気に噴出(ふきだ)してしまったって感じかな。

もう完全に頭の中が真っ白になってしまった。

結局私は、母を殺す事も、おじさんを殺す事も、マリオを殺す事も出来ずに、しばらくの間その場で、泣き続ける事しか出来なかったんだけど、その内泣き声を抑え切れなくなっちゃってね。

直ぐに寝室を飛び出したんだ。

そして、自分の部屋へと戻って、必死に声を殺しながら思いっきり泣いた。

疲れ果てて眠ってしまうまで、ずっとね。

ほんと、自分の事が情けなくて情けなくて、しょうがなかった。

勿論それは、母を殺せなかった自分に対してじゃなく、そんな行為へと至った自分の浅はかさ、愚かさに対して、・・・それまでの自分、・・・私って言う人間の全てに対して・・・かな。

私ね、その時になって初めて、・・・そんな状況に陥って初めて、それまで自分が犯してきた行為の愚かさに気が付いたの。

だから私は駄目なんだって、だからみんなに忌(い)み嫌われるんだって、そう思った。

自分にとって都合の良い楽な道筋だけを選び出して、勝手に一人で

突き進んでおきながら、望んだ場所へと辿り着けなかった原因を、全部周囲の人間に擦り付けて、逆恨みに等しい暴挙を繰り返してきた、・・・私はそんな我儘な女だったんですもの。

何かを変えたい、何かを変えたいって、必死にもがいているつもりで、結局、自分からは少しも変わろうとしなかった、・・・私はそんな臆病な女だったんですもの。

そして、簡単には抜け出せない泥沼の中に嵌り込んで、完全に身動きが取れなくなってしまうまで、少しもその事に気付かなかった馬鹿な女。

・・・それが私。

ううん、本当は自分から進んで泥沼の中に足を踏み入れたんだって、解っていた。

泥沼だって、自分が作り出したんだって、解っていた。

誰かに助けて欲しくて、誰かに構って欲しくて、誰かに見てもらいたくて、・・・母に助けて欲しくて、母に構って欲しくて、母に見てもらいたくて、私はその泥沼の中で必死に叫び声をあげていたの。

もがけばもがくほど、更に深く嵌り込んでしまう底なし沼だって、知らずにね。

ほんと馬鹿よね。・・・本当に馬鹿。

・・・もうね、私、その時、本当に自分の事が嫌になっちゃって・・

・、完全に壊れちゃった。

ほんともう、そんな状況に立ち向かう気力も沸き起こらなかったし、そもそも変える力なんて私には無かったし、・・・かと言って、何処か別の世界に一人で逃げ出す勇気さえ無かったし、どうしたら良いのか解らなくなっちゃって、ずっとずっと自分の部屋に閉じ篭(こも)ったまま、死んだような毎日を送るようになったの。

完全に自分自身に愛想が尽きたって感じかな。

もう生きているのが嫌になってしまった。

勿論、私には、自分で自分を殺す勇気すらなかったんだけどね。

もう食事する気力も沸き起こらなかったし、ただボーッとベッドの上に座ったまま、只管(ひたすら)に時間が過ぎ去るのを待っていた。

ほんとに何もしなかった。何も考えなかった。

何も考えられなかったって言う方が正しいのかな。

破壊し尽くされた後の焼け野原に、一人だけぽつんと取り残された気分。

何処を見渡しても希望を持てるようなものは何も無かった。

でもね、そんなある日、・・・母が突然、私の分の食事を用意してくれるようになったの。

あれは確か、私が何も食べなくなってから、五日目の朝ぐらいからかな。

多分、それは、母が家の食材の減りが少なくなったって、気付いたからだと思うんだけど、それから毎日、私の部屋の前に食事が置かれるようになったんだ。

私、その時ほんと驚いちゃって、・・・もしかしたら早く死ねって、毒でも入れられてるのかと思っちゃった・・・。

・・・うっふふ。冗談。

本当は凄く嬉しかった。涙が止まらなくなるほど嬉しかった。

幾ら要らない子供だって言っても、母はちゃんと私の事を気にかけてくれてたんだって、完全に見捨てられた訳じゃないんだって、そう思ったわ。

そしたら急に、目の前が明るくなったような気がしてね。

一番最初に出された食事は、無我夢中でかぶりついちゃった。

久しぶりに食べた母の手料理は、相変わらずの味だったけど、本当に懐かしくて、本当に暖かくて、本当に美味しかった。

母の手料理を食べる事なんて、もう二度とないんだって思ってたしね。

私は母に差し出された食事を口にしながら、まだやり直せるんじゃないかって思った。

また再び、あの楽しかった日々を迎えられるんじゃないかって、取り戻せるんじゃないかって思った。

勿論、直ぐに母の好意に答える事は出来なかったんだけどね。

その時、母が私にくれた私への想いが、私自身を変えてくれるような、そんな気がしたの。

まるで長い長いトンネルの中で、ようやく出口を見つけたような感じかな。

本当に・・・本当に嬉しかったわ。

でもね、そう思った矢先、・・・私がようやくトンネルの出口から外に飛び出そうとした瞬間、突然、その出口がガラガラと崩れ落ちてしまったの。

そして、再び目の前が真っ暗になっちゃった。

・・・ううん。そうじゃないの。

・・・死んだの。・・・事故で。

母が突然、交通事故で死んじゃったの。おじさんと一緒にね・・・。

それは私が１５歳の時。確か冬の・・・凄く凄く寒い日だったかな。

その頃の私は、まだ三人と一緒に行動を共にする所まではいってなくて、昼頃から買い物に出かけた三人とは別に、一人で家に居たんだけど、夕方になっても、夜になっても、三人が帰って来なくってね。

私はまた、何か悪い事でもしちゃったかな・・・なんて思いながら、ずっと三人の帰りを待っていたんだ。

そしたらその後、日付が変わる頃になって、突然家に電話がかかってきて・・・、警察から・・・、三人が事故に遭った事を知らされた。

幸い、マリオはかすり傷程度で済んだらしいけど、母とおじさんは、交差点に突っ込んできた大型トレーラーの下敷きになって即死だって。

私その時、ほんともうパニくっちゃって、三人が街の一番大きな病院に搬送されたって聞かされたとたん、受話器を放り出して家を飛び出したの。

そして、お金も持っていなかったから、必死に病院へと向かって走った。

病院の場所もよく解っていなかったけど、多分、一生懸命街の人に聞きながら向かったんだと思う。

実はその時の事、余りよく覚えていないのよ。

電話口の向こう側から聞こえてきた警察官の言葉が、ずっとずっと

脳裏にこびり付いたままでね。

きっと私の聞き違いなんだって、きっと電話してきた警察官の勘違いなんだって、必死に頭の中で繰り返しながら掻き消そうとしていたかな。

それ以外の事は、他に何も考えられなかった。

でも、幾ら心の中で必死に願ったり、祈ったりしても、現実って変わらないものなのよね。

ようやく辿り着いた病院で待っていたのは、やっぱり悲しい現実だけだった。

私は母が死んでしまったなんて、ほんと信じられなくって、病院の先生に掴み掛かりながら、母に会いたい、母に会いたいって、泣き付いたんだけど、母と面会する事は強く止められた。

先生はその理由を、明確に説明してはくれなかったけど、母の遺体が相当酷い状態なんだって、先生の顔にそう書いてあった。

私はその時、本当に母は死んでしまったんだって、もう二度と会えないんだって事を、知ってしまった。

その後はずっと、人気（ひとけ）の無い病院の待合室で、一人で泣いていたかな。

もう泣く事以外、何も出来なかった。

私は母とよく喧嘩をしたし、時には酷い事を言い合ったりして、決して仲が良かった訳じゃないけど、・・・やっぱり私は、母の事が大好きだったのよね。

そりゃ、一度は殺してしまおうって思い詰めた事もあったけど、本当の私は、母と一緒に仲良く暮らしたいって思ってたし、・・・あんなに母の事を困らせるつもりも無かった。

出来れば母とおじさん、マリオと私の四人で、毎日を楽しく過ごしたいって思ってた。

特に、母が私の分の食事を用意してくれるようになってからはね。

いつの日かきっと、自分の思いは伝わる、母に思いを伝えられる日が来るんだって、そう信じていた。

なのに、・・・それがまさか、こんな形で唐突に終わりを迎えてしまうなんて、・・・夢にも思わなかった。

・・・本当に悲しかったわ。・・・ショックで目の前が真っ白になっちゃって、何も見えなくなるぐらい。

何を言われても、何も聞こえなくなっちゃったし、何も考えられなくなった。

でも、悲しいって言う気持ちの中で、一番強く疼(うず)いていたのは、最終的に、私の本当の思いを、母に伝える事が出来なかったって言う、情けなさ、悔しさかな。

結局私は、母を困らせてばかりいた不出来な娘で終わり・・・。

母を苦しませるだけ苦しませて、何一つ気の利いた事をしてあげられなかった親不孝者。

もう絶対にその事実を覆す事は出来なかったし、・・・そう思うと、ほんと悔しくて悔しくてね・・・。

こんな馬鹿な娘でごめんなさい、我儘（わがまま）な娘でごめんなさいって・・・、心の中で必死に謝っても、もうどうなるものでもなかったし・・・。

その時私は、本当に死にたい気分になってしまった。

ほんと、生きる気力の全てを吸い取られてしまった感じだった。

でもね、そんな時、ふと顔を上げたら、目の前にマリオが立っていたの。

顔に何枚か大きな絆創膏（ばんそうこう）を張った状態で、私と同じように思いっきり泣きじゃくってた。

私はそれまで、死んでしまった母の事ばかり考えていて、奇跡的に助かったマリオの事なんて、全然頭に無かったけど、よくよく考えたら、マリオはその時、母親と父親を同時に失ってしまったのよね。

きっと私以上に辛い状況だったに違いないわ。

それなのに私ったら、そうだと気付いた瞬間、鬱陶（うっとう）しさの方が強くなっちゃって、マリオの事を慰めてやろうともしないで、直ぐにそ

の場から立ち去ろうとしたの。

逃げ去ろうとした・・・って言う方が正しいのかな。

目の前で悲しみに暮れる自分の弟を見捨ててだよ。

自分よりも十歳も年下の子供を見捨ててだよ。

ほんと薄情な姉だって、自分でも思ったわ。

私は結局、自分の事しか考えない、他人の悲しみ、痛み、辛さなんて、どうでも良い軽薄な人間だったのよね。

いつか自分は変われるんだなんて、そう思ってたけど、結局私は以前と何も変わっていなかった。

でも、そんな時、マリオが突然、私に抱きついてきたの。

そして、泣きながら震える声で、こう言ったんだ。

「お姉ちゃん」・・・って。

私、いまだに覚えているわ。その時のマリオの言葉。

それだけ衝撃的だったの・・・。私にとっては・・・。

他に頼る人が居ないと言うのは解る。

でもまさか、あんなに酷い事をして虐めまくった私に、泣きながら

抱きついてくるなんて・・・、夢にも思わなかった・・・。

・・・嬉しかった。・・・本当にね。本当に嬉しかった・・・。

勿論、母の死は悲しかったけど、それ以上の嬉しさが込み上げてきちゃって、途中から違う涙になっちゃった。

私はマリオに、絶対に嫌われていると思っていたし、憎まれているとさえ思っていたし、まさかマリオの方から私に近付いてくるなんて、・・・まさか、お姉ちゃんって呼んでくれるなんて、思っても見なかった。

それに、それまでの私は、誰かに頼られるなんて事は、一度も無かったしね。

本当に嬉しかったわ。

その後私ね。ぼろぼろ涙を零しながら、小さなマリオの身体をギュッと抱きしめて、優しく頭を撫でてあげたんだ。

ずっとずっと、マリオが泣き疲れて眠ってしまうまで、ずっとね。

ほんとこの時、私の中で何かが変わったと思うわ。

それまで刺々しかった私の心も、何処か自然と穏やかになったような気がする。

だってその時点で、この幼いマリオの事を守ってやれる人間は、もう私しか居なかったんですもの。

私が何とかしなきゃって思った。

私がマリオの母親代わりにならなきゃって思った。

私が誰かの為に何かをしようって本気で考えたのも、その時が初めてかな。

私はね。マリオがくれた「お姉ちゃん」って言う、その一言によって救われたんだ。

暗い暗い闇の中で、ずっと一人で彷徨(さまよ)い続けていた私の心に、フッと暖かい光を齎(もたら)して、救い出してくれたのがマリオなの。

私にとってのマリオは、本当にかけがえの無い愛すべき人。

マリオの為なら何でもしてあげようって思った。

マリオの為なら死んでも良いとさえ思うようになった。

人って、何かの切欠さえあれば、一瞬にして変われるものなのよね。

それまで、幾ら頑張った所で、思うような人間にもなれなかった私が、その日を境に、出来るだけ優しい人間になろうって、努力し始めたの。

自分でも不思議だったわ。

その内マリオも、私の事を好きだって言ってくれるようになってね。

最終的に私達二人は、凄く凄く仲の良い姉弟(あねと)になる事が出来たんだ。

母とおじさんが死んでからは、おじさんの遠い親戚の家をたらい回しにされて、根無し草の様な毎日を送る破目になっちゃうんだけど、私はマリオと一緒なら、どんな状況だって乗り越えられると思っていたし、私は、マリオが傍に居てくれれば、それだけで幸せだった。

・・・本当に幸せだったわ。

でもね。実際はそんな幸せな事ばかりじゃなかったの。

本当は毎日が辛い日々の連続だった。

私達を引き取ってくれた親戚の多くは、みんな自分達家族が食べていくだけで精一杯って言う、貧しい家庭の人達が多くてね。

何処に行っても私達は、要らない物の様に冷たく扱われた。

酷い所だと、食事を全く用意してくれなかったし、寝る場所も、壁に穴の空いた薄汚い物置小屋を宛がわれて、毛布の一枚すら与えてもらえなかった。真冬の寒い時期にだよ。

私達には、母とおじさんが残した僅かな蓄えがあったから、なんとかやっていく事が出来たけど、毎日毎日働くだけ働かせておいて、学校にも行かせてもらえなかったし、挙句の果てには、別の親戚を紹介してやるから出て行けって・・・。

ほんと酷い人達ばかりに当たっちゃったと思う。

世間はこんな酷い人達しかいないのかって、そう思っちゃうぐらい。

まあ、何処の馬の骨とも解らない子供二人を、引き取って育てるなんて、簡単な事じゃないって解ってたけど、ほんと、酷かったわ。

でも、本当に酷いと思ったのは、最後に行き着いた中年夫婦の家かな。

初めて会った時は、とても愛想が良くて優しいおじさんとおばさんって印象を受けたんだけど、実際は毎日働きもしないで、昼間から酒を呷(あお)っているような連中でね。

他人を食い物にして生き永らえてるだけの最低の人間だった。

私もまさか、最初はそんな人達だって知らなくってさ。

ようやく優しい人達に出会えたんだって、マリオと二人で喜んでいたんだ。

そしたら突然、・・・あれは確か、私達が中年夫婦の家で暮らすようになって、二週間ぐらいが経った頃かな。

突然、家に黒服の男達が四人やってきて、強引に私の事を連れ去ろうとするの。

もう有無を言わさずって感じでね。

私ほんと、何が何だか訳が解らなくって、必死に叫び声を上げながら、家の中に居るおじさんとおばさんに助けを求めたんだけど、二人はニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべたまま、助けてくれよう

ともしなかった。

私ね。その時、・・・おじさんとおばさんに売られたんだ。

その黒服の男達に・・・。

私はそうだと気付いた瞬間、何とか逃げ出そうって必死に抵抗したんだけど、黒服の男達に四人がかりで掴みかかられちゃって、全く成す術もなく、車の中に引き摺り込まれそうになったの。

必死に声を上げても、近所には誰も住んでいない廃屋ばかりが立ち並んでいたし、私はもう駄目だと思った。

本当に怖かった・・・。

でもね、そんな私の事を助け出してくれたのがマリオ。・・・マリオなの。

・・・凄かった。・・・本当に凄かったのよ。

小さい身体ながら、手に持った木の棒をブンブンと振り回して、たった一人で黒服の男達に飛び掛って行ってね。

あっと言う間に一人、二人と薙ぎ倒してしまったのよ。

そして、男達が怯んだ一瞬の隙を見て、私は何とか逃げ出す事が出来たんだけど、その後も、後ろから追い縋って来る男達を、千切っては投げ千切っては投げって感じで上手に蹴散らしてくれてね。

本当に凄かったんだから・・・。

・・・うっふふ。そうでしょうね。セニフには信じられないでしょうね。

勿論、話がちょっと飛躍し過ぎって点については、敢えて否定はしないけどね。

その時の私には、本当にそう見えたんだ。

マリオは普段から大人しくて、泣き虫で、人見知りが激しいってイメージが有ると思うけど、実はあれでいて意外と度胸のある子なのよ。

そして、いざとなると信じられない様な力を発揮する不思議な子。

あの時はほんと、マリオに助けられたわ。

もしマリオが居なかったら、その後の私はどうなっていたか解らないし、・・・本当にマリオには感謝している。

本当にね・・・。

私はね。いつもいつもマリオの事を守ってやらなきゃ、守ってやらなきゃって、そう思ってたんだけど、本当は逆に、いつもいつもマリオに守られてばかりいた。

助けられてばかりいた・・・。

それは、実際にマリオに助けてもらった話とは別にね。

私はマリオが傍に居るだけで、本当に幸せを感じる事が出来たし、どんなに辛い事があっても、どんなに悲しい事があっても、どんなに怖い目に遭っても、マリオの笑顔を見ただけで、頑張って乗り越えようって言う、強い気持ちを抱けるようになった。

それに、マリオと一緒に居ると、私が私で居られる・・・って言うか、私自身がこう在りたいって望んだ、理想の自分に近づけているような気がして、本当に嬉しかった。

私にとってのマリオは、本当にかけがえの無い大切な存在で、絶対に無くしてはならない心の拠り所。

そう、心の底から真に愛すべき可愛い弟だったの。

・・・でもね。私はそんなマリオに・・・、酷い事をしていた・・・。

毎日毎日、執拗(しつよう)なぐらいに虐めていた・・・。

泣き叫んでも泣き叫んでも、この手で何回も何回も殴り付けて、何回も何回も蹴り飛ばして、挙句の果てには、この手で殺そうとまでした・・・。

ほんと、情けなくなっちゃう・・・。もう情けなくて涙も出ないわ・

・・・。

私さ、マリオの笑顔を見る度に、凄く嬉しい気持ちになる反面、いつもいつも心が苦しくて・・・、切なくて・・・、やるせなくって・・・。

でも、マリオは、本当に優しい子だから、全くそんな事気にしていないような振りして、いつもいつも私に明るく振舞って見せるんだ。

本当に優しい子・・・。

私ね・・・。そんなマリオの優しさに甘えて、きちんと謝った事が無いの・・・。

いつかは絶対謝ろうって心に決めていたけど、二人で仲良く過ごすようになってからは、中々言い出すチャンスが無くてね・・・。

・・・私、今でも毎晩、寝る前にマリオに謝ってるんだ。

もう、マリオが死んでしまった後じゃ、何を言っても意味の無い事なんだけど、・・・今の私に出来る事は、これぐらいだから。

でも、なんか・・・。その時、いつもいつも頭の中に浮かぶんだ。

マリオがニッコリと満面の笑みを浮かべて、「いいよいいよ。気にしないでお姉ちゃん」って、言ってくれてる姿がね・・・。

勿論、それが自分勝手な思い込みでしかないって事は解ってるけど、

私には優しいマリオのイメージしか思い浮んでこないんだ。

ほんと、馬鹿なお姉ちゃんでごめんなさいね。マリオ・・・。

結局ね・・・、私の心の中に残された傷跡は、絶対に直らない・・・って、そう思っている。

直す方法は、死んでしまったマリオに直接会って、謝る事しかないんだと思う。

それが出来ない限り、この私の心の苦しさは、絶対になくならないの。

つまり、私が生きている限り、永遠に苦しみ続けなければならないって事。

自分自身がこれまで仕出かしてきた悪行のツケですもの。

私はもう、死ぬまで苦しみ続けるつもり。

勿論、その辛さに耐え切れなくなりそうな時はあるけどね。

でも、それでも頑張って生きていかなければならないのよ・・・。

だって、死んだってマリオに会えるって、決まってる訳じゃないしね。

それに、恐らくマリオは天国に行ってるけど、私は絶対に地獄に落ちるんだって思ってるし・・・。

・・・うっふふ。ありがと。

でもね。これは私が生きる為の一つの方便として、そう思うようにしただけだから、余り気にしないで。

だって地獄に落ちてしまったら、こうやってマリオの事を思い返す暇なんか、全く無いないかもしれないじゃない？

現世って言うこの世界で、マリオの思い出に浸れるだけ、まだ幸せな方なんじゃないかって、そう思うようにしたの。

自分から死を選択する事は自由だし、死ぬのはいつだって出来る事だわ。

なら、取り敢えず生きてみるのも、そう悪くはないんじゃないかって、私はそう思う。

セニフはさ、今直ぐここで、死にたいなんて思っているの？

・・・そうよね。死にたいって思っていたら、最初から私の所なんかに来る訳無いっか。

私もね、・・・あんまり気の利いた言葉をかけてやる事は出来ないけど、・・・一度心に負ってしまった悲しみ、辛さって言うのは、生きている限り絶対になくならないものなのよ。

死ぬまでずっと、それに耐え続けなければならないものなの。

悲しみや辛さに耐え続ける為には、自分がもっともっと強くならなきゃって思っているし、強くなる為には、それなりの何かを見つけなければならないって思っている。

勿論、それがそう簡単に見つかるものだなんて思っていないけどね。

でも、セニフも私も、これから頑張って、それを見つけていかないとね。

生きて行く為に・・・。

０７－１４：〇厄事に塗れた長い一日

第七話：「光を無くした影達の集い」
ｓｅｃｔｉｏｎ１４「厄事に塗れた長い一日」

二十四時間三百六十五日、全く休む事無く働き続ける軍の基地内部にあって、不思議とシンと静かな耳鳴りのする、小狭い通路へと這い出る。

そこは、雑多な雰囲気が充満した大通り沿いの脇に設けられた、資材運搬用の地下通路であり、つい数ヶ月前までは、昼夜を問わず、大量の物資と運搬作業員達が行き交っていた道だ。

ランベルク基地東方区画第五期開発が、ほぼ終局を迎えつつある今、この通路は既に、廃路とされる運命が定められていたが、それでもまだ、ほのかに足元を照らす程度の照明は残されたままだった。

大通りと通路を分け隔てる鉄の扉を閉じると、緩やかに流れていた空気の揺らぎが不意に止まり、意識の周囲にへばりつく様に纏わり付いていた騒々しさと共に、静態した水面の中へと深く深く沈み込んで行く。

全く人気の無い閑散とした通路内の雰囲気は、今だグズグズと火照り止まない疲れ果てた意識を、優しく宥めてくれる風にも感じられたが、シルは、鉛の様に重たくなった身体に最後の鞭を振るい入れると、直ぐに目的地へと向けて前進を開始した。

薄緑色に塗装された古めかしい通路の外壁に、全体重を預けるように何度も右手を据え付け、その場に倒れ込みたい思いを、必死に引

き摺(ず)る様にして前へと進む彼の脳裏には、もはやただ一言「寝たい」と言う思い以外に存在しない。

それは、つい先ほどまで執り行われていた軍事演習の内容が、余りに過酷な作業の連続だったから・・・と言うのも、あながち嘘ではないだろうが、ここまで彼を疲弊させるに至った根本たる原因が、昨晩から朝方にかけての不摂生(のみあるき)にあった事だけは間違いなかった。

もう直ぐ・・・、もう直ぐだ・・・。

この近道を抜け出れば、もう直ぐ自室へと辿り着く事が出来る・・・。

もう夕飯なんてどうでも良い・・・。

シャワーだって浴びなくても良い・・・。

早く寝たい・・・。

早くベッドの上に倒れこみたい・・・。

今はただ、それだけだ・・・。

この時、時刻は既に夜の十二時を回ろうかと言う時頃に差し掛かっている。

本日予定されていたネニファイン部隊と、ブラックナイツ部隊との合同軍事演習も無事終わり、翌日以降の部隊運営に支障をきたさな

い程度の応急整備を完了させた彼は、この時間になって、ようやく本日の目まぐるしい軍務の嵐から開放される運びとなった。

昨日の朝七時に起床してから、今の今まで丸々四十時間余り、勿論、彼には全く寝る暇が無かった訳ではない。

言うなれば、それなりに仮眠を取れる余裕はあったはずだった。

しかし、悪い流れが更に悪い流れを呼び覚ます・・・と言った現象は良くある事で、彼は、無作為に降りかかってくる数々の厄事によって、それらを尽く阻害されると、ゆっくりと落ち着いて過ごせる安息の一時を、完全に奪い取られてしまったのだ。

結果、悲しいかな、彼は疲弊し切った精神と肉体を持って、過酷な軍事演習をこなさなければならない立場へと陥ってしまい、まさに本番さながら、・・・いや、それ以上に過酷な一日を送る羽目となってしまった。

元を正せば、無計画な飲み歩きに随伴した自分自身が悪い・・・と言う事は、全く反論の余地無くその通りであると、彼自身理解してはいるのだが、それでもやはり、自分を無理矢理に連れ回した阿呆共二人組みに対する、恨みがましい不快感は、今だ彼の脳裏に燻ったままだった。

勿論、今更そんな詮無い事を吐き散らした所で、どうとなるものでもないと解っていた彼は、かったるそうに深い溜息を吐き出して、煩わしき思いの全てを無理矢理に振り払うと、俄かにその進む歩を早めにかかった。

そして、ようやく辿り着いた一つ目の曲がり角で、その縁部分へと

右手を付き、気だるそうにして重たい身体をのそりと右側へと折れ曲がらせる。

（シルジーク）
「ん？」

しかしこの時、新たに目の前へと現れ出た地下通路の行く先に、何やら不思議な物が一つ、転がり落ちている様を見て取ったシルは、徐に軽く喉元を鳴らしてその足を止めた。

それは、薄緑色に塗装された壁面、床面に映える、綺麗なオレンジ色を放っていた一足のサンダルであり、不思議な事に左足用と思しき片方しか見当たらなかった。

シルは、何故？・・・と、考え付く間もなく後ろを振り返り、誰も居ないはずの地下通路内へとぐるり視線を這わせる。

すると、彼の進行方向とは逆手側、つまり、突き当たったT字路の左手側通路奥に、彼はその理由を一瞬にして説明付けるものを見つけてしまった。

悪い流れと言うものは、一度取り憑かれてしまうと、中々に振り解くのが困難なものであり、後はもう寝るだけと言う本日の最終段階に至っても尚、まだ彼に新たなる面倒事を押し付けて来ている様でもある。

彼の視界に捉えられた新たなる面倒事とは、薄汚い通路の壁を背に、一人ぽつねんと座り込んでいる赤毛の少女、セニフの姿であった。

シルは一瞬、意識に反して滅入る様な重さを全身に感じ、呆れた様

に大きな溜息を吐き付けたい気分に駆られてしまったが、心の奥底で燻っていた真っ黒な憂心によって虚ろいだ意識を強く焚き付けられると、直ぐにハッとした表情を浮かべ、彼女の元へと小走りに駆け寄って行った。

あの馬鹿！

一体こんな所で何してやがるんだ！

自分がどんな立場に置かれているか解ってんのか？

いつ何処で、誰から狙われるとも解らない矢面に立たされていながら、たった一人で、しかもこんな人気の無い地下通路内をうろつくなんて・・・、自覚が無いにしても程がある！

もし俺が命を狙う賊の一人とかだったら、どうするんだ！

もうちょっと考えて行動しろって・・・。

いや待て・・・。ちょっと待て・・・。

まさか・・・。

シルは、通路の壁際に座り込んで全く身動ぎもしないセニフの様子から、唐突に沸き起こった不安感に心の臓を思いっきり突き上げられ、到着と同時に慌てて彼女の肩を揺り動かしながら強く彼女に問いかけた。

（シルジーク）
「セニフ！・・・おい！セニフ！」

（セニフ）
「・・・ふぇ？」

しかし、瞬間的に沸騰した彼の疑念も、彼女から漏らされた間抜けな返事によって、一瞬にして杞憂のものとして終わる。

彼はここで、真に疲れ果てた大きな吐息を吐き出してしまった。

（シルジーク）
「お前・・・、何だってこんな所に・・・。」

（セニフ）
「あぁあーっ。シルだー。何でこんな所にシルが居るのー？」

（シルジーク）
「馬鹿野郎。それはこっちの台詞だ。」

寝惚け眼をゴシゴシと両手で摩りながら、突然の来訪者に驚いた様な声色を流したセニフは、怪訝な表情を浮かべるシルの顔色を、不思議そうにマジマジと覗き込んだ。

初夏の季節と言えど、昼夜を問わずして寒々とした空気に包まれるこの地下通路内で、何故にこんな薄ら寒い格好のまま寝入っているのかと、シルは多少呆れ気味の眼差しを持って彼女の視線に応えてやったのだが、彼女の吐き出した言葉と共に、周囲に漂い始めた異臭の存在に気が付くと、徐に鼻を摘んで顔を顰めた。

（シルジーク）
「うっ！・・・こいつ、相当飲んでやがるな・・・。酔っ払ってるのかお前は。」

（セニフ）
「なにぉー。お姉さんは酔っ払ってませんよって。シルの方こそ、レディの部屋に無断で押し入って来るなんて、かんな～～～り、酔っ払ってるんじゃなくて？」

（シルジーク）
「どこがレディの部屋なんだよ馬鹿。こんな所で寝てたら風邪ひくだろうが。」

シルは、やれやれと言った感じで、もう一度大きな溜息を吐き出し、程なくして寒そうに二の腕付近を摩るような仕草を見せたセニフの為に、直ぐに着込んでいた上着を彼女の肩からかけてやった。

そして、もう一度注意深く周囲の様相をぐるりと見渡した後で、軽く頭を掻き乱して見せると、もしかして、あれからずっと部屋で飲んだくれていた訳じゃないだろうな・・・と、心配そうに彼女の表情を窺った。

アリミアが死んだと軍上層部から報告があってから、もう五日程が経とうとしているが、その間、セニフが軍務の全てを放り出し、ずっと自室に篭(こも)りっぱなしであった事は、シルのみならず、ネニファイン部隊の全員が知っている事実である。

毎日毎日健気(けなげ)にも彼女の部屋を訪れ、食事を差し入れていたシルでさえ、彼女の姿を目にする事は出来ず、返事すら返してもらえない

有様だった。

勿論、トゥアム共和国の兵士として、ネニファイン部隊の一員として、軍の命令、上官の命令に、絶対的に従わなければならない義務を背負った彼女が、自分都合の利己的判断によって軍務をサボるなど、絶対に許されるべきではない違背(いはい)行為そのものと言える。

本来であれば、厳罰の対象として槍玉に挙げられても、おかしくない状況にあったのだ。

しかし今回、不思議な事に、この彼女の現実逃避行動の全ては、「療養中」と言う曖昧(あいまい)なカテゴリーの中で黙殺され続けている。

それが部隊長であるサルムの意思なのか、部隊メンバー全員の行動を管理するカース作戦軍曹の判断なのかは解らなかったが、彼女が犯した感情的行為を、頭ごなしに処断する様な風潮は、ネニファイン部隊内に関わらず、軍内部においても何処にも見られなかった。

まあ・・・、あのトゥマルクのオシャカ振りから見ても、そのパイロットが全くの無傷で生還したなんて、誰も思わないだろうがな・・・。

シルはふと、疲れ果てた意識の中でそう呟き出すと、「どっこらしょ」と言うジジ臭い発言と共に、その身をすっくと立ち上がらせた。

そして、久しぶりに見たように思える彼女の姿へと再び静かに視線を落とし、今だ眠たさの淵から立ち直れずにいるセニフの右手を優しく持ち上げてやった。

（シルジーク）
「ほらセニフ。寝るならちゃんと自分のベッドで寝ろよ。部屋まで連れてってやるから。」

（セニフ）
「ん・・・んー。」

（シルジーク）
「・・・ったく、しょうがない奴だ。ほら、おんぶしてやるから。」

シルは、セニフがまともに立てそうも無い事を察してやると、再びその場にしゃがみこみんで、彼女の目の前に自分の背中を差し出してやった。

彼自身、相当疲れ果てていた事は間違いなかったが、まさかこんな危険地帯に彼女を放置しておくなど出来るはずも無く、せめて彼女を部屋に連れて行く所までは面倒を見てやろうと、そう思ったのだ。

勿論、たった一人では歩く事も、立つ事も儘ならぬほどに、大量に酒を呷りまくったセニフの狂乱振りに、多少なりとも小言を突き刺してやりたい気分を沸き起こしてしまったが、今朝方の自身の体たらく振りを省みて口を噤まれてしまうと、どちらの側に対するものか解らぬ、呆れ顔を浮かべてしまった。

（セニフ）
「うん・・・。ありがと・・・。」

やがて、のそのそと背中の上へと這い上がってきたセニフの身体を、シルはしっかりと自分の身体に乗せ上げると、最後の気力を振り絞

るようにして立ち上がる。

そして、不意にずり落ちそうになったセニフの身体を無理矢理に抱え上げようと、軽く二、三回、自分の身体を跳ね上げて、ゆっくりと静かにサンダルが落ちていた場所まで歩み寄って行った。

背中に背負った彼女の身体は思ったよりも軽かった。

勿論、彼女の体重が元より軽い事など、彼はとうに知っている。

しかしそれでも尚、彼はこの時、そう感じてしまった。

恐らくはここ数日間、毎日毎日悲しみに暮れ、泣き明かし、満足に食事を取る事すら儘(まま)ならなかったのだろう。

アリミアとセニフがチームＴｏｍｂｏｙ内でも特に仲が良かった事は、チームメンバー全員が知る事実であり、シル自身、その事について何ら疑念を抱くつもりも無い。

例え、激しい口論を繰り広げるに至った後でも、直ぐに仲直りできる良き関係にあった事は確かだ。

あの一室での出来事から、アリミアに対して激しい反発心を抱くようになったセニフだが、やはり心の内の何処かでは、アリミアの事を強く憂(うれ)いていたのだろう。

シルはふと、首元へと巻き付いたセニフの腕越しに、彼女の様子を横目で窺い見ると、柔らかな吐息を静かに吐き出して、通路内に放

り出されていたオレンジ色のサンダルを拾った。

（セニフ）
「シールー。」

（シルジーク）
「ん？なんだ？」

（セニフ）
「私ねー。・・・ついさっきまで、ジャネットと一緒に飲んでたんだよ。」

（シルジーク）
「えっ？」

耳元で囁(ささや)かれた彼女の声色は、深い深い眠りの淵に掻き消えてしまいそうなか弱さであったが、シルは多少驚きの色を禁じえない表情を醸(かも)し出してしまった。

（シルジーク）
「そうなのか？」

（セニフ）
「・・・うん。・・・なんかねー。暖かかったし、柔らかかったし、良い匂いがしたんだよ。・・・ほんと大きかったんだー。・・・うん。」

（シルジーク）
「・・・。一体何の話をしているんだよ。」

（セニフ）
「えっとねー。ジャネットのおっぱい。」

シルは余りにも唐突に、身も蓋も無い会話へと旅立って行ったセニフの思考に、思わず蹴躓(けつまづ)いてしまいそうになった。

そして、まともに酔っ払いと会話をしようなどと試みた自分自身を省みて、ほのかに気恥ずかしい気持ちを沸き起こしてしまった。

（セニフ）
「私ねー。どさくさに紛れて、最後にジャネットに、思いっきり抱きついちゃったんだ。あぁー。気持ちよかったなぁー。」

（シルジーク）
「はぁ・・・全く。お馬鹿の相手は疲れるよね。お馬鹿の相手は。」

（セニフ）
「馬鹿とはなんだー馬鹿とはー。馬鹿だって一生懸命生きてるんだぞー。馬鹿にするんじゃないよーほんとー。確かにお姉さんは馬鹿かも知れないけどさー。馬鹿だって馬鹿なりに頑張って生きているんだ。そのぐらい理解して欲しいもんだねー。・・・あーっ。そっかー。そんな事も解らないシルの方こそ、馬鹿っちゃ馬鹿なんじゃーん。えーい。シルのバーカ。バーカ。」

（シルジーク）
「はいはい。俺もお馬鹿。お姉さんもお馬鹿。お馬鹿二人でお前も満足だろ?俺も疲れてるんだから、もうこのぐらいで勘弁してくれ。」

（セニフ）

「なんだーその不貞腐れた態度はー。気に入らない事があるなら、はっきり言いなさいよ。はっきりとー。お姉さんが何でも相談に乗ってあげるからさー。」

（シルジーク）
「ええと・・・。特に何も無いです。」

（セニフ）
「何も無い訳ないじゃんかー。何を言っているんだね君はー。君はジャネットのおっぱいを触りたいんでしょうがー。おっきくて、柔らかくて、良い匂いがするジャネットのおっぱいをさー。ほんと、もう・・・。うーん・・・。・・・ええいどうだ！羨ましいかシルっ！このスケベっ！」

（シルジーク）
「ええい！やめんかこの酔っ払いめ！」

シルは、激しく滅入る気持ちを押さえ切れない様子で声を大に荒らげ、後ろから両手を使って首元を締め付けてくるセニフを制して見せたが、それでも、彼女と繰り広げた鎮撫な会話の中で、多少なりとも心の隙間が温かな愉悦で満たされて行くのを感じていた。

確かに人が聞けば、情けなくなるほど低脳な世迷言の投げ合いと、そう解釈されてもおかしくない、瑣末な遊戯であった事は事実だが、会話したくても出来ない、会いたくても会えないと言う状況を経る事によって、彼の心の中に生み出された強い軋轢は、彼女と言う存在を思ったよりも強く渇望していたのだった。

勿論、彼が本当に彼女と交わしたかった会話の内容は、もっともっと根の深い所に存在する重々しきものであり、本来であれば、彼是

と思考を巡らし、その手の会話へと彼女を引き摺り込もうと、様々な策を弄したい所ではあった。

しかし、現時点における彼女の心情と、自身の思考の疲弊度を考慮すれば、それが自分達の許容範囲内に納まるものとは到底考え難く、世間話の類に含ませて遣り取りできる内容でもなかった為、シルは、それを断念せざるを得なかった。

シルは、取り敢えず今の所はこれでいいさ・・・と、自分自身にそう言い聞かせる様に思いを巡らせると、崩れかけた彼女の身体を再び背負い直し、帰室の途へと意識を舞い戻した。

そして、せめて彼女が普段通りの自分を取り戻すまでは、なるべく詮無い形での合いの手を差し伸べてやろうと、次なる彼女の不毛な言葉を待った。

（セニフ）

「確かにさー。お姉さんは胸が足りないよー。ジャネットみたいに、大きな胸がほしいなーなんて、そう思う時もあるよー。でもさー、私だっていつまでも子供じゃないんだしー、その内胸だってきっと大きくなるんだよー。勿論、ジャネットみたいに大きくはならないだろうけどさー。せめてアリミアぐらいにはさー・・・。アリミアぐらいには・・・。」

しかし、そんなシルの思いとは裏腹に、とある固有名詞を口にしてしまったセニフが、唐突に語尾を窄めて黙り込んでしまった。

シルは、やはり・・・と思いはしたが、静かに後ろを振り返って彼女の様子を窺い見る。

（シルジーク）
「どうした？セニフ。」

（セニフ）
「ううん。何でもない・・・。何でもない・・・。うっ・・・。何でもないったら・・・。・・・・・・・・・。」

セニフは必死に込み上げる想いを堪えている様子だった。

だがやはり、その突き上げの強さに彼女の涙腺が耐え切れるはずも無かった。

（セニフ）
「うっ・・・。ううっ・・・。ごめん・・・。・・・・・・・・・。思い出しちゃったよぉ・・・。うっ・・・。うっ・・・。」

セニフは単に悲しみの淵へと沈み込んだ思いを、酔いに任せて誤魔化していただけだった。

拭い去ろうとしても決して拭い切れない悲痛な叫びを、明るく無邪気な振る舞いに還元して、無理矢理吐き散らしていただけだった。

セニフはその後、シルの背中で必死に声を殺して、小刻みに身体を震わせていた。

シルはその後、彼女に対して何ら気の利いた言葉を一言もかけてやる事が出来ず、ただただ自分に付き従い歩む事を止めない黒い影の中へと視線を落としていた。

なんとも情け無い男だ・・・。

悲しみに暮れる女性を目の前にして、慰めてやる事すら出来ないなんて・・・。

他人行儀な慰めの言葉なんて、セニフが欲しているとも思えないし、逆にそれで、セニフを更に痛め付ける事になってしまうかもしれない。

現に今だって、アリミアの事を少し思い出しただけで、泣き崩れてしまう様な有様だ。

今の俺には、セニフの気持ちを察してやる事しか出来ない・・・。

察した上で、それを見守ってやるぐらいの事しか出来ない・・・。

それ以外には何も、セニフにしてやれる事は無いんだ・・・。

シルはふと、脳裏に蔓延(はびこ)る重々しき思考の渦中で、「もう少し、いい男になったら？」・・・と言う、以前アリミアに言われたその言葉を見つけ出してしまうと、軽く下唇を噛んでその場に足を止めた。

いい男・・・。いい男か・・・。

いい男って、一体どんな男の事を指して言うのだろう。

女性に対して何ら隔たり無く、その想いに応えてやる男の事だろうか。

いや・・・、それじゃ単に、手当たり次第に女性に手を出す無節操な男と言えなくも無い。

では逆説的に考えて、たった一人の女性に対してのみ、想いを寄せる一途な男の事だろうか。

いや・・・、それじゃ単に、他を全く顧みない意固地で軽薄な男と言えなくも無い。

一般的女性の言い分から推測するなら、愛する男性に切に望むものは、間違いなく後者であろう事は明白だが、前者たる資質を完全に欠落した男性が、女性から好まれない傾向にある事も確かだ。

勿論、他の女性に対して返される思いに、過度な愛情が込め入れられる事を望んでいないだろうが、それでもやはり、他者に対して少なからず友愛なる精神を垣間見せる男性の方が、より魅力的と言うに相応しい存在だろう。

つまりは、矛盾しているかも知れないが、前者も後者も全てひっくるめて抱き持つ、矛盾した男性がより好まれるいい男って事に・・・。

・・・いやいや、この際、男性である俺の考えなんてどうでも良くて、女性から見ていい男かどうかなんて事も関係なくて、要は俺が、セニフに対して何かをしてやれる、いい男になれるかどうかなんだ。

セニフが望むいい男になれるかどうかなんだ。

シルは再び、ゆっくりと歩を進めながら考えを巡らせて行く。

セニフから見て俺は、一体どんな男なのだろうか。何を望んでいるのだろうか。

これまでセニフは、何度と無く俺に対して、その抱く好意を大っぴらにひけらかしてきたが、俺はいつもいつも素っ気無くあしらって、まともに応えてやろうとしなかった。

セニフにとって一番嬉しい事とは、俺がその想いに応えてやる事なんじゃ無いだろうか。

セニフの好意を全身で受け止めて、強く抱きしめてやる事なんじゃ無いだろうか。

考えてみれば、好きな男性に抱きしめられて、喜ばない女性はいないだろうし、きっと俺はそうすべきなんだろうと、自分自身でそう思う。

確かにセニフは、馬鹿で我儘（わがまま）で小煩（こうるさ）い女性だ。

時折、こちらが取り扱いに困って、怒鳴り散らしてしまいたくなる程に面倒臭いと思う事もある。

しかし、その明るさと無邪気さは、確かに可愛いと称するに値するし、決して、理由無く他人から嫌われる様なものではない。

俺自身、その元気の良さに何度と無く救われた思いをした事もあるし、セニフに対する好意的感情を持て余す事だってある。

言ってしまえば俺は、セニフの事が好きなんだろうな・・・。

シルは、自身の心の中に存在する彼女への思いを、最終的にそう結論付けると、再び後ろの方へと視線を流し、不思議と大人しくなってしまったセニフの様子を覗き見た。

するとセニフは、いつの間にやら深い眠りの森へと意識を誘(いざな)われてしまった様で、頬を伝い滴り落ちる涙をそのままに、静かに寝息をたてながら眠りに付いていた。

恐らくはこの数日間、まともに寝る事も叶わなかったのだろう。

シルは、そんなセニフに不憫(ふびん)なる思いを沸き起こすと、その歩(あゆ)む足音を温和なものへとアレンジしながら、拙(つたな)い光を振り撒く天井の照明を見上げた。

シルの頭の中では、前述した最終的結論が大半を占める勢力に拡大し切っていたが、それでも多少なりとも、それに対して否定的な意見を持つ自分自身も確かに存在していた。

シルはその後、思わず零れた大きな溜息を一気に吐き出しながら、自らの進み行く道先へと視線を挿(す)げ替えた。

セニフの想いに応えてやりたい。

そう言った俺自身の気持ちに、全く嘘は無い。それは確かだ。

・・・しかし、上辺だけの愛情を取り繕って見せた所で、抱きしめられた側のセニフが喜んでくれるはずも無い。

勿論、一時の喜びを演出するには十分な振る舞いかも知れないが、セニフが真に欲しているものとは、心の底からセニフの事を愛する俺自身の存在であって、中身の無い外面だけの俺自身じゃない。

確かに、中身が有る様に見せかける事は、きっとそんなに難しい事じゃないと思うが、口先だけで愛しているなどと嘯く様な人間を、俺自身、許す事が出来ない。

そう・・・。何しろ俺は、まだ・・・。

（シルジーク）「！！」

・・・と、そこまで思いを馳せて、自分自身に対する失望の念を禁じえなくなったシルが、不快なる重さに塗れた意識を抱え込んだまま、次なる曲がり角を左手に曲がろうとした時、唐突に痛烈なカウンターパンチを見舞われた様な、激しい卒倒感に襲われた。

それは、誰も居ないと思い込んでいた地下通路内で、思いもよらぬ人物と出くわしてしまった為であり、シルは、呆然とした表情を隠し切れない様子で、その人物の名を呼んだ。

（シルジーク）
「ユ・・・ユァンラオ！」

（ユァンラオ）
「これはこれは、青臭い双星の片割れ様じゃありませんか。こんな夜分遅くに、どちらまで？」

つい今しがた自分達が歩いて来た通路側からは全く見えない死角となる位置取りで、壁に背を凭(もた)れ掛ける様にして息を潜めて佇んでいたその男は、どっしりと腕組みをした状態でシルの方を強く睨み付けると、ほのかに不気味で寒々とする薄ら笑いを浮かべて見せた。

薄暗い地下通路内の雰囲気も相俟(あいま)って、奴の姿が普段より大きく見えてしまうのは気のせいだろうか・・・。

シルは、一瞬にして沸き起こった強い恐怖心を、必死に心の奥底へと捻(ねじ)じ込んで見せると、ユァンラオが放つ禍々（まがまが）しき威圧感に負けぬよう、その瞳に鋭さを宿し入れた。

（シルジーク）
「お前・・・。こんな所で何をしていたんだ？」

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。おまえ自身、その答えが既に解っていながら、敢えてそれを人に問うのか？」

（シルジーク）
「何をしていたのかって聞いてるんだよ！」

シルは、ずっと脳裏に思い描いて来たユァンラオとの対峙シーンを、

まさかこんな形で唐突に迎える事になろうとは、少しも思っていなかった。

彼の頭の中では、必死に「どうすべきか」と言う最良の道筋を模索する動きが活発化してはいたが、意識とは全く無関係に吐き散らされる大量のワーニングメッセージに阻まれ、中々にそれを見出せぬ状況に陥ってしまっていた。

考えても見れば、全く人気（ひとけ）の無い密室たる地下通路の中で、ユァンラオと出くわしてしまう事自体、最悪のケースにより近い状況にあると言えるのだが、酷く錯乱した彼の意識は、その事にすら気付いていない様子だった。

一対一では絶対に勝ち目は無い・・・と、そう自分自身に言い聞かせてきたシルであったが、今の彼には、激しい敵意を剥き出しにして相手を牽制して見せるぐらいの事しか出来なかった。

（ユァンラオ）
「なーに。大した事は無いさ。口を開けてもいないのに、おいしそうな獲物の方から勝手に飛び込んで来たんで、丹念に舐め回してやろうか、噛み砕いてやろうか、彼是（あれこれ）と考え込んでいた所さ。」

（シルジーク）
「なっ！！・・・貴様！！」

（ユァンラオ）
「ふっふっふ。まあ、そういきり立つな。今直ぐにお前達をどうこうしようって訳じゃない。・・・いや、少し違うか。お前達を・・・じゃなくて、その小娘を・・・だな。」

（シルジーク）
「何!?・・・てめぇ!!もし、セニフに何かあったら、その時は・・・!」

（ユァンラオ）
「その時は?」

すると、シルの放った強い怒気の色香（いろか）に釣られる様にして、徐に壁際から身体を突き放したユァンラオが、意地の悪そうな顔色をしこたま滲み出し、殺意にも似た低い声を放ちながら、ゆっくりとシルの前に立ちはだかる。

ギトギトに塗り固められたオールバックの黒髪と、無精髭（ぶしょうひげ）に塗れた強面、そして両耳からぶら下がるドでかいイヤリングが、一種異様な彼の雰囲気を更に増幅させている様にも見受けられたが、シルは、それに負けじと意を決したように強く歯を食いしばると、力強く握り締めた右手の拳をユアンラオの目の前に突き出して、思いっきり激しい挑戦的意思を吐き付けてやった。

（シルジーク）
「俺がてめぇをぶっ飛ばす!!」

ユァンラオはこの時、不覚にも一瞬キョトンとした表情を浮かび上がらせてしまった。

それは、余りに単純過ぎると言うか、幼稚すぎると言うか、何の含みも無い直線的過ぎる発言であった為、彼としても思わず虚を突かれてしまったのだ。

子供の喧嘩でもあるまいし、ぶっ飛ばすとは・・・。

（ユァンラオ）

「あっはっはっは。お前も中々に粋（いき）な事を言えるのだな。立場は違えど、それなりに兄弟と称すに相応（ふさわ）しいものがあると見える。・・・良かろう。お前が俺の目の前に立ちはだかるつもりなら、その時は俺が相手をしてやろう。尤（もっと）も、売り言葉に買い言葉程度の遣り取りもこなせぬようでは、まだまだ俺の敵としては不足・・・、と言わざるをえんだろうがな。」

ユァンラオはそう言って、激しく息巻くシルの右肩を軽く叩いてみせると、それまで垣間見せていた威圧的態度の全てを掻き消すようにして、渇いた笑いを地下通路内に響き渡らせた。

そしてその後、二人に全く何ら手出しする様子もなく、何食わぬ顔でその場を立ち去って行った。

この男・・・。本当に何を考えているのか、解らないな・・・。

「怪しい存在」と言うより、「危ない存在」である事を再認識したシルは、俄（にわ）かにドッと疲れ果てた表情を醸（かも）し出し、ユァンラオが姿を消し行く通路奥から視線を切り捨てた。

そして、静かに恐る恐ると言う感じで、背後に背負ったセニフの方へと視線を流す。

彼の背中では、今も尚、静かに寝静まった吐息を繰り返すセニフが、

安らかな寝顔を浮かび上がらせていた。

目を覚まさなくて良かったな・・・。

シルはふと、激しい疲労感を再び認識し始めた意識の中でそう思い付くと、やがて、何事も無かったかの様に、直ぐに目指す兵士宿舎へと足を向けた。

無論、ユァンラオとの突然の対峙劇から、新たに感じ取ったおどろおどろしき感触によって、彼はまた、様々に思考を巡らす必要性があるな・・・と、痛感せざるを得ない状況に突き当たってしまった訳だが、今の彼の脳裏には、逸早くセニフを部屋まで送り届ける事、そして、逸早く自分も眠りの淵へと落ち込んでしまいたいと言う思い以外、何者ものさばる気配を匂わせなかった。

彼はこの時、本当に疲れていた。完全に疲れきっていたのだ。

彼は、これ以上何事も起きません様に・・・と、切なる願いを小さく口元で呟き出すと、徐にその歩む速度を早めた。

そして、不意に視界に分け入ってきた地下通路の出口の存在に気付き、ようやく安堵(あんど)の溜息を吐き出す。

鬱陶(うっとう)しき厄事に塗れた長い長い一日は、彼が出口へと到達した時点を持ってして、ようやく静かなる別れを受け入れてくれたのだった。

０７－９０：★【第七話】登場人物一覧（前書き）

全く瑣末な間違いですが、ムニアの出身をティルフィア王国に修正しました。

０７－９０：★【第七話】登場人物一覧

第七話：「光を無くした影達の集い」

★★★新規登場人物一覧★★★

【ロン・ロベルト・ミューラー】
性別：男　年齢：４４歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍第二陸将であり、オクラホマ攻略軍の総司令官。

【クオタール・ディロン】
性別：男　年齢：４９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国政府高官の一人で、秘密組織メリオルを統括する大物政治家。
茶色い髪の毛をオールバックに纏(まと)め上げ、常に穏やかな雰囲気を纏(まと)った品の良い紳士的中年男性。
ネニファイン部隊に所属するＤＱパイロット、ジルヴァの実父。

【シャナ・サムエル】
性別：女　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
マムナレス・インダストリー社の営業担当で、しばしばＬＮＲ社を訪れていた可愛らしき女性。
ランベルク工業地帯にある貸倉庫内で何者かに殺害され、変死体で発見された。

【ジョイル・ランドリー】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【インサ・ポリュオ】
性別：男　年齢：２１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ウガンヌ・ベンジャミン】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ケリック・ヴィラジェラ】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【マルスラン・セント】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ペギィ・サイモン】
性別：女　年齢：２２歳　出身：アブキーラ連邦クリシチア・ロウ
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ムニア・ロイ】
性別：女　年齢：２０歳　出身：ティルフィア王国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ハサン・アル・ガスコイン】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。

【ボルダー・クライス】
性別：男　年齢：５０歳　出身：リバルザイナ共和国

リバルザイナ共和国でも指折りの大企業「クライス社」の社長で、多少強引であると称される大胆な経営手腕を持って、中流以下にあったクライス社を、一代で一流企業へと伸し上がらせたやり手の経営者。
しかしその反面、彼は世間でも有名な好色的人物であり、全く家庭を顧みずに夜の街を謳歌する毎日を送っていた。
ジャネットの実父。

【メアリー・シートレイル】
性別：男　年齢：死亡　出身：リバルザイナ共和国
不滅の楽園と呼ばれるメルタリア島に、広大な土地を有する大資産家の後取り娘で、ジャネットとマリオの実母。
名うての遊び人である夫を捨て、ジャネットと共にクライス家を離れる。
その後、シャロン・ロン・シャオロンの街で、コイリアと出会い、マリオを授かる事になるも、逆に娘であるジャネットとの仲が険悪なものとなってしまう。
最終的に彼女は、ジャネットとの関係を完全には修復できないまま、事故死してしまった。

【コイリア・ホスノー】
性別：男　年齢：死亡　出身：リバルザイナ共和国
リバルザイナ共和国最東端都市シャロン・ロン・シャオロンのスーパーで働く好青年。
非常に人当たりの良い温和な性格の持ち主で、若いながら、とても面倒見の良い人物。
マリオの実父にして、ジャネットの義父。メアリー、マリオと三人で買い物中、交通事故に遭って死亡。

【オルティア・ベネーセン】

性別：女　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
レジェスに付き従う謎の女性。

【ロゼリス・カリューシャス】
性別：男　年齢：３４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
レジェスに付き従う謎の男性。

★★★登場済登場人物一覧★★★

【セニフ・ソンロ】
性別：女　年齢：１６歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
赤く長い髪の毛が特徴的な元気の良い女の子だが、とても人懐っこい性格の反面、気性が激しく扱い辛い一面も。
非力で口うるさい事だけが取り得の小柄な少女だが、ＤＱを操る事に関しては、他を圧倒するほどの技術を有する。
彼女自身の告白により、第十三代皇帝ソヴェールの娘「セファニティール・マロワ・ベフォンヌ」である事が判明。
喧嘩別れに終わったチームメイトとの話し合いから、微妙となってしまった仲間達との関係に悩む。
その後、次第にアリミアに対する想いを軟化させていった彼女は、再びアリミアと再会する事を切に願いながら、必死に過酷な戦場を駆けずり回る事になるが、オクラホマ攻略作戦によって、アリミアが戦死した事実を知らされると、彼女は、深い悲しみと強い後悔の念に、もがき苦しむ様な毎日を送る羽目になってしまった。

【シルジーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
金髪に深緑の瞳を持つ彼は、非常に人当たりが良く温厚な性格の持ち主だが、一度怒り出すと口が悪くなるのが玉に瑕。
ＤＱメンテナンスに関する様々な技術に長けた人物。
トゥアム共和国陸軍三佐サルムザークとは、双子の兄弟。
アリミアの死から、セニフを守るのは自分しか居ないと、新たなる決意を胸に抱くも、それを成す為の方策を導き出すのに、中々に四苦八苦していた。

【ジャネット・クライス・ホスノー】
性別：女　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
抹茶色の癖毛が特徴的の長身女性であり、とてもおしとやかで愛らしい容姿を持つが、ＤＱを操舵する彼女の行動は、セニフに負けず劣らずの突撃タイプである。
最愛の弟であるマリオの死から、人が変わったように冷たい態度を示すようになった。
ディップ・メイサ・クロー作戦以降、ユァンラオと行動を共にするようになり、マリオを失った悲しみを必死に紛らわせるように、酒とタバコと男に溺れていた。

【アリミア・パウ・シュトロイン】
性別：女　年齢：死亡　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
セニフよりも紅く長い髪の毛を有する彼女は、その鋭い目つきと歯に絹を着せぬ言動から、時として冷たい性格の持ち主と勘違いされがちだが、実のところはメンバー想いの心優しい人物である。
趣味は読書で酒を飲むと人が変わる。

セニフとの関係が悪化してしまった状況にもかかわらず、彼女の事を想い、何か彼女の為にしてやれる事はないのかと必死に模索する。しかし、その用いた情報入手方法があまりに行き過ぎた行為だったため、諜報部の監視網に引っかかる事となり、彼女は半場ヘイトーゼに脅しをかけられるような形で諜報部へと転属する事になってしまった。
その後、オクラホマ軍事空港破壊工作員として、オクラホマ都市へと潜入を果した彼女は、裏切り者であるシュバルツ・ノインと出会う事となり、激しい格闘戦を繰り広げるに至る。
最終的に彼女は、彼の前に敢え無く敗れ去る事となり、セニフとの再会を果す事無くこの世を去ってしまった。

【サフォーク・モロ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＱ非正規整備士。
何かにつけて無気力で不真面目な態度を周囲に吐き散らす彼だが、ＤＱ整備士としての腕は確かなものを有した人物。
お調子者らしい性格を現すかのように、時折大きなミスを平気で仕出かす問題児。

【マリオネクス・ホスノー】
性別：男　年齢：１３歳　出身：リバルザイナ共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のシステム整備担当者を勤める小さな巨人。
少し前までは人見知りの激しい引っ込み思案な性格だったが、教えられれば直ぐに何でもこなす将来有望な少年であり、最近では積極的にメンバー達と会話を交わすようにまでなった。
同チームに所属するジャネットの弟。
ブラックポイントを襲撃した謎の武装集団の攻撃により、崩れたガレージの下敷きとなって死亡。

【サルムザーク・ハイフィリツ】
性別：男　年齢：１８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍士官学校を１７歳で卒業した秀才であり、ネニファイン部隊の隊長を務める。
黄緑色の髪の毛と瞳が特徴的であり、体格的には恵まれなかったものの、その卓越した戦術眼は軍上層部内でも非常に評価が高かった。
仕官として最初に配属されたカルッツァ地方ニールベングにおいて、帝国軍との大規模な戦闘に遭遇。
負傷した司令官の代わりに軍を指揮し、見事帝国軍を蹴散らして見せた。
普段から無気力な怠け者を装っているが、非常時にこそその真価を発揮する異端的才能の持ち主。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦の成功に伴って、トゥアム共和国軍陸等二佐に昇進する事が決定し、その任地をパレ・ロワイヤル基地に移す事になった。

【カース・イン・ロック】
性別：女　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍作戦参謀本部出身の作戦軍曹。
厳格な性格の持ち主であり、軍規律に関しては非常に小うるさいが、逆に自身の身形は少々派手目で挑戦的。
非常に高い統率力と指揮能力を有する人物で、陸軍士官学校の鬼教官として恐れられた人物。
自分の思いに真っ直ぐで頑固な性格を持つが、心優しき二児の母でもある。

【シューマリアン・ベルナール】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍技術部所属の技術三尉。
非常に温厚な性格の持ち主で、その体格が指し示す通り、何事にも

動じないおっとりとした雰囲気を醸し出しているが、ＤＱ整備を主としたその技術力は、非常に優れたものを有する人物である。

【チャンペル・シィ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター兼、部隊長サルムザークの秘書官。
細くしなやかな深緑色の長髪に、ほのかに釣り上がった猫目が特徴的な女性。
トゥアム共和国通信高大卒のエリートお嬢さんで、ネニファイン部隊にはカースの推薦で入隊した。
その能力は非常に優秀なものであったが、時折見せる大きな天然ボケが玉に瑕。
内心でサルムに好意的感情を寄せる。

【リスキーマ・サラオ】
性別：男　年齢：２２歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の通信オペレーター。

【ジルヴァ・ディロン】
性別：女　年齢：２５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍所属の国境防衛部隊所属のＤＱパイロット。
見た目の可愛らしさとは裏腹に、彼女の発する言動はとても汚く、非常に性格の荒い女性。
その素行の悪さはトゥアム共和国軍内でも有名であり、数々の部隊を渡り歩く事になるのだが、責任感が強く、与えられた責務に対しては真面目に取り組む姿勢を見せる。

【ランスロット・アバンテ】

性別：男　年齢：２３歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
金髪の天然パーマが特徴的な彼は、そのお調子者たる人柄が示す通り、「酒」と「女」に全てを捧げる堕落者としての烙印を押された人物。
明るく軽い性格が彼の人当たりの良さを醸し出してはいるが、大半の女性は決して無為に彼の元へと近づく事は無かった。

【ルワシー・オスカフォード】
性別：男　年齢：２７歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
良く肥えた大きな身体に、モヒカン頭と言う特徴的な風貌を持つ人物であり、大雑把な性格柄、余り物事を深く考えないで行動するタイプの人間。
かなり訛りの強い言葉を持って毒を吐き散らすのが常だが、こう見えて中々に男気溢れる熱い男である。
実はその体躯に似合わず、かなりの筋肉質であり、鈍重と言う様な表現を持って称される人物ではない。

【マース・チェリーズ】
性別：男　年齢：死亡　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属のＤＯ非正規軍人。（出戻り）
性格は好戦的だが、周囲の状況を冷静に分析して作戦を練るタイプ。
トゥアム共和国軍の傭兵として５年の実戦経験があり、小部隊を統率するリーダーとしては、周囲からそれなりに高い評価を得ていた。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによって狙撃され爆死。

【ウララ・アクイ】

性別：女　年齢：２０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
短めの茶髪にのっぺりとした顔立ちが特徴的な、非常に明るい性格の女性で、実戦経験こそ無いが、中距離戦闘をもっとも得意とする射撃の名手であり、ＤＱＡ時代には数多くの相手パイロットを駆逐してきた若きポイントマンである。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによって狙撃され爆死。

【ベルトラン・ギュストリア】
性別：男　年齢：２９歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
若くして禿げ上がった頭髪が特徴的な人物であり、必要が無ければほとんど言葉を発さない寡黙な男性。
性格は控えめで、自ら率先して敵陣に切り込む獰猛さを持ち合わせていなかったが、味方に敵を撃破させるアシストシュートを最も得意とする優秀なパイロット。
パレ・ロワイヤルミサイル基地攻略作戦において、セラフィによって狙撃され爆死。

【デルパーク・シャンク】
性別：男　年齢：３０歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。

【ルーサ・シャル・コニャック】
性別：男　年齢：１３歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
旋毛付近で長い赤毛を結え上げ、お洒落な衣服に身を包んだ可愛らしい少女であり、見るからに戦闘員である事を疑われるほどの幼さ

を残す人物だ。
他人と全く会話をしないとまで噂される彼女は、非常に内向的な性格の持ち主であり、フロル以外の者と行動する事は稀である。
彼女は非常にセニフと良く似た容姿をしており、出身が帝国であるという事以外、ほとんど有効な情報は公にされていない。

【フロル・クローチェ】
性別：男　年齢：２６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
浅黒い肌に少し厚めの唇が特徴的な長身女性であり、独特のしゃがれ声を持ち、しばし女性らしさから逸脱した言葉遣いから、豪胆で野坊主なイメージを持たれがちな人物。
しかし彼女は非常に温厚で優しい心の持ち主であり、誰にでも分け隔てなく接する気持ちの良い性格から、誰からも親しまれる好人物である。

【ジョハダル・ムーズ】
性別：男　年齢：３１歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の正規軍人。
面長な顔貌に、細く垂れ下がった目尻が特徴的な人物であり、凡人を遥かに凌駕するＤＱ操舵技術を有したパイロット。
若い頃は上官泣かせの荒くれ者で通っていたらしいが、人の上に立つべき年齢の到来と共に、大らかでいて周囲を見渡せる上位者としての自覚に目覚めた。

【サックス・セロイアン】
性別：男　年齢：２８歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
自己中心的で、いつまでも根に持つしつこい性格の持ち主。

【ショウ・イムラ】
性別：男　年齢：１９歳　出身：リバルザイナ共和国
トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
黒くサラサラな頭髪に、細く釣り上がった目尻が特徴的な血気盛んな若者。
言葉遣いが非常に悪く、誰か彼かに食って掛かる陰湿な性格の持ち主。

【ヘルモア・トラッド】
性別：男　年齢：５６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国軍第一陸将であり、陸軍における最高司令官。
ギトギトに脂ぎった銀髪に、良く肥えて太った身体つきが特徴的な人物だが、数々の傷跡が残る顔貌から放たれる鋭い眼光は、決して最高司令官たる威風を損なうものではない。
軍内部では軍高官思想に凝り固まった堅物として有名であるが、軍の最高司令官としての責務を担う彼の立場柄、それは仕方の無いことなのかもしれない。

【ピエトロ・トレイモイユ】
性別：男　年齢：３６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国陸軍後方支援部隊の総指揮官たる一等陸佐官。
品位漂う髭を蓄えた大柄な男性であり、非常に大らかで優しい性格を持った人物。
時にお人好しとも揶揄される程のその優しさは、まさに軍人たる厳しさと威風を完全にかき消しているようにも見受けられるが、非常に卓越した戦術眼の持ち主であり、周囲からの人望も厚い頼れる大人の男性だ。

【グラフティ・チャーチル】
性別：男　年齢：４２歳　出身：トゥアム共和国

トゥアム共和国陸軍陸等一佐。
トゥアム共和国機動歩兵部隊を統括する旅団長。

【ゼフォン・ウィリアムズ】
性別：男　年齢：４６歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ブラックポイント駐留軍の総司令官。
迫力のある眼光とスキンヘッドが特徴的だが、物静かで温和な性格の持ち主。
長きに渡りトゥアム共和国北方一帯を守ってきた守護神たる人物。
帝国より突きつけられた衝撃的事実の真意を解き明かす為、トゥアム共和国軍にその身柄を拘束される。

【オーギュスト・レブ・ストラントーゼ】
性別：男　年齢：５５歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
メヌシア地方一帯を取り仕切るストラントーゼ家の当主。
統治領土はそれほど多くは無いが、帝国国内で最も強大な軍事力を持つ貴族であり、帝国最高評議会の圧倒的大多数を占めるストラントーゼ派の首領。
非常に好戦的な性格の持ち主であり、薄ら暗い陰謀に長けた黒い不世出の知将。

【オットンハイマー・レブ・ロイロマール】
性別：男　年齢：５４歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
南ブランドル地方からセレーヌ地方一帯を取り仕切る帝国最古の名家ロイロマール家の当主。
第十三代女帝の夫ディユリスの兄にして、帝国国民から絶大な人気を誇った偉大なる人格者であり、周辺諸国との関係強化にも積極的に取り組んだ人物。

【ディユリス・ランス・セルブ】（ディユリス・レブ・ロイロマール）
性別：男　年齢：死去　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国第十三代皇帝代理。
ロイロマール家の次男として生まれた彼は、非常に優れた頭脳を持つ有能な人物にして、第十三代皇帝ソヴェールの夫。
ソヴェールの死と共に代理皇帝としての責務を背負わされた彼は、政治的理由から新たにクロフティアを新皇后として迎え入れる事になるが、娘であるセファニティール皇女の強い反感を買ってしまい、最後には彼女に殺害されてしまうという悲しい結末を迎える。

【クロフティア・ハイネセル・プレッソス】（クロフティア・レブサーマル・トロ・ストラ）
性別：女　年齢：３９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
第九代皇帝アヌバースの曾孫にして、第十三代皇帝代理の妻。
彼女は第十四代幼少皇帝を支える有能な指導者であり、非常に高い知性を持つ聡明な人物だが、裏では完全にストラントーゼの操り人形だったと言われている。

【レジェス・ウィルナー】
性別：男　年齢：１９歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国とビナギティア国との間で開催された国家間会議の場に出席した若き少年。
出身地域、所属勢力、軍歴など、その一切が不明とされる謎の人物。
実際には、ＢＰ事件の発端を作り出した張本人たる「依頼主」本人であり、帝国領東部に位置するシャルムにおいてカルティナと接触する。

【ヒューファレス・プレサリオ】
性別：男　年齢：２７歳　出身：セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国
帝国ロイロマール家軍団所属の兵士の一人で、非常に優れた指揮能力を有した仕官。帝国軍階級は中尉。
旧帝都シュトラセ・ゼニーロ近辺で対峙したストラントーゼ軍との戦闘で行方不明となった。
その後、在野へと落ち延びた彼は、帝国領オクラホマ市内において、疲弊したロイロマール派兵士達を糾合し、武装決起を成功させるに至る。

【ユァンラオ・ジャンワン】
性別：男　年齢：３４歳　出身：ティルフィア王国トゥアム共和国陸軍ネニファイン部隊所属の非正規軍人。
厳つい顔に生え揃った武将髭がトレードマークの得体の知れない人物であり、決して誰とも馴れ合う事の無い孤高の一匹狼。
長年に渡り傭兵として数々の戦場を練り歩いてきただけあって、戦闘能力においては無類の強さを有する猛者。
謎の依頼人からの要望でセニフを付け狙い、ＢＰ事件を引き起こす。
彼自身、セニフの正体に非常に強い興味を抱いている。

【カルティナ・エニオアスカ】
性別：女　年齢：２４歳　出身：北ムルアート諸国
酒場「カルティナ」の名前の由来となるほど、攻撃的な魅力を有した美人店員。
紫色のボリュームのある綺麗な髪の毛が特徴的な彼女は、明るく優しい性格の持ち主だが、時として冷酷な一面を垣間見せる不気味な女性であり、ユァンラオとも深い関係の中に居るようだ。
ユァンラオと共にセニフを付け狙い、彼女の正体を暴こうとする。

ユァンラオの指示により、密かに帝国領内へと潜入。事の発端を作り出した「依頼人」との接触に成功する。

【ヴァラジン・オーム】
性別：男　年齢：４４歳　出身：ビナギティア国
ビナギティア国軍指揮権の大半を掌握していると言われている強大な権力者。
迫力のある眼差しと、鍛え上げられた肉体によって、一種異様な威風を醸し出す大男で、額から右目を辿るように頬にかけて伸びる大きな傷が特徴的な人物。
帝国貴族「オットンハイマー・レブ・ロイロマール」と個人的な結び付きも強く、北方アイスクリストフの平和と秩序を保ってきた功労者でもある。
オクラホマ都市で勃発した武装決起によって、その身柄を拘束されるが、その後、帝国憲兵隊に救出される事となり、トポリ要塞へとその身柄を移送された。

【ティーラー・テル】
性別：男　年齢：３３歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国ＤＱ製造メーカー最大手「マムナレス社」のＤＱ販売促進部門の総責任者であり、目的の為には手段を選ばない独断的先行者。
小柄な体躯ながらも常に威圧的態度をひけらかす冷淡な性格の持ち主であり、トゥアム共和国内の黒い影に潜んで何かを目論む人物。
ゼフォンの失脚から保安部にマークされ始めた彼は、情報が漏れそうな端々を整理し始めていたが、シルバーストルスの破壊的行為により、その目論見の根本を完全に撃ち砕かれてしまった。
ＢＰ事件に関する重要参考人として、ランベルク中央保安局より特別指名手配中の身。

【リッキー・コーラス】
性別：男　年齢：４５歳　出身：トゥアム共和国
トゥアム共和国中央保安局所属の捜査官。
ごつごつとした厳つい顔に、優しげに垂れた目元が特徴的な人物であり、何処と無く憎めない滑稽さを持ち合わせた中年男性。
彼は見た目、全く何のとりえもない「駄目オヤジ」のような雰囲気を装っているが、実はその筋では、かなり名の通った有名な捜査官の一人であり、難解な事件を幾つも解決に結び付けてきた過去を持っている。

【ラックス・ムーズ】
性別：男　年齢：３９歳　出身：トゥアム共和国
チーム「Ｔｏｍｂｏｙ」のオーナーで、合法的不正規部品を取り扱う「ＬＮＲ社」の社長。
周囲の事象に対して無頓着で流されやすい性格だが、無駄に明るい雰囲気を醸し出して、誰にでも隔たり無く優しく接する温厚な人物。
時におかしな言動を放って、周囲に変人たるイメージを植え付けてしまう悲しき中年男性。
ランベルク都市中心街の裏路地で何者かに銃で撃たれ死亡した。

０８－０１：●魔境の森

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０１「魔境の森」

セルブ・クロアートスロベーヌ帝国の広大な領土を、大きく南北に分断する「コンサット山脈」は、言うまでも無く、ムーンスロープ大陸最大級の山々が連なる大山脈群であり、まさに天界と称すに相応しい、壮麗な高さを誇る山々が軒を連ねている。

中には１００００メートルを遥かに超える神々（こうごう）しき山が存在する事も確認され、古来より人々は、この地に神が住まうものとして崇め敬ってきた。

しかし、科学の進歩と共に人外なる世界感が徐々に侵食されて行くと、人々の思いは、偶像崇拝なる信念よりも、より現実的な利己的欲求へと思いを馳せ始め、終には、この地に強大なる要塞基地群を建設するに至るのである。

第十一代皇帝シュヌパーリィの時代に建設されたその要塞基地群は、難攻不落の山岳都市「マリンガ・ピューロ」を中心として、山岳地帯の要所に配された、合計二十箇所もの小規模秘密基地によって構成され、南方からの侵攻勢力に対して完全無欠の強さを誇っていた。

先の大戦において、現在のリバルザイナ共和国、旧サンカサロ帝国の侵攻を、延べ二十一回に渡り撃退せしめたと言う事実は、今尚語り継がれる逸話となっている。

勿論、航空兵器の開発技術力が著しい発展を遂げたＥＣ３６０年代

初頭には、次第にその防衛能力に陰りが見え始め、最終的には、サンカサロ帝国の二十二回目の大攻勢を持ってして、地図上から完全にその姿を消してしまう結末を迎えるのだが、マリンガ・ピューロと言う一時代を築いた恐るべき要塞基地群は、その防衛司令官だった「ミハエル・レブ・バシュトゥルク」将軍の名と共に、伝説と呼ぶに相応(ふさわ)しい存在であった。

その後、山岳都市マリンガ・ピューロは、グリーンクラッド作戦によってばら撒かれた、大量の人工樹木群によって完全に深緑の大海の中に埋もれ、嘗ての栄華がまるで嘘だったかのように、ひっそりとした森閑(しんかん)の中に包み込まれる事となる。

と言うのも、帝国国内でマリンガ・ピューロ再建の気運が高まるより以前に、コンサット山脈の西側から南進した「デルネギス・レブ・ブラシアック」の軍勢が、南方サンカサロ地方一帯を制圧してしまった為、軍事的利用価値を失ったこの地に、多額の再建費用を費やす必要性が無くなってしまったからであった。

勿論、コンサット山脈一帯に存在する、貴重な鉱物資源を掘り出す為の採掘場などは、その後も、吐いて棄てる程に数多く乱立する事になるのだが、マリンガ・ピューロを建設するのに要した多額の費用、多大な労力を鑑(かんが)みれば、完全に焦土化した廃都市の再建に、二の足を踏んでしまう事は、至極当然の流れもと言えた。

そして、大戦が終了して間もなく、メルタリア海を望む北岸の辺(ほとり)に、「ブラシアック」なる大都市を建設する計画が取り沙汰(ざた)されると、やがてこの地は、人々から完全に見放された、追憶(ついおく)の遺跡風情へと成り下がってしまう事となる。

延べ四百年にも及ぶ長い帝国史の中で、著しい衰退期にあった帝国の命運を、常に最前面で支え続けた強固なる南の壁「マリンガ・ピューロ」は、確かに、永遠に後世に語り継がれるであろう、神々（こうごう）しき戦果を残すに至ったが、長きに渡り続いた戦争の凄惨な記憶を、出来るだけ早く掻き消したいと願う人々の思いは強く、その英姿は、完全に深い深い森の中で、朽ち果てて行くだけの運命を定められる事となった。

その後、コンサット山脈から東方「タリオヘネス山脈」にかけての北方裾野一帯は、人智を超えて爆発的に変異成長した人工樹木群の猛威により、人跡未踏たる大自然を形成するに至る。

そして、凄惨な過去の記憶を封印せり、忌まわしき土地と言う事も相俟って、今では、決して誰も立ち入らぬ「魔境の森」として、人々の畏敬の念を集めるようになった。

しかし、そんな人の手の行き届かぬ辺鄙な土地だからこそ、逆に人目を憚らず策動できる「何か」があった事も事実であり、当時、廃墟と化したマリンガ・ピューロの工場跡地から、大量の高濃度汚染物質が漏れ出していると言う噂話が、帝国国内で大々的に喧伝されるようになったのも、この地に「関係者以外立入禁止」と言うレッテルを簡単に貼り付けたいと言う、帝国の思惑があったからだとされている。

実際、この件に関して、専門の調査団が幾度と無くマリンガ・ピューロ跡地を訪れ、現地の汚染状況を調査する次第となったが、特にこれと言って重大なる問題点を抽出するには至らなかった。

勿論、これ程広大な「魔境の森」全てを調査する事など、出来よう

はずも無い実情から、その真偽の程を確かめる手段がなかった事も確かであり、半強行的にこの地を封鎖するに至った帝国の行動を、あからさまに非難する事が出来なかった事も事実である。

しかし、「魔境の森」完全封鎖に関わる一連の経緯の中に、帝国最高評議会ストラ派の意思が強く関わっていた事実が判明すると、周辺諸国も強い警戒心を抱かずにはいられなかった。

それはつまり、周辺諸国に対する強行的思想を持ったストラ派が、完全封鎖した「魔境の森」を利用して、何かしら後ろ暗い陰謀を、張り巡らしているのでは無いかと勘ぐった為であり、再び混沌とした戦乱の時代へと遡行（そこう）する危険性を憂慮（ゆうりょ）した為だ。

勿論、「魔境の森」を完全封鎖するに至った帝国の行動が、真に汚染物質流出と言う問題に対応する為のものであるなら、周辺諸国もこれ程までに強い反発心を見せなかったかもしれない。

しかし、その確固たる証拠を一つも提示できなかった帝国の対応が、周辺諸国との間に更なる強い軋轢（あつれき）を生み出してしまった事も事実で、その後、帝国は「魔境の森」に程近い南方リバルザイナ共和国、東方トゥアム共和国との間に、小さな軍事衝突を幾つも生じさせる結果となってしまった。

そして、挙句の果てには、元々帝国と険悪な関係にあったトロス王国と、もはや小競り合いと称すには大きすぎる規模の激しい地上戦、艦隊戦を繰り広げるに至り、事態はより一層深刻化した状況へと転落の一途を辿っていった。

（戦後、トロス王国が帝国との和平交渉に応じなかったのは、サンカサロ地方を制圧したブラシアック家南進軍の攻撃によって、凄惨

な被害を被るに至った国そのものであったからで、その一番の被害者たる王国国民の大半が、帝国の思惑と同調する事を強く拒んだ為だとされている）

しかし　長い長い戦乱の時代を経て、ようやく手にした平和的風潮を、儚くも無残に掻き消してしまう事など、何れの陣営も望んでいなかった事だけは確かで、当時、帝国の最高権力者であった女帝ソヴェールが、自ら事態の収拾を試みて周辺諸国を奔走して回ると、事態は漸進的に回復の徴候を見せ始める。

サンカサロ地方において、激しい戦闘を繰り広げた挙句、完全に泥沼化の様相を呈してしまったトロス王国との関係については、その後も茨の道たる難道を歩む羽目になってしまうのだが、それでも、この「魔境の森」に関する一連の騒動に関しては、ある程度なだらかな緩斜面へと軟着陸させる事に成功したのだった。

第十三代皇帝ソヴェールが残した数々の功績は、確かに当時の帝国を劇的に改変させる良薬であった事は間違い無く、時に独善的とも揶揄される強引な辣腕振りも、疲弊した戦後の帝国を支えるのに非常に有効的だったと言える。

しかし、友好的関係を構築しつつあった周辺諸国との間に、深い溝を掘り込ませるに至った、この騒動に関してだけ言えば、彼女は処方する薬を取り違えたと称さざるを得なかった。

最終的に彼女は、この騒動に関する全ての責任が自らの失政にあった事を素直に認め、周辺諸国と帝国国民に対し、皇帝自ら謝罪声明文を発表する事で、ようやく事の顛末に終止符を打つ事になるのだが、元々周辺諸国に対して非常に融和的思想を持った彼女が、当初

からこの件に関して賛成の意を表していたかと言えば、全くそうではなかった。

寧ろ彼女は、「魔境の森」を封鎖する事が帝国最高評議会で可決された後も、幾度と無く帝国最高権力を持って棄却しようと考えていた反対派の人間であり、この議案が可決される事によって生じる様々な問題を、予め予測出来ていた人物であった。

それでは何故、彼女がこの議案を端から棄却する事が出来なかったのか。

それは、この議案が九割五分と言う圧倒的賛成意見を収集して、可決されたものであったからで、如何に専横体制の頂点たる権力を持ってしても、簡単にこの決定を覆す事が出来なかったのだ。

言うなれば彼女は、自らが従える帝国貴族達の総意たるこの議案を棄却する事で、自らが生み出した帝国最高評議会の存在意義を、完全に失墜させてしまうのでは無いかと危惧した為で、ストラ派のみならず、他の帝国貴族達全てを敵に回した専制政治と言う愚を避けたい、と言う思いが彼女自身にあったからだ。

確かに考えてみれば、ストラ派に敵対するロイロマール派貴族達までもが、この議案に然したる物言いも付けず、大人しく賛成の意を示したと言う事実は、全く持って奇妙と称す以外に無い、珍しい現象と言うに相応(ふさわ)しく、如何に聡明なる女帝ソヴェールを持ってしても、そうそう容易に予期し得なかった事態かもしれない。

しかし、この問題を生み出すに至った根本たる原因が、彼女自身の思い、発した言葉の中に含まれていた事は確かで、彼女がそれと気付いていたかどうか定かではないが、彼女の意思とは相反する帝国

貴族達の思いが、強く滲み出た事件であった事だけは間違いなかった。

戦後間もなくして皇帝の地位に付いたソヴェールは、周辺諸国との戦火を縮小する意思を発すると共に、公の場で自国の軍備を縮小する事を宣言し、周辺諸国の親帝国感情を著しく煽り立てる事に成功した。

しかし、それは逆に、帝国国内で力を持った貴族達に、強い反発心を植え付ける結果となり、自らを誇示する軍事力が侵食される事態を恐れた帝国貴族達が、人目に付かない水面下で暗躍する切欠を作り出してしまった。

実際、帝国最高評議会で「魔境の森」を封鎖すると言う議案が可決されたのも、帝国貴族達が自家の軍事力を密かに隠匿する為の温床を欲したからだとされており、この「魔境の森」には、帝国貴族達の秘密軍事基地が幾つも存在すると言われている。

勿論、それは帝国貴族達の手に完全に帰属した私兵基地と言う訳ではなく、帝国最高評議会の公式認定を受けた軍事基地と言う範疇を超えない程度のものであったが、それでも帝国貴族達が持つ強大な軍事力を、不可視なる闇の中へと埋める効果は大いにあったと言えよう。

ＥＣ３９７年代にその存在が確認された「パレ・ロワイヤル基地」を始めとして、各帝国貴族達の歪んだ思想を色濃く凝縮したこの「魔境の森」は、その特異的形状を織り成す人工樹木群の姿と相俟って、その後「ミュートローズド」と呼ばれるようになった。

そして、新たなる節目を迎えた時代の流れに、おどろおどろしき影

を落とす、強大な雷雲の礎石（そせき）となるのであった。

０８－０２：〇確かな記憶の片隅に

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０２「確かな記憶の片隅に」

セシル様。暗いですから、足元にお気を付けくださいね。

紺色（こんいろ）のロングスカートに、真っ白なペプラムジャケットを羽織った清楚な少女が小声で呟く。

古めかしさを残したレンガ造りの街中で、日没間際の暗がりの中を辿るようにして歩きながら。

心持ち体勢を低くして、人目に付かないよう狭い裏路地を選んで突き進むのは、勿論、誰にも見つからない様にと言う意識の表われだ。

綺麗な薄墨色をした可愛らしきボブカットを、薄暗がりの中にふわりと靡（なび）かせながら、仕切りに周囲の様子を窺っていた彼女は、小狭い通路の交差点付近で足を止めると、徐に後ろを付いて歩く小柄な少女の方へと向き直った。

大丈夫。誰も居ないようです。

そして、不意に急ぎ足へと歩みを切り替えた小柄な少女、真っ赤なポニーテールが特徴的な凛（りん）とした少女に対し、優しげな微笑を投げ

かけながら手招きを施す。

彼女の後背に付いて回るポニーテールの少女は、それ程派手な服装をしていた訳ではなかったが、それでも一目見てそれが高級品である風を匂わす黒いボトムと、小洒落(こじゃれ)た赤いジャケットを羽織っていた。

彼女達二人の背丈、様相を鑑(かんが)みる限りでは、前を歩くボブカットの少女の方が、よりお姉さんらしくも見受けられたが、彼女がポニーテールの少女に用いるのは、いつも決まって優しげな敬語だった。

ほら、あそこに見える白い建物ですわ。昨日お話した古い教会。

ボブカットの少女は、程なくして自分の元へと駆け寄って来たポニーテールの少女を、多少身を屈めた低い視線を持って出迎えるてやると、柔らかな口調でそう語りかけながら、右手側方向の小路地奥を指差した。

ポニーテールの少女は、一瞬だけチラリと彼女の表情を窺う素振りを見せたが、口元を大きく綻(ほころ)ばせて首を縦に振った彼女の態度に促され、静かに建物の角辺から頭だけを突き出した。

あれがそうなの？・・・何かちょっと気味の悪い建物だね。

ポニーテールの少女は、彼女が言うがままにそこに建っていた古い教会を見るや、直ぐに体勢を引き戻して、あけすけにそう所感を返

した。

全く人気(ひとけ)の無い寂しげな裏路地の中で、周囲に群成(むら)す高い建物に埋(うず)もれる様にして、ひっそりと佇(たたず)んでいたその教会は、通路を挟んで反対側にある街路灯の拙(つたな)い光の点滅も相俟(あいま)って、何処か不気味な雰囲気を漂わせている様にも見受けられる。

勿論、ポニーテールの少女は、世間一般的な女の子達の様に、幽霊亡霊の類(たぐい)を無為に恐れる気質の持ち主ではなかったが、それでも不思議と背筋の辺りがゾクゾクと冷え込む感を抑え切れなかった。

セシル様が、そうお感じになられるのも無理無い事ですわ。実はあの教会、近所でも有名なお化け屋敷ですのよ。

お化け屋敷？

はい。私が聞いた話ですと、あの教会には恐ろしい魔物が住んでいて、夜な夜な道行く人を建物の中に引きずり込んで、食べてしまうらしいですわ。

建物の中に引きずり込むって・・・、そんなの絶対嘘に決まってるじゃん。魔物なんて居るはずが無いよ。

うっふふふ。そうですね。私もそう思います。

ボブカットの少女は、そう言ってニッコリと優しげな笑みを浮かべて見せると、すっくとその身を起き上がらせて、改めてその教会へと視線を投げかけた。

そして、ポニーテールの少女もまた、彼女の仕草に釣られる様にして、建物の角から再度教会の様相を窺い見る。

次第に薄暗がりから漆黒の闇夜へと変貌を遂げる裏路地の中にあって、一種異様とも言える古めかしい白色(はくしょく)を周囲に滲ませるその佇まいは、確かに何者をも寄せ付けない威風を纏(まと)っている様にも感じられる。

実際にそんな魑魅魍魎(ちみもうりょう)なる噂話を、歯牙にもかけぬ現実主義者でも、端からこんな場所に立ち入ろうなどと、考えもしない事だけは確かだった。

しかし、そんな事は全くお構い無しと、再び周囲の様相を注意深く見渡したボブカットの少女は、不意にポニーテールの少女に一瞥(いちべつ)をくれた後で、直ぐにその教会の出入り口付近へと向かって歩き出した。

普段見せる穏やかな仕草、その見た目の可愛らしさとは裏腹に、意外と肝が据わった活動的行動を見せ付ける彼女の一面は、ポニーテールの少女に、多少なりと躊躇(ためら)いと戸惑いの意を植え付けるに至ったが、その反面、何処か頼れるお姉さん的豊潤(ほうじゅん)さを色濃く滲ませている風でもあり、やがて、ポニーテールの少女もまた、彼女の後に付いて教会へと足を向けた。

でもさ、あの教会の上から、ルーアンの街並みが一望できるって、本当なの？

はい。本当です。ここからでは少し見辛いですが、教会の一番奥の

建物に、背の高い鐘楼（しょうろう）がありまして、その一番上の釣鐘堂から、ルーアンの街並みが一望できるんです。セシル様がお住まいの「ヴィンシュタルディッヒ」も、「セントアンヌ学校」も見えますのよ。

へー。それは楽しみだなぁ。

それに、あの教会は昼間でも人が立ち入るような場所ではありませんから、セシル様のようにやんちゃばかりされている方には、格好の隠れ家になると思います。

ええっ？そんな・・・。私そんな、いつもいつも悪さばかりしてる訳じゃないよ？

あら？今日のお昼休みに、突然隣のクラスの男子生徒達と、無茶苦茶な水掛け合戦を始めた少女がいるって、私の耳にも届いてますわよ。綺麗な廊下一面を全部水浸しにして、他の生徒達だけでなく、先生方も皆ずぶ濡れになったって聞きましたわ。

うー・・・。それは・・・。隣のクラスの奴等が、先に水を掛けて来たからだよ。私、何にもしてないのにさ・・・。

うっふふふ。解っておりますわ。セシル様。セシル様は単に、その方達のお相手をして差し上げただけなのですよね。でも、周りの迷惑を全く省みずに、騒ぎを大きくなされたのは、余り褒められた行為とは言えません。セシル様は、もう少し反省なされた方が良いと思います。

そりゃまあ・・・、あれだけこってり叱られれば、もう少し大人しくしてようかって気にもなるけどさ・・・。いつもいつもあいつ等の方から、私にちょっかいをかけて来るんだもん。黙って見過ごせ

ないよ。ほんともう、迷惑な奴等。

うっふふふ。セシル様は人気者ですからね。きっとその方達も、セシル様と一緒に遊びたかっただけなのでしょう。余り邪険に扱わないでくださいましね。

え？遊びたかった？

そうですよ。セシル様はとてもお優しい方ですから。何があっても、決して無為に権力をひけらかす様な方では無いと、皆も解っているのです。セシル様は、常に相手と同じ目線に立たれて、正面から堂々と立ち向かわれますから、きっとその方達も、セシル様の事をとても好いているのだと思いますわ。

うーん。別に好かれたくてそうしてる訳じゃないんだけど・・・。そっか、私の普段の対応が悪いから、あいつ等が増長するって事なのか。

そうですね。あからさまに言えば、そう言う事になると思います。でも、私はそう言ったセシル様のお人柄が大好きですわ。帝国の皇女ともあろう峻厳（しゅんげん）なる身分をお持ちでいながら、その事を少しも鼻にかける風でもなく、周囲の方達と何の分け隔てなくお接しになられる、そのお人柄が。私なんて、エクレアール伯爵様のご好意が無ければ、セシル様と同じ学校に通う事さえ出来ない下賤者（げせんもの）ですのに・・・、セシル様は、何一つ嫌な顔をなされずに、お相手をしてくださいます。それは本当に、心の底から敬愛すべき、素晴らしいお人柄だと思いますわ。

シーフォにそう言ってもらえると、凄く嬉しいんだけどさ。あんな奴等にばっかり寄り付かれても、ちょっと困るかなー。

あら、セシル様は結構楽しまれたのではないかと、私はそう思っているのですが、違うのですか？

・・・・・ううん。違わない。結構楽しかった。

うっふふふ。そうですよね。きっとそうなのではないかと思っておりました。

やがて、程なくして辿り着いた教会の入り口付近で、一際優しげな笑みを振り撒いたボブカットの少女が、ポニーテールの少女にそっと左手を差し向ける。

ポニーテールの少女は、俄(にわ)かに込み上げたその笑みを幼顔一杯に押し広げながら、静かにその掌(てのひら)を掴み取った。

すると、不意に吹き荒れた強めの夜風が、奇妙な冷気を帯びて彼女達二人の髪の毛を妖美に舞い上げ、真っ黒な鉄柵で拵(こしら)えられた教会の門戸をゆっくりと押し開いて行く。

さあセシル様。中に入りましょう。

入り口付近から見上げた古い教会の様相は、寄り付く晩夏の夜色に彩られ、次第に黒々とした陰影の彼方へと落ち込みつつある様だったが、ぎりりと嫌な音を立てて開け放たれた門戸の中には、確かなる暖かさを宿し入れた愛(いと)おしき光が灯されていた事を、ポニーテールの少女は思い出した。

そしてふと、握り締めた左手に力をギュッと強く込め入れると、そっと心の中だけで小さく口ずさんで見せる。

私、シーフォの事が大好きだよ。

次第に暗闇の中へと溶け込んでいく薄墨色のボブカットをじっと見据えながら、紺色（こんいろ）のロングスカートも、真っ白なペプラムジャケットすらも、完全に掻き消してしまった闇の中をじっと見据えながら、ポニーテールの少女は、引かれるその手に感じる暖かな温もりを、確かに胸の内なる部分で感じ取っていた。

全く何も見えない完全不可視なる漆黒の闇夜に、頭の先から足の先までどっぷりと漬かり込んだ状態にありながら、これ程までに心の奥底が穏やかな凪（なぎ）を示しているのは、間違いなく掴んだその手の向こう側に、ボブカットの少女が居てくれるからであり、ポニーテールの少女はこの時、少しも怖いと感じなかった。

やがて、教会の裏手側にある高い鐘楼（しょうろう）の中へと潜り込んだ少女達二人は、恐らくは階段であろう板張りの登り道を辿り経て、ようやく硬い石畳が敷き詰められた小広い空間へと躍り出た。

そして、二人の身体をすっぽりと覆い隠す程の大きな釣鐘の脇をすり抜けて、ほのかな光を差し込ませる大きな窓枠へと駆け寄って行く。

うわぁ・・・。

するとその直後、大きな窓枠の右手側柱へと取り付いて、直ぐに眼下を見下ろしたポニーテールの少女が、思わず驚色を強く滲ませた感嘆の吐息を吐き出して凝り固まってしまった。

それは、少し小高い丘の上、そこに群生する木々達の更に上から見渡せる、美しき王都ルーアンの街並みで、それ程高さの無い古風な建物群が、一斉に夜を迎え入れる為の艶(あで)やかな光を照らし出し、一糸乱れぬ整然さを持って、煌びやかな幾何学模様を天へと差し向けている光景だった。

如何ですか？セシル様。

凄い・・・。ルーアンって、こんなに綺麗な街だったんだ。私、こんな風に街を見下ろしたの始めて。

うっふふふ。どうやら気に入って頂けた様ですね。私も嬉しいですわ。ルーアンには高い建物がほとんどありませんし、飛行機だって王都上空を飛ぶ事は許されていませんから、この光景を見られるのは、このユースフーの丘と、対面にあるタルヒネンブリッツの丘ぐらいですわ。勿論、この場所からの眺めが一番・・・とまでは言い切れませんが、私はこの場所からの眺めが一番大好きです。週に一度は必ずここに来て、こうしてルーアンの街並みを眺めていますのよ。

ふーん・・・。そうなんだ。何かちょっと意外な感じ。

意外・・・ですか？

うん。だってさ。シーフォって、いつもいつもおしとやかで、余り外で遊ばないってイメージが有るからさ。まさかこんな場所を一人で見つけてるなんて、全然思ってなかったんだよね。

うっふふふ。そうですね。私もそう思いますわ。

ボブカットの少女はそう言って軽い笑みを浮かべて見せると、涼やかな夜風に舞い上げられた薄墨色の髪の毛を右手で優しく掻き上げながら、静かにルーアンの街並みへと視線を下ろした。

ポニーテールの少女もまた、眼下に広がる艶(あで)やかな街の夜景へと意識を舞い戻したが、街の光に照らし出されるボブカットの少女の横顔をチラリと見遣ると、こちらもまた格別に綺麗だなと言う、羨望(せんぼう)なる思いを沸き起こしてしまった。

実際、ポニーテールの少女とボブカットの少女は、年齢的には一歳程しか離れておらず、どちらもまだ子供と言う枠組みから抜け出得ない幼さを残していたのだが、ポニーテールの少女の目から見たボブカットの少女は、いつでも素敵なお姉さんと言う存在に相応(ふさわ)しく、常に憧れの様な思いを抱いていた事は事実だった。

やがて、次第に明るみを掻き消し行く西の空の情景とは相反(あいはん)して、より一層艶(あで)やかさを演出し始めた街の光が、不思議なイルミネーションを形成して、午後六時になった事を知らせる鐘の音に神秘的な華を添える。

ピーッ。ピーッ。ピーッ。ピーッ。ピーッ。

あれ？・・・と、ポニーテールの少女は一瞬思った。

もう、こんな時間なのですね。そろそろ帰りましょうか。セシル様。

う・・・うん。

ポニーテールの少女は、多少戸惑いを隠しきれない様子で、そう軽く返事を返し、直ぐに階段の方へと歩き出したボブカットの少女を見遣ったが、先ほど鳴り響いた不思議な音は、いつまでも脳裏の奥底で木霊し続けている様だった。

あのさ。何だろこの変な音。

変な音？何でしょう。私には何も聞こえませんけど。もしかして、セシル様のお腹の虫でも鳴ったのですか？

ぐるるー。

おや、鳴った。・・・確かにお腹は空いている。でも、お腹の虫とは全然違う音だ。

ピーッ。ピーッ。ピーッ。ピーッ。ピーッ。ピーッ。

うっふふふ。セシル様ったら。そんなに慌てなくても、母の手料理は逃げたりしませんわよ。今日は、セシル様の大好きな紅ボルシチを作るって、母がそう言ってましたわ。楽しみにしていてくださいましね。

うわーい！やったー！

・・・・・・。

・・・。

・・・と、不意に両手を振り上げて嬉しさを爆発させたポニーテールの少女は、全く無意識の内に壁際にあるボタンを押した。

それは、古びた教会の建物内になど存在するはずも無い、近代的な四角い細長のボタンであり、左手の指先に感じる物理的感触から、ほのかにゴムの様に柔らかい素材である事が解った。

そして、自らの身体が柔らかなベッドの上に横たわっている事実に気が付くと、それまで自分の居た温和なる世界観、自らの記憶を元に組み上げられた、「夢」と言う仮想的空間が、儚くも脆く一気に崩れ去ってしまった・・・。

（シルジーク）

「なんだ?まだ寝てたのか?今日は朝の九時から機体整備をするっ

て、昨日言っといただろ?もう三十分も無いぞ。」

(セニフ)
「ん。・・・んー。」

ベッドの直ぐ傍に設置されていた小さなＴＶモニターから、聞き覚えのある男性の声色が流れ出ると、少女は寝惚(ねぼ)けた返事を二つほど返して見せ、直ぐにモニターに背を向けるようにして寝返りを打った。

勿論少女は、このＴＶモニターの通信方式が、映像のみ単方向である事を知っていた。

彼女は既に、自分が現実世界へと舞い戻って来てしまった事実を理解していたが、「二度寝」と言う埒(らち)も無い悪足掻(わるあが)きによって、再び同じ夢の続きを見ようと安易に画策したのだった。

しかし、その男性の背後から聞こえるけたたましい機会音と、それに負けじと声を荒らげる作業員達の怒鳴り声によって、その目論見を簡単に阻まれてしまうと、仕方なしとばかりに身体をのそり起き上がらせて、乱れた赤い髪の毛に軽く二、三回手櫛(てぐし)を通して見せた。

(シルジーク)
「おい!セニフ!起きろったら!聞こえてんのか!?」

(セニフ)
「は〜ぁい。聞こえてますよって。朝からそんなに大声を出さないでよ・・・。私が朝弱いんだって事ぐらい、シルも知ってる事でしょ?もう少し静かに起こしてくれたっていいじゃない・・・。」

（シルジーク）
「何言ってんだよ。一時間も前から定期的に呼び出しかけてんのに、お前、全く起きる気配が無かったじゃないか。そう言う台詞は、一時間前の呼び出しに応じた時に言ってくれ。ああ、それと、第二作戦室に新人のパイロットが一名居るらしいから、お前来る途中一緒に連れてきてくれ。」

（セニフ）
「・・・新人パイロット？・・・何それ？」

（シルジーク）
「おーい！！ジニアス！！そこの接続作業ちょっと待ってくれ！！制御システム側の受け入れ準備がまだ整って無いんだ！！あと五分で完了させるから、先にアマーウの方手伝ってくれ！！それじゃぁな。セニフ。頼んだぞ。」

プツッ。

（セニフ）
「えっ？ちょ・・・ちょっと、シル・・・。」

今だ夢から覚めやらぬ薄ぼんやりとした意識の中で、半場適当気味に彼と遣り取りしていたセニフは、全く取り付く島もなく、一方的に接続を切り捨てた彼の態度に、しばし唖然とした表情を浮かべて凝り固まってしまった。

確かに彼の背後でうねり動く忙（せわ）しい人の流れを目の当たりにすれば、彼も相当忙しい最中にあるのであろう事は簡単に予想できたのだが、

もう少しぐらい相手してくれたっていいじゃない・・・と、我儘（わがまま）なる思いを強く募らせて頬を膨らませると、彼女は不貞腐（ふてくさ）れた様にベッドの上で大の字になった。

そして、今だ見慣れぬ殺風景な部屋の天井をじっと見上げながら、久しぶりに見たと思える穏やかな夢の余韻に浸り、静かに両目を瞑った。

セニフが今居るこの部屋は、兵士達が日常生活を送る上で必要な、最低限の設備のみを取り揃えた機能的兵士宿舎の一室である。

何処と無く圧迫感のある狭い部屋の中には、一人用の簡易ベッドと、小さな机が並べられているだけで、入り口付近に設置されたバスルームも、トイレと洗面台が一緒になった三点ユニット方式の簡素な作りとなっていた。

それは、以前セニフが寝泊りしていたランベルク基地と比べても、特に変わり映えする様なものでも無く、セニフ自身、特にこれと言って不満がある訳でもなかった。

しかしセニフは、この部屋の様相、雰囲気、・・・匂いとでも言うのだろうか、上手く言葉では説明し切れない、妙な違和感を完全には払拭する事が出来ず、今だに自分の部屋として落ち着く事が中々に出来ないでいた。

（セニフ）

「・・・だからあんな夢、見たのかな・・・。」

久しぶりに見たな・・・。あんな夢・・・。

やっぱり綺麗だったな・・・。シーフォの優しい笑顔・・・。

今も元気にやってるんだろうか。

今何処で、何をしているんだろうか。

できる事なら、会いたいな・・・。

一度でいいから、シーフォに会いたい・・・。

セニフはふと、そう思い付いた瞬間、徐に上体を起き上がらせ、心の中に滲み出した思いを一気に吹き飛ばすかの様にして、勢い良くベッドからその身を立ち上がらせた。

そして、枕元に置かれていた紅いヘアピンを、そっと左手で掴み上げると、ゆっくりと右耳、左耳の順で嵌め込んでいく。

ううん。・・・そんなの無理。

そんな事は出来ない。

私はもう、二度とシーフォと会う事が出来ないんだ・・・。

今の私は、セファニティールでも、セシルでも無い。

セニフ・ソンロと言う一人の少女。

トゥアム共和国軍ネニファイン部隊のＤＱパイロット。

セニフ・ソンロなんだ・・・。

セニフはゆっくりと深呼吸する様に大きく息を吐き出し、机の上に置いてあったスタンドミラーへと視線を据え付けると、鏡に映し出された自分自身の姿をじっと見遣りながら、きりりと表情を強張らせた。

そして、ほんの少しだけ「彼女」らしさを滲ませた赤髪の女性に向かって、小さく笑みを零して見せながら、こう語りかける。

（セニフ）
「アリミア・・・。私頑張るから・・・。頑張って生きるから・・・。」

その後セニフは、徐に下を俯いて、下唇を強く噛み締めたのだが、強引に涙を捻じ伏せた瞳を持って、再度鏡に映し出された自分自身の姿を凝視すると、直ぐに椅子の背凭れに掛けてあった群青色の軍服、軍から新たに支給された真新しい軍服に手をかけた。

帝国領南東部に位置するパレ・ロワイヤル基地に配属されてから、四日目となる朝。

彼女はこの日より、ネイファイン部隊活動に復帰する事が決まっていた。

０８－０３：〇酷暑へと至る朝方の情緒［１］

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０３「酷暑へと至る朝方の情緒」

からっと晴れ渡る気持ちの良い青空に、くっきりと浮かぶ真っ白な雲が見事に映える朝。

今だほのかに朝露を残した大自然の木々達が、雨季の終わりを告げる力強い太陽の照り付けによって、色取り取りの濃緑色を浮かび上がらせていた。

時折、サラサラと心地良い葉音を奏でて流れ行く穏かな微風（そよかぜ）も、静かなる夜明けを迎えた奥深い原生林の様相をそのままに残した、冷涼（れいりょう）なる爽快感を感じ得るもので、深緑の有機的エキスをふんだんに濃縮した天然のアロマも、また格別な豊潤（ほうじゅん）さを漂わせるものだった。

シルはふと、汗と油に塗れた作業服の右袖で、滴る額の汗を拭い払うと、遥か頭上で不規則に揺らめく眩い木漏れ日を静かに見上げながら、今日も暑くなりそうだなと思った。

そして、切り立った岩壁を切り崩して拵（こしら）えられた、巨大な格納庫出入り口付近へと寄りかかると、ホッと一息大きく息を吐き出しながら、目まぐるしい忙しさの中でへばりだした身体を、ゆっくりと宥（なだ）める様にして落ち着かせた。

彼の目の前に広がる大自然の風景は、確かに人の手によって生み出された、人工的産物の集合体に過ぎないものだったが、それでも純然たる自然の香りを色濃く漂わせている様でもあり、騒々しい俗世

間の荒波から逃れ出たい者達にとっては、十分過ぎるほどの魅力を有していた。

勿論、余りにおどろおどろしき奥深さを形成するその様相は、後から生え来る自然の幼芽を守る防護服と言う役割を遥かに超え、恐怖すら禁じえない禍々（まがまが）しきオーラを放っている様にも見えるが、人界の辺（ほとり）から見渡す分には、それ程脅威たる威圧感を感じるものでもなかった。

やがて、シルは静かに両目を瞑ると、枝葉の隙間から差し込む、木漏れ日の煌（きらめ）きの中に全身を浸し入れ、しばし背後から聞こえ来るごった煮の様な喧騒さに耳を閉じた。

そして、格納庫内に整列した巨大な人型兵器を整備する機械音や、大きな部品を吊り上げるクレーンの稼動音、その周囲を慌しく駆け回る整備作業員達の怒鳴り声と言った、非自然的騒音の全てから完全に隔絶した意識を持って、目の前に広がる大自然の色香を嗜（たしな）む様に、大きく息を吸い込む。

（シルジーク）
「・・・帰って、・・・来たんだな・・・。」

シルはふと、内なる意識が感じた所感をそのままに吐き出して、ゆっくりと目を開いた。

彼にとってそれは、以前感じたものとは全く様相の異なる、雰囲気も異なる、香りさえも異なる、似て非なるものと言わざるを得ないものだったが、それでも、不思議と得も言われぬ懐かしさに包み込まれた彼の意識が、硬く閉ざした過去の記憶を、徐々に解き開いて行くのが解った。

そして、あれからもう、五年も経つのか・・・などと、感慨深い思いを沸き起こしながら、大きな樹木の幹をなぞる様にして上を見上げ、時が経つのは早いものだ・・・と続ける。

それは決して心地良い気持ちを湧き立たせる優美な思い出などでは無く、忘れ去ろうとしても中々に忘れる事が出来な陰鬱な思い出であった。

シルは、徐に吸い込んだ息をくっと喉元に溜め止めると、不意に落ち込んだ意識と共に視線を足元へと舞い落とした。

自分一人では何も出来なかった、あの頃の自分を思い返しながら・・・。

子供染みた感情論のみで、何かを変えられると信じていた、あの頃の自分を思い返しながら・・・。

（ジョルジュ）

「シールー！！休憩中の所悪いんだけどさ！！私、ジニアスとトムシアを連れて、第四格納庫に行って来るから！！１７ローテ小隊の出撃準備作業よろしくね！！」

すると突然、彼の背後から可愛らしい声色が投げかけられ、真っ黒い闇のベールで覆い隠した過去の記憶へと、埋没しかけた彼の意識がフッと鎌首を擡げた。

そして、静かに背後の巨大な格納庫内へと視線を立ち返らせると、

右手側作業場付近に停車したトラックの荷台から、大きく左右に手を振る少年の姿を見つけ、声を大に張り上げて返事を返した。

（シルジーク）
「解ったー！！０９ローテ小隊の受け入れ準備作業が終わったら、シルキーとアークチャンも、そっちに向かわせるからさ！！お前も適当な所で休憩に入れよ！！」

（ジョルジュ）
「あっははは！！私は大丈夫！！それよりもシル！！君、朝ごはんまだでしょ！？ロイドとジェイが戻ってきたら、入れ替わりで食べてきなよ！！」

茶色いしなやかな髪の毛を持つその少年は、シルと同い年ながらも、セニフとほぼ変わらぬ華奢（きゃしゃ）な身体つきで、見るからに可愛らしい少女と言う印象を拭えない幼さを残していたが、これでもネニファイン部隊ＤＯ整備作業班の班長たる人物である。

彼は、全く裏表を感じさせない人当たりの良い性格の持ち主で、彼の元で働く作業員のほとんどが、彼より年上と言う状況にも関わらず、彼に対する不平を零す者は誰一人としていなかった。

そして、整備作業員としての能力もさる事ながら、その特筆すべきは、若さに似合わぬ管理能力を有している事で、常に他人を思いやるその優しき人柄も相俟（あいま）って、誰からも好かれる可愛らしき上位者としての立場を確立しつつあった。

やがて彼は、最後にもう一度だけ、シルの方に軽く右手を振り翳（かざ）して見せると、直ぐにトラックの荷台から身を乗り出すようにして運転席内を覗き込み、運転手たる大柄な女性にトラックを発進させる

よう指示を出した。

シルはふと、そんなジョルジュの活動的所作の一部始終をじっと見遣りつつ、自分が何かを忘れているような錯覚に囚われてしまったが、一度動き出したトラックを差し止める程の事ではなかったはずだと思い付き、格納庫を後にする三人の姿を無言のままに見送った。

すれ違い様、助手席の窓枠から放り出した右腕を持って、意味も無く力瘤（ちからこぶ）をひけらかして見せたジニアスの行動に対しては、あからさまにゲンナリとした表情を突き返してやった。

そして、ゆっくりと足を作業場へと振り戻しつつ、右手首に巻き付けた腕時計をチラリと見遣った後で、流石にもうそろそろ来るはずだろうと、慌しく作業員が駆け回る格納庫内の出入り口付近へと視線を巡らせた。

今現在、彼の目の前に立ち並んでいるＤＱの機体数は、左右作業ラインを合わせても、合計六機しか確認する事ができないが、パレ・ロワイヤル基地に駐留したネニファイン部隊の総兵力は、人型機動歩兵部隊二個大隊（五十四機プラス予備機六機）であり、その他の機体は別の格納庫で待機整備中、もしくはパレ・ロワイヤル基地周辺部で哨戒行動中と言う状況にある。（部隊隊長であるサルムザーク陸等二佐の昇進と共に保有兵力が倍増）

勿論、対帝国最前線基地となるパレ・ロワイヤル基地の防衛任務を、ネニファイン部隊だけで全て賄（まかな）えるはずも無く、小規模ながらも防衛基地として、十分成り立つ程度の兵種を揃える必要はあったが、起伏の激しい山岳地帯と言う地形的制約から、パレ・ロワイヤル基地の主力部隊は、ネニファイン部隊であると言っても過言ではなか

った。

パレ・ロワイヤル基地に駐留する他の戦闘部隊の内訳については、フレッチャー・ブリアスキニ陸等二佐率いる第七機械化歩兵部隊が二個中隊（三百名余）、ニレル・カンポス陸等三佐率いる戦車部隊が一個大隊（二十七輌）、ジウ・サード・ケリードリン陸等三佐率いる支援車輌部隊が一個大隊（二十七輌）、ライアー・シレセン陸等一尉率いる戦闘装甲ヘリ部隊が一個中隊（九機）となっており、非戦闘部隊に関しても、地上輸送部隊、輸送ヘリ部隊、防衛基地管理運営部隊、建設工兵部隊、医療部隊など、非正規軍人を含めた様々な人員が、数多くこの基地へと配属されている。

近代戦闘において、最も重要視される航空兵器に関しては、戦闘ヘリ部隊を除き、全く保有していない状況と相成（あいな）ったが、占領下に置いたオクラホマ軍事空港の修復作業がほぼ完了しつつあると言う事もあり、航空兵力は全てオクラホマ軍事空港駐留軍に依存する次第となった。

そして、このパレ・ロワイヤル基地を統括する防衛司令官に任命されたのが、トゥアム共和国軍の最年少佐官、サルムザーク・ハイフィリツ陸等二佐である。

軍階級的に言えば、第七機械化歩兵部隊の長たるフレッチャー陸等二佐も、彼と全く同じ階級を有しており、能力面、実績面においても、特に彼に劣るような点があった訳では無いのだが、軍上層部が最終的にそう言った結論に至ったのも、パレ・ロワイヤル基地防衛任務における主力部隊と成り得るのが、ネニファイン部隊である事を理解していたからであった。

勿論、この人事に関する軍上層部会議の場で、少なからず異論の声

が飛び交った事も事実で、本来、拠点防衛任務に当たる者は、陸等一佐官以上を持って成すと言う、昔ながらの暗なる規定に相反する事を、躊躇(ためら)う者達が数多く居た事も確かだ。

しかし、オクラホマ地方の軍事的勢力権を、ほぼ手中に収めつつあった状況下の中で、辺境たる一防衛基地に対して貴重な陸等一佐官を宛がうなど、不利益を被るに等しい行為であるとの見方も強く、最終的にサルムザーク陸等二佐を、防衛司令官として宛がうに至ったのだった。

帝国領南東部に位置するこのパレ・ロワイヤル基地は、オクラホマ軍事都市を北端とする南北に長い戦線の中において、ほぼ最南端に当たる小さな軍事拠点であり、リバルザイナ共和国との国境にも程近い、云(い)わば、帝国軍が有する強大な軍事力に、最もさらされ難い最前線基地である。

基地周辺部を取り巻く環境も、濃密な樹木群を伴った起伏の激しい山岳地帯で、大軍を率いての行軍が非常に困難な入り組んだ地形によって守られていた。

その為、トゥアム共和国軍上層部も、真に注力すべきオクラホマ軍事都市方面の貴重な戦力を引き裂いてまで、この基地の防衛能力を高めようなどと端から考えておらず、やや捨て鉢気味な帰着点を持って、この基地の防衛司令官を決する事になったのも、そう言った意識があったからに他ならなかった。

勿論、だからと言って、トゥアム共和国軍上層部が、この小さな軍事基地の存在を、全く取るに足らない瑣末(さまつ)なるものとして、あからさまに軽視していた訳ではなく、寧ろ、オクラホマ軍事都市周辺部

を主戦場と定める戦略構想の中で、絶対に欠かす事の出来ない存在、対帝国西方戦線における重要な橋頭堡であると言う認識で一致していた。

トゥアム共和国領土内から見て、主戦場たるオクラホマ軍事都市周辺部は、レイナート山脈を越えれば直ぐ目と鼻の先と言う、然程遠くも無い距離に位置しているが、その直線経路上には、帝国軍によって占領されたリトバリエジ都市が存在し、陸路、空路共に、迂回路を辿らなければならない状況下にあった。

その為、トゥアム共和国軍の兵站戦略上、南方サルフマルティア基地を経由した補給路を絶対的に確保しておく必要があり、必然的に、レイナート山脈の西側に存在するパレ・ロワイヤル基地が、非常に重要視される事と相成ったのだ。

実際、トゥアム共和国軍上層部が、パレ・ロワイヤル基地を再建、再利用するのに際し、同基地の前所有者である帝国軍と同等以上の兵力を配備させるに至ったのも、オクラホマ軍事都市に駐留するトゥアム共和国軍主力部隊の生命線であるこの補給路を、絶対的に死守する事を目的としたものであり、パレ・ロワイヤル基地占領後程なくして、頻繁にこの地域へと姿を現すようになった帝国軍哨戒部隊の行動を、少しでも抑止したい思いがそこにあったからだ。

勿論、このパレ・ロワイヤル基地周辺部で頻発していた軍事衝突の多くは、単なる遭遇戦と言うに相応しき、些細なる小競り合い程度に過ぎなかったが、何ら益無き遭遇戦を無為にゴリ押ししてくる帝国軍の動向から察するに、その真の狙い所が、この補給路を分断する事にある事だけは間違いなかった。

六月三十日を持って、パレ・ロワイヤル基地へと赴任してきたサルムザーク陸等二佐も、こうした帝国軍の軍事行動に、着任早々初日から奔走させられる始末となり、移送されて間もない貴下の部隊を総動員させると言う、慌ただしさに見舞われる事となった。

しかし、無秩序に繰り返される帝国軍の攻勢に対して、常に後手を踏み続ける愚をなるべく避けたい思いがあった彼は、直ぐに帝国軍の行動を効果的に封じ込める為の防衛体制を確立させ、この地における戦術的優位性を確保する事に成功する。

それは、単にこのパレ・ロワイヤル基地周辺部の地形的特性、優位性を念入りに勘案した上で、導き出された主要防衛エリアに効果的に兵力を配置すると言う、極単純な防衛戦術に他ならなかったが、彼は帝国軍哨戒部隊の出現位置、出現頻度から、帝国軍の行動をある程度パターン化すると、その全てに対応し得る、非常に効果的な兵力配置図を完成させたのだった。

尤(もっと)も、この地へと投入された帝国軍哨戒部隊の兵力数が、元々それほどの規模を有していなかった事も、事態を鎮静化させるに至った一つの要因であるのだが、決して多いとは言い切れない同基地の防衛兵力のみを持ってして、トゥアム共和国軍の頭痛の種を減殺(げんさい)する事に成功したのも、彼の手腕による所が大きかった。

今現在、このパレ・ロワイヤル基地における防衛体制は、戦略的、戦術的に重要な拠点各所を守る戦車部隊と、地形的に不安定な密林地帯、山岳地帯を巡回警備するネニファイン部隊とが主軸を務め、その両者を常に援護できる形で支援車輌部隊が各所へと配されている。

そして、最も周囲の状況を把握しやすい上空からの監視任務を戦闘

装甲ヘリ部隊が賄い、ＤＱすら立ち入る事の出来ない難所地帯の巡回警備を、特殊移動車輌部隊、または歩兵部隊が補っていた。

勿論、有事の際には、それらの区分けを全て取り払って、帝国軍の攻勢に対応する必要はあったが、この彼の適所に適材を配した効果的な部隊運用は、帝国軍の軍事行動に対して常に先手を取れる、優位的状況を齎すに至ったのだった。

この日も、明け方近くに出没した帝国軍哨戒部隊の煩わしき蠢動によって、パレ・ロワイヤル基地は、早朝から非常に忙しき雰囲気に包まれていたが、本当の意味での危機たる状況と言うには程遠い状態で、決して想定した範囲を超え得るようなものでもなかった。

現時点において、パレ・ロワイヤル基地周辺部へと送り込まれた、ネニファイン部隊のＤＱ機数も、通常巡回任務時とほぼ変わりない全十八機二個中隊体制で、一時的に混乱を見せた兵員の交代ローテーションも、今では完全に平常時通りの流れへと舞い戻っていた。

やがて、シルは作業場へと辿り着いた足を持って、他の整備作業員達が数多く屯す、作業進捗管理室（とは言っても壁に仕切られた部屋ではない）へと歩み寄ると、複雑な作業工程表を映し出す大きなディスプレイの前で、何やら小難しい表情を浮かべていたおかっぱ頭の男性に声をかけた。

（シルジーク）
「どうだ？アークチャン。０９ローテ小隊の受け入れ準備作業は間に合いそうか？駄目そうなら早めに第七格納庫の使用許可取っといた方がいいぞ。」

（アークチャン）
「あ、シルさん。それはもう大丈夫だと思います。先輩が色々と頑張って働いてくれましたから。今朝方の混乱で生じた作業遅れは、これで大体取り戻せたと思います。」

（シルジーク）
「そうか。珍しい事もあるもんだな。」

そして、その男性の直ぐ脇に座っていたロン毛の男へとチラリと視線を宛がい、全くやる気無さそうに大欠伸（おおあくび）を繰り出したその様を見て、あからさまに嫌味を含み入れた毒言を吐き付けてやる。

（サフォーク）
「別に珍しいって事はないだろう。俺だってやるべき時にはやる男なのさ。能ある鷹は爪を隠す。昔からよく言うだろ？」

（シルジーク）
「本当に能ある鷹なら、必要な時に爪を隠して怠けてたりしないと思うがな。お前のそれは、普段から人に頼られない様にする為の、ただの欺瞞（ぎまん）行為だろうが。全く・・・。能ある鷹が聞いて呆れるよ。」

（サフォーク）
「おーおー。そりゃまたなんともつれないお言葉で。折角の貴重な休暇時間をふいにしてまで、皆の為に必死こいて働いてやったってのに、それが恩人たる助勢者に対して投げかける謝辞ってもんですか。ほんと嬉しくて嬉しくて涙が出てきますな。」

（シルジーク）

「感謝の言葉が欲しいだけなら、幾らでも言ってやるよ。どうもありがとうございましたおかげで大変助かりましたこの次もよろしくお願いします。」

（サフォーク）
「ふむ。なんかちょっとムカつくのは気のせいか。」

（アークチャン）
「き・・・気のせいですよ先輩。きっと気のせい。あっはは。」

お互いがお互いの性格を良く知る二人の関係の中において、こうした棘のある皮肉めいた言葉の応酬は、云わば日常茶飯時と言える代物であって、別段周囲に居る者達が気に病むような事でもない。

不意に両者の間に生じた不穏当なる気配も、実の所は彼ら自身が望んでそうしたのであって、特に他人にその場を取り繕ってもらう必要もない他愛の無い一幕であった。

しかし、そんな二人の険悪ムードに対して、不思議と過敏な反応を見せたアークチャンが、半場表情を引き攣らせた面持ちで、即座にシルとサフォークの間に割って入った。

彼としては、この忙しい最中に、余計な揉め事など起こして欲しくなかったのだろう。

（アークチャン）
「ほらほら先輩。もうここは大丈夫ですから、早く部屋に帰って身体を休めてください。次の交代まで後五時間程度しかないですけど、ちゃんと睡眠も取らなきゃ駄目ですからね。ほらシルさんも早く、次の整備作業に取り掛からないと、出撃時間に間に合わなくなっち

ゃいますよ。」

（シルジーク）

「俺は今、次のパイロット待ちなんだよ。整備作業を始めたくても始められない状態なの。あ、そうだサフォーク。お前、部屋に帰るついでに、次の奴らを呼んできてくれよ。」

（サフォーク）

「あーそりゃ残念だったなシル。俺はたった今、DO機体整備班の班長様から、少しでも睡眠不足を解消するよう言い渡された身でね。然したる理由もなく上官の命令に逆らうような真似はできんのよ。それに、これ以上睡眠時間を削られると、絶対に一人では起きられなくなりそうだし、作業中に寝不足で大ポカやらかしちまったら困るだろ。」

（シルジーク）

「お前・・・。そのぐらい面倒臭がらず、引き受けろよ・・・。」

尤もらしい言い訳を並べ立て、あからさまにそれと解る自己保身モードへと移行したサフォークの態度に、呆れたように舌打ちをかまして見せたシルは、何か言いたげな表情で口をもごもごと動かしつつも、それ以上は何も言わなかった。

それは、次のパイロット達を待つだけと言う自分自身にも、それなりに時間的余裕がある事を理解していたからであり、面倒臭い雑用事をサフォークに押しつけてやろうとした自らの行為が、ある種の嫌がらせ的思考から生み出されたものである事を自覚していた為だ。

やられたらやり返すと言った根性の悪いやり取りの中で、先に口籠（くちごも）った方が負けと言う自身の認識を覆すつもりはなかったが、やられ

っぱなしで終わりと言う情けない状況に甘んじたくなかった彼は、やり場のない怒りに煽り立てられた意識を、簡単には押さえ付ける事ができなかった。

そして・・・。

（アークチャン）

「はいはい。解りました。解りましたよ。交代時間になったら僕が起こしに行ってあげますから、先輩は何も心配せずゆっくり寝てください。シルさんも・・・。・・・あっ。ほらほらシルさん。次のパイロット達が来ましたよ。」

シルはその後、いきり立った感情に任せて、サフォークに対する有りっ丈の苦言集を投げつけてやろうと試みたのだが、それもまた唐突に割って入ったアークチャンの平和的思想によって完全に宥め賺されてしまうと、喉元まで出かかった悪感情を、再度飲み込まざるを得なくなった。

熱を失い萎えきった怒りなど、爆発させるに値しない陳腐な代物である事は、その怒りの持ち主であるシル自身も解っていた事であり、事態の悪化を嫌ったアークチャンの横槍は、まさに絶妙のタイミングを持って彼の意識を焦らしたのだった。

シルはふと、恐らくは作り笑いであろうアークチャンの笑顔をじっと見遣りつつ、もしかして、パイロット達が姿を見せなかったら、自分が迎えに行きますよなんて、言い出したんじゃなかろうか・・・などと、多少、気の毒な思いに苛まれてしまうと、苦労性な彼の性格に、同情めいた感情を湧き起こしてしまった。

（サフォーク）

「さーて。ほんじゃまあ。俺はぼちぼち部屋に帰って寝る事にしますか。じゃあなシル。作業中大ポカをやらかして、俺の眠りを妨げるなんて嫌がらせはしないようにな。」

（シルジーク）
「お前じゃないんだから、誰がそんな事するか阿呆。とっとと帰って寝てしまえ。」

（アークチャン）
「先輩。お疲れ様でした。」

そして、別れ際となる最終的帰着点においても、無意味な毒言を投げ付けて来るサフォークに対し、悪しき憑き物を振り払うかの様に大きな溜息を吐き付けてやると、直ぐに気持ちを切り替えて、格納庫内へと姿を表したパイロット達へと視線を差し向けた。

今だ見慣れぬ新たな作業場の中で、不意に湧きおこった懐かしき感覚を、こうした日常的やり取りの中へと埋めさせ、目の前の現実世界へと意識を舞戻した彼は、やがて、ゆっくりと自分の持ち場へと向かって歩き始めた。

０８－０４：〇酷暑へと至る朝方の情緒［２］

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０４「酷暑へと至る朝方の情緒」

パレ・ロワイヤル基地内において、最西端部に位置するこの第六格納庫は、切り立った岩壁を南北に細長く削り取って形成された、長方形型の地下格納庫であり、その東西壁際に備え付けられた整備作業ラインには、それぞれ五機づつ、合計十機ものＤＱを収容可能な、巨大な整備作業用ピットが立ち並んでいる。

格納庫内各所に施された様々な設備も、ほぼ申し分ない性能を有したものばかりで、多少、トゥアム共和国製製品と規格が異なる点はあったが、ＤＱを整備すると言う同じ目的を持って建設された施設だけあって、ネニファイン部隊のＤＱ整備作業が著しく滞（とどこお）る様な事態には陥らなかった。

今現在、この格納庫内には、本日十四時よりパレ・ロワイヤル基地周辺部の哨戒任務に当たる、第１７、第１８哨戒ローテーション小隊所属のＤＱトゥマルクが六機収容されており、その機体周囲で忙しく動き回る整備作業員達の手によって、出撃に向けた準備が着々と進められている状況にある。

格納庫メインゲート側から見て一番奥に存在する四つの空き作業ピットも、十二時に帰還予定の第０９哨戒ローテーション小隊受け入れ作業や何やらで、屯す整備作業員達の表情から精力的装いが消え失せる様な気配はなかった。

とは言え、ＤＱ機体整備作業における主たる繁忙期を乗り越え、次

なる作業工程へと至る過渡期にあった各作業ピットは、明らかに取り付く整備作業員達の姿が疎らであり、内に篭る様に反響していたけたたましき雑音も、何処か不思議と閑散たる雰囲気を作り出していた。

本来であれば、作業進捗の遅れを取り戻したその余勢を駆って、一気に次なる作業へと雪崩れ込みたい所ではあったが、整備作業の最後を締め括るシステムリンク作業は、そのＤＱに搭乗するパイロット達の存在が必要不可欠な共同作業であり、整備作業員達が如何に優秀でやる気に満ち溢れていたとしても、勝手に作業を推し進める訳にはいかなかったのだ。

整備作業の最終工程において、最も重要視される作業項目は、最終的に仕上がったＤＱの機体状態を、パイロット達自身の手によって確認する事にあり、その過程で浮き彫りとなった様々な問題点を、適宜修正して行く事にある。

如何に整備作業員達が完璧に近い仕上がりを持って整備作業を終えたとしても、そのＤＱに搭乗するパイロット達の了解が得られなければ、その作業を終わりとする事が出来ないと言う事は、彼等整備作業員達自身、良く解っている事だった。

（ルワシー）
「あ～ぁ。かたりぃなぁ。こんな天気の良い日に、小狭いコクピットの中で缶詰とはよ。偶にはゆっくり夕方まで爆睡ぶっこきてぇもんだなぁ。」

（ペギィ）
「そうよねぇ。こっちに来てから、まともに休めた日なんてないものね。毎日毎日帝国軍の相手をして、疲れて帰ったと思ったらまた

出撃。ほーんともう寝不足で寝不足で、へばっちゃいそうだわ。あーっと。ルワシーはもうちょっとへばった方が良いかもね。そのぽよよ～んとしたお腹、見ててみっともないわよ。」

（ルワシー）
「何言ってやがんだ。この鍛え抜かれた肉体美が目に入らねぇってのか？ええ？」

（ペギィ）
「お生憎様。私の目にはそんな大きなお腹は入らないわよ。せめてもう三回りぐらい絞って、スマートになってもらわないとねー。」

（バーンス）
「こいつの腹を三回り絞る為には、相当の覚悟と努力が必要そうだな。何せこいつときたら、目に入った食べ物は全部残さず食べる主義だからな。」

（ルワシー）
「うっるせぇな。いつ死ぬとも解らねぇ不確かな身で、ちまちま節食なんざぁしてられっかよ。好きなもんを好きな時に好きなだけ食う。これが俺様の流儀ってもんよ。誰にも指図される言われはねぇぜ。」

（ペギィ）
「あんたの流儀なんか知ったこっちゃないんだけどさ。そのままほっといたら、その内悪い病気になっちゃうかもって思っただけ。」

（バーンス）
「はっはっは。それは言えてるな。俺もお前の流儀に難癖つけるつもりはないが、少しは体内のエネルギーを消費させる努力をしたら

どうだ?今度一緒にジムで汗でも流すか?」

（ルワシー）

「よせやぁ。中年のじじぃと一緒に、二人で汗流す趣味なんてねぇぜ。」

（ペギィ）

「うっわ。ちょっとやめてよその表現・・・。気持ちの悪いじゃないの・・・。」

しかし、システムリンク作業開始予定時刻から十五分が経過した時点で、ようやく格納庫内へと姿を現したパイロット達は、そんな整備作業員達のもどかしき思いを少しも察する風でもなく、暢気(のんきな)な会話を悠々自適(ゆうゆうじてき)に繰り広げていた。

遅れて来た理由は?・・・と問われれば、特に然したる理由もなく遅れてきたと言う他ない彼等だが、休みなく続けられる帝国軍との攻防に、多少辟易(へきえき)していた事だけは間違いなかった。

ただ、めまぐるしい忙(せわ)しさに忙殺されて、激しい徒労感に襲われていたのは、整備作業員達も同じ事であり、彼らにしてみればそれは、迷惑千万極まりない嫌がらせ行為に等しいものだった。

全身深緑色に塗装し直された巨大な人型兵器が並ぶ格納庫内の中央通りを、ゆっくりと練り歩く大小長短不揃えな男女六人は、それぞれの共通点を見つけ出すのが困難なほど、バラエティーに富んだ顔触れで構成されていた。

唯一そこに、何かしらの統一感を見出すとすれば、それは全員、真

新しい群青色の軍服に身を包んでいたと言う事だけであろう。

先頭を歩く二人の男性は、どちらもがっしりとした体格の迫力のある風貌の持ち主で、進行方向左手側を歩く男が、顔中に無数の傷跡を携えた歴戦の勇者「バーンス・シューマッハ」である。

彼はそれほど大柄と言えるほどの体躯に恵まれていた訳ではなかったが、丸みを帯びた顔貌から覗く鋭い眼光が、彼の持つ覇気の全てを如実に誇大化させて居るようでもあり、如何なる兵が目の前に立ちはだかろうと、容易には太刀打ち出来ぬ威風を醸し出していた。

しかし、十代の半ば頃から、常に生と死の境界線上を彷徨い歩いてきた身でありながら、尋常ならざる狂気的精神に病み憑かれる事も無く、平時における彼の気質は、常に温厚と言って差支えない物柔らかさを有していた。

一方、その右手側を歩く、これまた一風変わった風貌をした男性は、「ルワシー・オスカフォード」と言う、ＤＱＡ上がりのＤＱパイロットだ。

彼の身体は全身がっしりとした筋肉に覆われてはいるものの、横幅の広い体躯に大きく突き出た巨腹が目に堪えない形をしており、ツルツルのスキンヘッドに意味なく突き立てた、カラフルな鶏冠頭が特徴的な男性で、その性格は大雑把にして直線的、大胆でいて向こう見ずと言った、かなりお粗末なものとなっている。

ただ、彼の口から吐き出される品の無い悪言とは裏腹に、思いのほか男気に満ち溢れた行動に出る事もしばしばで、彼の存在をあからさまに毛嫌いする様な風潮は、部隊内の何処にも見られなかった。

そして、彼等二人の直ぐ後ろを付いて歩く女性が、一際馴れ馴れしい態度でネニファイン部隊内を専横する、根明者（ねあか）「ペギィ・サイモン」である。

彼女はネニファイン部隊内で唯一となるアブキーラ連邦出身者で、常時耳まで隠れる深い帽子を被っており、前髪の両サイドから長く垂れ落ちた水色の巻き髪が特徴的な可愛らしい人物であった。

見るからに均整のとれたしなやかな体躯と、おしとやかそうな顔立ちからは、女性らしい女性と言う一見して温和な人柄を想像してしまうが、実際に彼女が有するその人となりは、非常に開放的で人懐っこいもの・・・と言うより、非常に鬱陶（うっとう）しくも感じる強引さに満ち溢れたもので、部隊内でも奥手側に位置する根暗（ねくら）者達からは、すこぶる疎（うと）まれていた人物の一人だ。

しかし、彼女が見せるその明るく元気な立ち振る舞いの中には、陰鬱（いんうつ）な感傷にのめりがちな兵士達の心を、多少なりと和ませる効果が含まれていた事は確かで、小煩（こうるさ）き彼女の言動や態度を、頭ごなしに抑止する輩達の姿も特になかった。

やがて、後背でもたつく三人のパイロット達を大きく引き離し、西側に並べられたトゥマルクの足元へと辿り着いた彼等三人は、そこでいそいそと整備作業を推し進めるシルの姿を見つける事になった。

するとシルは、徐に流した視線を持って彼等三人の顔色を順々に見やり、業（わざ）とらしくも初めて彼等の存在に気付いた様な素振りで、あからさまにブー垂れた表情を作り出して見せたが、やはりと言うか、遅れて登場した三人のパイロット達は、少しも悪びれる様子を見せなかった。

（ルワシー）
「おうシル。朝っぱら早くから、俺様の為にご苦労なこったぁよ。整備作業の方はどうだ？少しははかどってんのか？」

（シルジーク）
「お前らが居ないと始まらない整備作業が、どうやったらはかどるって言うんだよ。見ての通り作業は完全に停滞の一途を辿っています。」

（ルワシー）
「なぁに。そんなチンケな作業、俺様の手にかかれば、ものの三分で終わりを見ちまうぜ。期待して待ってなシル。」

（シルジーク）
「ああっ？自動システムリンク作業だけでも、最低三分はかかるって言うのに、どうやってその作業時間を短縮するつもりなんだよ。大言壮語（たいげんそうご）も余りに度が過ぎると、その内誰からも相手にされなっちまうぞ。」

（ルワシー）
「はっ。そんなもん、てめぇの努力と根性で何とかせいっちゅうの。何の為の整備作業員なんだよ。」

（シルジーク）
「あのな・・・。俺達整備作業員は、至極真っ当な現実世界のお仕事を相手にしているの。どこぞのテレビアニメみたいに、魔法の杖一つで何でも出来たりしないの。」

（ルワシー）

「なぁんだ、おめぇ。魔法使えねぇのか。つまんねぇ奴だなぁ。」

（シルジーク）
「お前・・・。本当は俺の事、馬鹿にしてんだろ・・・。」

ルワシーとシル。一見して何ら目ぼしき共通点の一つも見いだせぬこの両者が、昨今かなり仲の良いやり取りを見せる様になった事は、バーンスもペギィも知っていた事だった。

そして、両者が共に得意とする毒言の吐き付け合いへと事態がエスカレートすると、延々と不毛なる会話を繰り広げる事も、最終的にどのような経路を辿り経ようとも、何ら意味なき結末しか迎え入れない事も知っていた。

勿論、バーンスにしてみても、ペギィにしてみても、こう言った言葉遊びが嫌いなタイプではなかったのだが、周囲で行き交う他の整備作業員達の白々しき視線によって、その愚行を止めに入らざるを得な立場へと追いやられてしまった訳だ。

（バーンス）
「おいおいシル。いつまでもこんな奴の埒も無い会話に、真面目に付きやってやる必要はないだろう。早いところ、さっさと整備作業に取り掛かろうぜ。」

やがて、多少呆れ気味の溜息を持って二人の前へと踊り出たバーンスが、その場にいる最年長者らしく、事態の収集を試みる言葉を発して見せる。

言うまでもなく、自分自身が遅れてきたと言う事実については、完全に素知らぬ振りを突き通した。

（ペギィ）
「そうそう。整備作業員達の皆が魔法使いに見えちゃうほど、低能な野蛮人を相手に、貴重な時間を費やす事ないわよ。馬鹿の相手はそれなりにー。ブタの相手もそれなりにー・・・ってね。」

しかし、彼の背後からひょっこりと顔を出して、小憎らしい笑みを浮かべて見せたペギィの態度は、明らかに火に油を注ぐと言った香りが漂うものであり、バーンスが強引に打ち鳴らした終幕の鐘の音は、虚しくも儚く蚊帳の外へと掻き消えてしまう事となった。

勿論、彼女が真に意図した所は、バーンスのそれと然程(さほど)変わらぬものであったはずだったが・・・。

（ルワシー）
「なぁんだとペギィ。おめぇ。この俺様に喧嘩売ろうってんのか？今度その目障りな揉み上げと一緒に、チチ揉んでやろうか、チチ。馬鹿みたいに喚き散らすしか能のねぇ単細胞の分際で、いつまでもへらへらと威張り腐ってんじゃねぇよ。このツイン鼻水野郎が。」

やがて、程なくして、火を見るよりも明らかなるルワシーの反応が続き・・・。

（ペギィ）
「ツイン鼻水・・・。ツイン鼻水って何よ！あんたみたいな小汚い鶏男に言われたくないわよ！大体何なの？その悪趣味な鶏冠頭(とさかあたま)は！そんなんで一端のお洒落さん気取りですか！？ブクブクと肥えた醜い図体の上に、馬鹿みたいにカラフルなお花畑作って、まるで壊れた穀潰(ごくつぶ)しみたいよ！ほーんと気持ち悪いんだから！あんた鏡で自分の姿見た事あるの！？」

ミイラになったミイラ取り・・・と言うか、元々ミイラたる素質に富んだペギィの攻撃が加え被される・・・。

この時点でもはや、事態は容易に収束しえぬ、激しい乱戦へと突入する様相を呈し始めていた。

（ルワシー）
「お花畑だぁ！？言ってくれるじゃねぇかてめぇ！このモヒカンはな！俺様の真っ直ぐな生き様を象徴する、至極のヘアスタイルなんだよ！てめぇのそのグネグネとひん曲がった鼻水ヘアとは訳が違うんだ！結局の所、おめぇのそれは、頼りないチチを覆い隠す為の飾りもんだろがよ！」

（ペギィ）
「うっわ最低！女性に向かってそんな事言うなんて、ほんと信じらんない！そんなんだからあんたは、いつもいつも低能低能って言われんのよ！どんなに頑張ったって変わり映えしない醜いトン公の分際で、ブーコラブーコラ偉そうな事言ってんじゃないわよ！大体ね！私の胸はそんなに小さくないわよ！」

（ルワシー）
「貧乳貧乳っつって怒る奴ぁな！みーんな貧乳って相場決まってんだ！幾ら必死に否定して見せたって駄目なもんは駄目なんだぁよ！このカス女が！あ～ぁ。なんてつまんねぇ女なんだなろうな。興醒めもいいとこだ。つまらんつまらん。」

（ペギィ）
「ちょっとこのブタ！あんたほんっと、いい加減にしなさいよ！」

（シルジーク）
「あーあーあーあー！！！解った解った！！もう解った！よーく解った。解ったからもうやめろお前等。頼むから早いところリンク作業に入ってくれ。」

しかし、放って置けばいつまでも際限なく積み重ねられる両者の戯言に、とうとう痺れを切らして大きな溜息を吐き付けたシルが、半ばやけ気味の態度を押し通して二人の間に割って入った。

いつ死ぬとも解らぬ戦地を目の前にして、こうも無意味な会話に興じられる精神は、全く持って異常と称す以外にない頼もしさを感じ得るものだが、周囲の者達への悪影響を鑑みれば、それは差し止めざるを得ない愚行そのものと言えた。

勿論シル自身、こう言った他愛の無い馬鹿騒ぎが嫌いな訳ではなく、過酷な作戦任務へと向かう兵士達の気分を少しでも紛らわそうと、態々（わざわざ）自らその相手を買って出る事も少なくない。

だが、流石に部隊内でも指折りの鬱陶しさを誇る暴れ馬二頭を前にして、彼は上手くその手綱を握る事が出来なかったのだ。

（シルジーク）
「ほら。お前達17ローテ小隊の機体はあっち側の作業ピットだ。アマーウがずっとお前達の事を待ってるんだから、早く行ってやれって。機体の並びは小隊メンバー登録順で、出入り口側からバーンス、ルワシー、ペギィの順になってるからな。」

（ルワシー）
「なぁんだ。こっち側じゃなかったんか。なんか無駄に馬鹿騒ぎしちまったっつう感じだぁな。」

（シルジーク）
「お前まさか・・・、あっちに行ってからも、同じ様に騒ぎ立てるつもりじゃないだろうな・・・。」

（ルワシー）
「そんなのあったりめぇだろうがよ。どんな場所でも、俺様の行く所には、必ず俺色の花を盛大に咲かせてやんねぇとな。居心地が悪くてしょうがねぇ。」

（シルジーク）
「バーンス。今度こいつが騒ぎ出したら、思いっきりぶっとばしてやっていいからな。勿論、手加減する必要なんかないぞ。」

（バーンス）
「あっはっはっは。了解した。」

やがて、次第に下火へと回り行く周囲の様相を余所に、名残惜しそうに最後の世迷言（ほまいごと）を投げ付けたルワシーが、やや強引気味に背中を押し立てるバーンスに引き連れられ、その場を後にする。

シルはここで、ようやく安堵した様子を色濃く滲ませた小さな吐息を一つ吐き出し、無駄に疲れ果てた全身の倦怠感（けんたいかん）を軽く拭い去る様に、小首を二、三回左右へと傾げた。

騒ぎ立てるだけ騒ぎ立てて、周囲に何ら益を齎さぬ、その傍若無人（ぼうじゃくむじん）振りは、云わば巨大なハリケーンとも言うべき、理不尽さを感じ得るものだが、それが過ぎ去った後の爽快感（そうかいかん）もまた格別の味わいがあった事も確かで、シルは、不思議とねちっこい後味の悪さを感じていななかった。

しかし、本来であれば、いの一番で彼の元へと到達するはずの本命たる大嵐、小煩い赤毛の少女の存在が、今だ全く感じられないと言う奇妙なる事態に気付くと、彼は不思議そうな面持ちを持って周囲へと視線を這わせる事になる。

つい先ほど彼が確認した限りでは、格納庫内へと姿を現したＤＱパイロット達は、全部で六人いたはずで、勿論その中に、彼が担当する１８ローテ小隊のメンバー達も含み込まれていた事は確かだ。

先行した三人のパイロット達より、やや遅れて姿を見せたとはいえ、今し方の馬鹿騒ぎの合間に彼女達が辿り着かないはずもなかった。

もしかしてあいつら、バーンス達とは別に、あっち側の作業ピットに行ったんじゃないだろうな・・・。

シルはふと、真っ先に思い付いた思考に従い、反対側の作業ピットへと視線を投げかけると、しばし視線を右往左往させて、残る三人のパイロット達の姿を探し求めた。

パレ・ロワイヤル基地着任と共に、非正規軍人パイロット達にも支給された真新しい軍服は、格納庫内を駆け回る整備作業員達の深緑色の作業着とは異なり、非常に濃いめの群青色一色で統一されているのが特徴的で、然程意識を注意深く巡らせなくとも、一目でそれと解る代物だった。

しかし、容易に探し出せるものと高を括って見渡した彼の視界内には、東側作業ピットへと向かう大柄な男達二人の後ろ姿と、今だ直

ぐ近くで別の整備作業員と話し込むペギィの姿、そして、彼の居る作業場から程近い場所で一人ぽつねんと佇んでいる、抹茶色の髪の長身女性の姿しか捉える事が出来きず、赤毛の少女と言う条件に当てはまる様な人影を見つける事が出来なかった。

やがてシルは、あからさまに無愛想な表情のまま、煙草をふかす抹茶色の髪の女性、「ジャネット・クライス・ホスノー」と不意に視線をかち合わせると、他の二人は？・・・と言わんばかりの表情を浮かび上がらせ、業(わざ)とらしくも両手を左右に放り出して見せた。

するとジャネットは、何処か訝(いぶか)しげな表情を浮かび上がらせながら、大きく吸い込んだ煙草の煙を周囲へと撒き散らし、静かにとある方向を右手で指差して見せる。

実弟であるマリオの死から、まるで人が変ってしまったかの様に、刺々しき威風を醸(かも)し出す様になってしまった彼女だが、こうした業務的やり取りだけに関して言えば、彼女の方から一方的に無視を突き通される事は無かった。

勿論、面と向かって他愛の無い会話に興じるまでには至ってはいないものの、お互いにＤＱパイロットとその整備作業員と言う立場上、絶対に顔を合わせないままにして全てを済ます事など不可能であると、暗に察していたからなのかもしれない。

確かに彼女が醸(かも)し出す雰囲気、態度と言った外面的様相は、以前のものと比べ、大分異なる印象を拭い切れないものとなっていたが、全く何を言うでもなく交わされた些細なやり取りの中で、彼の意図を正確に読み取って見せた彼女の所作は、やはり以前のジャネットをほのかに感じさせるものであった。

この時彼女は、システムリンク作業を開始するにあたり、シルが一体誰の機体から手を付け始めたいのかと言う事を、既に解っていたようだった。

程なくしてシルは、ジャネットの右手が指し示す方向に素直に視線を走らせ、次第に格納庫内の奥の方、奥の方へと意識を移し替えて行くのだが、そこでようやく、彼の探し求める可愛らしい赤毛の少女「セニフ・ソンロ」の姿を見出すと、あからさまに呆れ果てた表情を浮かび上がらせる事になる。

そこは、ほぼ格納庫出入り口付近と言って差支えない壁際辺りであり、彼女はこの格納庫内に姿を現してからここ数分間の間に、たったの十数歩分程度しか歩みを進めていなかったのだ。

そして今も尚、直ぐ傍らに寄り添うように立つ、もう一人の男性パイロットと、何やら楽しげな会話を繰り広げている様子で、時折笑顔を交えて言葉を返す彼女の振る舞いからは、少しもその場を動き出そうと言う意思が感じられなかった。

あれが新しく来た新人パイロットか・・・などと、不意にありきたりな所感を脳裏に思い浮かべてしまったシルは、いつまでものんきに談笑を嗜(たしな)む彼女の姿に苛立(いらだ)ちを覚え、俄(にわ)かに大声を張り上げて彼女の名を呼んだ。

（シルジーク）
「おおい！！セニフ！！いつまでそんな所に突っ立ってるつもりだ！！早くこっち来てトゥマルクに搭乗しろ！！リンク作業お前からだぞ！！」

すると、唐突に浴びせかけられたシルの怒号に驚いたのか、やや大袈裟気味な反応を持って頭を擡げたセニフが、何処かばつの悪そうな笑顔を繰り出しながら、シルに左手を振り返してきた。

そして、最後に二、三回程、その男性パイロットと短く言葉を交わし合うと、今度は慌てた様子を垣間見せながら、全速力でシルの方へと向かって走り寄って来る。

全く・・・この糞忙しい時に、一体何を考えてるんだよあの馬鹿！

お前のリンク作業が一番時間がかかるって、あれ程言っておいただろうが！

ほんと毎回毎回、時間にルーズな奴だ！

・・・と、独り言の様にブツブツと小さくそう言葉を呟き出したシルは、心の奥底から沸き起こるイライラ感を紛らす為、大きな舌打ちに乗せて大きな溜息を吐き出して見せた。

そして、一体何をそんなに楽しく話し込んでいたのだろう・・・と言う、懐疑的思念に渦巻かれながら、もう一度その男性パイロットへと視線を投げかけた。

彼が「ロッコ・ミラマール」と言う名前で、年齢が二十三歳である事など、予め手渡された資料から読み取れる程度の情報なら、シルも既に解っていた事だったが、その人となりや物事の考え方、ＤＱパイロットとしての資質と言った、内面的な情報に関しては、今だ何も解っていなかった。

周囲に流れる風の噂を頼りにその人となりを想像すれば、非常に温和でおっとりとした性格の好美男子と言う、良いこと尽くしの凛(りん)とした人物像が出来上がるのだが、何故かこの時、シルは彼の醸(かも)し出す雰囲気の中に、何処となく不気味な胡散臭(うさんくさ)さを感じてしまっていた。

勿論、それが何かと問われれば、彼自身、その理由を明確に説明する事が出来なかったかもしれないが、現状、ＤＱパイロット余りの状態であるネニファイン部隊に、新人パイロットが配属される事自体、奇妙な話であるし、彼の出身地がセルブ・クロアート・スロベーヌ帝国であると言う事も、シルの疑念を増幅させる要因となっていた。

やがてシルは、主観的第一印象のみでその人を判断する愚をなるべくを避けようと、大きく天井を仰ぎ見てゆっくりと深呼吸を繰り返し、一度静かに両目を瞑った。

そして、ようやく作業が開始できるな・・・と言った、強い意気込みを心の中に滾(たぎ)らせて両目を見開くと、きりりとした表情に立ち返らせて前を向いた。

しかし、そんな時に限って、彼の思いを端から挫(くじ)く「何か」が、彼の元へと舞い降りるのが通例で、彼はその自らの運命を呪う暇も与えられないまま、次なる対応を余儀なくされるのだ。

０８－０５：〇酷暑へと至る朝方の情緒［３］

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０５「酷暑へと至る朝方の情緒」

（ペギィ）
「ねぇねぇシル。ジョルジュの姿が何処にも見当たらないんだけど、何処行っちゃったのかな。」

（シルジーク）
「あぁ。ジョルジュならさっき、１０、１１ローテ小隊の受け入れ作業で、第四格納庫に行ったよ。多分しばらく帰って来ないと思うぞ・・・って、お前、まだこんな所にいたのか。早いとこ・・・。」

（ペギィ）
「ええっー！！？何よそれー！！」

それは、運命によって齎（もたら）された新たなる厄災などではなく、彼自身の怠慢（たいまん）によって導き出された、自業自得なるしっぺ返し。

彼は、ペギィに甲高い怒声を浴びせかけられるまで、全くその事に気付いていなかった。

（シルジーク）
「あっ！・・・・・そう言えば、完全に忘れてた・・・。」

（ペギィ）
「忘れてたぁ～～～！？昨日私があれだけお願いしたって言うのに！！忘れてたってなによ！！しかも完全に忘れてたって！！ほんと

もう使えない男なんだからあんたは！！この役立たず！！」

（シルジーク）

「何だよ。そんなに目くじら立てて怒る事ないじゃないか。今度、また今度、ちゃんとセッティングしてやるから。それで良いだろ。それで。」

昨日の晩、パレ・ロワイヤル基地周辺部の哨戒任務を終えて帰還したペギィは、偶々自分の機体整備担当者となっていたシルの事を、無理矢理に人気のない格納庫裏へと連れ出すと、そこで突然、思いもよらぬ要求をシルに突き付けてきた。

それはシルにとって、迷惑千万極まりない面倒事に他ならなかったが、彼女の強引なるごり押しに根負けしてしまったシルは、渋々彼女の頼み事を聞いてやる事になってしまった。

ねぇシル。明日の出撃準備作業中にさ。

ジョルジュに、私の所まで来てくれるよう・・・伝えておいてくれないかしら。

私、それまでに頑張って、気持ち作っておくからさ。

何だよ気持ちを作るって。

馬鹿！そのぐらい察してよ！

女性が気持ち作るって言ったら、好きな男性に告白する時以外ないじゃないの！

とどのつまりシルは、ペギィがジョルジュに愛の告白をする為の環境作りを手伝うと言った、非常に重要な任務を言い渡されていた訳で、彼女からしてみれば、まさか忘れていたなどと言う安易なる理由を持って、約束を反故（ほご）にされるなど、思ってもみなかったのかもしれない。

勿論、シルとしても業（わざ）と故意に約束を破り捨てた訳ではなく、ただ本当に失念していただけの話なのだが、然程（さほど）その事を重要視していなかった事も事実で、ペギィが怒るのも当然の事と言えた。

（ペギィ）
「な～によ！その言い草！！良い訳ないじゃない！！今まで一生懸命気持ち作ってきた、私の思いはどうなるのよ！！この馬鹿！！この薄らトンカチ！！」

（シルジーク）
「本当に忘れてたんだから、しょうがないだろ。」

（ペギィ）
「しょうがないって・・・ちょっとあんた！！少しは私の気持ちも考えてよね！！私はね！！今日明日直ぐに死んじゃうかもしれない身なのよ！？これでもう二度と彼に会えなくなるかもしれないのよ！？それを、あんた・・・しょうがないだなんて・・・。ほんとあんたも、あの醜い鶏トン公と一緒だわ！！あんたみたいな男に頼んだ私が馬鹿だった！！」

シルはこの時、ペギィの放つ非常に鬱陶(うっとう)しき言葉の纏(まと)わり付きを、如何に簡単にあしらってやるべきかと、おざなりな返事を突き返しながら考えていた。

しかしその途中、ペギィの放った痛烈な一言によって、心の臓を強く打ち付けられてしまうと、俄(にわ)かに神妙な面持ちへと表情を切り替え、不意に彼女から視線を切り捨ててしまった。

そうだ。確かに言われてみればその通り・・・。

戦地へと赴き、命を賭して戦う者達にとって、今日を確実に生き残れる保証なんてどこにもない・・・。

今日と言う日、今と言う時を逃せば、もう二度とその機会に巡り合う事が出来なくなってしまうかもしれないんだ・・。

言うなれば俺は、これで最後になるかもしれないから・・・と言う覚悟を持って、好きな相手に告白しようと心に決めたペギィの決意を、忘れていたなんて埒(らち)も無い理由で、踏みにじってしまった事になる・・・。

最後・・・。死・・・。もう二度と・・・。

（シルジーク）

「ペギィ。・・・あの、ごめん・・・。俺が悪かった。」

（ペギィ）

「何よ今更！！誤って済む問題じゃないでしょ！！折角こんなにお

洒落までしてきたって言うのに!!ほんとあんたのせいで全部水の泡だわ!!」

（シルジーク）
「ごめん・・・。ほんとごめん・・・。」

（ペギィ）
「ごめんごめんってねぇ!!あんた・・・・・何よ。急に・・・。妙にしおらしくなっちゃって・・・。いつもの勢いはどうしたのよ。いつもの勢いは。」

（シルジーク）
「だって・・・。その・・・。ごめん・・・。」

相手から突き返される反応の全てを逆手に取り、いつなんどき如何なる言動に対しても、捲し立てられるよう身構えていたペギィが、不思議と唐突に意気消沈した装いを全身に纏い被って、謝罪の一手へと身を引き込ませたシルの態度に、驚いたように声色を変えた。

そして、吐き付ける口調をそのままに保ちつつも、あからさまに態度を豹変させて、その場を取り繕う言葉を並べ立て始めた。

彼女もまさか、シルがこんなにも真摯なる態度に打って出るなど、思ってもみなかったのだ。

（ペギィ）
「・・・。あぁーっ!ぅんもう!そんな顔されたら、こっちだって困っちゃうじゃない!いいわよ別に!そんなに気にしなくても!私もそんなに気にしてなんかいないんだし!大体、私はね。今日死ぬつもりなんてサラサラ無いわよ。明日も明後日も、その次の日も、

ずーっと死ぬつもりなんて無いんだから。今日だってちゃーんと生きて帰って来るわよ。ねー。セニフー。」

（セニフ）
「えっ？えっ？何？」

そして、ようやくシルの元へと辿り着いたばかりのセニフに対し、解るはずもない先の話題の終端部分を擦り付けると、今だ浮かない表情で凝り固まっていたシルを余所に、新たに見出した会話の入口へと屈託の無い作り笑いを捻じ込んでいく。

どうやら彼女はこういった展開が苦手なタイプらしい。

ペギィは、徐にセニフの手首を掴み取って、強引に彼女の身体を引き寄せると、シルに背を向ける様にして少しばかりの距離を取り、セニフの首元へと巻き付けた右腕を持って、彼女の身体を羽交い絞めにする。

そして、小刻みにもがき苦しむセニフの耳元に顔を近づけて、小声でこう話しかけるのだ。

（ペギィ）
（ねぇねぇセニフ。あなたジョルジュと仲が良いでしょ？年齢も近いんだし、今度私の為に彼を誘い出してくれないかな。）

（セニフ）
「ええっ？ちょっ・・・私が？・・・えっと・・・。」

（ペギィ）
（私ね。ジョルジュの事が、ほんと大好きで大好きでしょうがない

の。だからねっ。お願いっ。一生のお願い。ねっ。）

（セニフ）
「で・・・でも、・・・そういうのは、自分でやった方が・・・良いと思うけどなー。」

（ペギィ）
（いいじゃない。いいじゃない。セニフなら簡単にできるでしょ？いつもいつもジョルジュと仲良く話してる所、私見てるんだから。セニフなら絶対上手くいくと思うのよね。私ね。本当に大好きな人の前では上がっちゃってさ。まともに会話する事すら出来なくなっちゃうんだ。だからお願い。セニフ。こんな哀れな私を助けると思って、お願いっ。）

（セニフ）
「えーっ？・・・でも・・・。やっぱり・・・。」

（ペギィ）
（あーっ。じゃあさ。その代わりって言ったら何だけど、今度私もセニフの為に男の子を呼び出してあげる。それならいいでしょ？お互いがお互いにギブアンドテイクって事で。ねっ？）

（セニフ）
「ええっ？・・・そ、・・・そんなの困るよ・・・。」

ペギィの放つその可愛らしい猫撫で声は、確かに温和でいて優しい口調のまま、セニフの耳元へと送り届けられていたが、かなりの強引さを有して会話を推し進めて行くその圧力は、周囲から自己中心的お転婆娘として認識されていたセニフにとっても、かなり辟易（へきえき）としてしまうのものだった。

・・・と、言うよりも、あからさまに戸惑いを隠しきれなかったと言う方が正しいであろうか。

何よりこの時まで、セニフはペギィと言葉を交わした事がなかったからだ。

セニフとしては、自らが持つ社交的精神を総動員させて、何とか受け答えを成り立たせていた所なのだが、やはりと言うべきか、初対面の相手に対しても全く警戒心を抱かぬ、ペギィの馴れ馴れしさには打ち勝つことができず、セニフは、荒波に揉み砕かれるように会話の渦へと引き込まれて行ったのである。

（ペギィ）
（大丈夫よ。大丈夫。私に任せておけば、絶対に上手くいくわ。大船に乗ったつもりで安心しなさいって。ほらほら。セニフは誰の事が好きなの？言ってごらんなさいよ。ジョルジュ・・・って言われると、私もちょっと困るけど、それ以外の子なら私が何とかしてあげるわよ。）

（セニフ）
「・・・す、・・・好きな人って・・・いきなり言われても・・・。」

（ペギィ）
（ほーら。恥ずかしがる事無いじゃない。女の子同士なんだし。大好きな男の子を目の前にしてるって訳じゃないでしょ？お姉さんに言ってみなさいって。力になってあげるわよ。）

（セニフ）

「えっと・・・その・・・。」

（ペギィ）
（あー。解った。セニフー。貴女、自分に自信が無いとかって言うんでしょ。そんなに可愛らしい顔してながら、贅沢な悩みねぇー。）

（セニフ）
「そ・・・そんな事ない。そんな事ないって・・・。」

（ペギィ）
（私さー。セニフがニコーっと可愛らしく笑って見せれば、大抵の男はコローっといっちゃうと思うのよね。その上、お化粧なんかしちゃったらさー・・・。あ、そうだ。今度私がお化粧の仕方教えてあげよっか？）

（セニフ）
「え？・・・お化粧？」

（ペギィ）
（うんうん。セニフならほんと、びっくりしちゃうぐらい美人になっちゃうと思うわ。ちょっとお化粧したぐらいでも、女性って見違えちゃうんだから。私ね。ほんとセニフの力になりたいのよ。だって勿体ないじゃない。セニフみたいに可愛らしい女の子が、毎日毎日作戦任務に明け暮れるだけなんてさ。セニフだって、偶には好きな男の子と、デートなんかしたいなーって、思ったりする事あるでしょ？）

（セニフ）
「・・・・・そりゃ、まぁ・・・。」

（ペギィ）
（そうでしょう?そうでしょう?だからさ。私がセニフの愛のキューピッドになってあげる。ほんと頑張っちゃうんだから私。セニフの為なら何でもしてあげるわよー。だ・か・ら・さー。セニフの好きな人。私に教えてくれないかなぁ。）

（セニフ）
「う・・・・・・うー。」

セニフは困っていた。非常に困っていた。

自らの意思を持って返答できる全ての道筋を断ち切られた挙句、最後に示された一本道を渡るよう強引に強要してくる、そのペギィの優しげな笑顔に。

それはまさに、誘導尋問と言うに相応(ふさわ)しきペギィの遣り口で、セニフはもはや、その会話の趣旨が変ってしまっている事にすら、気づかない様子だった。

恐らく、こう言った輩の意地悪な魔の手から逃れ出る為には、それ相応の巧みな切り返しを持って、相手を捻(ね)じ伏せる以外に手立てはないのだろうが、普段からその場の勢いに任せて言葉を発してきた、やんちゃなるお子様風情には、まだ、そんな高尚なる会話技術が備わっているはずもなかった。

セニフは、刻々と移り変わり行く会話の内容をじっくり吟味する事も出来ず、ただただ浴びせかけられるペギィの言葉に、拙(つた)い反応を見せる出来なかった。

（ペギィ）

「あれっ？セニフ。・・・もしかして、好きな男の子とかいないの？」

（セニフ）
「あ・・・いや。・・・・・・・・・・。べ・・・別にぃ・・・。」

そして、頬と頬とが触れ合う程に、間近へと迫ったペギィの表情にチラリと視線を宛がうと、自分の表情をまじまじと観察する好奇心旺盛な瞳の存在に気付き、俄(にわ)かに頬を赤らめながら下を俯いてしまった。

同性同士であるにもかかわらず、こうも顔を近づけられて、気恥ずかしい思いに苛(さいな)まれてしまうのは何故だろうか・・・。

セニフはふと、そんな詮(せん)無い思考に、藁(わら)をも掴む思いで必死に縋(すが)り付くと、滴り落ちる額の汗を拭う事もできないまま、じっと黙り込む他なかった。

（ペギィ）
「あっははははっ。ごめんごめんセニフ。ちょっとからかって見ただけよ。冗談。冗談なんだから。」

（セニフ）
「えっ？」

（ペギィ）
「セニフがさー。余りにも可愛らしい反応するからさー。ちょっと意地悪してやろうかって思っただけ。ほんとごめんねぇー。」

（セニフ）
「・・・えっと・・・じゃあ、ジョルジュの事を好きだって言うのも・・・。」

（ペギィ）
「ううん。それはほんと。彼の事はほんとに大好きなんだから。でもね。愛の告白なんて、実際自分一人で出来るし、他人を困らせてまで人に頼んだりしないわよ。」

（シルジーク）
「なぬっ！？」

するとこの時、非常に辛気臭い面構えで負たる感情の穴蔵へと沈み込んでいたシルが、唐突に開示されたペギィの本意に感敏なる反応を示し、徐に頭を擡(もた)げて眉間に皺(しわ)を寄せた。

勿論、シルも一瞬まさかとは思った。

しかしその直後、可愛らしい仕草を持って態勢を翻(ひるがえ)し、シルに向かって小憎らしい薄ら笑いを浮かべて見せたペギィの態度が、彼の脳裏に渦巻いた疑念を確信へと書き換える十分な根拠となった。

あれだけ物凄い剣幕を持って、人の失敗を捲(まく)し立ててきたペギィの行為が、実は、シルをおちょくる為だけに繰り出された、偽りの悪行であったとは・・・。

（ペギィ）
「あっらー？聞こえちゃった？ごめんねぇシルー。あっはは。」

（シルジーク）

「お前な・・・。あははじゃないだろ。あははじゃ・・・。俺はほんと、お前に悪い事したなーって、そう思って、物凄く反省してたんだからな。ほんと勘弁してくれよ・・・。」

（ペギィ）
「だからごめんってば。そんなにブーたれる事ないじゃないの。シルだって私との約束、完全に忘れてたんだから、これでおあいこよ。おあいこ。」

（シルジーク）
「おあいこって・・・。大体お前、もし俺が約束通り、ちゃんとジョルジュを連れて来てたら、どうするつもりだったんだよ。」

（ペギィ）
「あーっ。その時はその時よ。私は元々、彼の反応をちょっと見てみようかなって、そう思ってただけだし、私の存在を少しでもアピールする事が出来れば、それはそれで良っかなー程度にしか考えてなかったしね。大体、彼はまだ私の事を良く知らないはずだから、最初から良い返事なんてもらえるはず無いわよ。まずは彼に、私の事を良く知ってもらう所から、しっかりと始めないとね。真っ向勝負して激しく玉砕なんてのは、若い子のする事よ～。」

恐らくペギィの本性を知ってしまったら、ジョルジュは直ぐに離れて行ってしまうと思う・・・と、不意にそう思い付いたシルとセニフは、やや呆れ気味の表情を浮かべてお互いの顔を見合わせると、ほぼ同じタイミングを持って大きな溜息を吐き付け合った。

そして、彼女の単なる遊び相手として・・・と言うより、単なる玩具として弄ばれてしまった二人は、心を揃えてこう思うのである。

決して悪い人間ではないのだろうが、余りにも傍迷惑な輩であると・・・。

（カース）
「ほらそこ！！いつまでグダグダと話し込んでいるつもりだ！！さっさと整備作業に取り掛からんか！！」

（ペギィ）
「ひぇっ！！」

しかし、そんな口八丁手八丁な独善的振る舞いを持って、その場を蹂躙し続けていた彼女の行動も、唐突に浴びせかけられた恐ろしき怒声によって、いとも簡単に堰き止められる事となる。

まさか彼女も、こんな辺鄙な格納庫内で、鬼軍曹たる人物の怒鳴り声を聞かされるは思っていなかったのだろう。

俄かに張り詰めた表情を浮かび上がらせて態勢を低く構えたペギィは、何処かオドオドと言った様相を強く滲ませながら、必死に辺りの様子を窺う素振りを見せ始めた。

どうやら彼女にも、天敵と呼べる人物が存在するらしい・・・。

そはまるで、意気揚々（いきようよう）と好き放題野山を駆け回っていた野ウサギが、突然、捕食者たる大蛇の存在を感じて取った時の様な怯え振りだった。

周囲に立ち込める空気の全てを、痛々しい緊張の荊棘線へと変質さ

せ、目には見えないおどろおどろしき暗雲を率いて、颯爽と歩き近づいてくるその女性の名は、「カース・イン・ロック」と言った。

彼女は、ネニファイン部隊内における、影の元締めとも揶揄されし大御所で、その見た目の派手さとは全く対照的に、非常に生真面目で厳格な気質に凝り固まった人物だ。

恐らく、彼女の内面を露とも知らぬ男性達の目から見れば、意図せずも振り返ってしまいたくなる女性の一人として、数え上げられていたに違いないが、ネニファイン部隊に所属する者達の目から見れば、意図せずも敬遠したくなる女性の一人である事に間違いはなかった。

凄いがの出てきちゃったよ・・・と、徐に顔を背けて、いそいそと整備作業へと舞い戻る素振りを見せ始めたシルの行動に合わせ、やばい、逃げなきゃ・・・的な様相で、慌てふためくペギィが眉間に深い皺を寄せる。

（ペギィ）
（ごめんセニフ。私、あの人超苦手なの。後はお任せしたわ。じゃあね。）

（セニフ）
「えっ？」

ペギィはそう言うと、態勢を低く保った状態のまま、そそくさと足早にその場を後にした。

（シルジーク）
「は～ぁ。忙しい忙しい。今日はほんと、休む暇もない忙しさだぜ。

さーてお次の作業はっ・・・と。」

（セニフ）

「ちょっとシル！あんたまで！」

するとシルも、何処か余所余所しい態度を頭から被り纏(まと)って、近場にあった整備工具をガチャガチャといじり始めた。

本来、彼が次になすべき仕事は、セニフが搭乗するＤＯ機体のシステムリンク作業であり、物理的工具を持って機体を整備する事などではなかったのだが、彼としても、非常に危険極まりないこの落雷予測地点から、逸早く逃げ出したかったのだろう。

程なくしてセニフは、その場にたった一人取り残された感のある自分の存在に気が付くと、遠くへと逃げ出せるはずもないシルに対し、可愛らしき怒声を放って、その首根っこを掴み取ろうとする。

・・・が、しかし、それよりも早く目の前へと辿り着いた鬼軍曹・・・、いや、現時点においては鬼曹長と称すべき女傑(じょけつ)の高圧的威風によって、その後の行動の全てを封じられてしまうと、セニフは俄(にわか)に身を小さく萎(すぼ)ませて、その場に立ち尽くす他なかった。

（カース）

「セニフ。ちょっといいかしら。」

（セニフ）

「は・・・はい。」

泣く子も黙る戦慄(せんりつ)の捕食者、カースが真っ先に捉えた哀れなる獲物は、逃げ出す事も出来ず、助けを呼ぶ事も出来ず、ただオロオロと

ビクついた表情で硬直してしまった野ウサギ、セニフであった。

セニフは一瞬、何故に私だけ・・・と、恨めしさを込め入れた視線をシルの背中に浴びせ付けたが、勿論、その理由について、少なからず思う所があった。

やがて、上から目線でじっとセニフの表情を窺い見ていたカースが、一つゆるりと大きな溜息を吐き出して口を開く。

（カース）
「セニフ。別に貴女の気持ちが全く解らない訳ではないけど、ここ二週間の間、貴女が私的に軍務を放棄していた行為は、著しく軍規に違反する行為だって事ぐらい、解っているわよね。」

（セニフ）
「・・・はい・・・。」

やっぱり来た・・・と、セニフは不意に思った。

真っ直ぐに自分へと宛がわれたカースの視線の中には、真に厳粛（げんしゅく）な攻撃的鋭利さが含み込まれていたが、弱弱しくも素直に返事を返して見せたセニフには、それを避ける事も、直視する事も出来なかった。

（カース）
「軍隊と言う協調一致団結が必要不可欠な集団の中において、貴女一人の我儘（わがまま）が、一体どれだけの人間に迷惑をかける事になるのか、少しは考えなさい。偶々今回の例に限って言えば、然（さ）したる大きな問題を生じさせずに済んだと言えるけど、貴女の犯した自分勝手な振る舞いが、仲間達の命を奪い取ってしまう事だってあるのよ。ト

ゥアム共和国との間に結ばれた、有事の際の徴兵契約に従い、仕方なく軍属となっている、貴方達の現状も解っているつもりだし、何の為に戦うのか、何の為に命を賭けるのか、その目標を見出し辛い状況にある事も解る。でもね。それでも、貴女の周りには、本気でこの国の為に死力を尽くして戦っている者達が、大勢いるんだって事を認識して欲しいの。」

やや俯き加減のまま、じっと直立不動体勢を維持していたセニフは、淡々と繰り出されるカースの苦言に、非常に耳が痛い思いに苛(さいな)まれていた。

勿論、親しい友人の死によって、のっぴきならぬ精神状態にあったと言う事実は事実だが、それを傘に投げ遣りな言い訳を持って、自身を正当化する事が出来るとも思っていなかった。

彼女の周囲にいる兵士達は皆、彼女と同じ境遇へと追い込まれし人間達であり、中には親しい友や恋人、将又(はたまた)家族を失ってしまった人達も、数多く存在していたはずで、彼女一人だけが、悲痛な思いに苦しめられていたのでは無いのだ。

誰しもが皆、そんな悲しみに苛(さいな)まれながらも必死に戦っている・・・。

誰しもが皆、そんな悲しみを乗り越えて必死に戦っている・・・。

（カース）

「貴女も含め、私達は皆、お互いに協力し合い、必死に困難な作戦任務を、数多くこなしてしかなければならない立場にあるわ。同じ陣営側に属する者として、同じ目標へと向かって歩み進む者として、云わば私達は、一蓮托生とも言うべき結び付きを持って、戦ってい

かなければならない運命共同体なの。それは解っているわよね。」

（セニフ）
「はい・・・。」

（カース）
「ネニファイン部隊と言う組織の中で、所属する各隊員達を管理、統率しなければならない私の立場からすれば、周囲の和を著しく乱す行為、軍規約に著しく違反する行為を、簡単に見過ごす事は出来ないし、事と次第によっては、厳罰を持って対処しなければならない場合だってあるわ。勿論それは、女子供だからと言って、特別扱い出来るものではないわ。」

厳罰を持って対処する・・・。

そのフレーズを聞いた瞬間、セニフは少しだけピクリと身体を弾ませて見せ、俯(うつむ)いた頭を更に深く前へとのめり込ませていった。

彼女自身、自らが押し通した自分勝手な振る舞いが、一体如何なる種の悪行に類するのか、よくよく理解していたようであり、全く一言も弁解する素振りを見せないその態度から、もはや何かしらの処罰が下される事を覚悟している様子だった。

やがて、恐らくは意図的に作り出したのであろう、セニフにとっては非常に居心地の悪い長い沈黙の時を経て、不意に小さく口元を緩めて見せたカースが次なる言葉をゆっくりと発する。

（カース）
「・・・とは言え、今回の一件に限っては、貴女にも十分反省の色が見えるようだし、その罪を無為に咎(とが)める様な事はしません。今回

の貴女の行動に関しては、私個人の判断で、特別に休暇を与えたものとして処理します。当然これは、既にサルムザーク陸等二佐の了解を得ている話です。」

お咎(とが)めなし・・・。

この事実に、セニフは少し驚いた様な表情を浮かべて、カースの顔を見上げた。

（カース）

「正直言って、私も、各隊員達の体調や精神状態を全く無視してまで、無理矢理に軍務を押し付ける様な真似はしたくないわ。勿論それは、戦況が許す限りの範囲内においての話になるけど、出来れば貴女達パイロットには、常に万全の体勢を持って、作戦任務に臨んでもらいたいの。体調が芳しくない、気分がすぐれないと言った、士気に欠ける兵士達を用いて、多大な戦果を上げたと言う話は聞いた事が無いし、本当は貴女の事も、哨戒ローテーションチームに組み入れるべきかどうか凄く迷った。でも、ここ最近、帝国軍の動きが非常に活発化してきて、他のパイロット達にも大分疲労の色が見え始めてきたし、貴女の事をいつまでも放置しておく事が出来なかったの。それは解ってもらえるかしら。」

（セニフ）

「は・・・はい。」

（カース）

「そう・・・。・・・その様子だと、大分落ち着いてきたみたいね。最近はどう？良く眠れるようになったの？」

（セニフ）

「あ・・・はい。・・・大丈夫・・・。もう大丈夫です。私。」

（カース）
「そう。それは良かったわ。」

思いもよらぬ人物から思いもよらぬ言葉が発せられるとは、まさにこの事を指して言うのだろう。

普段から機械的に発せられた無機質な声色と、人々の恐怖心を煽(あお)り立てるおどろおどろしき怒声しか、聞いた事の無かったセニフにとって、この時カースが見せた柔らかな喋り口調は、まさに意外と言う以外に無い驚きを生じさせるものだった。

そしてその直後、不意に投げかけられたカースの優しげな笑みの中に、アリミアと同じ様な雰囲気の存在を重ね見てしまうと、俄(にわ)かに涙が溢れだしそうになる感覚に突き上げられてしまった。

しかし、やはりと言うべきか、鬼軍曹たる彼女の最後の振る舞いは、しっかと締めるべき所はきちんと締めて終わると言った、彼女らしい高圧的な態度を持って繰り出される事になるのだ。

（カース）
「ところでシル。私が彼女の事を足止めしておいて言うのもなんだけど、１８ローテ小隊の整備作業における進捗遅れ分に関しては、貴方が責任を持って取り返しなさい。いいわね。」

（シルジーク）
「えーっ!?そんな・・・。」

（カース）

「ん？何？何か文句でもあるの？」

（シルジーク）

「あ・・・。いや・・・。」

そして、まさに有無を言わさずと言った感じで、哀れなる子羊と化したシルの顔を睨み付けると、あからさまにドスを聞かせた鋭い声色を流し、相手の恐怖心にグリグリと突き刺していく。

（カース）

「出来るの出来ないの？はっきりしなさい。」

（シルジーク）

「解りました！やります！頑張ります！」

やがてシルは、全く四の五の言う暇も権利も与えられぬままに、そう答える他ない虎口（こぐち）へと無理矢理に追い立てられると、突き出された彼女の鋭い言葉の鏃（やじり）に煽（あお）られ、その崖際から望まぬダイブを強要されてしまう事になってしまった。

先程セニフに対して垣間見せた優しげな態度とは裏腹に、一転して相手を捲（まく）し立てる表面モードへと物腰を立ち返らせたカースの表情は、触れれば食い付く悪魔の妖華（ようか）たる様相を、薄っすらと浮かび上がらせている様でもあり、シルとしても、適当な戯言（ざれごと）を見繕（みつくろ）って反撃する事が、如何に危険極まりない行為であるのか、既に解っている様子だった。

シルはふと、とほほ・・・と、ガックリ肩を大きく落とす仕草を奏で出すと、不意に恨みがましい視線をセニフに対して突き刺してやったが、セニフからは、業（わざ）とらしく浮かべた可愛らしい笑顔の上に

舌を出した、「あっかんべー」と言う間抜けな表情を突き返されてしまった。

そして、シルはそこで思う。

何かこう、俺は皆の遊び道具になりつつあるんじゃなかろうか・・・。

やがて、そんな思いに強く苛(さいな)まれてしまったシルは、得も言われぬ不平不満が鬱積(うっせき)した陽だまりの中で、大きく溜息を吐き出しながら天を仰ぎ見る他なかった。

するとそんな時、突然聞きなれない警報音・・・と言うより、何かしらを知らせる不思議な音楽が格納庫内へと響き渡り、それまで周囲に漂っていた忙しい喧騒(けんそう)さが、一時的に静寂の海へと埋没した。

(館内放送)

「緊急招集連絡。緊急招集連絡。ネニファイン部隊所属カース・イン・ロック作戦曹長、並びに、第17、18哨戒ローテーション部隊所属のDQパイロットは、至急、第一作戦会議室に集合してください。繰り返します・・・。」

何だ?・・・と一瞬、恐らくはその場にいる全員が、眉を顰(ひそ)めたであろうその館内放送は、思いもよらず穏やかなメロディと丁寧な喋り口調を持って齎(もたら)された為、周囲にそれほど慌ただしい雰囲気を感じさせるものでもなかった。

しかし、「緊急」と言う二文字を冠(かん)に呈(てい)している以上、そこに何かしらのゆゆしき事態が隠れ潜んでいる事は明らかで、シルは、もうちょっと気の利いたメロディは無かったのか・・・と、思い付くよりも前に、何処か不穏当なる不気味な色香の存在を嗅ぎ取ってしまった。

08－06：〇ブリーフィングルーム#4（前書き）

すみません。フライアシュートとデ・オウルの兵種を記載するのを忘れていました。追記しておきます。

０８－０６：〇ブリーフィングルーム＃４

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０６「ブリーフィングルーム＃４」

＜パレ・ロワイヤル基地３階　第１会議室＞

作戦名「スティーブ・マウンテン・ダイビング」

皆さん。お集まりのようですね。

こう言った少ない人数での作戦会議は初めてかもしれませんが、現状、パレ・ロワイヤル基地周辺部の哨戒任務と、どうしても並行実施せざるを得ない状況にありますし、今朝方に発生した帝国軍との戦闘によって、今だ数多くのパイロット達が休養中と言う状態にありますので、今回は取り敢えず、作戦任務に参加するメンバー達だけで執り行う形を取りました。

尚、サルムザーク陸等二佐は、この後直ぐ、ＴＶ電話で軍上層部会議に出席する予定となっている為、今回の作戦会議については、私が司会進行役を務めさせていただきます。

多々至らぬ点があるかもしれませんが、どうかご容赦くださいませ。

それではさっそく、当作戦における詳細説明をさせていただきます。

本日午前九時十分頃、タリオヘネス山脈北方裾野一帯を巡回警備中の「クラリオンベイル」隊から、「古都市マリンガ・ピューロ」上空付近にて、帝国軍所属の飛行小隊（フライト）と、交戦状態に入ったとの報告がありました。

帝国軍飛行小隊（フライト）の編成は、「ＭＷ－３１型護衛戦闘機ミル・バロール」三機と、「ＣＱＷ－２０３型中型輸送機クリューネワルト」で、その進行経路から推測するに、恐らくはコンサット山脈を越えて北上して来たものと思われます。

その後、クラリオンベイル隊から齎（もたら）された続報によれば、その内、護衛戦闘機二機と、中型輸送機一機を撃墜したとの事で、残る一機に関しては、「ラフロート都市」方面へと逃走離脱した模様です。

現時点において、帝国軍航空部隊が、何故少数兵力のみでこの空域へと侵入して来たのかなど、今だ詳しい事は解っておりませんが、古都市マリンガ・ピューロを含めたこの山岳地帯一帯は、帝国軍の秘密基地が数多く存在しているとも言われている暗礁（あんしょう）地域であり、恐らくその何れかの秘密基地に、積み荷を運び入れる任務を負っていたのではないかと見られています。

その為、軍上層部では、撃墜した中型輸送機に、何かしら有益な情報が含まれているのではないかとの見方を強め、この中型輸送機の積み荷を調査回収する方針を固めました。

今回発動される、この「スティーブ・マウンテン・ダイビング」作戦は、中型輸送機の積み荷を調査回収する、強襲歩兵部隊が主軸を務める作戦任務で、私達ネニファイン部隊は、強襲歩兵部隊を構成

する第七機械化歩兵部隊の指揮下で、当作戦を遂行する事になります。

そして、その主たる任務の内容は、強襲歩兵部隊の到着に先んじて、当該作戦エリア周辺周域の支配権を確保する事に始まり、強襲歩兵部隊が積み荷を調査回収する間、彼等を護衛する役割を担う事です。

中型輸送機が墜落したエリアポイントへの侵入は、周囲が険しい山岳地帯に囲まれていると言う事もあり、上空からの強襲降下を持って執り行う予定となっていますが、ミュートローズドとも揶揄(やゆ)される奥深い森の中に、直接降下突入するのは非常に危険であるとの判断から、今回の作戦では、当該作戦エリアより東側に５ｋｍｉｌｓ程離れた草原地帯に、降下突入する形を採用しています。

中型輸送機墜落地点まで、かなり距離が離れている感は否めませんが、現在の所、周辺部で帝国軍地上部隊の姿を確認したと言う報告はありませんし、当該作戦エリアの航空優勢権についても、引き続きクラリオンベイル隊が掌握する事になっていますので、降下任務にさしあたって懸念すべき事項はほとんど無いと考えられます。

ただ、このクラリオンベイル隊を構成する「ＦＸ－７７型制空戦闘機ストローダー」は、対地攻撃用兵器を全く装備していないとの事で、彼らに対地支援活動を期待する事はできません。

また、オクラホマ都市方面の軍事的緊張が高まりつつある現状においては、オクラホマ軍事空港に増援を要請する事も出来ない状況です。

そこで今回は、パレ・ロワイヤル基地に駐留する「デモアキート部

隊」に要請し、私達ネニファイン部隊の行動を上空から支援する飛行部隊を編成してもらう事になりました。

この追加支援飛行部隊の編成は、非常に高い対地攻撃能力を有した「ＤＡＨ－１２型戦闘装甲ヘリ、フライアシュート」二機と、非常に広範囲に渡る索敵能力を有した「ＤＡＳ－０３型装甲ヘリ、デ・オウル」一機によって構成され、私達ネニファイン部隊にとっては願ってもない事に、予備の弾薬や追加火器類の輸送をも請け負ってくれるとの事です。

尚、当作戦における追加支援飛行部隊の指揮権については、強襲歩兵部隊を統括指揮するフレッチャー陸等二佐に帰するものと定められていますが、先行して当該作戦エリアを確保する段階においては、ネニファイン部隊の小隊長権限を持って指示を与える事が可能となっています。

それでは次に、当作戦におけるネニファイン部隊の編成内容について説明します。

＜配布資料一部内容＞

＞Ｎｙｉｆｉｎｅ　ｏｒｄｅｒ＜

Ｎｏ．１　Ｓｕｐｐｒｅｓｓｉｏｎ　ｆｏｒｃｅ　ｏｎｅ　［ｆｒｏｒ］

ａ　Ｊａｎｅｔ－ｃｒｙｅｅｃｅ－ｈｏｓｎｏｗ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｂ　Ｓｅｎｉｆ　ｓｏｎｒｏ　（ｔｗｍａｌｃ）

ｃ　Ｒｏｃｃｏ　Ｍｉｒａｍａｒｌ　（ｔｗｍａｌｃ）

No.2 Suppression force two [giant]
a Bernce-Schumacher (twmalc)
b Ruwacy-oscaford (twmalc)
c Pegy-simon (twmalc)

今回の作戦に使用する機体は、全て高機動軽量型のDQ「トゥマルク」を用いる事としています。

使用する火器類の組み合わせに関しては、皆さんの判断に一任する事としますが、当該作戦エリアの地形的複雑性を考慮し、なるべく重火器類の装備を避ける様に心がけてください。

勿論、当該作戦エリアにおいて、帝国軍地上部隊と鉢合わせする可能性が全く無いとは言い切れませんので、それに対抗し得るだけの火器類は、最低限装備しておいた方が良いと思われます。

ただ、現状帝国軍の動向がはっきりと掴み取れていないと言う事もありますので、作戦当初から重装備を持って作戦任務に臨む様な愚(ぐ)は、出来るだけ避けた方が良いでしょう。

トゥマルクの機動性を著しく害する様な重火器類については、各小隊長の判断でデモアキート部隊に輸送してもらう事としてください。

尚、今回の作戦における主目的は、あくまで墜落した中型輸送機の積み荷を調査回収する事にありますが、積み荷が余りに大きく回収が困難である場合、また、帝国軍の攻勢が激しく、積み荷の調査回

収が困難であると判断された場合に限り、この積み荷を爆破破壊する事になっています。

第一作戦目標である積み荷の調査回収任務を放棄するか否かについては、フレッチャー陸等二佐の判断を持って下される事となっていますが、戦況的に強襲歩兵部隊が墜落地点まで到達できないケースも考えられますので、その場合には、私達ネニファイン部隊とデモアキート部隊の戦力を持って、この積み荷を爆破破壊してください。

そして、作戦終了時における退路の説明についてですが、古都市マリンガ・ピューロ南東部に広がる水源地帯の東側辺(ほとり)に、回収用ＶＴＯＬ機を配置しておきますので、作戦任務が終了しましたら、皆さん速やかにランデブーポイントへと移動してください。

また、このランデブーポイントにつきましては、当該作戦エリアの戦況如何によって、已(や)む無く変更を余儀なくされる場合があります。

その場合、第二、第三候補のランデブーポイントに順次切り替わりますので、後続部隊からの連絡事項にも、常に気を配るよう配慮しておいてください。

今回の作戦任務では、非常に地形的に不安定な山岳地帯での行動を余儀なくされる上、周囲は鬱蒼(うっそう)と生い茂る木々達によって、常に視界を遮られた状態が続くと予想されます。

しかも、余りに急な作戦任務ですので、当該作戦エリアの地形データやフィールド濃度予想値、帝国軍の動向など、情報が不足しすぎている感は否めません。

ですので、今回の作戦においては、同行するデモアキート部隊、強襲歩兵部隊と、常に密なる連絡体制を保ち、作戦参加者全員の意思統一と、目標へと向かう団結力を持って、これらの不足分を補っていかなければならないと考えています。

確かに現状、当該作戦エリアの航空優勢権は、私達トゥアム共和国軍側が掌握している状況にありますが、古都市マリンガ・ピューロ周辺部に広がる「魔境の森」には、「魔物」が棲(す)むとも言われていますので、どうか皆さん、決して気を抜かず、作戦任務成功へと向かって、邁進(まいしん)していただきたいと思っています。

最後になりますが、私はまた、ここパレ・ロワイヤル基地で、皆さんと笑顔で再会できるものと信じております。

ですので、どうか皆さん、全員無事で帰って来れるよう、頑張ってください。

では、以上を持ちまして、今回の作戦会議を終了とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

08－07：〇スティーブ・マウンテン・ダイビング［1］

第八話：「懐かしき新転地」
ｓｅｃｔｉｏｎ０７「スティーブ・マウンテン・ダイビング」

青、青、青とした天空の力強い空色を背景に、くっきりと描き込まれた深緑の雲海が、荒々しき波面（なみも）を形成する奥深い山岳地帯で、煌々（こうこう）と照りつける真夏の日輪（ひのわ）が、色濃きコントラストを生み出して、大自然の装（よそお）いに激しき彩りを添えている。

周囲に吹き荒れる山風の肌触りも、何処か躍動的野性味を帯びて、次々と襲い掛かって来る様な雰囲気を漂わせており、招かざる客人達を、優しくもてなしてくれる様な気配は少しも感じられなかった。

嘗ての栄華をほのかに垣間見せる、巨大な人口的楼閣（ろうかく）群も、今ではもはや見る影もないほど、濃緑的原生林の食指（しょくし）に深々と食い破られ、過（す）ぐる日の支配者たる覇気の全てを、完全に吸い取られてしまったかの様な佇まいで、ひっそりと聳（そび）え立っているだけだった。

遥か高い頭上で交錯していたはずの大きな陸橋群も、そのほとんどが橋げた部分だけを残して崩れ落ち、整然と道路脇に立ち並んでいたはずの街路灯や道路標識も、意気揚々（いきようよう）と生え育つ植物達の生命力によって、強引に薙（な）ぎ倒されているのが見て取れた。

人々の手によって生み出された人工的建造物の多くは、確かに容易には朽ち果て得ぬ運命を授けられた大いなる遺物達に違いなかったが、完全に死に絶えた街に寂しく取り残されたその様は、まるで巨大な墓場と言うに相応（ふさ）しき様相であった。

そこは嘗て、セルブ・クロアート・スロベーヌ帝国の一時代を支えた、強大なる軍事要塞都市「マリンガ・ピューロ」跡地・・・。

（テヌーテ）

「ユピーチル様。クリューネワルト墜落地点まで残り６ｋｍｉｌｓです。依然、敵地上部隊の機影は確認できません。」

誰もいない廃屋が連なる繁華街中心部にて、そんな光景を静かに眺めまわっていた金髪の青年は、通信機より流れ響いた可愛らしい声色に、フッと意識を揺り戻した。

そして、軽くサーチレーダーへと一瞥（いちべつ）をくれると、徐に綺麗な金色の細髪を二、三回掻き上げ、再びＴＲＰスクリーン上に映し出された情景の中へと視線を投げ入れる。

（ベトラッシュ）

「上空を旋回中の共和国軍戦闘機の動向からして、地上部隊の到着を待っている事は間違いないだろうが、俺達に対して全く攻撃を仕掛けてこない所を見ると、どうやら対地攻撃用火器を装備していないようだな。だとすると、このままクリューネワルトに、一気に取り付いてしまう手もあるが、どうする？ユピーチル。」

今にも崩れ落ちそうな背の低い廃ビルを背にしたまま、目の前に横たわる大きな幹線道路沿いの荒れ果てた姿を、ぐるり一通り見渡して見せた彼は、程なくしてコクピット内に響き渡った野太い声色と共に、力強く両手で操縦桿を握りしめると、軽く踏み拉（しだ）いたフットペダルを持って、搭乗する小豆色のＤＱ機体を震わせた。

（ユピーチル）

「ふん。言わずと知れた事よ。今だ姿を見せぬ相手に対して、彼是と思案を巡らせるのは趣味じゃない。」

（ベトラッシュ）
「ふっ。まあ、お前ならそう言うと思ったよ。」

（ユピーチル）
「ベトラ。周囲警戒索敵モードのまま、クリューネワルト墜落地点まで一気に駆け抜けるぞ。テヌーテはここでツィー・ハゲンの到着を待て。」

彼の名前は「ユピーチル・フローラン・レブ・ネノベル」と言った。サラサラとした細い金色の髪の毛と、燃える様に赤い綺麗な両の眼を持ち、見るからに峻厳なる凛とした雰囲気を漂わせていた彼は、その高飛車なる高圧的態度から見て解る通り、帝国国内でも非常に格式の高い名家出身者と言う肩書を有した人物だ。

彼が着込んだ漆黒色のパイロットスーツも、要所を押さえて配された、綺麗なオレンジ色のラインによって煌びやかに彩られた高雅な代物で、耳元で光り輝く高価なピアスや、左手首に巻き付けられた綺麗なブレスレット群なども、最前線で戦う他の一般の兵士達とは、あからさまに違う人種である事を、如実に示し現しているかのようだった。

（テヌーテ）
「いけませんユピーチル様。小部隊の分散化は更に危険度を高めるだけです。この地形では、カリッツォも十分に性能を発揮できないでしょうし、何より、ツィー・ハゲンとの連携が取れなくなる恐れがあります。ここは一度・・・。」

（ユピーチル）
「偉くなったものだな。テヌーテ。お前はいつから私に意見できる立場になったのだ？」

（テヌーテ）
「あ、いえ・・・。・・・申し訳ございません。」

そして、普段から小姑（こじゅうと）の様に小言を並び立てる茶髪の青年、「テヌーテ・ストラナー」に対し、鬱陶（うっとう）しげな顔色を浮かび上がらせながら、全く大人げない言葉を浴びせかけるのが彼の常だ。

勿論、ユピーチル自身、この茶髪の青年が発した言葉の確からしさを認識していた為、相反する適切な理屈理論を持って対抗し得た訳ではない。

しかし、毎回毎回事ある毎に用心深き慎重論を唱えるテヌーテの言動は、その何れもが己の矜持（きょうじ）たる思いに水を差すものばかりで、彼としても、そう強引に捻じ伏せる以外に手立てが無かった。

そして、テヌーテが何故、その様な言動に終始しなければならないのか、その立場を理解してもいたユピーチルは、その後直ぐに、何処か落ち着かない居心地の悪さと共に、不意に沸き起こる後悔の念に苛（さいな）まれる事になる。

ユピーチルはふと、ＴＲＰスクリーンの一番右端に映し出される小豆色のＤＱ、テヌーテが搭乗する「ＡＥ－３９４Ｒ型カリッツォ」へと視線を宛がうと、訝（いぶか）しげな表情を浮かべながら右手で綺麗な金髪を掻き乱し、軽い溜息を吐き出してしまった。

テヌーテは、幼い頃からネノベル家に仕える使用人の一人で、ユピーチルにとっては、お互いに兄弟とも言うべき間柄で育った仲だ。

勿論、常に下手側から敬語を用いるテヌーテと、常に上手側から命令口調を用いるユピーチルとの関係は、あからさまに見てそれと解る主従関係にあった事は間違いないが、ユピーチル、テヌーテ共に、お互いがお互いをそれ程遠くに感じていた訳ではなかった。

（ベトラッシュ）
「心配するなテヌーテ。俺達二人がそう簡単にやられるはずが無い。お前だって、俺達の腕を全く信用していないって訳じゃないだろ？」

（テヌーテ）
「それは・・・そうですが・・・。」

（ユピーチル）
「お目付け役たるお前の立場は私も重々承知しているが、この機動小隊の指揮官は私だ。そしてお前は私の手足となって働く一兵士に過ぎない。余り余計な口出しをしないでもらおうか。」

（テヌーテ）
「・・・解りました。」

（ユピーチル）
「今作戦におけるお前の役割は、作戦エリア周辺周域の索敵行動と、ツィー・ハゲンの積み荷回収作業を補佐する事にある。もし、我々が共和国軍と戦端を開く事になったとしても、お前は戦闘に介入する必要はないからな。」

（テヌーテ）

「はい。」

テヌーテは、ユピーチルが放つニベもない態度そのものが、本当の彼を示し現す全てではない事を知っていた。

そして、何の考えも無しに一人我が道を突き進む無鉄砲者でも、周囲の者達の思いを全く歯牙にもかけぬ高圧的専横者でも、捻くれ者でも無い事を知っていた。

テヌーテにとっての本当の彼は、非常に人情味に溢れた心優しき好青年だったのだ。

当然、その事を面と向かって彼に言って聞かせれば、俄かに顔を赤らめて憤怒の形相を浮かび上がらせる為、その様な色合いを滲ませた言葉を口にする事は出来なかったのだが、最終的に黙って彼の言に付き従う態度へと鞍替えしてしまうのも、そう言った思いがあったからに他ならなかった。

そして、そんな二人の関係を良く知る「ベトラッシュ・レブ・デューター」もまた、ユピーチルが内面に抱き持つ心優しき一面を知る人物の一人であり、上位者たる立場を利用して強引にテヌーテを捻じ伏せにかかるユピーチルの言動を、無為に差し止める様な真似はしなかった。

しかし彼の場合、いつもいつも虐げられる側へと自ら身を引くテヌーテの事を、多少可哀想だとも感じていた様で、然もそれが当然であるかの様に振る舞うユピーチルに対し、時折神経をチクチクと逆撫でする、からかいの言葉を投げつけるのだ。

言うなれば彼は、テヌーテ擁護派だった。

（ベトラッシュ）
「おいおいユピーチル。そんな回りくどい言い方をしなくてもいいだろ？テヌーテを危険な目に合わせたくないって、素直にそう言えばいいじゃないか。」

（ユピーチル）
「なんだとベトラ！私がその程度の理由で、自らの戦術論を捻じ曲げるとでも思っているのか！？私はただ・・・！」

（ベトラッシュ）
「はいはい。解っていますよユピーチル大尉。王都の貴婦人方に絶大な人気を誇るユピーチル大尉は、何者をも恐れぬ傲岸不遜な無頼漢って、そう言う設定になっているんだよな。心優しき純朴な好青年と言うお前の内面は、俺の心の中だけに仕舞って置く事にするよ。」

（ユピーチル）
「こいつ・・・！好き放題言わせておけば・・・！」

（ベトラッシュ）
「はっはっはっ。まあ、そう眉間に皺を寄せて、いきり立つ事も無いじゃないか。折角の綺麗な顔が台無しだぞ。こう見えても、俺はお前の事を褒めてやってるんだぜ。少しは素直に喜んでくれたっていいんじゃないか？」

（ユピーチル）
「ふん。そんな安っぽい煽て言葉で舞い上がる程、私は陳腐な人間ではないのだよ。何が心優しき純朴な好青年だ。自分で言ってて恥ずかしくないのか君は。」

（ベトラッシュ）
「晩餐会で貴婦人方に言って聞かせる、歯が浮く様なお前の賛辞に比べれば、大分マシな方だと思うがな。」

（ユピーチル）
「ちっ！余計なお世話だ！」

高貴なる身分を持つユピーチルに対し、全く歯に衣を着せぬタメ口をかまして見せるベトラッシュは、今年で二十歳になるユピーチル、十九歳になるテヌーテより頭一つ抜け出た、今年で二十四歳を迎える品の良い人格者だ。

家柄としてはネノベル家に遠く及びもつかないものの、これまた高級貴族と称すに相応しき身分の持ち主であり、贅沢な金の文様によって彩られた彼のパイロットスーツも、ユピーチルに負けず劣らずの質的良さを有した代物だった。

ほのかに緑がかった収まりの悪い黒髪に、シンプルな丸眼鏡から覗く細く垂れた目尻が特徴的である彼の様相は、他の二人と比べて、あからさまに成熟した大人の色香を強く印象付ける雰囲気を漂わせており、血気盛んな暴れ馬たるユピーチルの扱いについても、それなりに要領を得た体裁の良いものだった。

彼は、軍階級的に言えばユピーチルと同格、帝国軍大尉の称号を有している人物で、周囲の評価では、彼の方が隊長として相応しき人物であるとの呼び声も高い。

しかし彼は、年齢的に下位者であるユピーチルの部下と言う自らの立場に、特に強い不満を抱いていた訳では無く、逆にその状況を楽

しんでいるかの様でもあった。

（ベトラッシュ）
「まあ、何にせよ。今回が初めての実戦となるテヌーテを、最前線に駆り出さなくても良い様に、俺達がしっかり頑張らないとな。ユピーチル。」

（ユピーチル）
「当然だ。この程度の作戦任務で二の足を踏んでいては、この先ゲイリー様のお役になど立てん。」

ユピーチルはそう言うと、真っ白なグローブを嵌めた両手で、操縦桿をギュッと強く握りしめ、ぎらつく様な赤光（しゃっこう）を宿した両目を持って、人工的深緑の世界を睨めつけた。

そして、勢い良く右足でフットペダルを踏み拉き、ごうごうと唸りを上げ震える自らの機体に猛烈な加速度を加え入れた。

（ユピーチル）
「見ているがいいテヌーテ。戦場における我々二人の働きぶりを。」

（テヌーテ）
「御武運をお祈りいたします。ユピーチル様。どうかお気を付けて。」

けたたましき爆音と、強烈な暴風を周囲に吹き荒れさせて、羽ばたく様に左右三枚づつの巨大な鉄の翼を広げた小豆色のＤＱが、翼の裏側に取り付けられた無数の小型バーニヤを煌々（こうこう）と点滅させながら、繁華街を貫く大きな幹線道路へとその機体を滑り出させる。

と、それと同時に幹線道路対岸からも全く同型となる機体、ベトラッシュが搭乗するＤＱが飛び出し、先行するユピーチル機の直ぐ後ろを追走する形で、勢い良く進攻ルート上の粉塵を巻き上げた。

この二人が搭乗する小豆色のＤＱは、帝国軍内においては珍しい部類に入る汎用型人型機動兵器「ＡＥ－３９４型カリッツォ」の改良機で、その機体の扱い易さと改良のし易さから、幾多の亜種を生み出すに至った機種である。

中でも「Ｙ３型」の改良番号を付与された彼等二人の機体は、元々カリッツォが持つ高い機動性を、更に飛躍的に向上させる事を目したもので、両肩を軸にして自由に稼働する、大きな楕円形の三枚羽根が特徴的な機体だった。

テヌーテが搭乗する「Ｒ型」カリッツォについては、元々この機体が持つ華奢（きゃしゃ）なる様相を、そのままに有した外観となっていたが、ユピーチル、ベトラッシュの両名が駆る、この「Ｙ３型」カリッツォに関しては、全く機種さえも異なる重厚な威圧感を纏（まと）い有しており、強烈な突進力と凄まじき旋回性能を持って戦場を駆け抜ける、勇ましき豪傑（ごうけつ）と言った雰囲気を漂わせていた。

とは言え、そんな荒々しき暴れ馬を激しく駆り立て、もはや道路とも呼べぬ不整地の上を全速力で疾走する彼等二人の移動軌跡は、適所適所で立ちはだかる障害を小気味良くスムーズに回避し行くもので、非常に柔和的（にゅうわてき）滑らかさを感じさせるものがあった。

それは言うなれば、二足歩行兵器としてはあるまじきスピード、あるまじき挙動を持って不整地に描き出された半直線的最短ルートであり、彼等が如何に卓越したＤＱ技術を有した戦士達であるかを、

如実に物語っているかの様だった。

実際、彼等二人は入隊してから今だ一年半に満たぬ軍歴しか有していない、云わばひよっこども言うべき新米兵士であり、戦場において多大な戦果を挙げて、のし上がってきた戦士ではない。

両者が共に有する帝国軍大尉の称号も、まさに高級貴族出身者と言う、高い身分の持ち主達だけに与えられる特権的御祝儀であるとの見方が強く、彼等二人に対する世間一般的風評も、それほど高いものではなかった。

しかしそれは、彼等二人の実力を露とも知らない不見識者による空言に過ぎず、彼等ののし上がり振りに不満を抱く者達の悪言であったともされ、真に彼等が有する能力の高さを公正に称したものではなかった。

少なくとも彼等が、幼少の頃からＤＱと言う兵器に慣れ親しみ、幾多のＤＱＡ大会で数々の栄光を勝ち取ってきた猛者達であると言う事実を知らしめれば、彼等に対する見方を変えざるを得なくなる事であろう。

帝国内でも指折りの精鋭軍団ストラントーゼ軍へと入隊した当初から、彼等二人の事を非常に重用して来た「ゲイリーゲイツ・トロ・ナイト」などは、彼等が持つ真の実力を知る数少ない有識者の一人であったと言える。

彼等は今、ストラントーゼ軍ゲイリーゲイツ将軍帰下の機動部隊に所属する兵士だった。

（ベトラシュ）
「ユピーチル。進攻ルート上のエネンクワドル公園跡地が、こないだの大雨で完全に水没してしまっているみたいだぞ。どうする？南北の何れかに大きく迂回して進むか？」

（ユピーチル）
「いや、最新の地形データと水没地域の水嵩（みずかさ）を照合してみると、右辺ルート１０７ラインは、それほど深く沈み込んでいないようだ。このカリッツォなら、一気に渡湖してしまえる程度だろう。」

（ベトラッシュ）
「了解。派手好きのお前には、ピッタリの進攻ルートだな。へまをやらかして水面（みなも）に足を取られるなよ。」

（ユピーチル）
「ふん。それはこっちのセリフだ。」

帝国国内におけるＤＱＡ大会は、トゥアム共和国内で開催されるそれとは違い、非常に秘匿性が高い催（もよお）し物として開催される事が多々あり、特に高貴なる身分を持つ貴族達がパイロットとして登場する様な大会については、ほとんど世間に周知される事など無い。

それは、そのＤＱＡ大会に参加するＤＱのほとんどが、高級貴族達各々が持つ独自の開発技術力によって生み出された、特別特注の新型機であったからに他ならず、おいそれと周囲にひけらかせるものではなかったと言うのが、大きな理由の一つだ。

そして、そう言ったＤＱＡ大会を観戦できると言うのも、その人自身が持つ身分の高さを象徴する要素であると言われ、帝国国民達に娯楽を提供すると言った世俗的目論見など、当初から考えもしない

輩達の集いと言っても過言では無かった。

彼等高級貴族達にとって、その自らが持てる開発技術力の高さを誇示する相手は、それが真に解る同じ趣向を有する同調者達だけで十分だったのである。

尤も、だからと言って、ＤＱＡ大会なる代物が、全く帝国国民達に馴染みの無いものであったかと言えばそうではなく、一般市民達を含め、貧民階層者立の成り上がりの場として開催されるＤＱＡ大会等は、帝国国内でも非常に人気が高い催し物の一つとして認知されていた。

しかし、そう言った一般市民向けに開催されるＤＱＡ大会のほとんどが、有能なＤＱパイロットを見出したいが為に開催される軍主催の大会で、高貴なる身分を持つ貴族出身者がＤＱパイロットとして参加する事など、まずありえない話だった。

とどのつまり、ユピーチル、ベトラッシュの両名がこれまでに参加して来たＤＱＡ大会は、その全てが前述した非常に秘匿性の高い大会に該当する代物ばかりで、彼等の活躍振りが直接一般市民達の目に触れる事は無かったのである。

勿論、そう言ったＤＱＡ大会で活躍する事自体に、何ら意味が無かった訳ではなく、知る人ぞ知る的に広まった人々の風評によって、英雄視される事になったＤＱパイロットも、帝国軍内部には数多く存在している。

しかし彼等二人の場合、ＤＱパイロットとして所属していたチーム陣営の旗色、つまりは、親ロイロマール派か親ストラントーゼ派かと言う、大分類派閥の違いによって、その栄光の全てを黙殺される

事になってしまったのだ。

現状、帝国軍内部における派閥勢力図は、ストラントーゼ派兵士達によって、完全に牛耳られる始末となっており、ロイロマール派兵士達にとっては、非常に肩身の狭い思いを余儀なくされる状況に陥ってしまっている。

元々が親ロイロマールである彼等二人の家柄を鑑(かんが)みれば、それも当然の事だと言う他なかった。

やがてユピーチルは、目の前に現れ出た大きな水溜りの中へと、勢い良くカリッツォを突っ込ませると、激しい水飛沫(みずしぶき)を綺麗に左右に吹き上がらせながら、一気に対岸へとその身を滑り込ませた。

そして、ＴＲＰスクリーンに映し出される相も変らぬ廃屋の連なりを再度見渡して、非常にクリアなサーチ結果を表示するモニターへと視線を落とし込むと、手慣れた手つきでカリッツォの右手に装備された中距離型アサルトライフル、「ＨＶ１９２－Ｔ６４」の弾丸装填作業を並走して行う。

（ユピーチル）
「フィールド濃度計の数値は終始５％前後か。かなりクリアな状態が保たれているな。」

（ベトラッシュ）
「どうやら敵の不意打ちを警戒する必要はなさそうだが、ここから先、更に森が深くなって行くぞ。大自然のトラップには気を付ける様にしないとな。」

エネンクアドル公園跡地に広がる水源地帯周辺部は、先程彼等が待機していた繁華街と比べ、幾許(いくばく)か見晴らしの良い風景が広がっていたが、それは水平方向に広がる景色についてのみ言える事であって、周囲に立ち聳(そび)える巨大な木々達の枝葉群に遮られ頭上は、完全に深緑の洞窟内と言うに相応(ふさわ)しき様相を醸(かも)し出していた。

マリンガ・ピューロ都市中心部を離れるに連れて、次第にその背丈を降下させ行った巨大な建物群とは相反し、呆れるほどにその背丈を急上昇させて行ったのが、「ミュートローズド」と呼ばれる樹海の木々達だった。

巨大な人型機動兵器ＤＱに搭乗した状態にありながらも、見上げねばその全貌を備(つぶさ)に観察できぬ程に育った木の幹は、カリッツォ一機分を丸々と覆い隠してしまう程の、濛々（もうもう）たる貫禄を兼ね揃えており、時折、自分が小人の世界へと迷い込んでしまったのではないか・・・、と言う錯覚にさえ苛(さいな)まれてしまう程である。

ユピーチルは、公園外周部をぐるりと囲むグネグネとした細い道路を、しばし北に突き進み、東方側へと広く開けた片側二車線の大通りを目の前にして、静かにその足を止めると、ＴＲＰスクリーン左手隅に表示された最新の地形データへと視線を宛がった。

そして、後方から追い縋(すが)るベトラッシュ機の走行音を聞いた彼は、右手の人差し指で軽く前髪を巻き取る仕草を奏で出しながら、小さい吐息を一つ吐き零す。

（ユピーチル）

「このまま街中を東へと突き進んでも良いが、第一城塞壁より向こう側は、かなり地形的に入り組んだ構造になっているな。一体どう

なっているんだこれは。」

（ベトラッシュ）

「魔境の森に食われて死んだ都市の残骸が、山の様に山積してるって事なんだろ。噂では、東地区は完全に原型を止めていないって話だからな。」

（ユピーチル）

「・・・だとすると、今の内に北側の棚台へと這い上がった方が吉か・・・。」

ユピーチルは、独り言とも取れる小さな呟きを吐き出すと、進攻予定エリアの地形データを多角的視点から観察できるよう、メインモニター下部に取り付けられた大きなダイヤルをグリグリと左右に回し動かした。

そして、東側へと延びる片側二車線の大きな幹線道路の向こう側、直ぐ目と鼻の先まで迫った巨大な城塞壁を潜り抜けたその先に、何ら目ぼしき進攻ルートを見出し得ない事を悟り取ると、今度は全く別の視点から考察を開始し、新たなる進攻ルートを探索し始める。

確かに高機動軽量型である彼等のＤＱカリッツォの性能を持ってすれば、それ程神経質になって進路を選別する必要など無いと言えるが、今だ共和国軍が姿を見せぬこの状況下にあって、彼は街中へと潜り入る事によって、身動きが取れなくなってしまう事態を嫌ったのだ。

城塞壁を抜け出た向こう側に広がる都市道路の多くは、山積した数多くの瓦礫群によって埋め尽くされた状態にある様で、東側へと抜ける大きな幹線道路以外には、全くと言って良い程良好な迂回路が

存在しない様子だった。

（ユピーチル）
「ベトラ。第五環状ルート沿いを北上した先に、棚台へと続く緩斜面があるだろう。ここを一気に登り切って、崖上を東進する事にするぞ。」

（ベトラッシュ）
「いや・・・ちょっと待て。ユピーチル。」

（ユピーチル）
「何だ？何か文句でもあるのか？」

（ベトラッシュ）
「そうじゃない。二時の方向約１０ｋｍｉｌｓ。」

しかし、そんなユピーチルの思惑とは裏腹に、唐突に否定の意思を叩き返した野太い声が、やけに落ち着き払った態度のまま、事態が急変した事を告げ知らせると、ユピーチルは俄（にわ）かに表情を強張らせ、直ぐに真っ赤に光る両の目をサーチモニター上へと括（くく）り付けた。

それは確かに予め予測し得た事態と言うに相応（ふさわ）しき現象で、サーチモニター上の北東方向から、突如として姿を現した一つの赤い光点が、ゆっくりとではあるが真っ直ぐに、中型輸送機墜落地点へと突き進んでいる様が見て取れた。

そして程なくして、その移動軌跡をなぞる様に姿を現した、デルタ陣形を成す三つの光点が、その背後をピッタリと追走して行く。

（ユピーチル）

「移動速度と高度から推測して、共和国軍の強襲型輸送機だな。ベイロード的にＤＱ六機二小隊って所か。」

（ベトラッシュ）

「恐らくそんな所だろう。ようやく招かざる客人達のご到着って訳だ。さーて。お持て成しの方法はどうする？ユピーチル。どうやらお供に三機のオートジャイロを連れている様だぜ。」

（ユピーチル）

「望むべくして御足労いただいた客人達ならいざ知らず、望まぬ客人達を相手に礼儀正しき紳士を振る舞って見せても仕方があるまい。彼等にはそれ相応の趣を凝らした、特別な応接室を用意してやる事にしよう。」

ユピーチルはそう言って、ほのかに小さな笑みを浮かべて見せると、金色の前髪を優しく掻き上げた右手を持って、操縦席の脇に置き放たれていた漆黒色のヘルメットを掴み取った。

そして、右足と左足の操作だけで器用にカリッツォを半旋回させつつ、機体背後に取り付けられた全てのバーニヤに、赤々とした業火を灯し入れる。

静かに被り経たヘルメットの中に、高級貴族出身者と言う肩書の全てを隠し入れ、遥か東方森の奥深くへと続く幹線道路を睨み付けた彼は、もはや最前線で死闘を繰り広げる戦士たる存在以外の何者でもなかった。

彼はゆっくりと両手で操縦桿を握りしめると、サーチモニター上で徐々にその数を増やし行く敵部隊の動向を見て取った後で、カリッツォの両肩から生え伸びる片側三枚づつの大きな鋼鉄の翼を、小刻

みに三回ほど羽ばたかせた。

（ユピーチル）
「さあ。それでは行くとしようかベトラ。」

（ベトラシュ）
「ああ。」

そして、不意に態勢を深く沈みこませたカリッツォの機体に、右足で猛烈な推進力を踏み与えてやると、東側に延びる大きな幹線道路を全速力で疾走し始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9718g/

Loyal Tomboy

2011年10月9日13時02分発行